

上  
牧  
遺  
跡

高槻市

上 牧 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二一年十二月

公益財団法人  
大阪府文化財センター

2021年 12月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

# 上 牧 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書





上牧遺跡の古墳時代集落 [P5区：南東から]

# 序 文

大阪府の北東部に位置する高槻市は、北の北摂山地と南の淀川にはさまれた台地や沖積地を中心に古来から発展してきました。大阪と京都のほぼ中間地点に位置することから、高度経済成長期以降、ベッドタウンとして人口が急激に増加し、今日では人口 35 万人を有する中核市となっています。市内は、古代の山陽道・近世の西国街道が東西に横断し、街道沿いに発展を遂げ、淀川は三十石船などによる水運の要所となっていました。そして現在では、名神高速自動車道路、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、阪急京都線、国道 171 号がその役割を担っています。

当センターでは、関係各位の協力のもと、平成 22 年度から新名神高速道路建設に伴う埋蔵文化財調査を実施しており、現在は八幡京田辺 JCT - 高槻 JCT 間の発掘調査と整理作業に取り組んでいます。開通後には、高槻市域は既存の名神高速道路と新名神高速道路が交わるため、新たなネットワークの形成によってさらなる発展が期待されるところです。

このたび報告する上牧遺跡は、1970 年代の関西電力淀川変電所の建設を契機に発見された弥生時代から中世の集落遺跡で、当時としては珍しい中世村落の実態を明らかにしたことから著名な遺跡として知られています。今回の調査では、中世に係る成果に加え、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代の集落、奈良時代の遺構などが、調査地のほぼ全面で確認することができました。特に古墳時代の集落は、建物跡が 100 棟近くみつかるなど北摂有数の規模の集落遺跡となり、長期に亘る集落の移り変わりが詳細に判明しました。古くから洪水の多い淀川の近傍という立地からは、予想だにしなかった調査成果であり、淀川を通じた古来からの人々の往来や暮らしに関する歴史の一端が明らかになったと考えます。こうした埋蔵文化財の調査成果が有効に活用され、地域の歴史像や各時代の社会像を明らかにするための一助となることを、切に願います。

最後になりましたが、今回の事業の実施に当たってご理解・ご協力を賜りました、西日本高速道路株式会社関西支社、関西電力株式会社、大阪府教育庁文化財保護課、高槻市街にぎわい部文化財課、地元関係各位に厚く御礼申し上げます。今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

令和 3 年 12 月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 坂井 秀弥



# 例 言

1. 本書は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴い実施した大阪府高槻市上牧町3丁目・4丁目、梶原中村町地内所在の上牧遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理作業は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪東事務所および新名神大阪西事務所から委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。
3. 発掘調査および遺物整理作業に関する受託事業名と事業実施期間は下記の通りである。

[調査名] 上牧遺跡 17-1

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その3

〔新名神大阪東事務所→新名神大阪西事務所（7月1日から）〕

〔事業契約期間〕 平成29年10月25日 ～ 平成30年8月24日

[調査名] 上牧遺跡 18-1

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その4

〔新名神大阪西事務所〕

〔事業契約期間〕 平成30年8月1日 ～ 令和元年8月26日

[調査名] 上牧遺跡 19-1

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その6

〔新名神大阪東事務所〕

〔事業契約期間〕 令和元年8月1日 ～ 令和元年12月18日

[整理作業]

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）

〔新名神大阪西事務所〕

〔事業契約期間〕 令和元年12月2日 ～ 令和3年12月22日

（※ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策として令和2年4月20日から5月15日まで一時休止）

4. 発掘調査および遺物整理は下記の体制で実施した。

〔平成29年度〕 事務局次長 江浦洋（12月31日まで）

調整課長 岡本茂史（1月1日から事務局次長兼務）

調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 三好孝一、技師 笹栗拓（調査担当）

〔平成30年度〕 事務局次長兼調整課長 岡本茂史

調査課長 三好孝一、課長補佐 亀井聡、副主査 笹栗拓（調査担当）

〔平成31年・令和元年度〕 事務局次長兼調整課長 岡本茂史

調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、副主査 笹栗拓（調査担当・整理担当）

〔令和2年度〕 事務局次長兼調整課長 岡本茂史

調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、副主査 笹栗拓（整理担当）

〔令和3年度〕

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井聡

調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、副主査 笹栗拓（整理担当）

5. 本書に掲載した写真のうち、遺構は笹栗が、遺物は中部調査事務所写真室がおこなった。

6. 発掘調査および遺物整理の過程で、以下の委託分析を実施し、第4章に成果を掲載した。

平成30年度・令和2年度	放射性炭素年代測定（AMS法）	株式会社 パレオ・ラボ
令和2年度	花粉分析	文化財調査コンサルタント 株式会社
	大型植物遺体同定	古代の森研究舎
	赤外分光分析（FT-IR分析）	株式会社 パレオ・ラボ

7. 出土遺物の保存処理について、以下の機関に委託した。

鉄器（4点）	株式会社 文化財サービス
有機質付土器（1点）	株式会社 エイ・テック

8. 発掘調査で出土した有機質の同定を下記の方々に依頼した。石材の同定結果については、本文および挿図・一覧表に成果を記載し、昆虫および動物骨・貝類の同定結果については、第5章に寄稿文を掲載した。

石材の同定	小倉徹也氏	（大阪市教育委員会）
昆虫の同定	初宿成彦氏	（大阪市立自然史博物館）
動物骨・貝類の同定	丸山真史氏	（東海大学）

9. 本書の執筆および編集は笹栗がおこなった。第5章については、委託・依頼した機関・個人から頂いた報告書・原稿を掲載し、目次および文中に文責を記載している。

10. 発掘調査並びに報告書の作成過程において、下記の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします（順不同、敬称略、所属は調査・整理当時のもの）。

森屋直樹・山田隆一・中西裕見子・岡田賢・三好玄・原田昌浩・藤井陽輔・久永雅宏・小泉翔太・岡本敏行（大阪府教育庁文化財保護課）、早川圭・三好祐太郎（高槻市街にぎわい部文化財課）、森田克行・内田真雄・今西康宏（高槻市立今城塚古代歴史館）、諫早直人・菱田哲郎（京都府立大学）、一瀬和夫・中久保辰夫（京都橘大学）、梅本康広（（公財）向日市埋蔵文化財センター）、柏田有香（（公財）京都市埋蔵文化財研究所）、桐井理揮・中居和志（京都府教育委員会）、久住猛雄（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課）、古閑正浩・原田早季子（大山崎町教育委員会）、島本多敬（滋賀県立琵琶湖博物館）、高橋克壽（花園大学）、高野陽子（（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）、竹内裕貴（香川県教育委員会）、田中元浩（和歌山県教育庁）、辻康男（パレオ・ラボ）、橋本久和（元高槻市教育委員会）、東影悠（奈良県立橿原考古学研究所）、森岡秀人（関西大学大学院）、森島一貴（関市教育委員会）、山中良平（赤穂市教育委員会）、米田敏幸（元八尾市教育委員会）、若林邦彦（同志社大学）

# 凡 例

1. 図示した標高は、全て東京湾平均海面（T.P.）＋値を使用し、単位はmで表示した。図中の T.P.＋の記載は、便宜的に省略している。
2. 発掘調査では、世界測地系（測地成果 2000）によって測量し、平面直角座標系第VI系で図示した。遺構図の表記の単位は全てmで、方位は全て平面直角座標系第VI系の座標北である。
3. 現地調査および整理作業は、文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠しながら進めた。
4. 地層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2005年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5. 各遺構の記載については、調査区・遺構面に関わらず全て通しの遺構番号を付し、遺構番号 → 遺構種類の順で遺構名を記載している。建物跡などの複数遺構の集合体によるものについては、遺構種類 → 遺構番号の別に番号を付した。（例：「432 土坑」・「866 井戸」、「竪穴建物 32」など）  
また1間×1間構造の掘立柱建物は、竪穴建物の主柱穴の可能性が高いため、通常の掘立柱建物とは区別して（掘立柱建物 No.）という記載をし、竪穴建物に準じた扱いをする。
6. 遺構図における断面位置は、図面上に「← →」形によってその位置を示した。個別遺構の縮尺は40分の1または60分の1を基本とするが、遺構の規模に応じて縮尺率を変更しているものもある。
7. 遺物図の縮尺は、土器を4分の1で図示した。これ以外に土器の大型品の一部、金属器、石製品等はそれぞれ適切なサイズで掲載しており、詳細は各図のスケールを参照されたい。土器類の挿図の断面は、須恵器・瓦器を黒塗り、施釉陶器・瓦をアミフセで表現し、そのほかは白抜きとした。
8. 掲載遺物は、遺物の材質ごとに頭文字を付し、下記の通りそれぞれ通し番号を付した。本文・図版・一覧表・写真図版の番号は全て一致する。  
土器・土製品（なし） 石器・石製品（S） 木器・木製品（W） 金属製品・関連遺物（M）
9. 遺構図において遺物の出土状況や位置を示す場合、遺物の掲載番号を No. で囲い表示した。
10. 出土土器の年代観や器種分類の大枠については、特に断りのない場合は下記の文献に依拠した。  
[弥生土器] 森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社  
[古式土師器] 西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内と大和資料集』香芝市教育委員会  
[古墳中期土師器] 辻美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室  
[古墳須恵器] 田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店  
田中清美 2002「須恵器定型化への過程」『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺昭三先生古希記念の会  
[古 代] 小田裕樹 2016「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム発表要旨集  
[平安・中世] 橋本久和 1991「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財報』昭和63年・平成元年度  
高槻市教育委員会  
中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

# 目 次

巻頭写真 / 序文 / 例言 / 凡例

## 第 1 章. 調査の経緯と方法

第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査の経過	5
第 3 節	調査方法	8

## 第 2 章. 位置と環境

第 1 節	地理的・歴史的環境	12
第 2 節	調査地周辺における既往の調査	19

## 第 3 章. 発掘調査の概要と層序・地形

第 1 節	調査概要	24
第 2 節	基本層序	24
第 3 節	旧地形	31

## 第 4 章. 遺構・遺物

第 1 節	内ヶ池護岸古流路の調査	34
第 2 節	近世以降の土地利用	46
第 3 節	中世の遺構・遺物	50
(1).	概要	50
(2).	西側エリア	50
(3).	中央エリア	65
(4).	東側エリア	90
(5).	小結	98
第 4 節	古代の遺構・遺物	99
第 5 節	古墳時代の遺構・遺物	122
(1).	概要	122
(2).	西側エリア	127
(3).	中央エリア	268
(4).	東側エリア	348
(5).	小結	362
第 6 節	弥生時代の遺構・遺物	366
第 7 節	縄文時代の遺物	382
第 8 節	関西電力電線移設に伴う立会調査	383

## 第 5 章. 自然科学分析

第 1 節	分析の概要と目的	385
第 2 節	放射性炭素年代測定	(株) パレオ・ラボ 385
第 3 節	花粉分析	文化財調査コンサルタント (株) 392
第 4 節	大型植物遺体同定分析	古代の森研究舎 399
第 5 節	昆虫遺体の同定分析	初宿成彦 [大阪市立自然史博物館] 408
第 6 節	上牧遺跡の動物遺存体	丸山真史 [東海大学] 409
第 7 節	赤外分光分析 (FT-IR 法)	(株) パレオ・ラボ 411
第 8 節	分析結果のまとめ	412

## 第6章. 総括

第1節 遺跡の消長・地形環境・土地利用の変遷	414
(1). 検出された遺構・遺物と通時的な土地利用の推移	414
(2). 各時代における遺構・遺物の特質と周辺遺跡との関係	418
第2節 古墳時代集落の様相	420
(1). 出土遺物の基礎分析	420
(2). 遺構の基礎分析	429
(3). 集落構造の復元と景観の推移	438
(4). 周辺集落・古墳築造動向との関係	444
(5). 上牧遺跡の古墳時代集落の特質と歴史的位	447
第3節 調査成果の意義	449
附表 遺物一覧表	453
写真図版 / 報告書抄録	

## 挿図目次

図 1. 新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点	1	図 22. 内ヶ池分流路(102 流路) 出土遺物(3)	43
(1) 新名神高速道路計画路線図	1	D層: 奈良時代後半	
(2) 埋蔵文化財調査地点	1	図 23. 内ヶ池分流路(102 流路) 出土遺物(4)	44
図 2. 上牧遺跡とその周辺	2	D層: 奈良時代後半, A~D層: 古墳時代	
図 3. 平成28年度試掘調査出土遺物	3	図 24. 近世用水路の位置と淀川洪水砂(第2層) 分布範囲	47
図 4. 上牧遺跡の調査区割	4	図 25. 東側エリア 淀川洪水復旧土坑 平面	48
図 5. 現地説明会当日配布資料(抜粋)	7	図 26. 中世遺構 調査地全体平面図	51
図 6. 調査区地区割図	9	図 27. 西側エリア 中世遺構 全体平面図	52
図 7. 高槻市域周辺の地形	13	図 28. 1292 溝 平面・断面・出土遺物	53
図 8. 上牧遺跡周辺の空中写真	14	(昭和23年[1948]米軍撮影)	
(昭和23年[1948]米軍撮影)	14	図 29. 103・104・105・1291 土坑	54
図 9. 淀川北岸東部地域 遺跡分布図	16	平面・断面・出土遺物	
図 10. 上牧遺跡・梶原南遺跡・井尻遺跡 既往の調査地点	20	図 30. 362 溝 平面・断面・出土遺物	56
図 11. 調査区北側断面 柱状模式図(1) [Line 1・Line 3]	26	図 31. P5 区柱穴群 平面・出土遺物	57
図 12. 調査区南側断面 柱状模式図(2) [Line 2]	27	図 32. 400・402・411 土坑, 385 井戸	58
図 13. 調査区南北断面図(1) [Line 6・Line 4]	28	平面・断面・出土遺物	
図 14. 調査区南北断面図(2) [Line 5・Line 7]	29	図 33. 17・31 水路 平面・断面	60
図 15. 調査地の旧地形	32	図 34. B-1 区西半 遺構平面・断面・出土遺物	61
図 16. 内ヶ池分流路(102 流路) 平面	35	図 35. 西側エリア東半 耕作段・水路群 平面	62
図 17. 内ヶ池分流路(102 流路)ほか 断面(1)	36	図 36. 西側エリア東半 耕作段・水路群	63
図 18. 内ヶ池分流路(102 流路)ほか 断面(2)	37	断面・出土遺物(1)	
図 19. 内ヶ池分流路(102 流路) D層	38	図 37. 西側エリア東半 耕作段・水路群 出土遺物(2)	64
古代の遺物出土状況	38	図 38. 西側エリア東半 南東耕作段低地部・耕作溝群	65
図 20. 内ヶ池分流路(102 流路) 出土遺物(1)	41	平面・断面・出土遺物	
[上層: 中世~古代]	41	図 39. 中央エリア 中世遺構 全体平面図	66
図 21. 内ヶ池分流路(102 流路) 出土遺物(2)	42	図 40. 中央エリア西半 居住関連遺構ほか 平面	68
[C・D層: 奈良時代後半]	42	図 41. 中央エリア西半 区画溝 断面・遺物出土状況	69



図 42. 中央エリア西半 区画溝 出土遺物	70	図 79. 掘立柱建物 41・42 平面・断面・出土遺物	119
図 43. 掘立柱建物 39、柱列 12 平面・断面・出土遺物	72	図 80. 1989 焼土坑、1995・1996 焼土坑 平面・断面・出土遺物 / 包含層出土遺物	120
図 44. 1551 井戸 平面・断面・出土遺物 (1)	74	図 81. 古墳時代遺構 調査地全体平面図	123
図 45. 1551 井戸 出土遺物 (2)	75	図 82. 古式土師器の系統分類	126
図 46. 1552・1617 井戸、1616・1619 土坑 平面・断面・出土遺物	76	図 83. 西側エリア 古墳時代遺構 全体平面図	128
図 47. 中央エリア東半 耕作関連遺構ほか 平面	78	図 84. 西側エリア・微高地A 古墳時代遺構 全体平面図	130
図 48. 中央エリア東半 耕作関連遺構 平面・断面・出土遺物	79	図 85. 掘立柱建物 32、112 溝・113 溝 平面・断面・出土遺物	131
図 49. 1753 井戸 平面・断面・出土遺物	81	図 86. 掘立柱建物 49・6 平面・断面・出土遺物	132
図 50. 1752・1768・1784 土坑 平面・断面	82	図 87. 竪穴建物 58 平面・断面・出土遺物	133
図 51. 中央エリア 粘土採掘痕跡分布範囲	84	図 88. 掘立柱建物 30 平面・断面・出土遺物	135
図 52. 中央エリア西半 大型土坑 (粘土採掘土坑) ほか 全体平面図	85	図 89. 竪穴建物 39・掘立柱建物 31 平面・断面・出土遺物	136
図 53. 中央エリア西半 大型土坑 (粘土採掘土坑) 断面 (1)	86	図 90. 竪穴建物 57、掘立柱建物 9 平面・断面・出土遺物	138
図 54. 中央エリア西半 大型土坑 (粘土採掘土坑) 断面 (2)	87	図 91. 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) 平面・断面	140
図 55. 中央エリア粘土採掘関連遺構・第 4a 層・包含層 出土遺物	88	図 92. 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) 出土遺物 (1)	141
図 56. 1522 土坑、1517・1518 土坑 断面	88	図 93. 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) 出土遺物 (2)	142
図 57. 210 土坑、211 溝ほか第 4a 層関連耕作遺構 平面・断面	89	図 94. 1482 井戸 平面・断面	143
図 58. 東側エリア 中世遺構 全体平面図	91	図 95. 1482 井戸 出土遺物 (1)	144
図 59. 東側エリア 中世古段階 水田・耕作溝群 平面	93	図 96. 1482 井戸 出土遺物 (2)	145
図 60. 東側エリア 中世古段階 溝 断面・遺物出土状況・出土遺物	94	図 97. 1482 井戸 出土遺物 (3)	146
図 61. 東側エリア 大型土坑 (粘土採掘土坑) 平面・断面・出土遺物	95	図 98. 1482 井戸 出土遺物 (4)	147
図 62. 東側エリア 中世新段階 耕作溝群 平面	96	図 99. 116 井戸 平面・断面	148
図 63. 東側エリア 中世新段階 耕作段・溝 断面・出土遺物	97	図 100. 116 井戸 出土遺物	149
図 64. 古代遺構 調査地全体平面図	100	図 101. 1298 落込み・100 落込み (北側) 平面・出土遺物	150
図 65. 柱列 9、352・357・750 溝、1479 焼土坑 平面・断面・出土遺物	101	図 102. 1503・1481・1480 土坑 平面・断面・出土遺物	151
図 66. 957・960 溝、1007 土坑、976 土坑 平面・断面・出土遺物	103	図 103. 西側エリア 微高地A 包含層ほか 出土遺物	152
図 67. 957 溝 出土遺物 (1)	104	図 104. 100 落込み (浅谷) 全体平面図	153
図 68. 957 溝 出土遺物 (2)	105	図 105. 100 落込み (浅谷) 南半 詳細平面 (1)・遺物出土状況	154
図 69. 957 溝 出土遺物 (3)、西側エリア 包含層ほか 出土遺物	106	図 106. 100 落込み (浅谷) 詳細平面 (2)・断面	155
図 70. 1526・1625・199 溝 平面・断面・出土遺物	109	図 107. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (1) (最上層・上層・中層出土遺物)	158
図 71. 掘立柱建物 26 平面・断面・出土遺物	110	図 108. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (2) (中層出土遺物)	159
図 72. 掘立柱建物 26 柱根・出土遺物	111	図 109. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (3) (中層～下層・A2 区出土遺物)	160
図 73. 654 井戸 平面・断面・出土遺物	112	図 110. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (4) (下層出土遺物)	161
図 74. 中央エリア 包含層ほか 出土遺物	113	図 111. 西側エリア・微高地B 1280・473・931 溝、 1279 溝、1036 溝 平面・断面・出土遺物	162
図 75. 東側エリア 古代遺構 全体平面図	114	図 112. 西側エリア・微高地B 1279 溝、1036 溝 断面・出土遺物	163
図 76. 竪穴建物 54 平面・断面・出土遺物	115	図 113. 西側エリア・微高地B 西半 古墳時代遺構 全体平面図	164
図 77. 東側エリア 溝群・2001 土坑 平面・断面	117		
図 78. 東側エリア 溝群・2001 土坑 出土遺物	118		



図 114. 掘立柱建物 48、竪穴建物 16 平面・断面・出土遺物	165	図 161. 963 土坑 平面・断面・出土遺物、西側エリア 微高地 B-2 包含層ほか 出土遺物	220
図 115. 竪穴建物 9 平面・断面・出土遺物	166	図 162. 22 溝 断面	222
図 116. 竪穴建物 10 平面・断面・出土遺物	167	図 163. P4 区主要遺構 全体平面図	223
図 117. 掘立柱建物 5、柱列 2 平面・断面	168	図 164. 大型掘立柱建物 13 平面・断面 (1)・出土遺物	224
図 118. 竪穴建物 34、柱列 6 平面・断面・出土遺物	169	図 165. 大型掘立柱建物 13 断面 (2)・柱根	225
図 119. 竪穴建物 18 平面・断面・出土遺物	170	図 166. 掘立柱建物 15 平面・断面	226
図 120. 掘立柱建物 10 平面・断面	171	図 167. 866 井戸・867 落込みほか 全体平面・断面	227
図 121. 竪穴建物 8・12・13 全体平面	173	図 168. 867 落込みほか 遺物出土状況	228
図 122. 竪穴建物 8・12 平面・断面	174	図 169. 867 落込みほか 出土遺物	229
図 123. 竪穴建物 8・12 断面・出土遺物	175	図 170. 866 井戸 平面・断面 (1)	231
図 124. 竪穴建物 13 平面・断面	178	図 171. 866 井戸 断面 (2)	233
図 125. 竪穴建物 13 内遺構 平面・断面・出土遺物	179	図 172. 866 井戸 遺物出土状況 (1) [上層・中層]	234
図 126. 竪穴建物 7 平面・断面	180	図 173. 866 井戸 遺物出土状況 (2) [下層]	235
図 127. 竪穴建物 7 内遺構 平面・断面・出土遺物	181	図 174. 866 井戸 出土遺物 (1) [上層上面・上層①]	236
図 128. 竪穴建物 11 平面・断面	182	図 175. 866 井戸 出土遺物 (2) [上層②]	237
図 129. 竪穴建物 11 断面・出土遺物	183	図 176. 866 井戸 出土遺物 (3) [上層③]	238
図 130. 竪穴建物 6 平面・断面・出土遺物	185	図 177. 866 井戸 出土遺物 (4) [上層④・上層～中層]	239
図 131. 竪穴建物 3・2 平面・断面	186	図 178. 866 井戸 出土遺物 (5) [中層]	240
図 132. 竪穴建物 1・55・56 平面・断面、 竪穴建物 3・2 出土遺物	187	図 179. 866 井戸 出土遺物 (6) [下層①]	242
図 133. 掘立柱建物 4 平面・断面・出土遺物	189	図 180. 866 井戸 出土遺物 (7) [下層②]	243
図 134. 掘立柱建物 1 平面・断面・出土遺物	190	図 181. 826 大型土坑 平面・断面・出土遺物 (1)	246
図 135. 掘立柱建物 2 平面・断面・出土遺物	191	図 182. 826 大型土坑 出土遺物 (2)	247
図 136. 450 落込み 平面・断面	194	図 183. 竪穴建物 22、掘立柱建物 14 平面・断面・出土遺物	248
図 137. 450 落込み 出土遺物	195	図 184. 827 落込みほか 平面・断面	250
図 138. 432 土坑 平面・断面・遺物出土状況	196	図 185. 827 落込みほか 出土遺物 (1)	251
図 139. 432 土坑 出土遺物 (1)	197	図 186. 827 落込みほか 出土遺物 (2)	252
図 140. 432 土坑 出土遺物 (2)	198	図 187. 854 大型土坑 平面・断面・出土遺物	253
図 141. 33 落込み 平面・断面	199	図 188. 838 土坑、822 土坑、834 土坑、863・864 土坑、 833・836 溝 平面・断面・出土遺物	255
図 142. 33 落込み 出土遺物 (1)	200	図 189. 掘立柱建物 3 平面・断面	256
図 143. 33 落込み 出土遺物 (2)	201	図 190. 32 井戸 平面・断面	257
図 144. 1400 土坑、410 土坑 平面・断面・出土遺物	201	図 191. 32 井戸 遺物出土状況 (1)・出土遺物 (1)	258
図 145. 西側エリア 微高地 B-1 包含層ほか 出土遺物 (1) [古墳時代初頭・前期ほか]	202	図 192. 32 井戸 出土遺物 (2)	259
図 146. 西側エリア 微高地 B-1 包含層ほか 出土遺物 (2) [古墳時代中期・後期]	203	図 193. 32 井戸 遺物出土状況 (2)・出土遺物 (3)	260
図 147. 西側エリア 微高地 B-1 包含層ほか 出土遺物 (3) [石製品]	204	図 194. 32 井戸 遺物出土状況 (3)・出土遺物 (4)	261
図 148. 西側エリア・微高地 B 東半 古墳時代遺構 全体平面図	206	図 195. 34 土坑、25 土坑 平面・断面・出土遺物	264
図 149. 掘立柱建物 22 平面・断面・出土遺物	207	図 196. 21 溝、23 溝、26 土坑 平面・断面・出土遺物	265
図 150. 竪穴建物 60 平面・断面・出土遺物 (1)	208	図 197. 20 土坑 平面・断面・出土遺物	266
図 151. 竪穴建物 60 平面・断面・出土遺物 (2)	209	図 198. 西側エリア 微高地 B 南東縁刃部～低地部 包含層ほか 出土遺物	267
図 152. 掘立柱建物 18 平面・断面・出土遺物	211	図 199. 中央エリア 古墳時代遺構 全体平面図	269
図 153. 掘立柱建物 19 平面・断面・出土遺物	212	図 200. 中央エリア・微高地 C 1607・1651・168 溝、 1622 溝、645 溝、650 溝 平面	270
図 154. 掘立柱建物 20・21 平面・断面・出土遺物	213	図 201. 1607・1651・168 溝、1622 溝、645 溝、650 溝 断面・出土遺物	271
図 155. B-2 区東端 竪穴建物群 平面	214	図 202. 中央エリア 微高地 C 西半古墳時代遺構 全体平面図	273
図 156. B-2 区東端 竪穴建物群 断面・出土遺物	215	図 203. 掘立柱建物 23 平面・断面・出土遺物	274
図 157. 971 大型土坑 平面・断面	216	図 204. 掘立柱建物 25 平面・断面	275
図 158. 971 大型土坑 出土遺物 (1)	217	図 205. 掘立柱建物 28、柱列 7 平面・断面	277
図 159. 971 大型土坑 出土遺物 (2)	218	図 206. 掘立柱建物 24 平面・断面・出土遺物	278
図 160. 971 大型土坑 出土遺物 (3)	219		

図 207. 掘立柱建物 33・50、1135 ピット 平面・断面・出土遺物	279	図 248. 竪穴建物 21 平面・断面・出土遺物	330
図 208. 掘立柱建物 27 平面・断面	280	図 249. 竪穴建物 20 平面・断面	332
図 209. 掘立柱建物 29 平面・断面・出土遺物	281	図 250. 竪穴建物 20 断面・出土遺物	333
図 210. 竪穴建物 38 平面・断面・出土遺物	282	図 251. 竪穴建物 19 平面・断面 (1)	334
図 211. 竪穴建物 35 平面・断面・出土遺物	283	図 252. 竪穴建物 19 平面・断面 (2)・出土遺物	335
図 212. 竪穴建物 36・37・45・42 平面・断面・出土遺物 (1)	284	図 253. 竪穴建物 50、掘立柱建物 35 平面・断面 (1)	336
図 213. 竪穴建物 36・37・45・42 平面・断面・出土遺物 (2)	285	図 254. 竪穴建物 50、掘立柱建物 35 平面・断面 (2)・出土遺物	337
図 214. 竪穴建物 32 平面・断面	288	図 255. 竪穴建物 52、掘立柱建物 11 平面・断面・出土遺物	339
図 215. 竪穴建物 32 出土遺物	289	図 256. 掘立柱建物 36 平面・断面・出土遺物	340
図 216. 竪穴建物 33・43・44 平面・断面	291	図 257. 掘立柱建物 37 平面・断面	341
図 217. 竪穴建物 40 平面・断面・出土遺物、 竪穴建物 33・43・44 出土遺物	293	図 258. 掘立柱建物 40 平面・断面、 掘立柱建物 37 出土遺物・柱根	343
図 218. 竪穴建物 41 平面・断面・出土遺物	294	図 259. 648 井戸 平面・断面・出土遺物	344
図 219. 竪穴建物 30 平面・断面・出土遺物	295	図 260. D-2 区西端遺構群 平面・断面・出土遺物	346
図 220. 978 土坑 平面・断面	296	図 261. C-2 区西半遺構群 平面・断面・出土遺物、 微高地 C 東半包含層ほか出土遺物	347
図 221. 978 土坑 出土遺物	297	図 262. 625 水路 平面・断面・出土遺物	349
図 222. 竪穴建物 46・掘立柱建物 38 平面・断面	300	図 263. 東側エリア 古墳時代遺構 全体平面図	351
図 223. 竪穴建物 46、掘立柱建物 38、 竪穴建物 47・48・49 出土遺物	301	図 264. 掘立柱建物 12・44 ほか 平面・断面	352
図 224. 竪穴建物 47・48・49 平面・断面 (1)	302	図 265. 800 被熱面・807 焼土坑・804 土坑ほか 平面・断面・出土遺物	353
図 225. 竪穴建物 47・48・49 平面・断面 (2)	303	図 266. 竪穴建物 53 平面・断面	354
図 226. 竪穴建物 51 平面・断面・出土遺物	305	図 267. 竪穴建物 53 出土遺物	355
図 227. 柱列 11・1623 土器溜り 平面・断面・出土遺物 (1)	306	図 268. 790 井戸、775・771 土坑、柱列 4 平面・断面・出土遺物	356
図 228. 柱列 11・1623 土器溜り 出土遺物 (2)	307	図 269. 掘立柱建物 43 平面・断面	358
図 229. 掘立柱建物 51、柱列 15 ほか 平面・断面 (1)	308	図 270. 1985 井戸 平面・断面・出土遺物	359
図 230. 掘立柱建物 51、柱列 15 ほか 断面 (2)・出土遺物	309	図 271. 2010 土坑 (1976 土器溜り)、2009・2011 土坑 平面・断面・出土遺物	360
図 231. 掘立柱建物 34 平面・断面	310	図 272. 柱列 14 平面・断面、東側エリア 包含層ほか 出土遺物	362
図 232. 掘立柱建物 7 平面・断面	311	図 273. 弥生時代遺構 調査地全体平面図	367
図 233. 1897 井戸 平面・断面・出土遺物 (1)	312	図 274. 方形周溝墓西群 平面 (1)	368
図 234. 1897 井戸 出土遺物 (2)	313	図 275. 方形周溝墓西群 断面 (1) 出土遺物 (1)	369
図 235. 1683 土坑、1665 柱穴ほか 平面・断面・出土遺物	315	図 276. 方形周溝墓西群 平面 (2)・断面 (2)	370
図 236. 中央エリア 微高地 C 西半 包含層ほか 出土遺物	317	図 277. 方形周溝墓西群 遺物出土状況・出土遺物 (2) ……………	371
図 237. 中央エリア 微高地 C 東半 古墳時代遺構 全体平面図	318	図 278. 1008 土坑 平面・断面・出土遺物、 西側エリア包含層 出土遺物	374
図 238. 竪穴建物 31 平面・断面・出土遺物	319	図 279. 方形周溝墓東群 平面 (1)	375
図 239. 掘立柱建物 17 平面・断面・出土遺物	320	図 280. 方形周溝墓東群 断面 (1)	376
図 240. 掘立柱建物 16 平面・断面	321	図 281. 方形周溝墓東群 出土遺物 (1)	377
図 241. 掘立柱建物 8・45 平面・断面・出土遺物	322	図 282. 方形周溝墓東群 平面・断面・出土遺物 (2)	378
図 242. 竪穴建物 5 平面・断面・出土遺物	323	図 283. 東側エリア 2003 溝 平面・断面、 P14 区出土弥生土器	380
図 243. 竪穴建物 4 平面・断面・出土遺物	325	図 284. 縄文土器・石器	382
図 244. 掘立柱建物 52・53・54、311 土坑 平面・断面・出土遺物	326	図 285. 鉄塔移設に伴う立会調査地点	383
図 245. C-2 区・C-3 区南端柱穴群 平面・断面・出土遺物	327	図 286. 立会調査②地点 柱状断面模式図・出土遺物	384
図 246. 竪穴建物 59 平面・断面	328	図 287. 自然科学分析の試料採集地点	385
図 247. 竪穴建物 59 遺物出土状況・出土遺物	329	図 288. 暦年較正結果 (1) 平成 30 年度分析実施試料	388
		図 289. 暦年較正結果 (2) 令和 2 年度分析実施試料	391

図 290. 花粉分析処理フロー	393	図 300. 梶原古墳群と上牧遺跡の二重口縁壺	426
図 291. イネ科花粉の粒径比較図 (中村 1974)	393	図 301. 朱関連遺物	427
図 292. 花粉ダイアグラム	395	図 302. 竪穴建物の基本構造	431
図 293. 大型複合口縁壺 (1231) 黒色附着物と その赤外吸収スペクトル図	411	図 303. 掘立柱建物の諸型式	433
図 294. 各層の形成時期	415	図 304. 古墳時代集落の景観変遷 (1)	437
図 295. 土地利用の通時的変遷 (1)	416	図 305. 古墳時代集落の景観変遷 (2)	438
図 296. 土地利用の通時的変遷 (2)	417	図 306. 古墳時代集落の景観変遷 (3)	439
図 297. 出土土器の主要系統の移り変わり	422	図 307. 古墳時代集落の景観変遷 (4)	442
図 298. 小型精製器種の在地模倣の過程	423	図 308. 古墳時代集落の景観変遷 (5)	443
図 299. 主な外来系土器	424	図 309. 上牧遺跡と周辺の環境・集落・古墳	445

## 表 目 次

表 1. 新名神高速道路関連 埋蔵文化財既刊発掘調査報告書一覧	3	表 11. 分析試料の概要	392
表 2. 上牧遺跡埋蔵文化財発掘調査工程	5	表 12. 微化石概査結果	393
表 3. 上牧遺跡および周辺遺跡の主要な調査成果一覧	21	表 13. 花粉化石組成表	394
表 4. 本報告における古墳時代の年代的枠組み	125	表 14. 上牧遺跡分析試料一覧	400
表 5. 古墳時代の遺構・遺物の概要一覧	363	表 15. 上牧遺跡出土種実 (古墳時代)	401
表 6. 方形周溝墓一覧	366	表 16. 上牧遺跡出土種実 (奈良時代)	402
表 7. 放射性炭素年代測定試料および処理 (1) 平成 30 年度分析実施試料	386	表 17. 上牧遺跡古墳時代出土木材の樹種	403
表 8. 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (1) 平成 30 年度分析実施試料	387	表 18. 動物遺存体一覧表	410
表 9. 放射性炭素年代測定試料および処理 (2) 令和 2 年度分析実施試料	390	表 19. 生漆の赤外吸収位置とその強度	412
表 10. 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (2) 令和 2 年度分析実施試料	391	表 20. 建物遺構・主要遺構の変遷と土器様相の変化	421
		表 21-1. 竪穴建物一覧	431
		表 21-2. (掘立柱建物) 一覧	431
		表 22. 掘立柱建物一覧	433
		表 23. 井戸・大型土坑・土坑・落込み一覧	435

## 写真目次

写真 1. 調査風景写真	6	写真 7. 上牧遺跡出土木材 (1)	405
写真 2. 坂路工調査写真	8	写真 8. 上牧遺跡出土木材 (2)	406
写真 3. 土坑状変形 検出状況写真	381	写真 9. 上牧遺跡出土木材 (3)	407
写真 4. 立会風景写真	384	写真 10. 上牧遺跡出土昆虫遺体 (1:2:ヒメコガネ 3:コアオハナムグリ)	408
写真 5. 花粉顕微鏡写真	398	写真 11. 貝類の樹皮 (130 焼土坑)	409
写真 6. 上牧遺跡出土種実	404	写真 12. 馬骨・馬歯 (1617 井戸)	409

# 写真図版目次

巻頭図版 上牧遺跡の古墳時代集落

図版(扉) B-1区 竪穴建物・掘立柱建物 検出作業

- カラー図版1. 上牧遺跡と周辺環境
- カラー図版2. 調査区全景
- カラー図版3. 調査区全景
- カラー図版4. 大型掘立柱建物13と866井戸
- カラー図版5. 866井戸における土器祭祀
- カラー図版6. 古墳時代 竪穴建物
- カラー図版7. 古墳時代 井戸・土坑・落込み
- カラー図版8. 古墳時代初頭～前期の土師器1
- カラー図版9. 古墳時代初頭～前期の土師器2
- カラー図版10. 古墳時代初頭～前期の土師器3 / 搬入礫
- カラー図版11. 古墳時代の石製品  
/ 102流路出土の古代の土器群

- 図版1. 調査地遠景
- 図版2. 基本層序
- 図版3. 調査区全景1 (西側エリア P6区・A3区・A1区)
- 図版4. 調査区全景2 (西側エリア B2区・A2区・P5区・B1区)
- 図版5. 調査区全景3 (西側エリア P4区・B1区)
- 図版6. 調査区全景4 (中央エリア C8区・  
C7区・C6区・C5区・C4区・C3区)
- 図版7. 調査区全景5 (中央エリア P3区・C5区・C2区)
- 図版8. 調査区全景6 (中央エリア P2区・C1区・D2区・D1区)
- 図版9. 調査区全景7 (東側エリア P14区・E2区・E1区)
- 図版10. 中世後半から近世の土地利用 / 中世の遺構1  
(西側エリア)
- 図版11. 中世の遺構2 (西側エリア・中央エリア)
- 図版12. 中世の遺構3 (中央エリア)
- 図版13. 中世の遺構4 (中央エリア・東側エリア)
- 図版14. 古代の遺構1 102流路 (西側エリア)
- 図版15. 古代の遺構2 区画溝・焼土坑・井戸  
(西側エリア・中央エリア)
- 図版16. 古代の遺構3 建物遺構・水路・焼土坑  
(中央エリア・東側エリア)
- 図版17. 古墳時代の遺構1 浅谷100落込み (西側エリア)
- 図版18. 古墳時代の遺構2 建物遺構 (西側エリア)
- 図版19. 古墳時代の遺構3 建物遺構と付属遺構 (西側エリア)
- 図版20. 古墳時代の遺構4 建物遺構における出土遺物・  
溝断面 (西側エリア)
- 図版21. 古墳時代の遺構5 大型掘立柱建物13 (西側エリア)
- 図版22. 古墳時代の遺構6 1482井戸 (西側エリア)
- 図版23. 古墳時代の遺構7 32井戸・866井戸 (西側エリア)

- 図版24. 古墳時代の遺構8 井戸・土坑・落込み (西側エリア)
- 図版25. 古墳時代の遺構9 大型土坑・落込み・土坑  
(西側エリア)
- 図版26. 古墳時代の遺構10 建物遺構と付属遺構・  
遺物出土状況 (中央エリア)
- 図版27. 古墳時代の遺構11 建物遺構と付属遺構 (中央エリア)
- 図版28. 古墳時代の遺構12 水路および溝断面・  
井戸・土器溜り・土坑 (中央エリア)
- 図版29. 古墳時代の遺構13 建物遺構と付属遺構・  
井戸・土器溜り (東側エリア)
- 図版30. 弥生時代の遺構1 方形周溝墓西群 (B-2区・A-2区)
- 図版31. 弥生時代の遺構2 方形周溝墓東群・西群 水路  
(C-6区・C-7区・C-5区・P-14区・A-2区)
- 図版32. 中世の遺物 (鎌倉時代 1296溝・1551井戸ほか)
- 図版33. 古代の遺物1 (奈良時代 102流路)
- 図版34. 古代の遺物2  
(奈良時代 957溝・654井戸 / 飛鳥時代 1995溝)
- 図版35. 古代の遺物3 / 古墳時代の遺物1  
(竪穴建物54 / 100落込み・102流路)
- 図版36. 古墳時代の遺物2 (西側エリア 建物遺構・1482井戸ほか)
- 図版37. 古墳時代の遺物3 (西側エリア 1482井戸ほか)
- 図版38. 古墳時代の遺物4 (西側エリア 1482井戸・116井戸)
- 図版39. 古墳時代の遺物5  
(西側エリア 竪穴建物・432土坑・116井戸)
- 図版40. 古墳時代の遺物6 (西側エリア 32井戸)
- 図版41. 古墳時代の遺物7 (西側エリア 32井戸)
- 図版42. 古墳時代の遺物8  
(西側エリア 450落込み・33落込み・854大型土坑)
- 図版43. 古墳時代の遺物9  
(西側エリア 971井戸・826大型土坑・25土坑)
- 図版44. 古墳時代の遺物10  
(西側エリア 866井戸)
- 図版45. 古墳時代の遺物11 (西側エリア 866井戸)
- 図版46. 古墳時代の遺物12 (西側エリア 866井戸)
- 図版47. 古墳時代の遺物13  
(西側エリア 827落込み・867落込みほか)
- 図版48. 古墳時代の遺物14  
(中央エリア 竪穴建物32・ほか建物遺構)
- 図版49. 古墳時代の遺物15 (中央エリア 1897井戸)
- 図版50. 古墳時代の遺物16  
(中央エリア 978土坑・建物遺構・311土坑)
- 図版51. 古墳時代の遺物17  
(中央エリア 1623土器溜り・建物遺構・648井戸)
- 図版52. 古墳時代の遺物18 / 縄文土器・石器類  
(東側エリア 建物遺構・790井戸・1623土器溜り)
- 図版53. 弥生時代の遺物 (方形周溝墓西群・東群)
- 図版54. 中世・古代・古墳時代の金属製品・石製品・木製品



# 第1章 調査の経緯と方法

## 第1節 調査に至る経緯

本書は、西日本高速道路株式会社関西支社（以下、事業者）が実施する高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に先立って実施した上牧遺跡の発掘調査報告書である（図1）。

通称、新名神高速道路（以下、同様に記載）と呼称されるこの路線は、名古屋市から神戸市を結ぶ約174kmの高速道路で、大都市間のネットワーク強化や大規模災害への対応などを目的に建設が進められている。大阪府域を通過する八幡京田辺JCT－高槻JCT－神戸JCTの区間のうち、西側の高槻JCT－神戸JCT間は平成30年3月に開通しており、令和3年12月現在は、東側の八幡京田辺JCT－高槻JCT間の建設事業が進められている。

新名神高速道路の建設事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、大阪府教育庁文化財保護課（以下、府教育庁）と事業者との協議が重ねられた結果、府教育庁の指導の下、発掘調査は公益財団法人大阪府文化財センター（以下、文化財センター）が担当することとなった。先行して開通した西側の高槻JCT－神戸JCT間のうち、大阪府域では、成合遺跡群（高槻市）、千提寺遺跡群（茨木市）、止々呂美城跡（箕面市）などの調査を実施し、平成27年度までに発掘調査報告書の刊行が完了している。東側の八幡京田辺JCT－高槻JCT間については、平成28年1月13日付で府教育庁、事業者、文化財センターの三者で発掘調査に関する協定書を交わし、平成28年度から事業区間内の確認調査と本調査に着手した。当該区間において本調査の対象となった遺跡は、東から招提北代遺跡・船橋遺跡（以上、枚方市）、上牧遺跡・梶原南遺跡・梶原古墳群・金龍寺旧境内跡（以上、高槻市）で、発掘調査の終了後、遺物整理作業をおこない、順次、報告書を刊行しているところである（表1）。

本書で報告する上牧遺跡は、高槻市上牧町・梶原中村町に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、昭和46・47年（1971・1972）に実施された関西電力淀川変電所の建設に伴う調査で遺跡の

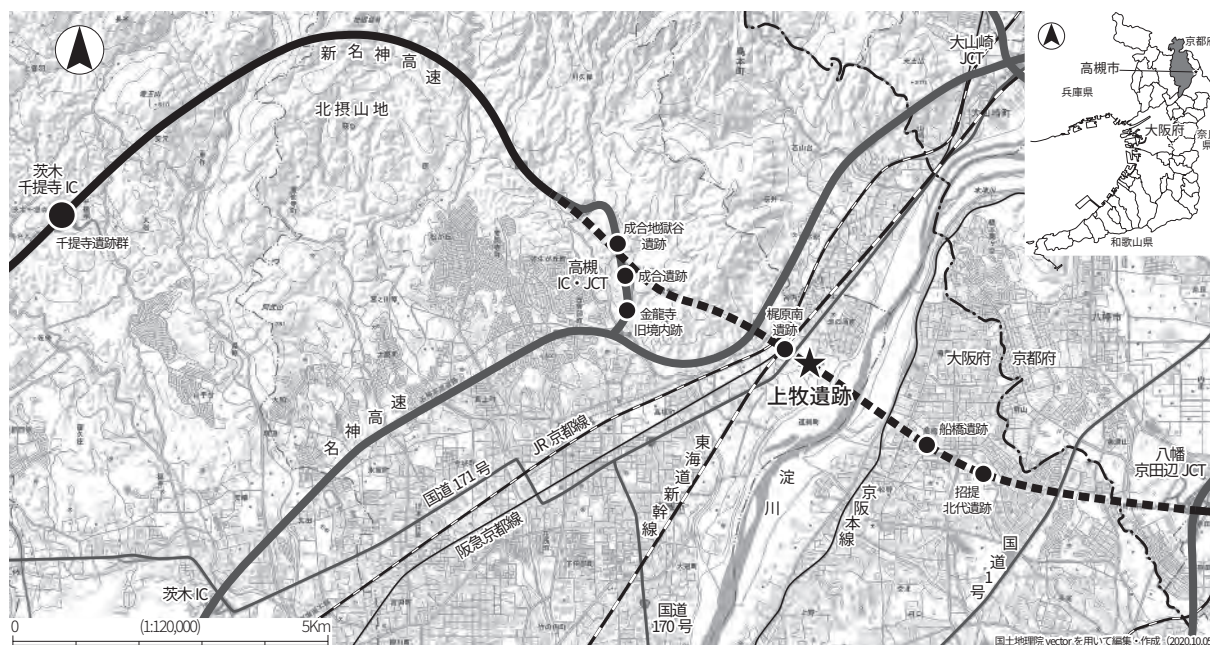


図1. 新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点



図2. 上牧遺跡とその周辺



表1. 新名神高速道路関連埋蔵文化財既刊発掘調査報告書一覧

区間	所在	報告書名	No.	刊行年月
大阪西区间 高槻JCT・IC - 神戸IC (平成30年3月18日開通)	高槻市	『金龍寺旧境内跡』	第224集	2012年5月
	高槻市	『成合1号墳』	第234集	2013年2月
	茨木市	『千提寺南遺跡』	第245集	2014年3月
	箕面市	『止々呂美城跡』	第246集	2014年3月
	高槻市	『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』	第251集	2014年10月
	茨木市	『千提寺西遺跡 日奈戸遺跡 千提寺市阪遺跡 千提寺クルス山遺跡』	第256集	2015年6月
大阪東区间 八幡京田辺JCT - 高槻JCT (令和5年度開通予定)	高槻市	『成合地獄谷遺跡・成合遺跡2・金龍寺旧境内跡3』	第260集	2015年7月
	枚方市	『招提北代遺跡』	第278集	2017年3月
	枚方市	『船橋遺跡』	第309集	2021年4月
	高槻市	『上牧遺跡』(本書)	第313集	2021年12月

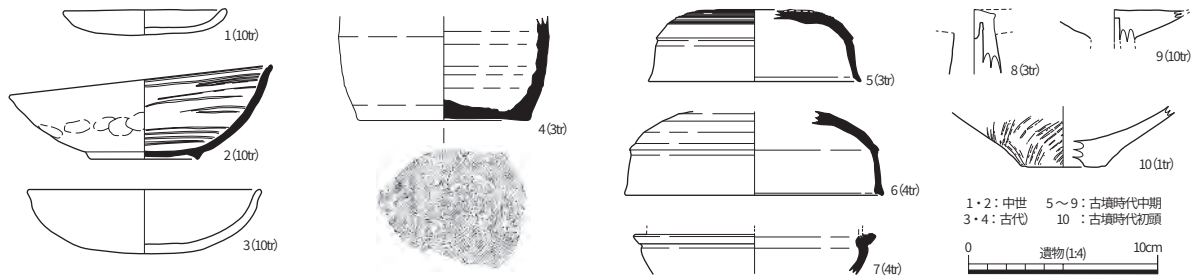


図3. 平成28年度試掘調査出土遺物

存在が確認された。特にこのときの調査は、まとまった中世集落の初期の調査事例として注目を集め、瓦器碗の編年と地域性を確立した点から全国的にも著名となっている。今回の新名神高速道路の計画路線は、上牧遺跡の一部と隣接する梶原南遺跡を横断するような形で東西に延びることから、埋蔵文化財包蔵地の範囲内は本調査の対象となったが、平成28年度からは周辺での埋蔵文化財の拡がりを確認するための試掘調査に着手した(図2)。このうち上牧遺跡の北東隣接地では、文化財センターが平成29年7月・8月に試掘調査を実施し、古墳時代・中世の遺物包含層と遺構の拡がりを確認したことから、同年10月に埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく拡大された。その後、本調査と並行して平成30年3月に実施した包蔵地の北西隣接地の試掘調査においても、中世以前の遺物包含層が確認され、包蔵地の範囲がふたたび拡大されている(図3・4)。

以上の経緯を受け、事業者と文化財センターは平成29年10月25日付で発掘調査の委託契約を締結し、11月1日から上牧遺跡の本調査に着手した。発掘調査は、その1(調査名称17-1:平成29年11月1日~平成30年7月31日)、その2(調査名称18-1:平成30年8月1日~令和元年7月31日)、その3(調査名称19-1:令和元年8月1日~11月29日)の3次に亘って実施した。さらに上記の委託契約内で、上牧遺跡の発掘調査に加え、上牧遺跡および梶原南遺跡の隣接地の試掘調査を3か所併せて実施しており、その結果、上牧遺跡および梶原南遺跡の範囲がそれぞれ拡大されている。

なお、新名神高速道路建設の本体工事のほかに、事業地周辺では道路建設事業に伴う関西電力鉄塔および電線の移設工事などが進められていた。これらの工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、高槻市教育委員会文化財課(調査当時、現街にぎわい部文化財課、以下、市文化財課)の管轄になるが、本事業に付帯する一連の工事でもあることから、府教育庁・市文化財課・事業者・関西電力による協議の結果、本調査および立会については文化財センターが今回の委託契約の中で併せて実施することとなった。さらにこれ以外にも、隣接の民間農地への環境整備として進入用の坂路を設置することとなったが、この取り扱いについても、協議の結果、文化財センターが委託契約内で調査を実施するように指示を受けた。こうした一連の最終的な発掘調査面積は、延べ12,040㎡である。

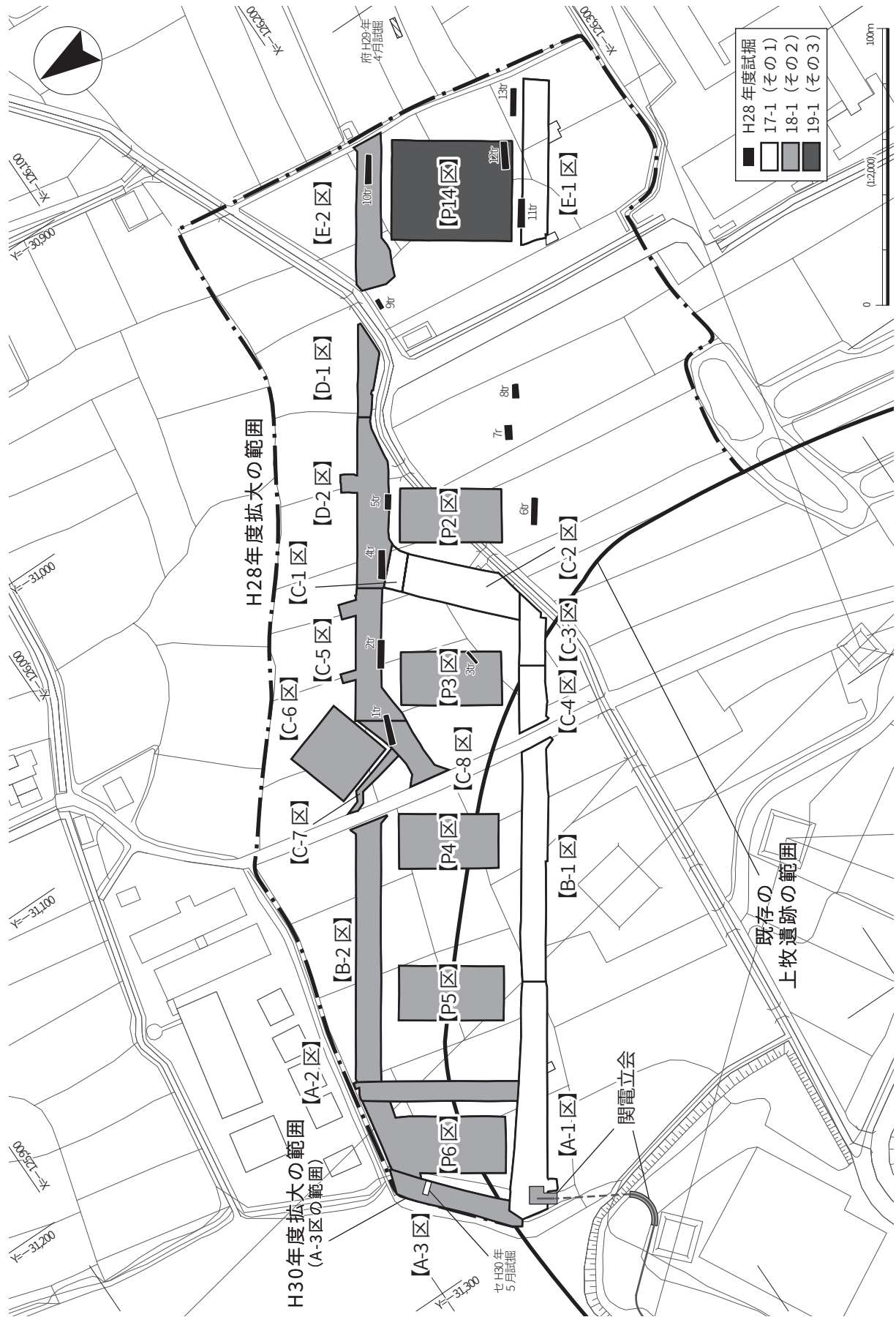


図4. 上牧遺跡の調査区割



表2. 上牧遺跡埋蔵文化財発掘調査工程

調査次	調査区名	面積 (㎡)	調査期間	立会 (対象調査区)
その1 (17-1)  2,945 ㎡ (+試掘 10 ㎡)	E-2 区	456	H29.11.27 ~ H30.01.11	第1回: H29.12.12 (E-1 区) 第2回: H29.12.22 (E-1 区) 第3回: H30.01.19 (E-1 区) 第4回: H30.02.20 (B-1 区東) 第5回: H30.03.15 (B-1 区西) 第6回: H30.04.10 (A-1 区) 第7回: H30.04.24 (C-1 区) 第8回: H30.05.29 (C-3 区・隣接地試掘) 第9回: H30.07.18 (C-2 区・C-4 区)
	B-1 区	1,484	H30.01.15 ~ 03.26	
	A-1 区		H30.02.22 ~ 04.17	
	C-1 区	82	H30.04.18 ~ 04.26	
	C-3 区	170	H30.04.27 ~ 05.31	
	C-2 区	561	H30.05.25 ~ 07.31	
	C-4 区	192	H30.06.28 ~ 07.25	
	隣接地試掘	10	H30.5.28	
	その2 (18-1)  7,715 ㎡ (+試掘 20 ㎡)	A-2 区	350	
P5 区		711	H30.08.20 ~ 11.21	
P4 区		671	H30.10.02 ~ H31.04.08	
D-1 区		113	H30.11.01 ~ 11.15	
D-2 区		592	H30.11.26 ~ H31.02.01	
E-2 区		456	H31.01.18 ~ 02.21	
B-2 区		794	H.31.03.04 ~ R01.05.23	
A-3 区		305	H.31.03.06 ~ 03.28	
C-5 区		509	H.31.03.15 ~ 04.18	
C-6 区		569	H31.04.04 ~ 06.03	
P6 区		935	H31.04.11 ~ 06.18	
C-7 区		60	R01.05.07 ~ 05.24	
C-8 区		247	R01.05.24 ~ 06.28	
P3 区		674	R01.06.06 ~ 07.31	
P2 区		679	R01.06.21 ~ 07.31	
坂路 No.8		7	H31.04.15 ~ 04.18	
坂路 No.9		11	R01.05.13 ~ 05.17	
坂路 No.10		32	H31.04.13 ~ 04.18	
梶原中村地区試掘	20	H.31.03.25 ~ 03.27		
その3 (19-1)	P14 区	1,380	R.01.08.01 ~ 11.30	第1回: R01.11.20 (P14 区)

発掘調査に続いて実施した遺物整理は、文化財センター中部調査事務所にて令和元年12月2日から令和3年8月24日の期間で実施した。このうちの令和2年4月20日から5月15日までの期間は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策として作業を一時中止したため、当初の整理作業期間を約1ヶ月延長している。そして、令和3年12月22日、本書の刊行をもって一連の業務を完了した。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成29年11月から令和元年11月までの25ヶ月間に亘って実施した。調査範囲は、事業地内の橋脚部分と側道および、水路や鉄塔などの永久構造物の施工範囲を対象とし、本体工事と並行して発掘調査をおこなうこととなったことから、府教育庁・事業者、文化財センター三者の協議の上、着手可能な範囲から順次調査を実施している。このため発掘調査は、3次に亘って実施することとなったが、大きな遅滞もなく継続して発掘調査を進めることができた。具体的な調査の工程については、表2の通りである。

調査区名については、着手当初、事業地内に西側からA地区～E地区の呼称があったことから、側道と水路等の調査区は、地区ごとに着手順で通し番号を振って調査区名とした。橋脚部分の調査区については、橋脚番号をそのまま調査区名とした。なおD区の南側については、試掘調査の結果、包蔵地範囲内に含まれることとなったが、地形が低く下がり遺構・遺物の拡がりも希薄であったため、本調査の対象からは除外することとなった。

各調査区の終了時には、府教育庁の立会を受けた上で調査を完了し、事業者および本体工事施工業者に引き渡しをおこなっている(写真1-1)。

関西電力による電線移設の工事立会については、事業地北西A-1区に隣接する①地点と水路を挟んだ南側の②地点で実施した。平成30年11月から翌平成31年1月にかけて、工事の進捗に併せて随時、立会した結果、①地点では遺構の可能性のある土坑状の落ち込みを確認し、②地点では遺物包含層の存在を確認し、遺物を回収した。この内容については、本書第4章第8節にて報告する。



写真 1. 調査風景写真 (左：大阪府教育庁による立会 右：現地説明会)

隣接民地への進入を目的とした坂路工については、永久構造物ではないため掘削が及ぶ深度までが調査の対象となった(写真2)。このうち事業地南東側 E-1 区に隣接する坂路 No.1 と No.2 は、工事掘削の規定面が遺物包含層および遺構面にまで到達しなかったため、床面と堆積状況を確認したのち事業者を引き渡した。事業地北西側 A-1 区に隣接する坂路 No.8 については、工事掘削基底面が遺物包含層にまでおよんだものの、遺構面には達していなかったため、遺物包含層を人力掘削で掘り下げ、記録したのち事業者を引き渡した。これ以外の4か所は、隣接調査区の成果から遺構の検出が予想されたことから、通常通りの調査をおこない、府教育庁の立会を受けた。このうちの C-5 区の隣接坂路2か所は、同時に調査をおこなうことが可能であったため、坂路部分を拡張する形で本調査の範囲に含めている。

平成30年10月27日には、古墳時代の10棟近い数の竪穴建物がまとまって検出されたP5区と、方形周溝墓などが検出されたA-2区を対象に現地説明会を実施した<sup>1)</sup>。NHK・関西テレビのテレビ局2社と、毎日(全国版)・読売・産経(大阪府内版)の新聞社3紙に報道されたことから、当日は遠方からの来場者を含め約400名の参加者があり、好評のうちに現地説明会を開催することができた(写真1-2、図5<sup>2)</sup>)。さらに現地説明会後には、地元北摂を中心とする地域情報誌「シティライフ」の取材を受け、2018年10月号に調査成果の内容が紹介された。

これ以外に、文化財センターが委託運営をおこなっている博物館2館にて調査成果に関する速報展示を実施した。大阪府立弥生文化博物館では、スポット展示「古墳出現期における井戸の祭祀—高槻市上牧遺跡の発掘調査成果—」を平成31年3月19日～令和元年5月6日の期間で実施し、泉佐野市立歴史館いずみさのでは、夏季企画展「摂河泉の考古学—小さな速報展—」を令和元年7月20日～9月29日の期間で実施した。さらに同9月1日には、歴史館いずみさのにおいて調査成果に関する講演会をおこなっており、府民に調査成果の周知・還元をはかっているところである。

発掘調査の実施においては、府教育庁の指導の下、円滑に進めてきたが、地元との調整などの面で事業者ならびに本体工事施工業者の適切な協力があつた。さらに調査中には、文化財センター職員の応援もあったことから、最終的には滞りなく作業を完了することができた。また今回の調査では、特に古墳時代を中心とした時期の遺構・遺物が豊富に確認されたことから、現地説明会の前後や主要な調査区の終了間際などに、府教育庁関係者や地元の市文化財課をはじめ、関係各位の来訪があり、調査成果や出土遺物に関する様々な助言や教示を頂くことができた。



5. 古墳時代以降の上牧遺跡

古墳時代後半(6世紀後半、1450 年前)以降の遺物が、これまでにまったく出土していないため、この頃には集落は廃絶したと考えられます。北方の丘陵部の程原古墳群では、この頃を境に多くの横穴式石室をつくりはじめ、上牧遺跡の集落に住んでいた人々が北の山側に居住域を移動させた可能性も推測できます。古代については、7~9世紀初(1400~1250 年前頃)の遺物がほとんど出土していないため、具体的な土地利用のあり方は不明です。この時期には、淀川沿いには私利の牧が多く設置されたこと、今回の調査で明らかとなった窪地(落込み)に囲まれた集落に微高地が点在するような自然地形は、馬を囲い込んで放牧するのに適しています。「上牧」という地名から、牧場であった可能性を推測することもできますが、現状ではあくまで想像の域を越えません。

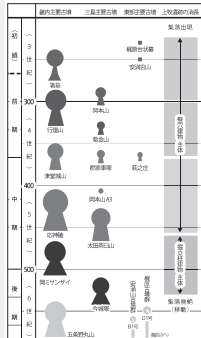
その後、調査地周辺では 11 世紀頃(1000 年前頃)から徐々に耕地開発が進んでおり、現在の耕作地の地割が中世までさかのぼることが明らかになってきました。その当時は、現在みられる平坦な地形が続く景観とは異なり、古くからの自然の凹凸が残されており、その名残が地割に反映されていることもわかってきました。また、今回の調査では中世の居住域は確認できませんでしたが、過去の調査で 13 世紀頃(800 年前頃)の屋敷地がみつかったこと、付近には居住域が分散していた様子もかえります。

近世以降は、度重なる洪水によって徐々に地形の低い部分が埋まり、現在のよう平坦に近い風景が形成されていったようです。調査地の東部では大規模な洪水痕跡が確認され、これに伴う耕地復旧のための田畑の天地返しの痕跡がみつかったことが、これについては近世の淀川の洪水の履歴の中でも甚大な被害を及ぼした享和二年(1802)の洪水痕跡の可能性が推測できます。

6. 調査成果のまとめ

今回の発掘調査で、調査地周辺には安定した微高地の広がりが確認され、古墳時代を通じて継続する集落の様子が明らかになってきました。確認された建物数は、三島地域東部ではこれまでで最大で、上牧遺跡がこの地域の中でも有力な集落のひとつであったことがわかってきました。居住域と墓域を同時に確認できる調査事例が少ないことや、地形に対応した土地利用のあり方、井戸に伴う祭壇の痕跡などといった、集落の具体的な姿が明らかとなった点は重要です。淀川流域では発掘調査の機会が少なく、遺跡の実態が不明瞭でしたが、古墳時代の集落の景観や風景、当時のくらしのあり方を垣間見ることができた貴重な調査事例になりました。

上牧遺跡と西側に隣接する井原遺跡では、古墳時代初期頃から集落が発見・発展することが今回や最新の調査で徐々に明確になってきましたが、その一方で弥生時代以来この地域の中心的な位置を占めてきた安清遺跡は集落の規模を縮小させつつあり、地域内の集落の動態は相互に連動する現象とみることも可能です。また、淀川分水路である内ヶ池に面し、北摂山地が覆も淀川に近る水上交通と陸上交通の結節点ともいへべき遺跡の立地も、集落の出現背景を考える上で重要といえます。さらにこの時期には、北摂山地かららびる丘陵上に安清宮山古墳や、加藤を伴う程原古墳群の方形石室などの有力な古墳・墳墓が存在しており、古墳時代のほしりりの時期に出現する有力な集落の発展に迫る手がかりになるかもしれません。



古墳の消長と上牧遺跡の動向

上牧遺跡 現地説明会資料  
 近畿国立文化財研究所(奈良国立文化財研究所)にて  
 発行・発行 公益財団法人大阪府文化財センター  
 〒590-0001 大阪府堺市東区上牧 3-1-1 番地 4 号  
 発行日 平成 30 年 10 月 27 日

高速自動車道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

高槻市上牧町

上牧遺跡の調査

淀川流域における古墳時代集落の発掘調査成果



公益財団法人 大阪府文化財センター

現在までの発掘調査成果の概要

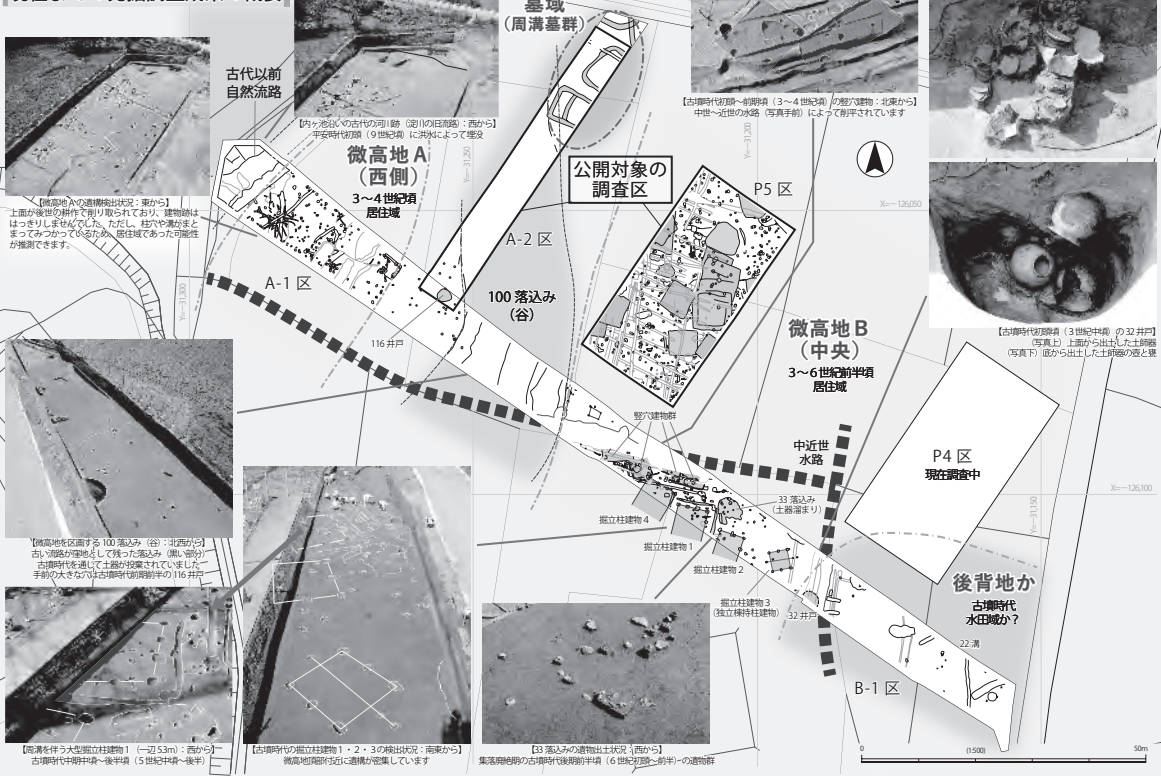


図5. 現地説明会当日配布資料(抜粋)



写真2. 坂路工調査写真 (左上: No.1 [立会] 右上: No.8・左下: No.9・右下: No.10 [調査])

### 第3節 調査方法

**現地調査** 調査前の事業地の現況は、部分的に工事用の仮設道の設置等があるのみで、耕作地として長らく土地利用がなされていた。発掘調査にあたっては、現耕土と近世の耕土をバックホウによって掘削したのち、中世以前の遺物包含層をスコップ等を用いて人力掘削し、遺構の検出と埋土の掘削をおこなった。

掘削深度は、調査区ごとに様相がやや異なる。浅い調査区では、現耕土を除去した T.P.+7.0 m で遺構検出面に到達するのに対し、深い調査区では 1.2 m 前後の深度があった。基本的にはオープンで掘削したが、隣接建物への影響が懸念された C-3 区と、内ヶ池の護岸際で掘削深度が 2 m 以上に及ぶことが判明した A-3 区は、部分的に矢板を打設して調査をおこなった。

発掘調査にあたっては、文化財センターが平成 22 年 12 月に定めた『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して実施している。マニュアルでは、世界測地系の国土座標に基づく平面直角座標系（第VI座標系）による大阪府全域をカバーする統一的な地区割を設定しており、出土遺物の取り上げや記録作業の全てをこれに則っておこなっている（図6）。

今回の調査では、調査面積が 1,000 m<sup>2</sup> を超える P14 区では空中写真測量を実施したが、それ以外は調査面積が 600 ~ 700 m<sup>2</sup> 以下の比較的小規模な調査区が大半であったことから、空中写真測量を実施していない。そのため測量については、平成 27 年度に事業者が本体工事用に事業地周辺に設置した 2 級・3 級基準点から、本体工事施工業者が各調査区の周辺に発掘調査用の基準点を打設し、図面の作成をおこなった。検出した遺構の記録は、トータルステーションを用いた全体平面図を 50 分の 1 サイズで作

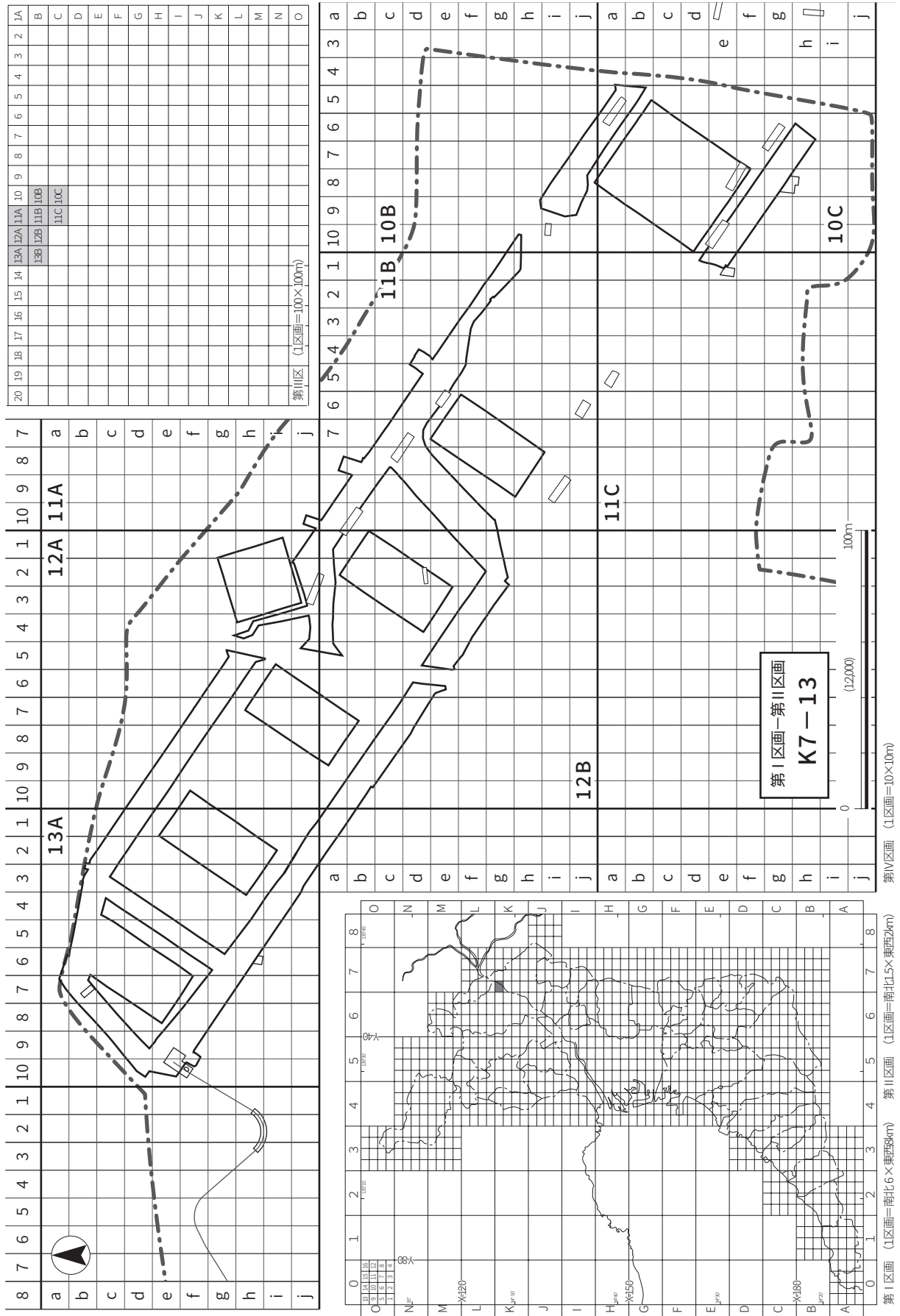


図6. 調査区地区割図



成し、主要な個別の遺構の平面図・断面図を手ばかりやトータルステーションを用いて、主に20分の1・10分の1などのサイズで作成した。それに加え、全体の等高線図を復元するための最終遺構面のレベリングや、FARO社製3次元レーザースキャナー Focus3Dを用いたレーザ測量などによって、測量の補足をおこなっている。こうしたレベリングによる遺構面の等高線図の作成や、3次元レーザ測量による遺構平面図の作成には、福井コンピューター社製の3D点群処理ソフト TREND-POINT およびCAD系測量ソフト MercuryEvoluto を使用し、適宜調整した上で本書掲載の挿図の下図とした。これ以外に、井戸や土坑などからはまとまった土器の出土がある場合が多々あり、そういった複雑な出土状況を呈する遺構に対しては、SfMによる写真測量を実施した。使用したソフトは、Agisoft社製 Metashape Professional で、俯瞰ならびに側面からのオルソ画像を作成し、出土状況の平面図や堆積状況の断面図を作成している。こうしたSfM写真測量は、近年、その有用性や手軽さから埋蔵文化財調査における普及が著しく進んでいるが、通常の手ばかりよりも迅速で、かつ精度面でもまったく問題がなかったことから有用であった。また調査区壁面の地層断面図についても、手ばかりで作図をおこなったほか、SfMでの写真測量を実施している。

現地での記録写真は、調査次ごとに取り扱いが異なる。その1(17-1)では、マニュアル通り6×7および35mmのモノクロ・リバーサルフィルムを使用した。その2(18-1)およびその3(19-1)では、35mmの代わりにデジタルカメラを用いた。使用したデジタルカメラは、その2(18-1)ではNIKON社製D600、その3(19-1)ではNIKON社製D5300で、RAWとJPEG(低解像度)で記録している。上述のSfM写真測量用にもこれらのデジタルカメラを用いており、その1(17-1)でのSfM写真測量の際には、NIKON社製D80を使用している。なお調査区の完了時には、本体工事施工業者の協力のもと、高所作業車を用いて調査区的全景写真撮影をおこなっている。

**自然科学分析** 発掘調査・整理作業の過程で、古環境や年代の検討、遺物および有機質の同定などを目的として自然科学分析を実施した。項目は、放射性炭素年代測定2件(いずれも(株)パレオ・ラボ)、花粉分析(文化財調査コンサルタント(株))、大型植物遺体同定分析(古代の森研究舎)、赤外分光分析((株)パレオ・ラボ)の計5件である。さらにこれ以外に、昆虫遺体の同定を初宿成彦氏(大阪市立自然史博物館)に、動物骨および貝類の同定を丸山真史氏(東海大学)に依頼した。分析結果の詳細については、第5章に記載するとともに、報告文の中にも適宜その成果にふれ、遺跡・遺構・遺物の評価に生かすよう努めた。

ほかでは、石材の同定を小倉徹也氏(大阪市教育委員会)に依頼し、その結果については各資料の挿図中ならびに巻末の遺物一覧に記載している。

**保存処理** 保存処理が必要な脆弱遺物(鉄器4点、有機質付着土器1点)について、令和元年12月から令和2年9月の期間で保存処理を実施した。鉄器は株式会社文化財サービスに、有機質付着土器は株式会社エイテックにそれぞれ委託した。

実施した資料のうち、鉄器は中世の鉄刀(図60:M1、P94)および鉄鎌(図63:M2、P97)、古墳時代の鉄斧2点(図101:M14、P150)・(図169:M18、P229)で、いずれも完形に近い。いずれも処理前にX線写真撮影を実施して遺物の状態を確認し、協議の上、クリーニング、脱塩処理、防錆効果を目的とした樹脂塗布をおこなった。

有機質付着土器については、古墳時代初頭～前期の866井戸下層から出土した土師器直口壺(図180:1234、P243)の外面に紐状の有機質(フジツル)が付着・残存しており、釣瓶と考えられる貴

重要な資料であったため保存処理を実施した。有機質は、土・砂によって土器表面に付着した状態であったため、クリーニングののちトレハロース含浸法によって土ごと固めて処理している。

**整理作業** 現地作業の完了ののち、東大阪市長田東所在の中部調査事務所にて整理作業を実施した。出土遺物の大半は現地で洗浄したのち、注記をした。注記は、調査次ごとに「カンマキ 17-1- (登録番号)」・「カンマキ 18-1- (登録番号)」・「カンマキ 19-1- (登録番号)」と記載している。出土遺物は、取り上げの際に付した登録番号ごとにデジタルカメラでメモ写真を撮影して台帳を作成し、随時その内容を把握できるように保管している。今回の発掘調査で出土した遺物は、土器類を中心に遺物整理用のコンテナ箱で 224 箱を数える。

出土遺物は、主に井戸や土坑などから出土した一括性の高い資料群や、建物跡などの重要な遺構の年代決定に資する遺物を抽出した。復元作業については、その中でも特に重要性の高い遺物を中心に実施している。そののち、報告書に掲載する遺物を実測図化し、必要に応じて拓本をとった。特大サイズの遺物や複雑な構造の遺物などは、SfM 写真測量で生成した 3 次元データからオルソ画像を作成し、遺物実測図と同様の取り扱いをした。報告書に掲載した遺物は 1,988 点で、その内訳は、土器・土製品が 1,872 点、木器・木製品が 17 点、石器・石製品が 70 点、金属製品が 29 点である。土器は、口縁や底部などの径が 12 分の 1 以上が残存する場合を復元図化する上での基準とした。挿図の遺物番号の末尾には、土器の器質、他地域形土器の故地、石材の種類、重量などの特記事項や、出土遺構・地点などの情報を必要に応じて記載しており、特記事項は〔 〕で、地点等の情報（ ）で記載している。また、平面図・断面図に遺物の出土状況や地点が図示された場合、遺物番号をほかの遺構番号などと区別するため No. で囲い表示している。報告の末尾には、種別ごとの遺物一覧表を掲載しており、出土地点や個別の遺物の所見などの基本的な情報をまとめた。

報告書に掲載する挿図は、現地で作成した遺構図と遺物実測図をスキャンしたのち、Adobe 社製 Illustrator CC・CS6 を用いて浄書した。このほかに、空中写真測量や 3 次元測量、写真測量などで作成したデータは、直接 Illustrator で読み込めるファイル形式に整え、データを調整または浄書して挿図に用いた。

現地で撮影した遺構写真は、台帳を作成して一括管理し、報告書に掲載するものを選定した。6×7 フィルムの写真は、スキャンしてデータ化し、デジタルカメラで撮影した写真データは画像を適宜調整して掲載した。遺物の写真撮影は、中部調査事務所写真室にて撮影した。写真撮影の対象とした遺物は、報告書掲載遺物の中から重要性の高いものや残存状態の良いものなどを中心に抽出した。写真図版に掲載した遺物は 394 点である。

報告書の編集作業は、Adobe 社製 IndesignCC でおこった。本文および挿図・表・図版で使用したフォントは、源ノ明朝および源ノ角ゴシックである。報告書に関わるデータは全てデジタルで出稿した。

#### 【註】

- 1). 現地説明会開催時には、方形周溝墓は古墳時代の遺構と認識していたため、古墳時代の居住域と墓域がセットでみつかった調査事例として成果を公開した。しかし、その後の調査によって、方形周溝墓は弥生時代中期に遡ることが判明したため、古墳時代の居住域との関連は極めて薄い。
- 2). 現地公開資料は文化財センター H.P. で公開している。

[https://www.occh.or.jp/static/pdf/data/setumeikai/2018.10.27\\_kanmaki.pdf](https://www.occh.or.jp/static/pdf/data/setumeikai/2018.10.27_kanmaki.pdf) (令和3年12月22日現在)

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的・歴史的環境

#### 1. 遺跡の位置

上牧遺跡は、高槻市北東端部に位置する弥生時代から中世の複合遺跡である。遺跡の現住所は、高槻市上牧町3丁目・4丁目・5丁目、梶原中村町、井尻1丁目にまたがっており、東西650m、南北450mの範囲に及ぶ。今回の調査の範囲は、本事業に伴って新たに拡張された遺跡北東側を東西約400mに亘って横断するような形となっており、事業地内は上牧町3丁目・4丁目・梶原中村町地内にあたる。調査前は耕作地で、事業地一帯は上牧町の集落の南西200～300mに位置する(図2)。

古代の行政区画では、摂津国嶋上郡に相当する。嶋上郡の郡名の史料上の初見は、『続日本紀』和銅四年(711)正月二日条であるが、『日本書紀』雄略九年三月条や欽明天皇二三年一二月条などに三島の名称がみえるなど、古くから三島の名が地域名称として認識されていたようである<sup>1)</sup>。『倭名類聚抄』によれば、嶋上郡は濃味・児屋・真上・服部・高上の五郷で構成され、調査地一帯は濃味郷に属する可能性も指摘される。ただしその場合、濃味郷の範囲は檜尾川西岸以東を全て包括する広大な範囲となることから、その範囲は検討を要する。また『大阪府全誌』によれば、平安時代の近都牧として三島にあったとされる上・中・下の三ヶ牧のうち、当地は上ノ牧にあたる可能性が指摘され、「かみのまき」が転じて「かんまき」という地名となった可能性も併せて指摘されることである。

近世では、慶長10年(1605)の『摂津国絵図』に「上牧村」の記載が確認できる。前代から烏丸領であったとされるが、17世紀から幕末にかけては烏丸領・旗本領・美濃加納藩領の入り組み地となっていた。明治以降の変遷は、明治22年(1889)の市制・町村制施行時に島上郡五領村となり(明治29年(1896)に島上郡から三島郡に変更)、昭和25年(1950)11月に高槻市に合併され、現在に至る。

なお現在の住所は、上牧町1～5丁目の表記となっているが、調査地内の元々の字名は、西から「辻垣内」・「才の前」・「海ノ本」・「堀池」である<sup>2)</sup>。

#### 2. 地理的環境

大阪平野の北縁にあたる淀川北岸地域は、有馬一高槻構造線を境に北側の北摂山系と南側の平野部に大きく二分される(図7)。北摂山系は、古生代の丹波帯を中心とした地質で、標高500m前後の低山地からなる。山地の南端には、標高200～100mの大阪層群からなる低丘陵が取り付く。断層帯より南側の平野部は、北東から南西方向に流れる淀川と、北摂山地から南流する安威川・芥川・檜尾川などの中小河川によって形成された低位段丘帯と沖積低地からなる。遺跡が増加する縄文時代後期以降は、主に丘陵南端から沖積低地を中心に展開する遺跡が多く、主要な人間活動の範囲となっていたようである。

今回の調査の対象となった上牧遺跡は、淀川北岸平野部の東端付近に位置する(図8・9)。檜尾川以東は、北摂山系の一角をなす標高679mのポンポン山から連なる山地が南側の平野部に直接的に張り出しているため、なだらかな丘陵や段丘が取り付く西側のエリアとはやや様相が異なる。また山地斜面がやや急峻で、山裾に小規模な扇状地が東西方向に帯状に形成されているのが特徴である。そのため東の水無瀬川と檜尾川の間約5kmの範囲に亘って、規模の大きな河川がない。調査地の西に隣接する内ヶ池は、淀川の三日月湖(河跡湖)と目されており、本遺跡周辺の沖積低地は淀川本流の影響が強い



エリアと認識することができる。縄文海進期には、大阪平野の低地部の大半が海であったことが広く知られているが、淀川北岸地域では市内各所の沖積層のボーリングデータから段丘面付近まで海が迫っていた可能性が高いとされる。さらに上牧遺跡の周辺では、内ヶ池から上牧駅にむかって湾状に海が入り込んでいた可能性も指摘されており、調査地周辺は陸地との境界付近に位置したことになる。

調査地点は、淀川の堤防から西150mに位置し、新名神高速道路の建設予定地は、淀川河口から31.8km地点にあたる。天王山と男山に挟まれた三川合流地点の山崎狭窄部が河口から36km地点であるため、上牧遺跡は三川合流地点から約4km下流側に位置することになる。上流側の島本町域には、小規模な平地部があり、盆地状の地形を呈しているが、本遺跡周辺では淀川にむかって山地（通称：梶原山または神内山）が張り出している。山地から淀川までの距離は約1kmで、山崎狭窄部に次いで2番目に狭いため、付近一帯は古代山陽道および近世の西国街道が通るなど古くからの交通の要衝となっており、現在も名神高速道路やJR京都線、東海道新幹線、国道171号線などの主要な交通インフラが集中している。

なお高槻市域は、大阪・京都のほぼ中間に位置し、戦後には上述した主要な交通インフラの集中もあって人口増加と都市化が進み、市域南部や国道171号線沿いを中心に工業地帯が拡大した。特に1960年代以降には、丘陵部などの宅地開発が進行したため急激に人口が増加し、都市近郊の農村地帯からベッドタウンへと景観が一変した。上牧町周辺では、昭和9年（1934）に阪急上牧駅の設置されたのち、1960年代後半には淀の原町および上牧東の宅地造成によって人口が急激にのびた。さらに前後する時期には、関西電力淀川変電所の建設や国道171号線沿いの工場建設および店舗の新出が相次ぐなど開発も進んだ。その一方で調査地周辺は、1960年代に対する1980年代の耕作地面積の比率が70%程度に抑えられており、市内低地部の中では耕作地面積の減少率が低い。幕末頃の村絵図などを参照する限り<sup>3)</sup>、上牧町の集落の構造や水路や耕作地の位置関係などは当時と大きく変わっておらず、隣接する鶴殿の淀川河川敷にはかつて宮内庁雅楽寮に葦を納めていた葦原が良好に残る。このことから分かるように、市域でも古くからの景観が維持されてきた地域のひとつとして認識できるだろう。

### 3. 歴史的環境

既往の考古学的な調査成果や文献史学の研究成果をもとに、淀川北岸域全体と上牧遺跡の位置する嶋上郡東部を中心に通時的な歴史的展開を概観する（図9）。

**旧石器時代・縄文時代** 旧石器時代の遺跡は、主に段丘と丘陵部を中心に確認されている<sup>4)</sup>。郡家今城遺跡など芥川流域周辺で国府型ナイフ形石器などがまとまってみつまっているが、上牧遺跡が所在する東

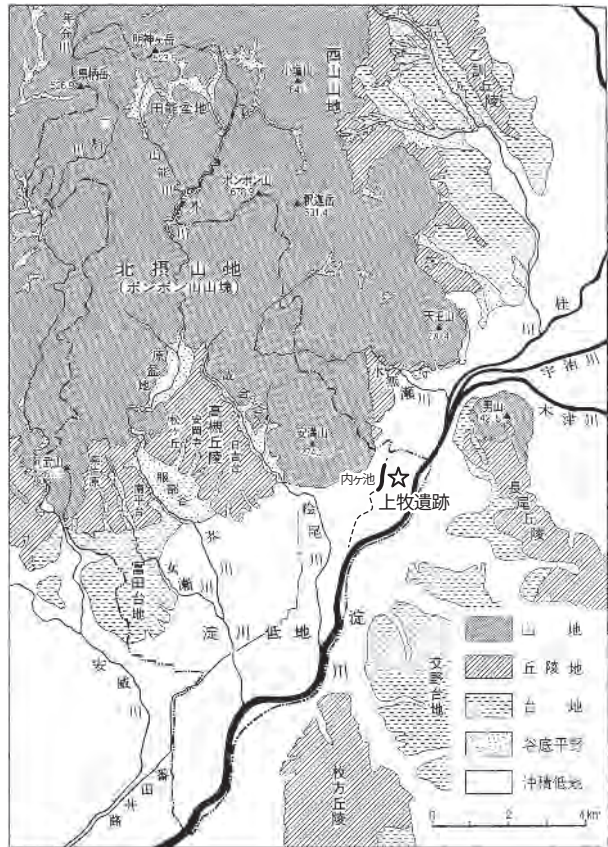


図7. 高槻市域周辺の地形  
（『高槻市史』本文編1を転載・加筆）





図8. 上牧遺跡周辺の空中写真（昭和23年〔1948〕米軍撮影）

部のエリアは沖積地の面積が広いいためか、その存在は今のところ確認されていない。

縄文時代では、後期以降に遺跡数が増加する傾向にある。中期以前の資料は少ないが、早期から中期の遺物が大塚遺跡や柱本遺跡など淀川本流域周辺で確認されている。後期・晩期は、沖積地から段丘周辺までの広範囲で遺跡数が増加し、さらに段丘周辺では遺構を伴う形での確認事例が増える。東部エリアでは、長らくその実態が不明確であったが、梶原寺跡の調査で後期後半の宮滝式や磨製石斧の出土が確認されたほか<sup>5)</sup>、神内遺跡でも生駒西麓産の後期の土器が出土している<sup>6)</sup>。東に隣接する島本町域では、越谷遺跡や広瀬遺跡など中期～後期中葉の遺物の出土が確認されており、後期の遺構の存在も推測されている<sup>7)</sup>。さらに、現在の淀川河床にあたる鶴殿遺跡や前島遺跡では、近年、地元住民によって縄文時代から近世までの各時代に亘る遺物がまとまって採集されている<sup>8)</sup>。その中には、復元率の高い中期から晩期の縄文土器が含まれるなど、資料が増加している。このように東部エリアや淀川流域低地部では、少量ではあるものの、縄文土器の出土が点的にみられることが近年の新しい知見であり、周辺に遺構や集落の存在が推測されるところである。

**弥生時代** 淀川北岸域では、弥生時代以降に遺跡が著しく増加し、調査成果の蓄積もめざましい。その中でも安満遺跡と東奈良遺跡は、淀川北岸地域における東西の中核的な環濠集落として著名で、古くからこの2遺跡と周辺遺跡との関係に注目が置かれてきた<sup>9)</sup>。檜尾川の扇状地上に位置する安満遺跡は、上牧遺跡との距離が僅か2.5 km程度の位置関係にあり、1928年（昭和3）の京大農場開設に伴う遺跡の発見以降、度重なる調査によってこの地域の農耕集落の成立と展開過程を明らかにしてきた。安満遺跡を中心に嶋上郡東部の弥生時代集落の通時的な動向をみると、近年の調査で前期前半（撰津I-1様式）から環濠とみられる溝の掘削が開始され、前期までに水田が広がっていることが確認された。中期前半には、洪水によって遺跡の広範囲に砂礫が供給されるなど、一時的な衰退が認められるが、その後は方形周溝墓が100基以上確認されるなどさらに拡大・発展する。その一方で、中期後半から後期にかけては、集落が衰退する傾向にあり、それと軌を一にするように、山間部や丘陵上に成合遺跡（中期後半）や古曾部・芝谷遺跡（後期前半）、萩之庄遺跡（後期）、紅茸山遺跡（後期後半～庄内式初頭）が出現する。これらの遺跡は、成合遺跡のヒスイ製勾玉の存在や、古曾部・芝谷遺跡での粘板岩製の石器組成などから、安満遺跡との深い関わりの中で成立した可能性が指摘でき、安満遺跡周辺での環境変化や社会変化に伴って高所部に居住域が移動したことが示唆される。

上牧遺跡の所在する檜尾川以東については、1990年代前半までに梶原南遺跡・梶原遺跡・上牧遺跡などの存在が確認されていたが、1990年代後半以降には、新たに萩之庄南遺跡<sup>10)</sup>（後期後半～庄内式期）、梶原西遺跡<sup>11)</sup>（中期前半・後期）、井尻遺跡（中期後半）、神内遺跡（中期前半）、越谷遺跡（後期）の存在が確認され、遺跡数が増加している。特に近年では、神内遺跡で20基、梶原西遺跡で8基の方形周溝墓がそれぞれ確認されている点が特筆される。時期は中期前半に限定され、さらに上牧遺跡と隣接する梶原南遺跡でも同様の時期の方形周溝墓がまとまって確認されていることから、造墓の背景と母体集落の追求が今後の検討課題といえるだろう。

**古墳時代** 今回報告する上牧遺跡では、最も遺構・遺物が多い時期であるため、やや詳しく述べる。嶋上郡域では、弥生時代後期の安満遺跡の衰退と入れ替わるようにして、後期後半以降は芥川流域の遺跡の規模が相対的に大きくなる<sup>12)</sup>。その中核となる郡家川西遺跡では、これまでの調査で150棟近い建物が検出されており、庄内式期から後期まで継続する集落の居住域の様相が整理されている<sup>13)</sup>。さらにその背後の丘陵上に位置する弁天山古墳群は、前期前半から中期初頭にかけて岡本山古墳・弁天山古墳・弁





図9. 淀川北岸東部地域 遺跡分布図



天山 C1 号墳・郡家車塚古墳へと 70 m～100 m 級の首長系譜が連続し、須恵器が出現する中期前半以降はやや規模を縮小しつつも、前塚古墳から丘陵奥部の弁天山 D 支群へと連続する。また中期中頃には、嶋上郡と嶋下郡の境界付近に太田茶白山古墳が、後期前半には女瀬川の扇状地に今城塚古墳がそれぞれ築造される。いずれも 200 m 級の大型前方後円墳で、特に後者は真の継体大王墓と確実視できるなど、淀川北岸地域が畿内の中でも重要な一角を占めていたことがうかがえる。

嶋上郡東部では、安満遺跡で弥生時代後期後半～古墳時代を通して遺構・遺物が確認されており、規模は不明確ながらも檜尾川扇状地に居住域が通時的に展開したようである。その一方で近年では、扇状地頂部の紅茸山南遺跡<sup>14)</sup>や成合谷の金龍寺旧境内跡<sup>15)</sup>などで、韓式系土器や初期須恵器を含む中期の遺構・遺物が確認されており、高所部への進出がうかがえる。檜尾川以東では、上牧遺跡の過去の調査で弥生時代後期後半～古墳時代中期の遺構・遺物が確認されてはいたものの、長らく分布が希薄な地域とみなされていた<sup>16)</sup>。ただし近年になって、井尻遺跡で前期・中期の遺構・遺物がまとまって確認され、今回報告する上牧遺跡の調査成果をふまえると内ヶ池の周辺に規模の大きな集落が展開したことが明らかになってきた。特に井尻遺跡では、緑色凝灰岩製と滑石製の石釧がそれぞれ 1 点ずつ出土したほか、祭祀的様相を帯びる中期中頃の土師器高杯と滑石製玉類・小型鉄器の集積遺構などの存在が確認されており、特筆すべき成果となっている。さらに内ヶ池から連なる水路と淀川の合流点付近に位置する淀川河床の鵜殿遺跡・前島遺跡周辺は、近年、古墳時代中期を中心とした時期の遺物がまとまって採集されている。コンテナ数十箱にも及ぶ復元率の高い土師器・須恵器が多数含まれ、淀川の水運と周辺遺跡との関連を考える上で極めて重要な資料となっている。こうした内ヶ池および接続する水路周辺の集落遺跡は、いずれも初頭～中期を主体としているが、その一方で今のところ後期後半以降の集落遺跡の実態が不明確であり、居住域の移動先と移動の背景が問題となる。

こうした集落の動向と連動する檜尾川以東の古墳の築造動向は、青龍三年紀年銘をもつ方格規矩四神鏡を含む 5 面の銅鏡が出土した安満宮山古墳<sup>17)</sup>（前期初頭）や、緑色凝灰岩製の石製腕飾類や玉類が豊富に出土した萩之庄 1 号墳（前期末～中期初頭）のほか、紅茸山古墳群（中期～後期）、安満山古墳群（前期～中期・後期）、梶原古墳群（主に後期）、神内・源吾山・越谷古墳群（後期）などの群集墳の存在が知られている。安満宮山古墳や萩之庄 1 号墳は、いずれも東部の山地尾根上に築造された 20 m クラスの小規模墳であるが、豊富な副葬品をもつことが特徴で、東部地域の特色を示している。さらに近年では、梶原古墳群中の尾根上の調査で庄内式期の加飾二重口縁壺が出土したほか（梶原台状墓<sup>18)</sup>）、中期後半頃の埴輪の出土も確認されている<sup>19)</sup>。これまでに調査がおこなわれた安満山 B0 号墳や C1 号墳<sup>20)</sup>、梶原寺背後の竹林で不時発見された梶原円筒埴輪棺<sup>21)</sup>の存在などをふまえると、山地尾根上には古墳時代初頭～中期までの中小規模の古墳が存在する蓋然性が高くなってきた。後期の群集墳については、大半が墳丘規模 10～20 m、石室全長 10 m 以下の中小規模墳で、群集規模は 40 基からなる安満山古墳群が他と比べてやや大きい。墳丘・石室の規模がやや大きい古墳としては、梶原 D-1 号墳があり、二上山白石製の組合式家形石棺に十字文楕円形鏡板付轡や三葉文楕円形杏葉、双葉剣菱形杏葉などの装飾馬具が伴う<sup>22)</sup>。淀川北岸地域では、今城塚古墳の築造後の後期後半以降の単独立地の大型古墳は、海北塚古墳や耳原古墳などに限られるが、塚原・塚脇などの大規模群集墳中に豊富な副葬品を伴う古墳が認められる。このことから群集墳中の有力古墳は、地域の中でも中核的な位置を占める可能性が高く、梶原古墳群は梶原寺の造営氏族へと続く檜尾川東部地域の有力集団の奥津城と認識できるだろう。なお檜尾川西岸の高槻丘陵上には、前期の慈眼寺山古墳や中期末～後期の中将塚古墳・昼神車塚古墳など 50 m 級の前方

後円墳のほか、奥坂・慈眼寺山などの小規模な群集墳の存在が知られている。これらの母体となる集落については、現在、高槻市の中心市街となっている芥川右岸の扇状地上に想定ができそうであり、檜尾川扇状地の集落や東部地域とは別の勢力のものともみられる。

**飛鳥・奈良時代** 古墳時代以来、地域の中核であった郡家川西遺跡が嶋上郡衙として整備されていく。<sup>23)</sup> 嶋上・嶋下郡域の奈良時代以前の古代寺院は、古代山陽道に面した立地のものが多く、東から梶原寺・芥川廃寺（以上、嶋上郡）、太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺（以上、嶋下郡）の存在などが知られている。このうちの最古の寺院が嶋上郡東部の梶原寺で、これまでに採取された瓦から7世紀中頃の創建と考えられている。<sup>24)</sup> 天平勝宝八年（756）には、東大寺の建立に際して摂津職を通じて梶原寺が瓦6,000枚の発注を受けたとする記載が『正倉院文書』にみられる。これまでの発掘調査においては、主要な伽藍の確認までは至っていないものの、僧房の可能性のある掘立柱建物の存在が確認されたほか、背後の丘陵斜面では5基の瓦窯がみつかり、正倉院文書の記載を裏付けるような調査成果があがっている。<sup>25)</sup> さらに周辺では、梶原西遺跡、井尻遺跡、梶原南遺跡、神内遺跡などで奈良時代を中心とした時期の遺構が確認されており、特に梶原南遺跡では、奈良時代前半と後半の2時期の掘立柱建物群や井戸などまとまった遺構・遺物がみられる。井戸からは、「新屋首乙賣」という女性名が記された木簡が出土するなどその成果が目ざされるところであり、古代山陽道の淀川の渡しに関わる大原駅家の最有力候補地と目されている。北の島本町域には、天平勝宝八年（756）に東大寺によって水無瀬荘が設置され、国内最古の荘園絵図が残されていることはよく知られている。先の梶原寺の瓦搬出記事も含め、檜尾川以東は主に東大寺との関わりが強い地域とみなせる。

なお嶋上郡域の条里地割は、檜尾川以西では正方位の区画が明瞭にみられるのに対し、檜尾川以東ではややずれがあり、内ヶ池以東ではその痕跡が認められない。条里の施工時期については、嶋上郡内の各集落遺跡の調査から平安時代後期以降と考えられているが、安満遺跡をはじめとする調査事例などから8世紀後半～末頃に遡るような時期の畦畔遺構も確認されている。そのため、奈良時代に施工された先行する古条里を踏襲して平安時代後期に主条里が施工されたとする意見がある。<sup>26)</sup>

**平安・鎌倉・室町時代** 9・10世紀に入ると、上牧遺跡周辺では遺構・遺物が希薄になる。大原駅家は、『延喜式』に記載がないことから平安時代に入って廃止となっていたようであり、付近一帯も衰退した可能性が高い。その一方で、隣接する檜尾川扇状地に目を転じてみると、『類聚国史』には天長九年（832）に安満周辺一帯に二二三町の勅旨田が開かれたとする記載があり、大規模な開発がおこなわれたとされる。さらに檜尾川の上流域にあたる成合谷では、近年、本事業に伴う金龍寺旧境内跡・成合遺跡・成合地獄谷遺跡の調査で、寺院関連の遺構・遺物や火葬墓、須恵器窯など山間部での特殊な遺跡の実態が明らかとなってきた。<sup>27)</sup> この地域では、8世紀後半～9世紀前半にかけて安満寺（金龍寺前身寺院）や悉檀寺などの山寺の存在が『日本三大実録』や金龍寺寺伝に記されており、上述の調査成果は寺院の存在や都城近郊での有力者の動向を考える上で重要な成果となっている。<sup>28)</sup>

淀川周辺の低地部では、上述したように『類聚三代格』昌泰元年（898）十一月格に公私の牧が多く設置されていたとする記載があり、「上牧」も含め淀川の東西には現在までに牧と記された地名が多く残されている。応永四年（1397）の『靈末寺文書』「成重・光全連署打渡状」には、井尻牧の記載もみられるため、古代から中世にかけて牧が存続していた可能性が高い。ほかでは、紀貫之の『土佐日記』に淀川往来時の宿泊地として鶴殿の記載があり、近隣も含めた周辺一帯の地名が和歌などに散見されるようになる。ただし嶋上郡東部では、現状では9・10世紀の遺構・遺物は希薄であるため、文献の記

載と遺跡動向が十分に関連付けられておらず、当該時期の遺跡の発見が待たれるところである。

後続する 11 世紀は、嶋上郡域における集落の消長にかかわる転換期とされる。上牧遺跡や井尻遺跡では、この時期以降、遺構・遺物が増加することが明らかとなっており、集落の具体像が描けるようになってきた。各遺跡の消長は、井尻遺跡では 11 世紀代に、上牧遺跡と梶原南遺跡では 13 世紀代にそれぞれピークがあり、13 世紀後半～14 世紀以降は徐々に耕作地に転化する。こうした遺跡の展開は、藤原摂関家による荘園化に伴う耕地開発の進展との関連を検討していく必要があるだろう。後続する 15 世紀以降の集落域は、発掘調査成果からは明確にできないが、上牧集落に所在する日蓮宗本澄寺が文明三年（1471）の創建とされており、周辺の現存の集落の多くがこの頃には成立したとみられる。

**近世以降** 上牧の周辺一帯は、近世以降、主に烏丸家領となっているようである。その後、上牧村は、三領主の入組地となり、水利組織は神内・梶原・上牧・井尻・鶴殿の各村で組織された五領組に属していた。なお、近世に入ると淀川の洪水記事が増える。その中で最も甚大な被害であったとされるのが享和二年（1802）の大洪水で、当時には『摂河水損村々改正図』などの水害個所を記した絵図がいくつか出版されている。現在の寝屋川市域から大阪市内といった下流の左岸域が甚大な被害を受けたことはよく知られているが、上牧村を含めた檜尾川以北の右岸域も破堤したことが絵図には記されており、<sup>29)</sup> 淀川との関わりの重要性が増したといえよう。このほかに、文久元年（1861）出版の『淀川両岸一覽』にも上牧村の記載があり、淀川に面した村と本澄寺の様子が具体的に記されている。<sup>30)</sup> また幕末には、内ヶ池の奥部に西国街道を引き込む形で梶原台場が設置された。<sup>31)</sup> 現存地割にその痕跡を明瞭に留めており、淀川対岸の楠葉台場とともに京都を守護する往時の姿を偲ばせている。

## 第 2 節 調査地周辺における既往の調査

淀川北岸東部は、もともと高槻市内でも遺跡の分布が希薄なエリアで、2000 年代までは市文化財課や調査会などによる上牧遺跡や梶原南遺跡、梶原寺周辺の小規模な調査、名神高速道路の拡幅による梶原古墳群・梶原瓦窯などの調査に限られていた。その後、新名神高速道路の建設に伴う高槻東道路（府道 79 号）や十三高槻線（府道 14 号）などの周辺アクセス道などの整備に伴って平成 22 年（2010）以降、檜尾川東部エリアの発掘調査の機会が増加した。萩之庄南遺跡、梶原西遺跡、井尻遺跡などの新規の埋蔵文化財包蔵地の発見が相次ぎ、これに加え磐手杜古墳群、梶原古墳群、梶原寺跡を含めた発掘調査を文化財センターが実施してきた結果、上述したような新たな成果が蓄積されつつある。

今回報告する上牧遺跡については、昭和 47 年（1972）の関西電力淀川変電所の建設に伴って発見された集落遺跡で、その時の調査で弥生時代後期から古墳時代前期と中世の遺構・遺物がまとまって確認されている。調査当時は、行政による埋蔵文化財の調査体制が徐々に確立されはじめた時期であったことから、中世以降の調査そのものがまだ少なく、初期のまとまった中世集落の調査事例として注目された。<sup>32)</sup> さらに報告書では、調査担当者の橋本久和氏によって詳細な瓦器碗の編年案も提示されたことから、標式的な遺跡として学史的にも著名となっている。その後、発掘調査の機会がなかったため、今回はそれ以来 45 年ぶりの調査で、今回の調査地点は当時の調査地点である変電所の北東 200m に位置する。

周辺の遺跡では、北西・南西にそれぞれ隣接する梶原南遺跡と井尻遺跡でまとまった調査履歴があり、調査地点と概要を図 10 および表 3 にまとめた。上牧遺跡を含めたこれらの 3 遺跡は、内ヶ池を中心に東西 900 m、南北 800 m の範囲に包括され、内ヶ池が淀川の三日月湖とされることから地理的にも関連が深いものと認識できる。内ヶ池周辺遺跡群と呼称できるようなこれらの遺跡では、弥生時代中期か



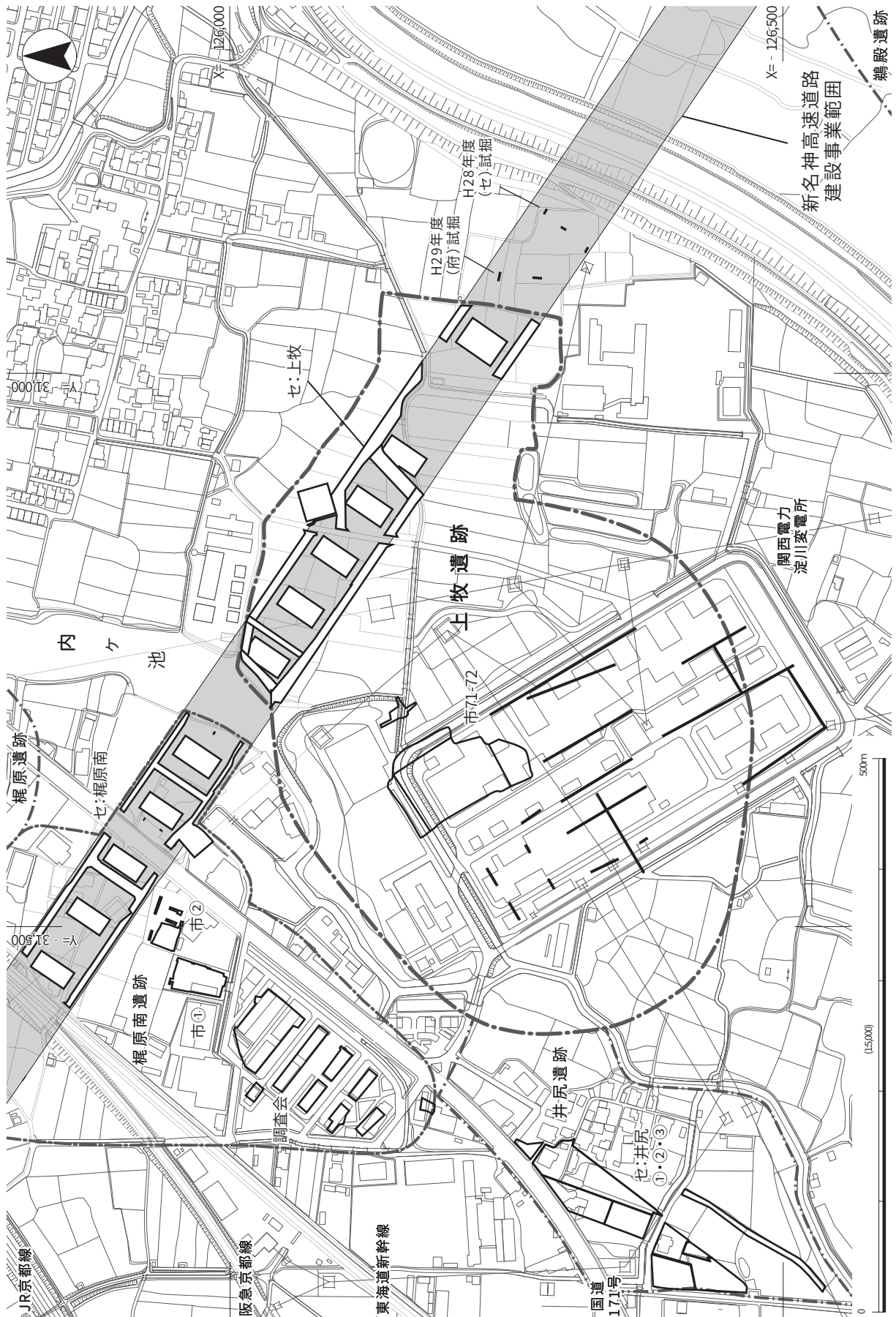


図 10. 上牧遺跡・梶原南遺跡・井尻遺跡 既往の調査地点



表3. 上牧遺跡および周辺遺跡の主要な調査成果一覧

遺跡	調査主体	調査期間	面積	調査原因	内容	文献
上牧遺跡	高槻市	1971/07 - 1972/04	約 7,000 m <sup>2</sup>	関西電力 淀川変電所	弥生後期：遺物あり（包含層、後期前半） ◎古墳初頭～中期：竪穴建物3（庄内・布留新）、井戸3（布留新）、遺物多数（主に布留古～新） 奈良か：掘立柱建物4？、遺物ごく少量 ◎平安～鎌倉：掘立柱建物9棟、柵列、井戸9、土坑墓2、溝（11～13世紀主体）	1
	センター	2017/11 - 2019/11	12,040 m <sup>2</sup>	新名神 高速道路	弥生中期前半：方形周溝墓14基 ◎古墳初頭～後期前：建物遺構110、井戸10、ほか遺構・遺物多数（外来系土器ほか） 飛鳥：竪穴建物1棟、灌漑水路 奈良～平安前期：掘立柱建物2棟、井戸1、区各溝、内ヶ池分水路ほか、小型瓦・製塩土器・鍛冶関連遺物など 平安後期～鎌倉：掘立柱建物2棟以上、柱穴群、井戸3+、土坑、水路群、粘土探掘土坑（13世紀代主体） 室町：区画溝	本書
梶原南遺跡	調査会	1983/12 - 1984/03 1985/07 - 1985/11 1986/04 - 1987/03	約 1,500 m <sup>2</sup> 約 1,600 m <sup>2</sup> 約 3,000 m <sup>2</sup>	府営 上牧住宅	弥生後期：竪穴建物1棟、土坑、溝 古墳中期：溝、須恵器少量出土（中期後半） ◎奈良：掘立柱建物1棟、井戸3、ほか土坑など、「新屋首乙賣」木簡・製塩土器・鍛冶関連遺物など 平安後期：土坑・柱穴少数	2
	高槻市 ①	1990/04 - 1990/06	1,424 m <sup>2</sup>	民間開発 (資材置場)	弥生後期：竪穴建物1棟（後期後半） ◎奈良：掘立柱建物11棟、井戸1、溝など 鎌倉：L字状区画溝ほか、小刀	3
	高槻市 ②	(1996年度)	1,803 m <sup>2</sup>	民間開発 (駐車場造成)	弥生中期前半～中頃：方形周溝墓2 古墳後期：竪穴建物1棟 ◎奈良：掘立柱建物3、井戸3など、製塩土器・鍛冶関連遺物 鎌倉：土坑2	4
	センター	2019/06 - 2020/12	-	新名神 高速道路	◎古代・中世の遺構・遺物、多数確認 ほか弥生時代方形周溝墓、古墳時代の遺物等あり	調査・ 整理中
井尻遺跡	センター ①	2013/11 - 2014/05	2,480 m <sup>2</sup>	府道 十三高槻線	弥生中期後半：遺物あり 古墳前期～中期：溝ほか、遺物集積あり（布留新・中期前半主体） ◎平安後期～鎌倉：屋敷地区画溝、井戸、土坑墓、遺物多数（11世紀後半～13世紀主体）	5
	センター ②	2015/12 - 2016/05	1,038 m <sup>2</sup>		弥生中期後半：磨製石鏃 ◎古墳前期～中期：溝ほか、落込み、土師器高杯集積、滑石製品・小型鉄器（中期中頃主体） 奈良：掘立柱建物3、溝、梶原瓦窯産瓦 平安中期～後期：掘立柱建物1、溝、流路、灰釉・緑釉陶器 鎌倉：掘立柱建物、土坑	6
	センター ③	2018/05 - 2020/08	3,894 m <sup>2</sup>		古墳前期～中期：竪穴建物4棟、落込み、溝群、遺物一定量あり（前期外来系土器、中期須恵器ほか） 奈良：横板組井戸 中世：溝ほか、遺物一定量あり	7

※ 調査主体の凡例 高槻市：高槻市教育委員会 センター：(公財)大阪府文化財センター 調査会：梶原遺跡調査会  
 ※ 上記は遺構・遺物がまとまって確認された主要な調査を抜粋。ほかにも高槻市による小規模な調査履歴はある。  
 ※ 各調査で確認された遺構・遺物の主要な時期は、◎・○の記号で記載

- 橋本久和 1980 『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第13冊 高槻市教育委員会
- 宮崎康雄 1988 『梶原南遺跡発掘調査報告書』梶原遺跡調査会
- 宮崎康雄 1992 『梶原南遺跡』『高槻市文化財年報』平成2年度 高槻市教育委員会
- 川村晋江・宮崎康雄 1997 『梶原南遺跡(96-2)の調査』『崎上遺跡群21』高槻市文化財調査概要 X X
- 三宮昌弘 2015 『井尻遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第255集
- 鹿野豊 2017 『井尻遺跡2』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第276集
- 奥村茂輝 2019 『井尻遺跡3』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第296集

ら後期にかけて断続的に遺構・遺物が確認できるようになり、古墳時代以降は遺構・遺物が増加することが判明している。その状況を通時的にみると、弥生時代は梶原南遺跡で中期前半頃の方形周溝墓2基(市②)が、井尻遺跡で中期後半の土器と石器が(セ①・②)、梶原南遺跡(調査会・セ①)と上牧遺跡(市)で後期の竪穴建物や土器などがそれぞれ確認されている。ただ、いずれも単発的な状況であり、その評価・位置づけに関しては今後の課題である。

古墳時代については、上牧遺跡と井尻遺跡で前期から中期を中心とした時期の遺構・遺物がまとまって確認されている。今回の報告においても古墳時代の遺構・遺物が最も多く検出されていることから、関連が深いことが予想される。具体的な内容としては、上牧遺跡で初頭から中期初頭頃の竪穴建物3棟と井戸2基がこれまでに検出されている。特に井戸からは、中期初頭(布留式新段階)の土師器がまとまって出土しており、摂津における寺沢編年布留3式の基準資料となっている(市)<sup>33)</sup>。これに加え、二重口縁壺や小型丸底壺がまとまって出土した点も注目される。井尻遺跡では、竪穴建物4棟のほか落込みや溝などが検出されており(セ①・②・③)、出土遺物では2点の石釧(緑色凝灰岩・滑石)が特筆される(セ②・③)。ほかでは、中期中頃(TK216～208型式期)の落込みから、土師器高杯・滑石製玉類・小型鉄器が集積した状態で出土しており、祭祀関連遺構と認識されている(セ②)。さらに上牧・井尻の両遺跡からは、吉備、山陰、阿波、河内、近江、伊勢湾岸、東日本といった地域の外来系土器の出土が一定量あり、遺跡の性格を考える上で重要である。その一方で梶原南遺跡では、竪穴建物2棟や溝が確認されているものの、今のところ遺構・遺物は希薄である(調査会・市②)。

古代では、飛鳥時代の遺構・遺物は今のところ確認されていないが、梶原南遺跡で奈良時代の遺構・遺物がまとまって検出されている(調査会・市①・②)。掘立柱建物30棟、井戸7基、道路側溝の可能性のある溝などが検出されたほか、遺物では「新屋首乙賣」と記された木簡、「冨」「當」と記され

た墨書土器、製塩土器、鉄滓や羽口などの鍛冶関連遺物などが出土している。掘立柱建物には、6間×2間(13.7m×5.5m)の大型建物や径0.6mの柱痕をもつ総柱建物などが含まれ、建物の中心軸に奈良時代前半と後半の2時期のまとまりがあることが指摘されている。一般的な集落遺跡とは考え難いため、古代山陽道の大原駅家の可能性が指摘されている。上牧遺跡と井尻遺跡では、奈良時代の掘立柱建物や井戸などが検出されているものの、遺構・遺物は希薄であり、古墳時代とは状況が逆転している。

平安時代以降については、これまでのところ9世紀代の遺構・遺物はほとんど確認されていない。その後、井尻遺跡では10世紀頃から遺構・遺物が増え始め、11世紀後半～13世紀前半にピークがある(セ①・②・③)。具体的には、11世紀後半の土師器・黒色土器B類・瓦器が大量に出土したコの字状の区画溝や、青磁・白磁の合子や椀を副葬する12～13世紀代の土坑墓2基などが検出されており(セ①)、遺物の出土も多い傾向にある。また隣接する上牧遺跡においても、11世紀末～13世紀代の掘立柱建物9棟と井戸9基が検出されたほか(市)、梶原南遺跡では13世紀代を中心とした時期のL字状の区画溝や土坑などがそれぞれ確認されている(市①)。このように近年の継続的な調査によって、中世集落の状況がより詳細に判明してきている事実は、学史的にも重要な成果といえる。

その後、井尻遺跡では13世紀後半以降に、上牧・梶原南両遺跡では14世紀以降に遺構・遺物が激減する。それ以降の状況としては上牧遺跡で15世紀代の区画溝が1条確認されているものの、それ以外は耕作溝などの検出に留まっている。中世集落は、南北朝期頃を境に廃絶・移動し、この時期以降は戦後の開発まで主に耕作地として土地利用がなされたようである。

以上、上牧遺跡と隣接する井尻・梶原南遺跡の既往の調査成果を概観した。内ヶ池を取り巻くこの3つの遺跡では、断続的ではあるが弥生時代から中世にかけて遺構・遺物が確認されるとともに、古墳時代では井尻と上牧が、奈良時代では梶原南遺跡が中心的な位置を占めていたようである。また、近年あたらしく発見された井尻遺跡の調査によって、内ヶ池の西側の詳細が判明しつつあるが、今回おこなった内ヶ池東側での調査は、上牧遺跡の発見の契機となった関西電力淀川変電所建設に伴う調査以来となる。内ヶ池と淀川には挟まれたエリアにおける久しぶりのまとまった調査であり、淀川との関わりが強い内ヶ池周辺の通時的な土地利用について新たな知見をもたらすものといえるだろう。

#### 【註】

1) 以下、地理・歴史に関する総論について、特に断りのない限り以下の文献およびデータを参照した。

- (総論・歴史) 高槻市史編さん委員会編 1977『高槻市史』第一巻 本編I  
高槻市史編さん委員会編 1984『高槻市史』第二巻 本編II  
高槻市史編さん委員会編 1973『高槻市史』第六巻 考古編  
平凡社 1986『大阪府の地名I』日本歴史地名体系 28巻

- (地質・地形) 国土地理院発行『治水地形分類図』(初版版:1976～1978作成、および更新版:2009年以降作成)  
国土地理院ウェブサイト <https://www.gsi.go.jp/index.html> (令和3年2月26日閲覧)  
産業技術総合研究所地質調査総合センター編 2015『20万部の1日本シームレス地質図』  
大矢雅彦・久保純子編 1993『淀川水害地形分類図』建設省 淀川工事事務所

また、上牧遺跡・梶原南遺跡・井尻遺跡に関する調査成果については、表3の文献による。

- 2) 高槻市史編さん委員会編 1973『高槻市史』第三巻 史料編I  
3) 本澄寺蔵『上牧村粗絵図』(明治時代作成)および『上牧村絵図』(明治2年(1869年)作成)、個人蔵『梶原村粗絵図』(明治3年(1890)頃作成)。下記の文献に掲載を参照。

千田康治編 2010『幕末 今日をめぐる雄藩と高槻 一黒船来航から鳥羽・伏見の戦いまで』高槻市立しろあと歴史館 平成22年秋季特別展示図録

- 4) 旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡の動態については、下記の文献に詳しい。

- 森田克行 1993 「新池埴輪製作遺跡の位置と環境」『新池—新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書—』高槻市埋蔵文化財発掘調査報告書 17 高槻市教育委員会
- 5) 鹿野墨 2017 『梶原寺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 287 集
- 6) 橋本久和・高橋公一・木曾広 2002 「神内遺跡の調査」『高槻市文化財年報』平成 12 年度 高槻市教育委員会
- 7) 大塚隆 1997 『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書 2 名神高速道路内遺跡調査会  
久保直子・木村友紀・大西晃靖 2013 『大藪浄水場送水施設整備(土木・建築)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 広瀬遺跡発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書第 24 集 島本町教育委員会
- 8) 内田真雄 2019・2020 『鶴殿遺跡・前島遺跡の考古資料(1)・(2)』『高槻市文化財年報』平成 29・30 年度 高槻市  
なお鶴殿遺跡・前島遺跡の採集資料については、今城塚古代歴史館のご高配により、複数回に亘って見学する機会を得た。また、以後、鶴殿遺跡・前島遺跡に関する記述は、上記の文献および資料見学の所見に依拠する。
- 9) 弥生時代の遺跡の動態については、文献註 6) のほか下記の文献に詳しい。  
今西康宏編 2013 『三島弥生文化の黎明—安満遺跡の探求—』高槻市立今城塚古代歴史館 平成 25 年度春季特別展図録  
内田真雄編 2014 『淀川中流域の弥生文化』高槻市立今城塚古代歴史館 平成 26 年度春季特別展図録  
内田正雄編 2021 『安満遺跡と近畿の弥生時代』高槻市立今城塚古代歴史館 『安満遺跡公園』全面開園記念特別展図録
- 10) 黒須亜希子 2013 『萩之庄南遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 237 集
- 11) 川瀬貴子 2015 『梶原西遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 261 集
- 12) 古墳時代の遺跡の動態については、下記の文献に詳しい。  
森田克行 2006 『今城塚古墳と三島古墳群 撰津・淀川北岸の真の継体陵』同成社
- 13) 岡田賢 2016 「撰津地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代集落について』六一書房
- 14) 井西貴子・山上弘 2002 『紅茸山南遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会
- 15) 合田幸美・信田真美世・早川圭 2021 『金龍寺旧境内跡 4』高槻市埋蔵文化財発掘調査報告書 38・(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 310 集
- 16) 山田隆一 2003 「淀川流域の古墳時代初頭集落について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』同刊行会
- 17) 鐘ヶ江一郎 2000 『安満宮山古墳』高槻市埋蔵文化財発掘調査報告書 21 高槻市教育委員会
- 18) 三宮昌弘 2015 『梶原古墳群』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 259 集
- 19) 新名神高速道路の建設事業に伴う試掘調査で新たに古墳の存在が確認され、今後、調査が予定されている。
- 20) 宮崎康雄・富成哲也 2002 「安満山古墳群萩之庄支群の調査」『高槻市文化財年報』平成 11 年度 高槻市教育委員会  
鐘ヶ江一郎 2002 「安満山古墳群萩之庄支群 C 1 号墳の調査」『高槻市文化財年報』平成 12 年度 高槻市教育委員会
- 21) 今西康宏編 2020 『三島埴輪総覧』高槻市立今城塚古代歴史館 令和 2 年度秋季企画展図録
- 22) 川端博明 1998 『梶原古墳群発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書 4 名神高速道路内遺跡調査会
- 23) 飛鳥・奈良時代の遺跡の動態については、下記の文献に詳しい。  
高橋公一編 2013 『三島弥生文化の黎明—安満遺跡の探求—』高槻市立今城塚古代歴史館 平成 25 年度春季特別展図録
- 24) 嶋谷稔 1974 「高槻上代寺院の研究(一)」『大阪文化誌』第 1 巻第 1 号 (財)大阪文化財センター
- 25) 森田克行 1978 「梶原寺跡」『高槻市文化財年報』昭和 51・52 年度 高槻市教育委員会  
鎌田博子 1997 『梶原瓦窯発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書 3 名神高速道路内遺跡調査会
- 26) 森田克行 1988 「嶋上郡の方形地割に関する覚書」『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要 12』高槻市文化財調査概要 XII 高槻市教育委員会
- 27) 金光正裕 2012 『金龍寺旧境内跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 224 集  
笹栗拓編 2014 『成合遺跡・金龍寺旧境内跡 2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 251 集  
笹栗拓編 2015 『成合地獄谷遺跡・成合遺跡 2・金龍寺旧境内跡 3』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 260 集
- 28) 笹栗拓 2017 「高槻市成合遺跡群における律令期前後の地域社会の変容」『洛北史学』第 19 号 洛北史学会
- 29) 島本多敬 2019 「19 世紀初頭の災害出版における書肆の役割—1802 年淀川水害の事例から—」『人文地理』第 71 巻第 1 号 人文地理学会  
なお『摂河水損村々改正図』については、島本氏所蔵資料を閲覧させていただいたほか、享和の大洪水に関する詳細をご教示頂いた。また、同図の別図は、下記の文献にも掲載されている。  
新修大阪市史編纂委員会編 1989 『新修 大阪市史』第 3 巻 大阪市
- 30) 暁鐘成編著、松川半山挿絵  
なお、『淀川兩岸一覽』については、その詳細を解説した下記の文献を参照した。  
西野由紀・鈴木康久編 2012 『大阪淀川探訪』人文書院
- 31) 中西裕樹 2009 「梶原台場の歴史と構造」『ヒストリア』217 号 大阪歴史学会
- 32) 宇野隆夫 2001 『荘園の考古学』青木書店  
原田信男 2008 『中世の村のかたちと暮らし』角川書店、など
- 33) 寺沢薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊 奈良県立橿原考古学研究所



## 第3章 発掘調査の概要と層序・地形

### 第1節 調査概要

第1章でも述べたように、今回の発掘調査では新名神高速道路の建設事業予定地のうち、工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす橋脚と側道、水路等の永久構造物の施工範囲を対象として調査区を設定した。工事の進捗に併せて着手可能な地点から順次調査をおこない、延べ23か所の調査区（試掘・坂路工の調査区は除く）、調査面積12,040㎡の発掘調査を25ヶ月間かけて実施した。

今回の調査で出土した遺物には、縄文時代前期から室町時代まで幅広い時期のものがあり、近世以降の出土品もみられた。遺構としては、やや断続的ながらも弥生時代から室町時代まで継続し、各時代の遺構をほぼ網羅している。そのうち主なものとしては、弥生時代中期前葉の方形周溝墓群、古墳時代の集落関連遺構、古代～中世の居住関連遺構と耕作関連遺構などがある。この中で遺構・遺物の密度が最も高い時期が古墳時代で、出土遺物の8割程度を占めるほか、遺構としては竪穴建物と掘立柱建物が併せて99棟以上検出されている。また調査地西端の内ヶ池に隣接するA-3区では、内ヶ池の護岸で淀川の古い分流路とみられる古墳時代～古代の流路が検出された。この流路は、奈良時代末以降に洪水砂で埋没したのち中世頃には池へと変化したことが調査で判明し、現在まで続くような景観が徐々に形成されたことがわかる。このほかにも、淀川の堤防に近い調査地東端のP14区・E-1区では、近世の淀川水害に関連する災害復旧土坑が面的に検出された。これに関しては、立会時に府教育庁から平面図作成と写真撮影の記録を残すように指示があり、近世における全体的な土地利用も含めて報告する。

基本層序と遺構面の認識については、次節で詳述するが、1面もしくは2面の調査を実施した。基本的には、第1面で中世以降の、第2面で古代以前の遺構をそれぞれ調査しているが、掘削深度などが調査区ごとに異なっているため一様でない。そのため特に地形的に高い部分などでは、近世以降の耕作溝から弥生時代までの遺構を同一面で検出している。調査区は、南北の側道などで調査可能な範囲を分割して調査区を設定したが、調査区が隣接しているため、遺構がふたつ以上の調査区にまたがる場合も多い。このため報告では、調査区・面ごとに報告した場合、遺構の位置関係と帰属時期が錯綜して煩雑になることから、検出した遺構を時代ごとに整理し、新しいものから順に報告していくこととする。ただし調査区ごとに遺構検出面の数が異なっているため、遺構の帰属時期が判断しづらいものも一定数ある。そのような場合は、最も蓋然性の高い時期の項目で取り扱うこととするが、可能性のある場合は、各時期の全体の平面図等で明示しておくこととしたい。

さらに調査地は、現況区画から市道上牧301号線と403号線を境に、西側（A・B区）・中央側（C・D区）・東側（E区）の3つのエリアに区分できる。次節で詳述するように、この区分は旧地形ともおおよそ整合することから、時代順・エリアごとに詳細を報告する。ただし内ヶ池の護岸部分のA-3区は、上述したように、古墳時代から古代の流路から中世以降の池まで、時期をまたいで重層的に確認されているため、別に節を設けて報告する（第4章第1節）。

### 第2節 基本層序

調査地内は、東西420mの範囲に及んでいるため、旧地形や地層の堆積状況が一様ではない。特に調査地周辺は、調査着手時の現況ではほぼ平坦な耕作地が広がっていたものの、試掘調査を実施した結

果、現地表面から遺構検出面までの深度は、調査区ごとに0.3 m～1.2 mの幅がみられた。予想以上に起伏に富んだ旧地形であることが判明したが、それでも調査の対象とした基本的な層序は、試掘調査の結果をふまえて第1層から第6層までに大別することができたため、この認識に基づいて調査地全体の整合を図りながら調査を進めた。

調査の対象となった層序のうち、第1層から第3層までが近世以降の堆積であるため機械掘削で除去し、第4層から第6層までが中世から古墳時代の包含層であるため人力掘削の対象とした。第6層より下位の堆積層については、人為的攪乱の及んでいない無遺物層であったため、7層以下を基盤層と認識した。基盤層については、掘削深度が1.5 m以上に及ぶ井戸や土坑、流路の調査の際に、断割り時の壁面等で下層の状況を確認することができたことから、遺跡周辺の地形の形成過程を把握するため必要に応じて堆積状況の観察をおこない、断面の記録をとっている。なお、最終の遺構検出面から深さ約1.5 mの高さで、調査地の西側～中央にかけてまんべんなく広がる古土壌層（第9層）の存在を把握した。この層については、部分的な掘削と断面の観察をした限りにおいては、人為的な遺構・遺物は認められなかったものの、遺物が含まれる可能性も否定できないことや、形成年代自体も不明であったため、堆積物中の炭化物を対象に放射性炭素年代測定（AMS法）を実施している【第5章第2節参照】。

地点ごとの地層断面図を、図11～15に示す。基本層序の概要は以下の通りである。

**耕作土** 現代の耕作土上面（地表面）の標高は、T.P.+7.5 m前後。層厚約0.2～0.3 m。

**第1層** 近世後半から近代の旧耕作土。層厚0.05～0.1 m。

**第2層** 細砂～粗砂の自然堆積層。主に高槻用水幹線水路の東側で確認され、中央西半～西側エリアには拡がらない。このため、淀川から供給された洪水砂とみなすことができる。時期については、18世紀～19世紀前半頃の遺物を若干ながら含んでおり、近世淀川の洪水で最も被害が大きいとされる享和二年（1802）の淀川洪水に伴う堆積の可能性が推測できる。

東側エリアでは、この第2層を天地返しして埋めた耕地復旧土坑が面的に検出されており、復旧土坑上面には第3層以下の堆積層由来の盛土が0.2～0.3 mの厚さで見られる。

**第3層** にぶい黄極細砂～シルトを主体とする近世耕作土で、この第3層までを機械掘削で除去した。淀川起源の越流堆積物を母材とする耕作土と考えられる。層厚は一様でなく、約0.1～0.5 m程度まで幅がある。高所部では削平を受けて確認できない地点があり、旧地形の低い地点では厚く堆積する傾向にある。また、分級の悪い上半第3a層とシルトを主体とする下半第3b層におおよそ大別できるが、地点によって層相は異なる。遺物の出土量が少ないため、時期は明確でないが、下部については中世後半まで遡る可能性がある。中央エリアや西側エリアでは、上面で石組暗渠がみられるほか、細分された層中および除去面で、耕作溝群が多数みられる。第3層除去面でこれらの耕作溝の平面的な略測図を作成している。

**第4層** 古代後半から中世の耕作土。遺物を一定量含むことから、第4層以下を人力掘削の対象とした。層厚0.1～0.2 m程度で、主に地形的に低い地点に分布する。第4層が確認できる地点では、この層の除去面を第1遺構面として調査した。

第4層は、地点によって細分でき、低位の耕作区画上で見られる青灰粘土を第4a層とし、上位の耕作区画上で見られる暗灰黄極細砂～シルト質砂を第4b層とした。特に第4a層の下部では、粘土採掘土坑と考えられる大型土坑が多数検出されたが、粘土採掘土坑は埋め戻されたのち耕作地として復旧

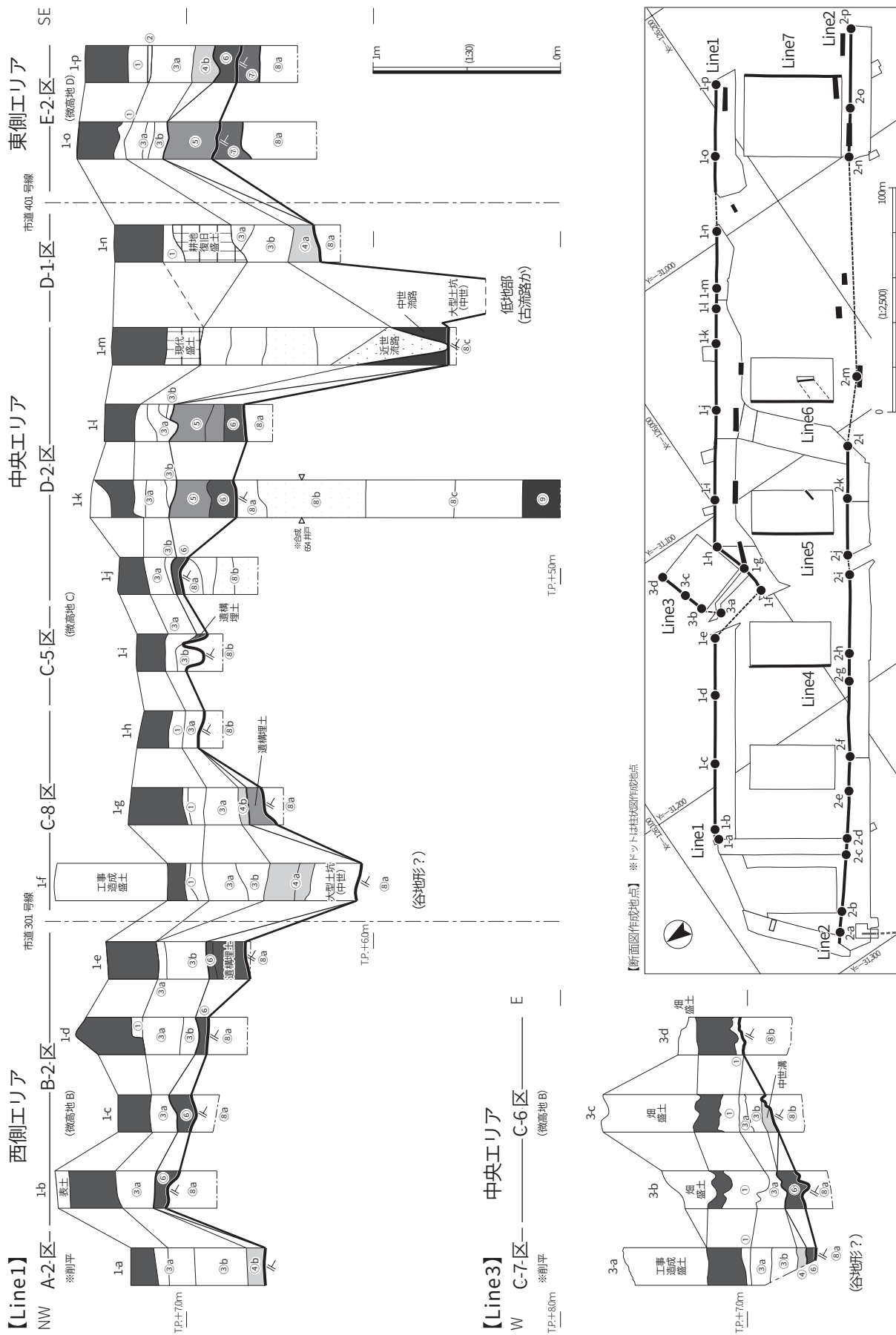


図 11. 調査区北側断面 柱状模式図 (1) (Line 1・Line 3)







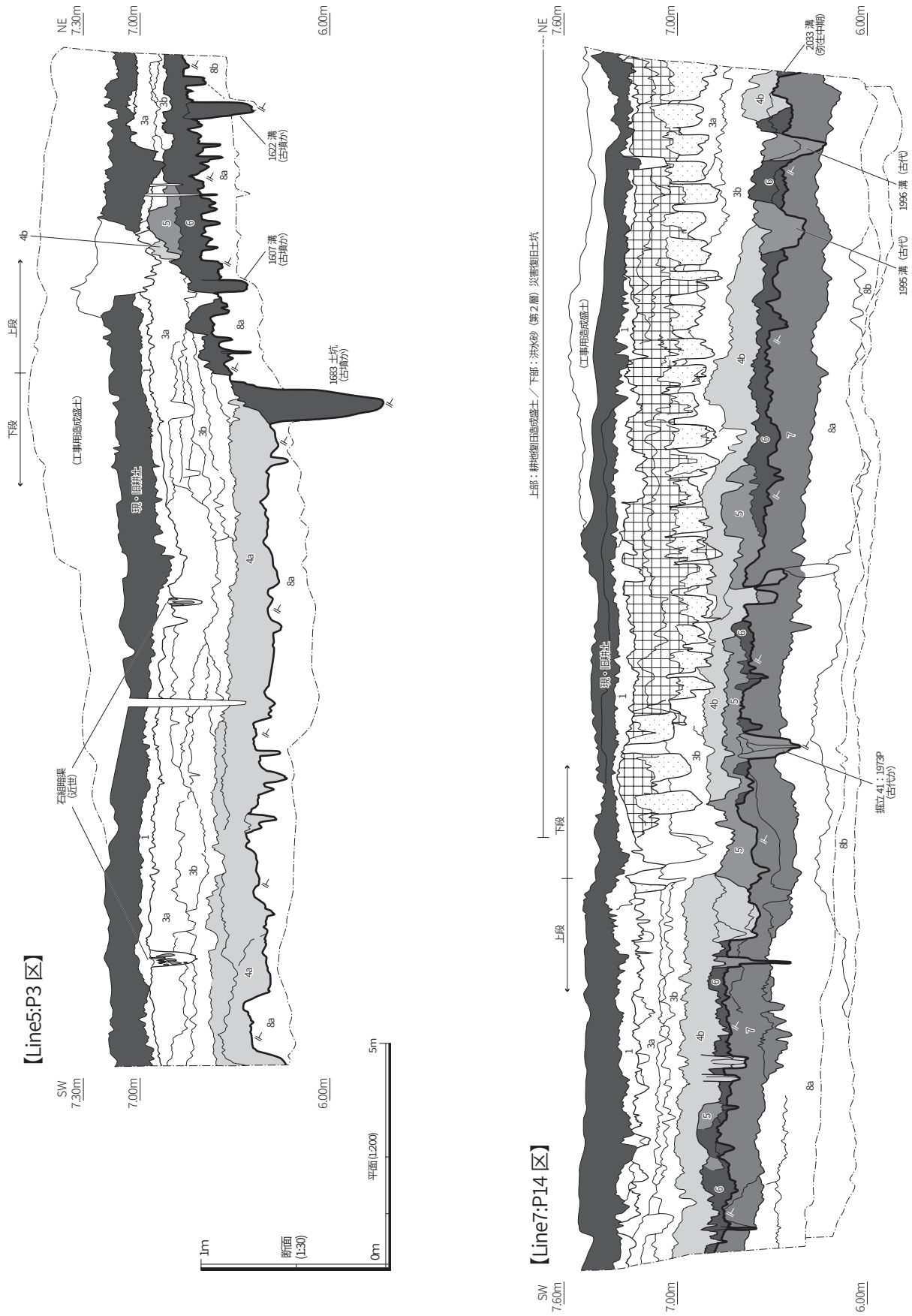


図 14. 調査区南北断面図 (2) (Line 5・Line 7)



されており、この復旧に伴う耕作土が第4a層である。粘土採掘土坑の埋土や第4a層からは主に13～14世紀代の遺物が出土するのに対し、第4b層からは主に13世紀代の遺物が出土している。このことから第4a層と第4b層形成時期については若干異なる可能性が高い。

**第5層・第6層** 暗灰黄黒褐～シルトを主体とする古土壌層。層厚は一様でなく、層厚は0.1～0.5mまで幅がある。微高地の縁辺部では厚く堆積し、色調がやや明るい上半第5層と、暗色傾向にある下半第6層に区分できる。ただし層境は不明瞭で、明確に区分できる状況にはなかった。また堆積が厚い地点では、遺物が多く含まれる傾向にある。その一方で、地形的に高い地点では堆積が薄く、削平を受けて認められない地点もある。このように高い地点では、第6層としてこの層の掘削と遺物の取り上げをおこなっている。

古土壌層の上半（第5層）では主に古代～古墳時代の遺物が、下半（第6層）では古墳時代以前の遺物が出土する傾向にあるが、上述したように層境は不明瞭なため、明確に峻別されるものではない。また、古土壌層が厚く第5層と第6層に区分できた地点では、上半第5層で遺物が多く出土する傾向にある。さらに遺構・遺物の検出状況から、古土壌層中から切り込んでいる遺構が確実にあり、第6層から遺物がまとまって出土する場合は、その下部で検出された遺構との関連が推測できるものが多い。その一方で第6層の下部では、むしろ遺物がほとんど出土しない傾向にあり、古土壌層の形成は弥生時代以前に遡る蓋然性が高い。

調査では、この第6層除去面を最終遺構面として調査を完了させた。最終遺構面の高さは、T.P.+7.0～6.2mである。なお上述したように、第5層と第6層は層境が不明瞭であるため、遺物の取り分けはおこなっているが、基本的には第5層除去面で遺構検出はおこなっていない。ただし東側エリアでは、層境がやや明瞭であり、第5層除去面で遺構を検出している。

**基盤層** 最終遺構面より下位は、人為的攪乱の及んでいない無遺物層であったことから調査の対象としていない。ただし、掘削深度のある井戸や粘土採掘土坑などの調査時に壁面の観察と記録作成をおこなっている。調査地の西側エリア～中央エリアと淀川に近い東側でやや様相が異なるが、大まかには第7層（古土壌層）・第8層（沖積層）・第9層（古土壌層）・第10層（洪水堆積層）の存在を確認できた。

第7層は、東側エリアのみに分布する灰黄褐～オリブ黒粘土の古土壌層で、層厚は0.2～0.3mである。標高が低い南側（P14区南半～E-2区）を中心にグライ化している。上面の第6層とは層相が類似しており、北側のE-2区の調査時には、この層を第6層と認識して掘削したが、無遺物層であることを確認した。さらに除去面では、上面での検出が不十分であった遺構を除けば、明確な遺構を確認できなかったため、基盤層と認識するに至った。堆積の時期については不明であるが、上面で検出された古墳時代の遺構よりも古いことから、弥生時代後期以前であることは確実である。

第8層は、粘土～シルトを主体とする泥質の氾濫堆積層である。調査区のほぼ全域で確認でき、西側～中央エリアではこの層の上面を最終の遺構検出面とした。上面は酸化して黄褐色系の色調を呈するのに対し、下部および低地部ではグライ化している。層厚は約1mで、層相は均質ではなく中間に極細砂～細砂を主体とするやや粗粒な堆積層が介在する。大まかにみれば、堆積時期の新しい方から順に、粘土～シルトを主体とする第8a層、シルト～細砂をやや主体とする第8b層、粘土～シルトを主体とする第8c層の順に区分できる。ただし、実態としては、より細分が可能で、詳細な観察と検討を要するものの、全体の状況を正確に把握するまでには至っていない。また旧地形が高いC-5・C-6区では、上面が削平されているためか、極細砂～細砂を主体とする下部の第8b層が上面に露出するような状況を

呈する。この層の形成時期に関するデータについては、100 落込み下部の断割り調査で、この層の下位にあたる第8b層内に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)を実施したところ、5,000～5,300年前頃(縄文時代中期前半)という年代値が得られている【第5章第2節参照】。上位の第6層下部で縄文時代晩期の土器や縄文～弥生時代の石鏃やサヌカイトの剥片等が出土していることから、縄文時代中期～後期の間の堆積とみなすことができ、この時期の淀川の活発な河川堆積作用によって調査地周辺の地形の大枠ができたことがわかる。ただし調査地一帯の第8層の堆積は、粘土やシルトなどの細粒物質からなる越流堆積物を主体とするため、その当時の淀川の本流域とはやや距離があったことが推測される。

下位の第9層は、黒褐粘土を主体とする泥質な古土壌層である。調査地の北半および東側エリアでは部分的な確認に留まっているが、概ね T.P.+5.2～4.8 mの高さで調査地のほぼ全域にこの層が広がる事が推測できる。上述したように、この古土壌層についても B-1 区や C-3 区で層中に含まれる炭化物を対象に放射性炭素年代測定(AMS法)を実施しており、6,500～7,400年前頃(縄文時代早期～前期)という年代値が得られている。このことから、縄文時代早期～前期には、付近一帯が静穏化した古土壌が安定的に累積する堆積環境であったことがうかがえる。

さらに下位の状況としては、西側エリアの102流路下部で細砂～粗砂を主体とする洪水堆積層(第10層)を確認した。この第10層は、上部の有機質を含む極細砂層の第10a層と、下位の粗砂～中砂を主体とする第10b層に細分できるが、極めて限定的な確認に留まったため、分布範囲など不明な点も多い。A-3区の102流路下部の部分的な断割り掘削で、標高 T.P.+4.3 mまで堆積することを確認し、さらに近接する関電立会①地点で、標高約 T.P.+3.2 mの深さまでその存在を確認した。1.4 m以上の分厚い粗粒な洪水砂の存在から、調査地周辺に淀川の主流路となるような大規模な流路が位置していたことがわかる。時期については今後の検証が必要であるが、縄文時代早期以前ということは確実であり、淀川の長期的な流路の変遷にかかわる有効なデータのひとつとなるだろう。

### 第3節 旧地形

上牧遺跡の立地は、淀川と淀川の古い分流路の名残(三日月湖・河跡湖)である内ヶ池に挟まれた淀川の中州上であることが大きな特徴である。調査地一帯は、着手当時はほぼフラットに近い平坦な耕作地が広がっていたが、今回の調査で予想以上に旧地形に凹凸があることが明らかとなった。前節で述べたように、微高地の最も高い部分では厚さ約0.3 mの耕作土を除去するとすぐに基盤層上面に到達するのに対し、微高地の縁辺部など標高が相対的に低いエリアでは第1層～第6層までの重層的な堆積が認められる。

調査地全体の中では、西側エリア北側の B-2 区西端付近と中央エリア北西側の C-6 区付近が最も標高が高く、全体的にみれば北から南側に緩やかに傾斜する地形を呈している(図15)。最高所部の標高が T.P.+7.1～7.0 mで、P3区では北側高所部から南側低地部にむかって約5°の傾斜角で地形が傾斜している。B-2区や C-6区など地形的に最も高い地点や P6区などでは、一定程度上面が削平されていたようである。具体的には現状で標高 T.P.+6.9 m以上の範囲の削平が著しく、弥生時代の方形周溝墓の埋葬施設は完全に削平を受けていたため検出されなかった。また、低地部側においても中世以降の耕地開発で大きく地下げされており、旧地形が良好に残存していない範囲も広い。

内ヶ池に隣接する調査地西端の A-3 区では、淀川の分流路とみられる8世紀後半～9世紀頃に埋没

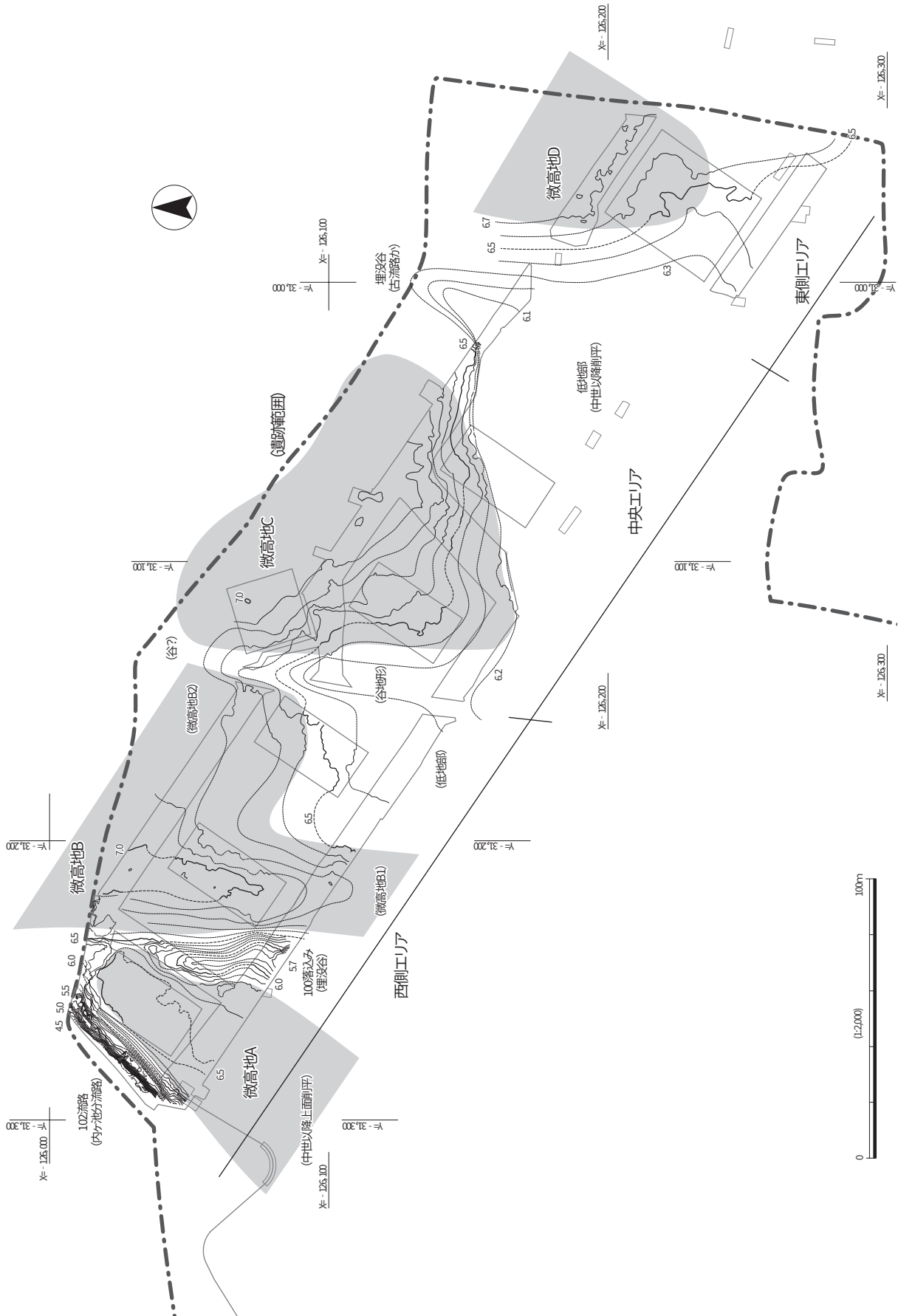


図 15. 調査地の旧地形



した古流路（102 流路）の東岸部分が検出された。このことから少なくとも古代以前は、淀川の中州という立地であることが発掘調査で確認できた意義は大きい。さらに調査地内には、南北方向に3つの谷地形および低地部が存在することが確認され、谷・低地部に挟まれた4つの島状の高まり上で遺構がまとまって検出されている。これらの島状の高まりについては、以後、西から微高地A・微高地B（西側エリア）、微高地C（中央エリア）、微高地D（東側エリア）と呼称することとしたい。

低地部については、中世の粘土採掘土坑が存在するなど、中世以降の削平・掘り下げが著しいため、古い地形の形状や深さが明確でない。上述した基盤層下部の堆積状況をふまえると、埋没谷や低地部は古い流路の名残である可能性が高く、全体的な地形は淀川の活発な河川活動によって形成されたとみてよい。堆積作用が活発化した時期については、基盤層第8層の放射性炭素年代測定の年代値から縄文時代中期頃（5,000～5,300年前頃）と考えることができる。その一方で、堆積作用が静穏化した時期については明確でないものの、基盤層上面付近から縄文晩期の土器が出土しており、遅くともこの時期には地形の大枠は完成していたことは確実である。

旧地形と土地利用の関係性については、通時代的に微高地上で遺構が多く検出されており、特に古墳時代の居住関連遺構と弥生時代の方形周溝墓は微高地の頂部付近を中心に拡がりを見せていた。つまりこのことは、各時代を通じて洪水の影響を受けにくい安定した島状の高まりを中心に積極的に土地利用がなされていたことを示している。さらに調査地点によって様相がやや異なるものの、概ね標高T.P.+7.0 m～6.5 mまでの範囲で遺構密度が高く、それより低い地点では遺構密度が低くなる傾向がみられた。その一方で遺物については、微高地の縁辺部の古土壌層（第5層・第6層）が厚く堆積する地点で多く出土する傾向がある。特に100 落込みなど埋没谷の南側では、一定量の古墳時代の遺物が出土しており、居住域の縁辺部に遺物を投棄する状況にあったことがうかがえる。ただし今回の調査では、調査範囲が比較的高所部を中心としていたため低地部の調査は部分的で、さらに低地部は中世の粘土採掘等による地形改変を大きく受けていたため、様相に不明確な点も多い。低地部における古代以前の耕作地の有無や拡がり、遺物の廃棄の状況等は現状ではよくわからないことから、こうした問題の解決が地形と人間活動の関係と通時的な土地利用を考える上で重要になるだろう。

## 第4章 遺構・遺物

### 第1節 内ヶ池護岸古流路の調査

調査地西端の A-1 区西端と A-3 区は、内ヶ池の護岸部分にあたる調査区で、調査の結果、内ヶ池の下部で古代～古墳時代の古流路（102 流路）の東岸肩が検出された。内ヶ池は、古くから淀川の三日月湖と考えられており、今回の調査ではそれを裏付けるような考古学的成果が得られたことになる。古墳時代から現代まで長期間に亘る重層的な堆積が確認され、古代に流路が埋没し、中世にかけて現在みられるような池へと変化する状況が明確になった点は地域の景観の変遷を考える上でも重要な成果といえる。このように流路の堆積が長期間に亘ることから、時期を分けずにひとつ節を設けて報告する。

#### 1. 検出状況

内ヶ池東岸隣接地は、東側の耕作区画と比べて約 0.3 m 低く、現住所も上牧町ではなく梶原中村町の範囲に含まれる。このため調査着手時は、一部を除き埋蔵文化財包蔵地の範囲外となっていたが、側道設置予定地であるため、（その 1）の調査時に実施する A-1 区と試掘トレンチの所見をふまえて本調査の実施の有無を決めることとなった。その結果、中世以前の遺物の出土と古代以前の流路の肩部が検出されたことから、再度、包蔵地の範囲拡大の手続きがなされ、A-3 区として全面的な調査をおこなうこととなった。

本調査では、内ヶ池に沿うような形で古流路の肩部が 45 m に亘って検出された（図 16）。現状の内ヶ池は、やや東西に屈曲する形状を呈しているが、これは蛇行する流路の名残を僅かに留めているものと推測できる（図 8 など）。調査地付近は、ちょうど東側に蛇行する攻撃斜面の外側にあっており、実際に検出された古流路の肩部も湾曲した形状を呈している。また肩部は、崖状に深く落ち込んでおり、1.0 ～ 1.2 m 程度の落差がみられる。調査前の耕作面の標高は T.P.+7.1 ～ 7.0 m で、流路の肩部は標高 T.P.+5.2 ～ 5.0 m の高さで検出された。流路の底については、調査区南端で検出され、その付近の底面の標高は T.P.+4.0 m である。A-3 区の掘削は、A-1 区および試掘調査の所見をふまえ、護岸側で 2.5 m の深度を想定して矢板を打設し調査を進めたが、当初の想定以上の掘削深度となった。このため安全面確保の観点から、池側に 1 m の未掘部分を設けて下部を掘削する必要があり、流路の底を確認することができた範囲は、A-3 区の南端部に留まっている。なお、底面が検出できた南端部分では、僅かに西側への立ち上がりを確認でき、この部分での底面の幅が 2.0 m 前後であることが判明したが、流路内の部分的な深みである可能性もある。

東側の微高地 A と流路の関係性については、上面が削平を受けた微高地 A の遺構検出面の標高が T.P.+6.5 m 前後であることから、古墳時代の居住域から流路底までの比高は 2.5 m 以上であることがわかる。南北の側道部分にあたる P6 区と南端 A-1 区で、微高地から流路にかけての地形の傾斜が把握できており、A-3 区で検出された流路の肩部から 7 ～ 8 m 東側で段状の落込みが検出されている。この段差は、0.1 m 程度の落差で、段差を境に西側の内ヶ池にむかっては緩やかな斜面となって流路肩部から底にむかって急激に地形が落ち込んでいる。段差付近まで中世の池の堆積に伴う泥質の B 層が及んでいることから、中世段階の池の肩部を反映する可能性が高い。なお段差の西側の緩斜面地には、流路と並行・直交する方向の溝や土坑、足跡などがいくつか検出されている。これらは現代まで時期が下るものを一部含んでいるが、出土遺物から中世まで遡るものがほとんどで、のちに報告する中世の大規模な耕

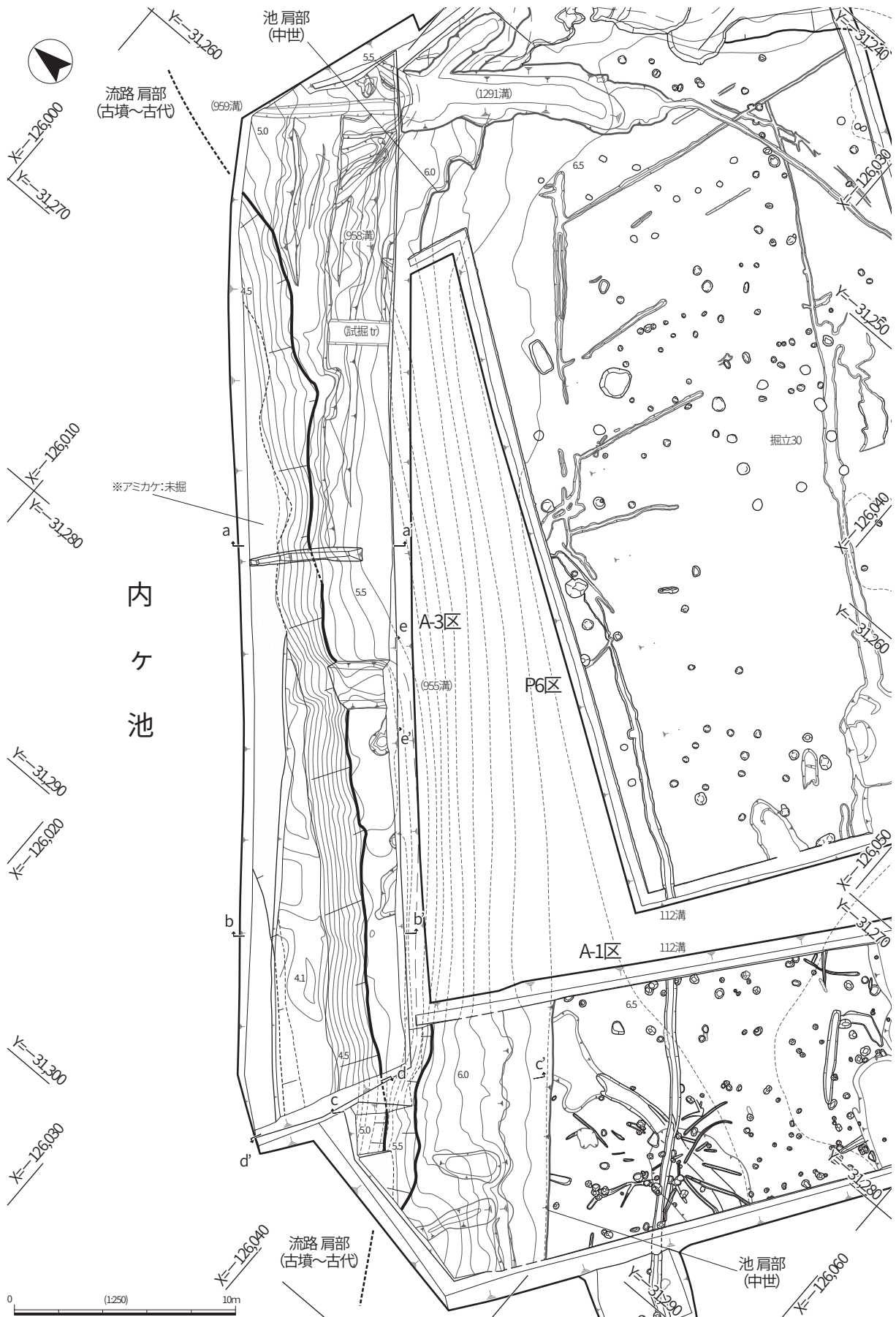


図 16. 内ヶ池分流路 (102 流路) 平面



第4章 遺構・遺物



図17. 内ヶ池分流路（102流路）ほか 断面（1）

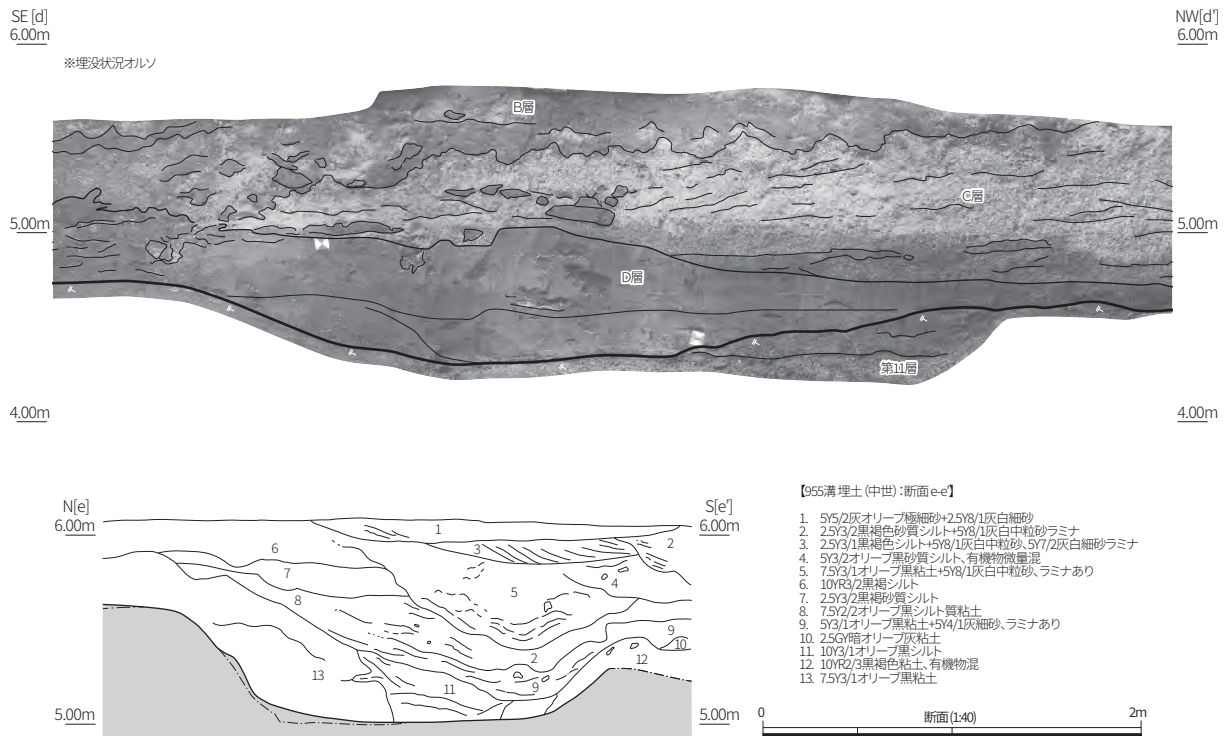


図18. 内ヶ池分流路(102流路)ほか 断面(2)

地開発に伴って内ヶ池の護岸の整備などがおこなわれたことを反映するものとみてよい。

## 2. 堆積状況

内ヶ池護岸部分の堆積は、上層から現耕作土、池状堆積層のA層・B層、流路堆積層のC層・D層に大別できる(図17・18)。このうちのA層とB層は、それぞれ近世以降と中世の池の堆積層で、C層が古代の洪水砂、D層が古墳時代～古代の流路充填堆積層である。また、護岸部分からやや距離があるA-1区では、現耕作土とB層の間に近世後半頃とみられる盛土層が確認された。このことから護岸側の一段低い耕作地は、近世以降に池際の護岸部分を埋め立てて新しく造成された耕作地と判断できる。

最上層のA層は、土壌化した暗色の泥質堆積物で、内ヶ池の湖沼の堆積層と判断できる。下位でみられるような砂の流入などはほとんどみられず、古墳時代～中世までの遺物のほか、近世～現代の土器類、下駄や曲物などの木製品、近現代の廃棄物等など、あらゆる時期の出土品が含まれる。基本的には機械掘削により除去したため明確な堀り分けはしていないが、上部ほど時期が新しい出土品を含む傾向にあり、下位のB層の年代観からおおよそ15世紀以降の堆積と判断できる。

B層は、層厚は最大0.8mの暗色の極細砂～シルトを主体とする堆積層で、上方細粒化の傾向を示し、層中に細砂のラミナが介在する。堆積状況から滞水状態で徐々に堆積していたことがわかるが、間欠的に洪水砂が流入する状況下であり、時期を追うごとに徐々に静穏化した様子がうかがえる。B層中からは、古墳時代～中世までの遺物が出土している。時期幅があるが、平安時代～中世の遺物を一定量含んでおり、それらは13～14世紀を中心とする時期のものが多い。下部C層とB層の出土遺物の上限の年代観から9世紀～14世紀までの間の堆積と判断できる。

C層は、灰白粗砂を主体とする流路堆積層である。層厚は最大0.5mで、粒形が粗い堆積物が厚く堆積しているため、短期間のうちに堆積した洪水砂と判断できる。流路南端のA-1区で、完形に近い古代の土師器甕(49)が出土しているが、遺物の大半は細片で、出土量もそれほど多くはない。このため、





下位に含まれる遺物が流されて2次的に堆積したのことが多いと判断できる。堆積時期については、下層〔埋土 D3〕から出土する遺物の年代観から8世紀後半以降と認識できるが、C層と〔埋土 D3〕の間に〔埋土 D1〕・〔埋土 D2〕が介在していることから、C層の堆積までにやや時間が経過していることがうかがえる。流路が埋没するC層の堆積の時期を詳しく限定することは難しいが、周辺遺跡の動向を勘案すると8世紀末～9世紀前半頃であった可能性が高い。

D層については、灰粘質シルト〔埋土 D1〕、オリブ黒粘土〔埋土 D2〕、灰極細砂〔埋土 D3〕、明緑灰粘土〔埋土 D4〕に大別できる。〔埋土 D1〕や〔埋土 D3〕の層中にラミナが顕著に認められたため、流路を充填する河川堆積層と認識できる。また粒度が細かいため、検出した範囲内では比較的緩やかな流れの中で徐々に埋没が進行したことがうかがえるが、今回の調査では流路肩部の部分的な検出に留まっており、流路全体の堆積状況を反映しているかどうかは明確でない。流路が内ヶ池と重複しており、全体の幅や形状、流心の位置などもまったく不明であることから、肩部のごく部分的な堆積状況の一端を捉えているものとみられる。D層中からは、縄文時代～古代までの遺物が出土しているが、大半は古墳時代と古代の遺物である。そのなかでも奈良時代後半の遺物が多く、東岸肩部付近からは完形に近い形の遺物が点的に出土している。こうした復元率の高い遺物は、主に〔埋土 D3〕に伴うものであり、出土状況からみて東岸からの人為的な投げ込みによるものと判断できる。

以上をまとめると、洪水砂のC層を挟んで上層B層と下層D層で堆積状況が大きく変わることが特徴で、こうした状況は流路から池への変化を示すものといえる。出土遺物の詳細は後述するが、流路の埋没時期は奈良時代末～平安時代前半頃で、その後、池へと変化した時期は13～14世紀頃と判断できる。流路が内ヶ池と重複しているため、流路の幅や全体の堆積状況が現状では不明確であるが、洪水砂の供給源はその規模や堆積物の類似性などから淀川起源とみなすことが妥当である。102流路は、上流・下流とも淀川と直結する分流路の一部であった蓋然性が高く、このことは淀川が南流する周辺一帯の景観変遷や、上牧遺跡の古墳時代の集落の性格と古代の土地利用を考える上でも極めて重要な成果といえる。

### 3. 遺物出土状況

各層から出土した遺物の概要については、A層からは古墳時代～近現代までの遺物・出土品が、B層からは中世以前の遺物が、C層・D層からは奈良時代後半以前の遺物がそれぞれ出土している。C層より上位の遺物は、破片資料が大半で集落域から流れ込んできたものとみなせるが、その一方でD層中から出土した古代の遺物は復元率が高い。流路内から出土した遺物の出土量はそれほど多いわけではないが、古代の遺物が流路肩部に点在しており、出土状況から人為的に投げ込まれたものと判断ができるため重要である(図19)。さらに詳細をみると、出土地点に大きな偏りがなく、2～3m程度の間隔で点的に遺物が出土している。必ずしも同時に投棄されたものであるかは断定できないが、いずれも〔埋土 D3〕に伴うことから、一定の間隔をあけて投げ込まれた可能性が高い。検出状況から古代の河岸祭祀に伴う遺物群とみて大過はなく、その範囲は南北にも拡がるものとみられる。河岸祭祀に伴う遺物は、奈良時代後半頃の土師器の長胴甕と小型の甕が多数を占め、これに少量の須恵器の杯類・壺・甕が伴う。特に甕は、内面に同心円のあて具痕があるのが特徴で、在地の土器を主体とする。長胴甕の外面には、煤が顕著に付着しており、実際に煮沸に使われていたことがわかる。さらに、いずれの資料も底部が欠損している点の特徴で、これについては使用後に意図的な穿孔がなされた可能性や、使用時の破損の可能性が推測される。杯類や壺類の破片には、墨の付着が認められるものがあり(40・46)、転用硯として使用されたものが含まれている。古代の河岸祭祀の事例では、人面墨書土器や土馬、人形などといっ

た律令的祭祀具が出土するケースが多いが、上層A層から齋串の可能性のある木製品（W2）が1点出土しているものの、上述したように実用的な土器類が主体である点が特徴的で、典型的な古代の河岸祭祀のあり方とはやや様相が異なっている。

古墳時代の遺物については、A～D層までの各層中から出土して一定量出土がみられる。破片資料が多く、庄内式期から終末期までの幅広い時期の遺物を含んでいる。時期的なまとまりに欠け、奈良時代の遺物のように人為的に投げ込まれた様子はいかぬため、今回の調査で確認された古墳時代集落に伴うものが流路内に流れ込んできたものが多いと判断できる。その一方で、ローリングを受けた摩滅が著しい遺物が一定量含まれており、上流域の別の遺跡から流れてきた遺物が一定量含まれることがわかる。またC層・D層中からは、弥生時代中期と縄文時代前期の土器がごく少量ながら出土しており、特に弥生土器に関しては、本遺跡や隣接する梶原南遺跡、上流域の神内遺跡などで確認されている中期前半～中頃（Ⅱ～Ⅲ様式）の方形周溝墓群やそれに付随する集落遺跡との関連が示唆される。縄文時代前期の土器については、器面の状態は良好であるため、比較的近くに当該時期の遺跡が存在する蓋然性が高い。嶋上郡東部では、これまでのところ中期を遡る時期の遺構・遺物は未確認であり、当該期における周辺一帯の遺跡の分布や地形環境を考える上でも重要である。

#### 4. その他の遺構

上述したように102流路の肩部では、流路と並行および直交する方向の人為的な溝や掘り込み、足跡などが検出されている。これらの遺構は、主に流路の外側肩部と内側肩部間の傾斜面地上で検出されており、一部は現代まで下る攪乱もあるが、上面がB層で覆われた中世のものが多い。

A-3区中央付近で検出された955溝は、流路と直交する方向の溝で、幅2.3m、深さ0.4mをはかる。埋土の堆積状況は、下部が土壌化した粘土・シルトを主体とし、上方はやや粗粒化する。細砂～中砂のラミナも顕著にみられ、東側耕作地からの排水目的の溝と判断できる（図18）。北側P6区で検出された1291溝も同様の性格の遺構と判断でき、この1291溝の延長線上の959溝は現代まで下るため、同様の排水路が現代まで継続していたことがわかる。なお、958溝をはじめとする流路と並行する溝については、主にA-3区北半で検出されている。幅1.0～2.0m、深さ0.2～0.3m前後で、その性格は明確でないが、上述した1291溝に接続していることから、排水等の目的で掘削された可能性を推測できる。

時期については、埋土から11～14世紀までの土師器・瓦器などが出土しており、特に13・14世紀代の遺物が多い（27～32）。関連するB層の主体となる時期とも概ね重複しており、この時期に排水路の整備などを含めた周辺一帯の耕地開発が進んだことが示唆される。

#### 5. 出土遺物

出土遺物は、中世の池状堆積層（B層）および関連する溝等に伴う古代～中世の遺物（図20）、河岸祭祀に伴うC層・D層出土の古代の遺物（図21・22・23）、各層から出土した古墳時代以前の遺物（図23）に大別でき、各層の帰属時期を示す遺物と特徴的な遺物を中心に抽出・図化した。

**B層出土の古代・中世の遺物**（図20） B層出土の中世遺物（11～22・25・26）、流路肩部の溝出土の平安後期～中世の遺物（27～30）、8世紀末～9世紀の遺物（33～36）、7世紀代の遺物（37～39）に大別でき、このほかにA層から出土した古代の齋串と考えられる木製品（W2）がある。

B層および肩部関連遺構に伴う土師器・瓦器は、ての字皿（27）が11世紀まで遡るが、それ以外は13～14世紀代のものが主体を占める。土師器皿は、形態・サイズにバリエーションがあり、土師器皿（17）が14世紀後半まで時期が下るため、B層の下限を示す可能性がある。また、白磁碗（23）、西日

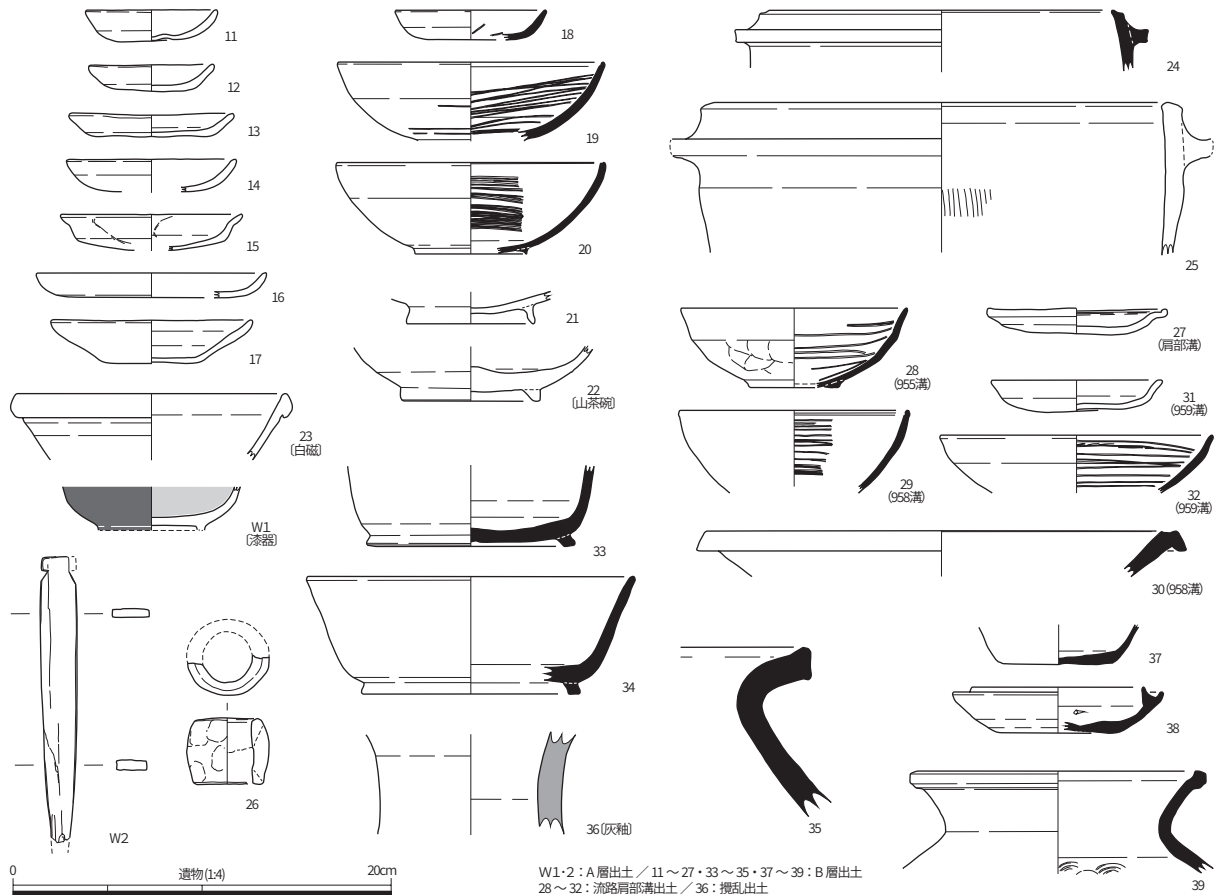


図20. 内ヶ池分流路（102 流路） 出土遺物（1）（上層：中世～古代）

本系の高台付の土師器椀（21）、胎土が均質手の北部系の山茶碗（22）など、他地域からの搬入品が一部含まれる。これ以外に、須恵質の羽釜（24）、摂津式土釜（25）、瓦質の鉢（30）などが出土しており、土錘（26）は内ヶ池での漁労に伴う遺物の可能性がある。

古代の遺物については、D層の河岸祭祀と同時期の遺物以外はB層からはほとんど出土しておらず、その前後の時期のものをいくつか抽出・図化した。須恵器の杯B（33・34）と甕（35）は、8世紀末～9世紀初頭頃に位置づけられ、重厚なつくりから近隣の成合産の須恵器の<sup>1)</sup>可能性が高い。肩部の攪乱に伴って出土した灰釉陶器（36）も近い時期のものであり、胎土から東海産とみなせる。なおこの時期の遺物は少ないが、河岸祭祀に伴う遺物よりもやや後出するものであり、B層の堆積がはじまる上限の時期を示す可能性がある。これ以外では、須恵器杯G（37）や杯H（38）・壺（39）など、飛鳥I新～II頃の遺物が僅かながら含まれる。この時期の遺構・遺物も今回の調査では出土量が極めて少なく、東に約400m離れた東側エリアE-2区・P14区に限定されている。このため、内ヶ池周辺に当該時期の遺跡の存在を推測する必要がある。

**C層・D層出土の古代河岸祭祀に伴う遺物**（図21・22・23） 上述したように、土師器の長胴甕と小型甕が主体で、これに少数の須恵器の供膳具と壺・甕が伴う。須恵器供膳具には、杯A（40・41）・杯B（42・43）・皿（44）がある。このうち杯A（40）には、底部に「一」の墨書がみられる。さらに墨が顕著に付着しており、転用硯として使用された可能性が高い。杯A（40・41）・杯B（42）は、胎土から同一生産地の可能性が高く、皿（44）は焼成不良である。須恵器貯蔵具では、小型の壺（45）が唯一の完形品で、不安定な平底に丸い肩部、胴部がやや長い、といった特徴的なプロポーシオンを呈する。都城



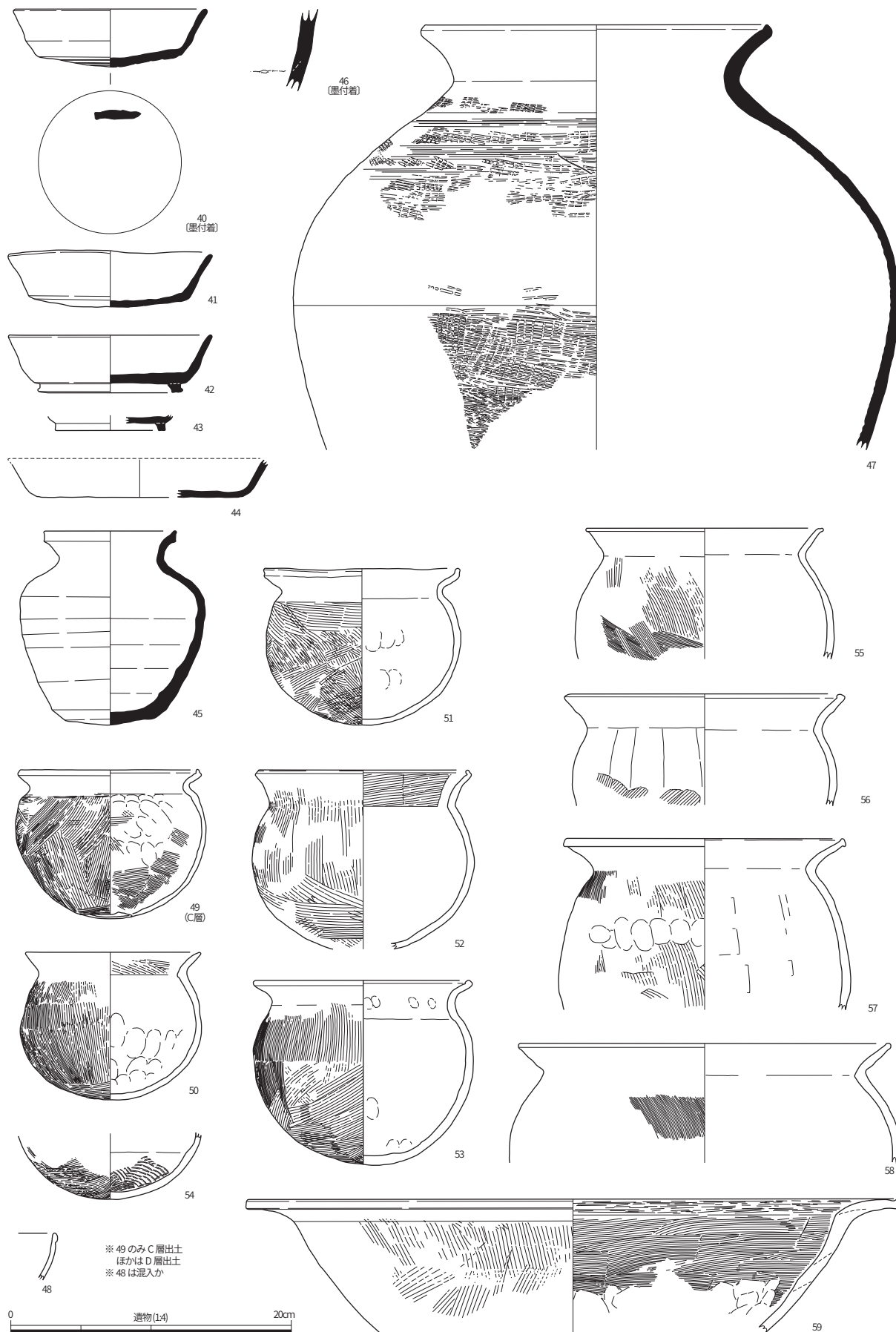


図 21. 内ヶ池分流路 (102 流路) 出土遺物 (2) [C・D層: 奈良時代後半]

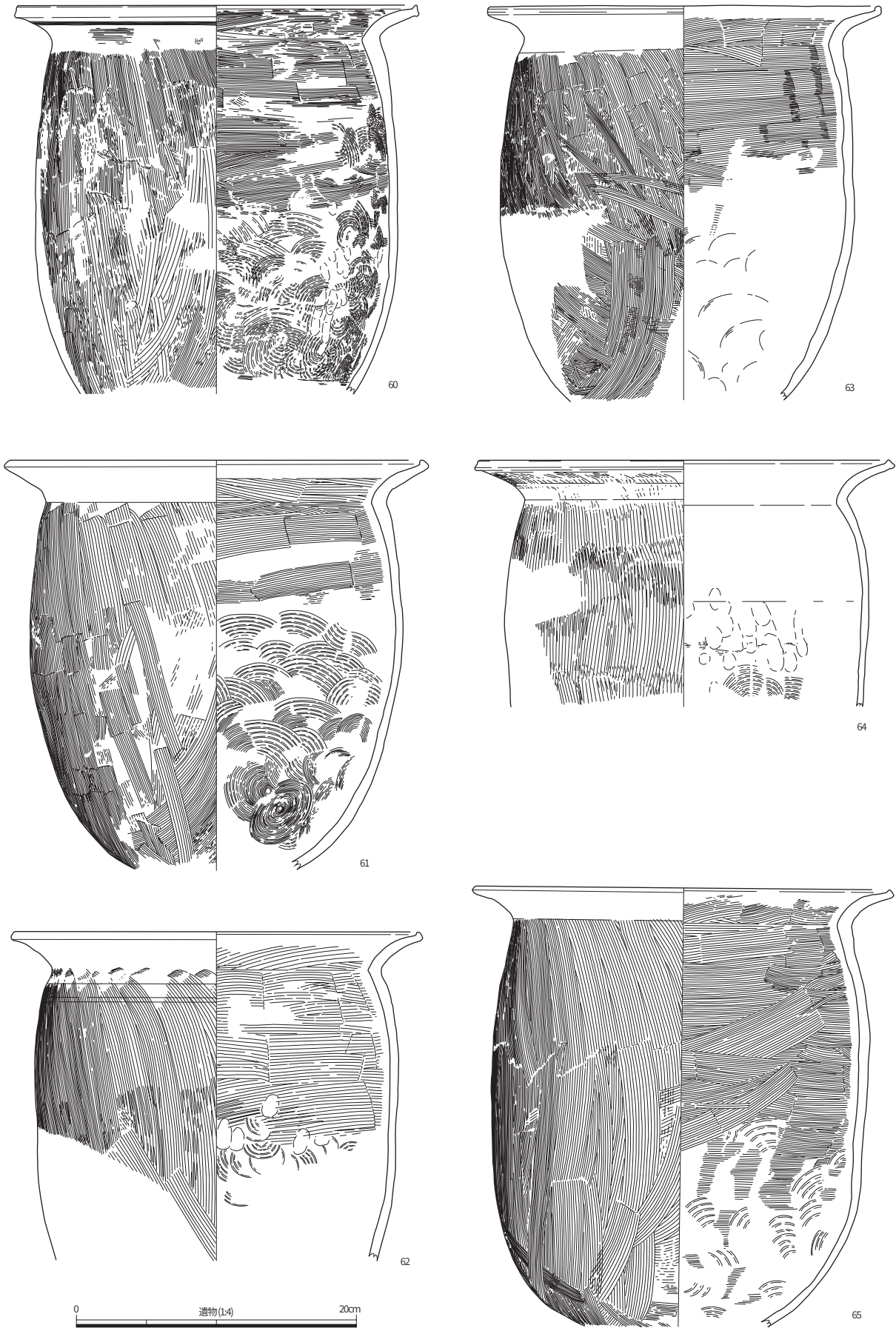


図 22. 内ヶ池分流路（102 流路） 出土遺物（3）（D 層：奈良時代後半）



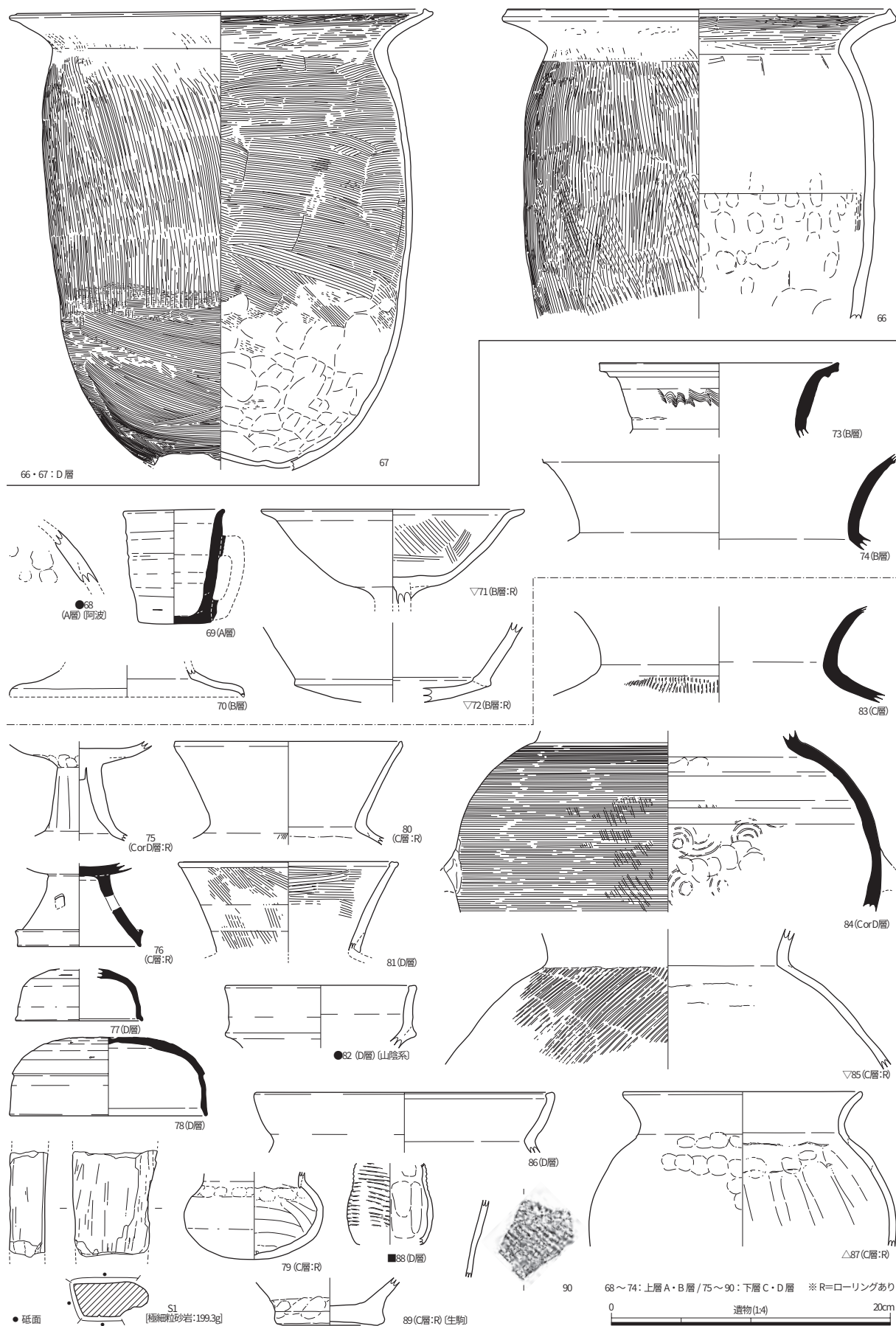


図 23. 内ヶ池分流路 (102 流路) 出土遺物 (4) (D層: 奈良時代後半、A~D層: 古墳時代)



の土器編年の器種分類に相当するものがなく、生産地は不明である。体部の破片(46)には、墨が付着しているため、杯A(40)と同様に転用硯として使用されたものと判断できる。甕(47)は大型品で、やや軟質の焼成である。

土師器甕類のうち小型甕(49～52)は、体部外面ハケ、内面ナデ・オサエ調整の個体が主体を占め、一部に体部内面にハケや同心円あて具痕がみられるものがある。口縁端部にバリエーションがあり、端部を内側につまみ上げるものや巻き込むものと、直立して面をもつものと外反するものがある。長胴甕(60～67)は、小型甕と同様にいずれも外面タテハケ、内面ハケ・オサエ調整のものが主体で、底部の体部あて具痕がみられる一群(60～65)と、あて具痕のない一群に大別できる(66・67)。口縁部は、小型甕と同様に端部のつまみ上げの有無にバリエーションが認められる。また、大半が胴部に分厚く煤が付着しており、実用品であったことを示すほか、底部まで完存する個体がないことから意図的に破損された可能性も推測できる。大型の鉢(59)は、長胴甕(65)とともに出土している。長胴甕と同様に煤が厚く付着しており、実際の使用を伴っていたことがわかる。なお、小型甕と長胴甕の体部内面あて具痕は、山城南部や北河内、嶋上郡域の地域色と認識されており、<sup>2)</sup>在地での生産が想定できる。これ以外では、長胴甕と小型甕の中間のサイズの土師器甕が一定量あるが(55～58)、いずれも破片の出土で、サイズも揃っていないことから、投棄に伴うものであるかは判断できない。

これらの土器群の時期については、混入品とみられる白磁碗(48)を除くと、奈良時代後半の一定の時期のまとまりをみせる。同時に投棄されたかどうかは定かでないが、須恵器の杯類の形態などから、時期については平城IVに位置づけることができる。

**古墳時代以前の遺物**(図23) 古墳時代の遺物は、各層から出土しているが、下層C層・D層からの出土がやや多く、このことは古墳時代に流路が機能していたことを示すものといえる。また、周辺からの流れ込みの可能性が高いローリングを受けた資料があり、こうした遺物は遺物番号の末尾にRの文字を付記した。遺物の時期は、庄内式期～後期前半頃まで幅があり、残存状況が良いものと特徴的な遺物を図示した。古式土師器では、胎土に片岩を含む内面オサエの阿波産の壺の肩部(68)や山陰系の甕の口縁(82)などの外来系の土器が含まれる。中期の遺物には、把手付椀(69)や甕(83)などの初期須恵器、外面タタキ調整の小型椀形の製塩土器(88)がある。このほかでは、壺蓋(77)や把手付きの甕(84)が珍しく、これらは後期に下る可能性が高い。

弥生時代以前の遺物は少ないが、生駒西麓産の弥生土器の底部(89)と、縄文時代前期の深鉢(90)の破片などがある。特に縄文土器は、前期・北白川下層II a式に位置づけられもので、あまりローリングを受けていないことから、周辺に未知の遺跡が存在する蓋然性が高い。これまでのところ、嶋上郡東部で最古の遺物であるため重要である。

#### 【註】

- 1) 檜尾川上流域の成合谷では、成合琴堂窯跡や成合西王寺玉窯跡などの8世紀末から9世紀初頭頃の須恵器窯の存在が知られている。中村剛彰 1995「奈良時代末頃における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡群発掘調査報告にかえて～」高槻市文化財年報 平成5年度 高槻市教育委員会  
笹栗拓編 2014『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第251集
- 2) 佐藤隆 1996「撰津東部」『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会  
秋山浩三 2007『日本古代社会と物質文化』青木書店

## 第2節 近世以降の土地利用

**近世の土地利用** 今回の発掘調査では、中世以前の遺構・遺物の調査をおこなう中で、周辺一帯の近世以降の土地利用の実態も明確になってきた。機械掘削の停止面である第3層除去面相当の深度は、近世以前の旧地形に凹凸があるため、調査区によって相違があるが、この面で現行区画に沿った耕作溝が多数検出されている。これらの溝群は、上層3層の堆積の年代や埋土中から出土する遺物から、中世～近世にかけて掘削された耕作溝群と認識できるもので、調査地周辺は中世以降現代にかけて連綿と耕作地として土地利用がなされたことがわかる。(図版10)。

また調査では、基幹水路と認識できる近世の水路もいくつか検出されている(図24)。特に現在の高槻用水幹線水路の隣接地および下部では、近世以前に遡る水路が確認され、近世以前につくられた用水体系が現在まで維持されていることがわかる。さらにB-1区やA-1区では、17水路や31水路といった現行区画に沿った近世以前の水路が検出されており、近世には既に現行の耕地区画が成立していたことは確実である。次節で詳述するが、こうした現行の耕地区画や水路は中世まで遡るものも多く、中世の耕地開発を基礎として、近世以降は徐々に改良を加えながら現在に至る過程が復元できる。

**洪水砂(第2層)の分布と成因** 近世に関する所見として重要なことのひとつに、淀川から供給されたとみられる洪水砂(第2層)の存在をあげることができる。調査地周辺の基本的な堆積は、基盤の沖積層(第7層・第8層)と古墳時代～古代の古土壌層(第5層・第6層)が粘土～シルトを主体とする泥質堆積物で、中世～近世の耕作土(第3層・第4層)がシルト～極細砂を主体とする越流堆積物を母材とするなど、主に粒形の細かい堆積を基本とする。これに対して第2層は、明らかに粒度の粗い中砂～粗砂であることから異質で、大規模な洪水によって周辺一帯に供給されたことがうかがえる。事前の試掘調査において、主に淀川の近くのトレンチでこの洪水砂の存在が確認されていたが、今回の調査と試掘および周辺の工事立会などで、その分布範囲が明確になった。具体的には、中央エリアの東半の一区画を除いて高槻用水幹線用水路より南東側に分布することが明らかになり(図24)、第2層の洪水砂が淀川起源であることを確実視できるようになった。

さらに一部の耕地区画においては、この洪水砂を埋土とする列状に整然と並んだ溝状遺構が検出された(図25)。これについては、洪水砂を天地返しした災害復旧土坑と認識できる。復旧土坑は、耕作区画ごとに東西方向で列状に並んで検出され、その規模は幅0.6m前後、長さは最長で20mをはかる。ただし、全体を検出できたものはほとんどなく、検出状況から田んぼ一筆分の幅いっぱいの長さで掘削されたことが推測できるため、現行区画から最長で35m程度の長さのものを復元できる。深さについては、耕地区画ごとに異なっており、0.2～0.5mまでの幅がある。なお、微高地Dに相当する旧地形が高い区画では、第2層と復旧土坑は分布しておらず、この区画部分では洪水砂は除去された可能性が高い。復旧土坑は、微高地Dを取り巻く一段低い耕地区画に分布しており、さらにその周辺の一段低い耕地区画に単純な第2層の堆積が認められる。このため、復旧土坑は微高地の縁辺部のみに分布することがわかる。第2層および復旧土坑上面には、0.2～0.3mの厚さの盛土層があり、最終的にはこの盛土造成を経て耕作地の復旧が完了したことがわかる。

以上の点からみて、大規模な洪水砂の供給とそれに伴う耕地復旧の痕跡は、上牧遺跡周辺で人間活動が明確化した古墳時代以降で最も甚大な洪水痕跡と認識できる。この洪水砂がもたらされた時期が問題となるが、第2層中および復旧土坑埋土中に含まれる18世紀後半～19世紀頃の陶磁器類から年代を

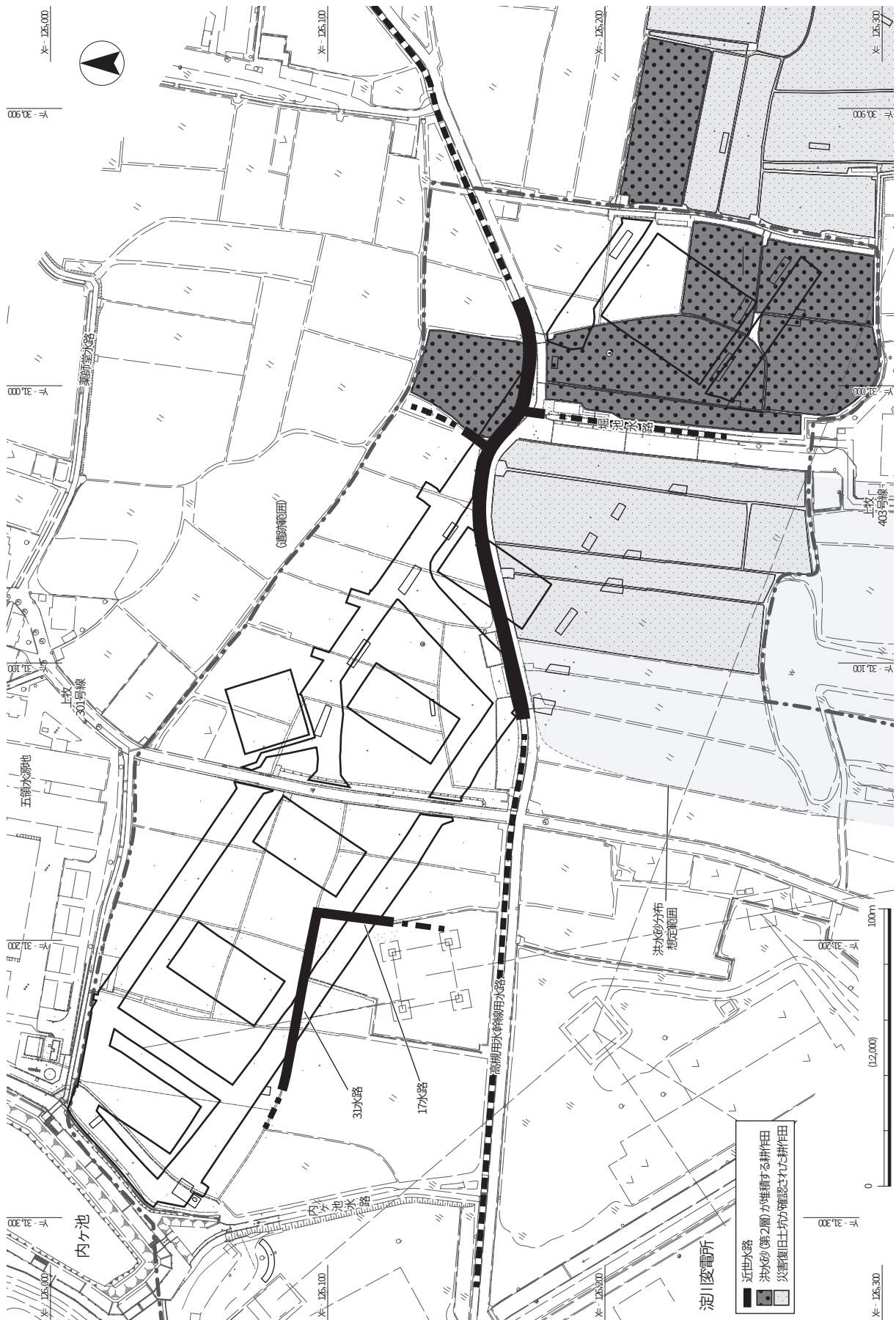


図 24. 近世用水路の位置と淀川洪水砂（第2層）分布範囲



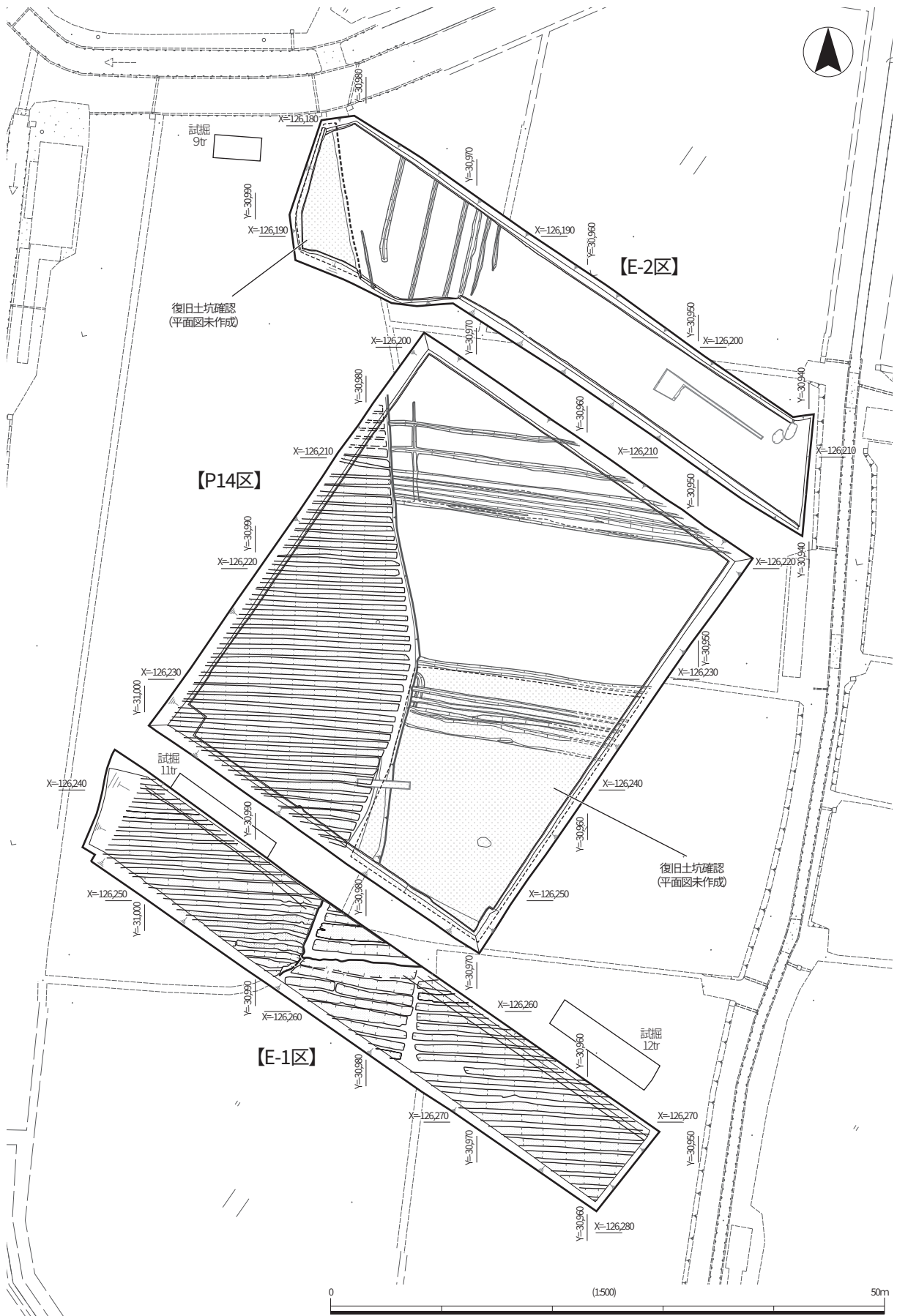


図 25. 東側エリア 淀川洪水復旧土坑 平面

推測することができる。淀川の洪水については、近世以降に文献や水損図などの詳細な記録が増えるが、この中で最も甚大な被害をもたらした享和二年（1802）の淀川洪水時には、上牧村もふくめた淀川右岸周辺一帯にも被害が及んでいたことが絵図等に記録されている。今回検出された第2層は時期的にもこの洪水の記事とおおよそ符合するものであり、第2層は享和の淀川洪水によって供給された洪水砂である可能性が極めて高い。

なお、今回の調査で検出された災害復旧土坑については、各地で類似する遺構が確認されている。これまでに東大阪市・八尾市池島・福万寺遺跡<sup>1)</sup>や、旭川の近傍に位置する岡山市宮南遺跡<sup>2)</sup>などで、洪水に伴う災害復旧土坑が検出されている。さらに最近では、檜尾川上流域の金龍寺旧境内跡で同様の復旧土坑が確認され、高槻市内での事例もみられるようになってきた<sup>3)</sup>。洪水以外の事例では、神奈川県域で富士山の宝永大噴火に伴う火山灰を埋め立てた復旧土坑と形態が類似している<sup>4)</sup>。いずれも組織的におこなわれた大規模な復旧工事のあり方を示しており、近世の災害史や災害復興に伴う普請の実態を考える上で貴重な成果といえるだろう。

## 【註】

- 1) 江浦洋・長原亘 1995「近世水田名にみる災害復旧—池島・福万寺遺跡における近世水害と水田復旧—」『大阪文化財研究』第8号（財）大阪府文化財センター
- 2) 物部茂樹ほか 2009「宮南遺跡」『中島遺跡・宮南遺跡・国長遺跡・天神河原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 221 岡山県教育委員会
- 3) 合田幸美・信田真美世・早川圭 2021『金龍寺旧境内跡4』高槻市埋蔵文化財発掘調査報告書 38・（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 310 集
- 4) 砂田佳弘編 2007『河村城跡』神奈川県山北町文化財調査報告 1 神奈川県足柄上郡山北町教育委員会

### 第3節 中世の遺構・遺物

#### (1). 概要

中世の遺構・遺物には、主に微高地BのP5区やB-1区、微高地Cの高所部にあたるC-6区・C-8区・P3区では、柱穴や区画溝、井戸などの居住関連遺構が検出された。ただし居住関連遺構は、上記の地点にほぼ限定されており、遺構・遺物は総じて多くはない。これ以外は、水路や耕作溝などといった耕作関連遺構が大半で、東側エリアのP14区では水田が検出された。これらはおおよそ現行区画に沿った方向で検出されていることが特徴である(図26)。

本節では、主に10世紀～16世紀までの遺構・遺物について報告するが、今回の調査で確認されている中世の遺構は、出土遺物から13・14世紀代を中心とする。その前後の9世紀～12世紀と15世紀以降は、遺物の出土量がごく僅かで、分布範囲も限定される。また現在までに上牧遺跡では、既往の調査も含めて15世紀以降の明確な居住域は確認されていない。このため15世紀以降は、現在まで主に耕作地として土地利用がなされていたようである。中世の遺構・遺物の年代観は、特に断りのない限り凡例で記した(橋本1991)に基づき、年代は世紀で記す。遺物は、各遺構から出土した遺物のほか、各地区の土地利用の年代を示す遺物を中心に抽出・図化した。

#### (2). 西側エリア

西側エリアで標高が最も高い地点は、B-2区西半・P5区全域・B-1区西半の南北にのびる微高地Bとした範囲に相当し、P5区では柱穴や土坑等が一定数検出された。現状では、建物の復元には至っていないが、微高地部分に小規模な居住域が存在する可能性が高い。

上記の調査区以外では、水路や耕作溝等の耕作関連遺構のみの検出に留まっており、これらは基本的には現行の耕地区画に沿っている。大局的にみれば、旧地形の凹凸に合わせて耕地区画を整備しているようであり、微高地Bを起点に東西方向にそれぞれ雛段状に徐々に低く段造成されている。ただし内ヶ池の東に隣接する微高地Aとした高まりは、一部に未掘削の高台を残すものの、中世段階に大規模な削平によって平坦地化されたことが調査で判明した。旧地形の凹凸を残しつつ面的に耕作地の造成がおこなわれており、中世段階の淀川低地部の開発の実態を考える上で重要なデータとなるだろう。

**1291溝**(図28) P6区北西で検出された溝で、南東から北西方向にむかってのび、内ヶ池に接続している。規模は、全長12m、上端の幅が2.4mをはかる。南東端から約2mまでは0.2mほどの深さであるが、そこから急激に深く落ち込んでおり、深さは最深部で1.2mをはかる。周辺の耕作溝がこの1291溝に接続していることから、耕作地から集水して内ヶ池への排水目的の溝とみなすことができる。また、断面図の作成位置付近が最も深く窪んでいるが、北西側にむかって底面が緩やかに立ち上がっており、水溜の機能も兼ね備えていた可能性が高い。

埋土は、暗色の泥質土とシルトや極細砂のラミナが混じる流入土が互層状に堆積しており、滞水と流入を繰り返しながら徐々に埋没した状況がうかがえる。ただし埋土4の下部の形状などから、浚渫や再掘削もおこなわれていたようであり、一定期間は溝が維持管理されていたことがわかる。

出土遺物には、土師器皿、瓦器、東播系須恵器の鉢、土錘などがある。このうちの無高台の椀(98)は、輪花椀とされるやや珍しい器種で、楠葉野田遺跡などでの生産が想定されている<sup>1)</sup>。また初期の堆積である最下層〔埋土11〕からは、12世紀後半～13世紀頃の土師器皿(101・102)が出土しており、この



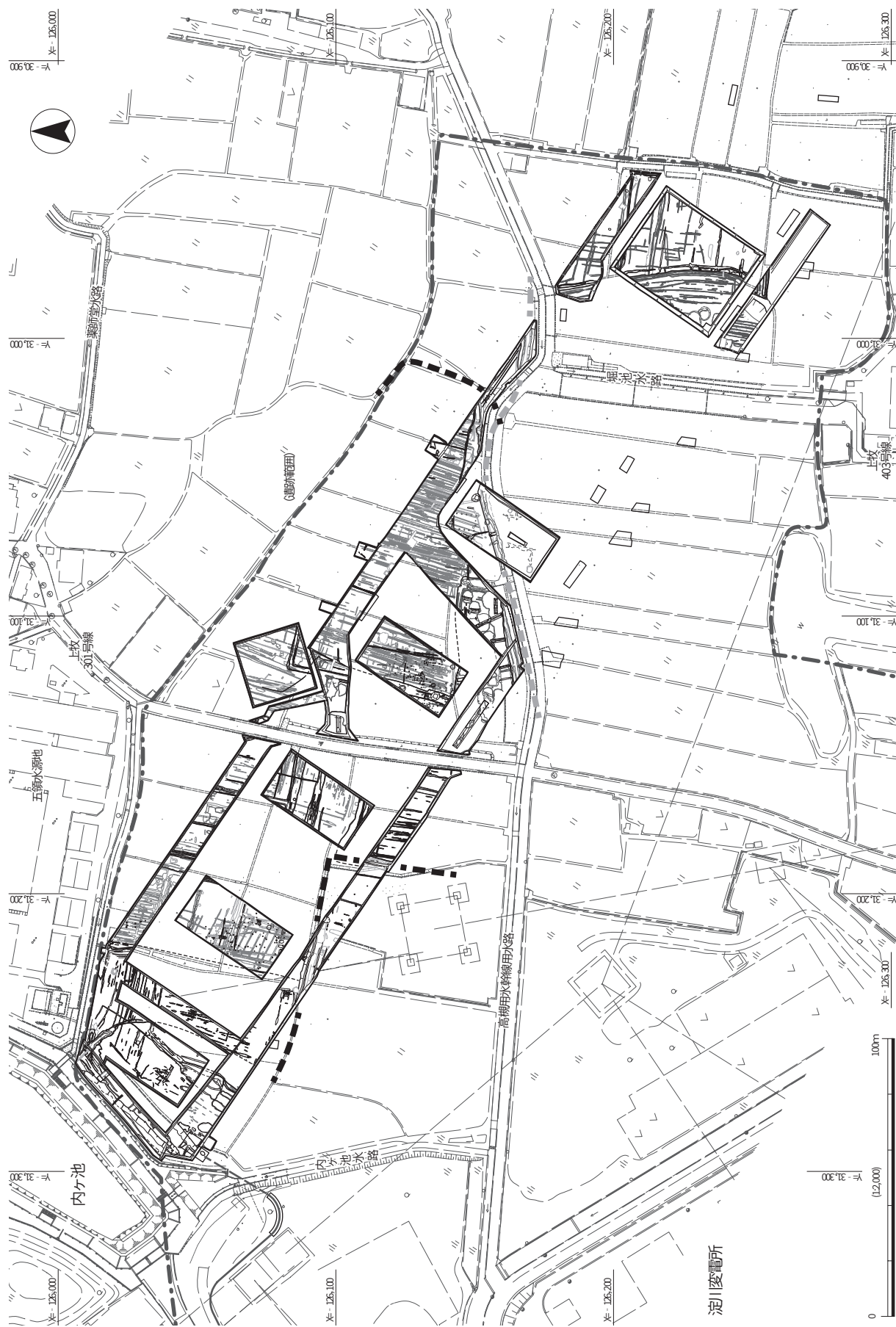


図 26. 中世遺構 調査地全体平面図

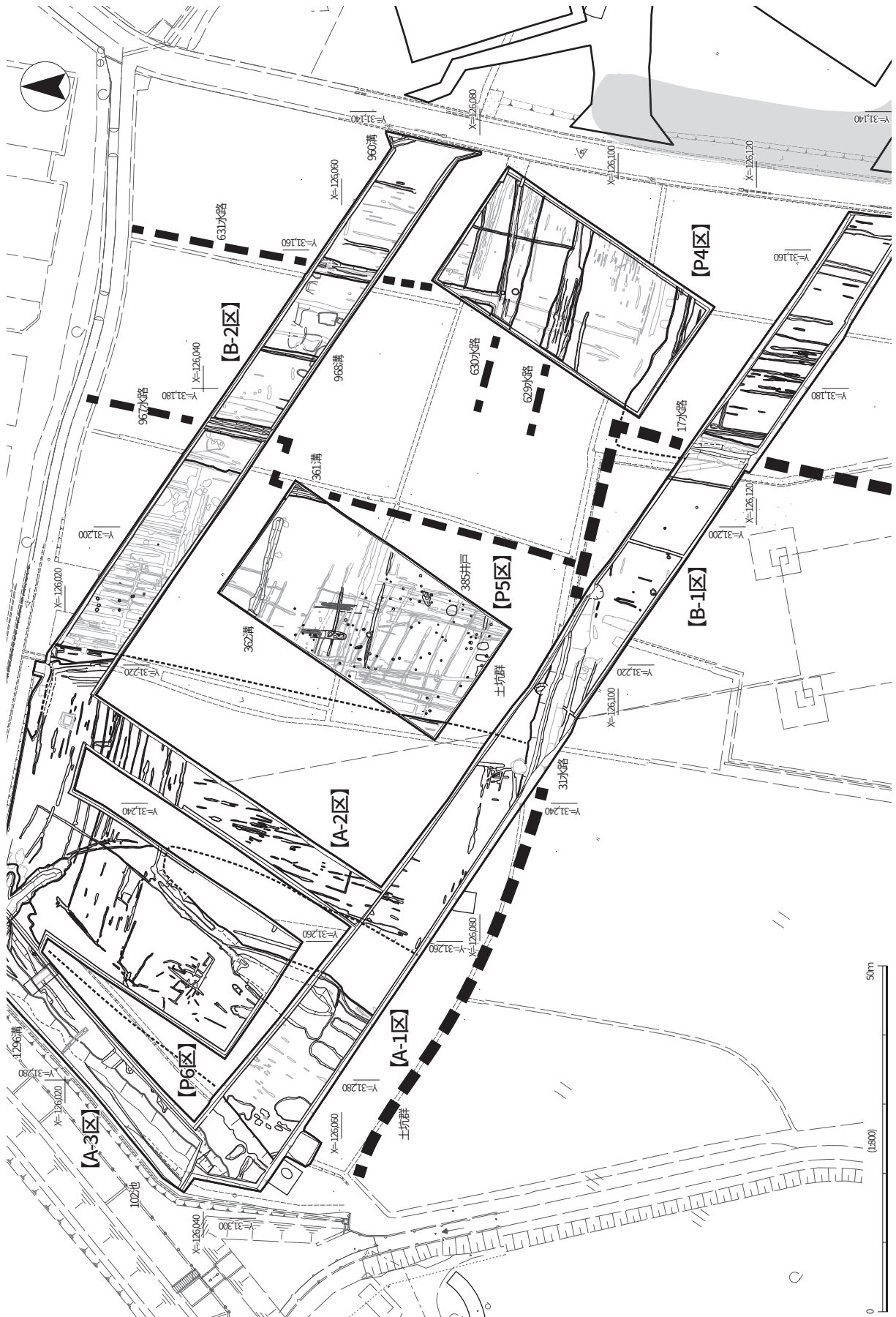


図 27. 西側エリア 中世遺構 全体平面図

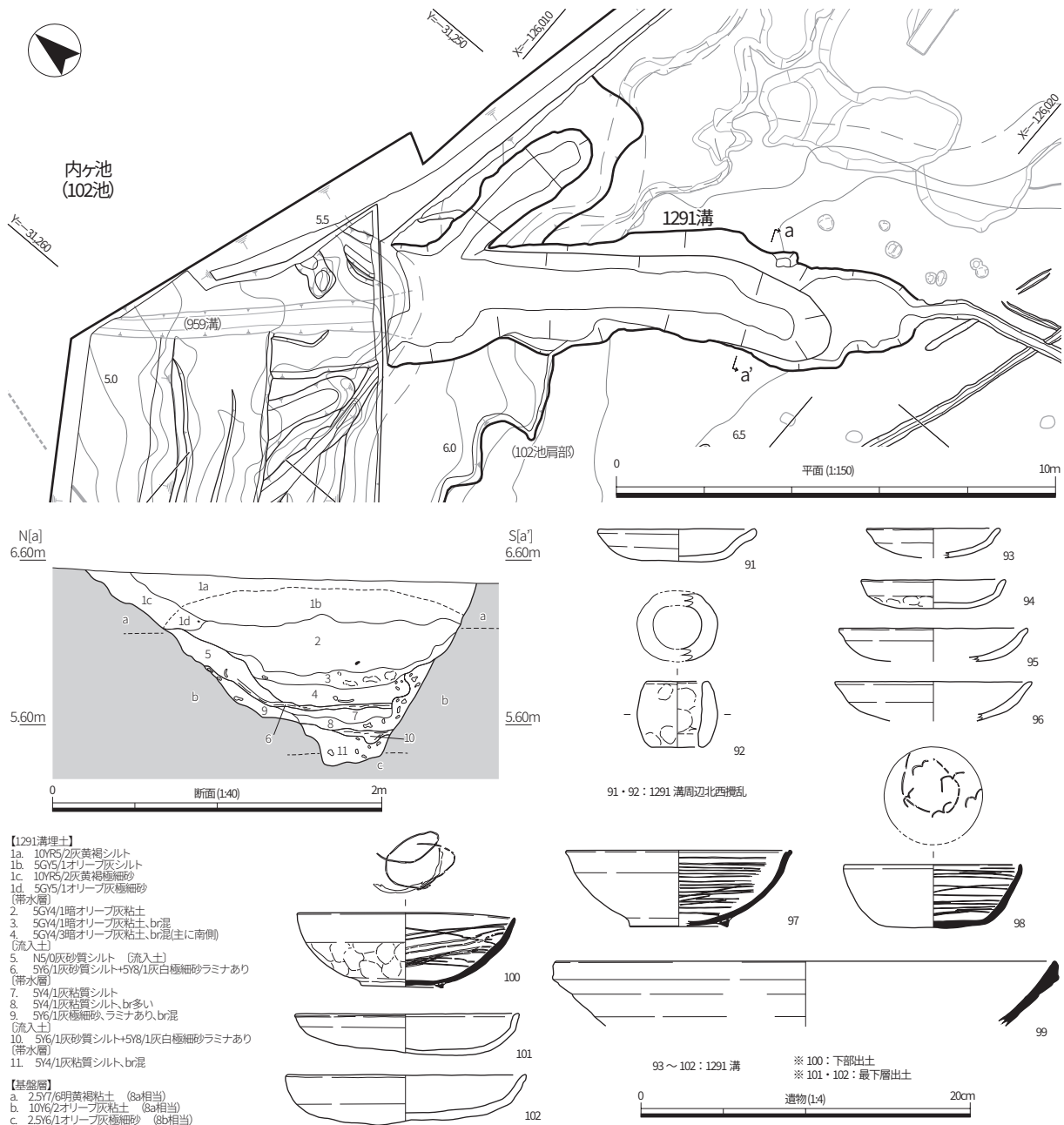


図 28. 1292 溝 平面・断面・出土遺物

排水溝が掘削された時期を示す可能性がある。全体的にみれば13～14世紀代に位置づけられる遺物が多く、1291溝の機能時期は12世紀後半～14世紀と推測される。

**103・1292 土坑**(図 29) P6 区の南端、A-1 区西側で検出された不定形の土坑で、全長 16.6 m、幅 6.2 m、深さ 0.55 mをはかる。埋土は、褐色～灰色系シルト～極細砂を主体とする。周辺一帯は、一部に耕作地の造成で平坦地化されており、東側に未削平の高台が残されているが、103・1292 土坑は未削平の高台に接した位置にある。高台の裾をめぐる 1295 溝や周囲の耕作溝などが接続しているため、耕作地一帯の水を一時的に集水するための水溜め遺構であった可能性が高い。

遺物については、ほとんどが細片化しており、出土量も少ない。このため詳細な時期比定は難しいが、図示した13世紀代の瓦器椀(103)は、遺構の機能時期の一端を示すものとみられる。

**104・105・106 土坑**(図 29) P6 区の南端で検出された土坑群で、103・1292 土坑の南側に隣接している。



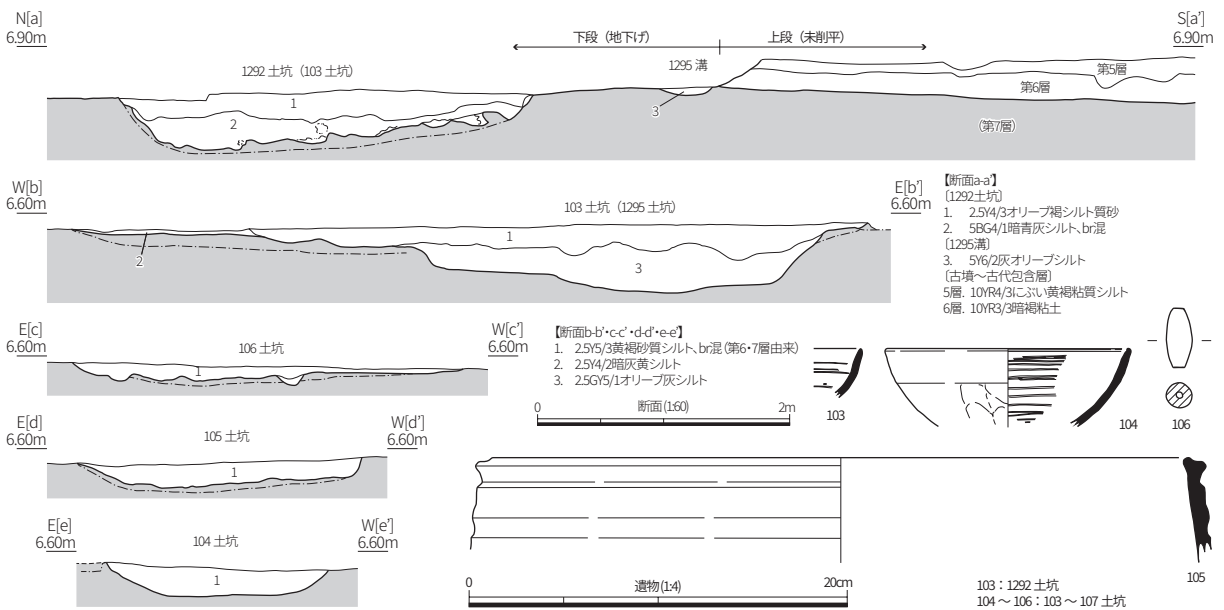
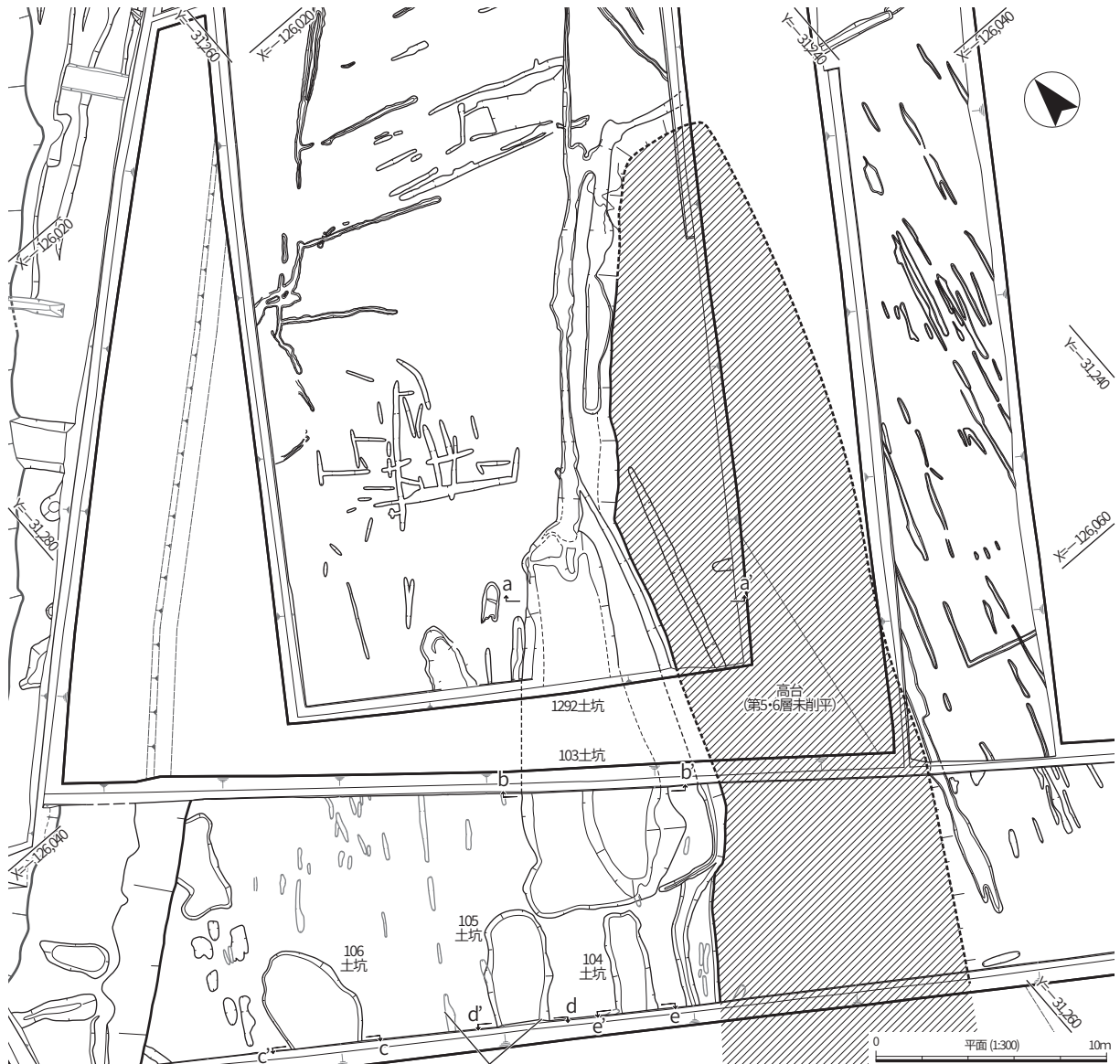


图 29. 103・104・105・1291 土坑 平面・断面・出土遺物

検出範囲が限られているため全体の形状は不明確ではあるが、北東から南西方向に縦に長い溝状の形態に復元でき、一定の間隔で列状に並んでいるようにも見受けられる。規模は、長さ 4.8 m 以上、幅 1.7 ～ 3.3 m、深さは最大で 0.26 m をはかり、埋土は 103・1292 土坑と同様の褐色～灰色系のシルト～極細砂を主体とする。調査地外へ遺構は拡がっており、全体の状況が明確でないが、規則的に並ぶような状況を積極的に解釈すれば、地下げ型島島に伴う掘り込みの可能性が推測される。

遺物については、103・1296 土坑と同様に大半が細片化しており、出土量も少ない。13～14 世紀代の瓦器椀（104）や瓦質土器の鍋（105）などの破片を図化できたのみであるが、これらは遺構の帰属時期の一端を示すものとみられる。

**362 溝**（図 30） P5 区の北側で検出された溝で、溝の東端は検出されているが、西側は調査区外にのびている。規模は、検出長 14.7 m、最大幅 1.6 m をはかる。現行の耕地区画とほぼ並行し、東西方向から約 16°北に振っている。溝の中央部、断面 b-b' ライン付近で底面が一段高くなっており、西側と東側が一段深くなる形状を呈する。検出面からの深さは、東側が 0.61 m、中央が 0.32 m、西側が 0.66 m をはかる。埋土は、灰色の粘土～シルトを主体としており、積極的な流水の痕跡は見出せないため、なんらかの区画を意図した溝と判断できる。

出土遺物には、土師器皿・青磁碗・瓦質土器羽釜・常滑焼の大甕などがある。このうち東端北側肩部からは青磁碗（115）と瓦質羽釜（118）が重なった状態で出土し、西端上層付近では常滑焼の大甕の破片（117）と土師器皿（107・112・113）がまとまって出土している。出土遺物の時期は、いずれも 15 世紀代であるが、この区画溝以外では同時期の遺構・遺物はほとんど出土していない。周辺に同時期と考えられる遺構を見出すことは現状では困難であるが、溝の北側は調査面積が限られているため、北側にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

**P5 区柱穴群**（図 31） 西側エリアで最も標高が高い P5 区では、柱穴が約 400 基検出されている。P5 区は、古墳時代と中世の遺構が重複しているため、柱穴の時期判断が問題となるが、古墳時代の柱穴は第 6 層に類似する埋土を主体とするのに対し、中世の柱穴は主に第 4 層に類似する埋土であることが多く、大まかな区別は可能である。図 31 では、出土遺物と埋土から確実に中世まで下る時期の柱穴を抽出し、図示した。相対的にみれば古墳時代に遡るものが多く、現状では中世の掘立柱建物を復元するまでには至らなかったが、388P－446P－447P－448P－376P のように列状に並ぶようなものもあるため、中世段階に微高地 B の頂部には中世段階に小規模な居住域が展開していたことがうかがえる。

柱穴埋土から出土した中世の遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器等がある。大まかにみれば、10 世紀後半～14 世紀頃までの遺物を含んでおり、418P からは土師器皿（119）や黒色土器 A 類（120）・B 類（121）椀など、今回の調査では出土量が少ない 10 世紀後半～11 世紀前半頃の遺物がまとまって出土している。ほかでは、376 P から出土した高台が二重につく瓦器椀（124）などが珍しい資料で、これについては井尻遺跡などで類例がある<sup>2)</sup>。柱穴以外では、耕作溝 386 溝から 9～10 世紀頃の須恵器杯（123）も出土しているため、居住域の形成時期はやや遡る可能性も推測できるだろう。

**400・402・411 土坑**（図 32） P5 区の南端で検出された 3 基の土坑で、約 1.5 m の間隔で列状に並んでいる。東側の 400 土坑と中央の 402 土坑は、いずれも全体が検出され、隅丸方形を呈する。規模は、長さ 1.6 m、幅 0.8～1.0 m をはかる。北側が浅く南側が深い段差のある形状が特徴的で、検出面からの深さは北側で 0.4～0.45 m、南側で 1.0 m をはかる。埋土は、上層～底部までブロック土で充填されており、掘削からあまり時間を経ずにすぐに埋め戻されたことがわかる。特徴的な遺構であるため、

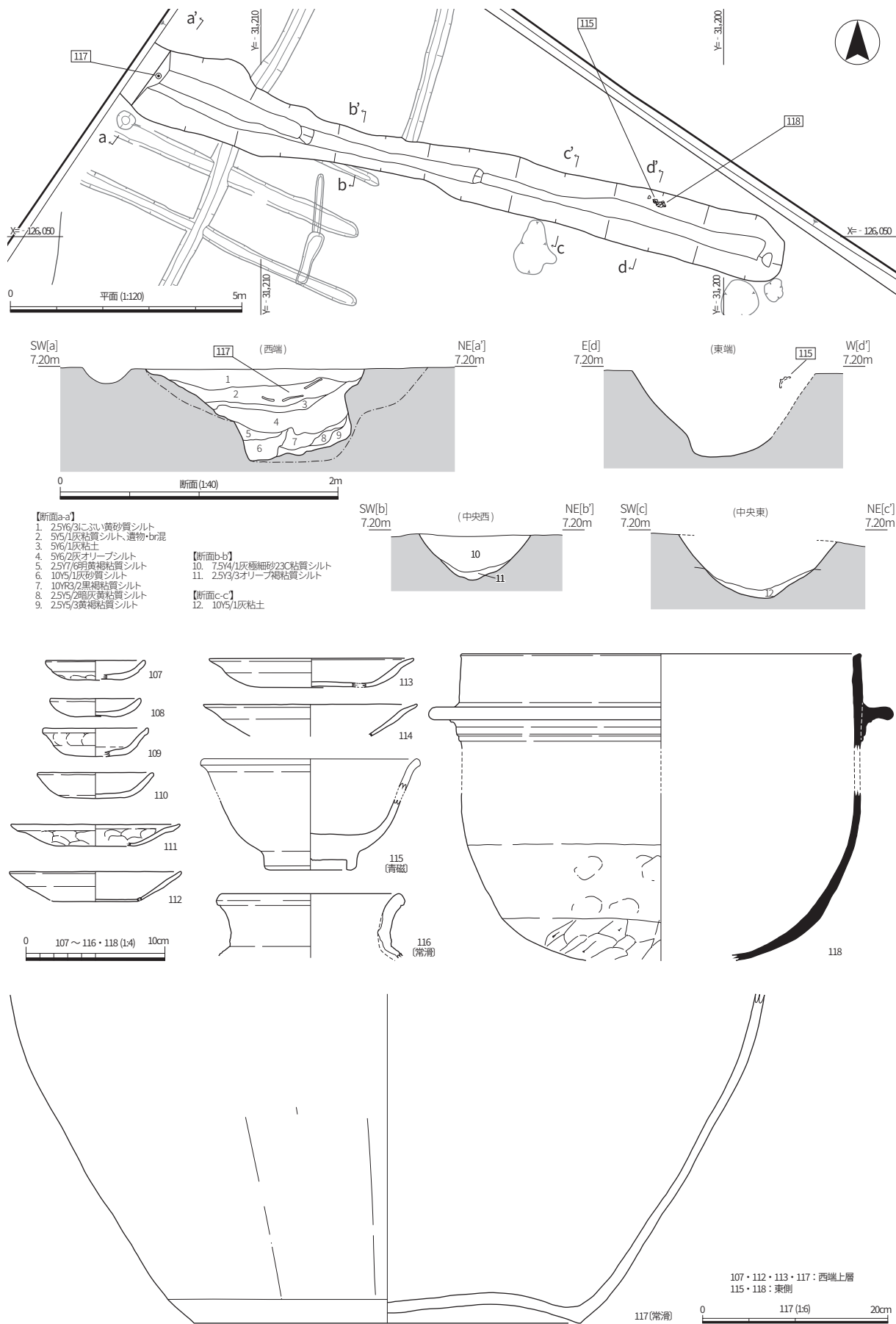


図 30. 362 溝 平面・断面・出土遺物



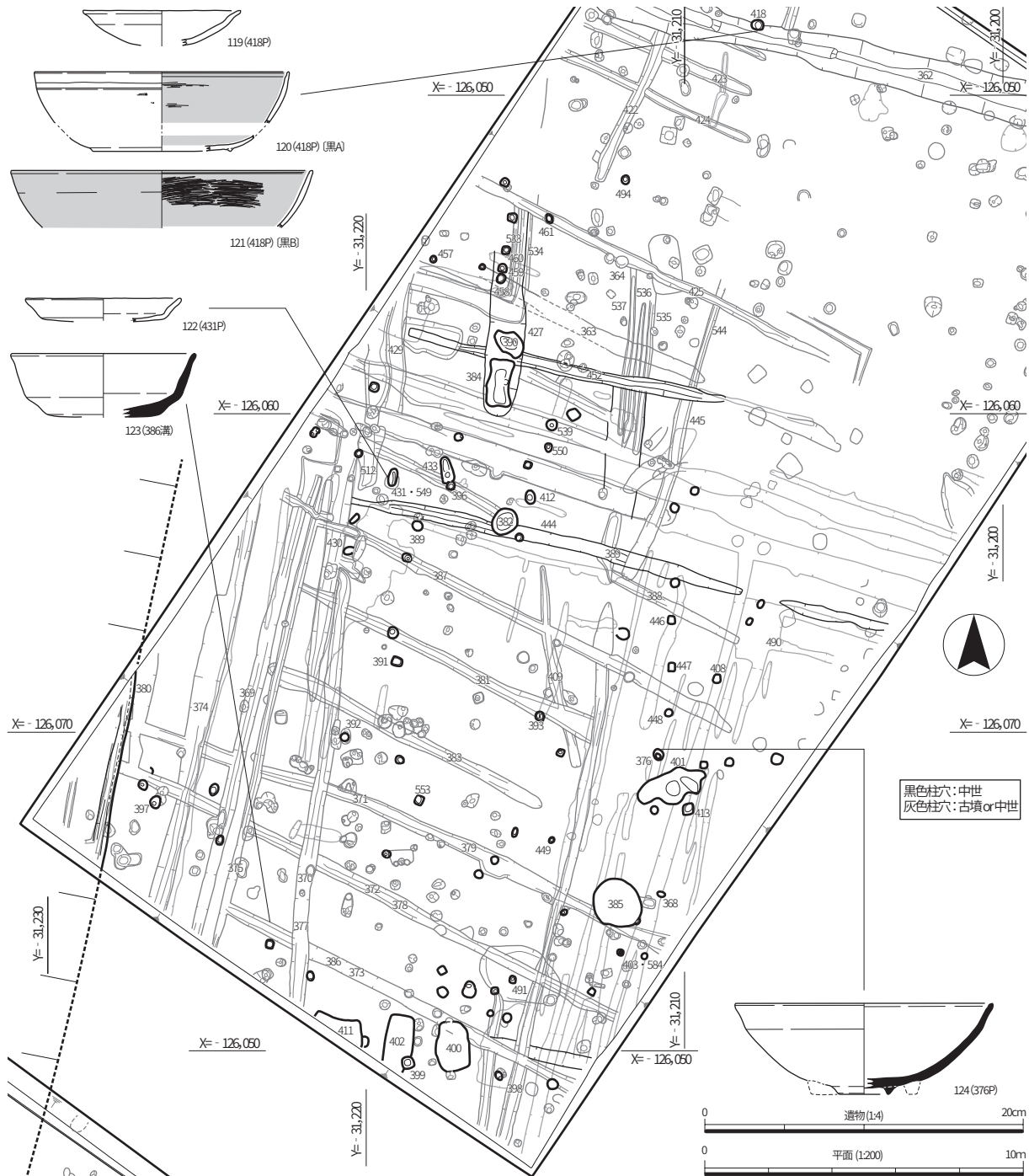


図 31. P5 区柱穴群 平面・出土遺物

その機能や掘削の目的が問題となるが、東大阪市・八尾市池島・福万寺遺跡<sup>3)</sup>や松原市池内遺跡<sup>4)</sup>などで、形態および埋土の堆積状況が類似する遺構が検出されている。これらの遺跡の報告書では、いずれも性格不明の方形土坑として報告されているが、水田に遡上する淡水魚を捕獲するために掘削された土坑とする意見がある<sup>5)</sup>。今回検出された土坑の場合、西側エリアの最高所部付近に位置しているため、水路から水を引込んで水を抜くのは容易であり、魚を追い込み捕獲するための遺構とする解釈は、状況証拠からは魅力的な説といえる。このように淡水魚捕獲目的の土坑とみなしてよいのであれば、周辺の耕地開発の実態を考える上でも大変興味深い事例といえるだろう。

遺物の出土量は、極めて少なく、いずれも細片である。時期を示す可能性があるものとしては、400

第4章 遺構・遺物

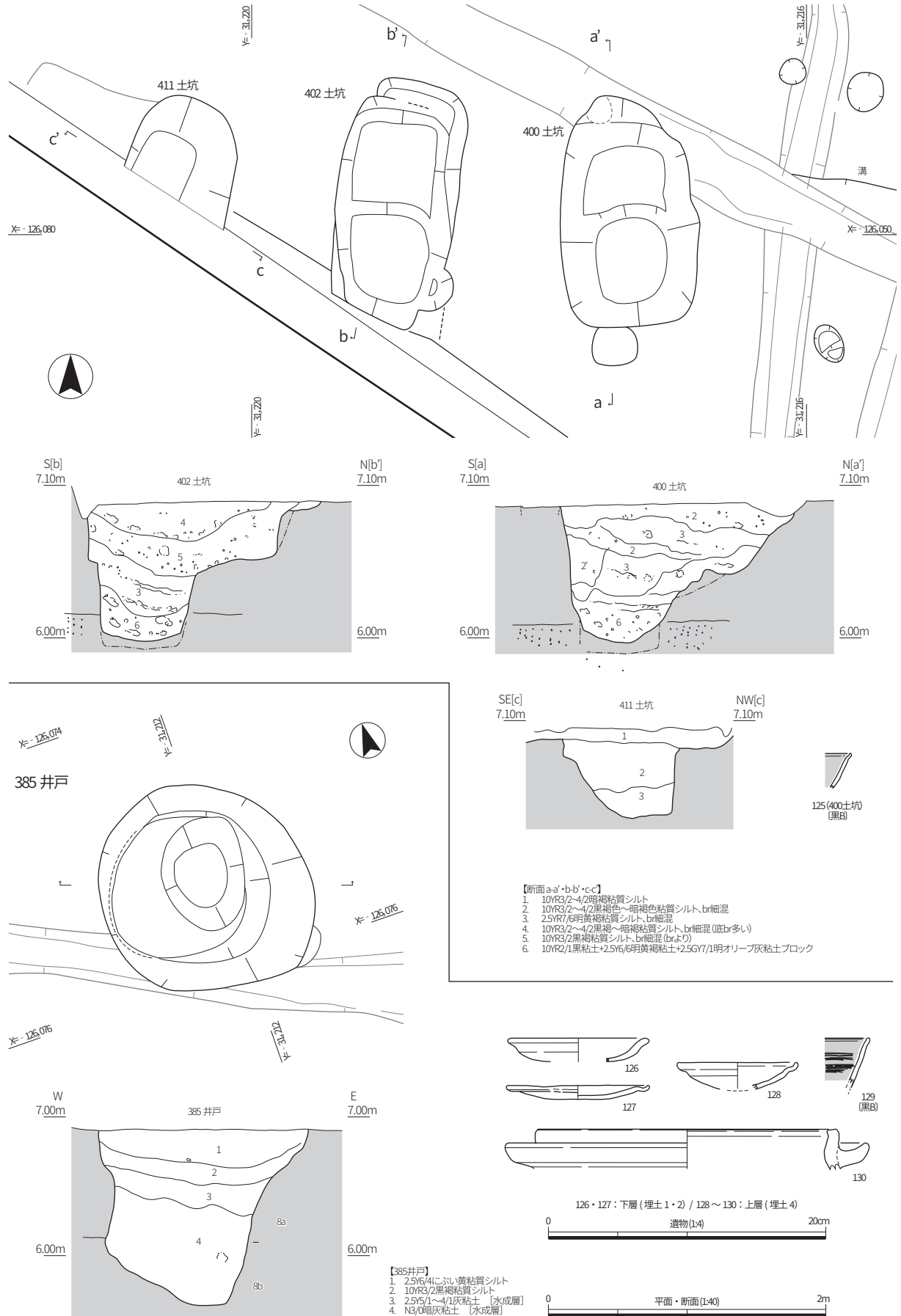


図 32. 400・402・411 土坑、385 井戸 平面・断面・出土遺物

土坑から出土した黒色土器 B 類碗の細片があり (125)、やや不確実であるが、遺構の帰属時期は 11 世紀代と推測される。

**385 井戸** (図 32) P5 区の南東、400 土坑の北東 4 m に位置する。検出面の形状は、径 1.5 m の円形を呈する。断面形は、漏斗状に近い形状で、検出面からの深さは 1.24 m をはかる。埋土は、暗色の粘土～粘質シルトを主体としており、滞水状態で徐々に埋没した様子がうかがえる。掘削底面から湧水があるため、素掘の井戸とみなすことができる。

出土遺物は、ほとんどが細片で、出土量も少ないが、土師器皿・黒色土器・土師器羽釜などがみられる。ての字状口縁皿 (127・128) や黒色土器 B 類碗 (129) などが出土しており、いずれも 11～12 世紀代に位置づけることができる。

**17・31 水路ほか** (図 33・34) B-1 区の中央付近で検出された南北方向の 17 水路と、西端で検出された東西方向の 31 水路は、いずれも現行の耕地区画に沿っており、P4 区南西で屈曲する一連の遺構と考えられる。検出面の幅は、3.5 m 前後をはかり、深さは 1.7 m 程度である。一定の間隔で護岸杭が打設されており、その規模からみて基幹的な灌漑水路と推測される。表土を掘削した段階で、第 3 層を切り込む近世以降の水路が検出されたため、真砂土で充填された〔埋土 4〕までを重機で掘削し、下部は人力で掘削した。上層からは近世の陶磁器等が一定量出土したが、最下部から出土した遺物は中世以前に限られる (131・132・134～137)。また 31 水路南の 165・166 溝や 17 水路東西の 16 溝・30 溝は、この水路と並行するようにのびる耕作溝であるが、出土遺物はいずれも中世以前に限られる (133・138)。このため基幹水路 17・31 水路の掘削時期は、14 世紀頃まで遡ることが現実視でき、近世にかけて長期的に維持・管理されていた水路であったとみなすことができよう。

なお水路の埋立ての時期については、最終の掘削が第 3a 層を切り込んでいることや、18 世紀頃までの遺物が出土することから、近世後半以降と判断できる。その後は、調査地南側の現行水路に付け替えられたことが推測されるが、享和二年 (1802) の洪水と時期が概ね符合するため、洪水復旧に伴う周辺一帯の大規模な区画整理の一環として水路が付け替えられた可能性が推測される。

**18 土坑・39 P・38 P** (図 33・34) 17・31 水路南西側の一角は、北側 P5 区からのびる微高地 B1 の延長線上に位置しており、P5 区と同様に標高が高い。ただしこの一画では、中世以前に遡る時期の遺構は少なく、僅かに 18 土坑・39P・38P など中世以前の遺物が出土している。特に 18 土坑では、黒色土器 B 類碗や瓦器碗がまとまって出土したほか (139～144)、隣接する 39P でも黒色土器 B 類 (144) が出土している。また、これらの遺構の東 8 m に位置する 38P では、梶原瓦窯産の平瓦 (145) が出土しているが、その背景は不明である。なお、これらの遺構の位置する B-1 区西半の包含層からは、北側の P5 区と同様に 10～14 世紀代の遺物が出土している (146・147・150・151)。調査区外の南側にも微高地 B がのびていることをふまえると、同様の遺構が南に拡がる蓋然性が高い。

**967・631・630・629 水路ほか** (図 35・36・37) 微高地 B の東側は、東に向かって地形が徐々に下がっており、地形に沿って耕作地が雛段状に造成されていることが調査で確認された。こうした耕作段の裾部や肩部には、南北方向の溝や水路が検出されており、このうちの 967 水路と 631 水路は、幅が 2 m 以上あることから、周辺一帯の耕作に関連する基幹水路とみなすことができる。

南東側の P4 区の調査区では、631 溝の延長部分のほか、それと接続する東西方向の 630 水路と、それに併行する 629 水路が検出されている。これらの水路も幅が 3～4 m あり、631 水路と接続することから、基幹水路と判断することができる。上述した B-2 区の水路も含め、いずれも現行区画に概ね沿っ



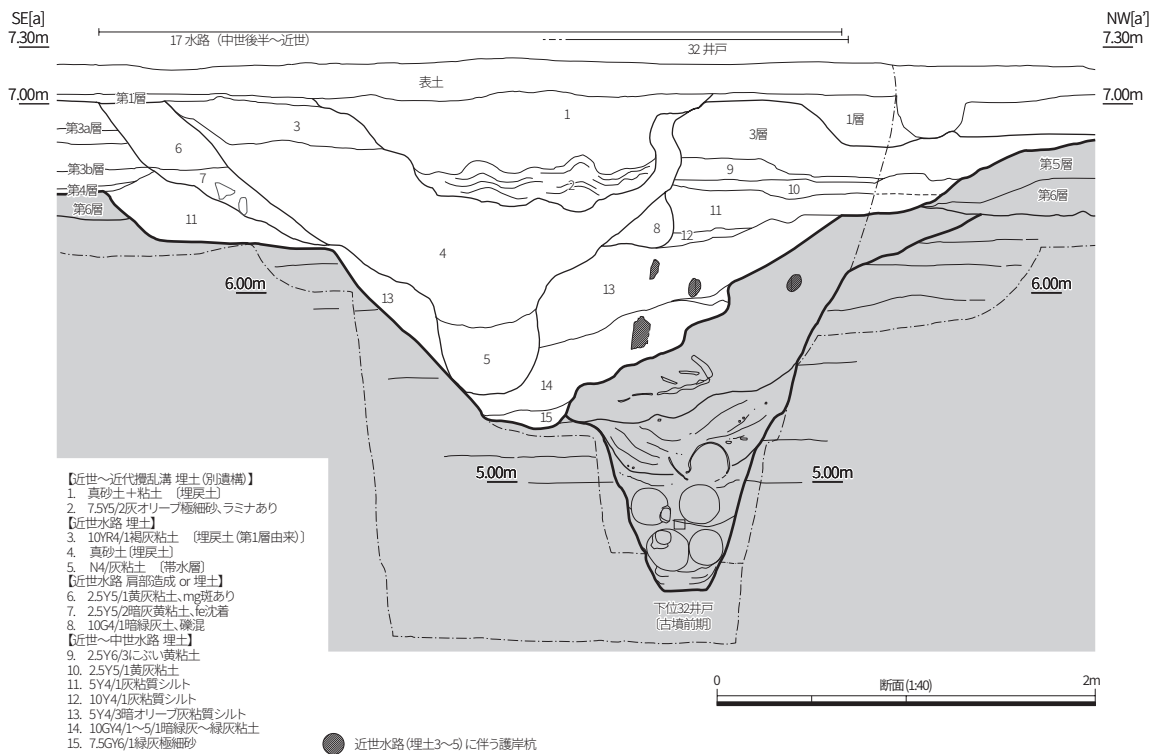
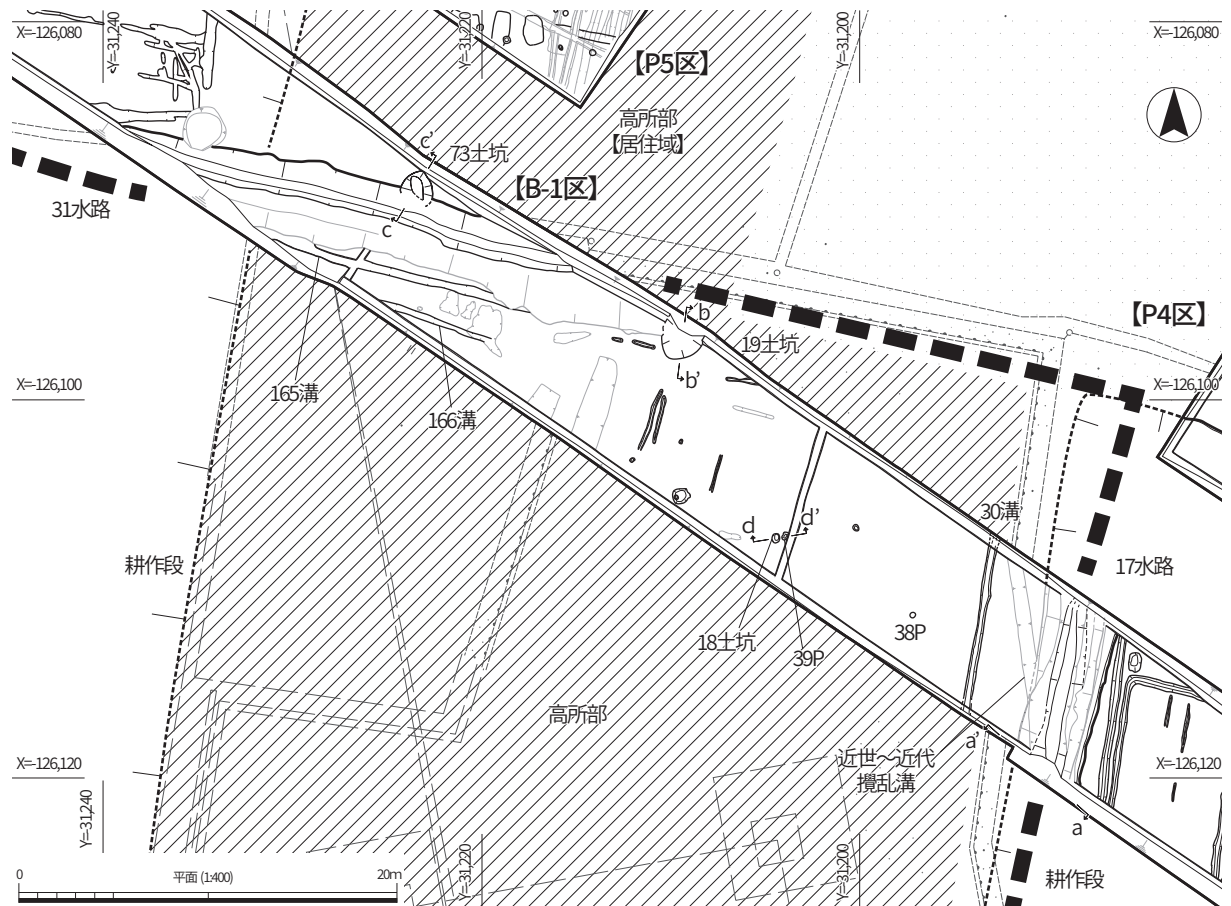


図 33. 17・31 水路 平面・断面

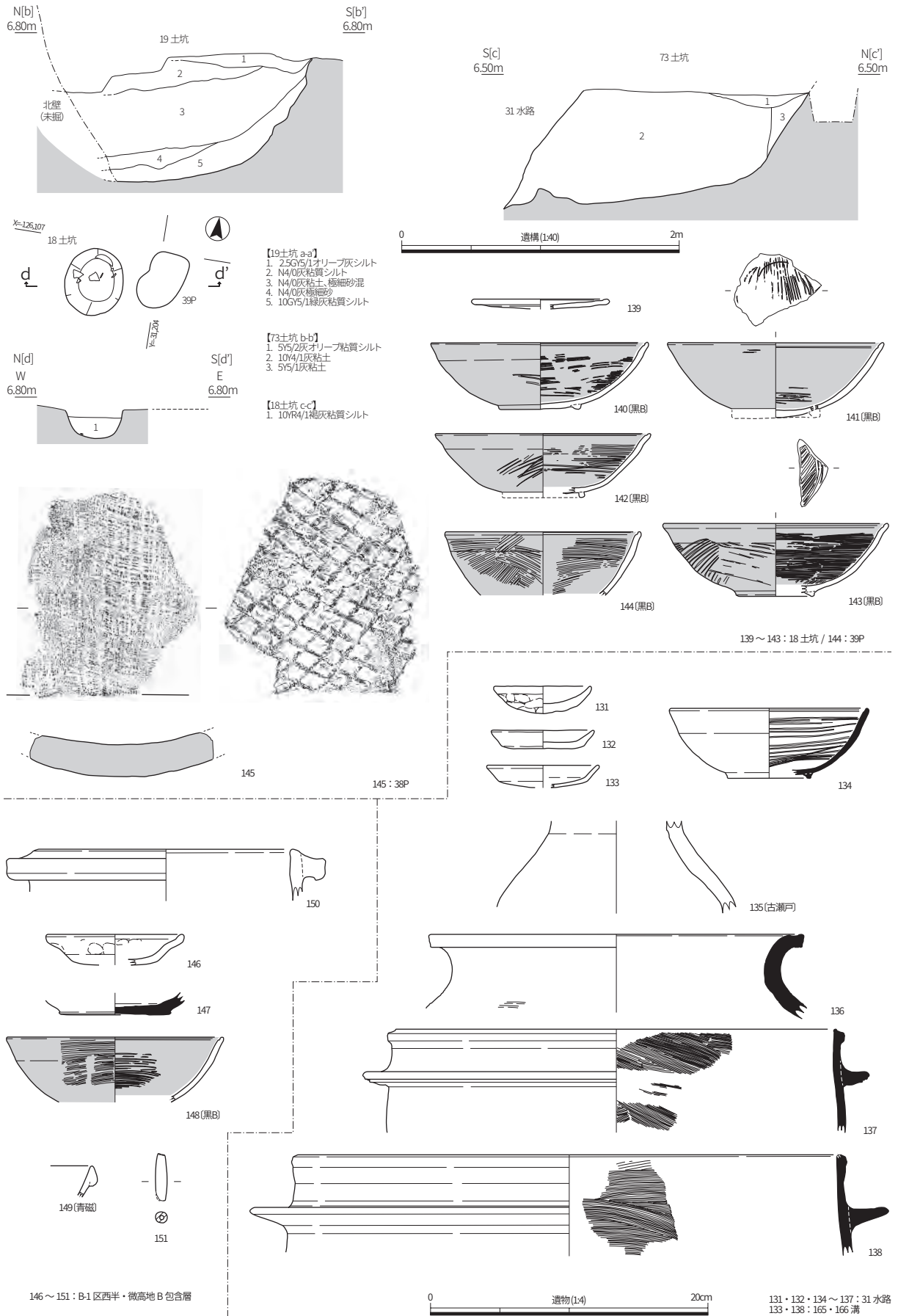


図 34. B-1 区西半 遺構平面・断面 出土遺物

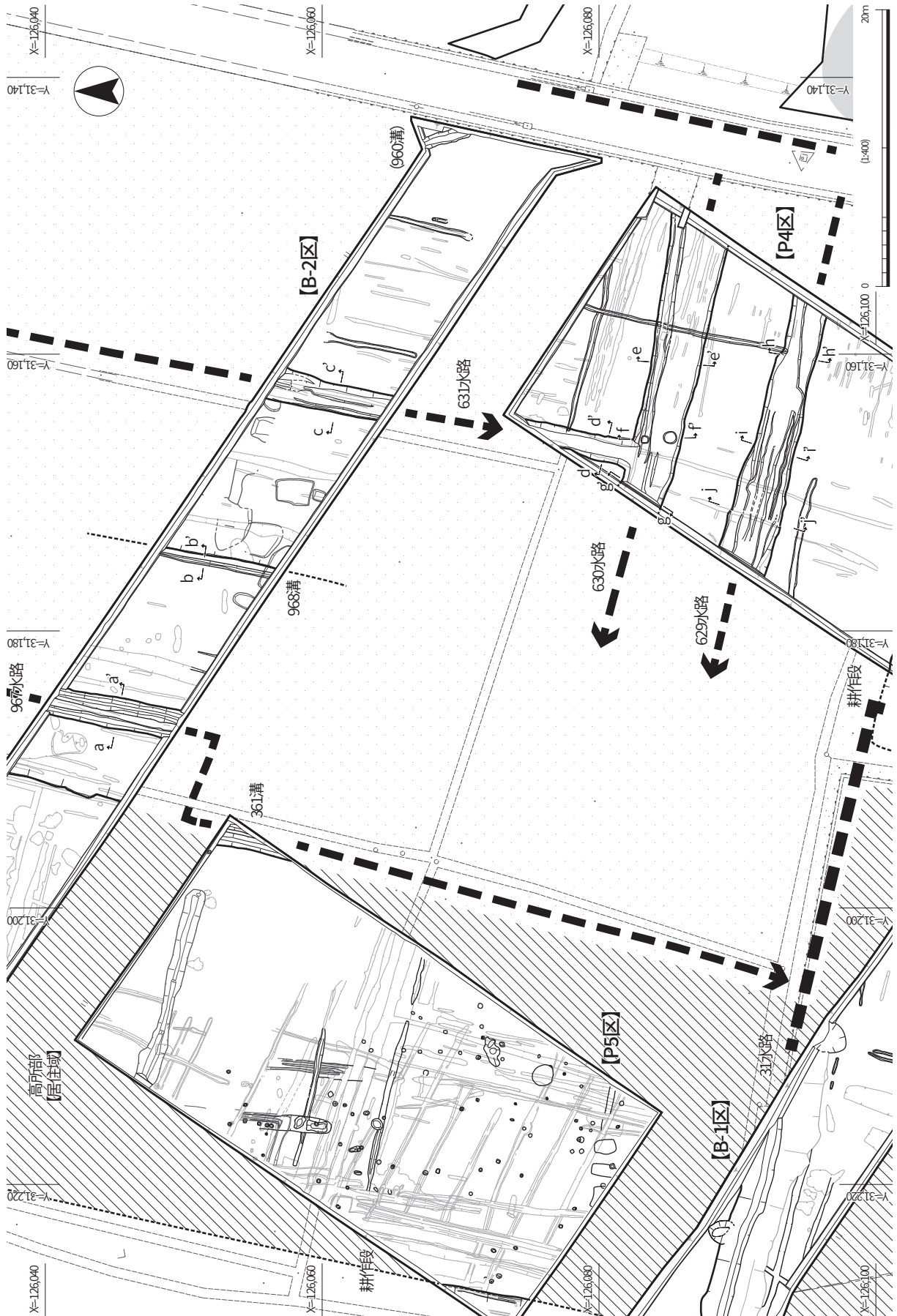


図 35. 西側エリア東半 耕作段・水路群 平面



第3節 中世の遺構・遺物

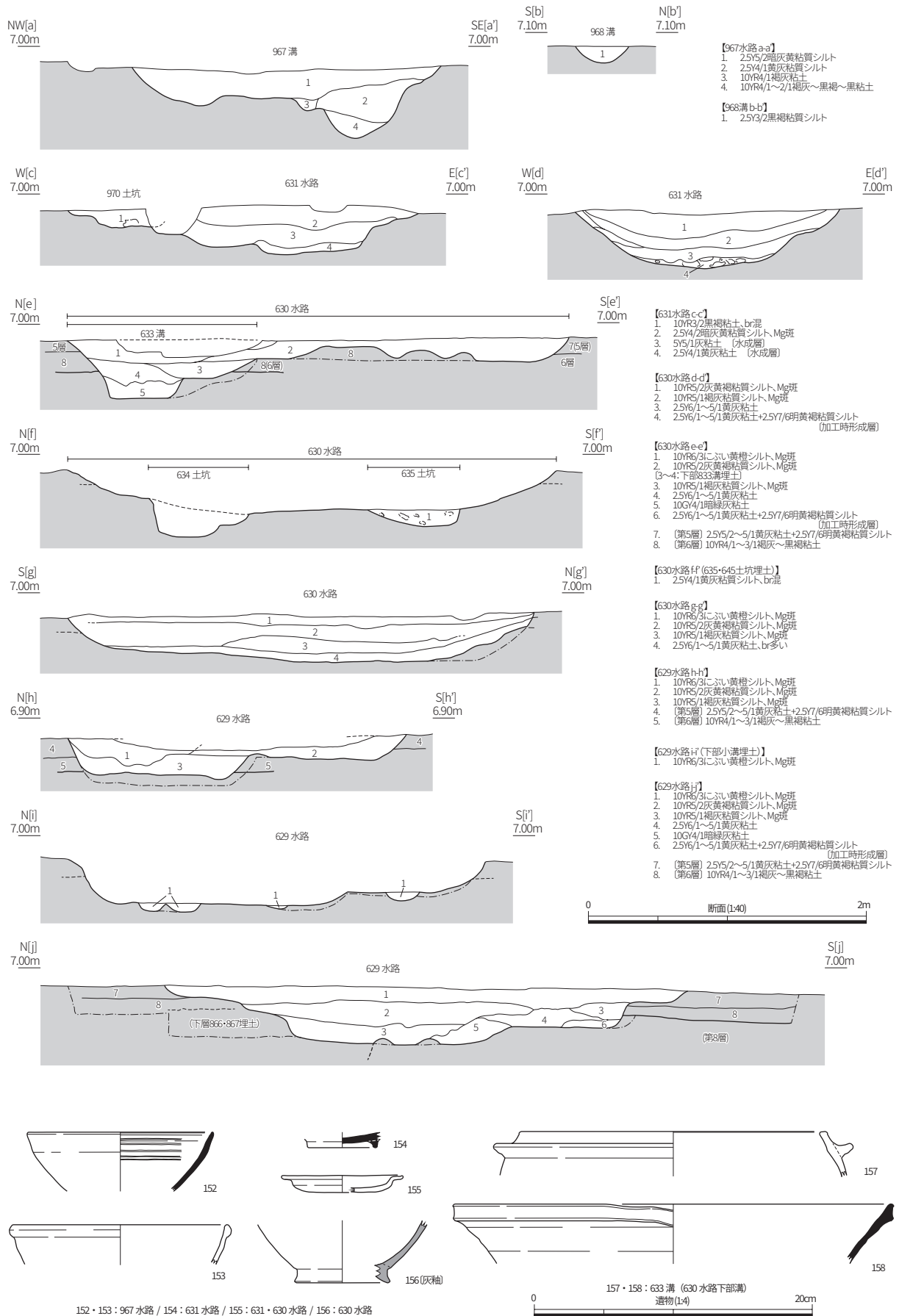


図 36. 西側エリア東半 耕作段・水路群 断面・出土遺物 (1)

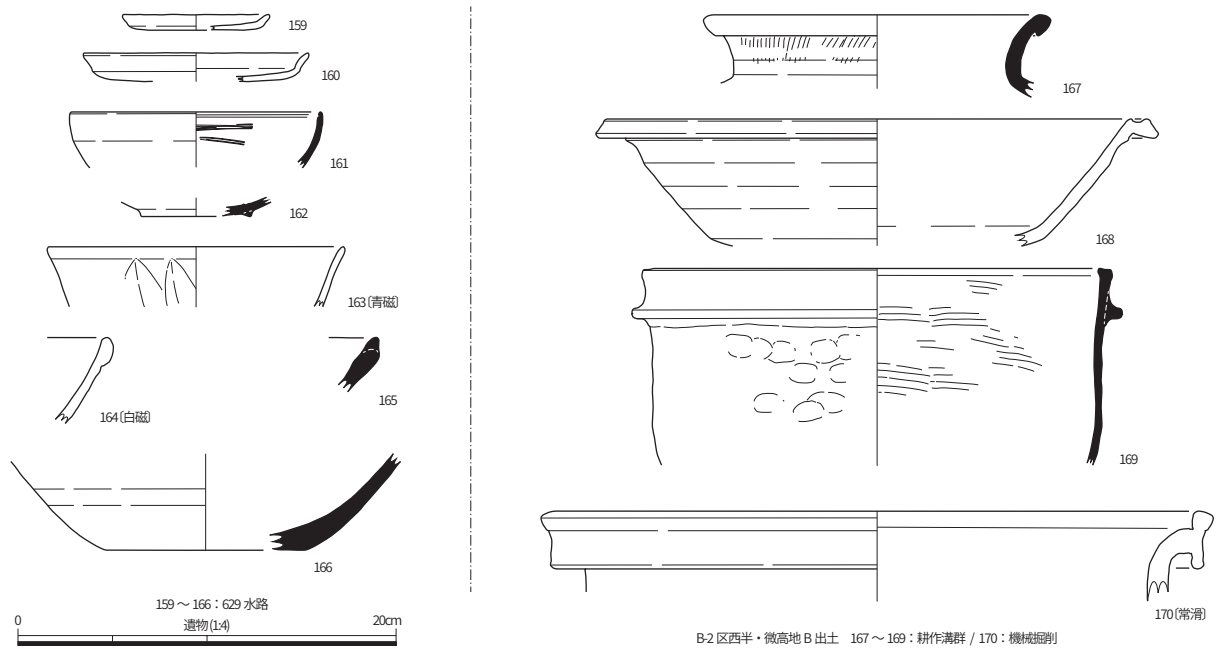


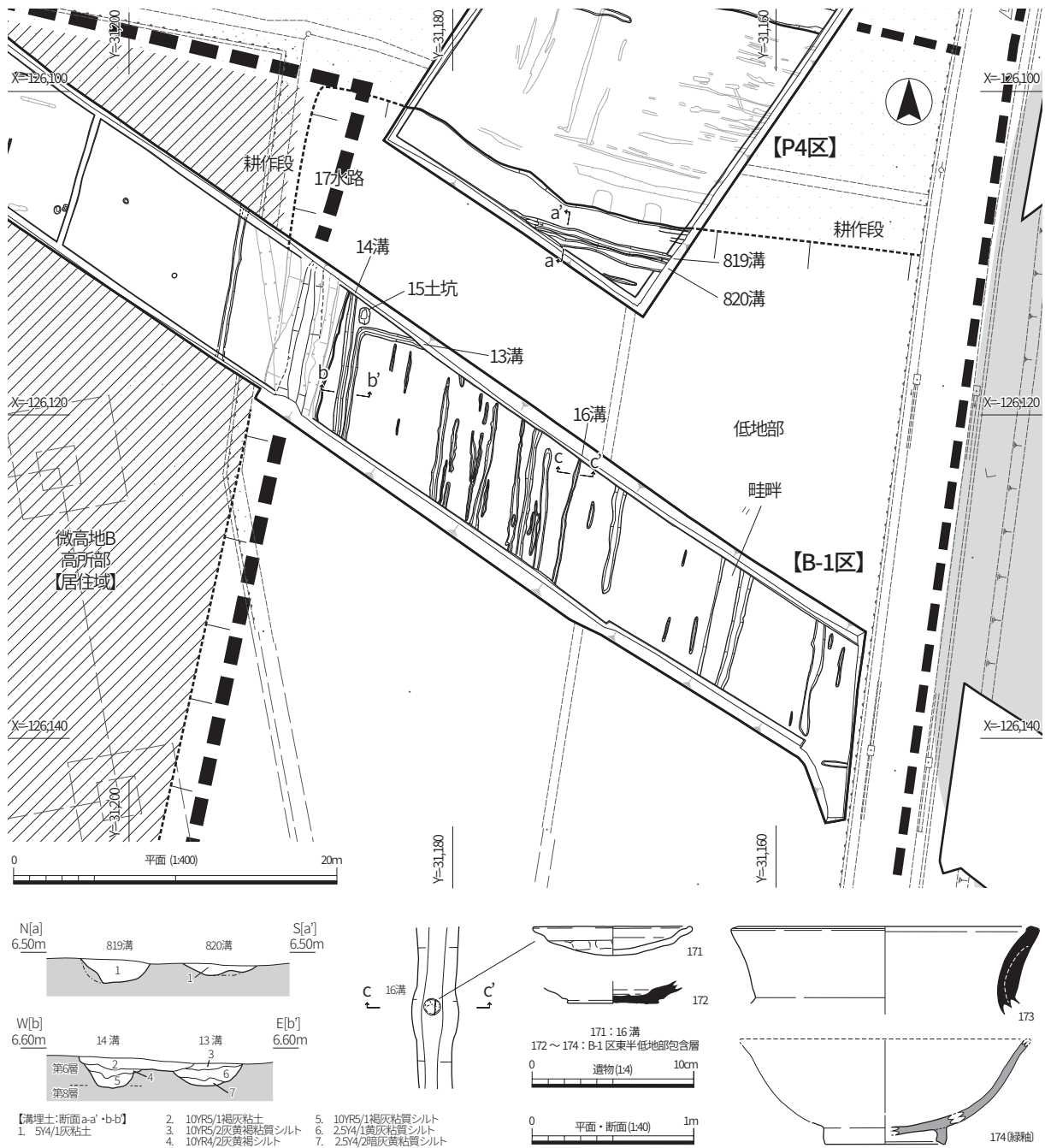
図 37. 西側エリア東半 耕作段・水路群 出土遺物（2）

ているのが特徴である。また東西方向の 630 水路と 629 水路は、南西に位置する 31 水路と概ね方向が一致しているため、31 水路に接続するとみられるが、31 水路の方が底面の標高が低いため、これらの水路の水は 31 水路に流れ込んでいたことがわかる。

水路の検出面からの深さは、地点ごとに差があるが、0.4 m 前後の地点が多い。埋土は、地点ごとに色調はまちまちであるが、泥質の粘土やシルトを主体としており、著しい流水痕跡は認められない。滞水状態で徐々に埋没したことを示しているため、水を流すような機能よりも周辺一帯の落水を受け止めて排水するための機能が重視されていた可能性が高い。

出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器、灰釉陶器、陶磁器類などが出土しているが、細片化したものが多い（152～170）。全体的にみれば 13 世紀代の遺物が多く、水路の機能時期の一端を表すものとみられる。水路は現行の耕地区画に沿ったものが多いことから、周辺一帯の区画の整理が 13 世紀頃まで遡ることは確実で、重要な調査成果といえるだろう。

**B-1 区東半耕作関連遺構**（図 38） P4 区の南端および B-1 区の 17 水路以東は、西側エリアの中で最も標高が低い地点で、ここでは現行区画に沿った耕作地の段造成がおこなわれていることが確認された。上面に中世の耕作土である第 4b 層が被覆しており、これを除去した面で現行区画に沿った方向で耕作溝や畦畔などが検出されたことから、造成時期が中世まで遡ることがわかる。また畦畔が検出されたことから、周辺一帯に水田が存在した可能性も推測される。包含層中および耕作溝の埋土からは、9～14 世紀頃までの遺物が出土しており、中央付近の 16 溝からは 11 世紀代の完形の土師器皿（171）が出土している。ほかでは、緑釉陶器碗の底部と口縁部の破片（174）などやや珍しい遺物もみられ、時期的に古いものが一定量含まれることから、この区画の開発時期が平安時代前期～中頃まで遡る可能性が推測できる。



### (3). 中央エリア

中央エリアでは、C-6区・C-5区・P3区付近が最も標高が高く、そこから東西および南の各方向にむかって地形が低くなる。微高地Cとしたこの高所部付近を中心に、柱穴や井戸などの居住関連遺構がまわって検出されており、区画溝とともに掘立柱建物1棟や井戸4基などが確認されている。建物や井戸、柱穴は、区画溝の内部の一面にあたるP3区の南半でまわって検出されていることが特徴で、この地点は今回の調査で最も中世の遺構・遺物の密度が高い。これ以外では、出土遺物は古墳時代のものに限られるものの、微高地Cの南端および東端に位置する掘立柱建物7・35が建物の構造や柱穴の規模から中世まで下る可能性がある。



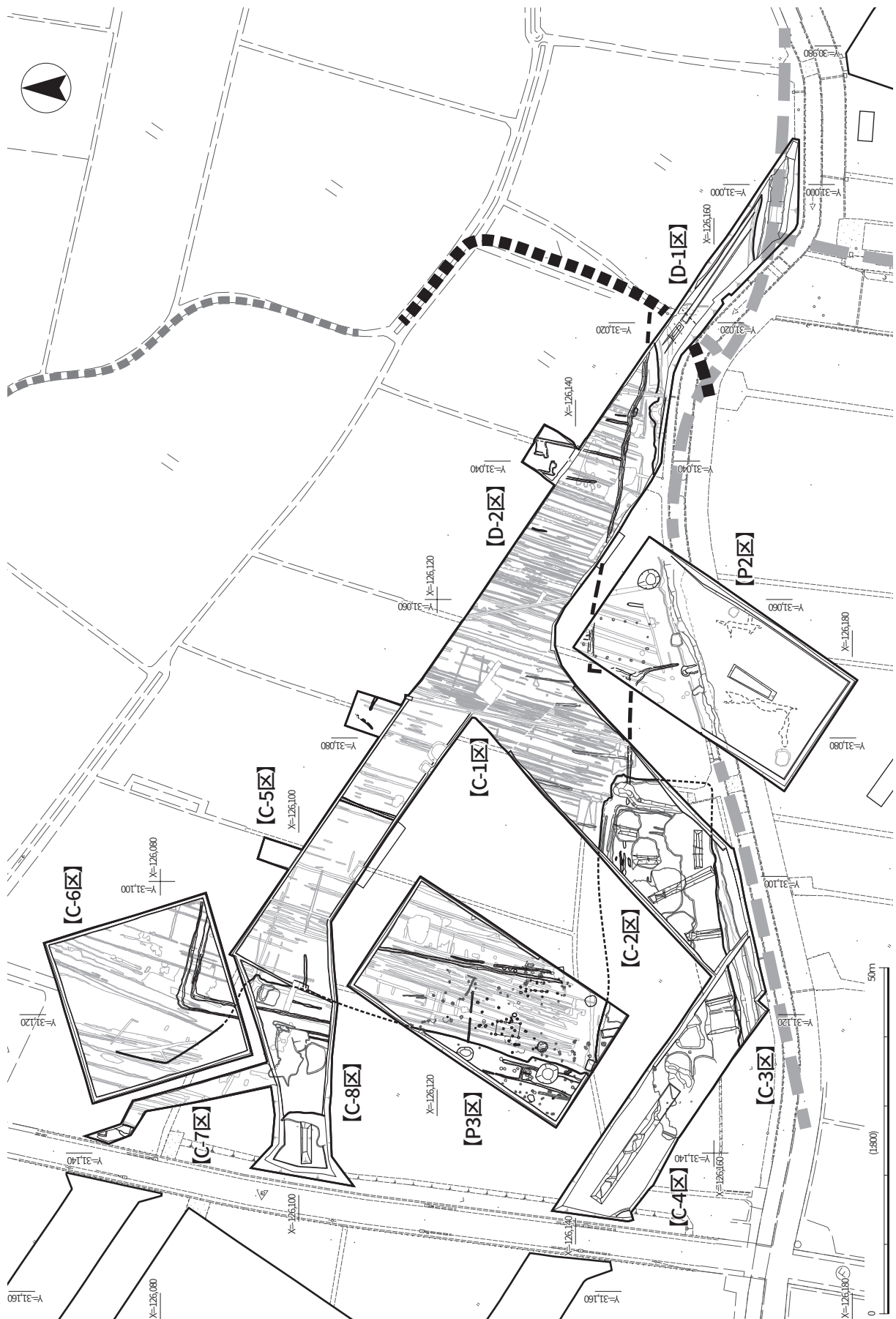


図 39. 中央エリア 中世遺構 全体平面図

高所部では、現行区画に沿った耕作溝群が多数検出されている。これらは中世から近世後半までの時期幅があるため、耕作地として連綿と土地利用がなされたことがわかる。微高地縁辺部の C-8 区南西・P3 区南西・C-2 区南半では、大型の掘り込み土坑が面的に検出され、そこからさらに地形が下がる中央エリアの東端と高槻用水以南は、基盤となる沖積層〔第8層〕が面的に掘り込まれていることが判明した。その詳細は後述するが、低地部の地下げと土取りに伴う基盤層の掘削は、出土遺物から居住域の形成時期とは若干のずれがあり、地下げおよび土取りに伴う掘削が後出する。このように中央エリアでは、地点ごとあるいは遺構の種類や性格などによって前後関係を判断することができたため、居住関連遺構等を〔a. 中世古段階〕として報告したのち、後出する低地部の掘り込み遺構を〔b. 中世中段階〕、復旧後の耕作関連遺構を〔c. 中世新段階〕として順次で報告することにしたい。

### 〔a. 中世古段階の遺構〕

**1296・1297・1554・1555 溝** (図 40・41・42) C-6 区・C-8 区・P3 区にかけて検出された 2 条の L 字状の区画溝で、北側の東西方向の検出長は、外側の 1296 溝部分で 16 m をはかる。南北方向は 58 m 分を検出したが、南側の延長部分にあたる C-3 区・C-4 区は、地下げと大型土坑群の掘削などによって削平を受けている。2 条の溝の間は、北側東西方向で 0.8 m の、西側南北方向で 2.0 m の幅がある。検出面からの深さは、外側の溝が最大で 0.28 m、内側の溝が最大 0.19 m をはかるため、外側の溝の方がやや深いことがわかる。埋土は、第 4b 層に類似する褐灰色系のシルト～粘土を主体とし、明確な流水痕跡は認められない。後述するように、1554 溝・1555 溝の東で掘立柱建物等が検出されているため、居住域の区画を意図した溝と認識することができる。

溝全体からの出土遺物はそれほど多くはないが、外周溝の北側の一角からは土器類や石材がまとまって出土している。土師器皿 (175・176) や瓦器椀 (177～180) とともに、東播系の鉢 (181)、土師器羽釜 (183・184)、瓦器三足釜 (182) が集積した状態で出土しており、器種ごとに分布にまとまりもみられる。器面の状況など残存状況があまり良好ではないが、土師器羽釜の外面には煤が明瞭に付着している。実際の使用を伴った土器がなんらかの意図をもって廃棄されたことがうかがえ、13 世紀代の良好な一括資料と認識できる。これ以外には良好な資料は少ないが、同様の時期の土師器・瓦器等が出土しているため (185～188)、区画溝は 13 世紀代に機能していたことがわかる。

**1553 溝** (図 40・41・42) P5 区南西端で検出された南北方向の溝で、区画溝 1554 溝と重複・後出する。検出長 4.7 m、幅 0.5 m、深さ 0.27 m をはかり、南側の C-4 区で検出された 263 溝は同一遺構である可能性が高い。埋土からは、完形の瓦器椀 (191) のほかに、土師器皿や瓦器椀の細片などが出土している。遺物はいずれも 13 世紀代に帰属するが、重複する 1554 溝より後出するものの、出土遺物の年代はそれほど変わらないため、時期を経ずに掘削された可能性が高い。

**972 溝** (図 40・41・42) 区画溝 1296・1297 溝の東側に対応する可能性のある溝の候補として C-5 区で検出された 972 溝を挙げることができる。ただし溝の中軸が東西方向にややずれており、あくまで候補に留まる。検出長 8.7 m、幅 0.7 m、深さ 0.10 m をはかる。埋土からは、中世の土師器皿の細片 (189) のほかに、古墳時代の土師器・須恵器の破片がごく少量出土している。

**1610・1612・1613 溝** (図 40・41・42) P5 区の中央東で検出された 1610 溝は、区画溝 1296・1297・1554・1555 溝から 13 m 東に位置しており、中軸もほぼ並行する。このため関連する同時期の遺構とみなすことができるが、南端・北端ともに途切れていることから、方形区画の内部の区画溝とみなすことができる。検出長 27 m、最大幅 0.7 m、深さ 0.13 m をはかる。底面は、地形の傾斜に沿っ

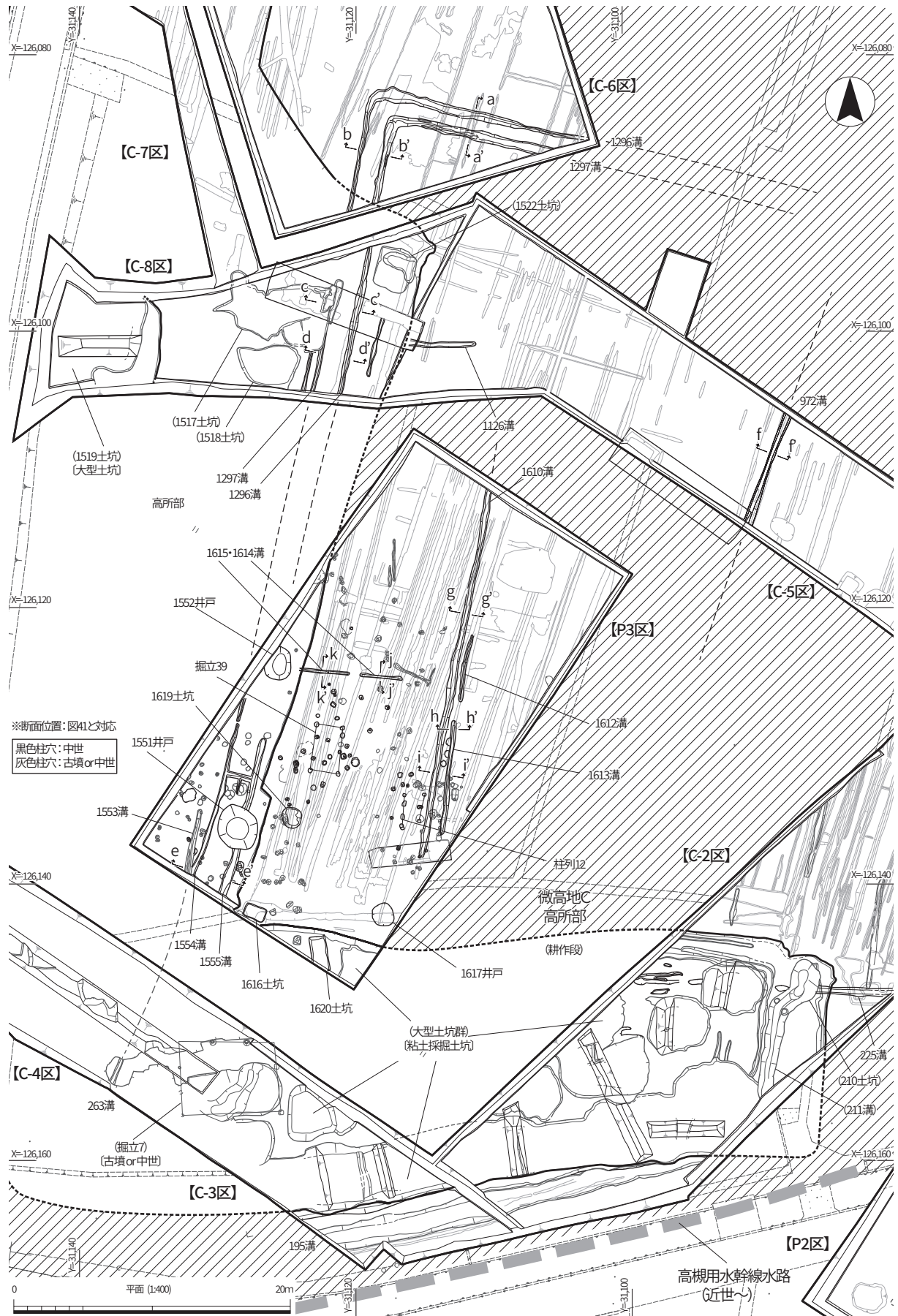


図40. 中央エリア西半 居住関連遺構ほか 平面



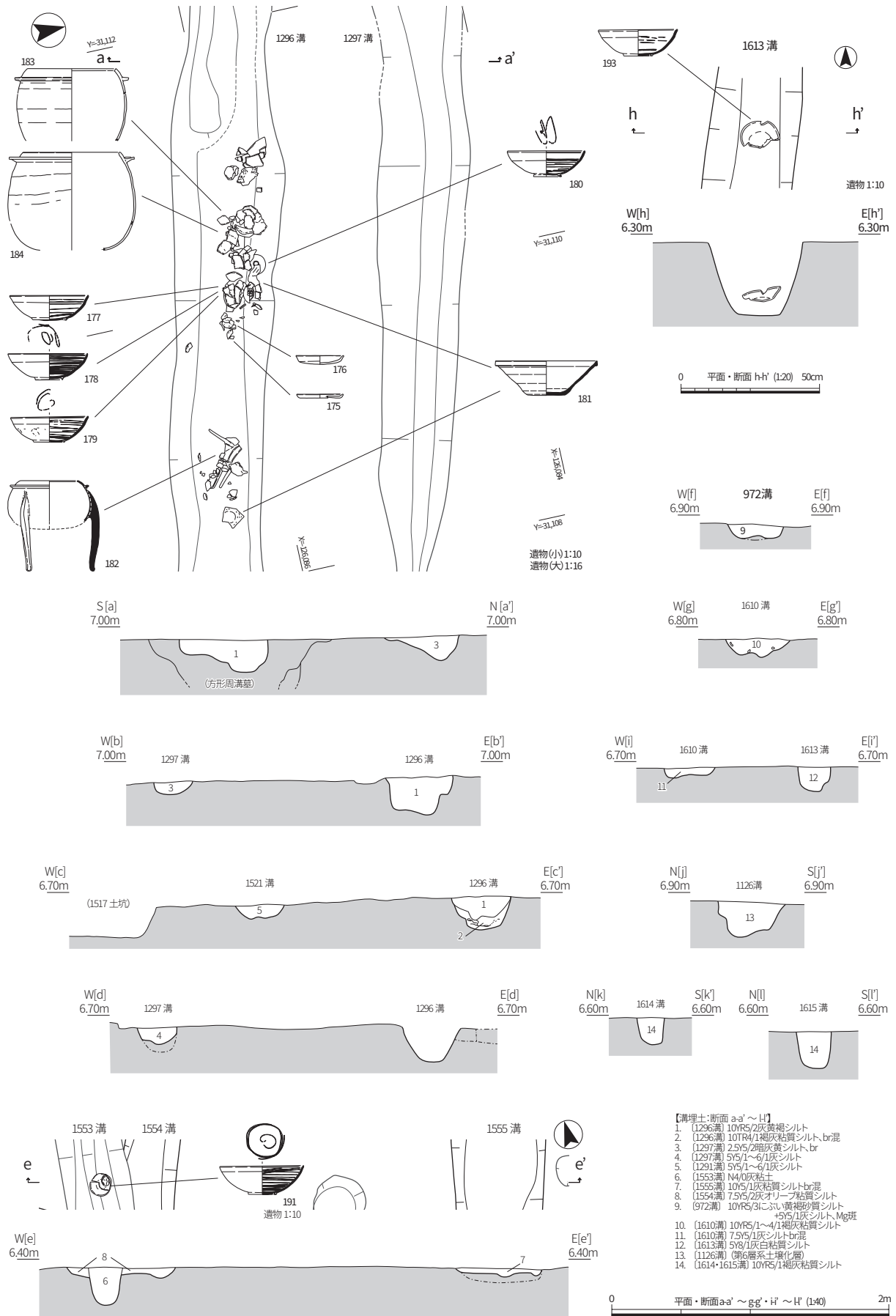


図 41. 中央エリア西半 区画溝 断面・遺物出土状況

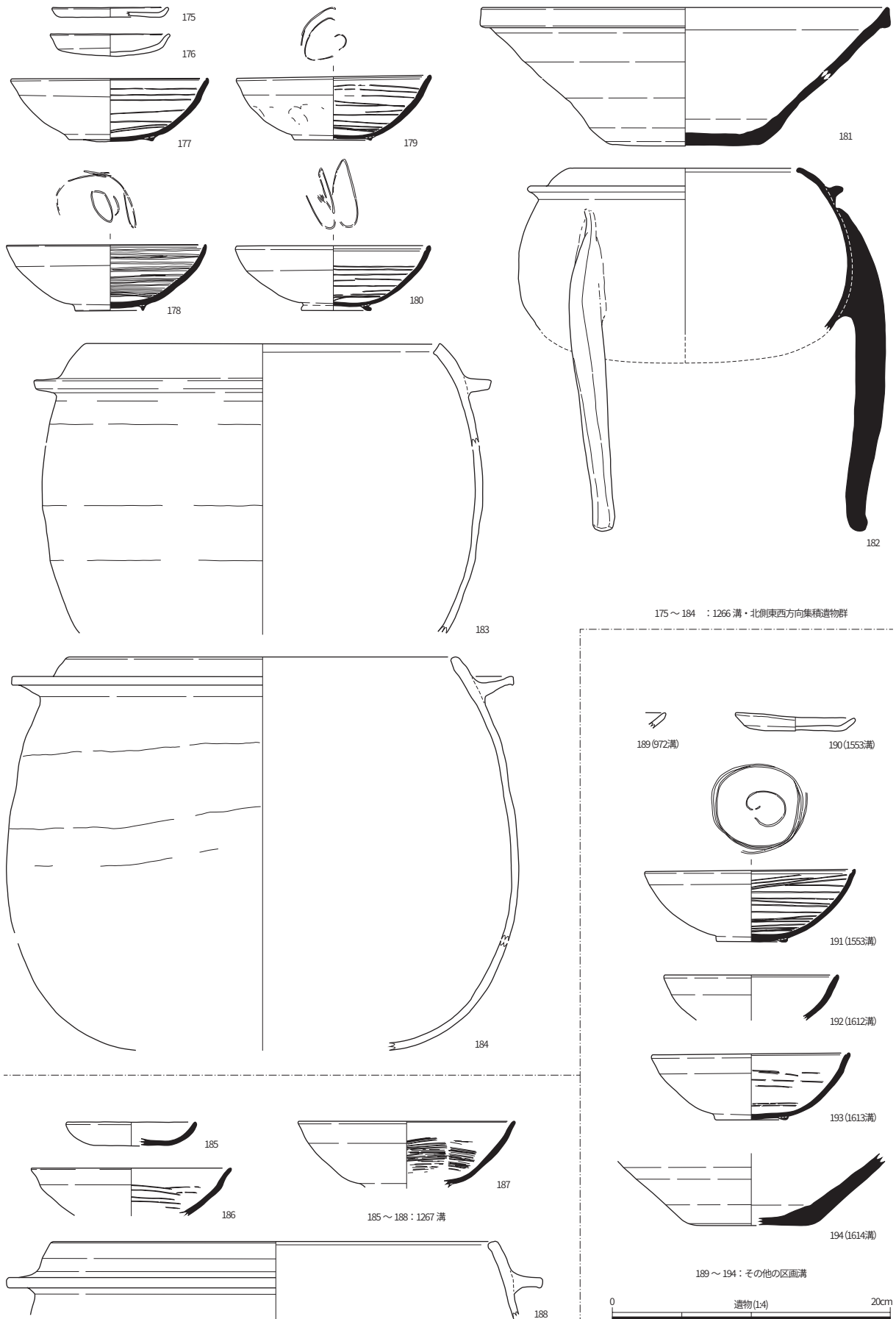


図 42. 中央エリア西半 区画溝 出土遺物

て僅かに北から南に傾斜している。

1612・1613 溝は、1610 溝と隣接・並行しており、縦列方向に並んでいる。ふたつの溝の間は意図的に掘り残されたものとみられ、この部分が区画内への進入口となっていた可能性がある。1612 溝の北端から 1613 溝の南端までの長さが 14.5 m、溝が途切れた区間の長さが 1.5 m、最大幅は 0.4 m をはかる。深さは 0.21 m で、1610 m 溝よりやや深い。

埋土からは、土師器・須恵器・瓦器の破片が出土しており、1612 溝と 1613 溝から出土した 13 世紀代の瓦器碗を図化した (192・193)。特に 1613 溝で出土した瓦器碗 (193) は、完形の状態で出土しており、意図的に置かれた可能性がある。

**1126 溝** (図 40・41) C-5 区の西端で検出された検出長 4.9 m の溝である。調査当初は、埋土の特徴から古墳時代の遺構と認識していたが、南側の P3 区で並行する方向の中世の区画溝 (1614・1615 溝) が検出されたため、中世まで下る時期の区画溝と認識した。幅は 0.4 m、深さ 0.25 m で、埋土からは遺物は出土していない。

**1614・1615 溝** (図 40・41) P3 区中央で検出された東西方向の溝で、ふたつの溝は縦列方向に並んでいる。1615 溝西端は、耕作段の地下げによって削平を受けており、1614 溝東端から 1615 溝西端までの検出長は 7.4 m、幅 0.25 m をはかる。深さは、東側の 1614 溝に比べて西側の 1615 溝がやや深く、深さはそれぞれ 0.20 m、0.26 m である。外周の区画溝 1296・1297・1554・155 溝とほぼ直交する方向の溝で、この溝の北側では中世段階の遺構が希薄であるのに対し、南側で掘立柱建物をはじめとして柱穴や井戸等がまとまって検出されている。このことから、方形区画内部の区画溝とみて間違いなく、途切れた部分については区画内部の進入口であった可能性が高い。

埋土からは、土師器・須恵器・瓦器の破片が出土しており、1614 溝から出土した東播系の鉢 (194) を図化した。出土遺物から、ほかの区画溝と同様に 13 世紀代の遺構と認識できる。

**掘立柱建物 39** (図 43) P3 区中央南寄りで検出された南北 3 間または 2 間×東西 1 間の掘立柱建物である。規模は、南北 3.3 m、東西 2.0 m、面積 6.60 m<sup>2</sup> をはかる。柱筋は、西側梁間の通りがやや悪く、柱間間隔は 0.9～2.1 m までばらつきがある。柱穴の大きさは 0.3 m 前後で、平面形は円形または隅丸方形を呈する。深さは 0.15～0.3 m 前後で、断面で柱痕が確認できるものが多い。埋土は、第 4 層に似た灰色系のシルトを主体とする。建物の長軸は、東に 7.0°傾いており、周辺区画溝の傾きと概ね一致することから、同時期に併存していたとみてよい。

出土遺物には、1747P と 1797P から出土した土師器がある。特に北東の 1797P では、柱抜取痕の埋土から土師器皿 (195・196) が 2 枚重なった状態で出土しており、出土状況から建物の廃絶時に意図的に埋納された可能性が高い。いずれも 13 世紀代に帰属し、区画溝から出土した遺物とも年代とも齟齬はない。なお周辺では、14 世紀前半頃まで下る遺物も柱穴から出土しており (197)、区画溝内の居住域は 13 世紀代～14 世紀前半頃まで存続していた可能性が高い。

**柱列 12** (図 43) 掘立柱建物の東約 6 m に位置する 4 基の柱からなる南北方向の柱列である。長さは 2.2 m で、柱筋の通りは概ね良い。柱間間隔は、中央がやや広く 1.0 m で、南北両側は 0.5～0.6 m である。柱穴の大きさは 0.25～0.4 m で、平面形は円形または不整円形である。深さは 0.25～0.35 m で、いずれも埋土で柱痕が明瞭に観察できる。埋土は、第 4 層に似た黄灰色の砂質シルトを主体とする。長軸が 5.0°東に傾いており、東 1.7 m に位置する区画溝 1610 溝とは、約 5°の軸のずれがみられる。ただし、東側に隣接する 1613 溝をはじめとして、ほかの区画溝や建物とも軸が概ね一致しているため、



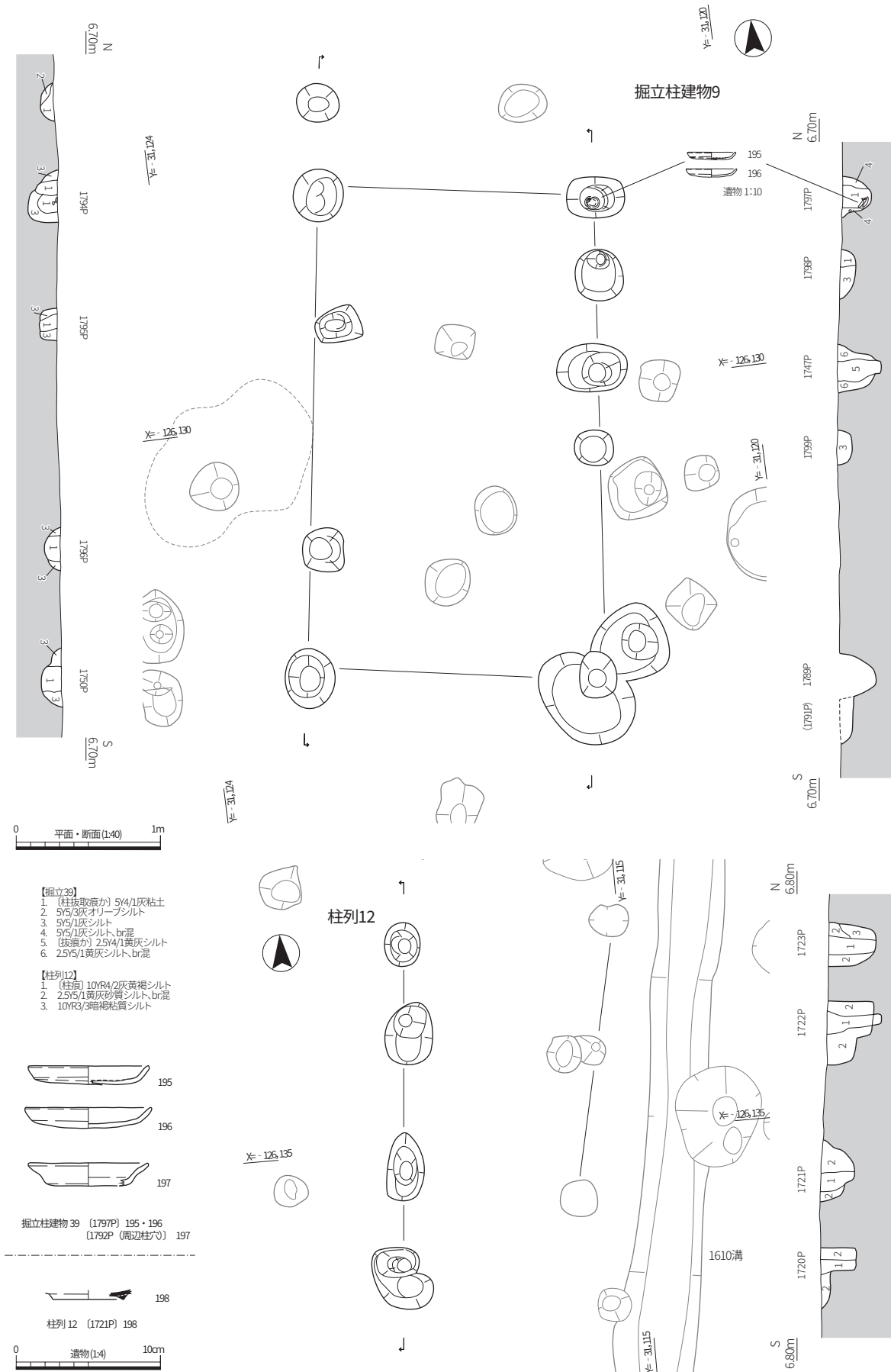


図 43. 掘立柱建物 39、柱列 12 平面・断面・出土遺物

関連性のある遺構と認識できる。

出土遺物には、1720・1721・1723P から土師器・須恵器・瓦器の細片が少量出土しており、大半は古墳時代の遺物である。1721P からは13世紀代の瓦器碗の底部の破片(198)が出土しているため、区画溝や掘立柱建物と時期的な齟齬はない。

**1551 井戸** (図44・45) P5区の南西端に位置する。検出面の形状は、径3.0mの円形を呈する。漏斗形の断面形状を呈し、底部径は0.7mである。検出面から底部までの深さは2.5mであるが、上面が後世の耕作段の造成で大きく削平を受けており、本来の深さは現状よりも0.3～0.5mほど深かった可能性が高い。埋土は、上層〔埋土1・2〕・中層〔埋土3・4〕・下層〔埋土5～9〕に大別でき、上層は灰色粘土を主体とする。中層は、上部〔埋土3〕が極細砂やシルトを主体とする流入土で、下部〔埋土4〕は暗色の粘土を主体とする滞水層と考えられる。下層については、下部を重機で掘削したため詳細な検討ができなかったが、滞水層と流入土が互層状に堆積しており、徐々に埋没した様子がうかがえる。深さや形状から素掘の井戸と認識できるが、調査時には底面からの著しい湧水はなく、さらに区画溝と接続している点を重視すれば、水溜としての機能が重要視されていた可能性も考えられる。なお、井戸枠は存在しなかったが、これについては遺構周囲が比較的堅固な粘土～シルトを主体としているため、崩落の恐れが少なかったことが要因と考えられる。今回の調査では、井戸枠を伴う中世の井戸は1基もなく、基本的には井戸枠を必要としなかったものと推測できる。

出土遺物は、大半が上層と中層からの出土で、下層からはほぼ完形の瓦器碗が1点出土しているが(206)、出土量は極めて少ない。中層からは、底面付近で完形の土師皿や瓦器(199～206)がまとまって出土しているが、中層の底面に有機質層〔埋土5〕が薄く堆積しており、これらの遺物はなんらかの有機物を伴った形で井戸の機能廃絶時に人為的に投棄されたものである可能性が高い。それ以外は、大半が上層からの出土であり、コンテナ2・3箱程度のまとまった量の遺物の出土がある。上層の遺物については、大半が破片であり、井戸の廃絶以降、残存する落込みに断続的に遺物を廃棄していたことがうかがえる。上層から出土した遺物には、普遍的にみられる土師器皿(207～213)・羽釜(228・229)、瓦器碗(218～221)・小皿(214～217)・三足釜(226)、須恵器の甕や東播系の鉢(231・230)のほか、瓦器の把手付碗(222)・鉢(223・224)・鍋(225)などの類例が少ない器種が一定量含まれる。これ以外では、底部に「尚」の墨書がみられる東海系の山茶碗(232)がある<sup>6)</sup>。粗肌手の胎土から南部系と推測されるが、扁平でべったりとした特徴的な高台形状などから、遠江など東海東部などでの生産地が推測される。なお山茶碗については、淀川流域の遺跡での出土事例が一定数知られており、淀川を介した中世の流通を考える上で重要な遺物とされる<sup>7)</sup>。出土遺物の時期については、いずれも13世紀代に位置づけることができ、最下部と上層からの出土遺物に時期的な大きな隔たりはないため、井戸の使用から廃絶までの時間幅は、土器の一型式程度の時間幅におさまるものとみられる。これに加え、掘立柱建物や区画溝の時期とも隔たりはなく、居住域に伴う取水遺構と認識するのが妥当といえる。

**1552 井戸** (図46) 1551井戸の北12mに位置する。検出面の形状は、南北にやや長い楕円形で、長径2.4m、短径1.9mをはかる。漏斗形の断面形状を呈し、底部径は0.8mである。検出面から底部までの深さは1.8mで、1551井戸と同様に上面が後世の耕作段の造成で大きく削平を受けているため、本来はより深かったと推測される。埋土は、上半は黒色の粘土～シルトを主体としており、肩部からの流入の痕跡がみられるが、滞水状態で徐々に埋没した様子がうかがえる。下半については、オリーブ灰

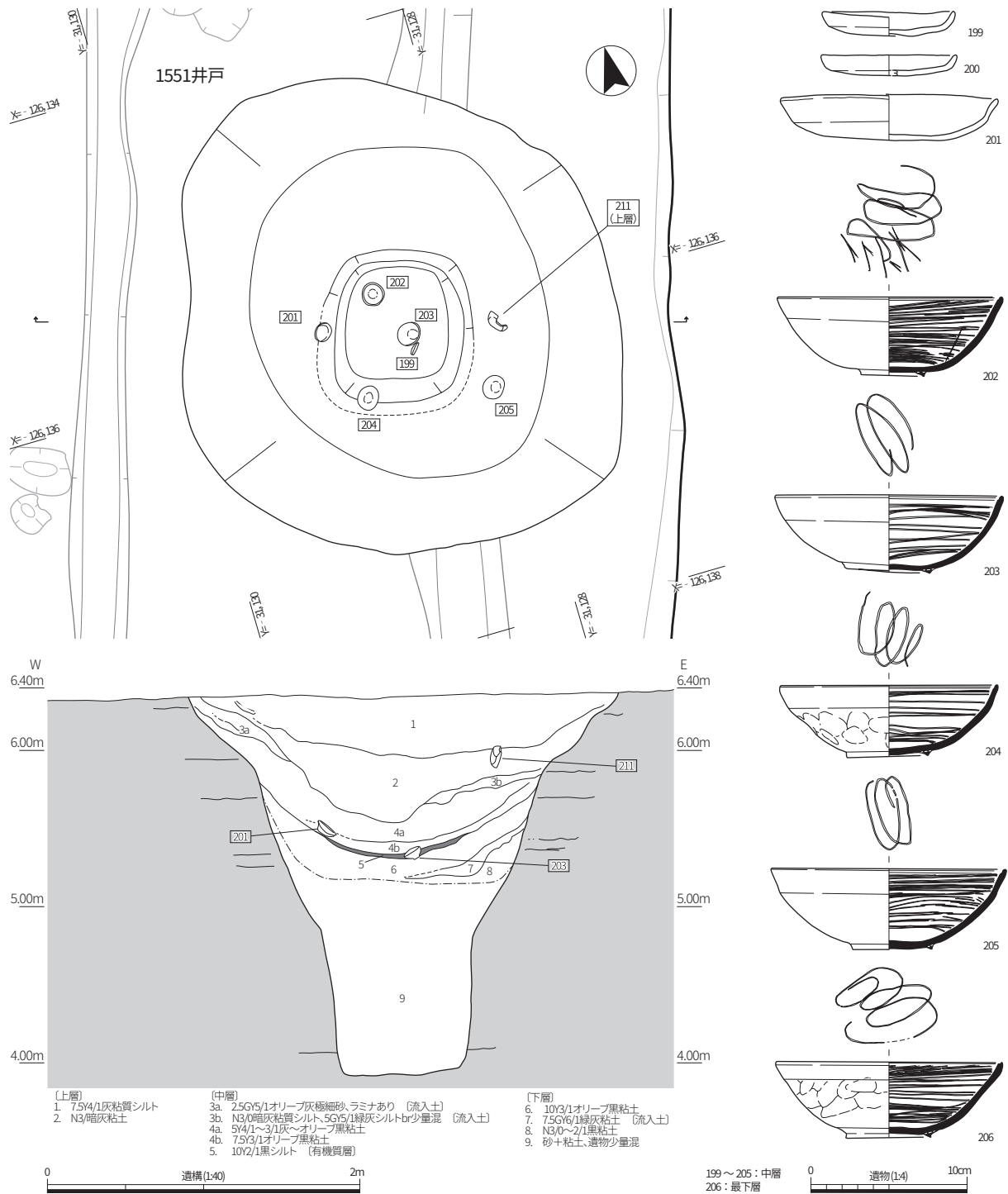
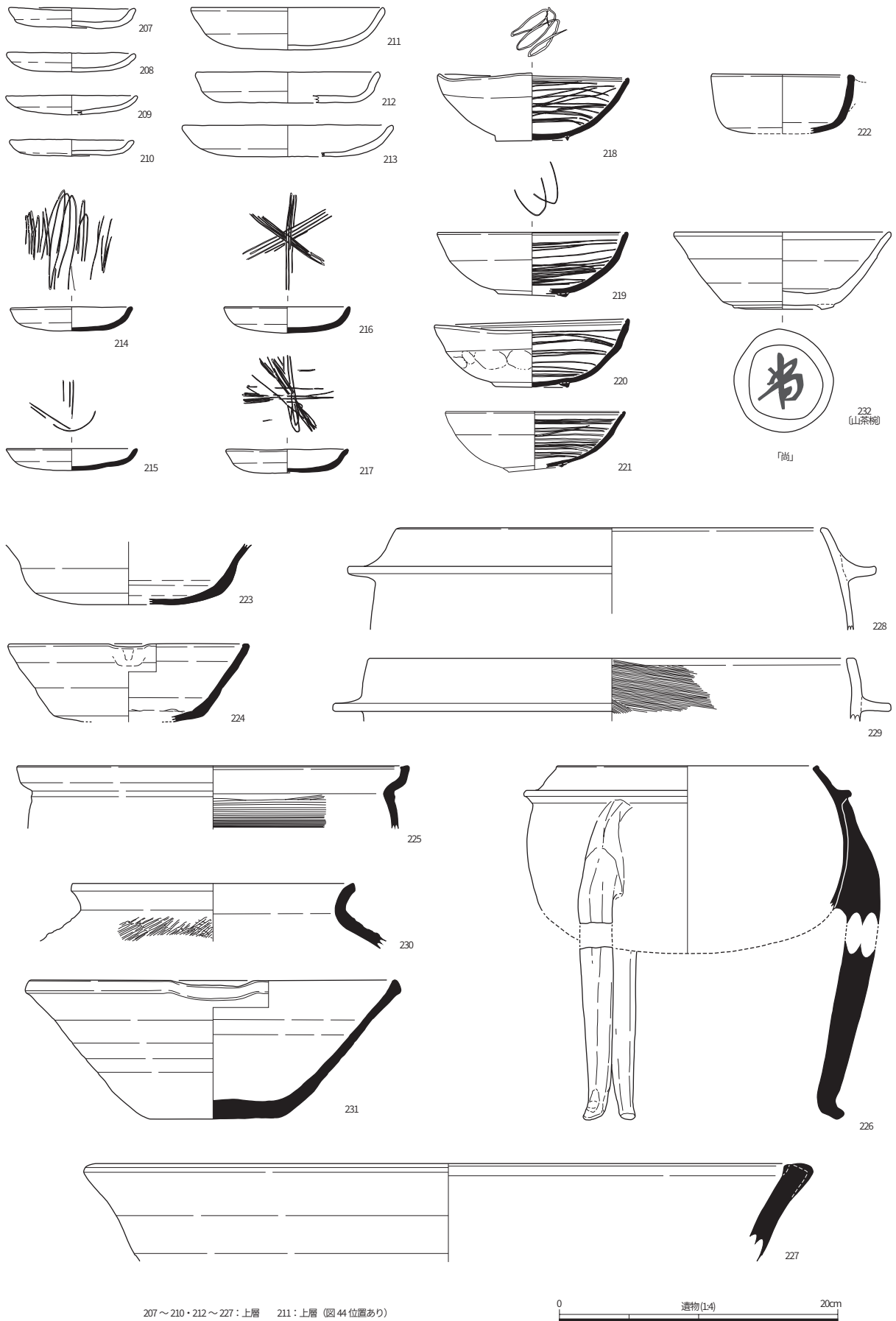


図 44. 1551 井戸 平面・断面・出土遺物 (1)

極細砂を主体としており、底面付近からの著しい湧水はなかった。1551 井戸と同様に、区画溝 1664 溝の延長線上に位置するほか、それと直交する 1615 溝の延長線上にもあたっている。このような位置関係や遺構の形状などもふまえると、1551 井戸と同様の機能・性格を備えていた蓋然性が高く、井戸または水溜であったと推測できる。

埋土からの出土遺物は少なく、これについては 1551 井戸とは大きく様相が異なる。土師器・須恵器・瓦器の小片がほとんどで、土師器皿 (233) と瓦器椀 (234) を図化した。これらの遺物は、やや時期が下る 13 世紀後半～14 世紀前半頃の所産であり、遺構の時期は 1551 井戸より後出する。





207～210・212～227：上層 211：上層（図44位置あり）

図45. 1551井戸 出土遺物（2）

第4章 遺構・遺物

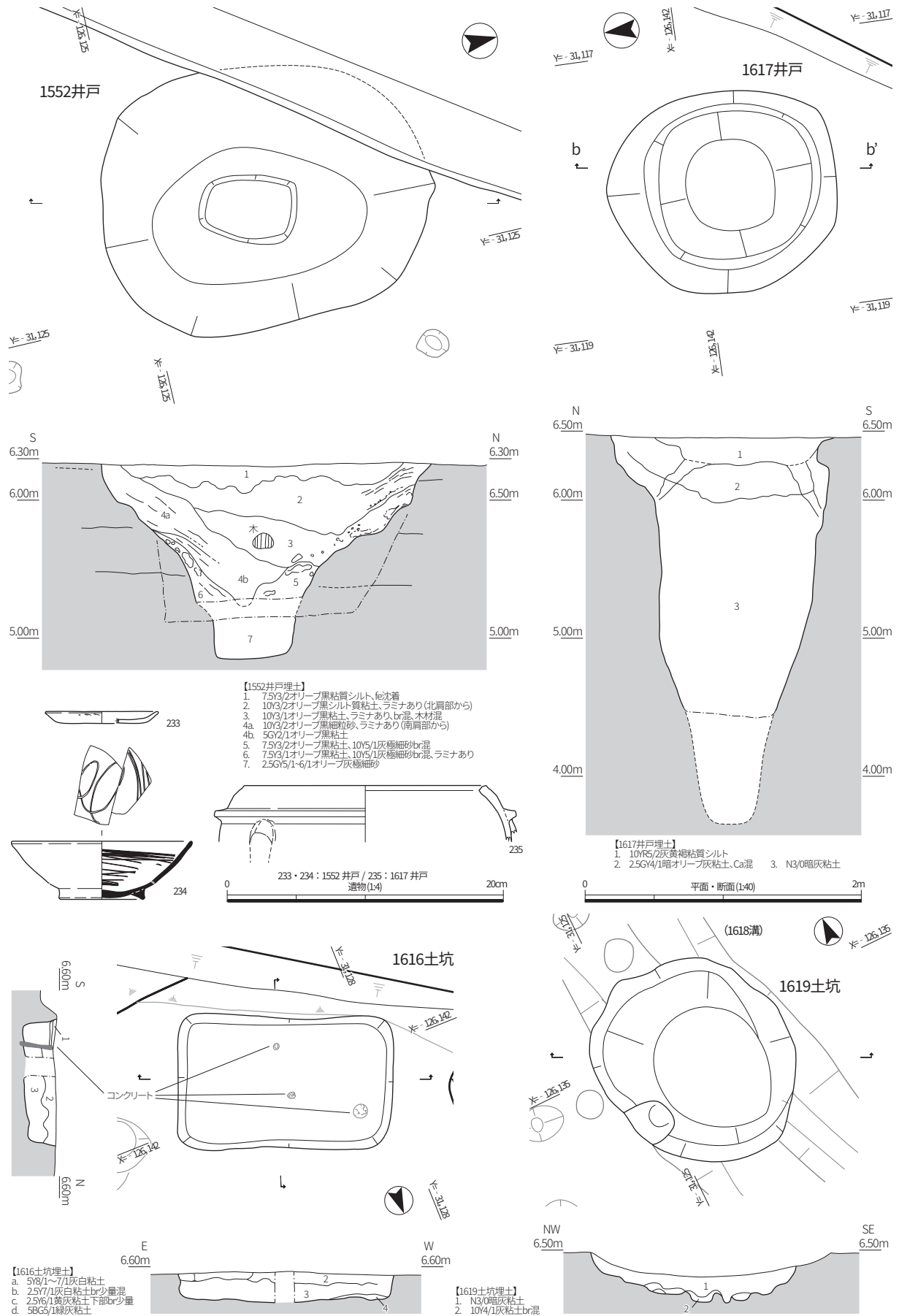


図46. 1552・1617井戸、1616・1619土坑 平面・断面・出土遺物

**1617 井戸** (図 46) 1551 井戸の南東 13 m に位置する。検出面の形状は円形に近く、上面から底面にむかって徐々にすぼまる断面形状を呈する。平面の規模は、検出面で径 1.6 m、底面で約 0.4 m、深さは 2.9 m をはかる。埋土は、上層に灰黄粘質シルト〔埋土 1〕が堆積し、下部には暗灰粘土〔埋土 3〕が厚く堆積している。このことから滞水状態で徐々に埋没した様子がかがえ、遺構の形状から素掘の井戸と認識できる。

埋土から出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・灰釉陶器があり、そのほとんどが細片である。また埋土の上半からの出土が大半で、下半からは瓦器の細片が僅かに出土したのみである。土師器の三足釜 (235) を図化したほか、炭素未吸着の瓦器の細片などがあり、いずれも 13 世紀代に帰属する。土器以外では、埋土下半 T.P.+5.20 m 以下からは動物骨が一定量出土しており注目される。同定の結果、ウマの後肢骨などが中心で、人為的に解体された上で埋められた可能性が高い【第 5 章第 6 節】。古代・中世の遺跡で牛馬骨が井戸や土坑、溝などからまとまって出土する同様の事例は多くあり、農耕儀礼との関わりが指摘されることも多くみられるが、この 1617 井戸では頭蓋骨の出土がないため、安易に「殺牛馬祭祀」に伴うものとするには慎重を要する<sup>8)</sup>。その一方で、鎌倉時代以降、西日本では牛馬耕が増えることは一般的にも周知の事実であり、今回の牛馬骨の出土事例からも周辺一帯の耕作に牛馬が使役されたとみて間違いなく、本遺跡周辺での耕地開発の展開を考える上でも興味深い事例といえる。

**1616 土坑** (図 46) 1551 井戸の南に位置する東西 1.6 m、南北 1.0 m の長方形の土坑である。埋土は、灰白～黄灰粘土を主体としており、淘汰が良く、人為的に埋められた可能性は低い。周辺の中世の遺構と比較するとやや異質であるが、ほかの中世の遺構と同様に第 4 層除去面で検出されたことから中世の遺構と認識したが、性格は不明である。出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器があり、時期については 13 世紀以降と認識できる。中世の遺物は、いずれも細片のため図化できなかったが、肩部からは古墳時代の初期須恵器の杯蓋 (図 236: 1642、P317) が出土している。

**1619 土坑** (図 46) 1551 井戸の東 4 m に位置する径 1.5 m の円形の土坑である。調査時には、切り合い関係を見誤って重複する古代の 1618 溝の埋土を先に掘削したが、ほかの遺構の埋土との類似から中世に下るものと推測できる。また居住域の一角に位置するが、性格は明確でない。埋土からは、土師器・須恵器が出土しているが、いずれも細片で、古墳時代のものに限定される。そのため詳細な時期については不明である。

**640・1917 溝、225・1917 溝ほか** (図 47・48) 中央エリアの東部では、P2 区から D-2 区にかけて検出長 44 m におよぶ東西方向の 640 溝が検出されている。東側は、後述する 638 水路に接続するとみられ、西側では延長線上に位置する C-2 区で溝の続きが検出されていないため、P2 区北西付近で直角に曲がって 1917 溝に繋がるとみて大過はないだろう。

さらに 1917 溝は、南側で 1751 溝に接続している。1751 溝は、この接続部付近で直角に曲がっており、南側は地形の傾斜に沿ってのび、南端部は不明瞭になっている。西側の延長線上に位置する 225 溝は、D-2 区の調査当時には古墳時代の遺構の可能性を考えていたが、位置関係からみて 1751 溝に接続することは確実である。西端については、後世の耕作段によって削平を受けており不明瞭であるが、削平された面で延長線上に浅い溝が検出されており、C-2 区の範囲まではのびると推測される。

埋土は、暗色の泥質土が主体で、恒常的な強い流水痕跡はみられない。底部の高低差は、それほど明瞭でないが、西側・南側、東側に比べてやや高い。このことから東の 638 水路にむかって排水していたことは確実で、埋土の状況を勘案すると落水の排水目的の水路とみなすのが妥当といえる。





図47. 中央エリア東半 耕作関連遺構ほか 平面

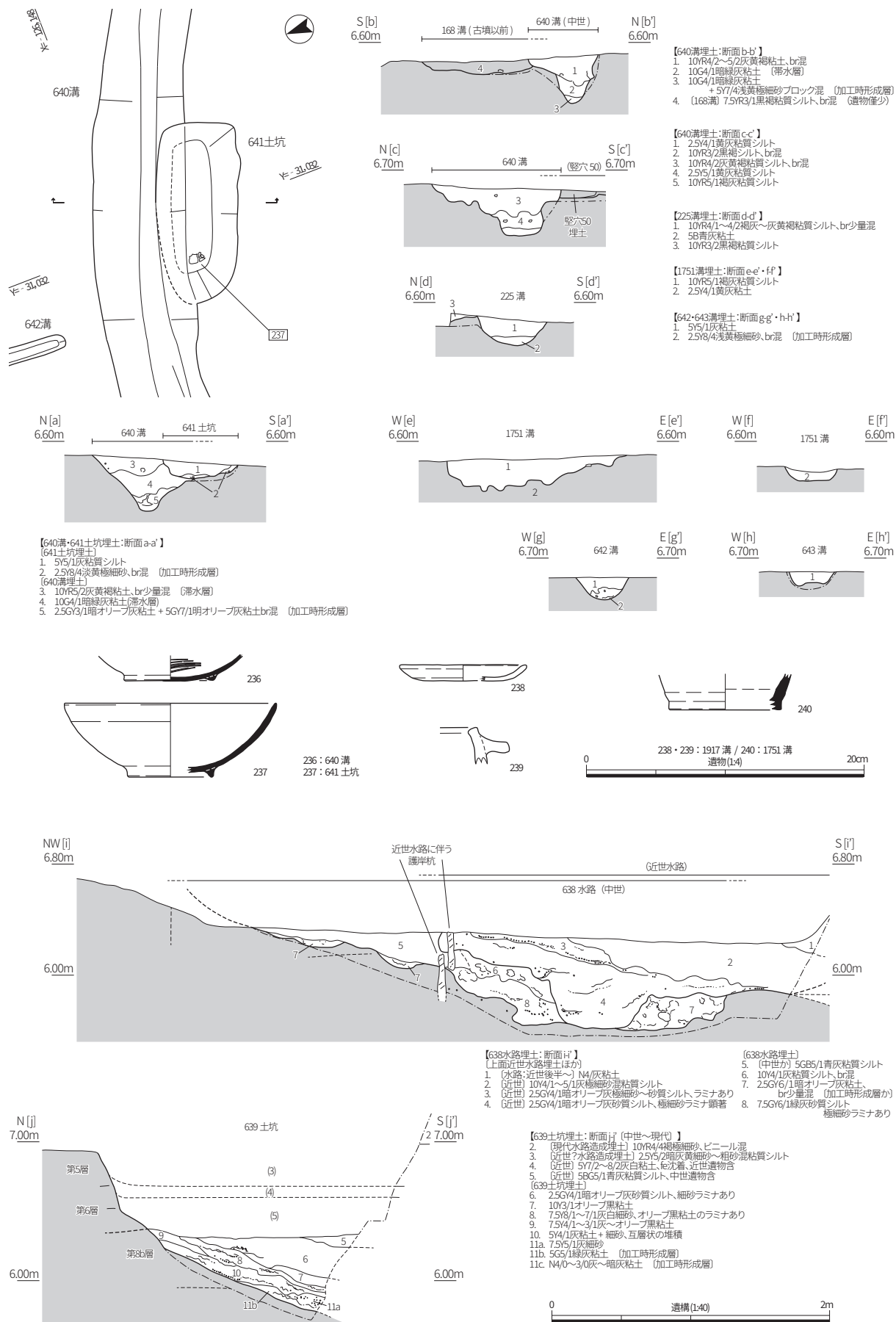


図 48. 中央エリア東半 耕作関連遺構 平面・断面・出土遺物

この水路の北側では、細筋の溝が無数に検出されており、それらは中世後半～近世・現代まで綿々と続く耕作溝群とみてよい。その多くは、現行の耕地区画と並行しているが、やや軸が異なり先の排水路に直交する方向の溝がいくつか検出されており、これらは基本的に排水路に接続する。642・643 溝をはじめとするこれらの溝が、中世に遡る耕作溝である蓋然性が高い。

埋土から出土した遺物量は少なく、いずれも細片であるため、遺構の帰属時期を示す遺物に恵まれていない。それでも図化した遺物には、土師器皿（238）、瓦器椀（236）、土師器羽釜（239）、須恵器壺底部（240）があり、このうち須恵器壺が10世紀代でやや古く、溝の掘削された上限を示す可能性がある。このほかには、土師器皿が12世紀代の遺物であり、遺構の機能時期の一端を示す可能性が高い。また640 溝と重複する641 土坑は、切り合い関係から640 溝より後出するが、13世紀代の瓦器椀（237）が出土しており、排水路の下限を示すものとみられる。いずれも中世の遺構の中ではやや古い時期の遺構と認識でき、周辺の耕地開発の展開を考える上でも重要な遺構といえる。

**638 水路・639 土坑**（図47・48） D-2 区の東端で検出された溝である。D-2 区の東半は、西から東に向かって緩やかに地形が下がり、D-1 区との境界付近で南東方向に急激に落ち込む。落込み部分の埋土上半では、近世の水路の痕跡が重層的に検出された。下部については、部分的なトレンチ調査で底を確認したが、最下部の〔埋土5～8〕（図48：i-i）から出土した遺物は瓦器や土師器皿の口縁部の細片などを含む中世以前の遺物に限られるため、中世まで遡ることは確実である。

上述したように、近世以降の水路が同地点に重複しているため、中世段階の水路の肩部は明確でなく、上端幅等は不明であるが、底面の幅は約1.5 mである。底面の標高はT.P.+5.60 mで、肩部からの比高は1.1 mである。埋土は、最下部の〔埋土8〕にラミナが顕著にみられることから、恒常的な流水があったことがうかがえる。先に報告した640 溝をはじめとする排水路と接続しており、その規模と位置関係から中世段階の基幹水路であった蓋然性が高い。周辺の全体的な地形からみて北から南に流下する水路であることは確実であるが、調査地の北側に蛇行する不自然な地割が存在しており、この部分に水路が存在する可能性が高い。出土遺物は、上層の近世段階の埋土に近世以降の陶磁器や木製品、金属製品が含まれるのに対し、埋土下部は上述したように瓦器・土師器に限定される。遺物は、いずれも細片のため図示できなかったが、遅くとも13世紀には機能していた水路と判断できる。

なお水路の肩部には、不整円形の窪み（639 土坑）があり、同様の遺構は西側エリアの31 水路の肩部などでもいくつか検出されている。出土遺物から時期を明確にすることができなかったが、堆積状況から中世まで遡る可能性が推測され、水路の機能と関わる遺構と認識できる。

**1753 井戸**（図49） P2 区北東で検出された素掘の井戸である。検出面の形状は、径2.7 mの円形で、検出面からの深さは1.9 mをはかる。断面の形状は、漏斗状を呈し、北側には2段のステップがみられる。埋土は、灰色の粘土やシルトを主体とする上層〔埋土1・2〕、黒色粘土を主体とする中層〔埋土3〕、オリーブ灰色の極細砂～粘質シルトを主体とする下層〔埋土4・5〕に大別できる。調査時には、底面付近からの湧水はなかった。なお、下部の断割り調査をおこなった際にも壁面の崩落がなく、ほかの井戸と同世に周辺の堆積土が比較的堅牢なため井戸枠を必要としなかった可能性が高い。

遺物は、上層からの出土が大半で、中層から下層からの出土は土師器の細片2点に限られる。瓦器・土師器・須恵器などが出土しており、普遍的に出土する土師器皿・瓦器椀・瓦器小皿に加え、須恵器杯（248）や瓦器の鍋（249）などが含まれる。鍋（249）は、〔埋土2〕の底面付近から出土で、復元率が高い。ほかでは、瓦器椀（242）が内面の炭素が未吸着の焼成不良品である。時期については、出土遺



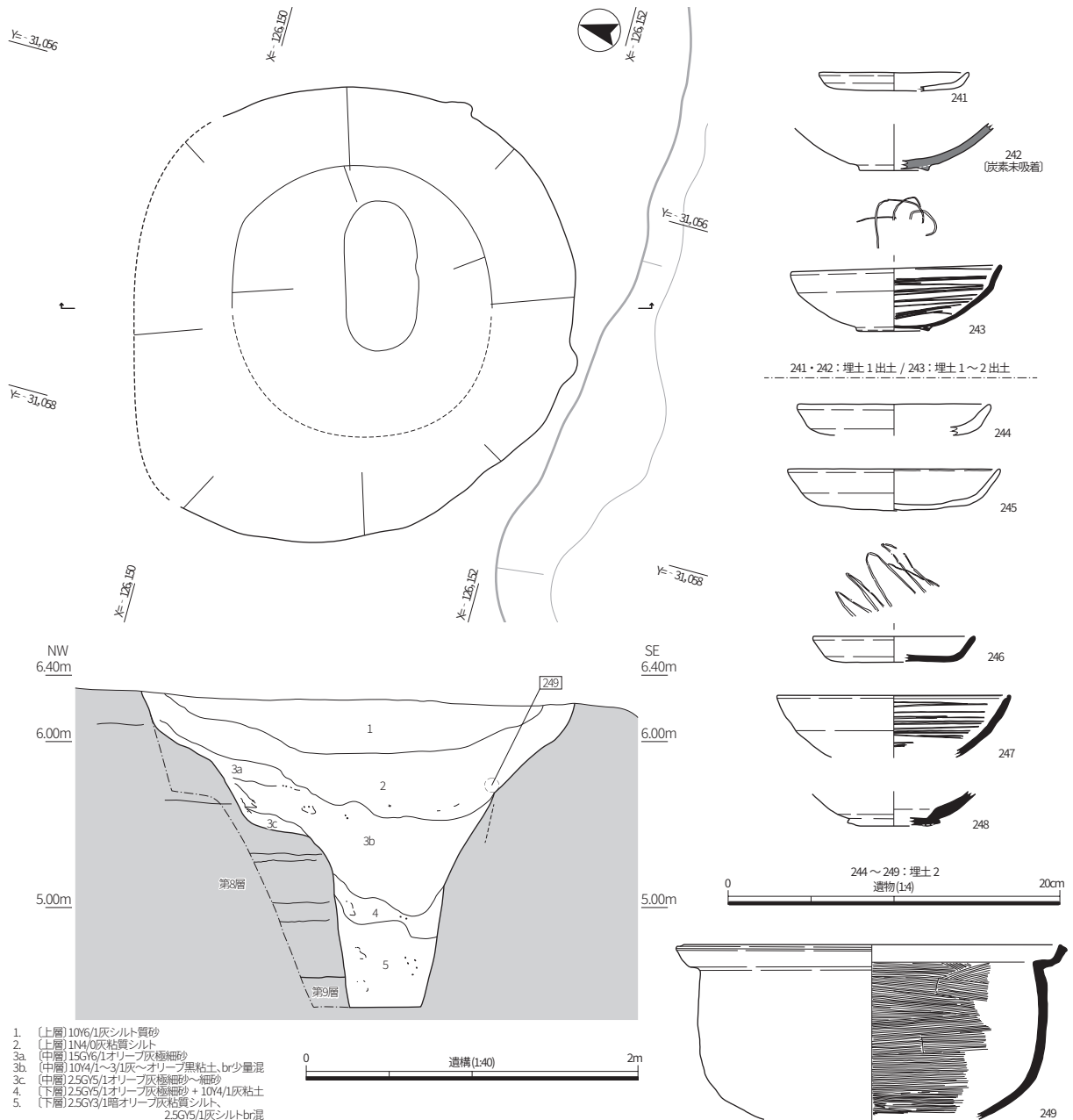


図 49. 1753 井戸 平面・断面・出土遺物

物から 13 世紀代の遺構と認識できる。

なお、この遺構の西 5 m に位置する掘立柱建物 35 は、埋土から出土した遺物は古墳時代に限られるが、規模や柱穴の大きさなどから中世まで下る可能性がある。ただし時期が明確でないため、出土遺物から古墳時代の項目で報告するが、中世に下ると仮定した場合には 640 溝と重複するため、それとは異なる時期の遺構と認識できる。先に報告した通り、640 溝は出土遺物から 12 世紀後半には埋没していた可能性があり、その後に建てられた建物であるならば、この 1753 井戸と時期的に重なる可能性がある。

**1752・1768・1784 土坑(図 50)** 耕作段の肩部で検出された列状の 3 基の土坑である。検出面の形状は、いずれも不整な楕円形を呈し、長径 2.0 m、短径 1.0 m 前後をはかる。埋土は、粘土～シルトを主体とし、下部の堆積に部分的にラミナがみられる。時期については、1752 土坑から一定量の遺物の出土がみられるが、いずれも細片で古墳時代の土師器・須恵器に限られる。1752 土坑は、重複する古墳時代

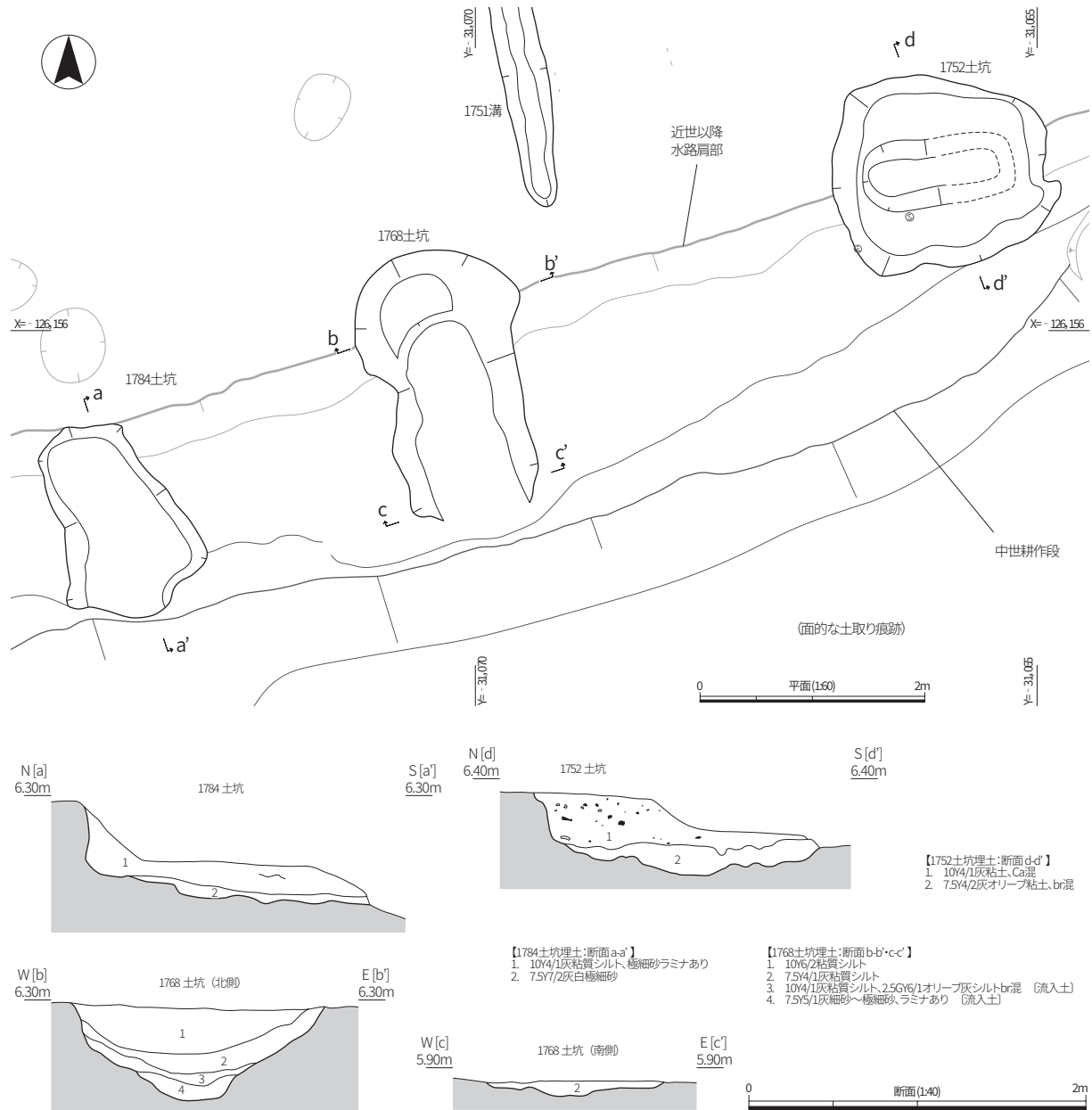


図 50. 1752・1768・1784 土坑 平面・断面

の掘立柱建物 36 より後出し、古墳時代の遺構に同様の遺構がないため、埋土の状況などから中世と認識したが、古墳時代に遡る可能性も残される。この3基の土坑は、埋土や形状から類似する性格と推測でき、重複する近世水路によって削平を受けているものの、いずれも耕作段の肩部付近に位置することから、耕作にかかわる水溜遺構の可能性が推測される。

**〔b. 中世中段階〕**

**大型土坑群** (図 51 ~ 55) 微高地 C の縁辺部にあたる C-2 区南半・C-3 区・C-4 区では、現行の耕地区画の一面内で大型土坑が密集した状態で検出された (図 51・52)。土坑群は、3~4m規模の不整形の土坑状のものが主体で、高槻用水沿いは一定の範囲内が面的に掘削されている。また調査地周辺の現行の耕地区画は、基本的には南北方向に長い区画を呈するが、この土坑群が検出された区画のみが東西方向に長い。さらに C-8 区の西端でも大型土坑が検出されているため、市道上牧 301 号線と高槻用水に沿った L 字状の範囲に大型土坑が分布していることがわかる。これに加え、高槻用水の南東の低地

部と D-1 区中央部の一区画では、基盤層が面的に深く掘削されていることが確認され（図 51）、微高地縁辺の低地部において大規模な基盤層の掘削がおこなわれていたこと判明した。

基盤層の掘り込みの深さは、遺構や地点ごとに差があるが、総じて 1 m 強のものが多く、掘削深度が当初の想定より大幅に深くなったため、隣接する既存の構造物に対する安全面への配慮の必要性が生じた。このことにかかる取り扱いについては、府教育庁・事業者を交えて協議した結果、府教育庁から全面掘削は不要との指示があり、部分的にトレンチを設けて、深さや堆積状況、出土遺物の確認をおこなっている。

埋土については、いずれもブロック土を主体とすることから人為的な埋め戻し土であることが明確となり、埋土に流入土等がみられないことから、土坑の掘削後、短期間で人為的に埋め戻されたことも判明した。埋土のブロックには、暗色の泥質土が目立つことから、主に周辺の土壌層が埋め戻し土の母材となっていたことがわかる。さらに、掘削の底面が土壌化した第 9 層の上面付近であったことから、沖積粘土を主体とする第 8 層の掘削・獲得を目的としていた可能性が推測される。また高槻用水に沿って面的に掘削された範囲では、断面で切り合いが確認でき、埋土の底面が段差になっている。このことから、面的に掘削されている地点においても、土坑状の掘り込みが重複する状況が復元でき、一定の範囲で第 8 層を徹底的に掘削しようとする意図があったことがうかがえる。

第 8 層を母材とする粘土の用途については、発掘調査から明確にできるものではないが、近隣の梶原西遺跡において類似する不整形の密集土坑がこれまでに 80 基以上みつまっている<sup>9)</sup>。梶原西遺跡の事例は、規模が 2 m 前後、深さが 0.5 m 前後のものが主体であるため、本遺跡のものと比べるとひとまわり規模が小さく、時期も古代に遡るなどやや違いがある。ただし埋土は、ブロック土を主体とし、微高地縁辺の一画に集約されているといった立地面の類似性も認められるため、同様の性格を有する遺構である可能性が高い。梶原西遺跡の報告では、瓦の製作に用いるための粘土採掘土坑の可能性が指摘されているが、淀川対岸の楠葉牧が中世の土器生産が盛んであった点と、楠葉牧が淀川両岸一帯の広い地域を包括していたとする説などをふまえると、今回みつかった大型土坑群は土師器や瓦器の粘土素地を獲得するために掘削された土坑とする解釈も可能である。

埋土から出土した遺物は、細片化したものが大半で、古墳時代～中世の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器類などが出土している（250～274）。中世の遺物では、周辺一帯から出土する遺物と大きな差はないが、瓦器の把手付鉢（257）の把手など類例が少ない器種が含まれ、このほかに漆器椀（W3）などが出土している。このため時期については、14 世紀まで下り、大型土坑群の掘削は北側の居住域の中心時期よりも一段階ほど遅れることがわかる。

### 〔c. 中世新段階〕

**1522 土坑**（図 52・56） C-8 区北東で検出された土坑である。耕作段のコーナー付近に位置しているため、段造成との関わりのなかで掘削された可能性が推測でき、新段階の遺構と認識した。平面形は、3.1 m × 2.8 m の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは 0.90 m をはかる。埋土は、ブロック土で充填されており、人為的に埋め戻されたことがわかる。埋土から出土した遺物には、古墳時代・古代・中世の土師器・須恵器・瓦器があり、特に古墳時代前期の土師器がまとまって出土している。周辺で検出された竪穴建物 32・33 などと関連するような遺物を一定量含んでいるため、耕作地の造成時に付近から出土した土器等を廃棄するための土坑の可能性が推測される。時期については、瓦器の三足釜を含むことから、13 世紀以降と認識できる。



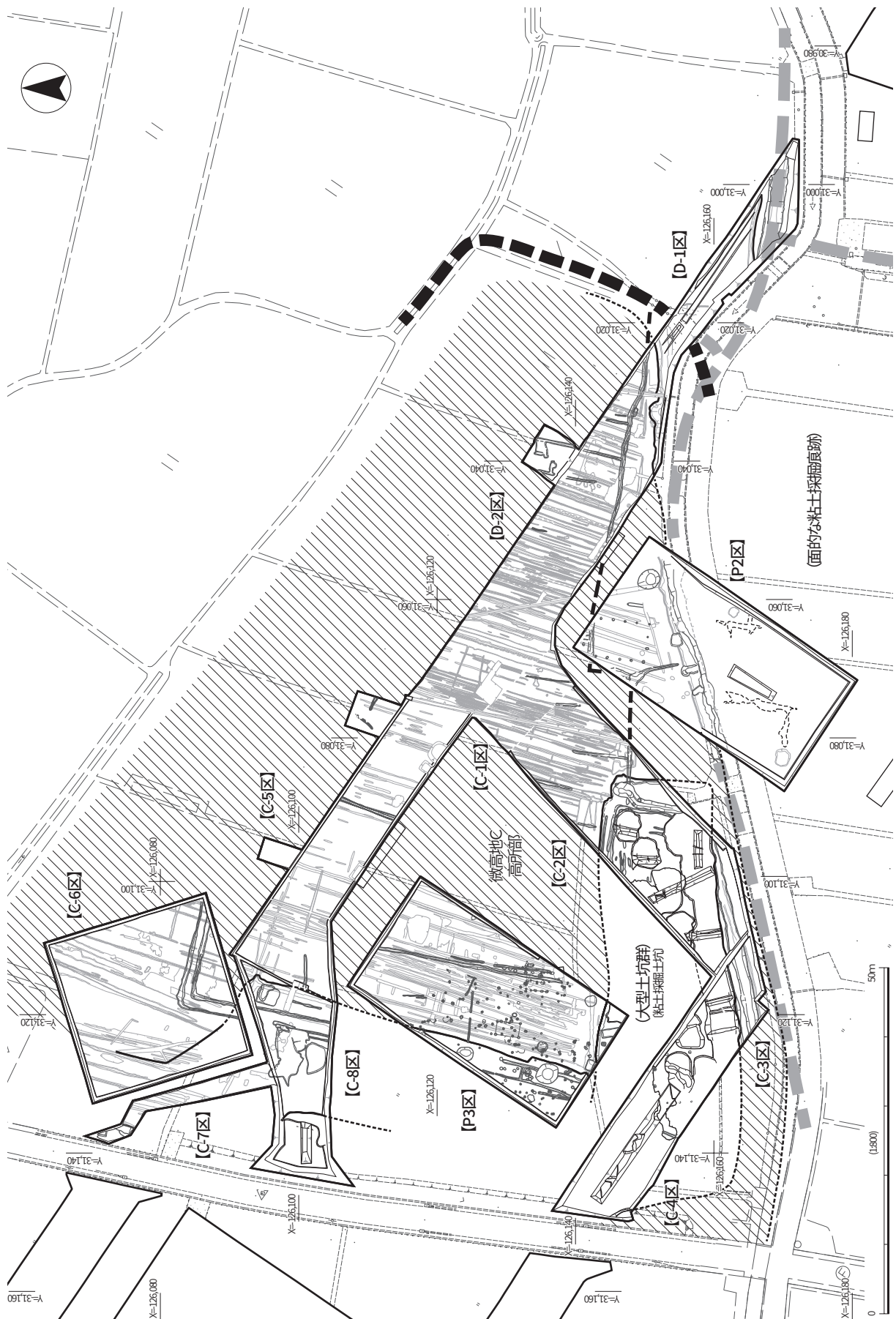


図 51. 中央エリア 粘土採掘痕跡分布範囲

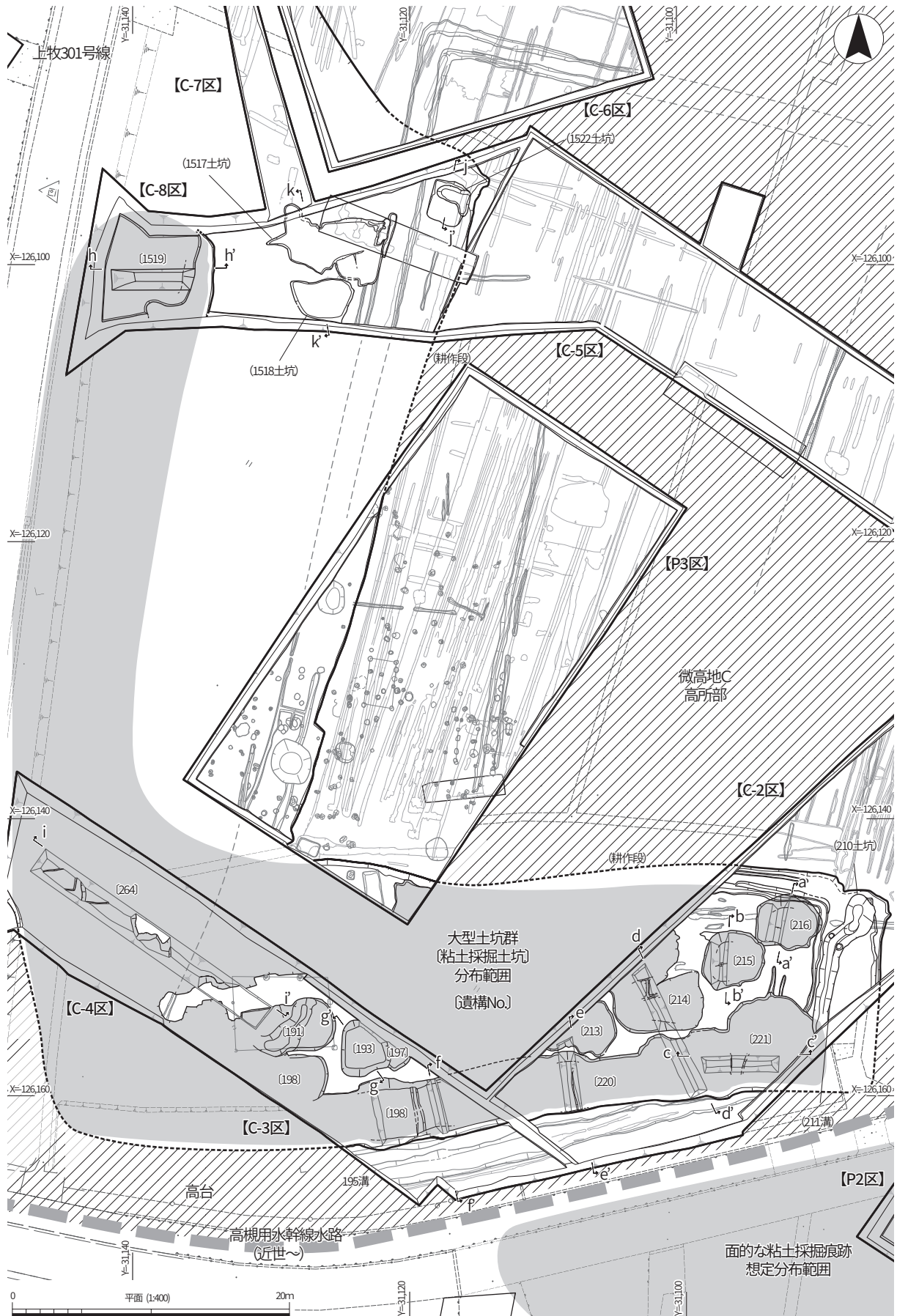


図 52. 中央エリア西半 大型土坑 (粘土採掘土坑) ほか 全体平面図







第4章 遺構・遺物

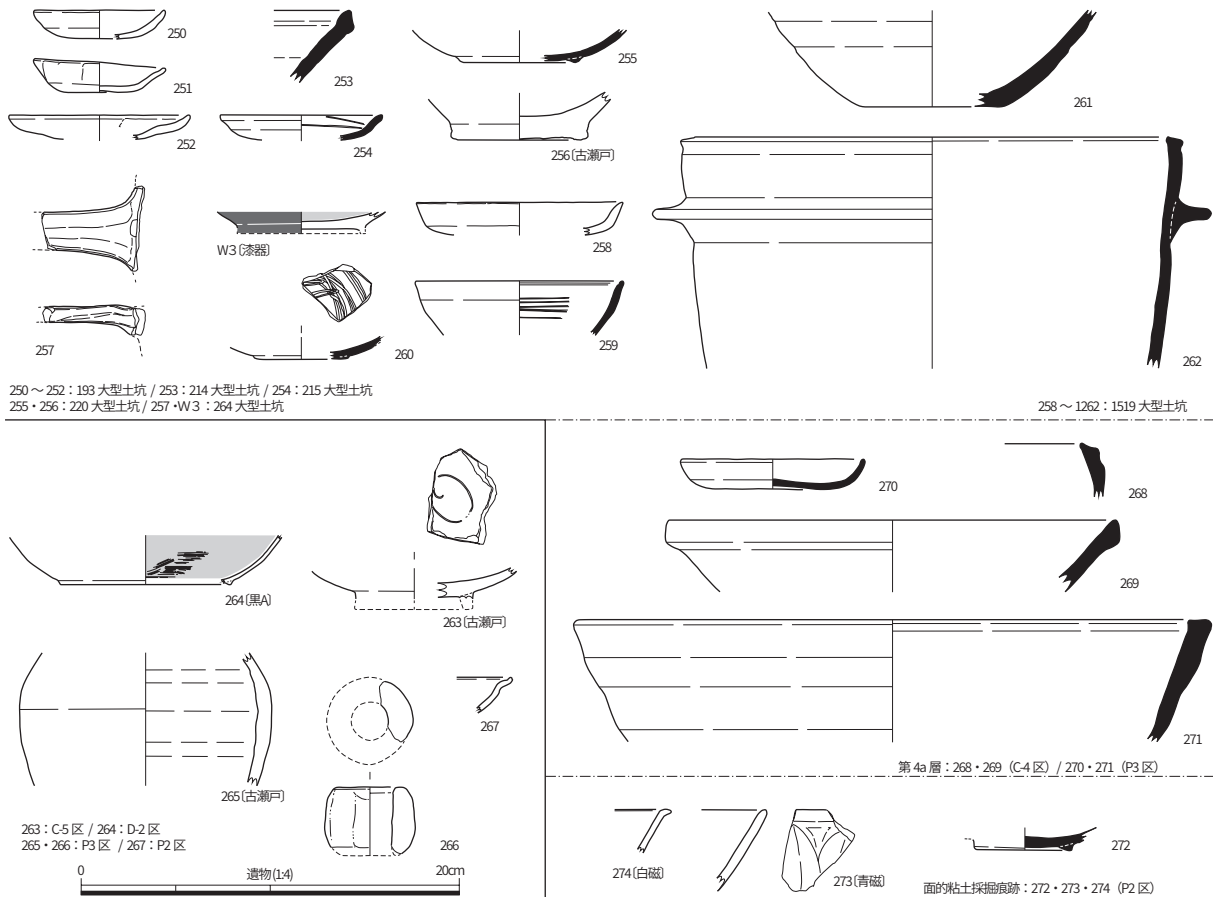


図 55. 中央エリア 粘土採掘関連遺構・第4a層・包含層 出土遺物

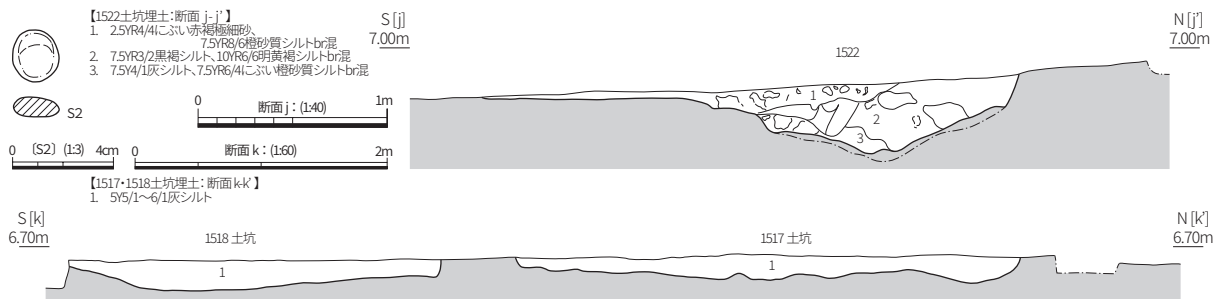


図 56. 1522 土坑、1517・1518 土坑 断面

**1517・1518 土坑** (図 52・56) C-8 区の中央東で検出された不定形の土坑群で、重複する区画溝 1297 溝より切り合い関係で重複することから、中世中段階または新段階のどちらかの時期に帰属する。北側の 1517 土坑が最大幅 6.7 m 程度、南側の 1518 土坑が最大幅 4.0 m 前後で、深さはいずれも 0.15 m 程度である。埋土は、灰色シルトを主体とする。埋土から出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・瓦・鉄片などがあるが、いずれも細片のため図化できなかった。遺構の機能・性格は明確でないが、西側エリアの 103・1292 土坑、104～106 土坑と形態や埋土の堆積状況が類似している。さらに耕作段の裾付近という点でも類似性があり、水溜遺構の可能性が推測できる。

**210 土坑・211 溝ほか** (図 57) 210 土坑は、C-2 区の南半で検出された耕作段のコーナー付近に位置する楕円形の掘り込みで、この土坑から南に 211 溝が派生している。210 土坑の規模は、長径 2.8 m、短径 2.1 m をはかり、肩部からの深さが 0.68 m、耕作段上面からの深さが約 1.3 m である。211 溝は、

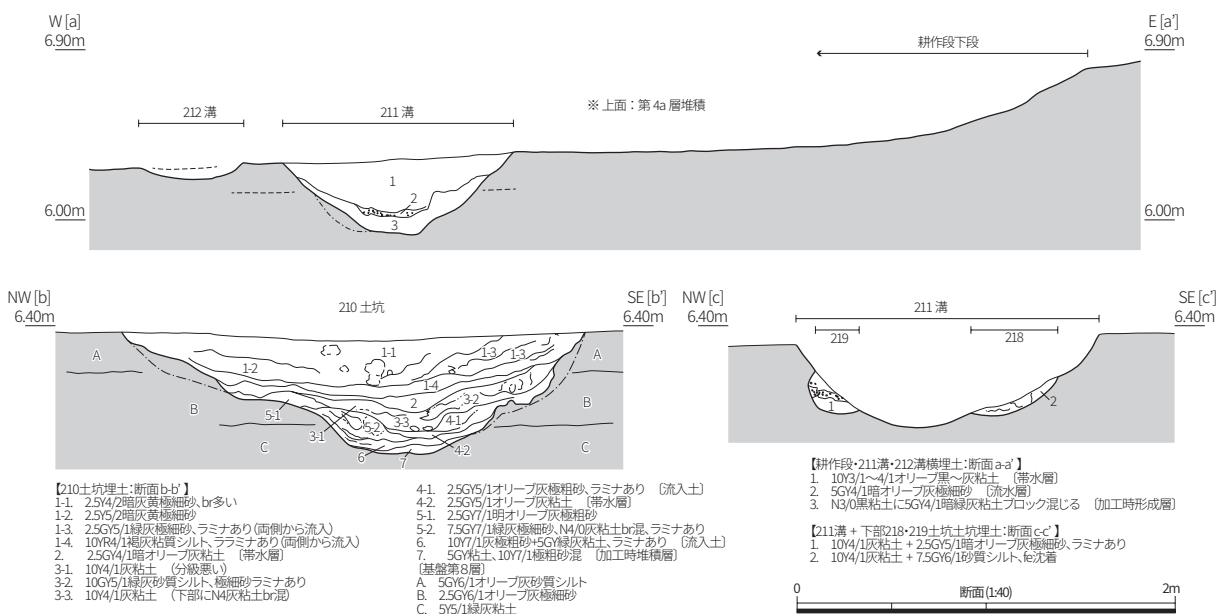
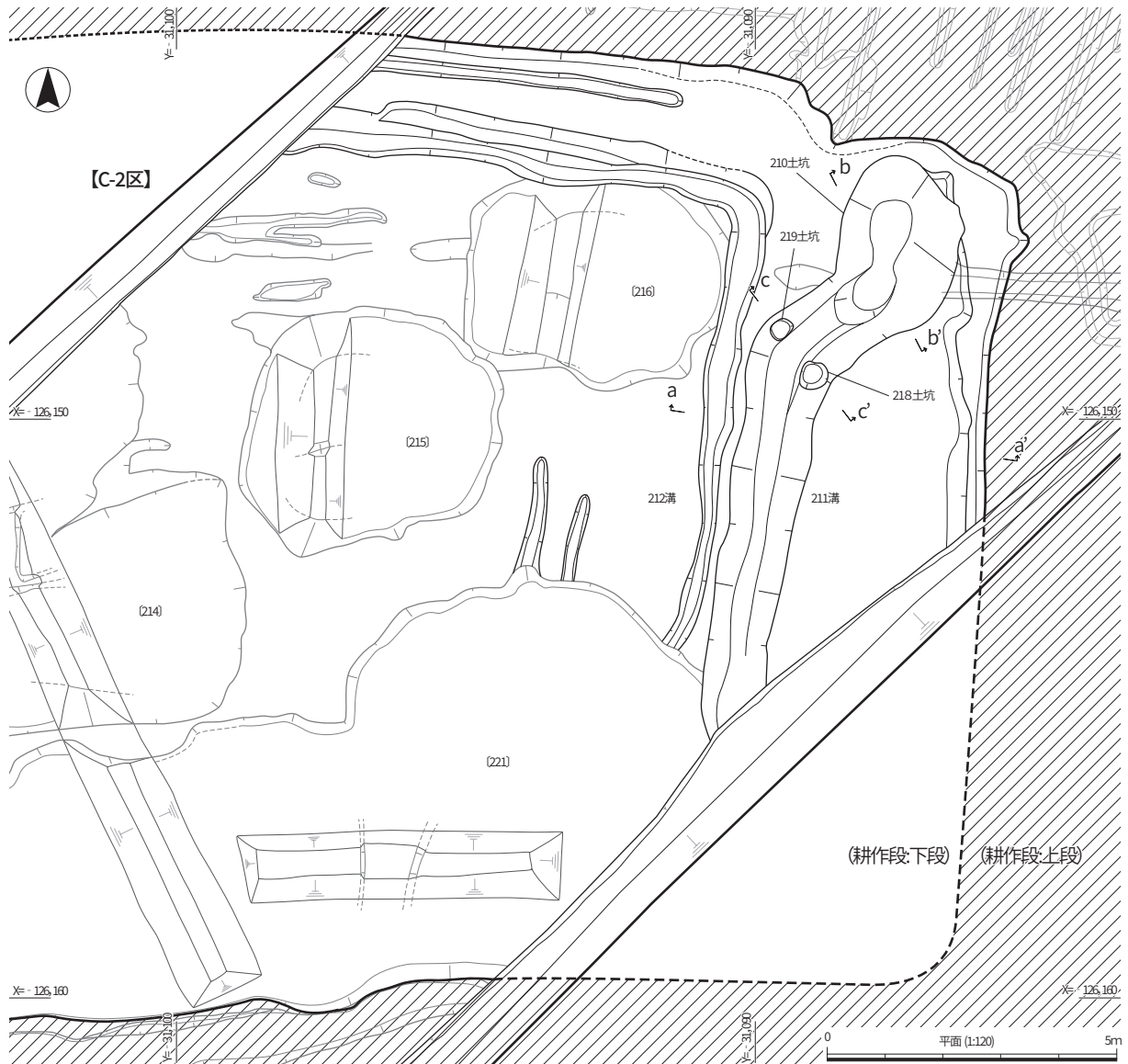


図 57. 210 土坑、211 溝ほか第 4a 層関連耕作遺構 平面・断面



幅 1.2 m 前後、検出長が 7.8 m である。肩部からの深さは 0.45 m で、210 土坑より浅いことから、210 土坑が水溜、接続する 211 溝が排水路と推測できる。さらに 210 土坑と 211 溝との接続部付近には、溝底部に 2 対の円形の掘り込みがみられたが、これについては堰の痕跡の可能性が推測できる。

210 土坑の埋土は、極細砂と粘土が互層状に堆積する自然堆積層で、極細砂中にはラミナが顕著にみられる。211 溝の埋土は、下部に流水痕跡が認められるが、上部は暗色の粘土層で、滞水状態で徐々に埋没したことがわかる。出土遺物は、210 土坑からは須恵器の細片が少量、211 溝からは土師器・須恵器・瓦器の細片が少量出土しているが、図化できる遺物はなかった。大型土坑群の埋立て後の遺構であることから、14 世紀以降とみなすことができる。なお、211 溝に並行する 212 溝などの耕作段と並行および直交する方向の耕作関連の遺構は、同時期の関連する遺構と認識できる。

#### (4) 東側エリア (図 58)

東側エリアは、北から南にむかって微高地 D がのびており、大まかには北から南に地形が傾斜して下がる。このため E-2 区・P14 区・E-1 区の順で徐々に中世の遺構検出面の標高が低くなっている。また、中央エリアの南東側の地形が大きく下がっており、それに対応して東側エリアでも西側にむかって地形が下がっている。この西側低地部は、中央エリアと同様に人為的な地下げがなされ、P14 区南西端から E-1 区西端にかけて大型土坑が検出されている。東側エリアでは、先行する古代と古墳時代の遺構に居住関連遺構が存在するのに対し、中世以降の遺構はいずれも耕作関連遺構と粘土採掘に伴う大型土坑に限られている。概ね現行区画に沿った形で耕作関連遺構が検出されており、中世から現在まで長らく耕作地として土地利用がなされていたことがわかる。また P14 区の東側では、水田区画が一定の面積で検出されたが、畦畔が面的に検出された調査区はこれが唯一である。

なお全体図 (図 58) では、第 4 層と第 5 層の除去面相当で確認された中世の遺構を全てまとめて図示したが、大まかには 3 ないし 4 時期に分かれる。低地部の造成段と粘土採掘土坑は、中央エリアと同様に相対的に新しく、上段との対応は明確でないが、新しい時期の耕作関連遺構と時期的に接合する可能性が高い。このため中央エリアと概ね対応するように、〔a. 中世古段階〕・〔b. 中世中段階〕・〔c. 中世新段階〕に区分して、順次報告することにした。

##### 〔a. 中世古段階〕 (図 59・60)

**760 堤・761 溝** (図 59・60) E-2 区の西端で検出された南北方向の堤状の高まりで、大畦畔の可能性はある。現行の耕地区画とほぼ重複しており、上面に第 5 層が被覆しているため中世でも古い時期の遺構と認識できる。上端の幅は、0.6～0.8 m をはかるが、西側は中世新段階の耕作段の地下げで削平されており、本来の幅は明確でない。高さは、0.2 m である。この堤状の高まりと並行して 761 溝が掘削されており、幅は最大で 0.4 m、深さ 0.05 m をはかる。

**767・766 溝** (図 59・60) P14 区の北西と E-2 区西半で検出された一連の東西方向の溝が 767 溝で、西端が北向きに屈曲していることから、761 溝から派生した溝の可能性はある。規模は、検出長 35 m、検出面の幅 0.6～1.1 m、検出面からの深さ 0.25～0.35 m をはかる。底面の標高は、T.P.+6.5～6.6 m で、東西の高低差はほとんどない。埋土は、第 4 層に類似する黄灰色の極細砂～シルトを主体とする。この溝は、試掘調査時に試掘 10tr で検出された溝と同一遺構で、その際に 13 世紀代の土師器皿や瓦器椀 (図 3: 1・2、P3) が出土している。

E-2 区東端では、767 溝が南北方向の 766 溝と十字に交わっており、東側と北側の延長方向はいずれ

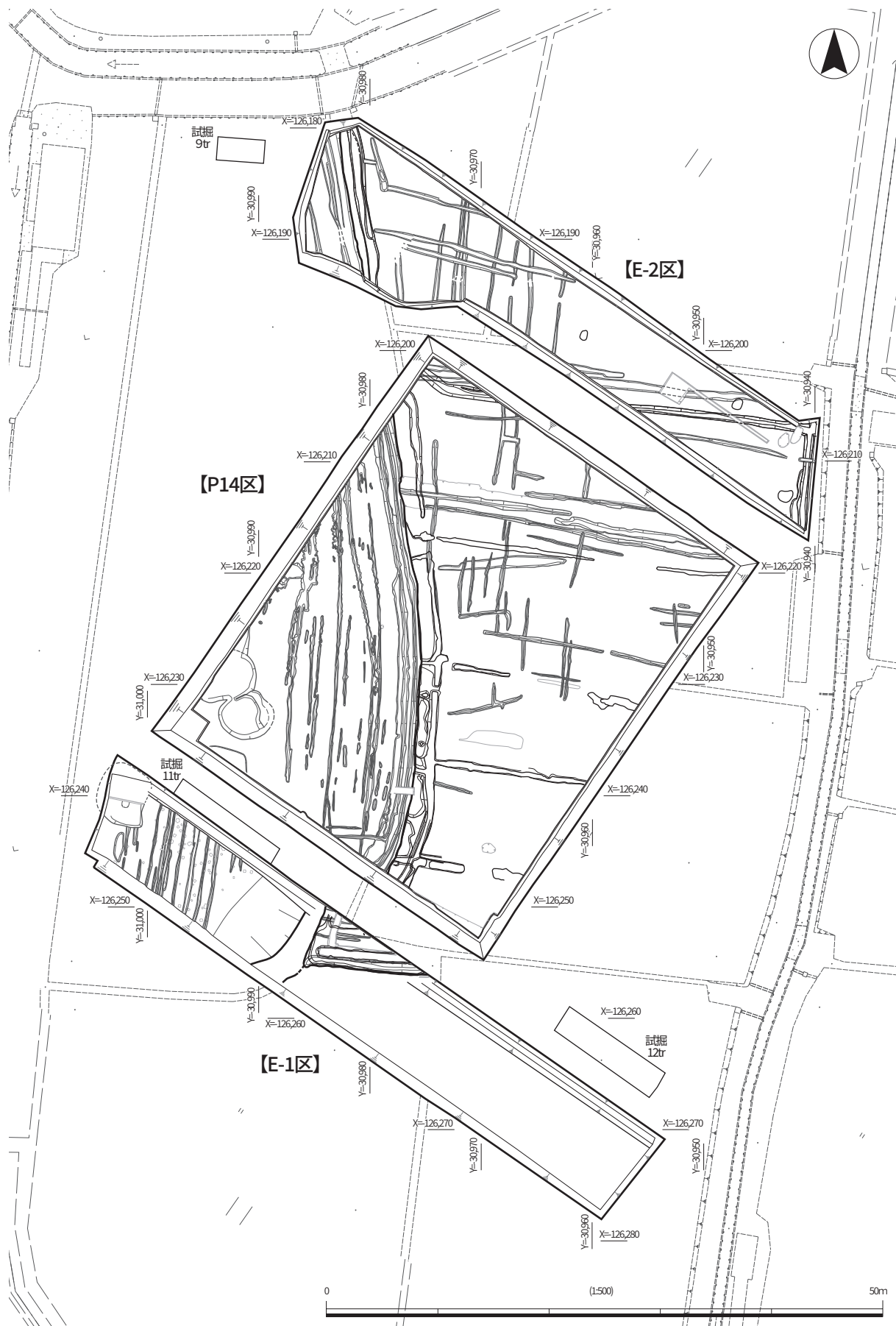


図 58. 東側エリア 中世遺構 全体平面図

も調査区外にのびている。766 溝とした南北方向の溝については、検出長 9.5 m、幅 0.7 m 前後をはかる。深さ約 0.3 m、底面の標高が T.P.+6.4 m であるため、767 溝と比べると底の標高はやや低い。埋土は、暗灰色系粘土～粘質シルトを主体としており、著しい流水痕跡はみられない。十字の接続部のやや南では、遺物がまとまって投棄されており、土師器皿（275）、瓦器椀（276・277）、土師器羽釜と瓦器三足釜（281・282）などが出土している。集積部分以外から出土した遺物を含め、出土遺物はいずれも 13 世紀代に帰属する。767 溝の出土遺物（1・2・283）もほぼ同時期のものであり、ふたつの溝の埋没時期を示すものとみられる。

**水田**（図 59・60） P14 区の東半約 3 分の 2 の範囲では、第 5 層の除去面で面的に畦畔が検出された。西側については、後世の地下げで削平を受けているが、東側にも同様に水田が広がっていた可能性が高い。区画 h と区画 i とした区画間は、疑似畦畔であるため同時期のものであるかは明確でないが、ほかには高さ 0.05 m 程度の低い高まりが検出されており、いずれも小畦畔と考えられる。調査では、9 区画分の水田区画が検出されており、区画の方向は現行区画の方向と概ね一致している。全体が検出された区画がないため規模が明確でないが、区画 a・b・c・e・f については、南北方向の幅が約 9 m で一致する。西側の区画 a～d は、東側に比べて一段低くなっている。

出土遺物は少ないが、水田区画 d 内の埋土からは 13 世紀後半頃の瓦器椀（285）が出土している。畦畔の下部で検出された 1999 溝から、やや先行する時期の瓦器碗（284）が出土しており、水田区画の時期は 13 世紀後半頃を中心とする時期のものと推測できる。

**6・7 溝**（図 59・60） 水田区画の南端に位置する東西方向の 2 条の溝で、周辺の遺構との位置関係から水田からの落水を受け止める排水路と推測される。北側の 7 溝が幅 2.0 m、深さ 0.13 m、6 溝が幅 0.8～1.0 m、深さ 0.10 m をはかり、北側 7 溝が幅広で僅かに深い。埋土は、いずれも黄褐粘質シルトを立体とし、顕著な流水の痕跡はみられない。また、北側の 7 溝の北西側に幅の狭い溝が付随しているが、西側の低地の水田区画に水を配水するための機能が推測される。

埋土からは、土師器・須恵器の細片が出土したほか、7 溝の底からは完形の短刀（M1）が原位置を保った状態で出土した点が特筆される。短刀（M1）は、遺存状態が良好で、法量は全長 24.6 cm、刀身長 19.0 cm、幅 2.7 cm をはかる。特に区の部分が錆膨れしており、<sup>はばき</sup> 鋤を伴っていた可能性があるほか、刀身の側面に木質が残存しているため、鞘に納められていたことがわかる。また目釘穴がないため、やや実用性に欠ける面がみられる。出土状況からみてもやや特殊な位置づけが必要で、地鎮などに伴う可能性が推測されるところである。時期については、形態から平安時代後期頃の可能性が高い。出土した土器は、細片のため帰属時期が明確でないが、遺構の年代は 12～13 世紀頃と推測できる。

**1992 溝**（図 59・60） 西側の低地部で検出された溝で、長さ 1.9 m、幅 0.3 m、深さ 0.23 m をはかる。同一面で検出された耕作溝群とは、傾きや深さが異なっており、東側の水田畦畔と傾きが揃うことから中世古段階の遺構と認識した。上面が大きく削平されているため、深さのある遺構と認識できるが、遺構の機能や性格は不明である。また埋土からは遺物が出土しているため、時期については不明である。

#### 〔b. 中世中段階〕（図 61）

**1981・1982・1983・1984 大型土坑**（図 61） P14 区南西で検出された大型の土坑群で、いずれもブロック土で埋土が充填されている。1981・1982・1983 は、隣接・重複しており、連続して掘削・埋め戻しがなされたものと認識できる。全体の形状が概ね把握できる 1981 大型土坑は、径 4.5 m、深さ約 0.7 m で、そのほかの大型土坑についても類似する規模を有するものとみられる。中央エリアの南西側で検出



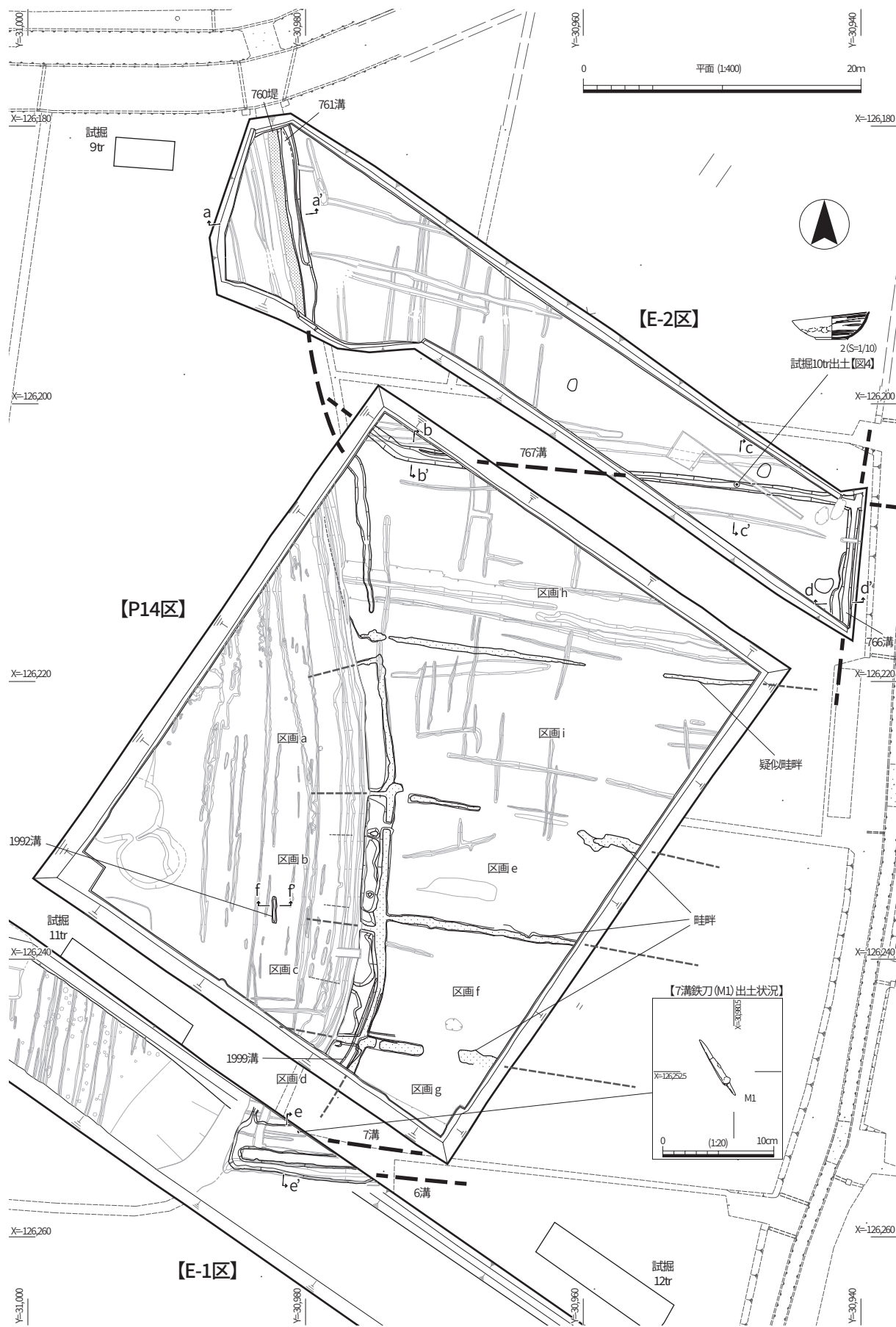


図 59. 東側エリア 中世古段階 水田・耕作溝群 平面

# 第4章 遺構・遺物

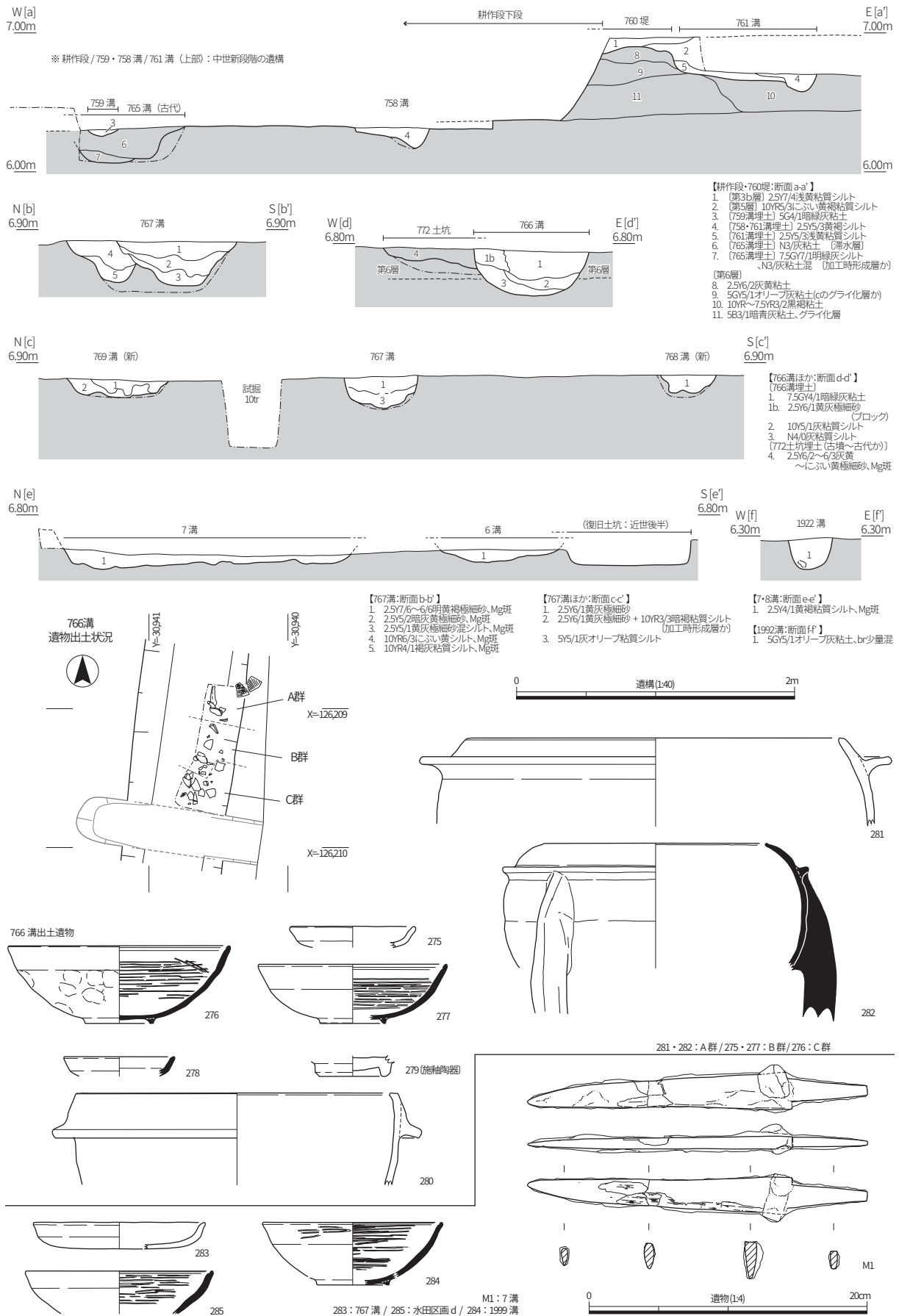


図 60. 東側エリア 中世古段階 溝 断面・遺物出土状況・出土遺物

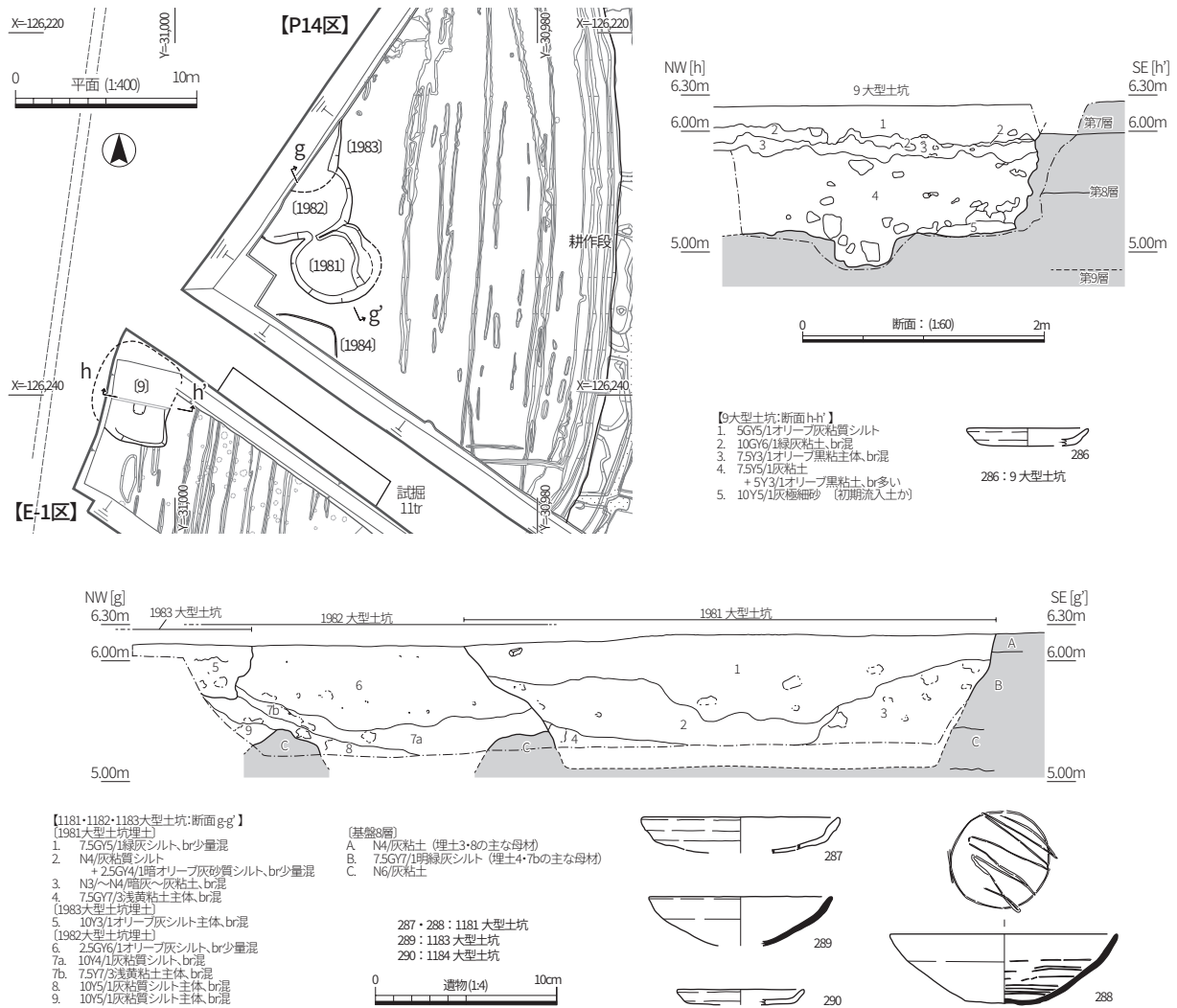


図 61. 東側エリア 大型土坑 (粘土採掘土坑) 平面・断面・出土遺物

された大型土坑群と形状や埋土の堆積状況が酷似しており、いずれも低地部に位置するという立地面にも類似性が認められる。このことから同様の性格・機能を有する遺構と認識でき、粘土採掘土坑と推測される。

埋土からは、主に土師器・須恵器・瓦器の破片が出土しており、土師器皿 (287・290) や瓦器椀 (288・289) を図化した。瓦器椀 (288・289) は、いずれも無高台であり、14世紀まで時期が下る。ほかの遺物も概ね同様の時期のため、遺構の時期は14世紀代に位置づけられる。

**9大型土坑** (図 61) E-1 区の西端で検出された大型土坑で、形状・埋土・位置関係から P14 区の大型土坑群と同様の粘土採掘土坑と認識できる。規模は、約 5 m、検出面からの深さは 0.9 m をはかり、埋土はブロック土で充填されている。埋土からは、土師器・須恵器・瓦器の細片が出土しており、土師器皿 (286) を図化した。時期については、P14 区の大型土坑群と同様に 14 世紀代に位置づけられる。

**〔c. 中世新段階〕** (図 62・63)

**上段耕作溝群** (図 62) E-2 区および P14 区東半上段で検出された耕作溝群のうち、中世古段階とした水田畦畔や 761・767・766 溝よりも切り合い関係から新しい時期と認識できるものを中世新段階の耕作溝群と認識した。溝の方向は、いずれも現行区画と概ね一致する東西・南北方向を指向する。これらの溝の時期については、出土遺物が少なく細片が大半のため明確でないが、1964 溝からは原位置を保つ



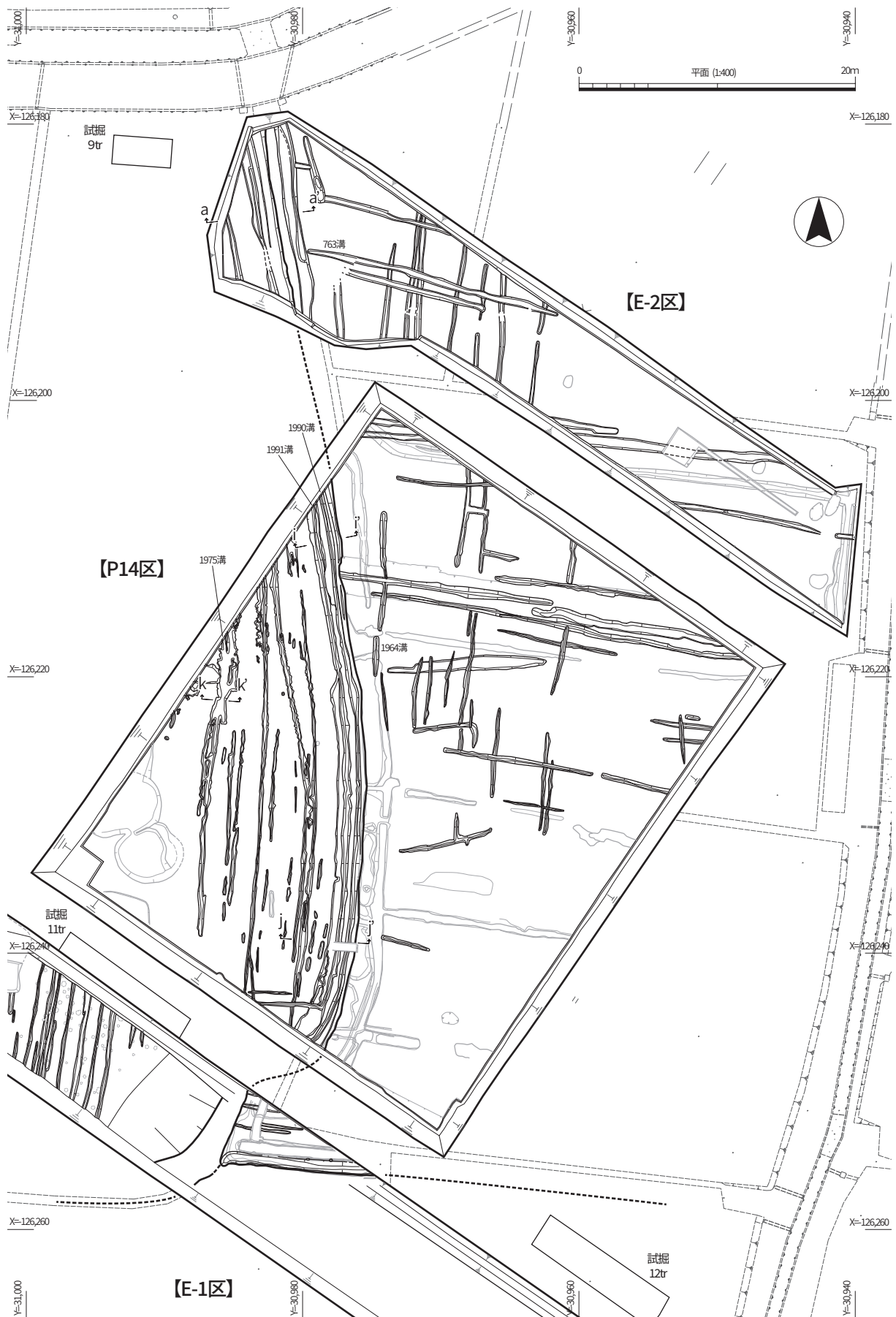


図 62. 東側エリア 中世新段階 耕作溝群 平面

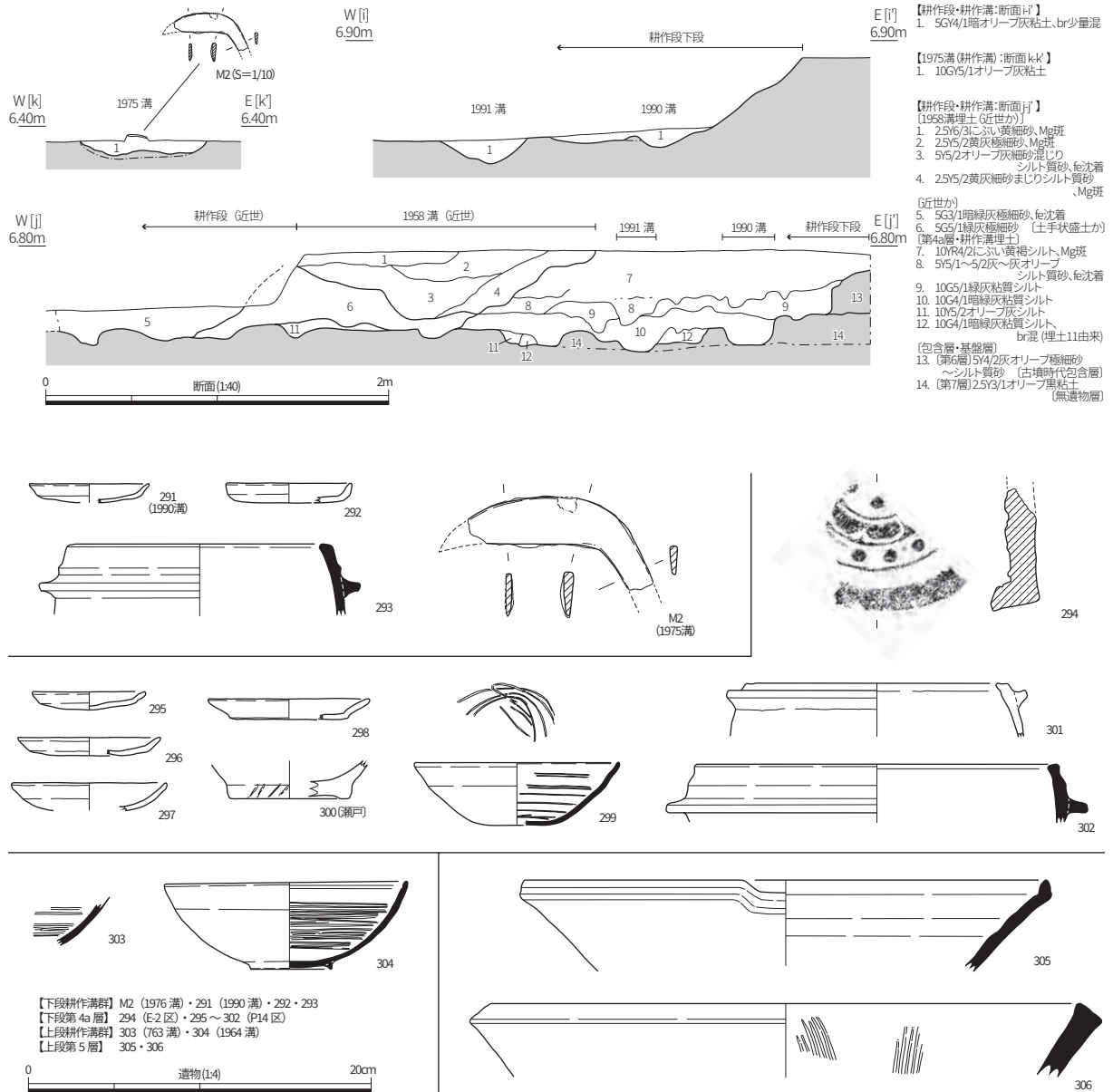


図 63. 東側エリア 中世新段階 耕作段・溝 断面・出土遺物

た状態で13世紀代の瓦器椀(304)が出土している。先行する中世古段階の遺構とそれほど明確な時期差はないが、上段の包含層〔第5層〕からは東播系や備前のすり鉢(305・306)などが出土しており、13世紀後半まで下るものも含まれることから、13～14世紀代にかけて機能した溝群と認識できる。

**下段耕作溝群**(図62・63) 上述したように、E-2区・P14区・E-1区の西側低地部は中世のある段階に大きく地下げがなされており、造成された下段低地部では耕作溝群が面的に検出されている。耕作段は、現行区画や先行する中世古段階の水田区画とほぼ重複しており、耕作溝群もほぼ現行区画と一致する。同一面で検出された中世中段階の大型土坑群との関係については、平面の切り合い関係を明確にできたわけではないが、耕作溝群の埋土が溝群および大型土坑群の上面を被覆する耕作土〔第4a層〕がほぼ同質であることから、耕作溝群が後出するとみて間違いはない。

耕作溝群や下段の上面を覆う耕作土〔第4a層〕からは、一定量の出土遺物があり、土師器・瓦器・中世陶器・軒丸瓦・鉄鎌などが出土している(291～293・M2、294～302)。土器類は、13～14世紀頃までの幅があるが、無高台の瓦器椀(299)をはじめとして14世紀に下るものが多い。軒丸瓦(294)

は、平安時代後期の珠文縁複弁4弁蓮華文の軒丸瓦で、薬師寺や興福寺など大和に同紋例がある<sup>11)</sup>。軒丸瓦は、この1点のみの出土であり、どのような背景でもたらされたかは明確でないが、淀川の河川流通との関わりは無視できるものではないだろう。ほかでは、鉄鎌(M2)が1975溝から原位置で出土しており、この付近での耕作に伴って使用されていた農具と推測される。なお出土遺物からは、下段耕作溝群は14世紀以降と認識できるが、上段の耕作溝群は出土遺物がやや古いため、上段と下段の耕作溝群の時期が異なっていた可能性が高い。

### (5). 小結

中世の遺構は、灌漑水路等の耕作関連遺構が主に検出され、調査地のほぼ全域に耕作域が拡がること今回の調査で判明し、東側エリアでは水田畦畔が検出された。近世以降も耕作地として継続的に土地利用がなされたため、耕作溝の時期は明確でないが、中世～近世のものが混在するとみられる。

居住域については、西側エリア微高地頂部と中央エリア西半の一部に限定される。特に中央エリアでは、方形区画の内部で建物や井戸が少数確認されおり、周辺の耕地開発に伴って小規模な居住域が形成されたとみられる。居住域で出土する遺物は、13～14世紀代の土師器や瓦器が中心で、耕作溝等から出土する遺物もこの時期のものが大半であることから、耕地開発のピークを示すとみられる。ただし西側エリアの微高地Bと東側低地部では、11世紀代の遺物が一定量あり、上牧遺跡の過去の調査でもこの時期の遺構・遺物も確認されているため、開発の時期が遡る可能性がある。

14世紀以降は、遺物が減少傾向にある。ただし粘土採掘土坑とみられる低地部の大型土坑群は、出土遺物から14世紀に下る。15世紀代の遺物は、362溝からまとまって出土したが、この遺構に限定され、近世前半も含めてこの時期以降の遺物の出土はほぼない。

なお中世の遺構は、ほとんどが現行の耕地区画に沿っており、内ヶ池もこの時期には既に池となっていたことが今回の調査で明らかとなった。現在みられるような景観に近いものが13世紀代には成立しており、淀川低地部での耕地開発の動向を考える上でも重要なデータとなるだろう。

### 【註】

- 1) 橋本久和 2018 『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社
- 2) 三宮昌弘 2015 『井尻遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第255集
- 3) 廣瀬時習編 2007 『池島・福万寺遺跡3』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第185集  
大庭重信編 2008 『池島・福万寺遺跡6』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第185集
- 4) 正岡大実ほか 2010 『池内遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第198集
- 5) 江浦洋 2010 「水田と淡水漁労」『大阪文文化財研究』第37号 (財)大阪府文化財センター
- 6) 墨書の判読については、歴史館いずみさの細田慈人氏の協力を得た。
- 7) 前掲註1) 橋本 2018
- 8) 松井章 1995 「古代・中世村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第61集 国立歴史民俗博物館
- 9) 川瀬貴子 2015 『梶原西遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第261集
- 10) 平凡社 1986 『大阪府の地名II』日本歴史地名体系 28巻
- 11) 山崎信二 1985 「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集』VI 奈良国立文化財研究所学報 45  
森郁夫・上野那ー編 1987 『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報 45



## 第4節 古代の遺構・遺物

### 1. 概要

今回の調査で検出された古代の遺構・遺物は、相対的に少なく、遺構密度も極めて低い。検出された遺構は、流路や溝が中心で、ほかでは建物4棟と井戸1基などに限られることから、調査成果からどのような土地利用がなされたのかは明確でない(図64)。ただし第4章第1節で報告したように、古い淀川の分流路とみられる102流路からは、河川祭祀との関わりが想定されるまとまった遺物の投棄の痕跡が確認され(図21～23)、さらにこれに加え、957溝や654井戸などから遺物がまとまって出土する点が特筆される。また建物遺構は、数棟程度の検出に留まっているが、C-6区やP14区などで柱の規模が大きい柱穴を伴う掘立柱建物が検出されている点も注目される。

本節では、7世紀～9世紀までの遺構・遺物について報告するが、西側エリアと中央エリアの遺構・遺物は、8世紀代にほぼ限定される。その一方で東側エリアでは、主に7世紀代と9世紀代の遺構・遺構が検出されており、エリアごとに中心となる時期が異なっている。年代観や器種分類は、7・8世紀は主に都城の土器編年(小田2016)に基づいて報告し、9世紀は(橋本1991)や平安京編年などを参照とし、世紀で年代を記すこととしたい。古代の遺物は、上述したように出土量が特に少なく、一部の遺構にほぼ限定される。このため各地区での土地利用の年代を把握する必要性から、包含層から出土した遺物も可能な限り抽出し、ほぼ網羅的に図示している。

### 2. 西側エリア

標高が高い北側で柱列、焼土坑、長大な溝が数条検出されている。このうちの東西方向の957溝からはまとまった量の遺物が出土している。大半が奈良時代を中心とした時期の遺構で、同時期には調査地西端の淀川分流路(102流路)で河川祭祀に伴う遺物の投棄の痕跡が認められる。

**柱列9**(図65) P6区北側で検出された北東-南西方向の柱列で、6基の柱穴からなる。長さは3.5mをはかり、柱間寸法は南端の1494P-1497Pを除いて0.7m前後におさまる。柱穴の大きさは、いずれも0.25～0.35m前後をはかる。北端1501Pと南端1494Pは、柱痕が確認でき、検出面からの深さが約0.2mをはかる。そのほか中間の柱穴は、深さはいずれも0.5～0.15m前後である。柱穴は、いずれも規模が小さく浅いが、これは付近一帯が中世の耕作地の造成時に大規模に地下げにより削平を受けているためであり、本来の深さは不明である。埋土は、褐灰～黄灰シルトを主体とし、土師器や須恵器の細片が多く含まれる点が特徴的である。このような埋土を呈する遺構はほかにはなく、細片化した遺物を意図的に埋めた可能性がある。また遺物のほとんどは、古墳時代の遺物であるが、1499Pからは奈良時代の須恵器杯蓋の細片(307)が1点出土している。後述する750溝と柱列の方向が概ね一致していることから、性格は不明であるが8世紀代に帰属する遺構と認識できる。

**1479 焼土坑**(図65) P6区北東端で検出された焼土坑で、357溝と隣接している。中世の耕作に伴う造成段によって南半分が削平されており、規模は東西長1.2m、残存幅0.43mをはかる。底面から側面にかけて被熱しており、ほぼ全体が赤変して部分的に硬化していることからなんらかの焼成遺構とみられる。埋土は、微細な焼土や炭化物を含む粘質シルトを主体とする。削平を受けているため全体の形状や詳細な構造は不明確であるが、西側がやや舌状に張出しており、西側が焚口部分であった蓋然性が高い。遺物は、時期不明の土師器の極細片が1点出土している。耕作段によって削平を受けているため13世紀以前という点は確実であるが、詳細な時期については検討の余地を残す。なお本遺跡北方の丘



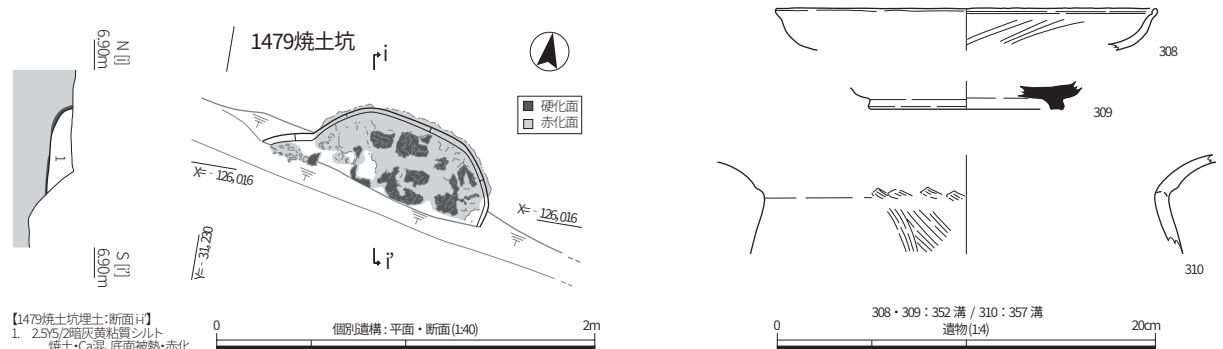
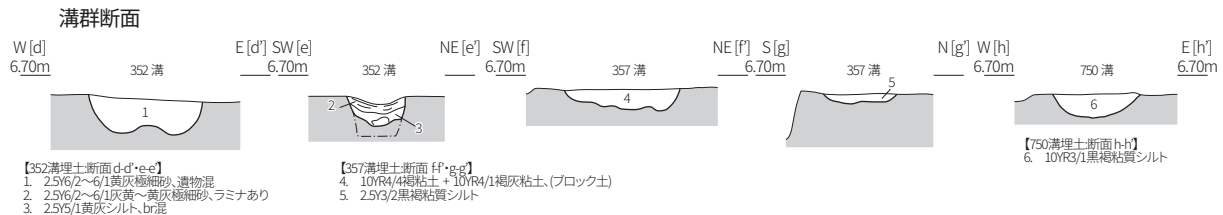
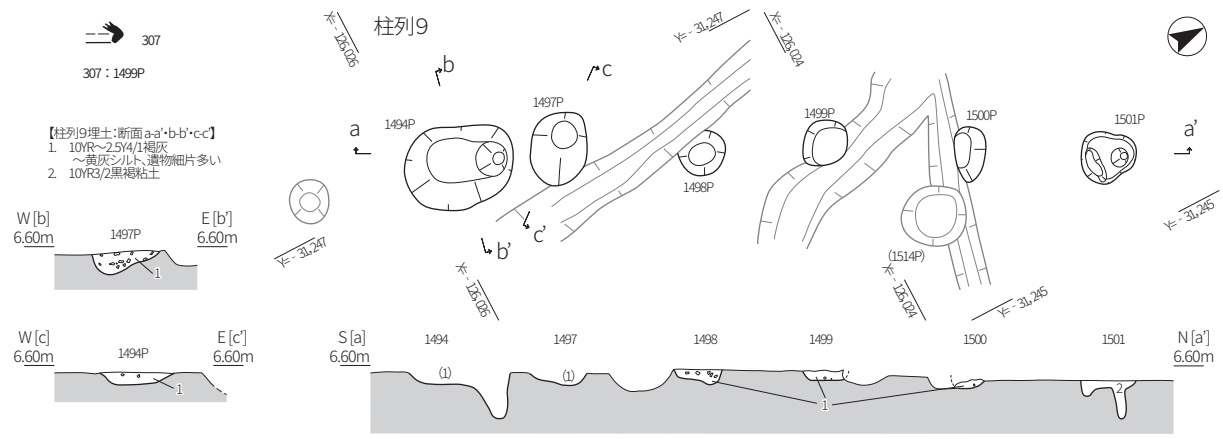
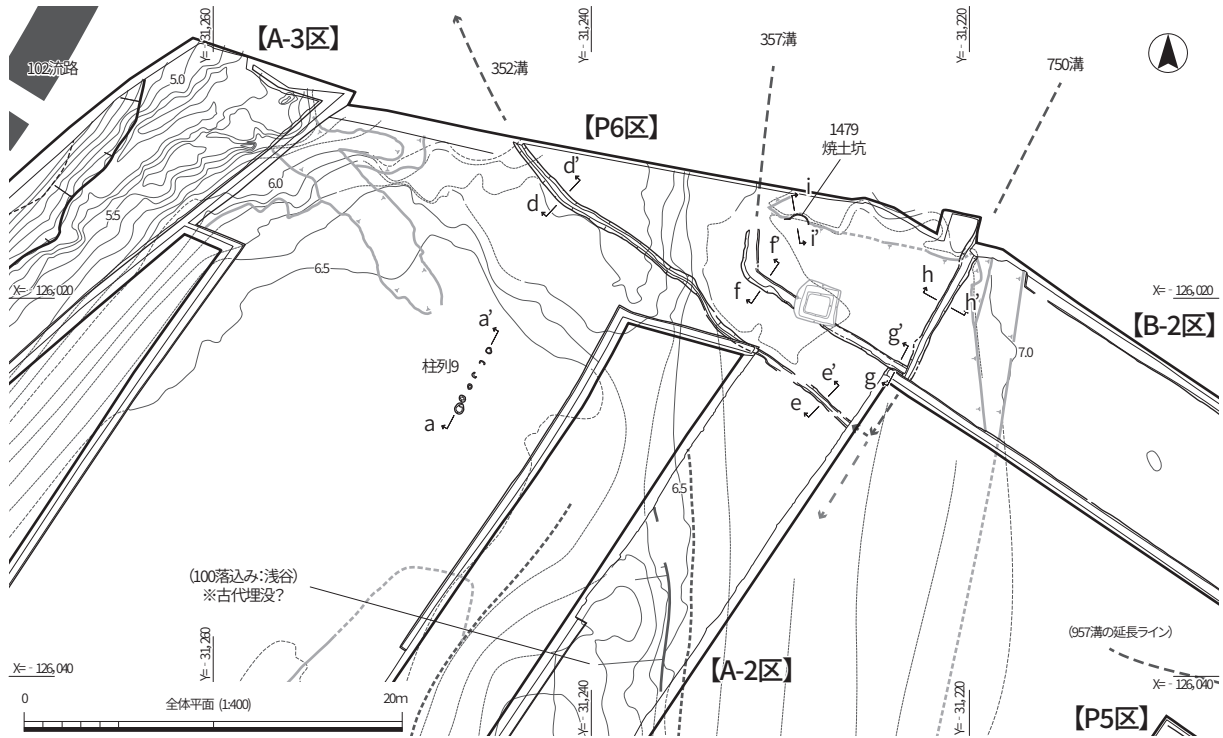


図 65. 柱列9、352・357・750溝、1479焼土坑 平面・断面・出土遺物



陵部の梶原古墳群や、檜尾川上流域の成合谷の遺跡群で、類似する焼土坑がいくつか確認されており<sup>2)</sup>、これらの事例から類推する限り、9世紀代に遡る可能性が考えられる。

**352・357・750 溝** (図 65) 西側エリア北西、P6 区・A-2 区・B-2 区にまたがって検出された溝群で、西側に南東—北西方向の 352 溝と南北方向から東西方向に屈曲する 357 溝があり、これらは東側に位置する北東—南西方向の 750 溝と接続している。

352 溝は、検出長 23 m、幅 0.6 m 前後、深さ 0.2 m をはかる。埋土は、黄灰～灰黄色の極細砂～シルトを主体としており、一定程度の流水痕跡がみられる。底面が東側から西側にむかって傾斜しているため、内ヶ池側への排水目的の水路と認識できる。

357 溝は、検出長 12 m、幅 0.6 m 前後で、深さは 0.1 m 前後である。埋土は、褐色～黒褐色の粘土を主体としており、滞水状態で埋没したことがわかる。中世の耕作段によって削平を受けているため、北側が途切れているが、本来は北側調査区外にのびていたことが推測される。溝底の標高は、東西で大きく差がないが、地形的には北から南に傾斜しており、接続する 750 溝の方が一段深いことから、流水方向は 357 溝とは逆方向であった可能性が高い。

780 溝は、検出長 9.5 m、幅 0.6 m 前後、深さ 0.15 m をはかる。埋土は、黒褐粘質シルトを主体としており、著しい流水痕跡は確認できない。地形や底面の標高から北から南にむかって傾斜する排水溝と認識できる。南側については、調査区外のため検証の余地を残すが、屈曲して 352 溝に接続するほか、そのまま南にのびて 100 落込み（埋没谷）に連なっていた可能性も想定できる。

遺物は、土師器・須恵器・サヌカイトの剥片などが少量出土しており、大半が古墳時代以前の遺物であるが、古代の遺物を少量含む。352 溝からは土師器杯 A (308) と須恵器杯 B 底部 (309) が、357 溝からは土師器甕 (310) が出土しており、いずれも奈良時代前葉～中葉に位置づけられる。

**957 溝** (図 66・67・68・69) B-2 区東半で検出された検出長 38 m に及ぶ直線的な溝で、北西—南東方向の溝である。検出面での幅が 0.9～1.5 m、深さはいずれも 0.5 m 前後をはかる。埋土は、上層〔埋土 1〕が灰黄褐シルトを、下層〔埋土 2・3〕が褐灰～黒褐色の粘質シルトを主体としており、下部は滞水状態でゆるやかに埋没したことがうかがえる。底面の標高は、T.P.+6.4～6.5 m におさまり、東西で明確な高低差が認められないことから、用排水路ではなく区画溝であった可能性が高い。

埋土から出土した遺物は、主に古代の土師器と須恵器で、このほかに製塩土器、瓦、鉄釘、鍛冶関連遺物などが含まれる。復元率の高い遺物が一定量あり、特殊な遺物を含む点が注目される。遺物は、主に上層〔埋土 1〕から出土し、全体でコンテナ 5 箱分の出土量がある。また、西側エリアの古代の遺物の大半がこの溝からの出土であるため、周辺の後世の遺構や包含層から出土した遺物も、本来的にはこの遺構に伴うものであったとみてよい。

土器類全体に占める土師器と須恵器の出土比率は、概ね 7：3 程度の割合で土師器が多い。ただし土師器は、摩耗度合いが高いため復元率が低く、図化した遺物は須恵器にやや偏りがある。供膳具では、土師器の杯 A・皿類が一定量ある (313～318)。杯 A (316) には、暗文が僅かに残っているが、大半は器面が磨滅しているため暗文の有無がはっきりしないものが多い。須恵器供膳具では、通有の杯 A (319～321)、杯 B (324～327)、杯 B 蓋 (322・323) のほか、口縁部が内湾する杯 E (328) や高杯 (329) なども出土している。貯蔵具は、須恵器の壺類 (330～336) と大型の鉢類の破片が一定量ある (337～339)。台付の壺 Q などが主要な器種であるが、復元率が高いものは多くない。把手を伴う鉢 D (339) は、類例が少ない珍しい器種で、平城 II の標識資料の長屋王邸 SD4750 出土資料に類例がある<sup>3)</sup>。



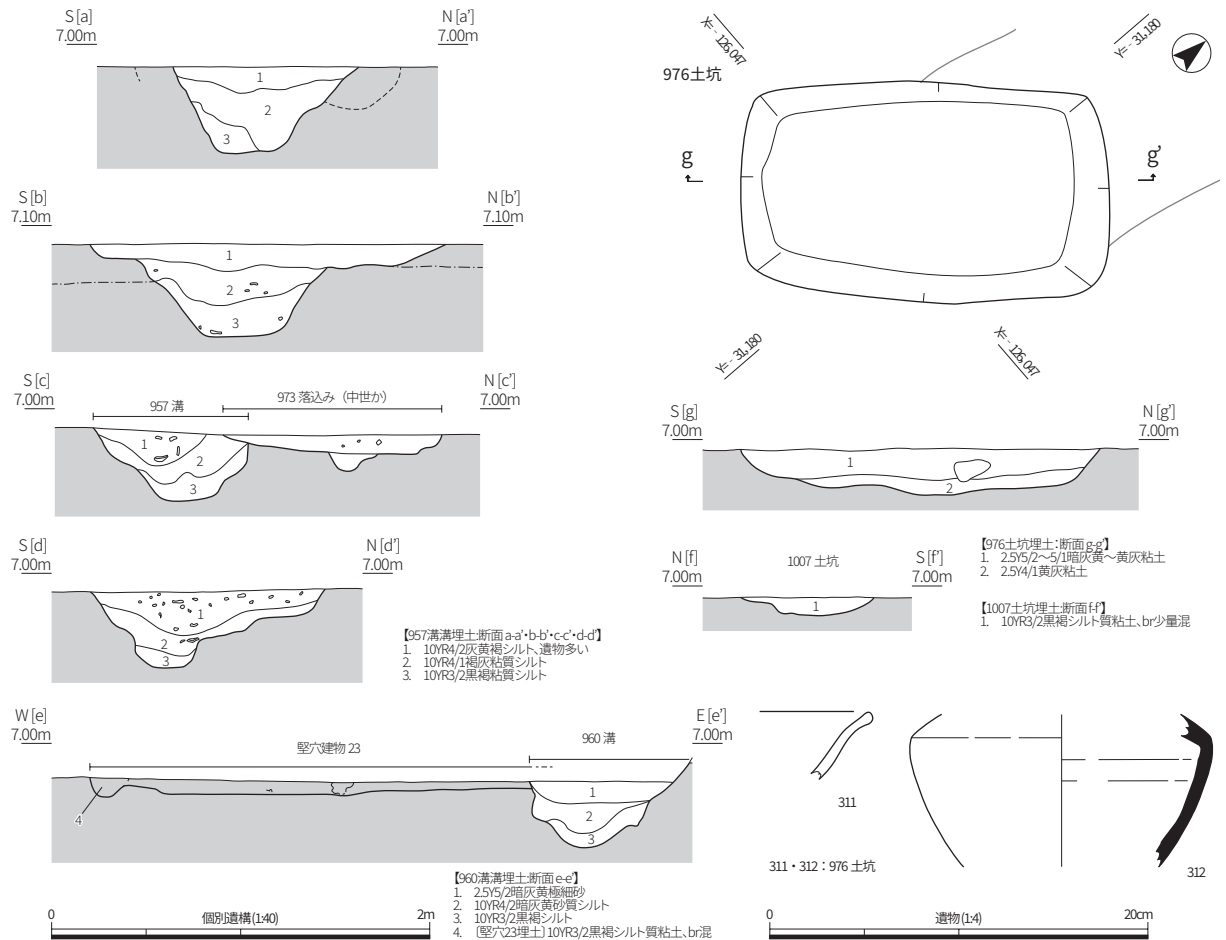
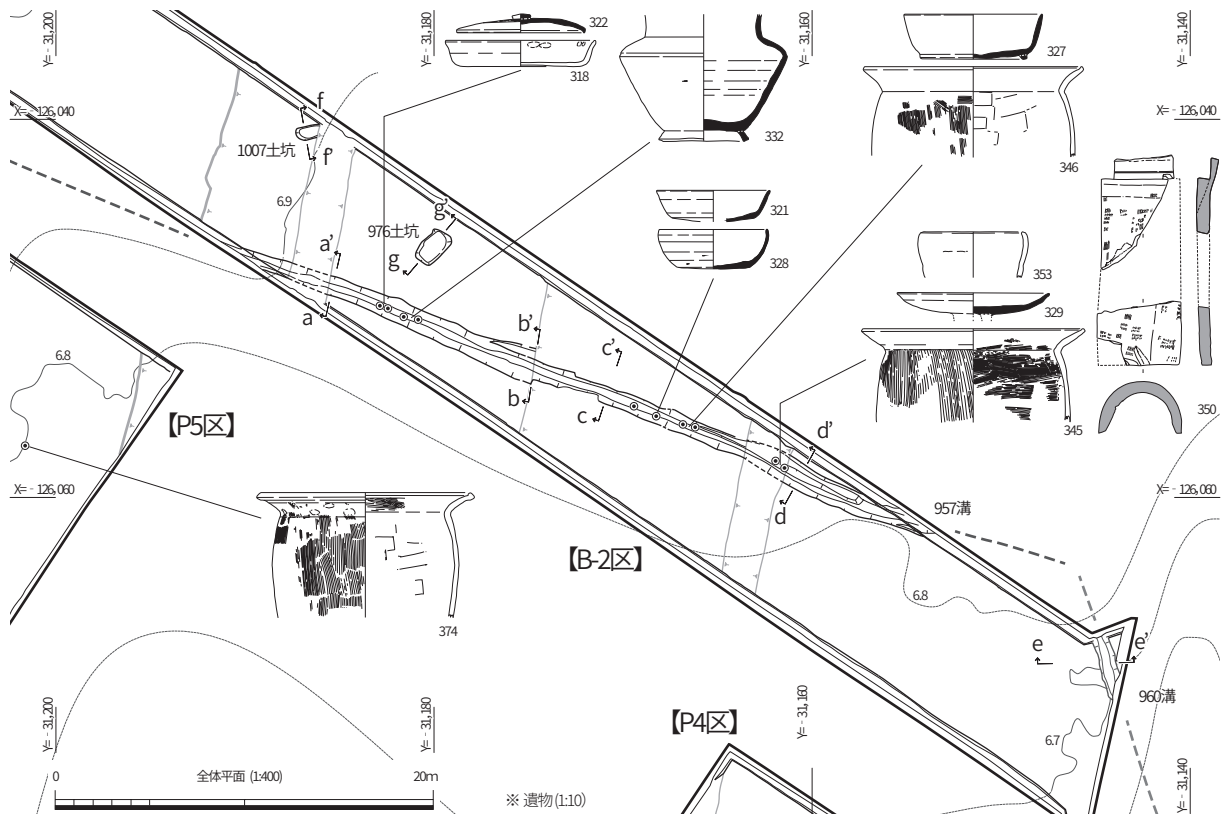


図 66. 957・960 溝、1007 土坑、976 土坑 平面・断面・出土遺物

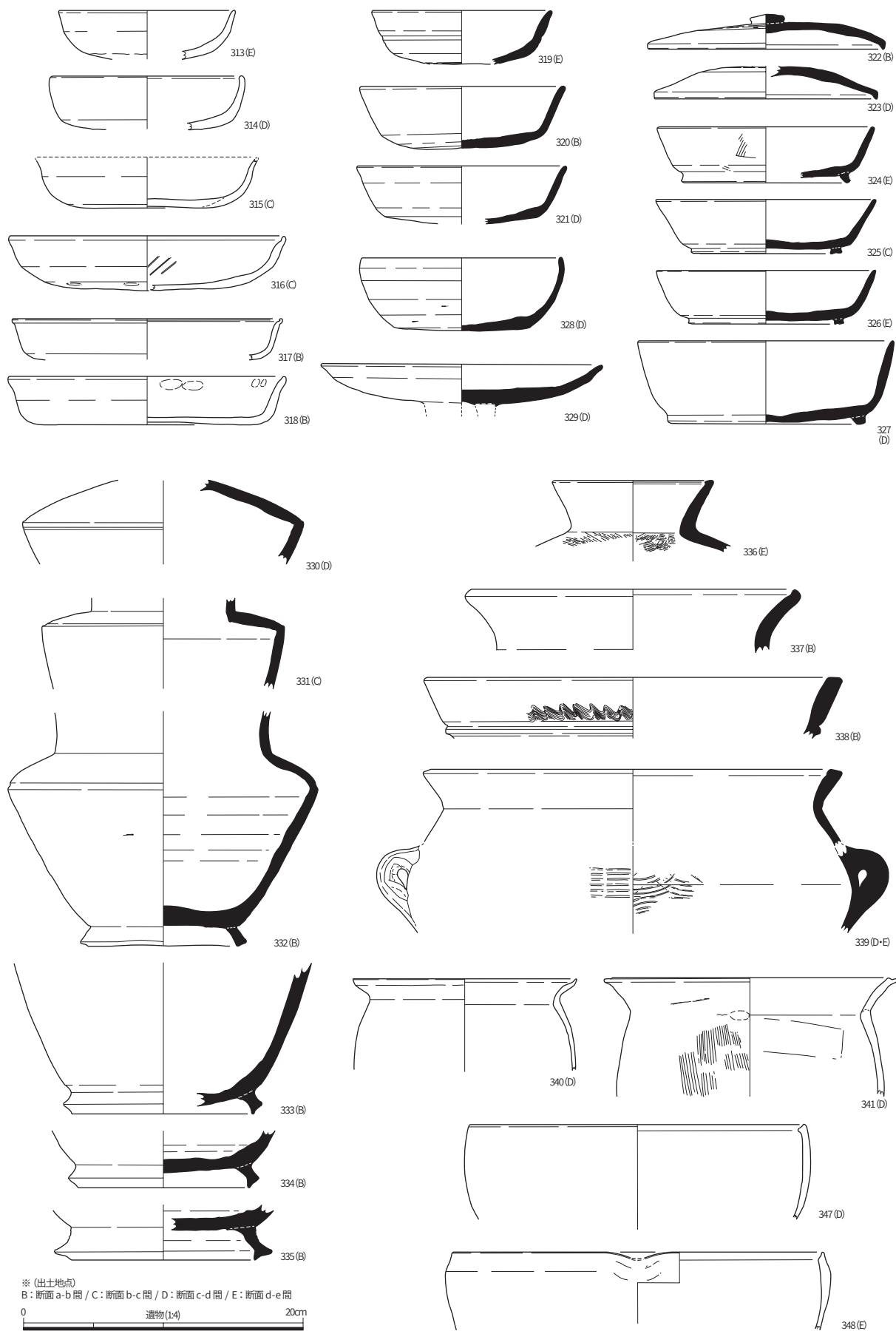


图 67. 957 溝 出土遺物 (1)

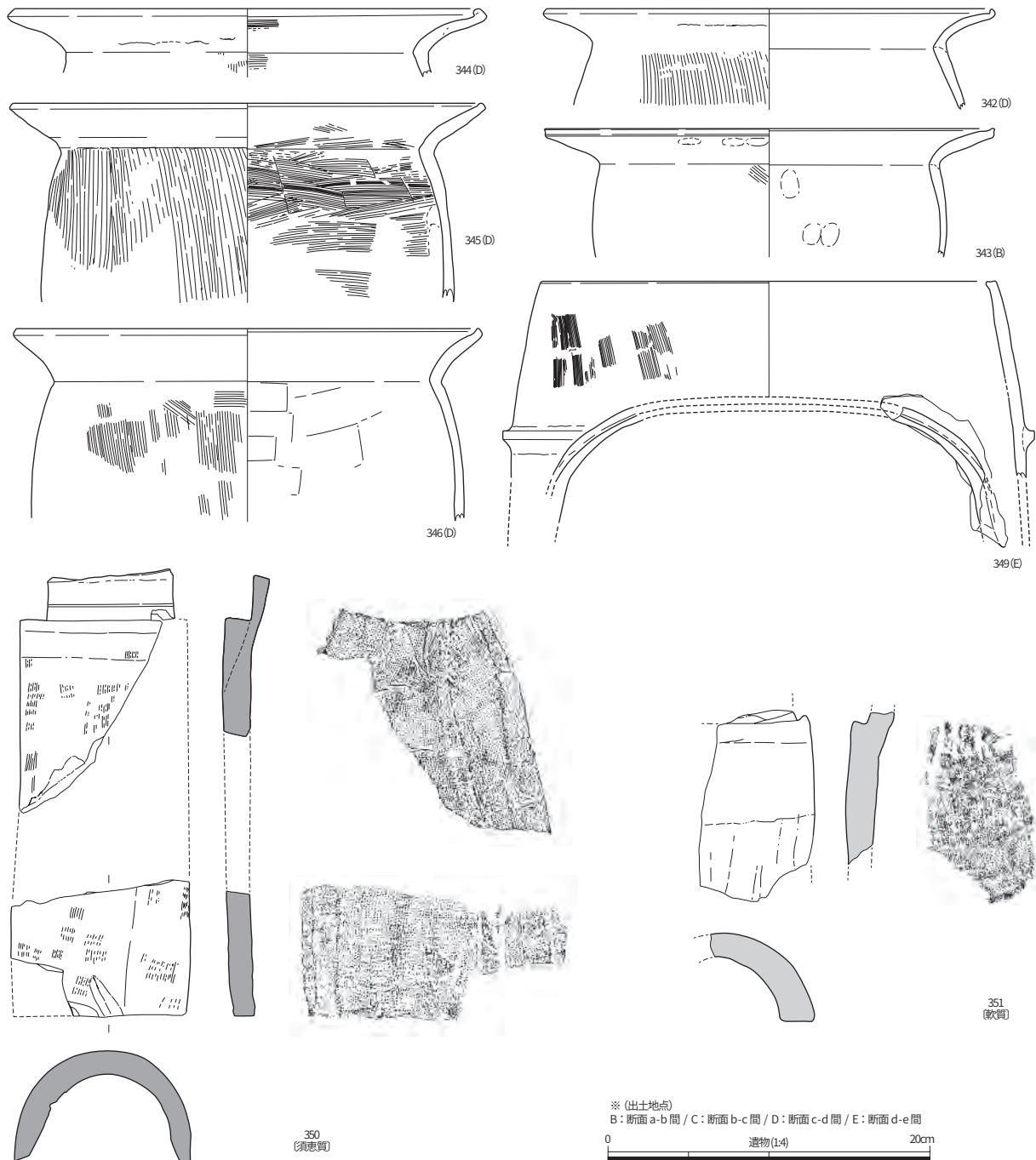


図 68. 957 溝 出土遺物 (2)

煮炊具は、大半が土師器の長胴甕 (340～346) の破片で、ほかに移動式カマドの破片がある (349)。長胴甕は、口縁部の破片から推定する限り 20～30 個体分ある。観察した限りでは、大型の甕に偏っており (342～344・346)、球胴の小型甕はみられなかった。端部は面をもつものが多く、巻き込みが顕著なものは少ない。

やや特殊な遺物としては、小型瓦や製塩土器、鍛冶関連遺物がある。小型瓦は、溝の東端、断面 d-d' 以東に出土が偏っており、丸瓦に限定される。同一個体と考える須恵質 2 点 (350) と、軟質 1 点 (351) が出土しており、ほかでは周辺から別個体の可能性が高い小片が少量出土している。須恵質の (350) は、凸面はタタキのちナデで、内面には継ぎ目がある。胎土にチャートを含んでいるため、周辺での生産が確実視でき、梶原瓦窯をはじめとする西国街道周辺の瓦窯が生産地の候補となる。なおこ

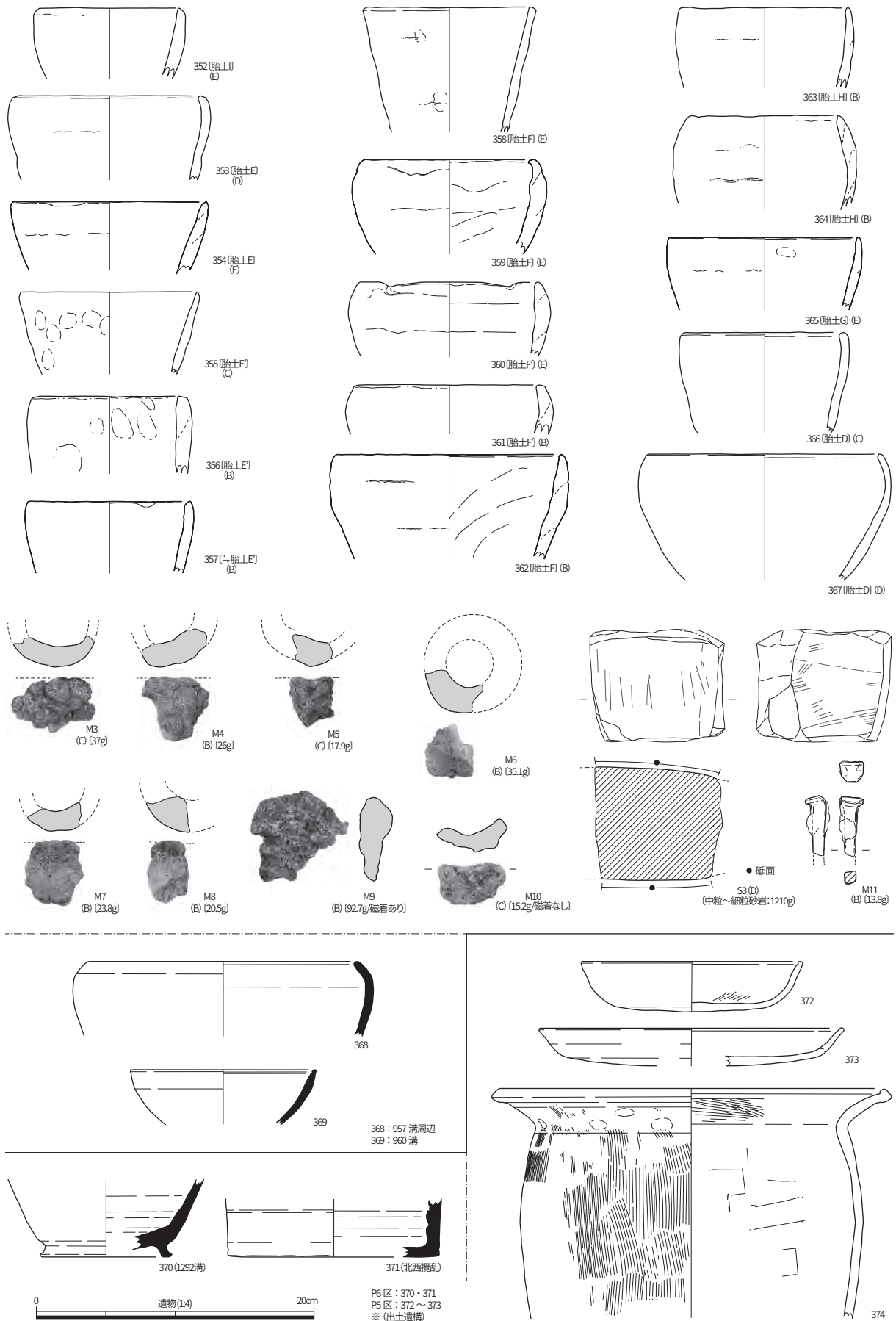


図 69. 957 溝 出土遺物 (3)、西側エリア 包含層ほか 出土遺物



の957溝の東端付近の耕作溝群からは、須恵器の鉄鉢の破片(368)も出土しており、仏教関連遺物がやや偏在的にみられる傾向がある。製塩土器は、総重量3,686.4gの出土があり、出土地点に明瞭な偏りはない。胎土が5種類程度に分別でき、淡い灰白～黄灰色のD類、赤褐色を呈し砂粒を顕著に含む粗い胎土のE類、淡い橙褐色を主体とするF類、砂粒を多く含む橙褐色のG類、器表面橙褐色で内面黒色のH類に大まかには分類できるが、胎土に多様性があることから複数生産地からの供給が推測される。大半が破片のため、全体を復元できるものはないが、口縁部から底部にむかってすぼまる砲弾形の形状のものが多い。鍛冶関連遺物は、少量の羽口と鉄滓が出土しており、溝の中央から西半に偏る傾向がある。羽口は、いずれも細片化しており、全体の形状の復元は困難である(M3～M8)。先端付近の径が6cm前後に復元できるものが多く、厚みはいずれも1.5～2.0cm前後である。先端部分の外面は硬化し、端部は顕著に発泡しているものが多い。鉄滓も少量出土しているが、出土量はごく僅かで、羽口と同様に西側からの出土に偏る(M9・M10)。硬度があり磁着するもの(M9)と、硬度・磁着がないもの(M10)とがあり、(M10)は湾曲部分が発泡しているため、羽口と接着部分が凝固化したものとみられる。製品では、鉄釘(M11)が1点出土している。このほかに砂岩の砥石(S3)が出土しており、金属製品の研磨等に使用された可能性がある。

出土遺物の時期については、土師器と須恵器の年代観から平城Ⅱ～Ⅲを中心とする。溝の上方から遺物が出土する傾向にある点をふまえると、掘削時期はこれよりもやや遡る可能性が高い。上述したように、この溝はなんらかの区画を目的とした溝と考えられるが、南側には同時期の遺構がほぼ皆無なため、北側未調査地に関連する遺構が存在する蓋然性が高い。特殊な遺物がまとまって出土している点からみても、調査地北側には手工業生産にかかわる施設や仏教関連遺構など、当該時期の重要な遺構が存在する可能性が極めて高く、周辺部の調査の進展が期待される。

**1007 土坑** (図66) B-2区の中央付近で検出された隅丸方形の土坑で、957溝の北7mに位置する。東半が中世の967水路の掘削によって削平を受けており、東西長1.3m以上、南北幅0.7m、検出面からの深さ0.09mをはかる。埋土は、黒褐シルト質粘土を主体とする。出土遺物は、土師器・須恵器の細片が出土しており、図化はできなかったが、遺物から古代に下る時期の遺構と判断した。

**976 土坑** (図66) 1007土坑の南東9m、957溝の北4mに位置する長方形の土坑である。古墳時代初頭の竪穴建物60と重複しており、切り合い関係から976土坑が後出する。規模は、長さ1.9m、幅1.2m、検出面からの深さ0.24mをはかる。埋土は、灰黄～黄灰粘土を主体とし、古墳時代の遺構埋土に比べてやや淡い色調を呈する。埋土からは、土師器・須恵器が出土しており、古墳時代と奈良時代に下る遺物が含まれる。図化した古代の遺物は、土師器の口縁部の細片(311)と須恵器壺の体部片(312)で、土師器(311)は径30cm程度に復元でき、大型の鉢と推測される。遺構の性格は不明であるが、すぐ南側に位置する957溝と近い時期の遺構であり、関連する遺構の可能性が高い。

**960 溝** (図66・69) B-2区東端で検出された北西－南北方向の溝で、重複する竪穴建物23とは切り合い関係から後出する。検出長3.0m、幅0.9m、検出面からの深さ0.45mをはかる。埋土は、下部〔埋土3〕が黒褐粘質シルトで、上方粗粒化傾向にある。埋土からは、瓦器碗の細片(369)が1点出土したため、中世に下る可能性も考えられるが、現行の耕作区画と並行・直交する方向の中世の灌漑水路とは方向が大きく異なる。このため瓦器の細片は混入の可能性が高く、上述の957溝と形状や深さが類似することから、957溝と接続する奈良時代の溝である可能性が高い。

**西側エリア包含層ほか出土遺物** (図66・69) 西側エリアで出土した古代の遺物は、P6区・P5区など

で8・9世紀代の遺物がごく僅かに出土しているが、出土量は極めて少ない。また、P5区南西端で出土した土師器皿(373)や100落込み上面から出土した土師器杯A(図107:595、P158)を除くと、調査地の北半に偏りがある。P5区北東端付近からは、土師器の長胴甕の破片(374)がまとまって出土しているが、出土地点から957溝との関連が推測される。

### 3. 中央エリア

掘立柱建物1棟と井戸1基、南北方向の溝1条が検出されているが、遺構密度は極めて低く、出土遺物も少ない。いずれも飛鳥時代後半～奈良時代の遺構で、調査地の最高所部付近で掘立柱建物26が、低地部との地形変換点付近で654井戸がそれぞれ検出されている。

**1526・1618・199溝**(図70) C-8区の1526溝、P3区の1618溝、C-3区の199溝は、一連の遺構と考えられ南北方向の溝である。検出長58mの直線的な溝で、最大幅1.0mをはかる。検出面からの深さは0.25～0.45mで、溝の底面の標高はP3区南側の断面b-b'ライン付近が最も高く、地形の傾斜に沿って北側と南側に傾斜して下がる。北側は、西側エリアD-2区の960溝と接続する可能性もあるが、軸がややずれており、それぞれが西側エリア～中央エリア間の谷部に連なることが推測される。

埋土は、おおむね暗色の泥質土を主体としており、著しい流水痕跡はみられない。このため流水目的の水路でないことは明らかであり、周辺一帯の排水を目的として掘削された可能性が高い。埋土から出土した遺物は少なく、大半が古墳時代の土師器・須恵器であるが、1618溝から飛鳥時代後葉～奈良時代前葉頃の須恵器の杯A(375)が1点出土しており、溝の機能時期の一端を示すものとみられる。

**掘立柱建物26**(図71・72) C-6区西半で検出された2間×2間または1間×1間の掘立柱建物である。四隅の柱穴は、いずれも大型で柱痕が残るが、中間の柱穴はいずれも浅く、また周辺には古墳時代の柱穴が存在するため、この建物に伴うものであるかは明確でない。規模は、南北3.6m、東西3.2mをはかり、面積11.5㎡である。建物の長軸は西に約4.0°傾く。中間の柱穴がこの建物に伴うものとみた場合、柱間寸法は1.7～1.8mで概ね揃う。柱穴の平面形は、四隅はいずれも大型の方形または隅丸方形で、このうち北西の1478Pは、方形周溝墓の埋土と重複していたため柱痕の残りが良く、柱の太さは0.25m以上になる。掘方埋土は、暗色のシルト～粘質シルトにブロックが多く混じる。

柱穴から出土した遺物は、いずれも細片で、大半が古墳時代の土師器・須恵器であるが、1405Pからは古代の土師器甕の口縁部細片(376)が1点出土している。詳細な時期比定は難しいが、1478Pの柱根のAMS年代測定を実施しており、7世紀前葉～中葉頃の年代値が得られている【第5章第2節参照】。最外皮が残存していないためあくまで参考値ではあるが、飛鳥時代中葉以降であることは確実である。周辺一帯では古代の遺構は特に少ないが、すぐ西に位置する1526・1618・199溝などの年代観をふまえると飛鳥時代後葉～奈良時代前葉頃とみるのが穏当である。

**654井戸**(図73) D-2区の東半で検出された素掘の井戸で、高所部から緩やかに下った低地部との地形変換点付近に位置する。北半分が調査区外に拡がっており、南半分のみ掘削に留まったが、井戸底面まで埋土を掘削することができた。また、調査区の北壁で基本層序との関係を明確に捉えることができ、第5層下部から井戸が掘り込まれていることも明確になった。平面形状は、正円に近い形状に復元でき、径1.9mをはかる。底面にむかって徐々にすぼまる断面形状で、深さは1.9mをはかる。底面は第9層に達しているが、顕著な湧水がみられなかった。

埋土は、上層・中層・下層に大別でき、上層はブロックや炭化物が混じることから人為的な埋戻土である可能性が高い。中層は3層に細分できるが、いずれも暗色の粘土を主体とすることから、滞水状態

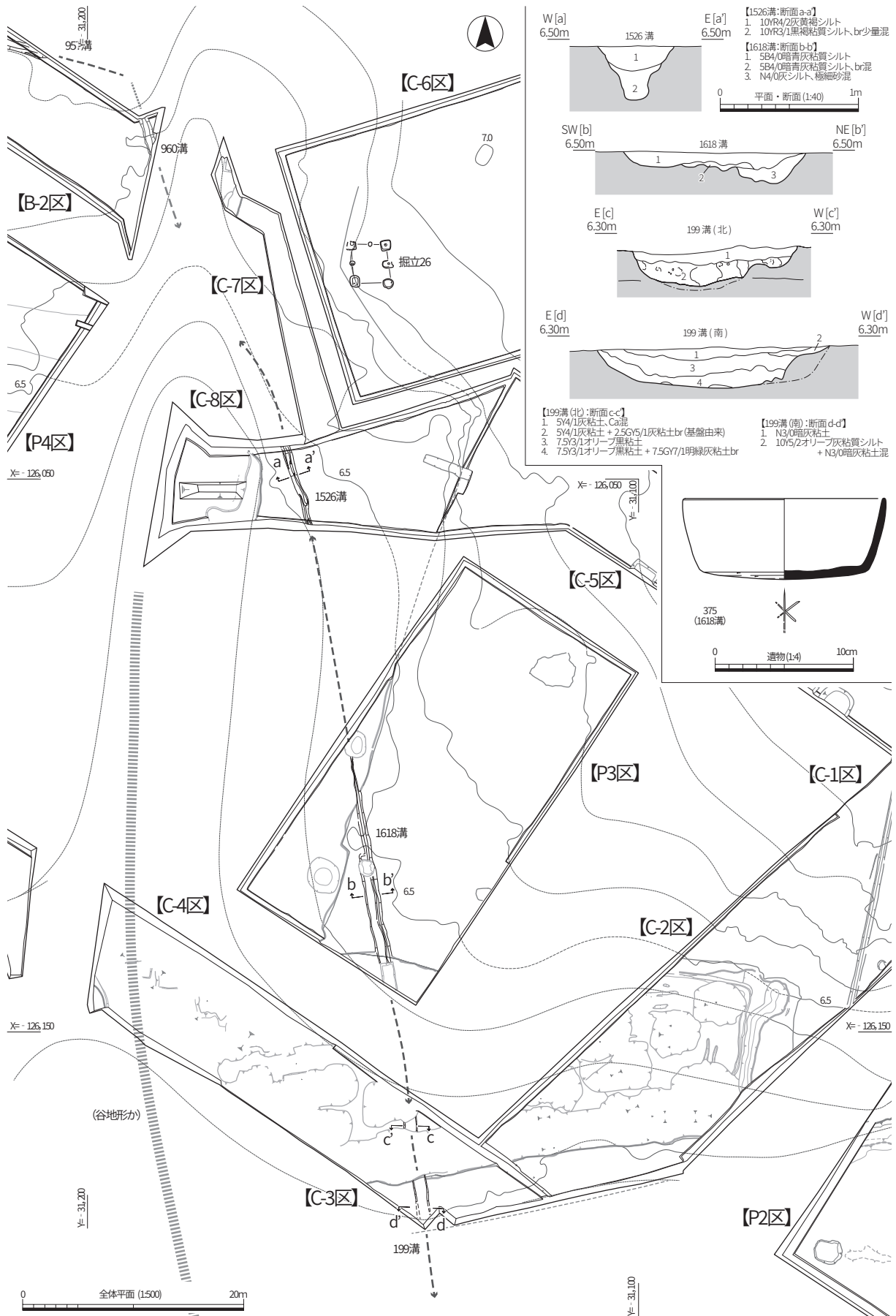


図 70. 1526・1625・199 溝 平面・断面・出土遺物

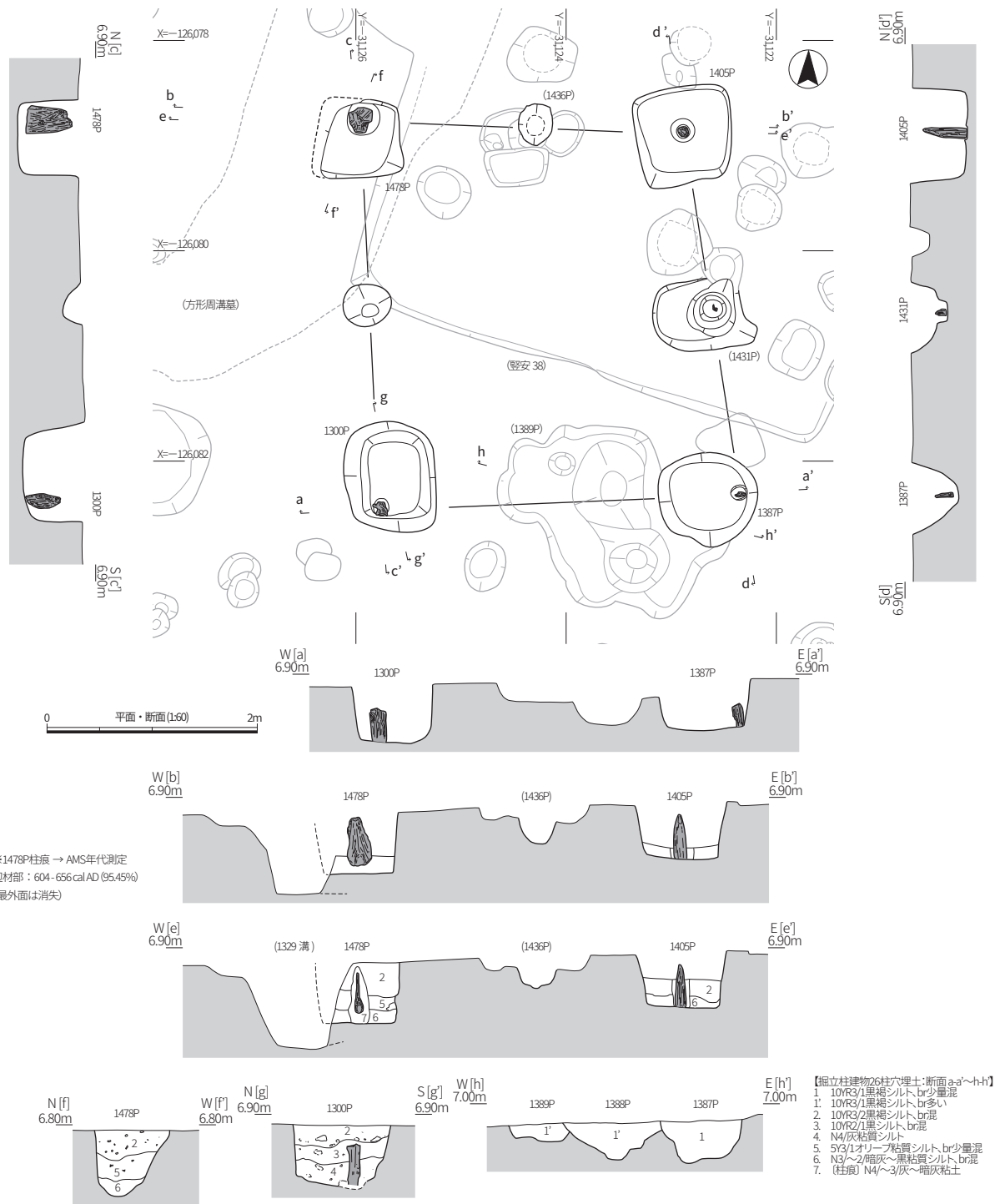


図 71. 掘立柱建物 26 平面・断面・出土遺物

で徐々に埋没したことがわかる。各層の下部に薄く炭化物が溜まっており、その直上に遺物が介在している。このことから遺物の投棄が複数回に亘っていたことがうかがえ、特に中層3からはまとまった遺物の出土がみられる。下層は、緑灰極細砂を主体としており初期の流入土と判断できる。

埋土からは、土師器・須恵器・製塩土器がまとまって出土したほか、種子も多数含まれていた。種子については、種類が多様であり、詳細な内訳は【第5章第4節】にて示している。その多くは、周辺に生息する雑穀類の種子の混入と考えられるが、ヒョウタンが一定量含まれており、これについては意図的に投棄されたものと判断できる。土器類については、[上層]・[中層1]・[中層3] からまとまった



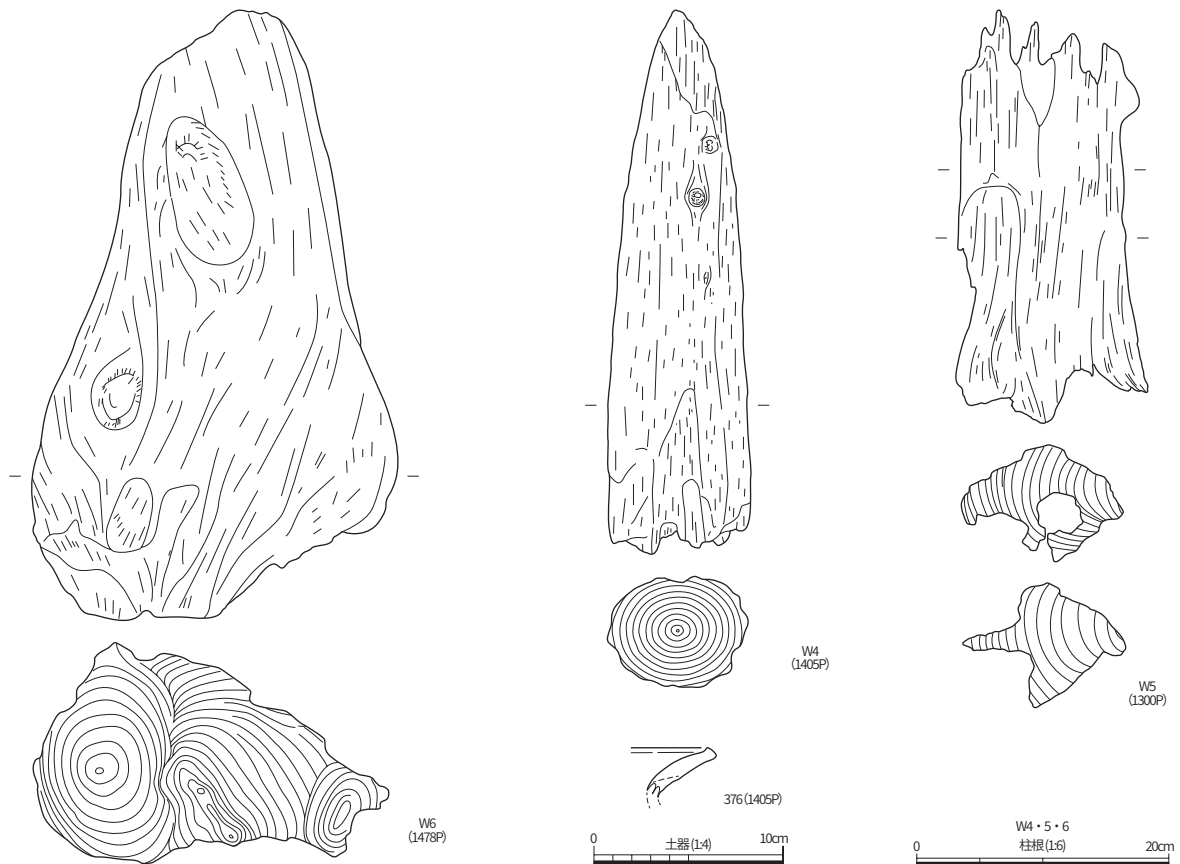


図72. 掘立柱建物26 柱根・出土遺物

量の出土があり、下層出土遺物は調査範囲内では土師器の小型甕に限られる。また、上層から下層まで出土層位を隔てて遺物に接合関係が認められることから、土器は意図的な破壊を受けた上で、段階ごとに投棄されたことがわかる。

出土遺物の内訳は、土師器・須恵器の供膳具と土師器の煮炊具はあるものの、現状では貯蔵具は出土が確認できない。供膳具は、土師器杯A (378・380)・杯C (377)・皿A (379)・須恵器杯A (381・382)があり、平底食器に偏るのが特徴である。このなかで須恵器杯A (382)は、外面に「つ」の墨書がある。煮炊具のうち甕は、小型甕 (383～387)と大型の甕 (388～390)に大別でき、ほかに片口鉢 (391)がある。甕の口縁は、端部に面を持つものが多く、巻き込むものはない。また大型の甕は、肩部が張る形状のものが多いのも特徴である。片口鉢については、体部外面に煤が明瞭に付着している。製塩土器は、上層～中層3にかけて出土しており、総計840.7gが出土した。北側の半分以上が未調査である点をふまえると、2kg以上の投棄があったことが推測できる。細片化したものが多く、図化できたものは4点のみに留まる (392～395)。胎土は、著しく粗い素地で硬質のA類と、石英・長石を含むやや粗い素地で硬質のB類、長石等を含みやや軟質のC類に大別できる。大半がA類で、C類はいずれも細片のため図化していない。なお957溝出土の製塩土器とは、いずれも胎土が異なっており、生産地が異なっていた可能性が高い。これらの出土遺物は、概ね平城Ⅱ～Ⅲに位置づけることができる。

**中央エリア包含層ほか出土遺物** (図74) 中央エリアで出土した古代の遺物は、654井戸を除けば極めて少ない。8世紀代の遺物 (396・397・401・403・404など)については、当該時期の遺構が少なからず分布するため、こうした遺構との関わりの中で理解できるが、その一方で9世紀に下る須恵器杯A (400)、灰釉陶器壺 (398)、緑釉陶器椀 (399)などもごく僅かにあり、どのような脈絡で出土したも

第4章 遺構・遺物

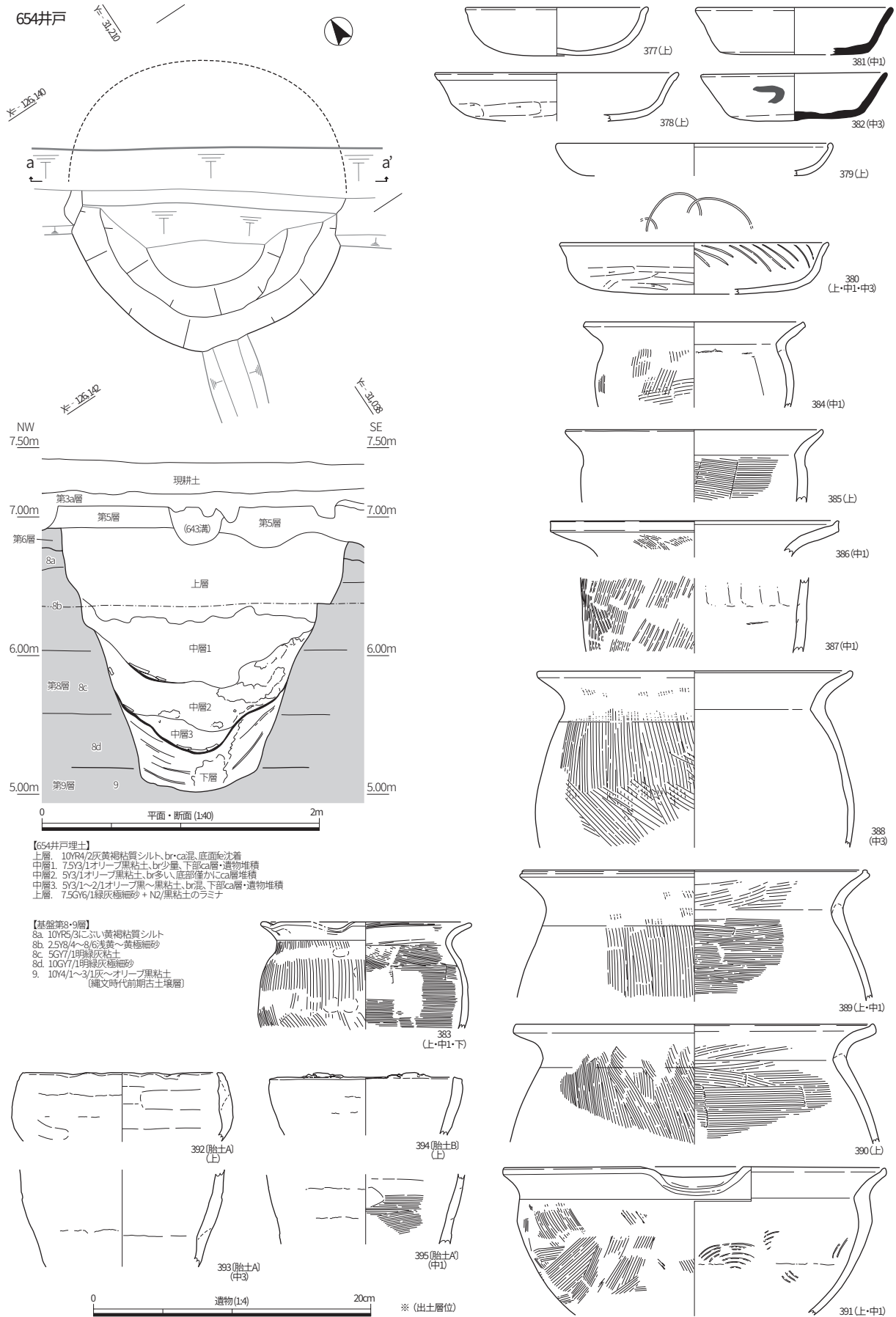


図 73. 654 井戸 平面・断面・出土遺物

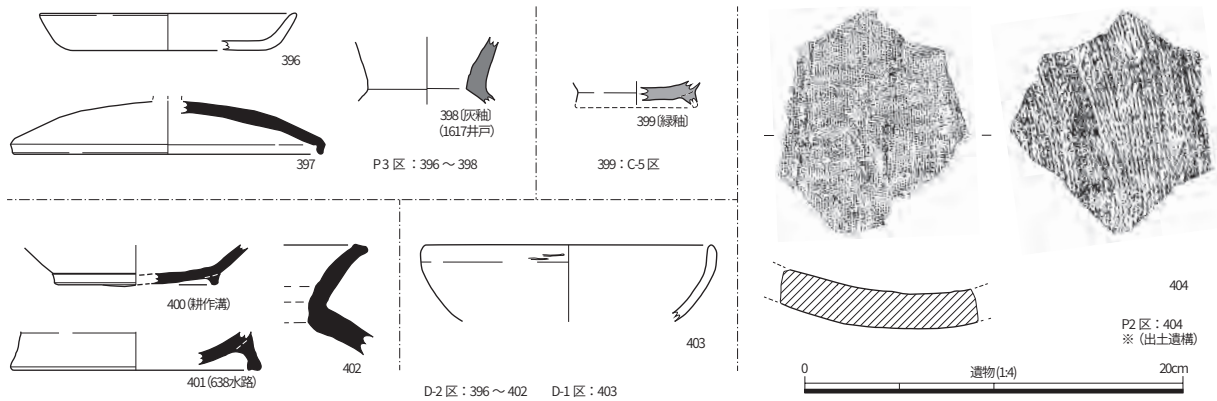


図 74. 中央エリア 包含層ほか 出土遺物

のかは不明である。また平瓦（404）は、今回の調査で出土しているほかの同時期の瓦と同様に梶原瓦窯産とみられるが、これについても出土背景は不明である。

#### 4. 東側エリア

竪穴建物1棟と掘立柱建物2棟が検出されたほか、北西—南東方向の溝が複数検出されている。遺構密度が高いとはいえないが、ほかのエリアに比べると相対的に遺構の数が多く、包含層中からは復元率の高い遺物が一定量出土している。時期については、飛鳥時代の遺構・遺物が多く、次いで平安時代前半（9世紀代）の遺構・遺物が少数みられるが、奈良時代を主とする西側エリアと中央エリアとは様相を異にしており、中央エリアと東側エリアの間の谷を隔てて古代の遺跡の展開に大きな違いが見出せる。2時期にわかれることから、飛鳥時代→平安時代前半という順で報告する。

**竪穴建物 54**（図 76） P14 区北端で検出された建物で、北東側の約半分が調査区外にかかる。最終遺構面で輪郭を検出したため、調査時には古墳時代中期の遺構と認識していたが、埋土から出土した遺物が飛鳥時代のものに限られることから、古代の遺構と判断した。また上層遺構面の調査時には、上面で羽釜や甕がまとめて出土しており、竪穴建物に伴う遺物と理解している。

規模については、南北長 3.6 m をはかり、東西長は不明であるが 4 m 以上に復元できるため、やや東西に長い方形を呈する。深さは最大で 0.15 m をはかるが、上面が中世の耕作による削平を受けているため、本来の深さは不明である。壁溝は、幅 0.25 m 前後、深さ 0.05 cm 前後をはかる。床面にごく浅いピット状の凹み（2037P～2039P）がみられるが、明確な支柱穴は検出されなかった。古墳時代中期以降の小型の竪穴建物には、支柱穴を伴わないタイプの建物が存在するため、支柱穴はもともと伴わない構造であった可能性が高い。南側の壁際の一面には、焼土と炭化物が面的に分布する被熱面が検出され、その位置からみてカマドの痕跡とみるのが妥当である。また壁面には、土坑状の掘り込み（2013 土坑）が確認できるが、これについては竪穴埋土の上面からの掘り込みであるため、埋没後の遺構と判断できる。

埋土から出土した遺物には、土師器杯H蓋（405）や土師器甕の口縁部片（411）などがあり、被熱面からは須恵器甕の体部片（408）が出土している。ほかにも上面や周辺側溝内からも同時期の遺物がまとめて出土しており、これらの遺物もこの竪穴建物に直接伴う遺物と認識できる。このうちの須恵器杯（407）については、本来であれば杯H蓋とみなせるものであるが、天井部分が明確に平らな部分があり、杯身として使用されたと判断した。土師器の甕（409）と羽釜（410）は、胎土に角閃石を含む生駒西麓産の搬入品で、カマドでの使用が想定できる。これらの遺物の時期については、いずれも飛

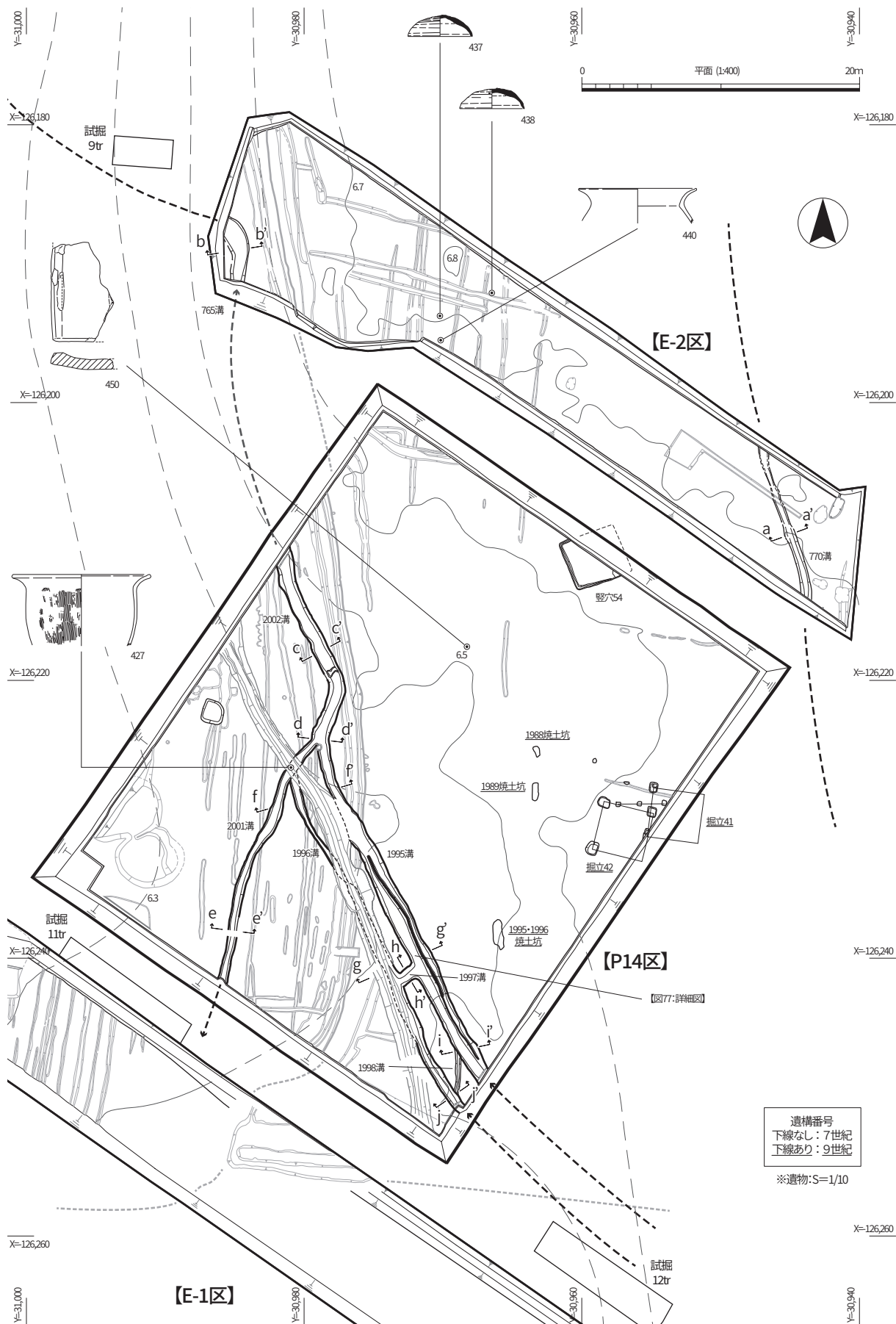


図 75. 東側エリア 古代遺構 全体平面図



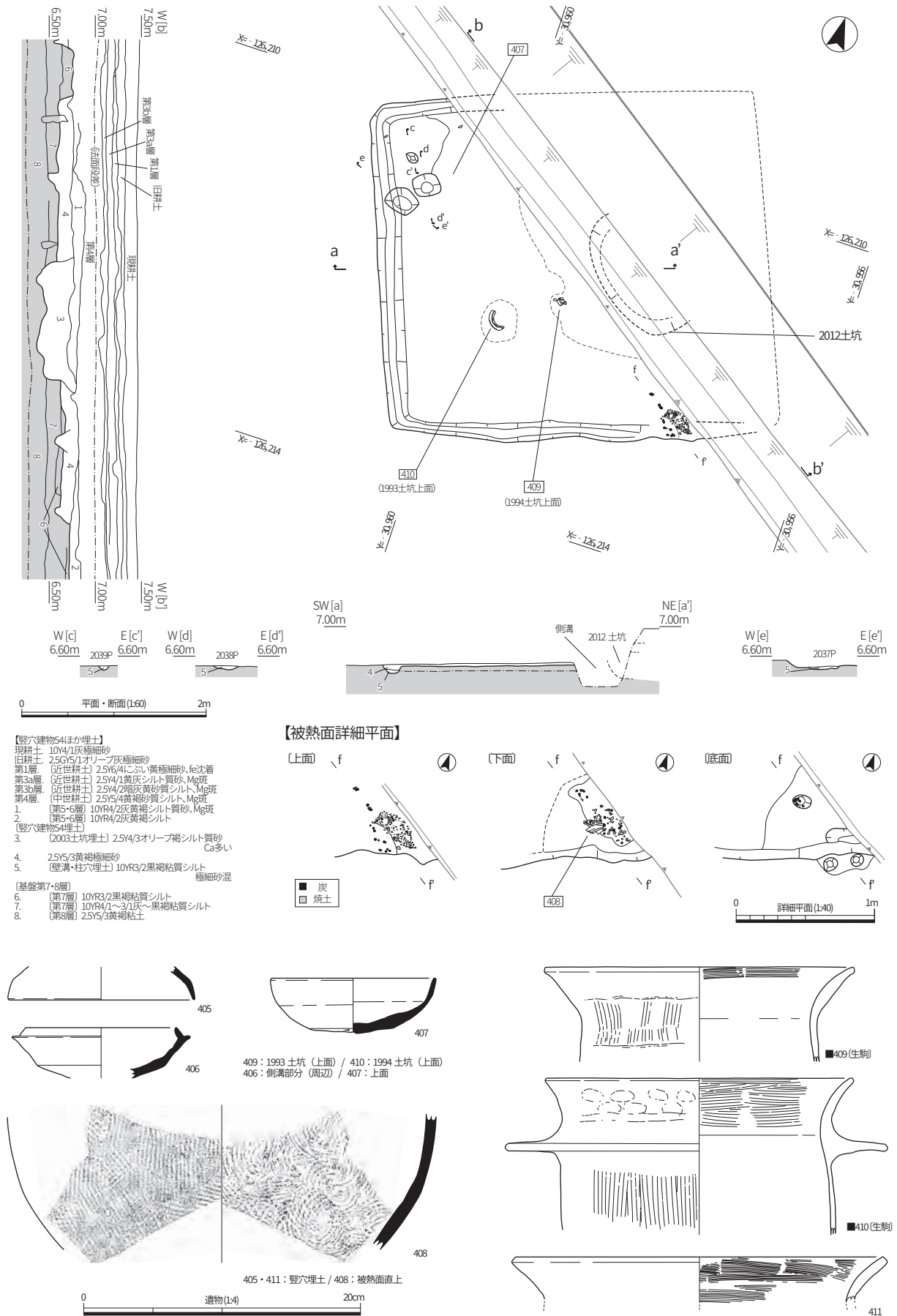


図76. 堅穴建物54 平面・断面・出土遺物

鳥 I 古段階頃に位置づけることができ、7世紀前葉の年代観を与えることができる。

なお大阪府域では、竪穴建物は飛鳥時代以降は激減して、掘立柱建物へと移り変わっていくが、飛鳥時代前半までの事例は一定数みられることが指摘されている<sup>4)</sup>。カマドを伴うことから、古墳時代後期に通有の構造の建物が継続したと認識するのが穏当である。

**2000 土坑** (図 77・78) P14 区中央西端で検出された隅丸方形の土坑で、検出面の規模は一辺 6 m をはかる。検出面からの深さは 0.27 m をはかるが、周辺一帯は中世の耕作段の造成で大きく削平を受けている。埋土は、暗緑灰極細砂を主体とし、下部に堆積するブロック土は、加工時形成層と判断できる。出土遺物は、土師器・須恵器の細片が少量している。古墳時代に遡るものが多いが、須恵器杯 B 蓋(428)の細片が 1 点出土しており、飛鳥 IV～V 頃の遺構と認識できる。遺構の機能・性格は不明であるが、後述する水路群とほぼ同時期であり、関連する遺構とみてよいだろう。

**765・2002・2001・1995・1996 溝ほか** (図 75・77・78) P14 区の南西側で検出された 1995・1996・2002 溝は、等高線に沿うようにして北西—南東方向にのびており、位置関係からみて E-2 区西端で検出された 765 溝も同一の遺構と認識できる。北半は一条の溝であるが(765・2002 溝)、南半は分岐して溝 2 条が並行してのびている。南東側に接続部分(1997 溝)があるため、同時に機能していたことは確実で、溝底の標高は北側の 1995 溝が相対的に高い。さらに北側の 1995 溝は、再掘削された痕跡も確認でき、分岐点付近は南南西方向にさらに別の 2001 溝が派生している。

765・2002・1995・1996 溝は、検出長 65 m、最大幅は 1.4 m、検出面からの深さ最大 0.4 m をはかる。ただし東側高台では、検出面が土壌化した第 7 層を基盤としていたため、肩部の検出がやや難しく、上面をある程度削り込んだ状態で全体を検出したため、本来の溝は 0.1～0.2 m 程度深い。埋土は、南東側の 1995・1996 溝が主にシルト～極細砂を主体とするのに対し、北側の 2002・796 溝は泥質土を主体とするなど、地点によって様相がやや異なる。周辺一帯の地形は、大まかには北から南に傾斜しているが、溝の底面の標高は、南東端の断面 i-i'・j-j' 付近が T.P.+6.2 m 前後、分岐点の d-d' 付近が T.P.+6.1 m 前後、北側の断面 b-b'・c-c' 付近が T.P.+6.0 m 前後で、地形とは逆方向の南から北にむかって緩やかに下がる点の特筆される。さらに分岐点付近の北側で溝がやや深くなっており、南から流水して北半で水が滞留するような構造であったことがわかる。溝の上手にあたる南東側は、調査区外へのびているが、周辺一帯の地形の検討や試掘調査の結果などから、調査地東側は地形が落ち込むことが判明している。このため、舌状にのびる微高地 D の南端裾を等高線に沿って溝を掘削し、地形に逆らって南側から北側に水を引き込んだことがわかる。北西の延長方向については、やや不明な点が多いが、先端部分がやや西向きに屈曲しており、西側にある谷に接続するものとみられる(図 64)。分岐点から南側に派生する 2001 溝については、分岐点から南端までの長さが 20 m、幅 0.6 m 前後、深さ 0.2 m をはかる。極細砂を主体とする埋土で、地形の傾斜に沿って底面が北から南に僅かに低くなっていることから、分岐点から南に排水されていたことがわかる。南側の延長部分にあたる E-1 区では、この溝の続きは検出されなかったが、溝が浅いため上面が中世の耕作段の造成で削平された可能性が推測できる。

埋土から出土した遺物は、総じて少なく、古墳時代の土師器・須恵器とともに古代の土器の破片が少量出土している。ただし復元率の高い遺物が集中して出土する地点があり、1995 溝と 1997 溝の分岐点付近で土師器長胴甕(427)が、1996 溝と 2001 溝の分岐点付近で土師器の長胴甕(422)と須恵器杯 B(413・414・416・417)・杯 B 蓋(412)・高杯(419)がまとまって出土している。特に 195 溝の長胴甕(422)については、胴部中央の一部分と底部のみが欠損しているため、意図的な破壊を受けた

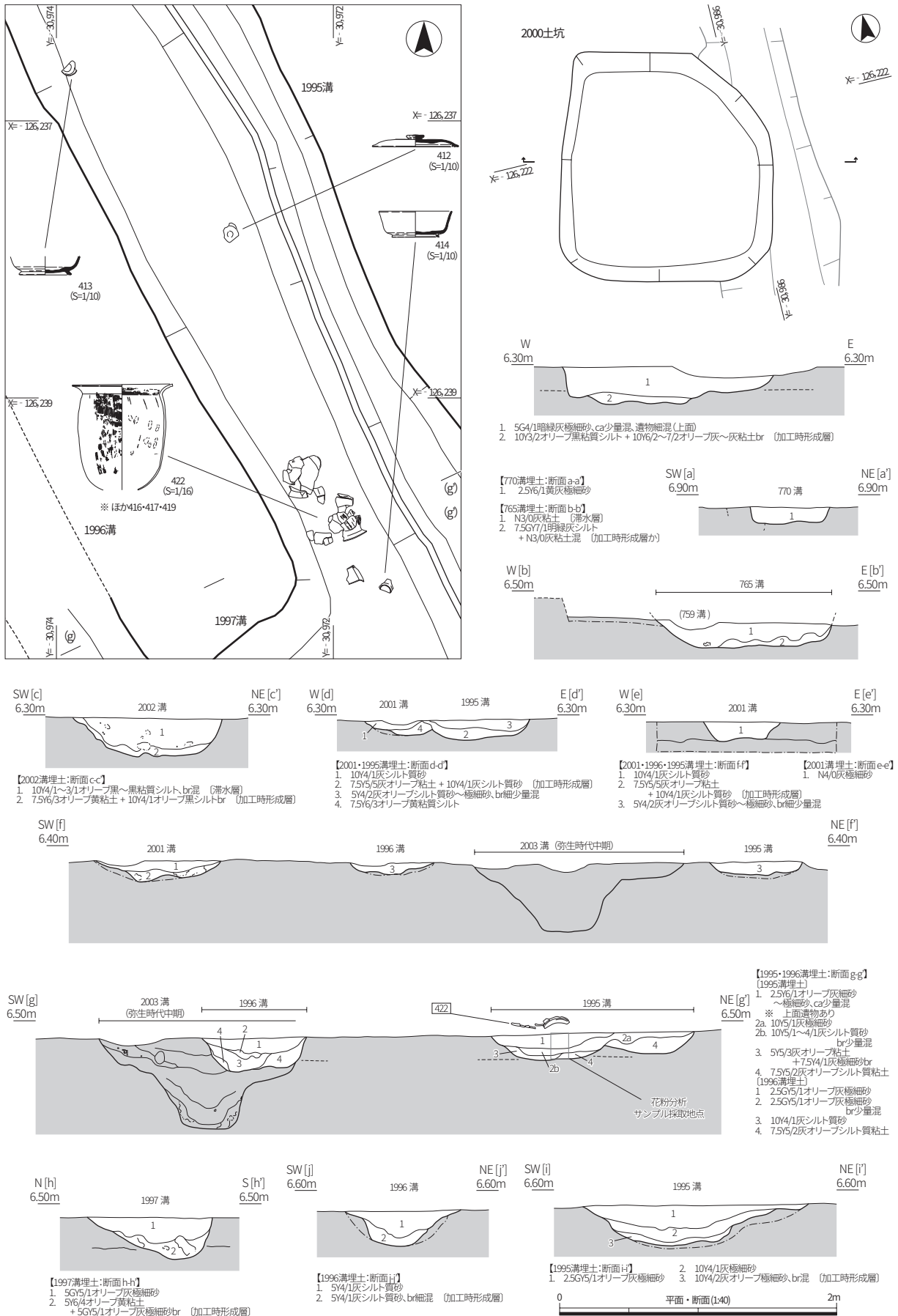


図77. 東側エリア 溝群・2001土坑 平面・断面

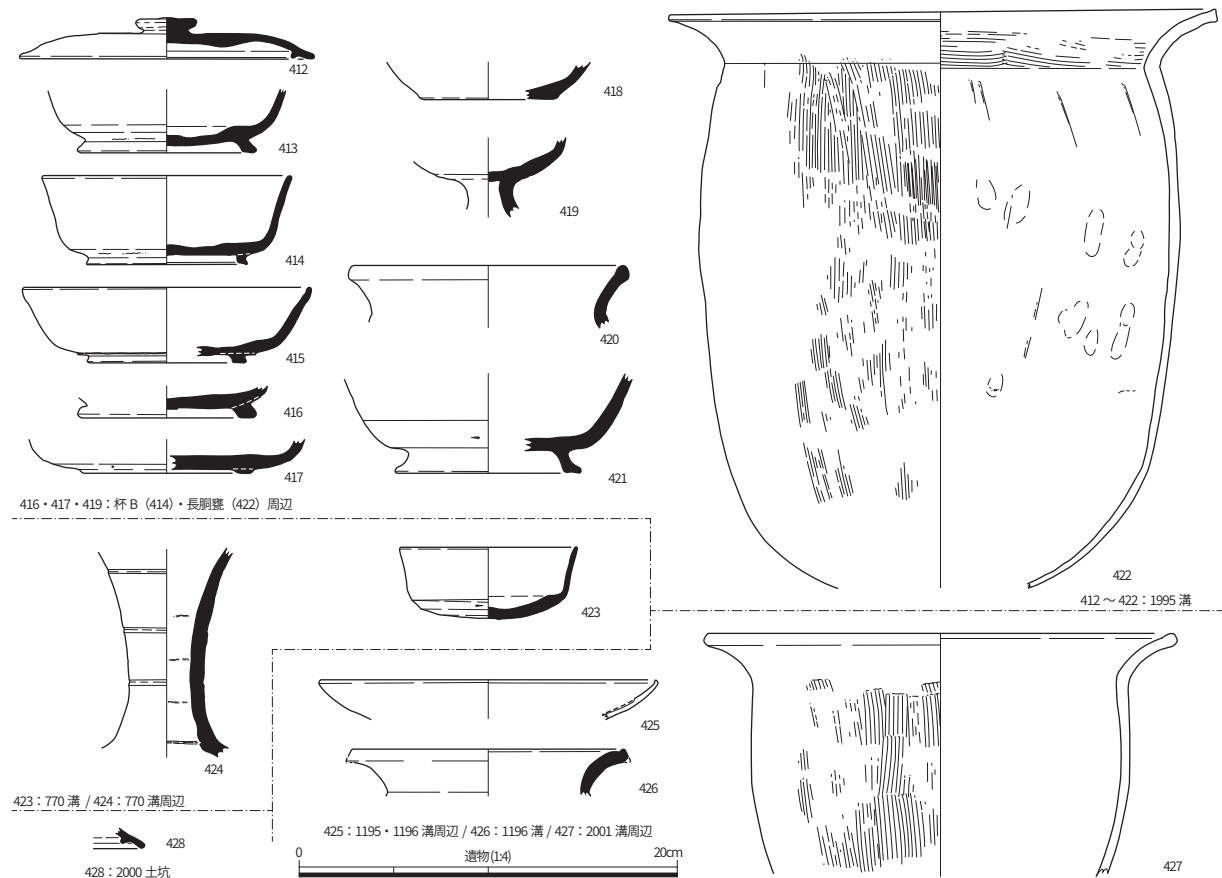


図 78. 東側エリア 溝群・2001 土坑 出土遺物

上で投棄されたことは明らかである。図化した遺物は、高台付平底食器の杯Bがまとまっており、飛鳥IVを中心とする7世紀後葉頃を中心とする。ただし、上述した1995溝の長胴甕と杯Bを主体とする土器集中部は、溝の埋土最上層からの出土であり、これらはおおよそ溝の埋没時期を示すものとみられる。溝の掘削・機能時期はやや遡ることが推測でき、包含層中の出土遺物や周辺の遺構の年代観などから、7世紀前葉頃まで遡る蓋然性が高い。

**770 溝** (図 75・77・78) E-2 区東端で検出された南北方向の溝で、検出長 11 m、最大幅 0.7 m をはかる。検出面からの深さは 0.1 m で、埋土は黄灰極細砂を主体とする。上述した P 14 区の溝群とは、約 35 m 隔てて概ね並行しており、関連する遺構と認識できる。ただし底面の標高は、この 770 溝の方が 0.5 ~ 0.7 cm ほど高い。埋土からは、古墳時代の土師器・須恵器のほかに、飛鳥Ⅲ~Ⅳ頃の杯 G (423) が出土している。周辺からは、近い時期の長頸壺の破片 (424) も出土しており、西側の水路群と概ね時期も一致する。飛鳥時代の遺構が存在する微高地の東端付近にこの溝があり、もともとの地形も東に向かって下がっていくことから、微高地部分の区画を目的とするような性格が推測される。

**掘立柱建物 41・42** (図 79) P14 区中央東端で検出された 2 棟の掘立柱建物で、部分的に重複し、一部は調査区外に拡がる。埋土から時期を直接示す遺物の出土がないため、詳細な時期比定ができないが、大型方形の柱穴を伴っており、古代の建物である蓋然性が高い。

2 棟の建物のうち、残りの良い西側の掘立柱建物 42 は、南北 1 間×東西 1 間以上の構造で、規模は南北長 3.5 m、東西長 3.8 m 以上をはかる。建物の南北軸は、東に 9.8° 傾く。1 間×1 間の構造と仮定した場合の面積は、13.3 m<sup>2</sup> である。柱穴は、いずれも大型方形で、規模は一辺 0.7 ~ 0.9 m、深さは 0.3



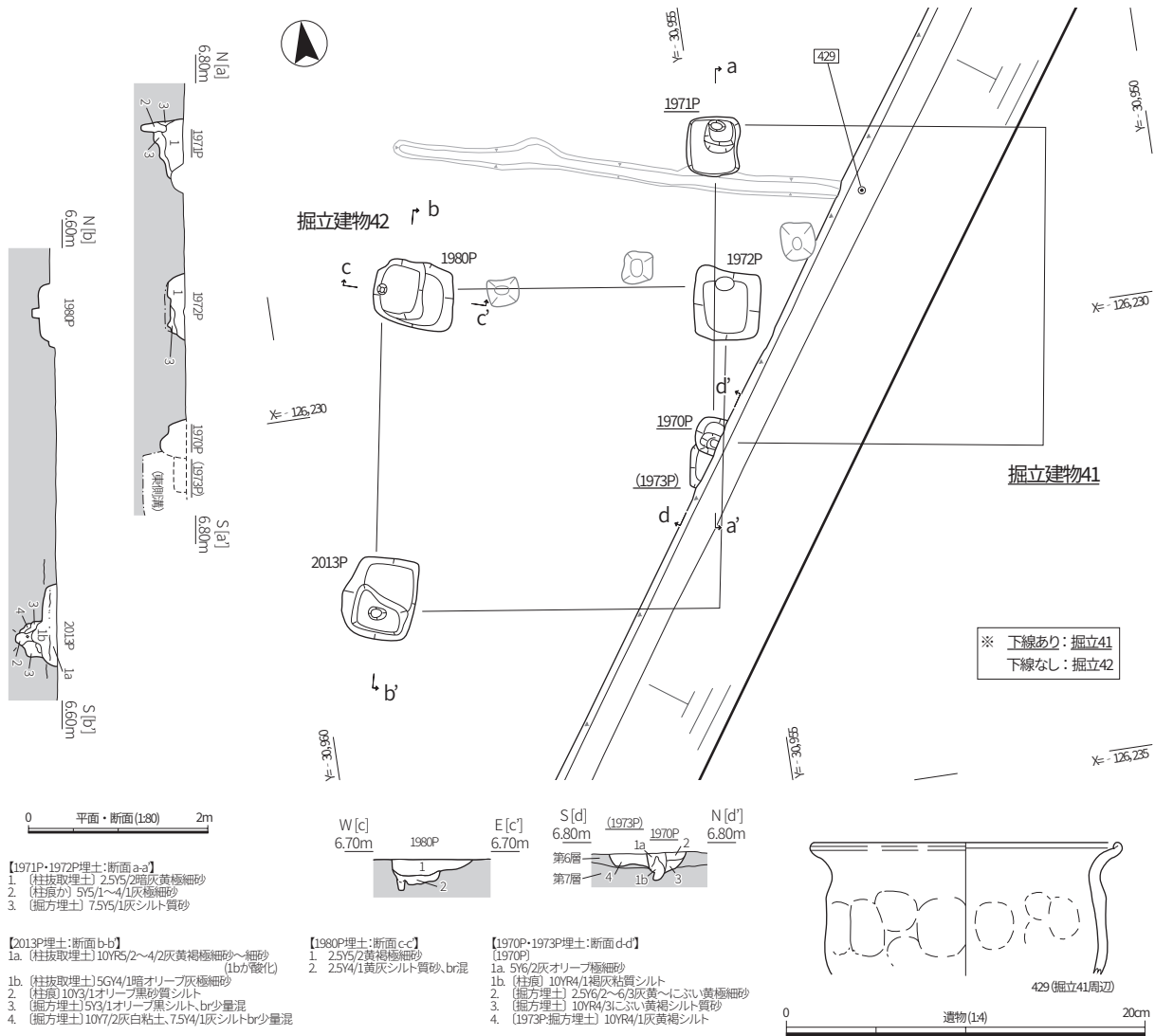


図 79. 掘立柱建物 41・42 平面・断面・出土遺物

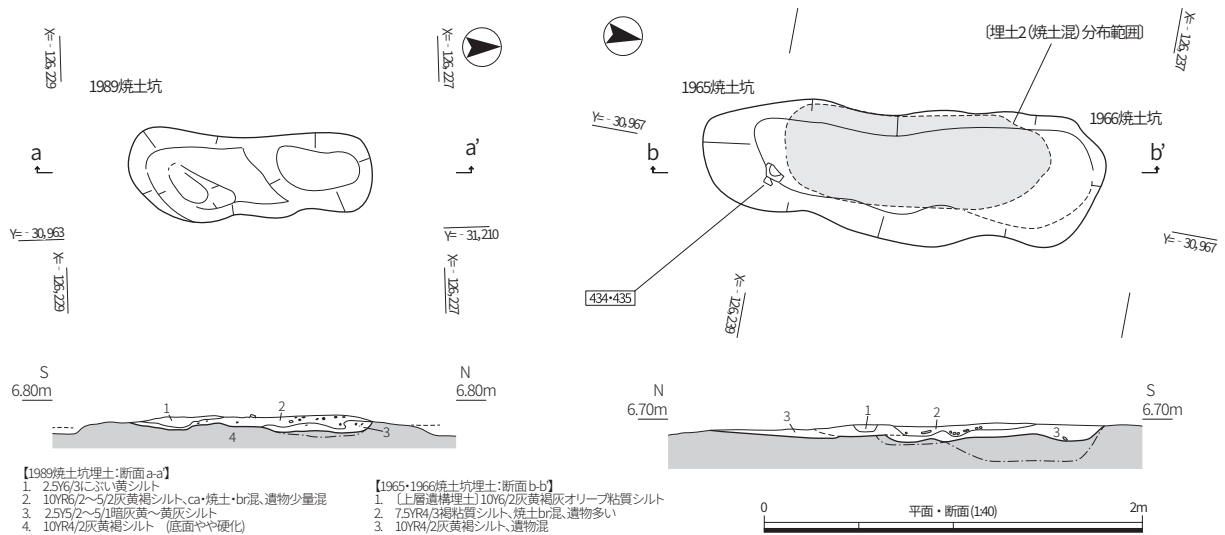
～0.4 mをはかる。柱痕が明瞭に残り、柱の太さはいずれも 0.15 m前後である。

東側の掘立柱建物 41 は、北西の 1971P と南側の 1970P が組合う可能性が高く、西側の柱筋が掘立柱建物 42 の東側の柱筋とほぼ重複した位置にある。柱間隔は 3.5 m で、掘立柱建物 42 の南北長と一致する。建物の南北軸は東に 9.0° 傾く。構造は明確でないものの、掘立柱建物 42 と同様に 1 間×1 間構造の可能性が高い。北西の 1971P は、掘立柱建物 42 と比べてひとまわり規模が小さい。柱穴の平面は方形で、規模は一辺 0.6 m、深さは 0.45 m をはかる。柱痕から柱の太さは 0.15 m に復元される。

埋土から出土した遺物はごく僅かで、上述したように時期を示すような遺物に恵まれていない。1971P や 1980P から古墳時代初頭～中期の土師器の細片が数点出土しているが、いずれも周辺からの混入と判断できる。詳細な時期は不明であるが、構造から古代に下る可能性が高く、周辺出土遺物から 7 世紀または 9 世紀のいずれかの時期と推測される。やや根拠は弱いだが、この建物の内側で 9 世紀代の土師器甕 (429) が 1 点出土しており、その点を重視すれば 9 世紀に下る可能性が想定できるだろう。

**1988・1989 焼土坑(図 80)** P14 区の中央西寄りで見出された 1989 焼土坑は、南北に長い楕円形を呈し、長さ 1.3 m、幅 0.4 m、検出面からの深さ 0.09 m をはかる。埋土に焼土や炭化物、ブロックを顕著に含む浅い掘り込みであるが、第 5 層掘削中に存在を確認したため、掘り込み面はより上位であった可能

第4章 遺構・遺物

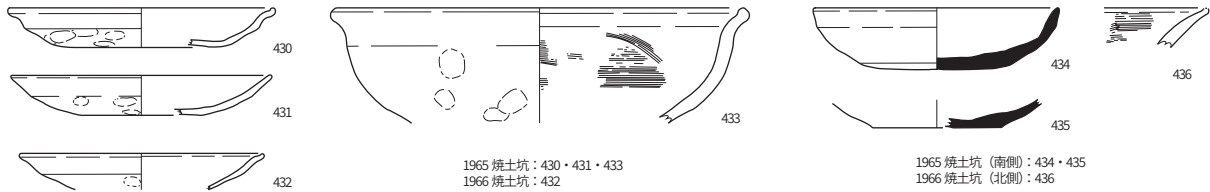


【1989焼土坑埋土:断面a-a】

1. 2.5Y6/3い黄シルト
2. 10YR6/2~5/2灰黄褐シルト、ca・焼土・br混、遺物少量混
3. 2.5Y5/2~5/1暗灰黄~黄灰シルト
4. 10YR4/2灰黄褐シルト(底面やや硬化)

【1965・1966焼土坑埋土:断面b-b】

1. [上層遺構埋土]10Y6/2灰黄褐灰オリーブ粘質シルト
2. 7.5YR4/5褐粘質シルト、焼土・br混、遺物多い
3. 10YR4/2灰黄褐シルト、遺物混



包含層ほか出土遺物

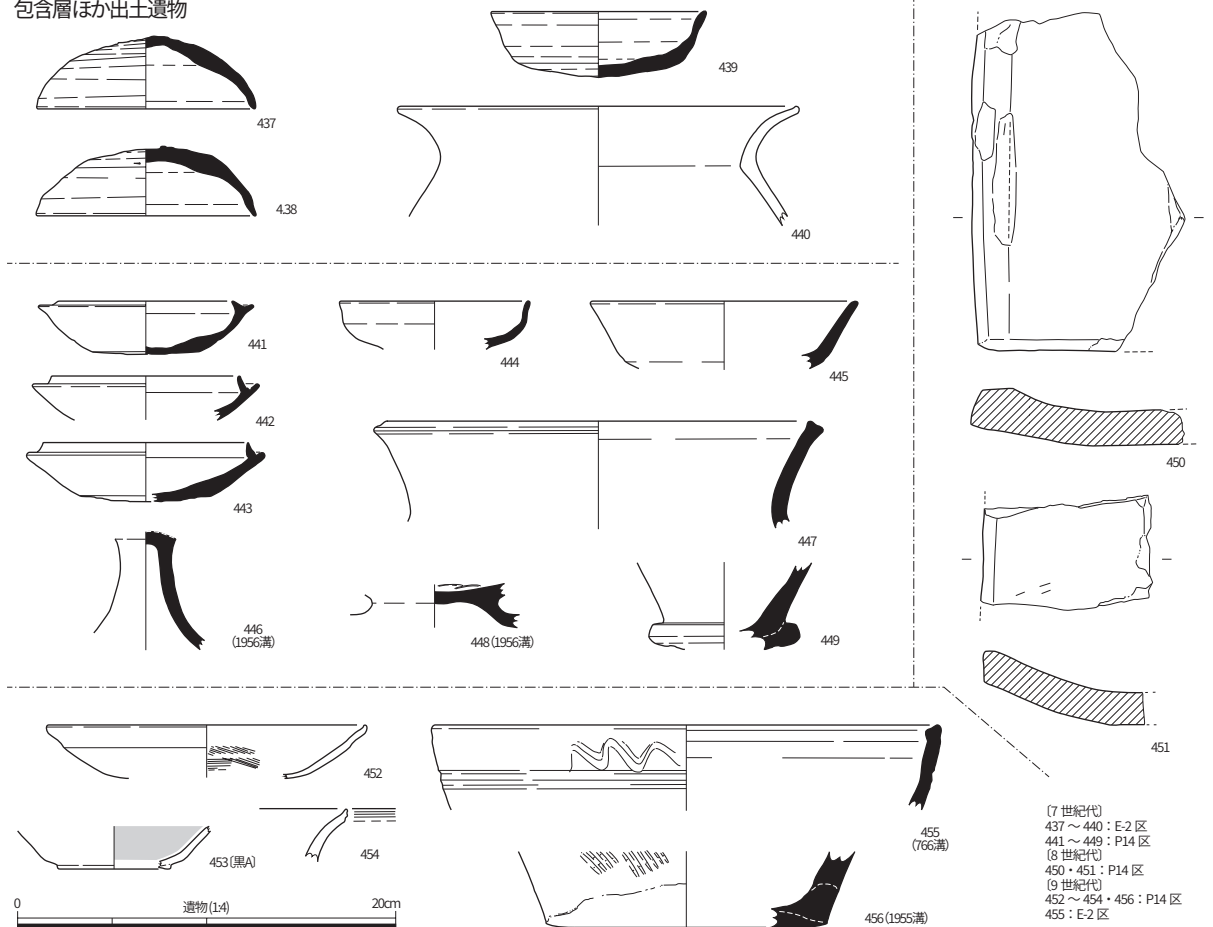


図 80. 1989 焼土坑、1995・1996 焼土坑 平面・断面・出土遺物 / 包含層出土遺物

性が高く、本来の遺構の深度は明確にできなかった。埋土からは、9世紀代の土師器皿(430)や鉢(423)の破片が一定量出土している。

さらにこの1989焼土坑の北3mで、長さ0.7mの不整楕円形の炭化物の薄い拡がり確認されたが(1988焼土坑)。9世紀代の土師器皿(432)が1点出土しており、形状や時期から1989焼土坑と類似する遺構と認識できる。

**1965・1966焼土坑**(図80) 1989焼土坑の南10mに位置する焼土坑で、検出時にはふたつの焼土坑と認識してそれぞれ別の遺構番号を付したが、一連の遺構と認識するに至った。そのほかの焼土坑と同様に南北に長い形状を呈し、規模は長さ2.1m、幅0.7m、深さ1.0mをはかる。1989焼土坑よりもひとまわり大きい、そのほかの焼土坑と同様に第5層掘削中に存在を確認したため、掘り込み面はより上位で、本来の遺構の深度は明確ではない。埋土からは、9世紀代の須恵器杯A(434・435)や土師器甕の口縁部片(436)が出土しており、1988・1989焼土坑と同時期の類似遺構と認識できる。

**東側エリア包含層出土遺物**(図80) 西側エリアと中央エリアでは、包含層中からの古代の遺物の出土量が少なくいずれも細片であったが、東側エリアでは相対的に出土量は多く、復元率の高い遺物も一定数含まれていた。時期については、7世紀代の遺物が多く、飛鳥I古～新段階頃の須恵器杯H(437・438・441～443)などがまとまって出土しており、同時期の竪穴建物54や北西-南東方向の溝群との関連が推測できる。そのほかでは、梶原瓦窯産とみられる平瓦(450・451)や、9世紀代とみられる土師器・黒色土器A類・須恵器(452～456)などがいくつか出土しており、9世紀代の遺物については、焼土坑との関連が推測される。

## 5. 小結

古代の遺構・遺物は、検出数が少なく限定的であるが、西側エリアと中央エリアを中心に奈良時代の特殊な遺構・遺物がまとまって確認されている。その中でも淀川分流路(102流路)と区画溝(957溝)に遺物が集中しており、特に後者の957溝からは小型瓦や鍛冶関連遺物、製塩土器など、特殊遺物が出土する点の特筆される。検出状況から北側未調査地に手工業生産あるいは仏教関連の重要な施設が存在した蓋然性が高く、周辺での調査の進展が期待される。さらに中央エリアの掘立柱建物26は、残存する柱根の太さから高さのある建物であったことが確認できるが、周辺では遺構・遺物が希薄である。そのため、空間地を含めた建物の性格と周辺一帯の土地利用が検証すべき課題といえる。東側エリアでは、飛鳥時代と平安時代初頭の遺構・遺物が検出されており、西側エリアや中央エリアとは時期が異なる。特に飛鳥時代については、古墳時代の集落とは断絶しているため、周辺での調査の進展をまって遺構・遺物の性格を検証する必要がある。古代の遺構・遺物については、奈良時代の遺構・遺物が豊富に検出されている梶原南遺跡との関係が重要となるため、今後の調査成果を待って内ヶ池(淀川分流路)周辺での全体的な土地利用を検証する必要があるだろう。

### 【註】

- 1) 小森俊寛・堀内明博・上村憲章・吉村正親・平尾政幸1994「第2章土器と陶磁器類」『平安京提要』角川書店
- 2) 三宮昌弘2015『梶原古墳群』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第259集  
笹栗拓編2014『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第251集  
笹栗拓編2015『成合地獄谷遺跡・成合遺跡2・金龍寺旧境内跡3』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第260集
- 3) 毛利光俊彦編1995『平城京東二条二坊・三条二坊発掘調査報告 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良文化財研究所学報第54冊 奈良国立文化財研究所
- 4) 合田幸美2011「古代の竪穴建物—大阪府を中心に—」『大阪文文化財研究』第39号(公財)大阪府文化財センター

## 第5節 古墳時代の遺構・遺物

### (1). 概要

今回の調査で検出された遺構・遺物は、古墳時代に属するものが最も多く、微高地部分を中心に建物や井戸、土坑などの居住関連遺構がまとまって検出された(図81)。古墳時代の遺物が出土遺物全体の約8割程度を占めており、古墳時代の初頭から後期前半までの時間幅がある。遺構・遺物の内容が多岐に亘るため、まずはじめに遺構・遺物の概要を記したのち、出土遺物の時期区分と分類方針を示したい。

**遺構の概要** 遺構密度は、地区や調査区ごとに粗密の差はあるが、調査地全体ではほぼまんべんなく遺構・遺物が検出されており、調査地全体に古墳時代の集落域が広がっていることが明らかとなった。第2節で記したように、調査地内には4つの微高地があり(図15:P32)、微高地上で居住関連遺構が数多く検出されている。微高地を区切る谷や微高地縁辺の低地部は、既に報告したように、中世の耕作や粘土採掘などに伴って削平を受けている範囲が広い。このため遺構・遺物の分布のあり方に不明な点も多いが、地形がやや不安定となっており、低地部では遺構密度は相対的に低くなる。

検出された遺構の大半は、居住関連遺構で、竪穴建物・掘立柱建物、井戸、土坑、土器溜りなどがある。灌漑水路や水田跡などの耕作関連遺構は、低地部でその可能性がある遺構が確認されているが、低地部の大部分が削平を受けているため、具体的な様相の復元には至っていない。集落に伴う墓域については、これまでのところ未確認である。

建物遺構については、古墳時代から中世までを含めて総計110棟の建物が検出された。内訳は、竪穴建物57棟と掘立柱建物53棟で、掘立柱建物については遺物が少ないため時期が不明確なものも多く、既に報告したように一部に古代・中世に下るものがある。それらを除いて確実に古墳時代と認識できる建物遺構は、総計99棟で、これとともに時期比定が困難な6棟を含めて本節で報告する<sup>1)</sup>。なお現地での調査時には、竪穴建物54・掘立柱建物43までを建物遺構としてナンバリングしていたが、整理作業時の検証を経て竪穴建物60、掘立柱建物54までを建物遺構と認定している。

また上述したように、高地の頂部や低地部などは中世以降に大きく削平を受けており、調査地点によって古墳時代の遺構の残存状況に差がみられた。このため本来の遺構の輪郭を正確に捉えることができなかつたものが多数あり、柱穴の深さや並びから竪穴建物に伴う可能性の高い1間×1間の柱穴の組み合わせを一定数抽出できた。通有の掘立柱建物とは明らかに区別ができるため、図中および本文中では(掘立柱建物 No.)という形で記載し、竪穴建物に準じた扱いをしたい。さらに今回の調査で検出された柱穴の総数は、計3,183基を数える。この中には時期不明のものも多く、また中世に下るものも少なからず含まれるが、埋土などから古墳時代に遡るものが大半であると認識している。復元ができなかつた建物が多数あることが予想され、未調査地も含めると事業地内に存在した古墳時代の建物は、150～200棟近い数になることが推定されるところである。

建物以外の遺構では、微高地の縁辺部を中心に井戸などの取水遺構が11基検出されている。この中には、多量の遺物が出土するなど、祭祀的な性格を帯びるものも含まれる。さらに土坑や落込みなどからも一括性の高いまとまった遺物が出土しており、古墳時代を通して一括性の高い資料群が確認できることから、地域の土器様相の移り変わりを考える上で重要である。特に摂津地域では、周辺地域と比べて良好な一括資料に恵まれてこなかつたため、現在も古式土師器の編年が未整備という問題があり、こ



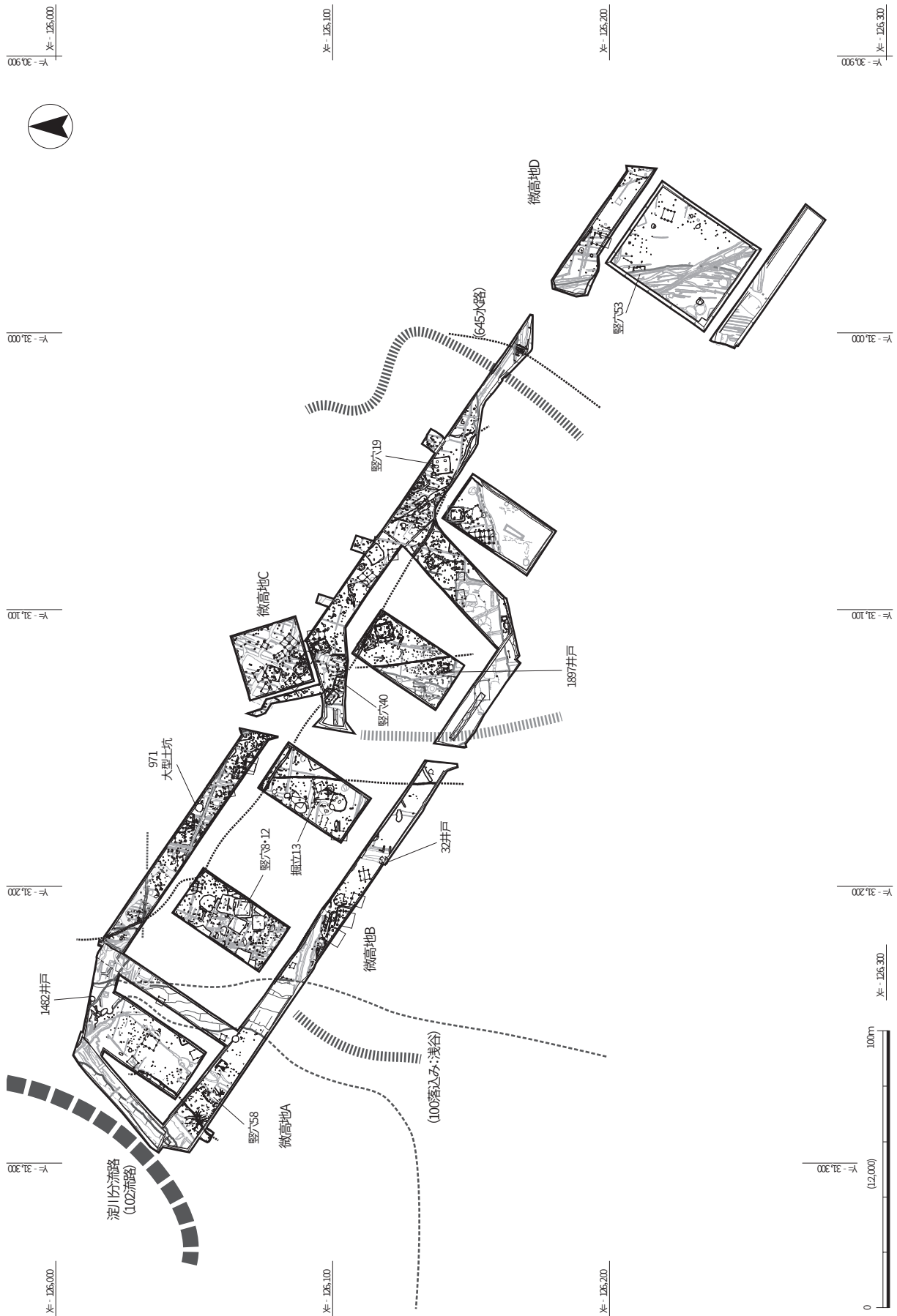


図 81. 古墳時代遺構 調査地全体平面図

うした課題をクリアするための良好な資料群としても注目されるものといえるだろう。そのほかの遺構では、微高地を分断する浅谷や居住域を横断する溝などが確認されており、浅谷からは重層的に一定量の遺物が出土している。

**出土遺物の概要** ここまで繰り返し述べてきたように、今回の調査で出土した遺物の大半が古墳時代のものであり、その大多数が土師器・須恵器をはじめとする土器類である。それ以外では、石製品（石材）と鍛冶関連遺物を含めた金属製品が少量出土している。木製品については、本遺跡が淀川の中州上に立地するものの、調査対象が高燥な微高地部分を中心としたため、木製品はほとんど遺存していなかった。低地部は部分的な調査に留まっており、さらに中世以降の造成や粘土採掘土坑等によって大きく改変を受けているため、井戸等から自然木などの出土が散見されるものの、木製品の出土はごく僅かである。

今回の調査全体で出土した遺物の総量は、遺物整理用コンテナ 224 箱で、概算でそのうちの約 8 割を古墳時代の遺物が占める。全体の調査面積や検出遺構の総数を勘案すると、遺物出土の総量はそれほど多いとはいえない。ただし古墳時代の集落遺跡では、流路や溝、谷部や低地部などに遺物を廃棄する事例が多く、今回の調査はそういった地点・遺構を大規模に調査していないことが遺物が相対的に少ない要因と考えている。その一方で、井戸や土坑から良好な一括資料が豊富に出土しており、出土遺物の内容と全体の組成の把握ができるように検討を重ねた。また建物遺構の出土遺物は、集落の推移を考える上で重要であるため、建物の帰属時期を示す遺物は可能な限り抽出・図化した。それ以外では、外来系土器や地点ごとの土地利用の状況を反映する特徴的なものなどを中心に抽出・図化したため、復元率の高い遺物でも図示していないものが一定数ある。

出土土器の時期については、古墳時代の初頭～後期前半頃までの幅がある。時期ごとに出土量の多寡はあるものの、明確な断絶はみられないことから、古墳時代を通じて集落がほぼ途切れなく継続していることわかる。また土師器と須恵器の出土量比は、あくまでも概算ではあるが 7 割程度を土師器が占める。これは古墳時代初頭から継続するため相対的に土師器の方が出土量が多い。なお弥生土器については、中期前半（Ⅱ様式）の方形周溝墓に伴う供献土器以外はほぼ出土がなく、先行する後期の土器は破片数点の出土に留まっているため、現状では弥生時代から継続性は認められない<sup>2)</sup>。

石材については、遺跡の立地環境からいずれも遺跡外から持ち込まれたものであることが確認できる。そのため、なんらかの利器として用いられたか、流通あるいは製品の製作の過程で遺跡内で消費されたもののいずれかと評価ができ、結晶片岩や緑色凝灰岩など遠隔地からの搬入石材が含まれる点が注目できる。内容としては、玉類・玉作関連遺物・石杵・石臼・砥石などに分類でき、特に玉作がおこなわれたことを直接的に示す緑色凝灰岩や朱の精製に関わる石杵・石臼は、遺跡の性格を考える上でも重要であるため、こうした特徴的な遺物は可能な限り抽出・図化した。

金属製品では、遺存状態が比較的良好な鉄斧の出土が注目できる。そのほかにも、用途不明の小型の板状製品や棒状鉄器、輪羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物の出土が確認できる。ただし鍛冶関連遺物は、古代に下るものが一定数あり、出土位置と層位等から古墳時代に遡る可能性が高いものを中心に抽出・図化した。

**出土遺物の年代区分と分類** 遺跡の継続期間が長期に亘るため、遺構の帰属時期を的確に捉えることは、集落景観の推移を復元する上でも重要である。本遺跡では、庄内式期のはじまりから集落が形成され、布留式期を通じて集落が継続するため、本報告では庄内式期を古墳時代に含め、庄内式期を古墳時代初頭、布留式前半を前期とする。中期のはじまりについては、古墳副葬品の質的变化と古市・百舌鳥古墳

表4. 本報告における古墳時代の年代的枠組み

	本稿で用いる枠組 (太枠)			既存の主要な土器編年との併行関係				
	中河内 西村編年 (西村 2008)	畿内・中河内 辻編年 (辻 1999・2002)	須恵器 陶邑編年 (田辺 1981・田中 2002)	摂津 弥生土器 (森田 1990)	畿内・大和 矢部編年 (寺沢 1986)	中河内 米田編年 (米田 1991)	中河内 津堂編年 (笹栗 2017)	
(弥生後期後半)	弥生後期後半新段階			VI -1				(弥生)
初 頭	庄内式 古段階古相			VI -2	庄内 0 式	庄内式期 I		初 頭
	庄内式 古段階新相			VI -3	庄内 1 式	庄内式期 II		
	庄内式 中段階			—	庄内 2 式	庄内式期 III		
	庄内式 新段階				庄内 3 式	庄内式期 IV		
前 期	布留式 古段階古相				布留 0 式	布留式期 I		前 期
	布留式 古段階新相				布留 1 式	布留式期 II		
	布留式 中段階古相	—			布留 2 式	布留式期 III		
	布留式 中段階中相				布留 3 式	布留式期 IV		
中 期	(布留式 新段階)	1 段階 2 段階 (古)	—		布留 4 式 (古)	布留式期 V	1 段階	中 期
		2 段階 (新)	TG232 (ON231)		布留 4 式 (新)	布留式期 VI	2 段階	
		3 段階	TK73 TK216				3 段階	
		4 段階	TK208				4 段階	
		—	TK23				5 段階	
(中 期)		(4・5 段階)	TK47		(布留式直後様式)	—	6 段階	(中 期)
			TK10				7 段階	
後 期		5 段階	MT15		—		—	後 期

※ 本報告で使用する年代的枠組み → 表の塗り部分 の表記を用いる ※ 各段階ごとの行幅は、あくまで土器編年上の区切りであって時間幅を反映させたものではない

【註文献】 西村歩 2008 「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内と大和』資料集』香芝市教育委員会  
 辻美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室  
 辻美紀 2002 「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原道跡発掘調査報告書』IX (財)大阪市文化財協会  
 田辺昭三 1983 『須恵器大成』角川書店  
 田中清美 2002 『須恵器定量化への過程』『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺昭三先生古希記念の会  
 森田克行 1990 『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編 II 木耳社  
 寺沢肇 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊 奈良県立橿原考古学研究所  
 米田敏行 1991 「土器編年 1 近畿」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 藤山閣  
 笹栗拓 2017 「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年」『大阪文化財研究』第 50 号 (公財)大阪府文化財センター

群の成立を重視する近年の研究動向をふまえ<sup>3)</sup>、最古の津堂城山古墳の築造と並行する布留式後半以降を中期とする<sup>4)</sup>。後期の開始については意見が分かれるが、ひとまずは須恵器編年の MT15 型式以降とする。

本報告で依拠する年代的枠組みは、摂津の古式土師器の編年が未整備であるため、隣接する河内の古式土師器の最新の編年(西村 2008)を援用する。特に今回の調査では、河内からの搬入品が一定量出土しているため、時期比定の根拠として適切なものといえる。中期・後期の土師器は、畿内全体を包括する辻美紀編年(辻 1999)に、須恵器は陶邑編年(田辺 1981)に依拠する。主要な編年との並行関係や年代的枠組みは、(表 4)の通りに理解し、表の塗り部分での表現を用いる。また各器種の形式分類については、古式土師器は(寺沢 1986)<sup>5)</sup>、中期の土師器は(辻 1999)、須恵器は(田辺 1981)の分類案に準拠し、著しく異なる表現・名称を用いる場合は、必要に応じて形式を記すこととしたい。

ところで近年の畿内の古式土師器に関する研究分野では、製作技術や形態などの相違に起因する系統差の理解が深まり、遺跡(群)や小地域ごとの様相差が指摘されるようになってきた<sup>6)</sup>。後続する中期は、須恵器生産の開始と韓式系土器の流入などに代表されるような土器様相の一大転換が認められる時期であるが、前期と同様に集落単位で土師器・須恵器・韓式系土器の組成や土師器甕の形式などが相違することが指摘されている<sup>7)</sup>。このように古墳時代の集落遺跡は、隣接する遺跡(群)どうしであっても土器様相に大きな差が認められる場合が多く、集落遺跡の土器の特徴や組成は遺跡の性格を考えるための鍵となりつつある。こうした現状をふまえると、土器の系統的な理解をふまえた資料の提示が必須であることはいうまでもなく、今回の報告では先学の理解にならない、古式土師器について技術的系統的に(図 82)の通り分類することとしたい。系統ごとの相互の関係性については、一般的には古墳時代初頭から前期にかけて地域・集落ごとの様相差を内包しつつ「A 系統」(V 様式系)・「B 系統」(庄内系)・「C 系統」(布留系)の順で段階的に変質する。後続する布留式中段階になると、基本的には A 系統(V 様式)は欠落し、庄内式 B 系統の流れを汲む I 群系と、典型的な布留式の系統である II 群系のふたつの

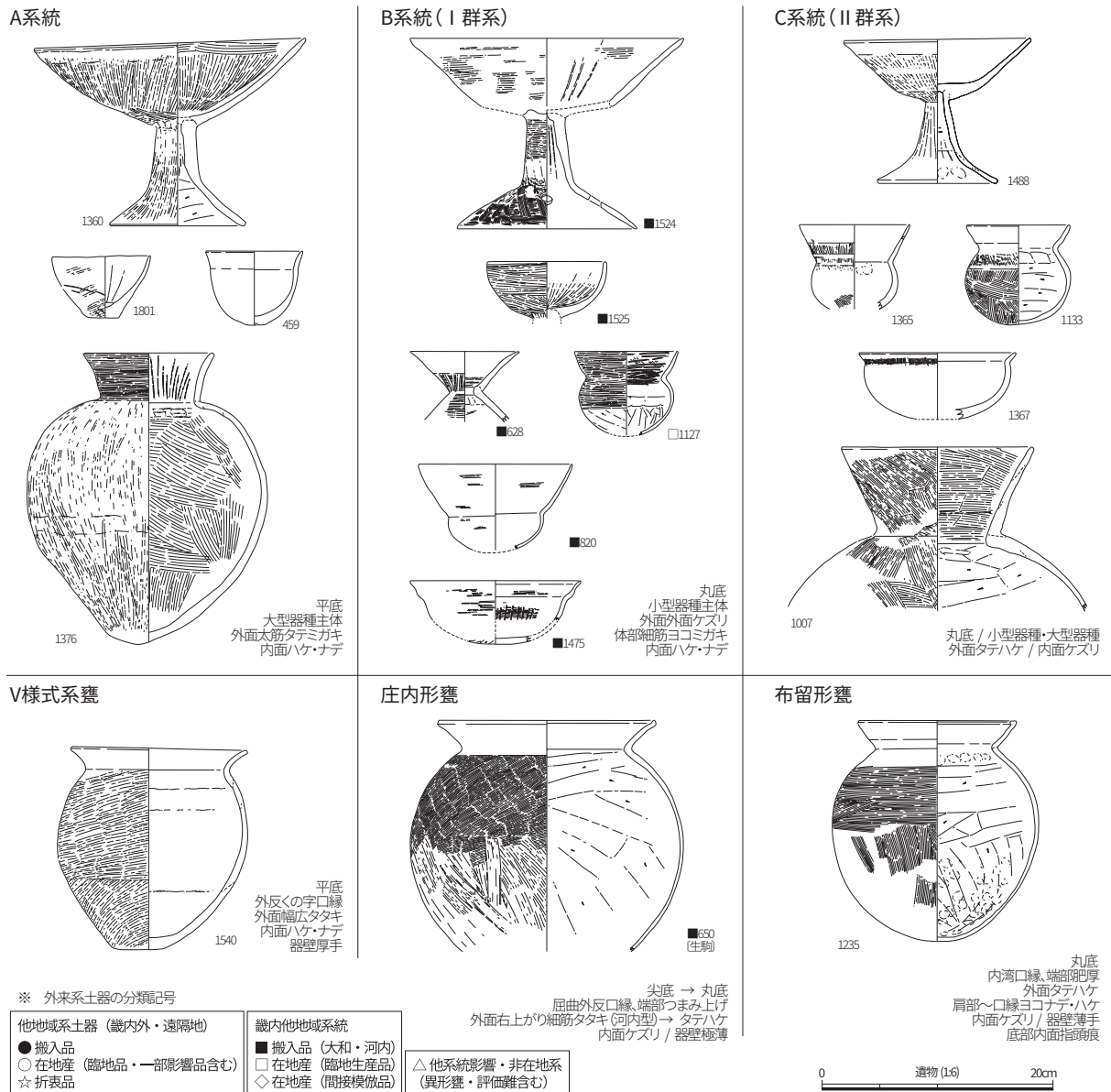


図 82. 古式土師器の系統分類

系統に大別できる。そして布留式新段階に相当する中期初頭以降は、前期に成立・定着した布留式の変容過程と韓式系軟質土器や須恵器の流入と定着によって土器様相が変質すると理解されている。なお、各時期を通じてふたつ以上の系統から相互的に影響関係を受けた変容形や折衷的な資料も多くあり、そういった資料についても可能な限り所見を記載することとした。

また古墳時代初頭から前期の集落遺跡では、遠隔地を含めた他地域の系譜を引く土器がまとめて出土することがあり、こうした外来系土器と呼ばれる土器の見極めも遺跡の性格を考える上で重要な資料とされてきた。特にこの時期は、長距離を含めた土器の移動現象が各地でみられる点で弥生時代後期以前とは質的にまったく異なる特徴と認識されており、古墳出現の前後の人の移動や物資の広域流通機構を考える手がかりにもなることから、各地で膨大な研究の蓄積がある。今回の調査では、少なくとも「吉備」・「阿波」・「東部瀬戸内」・「山陰」・「北近畿」・「近江」・「東海」などの地域に由来する外来系土器の出土が確認されており、本遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。外来系土器の判定については、一般的には器形や成形・調整手法、胎土などから判断されており、このうち胎土に関しては、今



回の調査では主に石英・長石（+チャートを含む場合がある）を含むものが主体であるため、これを在地産の土器の認定に関わる判断材料のひとつとした。<sup>9)</sup>ただし外来系土器には、直接的に他地域から持ち込まれたもの以外にも、搬出先で製作されたものや、他地域の人によって模倣されたものが存在しており、これらは「搬入品」・「臨地品」<sup>10)</sup>・「模倣品」に区分することができる。以上のような外来系土器の認定と区分については、基本的には報告者の認識に基づいておこなったが、<sup>11)</sup>情報が膨大かつ多岐に亘るため、判断や認定があいまいな資料も多い。可能な範囲でできる限り情報を記載しているが、認識の誤りや遺漏も多々あることが予想される。なお外来系土器については、図上で特徴をわかりやすく示すために図 82 で示したように、遺物番号の頭に記号を、遺物番号の後ろに〔地域名〕を付している。

土器以外の遺物では、石製品の出土が一定量あり、砥石や石臼・石杵などが主体を占め、そのなかでも、朱の精製に関連する石杵と石臼が複数出土している点が注目される。近年では、朱の産出地である徳島県域での採掘遺跡に関する調査・研究の進展は目覚ましいものがあり、（西本編 2016）では機能や用途に応じた石製品の分類案が提示されている。<sup>12)</sup>今回の調査で出土した石杵・石臼の全てが、朱の精製に関連するものではないと思われるが、堅果類の調理具として使用される石製品にも対応できるような分類案であり、本報告ではこの分類案に基づいて報告する。

**報告方法** 前節までと同様に、西側エリア・中央エリア・東側エリアに大別した上で、地形区分をふまえて西側から順に報告する。遺構の報告順序は、調査地を横断する溝 → 建物 → （一括遺物が出土した）井戸・土坑・落込み等 → その他遺構、の順を基本に報告するが、遺構の相互関係などをふまえて前後するものも一部ある。

## (2). 西側エリア

大まかな地形は、西からふたつの微高地（A・B）とそれを区切る浅谷（100 落込み）があり、主に微高地の高所部で遺構が検出されている。3つのエリアに区分した中で、古墳時代の遺構密度が最も高く、遺物の出土量も最も多い。

微高地Aは、上面が中世の耕作で大規模に地下げされているため遺構密度は低いが、建物が10棟検出されており、削平された遺構が多いことが推測される。また付帯工事に伴う立会の所見から、微高地Aの南側にも包含層の拡がることが明らかとなっており【第4章第8節参照】、微高地が南側にのびて居住域が拡がることを推測される。

微高地Bは、B-2区の西端付近を起点にして浅谷（100 落込み）の東側に沿って南側にのびる高まり（微高地B1）と、事業地北側を東南東にのびる高まり（微高地B2）が派生している。微高地の頂部は上面が後世の削平を受けているが、遺構が多く検出されており、特にP5区やB-2区東半では建物遺構が密集している。南東側は徐々に地形が下り、それと連動して遺構密度が低くなるが、井戸や落込みなどが検出されており遺物も多い。一方で最も地形が下がるB-1区東端では、遺構が希薄になる。

なお微高地A・B1・B2の縁辺部では、井戸などの取水遺構や大ぶりの土坑などが多く検出されている。これらの遺構からは、土器がまとまって出土する機会が多く、良好な一括資料が得られている。また包含層も厚く残っているため、遺物の出土量も多い傾向にある。微高地Bの縁辺部では、大型掘立柱建物13や独立棟持柱建物3などの特殊な建物が検出され、さらにこれらに近接して多量の遺物が出土した井戸が存在することから、関連が注目されることである。

検出された遺構・遺物の時期は、古墳時代初頭～後期前半までの幅があり、時期ごとに大きな分布の



の偏りはみられない。また微高地A・Bを区切る浅谷(100 落込み)では、古墳時代を通じて重層的な堆積が確認でき、遺物も一定量出土している。

#### 〔a. 微高地Aの遺構・遺物：P6区・A-1区・A-2区〕(図84)

建物遺構10棟、井戸2基などが検出された。微高地の先端部にあたるP6区北半では、遺構が希薄であるが、南半では柱穴が多数検出されており、居住域が南側未調査地に広がる可能性が高い。建物遺構の内訳は、竪穴建物3棟、竪穴建物の可能性が高い1×1間の建物が5棟、掘立柱建物2棟である。井戸は、微高地縁辺部で検出されており、北側の1482井戸から土師器が大量に出土している。

**112溝**(図84・85) P6区西端付近からA-1区にむかってのびる北東・南西方向の溝で、検出総延長は35m、検出面の幅は0.5mをはかる。上面が削平を受けているため、本来の幅・深さは明確でない。埋土は、黒褐色の泥質土を主体としており、著しい流水痕跡は確認できない。検出面からの深さは、北側で0.1m、南側では0.25mをはかる。底面は北から南に地形が傾斜して下がっており、微高地Aの裾部を縦断する集落内の排水溝と考えられる。

埋土から出土した遺物は、土師器の細片が数点のみで、図化可能なものはなかった。体部ハケの甕の破片などがあるが、詳細な時期比定は難しい。切り合い関係から重複する113溝よりも新しい可能性が高いため、溝の時期は中期以降の可能性が高い。

**113溝**(図84・85) A-1区西端で検出された南北方向の溝で、検出長8.5m、幅0.8mをはかる。深さは0.14mで、埋土は黒褐色の泥質土を主体とする。112溝と重複・交差しており、平面の切り合い関係からこの113溝が古い遺構と判断したが、ふたつの溝の埋土は酷似している。埋土からは、土師器・須恵器の細片が少量出土しており、布留式新段階以降とみられる布留形甕の破片(457)を1点図化した。須恵器を含むため、溝の機能時期は中期以降と認識できる。

なお113溝の周辺では、幅0.1m、深さ0.15m前後の細長い溝が複数検出されている。直線的なものや円弧を描くようなものなど形状はさまざまで、溝の性格については不明である。

**(掘立柱建物32)**(図85) P6区中央西端付近で検出された1間×1間の柱穴の並びで、柱穴の規模や形状などから、竪穴建物の支柱穴と判断した。柱間隔は、南北長2.1m、東西長1.9mをはかるため、一辺5m規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、いずれも円形に近い形状で、大きさは0.5～0.6mである。南西の1491Pはやや浅いが、ほかは検出面からの深さが0.4～0.6m程度ある。南東の1490Pは、柱痕跡が明瞭に残っており、柱の太さは0.15m前後に復元される。埋土は、ブロック混じりの黒褐色粘土を主体とする。柱穴埋土からは、遺物が出土していないため、詳細な時期については不明である。

**(掘立柱建物49)**(図86) P6区南西端で検出されたふたつの柱穴で、周辺には柱穴がなく、いずれも深さがあるため、竪穴建物の支柱穴と判断した。柱間隔は、南北1.6mであるため、一辺3.5～4.0m前後の規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、円形に近い形状で、大きさは0.25～0.3m前後である。検出面からの深さは、0.35～0.5mあり、上面が削平されていることをふまえると、柱穴は深い。埋土は、ブロックが少量混じる黒褐～黒粘土を主体とする。1486Pからは、TK208～23型式頃の須恵器杯蓋(458)が1点出土しているため、建物の時期は中期中葉～後葉頃と判断できる。

**(掘立柱建物6)**(図86) 掘立柱建物49の南西20mに位置する1間×1間の柱穴の並びで、柱穴の規模や形状などから、竪穴建物の支柱穴と判断した。北西側は柱穴が密集しているため、どの柱穴が組み







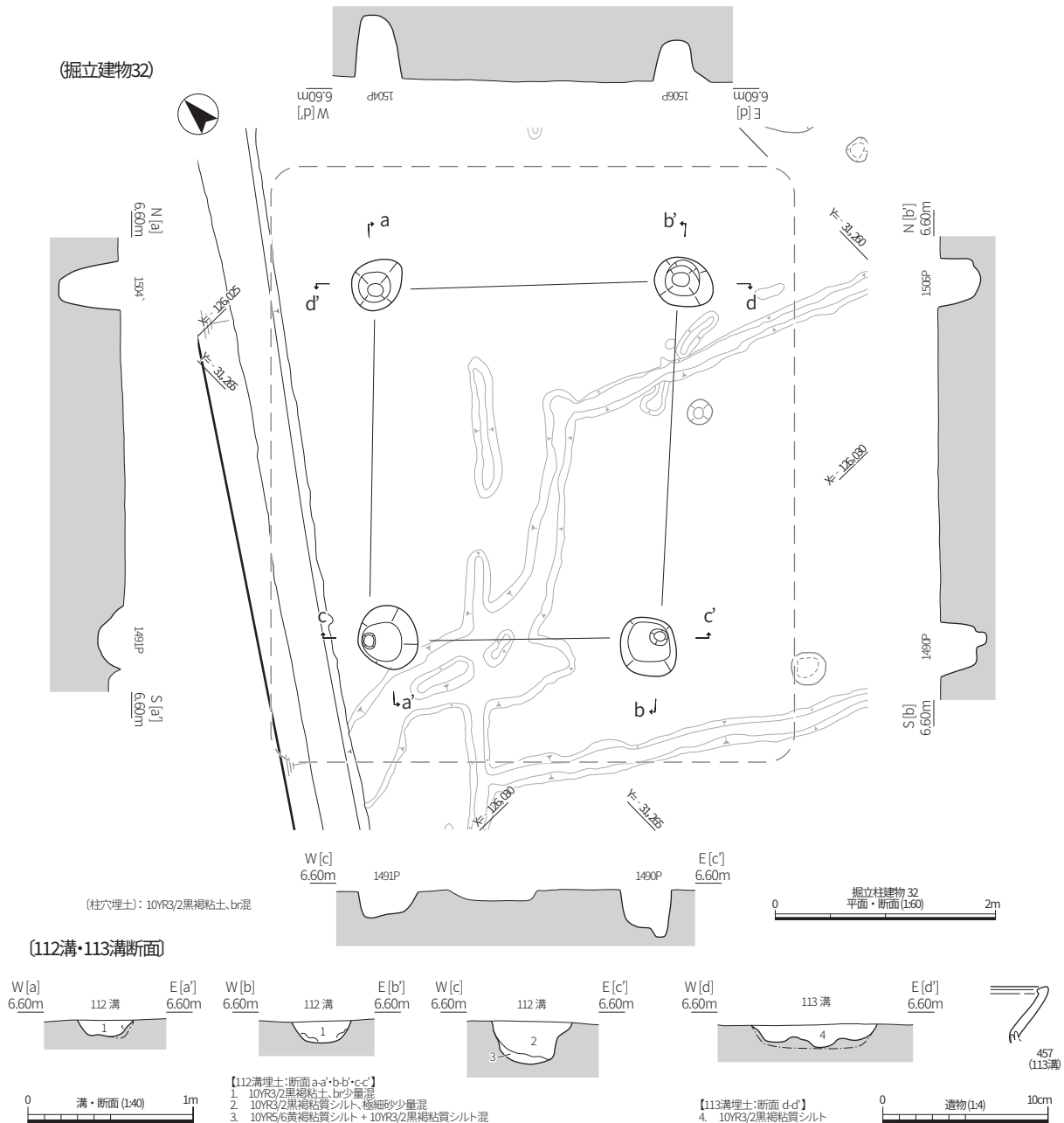


図 85. 掘立柱建物 32、112 溝・113 溝 平面・断面・出土遺物

合うのかが明確ではないが、柱間隔は南北長が 1.6～1.9 m、東西長 2.3 mをはかる。やや東西に長い平面形で、一辺 4.0～4.5 m程度の規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、径 0.35～0.5 m程度の円形を呈するものが多く、検出面からの深さは 0.25～0.35 mである。柱痕が明瞭なものも多く、柱の太さは 0.1～0.15 m程度に復元される。埋土は、ブロック混じりの黒褐粘質シルトを主体とする。152・153・154P から古式土師器とみられる甕体部片が出土しているが、細片のため図化できなかった。出土遺物から遺構の詳細な時期比定は困難であるが、古墳時代の建物遺構とみて大過はない。

**竪穴建物 58 (108・109・110 溝)** (図 87) 掘立柱建物 6 の東 10 m に位置する。上面が中世の遺構の掘削によって大きく削平を受けているため、調査当時は建物遺構として認識はしていなかったが、108・109・110 溝はコの字状にめぐる一連の溝の可能性が高く、その内側に支柱穴とみられる並びの良い柱穴が位置していたため、整理作業の過程で一連の建物遺構と認識した。規模は、南北 5.0 m、東

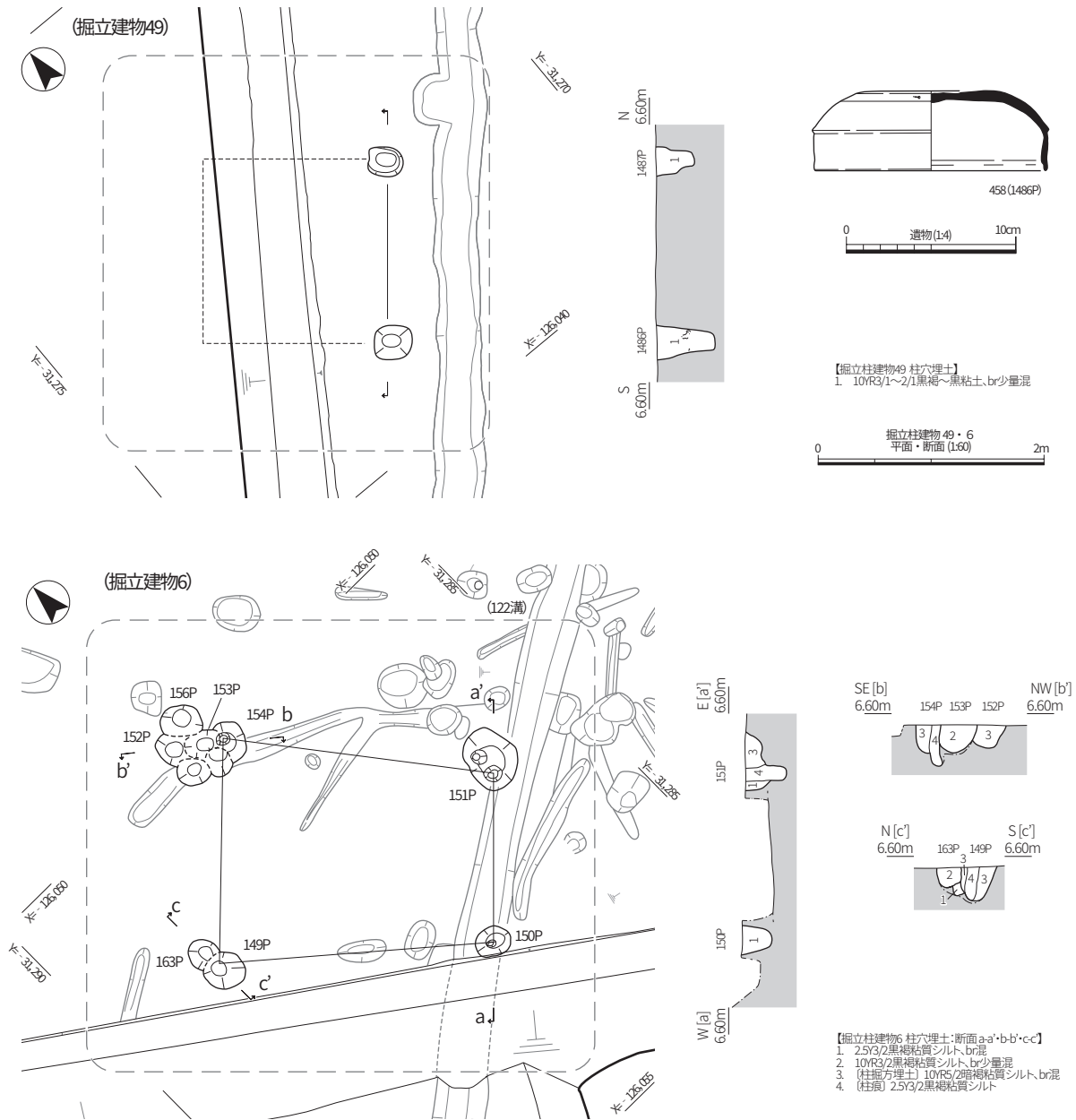


図 86. 掘立柱建物 49・6 平面・断面・出土遺物

西 4.3 m程度の規模に復元でき、面積は 21.5 m<sup>2</sup>をはかる。周囲の溝は、検出面からの深さ 0.1 ~ 0.15 m で浅く、幅は南側の 110 溝がやや幅広であるのに対し、北側・東側の溝はやや幅が狭い。ほかの竪穴建物と同様の内側の浅い凹みと認識でき、遺物は溝の上面付近から出土した。主柱穴は、いずれも径 0.3 m前後の小ぶりのものであるが、断面写真から判断する限りいずれも柱痕が残っている。検出面からの深さは 0.3 ~ 0.4 mで、底の高さは T.P.+6.05 ~ 6.10 mにおさまる。掘方埋土は、ほかの柱穴と同様に暗色のブロック混じりの泥質土で、上面が削平を受けたためサイズが小さいものとみられる。

南側の 108 溝の埋土からは、土師器と石杵・石臼が現位置を保った状態で出土した。ほかでは、109 溝から土師器の甕が出土しているが、細片のため図化していない。108 溝出土の土師器には、小型丸底鉢 (459) と精製の中型壺 (460)、非生駒西麓産の河内型庄内形甕 (461) があり、このうち中型壺 (460) は、B 系統に特有の精製の胎土であるが、体部ハケ調整であるため C 系統との折衷的な資料と認識できる。庄内形甕 (461) は、白色の特徴的な胎土で、体部に煤が明瞭に付着している。石製品は、

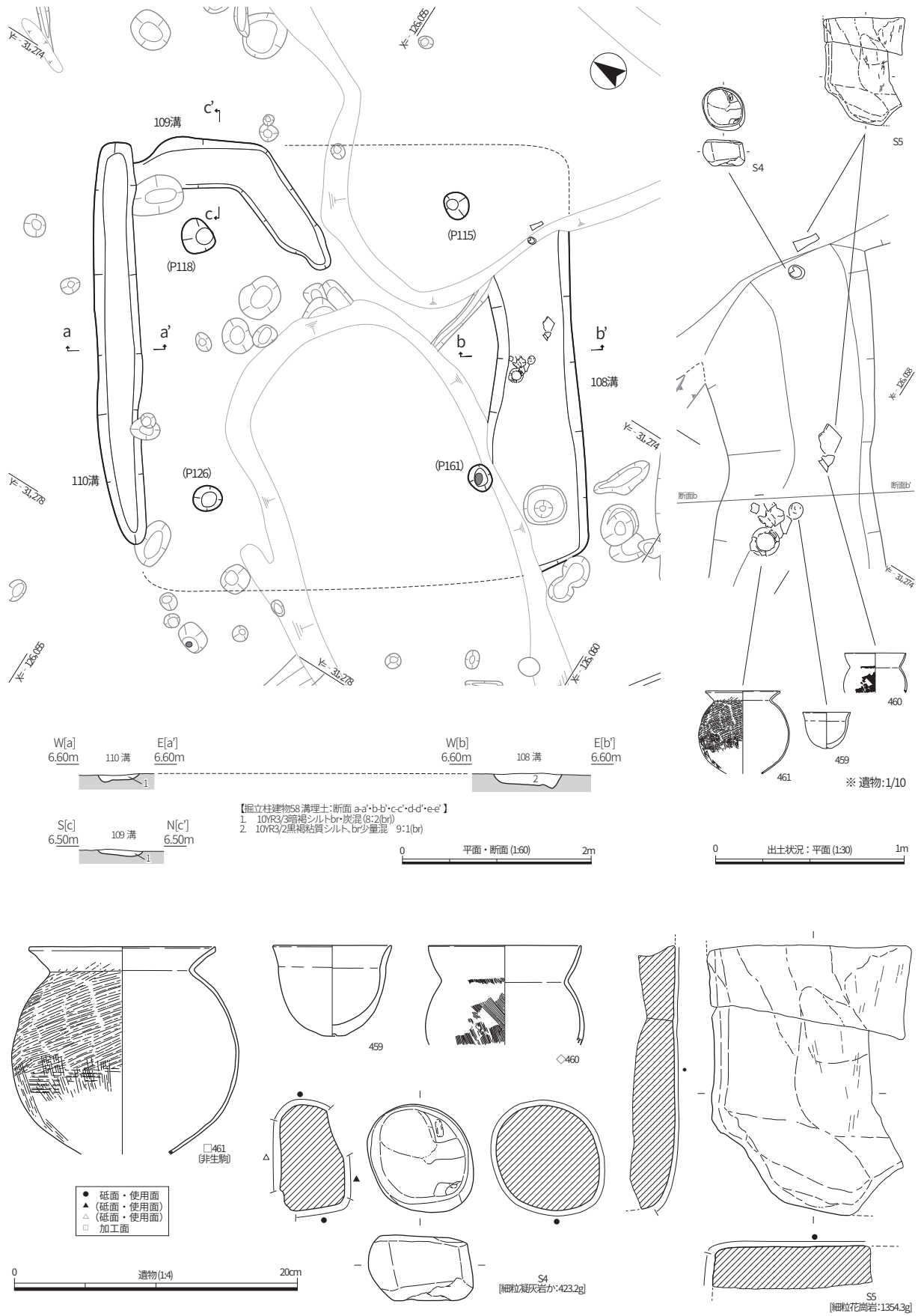


図 87. 竪穴建物 58 平面・断面・出土遺物

磨石（S4）と磨台（S5）が出土している。特に磨石は、やや軟質の凝灰岩製で、朱関連遺物がまとまって出土した徳島県名東遺跡 SB2004 に類似資料がある<sup>13)</sup>。名東遺跡の出土事例では、朱が著しく付着しているのに対し、磨石（S4）には朱の明確な付着はないが、磨台（S5）とセットとなることから、朱の精製に関わる資料とみなして大過はない。さらに土師器についても、出土状況から朱の精製に関連する道具立てと認識することができるだろう。

これらの遺物の時期については、球胴化した非生駒西麓産の庄内形甕（461）は庄内形甕のなかでもやや時期が下る新しい資料とみられる。精製中型壺の体部ハケ調整もやや新しい要素とみることが可能であり、概ね布留式古段階のなかにおさまる資料と認識することができる。遺物の出土量は少ないが、朱関連遺物と土師器が共伴することから、この建物は朱の精製に関わる工房の可能性が推測でき、遺跡の性格を考える上でも重要な遺構といえる。

**掘立柱建物 30・1485 土坑**（図 88）（掘立柱建物 32）の南東 10 m に位置する 3 間×2 間の掘立柱建物である。南西から北東方向にのびる微高地 A の先端部付近に位置しており、この建物の周囲には小穴が散在しているが周囲には遺構が少なく、独立して立地するような状況を呈している。

建物の規模は、南北長 5.0 m、東西長 4.3 m、面積は 21.5 m<sup>2</sup>をはかり、建物の南北軸は 28.5°東に傾く。東西・南北ともに柱筋の通りは極めて良い。柱間寸法は、南北桁行が 1.4～1.8 m で、東西ともに外側 1 間分がいずれも 1.7～1.8 m でやや長いのに対し、中央は 1.4～1.5 m でやや短い。東西梁間の柱間寸法は、2.1 m 前後でほぼ揃っており、南北に比べて長い。柱穴の平面形は、円形または隅丸方形を呈し、規模は 0.4～0.6 m である。深さは、南北の側柱が 0.36～0.51 m であるのに対し、東西梁間の中央の柱穴は 0.27～0.31 m で浅い。また柱穴は、いずれも平面・断面ともに柱痕が明瞭に観察でき、柱の太さは 0.15～0.2 m 前後に復元される。柱抜き痕跡が認められないため、根腐れして柱上部が切断されたと推測できる。この建物は、柱並びが極めて良く、南北側柱と東西中央の側柱で柱間隔と深さが異なっていることが特徴的で、建物全体を側柱で支える高床倉庫の可能性が高い。

柱穴埋土からは、1452P・1457P を除く柱穴からそれぞれ土師器片が数点ずつ出土している。これらの遺物は、柱穴に抜き痕跡がみられないため建物の構築時期を直接示す資料であり、1460P 出土の直口壺頸部（463）と、1354P 出土の小型の甕または鉢の小平底の破片（462）を図化した。小破片であるため詳細な時期比定は難しいが、いずれも庄内式期～布留式古段階古相におさまる。

なお、この建物の東に近接して不定形の浅い 1485 土坑があり、埋土や出土遺物から古墳時代に遡るものとみられ、性格等は不明ながらその位置関係から建物と関連する遺構の可能性もある。さらに南東隣接地で、全形が復元される体部ハケ調整の小型の土師器甕（464）が出土している。直接的な関連性は不明ながらも、建物の柱穴出土遺物と時期的に大きく齟齬はない。

**竪穴建物 39**（図 89）掘立柱建物 30 の南 10 m に位置しており、建物が調査区外に拡がるため北西が側の約 4 分の 1 程度の検出に留まっている。検出長は、東西 4.1 m、南北 3.0 m で、主柱穴の位置関係から一辺 5 m 程度の規模に復元できる。部分的な調査に留まったが、断面から床面が良好に残っており、検出面から床面までの深さが 0.10～0.14 m、加工面までの深さが 0.15～0.22 m である。壁溝は、幅の狭いタイプで、幅 0.15～0.2 m をはかり、床面からの深さが 0.07～0.08 m である。竪穴埋土と壁溝埋土は、いずれも黒褐色の粘質土を主体とするのに対し、貼床面の床下埋土は人為的なブロック土であったため、明瞭に区別ができた。唯一検出できた北西主柱穴 1489P は、検出面の形状が長さ 0.6 m の隅丸方形で、柱痕部分が漏斗状に深く掘り下がっている。床面から柱穴底までの深さは 0.71 m で、



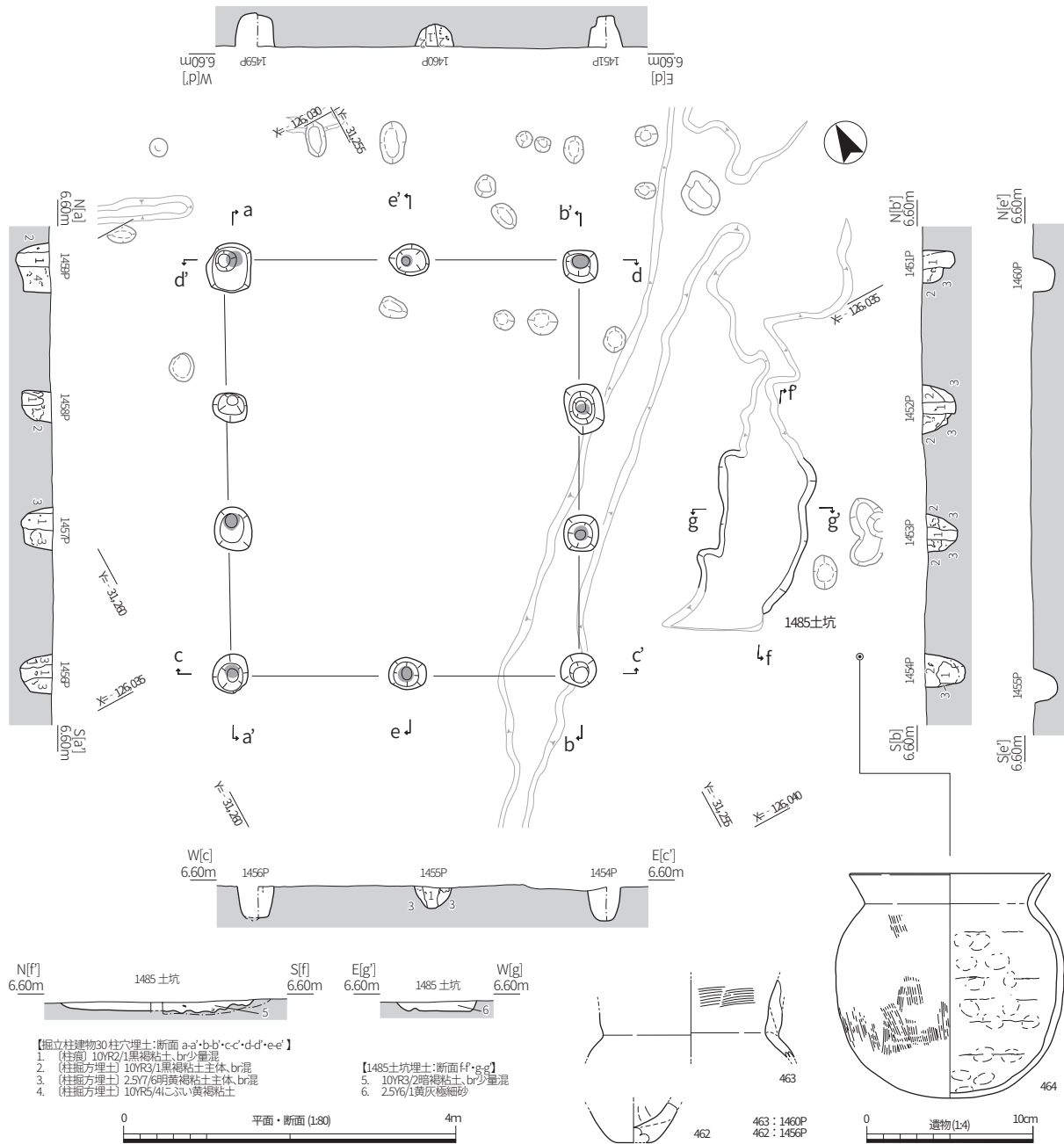


図 88. 掘立柱建物 30 平面・断面・出土遺物

極端に深くなっている。柱穴の太さは 0.11 m で、柱の抜き取り痕跡はない。

埋土や壁溝からは、土師器が少量出土しており、4 点を図化した。特に床面直上から出土した小平底の小型鉢 (466) は、建物の機能時期を直接示すことから重要で、やや時期比定が難しい資料であるが、布留式古段階以前と認識できる。ほかでは、壁溝出土の小型器台の可能性のある口縁部片 (465) や、埋土出土の V 様式系甕 (468) と口縁部が内湾気味にのびる布留系とみられる甕の口縁部破片 (467) がある。(465)・(466)・(468) は、庄内式中段階～新段階頃を中心とするが、(467) は古く見積もっても庄内式新段階以降であるため、建物の時期は庄内式新段階～布留式古段階古相までにおさまる。

**掘立柱建物 31** (図 89) 竪穴建物 39 の南西 4 m の隣接する位置で検出された掘立柱建物で、南側は調査区外に拡がる。そのため建物の構造は明確でないが、東西 1 間で南北側 2 間以上の構造で、規模は、南北 3.4 m 以上、東西 3.1 m をはかる。柱筋の通りは極めて良く、柱間寸法は南北方向が 1.6 ~ 1.7 m

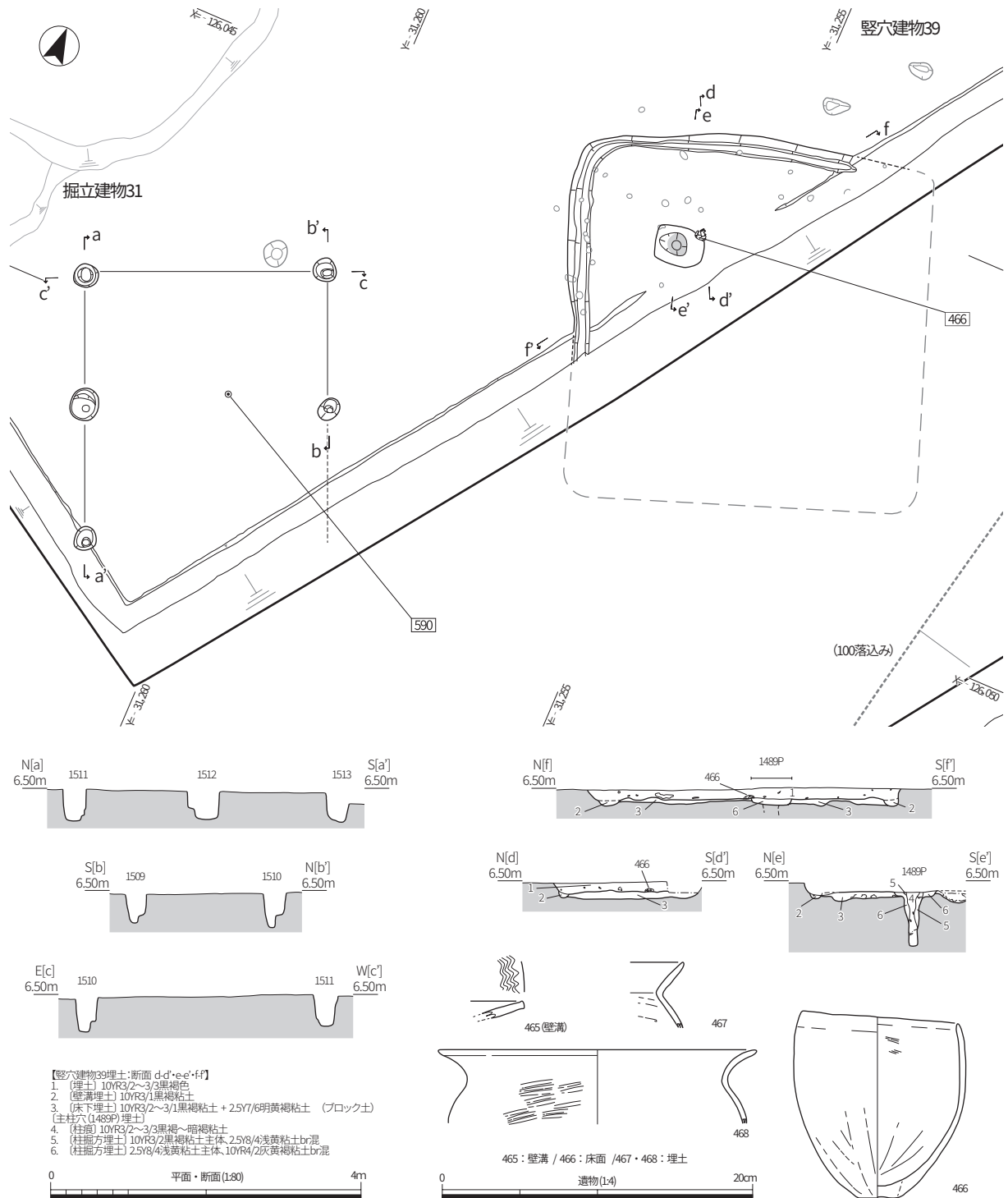


図 89. 竪穴建物 39・掘立柱建物 31 平面・断面・出土遺物

に揃うが、東西側の柱間隔が極端に長い。柱穴の平面形は円形で、検出面での大きさは 0.25 ~ 0.4 m とやや小さいが、いずれも柱痕が明瞭に残っている。検出面からの深さは 0.40 ~ 0.48 m で、柱あたりから柱の太さは 0.15 m 程度に復元される。埋土の断面図は作成していないが、そのほかの柱穴と同様のブロック混じりの暗色の泥質土を主体とする。柱穴埋土から出土した遺物は皆無であるため、建物の時期を直接的に示す資料はない。建物内中央部付近の包含層中から須恵器礎(図 103: 590, P152)が 1 点出土しているが、今回の調査で確認された掘立柱建物では、柱筋の通りが良く梁間の柱間隔が広い類似の構造のものは前期前葉以前のものが多い。さらに隣接する竪穴建物 39 とは、建物軸が揃ってい

ることから、これと同時期の庄内式期の建物の可能性が推測される。

**竪穴建物 57 (130 焼土坑)** (図 90) 竪穴建物 58 の東 10 m、掘立柱建物 31 の南 10 m に位置する。調査当時は、竪穴の輪郭が不明確であったことから建物遺構と断定することができなかったが、竪穴内外に一定の深さがある柱穴が複数あることから、整理作業の過程で建物遺構の可能性が高い遺構と判断した。竪穴内にある柱穴は、径 0.3 ～ 0.5 m 程度でいずれも小さいが、検出面からの深さは 0.3 ～ 0.4 m ほどある。ほかの建物遺構に伴う柱穴とも類似しているが、柱穴がやや密集しており、組合せは明確でない。

竪穴内の中央南寄で検出された 0.4 × 0.3 m の方形の 130 焼土坑は、検出面からの深さが 0.06 m で、埋土は炭・焼土片で充填されていた。特徴的な埋土であったため、微細遺物の検出を目的に土壌洗浄をおこなったところ、二枚貝の断片が多数検出され、分析の結果、イシガイ科と同定された【第 5 章第 6 節】。さらに埋土からは、土師器甕の細片とヒョウタンの種子も確認されている【第 5 章第 6 節】。位置関係から竪穴建物に伴う遺構と判断でき、貝類の調理に伴う遺構の可能性が推測されるため、このように解釈できるならば、土師器甕は調理に伴う使用が推定できる。これらの土師器甕には、口縁部が内湾しながら立ち上がる体部ハケの布留系甕 (469) と、口縁部が外反する V 様式系の甕 (470) があり、大まかには布留式古段階以前に位置づけられる。竪穴埋土やほかの柱穴からも同様の時期の土師器の細片が少量出土しているため、建物の時期は庄内式新段階～布留式古段階頃に位置づけることができる。

**(掘立柱建物 46) [100 落込み土器溜り 1]** (図 91・92・93) 掘立柱建物 30 の東 15 m に位置しており、調査時は、100 落込み (浅谷) 内に位置する土器溜り (100 落込み土器溜り 1) と認識していた。この土器溜りは、100 落込み (浅谷) の埋没底面から遊離するような状態で検出され、T.P.+6.5 ～ 6.4 m の高さで古墳時代前期末～中期初頭頃の復元率の高い土師器群と石杵・石臼などがまとまって出土した。さらに 100 落込みの完掘時には、土器群の下部で建物遺構を構成するような柱穴が一对検出されたため、整理作業の過程で土器群と柱穴は関連する一連の遺構に伴うものと判断した。柱穴については、いずれも柱痕が明瞭に残り、径は 0.3 m 前後で小さいが、検出面からの深さが 0.5 m ある。こうした深い柱穴は、例えば近隣の竪穴建物 39 の支柱穴などと平面・断面の形状が酷似しており、建物を構成する柱穴と認識して大過はない。検出地点が 100 落込み (浅谷) 内であるため、100 落込み (浅) の埋没状況と古墳時代の地表面との関係が問題となるが、土器群の検出面の高さと竪穴建物 39 の床面の高さはほぼ同じであるため、100 落込みの北半はほぼ埋没して地表面化していたと判断できる。類似する柱穴が周囲で検出されていないため、掘立柱建物として復元するのは困難で、西側の調査区外に広がる竪穴建物に復元するのが穏当である。規模については、2.5 m の柱間隔と遺物の分布状況から一辺 4.5 m 以上に復元できる。西側壁面に遺物が挟まっているため、さらに西側に遺物が広がることは確実で、この点からも概ね妥当な復元案といえる。なお検出された遺物のうち、石杵 (S6) のみやや東に離れた位置で出土した。これについては、出土地点の高さから関連する遺物とみて誤りはないと思われるが、竪穴の内外のどちらにあったのかは判断がつかない。竪穴内部にあったと仮定すれば、ひとまわり大きい建物に復元され、規模は 5.5 m 以上に復元される。

100 落込みの詳細については後述するが、調査時には埋土中に遺構が存在するという認識がなく掘り進めたため、結果として竪穴の輪郭に気が付くことができなかった点が悔やまれる。ただし幸いにも、A-2 区西壁に竪穴建物がかかっていたため、西壁断面写真や作成したオルソ断面図などから不十分ながらも再検証ができた。その結果、第 4 層より下位の 100 落込み埋土の T.P.6.6 ～ 6.2 m の間は、いずれ

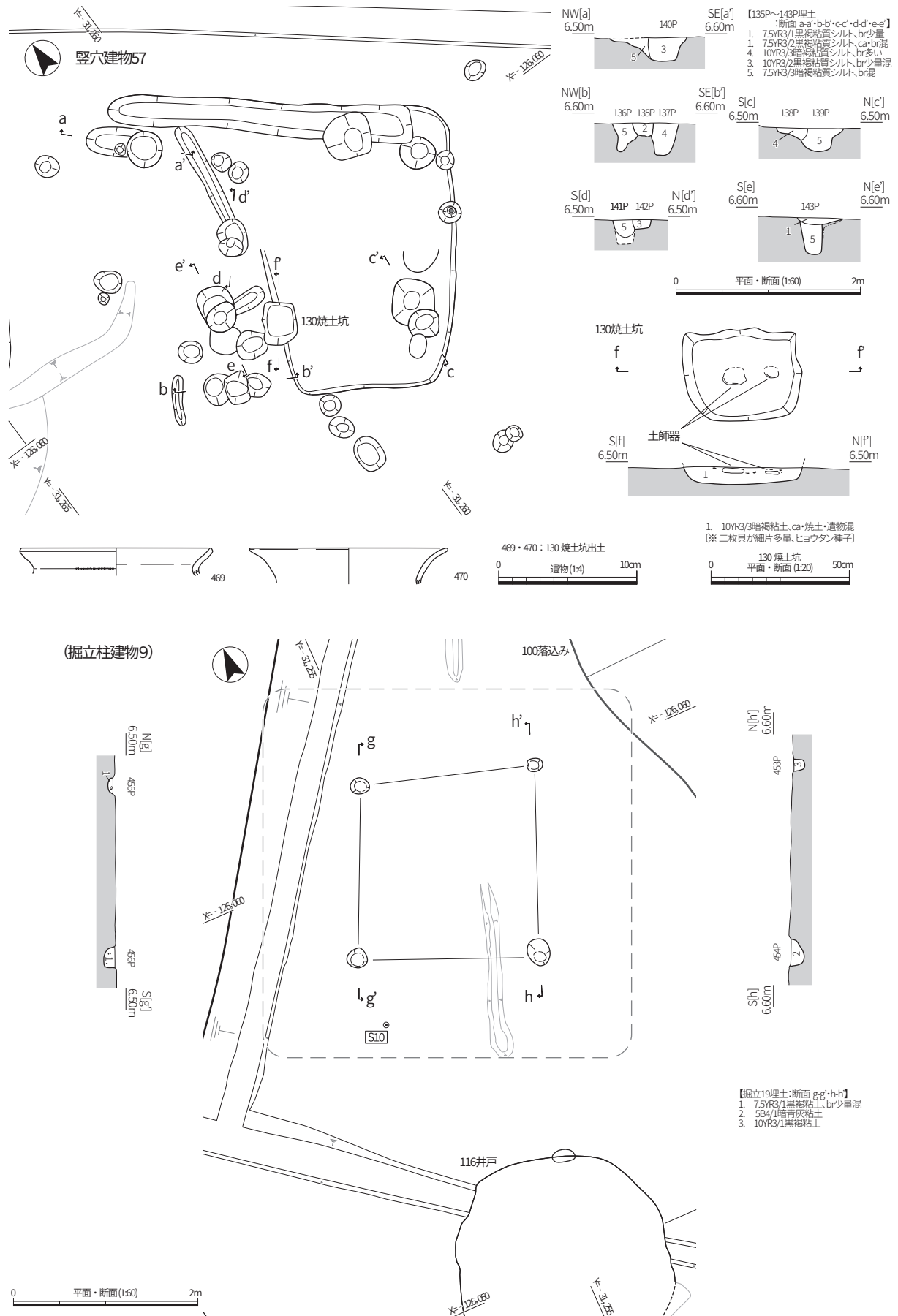


图 90. 豎穴建物 57、掘立柱建物 9 平面・断面・出土遺物



も暗色土の泥質土であるのに対し、遺物底面の T.P+6.3～6.4 mあたりを境にブロックの混じり方に相違があることが判明した。この境界を基準にして上下の区別ができることから、やや根拠は弱いだが、竪穴建物の底面を示すと推測される。出土した土師器と石製品のうち、西壁沿いで出土した大型壺類(484・485)と石臼は、建物の床面相当にある高さから揃って出土しており、建物の放棄時に残された遺物と判断できる。ほかの遺物は、0.1 mほど高い埋土上面付近から出土するものも含まれるが、土師器の偏在的な分布のあり方からこれらも基本的には建物に伴う遺物と認識できる。

出土した土師器には、高杯、小型丸底壺、中大型の壺類と鉢類、布留形甕がある(471～487)。床面相当から出土した大型複合口縁壺(484・485)は、全ての破片を回収することができなかったが、出土状況から完形の状態で廃棄されたとみて大過はない。そのほかの資料は、いずれも器面の摩滅が顕著な破片資料が多い。出土土器の特徴としては、高杯はいずれも円盤充填法による接合方法で(477・478)、脚部内面に棒状痕のある典型的なC系統(Ⅱ群系)が主体である。小型丸底壺(473・480・481)は、外面調整が不明であるが、いずれも粗製品のため高杯と同様にC系統(Ⅱ群系)とみなせる。壺類は大型品が目立ち、布留系直口壺(483)や複合口縁壺(482・484・485)などがある。阿波(482)・山陰(485)からの搬入品が含まれる点が特筆され、特に肩部に施文がある山陰系の大型甕(485)は、丸底の大型品であるため前期末～中期初頭頃の「大角式」の範疇で理解ができる<sup>14)</sup>。70%ほどの破片があり、畿内ではこの時期の復元率の高い出土事例が報告されていないため重要である。鉢では、(474)が布留式中段階以降出土事例が目立つ山陰系、中型品(487)はやや珍しい器形で、器面に煤が付着する。被熱痕跡があるため実際の使用が伴っていたことがわかる。布留形甕(476・486)は、いずれも直立気味に立ち上がるものの、内面の肥厚は明確でない。これらの土器群は、高杯の形態や小型丸底の調整技法から布留式新段階、辻編年2段階のなかにおさまる資料と認識でき、山陰地域との併行関係も大きな齟齬はない。高杯や小型丸底壺、布留形甕などといった編年的位置づけが明快な器種が少ないものの、前期末～中期初頭の広域的な併行関係を考える上で重要な一括資料といえる。

石製品については、石杵(S6)と石臼(S7)がセットで出土している点が重要で、形態的特徴や使用痕から朱の精製に関わる磨石と磨台と判断できる。朱の産出地として知られる阿波からの搬入土器(482)が共伴している点がさらに重要で、この建物は朱の精製に関わる工場の可能性が推測される。

**(掘立柱建物9)** (図90) 竪穴建物59の東10 mに位置し、100落込み(浅谷)の肩部付近に立地する。また、南側に隣接して116井戸がある。検出された柱穴は、いずれも径0.15～0.2 m、深さ0.08～0.2 mで規模が小さいが、周辺ではほとんど柱穴が検出されていないことや、4本の柱穴の並びが良いことから、竪穴建物を構成する支柱穴と判断した。柱間隔は1.9～2.1 mで、一辺4 m程度の規模の竪穴建物に復元できる。柱穴埋土からは、遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。なお、建物周辺で敲台もしくは磨台と考えられる石製品(S10)が一点出土しているが、これについては時期が明確でない。類例から縄文時代まで遡る可能性もあり<sup>15)</sup>、建物に伴う遺物であるか不明である。

**1482井戸** (図94・95・96・97・98) P6区の北端で検出された素掘の井戸で、掘立柱建物30の北25 mに位置する。立地は、微高地A北端部付近の100落込みの延長線上にあるため、標高は居住域の中心域に比べて相対的に低い。検出面の形状は円形を呈し、規模は径1.8 mをはかる。断面の形状は漏斗状で、底部径は0.5 m、検出面から底部までの深さは2.5 mをはかる。埋土は、上層〔埋土1～3〕が灰色の粘土を主体とする。検出面で大型の壺類などが出土し、深さ1.0 mまでまとまった量の土師器が重層的に出土している。下層〔埋土4～7〕については、黒褐シルト～黒粘土を主体とし、葉や枝な

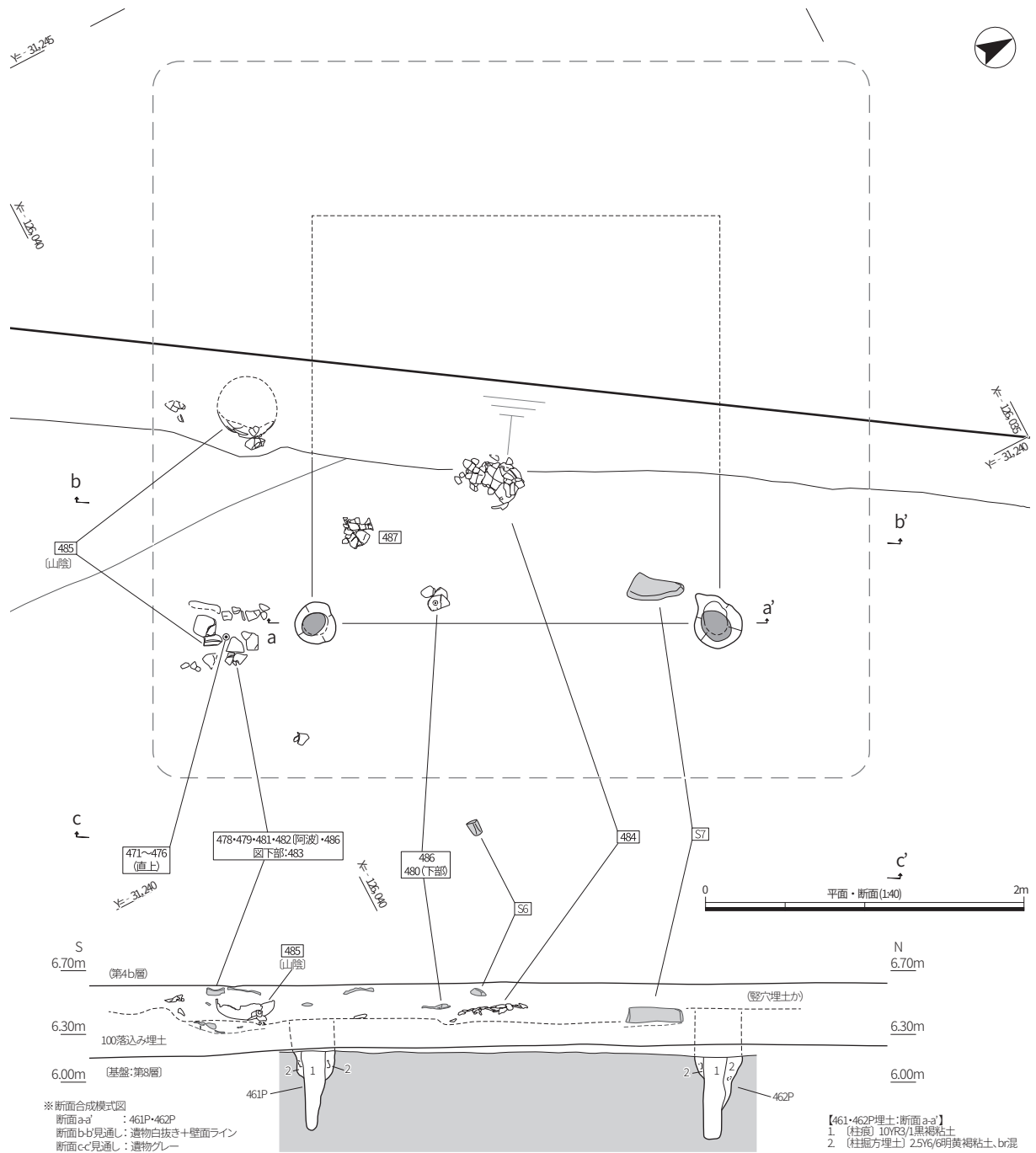


図 91. 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) 平面・断面

どの有機質を多く含む。上層とは対照的に遺物はごく少量で、土師器甕の細片や桃核が出土している。筒状の下半部は、堆積状況から自然堆積とみられる。徐々に埋没したことがうかがえ、埋没後に土師器を投棄して井戸が廃絶したことがわかる。

出土遺物は、大半が上層からの出土で、復元率の高い遺物が重層的に出土した。その一方で下層から出土した土師器は、破片数点に留まる。土器以外では、桃核が計 10 点出土している。上層〔埋土 3〕から 2 分の 1 以下に割れたものが 7 点、下層〔埋土 4・5〕から完存 1 点と半分に割れたものが 2 点出土しており、上層出土の桃核はいずれも破片で炭化しているのが特徴である。

上層出土遺物は、図 94 に示したように上下約 4 重に土師器が重なっており、図 95～98 では上位か

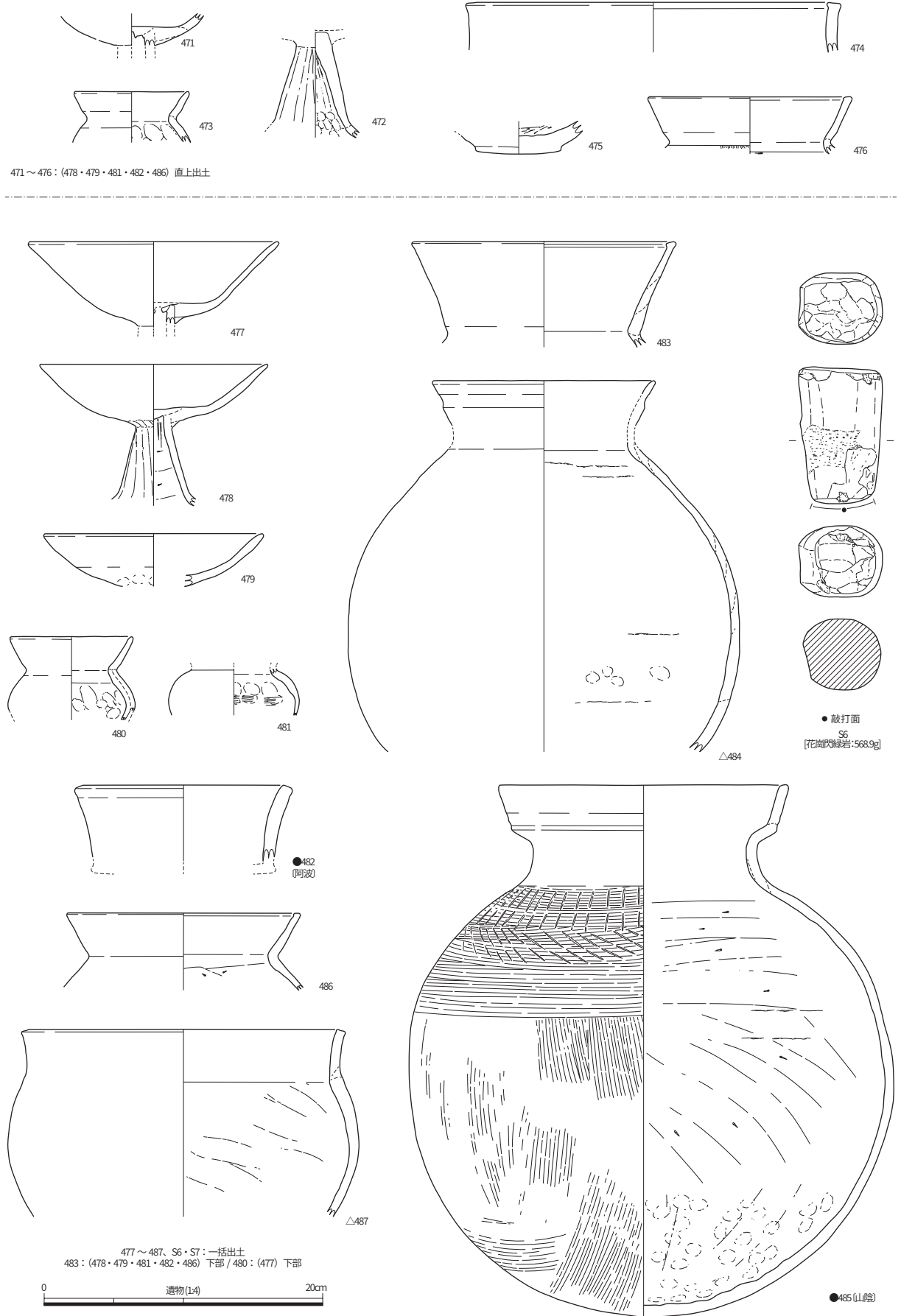


図 92. 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) 出土遺物 (1)

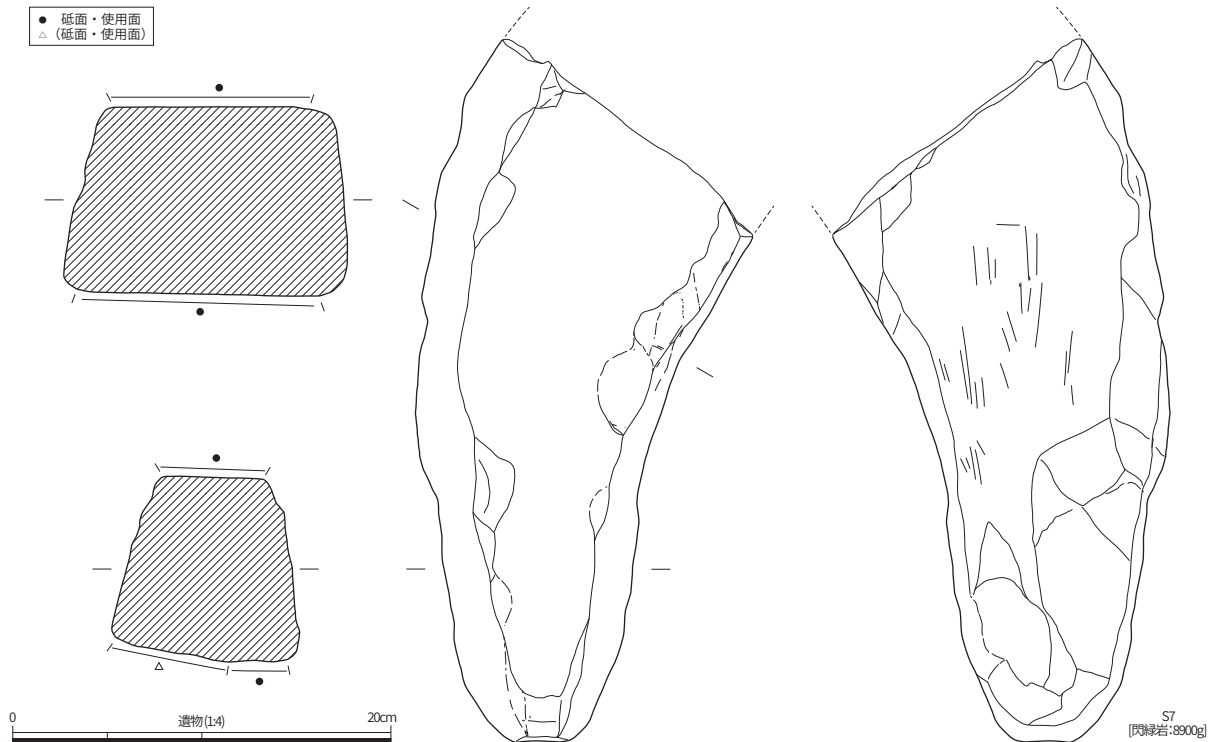


図 93. 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) 出土遺物 (2)

ら下位の順で出土遺物を図示している。出土状況に関する所見としては、検出面（上層①）では大型の壺類の出土が目立ち、その下部の上層②では高杯や壺・甕類が割れた状態で出土する傾向がみられた。さらに下部の上層③では、胴部や口縁部などに意図的な穿孔・打欠きを施す中・小型の壺・甕類の出土が目立ち、そして最下部の上層④からは、小型丸底壺と中・大型の布留形甕がまとまって出土した。このように土師器は、上下に重なり合いながら出土しているが、大まかな器種のまとまりを見出すことができ、なんらかのルールに基づいて器種の選別や投棄の順序が決められていた可能性が推測される。一貫して地形が高い南側からの投げ込みがなされており、上層②・③・④は接するように重なり合うことから、連続した投棄であることが確実で、投棄の同時性を保証できる。その一方で上層①と上層②の土器群との間には、間層〔埋土1〕を挟んでおり、少なからずタイムラグが認められる。ただし後述する遺物の型式学的な特徴から、投棄行為自体は短期間のうちにおこなわれた蓋然性が高い。このことは、上層②から上層③にかけて出土した高杯の脚部が、上層①・②間の埋土から出土した杯部と接合することからみても（519）、その間隔は限りなく短いと判断でき、上層①も含めて一括性の高い出土状況とみなすことができる。なお甕や小型丸底壺には、内外面に煤が顕著に付着する資料が多い。実際の使用を伴った土器であったことは確実で、井戸廃絶時の祭祀行為の内容を復元する上で重要な所見となるだろう。

上層出土の土師器の組成については、高杯、小型丸底壺、布留形甕が主体を占め、ほかに中・大型の壺・鉢類が含まれる（488～548）。高杯は、B系統（I群系）を少量含むが（488・492など）、大半がC系統（II群系）無稜外反形で（489・494・519・525・526・527・528）、一部に無稜外反形の杯底部外面にケズリを施す（518）など、折衷的な資料が一定量含まれる。また（527）については、866井戸上層出土遺物にハケ原体や胎土が酷似する同工品がある（図175:1120、P237）。小型丸底壺についても、外面ケズリ調整のB系統（I群系）（496・516）も含まれるが、外面ハケ調整のC系統（II群系）（497・



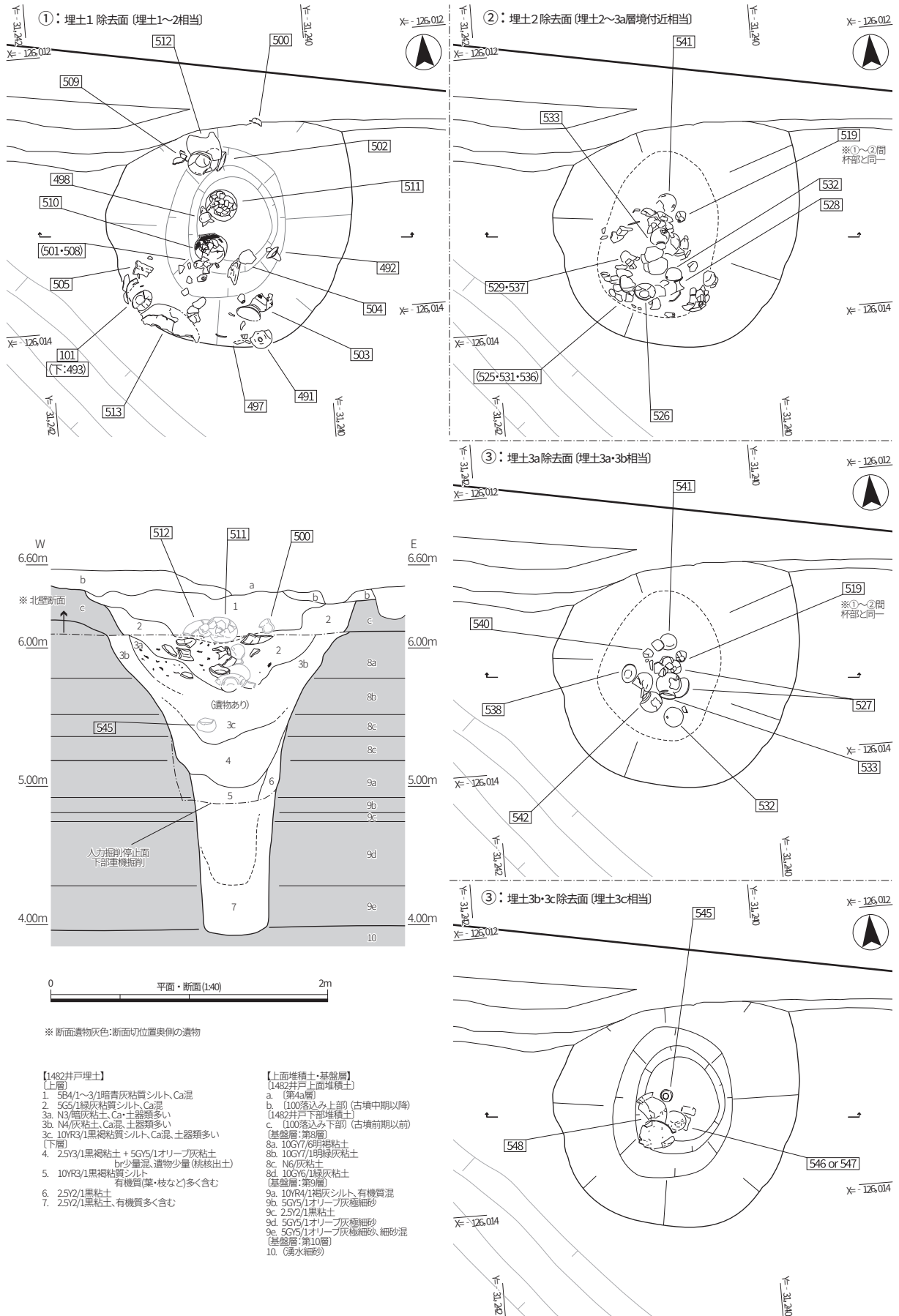


図 94. 1482 井戸 平面・断面



図 95. 1482 井戸 出土遺物 (1)

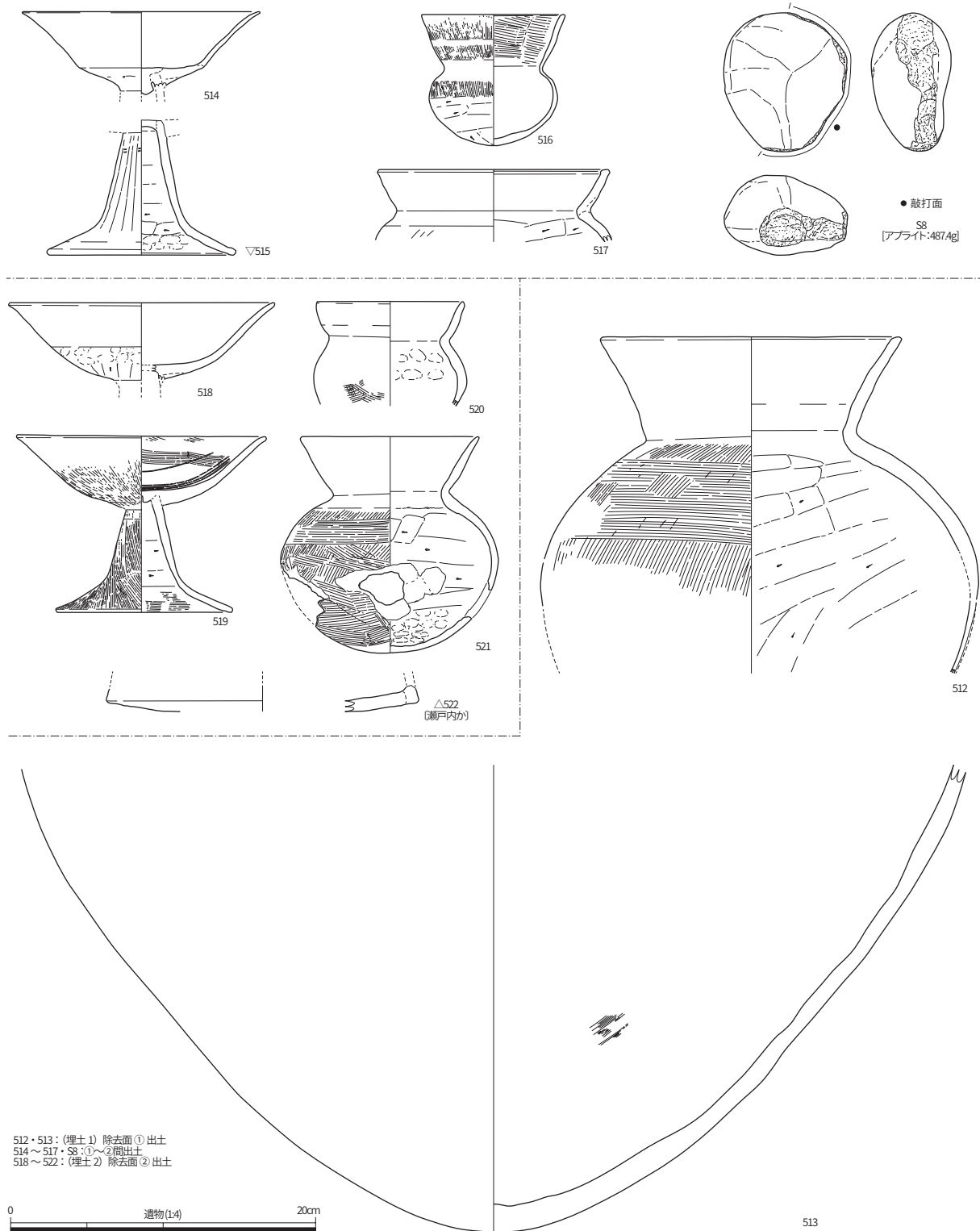


図 96. 1482 井戸 出土遺物 (2)

498・499・500・520・540・545) が主体である。ほかに1点のみ口縁部が開く厚手の小型丸底鉢(529)がある。中型壺では、直口壺(502・521)はいずれも口縁部が短く、体部中央～下半に内面から穿孔されている。脚付無頸壺(542)は、口縁部と脚部の一部が人為的に打欠きされている。特異な器形のため類例は知らないが、下半に限ってみれば東海廻間式の高杯と形状・成形が類似しており、東海系の特殊土器と認識したい。大型壺には、二重口縁壺(490・503)と直口壺(512)があり、これに加え底

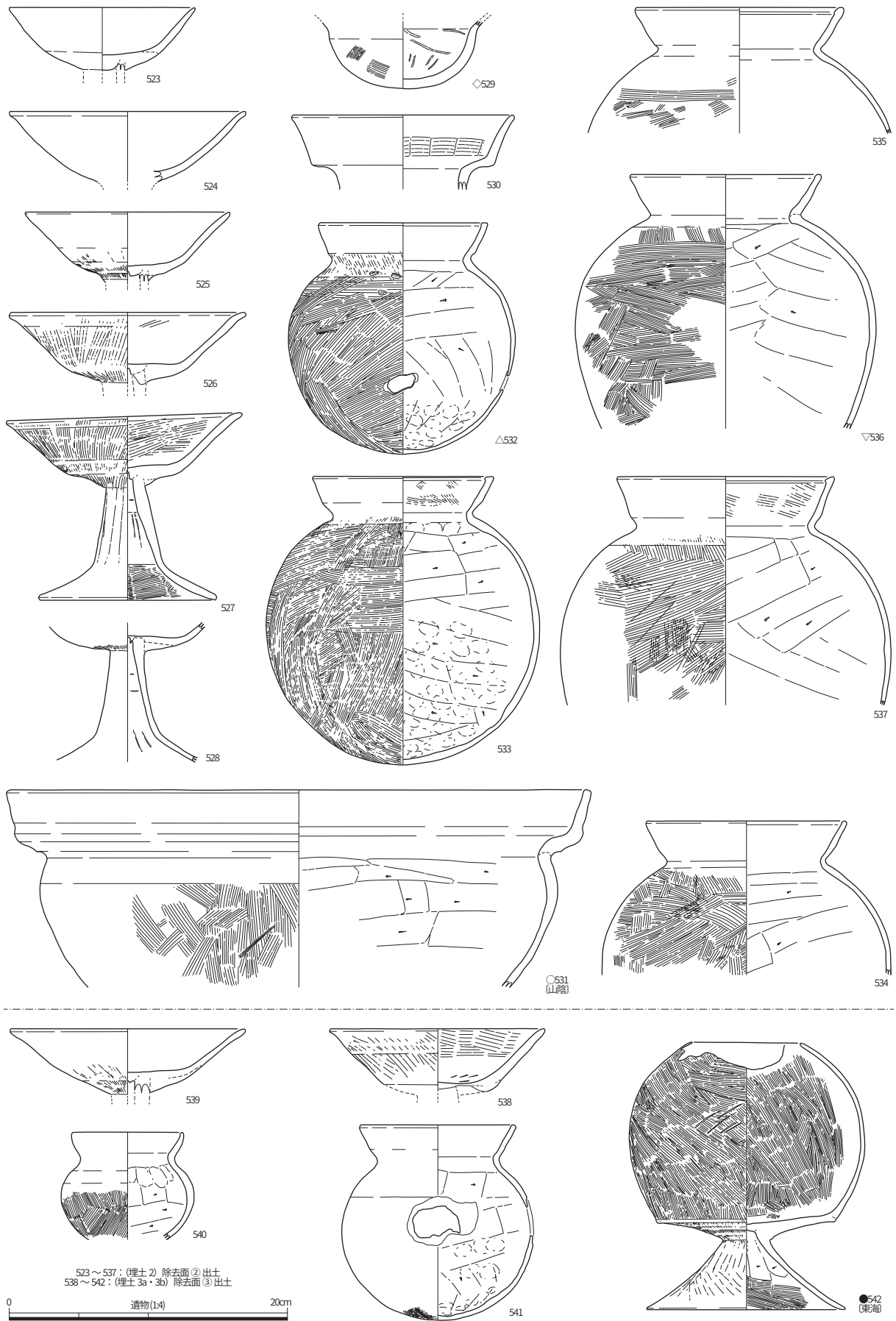


図 97. 1482 井戸 出土遺物 (3)



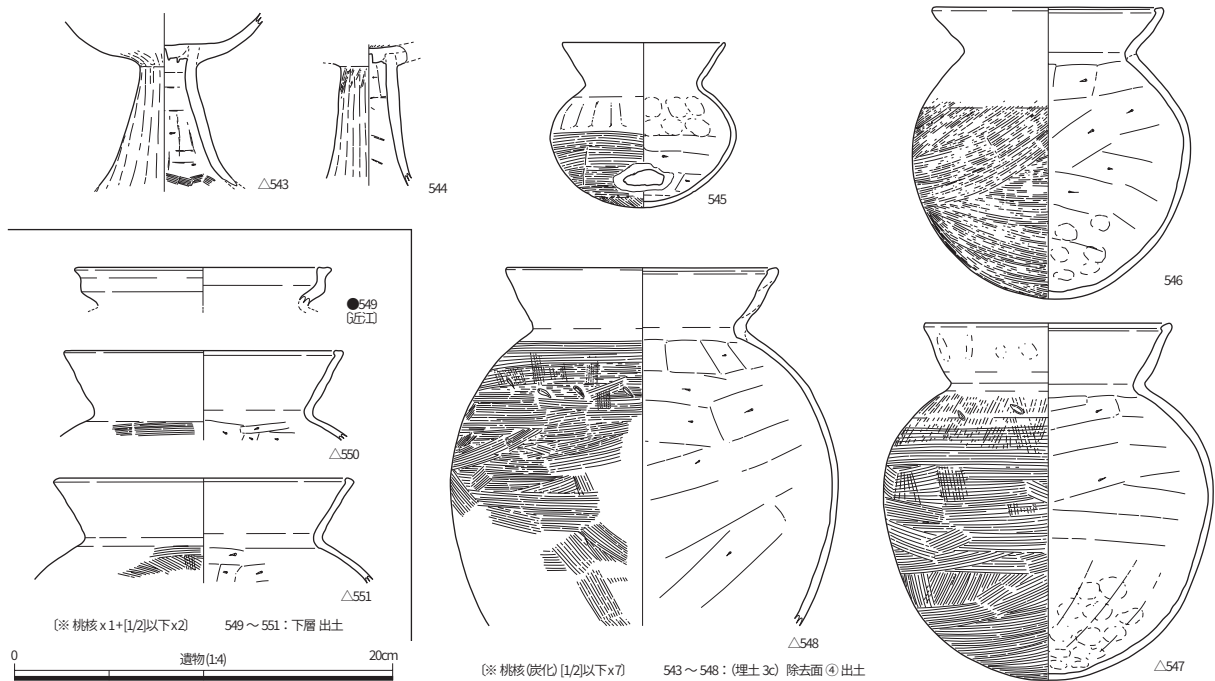


図 98. 1482 井戸 出土遺物 (4)

部のみ資料であるが、最大径 60 cm以上の超大型壺 (513) が含まれる。ほかでは布留系の鉢 (505・531) などがある。布留甕は、一定量の出土があり、小型品は同サイズの壺と同様に体部に穿孔を伴うものが含まれる (532・541)。内面はいずれもケズリで、形態的な特徴としては大型品を中心に長胴化傾向があって、口縁部は端部が肥厚するものとししないもの、内湾気味に立ち上がるものと直立気味に立ち上がるものなど、バリエーションがある。また肩部のヨコハケが伴うものもあるが、ランダムな斜めハケの個体も多い。さらに肩部には、米粒状圧痕を施すものが一定数ある (532・547・548)。類例は、既往の研究成果から前期の資料に多いことが知られているが、<sup>16)</sup> 近隣の井尻遺跡では中期前葉～中葉の事例が一定数あるため、<sup>17)</sup> 地域性のひとつと捉えることが可能である。土器以外では、側部に明瞭な使用痕がみられる敲石が 1 点出土している。

上層出土土師器の時期については、高杯と小型丸底壺が主要器種で、小型器台がないことから明らかに布留式新段階以降と認識できる。詳細については、II 群系小型丸底壺の内面のケズリが省略されたものが増えている点、布留甕は長胴気味の資料が多く肩部のヨコハケが粗雑化傾向を示す点などから、やや時期が下る辻編年 2 段階とみるのが妥当である。なお、全体的に土器の胎土は黄色い色調のものが多い傾向にあり、二重口縁壺や直口壺など一部に橙色のものも含まれる。

下層出土遺物は、上層に比べて極端に出土量が少ない。布留形甕 (550・551) と近江からの搬入品とみられる受口状口縁甕 (549) の口縁部の破片があり、これらは布留式古段階新相～中段階古相頃に位置づけられる。明らかに上層出土資料とは时期的な隔りがあるため、井戸の掘削時期は前期に遡ることは確実である。長期間に亘って使用されたのち、中期初頭頃に井戸の廃絶に伴ってまとまった土器の投棄行為がなされたことがうかがえ、古墳時代の祭祀行為を考える上でも重要な遺構となるだろう。

**116 井戸** (図 99・100) 100 落込みの西側肩部付近に位置する素掘の井戸で、A-1 区と A-2 区にまたがっている。このため A-1 区の範囲内の南半分を先行して調査したのち、北側の A-2 区の調査時に改めて全掘した。検出面の形状は円形を呈し、規模は径 2.3 mをはかる。底部にむかってすぼまる断面形状で、

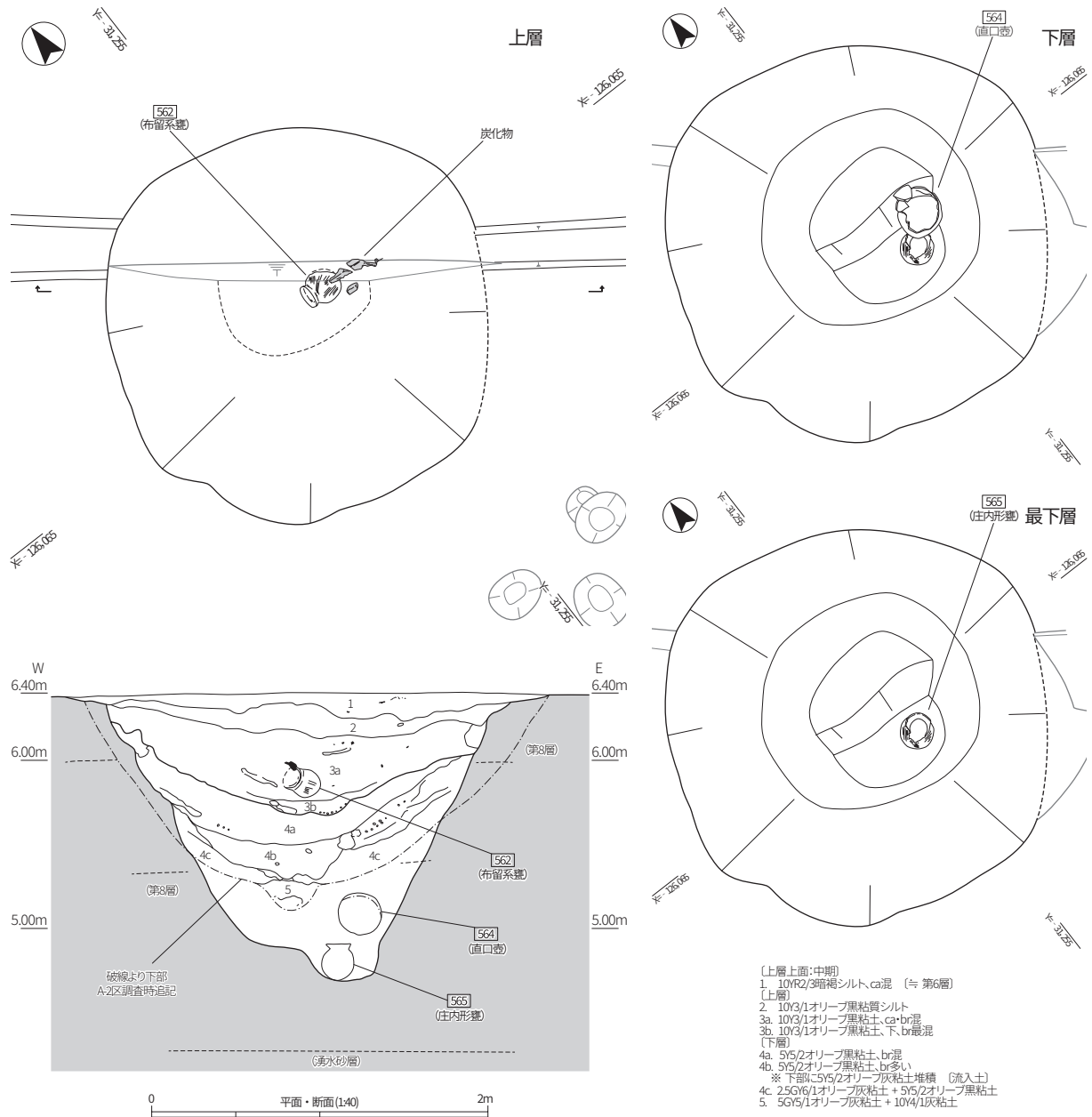


図99. 116井戸 平面・断面

最下部は南半が階段状に一段深くなっている。底部径は0.8 mで、検出面から底部までの深さは1.68 mをはかる。埋土は、上層〔埋土2・3〕と下層〔埋土4・5〕に大別でき、上層はオリブ黒色粘土を、下層はオリブ黒～オリブ灰色土を主体とする。上層下部から底部にかけて完形に近い土師器が3点出土しており、上層下部から布留形甕(562)が、下層から直口壺(564)が、底部から庄内形甕(565)がそれぞれ出土している。下層上部から上層にかけてレンズ状に堆積しており、滞水状態で徐々に埋没が進行したことがうかがえ、上層出土の布留形甕は最終的な井戸の廃絶時に伴って投棄された遺物と認識できる。

出土遺物は、上層と下層に大別できる。古式土師器のほかに、上層埋土中からアカメガシワの種子6点と下層から桃核1点がそれぞれ出土した【第5章第4節】。上層出土遺物は、完形の布留形甕(562)の周辺から土師器の高杯・壺・甕の破片が少量出土している(552～561)。布留形甕(562)以外はいずれも細片で、高杯にはタテミガキのA系統(553)と細筋ヨコミガキのB系統(552・554)がある。

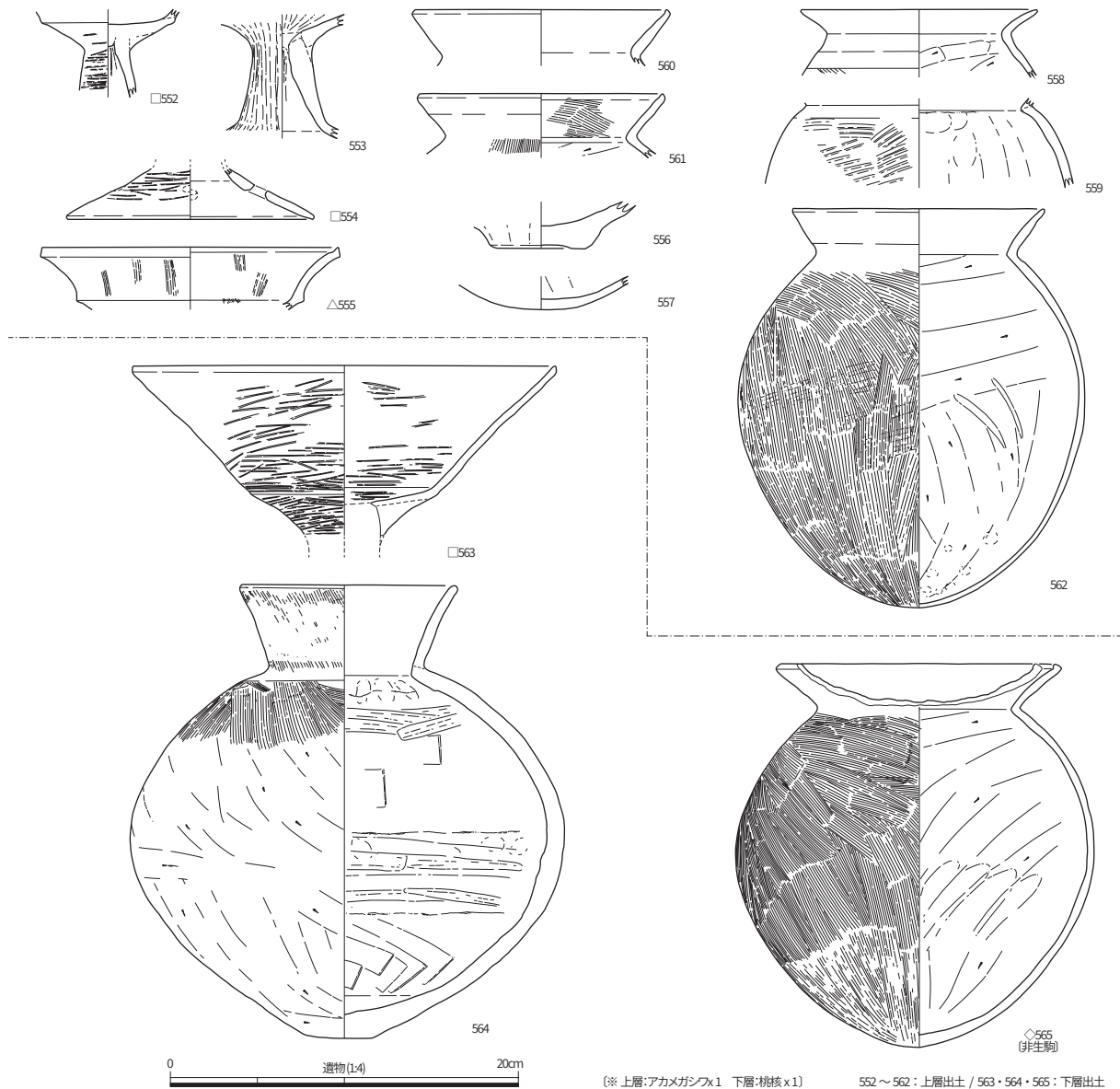


図 100. 116 井戸 出土遺物

甕には、V様式系甕 (558・559) と布留形 (560・561) があり、ほかに平底の壺底部がある (556)。布留形甕 (562) は、長胴気味の体部に肩部までタテハケを施し、体部にタタキの痕跡を残す。下層出土遺物は、上部から大型高杯 (563)、大型直口壺 (564)、外面ハケ調整の庄内形甕 (565) の順に出土している。大型高杯 (563) は、在地胎土の細筋ミガキを施すB系統の臨地品もしくは模倣品で、平底の大型直口壺 (564) は外面ハケ調整のためC系統の影響が看取される。庄内形甕 (565) は、生駒西麓産ではない胎土で、後円部に人為的な打欠きが認められる。井戸の上面から底部までの深さが 1.68 m あるが、出土遺物は底部から下層まで含めて布留式古段階新相～中段階古相の時期幅におさまる。そのため、比較的短期間のうちに井戸が埋没したことがうかがえる。

**1298 落込み** (図 101) P6 区北西から A-2 区、A-1 区南東にかけて南北にのびる 100 落込みは、P6 区と A-2 区間の未調査地北端付近が底面 (基盤層第 8 層の上面) の標高が最も高く、そこから南東方向と北西方向にむかって谷状に地形が下がる。北西側では、既に報告した 1482 井戸や中世の 1292 溝のほかに古墳時代の不定形の掘り込みが多数検出されており、一部からは遺物がまとまって出土すること

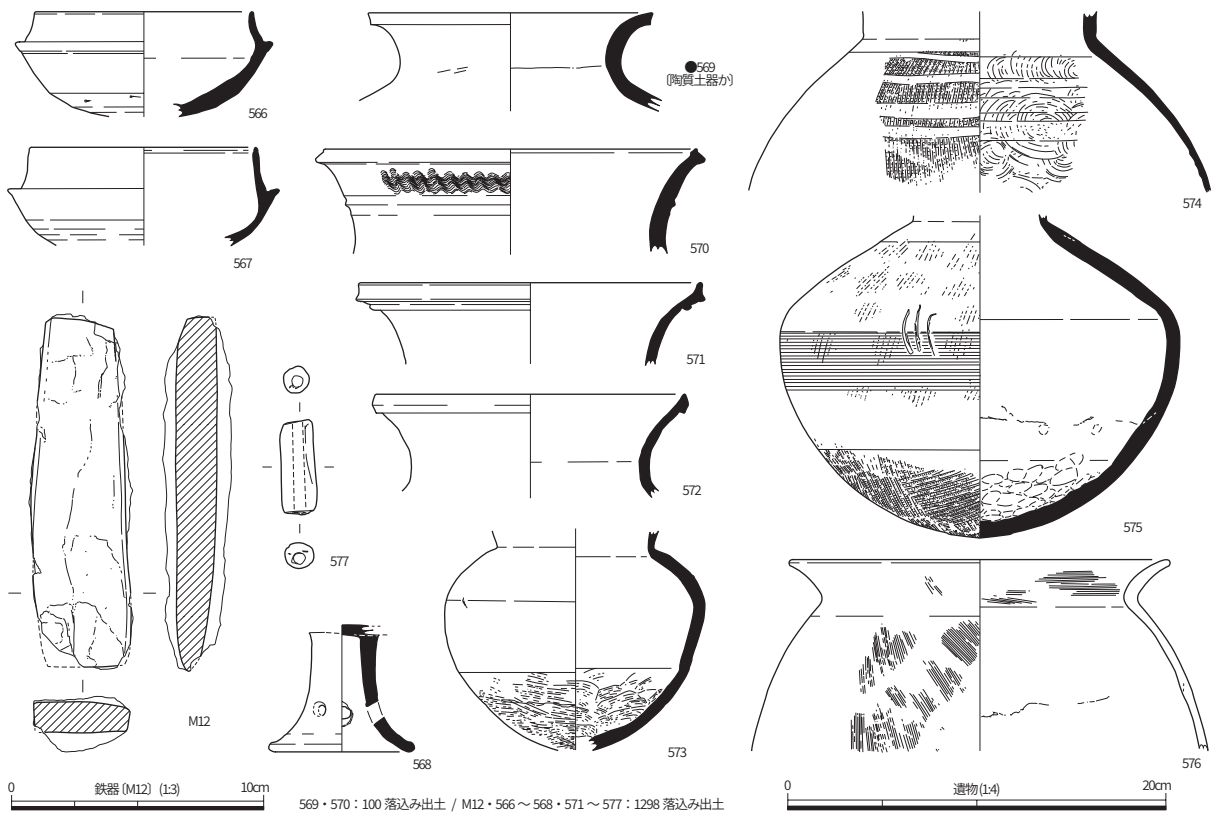
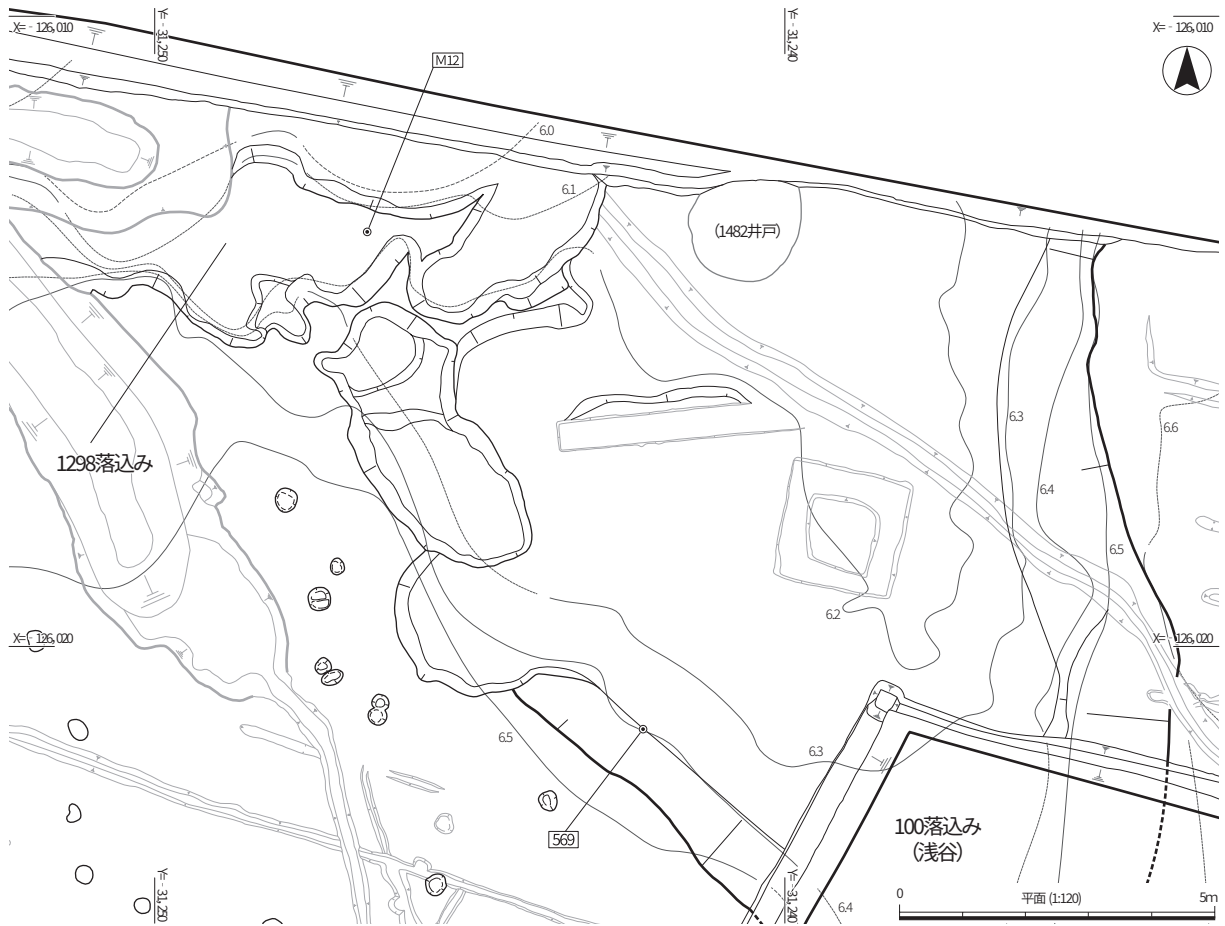


図 101. 1298 落込み・100 落込み（北側） 平面・出土遺物



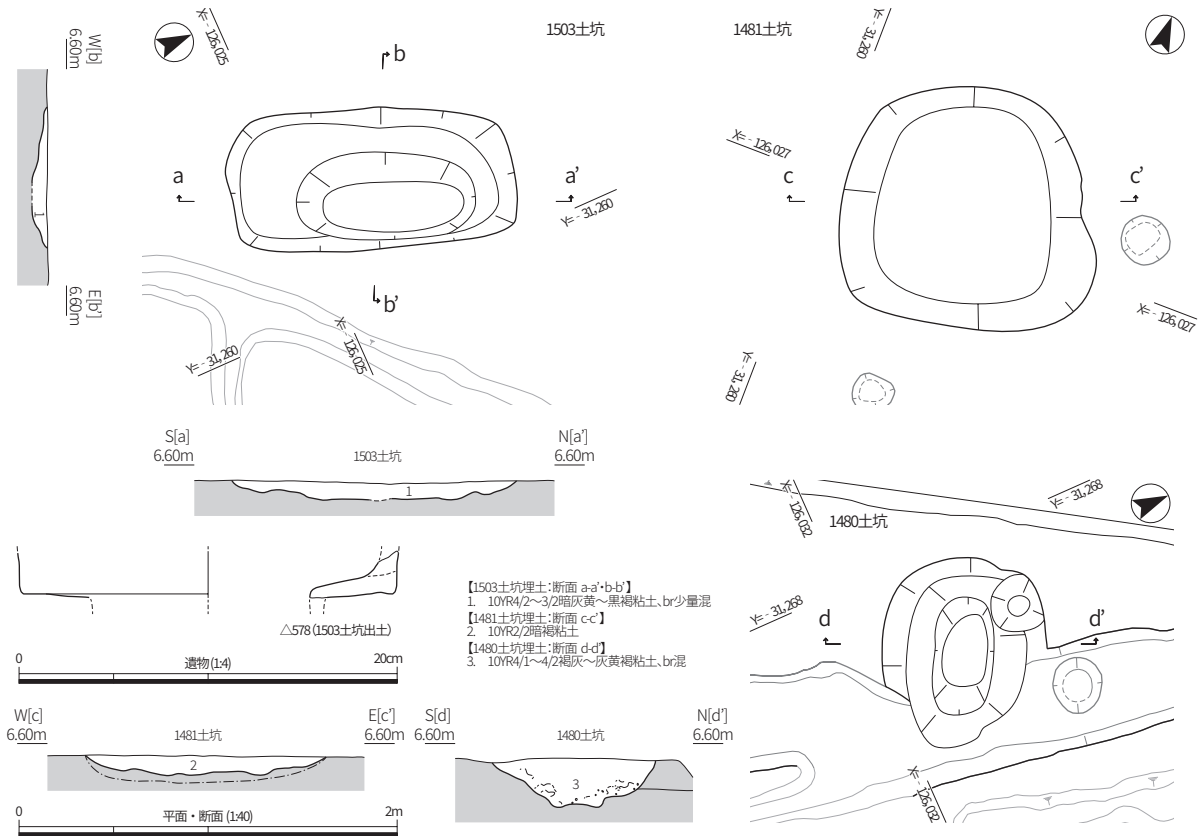


図 102. 1503・1481・1480 土坑 平面・断面・出土遺物

から、居住域の縁辺部に掘削された廃棄土坑と認識できる。

特に 1298 落込みとした遺構から最も多く遺物が出土しており、100 落込み北半部分で出土した遺物と併せて図化した (M12・566～578)。出土遺物は、須恵器が相対的に多く、古墳時代中期～後期初頭頃の遺物までの幅がある。杯身 (566) や高杯 (568)、壺 (572) などは、後期初頭頃まで時期が下り、今回の調査で出土した古墳時代遺物の中でも最も新しい時期の一群であることから、微高地 A の居住域の存続時期を考える上でも重要である。長脚化傾向にある小円孔スカシ 4 方向の高杯 (568) などは、管見の限り類例は知らない。土器以外では、短冊形の板状鉄斧 (M12) が出土しており、集落からの出土は希少な事例である。また土錘 (577) は、分流路 (内ヶ池) の近傍からの出土という状況をふまえると漁労に伴うものと認識できる。ほかでは、100 落込み内から出土した陶質土器の可能性のある壺の口縁部片 (569) が注目される。

**1503 土坑** (図 102) (掘立柱建物 32) の北東 4 m に位置する長方形の土坑で、規模は長さ 1.5 m、幅 0.7 m をはかる。検出面からの深さは 0.1 m で、埋土は、ブロック混じりの暗灰黄～黒褐粘土を主体とする。埋土からは、土師器の破片が少量出土しており、布留式古段階新相～中段階頃の二重口縁壺の破片 (578) が出土した。機能や性格については不明である。

**1481 土坑** (図 102) (掘立柱建物 32) の北東 4 m に位置する一辺 3.2 m の隅丸方形の土坑で、検出面からの深さは 0.1 m をはかる。埋土は、暗褐粘土を主体とし、遺物は出土していない。埋土の特徴から古墳時代の遺構と考えられるが、機能や性格は不明である。

**1480 土坑** (図 102) (掘立柱建物 32) の南西 5 m に位置する楕円形の土坑で、東半が 112 溝と重複する。規模は長径 2.5 m 以上、短径 2.2 m、検出面からの深さ 0.25 m をはかる。埋土は、ブロック混じ

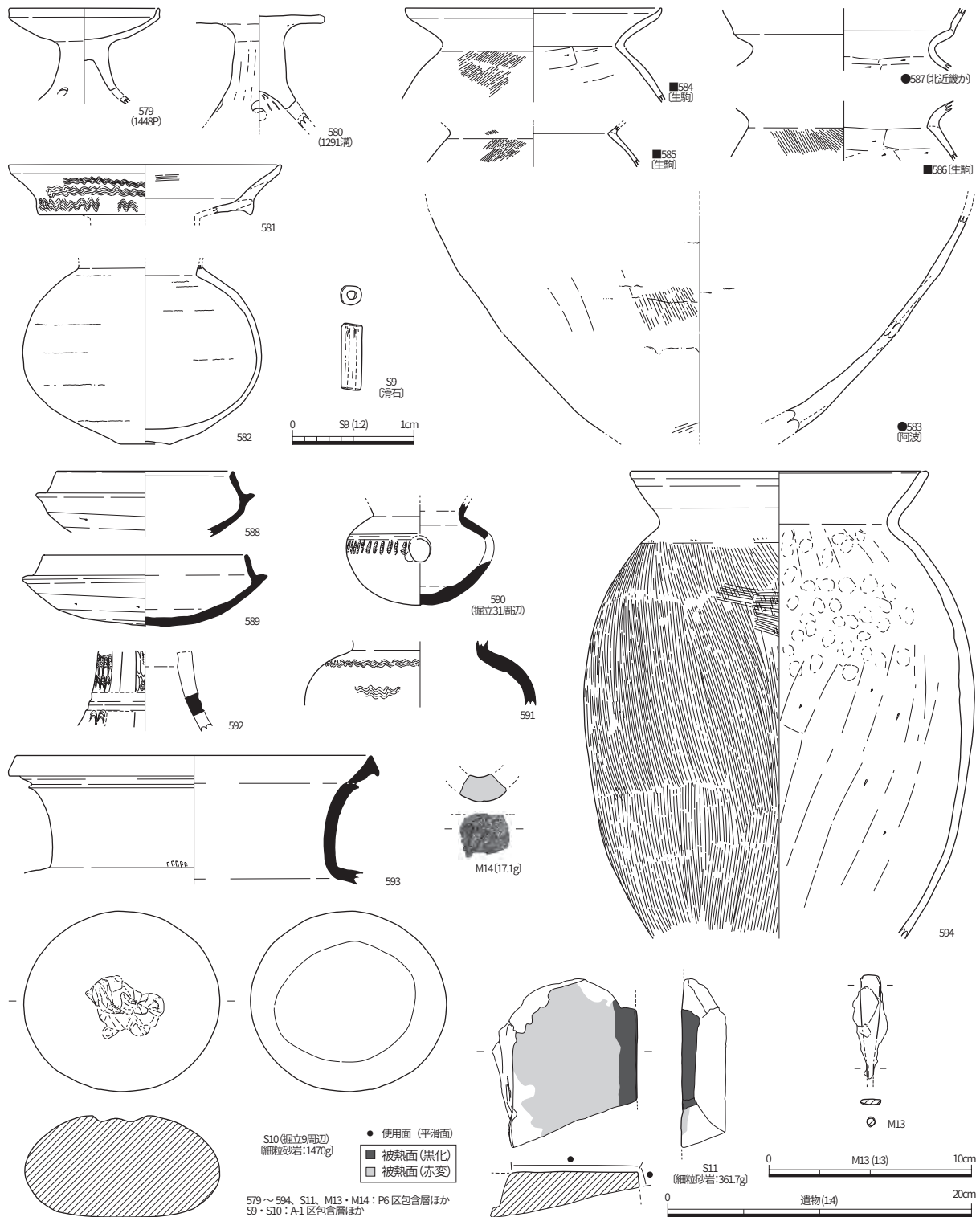


図 103. 西側エリア 微高地A 包含層ほか 出土遺物

りの暗灰黄～黒褐粘土を主体とする。埋土から土師器の細片が2点出土しており、古墳時代前期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

**包含層ほか出土遺物** (図 103) 微高地A周辺は、P6 区の南東部を除いて包含層 (第5・6層) が中世段階に削平されているため、相対的に遺物の出土量は少ない。ただし包含層が未削平の高台部分では、加飾二重口縁壺 (581・582) や、中期後葉以降の長胴化した布留形甕 (594) など復元率の高い遺物が



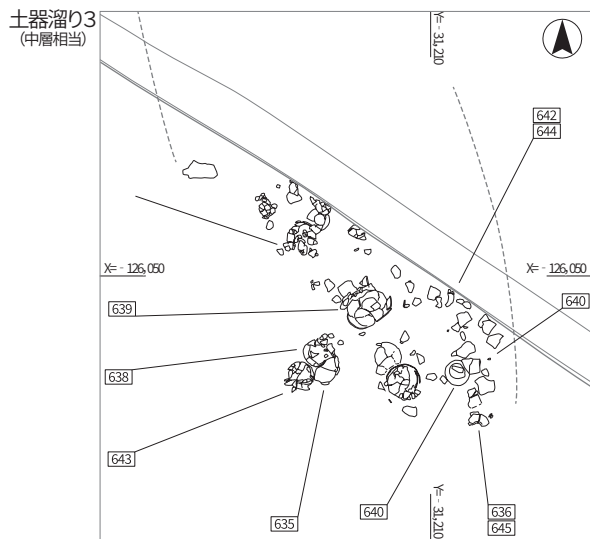
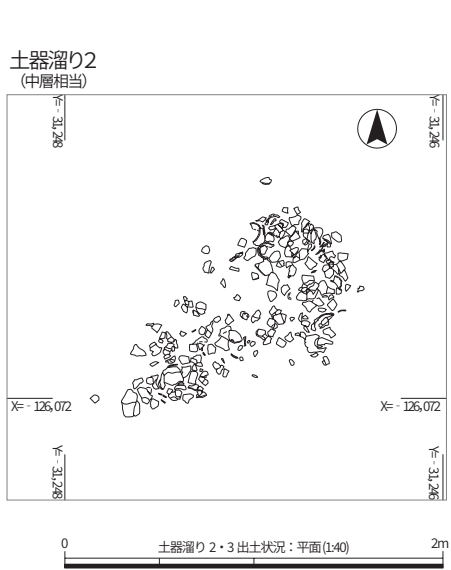
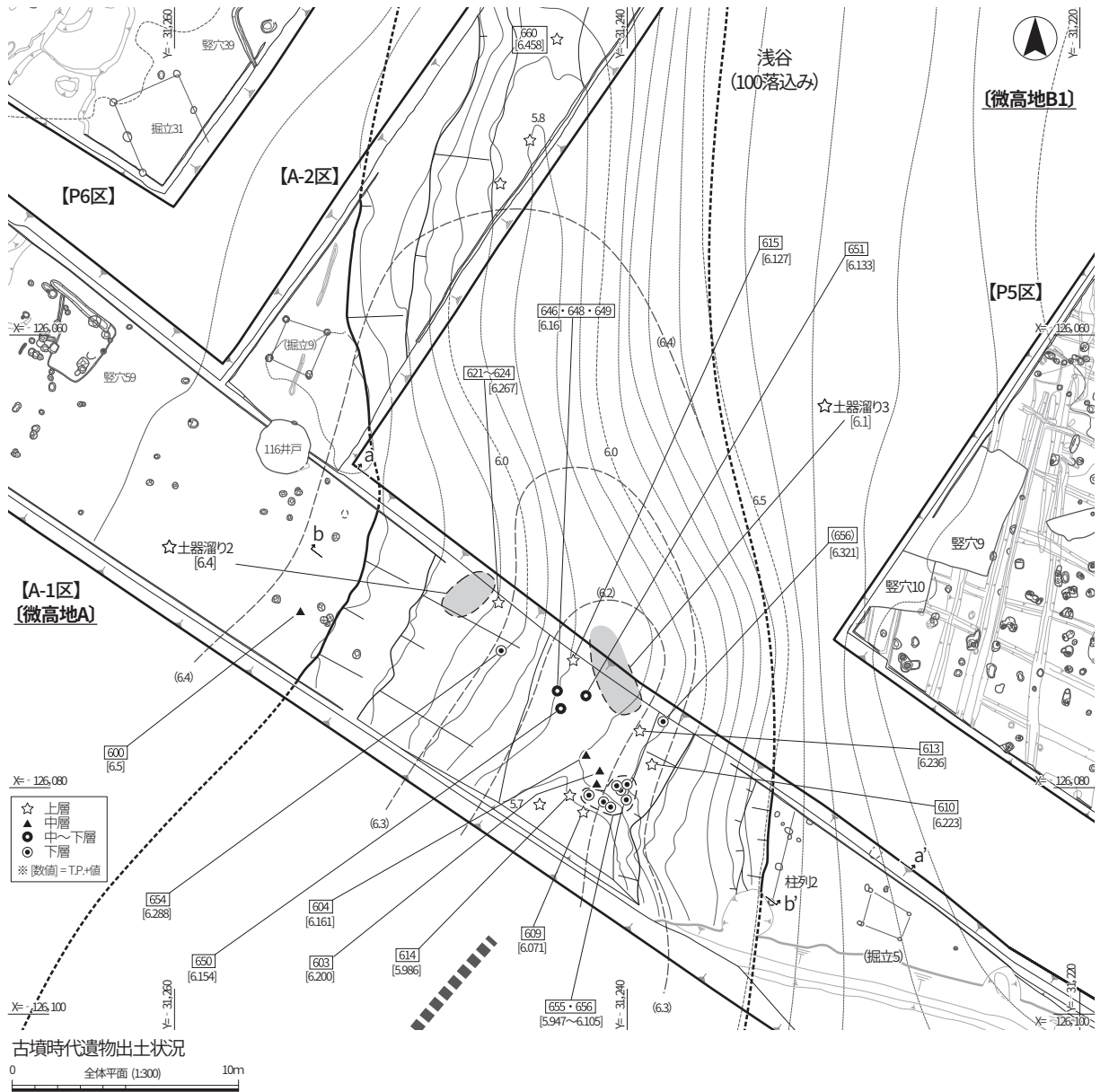
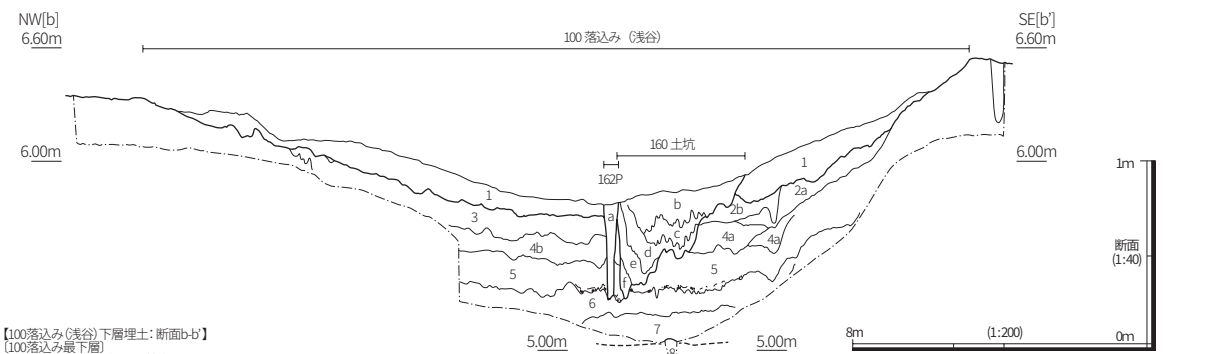
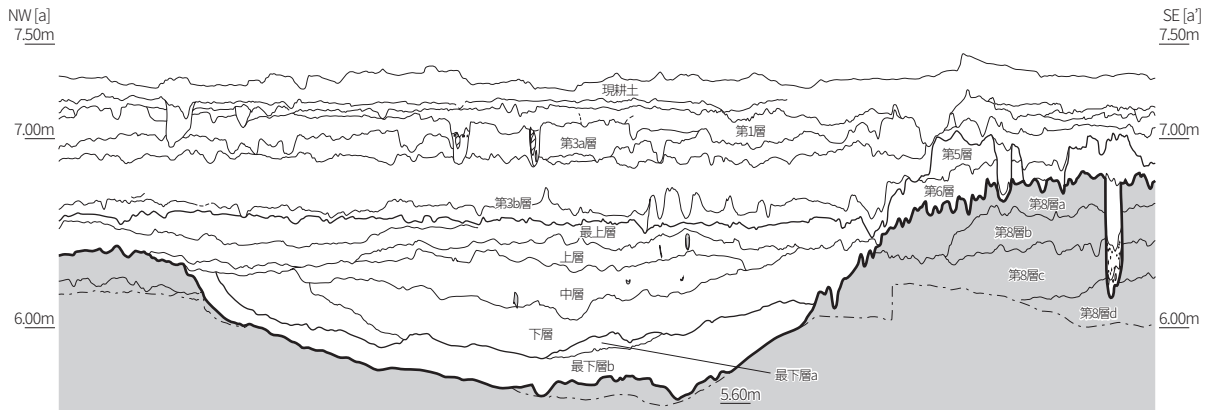
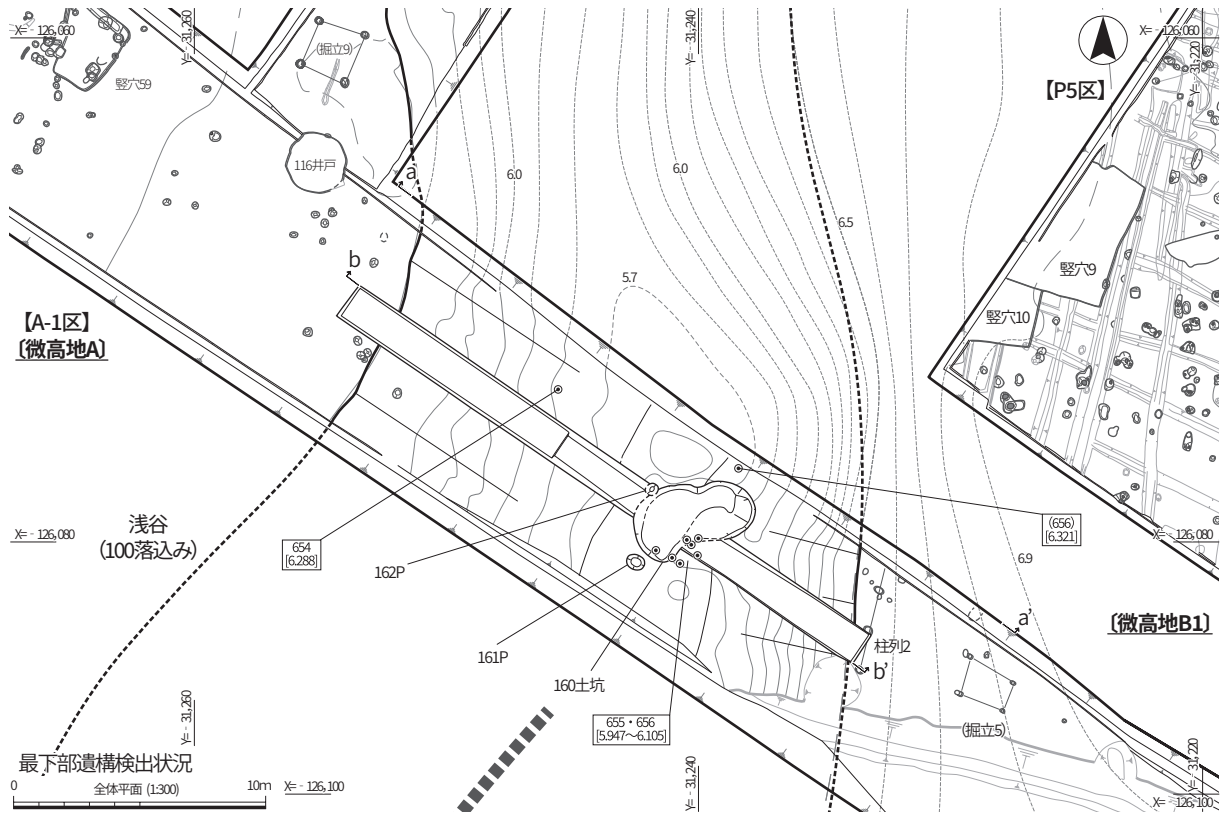


図 105. 100 落込み (浅谷) 南半 詳細平面 (1)・遺物出土状況





【100落込み(浅谷)下層埋土: 断面b-b']  
 【100落込み最下層】  
 1. 2.5Y3/1~2/1黒相~黒粘土  
 [基礎第8層相当]  
 2a. 5Y4/1灰粘土  
 2b. 5Y4/1灰粘土、br混  
 3. 5Y6/4~6/6オリブ黄~オリブ粘土  
 4. 5Y5/1灰粘土、やや土壌化傾向  
 5. 7.5G6/1緑灰シルト、下部ラミナあり  
 6. 2.5G6/1オリブ灰粘土  
 7. 10Y6/1灰粘土、Ca混  
 (下層埋土)  
 8. 7.5Y4/1灰極細砂、Ca混  
 ※ AMS年代測定 [B.C.3339~3207]

【160・162P埋土→古墳初頭】  
 a. (162P埋土) N3/O暗灰極細砂、遺物混  
 (160土坑埋土)  
 b. N4/O灰粘土、br-Ca混  
 c. 10Y5/1灰粘質シルト、br最混  
 d. N3/O暗灰粘質シルト、br-Ca混(主に底部付近)  
 e. 10YR5/1褐灰粘土+N4/O灰粘土、br混  
 f. N4/O灰粘土 + br

【100落込み(浅谷)埋土: 断面a-a']  
 最上層 (=第6層) 10YR4/1褐灰シルト、上面Mg沈着、長石粒混  
 → 中期~後期か  
 上層. 2.5GY3/1灰オリブ粘質シルト、遺物あり → 中期  
 中層. 5GY4/1~3/1暗オリブ灰粘質シルト、遺物多い → 前期  
 下層. 10Y3/1オリブ黒粘土 → 前期  
 最下層a. 7.5Y4/2灰粘質シルト  
 最下層b. 2.5Y3/1~2/1黒相~黒粘土  
 ※ 遺物ほぼなし、突帯文土器 → 縄文晩期~弥生の堆積か  
 基礎第8層  
 第8層a. 10YR6/6明黄褐粘土  
 第8層b. 10YR4/3に濃い黄褐粘質シルト  
 (やや土壌化)  
 第8層c. 2.5Y6/4に濃い黄褐粘質シルト  
 第8層d. 2.5Y6/6明黄褐粘質シルト

図 106. 100 落込み (浅谷) 詳細平面 (2)・断面

出土している。ほかでは、小型器台（579・580）や阿波・山陰からの搬入品（583・587）、生駒西麓産の庄内形甕（584～586）などの外来系土器、中期後半～後期が主体の須恵器（588～593）などが出土している。土器以外では、滑石製の管玉（S9）、用途不明の小型棒状鉄器（M13）、鞆羽口（M14）、石製品（S10・S11）などが出土している。板状の（S11）には、上面・側面に面があり、用途は不明であるが、被熱して部分的に赤変・黒化しているため、鍛冶などでの使用が想定される。

**〔b. 浅谷（100 落込み）：P6 区・A-2 区・A-1 区〕**（図 104～図 110）

微高地Aと微高地Bを隔てる浅谷（100 落込み）は、東西に長い調査地を横断するような形で南北方向にのびる。最も幅の広い南側（A-1 区）は、検出幅が 22 m で、底面の標高は T.P.+5.7 m である。東西微高地との比高は、西側微高地A側が 0.8 m、東側の微高地 B1 側が 1.3 m である。西側微高地Aは、もともと上面が大規模な削平を受けてはいるものの、落込みから微高地への傾斜が緩やかであるのに対し、東側・微高地 B1 側の斜面は急傾斜で落差が大きい。浅谷は、北側にむかって落込みの幅は徐々に減じ、底面が徐々に高くなる。A-2 区・P6 区の接続地点付近が最も幅が狭くなっており、基盤層〔第 8 層〕上面の標高は T.P.+6.4 m で最も高い。この付近は、上面の削平を受けているものの、落込みを充填する土壌層がほとんど確認できない。さらにこの狭窄部から北側にむかって徐々に幅を広げながら地形が傾斜しており、北端部では標高が T.P.+6.2 m まで下がる。位置からみて内ヶ池分流路から派生する小規模な古い流路の痕跡であることは明白であるが、主要流路から切り離されて放棄化した時期については、調査地全体を覆う粘土・シルトの沖積層〔第 8 層〕の堆積時期から縄文時代中～後期頃と判断できる【第 3 章参照】。

**堆積状況と遺物の出土状況** 浅谷を埋める堆積土は、底から上面まで全て土壌化した泥質土を主体とする。谷の内部には、氾濫堆積物はまったく確認できないことから、主流路である内ヶ池分流路からの流れ込み等はほぼなく、周辺微高地からの流れ込みによって緩やかに谷が埋没していった様子が見える。最も深い南端 A-1 区では、土壌化層の上面から底までの深さが 0.9 m で、浅谷埋土は最上層・上層・中層・下層・最下層に大別できる。いずれも暗色の泥質土を主体とするが、埋土の色調にやや違いがあり、上方粗粒化傾向にある。また遺物の出土量に多寡があり、最上層から下層まで遺物の出土が確認されるが、特に中層での遺物の出土量が多く、この層中で土師器の集積地点が複数みられた（100 落込み土器溜り 2・3）。その一方で最下層からは、土師器の出土が確認できないため、弥生時代以前の堆積であることが確実である。さらに谷の最下部からは、縄文時代晩期の突帯文土器の出土が確認されたことから、最下層の堆積のはじまりは縄文時代晩期以前に遡ることがわかる（図 284：1856、P382）。各層の層境は、間層等が介在しておらず、漸位的に変化する。そのため厳密な層位ごとの掘り分けはできていないが、概ね層位ごとに埋土を掘削することができた。その結果、出土遺物から最上層が古墳時代中期～後期、上層が中期、中層が前期中葉～後葉、下層が初頭～前期前葉頃の堆積と判断でき、最下層については上述したように遺物がほとんどないため、古墳時代の居住域の形成以前に遡る。遺物の出土状況については、最上層～上層では復元率の高い遺物もみられるものの散在的な出土のあり方を示す。中層では、上述したように出土量が相対的に多く、復元率の高い遺物も多い。2 か所の土器の集積地点のうち土器溜り 3 とした範囲は、調査区北側の未調査地にも遺物が拡がる。下層では、中層に比べると相対的に遺物の量が少ないが、復元率の高い遺物が一定量ある。浅谷の底面では、不定形な掘り込み土坑（160 土坑）と柱穴 2 基（161・162P）が検出されているが、これらの遺構の埋土や上面・肩部付近から下層

出土遺物と同時期の遺物が出土しており、性格は不明ながらも、谷内部がなんらかの目的で掘り込まれていたことがわかる。

その一方で北側の A-2 区では、遺物の出土量が極端に少なく、埋土上方では土師器の破片の出土が少量みられるものの、下部では遺物がまったく出土していない。A-2 区北端では、浅谷の埋土上半で、土器溜り 1 とした遺物の集積がみられたが、これについては上述したように柱穴を伴うことから、谷部の埋没後に営まれた建物遺構に伴う遺物と判断した（掘立柱建物 46：図 91～93、P137～142）。このことは、谷頭にあたる A-2 区の付近では早い段階に埋没が進行したことを示しており、北半は遅くとも古墳時代の中期頃には陸地化した範囲も広がっていたことがうかがえる。

**出土遺物** 南側 A-1 区の調査範囲で出土した遺物は、出土層位の認定ができたため、層位ごとに図示した（図 107～110）。その一方で北隣の A-2 区は、出土遺物が少なく層位の認定も難しかったため、特徴的な資料と復元率の高い資料を中心にまとめて抽出・図示した（図 110）。最上層（596～599）と上層（600～608）から出土した遺物には、中期中葉以降の須恵器などがまとまってみられる。居住域の出土遺物と大きな差はないが、甕 2 点（603・604）はいずれも体部が完存しており、口縁部が意図的に打欠きされたのち投棄された可能性が推測できる。なお、浅谷の埋土直上面から奈良時代の土師器杯 A（595）が出土しており、古代には浅谷はほぼ埋没していたことを示す資料といえるだろう。

最も出土遺物が豊富な中層出土資料は、ほとんどが布留式中段階頃の古式土師器で、壺や甕の破片とともに、小型精製器種が一定量含まれる点が特徴的である（609～645）。2か所の土器溜りのうち、西側の土器溜り 2 には細片化した土師器が多く、精製 B 系統の椀形高杯や X 字器台や布留形甕などが含まれる（625～634）。口縁部が大きく開く小型丸底壺（627）は、プロポーションや胎土は中河内や大和東南部で出土する精製器種との類似性が指摘できるが、体部～底部の器壁が極端に厚く、外面ハケ調整で仕上げる点なども異なっているため、明らかな模倣品とみなすことができる。同じ浅谷中層から出土した小型丸底壺（614）も同様の特徴を備えており、今回の調査や隣接する井尻遺跡でこうした特徴を備える資料の一定量の出土がある。このため在地生産の模倣品とみなすことができ、小型精製器種の周辺地域への波及と在地生産の定着過程を考える上で重要である。谷の中心に位置する土器溜り 3 から出土した土師器は、やや大ぶりの破片が多く、精製 B 系統の高杯や C 系統の直口壺、小型甕などが含まれる（635～645）。甕の破片は少ないが、庄内形甕（644）は今回の調査で唯一の左上がりのタタキの破片である。さらに中層から出土した遺物には、山陰系の直口壺（616）、東海系の柳ヶ坪型壺（617）、生駒西麓産の庄内形甕（619）、産地不明の杯部が深い精製高杯（622）など、他地域からの搬入品が一定量含まれる点が注目される。時期については、一括して出土した（621～624）が布留式中段階新相～新段階古相頃まで下る可能性があるが、それを除くと布留式中段階中層を中心とする時期にまとまる。明らかに布留式新段階以降に下る資料の出土はないため、中層は古墳時代前期以前の堆積と判断することができる。

（646～652）は、中層から下層にかけて出土した土師器で、概ね庄内式新段階～布留式中段階古相頃に位置づけられる。中層出土と下層出土の中間的な様相を示し、生駒西麓産庄内形（650・653）や山陰系の大型鉢（652）などの搬入品が含まれる。特に生駒西麓産庄内形甕（650）は、底部までは完存していないものの、今回の調査で出土した資料の中では最も残りの良い。ほかでは、内面に赤色顔料の付着する外面ハケ調整の小型丸底鉢（646）が注目できる。外面には著しい煤の付着があり、なんらかの理由で火にかけられていたことを示すが、こうした外面に煤・内面に赤色顔料が付着する類似資料

第4章 遺構・遺物

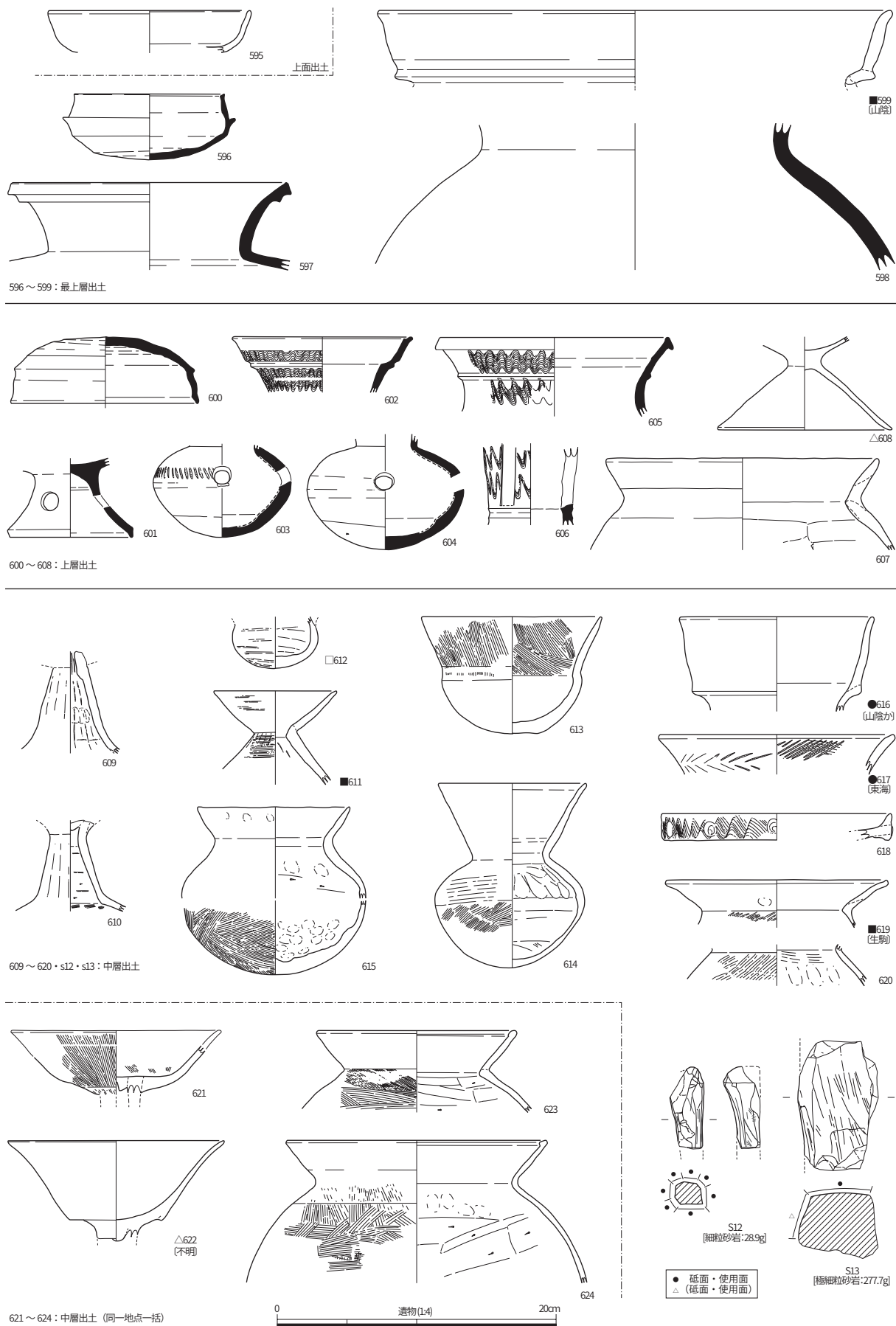


図 107. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (1) (最上層・上層・中層出土遺物)



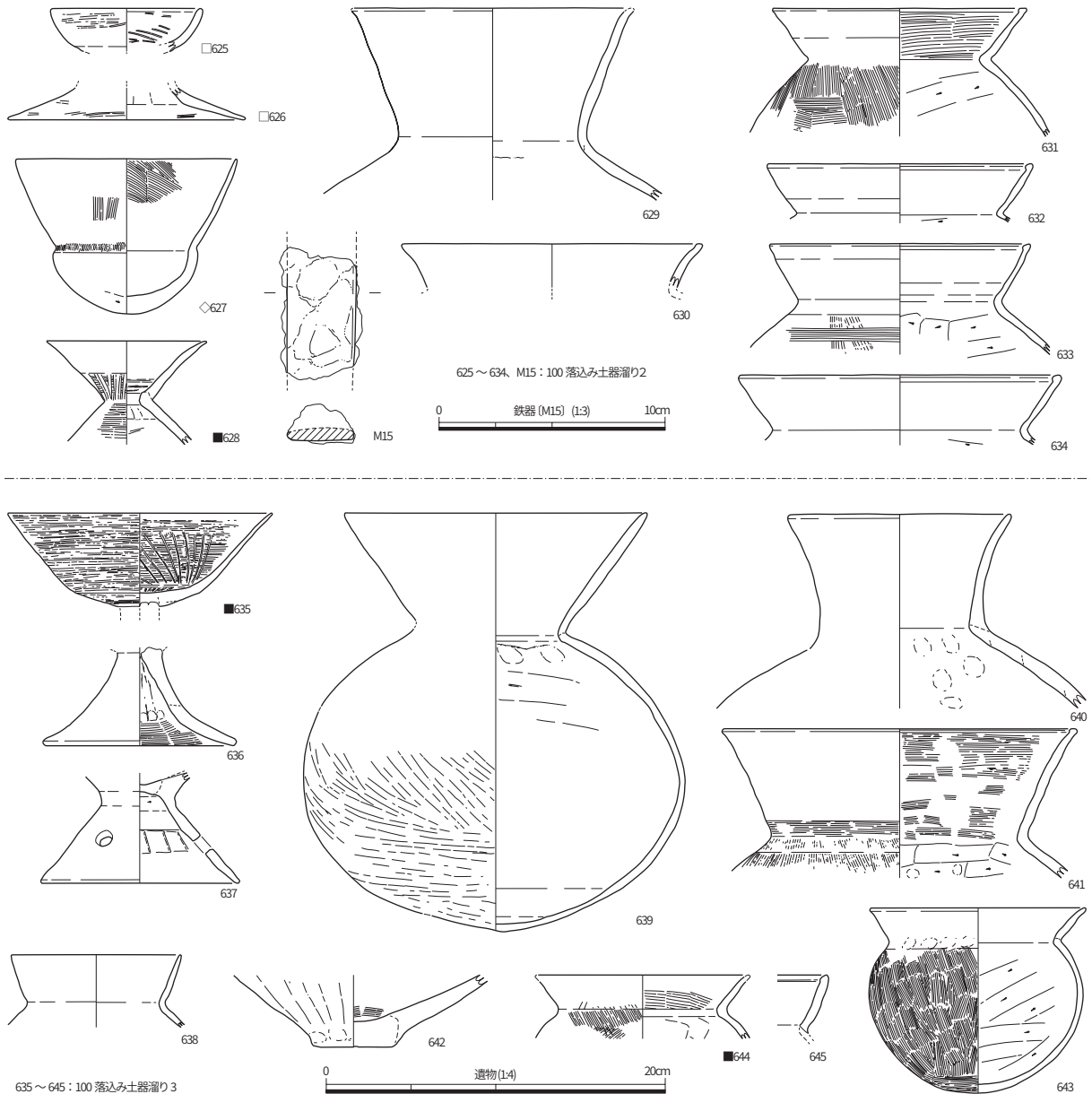


図 108. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (2) (中層出土遺物)

は、朱の生産地である徳島県域で多くみつがっている。最近の研究では、外面の煤は赤色顔料を定着させるために朱と膠を混ぜた上で加熱した痕跡とする分析結果<sup>18)</sup>が示されており、同様の性格を有する可能性が高い。さらに今回の調査では、朱の生産関連遺物である石杵や石臼などが一定量出土しており、朱の精製を直接的に裏付ける極めて重要な資料である。

下層から出土した土師器は、関連遺構を含めて出土量は多くはなく、いずれも庄内式古段階～中段階頃に位置づけられ、層位的な矛盾はない (654～658)。特に注目される資料は、超大型の加飾二重口縁 (658) で、これについては胴部最大径が約 75 cm に復元される。肩部と頸部内外面に櫛描の直線文・波状文を施すが、頸部内面にタテ方向の波状文を施す事例は類例がほとんど知られていない。ばらばらの破片の状態出土しており、量的には全体の 5% 程度の出土量と推測されるが、破面にまで焼成時の火のまわりの痕跡が確認できるものがある。このため本遺跡周辺での焼成失敗品と判断することができ、胎土からも矛盾はない。さらに超大型壺の破片とセットで A 系統の有段高杯 (654) が出土しており、

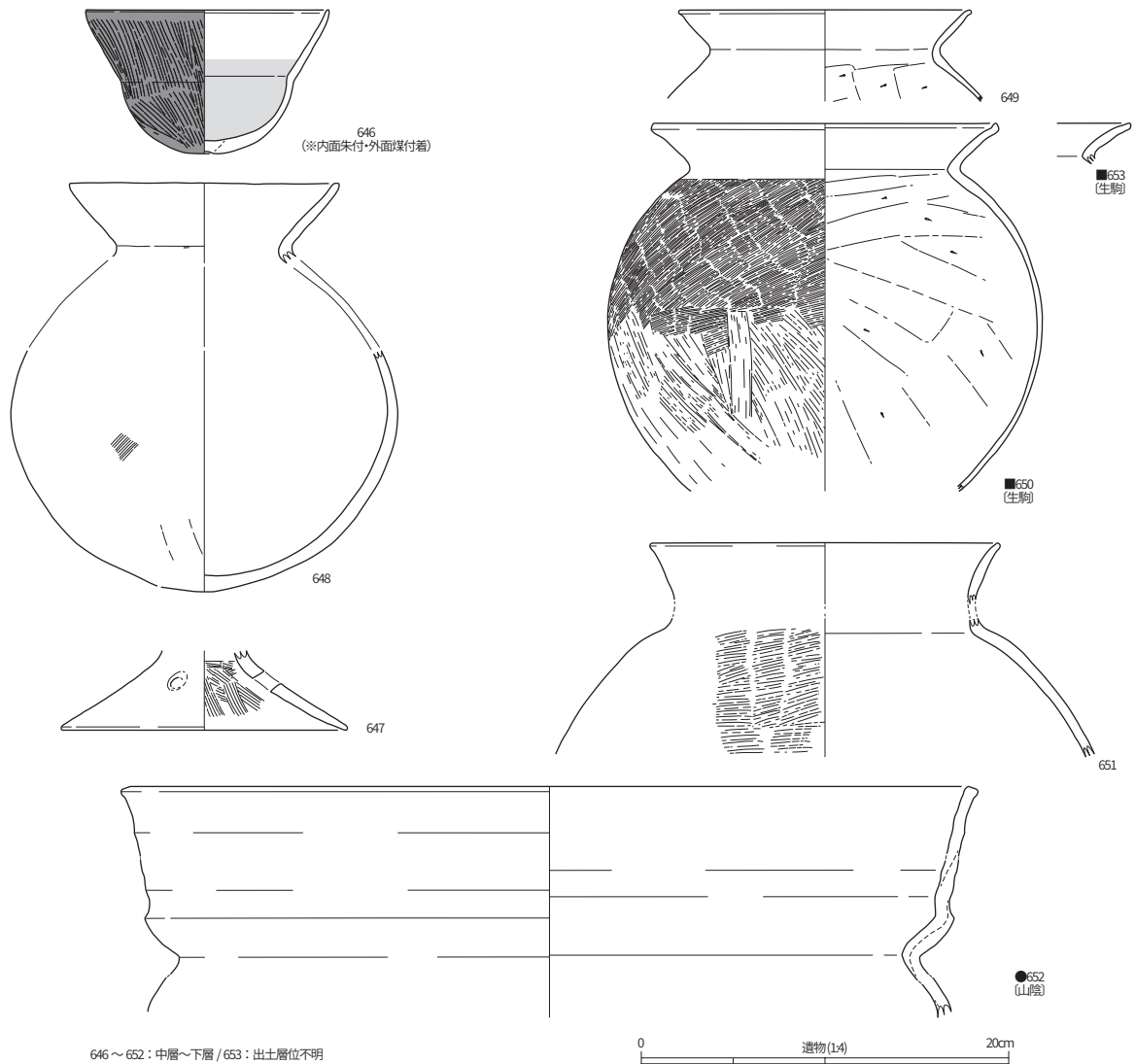


図 109. 100 落込み（浅谷）出土遺物（3）（中層～下層・A-2 区出土遺物）

ほかに精製 B 系統の高杯脚部（655）が周辺から出土している。

上述したように、北側 A-2 区から出土した遺物は少なく、層位的な区別も付けられないが、外来系土器が一定量出土している点が注目できる（659～665）。二重口縁壺（663）は、西部瀬戸内系の可能性があり、ほかでは東部瀬戸内産とみられる搬入品が一定量ある（661・662・664・665）。

このように浅谷（100 落込み）からは、古墳時代の各期間を通じた遺物の出土があり、微高地 A と微高地 B1 における居住域の存続期間を示すものといえる。また中層内でみられる土師器の集積は、精製土器を一定量含む組成などから、井戸や土坑の一括資料と類似する土器組成を備え、祭祀行為に伴って使用された土師器の投棄と判断できる。遺物の出土量は、相対的には南側にむかって増える傾向にあるが、東西の微高地 A・B と浅谷はそれぞれ今回の調査地点の南側にのびている。そのため谷下方の南側には、さらに多くの遺物が含まれることが予想されることから、周辺部での調査の進展に期待したい。

〔c. 微高地 B 1 の遺構・遺物：A-1 区・B-1 区・B-2 区西半・P5 区〕（図 113）

建物遺構 22 棟のほか土器がまとまって出土した土坑や落込みが 3 基検出された。微高地の頂部にあたる B-2 区西半は、弥生時代中期の方形周溝墓と重複しており、古墳時代の遺構がやや不明確であるが、

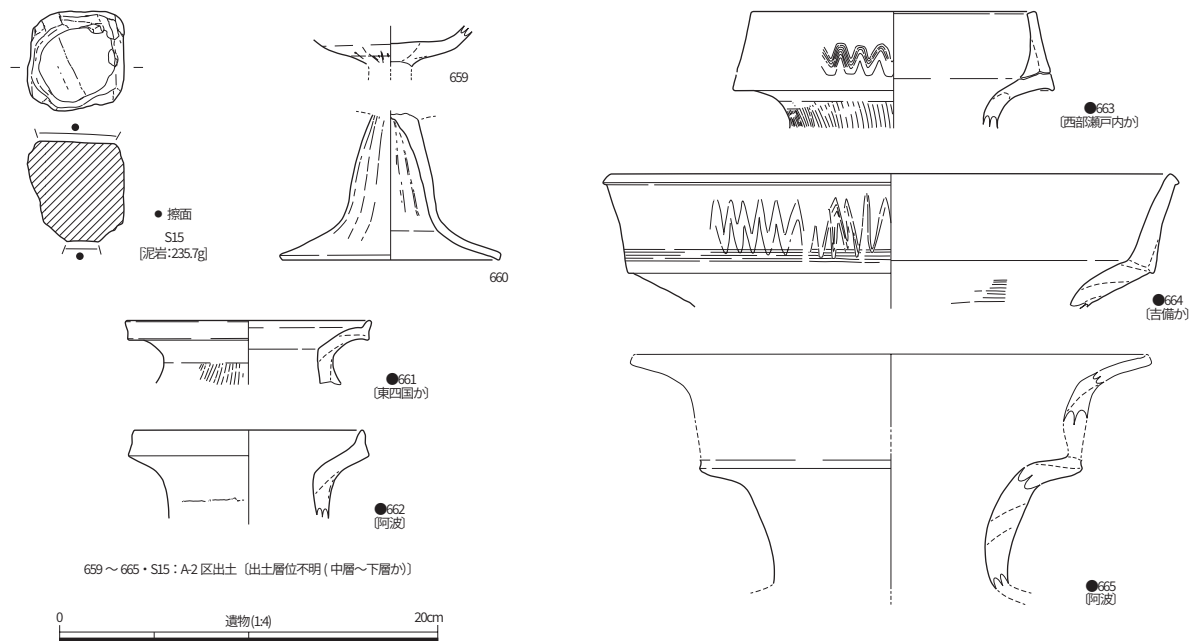
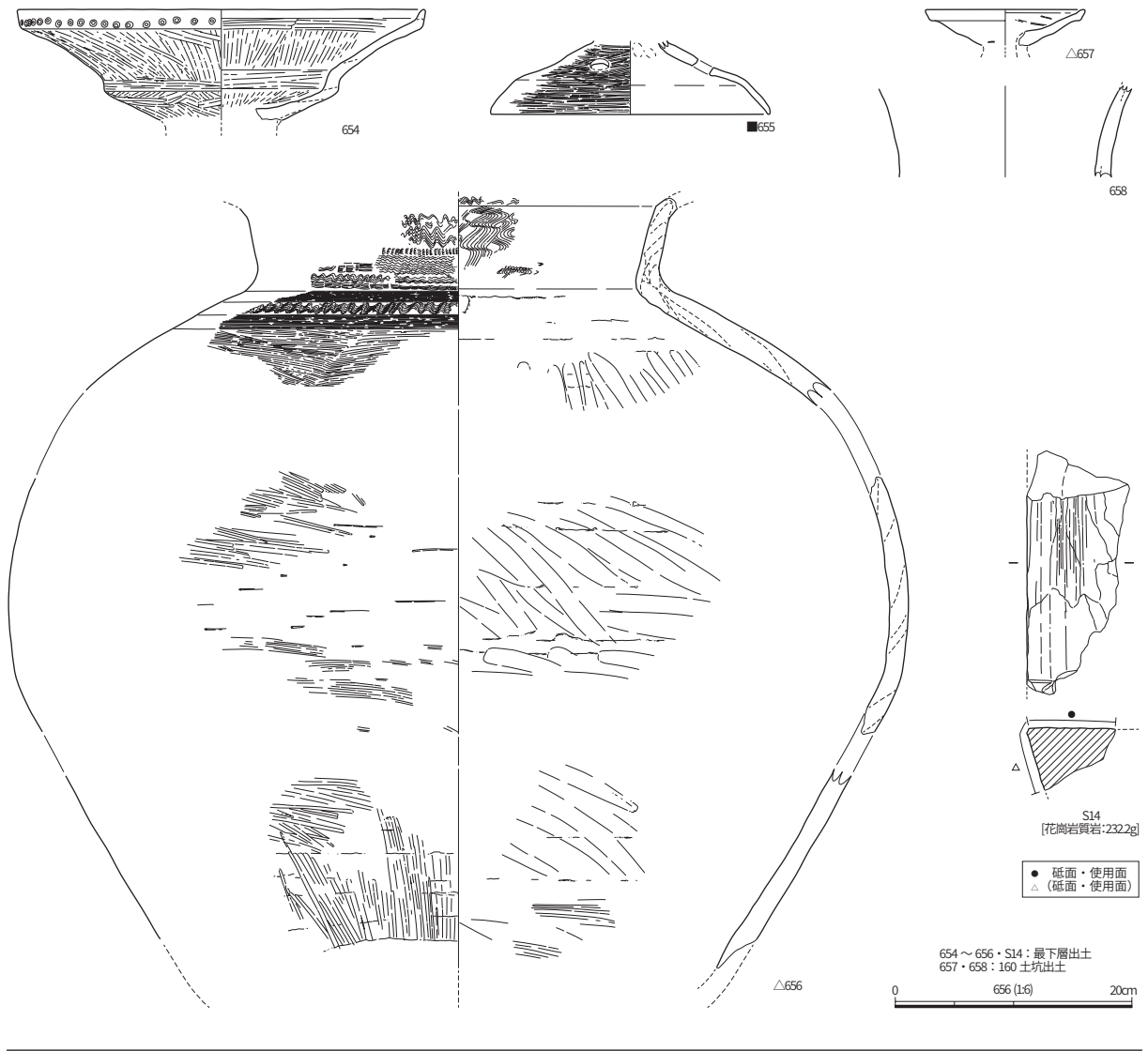


図 110. 100 落込み (浅谷) 出土遺物 (4) [下層出土遺物]



図 111. 西側エリア・微高地 B 1280・473・931 溝、1279 溝、1036 溝 平面・断面・出土遺物



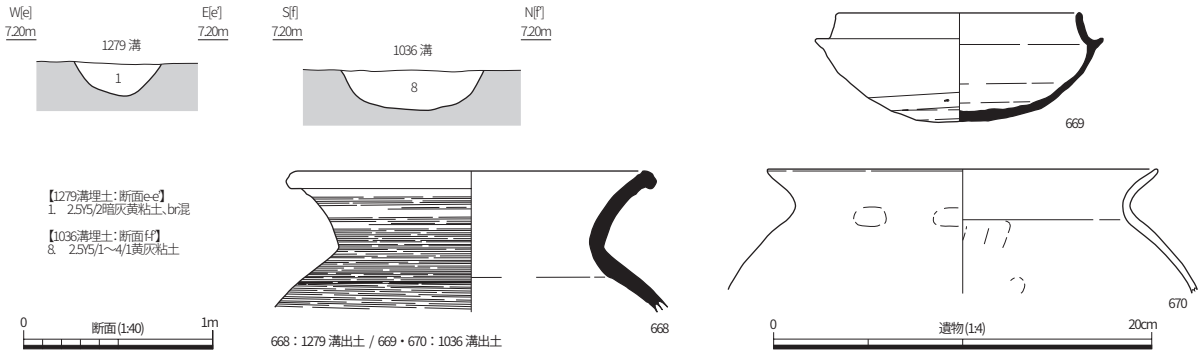


図 112. 西側エリア・微高地B 1279 溝、1036 溝 断面・出土遺物

南側の P5 区では竪穴建物が密集している。さらに南の B-1 区西半は、中近世の水路 (31 水路) の掘削により削平を受けているが、建物遺構が密集しており、南側未調査地へ居住域が広がることは確実である。建物遺構の内訳は、竪穴建物 16 棟、竪穴建物の可能性が高い  $1 \times 1$  間の建物が 2 棟、掘立柱建物 3 棟である。建物は、その立地から微高地頂部から西側斜面の一群 (竪穴建物 16・9・10 など) と、東側斜面の一群 (竪穴建物 8・12・13・7・6 など)、先端部の一群 (掘立柱建物 1・2・4、竪穴建物 2・3 など) に大別ができる。また竪穴建物については、規模の大きなものや、同一地点で複数回の建替えがみられるものがあり、継続的に居住域が営まれたことがうかがえる。

**1280・473・831 溝** (図 111) B-2 区西端で検出された 1280 溝、P5 区北東端で検出された 473 溝、P4 区北端で検出された 831 溝は、位置関係から一連の遺構と認識できる。北西-南東方向にのびる検出長 100 m に亘る長大な溝で、幅は 0.5 ~ 0.8 m をはかる。検出面からの深さは、0.22 ~ 0.48 m まで幅があるが、溝の底面の標高は、断面 a-a'・b-b' 付近が T.P+6.6 m 前後、断面 c-c'・d-d' 付近が T.P+6.4 m 前後であるため、地形の傾斜に沿って北西側から南東側に傾斜していることがわかる。埋土は、暗色の泥質土を主体としており、恒常的な流水痕跡は認められない。

重複する遺構との切り合い関係は、1280 溝は方形周溝墓の溝より新しく、1279 溝より古い。P4 区 831 溝では、周囲で柱穴が多数検出されており、切り合い関係は柱穴より古い傾向にあると認識したが、埋土が酷似しているため、やや不確実である。また P4 区では、この溝から南へのびる 22 溝が派生している。各溝から土師器の細片がごく少量出土しているが、図化できるものは少ない。V 様式系甕 (666) と甔の把手 (667) を 1 点ずつ図化したが、ほかでは古式土師器とみられる細片が多い傾向にある。上述したように、重複する遺構が多くあり、出土遺物は混入の可能性も捨てきれないため、これらの遺物が溝の機能時期を示すかどうかは明確でない。このため新しい時期の遺物を含むが、出土遺物や遺構の切り合い関係から古墳時代初頭~中期の中で機能・廃絶した可能性が推測される。古墳時代の遺構と判断してよいのであれば、微高地 B の頂部付近から南東方向にのびる微高地 B1 の縁辺部を通過しているため、溝の機能は集落内の排水を目的とした可能性が高い。

**1279 溝・1036 溝** (図 111・112) B-2 区西半で検出された南北方向の 1279 溝と東西方向の 1036 溝は、ともに直線的な溝で、いずれも重複する 1280 溝よりも切り合い関係から新しいことが判明している。検出長は、南北方向の 1279 溝が 6.7 m、東西方向の 1036 溝が 16 m をはかり、幅はいずれも 0.7 m である。深さはいずれも 0.2 m 前後で、ふたつの溝の底面の高さに大きな差はない。埋土は、いずれも暗灰黄~黄灰粘土を主体とし、ほかの古墳時代の遺構埋土と比べるとやや淡い色調を呈する。埋土からは、前期と中期以降の土師器・須恵器が混在して出土しており、1279 溝から出土した外面カキメを施



図 113. 西側エリア・微高地B西半 古墳時代遺構 全体平面図

第5節 古墳時代の遺構・遺物 (2). 西側エリア

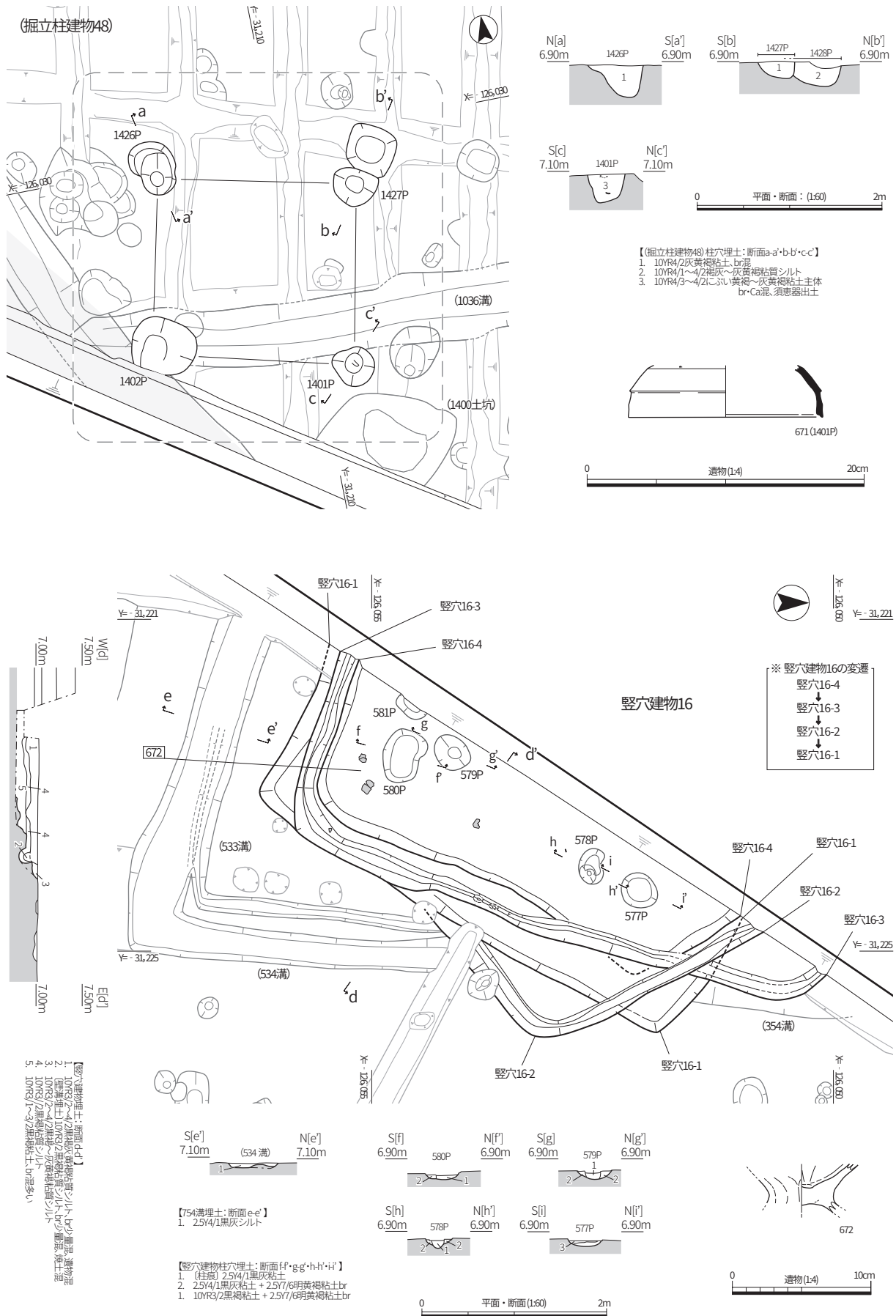


図114. 掘立柱建物48、縦穴建物16 平面・断面・出土遺物

第4章 遺構・遺物

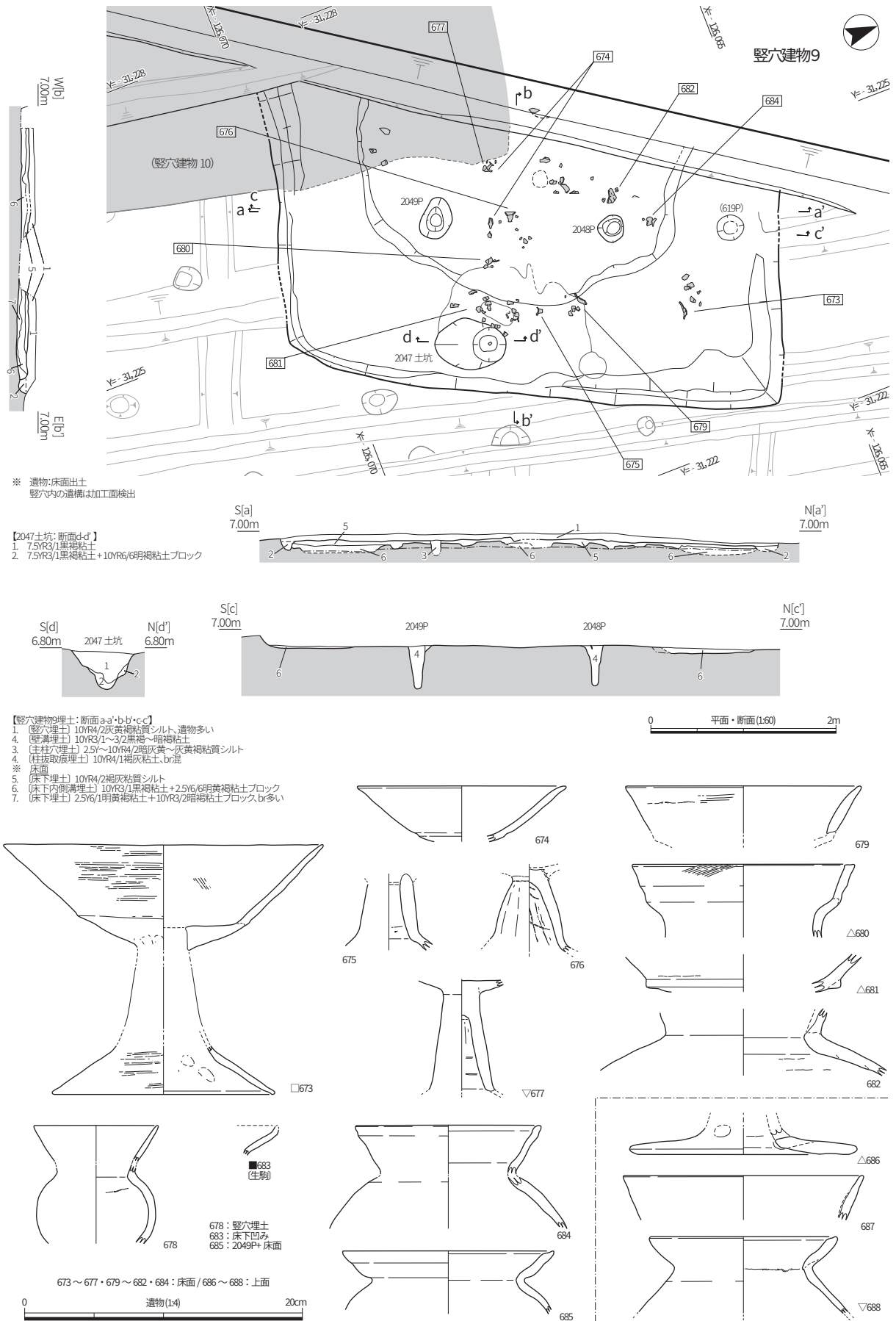


図 115. 堅穴建物9 平面・断面・出土遺物



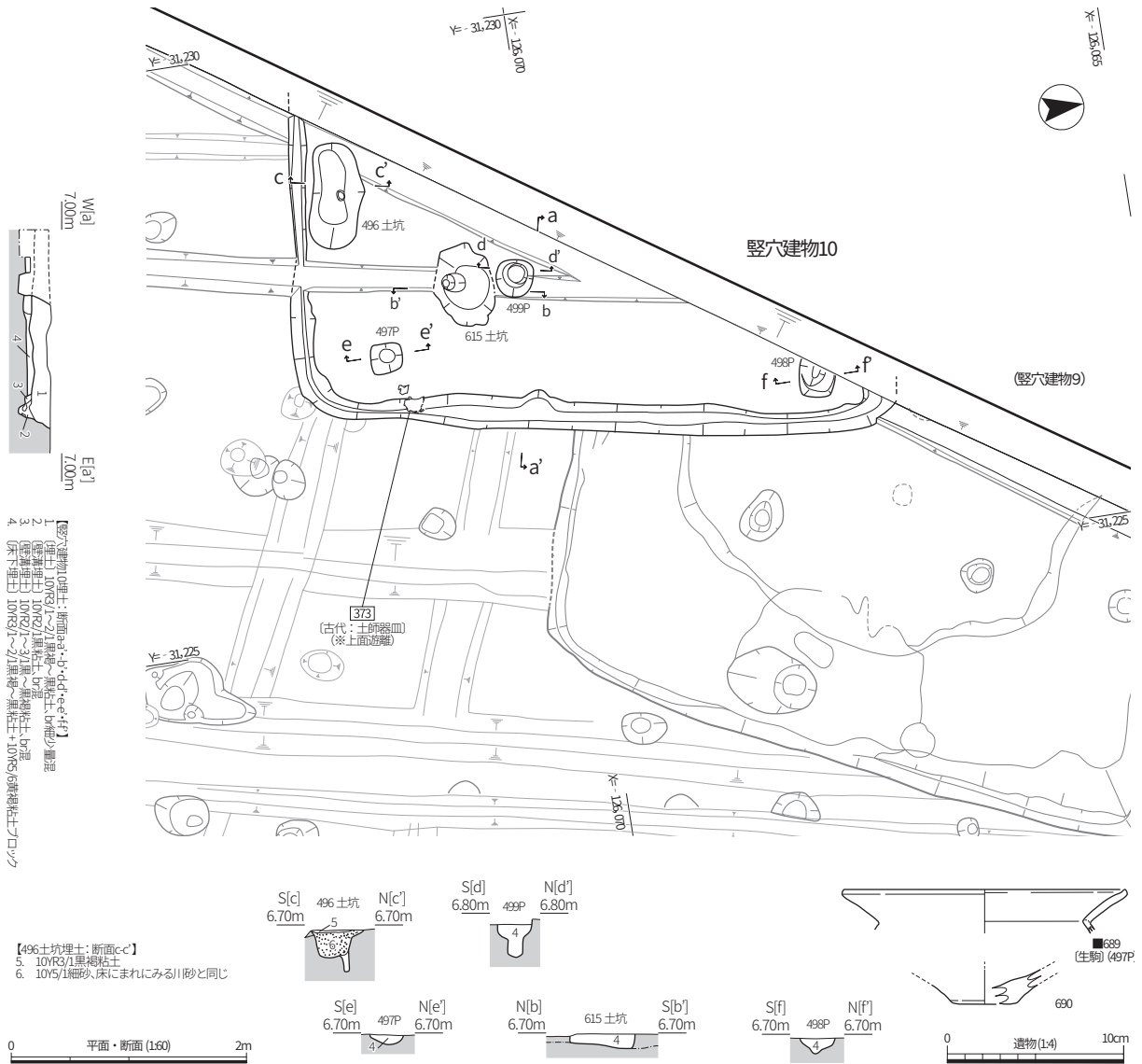


図 116. 竪穴建物 10 平面・断面・出土遺物

す須恵器の中型壺 (668)、1036 溝から出土した須恵器の杯身 (669)、外反口縁の大型の土師器甕 (670) を図化した。杯身 (669) は、口径が大型化しており MT15 ~ TK10 型式に時期が下る。ほかの 2 点も時期的な齟齬はなく、ふたつの溝の機能時期は後期前葉頃と判断できる。

溝の接続部分が調査範囲外となるため断定はできないが、ふたつの溝は同一時期で、形状や埋土が類似する点をふまえると、一連の遺構である可能性が高く、そのように認識した場合、L 字状にめぐる区画溝と判断できる。微高地頂部付近にあることから、区画の北東側には重要な施設が存在した可能性が推測されるが、調査範囲外に及んでいるため実態は不明である。隣接地での調査の進展が期待される。

**(掘立柱建物 48)** (図 114) B-1 区西半で検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、方形周溝墓 7 の上面に位置する。微高地 B の頂部西寄りに立地しており、柱穴の規模や形状から竪穴建物の支柱穴と判断した。柱間隔は、南北 1.9 m 前後、東西 2.0 m をはかるため、一辺 4.0 ~ 4.5 m 程度の規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、円形または楕円形に近い形状で、大きさは 0.4 ~ 0.6 m である。北側の 1426P と 1427P は、柱穴が重複しており、建替えに伴う可能性がある。検出面からの深さは 0.27 ~ 0.35 m で、埋土はブロック混じりの灰黄褐粘土を主体とする。1401P からは、TK23 型式頃の須恵

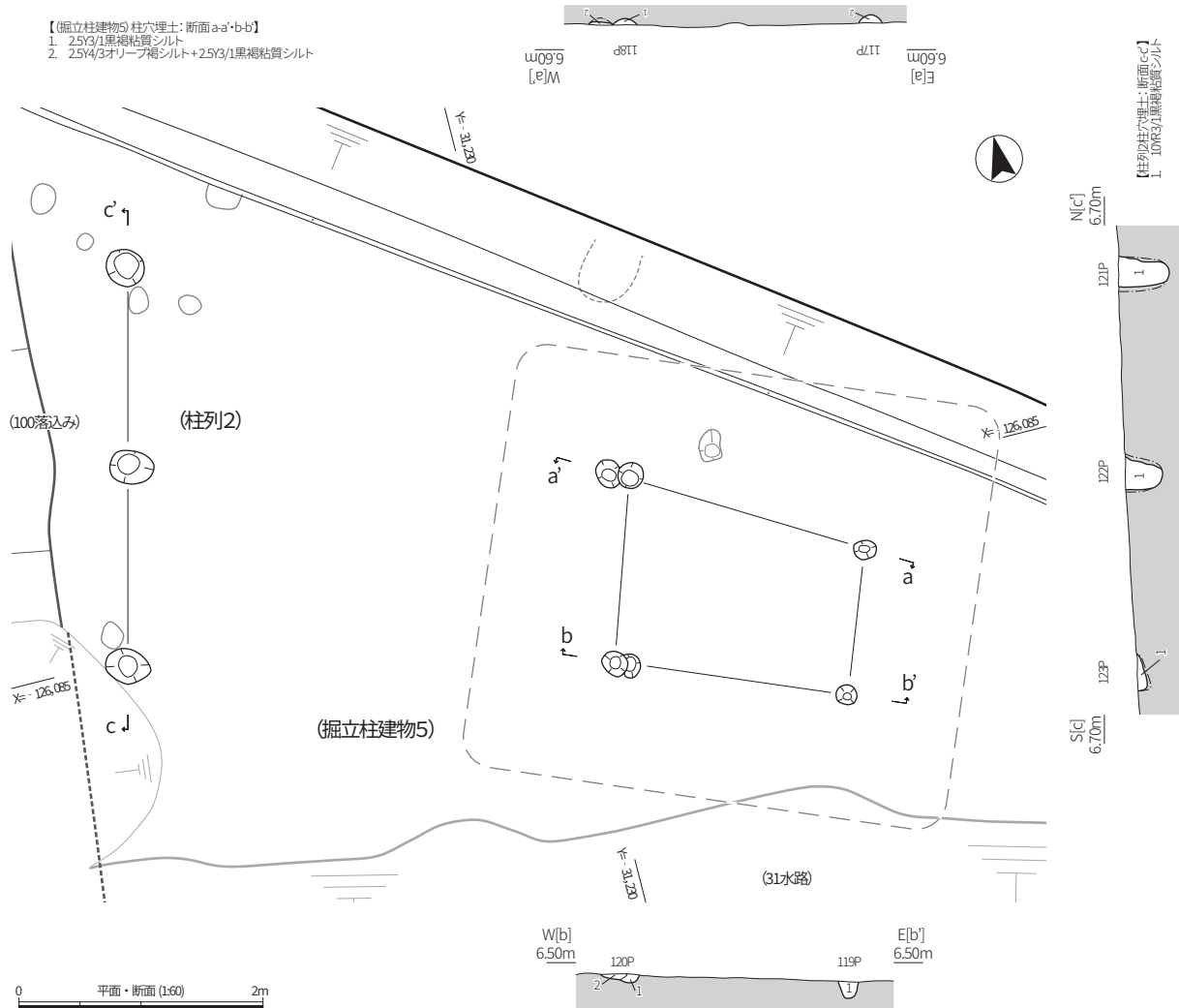


図 117. 掘立柱建物 5、柱列 2 平面・断面

器杯蓋が出土しているため、建物の時期は中期後葉頃に位置づけられる。

**竪穴建物 16** (図 114) P5 区西端北寄りで検出された竪穴建物で、450 落込みの西 10 m、竪穴建物 13 の北西 12 m に位置する。微高地 B1 の頂部西寄りに立地しており、調査区西端で検出されたため全体の 3 分の 1 程度の検出に留まっている。複数の竪穴建物が重複しており、少なくとも 4 回以上の建替えがおこなわれたことが判明した。規模については、最大の竪穴 16-3 が一辺 6.2 m をはかる。それ以外の建物は、全体の形状がはっきりしないが、いずれも規模はひとまわり小さい。竪穴内で柱穴が 5 基検出されたが、いずれも浅いため建物の主柱穴になるかはわからない。埋土からは、土師器の細片がごく少量出土している。図化した台付の壺または甕 (672) は、位置関係から最も古い竪穴 16-4 に伴う可能性が高い。出土遺物には、混入とみられる須恵器細片を数点含まれるが、ほかはいずれも古式土師器であることから、前期に遡る可能性が高い。遺物の出土量が少なく、建替えが頻繁におこなわれているため詳細な時期比定は困難であるが、布留式古段階頃に位置づけられるだろう。

**竪穴建物 9** (図 115) P5 区南西端で検出された竪穴建物で、竪穴建物 10 と部分的に重複し後出する。微高地 B1 の西側斜面に立地しており、調査区西端で検出されたため半分程度の検出に留まっている。規模は南北 5.4 m、東西 3.3 m 以上をはかる。建物の構造は、貼床を伴い、幅 0.15 m の壁溝がめぐる。検出面からの床面までの深さは、0.08 m をはかる。床面下部には、最大幅 1.0 m、深さ 0.07 m の凹み

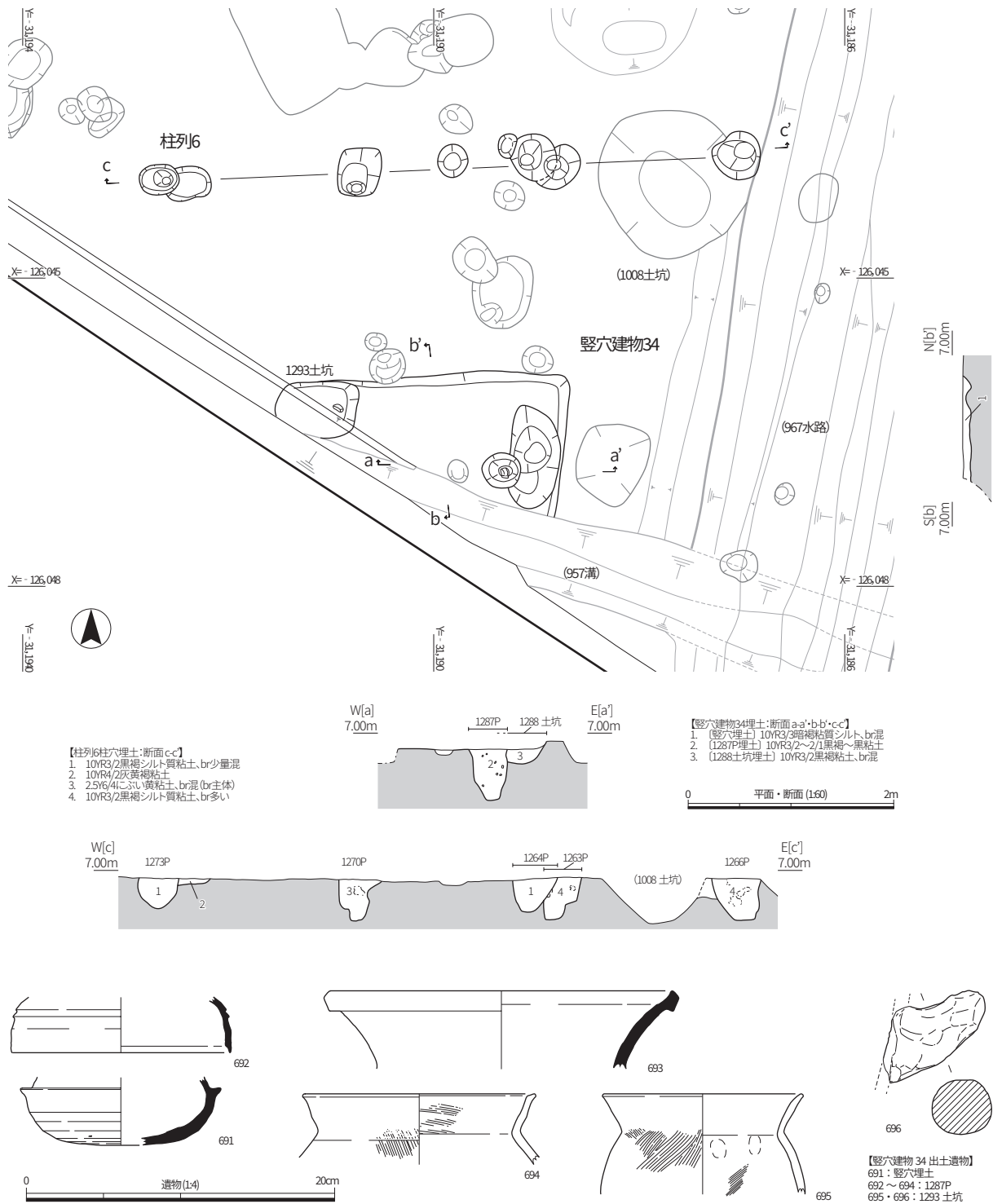


図 118. 竪穴建物 34、柱列 6 平面・断面・出土遺物

がコの字状にめぐっており、それを埋めて貼床としている。凹みの内側にある 2048P と 2049P が主柱穴とみられ、規模は径 0.3 m、床面からの深さ 0.45 mをはかる。ほかに西壁際中央付近に楕円形の 2047 土坑があり、規模は長径 0.6 m、深さ 0.43 mをはかる。ほかの竪穴建物でも同様の土坑が検出されているが、埋土から遺物は出土しておらず、機能・性格については不明である。埋土の掘削時には、床面と加工面との関係を十分に留意しながら掘ることができなかったが、床面付近とみられる高さから古式土師器の破片が一定量出土しており、これらは原位置を保っているものとみてよいだろう。

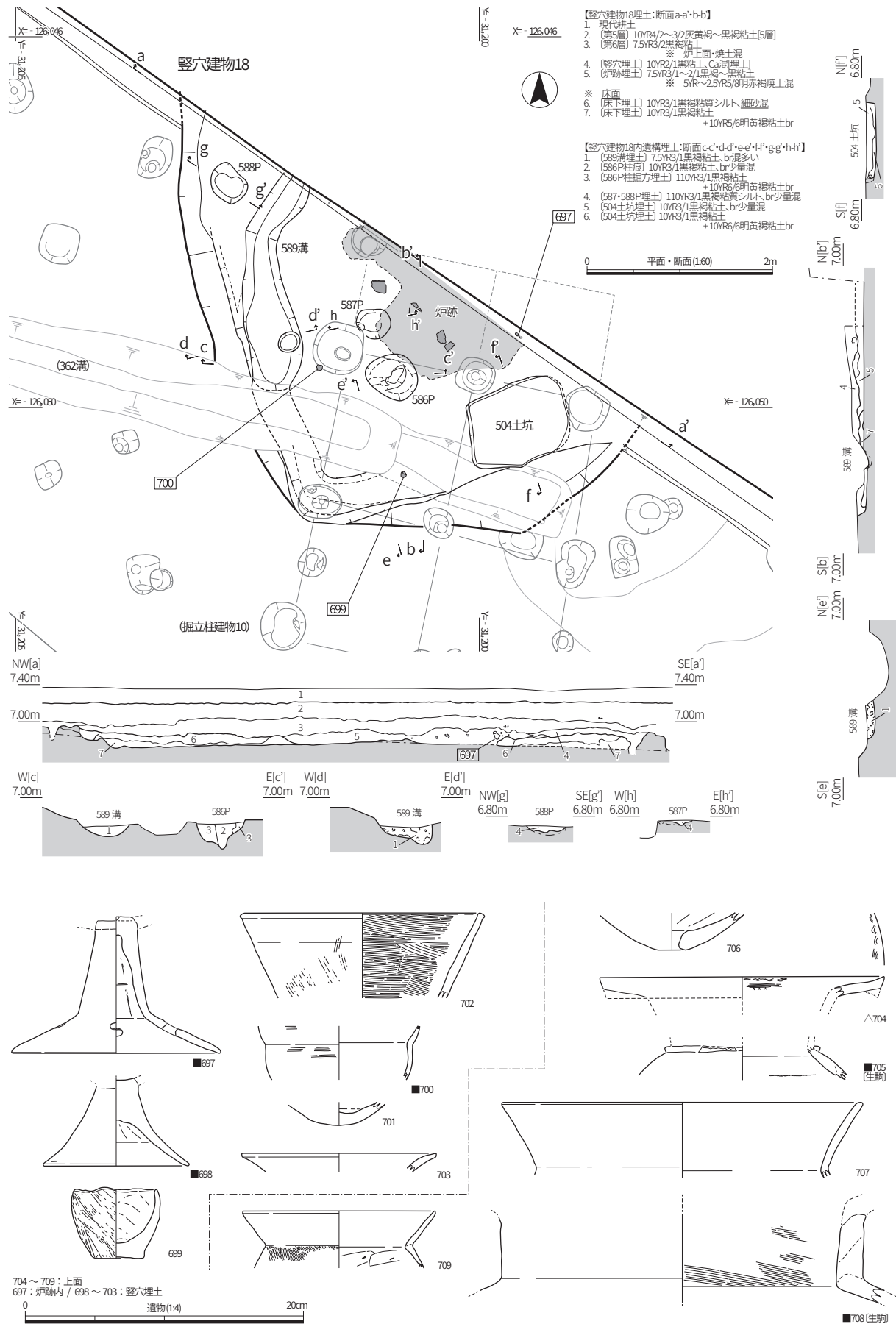


図 119. 竪穴建物 18 平面・断面・出土遺物



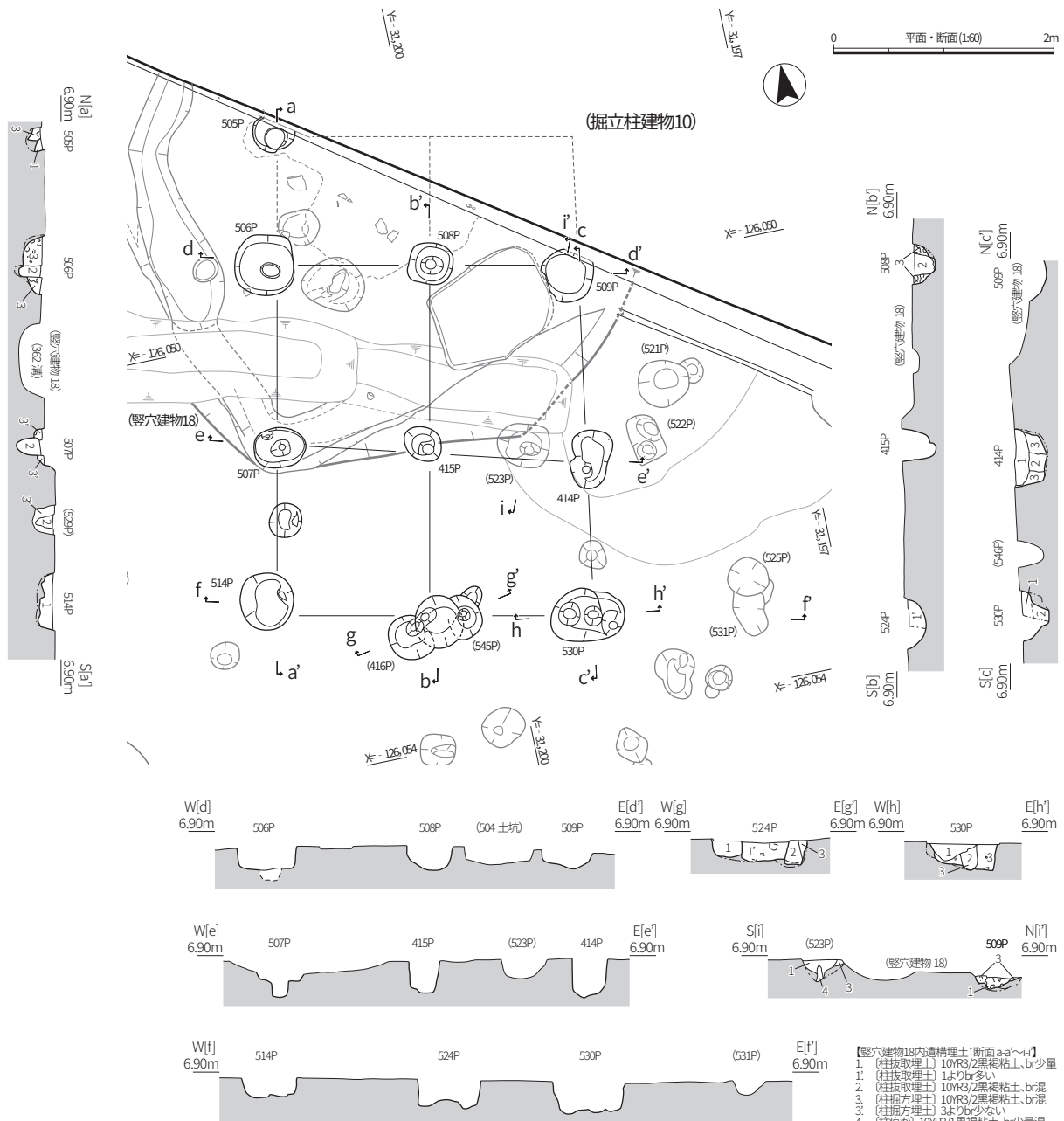


図 120. 掘立柱建物 10 平面・断面

出土遺物は、上面に中世以降の耕作溝が重複しているため、混入とみられる須恵器が数点含まれるが、それらを除けばほかは全て古式土師器で、高杯・壺類・甕が揃っている (673～688)。大半は、床面相当からの出土で、ほかに上面や埋土、支柱穴、床下の凹みから少量破片が出土している。床面出土遺物では、高杯はいずれも B 系統 (1 群系) で (673～677)、臨地品とみられる精製の大型高杯 (673) と杯部がやや小ぶりな (674) が共伴する。壺類では、中型の二重口縁壺の破片が一定量あり (679～681)、ほかでは埋土中から口縁部が長い小型丸底壺が出土している (678)。甕は、床下の凹みから生駒西麓産庄内形甕の口縁部細片 (683) が出土しているが、上面も含め、ほかはいずれも布留系甕である (684・685・688)。時期については、甕や高杯の組成などから布留式中段階古相に比定できる。

**竪穴建物 10** (図 116) P5 区南西端で検出された竪穴建物で、竪穴建物 9 とは切り合い関係から先行する。微高地 B1 の西側斜面に立地しており、調査区西端で検出されたため全体の 3 分 1 程度の検出に

留まっている。規模は、東西 5.1 mをはかり、貼床を伴う。幅 0.2 m、深さ 0.12 mの壁溝がめぐる。検出面から床面までの深さが 0.16 m、加工面までの深さが 0.21 mをはかる。499P が支柱穴の可能性が高く、規模は径 0.3 m、深さ 0.32 mをはかる。さらに南東・北東コーナーの 497P・498P は、位置関係からみてこの建物に伴う可能性がある。南壁際に位置する楕円形の 496 土坑は、埋土が細砂で充填されている点特徴的である。土坑の機能・性格は不明であるが、埋土と同質の細砂が竪穴建物 7 の床面などでも確認されている。

この建物に伴う可能性のある遺物は、土師器細片のみで出土量は少ない。埋土から出土した平底甕の細片 (690) や、497P から出土した生駒西麓産の庄内形甕の口縁部 (689) を図化した。詳細な時期比定は難しいが、重複・後出する竪穴建物 9 との先後関係と生駒西麓産の庄内形甕の出土から、庄内式新段階～布留式古段階におさまる。

**(掘立柱建物 5)** (図 117) A-1 区東半、100 落込みの東側肩部付近で検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、竪穴建物 10 の南 15 mに位置する。この建物が位置する中近世の 31 水路と 100 落込みに挟まれた範囲については、堆積の状況を見誤ったため基盤層 (第 8 層) を大きく掘削してしまい、遺構検出が十分におこなえなかった。その中で部分的に残存した 117P・118P・119P・120P の 4 本の柱穴は、検出面からの深さが最大で 0.14 mであるが、本来の深さは 0.5～0.6 mに復元でき、竪穴建物を構成する支柱穴であった蓋然性が高い。柱間隔が、南北 1.2～1.4 m、東西 1.9～2.0 mをはかるため、一辺 3.5～4.0 m以上の規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴埋土からは、遺物が出土していないため、詳細な時期については不明である。

**柱列 2** (図 117) A-1 区東半、100 落込みの東側肩部付近で検出された 3 基の柱穴の並びで、(掘立柱建物 5) の西 5 mに位置する。現状での南北長は、3.6 mであるが、南北にそれぞれのびる可能性がある。柱穴の規模は径 0.3 m前後、検出面からの深さは最大で 0.43 mである。埋土は、黒褐粘質シルトを主体とする。100 落込みの肩部にあるため、微高地 B1 の居住域との区画を意図した柱列の可能性もある。

**竪穴建物 34** (図 118) B-2 区西半で検出された竪穴建物で、P5 区の掘立柱建物 10 の北東 10 mに位置する。微高地 B1 の東寄り、東側にむかってのびる微高地 B2 の付け根付近に立地する。調査区の南壁沿いで検出されたため、北東コーナー部分の検出に留まっている。全体の形状・規模は不明であるが、現状で検出長 3.4 mである。竪穴部分の埋土は、暗褐色粘土を主体とするが、これが貼床であるか、竪穴の覆土であるのかは明確でない。竪穴内の 1287P と 1288 土坑は、位置関係からそれぞれ支柱穴と壁際の土坑の可能性があり、1287P は径 0.3 m、深さ 0.5 mをはかる。

出土遺物は、埋土および 1287P・1288 土坑から土師器・須恵器の出土が一定量ある (691～696)。須恵器には、TK47～MT15 型式頃の杯蓋・杯身 (691・692) や壺の口縁 (693) があり、土師器の布留甕 (694) と外反口縁甕 (695) とも年代的な齟齬はない。ほかには、甌の把手 (696) が出土しており、出土遺物から今回の調査で検出された建物の中で最も新しい時期の建物のひとつと認識できる。

**柱列 6** (図 118) B-2 区西半で検出された 4 基の柱穴の並びで、南 2.5 mに位置する竪穴建物 34 とは軸が一致する。東西の長さは、5.6 mをはかる。柱穴の平面形は、円形または隅丸方形で、検出面からの深さは 0.4 m程度のもが多い。埋土から遺物が出土していないため時期は不明であるが、位置関係から竪穴建物 34 と関連する後期の柵列の可能性もある。

**竪穴建物 18** (図 119) P5 区の北端で検出された竪穴建物で、微高地 B1 の東側斜面に立地している。調査区の北端で検出されたため、全体の 2 分の 1 程度の検出に留まっている。さらに掘立柱建物 10 と



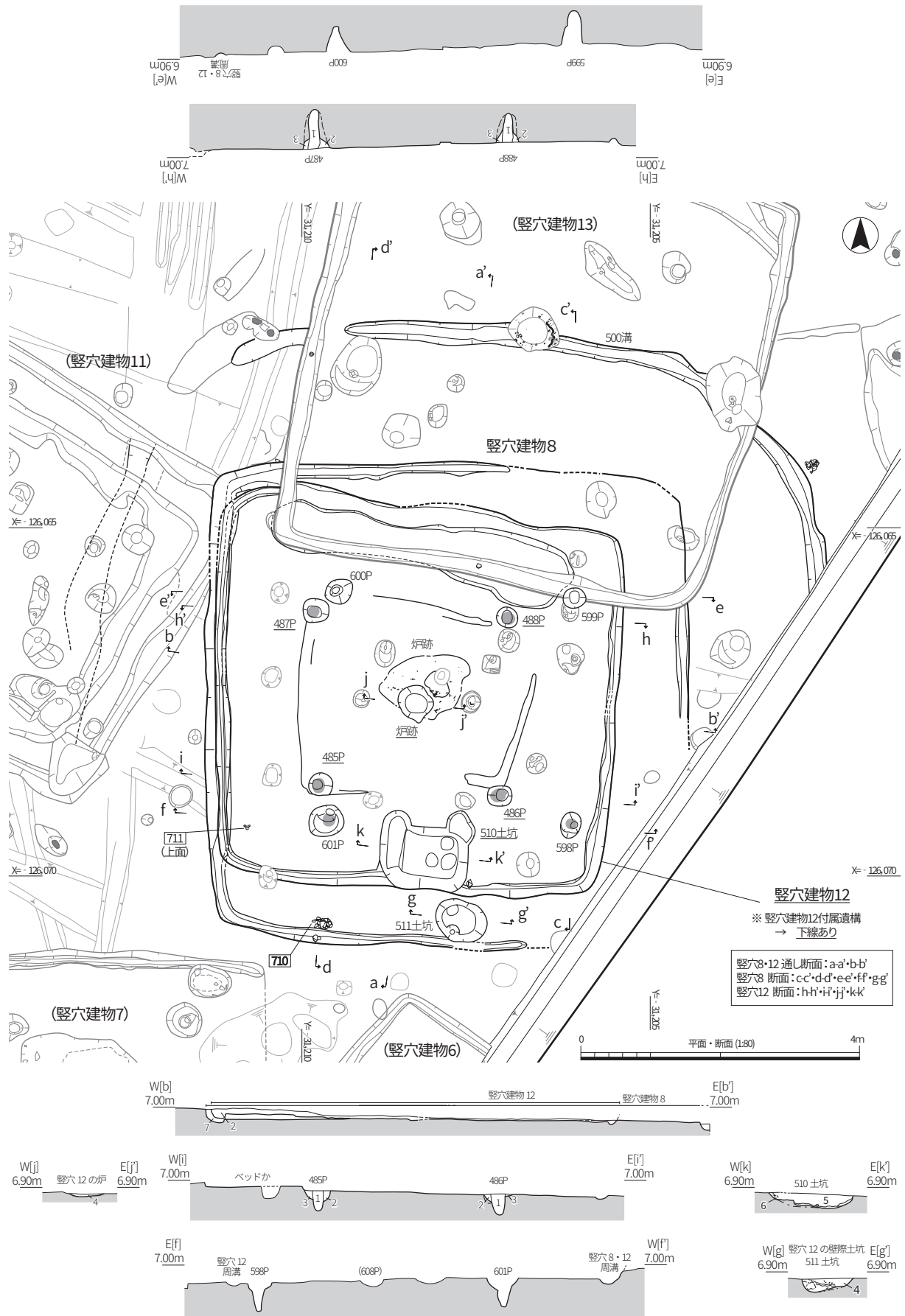


図 122. 竪穴建物 8・12 平面・断面



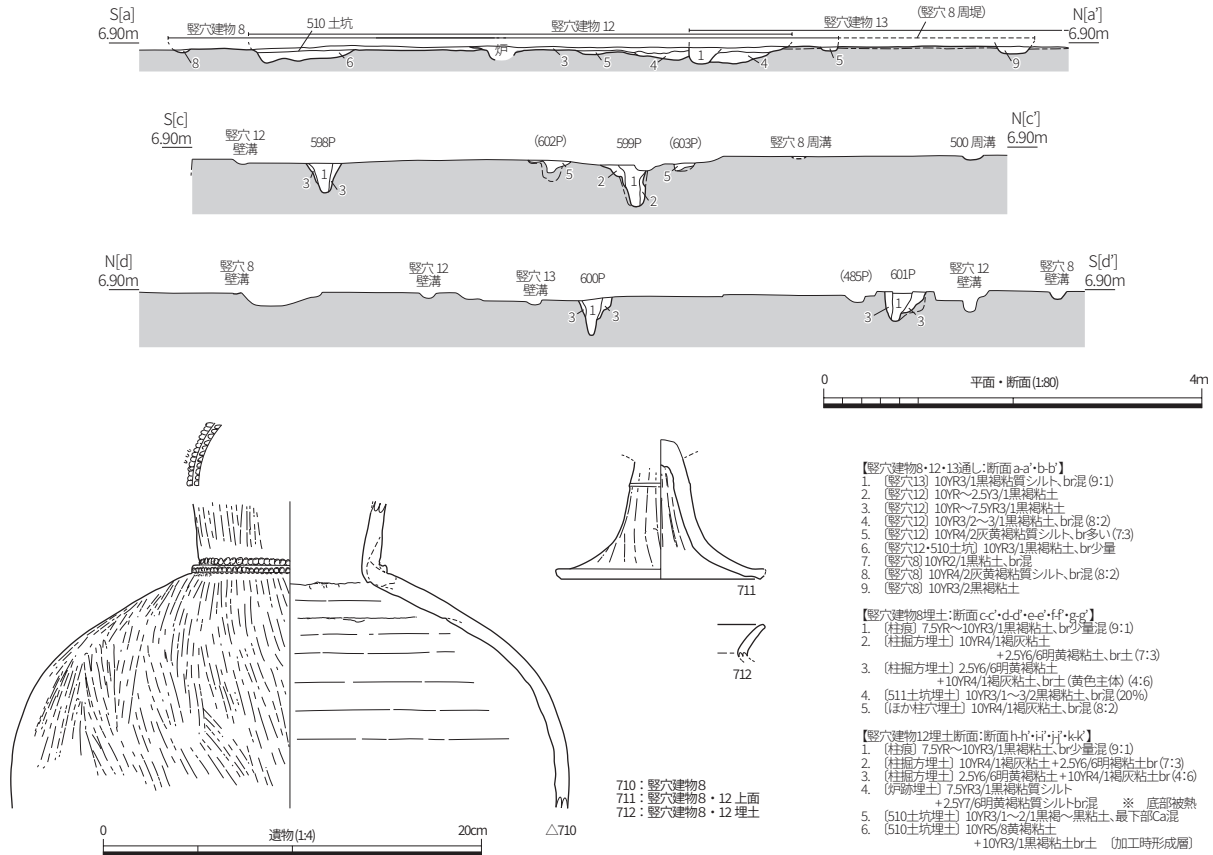


図 123. 竪穴建物 8・12 断面・出土遺物

中世後半の 362 溝と重複するため、残存状況はあまり良くない。全体の形状はやや不整な方形で、規模は南北長 4.7 m 以上である。中央に床面から掘り込まれた大型の炉跡が伴う点が特徴で、調査区北壁の断面から貼床〔埋土 6〕の上面から掘り込まれていることが判明した。また平面では、床面と壁溝を十分に検出することができなかったが、断面観察の結果、厚さ 0.14 m の貼床を伴い、周囲に幅 0.2 m、深さ 0.15 ~ 0.20 m 程度の壁溝がめぐることが判明した。竪穴内部で検出された 589 溝は、ほかの竪穴建物でもみられるような床下下部の凹みと認識でき、同様に壁際付近の方形 504 土坑も類似する遺構が数多く検出されているため、この建物に伴う遺構とみてよい。主柱穴については明確でないが、586P は候補のひとつであり、規模は径 0.5 m をはかる。床面からの深さは 0.31 m で、断面に柱痕が残る。中央の炉跡は、調査区壁面にかかるため部分的な検出に留まっているが、規模は 2.2 m をはかる。床面からの深さは 0.10 m で、埋土には赤色焼土が顕著に混じる。このような大型で掘り込みを伴う炉跡は、竪穴建物 7 でも検出されており、類似する性格の遺構である可能性が高い。

出土遺物は、埋土と上面から古式土師器が一定量出土し (697 ~ 709)、このほかに混入とみられる須恵器が上面から 1 点出土している。炉跡内部からは、搬入品とみられる精製 B 系統の大型高杯脚部 (697) が出土し、竪穴埋土出土の小型高杯の脚部 (698) と外面にヨコミガキを施す小型丸底鉢 (700) も搬入品の可能性がある。ほかでは、重複する 362 溝肩部付近から出土した完形のミニチュア鉢 (699) もこの建物に伴うとみてよい。上面からは、中・大型の壺・鉢類の破片が一定量あり、垂下口縁の加飾壺 (704) や、生駒西麓産の加飾壺 (705) と大型複合口縁壺の頸部 (708) などがある。時期については、庄内式新段階~布留式古段階古相におさまり、精製 B 系統と生駒西麓産の搬入品が一定量含まれる点が特徴である。埋土の洗浄作業等はできなかったが、中央にやや特殊な大型の炉跡があるため、鍛

治工房などの可能性を検討する必要があるだろう。

**掘立柱建物 10** (図 120) P5 区の北端で検出された 2 間×3 間または 2 間×2 間の総柱建物で、竪穴建物 18 と重複する。微高地 B1 の東側斜面に立地しており、調査区の北端で検出されたため、建物は北側にのびる可能性がある。2 間×3 間とみた場合、建物規模は南北長 4.3 m、東西長 2.9 m、面積は 12.5 m<sup>2</sup>をはかる。建物の南北軸は、東に 11.72°傾く。柱筋の通りは概ね良いが、東側南北筋はやや西に傾く。柱間寸法は、ややばらつきがあるものの南北が 1.6 m前後、東西が 1.4 m前後となる。柱穴の平面形は、円形または隅丸方形を呈するものが多く、検出面での大きさは 0.4～0.5 mである。検出面からの深さは、最大で 0.39 mをはかる。柱掘方埋土は、ブロック土を主体とし、柱痕や柱あたりから、柱の太さは 0.15 m前後に復元される。柱穴埋土からは、土師器細片が僅かに出土している。詳細な時期は不明であるが、前期に遡る可能性がある。

**竪穴建物 8・12** (図 121・122・123) P5 区の中央東寄りで検出された重複する 2 棟の竪穴建物で、建物の傾きはほぼ一致する。微高地 B1 の東側斜面に立地しており、切り合い関係から規模の大きい建物を竪穴建物 8 が先行し、内側のやや規模の小さな建物を竪穴建物 12 が新たに建替えられた建物と判断できる。さらに 2 棟の北側には、やや東に傾く竪穴建物 13 が重複しており、切り合い関係から 3 棟の中では最も後出することが判明した。ただし、いずれも上面が大きく削平されているため、全体としては主に竪穴外周をめぐる壁溝の検出に留まっており、3 棟の建物の床面の状況や貼床の有無については十分に説明することができなかった。

先行する竪穴建物 8 は、南東コーナー部分が調査区外にのびる。規模は、南北・東西ともに 7.0 m で、面積は 49.0 m<sup>2</sup>をはかる。竪穴の北側から東側にかけては、竪穴の外郭から約 1.7 m挟んで幅 0.2 m、深さ 0.14 mの周溝がめぐっており、この間に周堤が存在していた可能性が高い。周溝は、南側まで延伸するかどうか明確にできなかったが、周溝を含めた規模は 10.9 mに復元される。南側まで竪穴周囲をめぐる壁溝は、幅 0.2 m、深さは最大 0.19 mで、南側壁際に長径 0.8 m、深さ 0.19 mの 511 楕円形土坑が伴っている。中央には、大きさ 1.2 mの炉跡が伴う。598P・599P・600P・601P が建物 8 に伴う主柱穴で、規模は径 0.4 m前後、検出面からの深さ 0.36～0.5 mをはかる。いずれも平面・断面で柱痕が明瞭に残っており、主柱穴は切断された上で建物が廃絶したことがわかる。南側壁溝沿いでは、加飾壺の頸部～肩部の破片 (710) がまとまって出土しており、建物に伴うものと判断できる。外面に丁寧なタテミガキを施し、頸部突帯の側面・上面・頸部付根の側面の 3 か所に細かい竹管文を密に施す胎土精良な優品で、時期は庄内式新段階頃と考えられる。本遺跡から北西 1.5 kmに位置する丘陵上の梶原古墳群から類似する竹管文を施す二重口縁壺が出土している<sup>19)</sup>。施文に加え、胎土・色調からみて同工品であることが確実視でき、集落と丘陵上の有力な墓域と直接結びつきを考える上で重要である。

後出する内側の竪穴建物 12 は、西側の壁溝が建物 8 と重複する。規模は、南北・東西ともに 5.7 m で、面積は 32.5 m<sup>2</sup>をはかる。竪穴周囲をめぐる壁溝は、幅 1.9 m、深さ 0.10 mで、建物 8 と同様に南側壁際に 510 土坑が伴う。平面方形で、規模は 1.3 m、深さ 0.22 mをはかる。北側壁際沿いには、床面下部に幅 0.8 m、深さ 0.18 mの凹みがある。中央の炉跡はやや小ぶりで、底部が被熱赤変している。規模は、径 0.5 m、検出面からの深さ 0.07 mをはかる。485P・486P・487P・488P が建物 12 に伴う主柱穴で、規模は径 0.3～0.4 m、検出面からの深さ 0.29～0.57 mをはかる。いずれも平面・断面で柱痕が明瞭に残っており、建物 8 と同様に主柱穴は切断された上で建物が廃絶したことがわかる。4 本の主柱穴に沿うような形で浅い方形の掘り込みがあり、西側が一段高くなっている。全体の残存状況が

良くないため断定はできないが、竪穴建物西側の高まりはいわゆるベッド状遺構の可能性が推測でき、C-8区竪穴建物40で類似する構造の建物が検出されている。こうした構造の建物は、播磨に起源があり、畿内では近接する乙訓地域の集落遺跡でのまとまった検出例がある<sup>20)</sup>。ほか近隣では、交野市坊領遺跡などでも検出事例があるため、淀川を介した地域関係を検討する上でも重要である。竪穴建物8と重複するため、この竪穴建物12に確実に伴う遺物はごく僅かで、図化できる遺物はなかった。土師器高杯(711)とくの字甕の口縁部細片(712)が、竪穴建物8・12の重複部分の上面および埋土から出土しているが、いずれもどちらの建物に伴うものであるかは明確でない。ただし外面タテミガキの高杯(711)は、A系統とB系統の折衷的な資料であるため布留式古段階以降に下る可能性が高く、竪穴建物8よりも時期的に後出するため、やや根拠に乏しいが、竪穴建物12の時期を示す可能性がある。

2棟の竪穴建物のうち先行する竪穴建物8は、今回の調査で検出された竪穴建物の中でも最も規模が大きく、周溝を伴うなど構造面でも手の込んだ造りの建物であるため、集落内の中核的な建物とみることができる。さらに床面から出土した精製の二重口縁壺は、近隣の有力な墳丘墓から出土したものと同工品であるため、居住域の有力者の屋地であった可能性を指摘できる。

**竪穴建物13** (図121・124・125) P5区の中央東寄りで竪穴建物で、南側が竪穴建物8・12と重複している。重複する3棟の建物の中で最も新しく、建物軸がほかの2棟の建物とは異なり、約14°東に傾いている。建物の規模は、南北6.7m、東西6.6m、面積44.2㎡をはかる。東側に比べて西側の方が南北が長くなっており、内側にも幅の狭い590溝がめぐることからこの建物も建替えがあった可能性が想定できる。竪穴周囲の壁溝は、幅0.3m、深さ0.09mで、東側の壁際には、長径0.9m、深さ0.38mの楕円形の478土坑が伴う。これに加え、建替えがあったと仮定した場合、西側の595土坑もこの建物に伴っていた可能性がある。478土坑の埋土上面からは、完形の精製中型直口壺(715)と小型器台の杯部(713)と脚部(714)が出土しており、出土状況から土坑の埋没後に丁寧に埋納されたことがわかる。中央の楕円形の炉跡は、底部に薄い炭化物の堆積がみられ、長径0.8m、深さ0.15mをはかる。支柱穴は、475P・476P・477P・478Pで、規模は径0.5m前後、検出面からの深さ0.46～0.59mをはかる。いずれも埋土がブロック土で充填されており、柱は抜き取られたことがわかる。

この建物に伴う遺物は、上述した478土坑出土の小型器台(713・714)と中型直口壺(715)に加え、埋土や壁溝から土師器の細片が少量出土している。埋土出土の加飾二重口縁壺(716)とミニチュア鉢(717)を図化したが、加飾壺(716)はやや時期が古いため、先行・重複する竪穴建物8・12に伴う可能性がある。478土坑からは、明るい橙色の精製器種が出土した点が注目でき、口縁部内面に放射状ミガキを施す精製胎土の中型直口壺(715)は、搬入品か臨地品のいずれかと考えられる。その一方で小型器台の杯部(713)と脚部(714)は、混和材を多く含む粗い胎土から、在地産とみてよい。時期については、布留式中段階古相～中相に比定できるため、重複する竪穴建物8・12の廃絶に伴って新たに建替えられた建物とみなすことができる。竪穴建物8・12に後続する規模の大きな建物で、壁際の土坑から精製器種がまとめて出土する点をふまえると、集落の中で中核的な建物であったとみて誤りはない。竪穴建物8→12→13と、有力者の屋地とみなせるような建物が、同一地点で連続して建替えられ、長期に亘って継続することがわかるが、このことは集落景観を復元する上で重要な所見となる。

**竪穴建物7** (図126・127) P5区の南東で検出された竪穴建物で、竪穴建物8の南西2mの隣接する位置にある。微高地B1の頂部東寄りに位置しており、南東コーナー部分が竪穴建物6と重複する。建



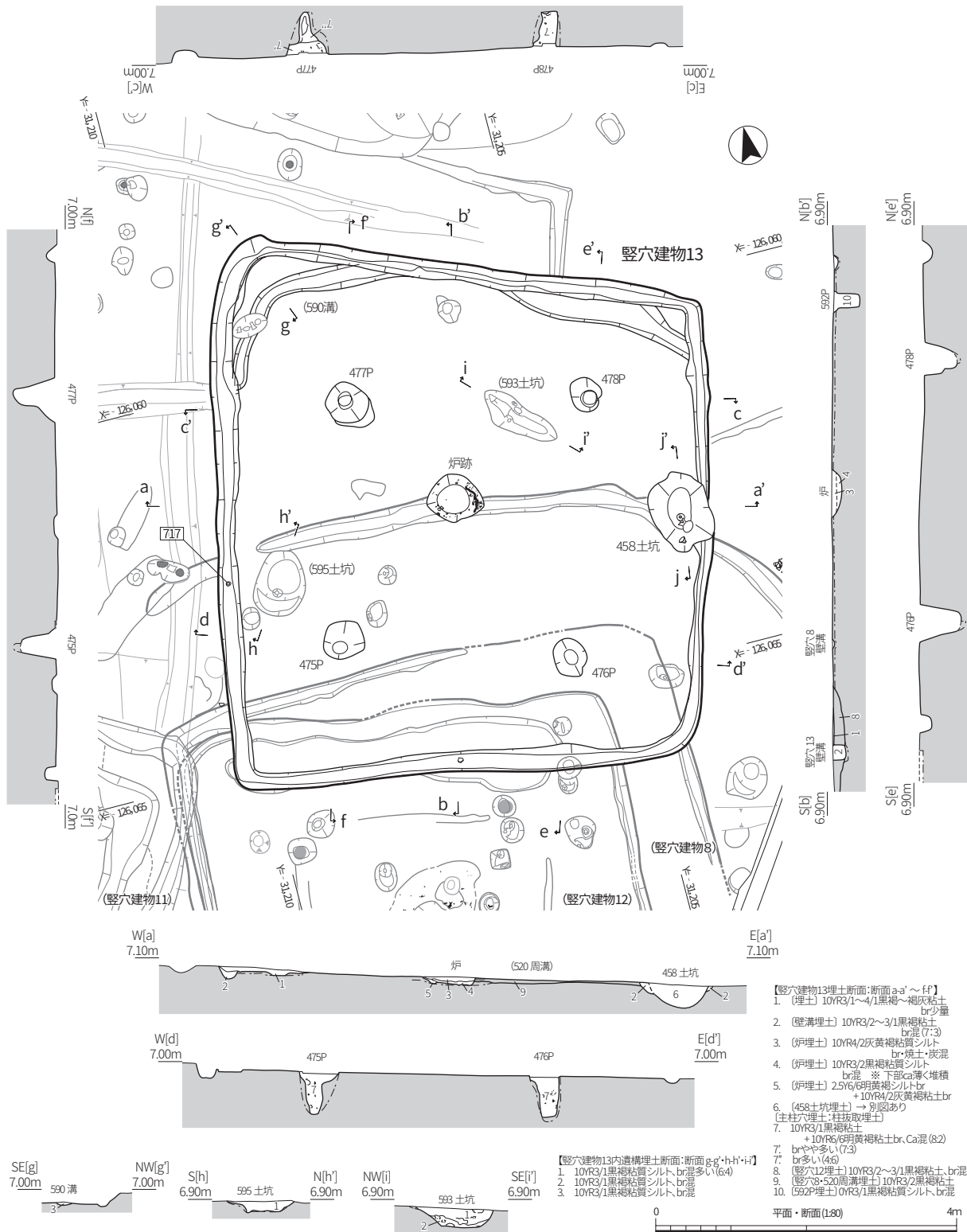


図 124. 竪穴建物 13 平面・断面

物の規模は、南北 4.4 m、東西 5.1 m、面積 22.4 m<sup>2</sup>をはかる。東西がやや長い点が特徴で、建物西側の 435 溝は、幅 0.3 m、深さ 0.11 m で、建物軸と並行する方向にのびることから付随する遺構の可能性がある。埋土の掘削時には、床面を十分に捉えることができなかったが、断面から厚さ 0.12 m の貼床を伴い、周囲に幅 0.1 m、深さ 0.14 m の壁溝がめぐることが明らかとなった。検出面から床面までの深さは 0.13 m、加工面までの深さは 0.22 m をはかる。建物の南西部では、川砂とみられる特徴的な



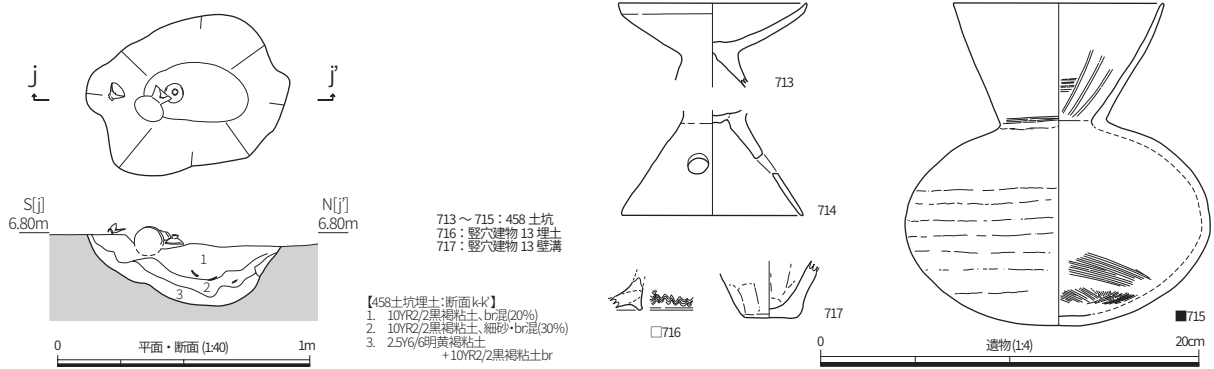


図 125. 竪穴建物 13 内遺構 平面・断面・出土遺物

細砂の分布がみられる。竪穴建物 10 に伴う 496 土坑埋土と同質の細砂で、人為的に床面に敷かれたことは明らかであるが、機能や性格については不明である。建物の南西には、一辺 0.8 m、床面からの深さ 0.38 m の隅丸方形の土坑があり、ほかの建物での事例と同様に建物に付属する遺構と認識できる。467P・468P・469P・470P がこの建物に伴う支柱穴で、規模は径 0.5 m 前後、床面から底までの深さは最大で 0.7 m をはかる。470P 以外は、埋土断面で柱痕が明瞭に残っており、柱の太さは 0.11 ～ 0.14 m 程度に復元できる。

建物 7 には、中央に不整形の大型の炉跡に伴う点の特徴である。規模は 1.6 m をはかり、床面から加工面まで深さ 0.08 m の掘り込みがある。埋土は、炭化物を含む黒褐粘土で充填される。炉跡の底面北寄りでは、白色粘土が検出され、その周辺は被熱赤変して炭化物の分布が確認された。火を取り扱う作業遺構と認定できたため、鍛冶遺構の可能性を想定して埋土の一部を土壌洗浄したが、残存土壌の一部に磁気が帯びることが確認されたものの、鍛造剥片等は検出できなかった。これ以外にも、竪穴の北東コーナー付近で検出された 593 土坑下部には、薄い炭層が介在しており、これについても関連する作業遺構と認識できる。どのような性格の遺構であるかは、十分に明らかにすることができなかったが、なんらかの手工業生産に関わる工房である可能性が高いため、重要な遺構と評価ができる。

出土遺物は、埋土 (718 ～ 726)、床面相当 (727 ～ 730・734)、貼床埋土 (731)、柱穴 (732・733) に区別でき、古式土師器の細片が一定量出土している。壺や甕の破片が多く、壺類では A 系統の小型直口壺 (719・720) や、口縁部が外反する広口短頸壺 (722)、肩部に羽状文を施す東海系の壺の体部片 (733) がみられる。甕はいずれも細片で、V 様式系のくの字甕 (724)、庄内形甕 (725・726・730・732)、布留形甕 (728) が共伴する。相対的に庄内形甕が多いが、生駒西麓産の (725・730) と非生駒西麓産の (726・732) が混在し、布留形甕 (728) は肩部のヨコハケが明瞭でない定型化以前の資料とみなせる。こうした組成から、布留式古段階新相頃に比定することがおおよそ妥当で、やや位置に近いが竪穴建物 12 と同時期に併存していた可能性が推測できる。

**竪穴建物 11** (図 128・129) P5 区の中央で検出された竪穴建物で、北東コーナーが竪穴建物 8・12 と接する。微高地 B1 の頂部に位置しており、建物周囲に口の字状の壁溝が二重にめぐる。支柱穴とみられる柱穴も 2 対の組み合わせがあるため、建替えを伴っていたと判断でき、断面から内側の溝が先行し、外側の溝が後出することが判明した。内側・外側ともに南北に長い構造で、規模は内側が南北 4.0 m、東西 3.5 m、面積 14.0 m<sup>2</sup> を、ひとまわり大きい外側は南北 5.3 m、東西 4.9 m、面積 26.0 m<sup>2</sup> をはかる。内側壁溝と外側壁溝の南東コーナーには、それぞれ土坑状の掘り込みが伴う。竪穴の中央西寄りには、炉跡とみられる直径 0.3 m の赤変した被熱面がある。赤変した範囲は狭く、被熱の程度は弱いことがう

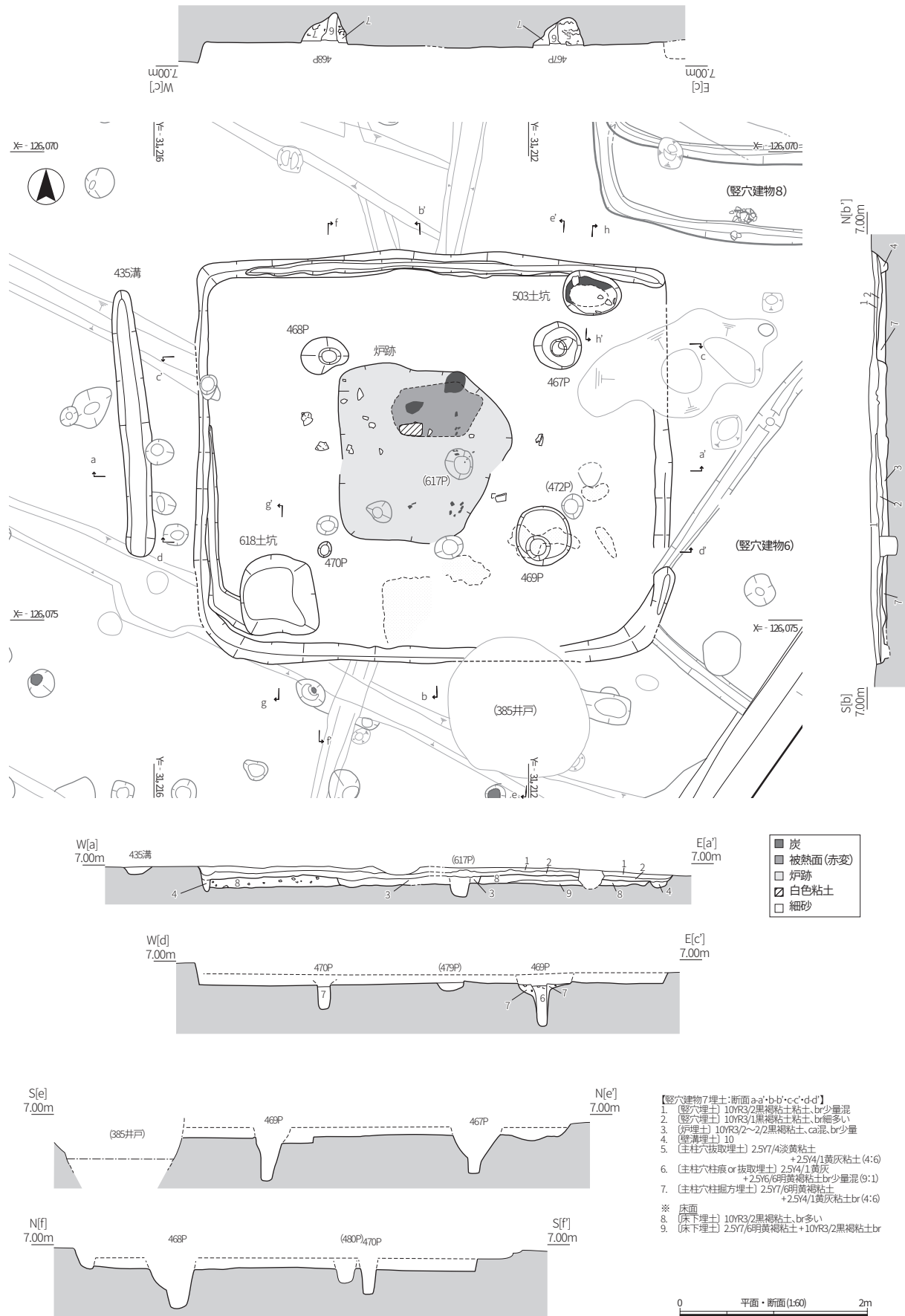


图 126. 竪穴建物 7 平面・断面

第5節 古墳時代の遺構・遺物 (2). 西側エリア

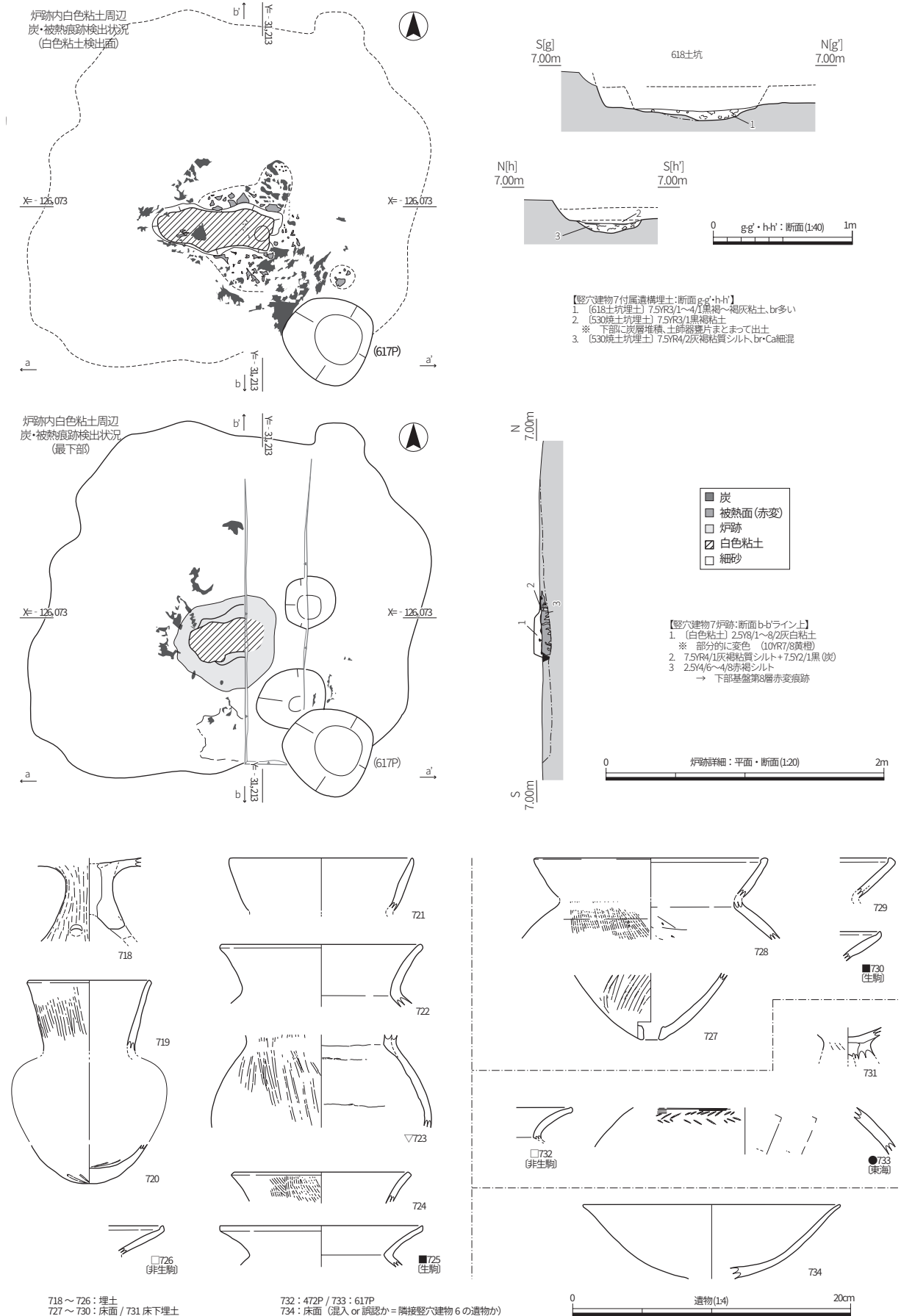


図 127. 竪穴建物 7 内遺構 平面・断面・出土遺物

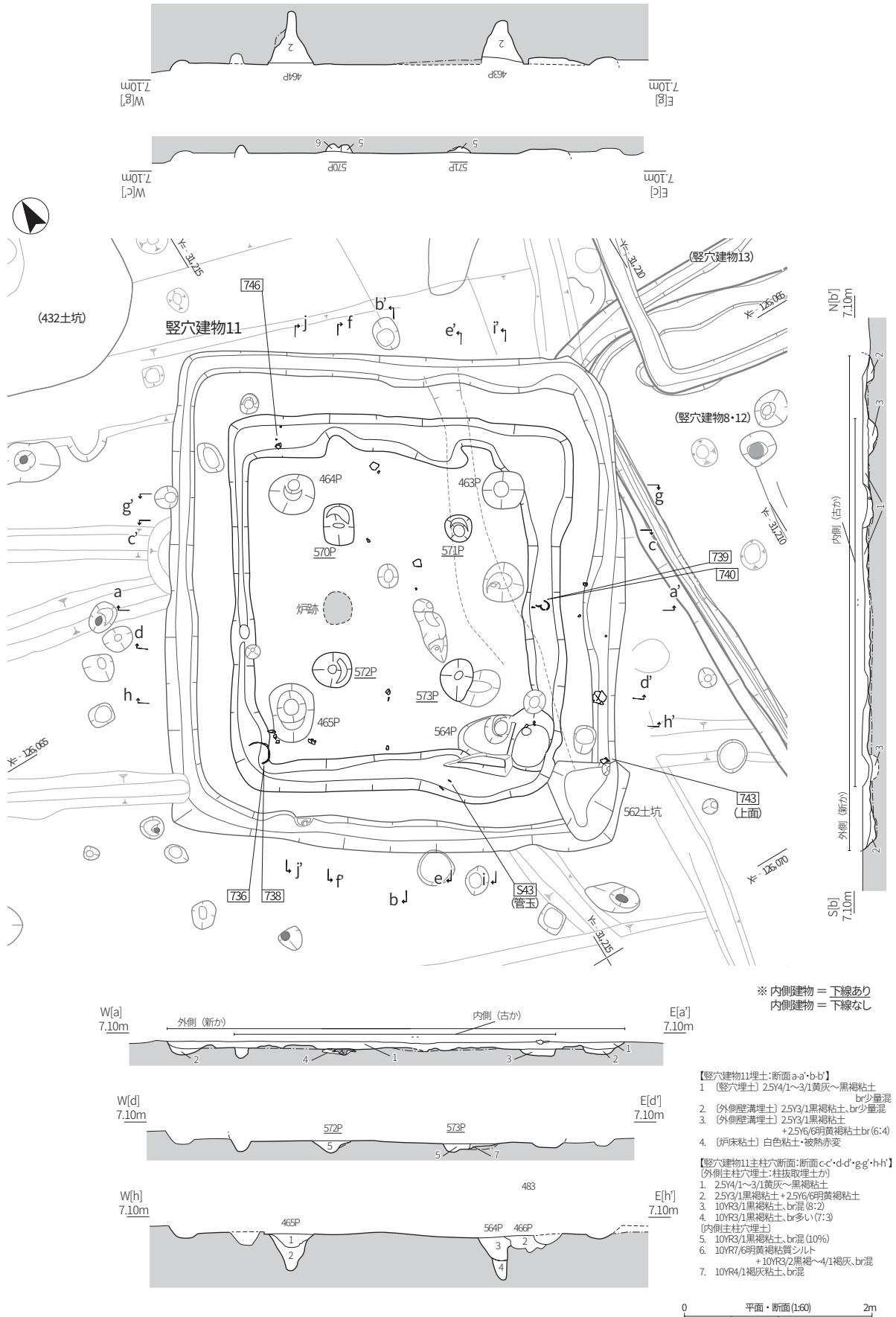


図 128. 竪穴建物 11 平面・断面



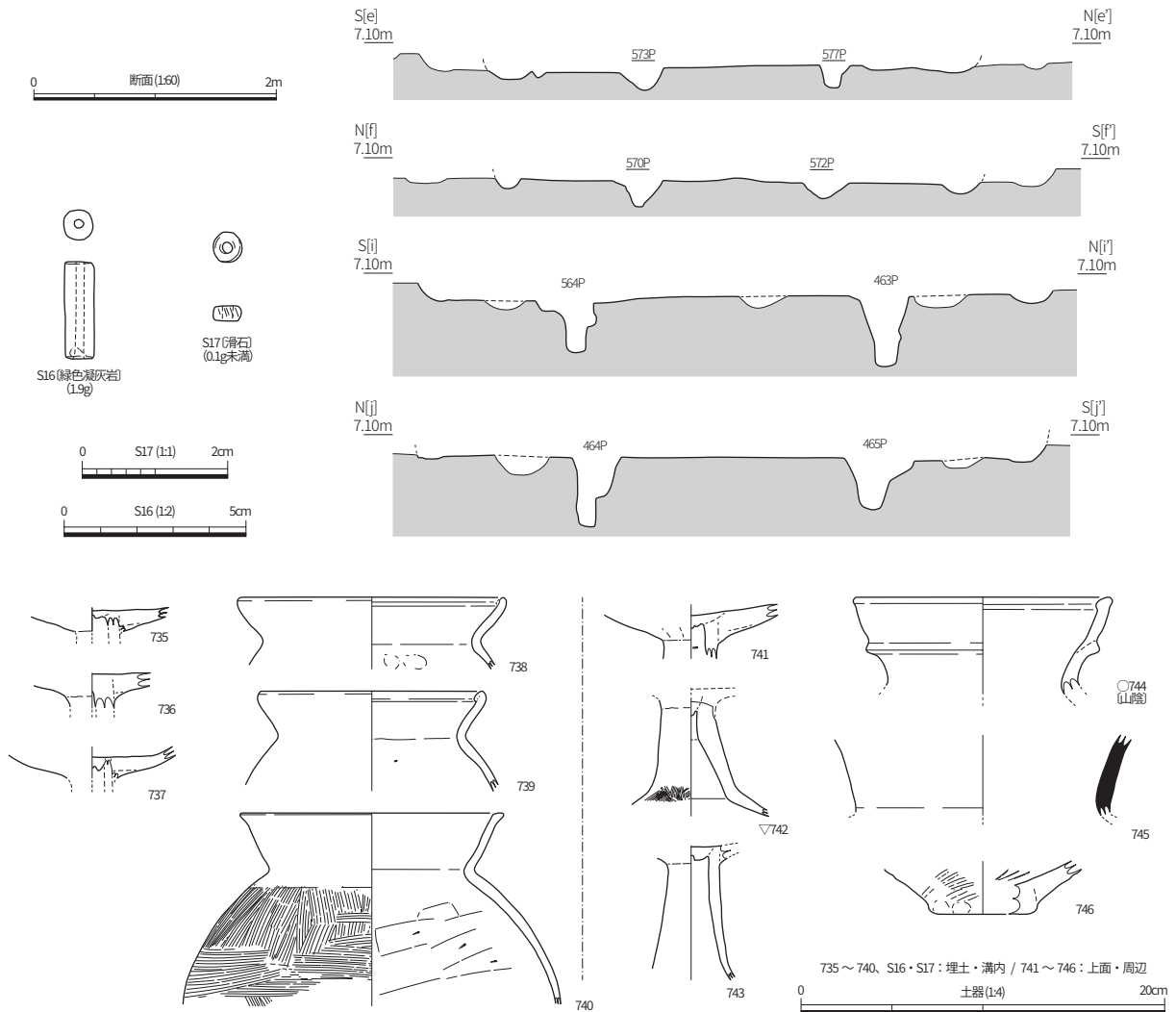


図 129. 竪穴建物 11 断面・出土遺物

かがえるが、通常は建物の炉跡は建物の中央に位置することが一般的であるため、ほかの建物で見られる炉跡とは機能が異なる可能性が推測される。また炉跡は、内側・外側のどちらの建物に伴うものであるかも明確でない。支柱穴については、内側の 570P・571P・572P・573P と、外側の 463P・464P・465P・564P の 2 対の組合せがあり、位置関係からみてそれぞれ内側壁溝と外側壁溝に組合うものとみられる。内側の支柱穴の規模は、径 0.3～0.4 m、深さ 0.15 m 前後をはかるのに対し、外側の支柱穴は一回り大きく、規模は径 0.5～0.6 m、深さ 0.40～0.57 m をはかる。内側の支柱穴は極端に浅いが、これについては建替時や後世の耕作によって上面が削平されたことが要因と考えられる。

埋土や壁溝からは、土師器の破片が一定量出土したほか、内側壁溝の上面で緑色凝灰岩性の管玉 (S16) が 1 点出土した。先行して実施した南側の B-1 区の調査時に、包含層中から緑色凝灰岩の石核が出土していたため (図 147:S25、P204)、玉作工房の可能性が推測されたが、建物の埋土を洗浄したところ、滑石製白玉 (S17) の出土が確認できたものの、緑色凝灰岩の薄片等は確認できなかった。

土師器については、内側壁溝内から布留形甕の破片 (739・740) がまとまって出土しているが、それ以外は上面出土資料も含めてほとんどが細片化している。高杯は、全体を復元できるものはないが、接合部に棒状痕がある円盤充填の C 系統 (II 群系) が多い (735～737・741～743)。布留形甕は、内面が特徴的に巻き込む一群 (738・739) と、直立気味に立ち上がり上端に面をもつ (740) があり、

特に前者については、この建物の南東7mに位置する竪穴建物7で類似資料(図130:753、P185)が出土している。これらの遺物は、いずれも布留式新段階、辻編年2～3段階に比定できるが、肩部下半に形骸化したヨコハケを施す布留形甕(740)の存在をふまえると辻編年3段階に入る可能性がある。なお、建物の上面に中世の耕作溝が多数重複しているため、上面出土遺物は建物に直接伴うものであるかは判断がつかない。高杯脚部(741～743)や山陰系甕の口縁(744)などは、時期的な齟齬はないが、V様式系甕底部(746)は明らかに時期が古いため建物に伴うものでない。須恵器甕の頸部(745)については、初期須恵器の範疇に入るものの、建物の帰属時期は須恵器の生産開始期と併行する時期となるため、建物に伴う資料であるかは不明である。

埋土の土壌洗浄の結果、この建物を玉作工房とする根拠は乏しくなったが、集落遺跡から管玉が出土した点は重要である。同一の緑色凝灰岩の石核が建物の近隣で出土している点や隣接する井尻遺跡での石釧<sup>22)</sup>の出土をふまえると、建物周辺とは限らないが、遺跡内または隣接遺跡のどこかでの玉生産はほぼ確実視できる。さらに本遺跡の北側1.7kmの丘陵上には、緑色凝灰岩製の石製腕飾類や玉類が豊富に出土した萩之庄1号墳<sup>23)</sup>が存在しており、この建物から出土した管玉と同質の石材であるかは検証の余地が残るものの、この時期の玉生産と流通・消費のあり方を考える上で重要な調査成果といえるだろう。

**竪穴建物6**(図130) P5区の南東で検出された竪穴建物で、南西コーナー部分が竪穴建物7と重複する。微高地B1の東側斜面に立地しており、東側壁際で検出されたことから、建物全体の2分の1程度の検出に留まる。規模は、南北4.3m、東西2.0m以上をはかる。周囲には幅0.2m、深さ0.16mの壁溝がめぐり、厚さ0.09mの貼床が伴う。隅丸方形の420Pと421Pが支柱穴で、規模は径0.3m、床面からの深さが0.65mをはかる。建物の中央付近とみられる位置には、大きさ0.6m以上の被熱赤変した範囲があり、炉跡と考えられる。

床面からは、北西側と南西コーナー付近、炉跡付近の3か所からまとまった遺物が出土している。いずれも原位置を保っているものとみられ、中期初頭～前半頃の土師器(747～755)とともに須恵器の甕の破片(756)が1点出土している。土師器の器種は、高杯か甕のいずれかで、炉跡周辺と南西コーナーでは高杯が、床面北西では甕がそれぞれまとまって出土している。器種ごとに出土地点に偏りがあり、この意味するところはよくわからないが、建物の機能や性格とも深く関わることが予想される。

出土遺物のうち土師器高杯は、形式はいずれも無稜外反形であるが、脚部の接合方法や系統にバリエーションがみられる(747～751)。甕は、布留形を主要な形式としつつも(752～754)、外反口縁形(755)が共伴する。須恵器については、焼成不良の軟質の甕の体部小片(756)で、外面平行タタキで内面に浅い同心円のあて具痕が残る。土師器の時期については、布留式新段階以降、おおよそ辻編年2段階～3段階頃に比定できる。特に高杯の形式は、いずれも辻編年2段階で主体的にみられる無稜外反形であるが、布留形甕の形状や外反口縁形の甕の存在などから、時期はやや下る可能性が高く、辻編年3段階古相頃とみるのが穏当である。近在する竪穴建物11と時期が近く、かつ建物軸も一致するため同時併存していたとみてよい。またこの時期は、須恵器の出現期にあたるため重要な時期であるが、この建物のように土師器と初期須恵器が同一遺構から共伴して出土する事例は、摂津では多くはない。須恵器編年との併行関係については、TK73型式と併行する時期と認識でき、この地域の須恵器出現期の土器様相や併行関係を考える上でも貴重な共伴事例といえるだろう。

**竪穴建物3**(図131・132) B-1区とA-1区でまたがって検出された竪穴建物で、北側の2分の1以上の範囲が重複する中近世の31水路によって削平を受けている。微高地B1の頂部西寄りに立地しており、

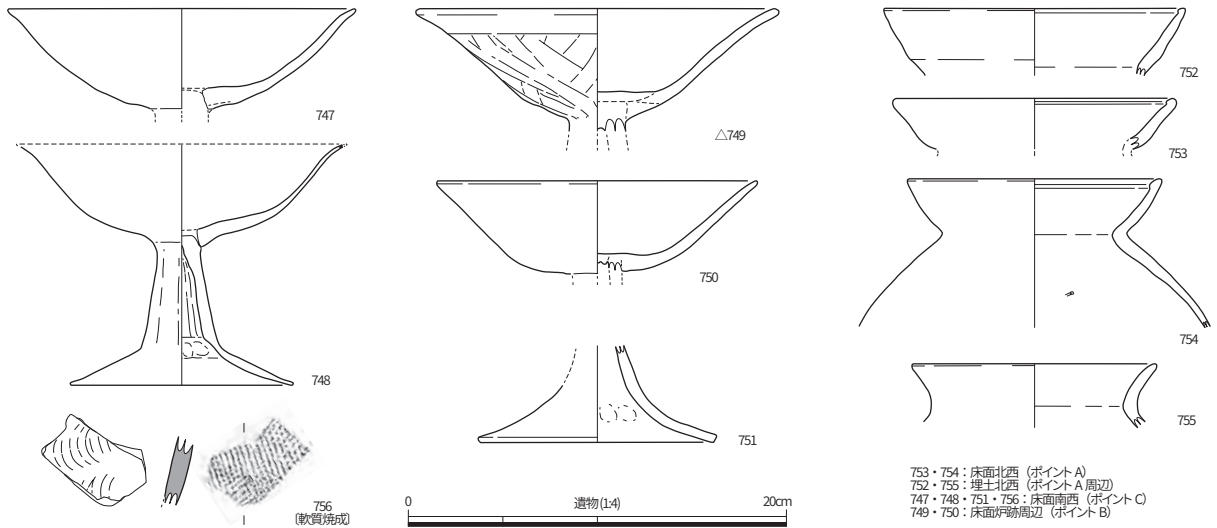
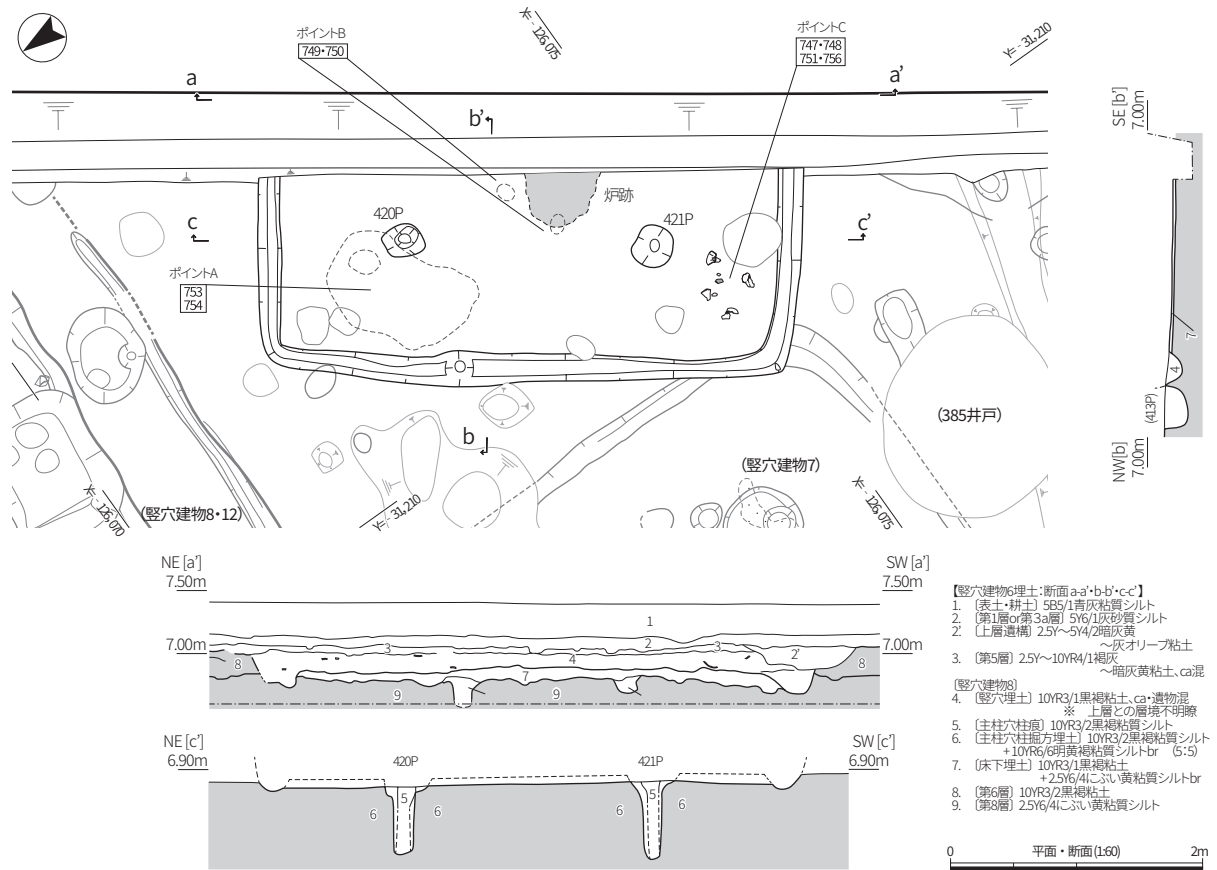


図 130. 竪穴建物 6 平面・断面・出土遺物

今回の調査範囲の中では微高地 B1 の南端付近にまとまる建物群のひとつである。規模は、東西 5.4 m、南北 2.3 m 以上をはかり、周囲には幅 0.2 m、深さ 0.11 m の壁溝がめぐる。南壁沿い中央には、径 0.7 m、深さ 0.30 m の土坑が伴う。竪穴埋土と床面の関係は十分に明確にできなかったが、断面から加工面を直接床面としていた可能性も推測できる。主柱穴は、位置関係から 134P が候補になるが、やや小ぶりで浅いため、主柱穴であるかどうかは断定できない。

埋土から出土した遺物には、古式土師器の細片が少量ある (757 ~ 759)。このうち A 系統の小型平底壺 (759) は、破片が床面の 1 か所からまとまった状態で出土しており、原位置を保っていると判断

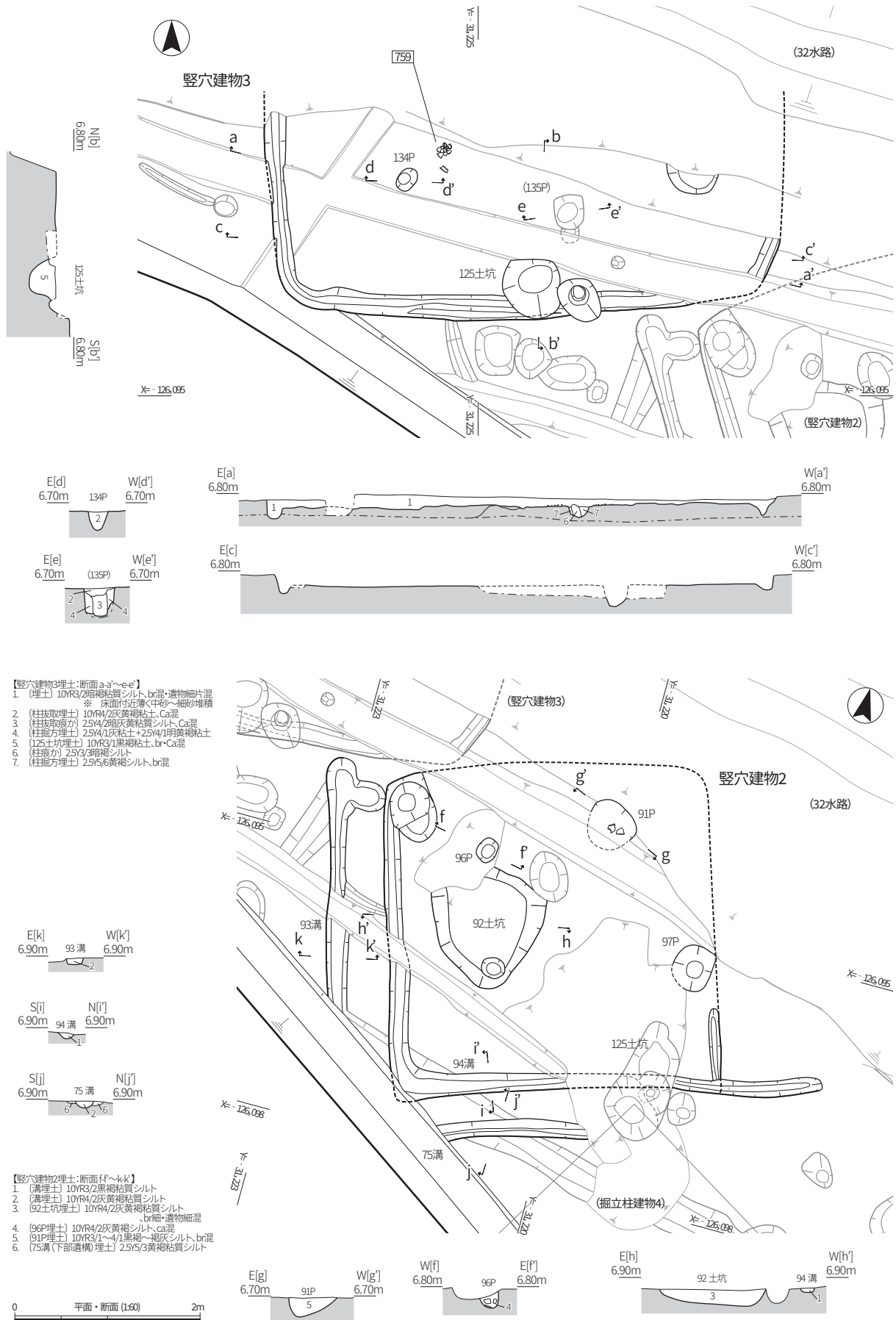


図 131. 堅穴建物 3・2 平面・断面



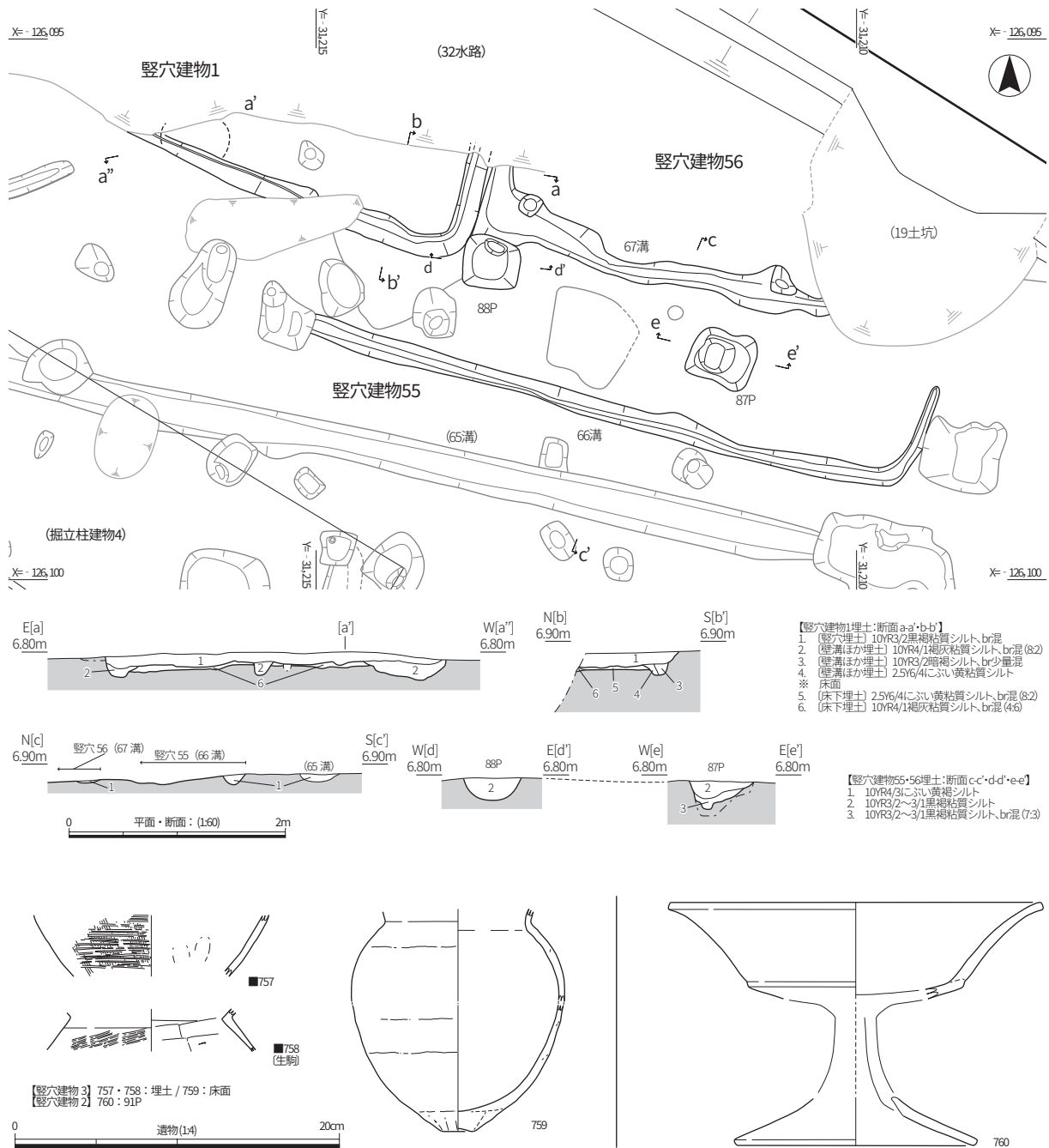


図 132. 竪穴建物 1・55・56 平面・断面、竪穴建物 3・2 出土遺物

できる。ほかでは、埋土から搬入品の可能性のある外面の細筋ヨコミガキの精製 B 系統の壺の口縁(757) や生駒西麓産庄内形甕の肩部の破片 (758) が出土している。遺物の出土量が少ないが、庄内式新段階～布留式古段階頃に比定でき、北側の P5 区で検出された竪穴建物 7・8・10・12 など近い時期の建物と、建物の軸は概ね揃う。このことから、古墳時代初期～前期の建物が南側調査区外まで広がる可能性が高い。

**竪穴建物 2** (図 131・132) B-1 区西端で検出された竪穴建物で、北側の竪穴建物 3 と隣接する位置にある。また北東側 3 分の 1 程度が、中近世の 31 水路と併行する溝の掘削によって削平を受けている。微高地 B1 の頂部に立地しているため上面の削平が著しいが、この建物の壁溝である 94 溝と並行する溝が西側と南側に走っており (93 溝・75 溝)、建替えがおこなわれた可能性も考えられる。規模は、

東西 3.6 m、南北 3.5 m、面積 12.6 m<sup>2</sup>で、小ぶりな部類の建物といえる。壁溝（94 溝）は、幅 0.2 m、深さ 0.05 m である。外周の溝（93 溝と 75 溝）を含めた規模は、一辺 4.9 m 程度に復元ができる。中世以降の攪乱などが重複しているため、この建物に伴う柱穴・土坑等は明確でないが、位置から北側の 91P と 96P が支柱穴の可能性はある。ただし南側については、攪乱などがあるため、柱穴の有無は明確でなく、柱穴を伴わない建物の可能性も念頭に置く必要があるだろう。

壁溝など関連する遺構から出土した遺物は、土師器の細片に限られ、出土量も少ない。91P からは、辻編年 2～3 段階頃の土師器大型有段高杯（760）が出土しており、この 91P が建物に伴うものであるならば、時期は中期初頭～前半に下る。

**竪穴建物 1・55・56**（図 132） B-1 区西端で検出され竪穴建物 2 の東側に隣接して検出された L 字状の 3 条の溝は、遺構の形状と周辺での竪穴建物の検出状況から、竪穴建物に伴う壁溝と判断できる。ただし上面の削平が著しく、北側にも中近世の 31 水路が重複するため、残存状態は極めて悪い。西側の逆 L 字状溝を竪穴建物 1 とし、東側の L 字状の溝を竪穴建物 56 とした。規模は、竪穴建物 1 が一辺 3.3 m 以上、竪穴建物 56 が一辺 3.4 m 以上をはかる。南側のひとまわり大きい L 字状溝を竪穴建物 55 とし、東西長 6.2 m 程度の規模に復元できる。北側の竪穴建物 1・56 は、断面からいずれも貼床を伴う構造で、南側の竪穴建物 55 については 87P と 88P が位置からみて支柱穴となる可能性がある。さらに建物軸が一致するため、連続した建替えと判断できる。

竪穴建物 1・55 の埋土からは、土師器の細片が少量出土している。細片のため図化できなかったが、竪穴建物 55 の破片は前期に遡る可能性がある。詳細な時期については不明であるが、貼床を伴う建物は前期以前に多いため、3 棟はいずれも前期に遡る可能性が高い。

**掘立柱建物 4**（図 133） B-1 区西端で検出された東西 3 間×南北 1 間以上の掘立柱建物で、竪穴建物 2 や掘立柱建物 1 などが隣接している。周辺の建物と同様に、微高地 B1 の南端頂部に立地しており、建物はさらに南側にのびる。建物の規模は、東西 5.8 m、南北 2.3 m 以上で、建物の南北軸は、東に 31.1°傾く。現状で確認ができる北側東西方向の柱筋の通りは概ね良く、東西の柱間寸法は 1.8～2.0 m におさまる。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものが多く、規模は 0.5～0.6 m をはかる。検出面からの深さは 0.36～0.59 m で、隅柱の柱穴が中間の柱穴に比べて総じて深い。また柱穴埋土断面には、全て柱痕が残っていないため、柱は抜き取られたことがわかる。柱穴埋土からは、土師器・須恵器の細片が少量出土しており、このうち北西の 85P から出土した外反口縁の土師器甕を（761）を図化した。ほかでは焼成不良の須恵器の細片などもみられる。出土遺物が少ないため詳細な時期比定は難しいが、外反口縁形甕は中期後葉以降に多いため、建物の時期については中期後葉以降に下る可能性が高い。

**掘立柱建物 1**（図 134） B-1 区西半で検出された東西 3 間×南北 2 間以上の掘立柱建物で、西側には掘立柱建物 4 が、東側には掘立柱建物 2 がそれぞれ隣接している。さらに北東隣接地には、中期末～後期前葉頃の土師器・須恵器がまとまって出土した 33 落込みが位置する。微高地 B1 の南端、頂部付近から東側斜面にかけて立地しており、建物は南側に広がる。さらに柱穴の周囲には、幅 0.4～0.6 m、最大で深さ 0.21 m の 35・36・37 溝がめぐっており、位置関係から建物に伴う外周の溝と判断できる。

建物の規模は、東西 5.4 m、南北 3.4 m 以上で、建物の南北軸は、東に 13.4°傾く。北側東西の柱筋に対して、東側南北の柱筋はやや東に開くが、柱筋の通りは概ね良い。柱間寸法は、1.8～1.9 m 前後におさまる。東西・南北ともに 3 間構造の建物と仮定した場合、建物の規模は、南北長 5.4 m、面積は 29.2 m<sup>2</sup>程度に復元できる。今回の調査で検出された掘立柱建物の中では、規模の大きい部類に入り、

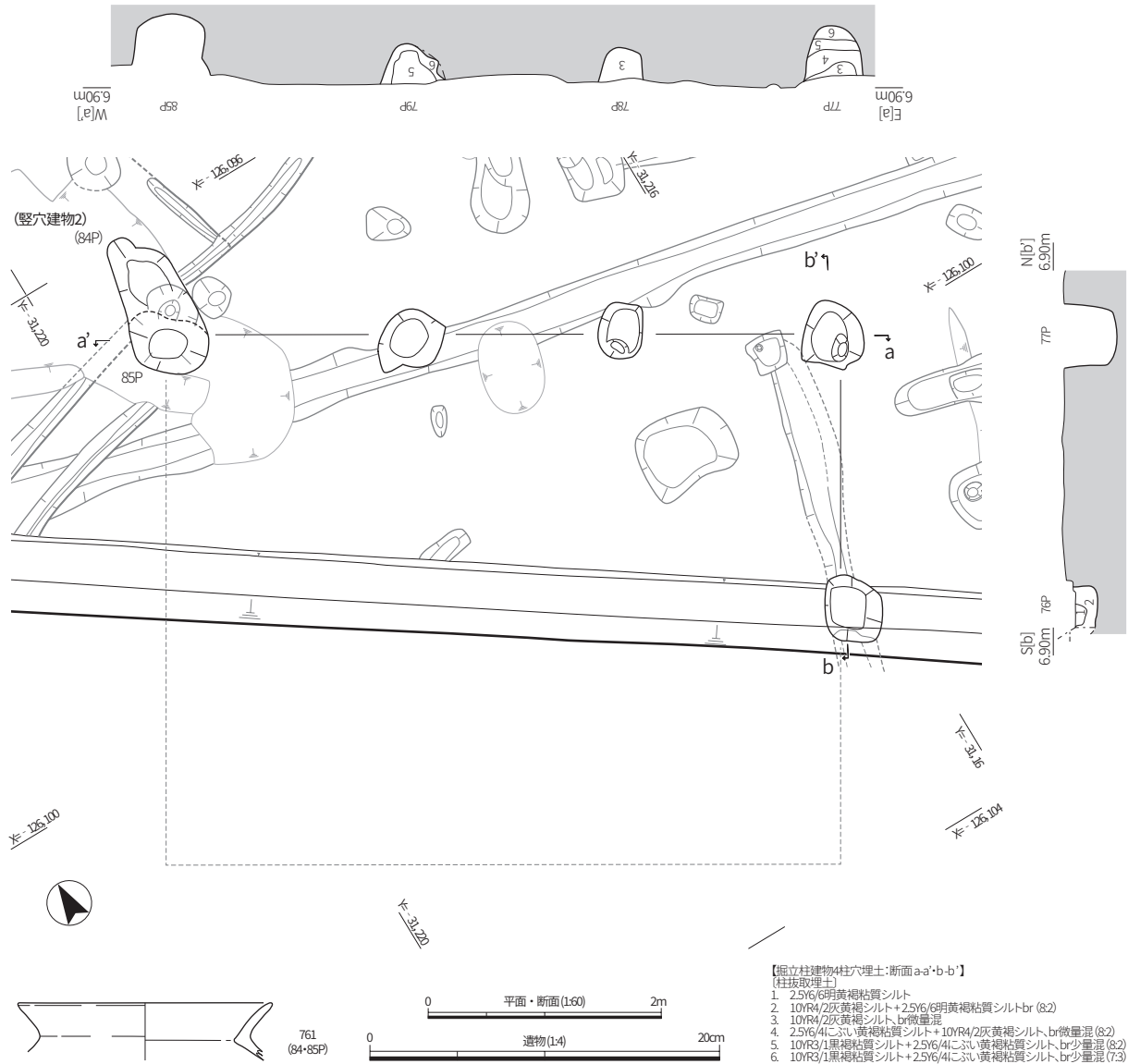


図 133. 掘立柱建物 4 平面・断面・出土遺物

中期に下るものとしては最大規模の建物である。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものが多く、規模は0.6～0.8mをはかる。検出面から底面までの深さは0.25～0.4mで、56Pでは柱痕が残るが、ほかの柱穴は埋土断面から抜き取られたと判断できる。柱の太さは、柱痕・柱あたりから0.15m前後に復元される。外周の溝については、北東・北西コーナー部分が途切れており、35溝の埋土と周辺からは遺物の出土が一定量あった。

柱穴から出土した遺物は少量で、762Pから出土したⅡ群系高杯の接合部(762)を図化した。ほかには、35溝埋土と周辺から土師器・須恵器・製塩土器が一定量出土しており(763～771、772～775)、胎土に結晶片岩を含む阿波産の高杯脚部(765)以外は、いずれも中期に下る。供膳具では、土師器高杯(763・764)と須恵器の杯類と高杯が共伴し(767・768、772～775)、ほかは須恵器壺の口縁(769)、布留形甕の口縁(770)、甑の可能性が高い口縁部破片(766)がある。小型碗形の製塩土器(771)は、計5.3g出土した。土師器はやや古い様相も留めるが、須恵器はいずれもTK208～23型式に比定できるため、須恵器の年代が建物の存続期間を示すものとみられる。

古墳時代中期の建物の中では、最も規模が大きく、周囲に溝をめぐる点からみても、格式の高い建

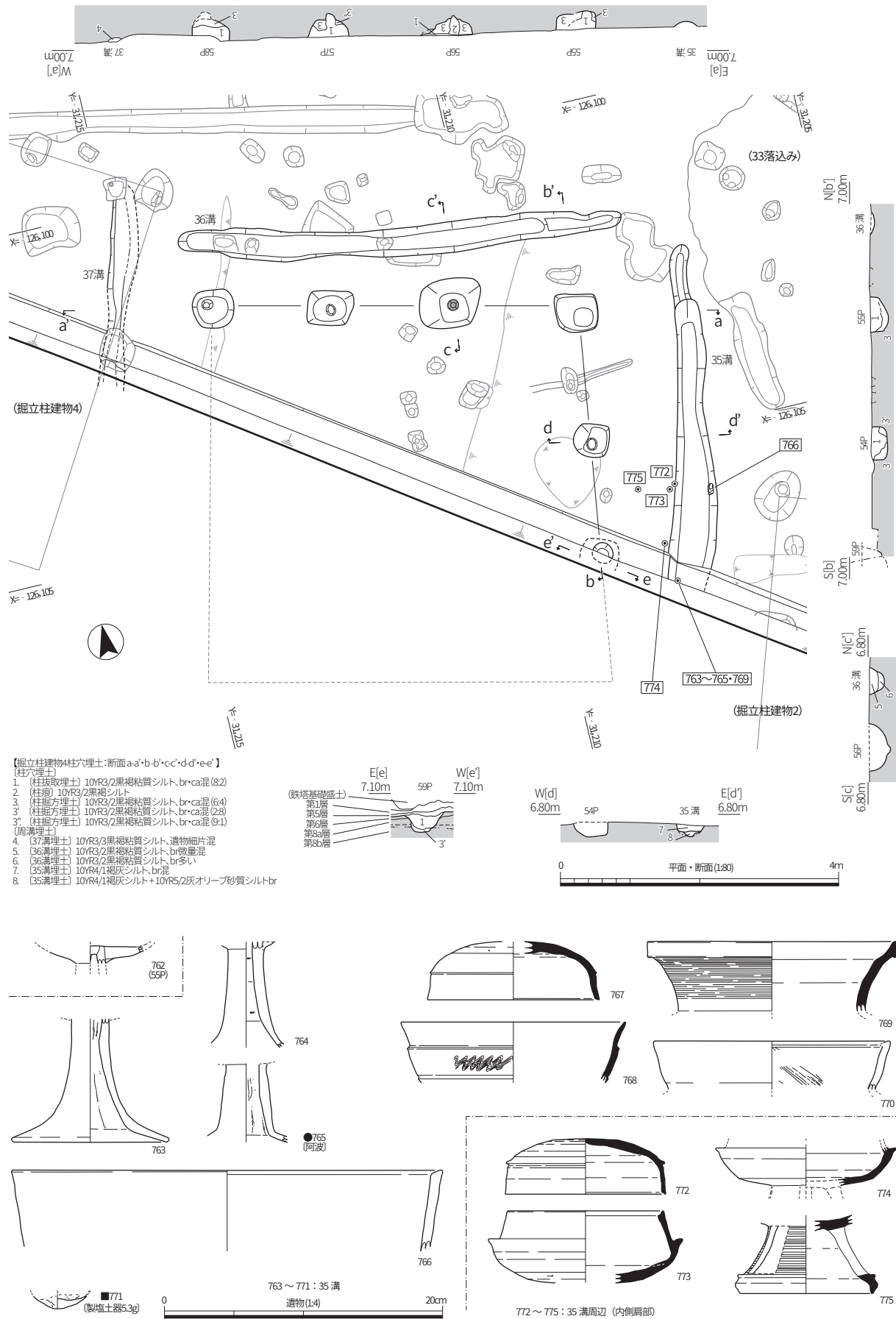


図 134. 掘立柱建物1 平面・断面・出土遺物



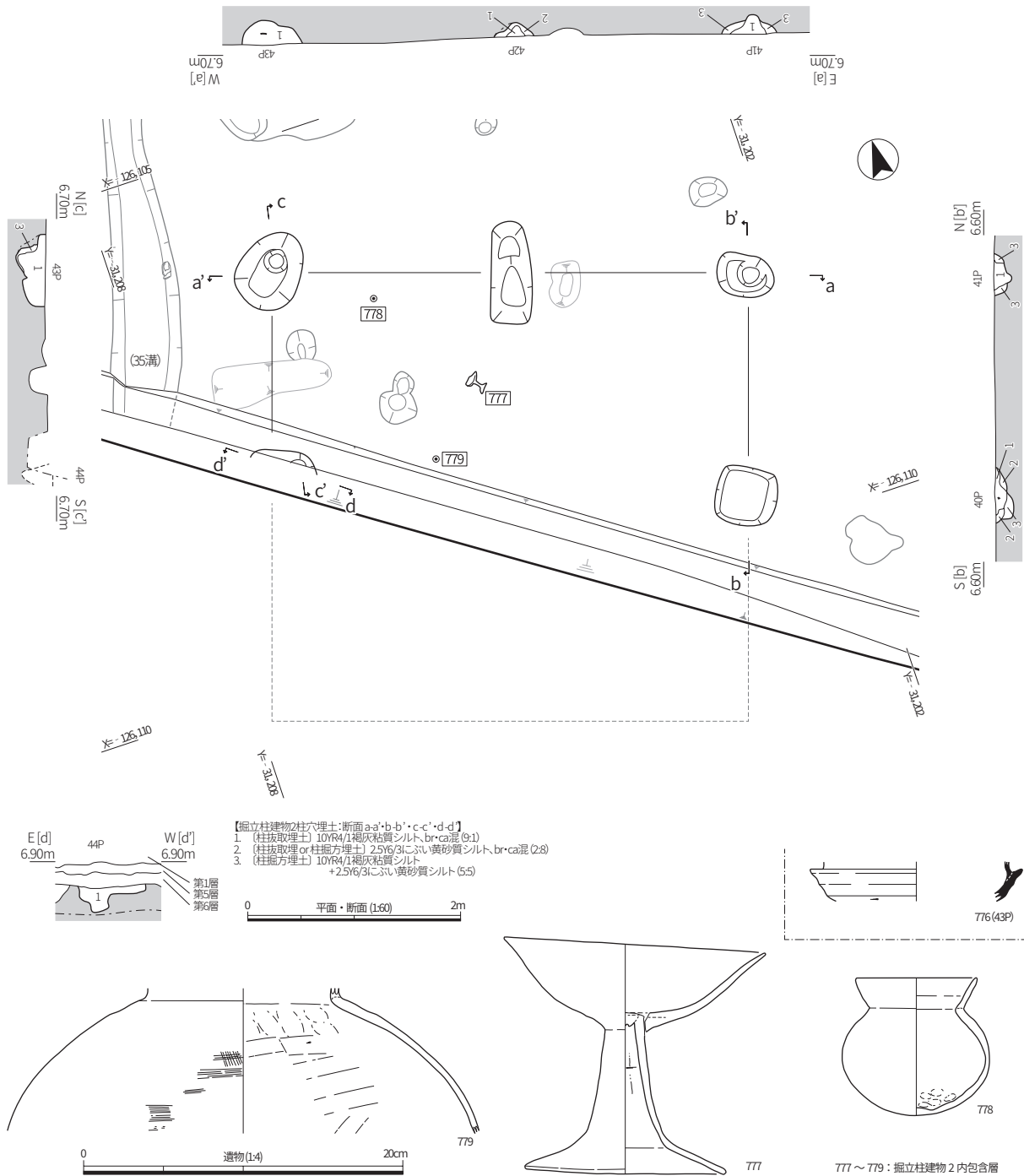


図 135. 掘立柱建物 2 平面・断面・出土遺物

物であったとみて大過はない。柱穴の規模も比較的大きく、中期の中では中核的な建物と評価ができることから、集落の構造を考える上でも必要な建物のひとつと認識できる。

**掘立柱建物 2** (図 135) B-1 区西半で検出された東西 2 間×南北 2 間以上の掘立柱建物で、西側には掘立柱建物 1 が、北側には 33 落込みがそれぞれ隣接している。微高地 B1 東側斜面に立地しており、建物はさらに南側にのびるが、南北は東西と同様に 2 間の構造とみるのが穏当である。建物の規模は、東西 4.5 m、南北 2.1 m 以上で、建物の南北軸は、東に 18.4° 傾く。柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は東西が 2.1 ~ 2.3 m におさまる。南北も 2 間構造と長さも東西とほぼ同規模と仮定した場合、面積は 20 m<sup>2</sup> 前後に復元できる。柱穴の平面形は、不整円形、隅丸方形のほか南北に長いものが含まれる。規

模は概ね0.5～0.7 mで、検出面から底面までの深さは0.14～0.23 mをはかる。柱穴の埋土断面から、柱は全て抜き取られたと判断できる。柱の太さは、柱あたりから0.15 m前後に復元される。

柱穴埋土からは、土師器・須恵器細片が少量出土しており、北西43Pから出土したTK23～47型式頃の須恵器杯身(776)を図化した。このほかに掘立の内側の包含層〔第6層〕からは、完形の土師器高杯(777)と小型丸底壺(778)、大型壺の肩部(779)などが出土している。土師器のC系統(Ⅱ群系)無稜外反形高杯(777)と小型丸底壺(778)は、辻編年2～3段階頃、大型壺(779)は布留式古～中段階頃にそれぞれ比定でき、柱穴埋土出土の須恵器杯身とは時期的な隔りがある。建物の南北軸がやや異なるが、西側の掘立柱建物1・4と同様の中期の遺物とみるのが妥当で、3点の土師器は掘立柱建物2に直接伴う遺物とみるのはやや難しい。出土遺物は、隣接する掘立柱建物1と時期に近いが、この掘立柱建物2が後出する可能性が高く、掘立柱建物1の廃絶後に建てられた可能性を想定しておきたい。

**450 落込み**(図136・137) 竪穴建物13の北4 mに隣接する不整形の浅い掘り込みで、中期中葉～後葉の須恵器・土師器がまとまって出土した。検出面での大きさは5.0 m、深さは0.25 mをはかり、埋土は暗色の粘質土を主体とする。底面には、円形や長方形のやや深い掘り込みがあり、これらについては下層遺構の可能性も考えられるが、遺物の様相に差がないため一連の掘り込みとみるのが妥当である。また最終的には、第6層を完全に除去した状態で検出したが、中期以降の遺構は第6層上面もしくは第6層中から掘削されていることが判明している。このため本来の規模・深さは、ひとまわり大きいことは確実である。埋土からは、土師器・須恵器が一定量出土しているが、主に上半〔埋土1〕や上面からの出土で、破片資料が多い傾向にある。

出土遺物は、埋土中から出土した遺物と、上面から出土した遺物に区別できるが、これらは様相にそれほど大きな差はみられない。土師器と須恵器の組成は、供膳具で土師器高杯(788)が少量出土しているが、大半は須恵器の杯類と高杯で、3方透かしの短脚高杯が多い。また菱形の2方透かしの高杯(785)は、類例がそれほど多くはないため生産地の特定ができる可能性がある。貯蔵具については、須恵器の壺・甕類の破片が一定量出土しているが、復元率が高いものはない。口縁部の破片にバリエーションがあり、大まかには端部に面を持つような資料が多い。甕の破片は、無文あて具の大甕(793)の破片と、同心円のあて具痕が残る破片(792)が混在している。土師器の煮炊具は、布留形甕(794・795)と外反口縁(796)の口縁部破片が混在している。このほかには、小型碗形の製塩土器(797)の破片が含まれる。なお精製の小型丸底壺(798)は、典型的な布留式中段階の資料のため、直接この遺構に伴うものではない。

時期については、各器種の形態的特徴からTK208～23型式頃と判断できる。このなかでも供膳具が須恵器主体である点、須恵器高杯が3方透かしを主体とする点、カキメを施すものが一定量含まれる点などが新しい様相といえ、TK23型式頃に下らせることが妥当である。居住域の中心部付近に存在する廃棄土坑と認識できるが、出土状況からは一括性の高いものとは言い難いため、廃棄が長期間に及ぶものであるか、短期的なものであるかは不明である。

**432 土坑**(図138・139・140) P5区中央付近、竪穴建物11の北西3 mに位置する楕円形の土坑で、埋土からは古式土師器がまとまって出土した。検出面での規模は、東西2.4 m、南北2.0 mをはかり、深さは0.48 mである。埋土は3層に大別でき、上層〔埋土1〕は、灰黄褐粘土を主体とする。中層〔埋土2〕は、炭化物を多く含む黒褐粘質シルトを、下層〔埋土3〕はブロック混じりの黒褐粘質シルトをそれぞれ主体とし、特に〔埋土2〕から重層的に土師器が出土した。土師器は、大半が破片の状態で出

土し、いずれも細片となっており十分に復元できない資料が多い。このことから土師器は、意図的な破碎を受けた上で投棄されたと判断することができる。また土師器は、細かな破片が重なり合った状態で出土しているが、上面はより細片化した破片が多いの対し、下面では相対的に大ぶりの破片が多く、完形に近い小型の壺類と中・大型の壺・甕類の破片がまとまって出土する傾向がみられる。こうした遺物の出土状況と後述する土師器の器種組成から、なんらかの祭祀に伴って使用された土器群とみることも可能である。

埋土から出土した遺物には、古式土師器と石製品があり、上述したように土師器は細片が大半を占め、各器種を網羅的に伴う点が特徴といえる。高杯は、残りの良い資料がないが、杯部が大ぶりの高杯(810)や精製B系統の模倣品とみられる(811・813)や、A系統の高杯脚部(814)などがある。小型器台は出土量が少なく、中実の(815・818)と中空の(819)がある。小型の壺類と鉢類は、出土量とバリエーションが豊富な点が特筆できる。細筋ヨコミガキを密に施す精製B系統の小型丸底鉢(820)・小型丸底壺(822)・有段口縁鉢(829)は、いずれも赤褐色を呈する胎土で大和東南部からの搬入品とみてよい。このなかで復元率が高い小型丸底鉢(820)は、被熱痕跡があり、廃棄時に火にかけられたことがわかる。これに加え、精製器種を意識した模倣品が多数あるが(821・822・823・824・828など)、模倣の程度・胎土等がそれぞれ異なっており、一括資料の組成として非常に興味深い構成となっている。この中でも有段口縁鉢(828)は、形態や器壁の薄さが典型的な(829)などが精製B系統と類似するが、白色の胎土や外面がハケ調整で仕上げられる点で模倣品とみなすことができる。ただし、器壁の薄さなど極めて精巧なつくりであり、精製器種の周辺地域への波及と在地生産の定着過程を考える上で貴重な資料となるだろう。また台付壺(826・827)は、北近畿からの搬入品の可能性が高い。中大型の壺類は、直口壺(832～835)と二重口縁壺(836～839)が主要な形式で、ほかに庄内式期に多い広口短頸壺(830・831)が含まれる。直口壺には、タテミガキのA系統(832)と外面ハケ調整のC系統(835)があり、二重口縁壺には山陰(838)と阿波(839)からの搬入品が含まれる。特に頸部に羽状文を施す山陰系の資料(838)は、畿内での出土例がほとんどないため、貴重な出土事例といえる。ほかに大型品では、生駒西麓産の大型複合口縁壺の肩部の破片(849)が出土している。甕については、生駒西麓産と非生駒西麓産の庄内形甕がそれぞれ1点ずつ出土しているが(840・842)、それ以外は全て布留形甕で占められる(841・843～848)。石製品では、平滑面のある大ぶりのチャートの石臼・擦台(S18)が土師器とともに出土しており、特殊な使用が推測できる。なお、32井戸からも同一石材で類似する擦台が土師器の集積とともに出土しており、出土状況が酷似している。

時期については、A系統や庄内式期に特有の形式を残しつつC系統(布留系)の形式が増加する傾向をふまえると、布留式古段階新相～中段階古相に位置づけることができる。さらに時期を限定するならば、甕の主要形式が布留形甕である点がやや新しい要素であり、高杯に大型・小型の両方を含む点や大きく口縁部が開く小型丸底鉢の存在などから布留式中段階古相まで下げることが妥当である。周辺の建物遺構では、竪穴建物9がほぼ同時期で、ほかでは竪穴建物12が近い時期の候補となる。破片化した資料が多いが、精製器種や外来形土器がまとまった出土や、同一器種における系統の多様性などが特筆され、土師器を用いた集落内祭祀のあり方や本遺跡と他地域の交流関係の実態を検討する上で重要な遺構のひとつといえる。

**33 落込み**(図141・142) 掘立柱建物1の北東、掘立柱建物2の北側隣接地に位置する不整形の浅い掘り込みで、中期末～後期前葉頃の土師器・須恵器がまとまって出土した。検出面での規模は、南北最

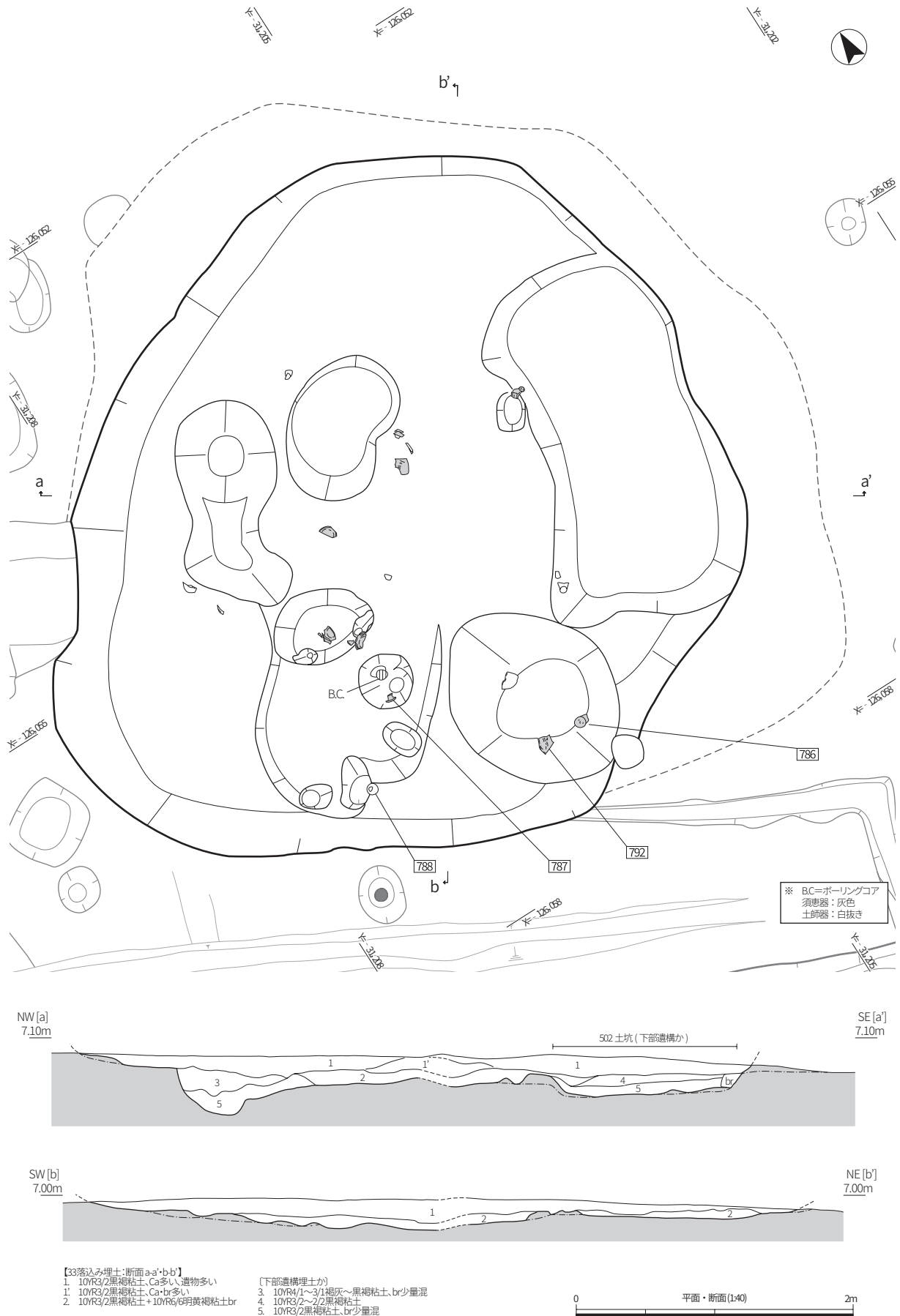


図 136. 450 落込み 平面・断面



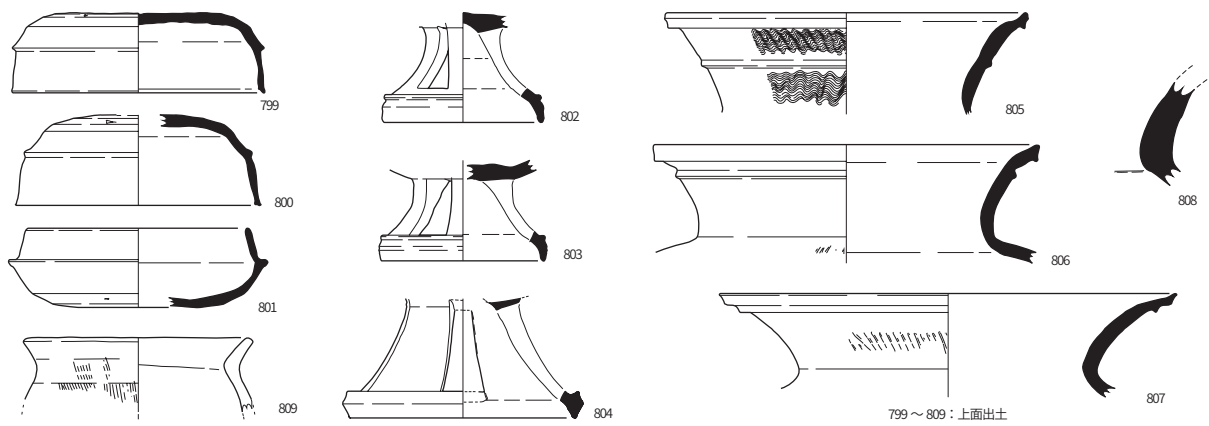
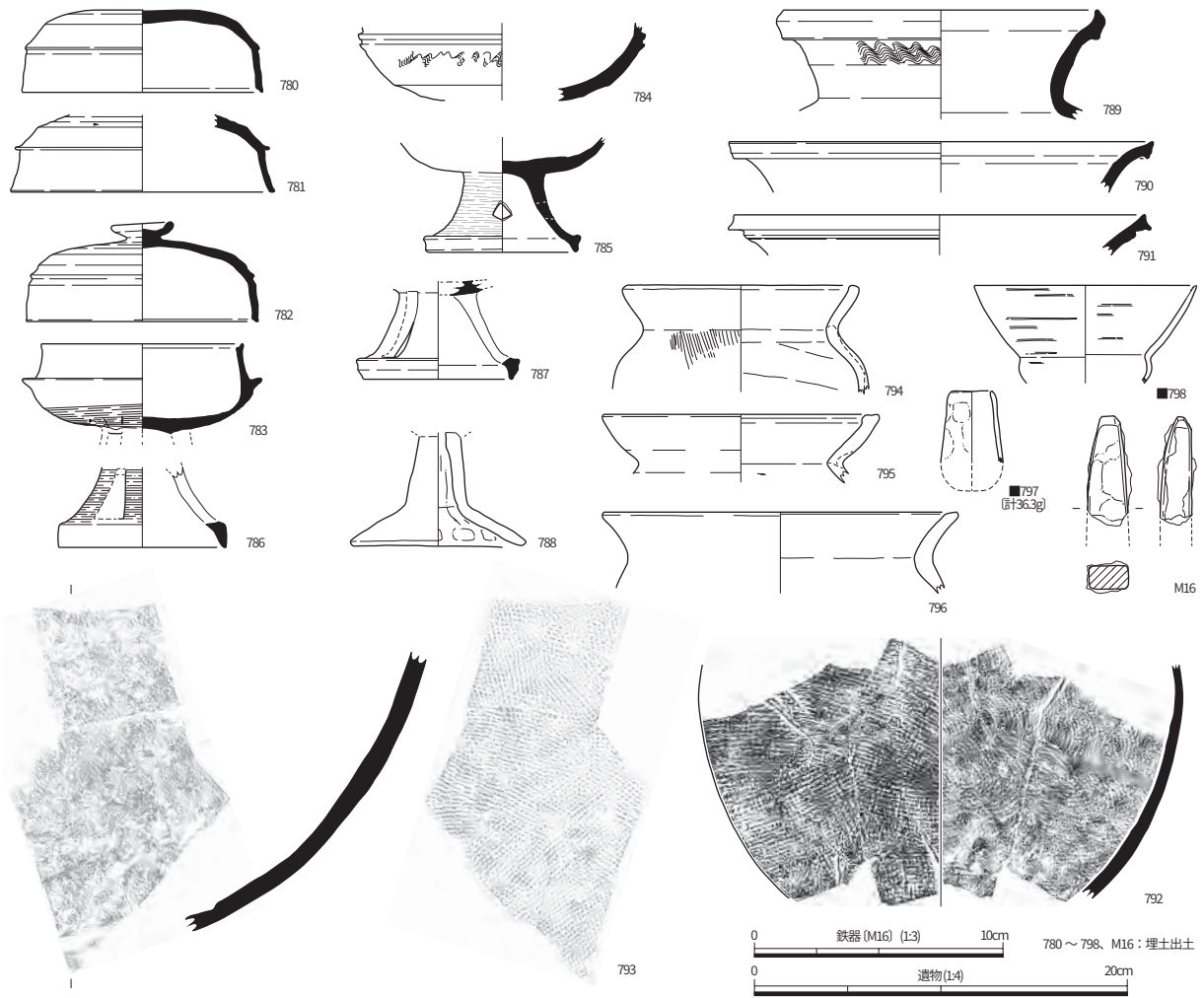


図 137. 450 落込み 出土遺物

大 4.4 m、東西 4.0 m、深さは 0.16 m をはかる。埋土は、褐灰～黒褐粘質シルトを主体とする。最終的には第 6 層を完全に除去した状態で検出したが、中期以降の遺構は第 6 層上面もしくは第 6 層中から掘削されていることが判明している。このため本来の規模・深さは、ひとまわり大きいことは確実で、上述した 450 落込みと類似する遺構といえる。底面付近からは、原位置を保った状態で土師器・須恵器がまとまって出土しているが、規模の大きな遺構であるため。遺物の密集度は低い。ただし復元率の高い遺物が多く、供膳具・貯蔵具・煮炊具が一通り揃っている点が注目される。

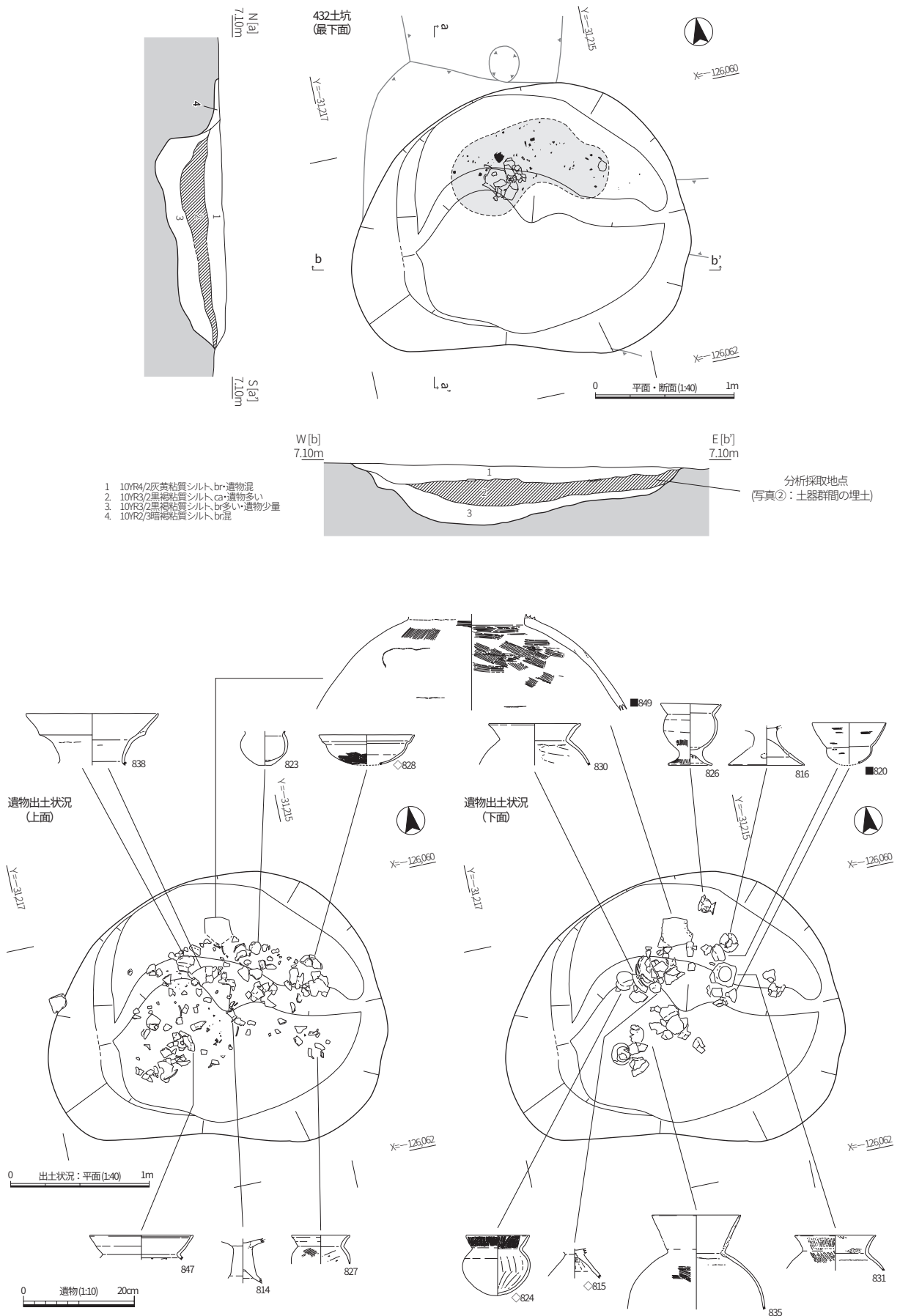


図 138. 432 土坑 平面・断面・遺物出土状況

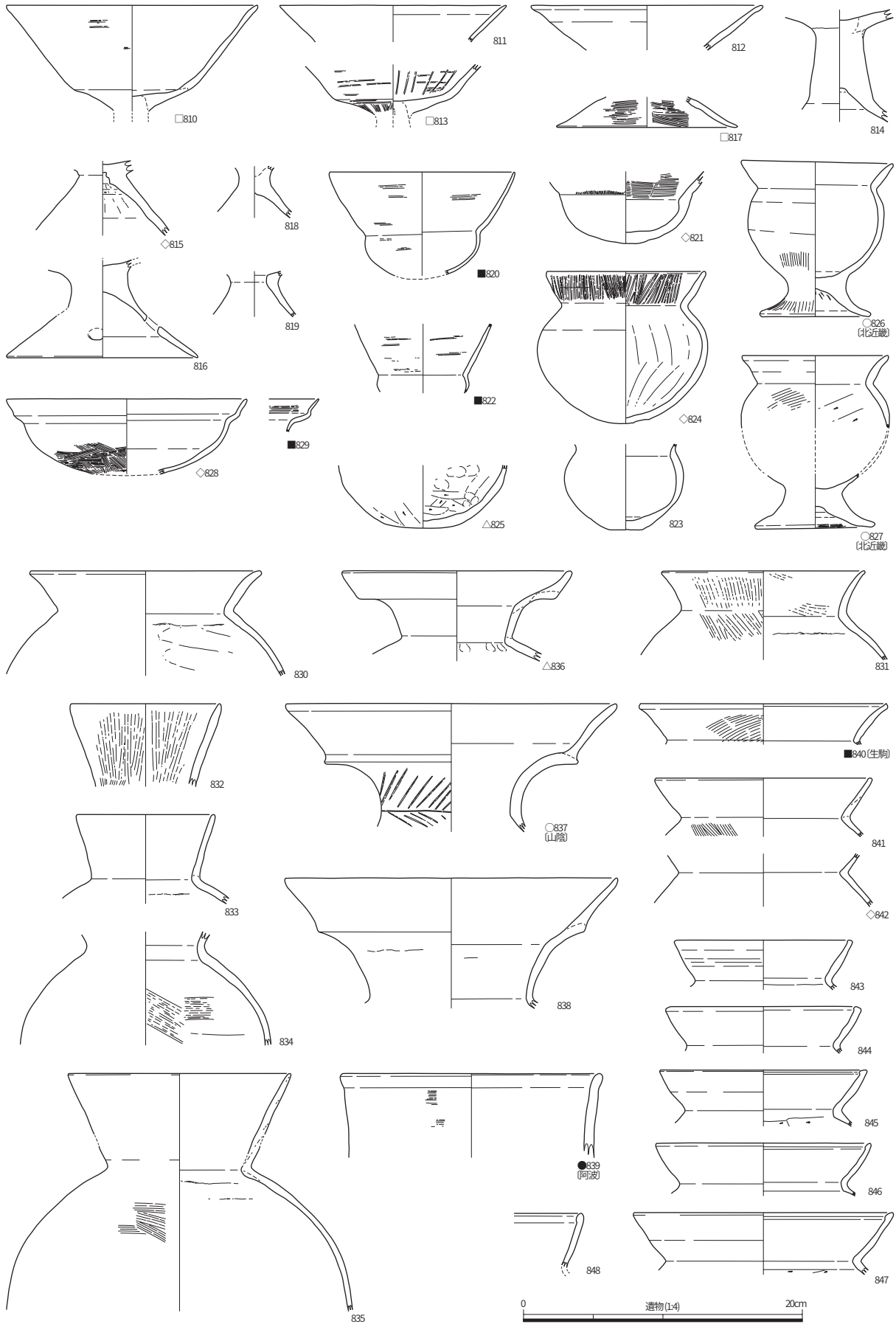


図 139. 432 土坑 出土遺物 (1)



図 140. 432 土坑 出土遺物 (2)

図化した遺物は、底面付近で原位置を保っていた遺物と埋土から出土した遺物 (図 142)、上面から出土した遺物 (図 143) を分けて図示した。全体の組成については、供膳具・貯蔵具は全て須恵器である点が特徴で、これに加え上面からは、須恵器器台 (879～881) や不明板状土製品 (886) などが出土している。ほかでは、図示はしなかったが底面付近から用途不明の石材が土器とともに数点出土している。底面から出土した遺物のうち供膳具では、須恵器の杯類と短脚の有蓋高杯がまとまって出土しているが、つまみ付きの有蓋高杯の蓋は含まれていない (850～863)。杯蓋の数と杯身と有蓋高杯の合計数がいずれも 7 点ずつであることから、有蓋高杯の蓋にはつまみのない蓋が伴っていた可能性が高い。短脚高杯と小ぶりの杯類が主体を占めるため、一見すると 5 世紀末頃のもともりのようにもみえるが、口径 14 cm 代の大口徑の杯蓋 (856) を含むことから、少なくとも遺物の廃棄の時期は 6 世紀に下ることは確実である。また杯類には、胎土に大ぶりのチャートを含むものがあり、在地生産の可能性が示唆される点も重要といえよう。貯蔵具では、甕と大型・中型壺・大甕が揃っている (864～869)。甕 (864) は、口縁部が細片化した状態で出土しており、意図的に打欠きされたことがわかる。同様に小型壺 (865) や中型壺 (868)、大甕 (869) も口縁部が欠損しており、意図的な打欠きと判断できる。特に大甕 (869) は、器壁が薄い優品で、破片が散乱した状態で出土している。土師器の甕 (870～875・884・885) は、遺存状態が良くないため復元率が低い、上面を含めると小型・中型・大型品が揃っており、いずれも外反口縁の個体で占められる。上面から出土した遺物は、確実にこの 33 落込みに伴うものであるかは不明であるが、筒形器台の破片 (879・880) などが注目され、このほかに焼成不良の杯身 (876)、長脚一段透かしの高杯 (878) や 6 世紀に下る可能性が高い器台または台付壺の接合部 (881) などの破片などがある。板状の土製品 (886) は、一辺 11.4 cm 以上、厚さ 2.5 cm で、外縁部分が僅かに厚くなって側面部は面が作り出されている。外面ハケ調整を施し、埴と類似する形状の遺物であるが、性格や用途は不明である。

小口径の杯類や短脚高杯が主体である点や甕の形状などは、TK47 型式頃の特徴を備えているものの、





図 141. 33 落込み 平面・断面

大口径の杯類と上面出土の長脚高杯の存在から、一括性の高いこれらの遺物の廃棄の時期は MT15～TK10 型式まで下るとみるのが穏当である。中期的な様相の遺物が多く含まれる点については、長期の使用を想定するか、古い様相を留める資料が遅くまで残ったものと理解するのかで、解釈が分かれると思われる。これについては、内面が丁寧にナデ消された大甕の製作時期は TK208～23 型式以前とみるのが妥当であるため、少なくとも一部の資料に長期的な使用が想定できるものが含まれるとみてよい。各器種が一通り揃った良好なセット関係であるため、なんらかの儀礼などに伴って使用された可能性が想定できるが、隣接する掘立柱建物 1 とは距離があまり近く、時期もややずれることから、別の建物との関係を考える必要がある。当該時期の良好な一括資料であるとともに、今回の調査でも最も新しい時期のまとまった資料群であるため、集落の廃絶を考える上でも重要である。

**1400 土坑**(図 143) B-2 区西半で検出された隅丸方形を呈する土坑で、掘立柱建物 48 と隣接している。規模は 1.3 × 1.1 m、検出面からの深さ 0.69 m をはかる。埋土は、ブロック土で人為的に埋め戻され

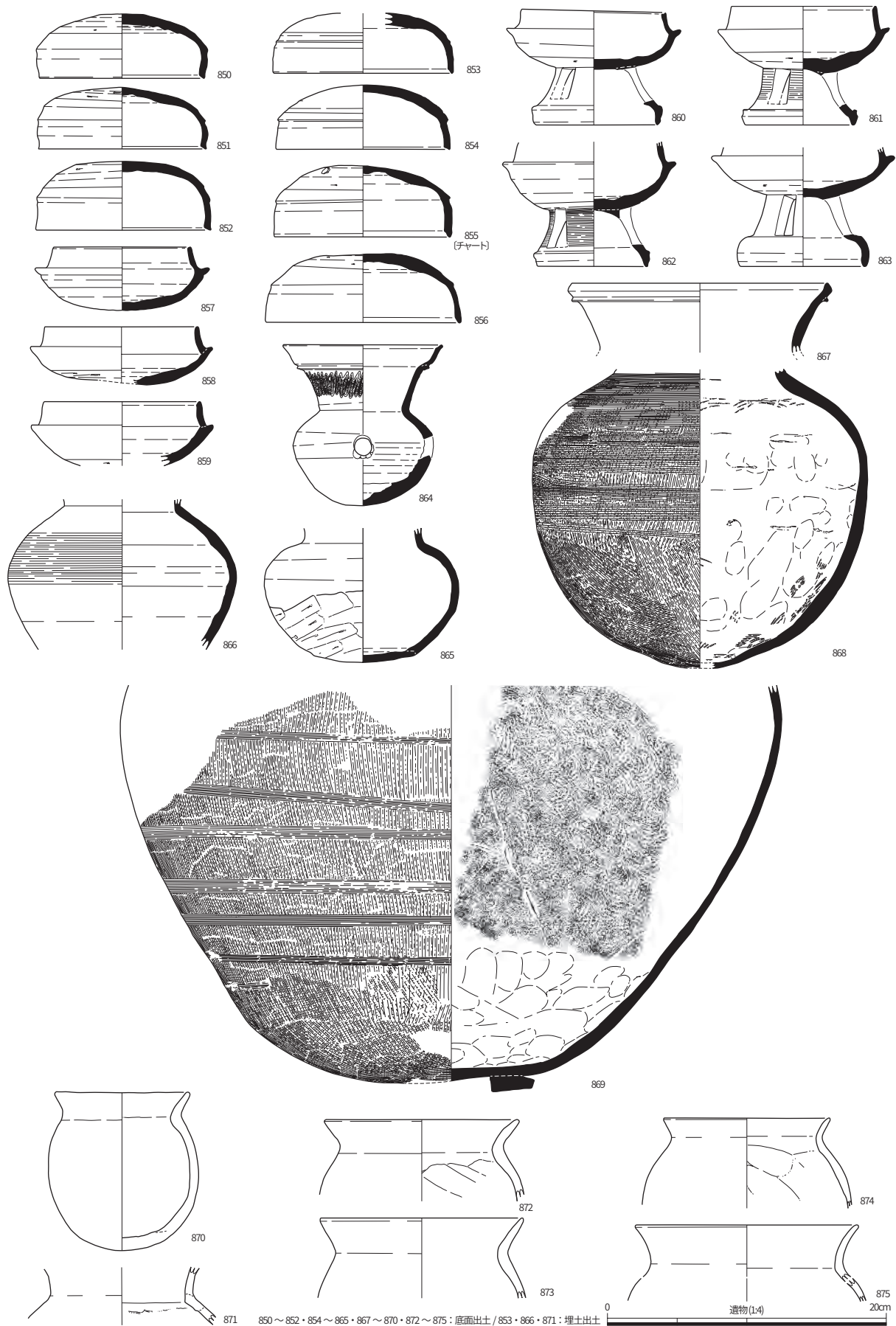


図 142. 33 落込み 出土遺物 (1)

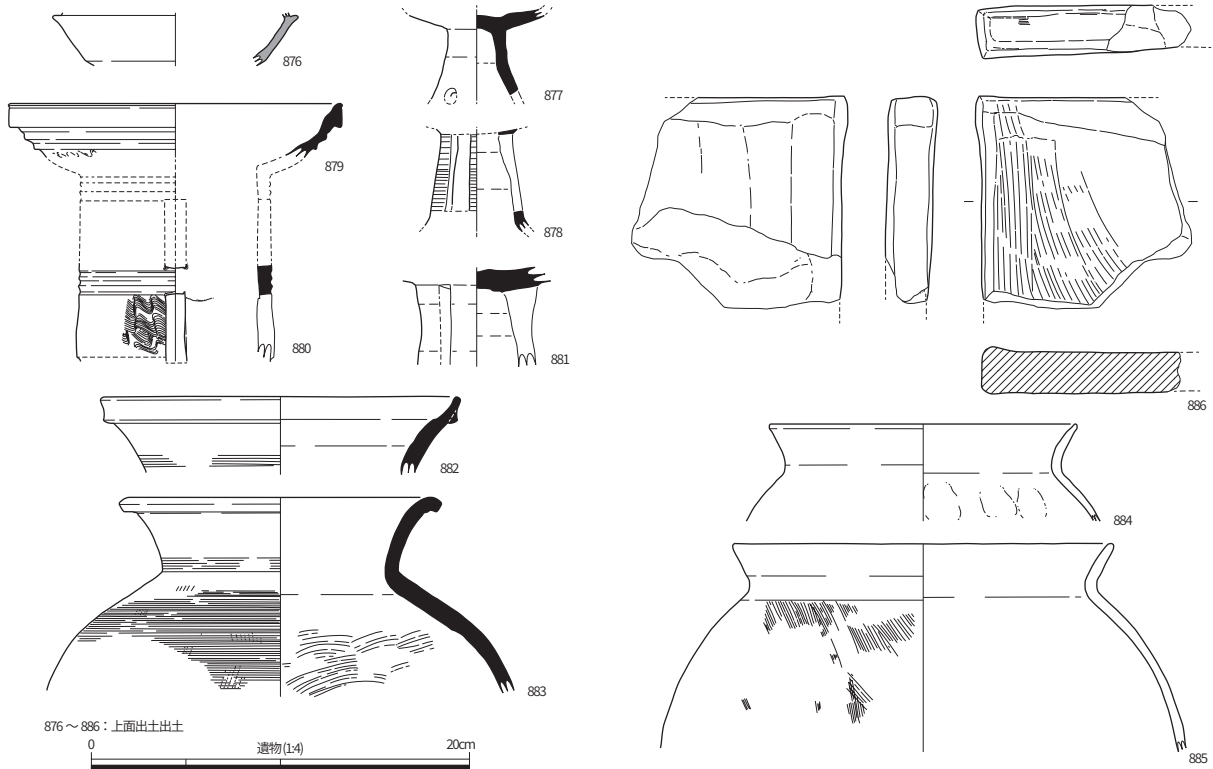


図 143. 33 落込み 出土遺物 (2)

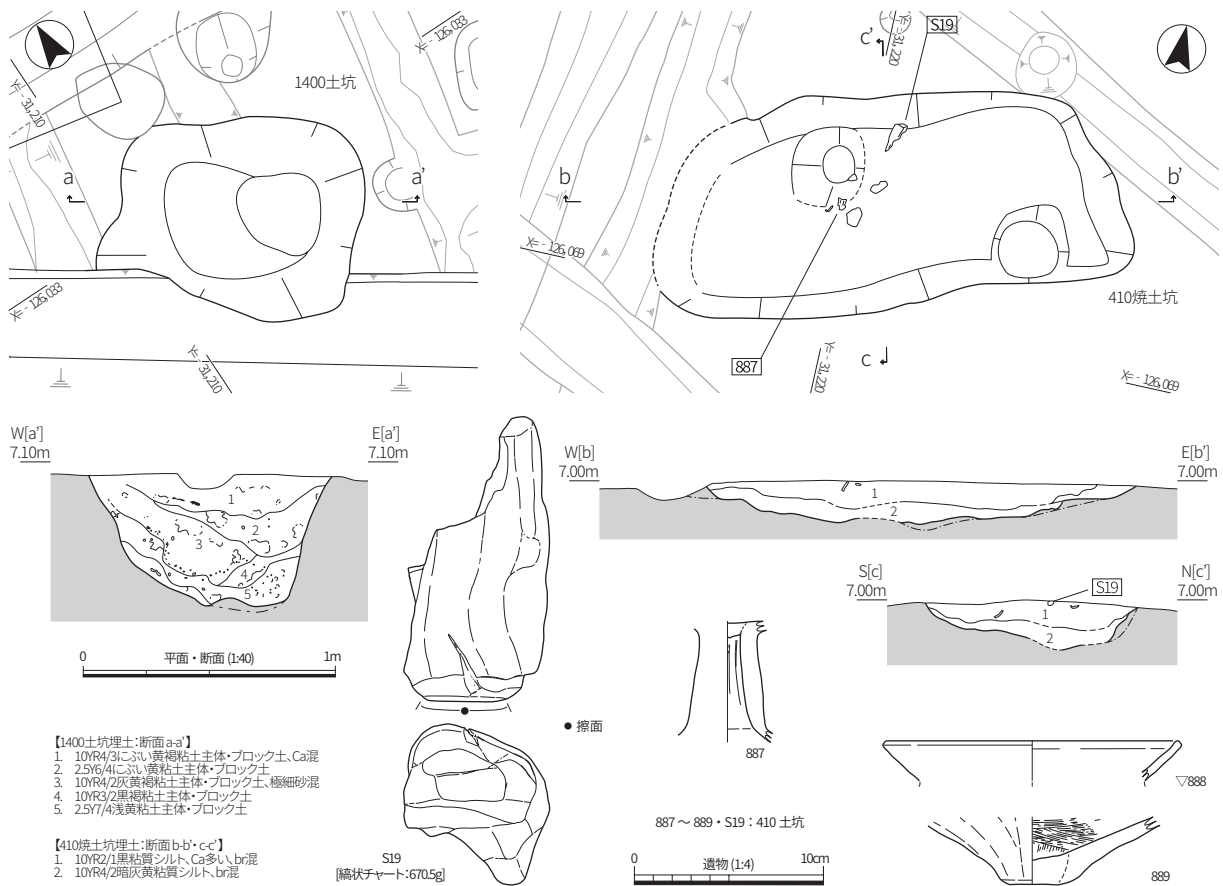


図 144. 1400 土坑、410 土坑 平面・断面・出土遺物

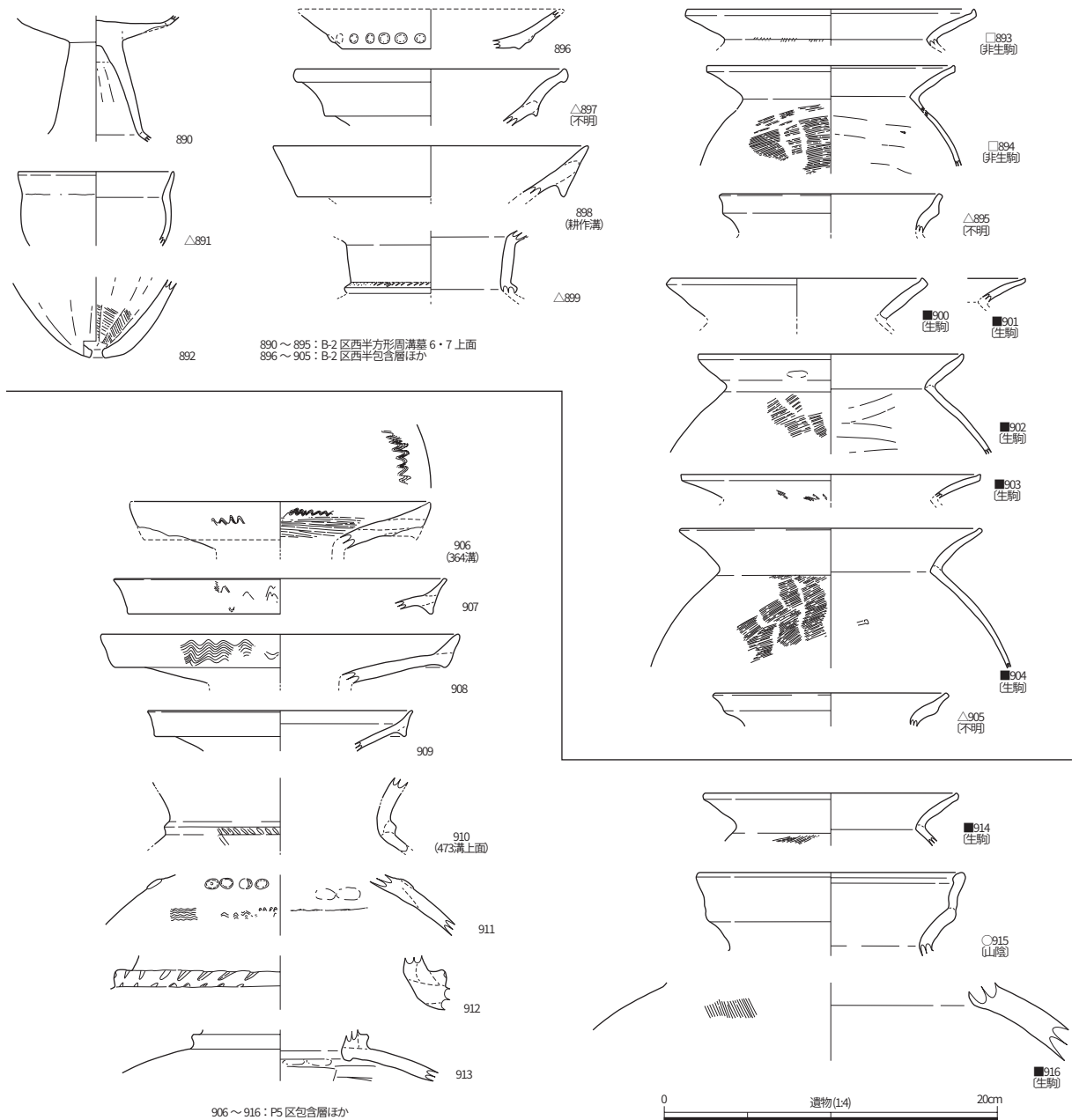


図 145. 西側エリア 微高地 B-1 包含層ほか 出土遺物 (1) [古墳時代初頭・前期ほか]

ているが、遺構の機能や性格等は不明である。埋土からは、遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、瓦器等を含まない点を踏まえると、古墳時代以前の遺構である可能性が高い。

**410 焼土坑** (図 143) 堅穴建物9の東4mに位置する長方形の土坑で、長辺2.5m、短辺1.1m、深さ0.23mをはかる。埋土は、上半が焼土で充填されているのが特徴で、古式土師器や石製品が少量出土している。土師器には、布留系甕の口縁部片(888)や平底の大型壺の底部片(889)などがあり、布留式古段階以前に位置づけることができる。石製品では、チャートの棒状の磨石(S19)が出土している。遺構の性格は明確でないが、居住域の中心にあり、隣接する堅穴建物9や堅穴建物7とも時期が近いと見られるため、建物遺構との関連が注目される。

**包含層ほか出土遺物** (図 144・145) 微高地 B1 は、今回の調査地点で最も標高が高いことから、微高地頂部付近を中心に基盤層〔第8層〕が削平されており、包含層〔第5・6層〕が残存する範囲は主に



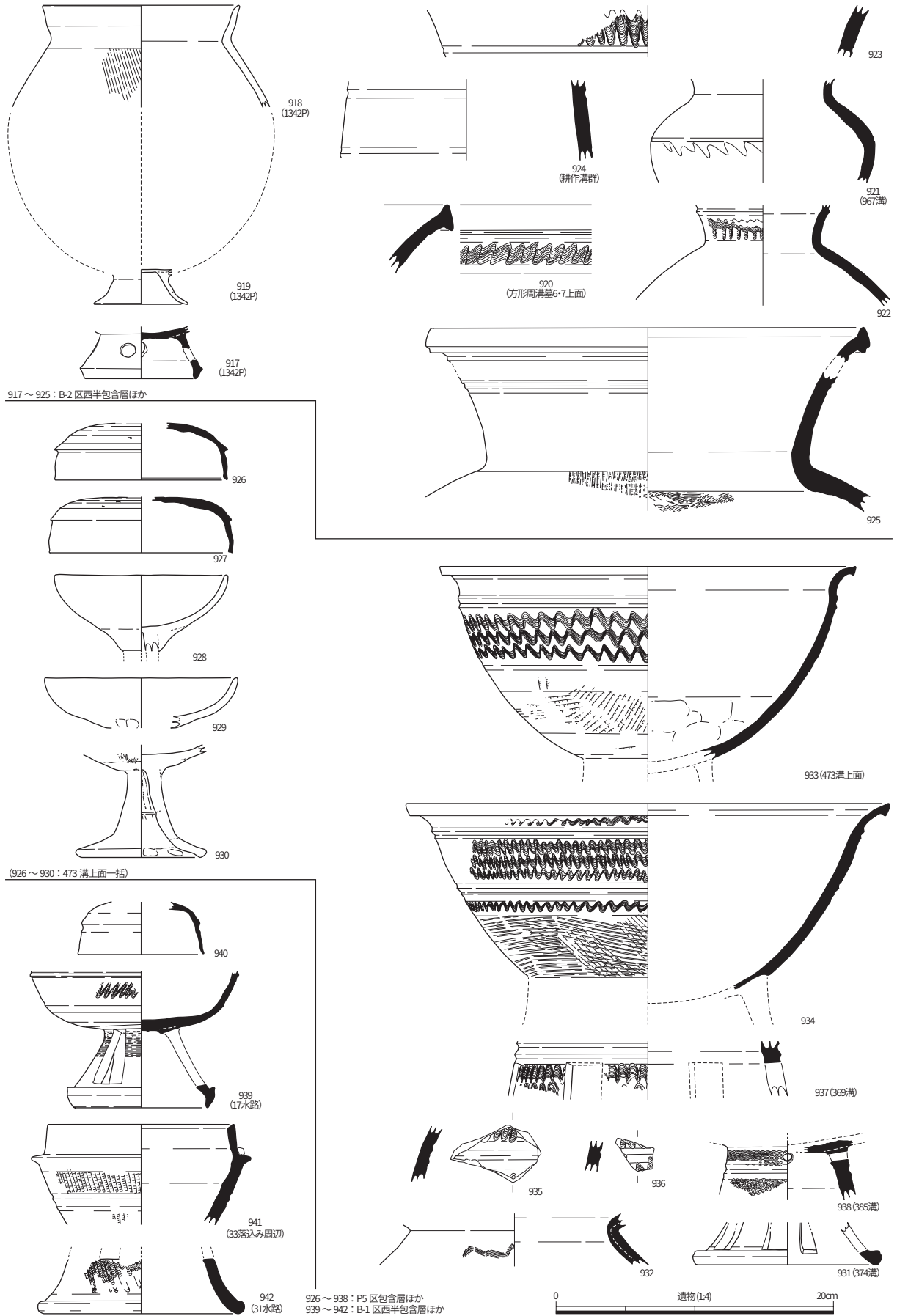


図 146. 西側エリア 微高地 B-1 包含層ほか 出土遺物 (2) (古墳時代中期・後期)

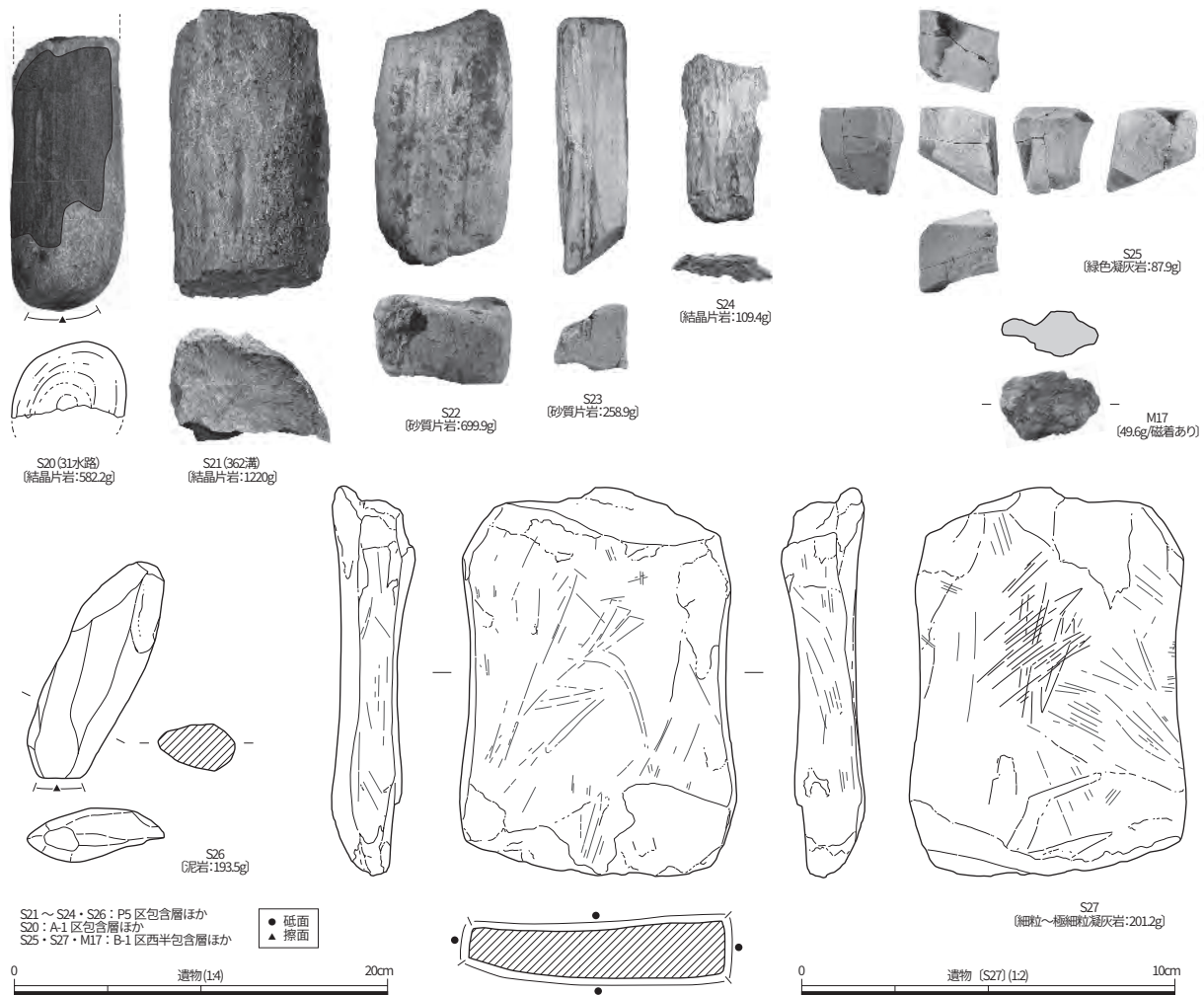


図 147. 西側エリア 微高地 B-1 包含層ほか 出土遺物 (3) (石製品)

東側斜面地に限られる。このため遺物の出土量が極端に多いというわけではないが、後世の遺構埋土出土のものも含めて、特徴的な遺物が多く出土する傾向にある。

特に古式土師器では、加飾壺出土が一定量みられるのが特徴で (896～899、906～913)、ほかの地点に比べて出土量が明らかに多いことから、微高地Bの居住域の性格を考える上で重要な所見となる。ほかでは、外来系土器の出土比率も高い傾向にあり (893～905、914～916)、特に北側 B-2 区西半では生駒西麓産の庄内形甕がまとまって出土している。さらに中期においても、器台や装飾付須恵器の出土が一定量あり、P5 区では TK216 型式頃の高杯形器台の大ぶりの破片が 2 個体分出土している。ほかにも脚部や杯部の破片が数点ずつあり、ほかの地点ではほぼ出土がみられないことから、偏在性を指摘できる。装飾付須恵器のうち、脚付壺の破片とみられる (941・942) は 6 世紀に下る可能性が高く、出土地点から 33 落込みとの関連が推測できる。

土器以外の遺物では、片岩類 (S20～24) と緑色凝灰岩 (S27) といった搬入礫の存在が重要である。片岩類は、潰石または磨石の可能性のある (S20) を除くと、用途は不明であるが、石室石材に使用するような板状石材ではないため、なんらかの利器として持ち込まれた可能性が高い。緑色凝灰岩 (S25) は、玉類や石製腕飾類の素材となる搬入礫で、竪穴建物 11 出土の管玉 (S16) や、隣接する井尻遺跡出土の石釧の存在をふまえれば、この付近で玉類の生産がおこなわれた可能性が高い。ほかでは、入念に使い込んだ板状砥石 (S27) や磨石 (S26)、鉄滓 (M17) などがある。古式土師器の加飾壺や中期の

須恵器器台の偏在、搬入礫の出土といった土器組成と石製品の組成が特徴的な様相をふまえると、微高地 B1 は上牧遺跡の古墳時代集落の中でも特殊かつ中核的な居住域であったことは確実視でき、上牧遺跡の集落遺跡の構造を考える上でも重要な所見となるだろう。

#### 〔d. 微高地 B2 (東半北側) の遺構・遺物：B-2 区東半〕 (図 148)

建物遺構 13 棟、大型土坑 1 基などが検出された。建物遺構の内訳は、竪穴建物 8 棟と掘立柱建物 5 棟で、ほかの地点よりも掘立柱建物の数が多い。取水遺構と推測される 971 大型土坑は、微高地上で検出されているが、そのほかの取水遺構がいずれも微高地縁辺部で検出されている点をふまえると、立地がやや特異といえる。この大型土坑を境に遺構の検出状況が異なっており、東側の微高地 B2 の先端部では柱穴が密集している。約 200 m<sup>2</sup>の範囲で古墳時代とみられる柱穴が約 300 基検出されており、建物の多くがこの付近で検出されているが、柱穴数と検出状況を鑑みると、掘立柱建物の数はさらに多かったものとみられる。

**掘立柱建物 22** (図 149) B-2 区中央付近、竪穴建物 34 の東 7 m に位置し、建物南東の柱穴が竪穴建物 60 と一部重複する。2 間×2 間の構造で、規模は 3.8 × 3.8 m、面積 14 m<sup>2</sup>をはかる。建物の南北軸は、3.2°西に傾く。西側南北方向を除くと、柱筋の通りは概ね良く、柱間間隔は 1.65 ~ 1.8 mにおさまる。柱穴の平面形は、円形または隅丸方形に近い形状で、検出面の大きさは 0.45 ~ 0.6 mで、柱痕や柱あたりが残るものが多い。検出面からの深さは 0.25 ~ 0.35 mをはかり、底面の標高は T.P.+6.66 ~ 6.52 mの間に概ねおさまる。埋土断面や柱あたりから、柱の太さは 0.15 m程度に復元される。柱掘方埋土は、ブロック混じりの黒褐シルトを主体とする。1151P・1153P・1200Pからは、土師器・須恵器の細片が少量出土している (943 ~ 946)。精製の椀形高杯 (943) や脚台付製塩土器の可能性がある (944) など、前期に遡る遺物も含まれるが、1200P 出土の TK208 型式の杯身 (946) から、建物の時期は中期中葉以降と判断することができる。

**竪穴建物 60・1179 土坑** (図 150・151) 掘立柱建物 22 の南東隣接地に位置し、部分的に重複する。また南東 5 mには、971 大型土坑が位置する。建物の東端部分や北西部分は、中世以降の耕作によって大きく削平を受けており、さらに南東部分は 1198 土坑や北東部分の 976 土坑などといった古代や古墳時代中期の掘り込みが重複するなど、上面が攪乱を受けている。L 字形にめぐる 1156 溝については、方形周溝墓の周溝の可能性を想定しながら調査を進めたが、溝が想定よりも浅く、内側で支柱穴とみられる深さのある柱穴が確認されたため、建物遺構と判断するに至った。

規模は東西 6.2 m、南北 5.7 m以上で、建物規模は相対的に大きい部類に入る。L 字状にめぐる建物の内側溝は、幅約 1 m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.15 mをはかる。ただし北西部分は、上面が攪乱を受けていたため肩部の輪郭が不明瞭で、やや幅広になっている。埋土は、ブロック土を主体としており、掘削後は人為的に埋められたことがわかる。1156 溝の内部に位置する柱穴のうち、1229P・1158P・1240P が支柱穴と推測でき、いずれも検出面からの深さは 0.45 mをはかる。

上述したように南東・北西部分に掘り込みがあり、周溝上面や 1198 土坑からは TK73 ~ 208 型式頃の土師器・須恵器 (947 ~ 950) が一定量出土している。後述する 1156 溝に伴う遺物とは時期がかけ離れており、この建物に直接関わる遺物ではないが、高杯形器台 (950) は圏線突帯の突出度合いも含めて全体的にシャープなつくりの優品である。文様帯が 4 段あり、最下部に櫛描刺突文が施される点などから TK73 型式以前と判断できる。高槻市内出土の須恵器の器台の中でも、岡本山 A3 号墳<sup>24)</sup>と並ぶ最

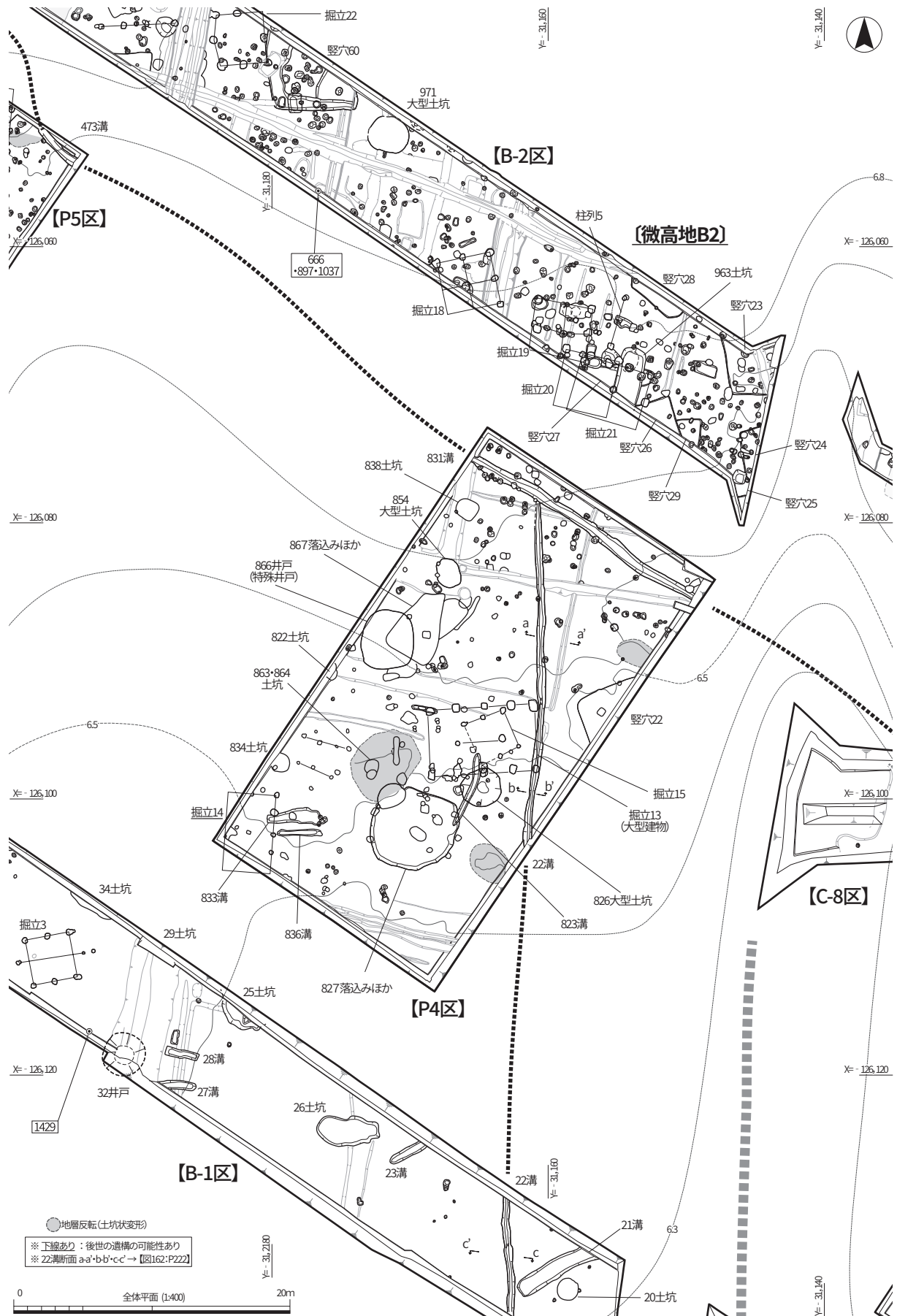


図 148. 西側エリア・微高地B東半 古墳時代遺構 全体平面図



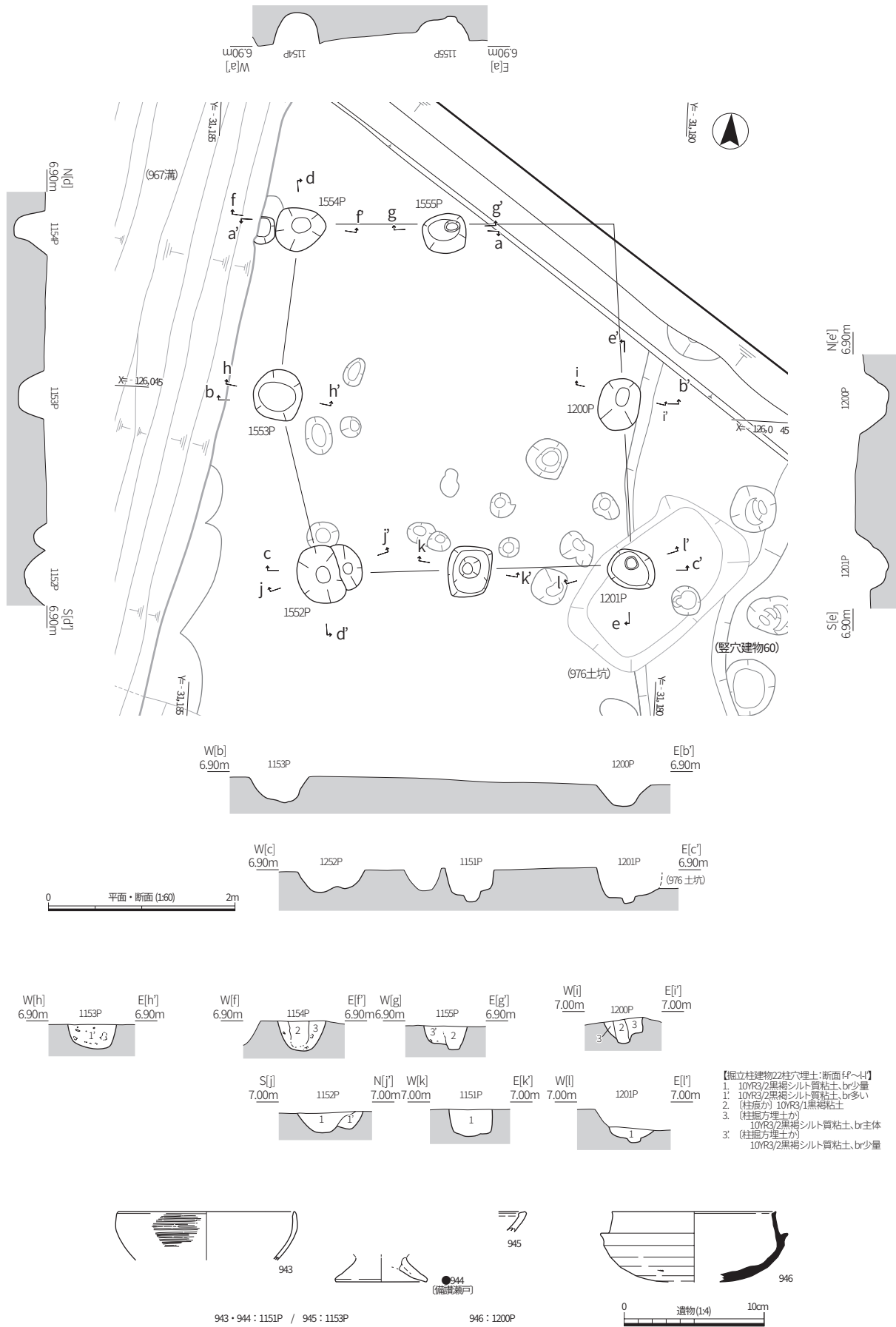


図 149. 掘立柱建物 22 平面・断面・出土遺物

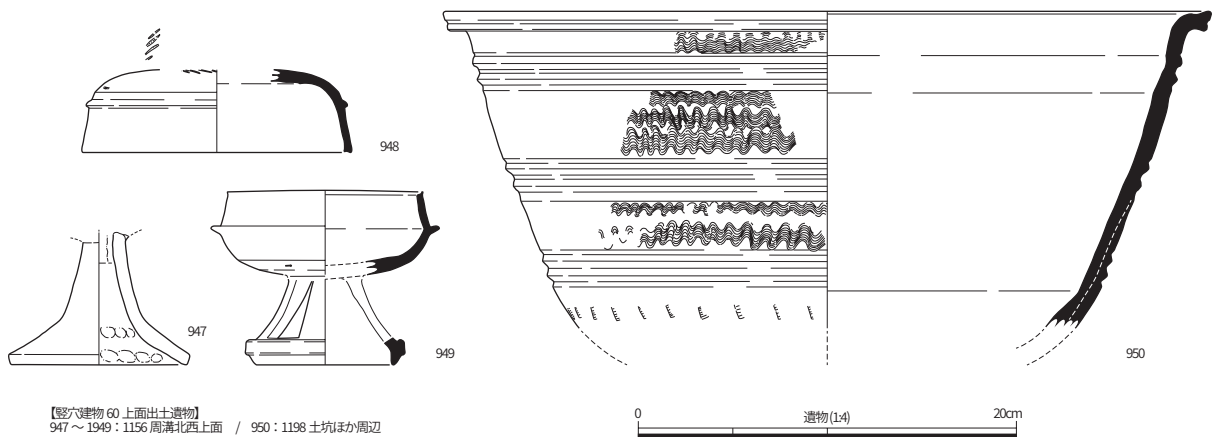
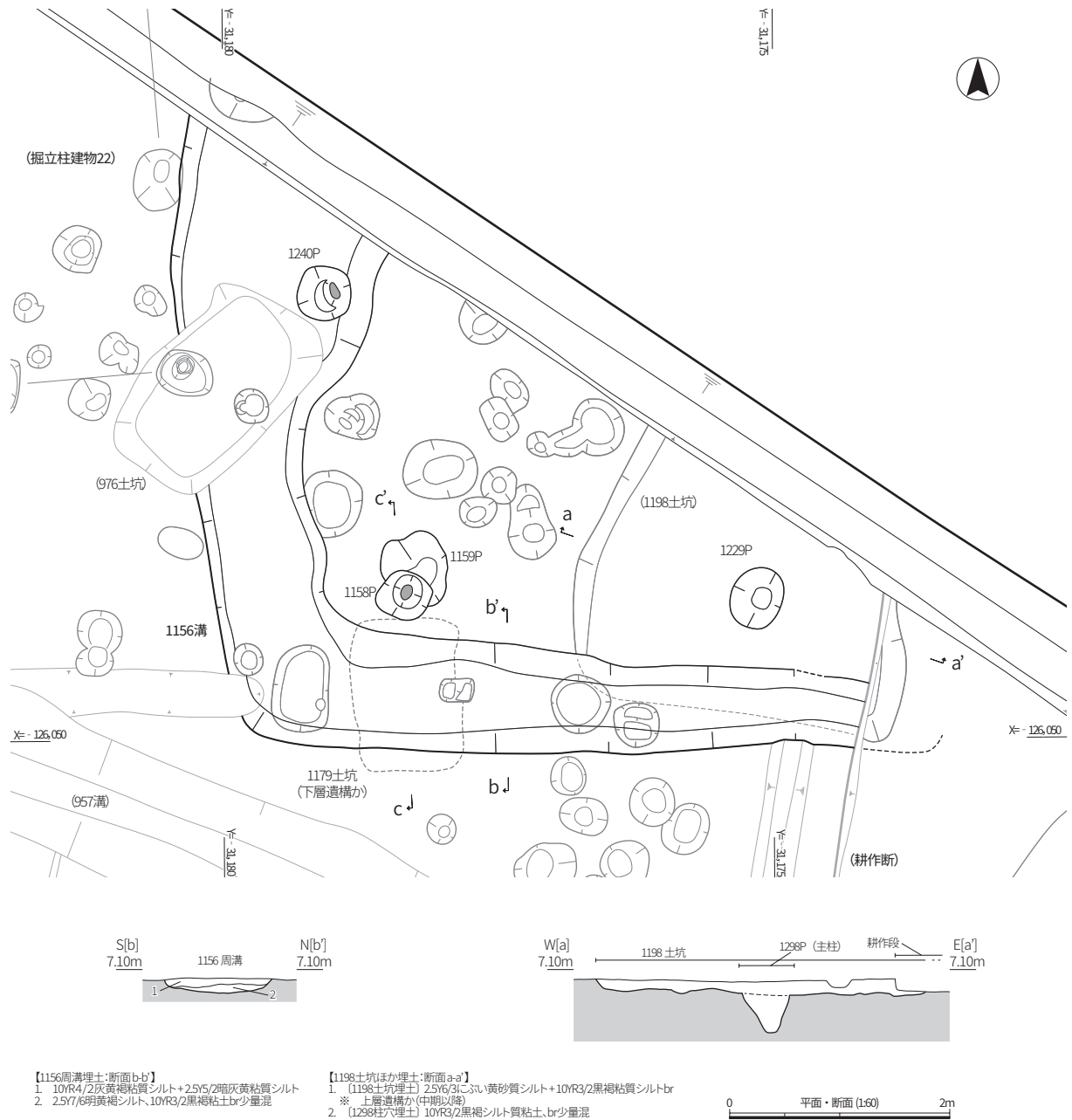


図 150. 竪穴建物 60 平面・断面・出土遺物 (1)

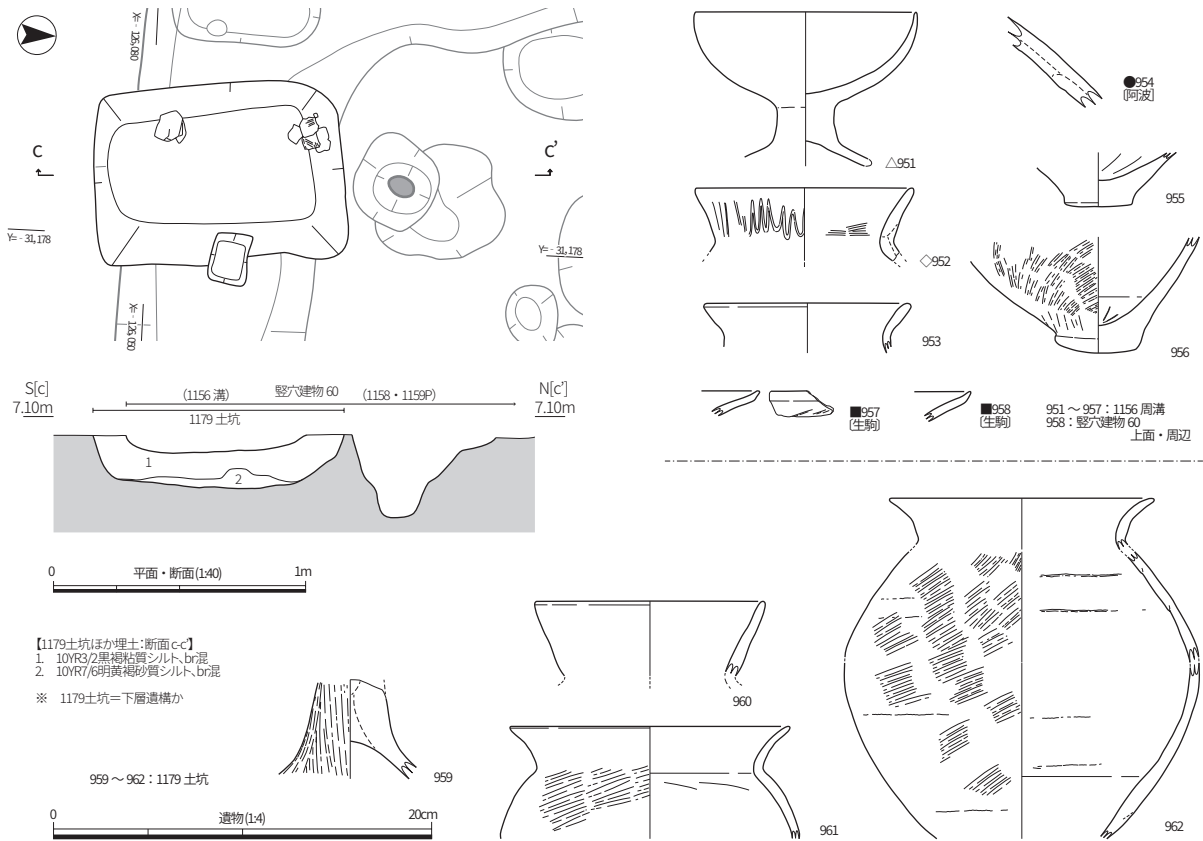


図 151. 竪穴建物 60 平面・断面・出土遺物 (2)

古級の資料であり、天井部に刺突のある蓋 (948) も含めて初期須恵器がややまとまって出土する点は注目される。

1156 溝埋土出土の遺物が、竪穴建物 60 に直接伴う遺物と認識でき、精製の椀形高杯 (951) や中型の短頸直口壺 (952・953)、V 様式系の平底底部 (955・956)、生駒西麓産の庄内甕口縁部 (957・958)、阿波産の壺肩部 (954) などがある。細片ながらも阿波の搬入品が含まれる点が特筆され、広口短頸壺の口縁部のタテ方向に波状に施された細筋ミガキなどもやや珍しい器種である。明瞭な平底の V 様式系底部と生駒西麓産の庄内形が共伴する組成から、時期については庄内式中段階頃に比定できる。

なお 1156 溝の下部では、規模  $1.3 \times 1.0 \text{ m}$ 、深さ  $0.28 \text{ m}$  の方形の 1179 土坑が検出された。部分的に周溝の外側に拡がるため先行する下層遺構と認識でき、埋土からは高杯脚部 (959) や中型の短頸直口壺 (960)、分割成形の V 様式系甕 (961・962) などが出土している。これらは庄内式古～中段階頃に比定でき、上面の 1156 溝にやや先行するため、遺構の先後関係に矛盾はない。

**掘立柱建物 18** (図 152) 971 大型土坑の南東 10 m に位置する。この掘立柱建物 18 を境に北西側では遺構がやや希薄となるが、東側には掘立柱建物 19・20・21 などが位置し、柱穴が密集している。南東側が中世の 631 水路と重複するため、上部が削平を受けているが、下部は良好に残存しており、建物の全体の構造が概ね復元できる。2 間  $\times$  2 間の総柱建物と推測され、規模は南北  $3.9 \text{ m}$   $\times$  東西  $4.0 \text{ m}$ 、面積  $15.6 \text{ m}^2$  をはかる。ただし南西側が調査区外に拡がるため、ひとまわり大きな構造となる可能性も残される。建物の南北軸は、 $12.3^\circ$  西に傾く。柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は  $1.9 \sim 2.1 \text{ m}$  におさまる。柱穴の平面形は、円形または隅丸方形で、上部が削平されているものを除くと検出面での大きさは  $0.5 \sim 0.6 \text{ m}$  をはかる。検出面からの深さは、最大  $0.57 \text{ m}$  で、隅柱がそのほかの柱穴より深い。底

面の標高は、隅柱で T.P.+6.35～6.45 m、中心・中間では T.P.+6.5～6.6 mである。柱掘方埋土は、ブロックが少量混じる黒褐シルトを主体とする。いずれも柱痕・柱あたりが明瞭に残っており、微高地高所部に位置する建物でありながら、北西の 1085P と北東の 1081P で柱材が残存していた。柱痕・柱あたりから、柱の太さは 0.15～0.2 m前後に復元される。

建物を構成する柱穴のうち、1082P・1084P・1085P から主に古墳時代前期以前の土師器の細片が出土している。631 溝と重複する 1082P 上面から出土した須恵器片 1 点出土は、混入の可能性が高い。図化した遺物（963～967）には、山陰からの搬入品とみられる竹管文を施す特異な壺頸部（964）や、生駒西麓産の庄内形甕の口縁部細片（965）などがある。遺物が少量かつ細片のみであるため詳細な時期比定は難しいが、庄内式新段階～布留式古段階頃と判断できる。なお、残存する柱根のうち比較的残りが良い 1085P の柱根（W7）は、残存長 18.2 cm、最大幅 6.7 cmをはかる。1081P の柱根は、かなり痩せていたため図化しておらず、残存する柱根サイズは残存長 13.2 cm、最大幅 6.6 cmをはかる。

**掘立柱建物 19**（図 153） 掘立柱建物 18 の南東 7 mに位置し、この掘立柱建物 19 の南東部分が掘立柱建物 20・21、竪穴建物 27 と重複する。付近一帯は、柱穴が密集しているため建物を構成する柱穴の組み合わせにやや検証の余地を残すが、掘立柱建物 19 としての建物は、2 間×2 間の総柱建物と推測される。南西端の柱穴が調査区外に位置するが、規模は南北 4.0 m×東西 4.0 m、面積 16.0 m<sup>2</sup>をはかり、建物の南北軸は 8.0°東に傾く。柱筋の通りは概ね良いが、中央東西方向の柱筋のみ通りがやや悪く、中央の 1029P は中心からややずれた位置にある。柱間寸法は、1.9～2.2 mにおさまる。柱穴の平面形は、円形または隅丸方形で、検出面での大きさは 0.5～0.6 mのものが多く、柱穴埋土は、ブロック混じり黒褐シルトを主体とする。柱あたりから、柱の太さは 0.15～0.2 m前後に復元される。なお中央の 1139P の南に隣接する 1131P は、埋土に炭・焼土が充填しておりやや特異な状況を呈する。建物を構成する柱ではないと思われるが、東側南北筋上に位置し関連する遺構の可能性もある。

柱穴埋土からは、主に古墳時代前期以前の土師器の細片が出土している。1138P と重複する 1061・1162P からは、布留式新段階の甕の口縁部片や須恵器片 1 点が出土しているが、切り合い関係が明確でないため、遺物に伴う可能性は低い。そのほかの柱穴は、重複する柱穴も含めていずれも古式土師器のみの出土であるため、建物の時期は前期以前と認識できる。図化した遺物は、1005P と 1228P から出土した阿波産の広口壺の口縁（968）、V 様式系のくの字甕の口縁部細片（969・970）があり、ほかでは、1228P からは生駒西麓産の甕の極細片が出土している。遺物が少量かつ細片のみであるため、詳細な時期比定は難しいが、建物の帰属時期は庄内式中段階～新段階頃と判断できる。

**掘立柱建物 20・21**（図 154） 掘立柱建物 19 の南東部分と隣接・重複する 2 棟の掘立柱建物 20・21 は、大部分が重複しており、これに加え竪穴建物 27 と 963 土坑が重複している。西側の掘立柱建物 20 が東西 2 間×南北 1 間以上、東側の掘立柱建物 21 が東西 3 間×南北 2 間以上の構造であるが、いずれも南側の大部分が調査区外に拡がっているため、詳細な規模・構造は不明である。現状での規模については、西側の掘立柱建物 20 は東西 4.0 m、東側の掘立柱建物 21 は東西 5.1 mをはかる。いずれも柱筋の通りは概ね良い。柱穴は、隅丸方形を呈するものが多く、現状はいずれも 0.5 m前後で、検出面からの深さは 0.35～0.45 mをはかる。埋土は、いずれも第 6 層に類似するブロック混じりの黒褐シルトを主体とする。

各柱穴から少量ながらも遺物が出土しており、掘立柱建物 20 の柱穴出土遺物は土師器の細片のみである。1202P から出土したくの字甕（972）と布留形甕（971・973）を図化しており、甕にバリエーショ



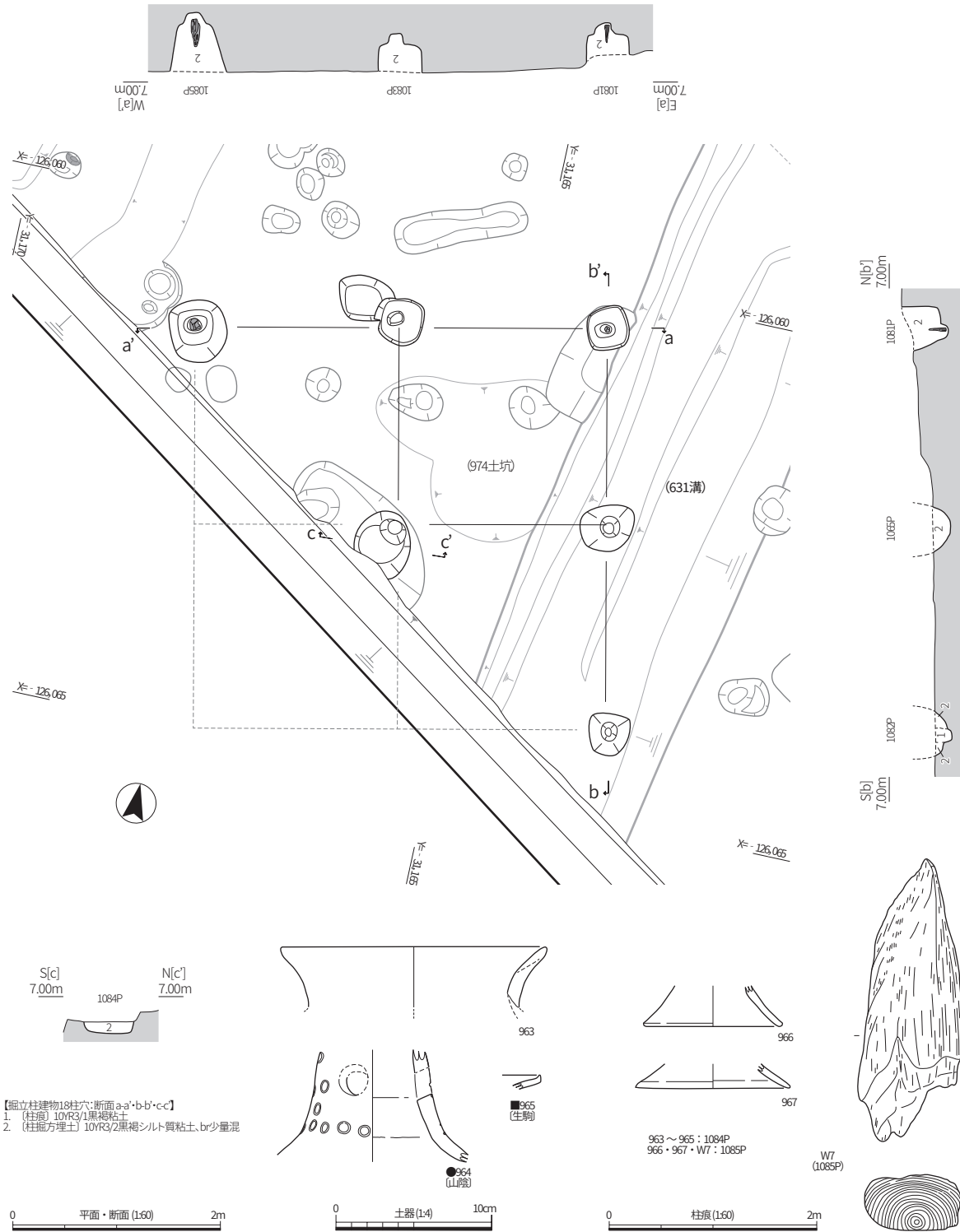


図 152. 掘立柱建物 18 平面・断面・出土遺物

ンがあるため、布留式古段階頃の帰属と判断できる。その一方で、掘立柱建物 21 を構成する 1035P と 1001P からは須恵器も出土しており、1001P から出土した杯身・杯蓋 (974・975) から、建物の時期は TK208 ~ 23 型式頃と判断できる。このことから、掘立柱建物 19 → 20 → 21 の順で推移したことがわかるが、掘立柱建物 20・21 の時期に隔たりがあるため、この間に重複する竪穴建物 27 が存在した可能性が推測できる。また掘立柱建物 21 と重複する 963 土坑は、後述するように掘立柱建物 21 と時期が近いと関係が問題となるが、建物の南北軸と土坑の南北軸が一致しており、関連する遺構の

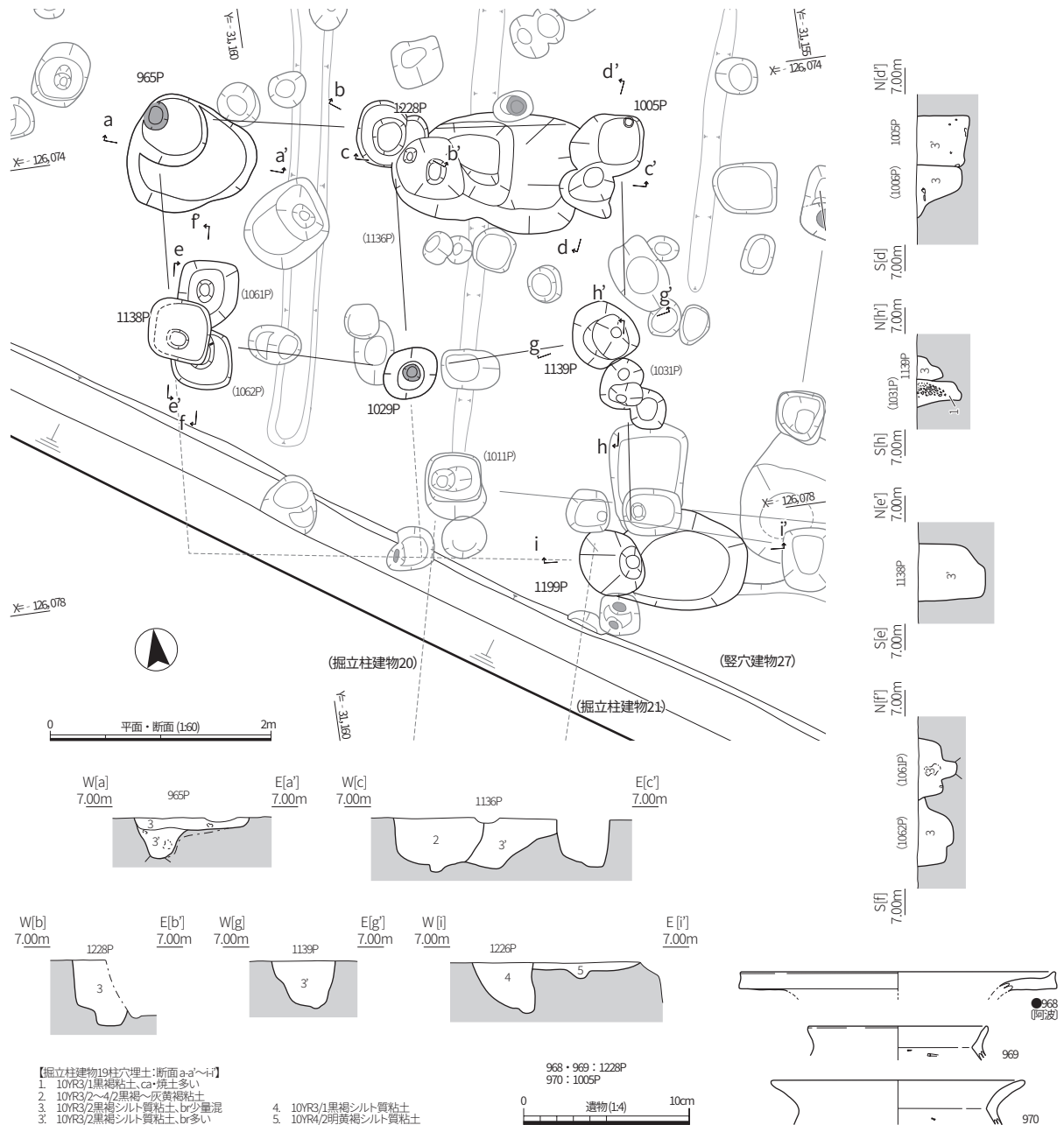


図 153. 掘立柱建物 19 平面・断面・出土遺物

可能性を検証する必要があるだろう。

**竪穴建物 23・24・25・26・27・28・29 ほか** (図 155・156) B-2 区東端では、竪穴建物とみられる方形の浅い掘り込みが多数検出されている。これらはいずれも部分的な検出に留まっているため、全体の形状が不明確で支柱穴も明瞭でないが、竪穴建物 24・竪穴建物 28 とした掘り込みは一辺 3.5～4 m 前後であるため、規模や形状から竪穴建物と判断した。いずれも上面が削平を受けているため、検出面からの深さは 0.05～0.15 m 程度で、埋土はいずれも第 6 層と類似する黒褐シルト質粘土を主体とする。竪穴建物 23・24 などでは、竪穴内で柱穴が一定数検出されており、竪穴建物 23 の 1182・1183P は支柱穴の可能性もある。これに加え、竪穴建物 25 の肩部に位置する 1181 土坑も竪穴建物となる可能性がある。

出土遺物は総じて少ないが、竪穴建物 29 以外は埋土もしくは竪穴建物内の柱穴から土師器の細片が

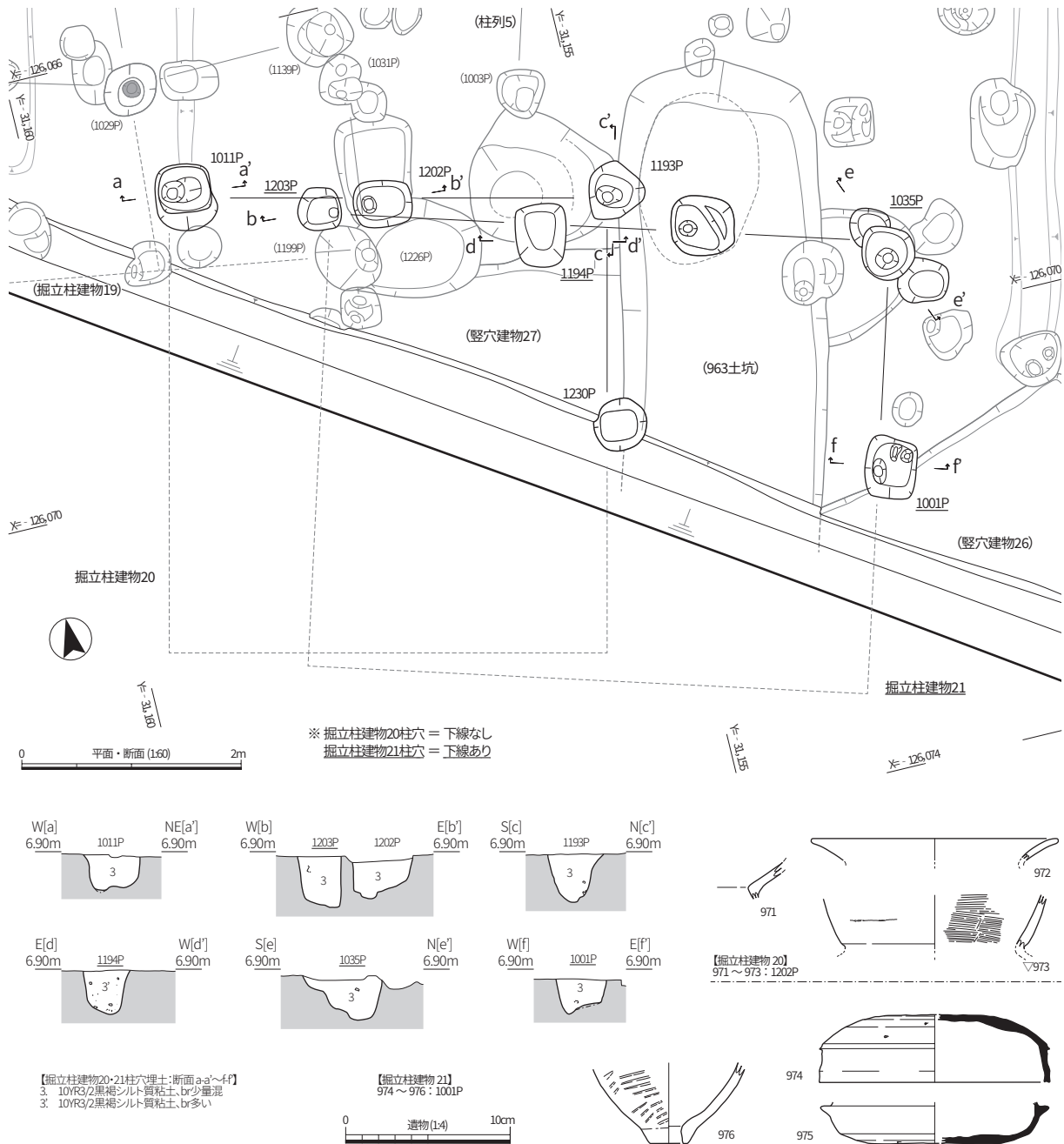


図 154. 掘立柱建物 20・21 平面・断面・出土遺物

出土している。このため時期が不明確なものが多いが、図化した竪穴建物 23 の (977・978)、竪穴建物 24 内 1187P の (979・980) はいずれも前期以前と判断できる。また、1180 土坑からも V 様式系の甕やハケ甕など古い時期の土師器細片が出土しており、やや根拠は弱いだが、前期以前に帰属するものが多いことが推測される。その一方で B-1 区南東端で検出された 1181 土坑からは、TK208 型式の杯蓋 (981) が出土している。かなり限定的な検出ながらも竪穴建物の可能性があるため、中期に下る建物の存在も念頭に置く必要がある。

**柱列 5** (図 154・155) 掘立柱建物 20・21、竪穴建物 27 の北 2 m に位置する。柱穴は 3 基のみであるが、一列に並び柱間隔と深さがほぼ揃うことから一連の遺構と判断した。柱列の長さは 3.7 m で、柱穴の深さは 0.4 m 前後である。各柱穴の埋土からは、土師器の細片が出土しているが、図化可能なものは

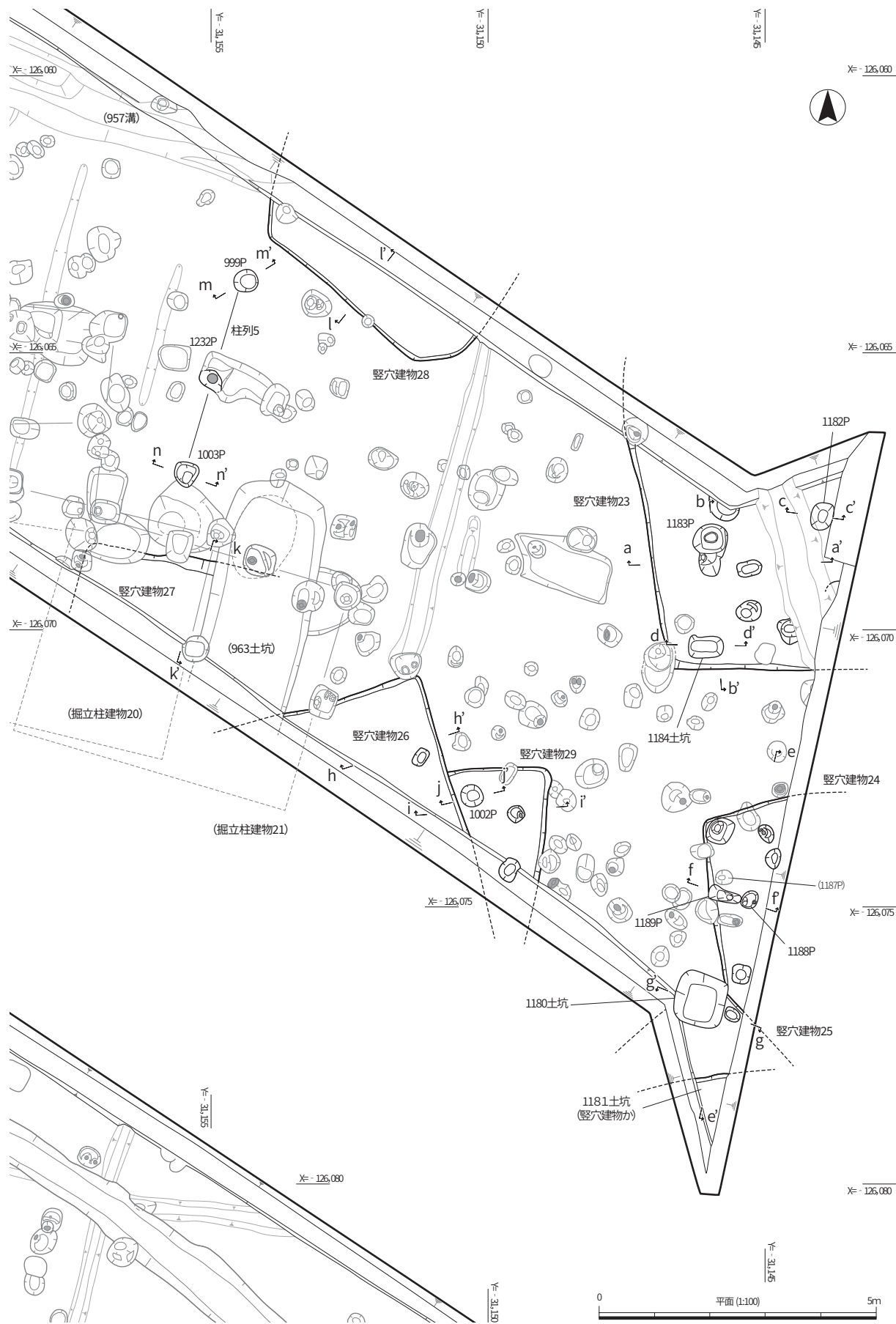


图 155. B-2 区東端 竖穴建物群 平面



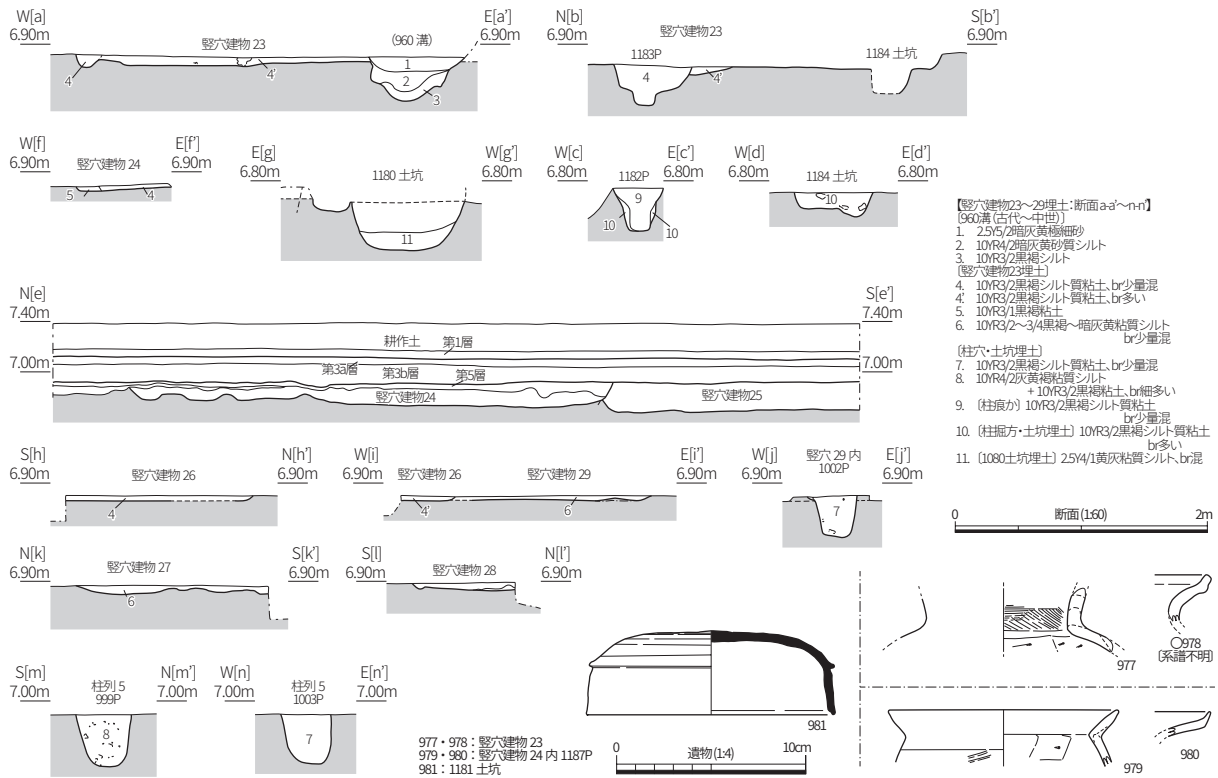


図 156. B-2 区東端 竪穴建物群 断面・出土遺物

なく、詳細な時期は不明である。なお、南に隣接する掘立柱建物 20 と軸が一致しているため、関連遺構の可能性はある。

**971 大型土坑** (図 157・158・159・160) 竪穴建物 60 の南東 6 m に位置する円形の大型土坑で、規模は径 2.9 m をはかる。検出面から底までの深さは 1.10 m で、埋土は上層〔埋土 1・2〕、中層〔埋土 3〕、下層〔埋土 4～8〕に大別できる。上層〔埋土 1〕は、灰黄褐砂質シルトを主体とし、〔埋土 2〕は、黒褐シルトを主体とする。〔埋土 1〕からは、中期～古代の遺物が僅かに出土しているが、上面の中世の耕作に伴う攪乱や隣接する古代の 957 溝からの混入によるものと推測される。〔埋土 2〕からは、復元率の高い遺物がまとまって出土しており、完形の甕や中型鉢などとともに体部最大径約 60 cm の大型複合口縁壺 (1002) の体部上半部分が逆さ向きの状態で投棄されていた。中層〔埋土 3〕は、上半が流入土、下半が黒褐シルトを主体とする滞水層で、下層〔埋土 4 以下〕は、粘土と砂が互層状に堆積している。このため、下層から中層にかけて流入と滞水を繰り返しながら下半部が埋没したのち、この大型土坑の廃絶時に遺物をまとまって投棄されたと判断できる。調査時には、底部からの積極的な湧水は認められなかったが、遺構の形状・規模から取水遺構、もしくは水溜遺構と認識できる。こうした取水関連遺構は、主に微高地の縁辺部で検出されているが、この 971 大型土坑については高所部に立地するため、類似するほかの遺構とは様相がやや異なる。

出土遺物は、出土層位から上層上半〔埋土 1: 図 158〕、上層〔埋土 2: 図 159・160〕、中層以下〔主に埋土 3: 図 160〕に大別できる。大半が〔埋土 2〕からの出土であり、上述したように復元率の高い遺物が多い点が注目される。その一方で、中層以下からの遺物の出土量は少ない。全体的な組成としては、中・大型の壺・甕類が一定量あるが、供膳具や小型器種が相対的に少ない。

上層上半出土の古式土師器は、破片資料が多い (982～1001)。このなかでは、高杯に小型品 (985)

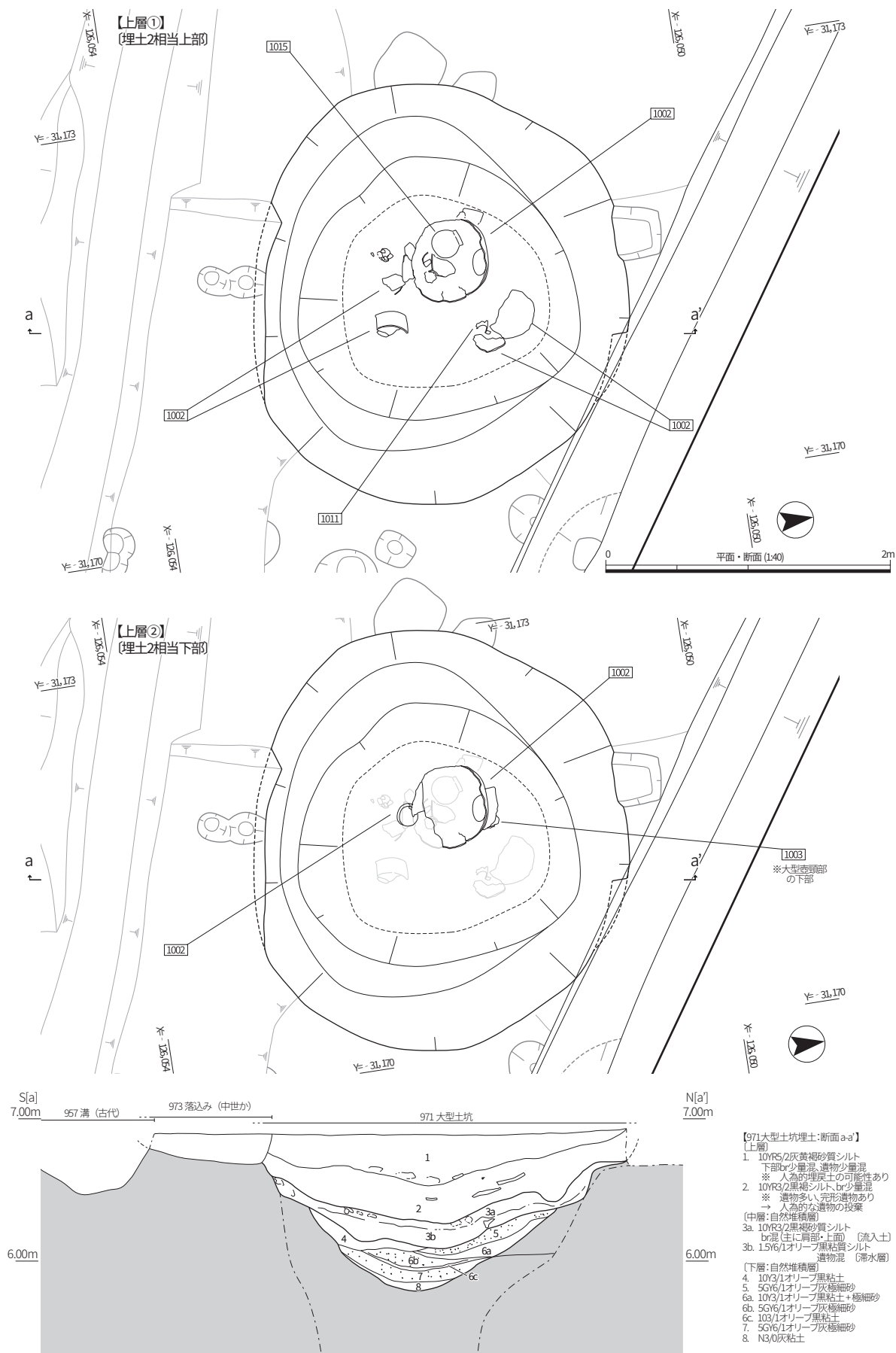


図 157. 971 大型土坑 平面・断面

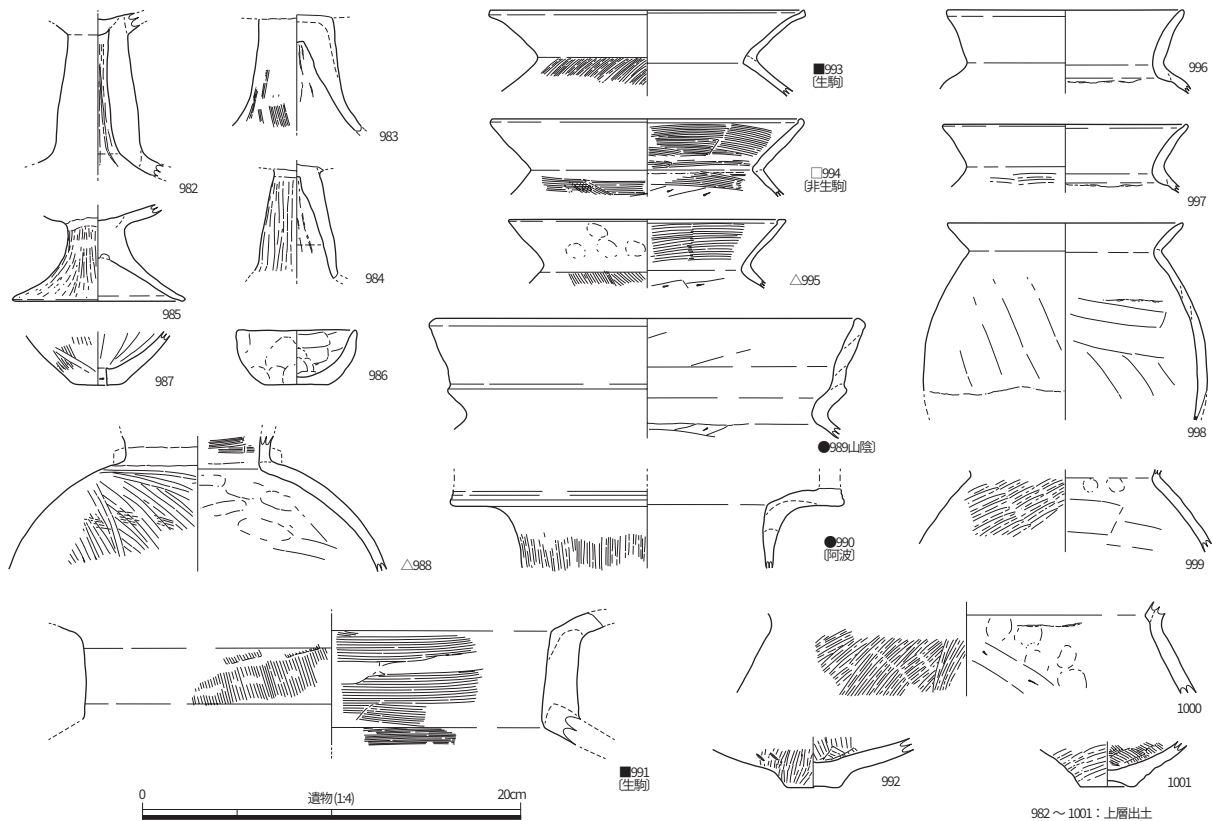


図 158. 971 大型土坑 出土遺物 (1)

が含まれる点や、壺類に山陰 (989)・阿波 (990)・生駒西麓産 (991) といった外来系土器が含まれる点の特徴といえる。生駒西麓産讃岐系大型複合壺 (991) については、〔埋土 2〕出土の (1002) とは別個体で、一次口縁が直立気味に立ち上がる。甕は、V 様式甕 (996 ~ 1001) と庄内形甕 (993・994)、布留形甕 (995) が共伴しており、庄内形甕は生駒西麓産 (993) と非生駒西麓産 (994) が混在している。

上層〔埋土 2〕出土の古式土師器は、上述したように復元率が高いものが多い (1002 ~ 1016)。やや厚手の A 系統の中型鉢 (1005) は完形で、口縁部が意図的に打欠きされている。ほかでは、精製の中型壺 (1004) は体部が完存している。大型壺には、直口壺と二重口縁壺がある。二重口縁壺 (1008) は、プロポーシオンから山陰系の可能性があるが、内面ケズリがなく、接合痕と指頭痕が明瞭な点が異なっているため、二次的な変容を受けた資料と推測される。これと内面調整が類似する直口壺 (1006) は、胎土が酷似しており、形式は異なるが同工品とみなしてよい。このほかに直口壺では、外面ハケ調整の C 系統の大型品 (1007) が含まれる。生駒西麓産の大型複合口縁壺 (1002) は、全体の 70% 程度の破片が残存しており、口縁部から底部まで復元図化ができる資料として注目できる。出土状況から、口縁部と体部下半が意図的に破砕された上で投棄されたと判断できる。形態的な特徴としては、一次口縁が頸部から外反しながらのびるタイプで、底部は小平底である。甕は、庄内形甕 (1012・1013) と布留形甕 (1011・1014) のほかに、外面ハケ調整の布留形甕の影響品 (1015) と口縁端部に擬凹線を施す系譜不明の搬入品 (1016) が含まれる。庄内形甕は、いずれも肩部までハケが及んでおり、口縁部が長く外面に接合痕がみられる (1012) は、山城からの搬入品とみられる<sup>25)</sup>。内面肩部にハケを施す (1013) については、生産地は不明で、布留形甕 (1011) も胎土などから周辺地域からの搬入品の可能性がある。

中層以下から出土した遺物は、全て破片資料で、出土量は少ない (1017 ~ 1022)。外面ハケ調整の

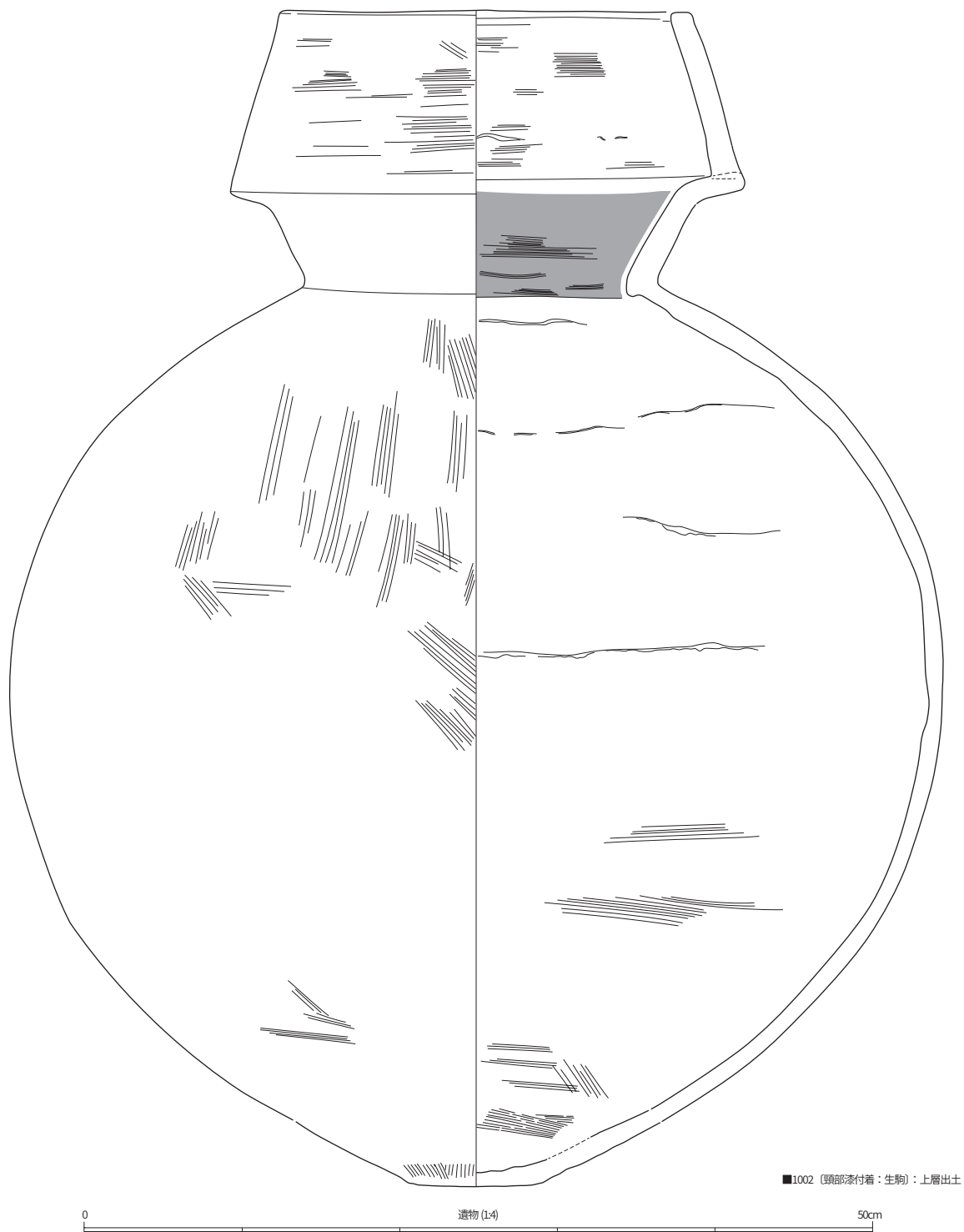


図 159. 971 大型土坑 出土遺物 (2)

小型丸底鉢 (1017) は、小型精製器種の在地模倣品で、小型壺 (1018) には内外面に赤色顔料が塗られた痕跡が残る。精製B系統の二重口縁壺 (1019) は搬入品と考えられ、外面タテミガキの小型器台脚部は、脚部がやや内湾し、穿孔が上位にあることから、東海～近江の系譜を引く可能性がある。布留形甕 (1021・1022) は、2点とも内面が肥厚して明瞭な面をもっており、肩部のヨコハケも確認できる。

時期については、中層以下出土遺物に布留形甕があり、上層とそれほど明確な時期差はないものとみられる。その上で各形式の組成などから判断する限り、布留式古段階新相～中段階古相頃に位置づける



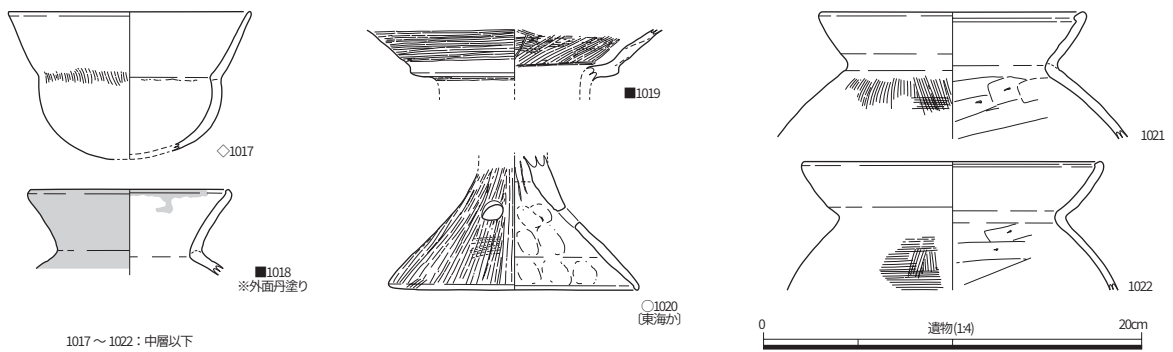
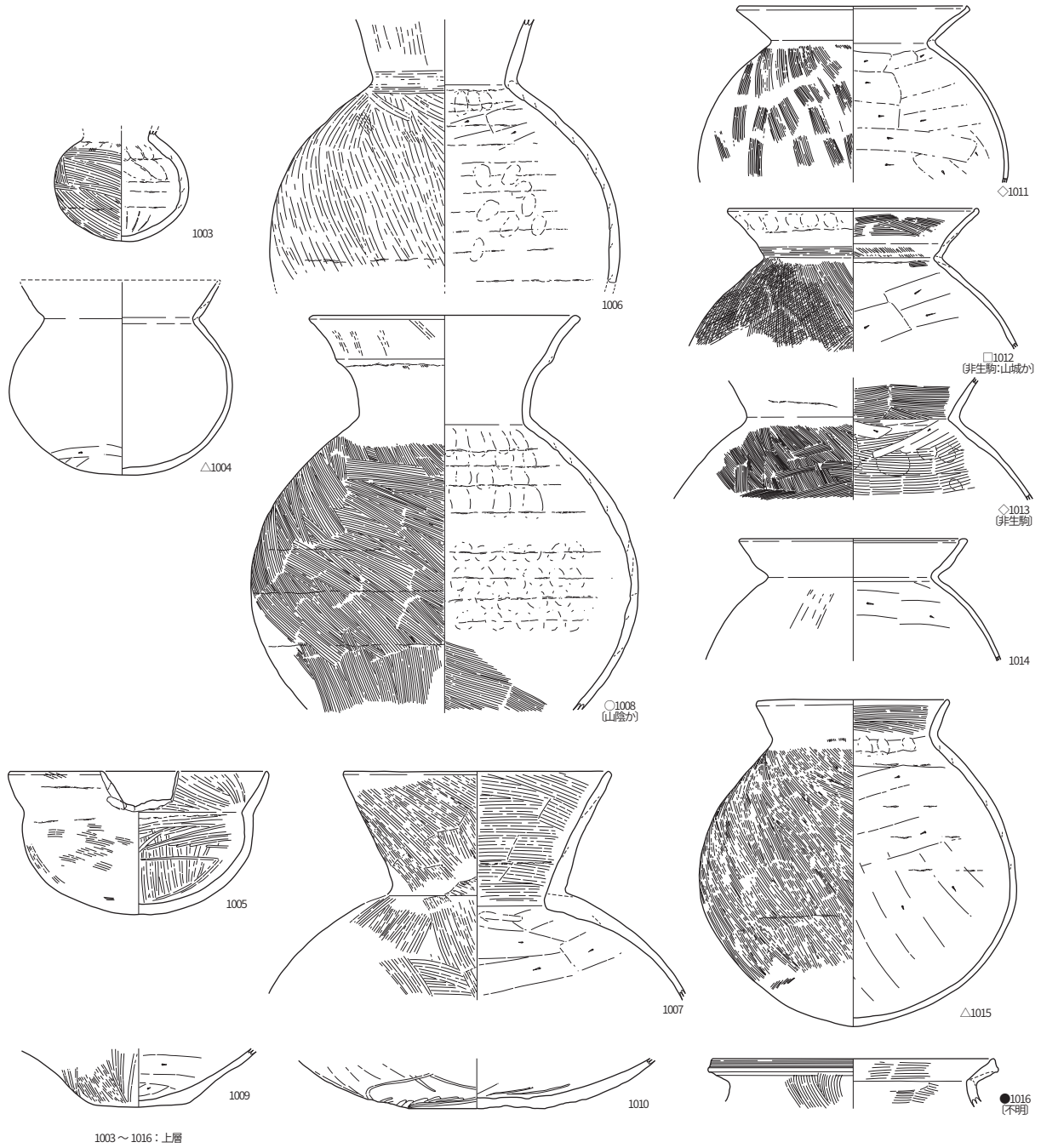


図 160. 971 大型土坑 出土遺物 (3)

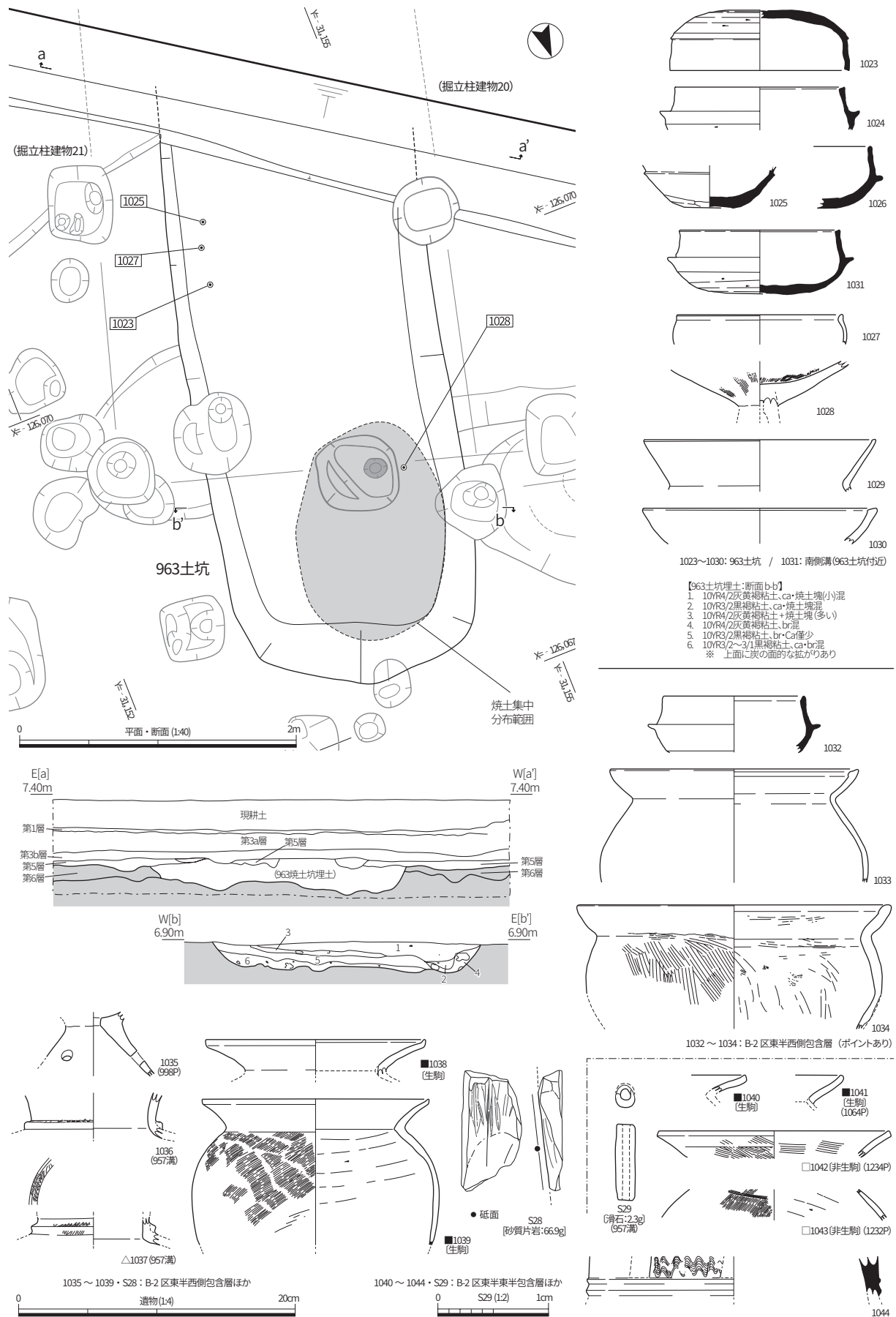


図 161. 963 土坑 平面・断面・出土遺物、西側エリア 微高地 B-2 包含層ほか 出土遺物

ことができる。P5区432土坑やB-1区32井戸上層の出土遺物と時期的にも様相に近いが、432土坑では甕の形式が布留形甕が主体であるため、この971大型土坑の出土遺物がやや先行し、布留式古段階新相に中心があると判断できる。その中でも上層〔埋土2〕から出土した遺物は、網羅的に各器種が揃うわけではないものの、壺類が豊富に出土する良好な一括資料であるため重要である。

**963土坑** (図161) B-2区東端に位置し、掘立柱建物20・21、竪穴建物27・26と重複する。南北に長い長方形の土坑で、調査区外南側にのびるため全体の形状は明確でない。検出長4.4m、幅1.9m、深さ0.27mをはかる。埋土には、炭化物や焼土等が充填しているのが特徴で、古墳時代中期の土師器・須恵器、土塊などが一定量出土した。須恵器の杯類(1023・1024・1026・1031)、把手付椀(1025)、土師器の高杯(1028)、杯(1027)、布留形甕(1029・1030)などがあり、須恵器はTK208型式頃、土師器は辻編年3段階頃に位置づけられる。重複する掘立柱建物21と時期が近いこと、前後関係などが問題となるが、建物軸と土坑の南北軸がほぼ一致しており、相互に関連する遺構の可能性も推測される。

**包含層ほか出土遺物** (図161) 微高地B2は、上面が中世以降の耕作によって削平を大きく受けており、B-2区東端付近を除くと大部分で第5・6層が削平されている。そのため復元率の高い遺物の出土は少ない傾向にあるが、古墳時代初頭～中期までの遺物があり、古式土師器では二重口縁壺や外来系土器も一定量出土している(1032～1044、S28・S29)。特に二重口縁壺(1036・1037)は、西側に出土が偏っており、微高地B1での出土傾向と関連するものとみてよい。ほかでは、庄内形甕の出土が一定量あり、(1039)は復元率が高い。中期以降では、TK47型式頃の杯身(1032)と布留形甕(1033)、布留系の鉢または鍋(1034)の3点が同一地点でまとまって出土している。このことは、本遺跡では中期末葉まで布留系の煮炊具が残ることを示す点で重要である。土器以外では、砂質片岩の砥石の断片(S28)が出土している。東側では、特徴的な遺物は少ないが、庄内形甕が一定量あり(1040～1043)、ほかに須恵器器台脚部(1044)と滑石製管玉(S29)を図化している。

#### 〔e. 微高地B縁辺部・低地部の遺構・遺物：B-1区・P4区〕 (図148)

建物遺構5棟のほかに、井戸2基と大型土坑や落込みなどが検出された。微高地縁辺部は、地形が低くなるため遺構の密度は徐々に低くなるが、その一方で包含層中から遺物の出土量は相対的に多く、さらに井戸や落込み等からは遺物が多量に出土している。南東側の低地部は、平坦な地形となっており、遺構は希薄である。建物遺構の内訳は、竪穴建物1棟と掘立柱建物4棟で、大型掘立柱建物13や独立棟持柱建物3などが含まれる。さらにこの2棟の建物には、遺物が多量に出土する井戸が隣接しており、関係性が注目される。地形的なまとまりを重視して、微高地B2の南縁にあたるP4区の遺構群、微高地B1の東縁と南東低地部のB-1区の遺構群の順に報告する。

**22溝** (図148・162) 西側エリア東端のP4区で検出された東西方向の831溝から派生して南北にのびる溝で、南側のB-1区にかけて検出された。検出長60m、幅0.6mをはかる。検出面からの深さは、0.25～0.35mで、溝の底面の標高は、断面a-a'付近でT.P+6.4m、断面b-b'付近でT.P+6.35m、断面c-c'付近でT.P+6.15mであるため、地形の傾斜に沿って北側から南側に傾斜していることがわかる。埋土は、暗色の泥質土を主体としており、恒常的な流水痕跡は認められない。

重複する遺構との切り合い関係については、十分に検証することができなかった。柱穴がいくつか溝と重複していたが、いずれも埋土は暗色の泥質土を主体とするなど類似しており、区別が付きにくい状

#### 第4章 遺構・遺物

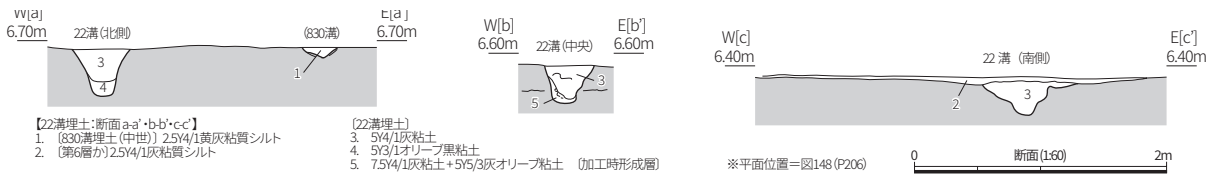


図 162. 22 溝 断面

況にあった。また、大型建物 13 に伴う 905P との関係も明確にできなかったが、柱穴は溝の埋土の完掘後に検出されたため、大型建物 13 よりも 22 溝が後出する可能性が推測される。埋土から出土した遺物については、前期以前とみられる土師器の細片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。遺物がごく少量のため詳細な時期比定が難しく、遺構の性格等も明確でないが、古墳時代の遺構の可能性が高く、831 溝と一連の遺構であることから集落内の排水を目的とした溝の可能性が推測される場所である。

**大型掘立柱建物 13** (図 163・164・165) P4 区のほぼ中央に位置する大型掘立柱建物で、掘立柱建物 15 や 826 大型土坑が重複する。微高地 B1 および B2 縁辺の低地部に立地しており、北西 10 m には 867 落込みと大型の 866 井戸が位置する。

建物の構造は、東西 4 間×南北 1 間で、東西に長い特徴がある。建物内部には、この建物長軸と揃う 2 基の柱穴 (910P・911P) があり、屋内棟持柱の可能性も想定できるが、深さが 0.14～0.25 m で側柱に比べて極端に浅いため、この建物に伴う柱穴であるかは判然としない。建物規模は、東西 7.6 m、南北 4.9 m、面積 37.2 m<sup>2</sup>をはかり、今回の調査で検出された建物の中で最も規模が大きい。建物の南北軸は、3.2°西に傾く。側柱は、全てではないものの南北間方向に長いものが多い。規模は南北 0.6～0.9 m、東西 0.6～0.7 m 前後のものが多い。検出面からの深さは、0.7～0.8 m 程度のもものがほとんどで、900P・903P・904P・906P では柱根が残存している。柱の太さは、残存する柱根と柱あたりから 0.3 m 前後に復元できる。また、柱穴埋土断面で抜き取り痕跡が確認できないため、建物廃絶時には柱穴の上部を切断する形で解体された可能性が高い。東西の柱筋の通りは極めて良く、柱根はいずれも建物の外側に偏る。さらに柱穴断面は、建物の内側は傾斜するのに対し、外側は垂直気味に立ち上がるといった特徴を備える。こうした柱穴は、近江湖南地域の下鈎遺跡や伊勢遺跡などで弥生時代後期後半頃の大型建物でよくみられ、大規模な柱を効率的に落とし込むためのものとされる。さらに近江湖南の大型建物は、<sup>26)</sup>梁間 1 間・桁行 4・5 間程度の規格性の高い平面構造を備えており、大型掘立柱建物 13 との平面形の類似性も指摘できるため、建物の系譜を考える上で重要である。なお近江の事例では、独立棟持柱や屋内棟持柱を備えるものも多いが、大型掘立柱建物 13 の屋内棟持柱の可能性のある 910P・911 は、上述したように側柱に比べて極端に浅いため、棟持柱が伴うか現状でははっきりしない<sup>27)</sup>。

柱穴埋土から出土した遺物は、全て古式土師器の細片で、911P を除く柱穴埋土から出土が確認されている。柱穴の抜き取り痕がないため、全ての遺物が建物の構築時に柱掘方埋土に入り込んだものと判断でき、建物の時期を直接示すため重要である。タテミガキの高杯口縁 (1045) や小型器台の脚部 (1047)、加飾壺二重口縁壺 (1051)、平底壺の底部 (1049) のほか、V 様式系の尖底の甕の底部 (1046) がある。甕の口縁部では、V 様式系のくの字甕 3 点 (1048・1050・1052) に、生駒西麓産庄内形甕の細片 1 点 (1053) が含まれる。時期については、典型的な布留式期の器種を含まない点と生駒西麓産庄内形甕を伴う点から、庄内式新段階頃に位置づけるのが妥当である。詳細は後述するが、近接する大型の 866 井戸がほぼ同時期の掘削と判断できるため、このふたつの遺構は古墳出現期の上牧遺跡の性格を考える上で特に



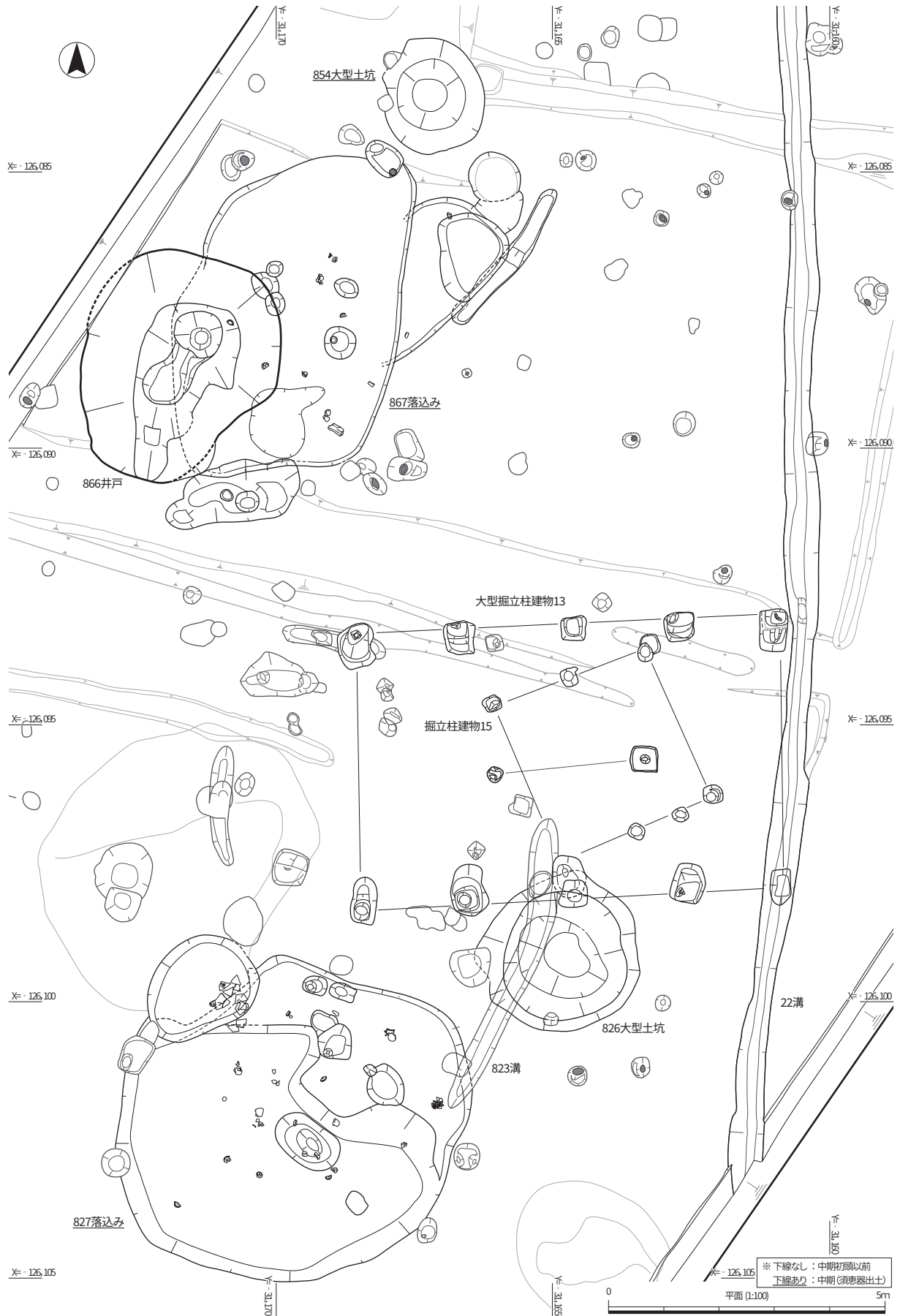


図 163. P4 区主要遺構 全体平面図

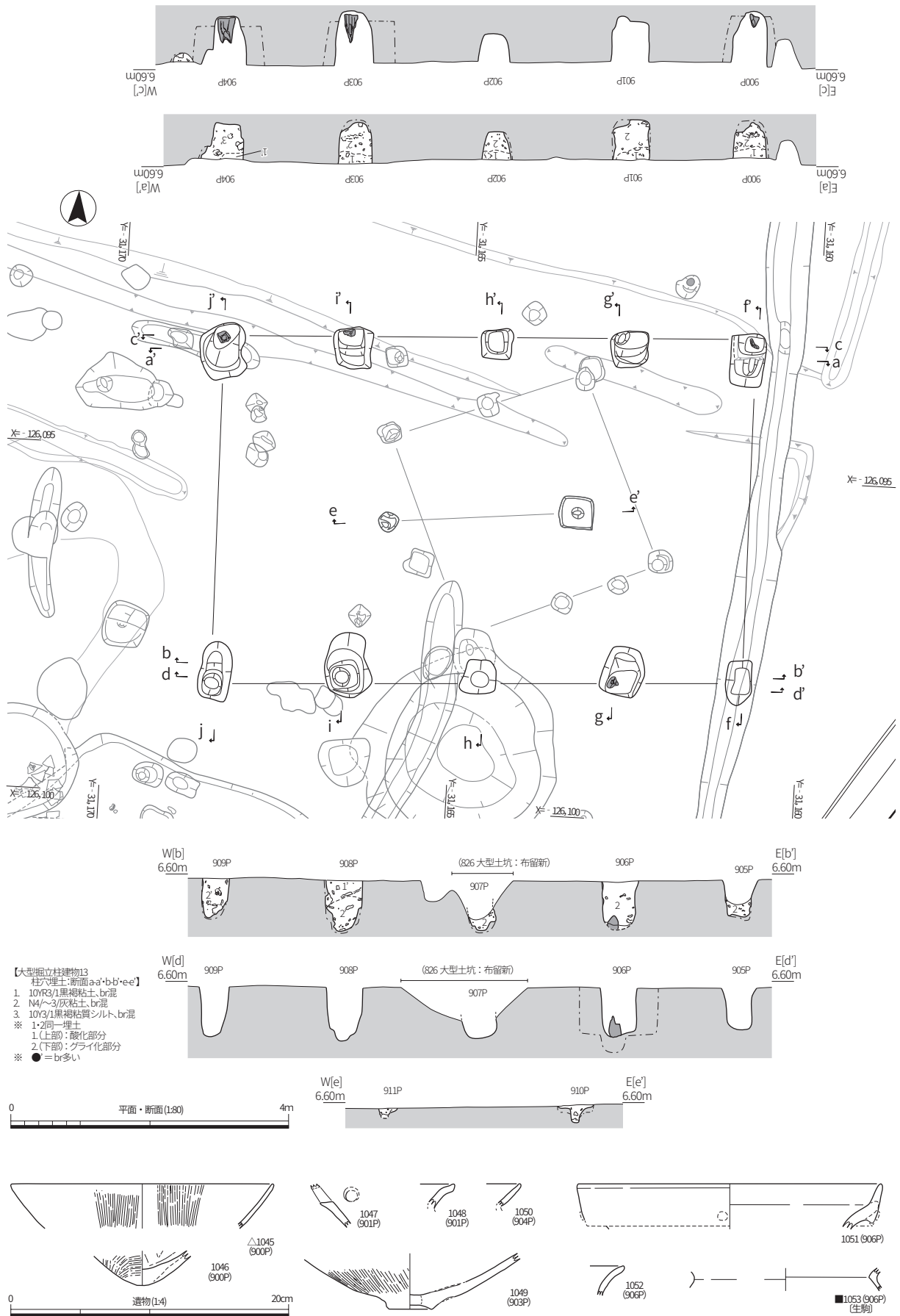


図 164. 大型掘立柱建物 13 平面・断面 (1)・出土遺物 (1)

大型掘立柱建物 13 規模・寸法

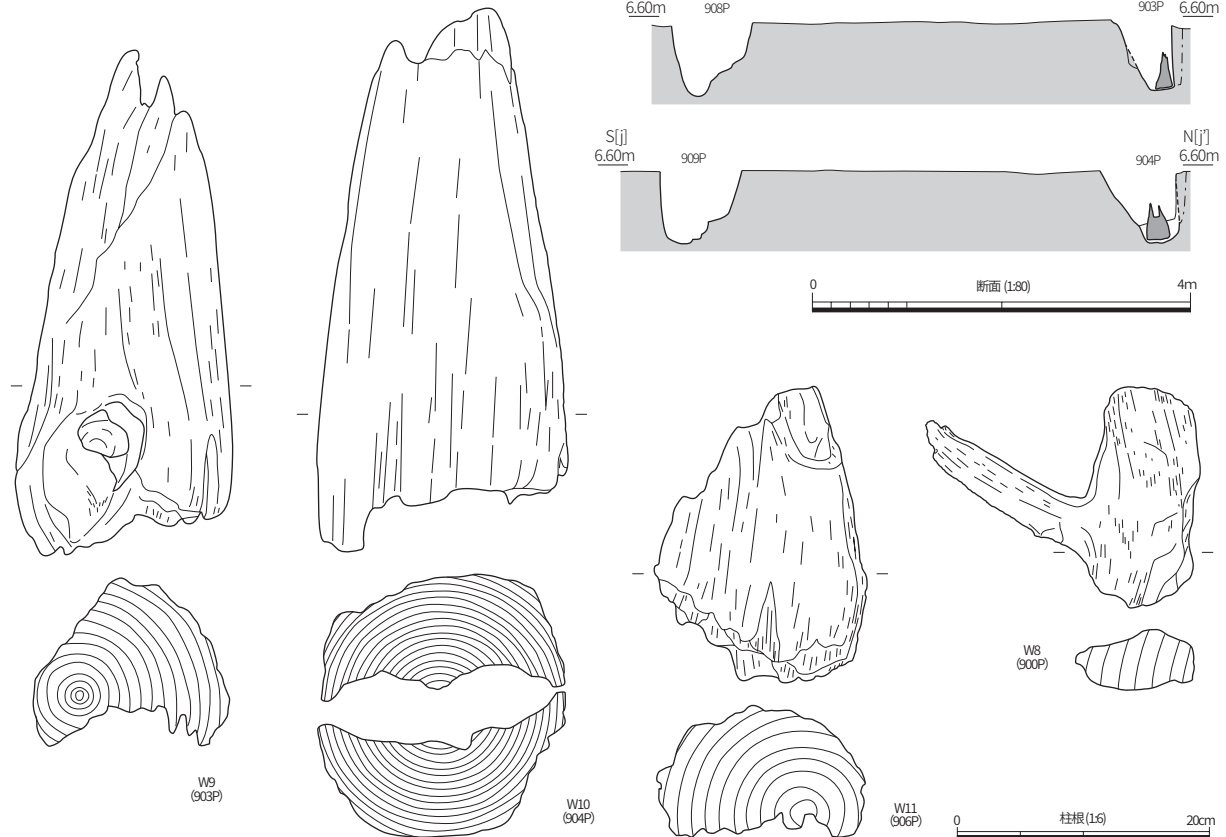
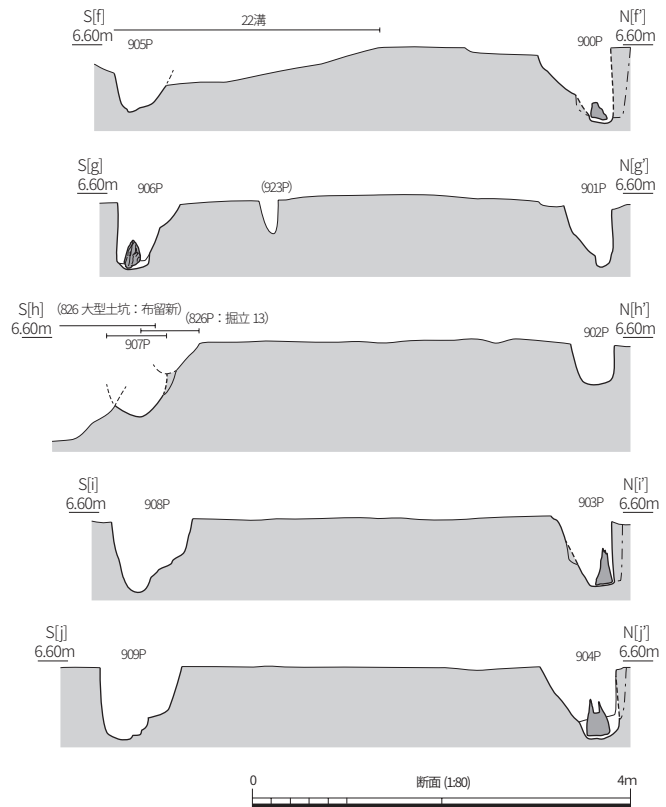
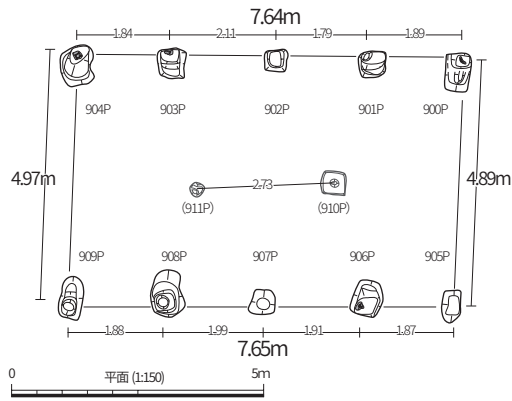


図 165. 大型掘立柱建物 13 断面 (2)・柱根

重要な遺構と認識できる。

**掘立柱建物 15** (図 163・166) P4 区のほぼ中央に位置し、大型掘立柱建物 13 と重複する。微高地 B1 および B2 縁辺の低地部に立地しており、南西の柱穴が 866 大型土坑と重複する。建物の構造は、東西 2 間×南北 1 間の構造で、規模は東西・南北ともに 3.0 m で、面積は 9.0 m<sup>2</sup> をはかる。建物の南北軸は、23.0°西に傾いており、重複する大型掘立柱建物 13 とは約 20°傾きが異なる。東西の柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 1.5 m 前後に揃う。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、いずれもやや小ぶりである。直径はいずれも 0.3 m で、検出面からの深さは 0.15 ~ 0.36 m までややばらつきがある。埋土はブロック土を主体とし、柱穴埋土断面からは柱痕を見出すことができない。826 大型土坑と重複する南西の 825P は、切り合い関係から 825P が先行する。

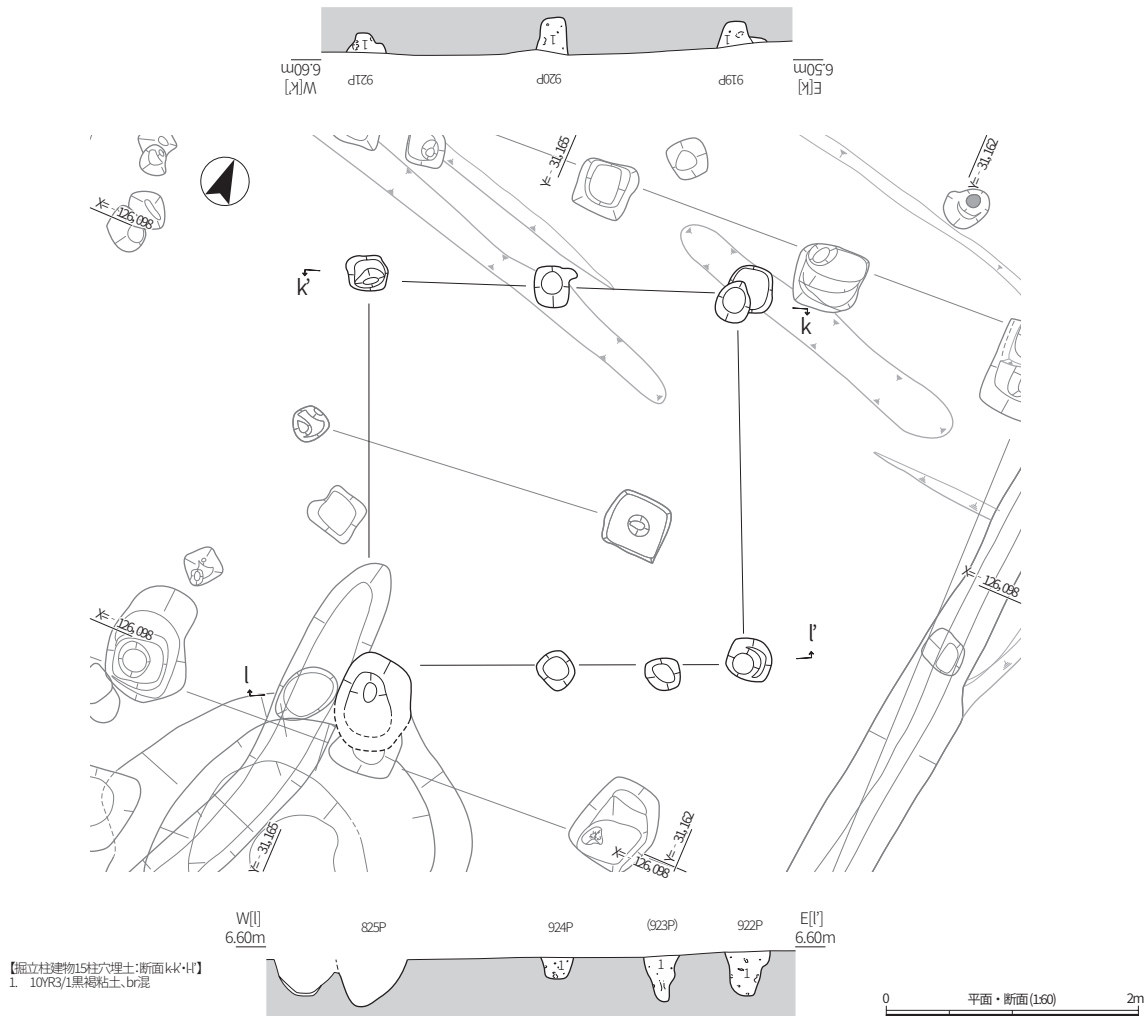


図 166. 掘立柱建物 15 平面・断面

919P から古式土師器の細片が少量出土しているが、図化できるものはなかった。そのほかの柱穴からは遺物は出土していない。出土遺物がほとんどないため詳細な時期比定は難しいが、重複する大型建物 13 が庄内式新段階、826 大型土坑の掘削が布留式中段階頃であることから、掘立柱建物 15 は布留式古段階頃の帰属とみるのが穏当である。さらに東 7m に位置する竪穴建物 22 とは、建物の傾きが概ね揃っており、想定される建物の時期も近いと見られるため、同時併存していた可能性が高い。

なお重複する大型建物 13 との関係については、南北の梁間が 1 間で、柱間隔が広い点で構造上の類似がある。このため規模が大きく異なるものの、大型建物 13 の解体後に新たに建替えられた類似する性格の建物の可能性が推測される。さらに P14 区の掘立柱建物 43 など、梁行 1 間の同様の構造の建物が今回の調査では一定数検出されており、構造や立地の比較から機能や性格を改めて検討する必要があるだろう。

**867 落込みほか** (図 167・168・169) P4 区中央西寄りで検出された不定形の浅い掘り込みで、中期中葉頃の須恵器や土師器などがまとまって出土した。微高地 B1・B2 の縁辺低地部に立地し、866 井戸と重複・後出する。また北東肩部の 868 落込みなども、形状などから近しい時期の類似する性格の遺構と認識できる。867 落込みは、やや崩れた隅丸長方形を呈し、規模は南北 6.7 m、東西 4.1 m、深さは 0.15 m をはかる。埋土は、炭混じりの褐灰～黄灰粘質シルトを主体とする。還元率の高い土師器・



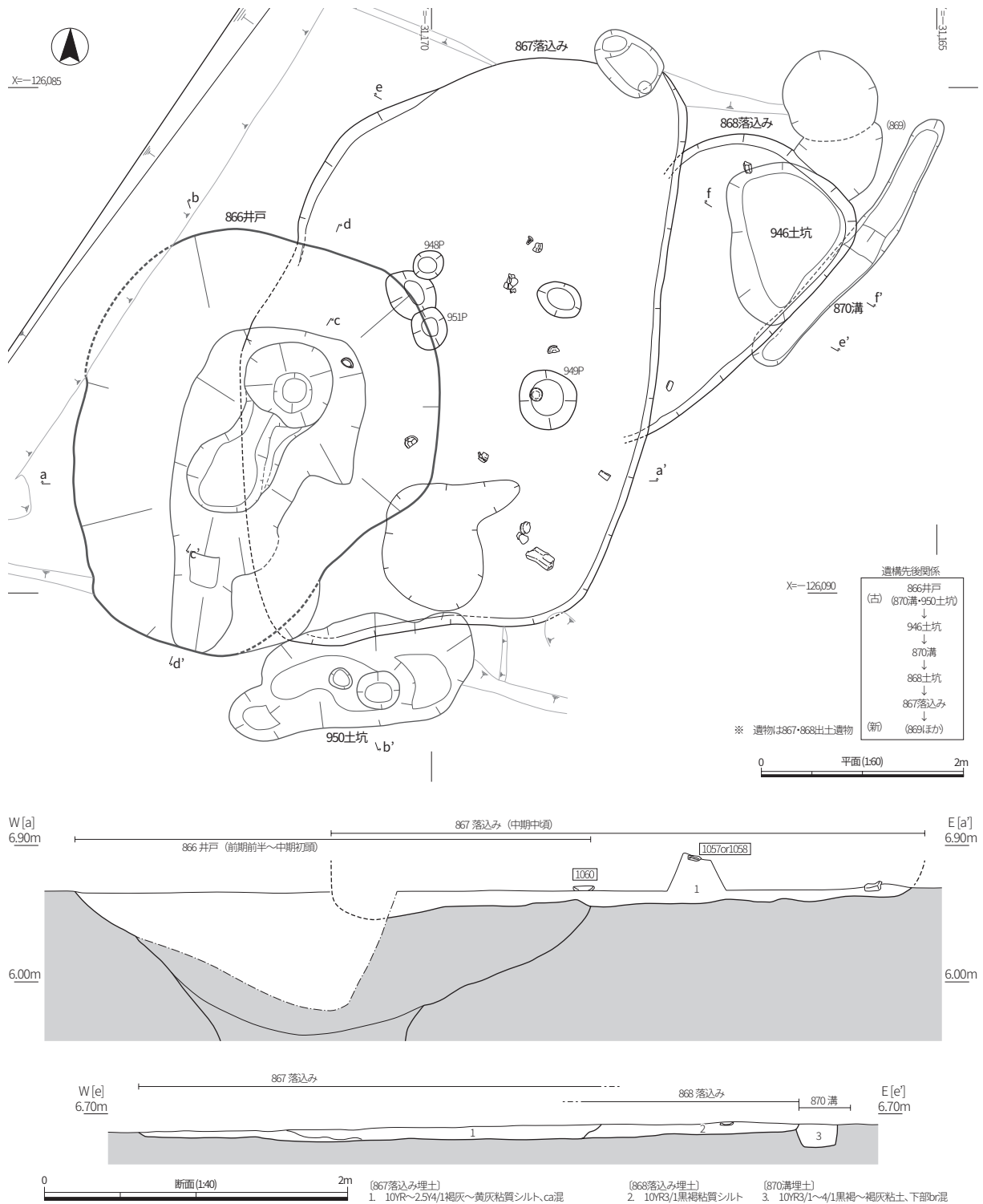


図 167. 866 井戸・867 落込みほか 全体平面・断面

須恵器・砥石などが原位置を保った状態で一定量出土しているが、分布は散在的である。さらに上面からも遺物が多数出土しており、本来の掘り込み面は検出面より上位にあり、第6層中から掘り込まれた遺構であった蓋然性が高い。北東の868落込みは、北東-南西方向の隅丸長方形の落込みで、規模は長さ3.0m以上、幅1.9m、深さ0.1mをはかる。切り合い関係から867落込みに先行し、埋土からは土師器・須恵器とともに鉄斧1点(M18)が出土した。

867落込みから出土した遺物には、土師器・須恵器・大型砥石があり(1054～1069、S30)、上面か

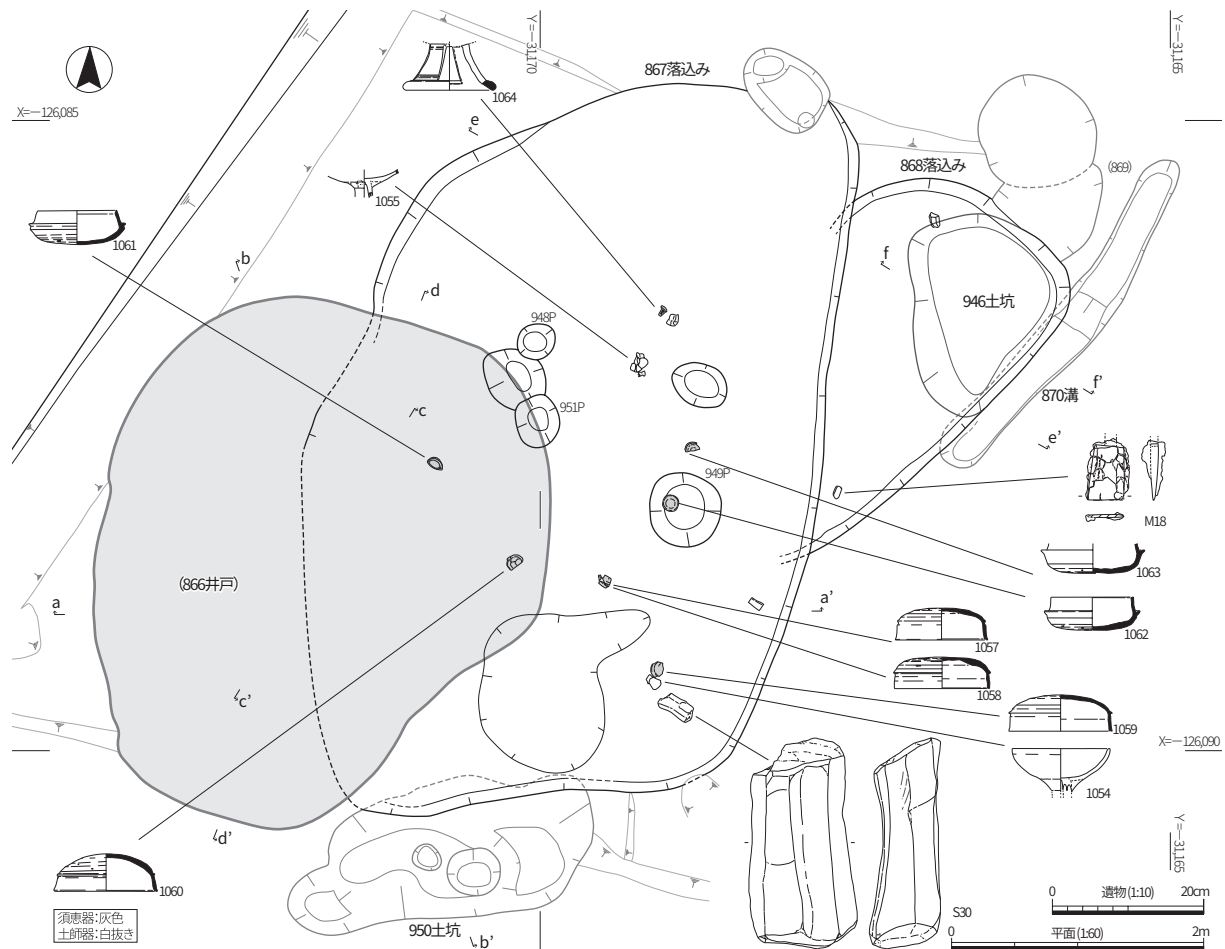


図 168. 867 落込みほか 遺物出土状況

らは土師器・須恵器に加え製塩土器が出土している（1072～1080、1083、1084）。868 落込みからは、土師器・須恵器とともに鉄斧 1 点が出土しており（1070・1071・1081、M18）、全体的には上面出土の遺物も含めて 867 落込みとの明確な時期差は見出しがたいため、全体をまとめて報告する。供膳具と貯蔵具は、総じて須恵器の比率が高く、供膳具では須恵器杯類が多い。全体的には天井部・底部ともに丁寧な回転ヘラケズリを施し、杯蓋は口縁部がやや外方に開くものが多い（1157～1163、1072・1073）。須恵器高杯は良好な資料がないが、4 方向スカシの脚部と杯部の細片がある（1064、1074）。それに対し土師器高杯は少数で、椀形高杯と大型有段高杯がある（1054～1056、1070・1071）須恵器の壺・甕・甔は、いずれも小破片で（1065～1067、1076～1080）、甕は布留形が主体である（1068・1081）。須恵器の把手付椀（1075）は、比較的残存状況が良好な資料である。ほかでは、外面タタキの軟質土器の小片（1069）と甔把手（1082）、小型椀形の製塩土器（1083）があり、製塩土器はいずれも内外面ナデ・オサエ調整で、出土総量は 10.5g である。なお生駒西麓産庄内形甕（1084）は、この遺構に伴うものではなく、下部の 866 井戸などとの関連が想定できる。土器以外では、大型の多面砥石（S30）と 868 落込み出土の鉄斧（M18）がある。砥石は緻密な砂岩製で、砥面が 7 面ある。いずれの面も平滑化しており、使用頻度が高かったことがうかがえる。鉄斧（M18）は、長さ 7.4 cm、幅 4.8 cm、厚さ 0.4 cm の板状の鉄斧で、基部の構造が明確でないが、手斧の可能性はある。

時期については、須恵器が TK216～208 型式頃に比定でき、土師器はそれと併行する辻編年 3 段階頃の資料とみて大過はない。後述するように、下層遺構である 866 井戸から豊富に遺物が出土しており、

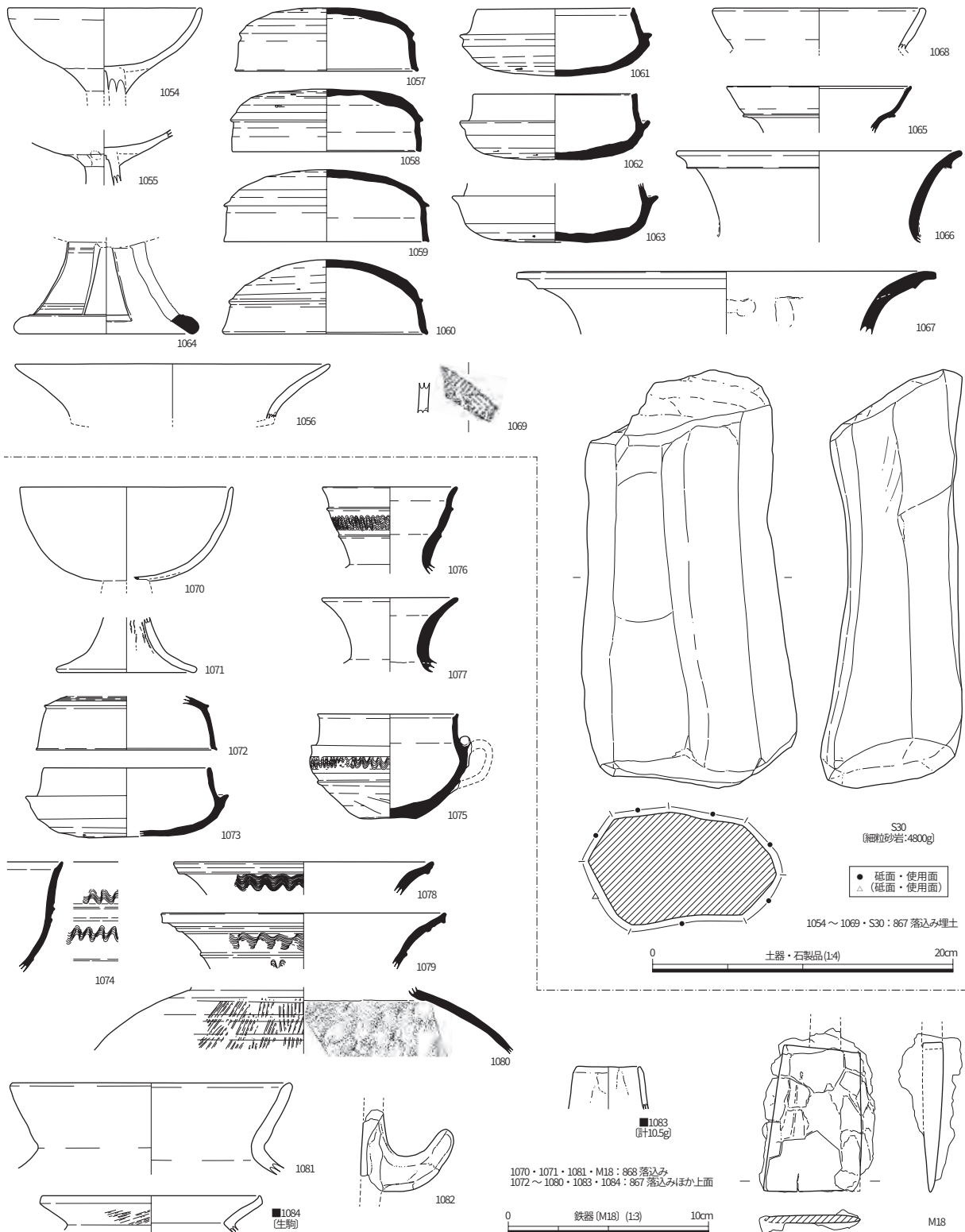


図 169. 867 落込みほか 出土遺物

層位的にこの遺構の出土遺物は後出することが明白である。このため、古墳時代初頭から中期までの土器の変遷を層位にもとづいて客観的に示すことができる点で重要である。また多面砥石 (S30) と鉄斧 (M18) は、遺構の性格を考える上で重要で、特に鉄斧 (M18) は集落での出土事例は珍しく、砥石との関わりがあるとすれば、周辺に鍛冶工房が存在する可能性が想定できる。

**866 井戸** (図 167・170 ~ 180) P4 区中央西寄りで検出された井戸で、微高地 B1・B2 の縁辺低地部

に立地する。複雑な構造の特殊な井戸で、かつ遺物も豊富に出土するため、南東 10 m に位置する大型掘立柱建物 13 との関連が注目される。古墳時代初頭～中期前葉頃までの重層的な堆積が確認でき、さらに上面には古墳時代中期中葉、867 落込みが重複している。この遺構だけでコンテナ約 15 箱程度（うち掲載遺物 12 箱）の遺物の出土があり、内容も多彩である。

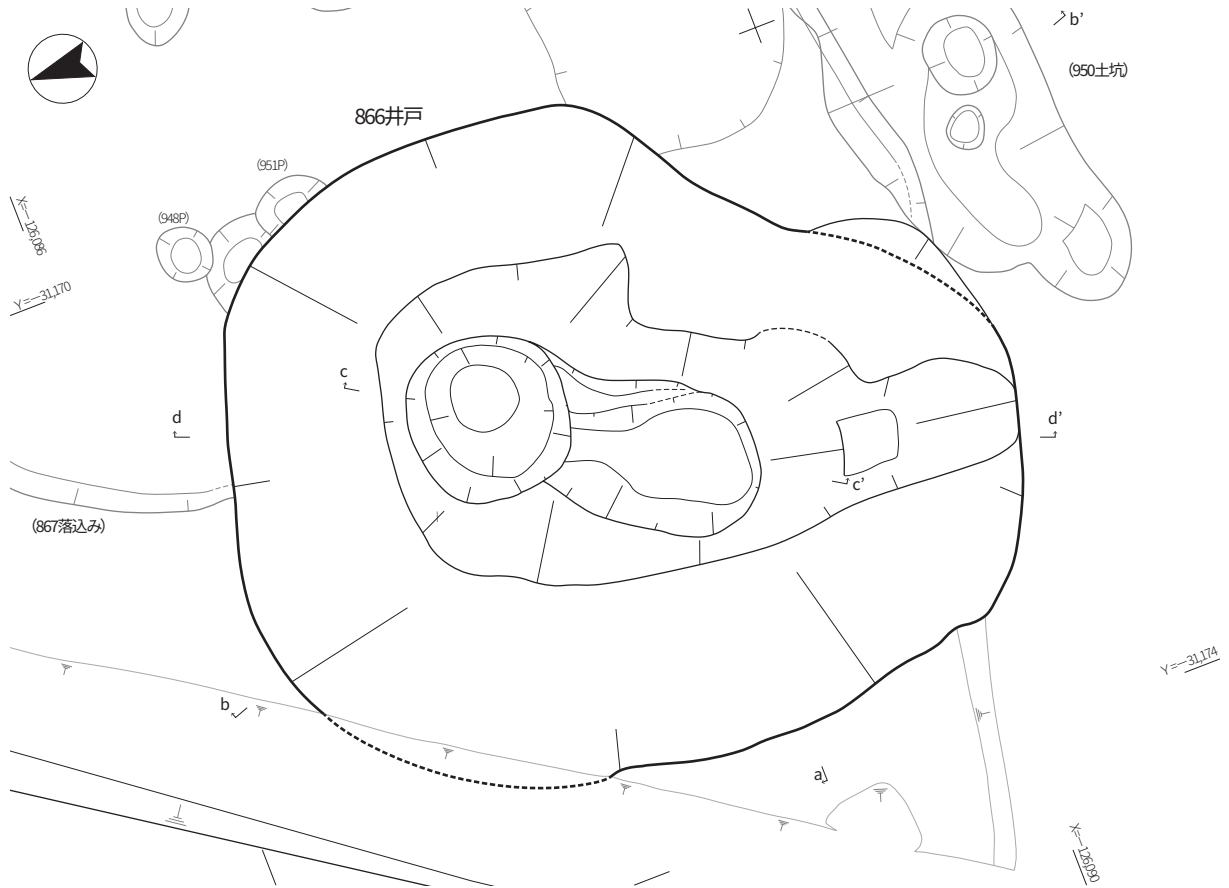
検出面の平面形は、やや不整な楕円形を呈し、規模は南北 4.1 m、東西 3.5 m をはかる。井戸の構造および堆積状況は複雑で、上部 3 分の 2 までが断面漏斗状で、下部は南側に 1.0 × 0.8 m の平坦面（南側ステップ）があり、北側径 0.9 m の範囲が筒状に深く落ち込む（北側最深部）。堆積途中にふたつの明確な間層があり〔埋土 5・埋土 10〕、この間層を境に上層〔埋土 2～5〕・中層〔埋土 6～10〕・下層〔埋土 11～16〕に大別ができ、出土遺物もそれに対応して明確な時期差をもつ。検出面の標高が T.P.+6.60 m、最深部の標高が T.P.+3.41 m まで深く下がる。上面から底面までの深さは 3.19 m で、上層下部までが 0.91 m、中層下部までが 1.46 m、下層に対応する南側ステップまでが 2.04 m である。

埋土の堆積状況と出土遺物の対応関係については、図 170・171 に詳細を示した。上層では、下部に有機質層の黒色シルト〔埋土 5〕が厚さ 0.08 m で堆積しており、この層から前期後葉～中期初頭頃の土師器が多量に出土した（1103～1157、1159～1179）。高杯や小型丸底壺をはじめとする遺物が、破片の状態が多量に出土しており（図 172:上）、井戸全体の中でこの層からの遺物の出土量が最も多い。さらに煤の付着など明らかな被熱痕跡を伴う破片が一定数あり、なかには同一個体の中で一部の破片のみ被熱痕跡があるものもみられる（1138）。このことから、意図的に破碎された上で火にかけて遺物を投棄したと判断できる。それより上位の堆積〔埋土 2～4〕は、灰色粘土を主体とする自然堆積（滞水層）で、この層からも一定量の遺物の出土がある（1092～1102）。特に上面付近からは、復元率の高い遺物が少量ながらも原位置を保って出土しており、ここから出土した遺物を上層上面出土遺物とした（1085～1091）。

中層では、上層と同様に下部に有機質を伴う黒色粘土〔埋土 10〕の堆積がみられ、この層の直上面で復元率の高い布留形甕（1212）と阿波産二重口縁壺（1210）などがまとまって出土した（1195～1212）。特に布留形甕と阿波産二重口縁壺は、全体の約半分～3分の1程度の破片がまとまって出土しており、部分的な破碎・打欠きがなされた上で遺物が投棄されたと判断できる。また調査時は、その存在に気がつかなかったが、この面の調査写真とオルソ画像の検討から二重口縁壺（1212）の北西に二重にめぐる円形の堆積土の違いが確認でき【カラー図版 5 参照】、中心部分が井筒、外郭が井戸の掘方であった可能性が推測される。下層の最深部とは位置がややずれており、再掘削に伴う井戸の可能性が高いが、土器直下の黒色粘土〔埋土 10〕には、小径木やクリやクワなどの広葉樹類の樹皮が多数含まれており、井戸枠材としての使用が推測される。なおこの面より上位の中層堆積土〔埋土 6～9〕は、レンズ状に粘土・砂質シルトが約 0.5 m の厚さで互層状に堆積している。自然の流入土と判断でき、この間から出土した遺物は少ない（1185～1194 など）。さらに全体の断面形状は、開口部に大きく開いている形状を呈しているが、ラップ状に大きく開く開口部は、断面をみる限り中層の底面ラインとスムーズに接続する。このため、当初の形態は不明であるが、中層に伴う 2 段階目の井戸を設営時に再掘削され、上部の形状が改変された可能性を指摘できる。

下層では、下部の南側ステップ上面に土師器の集積があり（1216～1230）、北側最深部からは重層的に遺物が出土している（1231～1247）。中層下部から南側ステップおよび北側最深部上面までの深さは約 0.5 m で、下層上部にあたるその間の堆積土〔埋土 11〕から出土した遺物はごくわずかである





【866井戸詳細構造断面模式図 (断面・平面から合成作図)】

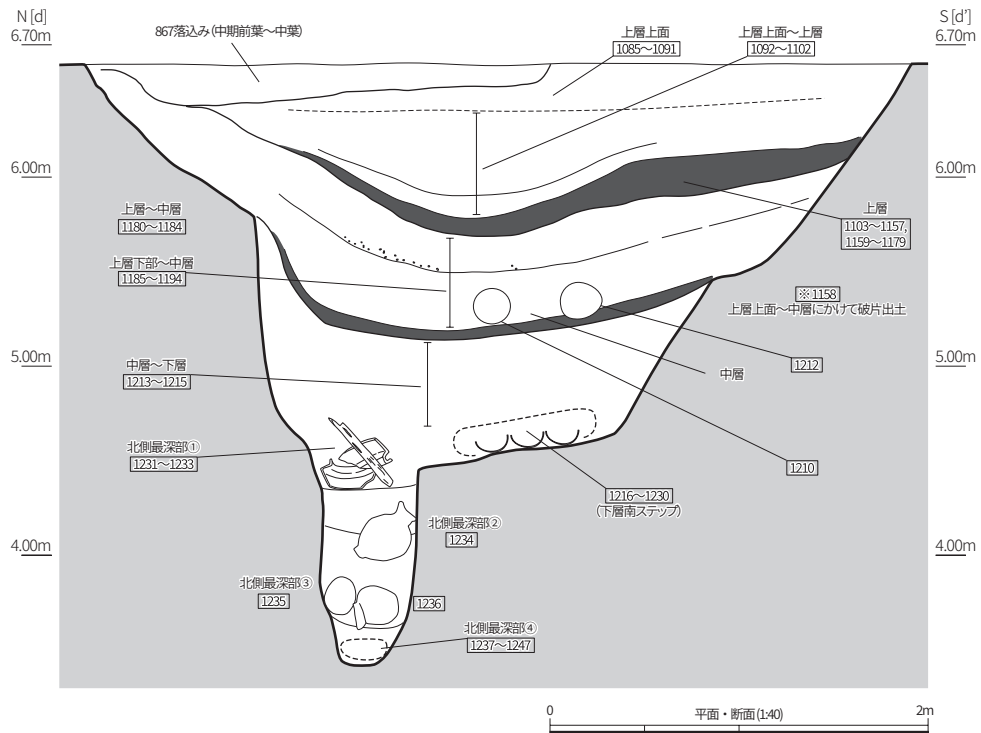


図 170. 866 井戸 平面・断面 (1)

(1231～1233)。南ステップの直上には、主に土師器の甕が集積した状態で出土している。球状の底部・体部が意図的に椀状・皿状に破碎されたのち、平坦面の底に丁寧に据えられていた。甕は、いずれも厚さ0.2～0.3 cm程度のいわゆる薄甕であるため、埋土掘削時に誤って割れてしまった可能性も考えられた。しかし周辺からは、接合する同一破片があまり出土しておらず、意図的に甕を破碎した上で底に据えられたと判断できる。北側最深部の堆積〔埋土13～15〕は、オリーブ灰色の粘土～シルトを主体とし、上面から底面付近まで重層的に遺物が出土している。遺物は、上下4重に積み重なった状態で出土しており、上位から下位にかけて北側最深部①～④に区別した。それぞれにやや間層を挟んでいるが、深く狭い場所での掘削となったため、自然の流入土か人為的な埋戻し土であるのかは判断としなかった。ただし最深部③に伴う布留形甕(1235・1236)は、南ステップ出土の甕よりも型式学的にはむしろ後出することから、北側最深部③～①までの土器の投棄と南側ステップ上での土師器甕の据え付け行為は、一連の井戸廃絶行為に伴うものと認識している。なお北側最深部①は、南側ステップとほぼ同レベルで、生駒西麓産大型複合口縁壺の口縁など(1231～1233)とともに自然木が出土した。最深部②からは有機質付着の完形の大型直口壺(1234)が、最深部③からは完形の布留形甕2点(1235・1236)がそれぞれ出土した。特に最深部②の直口壺は、紐状の有機質が体部・頸部にかけて網状に巻かれており、実際に使用された釣瓶と判断できる。井戸の最深部底面にあたる④では、古式土師器の破片が一定量出土しているが、いずれも小破片で、上部の①～③とは出土状況が大きく異なっている(1237～1247)。これに伴う最下部の〔埋土16〕は、砂質が強いため初期の流入土と判断でき、特徴的な細砂や小礫を一定量含んでいる。細砂や小礫は、もともとは井戸底に砂利が敷き詰められていた蓋然性が高いが、検出時には底面に敷き詰められていた様子は見出せなかったため、井戸廃絶時に人為的に攪拌された可能性が推測される。なお、かなり深度のある遺構であるにもかかわらず、調査時には最深部からの著しい湧水はなかった。今回の調査で検出されたほかの井戸でも同様な事例が多くあり、現在の地下水と古墳時代の地下水位が大きく異なっていた可能性が推測される場所である。

土器以外では、各層から種子をはじめとする植物遺体が一定量出土しており、その内容は井戸の祭祀行為とも深く関わるものが予想されたため、同定分析を実施した。その詳細は、【第5章第4節】にて報告するが、桃核のほか、アカメガシワ種子やヒメコウゾの果皮などが確認されている。桃核については、破片を含め計47点が確認でき、大半が下層から出土したもので、一部に齧<sup>げ</sup>歯<sup>し</sup>類の歯型が残るものがある。そのほかの種子は、中層埋土に伴うものが多く、萌芽再生能力の高い樹種の種子が中心であるため、人為的なものというよりは、周辺植生との関係を想定する方が妥当である。種子以外では、北側最深部の①～④にかけて、タケ亜科、ススキ属、ミズキ、アカガシ亜属の細かな炭化材が多数出土している。特に①からの出土量が多いが、いずれも細片のため、井戸の構築材とは考えがたい。人為的なものと判断するのが妥当であるが、性格等は不明である。土師器とともに出土しているため、なんらかの有機質の製品を燃やしたうえで廃棄した可能性などが考えられる場所である。

各層・各段階ごとの詳細な年代については後述するが、北側最深部と南側ステップが古墳時代初頭～前期前葉、中層下部が前期中葉、上層下部が前期末葉～中期初頭、上層上面が中期前葉にそれぞれ比定できるため、かなり長期間に亘ってこの遺構が継続的に使用され続けていたことを物語っている。しかも、各段階ごとに入念な遺物の投棄行為が繰り返されていることから、特殊な性格の井戸であったことは疑いなく、井戸に伴う祭祀行為を復元する上で一級の資料と評価することができるだろう。

出土遺物は、出土層位およびまとまりごとに区別し、相対的に新しい上位から古い下位の順で図174

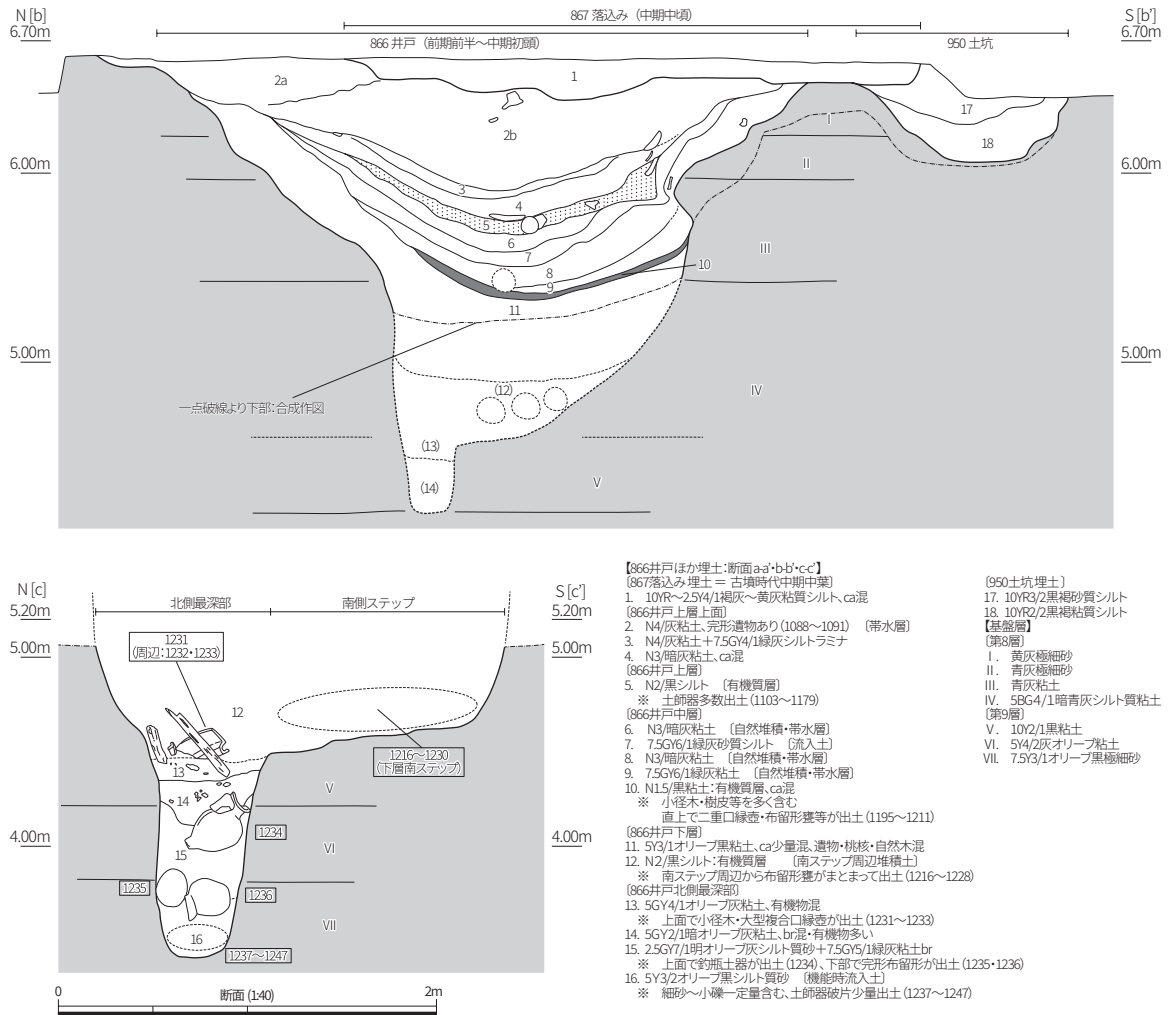


図 171. 866 井戸 断面 (2)

～180に掲載した。また出土層位と掲載遺物の位置関係については、断面の模式図に記載している(図170)。このうち最上部にあたる上層上面の出土遺物(1085～1091)には、土師器の椀形高杯(1085)や深手で口縁部が大きく開く大型有段高杯(1087)、布留形甕(1090)と外反口縁形の甕(1091)などがあり、いずれも辻編年3段階ごろに比定できる。上面の867落込みよりも僅かに先行するとみるのが妥当であるが、時期差はあまり大きくないため、867落込みの掘削の直前頃まで井戸の名残となる落込みが存在していた可能性が高い。続く(1092～1102)は、上層〔埋土2～4〕からの出土遺物で、辻編年2～3段階までの遺物を含む。

上層〔埋土5〕からは、最も豊富に遺物が出土しており、前期末葉～中期初頭の良好な資料群と評価できる(1103～1179)。特に高杯(1103～1126)と小型丸底壺(1127～1141)が豊富に出土しており、これに中・大型の壺・甕類が加わる組成を示す。高杯は、C系統(Ⅱ群系)が主体(1107～1109、1114～1126)で、杯部はいずれも無稜外反形である。その一方で、B系統(Ⅰ群系)の有稜形は2点に限られる(1103・1105)。このうち(1120)は、ハケ原体や胎土から同工品とみられる資料がP6区1482井戸から出土している(図97:527、P146)。また、有稜形(1103)の内外面に施される特異な暗文は、鳥取市秋里遺跡など山陰での類似資料の出土が知られている。それ以外では、折衷的な個体1点(1104)と大型有段高杯(1110～1113)があり、このうち(1110)は、杯部内外面のハケのあとにヨコミガキを施す点がやや特異である。小型丸底壺・鉢(1127～1141)は、底部外面にケズリを施

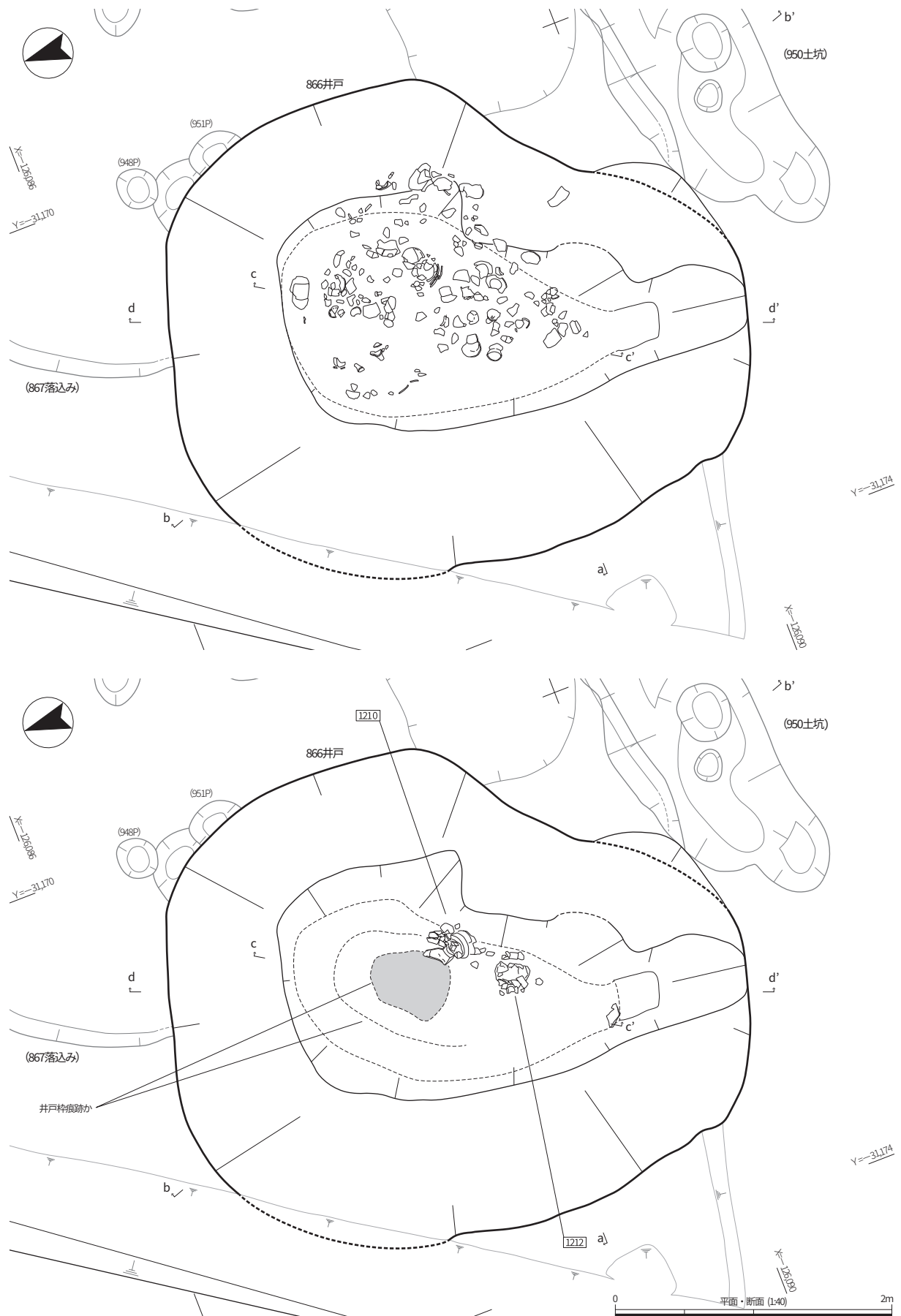


図 172. 866 井戸 遺物出土状況 (1) (上層・中層)



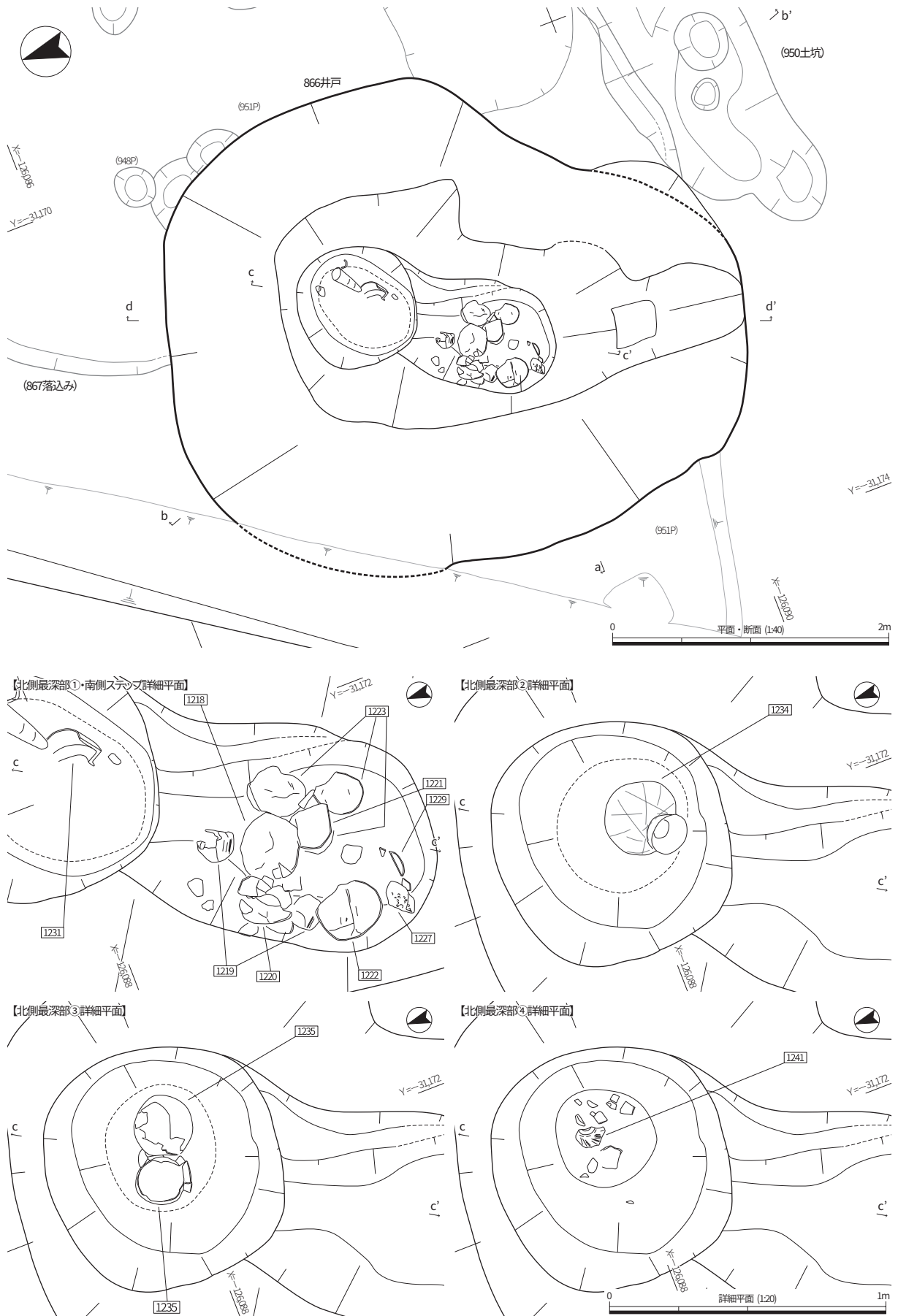


図 173. 866 井戸 遺物出土状況 (2) (下層)

第4章 遺構・遺物

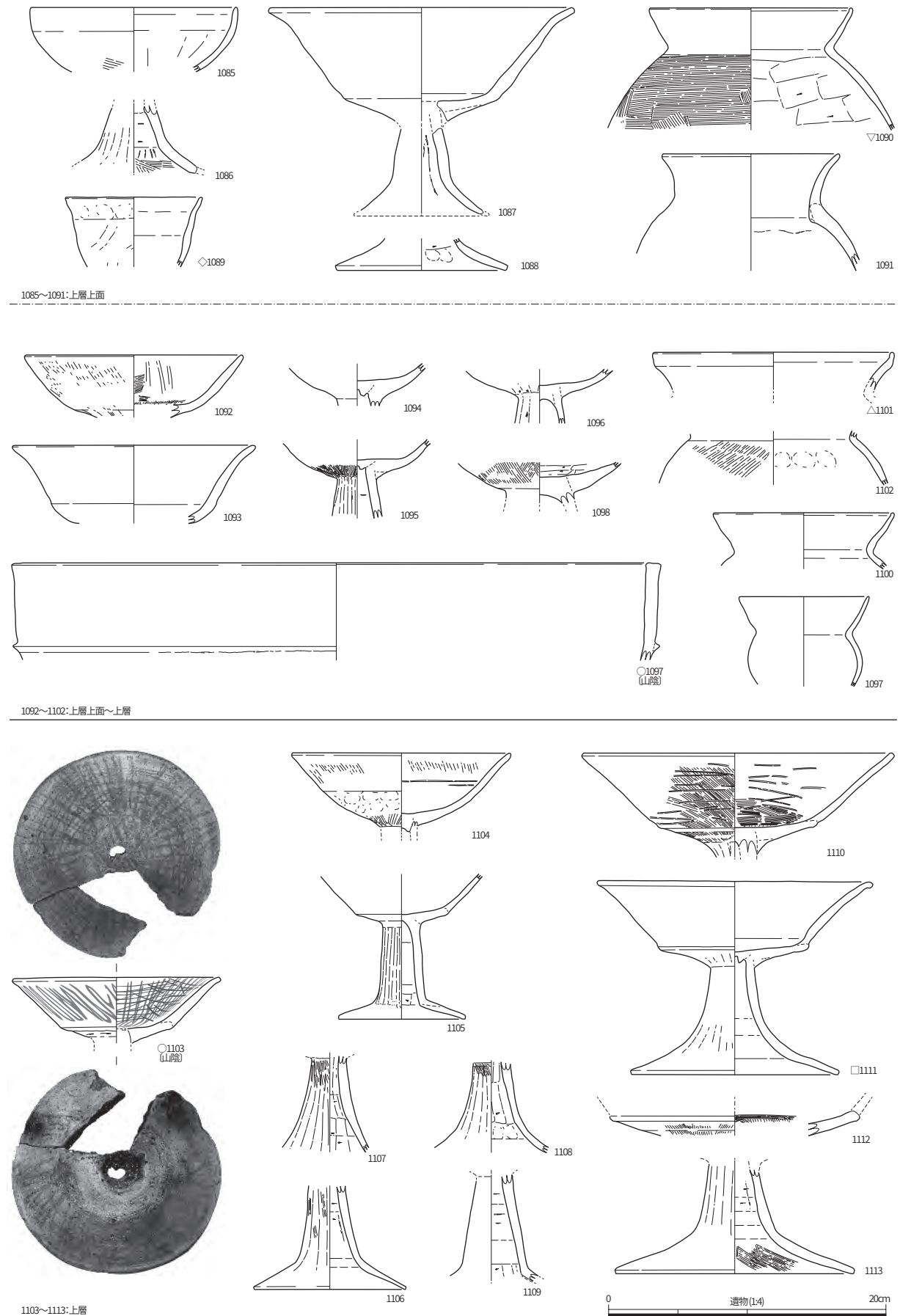


图 174. 866 井戸 出土遺物 (1) (上層上面・上層①)

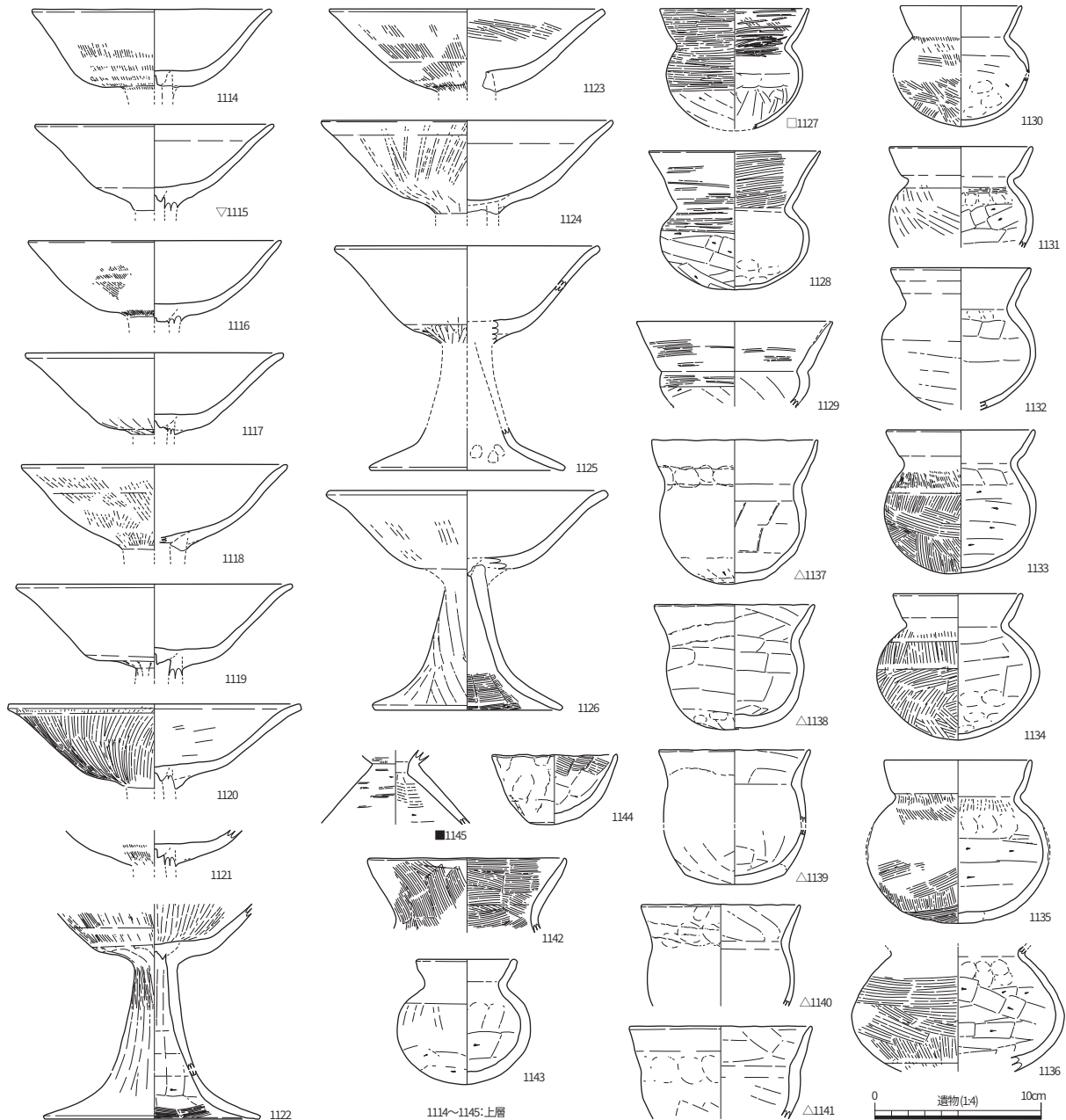


図 175. 866 井戸 出土遺物 (2) (上層②)

すB系統 (1127～1129) と、外面ハケ内面ケズリ・オサエのC系統 (1130～1136)、粗製品 (1137～1141) に大別できる。C系統が主体をなすが、これと共伴するB系統の上半部にヨコミガキが残る点が特異である。接合痕を明瞭に残す頸部のしまりの弱い粗製品 (1137～1141) は、大阪府域では類似資料の出土例はほぼないが、丹波での出土事例があるようである<sup>29)</sup>。これ以外では、内外面ハケの小型鉢 (1142)、ミニチュアの壺 (1143)・鉢 (1144) のほか、精製B系統のX字器台 (1145) が1点含まれる。壺類 (1146～1162) は、中型・大型の直口壺と二重口縁壺が主体で、特に二重口縁壺 (1157) は上半と底部の接点はないが、ほぼ全形が復元できる。長胴化が進んでおり、この時期の良好な事例は少ないため貴重な出土事例といえる。搬入品では、生駒西麓産の可能性のある直口壺 (1147)、阿波系の複合口縁壺 (1155・1156)、肩部に縄文または貝殻施文を施すは東海系の壺 (1159) などがある。生駒西麓産の大型複合口縁壺 (1158) については、上層中からの破片が多いことから図 176 で図示し

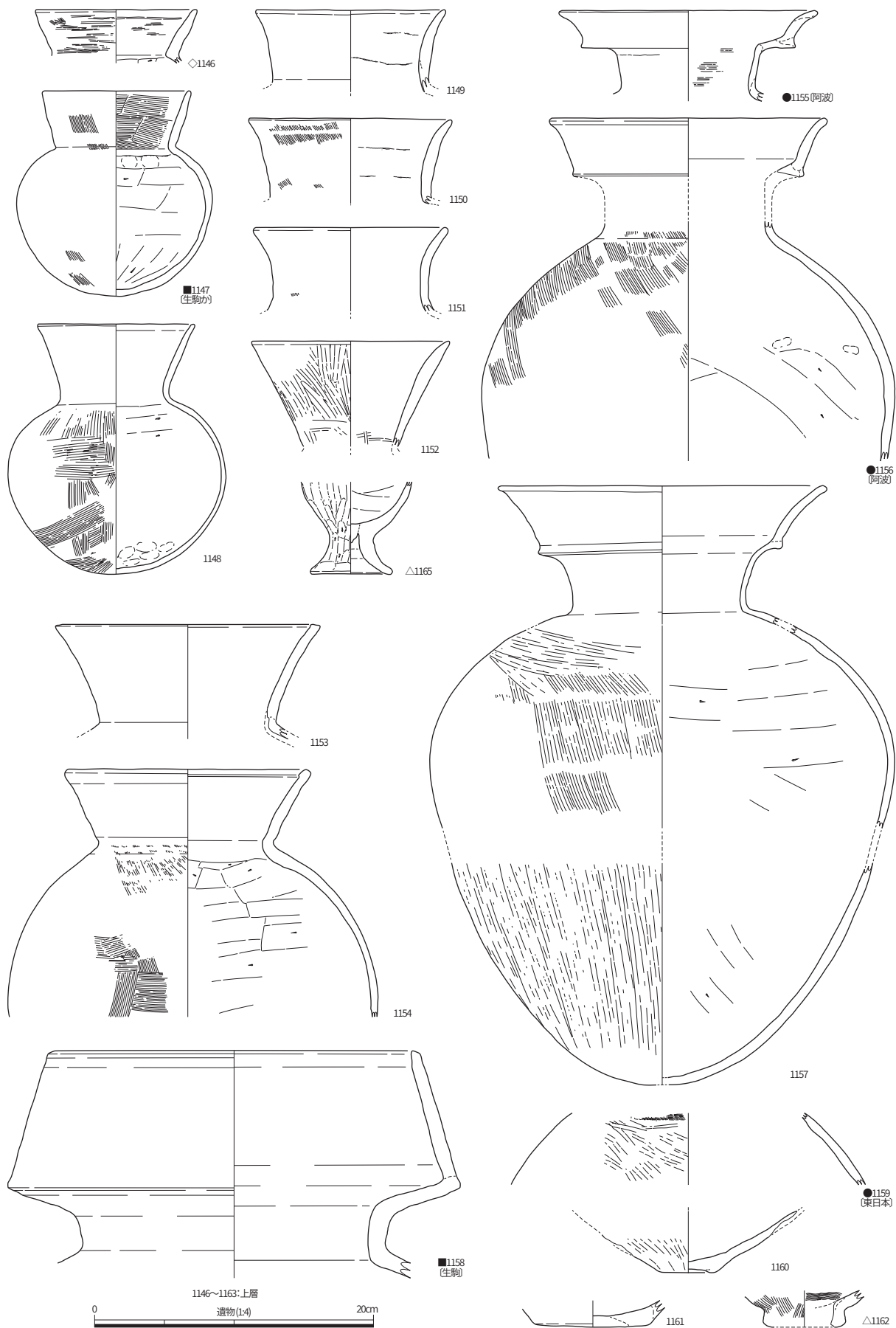
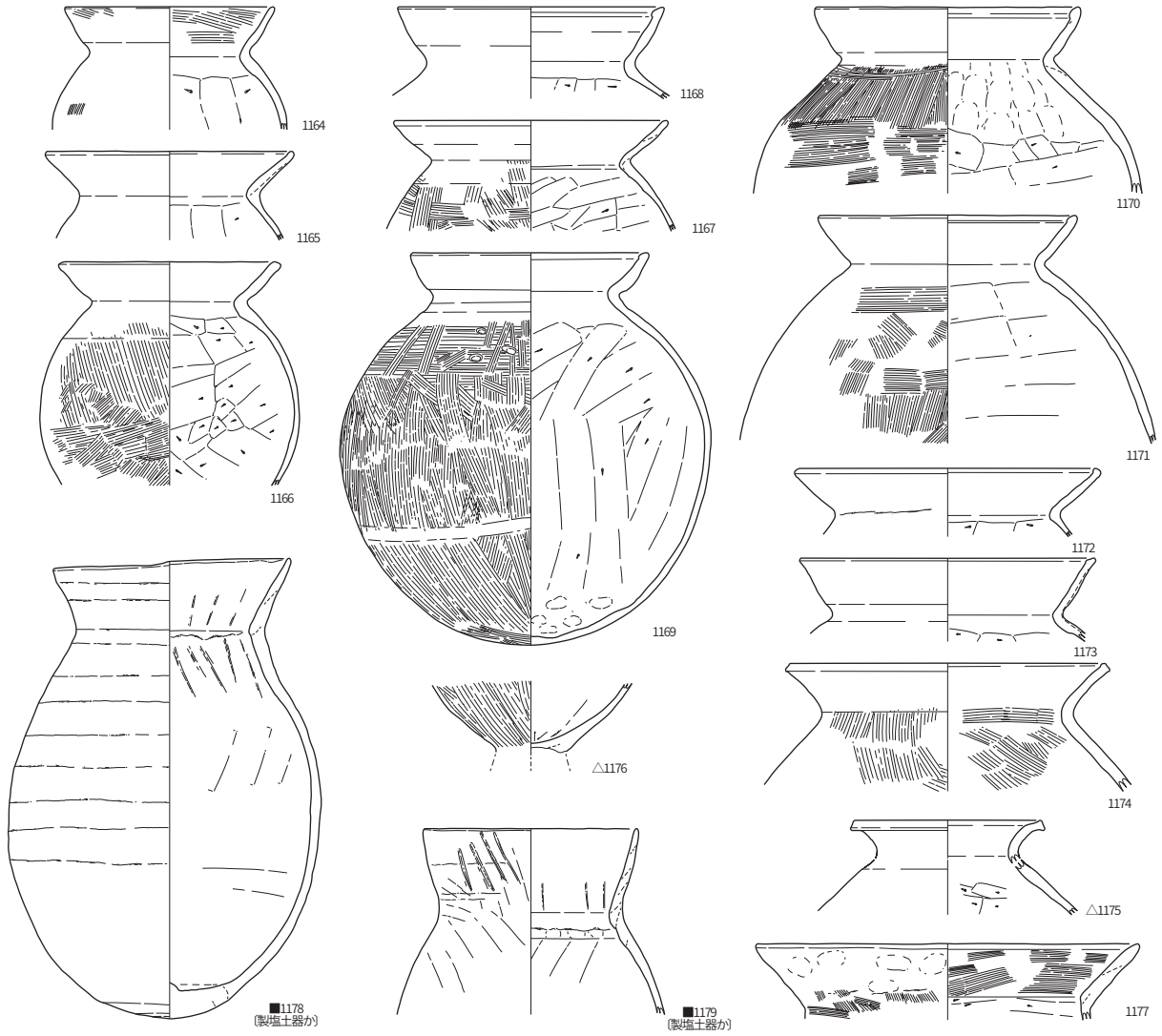


図 176. 866 井戸 出土遺物 (3) (上層③)





1164~1179: 上層

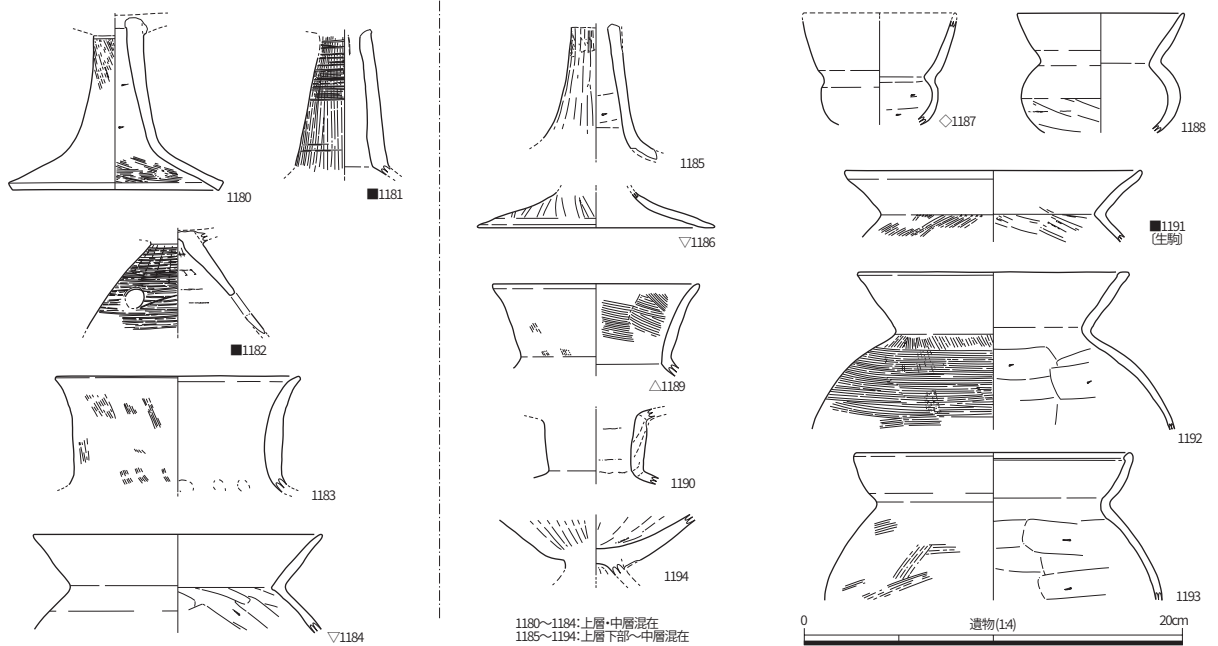


図 177. 866 井戸 出土遺物 (4) (上層④・上層~中層)

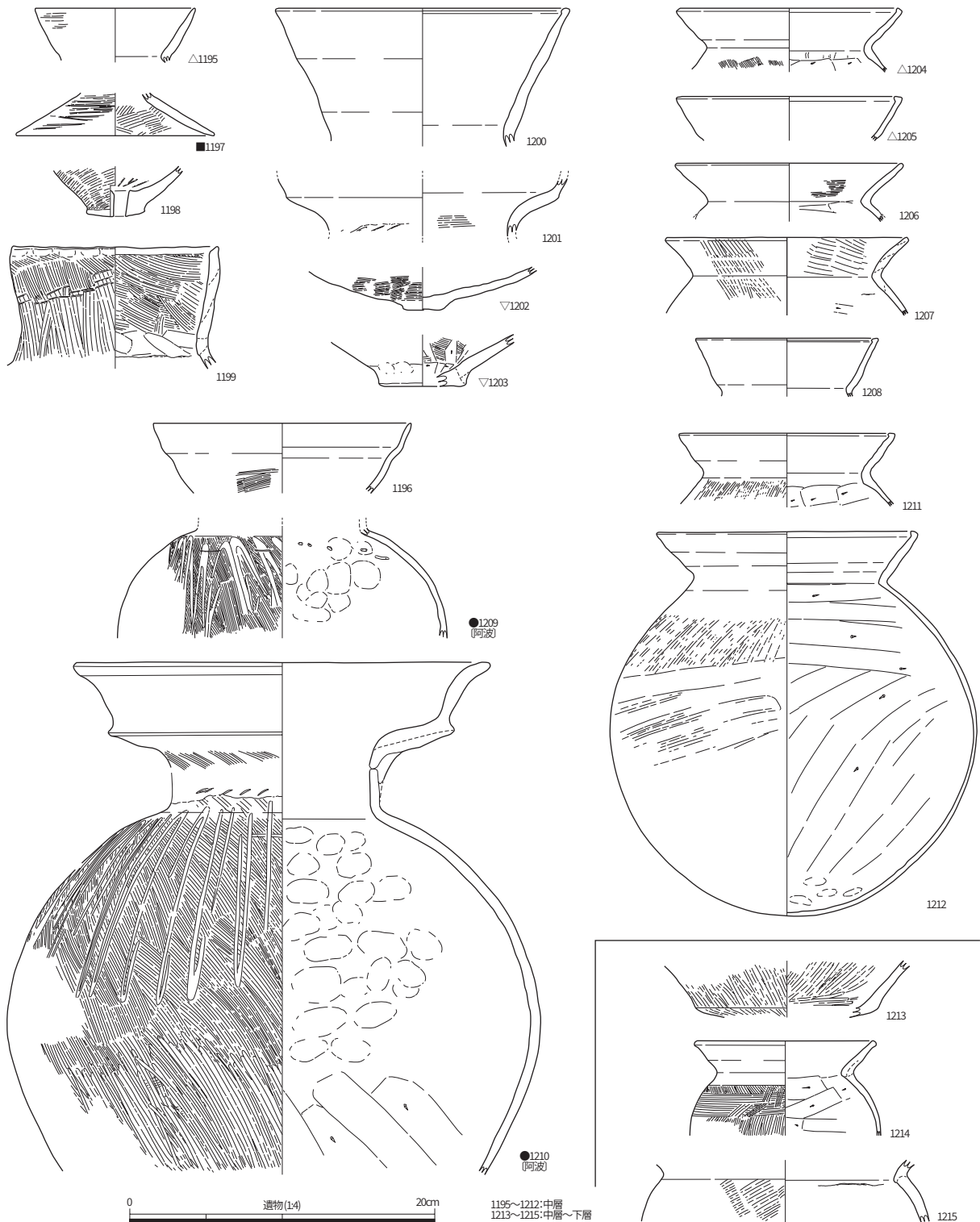


図 178. 866 井戸 出土遺物 (5) [中層]

だが、上層上面～中層まで破片が散見される。下層北側最深部出土の(1231)がほぼ同一の法量であり、同一個体の可能性も残されるが、器面の状態が大きく異なるため、別個体と判断している。甕類(1164～1176)は、布留形甕が主体で、大・中・小の3サイズがあるが、復元率が高いものは少ない。内面が肥厚する布留式新段階頃の資料が多いが、(1172～1174)など布留式古～中段階に遡る明らかに古い一群を数点含んでいる。また全形が唯一復元できる(1169)は、肩部に米粒状圧痕を施す資料で、

上述したように、P5区1482井戸(図97・98:532・547・548、P146・147)や近隣の井尻遺跡での出土例がある。ほかでは、甕(1175)、台付の(1176)、鉢(1177)は類例が乏しく、位置づけが明確でない。接合痕を明瞭に残す(1178・1179)は、いわゆる甕形製塩土器といわれる資料で、内外面に明瞭な被熱痕跡が認められる。以上が上層出土資料であるが、時期としては布留式新段階、辻編年1～2段階古相頃に位置づけることができる。C系統(Ⅱ群系)の高杯や小型丸底壺、甕の形式学的特徴や、大型有段高杯を含む組成などから布留式新段階に下げて理解することが妥当で、精製の小型器台が1点のみという点もこれを補強する材料といえる。その一方で、内外面ヨコミガキを施す精製の小型丸底壺については、通常は布留式中段階のなかにおさまる資料であり、全体をやや古く位置づけるべきか、遅くまで残るとみるのか、あるいは混入品とみるか、判断がつかない。上述したように、甕の一部や平底壺などに型式学的に古い資料を少数含むため、混入品とみることもできるが、例えば大和南部では少数ながらもこの時期までヨコミガキを施す資料が<sup>30)</sup>共伴しており、詳細な時期比定をするためには広域的な検討が必要である。

上層～中層間から出土した(1185～1194)と、出土層位がやや不確定な上層～中層出土遺物(1180・1181)は、上層〔埋土5〕と後述する中層〔埋土7〕との中間的な位置づけが可能と思われる。搬入品とみられる精製ヨコミガキの高杯(1181)や小型器台(1182)が布留式中段階の典型的な資料で、ほかに生駒西麓産の庄内形甕(1191)などが含まれる。

中層〔埋土10〕直上の出土遺物(1195～1212)では、潰れた状態で出土した阿波産の二重口縁壺(1210)と布留形甕(1212)の存在が特筆される。阿波産二重口縁壺(1210)は、外面に上下ジグザグに連続して施されるミガキと体部内面上位の明瞭な指頭痕が特徴的で、中河内では出土事例が多い<sup>31)</sup>。また口縁部と頸部の接合面で分離しており、接合剥離面には刻み目が確認できる。ほかに阿波産では、小型品(1209)があり、さらに上層からも同様の二重口縁壺が出土しているが(1155・1156)、いずれも別個体と判断できる。全形が復元できる布留形甕(1212)については、口縁部の形態や肩部の明瞭なヨコハケがないため定型化以前の資料とみなすことができるが、胎土が在地のものとは異なっており搬入品の可能性がある。そのほかでは、有孔鉢(1198)や平底の壺類(1202・1203)など、古い時期の様相を留める資料が含まれるが、精製B系統の模倣品(1195・1197)や在地C系統の有段口縁鉢(1196)、甕は布留系が主体(1204～1211)である点などがやや新しい要素で、中層〔埋土10〕直上資料の時期については、布留式中段階古相頃に位置づけるのが穏当である。中層下部〔埋土11〕に伴う遺物は、出土量が少なく、A系統の高杯や布留形・V様式系甕の細片などがみられる(1213～1215)。

下層出土遺物については、上述したように南側ステップ直上と北側最深部①～④に大別できる。南側ステップの出土遺物には、古式土師器と加工痕のある小型の木製品(1216～1230、W12・W13)がある。土師器は、甕が中心で、ほかの器種ではA系統の小型短頸直口壺(1216)と内面ハケ調整の鼓形器台(1217)がある。甕については、いずれも布留形の範疇に入るが、底部には指頭痕の有無に違いがあり(1219・1225・1227 / 1218・1223)、全体のプロポーシオンや口縁部の形態、胎土などにもバリエーションがある。形態は、球胴に近い(1219・1220・1223)と長胴気味の(1218・1221・1222)があり、口縁部の形態は田中元浩分類のⅠ型b類(1218・1219・1224・1228・1229)とⅡ型c類(1226・1230)、内面が肥厚する定型化口縁(1220)が<sup>32)</sup>混在し、生産地の多様性を指摘できる。特にⅠ型b類とされる口縁は、大和東南部で主流のタイプで、唯一全形が復元できる(1218)は尖底の名残を残しており、庄内形甕から布留形甕へスムーズに型式変化する大和東南部初期布留形甕の特徴をよく備えている。木

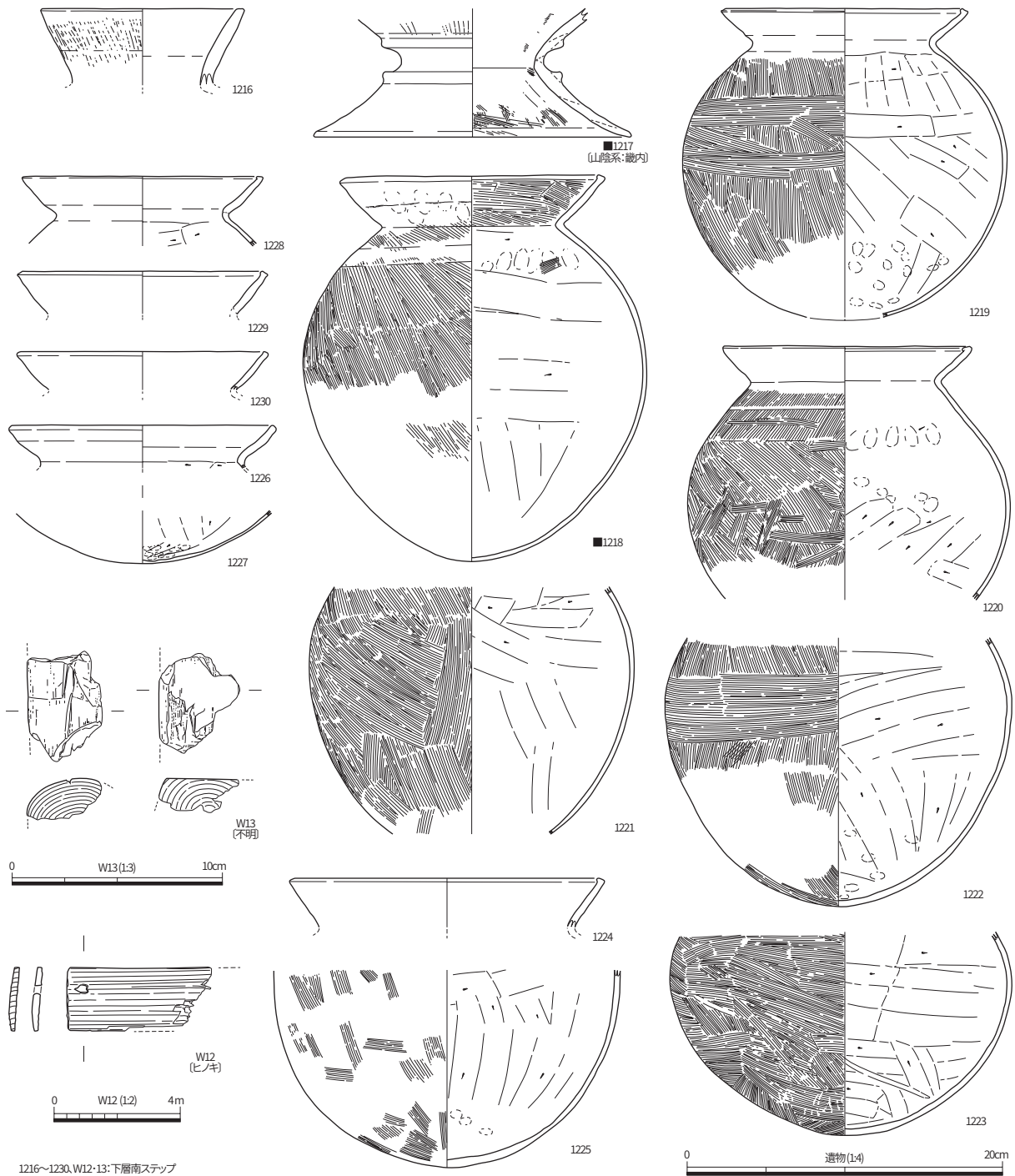


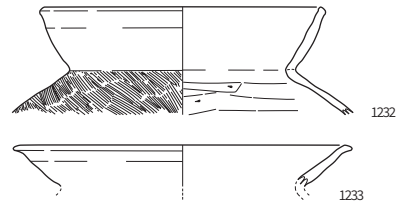
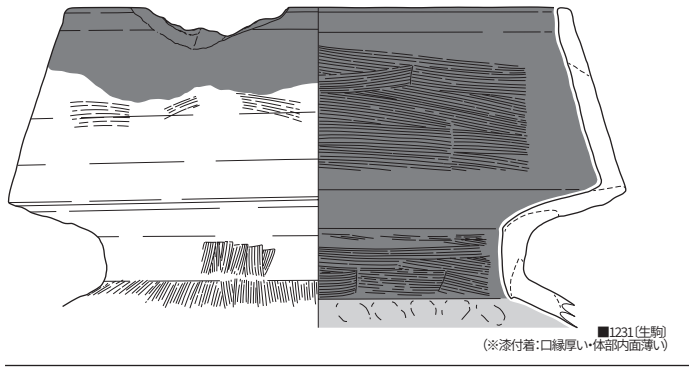
図 179. 866 井戸 出土遺物 (6) [下層①]

製品には、小孔がある小型の板材 (W12) と、一部に面をもつ用途不明の (W13) がある。板材 (W12) は、樹種がヒノキで、長さ 4.6 cm、幅 2.0 cm、厚さ 0.2 cmをはかる。紐で別材と組み合わせた製品の一部と認識できるが、詳細は不明である。

北側最深部①に伴う遺物としては、生駒西麓産の大型複合口縁壺 (1231) と甕の口縁部 2 点 (1232・1233) がある。甕 (1232・1233) は、胎土からそれぞれ南側ステップ出土の (1230・1221) と同一個体の可能性が高い。大型複合口縁壺 (1231) については、内外面黒色に光沢をもつ黒色物質が顕著に付着している。こうした大型複合口縁壺には、黒色物質が付着する事例が多いものの、<sup>33)</sup>具体的な同定分析の事例がこれまでになかったため、今回、同定分析を実施したところ、材質は「漆」であることが判

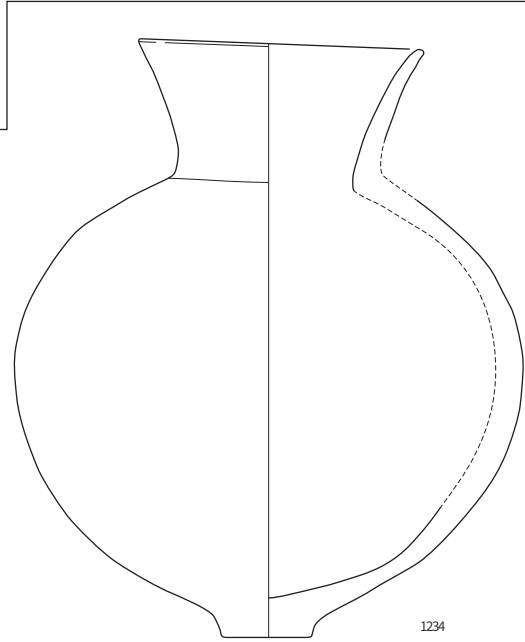
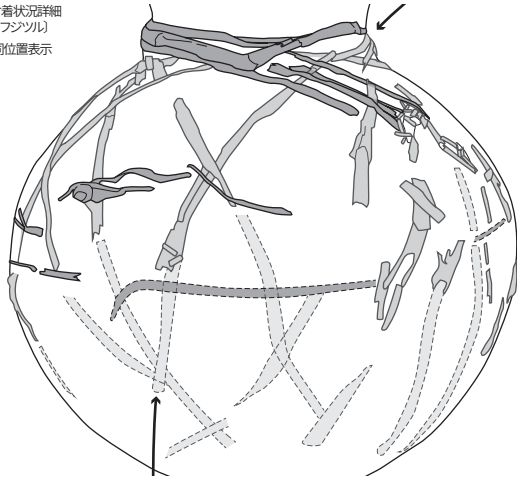


第5節 古墳時代の遺構・遺物 (2). 西側エリア

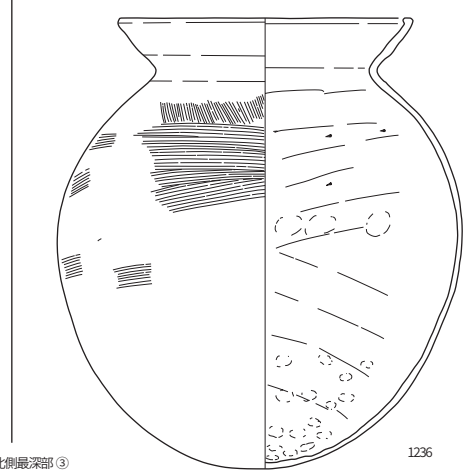
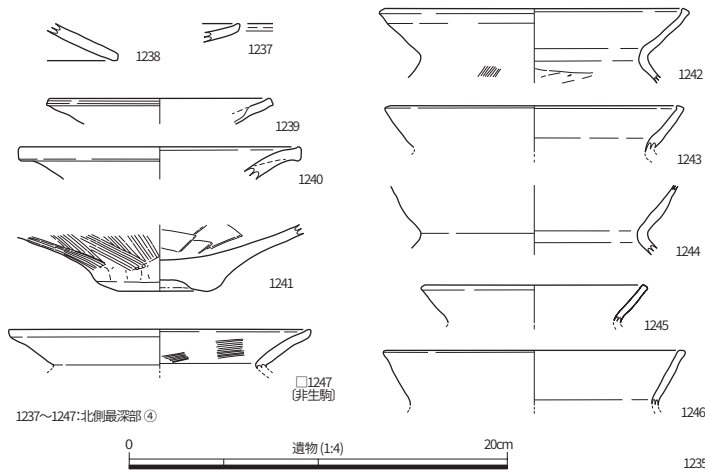
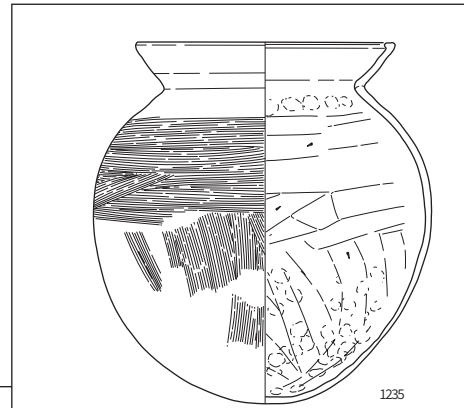
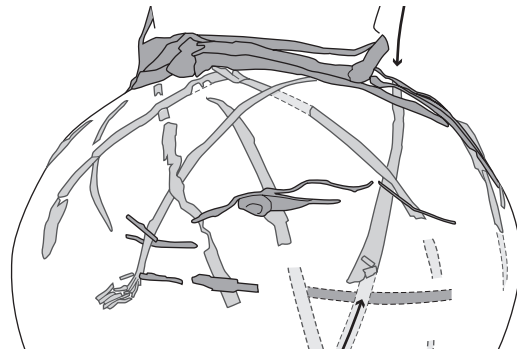


1231~1233:北側最深部 ①

有機質付着状況詳細  
 (素材:ファンデル)  
 矢印:同位置表示



1234:北側最深部 ②



1235~1236:北側最深部 ③

図 180. 866 井戸 出土遺物 (7) (下層②)

明した【第5章第7節】。漆を付着させる目的については、あくまで推測の域をでないが、漏水防止のための処置や土器そのものの強化などが考えられるところである。最深部②に伴う直口壺（1234）は、体部全体に紐状の有機質が付着することから、釣瓶と判断できる。底部平底のA系統直口壺で、付着する紐状の有機質の素材は、同定の結果「フジツル」であることが判明した【第5章第4節】。現状では、体部の約半分の範囲に残存しているが、遺物取上げ時に分離してしまい、元々は全周していた。また、頸部と体部上半は残りが良いが、下半に関しては当初から剥離が進んでおり、器面に痕跡が残っている。紐は、ナナメ方向の網目が交互に重なるようにして組まれており、体部中央のヨコ方向の紐はナナメ方向の紐と交互に重なり合う。頸部については、何重かに巻き付けており、残存状況が良好な貴重な出土事例といえる。最深部③に伴う2点の布留形甕（1235・1236）は、小型品（1235）と中型品（1236）があり、プローションや細部形状、調整等が酷似する。サイズの異なる同工品とみなすことができ、底部内面の指頭痕や肩部のヨコスリナデ、端部の肥厚など、定型化初期の布留形甕の特徴を備えている。底面の最深部④に伴う土師器は、いずれも破片で、小型器台（1237・1238）、壺類（1239～1241）、甕類（1242～1247）がある。平底壺（1241）は庄内式期に遡るが、布留形の範疇に含まれる甕（1242～1246）と非生駒西麓産の庄内形甕（1247）は相対的にやや新しく、南ステップ出土資料との類似性が指摘できる。

下層出土資料の年代的な位置づけについては、出土層位ごとに型式学的な観点から純粋に評価すると、南側ステップと北側最深部①の資料が布留式古段階古相～新相、最深部②が庄内式新段階、最深部③が布留式期古段階新相、最深部④が庄内式新段階～布留式古段階にそれぞれ比定ができると思われる。最深部③の布留形甕よりも上位の最深部②の直口壺が型式学的に古く、層位的な逆転現象がみられる点が問題となるが、これについては上述したように、南ステップから北側最深部③までが井戸の廃絶時に執り行われた一連の祭祀行為に伴うものと判断できるため、各段階に明確な時期差を見積もる必要はない。最深部④については、新旧の遺物が混在しているが、砂利の検出状況から底部が人為的に攪拌された可能性が高いことは上述した通りであり、最深部④に伴う遺物も最深部③以降の遺物の投棄行為と一連のものであった可能性が推測される。その時期については、最も新しい様相を示す北側最深部③の布留形甕（1235・1236）から、布留式古段階新相頃に下るとみてよい。その一方で、井戸の掘削および機能の時期が問題になるが、最深部②の直口壺（1234）が釣瓶としての使用が確実に視できるため、この資料から類推すれば庄内式新段階まで遡る可能性が高い。庄内式新段階は、大型掘立柱建物13の時期ともほぼ重なるため、同時併存していた蓋然性が高く、このことは本遺跡の性格を評価する上でも極めて重要である。

**826 大型土坑**（図181・182） P4区の中央東寄りで検出された大型土坑で、大型掘立柱建物13や掘立柱建物15と重複する。これらの建物との先後関係は、切り合いから826大型土坑が2棟の建物よりも新しく、上面に重複する北東－南西方向の823溝よりは古いことが判明した。検出面の形状は、比較的整った円形を呈し、規模は径2.9mをはかる。断面形は、底部から上方にむかって開く形状で、底部径は1.0m、検出面から底面までの深さは1.0mをはかる。埋土は、上層〔埋土1・2〕・中層〔埋土3〕・下層〔埋土4～7〕に大別でき、いずれもレンズ状に堆積することから、自然堆積と判断することができる。埋土は、全体的にみて暗色の泥質土が主体であるため、基本的には滞水状態で徐々に埋没が進行したと判断できる。ただし中層〔埋土3〕は、黒色粘土を主体とする特徴的な有機質の腐植土層で、遺物も一定量出土していることから、土器類とともに意図的に有機質を廃棄した可能性も推測で

きる。さらに遺物は、大半が上層・中層から出土であり、中層を境に堆積状況が様相が変化することがわかる。極細砂を主体とする下層〔埋土5〕については、増水時における周辺から流入土と判断でき、基本は上部が開口状態であったことがうかがえる。最下層〔埋土7〕については、粘土と砂が混在しており、加工時形成層とみなすことができる。深さが1m程度で、底部からの著しい湧水がないといった点から、水溜遺構の可能性が推測できる。

埋土からは、土師器が一定量出土し、ほかでは滑石製白玉(S32)と石製品(S31・S33)、種子が出土している。土師器は、上層(1248～1267)・中層(1270～1285)からの出土が大半で、下層からの出土量はごく僅かである(1286～1291)。また、上層・中層・下層ともに多くが破片で、復元率が高いものは少ない。種子は、梅核1点と炭化した桃核破片2点で、いずれも中層からの出土である。

上層(1248～1267)と中層(1270～1287)の出土遺物は、基本的な様相が似ており、高杯が主体で、これに布留形甕と小型丸底壺などが加わる。高杯は、大半が外面ハケ調整の無稜外反形で(1248・1250・1268・1269・1270・1271ほか)、B系統(I群系)は出土数が少ない(1251・1276)。同様に小型丸底壺も外面ハケ調整のC系統(II群系)が主体で(1255～1258)、外面にケズリを施す資料は1点に留まる(1280)。ほかには、頸部の屈曲が弱い鉢形の(1259)があり、これについては類似資料が近接する866井戸上層から一定量出土している。布留形甕については、出土数はあるものの状態の良い資料が少なく、ほとんどが小型品である(1264～1267、1283・1284)。ほかでは、直口壺とミニチュアの鉢(1260)、山陰系の大型鉢(1285)などがある。下層出土遺物は、いずれも細片で出土量も少ないが、土師器高杯(1286・1287)・大型直口壺(1290)・布留形甕(1291)とともに小型器台(1288・1289)が出土している。石製品では、上層出土の(S31)が上面に凹みがある潰台または敲台で、下層出土の(S33)は敲石である。特に敲石(S33)は、敲打痕の周辺が著しく黒化しており、なんらかの高温作業に用いられたことは明らかである。

出土遺物の時期については、上層・中層は高杯や小型丸底壺の特徴からおおよそ布留式新段階頃に比定できる。ただし、山陰系の大型鉢についてはやや古く、同様の大型鉢が出土したP5区1481井戸の出土資料(図95:505、P144/図97:531、P146)よりも型式学的にみて明らかに先行するため、布留式中段階まで遡る可能性も想定できる。その一方で下層については、小型器台を含むためやや古く中段階まで遡るが、遺物が少ないため詳細な時期の絞り込みは難しい。このように上層・中層と下層出土遺物にややタイムラグがあるため、一定期間遺構が機能したのち廃棄時に遺物を投棄した可能性が推測できるだろう。

**竪穴建物 22** (図183) P4区北東側、大型掘立柱建物13の東5mに位置する。微高地B2の南側縁辺の低地部に立地しており、調査区東端で検出されたため全体の4分の1程度の検出に留まっている。規模は、東西4.8m以上、南北3.5m以上で、貼床を伴い、周囲に幅0.15m、深さ0.05mの壁溝がめぐる。北西支柱穴である934Pは、規模が径0.3m、深さ0.45mで、埋土から布留形甕の口縁～肩部(1293)と精製の小型丸底鉢の破片(1292)が出土した。柱穴埋土断面から柱は抜き取られたと考えられ、埋戻し土から出土した大ぶりの土師器の破片は人為的に埋められた可能性が高い。

この建物に伴う遺物は、上述した934P出土の土師器に限られる。このうち体部にヨコミガキを施す精製B系統の小型丸底鉢(1292)は、胎土から搬入品の可能性が高く、底部外面にはケズリが残る。布留形甕(1293)については、胎土から在地品とみられ、端部が肥厚しない定型化以前のものと推測でき、時期については布留式古段階新相前後とみるのが妥当である。大型掘立柱建物13の廃絶後の建

第4章 遺構・遺物

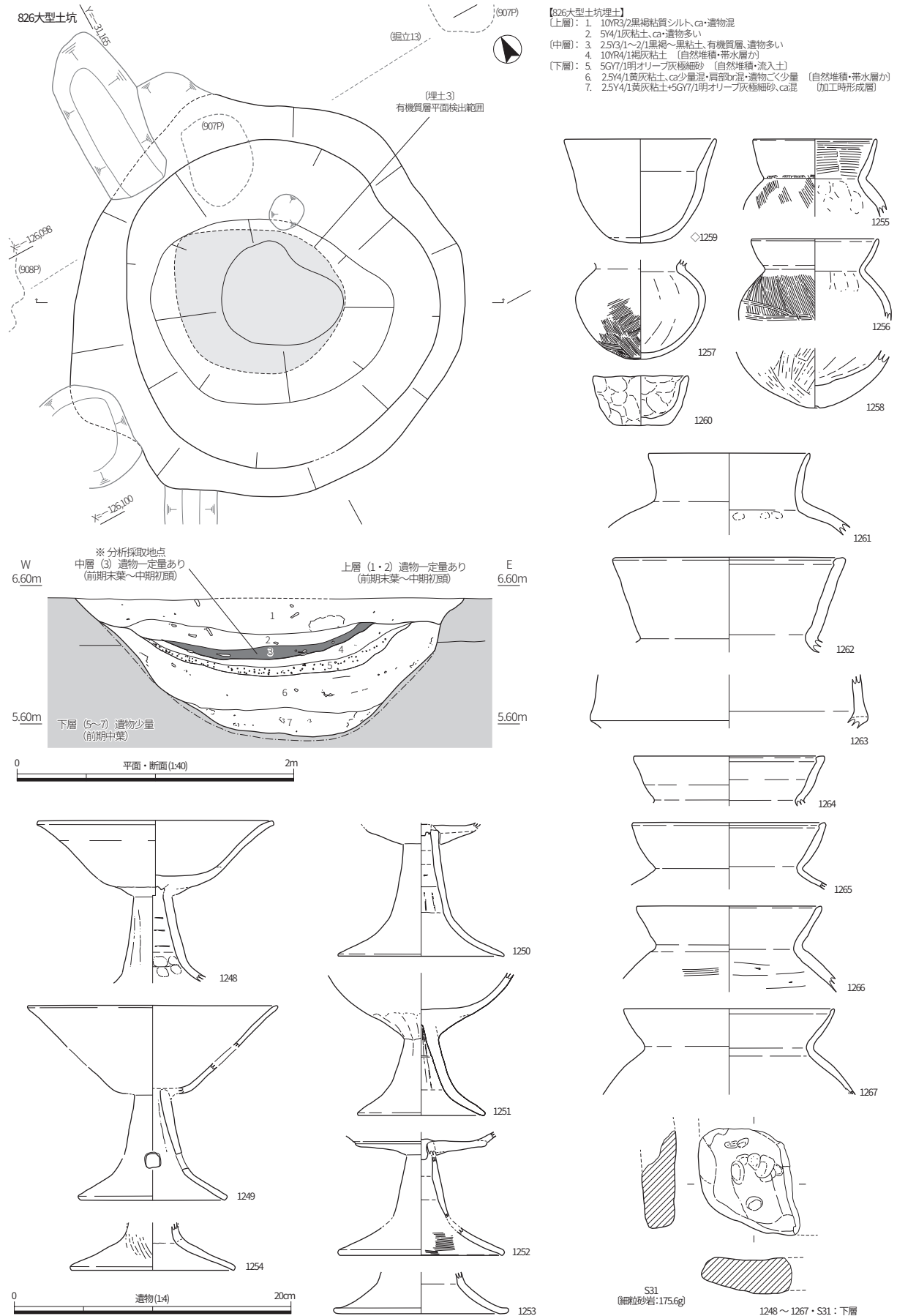


図 181. 826 大型土坑 平面・断面・出土遺物 (1)



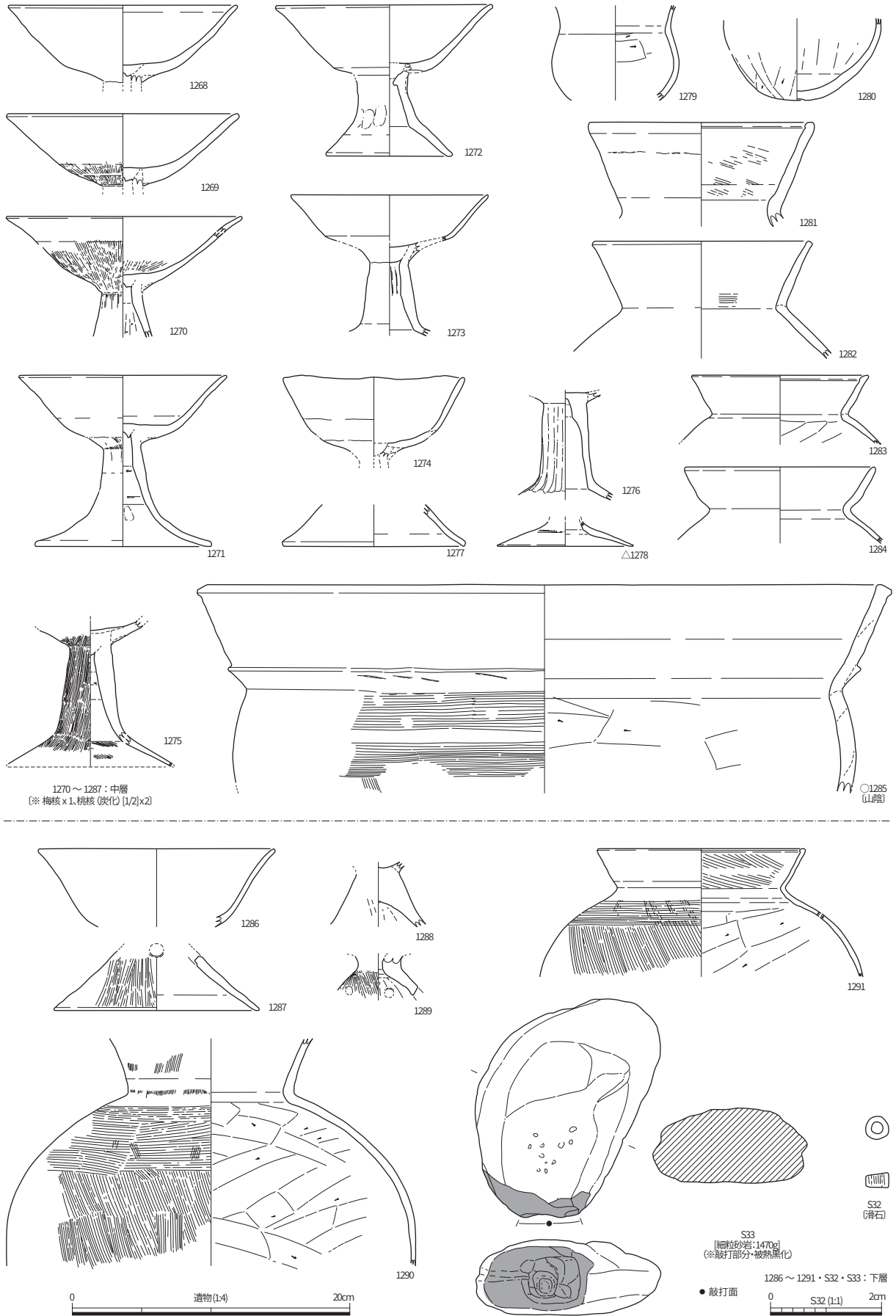


図 182. 826 大型土坑 出土遺物 (2)

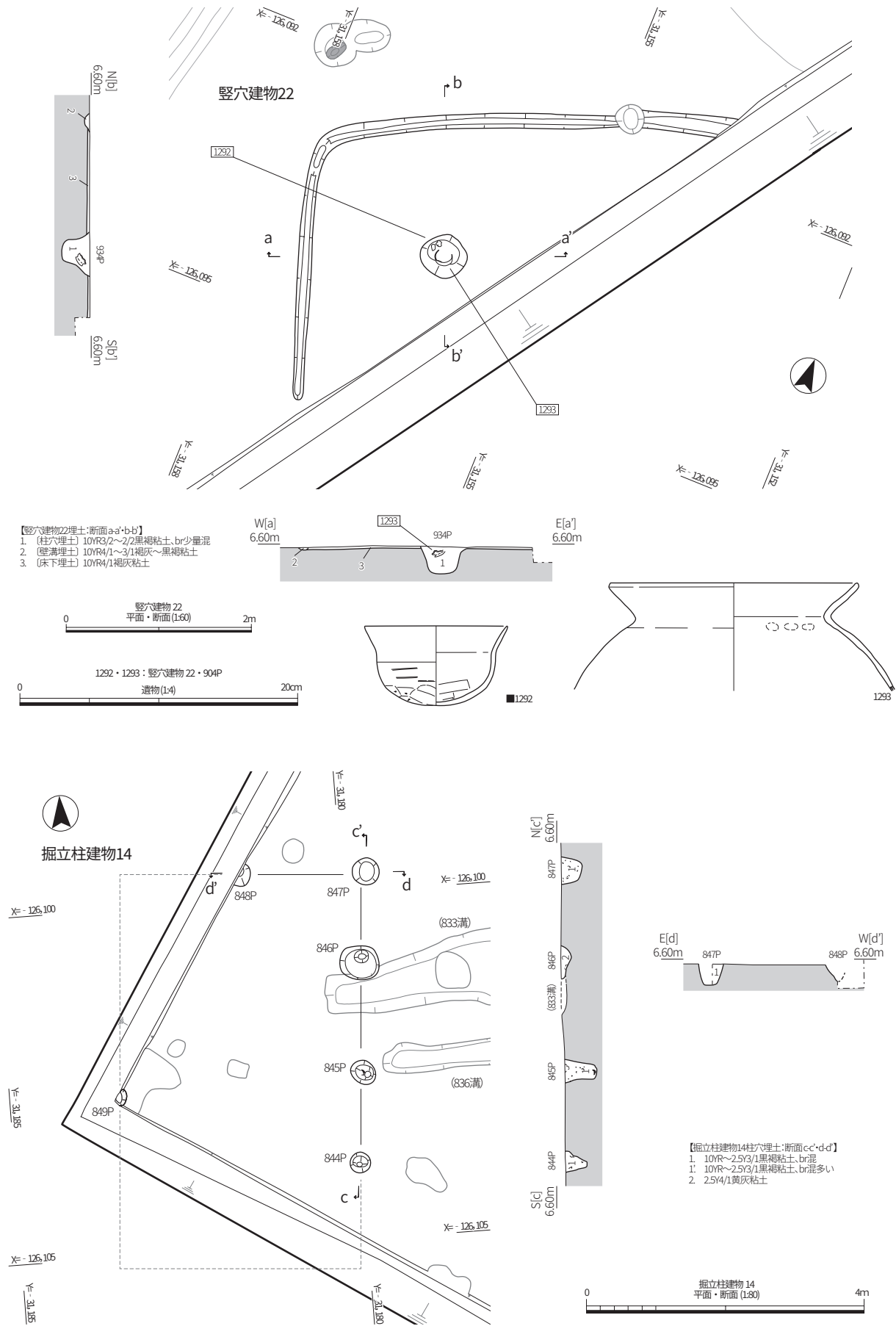


図 183. 豎穴建物 22、掘立柱建物 14 平面・断面・出土遺物

物と認識でき、建物の傾きが揃う掘立柱建物 15 と同時併存した可能性が高い。

**掘立柱建物 14** (図 183) P4 区南西端で検出された掘立柱建物で、827 落込みの西 10 m に位置する。柱穴の一部は、調査区外に位置するが、南北 4 間、東西 2 間の構造とみるのが妥当である。また微高地 B1・B2 の縁辺低地部に立地し、833 溝と部分的に重複する。建物の規模は、南北 4.3 m、東西 2.6 m、面積 11.2 m<sup>2</sup> に復元され、建物の南北軸は 4.3° 東に傾く。東側南北の柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 0.9 ～ 1.2 m におさまる。柱穴の平面形は、いずれも円形を呈し、規模は 0.3 m 前後の小ぶりのものが多い。検出面からの深さは、0.23 ～ 0.34 m でややばらつきがある。846P は、柱穴がひとまわり大きく、ほかと比べて埋土の様相も異なる。一部埋土に中世瓦が含まれることから、中世以降の攪乱を受けていることがわかる。それ以外の柱穴埋土は、いずれも第 6 層と類似する黒褐粘土を主体とするため古墳時代の建物と判断したが、中世に下る可能性も残される。時期については、柱穴埋土から出土した遺物のごく僅かであるため詳細は不明であるが、845P からは布留式新段階以降とみられる布留形の破片が出土している。古墳時代の建物と仮定するならば、やや根拠は弱い、中期初頭以降と判断するのが妥当であり、やや時期の下る建物と認識することができる。

**827 落込みほか** (図 184・185・186) P4 区南半で検出された円形に近い形状の浅い掘り込みで、中期中葉頃の須恵器・土師器がまとまって出土した。微高地 B1・B2 の縁辺低地部に立地し、北東 3 m の隣接した位置に大型掘立柱建物 13 と 826 大型土坑がある。検出面での規模は、南北 5.9 m、東西 6.3 m、深さは 0.23 m をはかる。落込みの中央下部には、長径 1.2 m、深さ 0.88 m の土坑状の落込み (915 土坑) があり、ほかにも下部に 916P などの凹みがあるが、いずれもこの 827 落込みに付随するものとみてよい。また北西肩部には、840 土坑とした楕円形の落込みがあり、調査時に別遺構と認識していたものの、遺物の出土状況から一体的な遺構と認識するに至った。

遺構の埋土は、土壌化した暗色の粘土を主体とし、大きくは炭化物を多く含む〔埋土 1〕と下半の〔埋土 2〕に大別できる。遺物は、主に〔埋土 1〕から出土し、これ以外にこの遺構の上面付近からも多数の遺物の出土がみられた。そのため本来の掘り込み面は検出面より上位にあり、第 6 層中から掘り込まれた遺構であった可能性が高い。埋土から出土した遺物のうち、大ぶりの破片については原位置を記録・図化した。遺物は、落込み内で散在的に分布する傾向にあるが、840 土坑とした北西肩部付近から初期須恵器の大甕の体部片がまとまって出土している。破片は、全体の 5% 程度出土量に留まっているが、全ての破片が接合することから、大甕の体部の一部のみが意図的に破砕された上で投棄されたと判断できる。

827 落込み埋土から出土した遺物には、土師器・須恵器・軟質土器・製塩土器・石製品がある (1294 ～ 1316、S35・S36)。上面出土遺物 (1317 ～ 1336、S34) は、周辺遺構や包含層に伴う遺物を含む可能性があるが、915 土坑・916P・840 土坑などの関連遺物 (1337 ～ 1343) も含めてよく似た組成を示しており、基本的には関連する遺物と認識して大過はないと思われる。この中で、上面出土の土師器の壺類 (1330・1331) と、840 土坑出土の生駒西麓産大型複合口縁壺の肩部 (1343) が古式土師器であるが、ほかはいずれも中期前葉～中葉の時期にまとまっている。供膳具では、土師器の高杯 (1303 ～ 1308、1322 ～ 1326、1338・1339) と須恵器の杯類 (1294 ～ 1301、1317 ～ 1320、1340・1341) がそれぞれ一定数あり、ほかに少数の須恵器の高杯が少数含まれる (1302、1321)。土師器高杯は、残りの良い資料が少ないが、椀形高杯が主体で (1303 ～ 1305、1323 ～ 1326)、これに無稜外反高杯 (1322) 1 点と大型有段高杯とみられる資料数点 (1306・1307、1327) が含まれる。杯身・杯蓋は、出土量が一

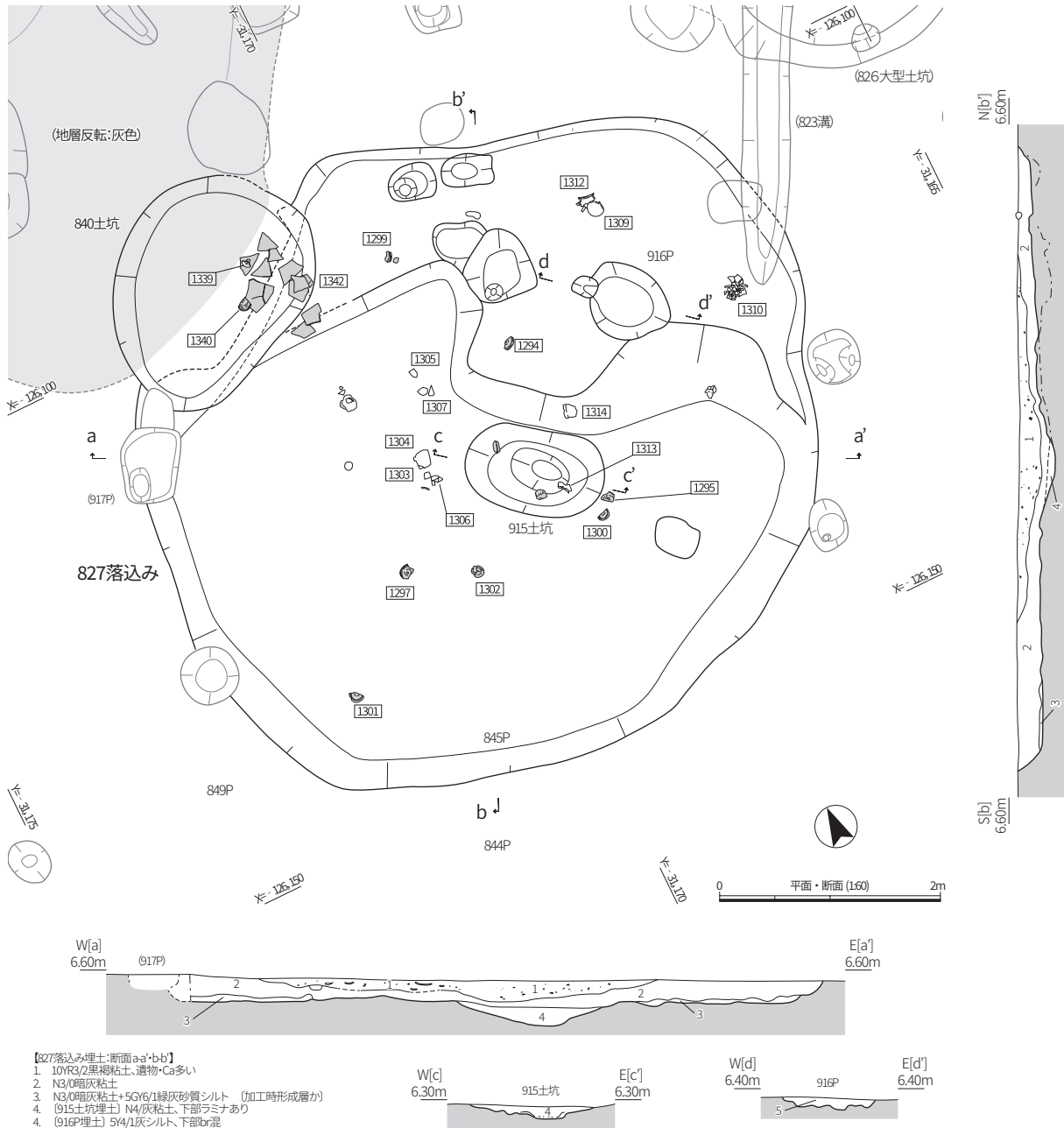


図 184. 827 落込みほか 平面・断面

定量あり、天井部や底部に丁寧な回転ヘラケズリを施すものが多く、杯身は端部が丸いものや面をもつ資料がほとんどで、段をもつ資料は少ない。貯蔵具では、土師器直口壺（1309・1310）と須恵器の甕（1328）・壺口縁（1332・1333）・大甕（1342）があり、このうち土師器の直口壺2点（1309・1310）は、口縁部のみが欠損しており意図的に打欠きされた可能性が高い。大甕（1342）は、胴部最大径が70 cm以上に復元でき、部分的に浅い同心円の痕跡が残るが、丁寧に内外面がナデ消された優品である。また胎土は精良で、灰白色を呈することから陶邑窯以外の生産地の資料の可能性が高い。このほかに須恵器では、器台脚部の破片（1334）が1点出土している。煮炊具では、甕は出土量が少なく、布留形甕（1311・1312）と外反口縁甕（1313）があり、ほかでは甗（1315・1316、1337）や小型の鉢（1314・1329）などがみられる。製塩土器は、小型椀形の破片が計7.5g出土し、外面調整はナデ（1335）とタタキ（1336）の両方の資料がある。土器以外では、結晶片岩の潰石（S34）、潰台（S36）、擦台（S35）などの石製品



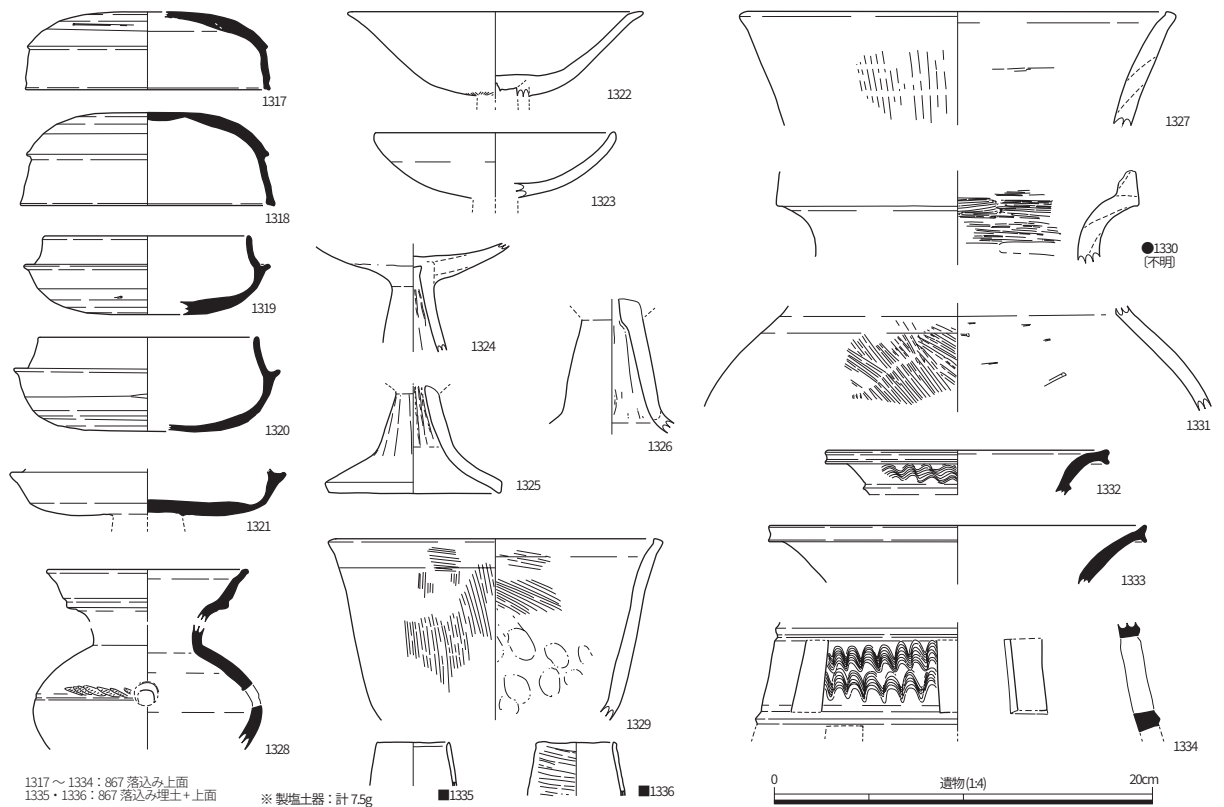
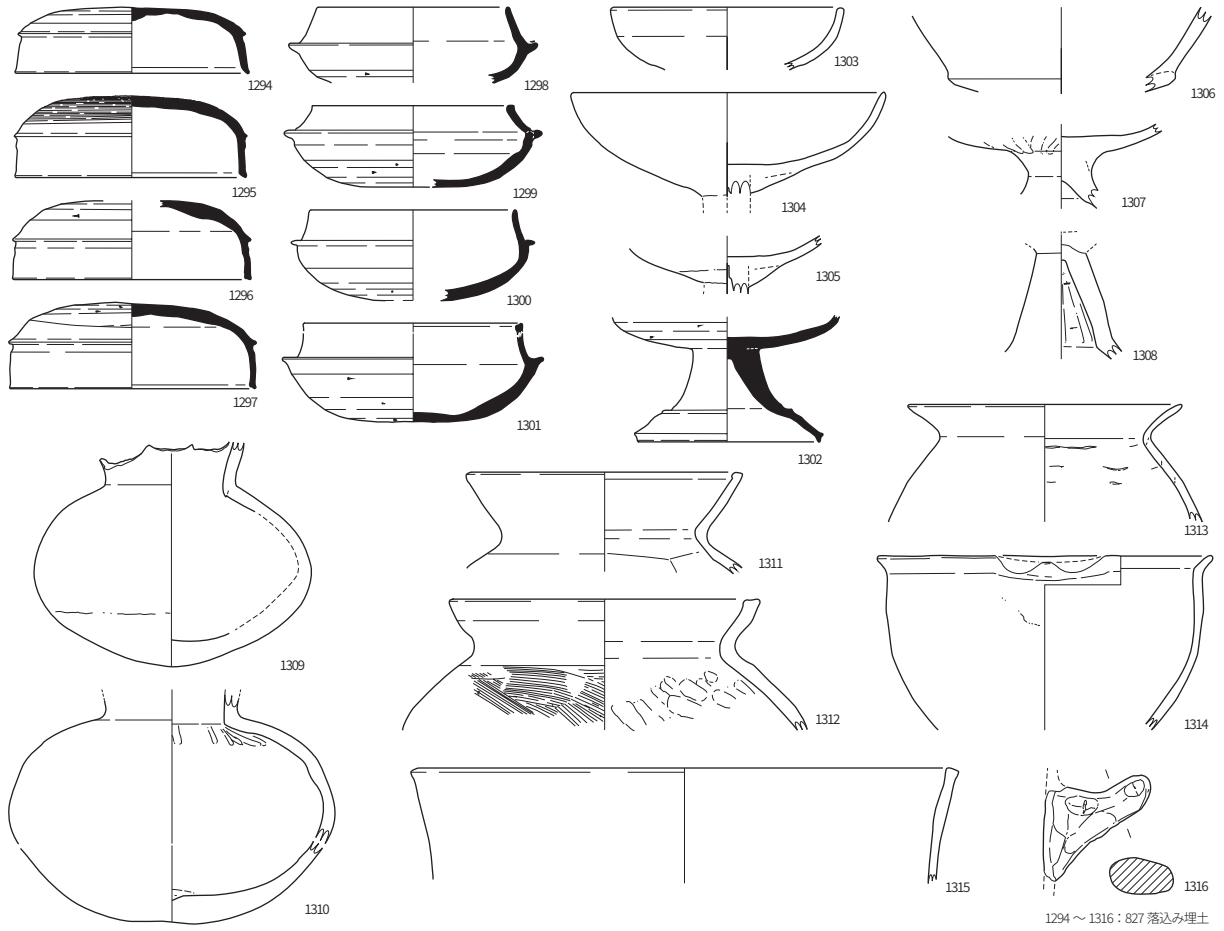


図 185. 827 落込みほか 出土遺物 (1)

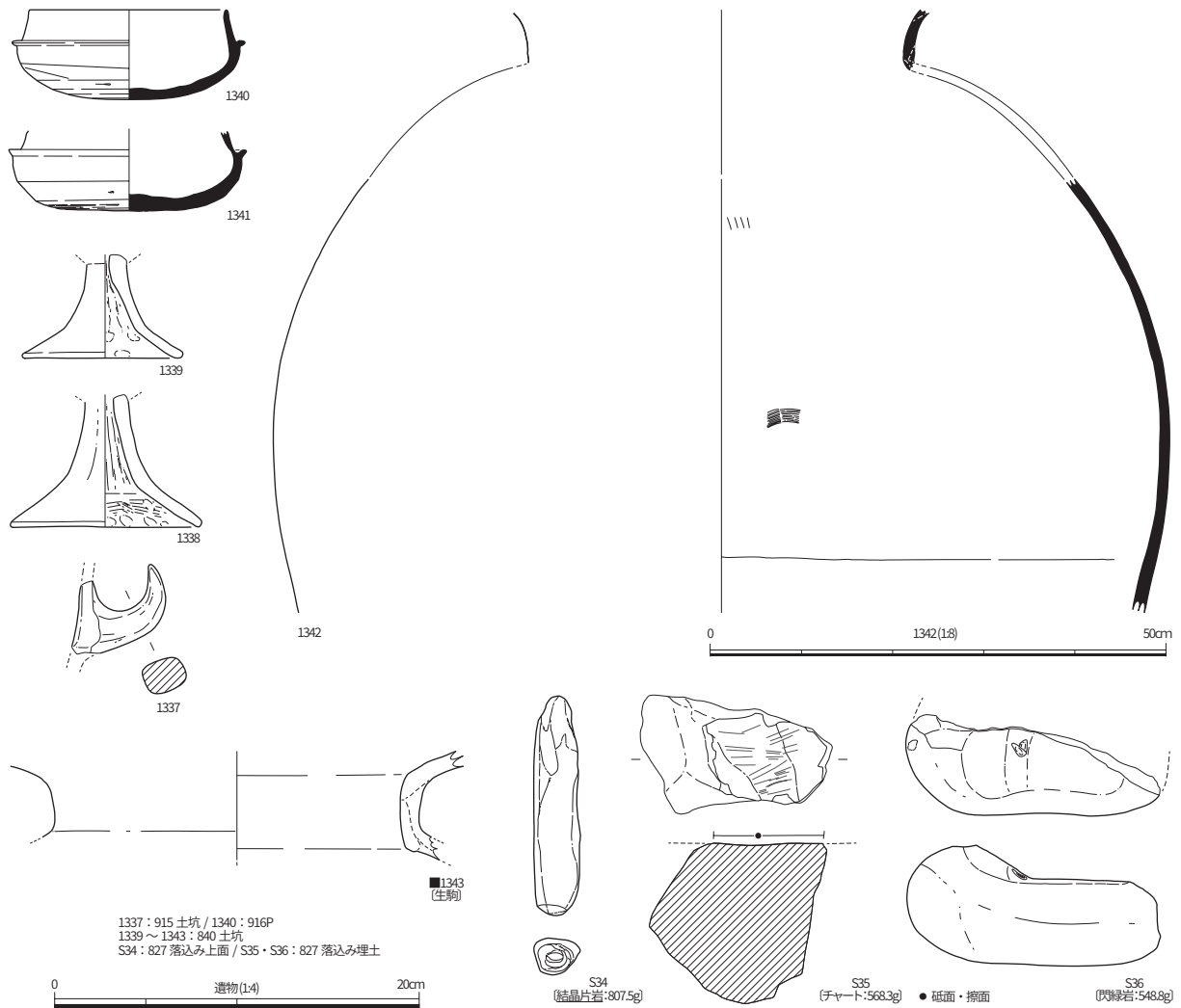


図 186. 827 落込みほか 出土遺物 (2)

がある。

時期については、土師器は辻編年3段階に比定でき、須恵器は型式学的にみてTK216型式頃を中心とする。須恵器・土師器の編年的な矛盾はなく、この時期の須恵器が豊富に出土する事例は摂津ではあまり多くないため、注目される資料といえる。遺構の性格としては、P5区450落込み、B-1区33落込み、近在するP4区の867落込みなど、類似遺構が周辺一帯でいくつかみつかり、居住域の縁辺部に存在する廃棄土坑と認識できる。出土遺物は、概ね一時期にまとまる傾向がみられるが、出土状況からは一括性の高さを保証することがやや難しく、廃棄が長期間に及ぶものであるか、短期的なものであるかを結論付けるには出土遺物のより詳細な検討が必要である。

**854 大型土坑** (図 187) P4区の北西で検出された大型土坑で、866井戸の北東6mに位置する。上面に中世の631水路が重複しているため、一定程度の削平を受けているが、下部は良好な状態で残存していた。検出面の形状は、南北にやや長い楕円形で、規模は長径2.1m、短径1.8mをはかる。断面形は、底部から上方にむかって開く形状で、底部径は0.6m、検出面から底面までの深さは0.91mをはかる。埋土は、上層〔埋土1~4〕と下層〔埋土5~8〕に大別できる。上層には、泥質土がレンズ状に堆積しており、自然堆積と判断できる。下層〔埋土5~7〕については、粘土と極細砂が互層状に堆積しているため、滞水と流入を繰り返していたことがわかる。最下層〔埋土8〕については、粘土と砂が混在

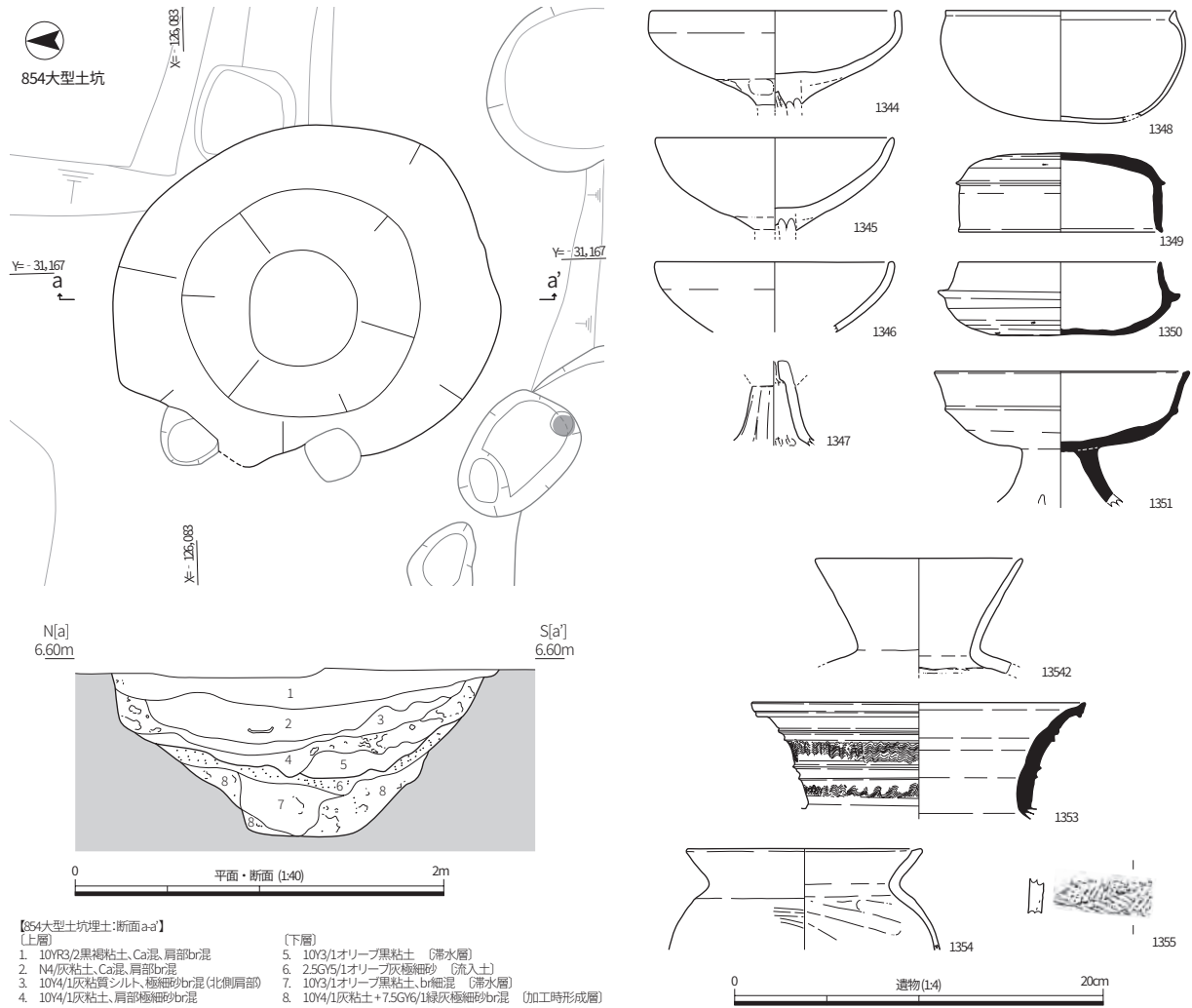


図 187. 854 大型土坑 平面・断面・出土遺物

しており、加工時形成層とみなすことができる。遺構の性格ははっきりとはわからないが、深さのある遺構であり、826 大型土坑と同様の水溜遺構の可能性が推測できる。

埋土からは、土師器・須恵器が一定量出土している (1344～1355)。大半は破片であるが、須恵器の中型壺 (1353) は口縁部が完存している。供膳具・壺類ともに土師器と須恵器が共伴する点が特徴で、土師器の椀形高杯 (1344～1347) は辻編年 3 段階に、須恵器壺 (1349～1351・1353) は TK216 型式頃に比定できる。ほかには、土師器布留形甕 (1354) と外面タタキの軟質土器小片 (1355) が出土している。遺物の出土量は少ないが、土師器・須恵器の各器種が揃うため土師器と須恵器の併行関係を考える上で良好なセットといえる。

**838 土坑** (図 188) P4 区の北西で検出された土坑で、854 大型土坑の北 5 m に位置する。上面に中世の 631 水路が重複しており、西半分が大きく攪乱を受けているが、攪乱は底部までは及んでいない。検出面の形状は、隅丸方形に近い形状で、規模は 1.6 m 以上、検出面から底面までの深さは 0.46 m をはかる。埋土は、ブロック土を主体としており、人為的に埋め戻されたことがわかる。埋土からは、土師器・須恵器・土塊・チャートなどが出土しているが、細片が多い。そのため図化できたものは、甕とみられる須恵器の口縁部片 (1356) に限られる。時期については、出土遺物から TK216～208 型式頃に位置づけられる。854 大型土坑と比べるとひとまわりほど小さく浅いが、埋土の堆積状況が類似し、

時期も近いことから、類似する性格の遺構と推測される。

**822 土坑** (図 188) P4 区の中央西端で検出された土坑で、866 井戸の南東 4 m に位置する。調査区西側に拡がるため全体の規模・形状は不明であるが、大きさが 1.1 m 以上で、検出面からの深さは 0.19 m をはかる。埋土は、ブロック混じりのオリーブ黒粘土を主体としており、人為的に埋め戻されたことがわかる。埋土から出土した遺物は、土師器の細片が 2 点のみのため詳細な時期比定は困難であるが、埋土の特徴から古墳時代の遺構の可能性が高い。

**834 土坑** (図 188) P4 区の中央西端で検出された土坑で、822 土坑の南東 7 m に位置する。調査区北西側が側溝の掘削によって部分的に損壊を受けているが、形状は楕円形と判断できる。規模は、短径 1.3 m で、長径は 1.5 m 程度に復元できる。検出面から底面までの深さは 0.27 m で、埋土はオリーブ黒粘土を主体とする。埋土から出土した遺物は、土師器の細片が 1 点のみのため詳細な時期比定は困難であるが、埋土の特徴から古墳時代の遺構の蓋然性が高い。

**863・864 土坑** (図 188) 827 落込みの北西 4 m に位置し、ふたつの円形の土坑が重複している。切り合い関係から、北側のひとまわり大きい 864 土坑が先行し、南側の小さい 863 土坑が後出する。規模は、864 土坑が径 1.0 m、深さ 0.51 m をはかり、南側の 863 土坑が径 0.6 m、深さ 0.31 m をはかる。埋土は、底部に加工時形成とみられるブロック土がレンズ状に堆積し、上半部は褐灰または黄灰粘土が堆積する。それぞれの土坑埋土からは、土師器の細片が少量出土しており、863 土坑から出土した V 様式系の小型甕 (1358) と 864 土坑から出土した高杯接合部 (1357) をそれぞれ図化した。V 様式系の甕については、庄内式～布留式古段階頃に位置づけられるが、先行する 864 土坑の高杯接合部は、辻編年 3 段階頃に位置づけられるため、ふたつの土坑はいずれも中期中葉以降に下る。遺構の機能は不明であるが、堆積状況が酷似しており、同一の目的で繰り返し掘削された土坑と認識できる。

**833・836 溝** (図 188) P4 区南東で検出された近接・並行する 2 条の溝で、827 落込みの西 5 m に位置し、掘立柱建物 14 の東側南北筋と重複する。北側の 833 溝がやや幅広で長く、規模は長さ 3.8 m、最大幅 1.1 m をはかる。南側の 836 溝は、長さ 3.2 m、幅 0.5 m をはかる。検出面からの深さは、833 溝が 0.08 m、836 溝が 0.04 m で、埋土はいずれもブロック混じりの黒褐粘土を主体とする。833 溝の埋土からは、土師器細片が少量出土しており、V 様式系のくの字甕の口縁部 (1359) を図化した。遺物が少量のため詳細な時期比定は難しいが、庄内式～布留式古段階の範疇におさまるものとみられる。836 溝からは、遺物の出土はないが、ふたつの溝の位置関係と埋土の類似性から同時期の関連遺構と推測される。

**独立棟持柱建物 3** (図 189) B-1 区中央付近で検出された独立棟持柱をもつ掘立柱建物で、東 9 m には掘立柱建物 2 が、南東 7 m には 32 井戸が位置する。微高地 B の東側斜面の縁辺部に立地しており、周囲は遺構が希薄で、周囲では柱穴がほとんど検出されていない。東西 2 間×南北 1 間の構造で、規模は東西桁行の北側が 3.4 m、南側が 3.1 m、南北梁行が 3.3 m をはかり、面積は 11.2 m<sup>2</sup> である。建物の南北軸は、10.7°西に傾く。柱筋の通りは概ね良いが、東西の柱間寸法は北側が 1.7 m の等間隔で、南側は 1.4 m・1.6 m である。

独立棟持柱は、東西軸にのびており、西側の 51P が妻側から 0.8 m 離れた位置にある。東側については同一直線状に柱穴が 2 基並んでおり、妻側からそれぞれ 0.8 m (52P)、1.5 m (53P) 離れた位置にある。西側 51P から距離は、東側 52P までが 4.9 m、東側 53P までが 5.6 m をはかる。東側の柱穴については、いずれも浅く不明確であり、内側の 52P は建物本体との距離が西側と等しいものの非常



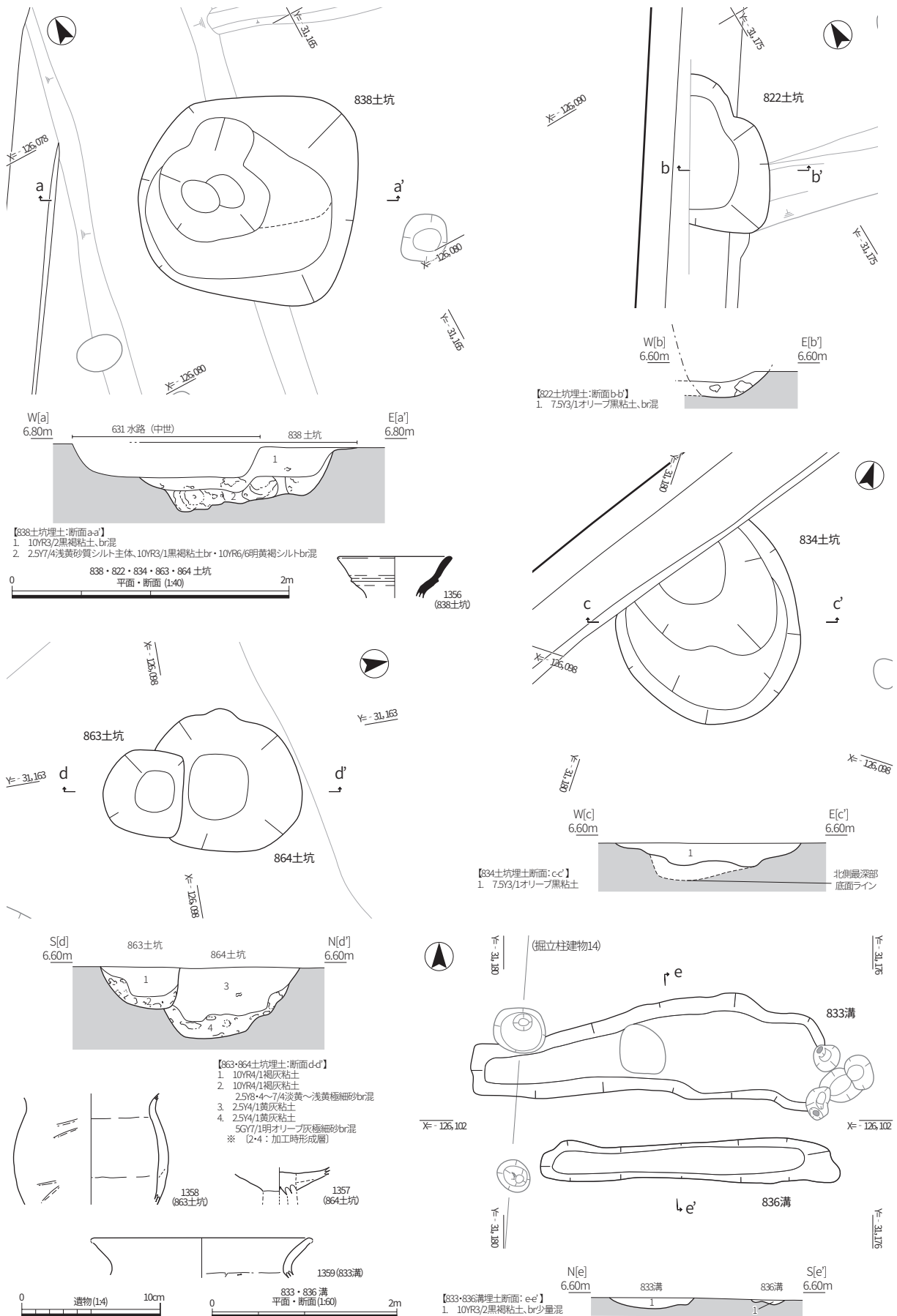


図 188. 838 土坑、822 土坑、834 土坑、863・864 土坑、833・836 溝 平面・断面・出土遺物

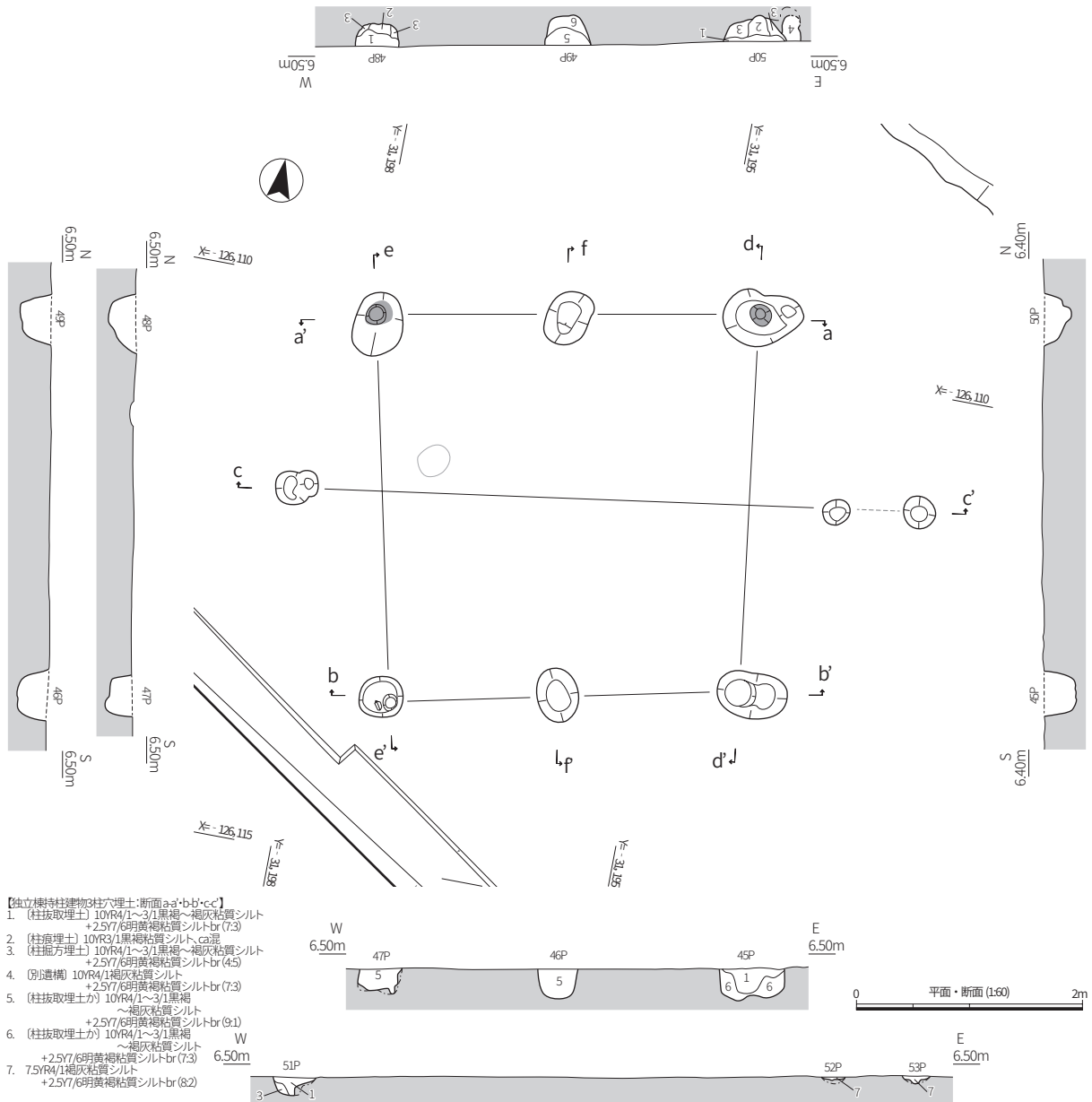
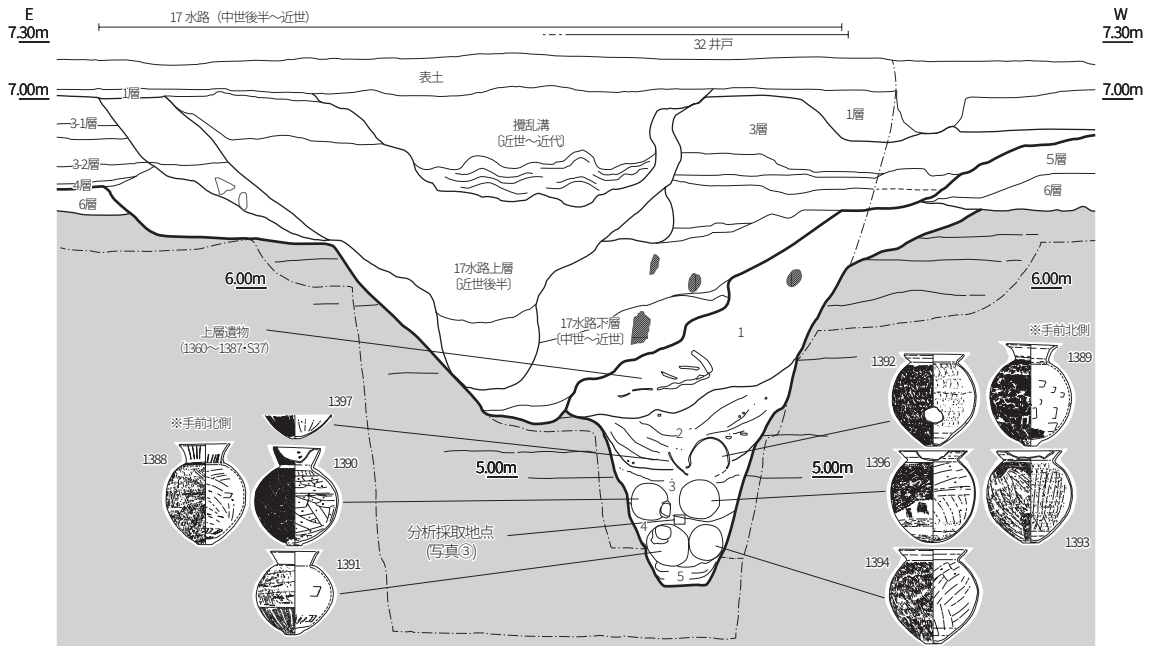
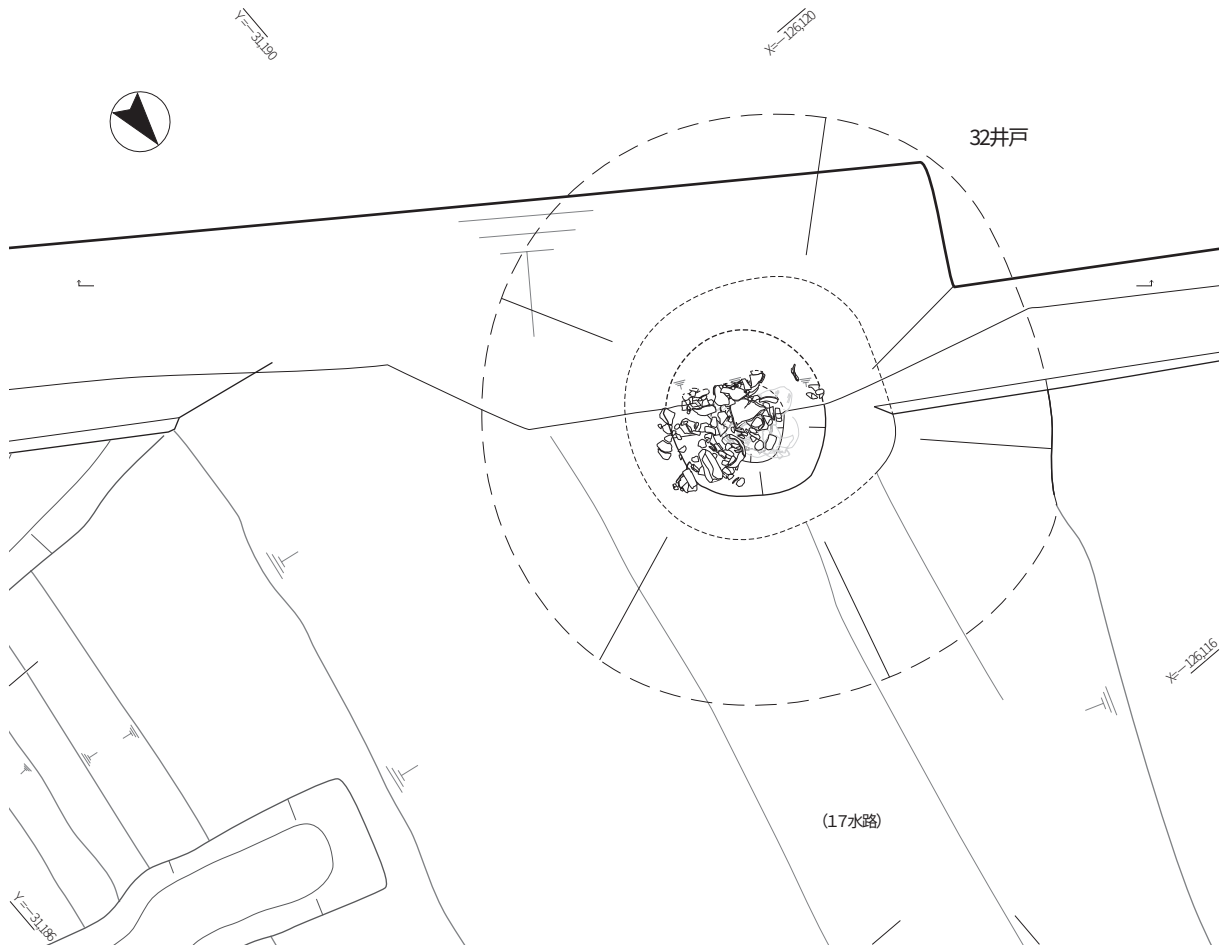


図 189. 独立棟持柱建物3 平面・断面

に浅い。このため東側の棟持柱は、どちらの柱穴が建物を構成するものであるかは明確でなく、片方が伴う構造と両方が伴う構造の、ふたつの復元案を提示しておきたい。

柱穴の平面形は、円形を呈するものが多い。検出面での大きさは0.3～0.5 mで、0.4 m前後のものが多い。検出面からの深さは0.2～0.25 mで、柱あたりが残るものが多い。柱は基本的には抜き取られているが、北側の隅柱 48P・50P では下部で柱痕が残存していた。柱あたりや柱痕などから、柱の太さは0.15～0.2 m前後に復元される。柱掘方埋土および柱抜取埋土は、いずれもブロック土を主体とする。棟持柱の柱穴については、側柱に比べるといずれもひとまわり小さく、径は0.25～0.3 m前後をはかる。また上述したように、いずれも浅く、検出面からの深さは西側の51Pで0.17 m、東側の52P・53Pでそれぞれ0.03 m、0.07 mをはかる。

柱穴のうち、南側の側柱 45P・46P・47P から土師器片が少量出土しているが、いずれも細片のため図化できるものはなかった。そのため詳細な時期比定は難しいが、いずれも古式土師器とみられ、須恵



【32井戸埋土:断面】

1. (上層) N3/層灰粘土、遺物多い〔滞水層〕  
※ 遺物多数投棄、主に破片
2. (中層) N3/層灰粘土+2.5Gオリブ灰粘土、ca・br混、ラミナあり〔流入土〕

- (下層) ※ 完形・壺甕類・桃核ほか投棄
3. N3/層灰粘土+10Y5/1灰粘土、ラミナややあり
4. 2.5G/5/1オリブ灰砂質シルト、土壌br混
5. 7.5Y4/1灰粘質シルト、土壌br混 (機能時堆積土)

※ 上面17水路埋土堆積状況・断面註記:P60・図版33

0 2m 平面・断面(1:40)

図 190. 32井戸 平面・断面

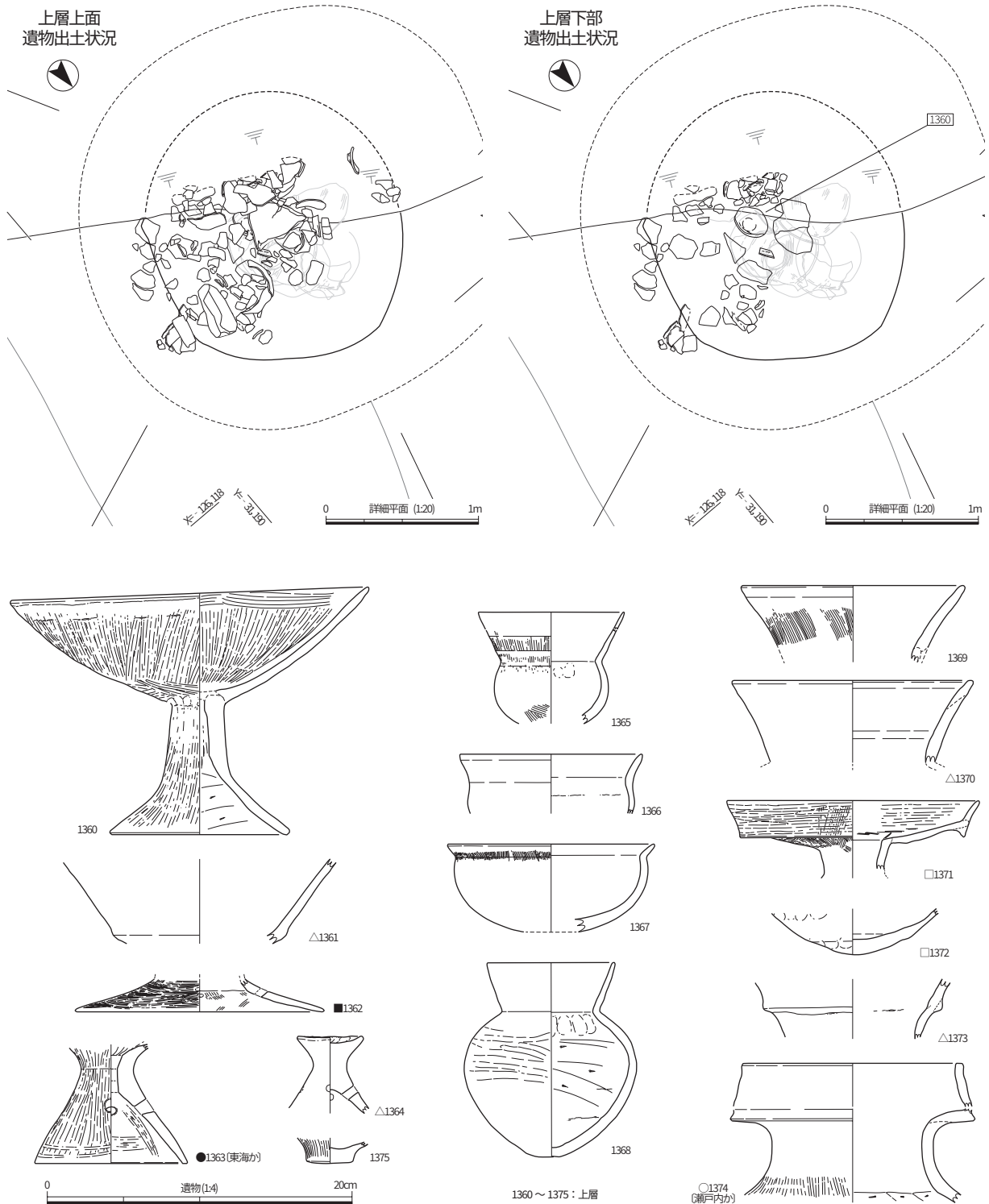


図 191. 32 井戸 遺物出土状況 (1)・出土遺物 (1)

器を含まない。このことから建物の帰属時期は、前期以前である可能性が高く、南側の近接した位置にある 32 井戸や、北側の 34 土坑との関連が注目される。

**32 井戸** (図 190・191・192・193・194) B-1 区中央で検出された井戸で、北西 8 m には独立棟持柱建物 3 が位置する。微高地 B1 の東側斜面地縁辺部に立地し、上面には中近世の 17 水路が重複する。このため上半が大幅な削平を受けており、17 水路の底面付近でこの井戸を検出した。検出面での規模は径約 1 m であったが、一部が調査区南壁にかかっており、断面から開口部が漏斗状に大きく開く形状



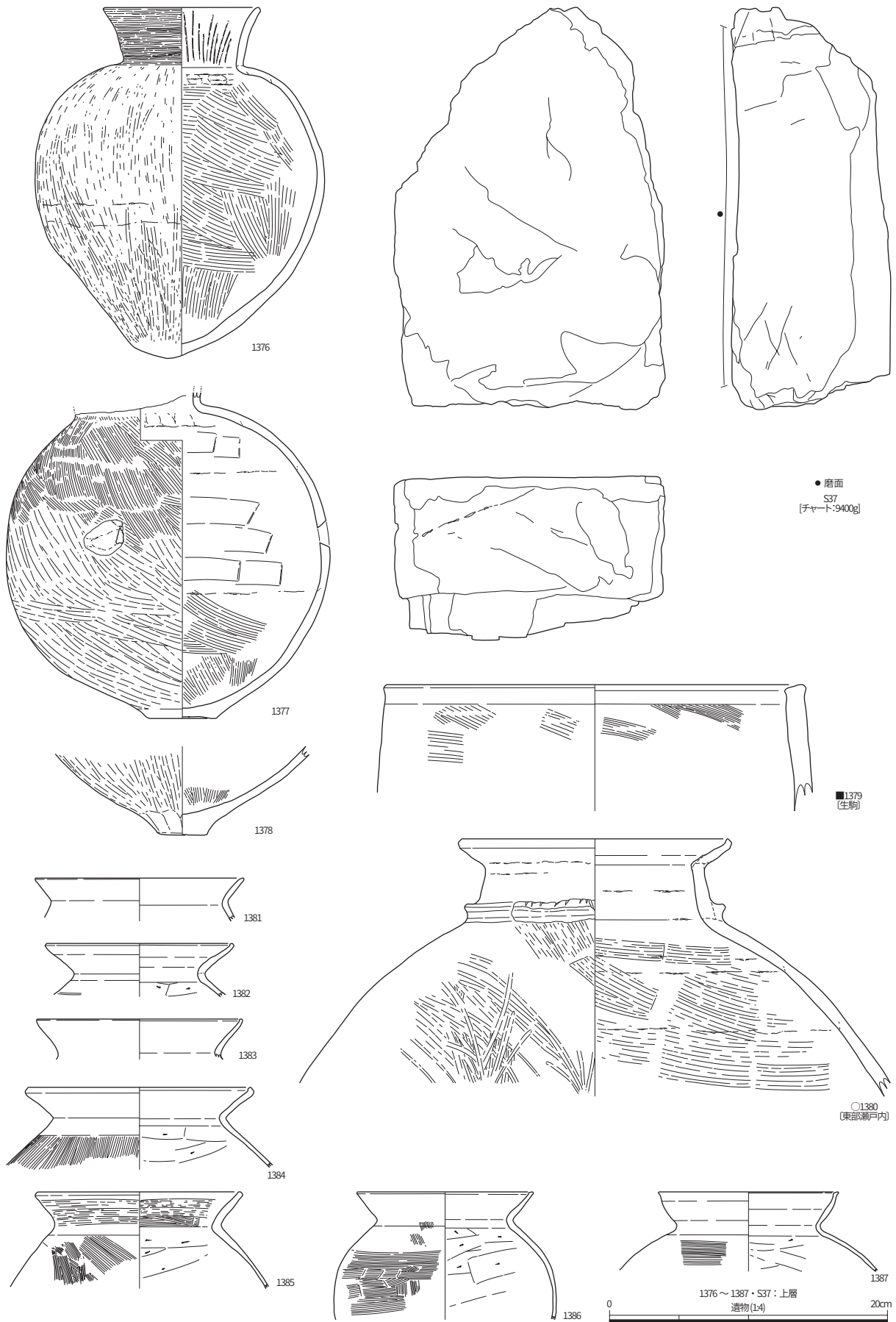


図 192. 32 井戸 出土遺物 (2)

第4章 遺構・遺物

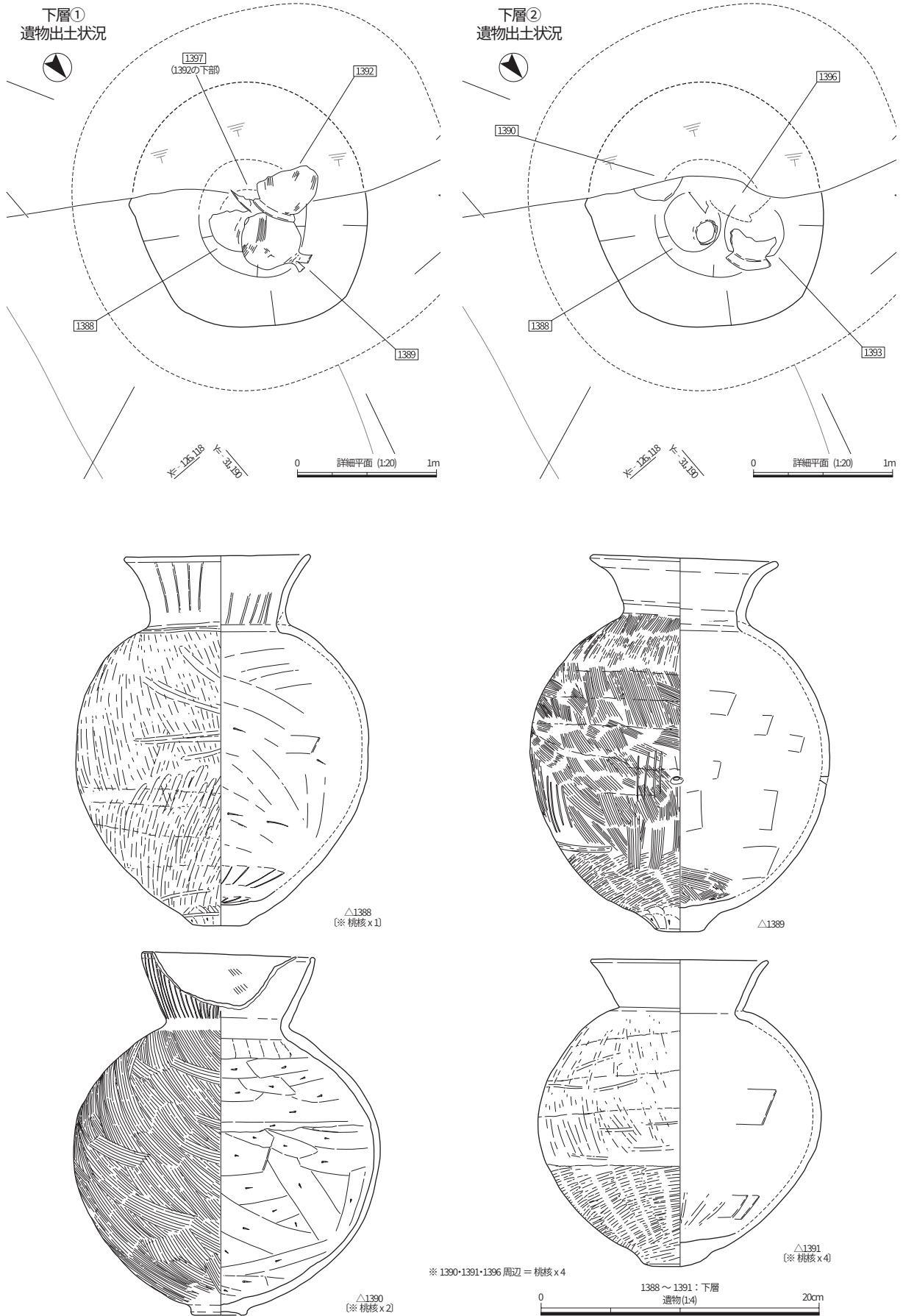
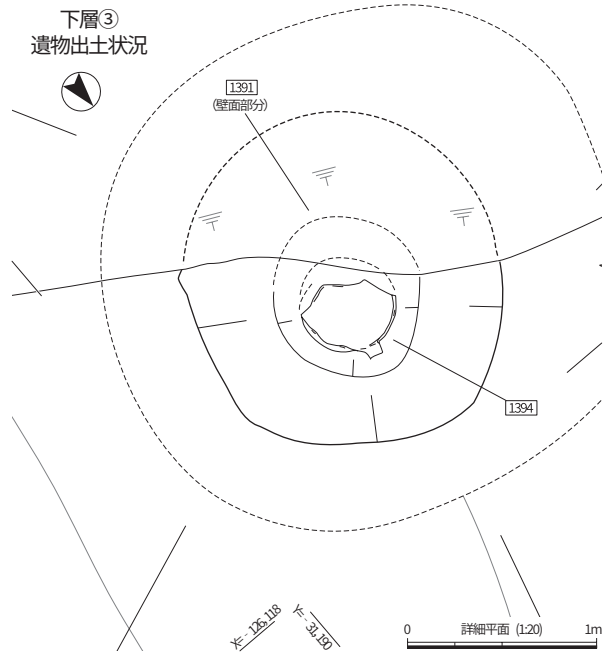


図 193. 32 井戸 遺物出土状況 (2)・出土遺物 (3)

第5節 古墳時代の遺構・遺物 (2). 西側エリア



【下層壺甕類出土状況模式図】

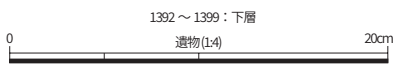
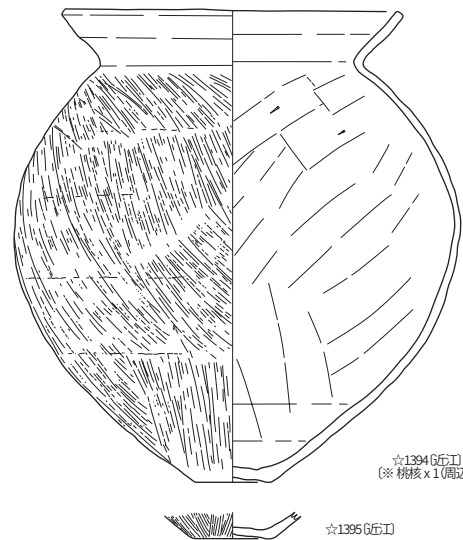
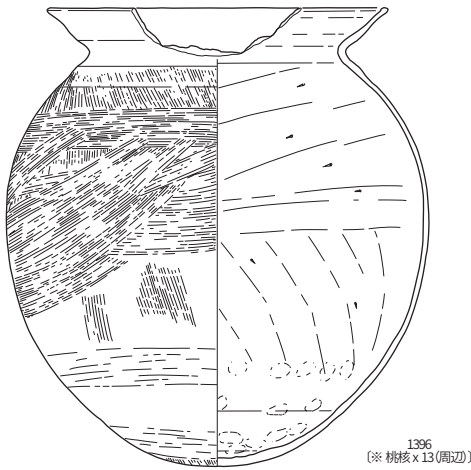
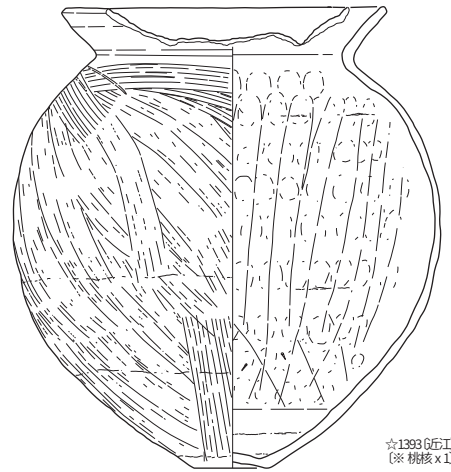
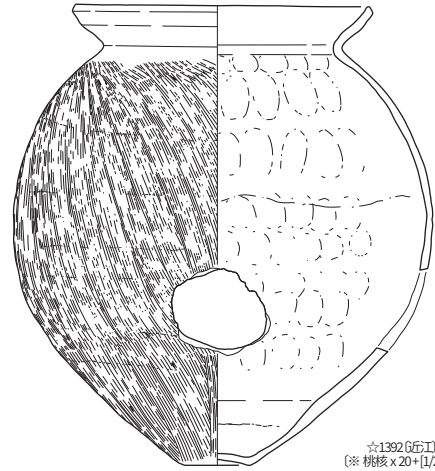
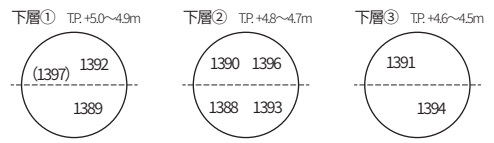


図 194. 32 井戸 遺物出土状況 (3)・出土遺物 (4)

であったことがわかる。本来の形状が円形を呈していたと仮定した場合、径約3mの規模に復元される。底部径は0.3m、上面から底面までの深さは2.6mをはかる。調査時には、17水路の南壁沿い底部付近から古式土師器の集積が確認されたことから下部遺構の存在に気づき、土師器の集積（上層出土遺物）を取り除いた。その後、下半に筒状の落込みがあることが確認されたため井戸と認識し、底部の調査をおこなった。

埋土については、断面の検討から上層〔埋土1〕・中層〔埋土2〕・下層〔埋土3～5〕に大別できることが判明した。特に上層〔埋土1〕と下層〔埋土3～5〕からそれぞれ遺物がまとまって出土しているが、この間に0.3mの間層を挟む。主に流入土と判断できる中層〔埋土2〕が介在しており、上層と下層の出土遺物には、時間幅は不明であるが一定のタイムラグがあったと判断できる。

遺物の出土状況は、上層では古式土師器の破片と大ぶりの石臼1点（S37）が集積した状態で出土しており、各器種がほぼ網羅的に揃っている点が特徴といえる（図191・192）。いずれも破片が細かく、ほぼ全形が復元できる2点の大型壺（241・242）もばらばらの破片の状態で出土していることから、意図的な破砕を受けた上で投棄されたと判断できる。その一方で下層出土遺物は、完形に近い形で直口壺と甕がまとまって出土しており、様相が大きく異なる（図193・194）。小さな破片資料を除けば、いずれもほぼ完形に復元ができ、口縁部の打欠きや体部の穿孔がみられる。また甕の体部外面は、煤が明瞭に付着しており、使用のち意図的な破壊を受けた上で井戸に投棄されたことがわかる。壺・甕類は、上下3重に積み重なった状態で出土したが、東側に甕類が、西側に直口壺が偏る傾向がみられた。このことから器種によって投げ込みの位置が異なっていた可能性が推測できる。さらに壺・甕類の内外からは、桃核が55点出土している。桃核は、55点のうち完存するものが49点、2分の1に割れているものが6点で、特に甕（1392）の内部には24点が含まれていた。もともと種のみであったのか、果実がついた状態であったかは不明であるが、内部に桃を入れた状態で壺・甕類が投棄されたことがわかる。ほかに種子では、メロン類の種子が少量出土している。なお南側約半分が調査外に及ぶため、未回収の遺物があると思われる。特に上層の遺物は、明らかに南側にまで拡がっており、未回収の遺物が多いと予想される。

出土遺物のうち上層出土遺物は、上述したように土師器の各器種がほぼ網羅的に揃っている。高杯は、全形を復元できるタテミガキのA系統（1360）と細筋ヨコミガキを施す精製B系統の搬入品（1361・1362）が共伴する。小型器種では、小型器台（1363・1364）・小型丸底壺（1365）・小型丸底鉢（1366・1367）がある。穿孔が脚部上位にある内湾脚部の小型器台（1363）は東海系で、小型丸底土器のうち外面ハケ調整の壺（1365）と鉢（1367）はC系統と認識できる。ミニチュアの器台（1364）は珍しいが、纏向遺跡に類例がある<sup>34)</sup>。壺類は、大・中・小の各サイズが揃っており、二重口縁壺と直口壺がある（1368～1380）。中・小型品では、（1344）が瀬戸内系、ミニチュアの垂下口縁の二重口縁壺（1371）は胎土から精製B系統の模倣品と認識できる。小型二重口縁壺は、古墳での出土事例が多いことから古墳への供献が主たる目的とされており、注目される<sup>35)</sup>。大型品では、復元率の高い直口壺（1376）と頸部がない（1377）がいずれもタテ方向の調整を基調とするA系統で、（1376）が尖底、（1377）が平底である。また（1377）には、体部に内側からの穿孔があり、口縁部も人為的に打欠きされた可能性がある。ほかでは、生駒西麓産の大型複合口縁壺（1379）、頸部の形状から東部瀬戸内系と推測される（1380）などの外来系が含まれる。甕は、いずれも外面ハケ内面ケズリ調整の布留形の範疇で捉えることができ、口縁部の形態や体部のハケの原体にバリエーションがある（1381～1387）。



下層出土遺物では、ほぼ完形復元できる直口壺4点(1388～1391)と甕4点(1392～1394・1396)が主な遺物で、ほかにA系統の高杯脚部(1398)と甕の口縁部1点(1399)と底部2点(1395・1397)が出土している。完形の8点は、上述したように人為的な打欠きや体部の穿孔を伴うものが多く、直口壺(1390)と甕(1393・1396)には口縁部に打欠きが、直口壺(1389)には胴部中央に小円孔が、甕(1392)には胴部中央下半寄りに穿孔がそれぞれみられる。直口壺4個体と甕4個体は、いずれもサイズが近いが、形式や調整手法にバリエーションがある。直口壺は、いずれも平底で外面タテ方向の調整を基調とするA系統の範疇で捉えることができるが、プロポーシオンは、口縁部が開き気味に立ち上がり端部が外反する(1388・1389)と、直立内湾気味に立ち上がる(1390)、やや外開きに立ち上がる(1390)に区分できる。内外面の調整方法もばらばらであり、製作地(者)が異なる可能性が高い。甕については、平底3点(1392～1394)と布留形甕(1396)に大別でき、前者は特徴的な上がり底の形態から近江地域からの影響を看取できる。ただし口縁部の形状は、内湾気味にのびる布留形の範疇で捉えることができるため、近江と畿内の折衷的な資料と理解することができる。さらに体部の粗いハケなどの調整手法は、湖南地域との親縁性があるため、当地の製作集団との関わりが濃厚であるが、これまでに類似資料の報告はないため、近江からの搬入品であるか、畿内での臨地的な製作であるのかは判然としない。なおこの近江系折衷甕と呼べる3点は、内外面の調整手法や調整に用いた工具に明らかな差異があり、これは直口壺と同様に製作者(地)の違いを反映するものとみてよいだろう。布留形甕(1396)については、やや長胴気味のプロポーシオンで、球胴化・定型化以前の資料と認識できる。布留式古段階古相頃に時期比定ができ、これについては外面付着の煤と中から出土した桃核を対象にAMS年代測定を実施した。その結果、外面の煤は1世紀後半～2世紀後半、桃核は2世紀前半～3世紀中頃の年代値が得られている【第5章第2節】。分析資料どうしの年代値の差と、煤の分析値が既存の年代的枠組みと大きく異なる点が問題であるが、参考データになる。ほかの破片資料については、外反する口縁部(1399)が体部内外面の調整からV様式系と布留系の折衷品、底部(1395)が近江系または近江系折衷品、底部(1397)が庄内系または布留系と捉えることができる。なお上述したように、下層出土遺物の内外からは桃核が多数出土している。その内訳は土器とともに図示しているが、近江折衷系の甕(1392)の中から24点、布留形甕(1396)の周辺で13点がそれぞれ出土している。

出土遺物の時期については、下層出土遺物が上述したように、布留形甕(1396)から布留式古段階古相頃に比定できる。上層出土遺物については、A系統の資料や平底壺類を豊富に含むといった古い様相もみられるが、甕は布留形甕を主体とする点は新しい要素で、後出する布留式古段階新相頃に位置づけるのが妥当である。遺物の出土状況や出土遺物の組成から、当該時期の井戸祭祀のあり方を復元する上で一級の資料であり、近接する独立棟持柱建物3などとの関係性を含めて詳細な検討が望まれる。

**34 土坑**(図195) 掘立柱建物3の北4mに位置する土坑で、大部分が調査区外北側に拡がることから全体の形状は明確でない。規模は3.9m以上、検出面からの深さは0.37mをはかる。埋土は、暗色の泥質土を主体とする。部分的な検出に留まっているが、埋土や周辺からは復元率の高い古式土師器が一定数出土している。精製の土師器高杯(1401)のほか、脚部が内湾気味にひろがる東海系とみられる小型器台(1403)や小型の脚台付鉢(1404)、柳ヶ坪型壺(1405)などの外来形土器が出土している点が注目され、いずれも布留式古段階頃を中心とした時期に位置づけられる。周辺部から出土した土師器(1400・1402・1406)については、この遺構に伴うものであるかは確実でないが、いずれも近い時期のものであるため、関連する遺物の可能性がある。遺構の全容については、部分的な検出に留まっ

第4章 遺構・遺物

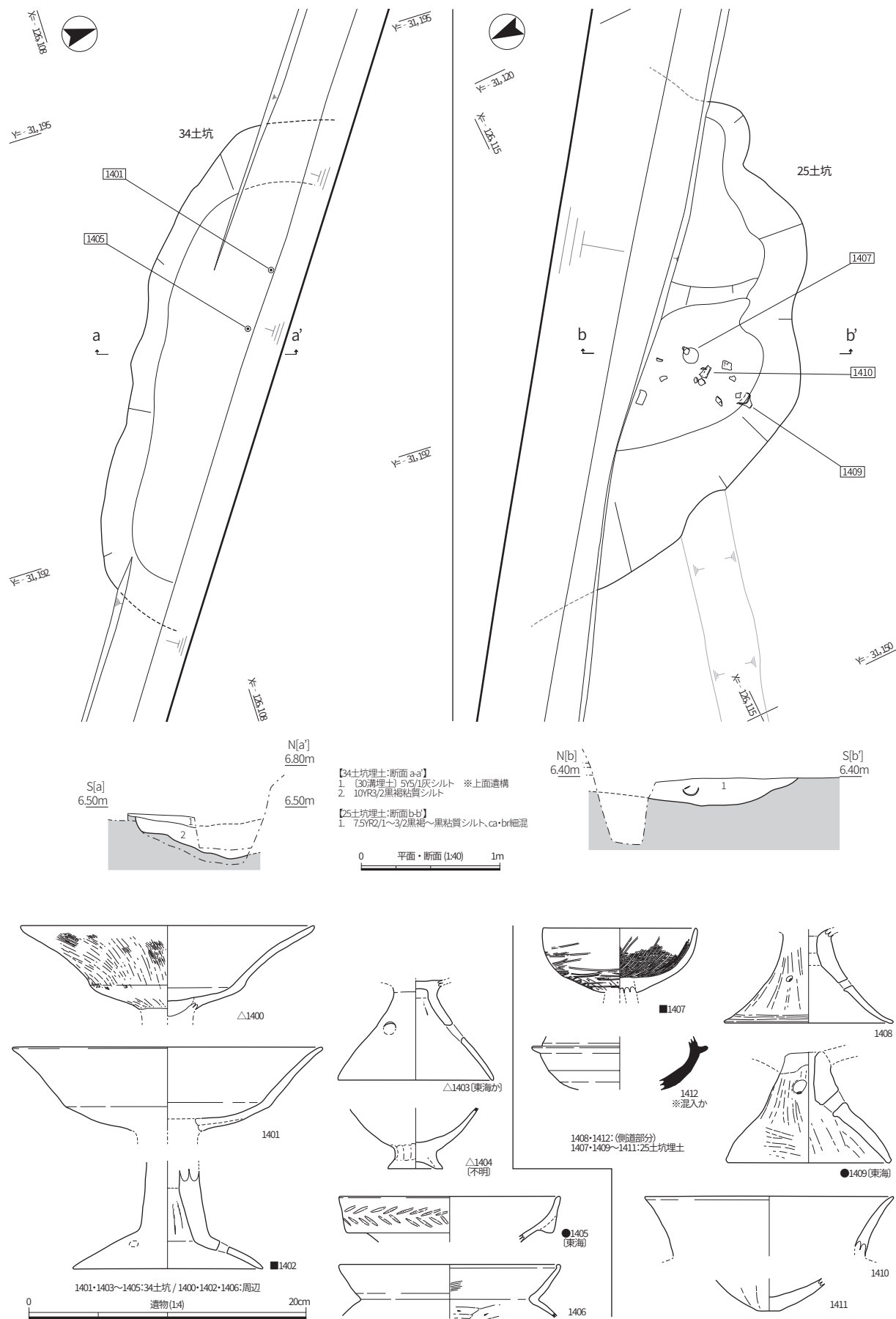


図 195. 34 土坑、25 土坑 平面・断面・出土遺物

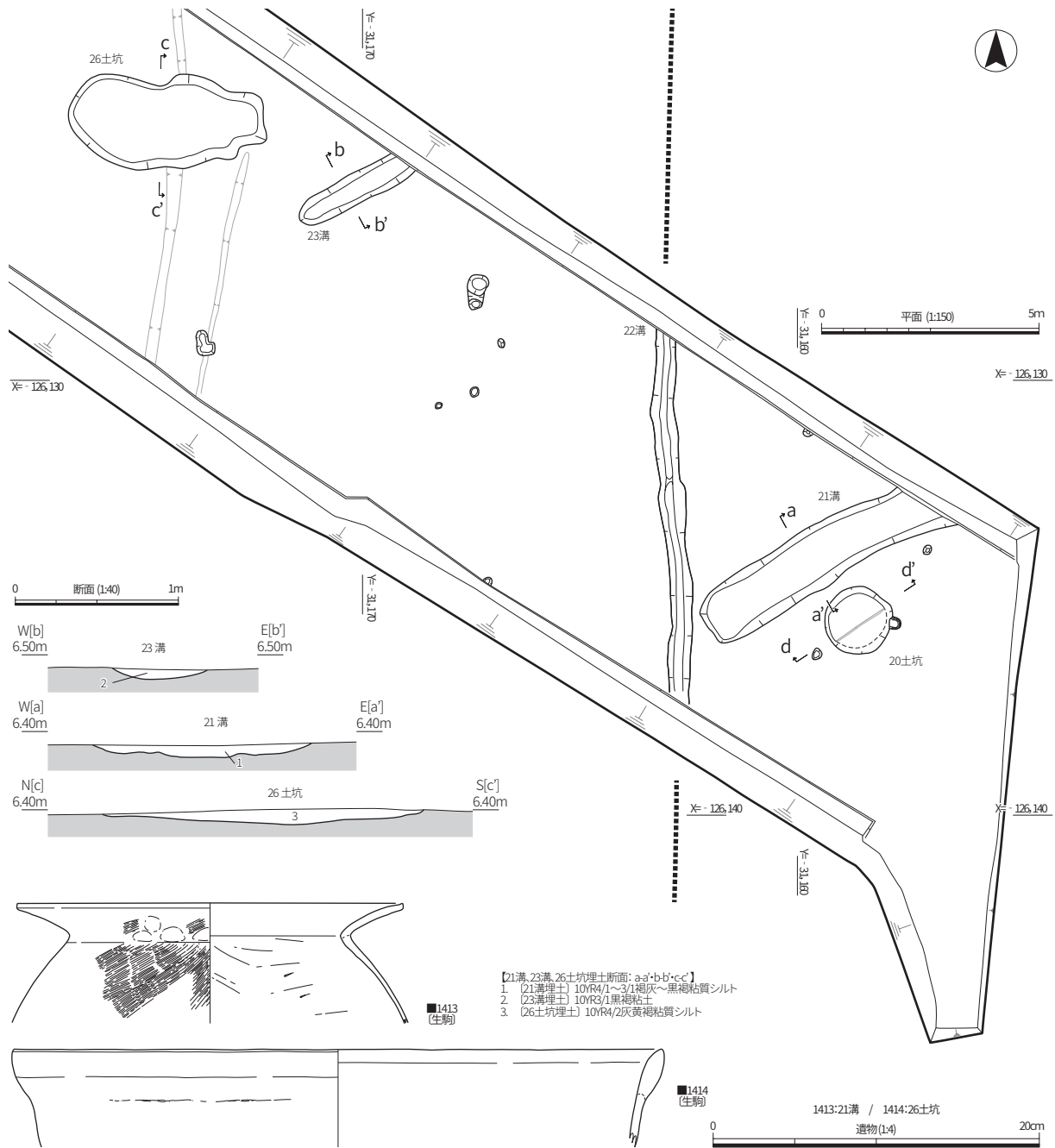


図 196. 21 溝、23 溝、26 土坑 平面・断面・出土遺物

ているため定かでないが、一括性の高い遺物群に伴う廃棄土坑の可能性が推測される。

**25 土坑**(図 195) 32 井戸の北東 8 m に位置し、34 土坑と同様に大部分が北側調査区外に拡がっている。このため全体の形状は明確でないが、規模は 4.1 m 以上をはかる。検出面からの深さは 0.2 m で、埋土は暗色の泥質土を主体とする。部分的な検出に留まっているが、34 土坑と同様に復元率の高い遺物がまとまって出土しており、精製 B 系統の椀形高杯 (1407) や小型器台 (1408・1409) などが含まれる点が注目される。特に小型器台 (1409) は、内湾する脚部形状や円孔透かしが脚部上方に穿孔される点などから東海系と判断できる。時期については、庄内式中段階頃に位置づけられ、側溝部分から出土した初期須恵器の杯身 (1412) については、遺構外もしくは混入品とみるのが妥当である。遺構の全容がよくわからないが、34 土坑と同様に一括性の高い遺物群を伴う廃棄土坑とみなすのが妥当である。

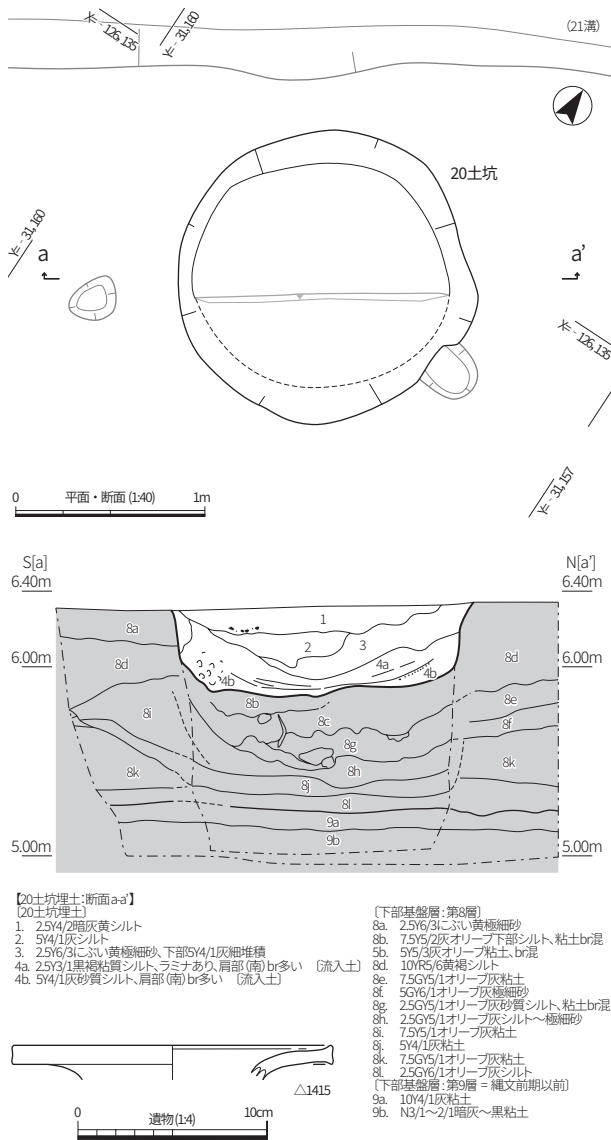


図 197. 20 土坑 平面・断面・出土遺物

顕著でないため、周辺の土地利用を考える上でも重要な遺構といえる。

**20 土坑** (図 197) B-1 区の東端、21 溝に隣接する位置で検出された土坑で、正円形に近い形状を呈する。規模は、径 1.5 m、検出面からの深さ 0.5 m をはかる。埋土上半〔1・2〕には、やや淡い灰色系のシルトが、埋土下部〔3〕には極細砂が堆積する。最下部の埋土〔4〕は、黒褐シルト～灰色砂質シルトで、ラミナが顕著にみられることから自然の流入土と判断できる。埋土からは、土師器片が少量出土しており、庄内式期の広口壺の口縁部 (1415) などが含まれる。遺構の機能・性格は不明であるが、近接する 21 溝と時期が近しいため、相互に関連する遺構と推測される。

なおこの 20 土坑については、調査当初は堆積状況から上記の報告よりも深度のある井戸と認識しており、底面を把握するために下部を大きく断ち割りして状況を確認した。その結果、遺構下部は基盤層〔第 8 層〕 落込みと判断できるものであった。このため結果としては、遺構の底面を誤認して掘り過ぎてしまったが、基盤層下部〔第 9 層〕 の上端の標高などを確認することができ、旧地形を把握するための情報を得ることができた。

**包含層ほか出土遺物** (図 198) P4 区は、微高地 B の縁辺部にあたり、今回の調査地点で第 5 層・第 6

**26 土坑** (図 196) B-1 区東半、32 井戸の東 17 m で検出された東西に長い不定形の土坑で、長さ 4.5 m、幅 2.1 m をはかる。検出面からの深さは 0.09 m と浅く、埋土は灰黄褐粘質シルトを主体とする。埋土からは、本遺跡での出土例が少ない生駒西麓産の大型鉢 (1414) など、土師器片が少量出土している。遺物の出土量が少ないため詳細な時期比定は難しいが、庄内式古段階～新段階とみられる。遺構の機能や性格は不明であるが、周辺に位置する 23 溝や 21 溝と時期が近しいことから、関連性が注目される。

**21・23 溝** (図 196) B-1 区の東端で検出された北東-南西方向の溝で、ふたつの溝は 12 m の間隔を隔てて並行しており、関連する遺構と認識できる。いずれも南西側が途切れており、北東側が調査区外にのびる。規模については、北西側の 23 溝が検出長 2.8 m、幅 0.7 m、深さ 0.68 m、北西側の 23 溝が検出長 6.0 m、幅 1.3 m、深さ 0.86 m をはかる。埋土は、いずれも暗色の泥質土を主体とし、土師器の細片が少量出土している。21 溝からは、生駒西麓産庄内形甕 (1413) が出土しており、時期については庄内式新段階頃に比定できる。微高地縁辺の低地部に位置し、周辺は遺構が希薄であるため、耕作関連の溝の可能性が推測されるが、古墳時代の生産関連遺構の検出は



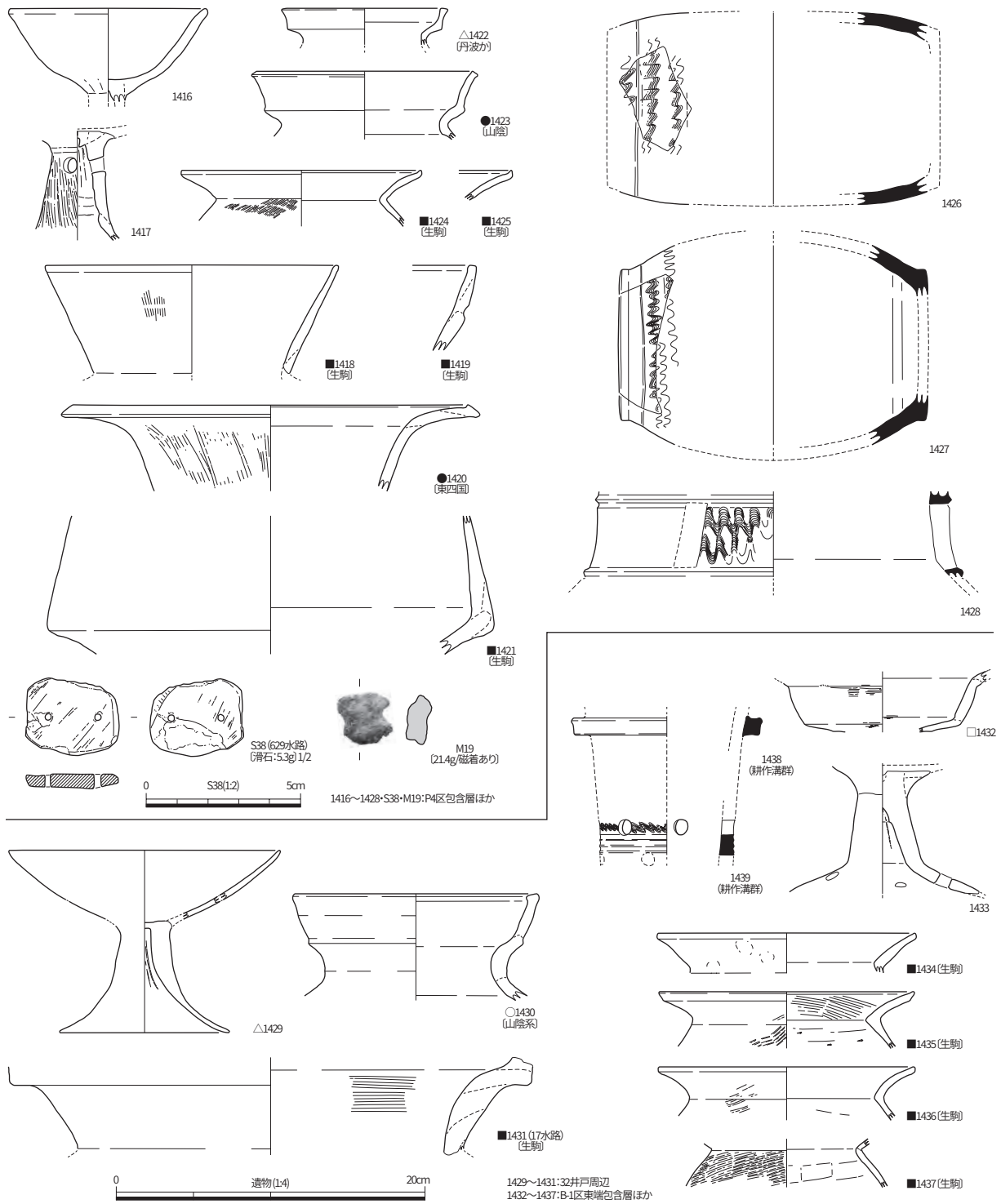


図 198. 西側エリア 微高地B南東縁辺部～低地部包含層ほか 出土遺物

層が最も厚く堆積していたため、ほかの地点と比べて遺物の出土量が多い傾向がみられた。その一方でP4区南端部から南側のB-1区東半は、中世の耕作段の造成によって第5・6層の大部分が削平を受けており、遺物の出土量も相対的に少ない。図198では、P4区とB-1区東端の出土遺物のうち、特徴的な資料を中心に抽出・図化した。P4区の古式土師器では、外来形土器の出土が一定量あり、特に生駒西麓産の土器がまとまって出土する傾向がみられる。普遍的に出土する庄内形甕(1424・1425)や大型複合口縁壺(1421)に加え、直口壺(1418)や詳細形式が不明の壺(1419)など類例の少ない器種

が含まれる点が注目される。ほかでは、丹波とみられる受口状口縁の甕（1422）や山陰系の甕（1423）、東四国系の広口壺（1420）などがあり、これらはいずれも搬入品と推測される。それ以外では、中期に一般的にみられる椀形高杯の祖型となるような高杯（1429）や脚上部に透かし孔が穿孔されるやや特異な高杯脚部（1417）、滑石製の有孔円盤（S38）などがある。中期の遺物では、TK216 型式頃の樽型甕の破片（1426・1427）や器台脚部（1428）などがある。

B-2 区東半の遺物では、32 井戸周辺出土遺物（1429～1431）と 17 水路東側の遺物（1432～1437）に大別できる。32 井戸周辺遺物では、生駒西麓産の大型複合口縁壺が 17 水路からの出土であるため、本来は重複する 32 井戸に伴う遺物である可能性が高い。井戸の肩部付近から出土した高杯（1429）は、これと時期的に近いが、山陰系の壺口縁（1430）は布留式新段階頃まで下るため直接関係はしない。東端部では、有段高杯（1432）や精製 B 系統の大型高杯（1433）のほか、生駒西麓産の庄内形甕（1434～1437）がまとまって出土している。付近一帯は、遺構が希薄であるが、ここで検出された溝や浅い土坑と近い時期の遺物がまとまって出土しているため、周辺一帯の土地利用を考える上で重要である。

### （3）. 中央エリア

C-6 区の北東から C-5 区・D-2 区にむかって南東方向にのびる微高地 C の南西斜面と南東斜面で建物遺構がまとまって検出されている。建物数は、微高地 A・B での総計数と同数で、掘立柱建物よりも竪穴建物が多い。特に C-6 区・C-8 区にまたがる北西側の南西斜面と D-2 区・P2 区にまたがる南東斜面に、竪穴建物が密集している。

第4章第3節で上述したように、微高地の頂部（C-6 区北東・C-5 区・D-2 区西端）と微高地の縁辺部（C-2 区南半・C-3 区・C-4 区）、南東低地部（P2 区南東）では、中世以降の造成等で大規模な削平・地下げを受けている。このため微高地頂部は、遺構がやや希薄で、南東低地部については古墳時代の遺構が完全に削平されており、西側エリアと比べて井戸や落込みなどの遺構の検出数が少ない。また遺物の出土総量も、西側エリアに比べると相対的に少ない傾向にある。

検出された遺構・遺物の時期は、古墳時代初頭から後期前葉までの幅がある。ただし西半の南西斜面側では、古墳時代初頭から中期まで時期の幅があるのに対し、東半の南東斜面側の遺構・遺物はほぼ中期に限定されるなど、時期ごとに遺構の分布に偏りがみられる。以下では、中央エリア全体を横断する溝を報告したのち、地形的なまとまりと遺構検出状況を加味して西から順に報告する。

**1607・1651・168 溝**（図 200・201） C-8 区で検出された 1607 溝、P3 区で検出された 1651 溝、C-1 区・D-2 区で検出された 168 溝は、位置関係から同一の遺構と考えられる。中央エリアの北半部分で北西—南東方向にのび、検出長は 112 m に及ぶ。幅は 0.7～0.9 m をはかり、検出面からの深さは最大 0.4 m である。埋土は、暗色の泥質土を主体としていることから、著しい流水痕跡はなく、滞水状態で徐々に埋没が進行したことがうかがえる。溝の底面の標高は、断面 c-c' 付近が最も高く、地形に沿って東西に傾斜しているため、一方から流水させるための機能はなく、居住域を排水する目的で掘削され、東西に存在が想定される谷部分に排水したものと推測される。

埋土から出土した遺物はごく僅かで、土師器・須恵器・弥生土器が出土している。溝埋土は、古墳時代の遺構埋土と類似しており、先後関係が明確にできなかったものも多く、特に須恵器の出土から中期以降に下る可能性も考えられる。その一方で P3 区北東では、古墳時代中期前葉頃の竪穴建物 51 と重複しており、断面 b-b' から 1651 溝の方が先行することから、中期前葉には既に埋没していたことが

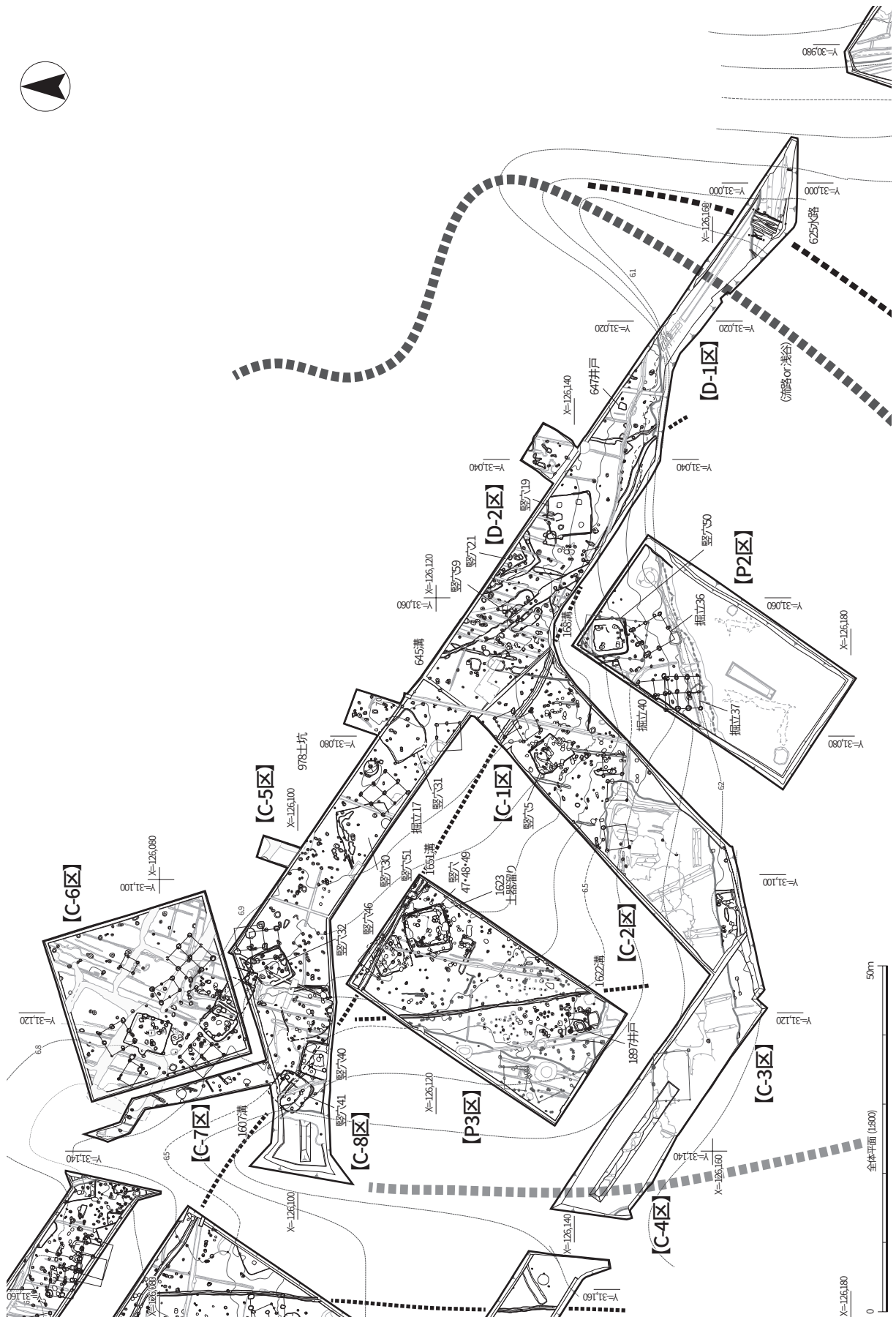


図 199. 中央エリア 古墳時代遺構 全体平面図





図 200. 中央エリア・微高地C 1607・1651・168溝、1622溝、645溝、650溝 平面



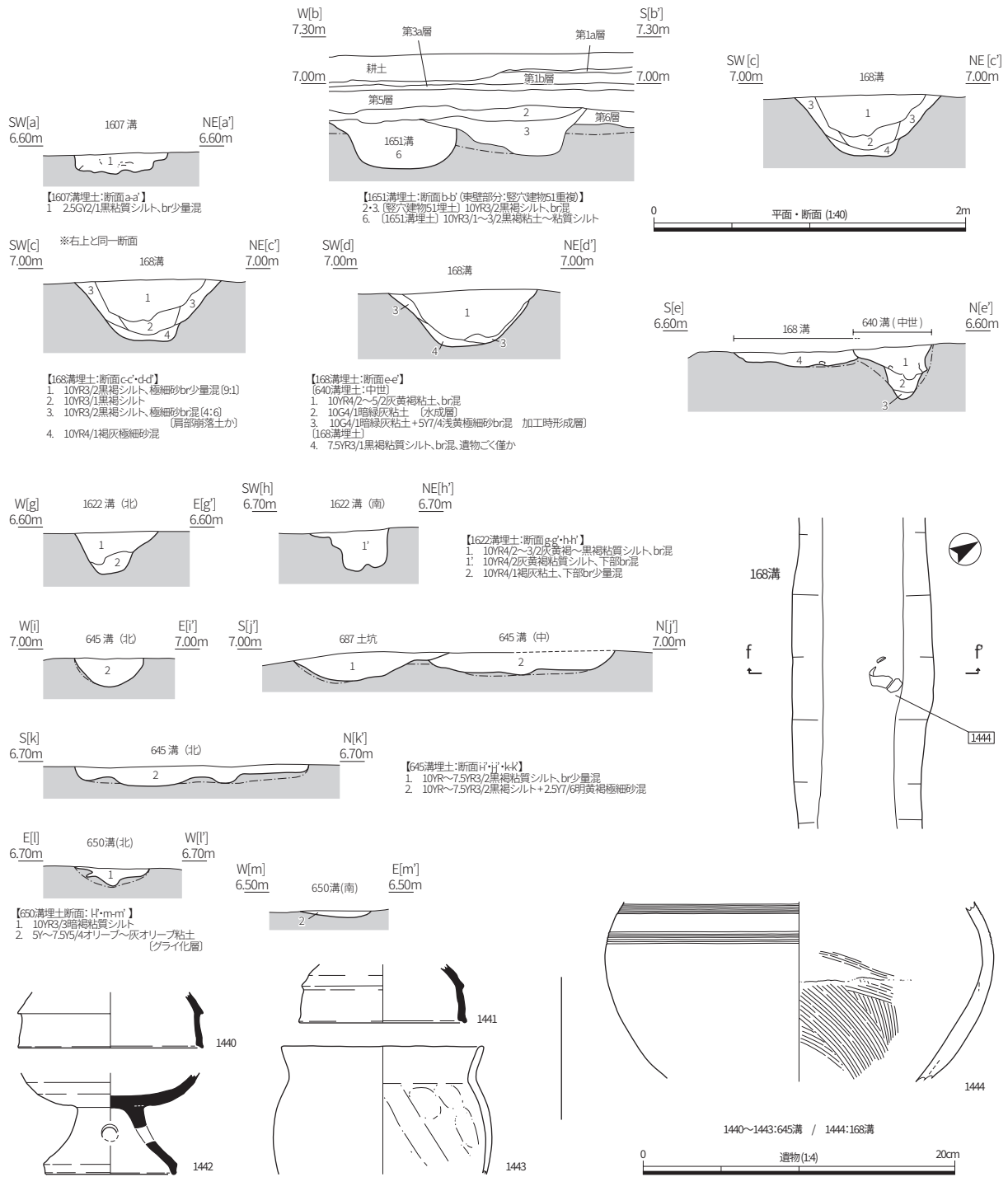


図 201. 1607・1651・168 溝、1622 溝、645 溝、650 溝 断面・出土遺物

わかる。なお南東端の 168 溝 f-f' ライン付近から、溝底部に貼りつくようにして弥生時代中期の壺体部破片 (1444) が出土している。C-6 区・C-5 区で検出された方形周溝墓群と時期が近いことから、関連性が想定される場所であるが、この溝との関係性は不明である。上述したように、溝の時期は古墳時代と推測されが、根拠はやや弱いため、弥生時代に遡る可能性も考慮する必要がある。

**1622 溝** (図 200・201) P3 区で検出された北西-南東の溝で、調査区を縦断するようのびる。検出長 28 m、幅 0.5 ~ 0.6 m をはかり、検出面からの深さ 0.25 ~ 0.30 m である。埋土は、灰黄褐~黒粘質シルトを主体としており、緩やかに埋没が進行した様子うかがえる。底面の標高は、南側が僅かに

高く、北側にむかって緩やかに地形が下がる。溝は、等高線に沿ってのびてはいるものの、やや地形に逆らっているのが特徴である。北側延長部分は、1607・1651 溝に連なっており、接続部分は調査区外のため未検出であるが、合流して北西谷部に排水していたものと推測できる。埋土から出土した遺物は、土師器細片4点のみで、出土量は少ない。図化できるものはなかったが、V様式系のタタキ甕の体部などがみられる。詳細な時期比定は難しいが、接続する1607・1651 溝との関連性を考えると、古墳時代前期以前の可能性が高い。

**645 溝** (図 200・201) D-2 区西半で検出された北西から南東方向にのびる溝で、遺構の密集地帯を横断する。検出長は 25 m に及び、幅は最大 1.6 m、検出面からの深さ 0.10～0.18 m をはかる。埋土は、極細砂混じりの黒褐シルトを主体とし、底面は地形の傾斜に沿って北から南に低くなっている。埋土からは、古墳時代の土師器・須恵器が一定量出土しており、須恵器杯蓋 (1440・1441)、高杯 (1442)、土師器甕 (1443) などを図化した。これらの遺物のうち甕などがやや古いが、多くは TK47 型式頃に位置づけることができ、溝の機能時期の一端を示す可能性がある。その一方で、竪穴建物 20・59 などの建物遺構と少なからず重複している。この溝と建物の先後関係が問題になるが、切り合い関係から建物の中心部分が重複する竪穴建物 59 より 645 溝が後出する。また出土遺物は、ほぼ同時期であるため、竪穴建物 59 の廃絶後すぐに溝が掘削された可能性も推測されるが、この溝の周辺には古墳時代中期の遺構が密集しているため、溝の埋土から出土する遺物はもともと周辺の遺構等に伴うものであった可能性があり、溝の掘削時期が下る可能性も想定する必要もあるだろう。

**650 溝** (図 200・201) D-2 区東端で検出された南北方向の溝で、居住域の東端部に位置する。検出長 11 m、幅 0.6～0.8 m、検出面からの深さ 0.05～0.10 m をはかる。埋土は、暗色の泥質土を主体とし、底面は地形の傾斜に沿って北から南に下がる。埋土からは、古墳時代の土師器・須恵器が少量出土しており、図化できる遺物はなかったが、TK216～208 型式頃の遺構と推測される。

#### [a. 微高地 C 南西斜面の遺構・遺物：C-3・C-4 区・C-5・C-6・C-7・C-8 区・P3 区] (図 202)

建物遺構 30 棟、井戸 1 基のほか、土坑などが検出された。標高が高い北半に建物遺構が密集しているため、頻繁に建替えがおこなわれたことがうかがえる。微高地の先端部にあたる P3 区南半は、相対的に遺構が希薄になるが、柱穴が一定数検出されており、中世の地下げによって削平された C-3 区などにも遺構が拡がっていた可能性がある。建物遺構の内訳は、竪穴建物 18 棟、掘立柱建物 7 棟、ほかに竪穴建物の可能性が高い 1×1 間の建物が 5 棟ある。

**掘立柱建物 23** (図 203) C-6 区北西で検出された東西 2 間×南北 2 間の掘立柱建物で、方形周溝墓 12・13 や竪穴建物 38 と重複している。建物の規模は、南北長 4.0 m、東西長 3.6 m、面積は 14.4 m<sup>2</sup> をはかり、建物南北軸は西に 29.8° 傾く。東西・南北ともに柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法はやや幅の狭い 1419P-1418P 間を除くと、1.7～2.0 m におさまる。柱穴の平面形は、一部を除くと円形または隅丸方形を呈し、検出面での大きさは 0.4～0.7 m でややばらつきがある。検出面からの深さは、0.15～0.20 m をはかる。微高地の頂部付近に位置しているため上面が大きく削平を受けており、全体的に浅くなっている。埋土は、灰黄褐極細砂～シルトを主体とし、1418P・1423P・1424P からは土師器・須恵器の細片が少量出土している。このうち 1423P から出土した TK23～47 型式頃の杯身の細片 (1445) を図化した。遺物が少ないため建物の詳細な時期比定は難しいが、中期末葉以降に帰属するものと推測される。



図 202. 中央エリア 微高地C西半 古墳時代遺構 全体平面図

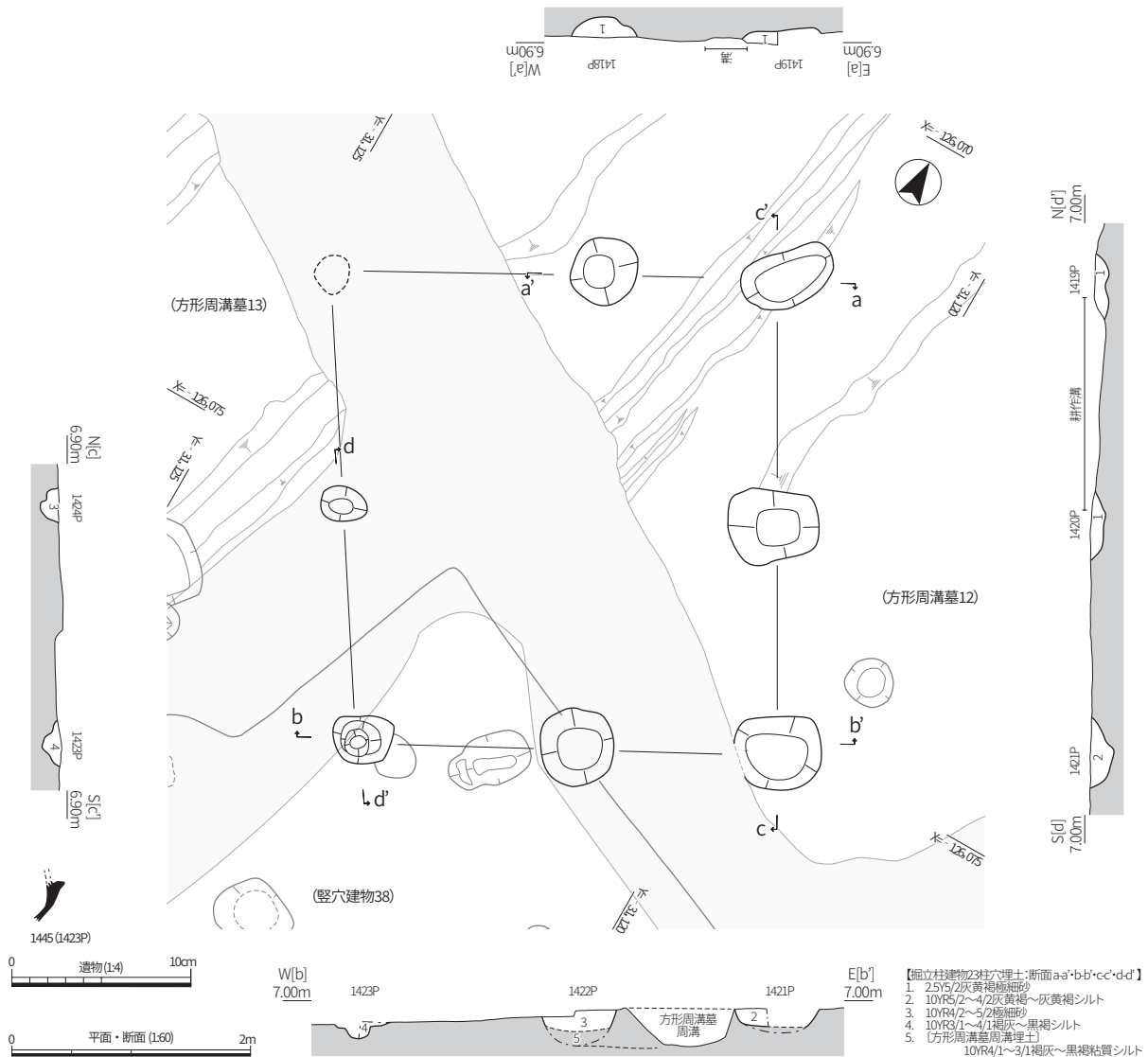


図 203. 掘立柱建物 23 平面・断面・出土遺物

**掘立柱建物 25** (図 204) C-6 区南西で検出された総柱建物で、竪穴建物 35 の北西 1 m に隣接する。東西 2 間×南北 2 間の建物構造で、北西隅は調査区外に広がる。規模は、南北長 4.5 m、東西長 4.4 m、面積は 19.8 m<sup>2</sup>をはかり、建物南北軸は西に 48.4°傾く。東西・南北ともに柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 2.1～2.3 m 前後におさまる。柱穴の平面形は、円形または不整形円形を呈し、検出面での大きさは 0.4～0.6 m で、0.4 m 程度のやや小ぶりなものが多い。検出面からの深さは、0.25～0.5 m 前後でややばらつきがみられるが、隅柱と中央の底面の標高は T.P.+6.3m 前後でほぼ揃っており、ほかの柱に比べて底が 0.1～0.05 m 程低い。このことから、建物の四隅と中央に比重がかかる構造の建物であったことがわかる。埋土から判断する限り、柱は抜き取られた可能性が高く、一部に柱あたりが明瞭に残るものがあり、柱の太さは 0.15 m 程度に復元される。

1343P・1466P を除く柱穴埋土から、土師器の細片が少量出土している。図化できるものはなかったが、1304P からは生駒西麓産の、1323P からは阿波産の土師器細片が出土している。そのほかの柱穴から出土した土師器には、ハケ甕や V 様式系のタタキ甕などがあり、いずれも古式土師器に限定される。このことから建物の帰属時期は、布留式古段階以前に遡ることが推測される。



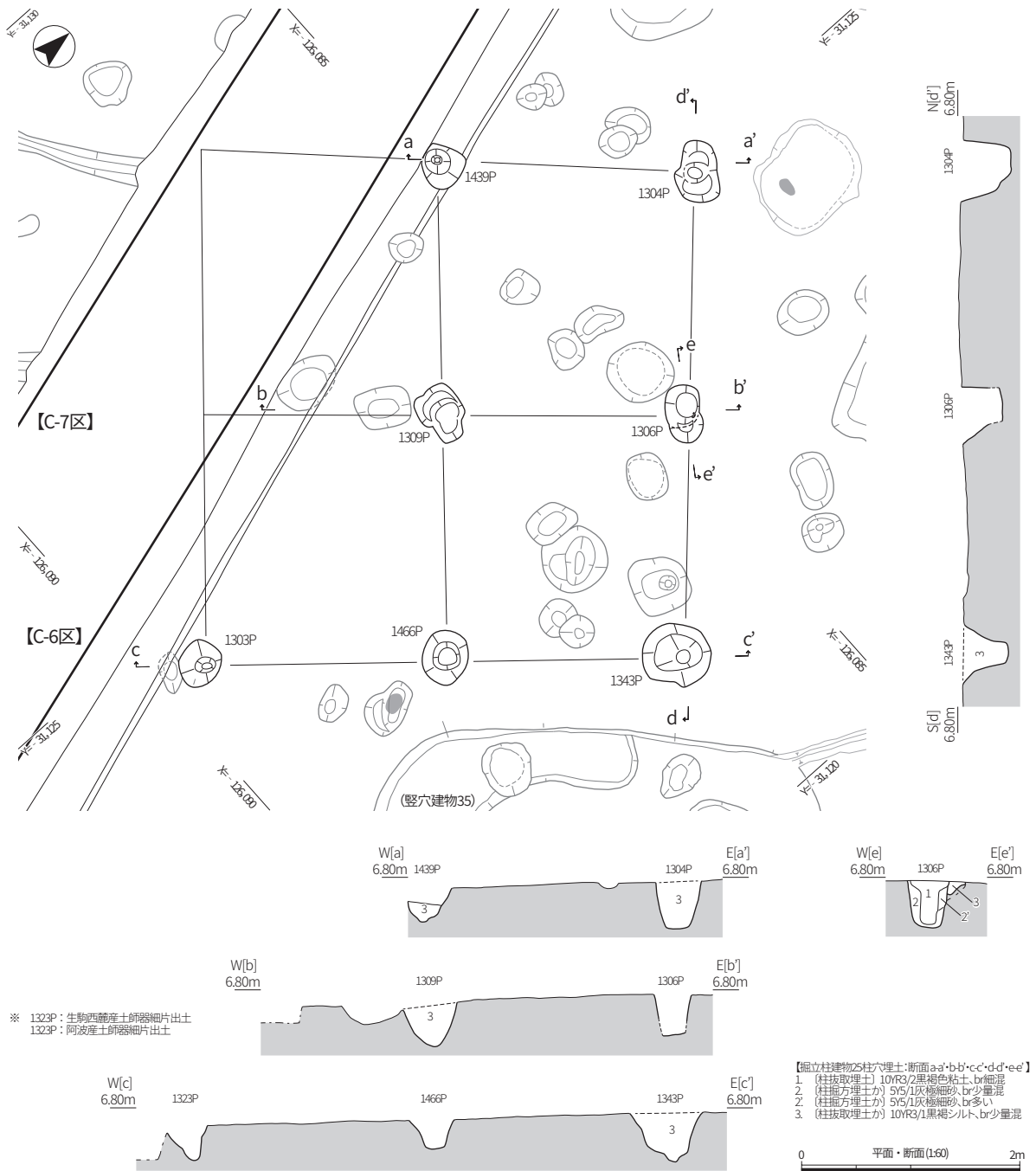


図 204. 掘立柱建物 25 平面・断面

**掘立柱建物 28** (図 205) C-6 区中央で検出された南北 2 間×東西 1 間の掘立柱建物で、掘立柱建物 24 の北西 3 m に位置する。南半が方形周溝墓 14 の周溝と重複しており、西側南北筋の中央の柱穴は検出できなかった。規模は、南北長 3.2 m、東西長 2.4 m、面積は 7.7 m<sup>2</sup>をはかり、建物南北軸は西に 32.6°傾く。東西・南北ともに柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は南北 1.5 ~ 1.6 m 前後におさまる。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、検出面での大きさは 0.4 ~ 0.5 m で、0.3 m 程度のやや小ぶりなものも含まれる。検出面からの深さは 0.15 ~ 0.4 m で、ややばらつきがみられる。建物の隅柱と中央の柱が深いため、隅柱に比重がかかる構造の建物の可能性がある。柱穴の埋土掘削後に建物の存在に気付いたため、柱穴の通し断面の埋土の記録はない。柱あたりから、柱の太さは 0.1 ~ 0.15 m 程度に復元される。北東の 1417P 埋土から土師器の細片が 2 点出土しているが、図化できるものはなかつ

た。このため詳細な時期比定は難しいが、破片の特徴から前期以前に遡る可能性がある。

**掘立柱建物 24** (図 206) C-6 区南東で検出された総柱建物で、北西 4 m に掘立柱建物 28 が、南西 7 m に竪穴建物 35・37 が位置する。東西 2 間×南北 2 間の建物構造で、方形周溝墓 14・15 の周溝と重複しているため、北西隅柱と南辺中央の柱は検出することができなかった。規模は、南北長 4.6 m、東西長 4.7 m、面積 21.6 m<sup>2</sup>をはかり、建物南北軸は西に 45.8°傾く。東西・南北ともに柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 2.1～2.4 m 前後におさまる。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、検出面での大きさは 0.4～0.6 m である。検出面からの深さは 0.25～0.39 m 前後で、底面の標高は概ね揃っている。埋土は、第 6 層に類似するブロック混じり黒褐シルトを主体とする。北西の 1396 P は柱あたりが明瞭に残るが、ほかは不明瞭である。

1301P・1302P から土師器の細片がごく少量出土しており、1301P から出土した系譜不明の土師器小型甕の口縁部片 (1446) を図化した。遺物の出土量が少ないため詳細な時期比定は難しいが、建物の帰属時期は布留式古段階以前と推測される。なお西 14 m に位置する掘立柱建物 25 は、ほぼ建物の傾きが揃っており、時期も近い。この掘立柱建物 24 が僅かに規模が大きいが、同時併存していた蓋然性が高く、前期前半以前に総柱建物が複数立ち並ぶ景観を復元できる。

**柱列 7** (図 205) C-6 区南端中央付近に位置する 4 基からなる北西—南東方向の柱穴の並びで、掘立柱建物 24 の西 2 m、掘立柱建物 28 の南 3 m に位置する。長さ 3.2 m で、柱間寸法は南北 1.0～1.1 m 程度におさまる。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、検出面での大きさは 0.5 m 前後で、深さは 0.22～0.44 m とややばらつきがある。柱穴埋土は、ブロック混じりの黒褐シルトを主体とする。南端 1303P 埋土から土師器・須恵器の細片が 1 点ずつ出土しており、図化できるものはなかったが、須恵器杯蓋の天井部の破片の特徴から、時期は中期後葉以降に下る可能性が高い。

**掘立柱建物 33** (図 207) C-5 区・C-8 区にまたがった位置で検出された掘立柱建物で、西半が竪穴建物 32 と、北西が掘立柱建物 50 と重複する。東西 1 間×南北 1 間の建物構造で、規模は南北長 4.0 m、東西長 4.6 m、面積 18.4 m<sup>2</sup>をはかり、建物南北軸は西に 8.4°傾く。柱穴の平面形は、やや大型の隅丸方形に近い形状で、大きさは 0.8～0.9 m をはかる。微高地の頂部付近に立地するため、柱穴は浅いものが多く、深さは最大の 1528 P で 0.26 m である。北西の 1525 P では柱根が残存しており、現状のサイズや柱あたりから柱の太さは 0.2～0.25 m に復元できる。

柱穴埋土からは、古墳時代の土師器・須恵器・石製品等が出土しており、1447 P から出土した TK23～47 型式の有蓋高杯 (1447) や 1523 P 出土の砥石 (S39) を図化した。このほかに 1523 P からは、布留式期の大型壺の体部がまとまって出土しているが、体部片のみのため図化できなかった。周辺一帯の基盤層は、砂質の強いやや軟弱な地盤 (第 8b 層相当) であるため、周辺の建物跡等の埋土に含まれる大型土器類を礎板として使用した可能性を推測できる。建物の時期は、1525 P 出土の須恵器から、中期末葉以降と判断したが、詳細な時期は不明である。1 間×1 間にも関わらず、比較的規模の大きな柱穴を伴っている点が特異である。北西 20 m に位置する古代の掘立柱建物 26 と、構造・規模が類似するため、この建物も古代に下る可能性も十分に想定ができるが、建物の傾きが異なるため、現状では出土遺物から古墳時代の建物とみるのが穏当である。

**掘立柱建物 50** (図 207) C-5 区西端に位置する掘立柱建物で、重複する掘立柱建物 33 とは概ね建物の南北軸が揃っている。東西 1 間×南北 1 間以上の構造で、東側未調査地にのびる可能性があるが、重複する掘立柱建物 33 と規模が近いので、1 間×1 間構造の建物と考える方が穏当である。現状での規

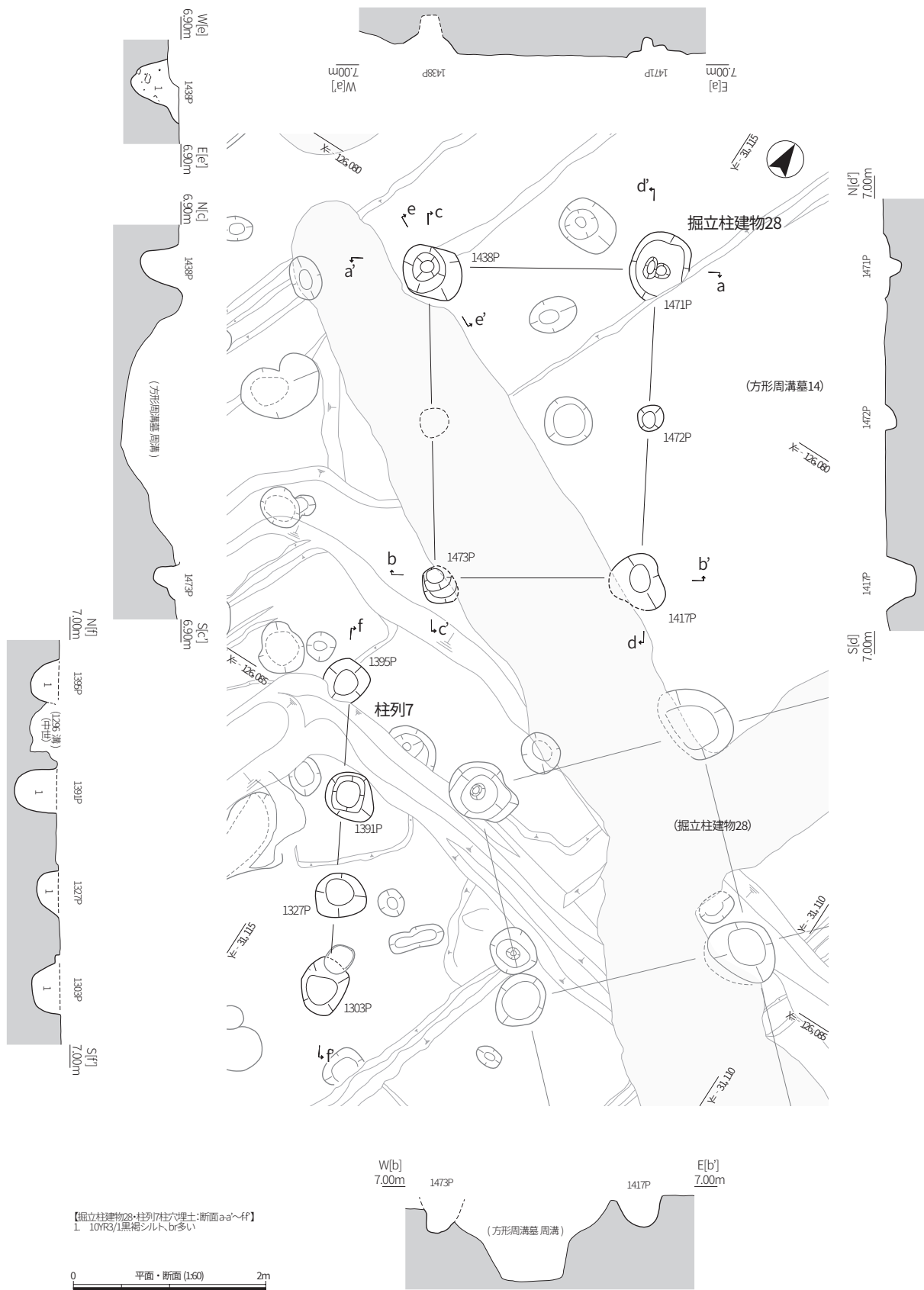


図 205. 掘立柱建物 28、柱列 7 平面・断面

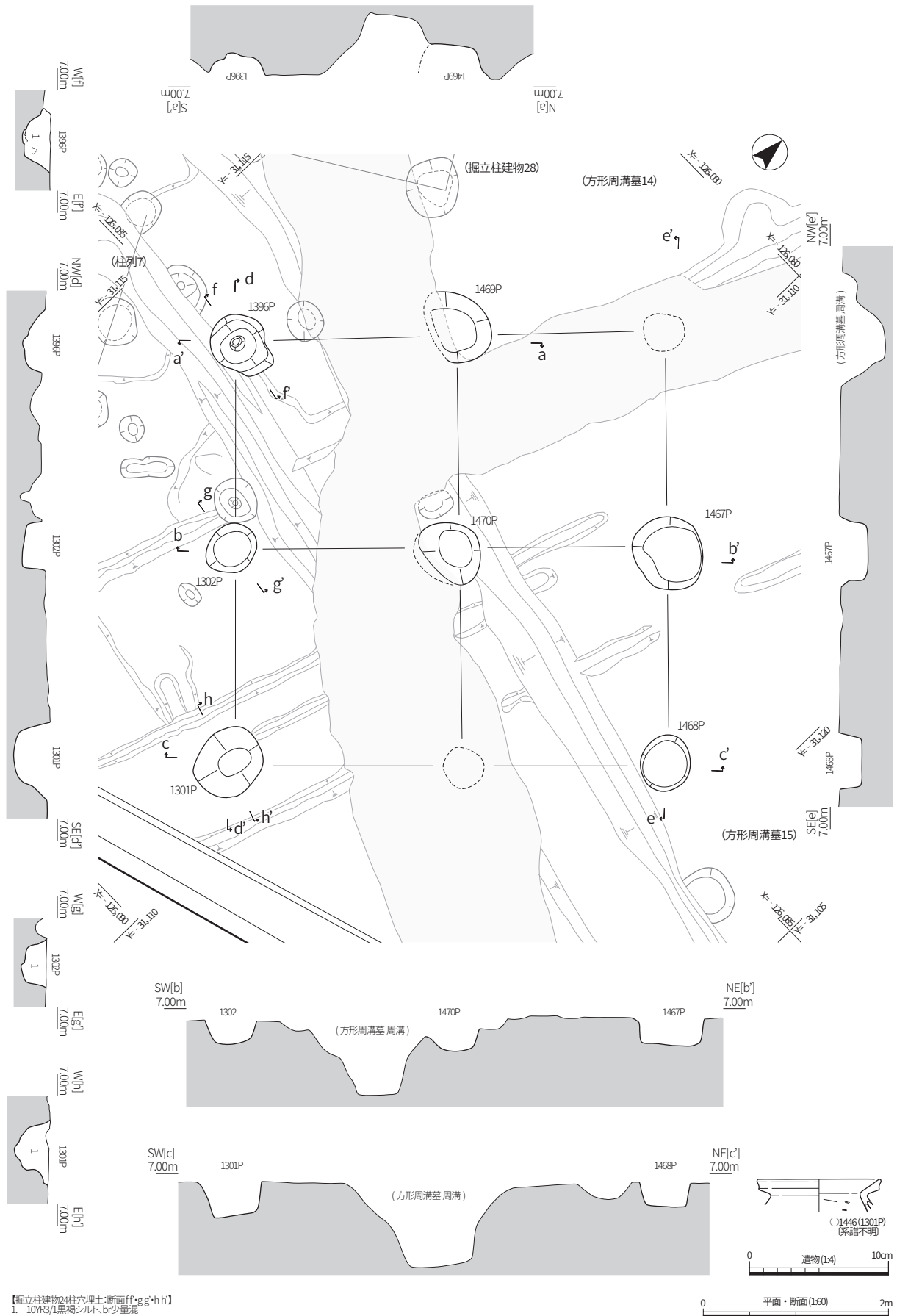


図 206. 掘立柱建物 24 平面・断面・出土遺物



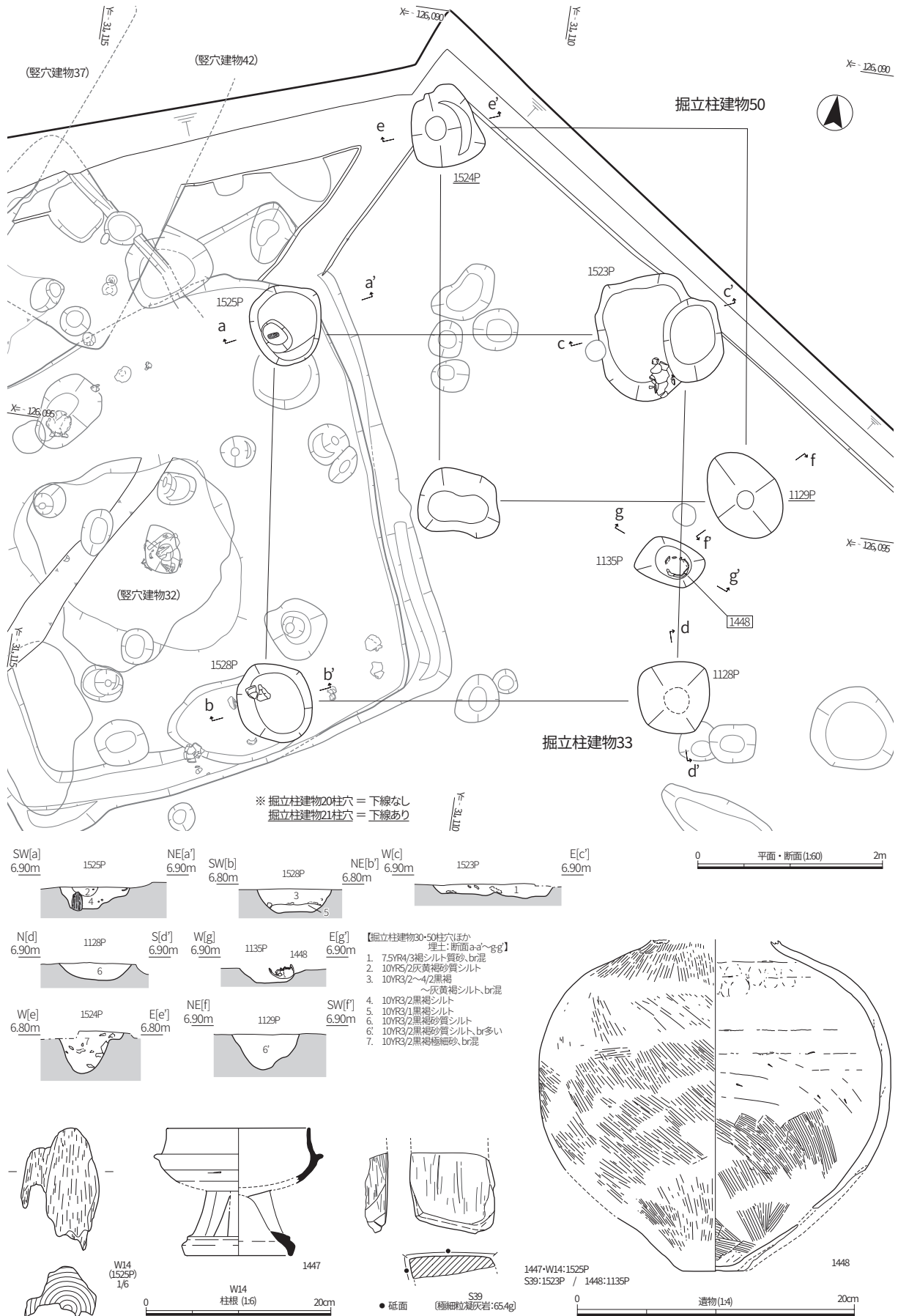


図 207. 掘立柱建物 33・50、1135 ピット 平面・断面・出土遺物

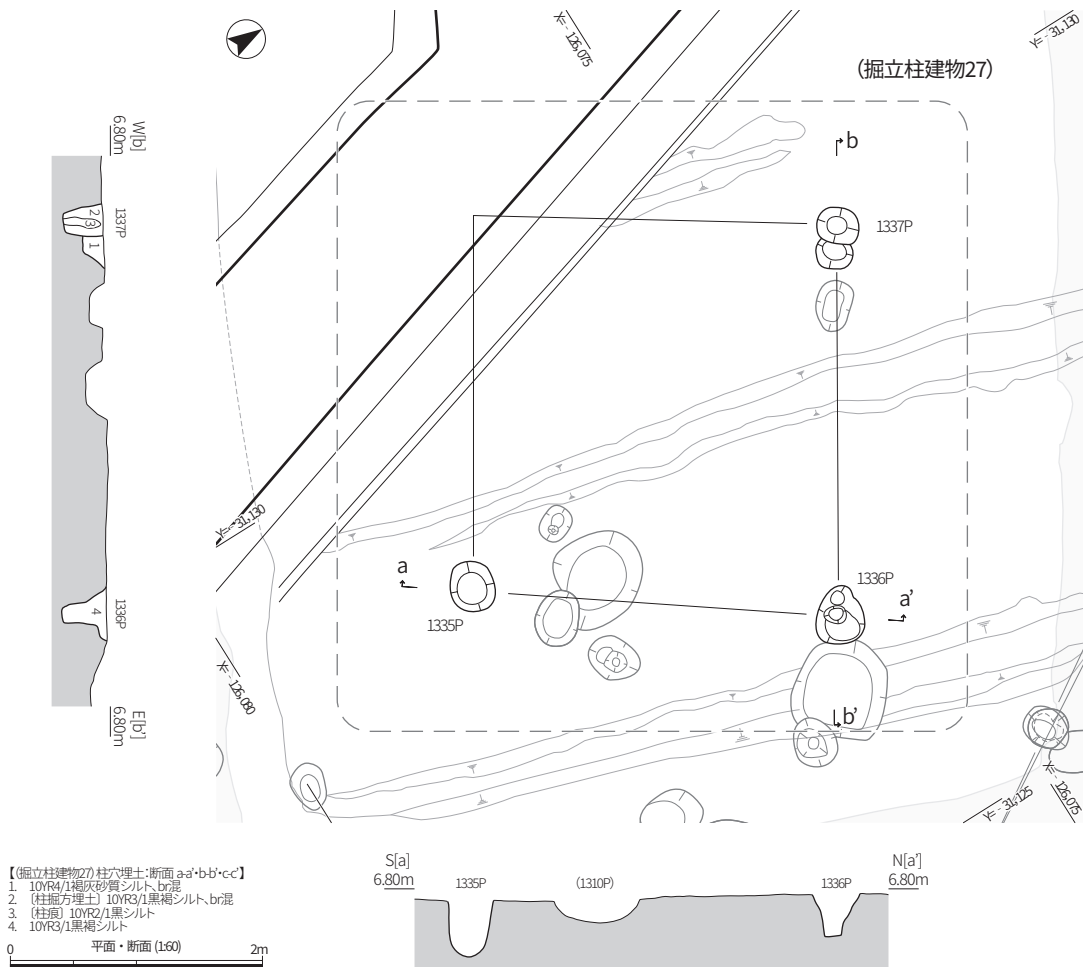


図 208. 掘立柱建物 27 平面・断面

模は、南北長 4.1 m、東西長 3.3 m、面積 13.5 m<sup>2</sup>をはかる。柱穴の平面形は、やや大型の隅丸方形または不整円形で、大きさは 0.9 ~ 1.0 m である。掘立柱建物 33 と同様に柱穴はやや浅く、深さは 0.38 ~ 0.46 m である。埋土は、ブロック混じりの黒褐砂質シルト～極細砂を主体とするため、柱は抜き取られた可能性が高い。

1129P からは土師器・須恵器の細片が、1524P からは土師器の細片がそれぞれ出土しているが、図示できるものはなかった。詳細な時期比定は難しいが、須恵器の出土から中期中葉以降に下ることは確実である。古代に下る可能性も残されるが、現状では古墳時代の遺構とみなすのが穏当である。なお重複する掘立柱建物 33 とは、建物の南北軸が揃っているため、前後は不明であるが、建替えに伴う建物の可能性も十分に想定ができるだろう。

**1135P** (図 207) C-5 区西端に位置し、掘立柱建物 33 の東側南北筋上に位置する。掘立柱建物 50 の南に隣接し、西 4 m には竪穴建物 32 が位置する。検出面の形状は隅丸方形で、規模は東西 0.7 m、南北 0.5 m、深さ 0.16 m をはかる。埋土の完掘後に建物の存在に気付いたため、埋土の断面の記録は取れなかったが、底部から古式土師器の壺の体部～底部の破片 (1448) がまとまって出土した。体部の破片が揃うわけではないため、据えられていたとは考え難いが、破片の一部が人為的に埋められた可能性が高い。小平底の大型壺で、外面に粗いタテハケを施し、体部内面にヘラケズリの痕跡がみられる。詳細な時期比定は難しいが、古墳時代前期前半頃に位置づけられる。出土遺物の時期からみれば、西側の竪穴建物群との関係が推測されるが、その一方で、近接する掘立柱建物 33 の 1523P と土師器壺体部

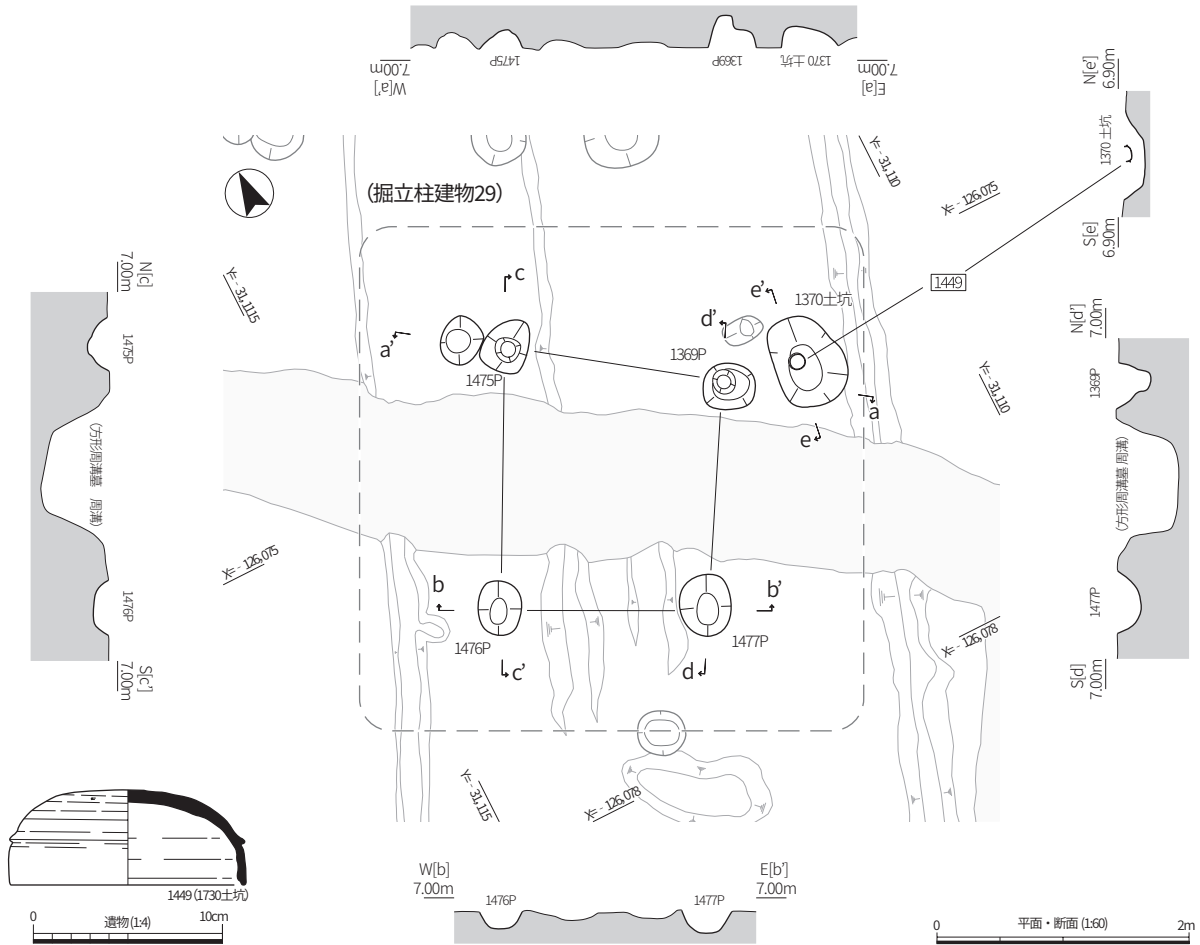


図 209. 掘立柱建物 29 平面・断面・出土遺物

の出土状況がある程度類似しており、後世の意図的な据え付けの可能性も考慮する必要があるだろう。

**(掘立柱建物 27)** (図 208) C-6 区北西端で検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、北東 4 m に掘立柱建物 23 が、南東 4 m に竪穴建物 38 がそれぞれ位置する。微高地 C の南西斜面に立地しており、北西隅柱が調査区外に位置するが、柱穴の規模や形状から竪穴建物の支柱穴と判断した。柱間隔は、東西 3.2 m、南北 2.9 m をはかるため、一辺 5 m 規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、小型で円形を呈するものが多く、大きさは 0.3～0.4 m である。検出面からの深さは、0.31～0.46 m をはかる。北東 1337P は、断面で柱痕が確認でき、柱の太さは 0.1 m 程度に復元される。各柱穴の埋土からは、古式土師器の細片が出土している。細片のため図化できる資料はなかったが、生駒西麓産の甕や V 様式系タタキ甕の体部、精製の小丸丸底壺の破片など、布留式古段階前後の資料がまとまっており、こうした遺物が建物の帰属時期を示す可能性が高い。

**(掘立柱建物 29)** (図 209) C-6 区中央北東寄りで検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、柱穴の規模や形状から竪穴建物の支柱穴と判断した。掘立柱建物 28 の北東 6 m に位置し、微高地 C の頂部付近に立地している。北東 1369P の東に長径 0.7 m、深さ 0.16 m の楕円形土坑 (1370 土坑) があり、竪穴建物の壁際で検出される土坑と考えられる。柱間隔は、東西 1.7 m、南北 1.8～2.0 m をはかるため、一辺 4 m 規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、小型で円形を呈するものが多く、大きさは 0.4～0.5 m である。いずれも浅く、検出面からの深さは 0.15 m 前後である。北東の 1370 土坑からは、TK47 型式頃の須恵器杯蓋が 1 点出土した (1449)。ほかでは、1369P の埋土から古式土師器の

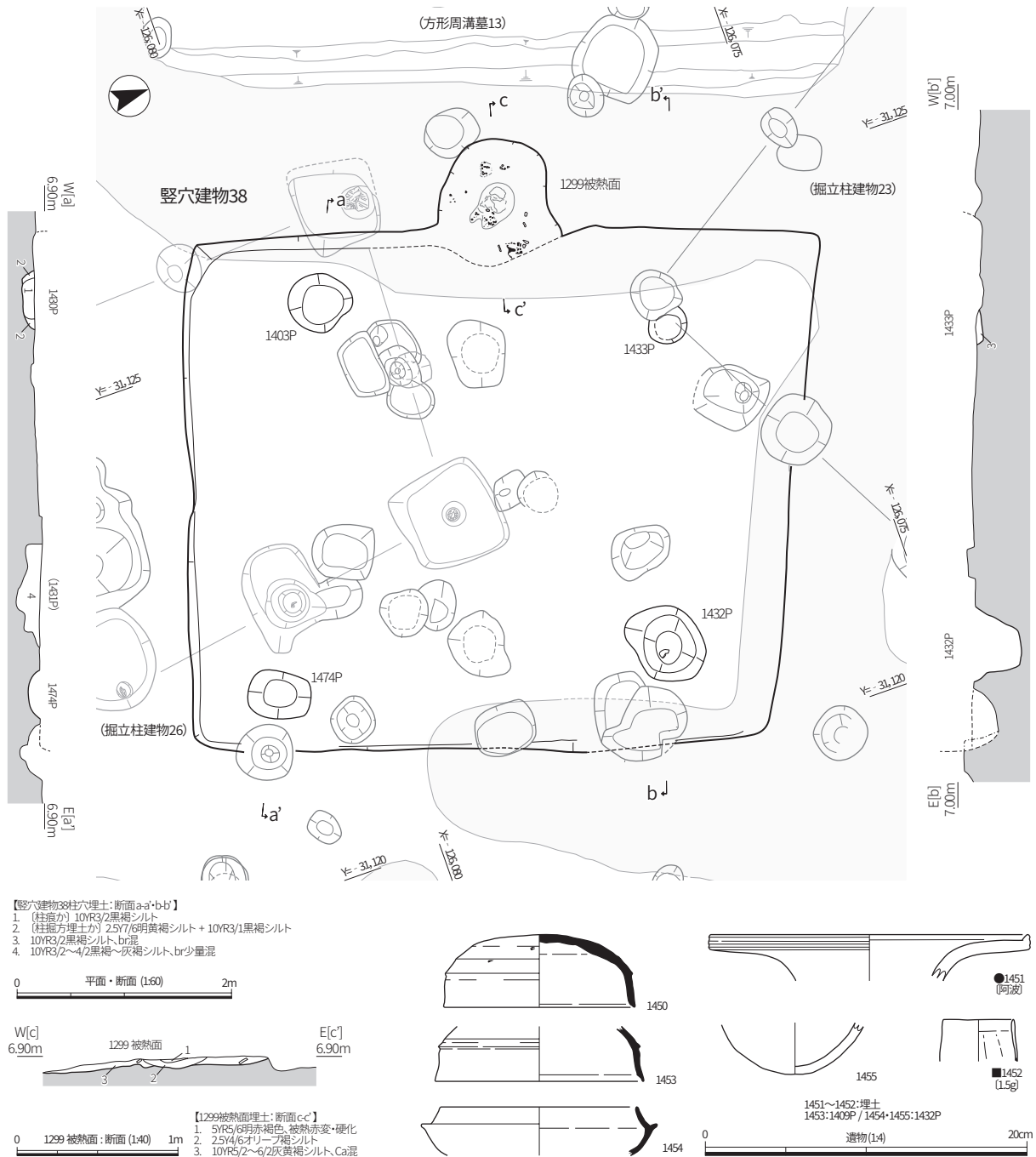


図 210. 竪穴建物 38 平面・断面・出土遺物

細片が1点出土している。建物の時期については、1730 土坑出土の須恵器杯蓋の年代観から中期末葉頃に比定できる。

**竪穴建物 38** (図 210) C-6 区中央西寄りで検出された竪穴建物で、微高地 C の南西斜面の高所部に立地する。北端部分が掘立柱建物 23 と重複し、さらに古代の掘立柱建物 26 や方形周溝墓 12・13 とも部分的に重複している。検出面の規模は、東西 5.7 m、南北 4.8 m、面積 27.4 m<sup>2</sup>をはかる。深さは 0.05 m 以下で、非常に浅く、竪穴の輪郭を辛うじて検出できた。竪穴内外に柱穴が一定数あるため、この建物に伴う柱穴の抽出にやや不安があるが、1403 P・1433 P・1432 P・1474 P が組み合う柱穴と判断した。柱穴の平面形は、不整形を呈するものが多く、大きさは 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m で柱穴ごとにばらつきがある。西壁中央付近には、長さ 0.9 m、幅 1.0 m の 1299 被熱痕が建物の外側に張り出し



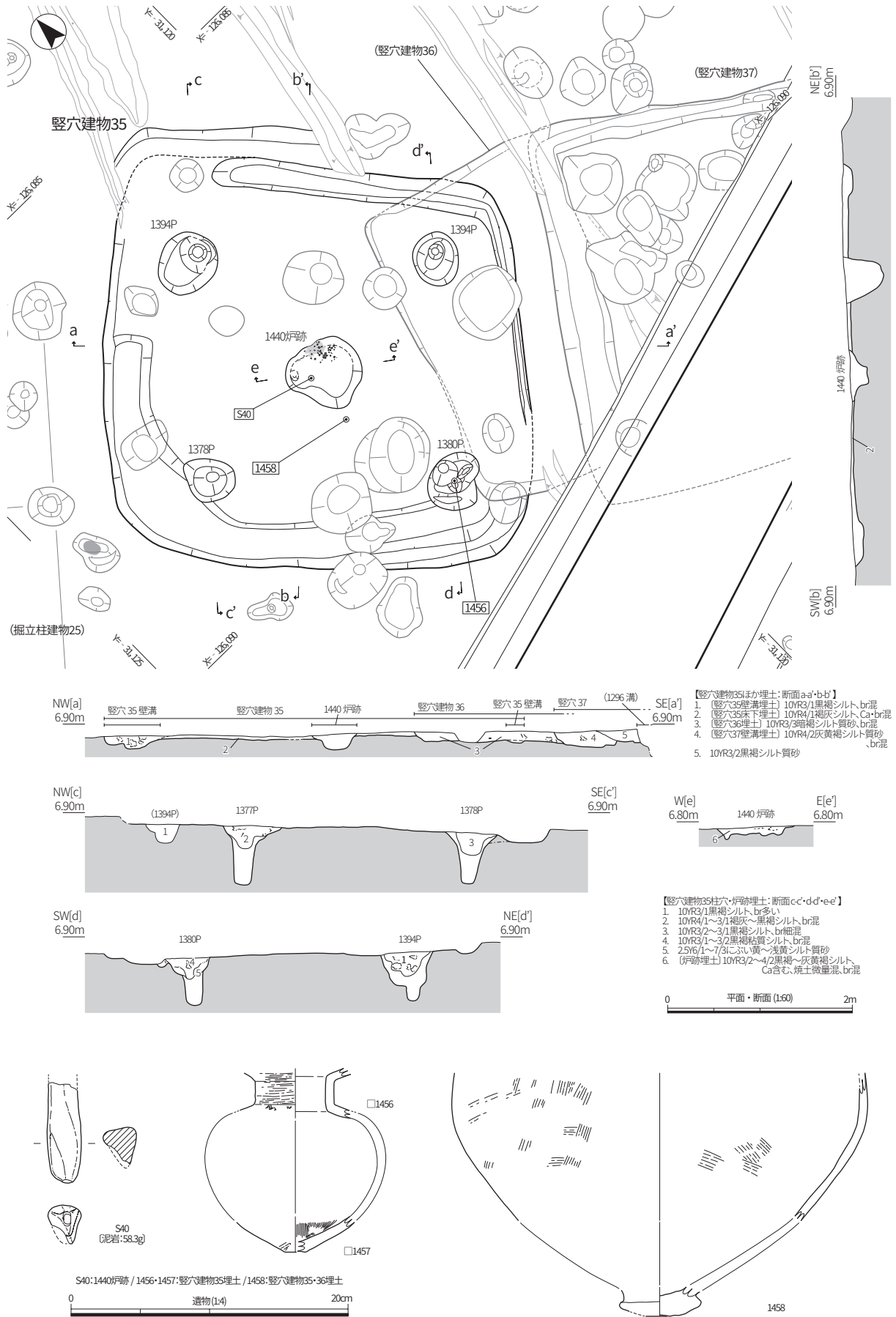


図 211. 竪穴建物 35 平面・断面・出土遺物

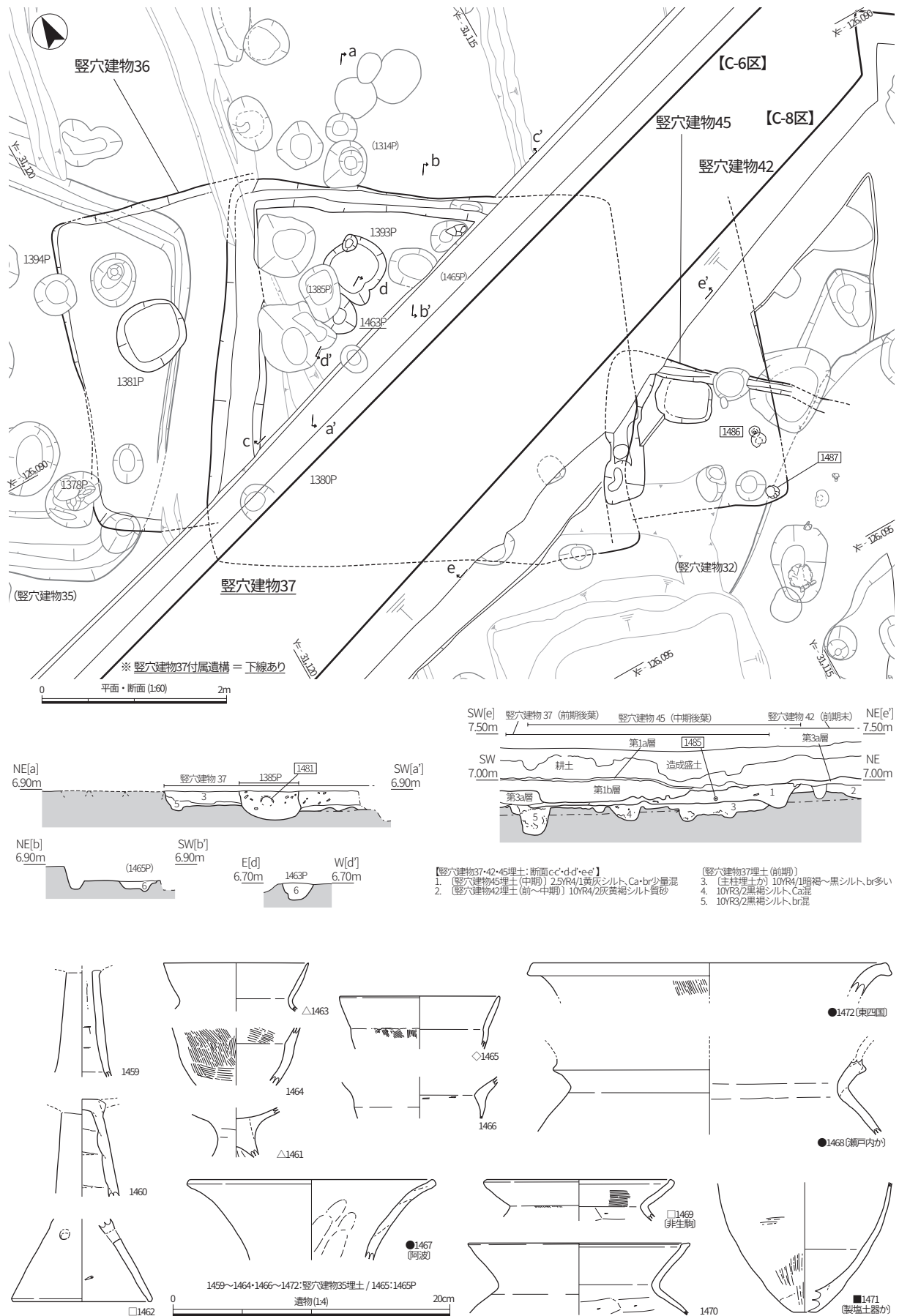


図 212. 堅穴建物 36・37・45・42 平面・断面・出土遺物 (1)

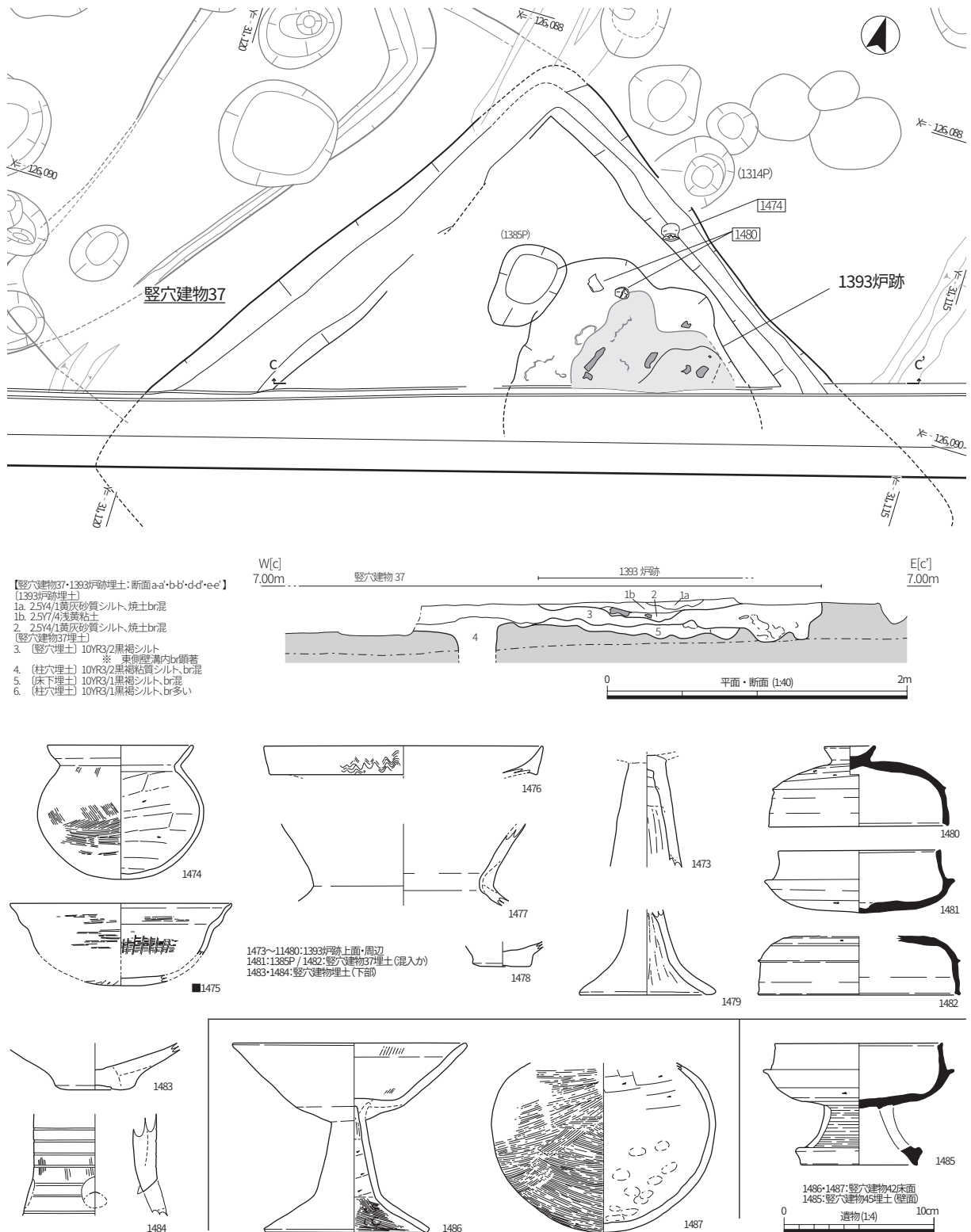


図 213. 竪穴建物 36・37・45・42 平面・断面・出土遺物 (2)

ている。上面が赤変・硬化しており、その位置からみてカマドの痕跡と判断できる。埋土や柱穴からは、一定量の土師器・須恵器・製塩土器の出土がみられる (1450～1455)。このうち建物の年代を絞り定める資料としては、埋土上面から出土した TK47 型式頃の杯蓋 (1450) や、北東支柱穴 1432P 出土の TK10 型式頃の杯身 (1454) があり、ほか内外面ナデ調整の製塩土器が計 1.5g 出土している。出土遺物はそれほど多くないが、時期については中期末～後期前葉頃に比定でき、今回の調査で確認された建

物遺構の中でも最も新しい一群と評価できる。なお阿波産の広口壺（1451）については、庄内式期まで遡るため、遺構に直接伴うものではない。

**竪穴建物 35**（図 211） C-6 区南西端で検出された竪穴建物で、北西には掘立柱建物 25 が隣接する。微高地 C の南西斜面地に立地しており、切り合い関係から東側に重複・隣接する竪穴建物 36・37 よりも古いことがわかる。検出面の規模は、東西 4.6 m、南北 4.8 m で、面積は 22.1 m<sup>2</sup> である。現状で厚さ 0.05 m の貼床を確認できるが、上面が削平を受けているため、本来の床面は反映されていない。竪穴内には、東側・西側コーナーにそれぞれ L 字形に溝がめぐるが、全周はしない。幅はそれぞれ 0.3 m、0.5 m をはかり、東側はやや幅広であるのに対し西側は狭い。中央には、大きさ 0.8 m、深さ 0.1 m の炉跡があり、埋土には炭化物や焼土が混じる。支柱穴は不整円形を呈するものが多く、大きさは 0.5 ～ 0.7 m をはかる。深さは 0.52 ～ 0.65 m で、柱痕の有無については明確にできなかったが、柱あたりから柱の太さは 0.15 m 前後に復元できる。埋土および柱穴埋土からは、土師器の細片が少量出土しており、南側支柱穴 1308P 上面から出土した精製二重口縁壺の頸部（1456）と、床面から出土した内外面ハケの平底の大型壺などを図化した。小平底の壺（1457）は、頸部（1456）の周辺、竪穴建物 35・36 の重複部分から出土しており、同一個体の可能性が高い。炉跡内は、土師器の細片とともに潰石と考えられる（S40）が出土しており、炉跡での使用をうかがわせる。これ以外には、精製器種の破片や V 様式系甕のタタキの破片などがみられ、時期については庄内式新段階～布留式古段階古相頃に比定できる。

**竪穴建物 36・37**（図 212・213） C-6 区西端で検出された 2 棟の竪穴建物で、南側の竪穴建物 37 は約 3 分の 2 が調査範囲外で、南側コーナーは隣接する C-8 区で検出されている。隣接地・上面に建物関連遺構が複雑に重複しており、前後関係を整理すると、西側は切り合いから竪穴 35 → 36 → 37 の順で建替えられたことがわかる。また未調査地を挟んで南側では、竪穴建物の一部とみられる L 字状の落込みやその南の竪穴建物 32 が隣接・重複しており、C-8 区の北壁断面などから竪穴建物 37 → 32 → 42 → 45 の順で変遷することがわかる。

先行する竪穴建物 36 は、西側 3 分の 1 ～ 半分程度の検出に留まっており、規模は南北 3.5 m、東西 1.8 m 以上をはかる。検出面からの深さは 0.1 m で、支柱穴の有無は現状では不明である。後続する竪穴建物 37 は、東西 4.1 m、南北 4.6 m の規模に復元でき、面積は 18.9 m<sup>2</sup> である。この建物も全体の 3 分の 1 程度の検出に留まったが、古式土師器がまとまって出土している。さらに上面には、後述する古墳時代中期の 1393 炉跡と重複しており、複雑な状況を呈する。断面から厚さ 0.04 m の貼床〔図 212：埋土 3〕の存在を確認でき、C-6 区の範囲では幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.05 m の壁溝がめぐる。竪穴の加工面では、柱穴が密集して検出されているが、位置から 1463P が支柱穴と推測され、大きさ 0.4 m、深さは 0.15 m をはかる。

出土遺物については、竪穴建物 36 に伴う可能性のあるものは、前述の竪穴建物 35 重複部分の（1457）など少数に限られる。竪穴建物 37 に伴う遺物としては、古式土師器がまとまってあり、大半が破片である（1459～1472）。さらに上面の 1393 炉跡に伴って出土した古式土師器（1473～1478）も様相が概ね一致しており、竪穴建物 37 に伴うとみて大過はない。出土遺物のうち高杯は脚部に限られ、いずれも B 系統の範疇で理解できるが、良好な資料はない（1459・1460・1473）。小型精製器種では、小型器台（1461・1462）、小型丸底壺・鉢（1463～1466・1474）、有段口縁鉢（1475）がある。出土量が比較的多い小型丸底壺・鉢は、内外面の調整などにバリエーションがみられ、有段口縁鉢（1462）は大和東南部からの搬入品と判断できる。壺類に関しては、破片ながら大型品が一定量確認でき、形式・



系統にバリエーションがみられる。さらに阿波産広口壺(1467)、瀬戸内系複合口縁壺(1468)、東四国系広口壺(1472)など、遠隔地からの搬入品が含まれる点が特筆される。甕は、非生駒西麓産の庄内形甕(1469)と布留形甕(1470)が共伴する。ほかでは、被熱痕跡が明瞭な外面タタキの甕形製塩土器(1471)が出土しており、摂津での出土は本遺跡に限られる。このように小型精製品と搬入品が多く含まれる点が特徴で、時期については布留式中段階中相前後に位置づけるのが妥当である。

なお埋土下部からは、弥生時代後期に遡る壺と器台の破片が1点ずつ出土している(1483・1484)。この建物37との直接的な関連は想定しがたいが、同時期の遺構・遺物の存在は明確でないため、周辺での弥生時代後期に遡る時期の遺構・遺物の有無を検証する必要があるだろう。

**1393 炉跡**(図213) C-6区南端、竪穴建物37の上面で検出された被熱面で、調査区南端で検出されたため部分的な範囲の検出に留まっている。東西2.5m、南北1.7m範囲で焼土が顕著に分布しており、炉跡と認識できるが、建物に伴う遺構であるかは不明で、具体的な機能や性確についても不明である。時期については、この炉跡に伴って出土した須恵器有蓋高杯(1480)から、TK23～47型式頃と判断できる。また、隣接する位置にある1385Pから出土したTK208型式頃の杯身(1481)や、竪穴建物37埋土から出土した混入とみられるTK208型式頃の杯蓋(1482)も、遺物の時期からみてこの炉跡と関連するものとみてよいだろう。

**竪穴建物45**(図212・213) C-8区の北壁沿いで検出された落込みで、L字状にめぐる可能性が高いことから、竪穴建物の一部と判断した。現状では、一辺2.7mの検出に留まっており、本来の規模・形状は不明である。北壁から出土したTK23～47型式頃の須恵器有蓋高杯(1485)が、この建物に伴う遺物のため、周辺一帯の建物遺構の中で最も新しいことがわかる。先行する建物とは時期の隔たりがあり、建物の向きも異なるため、重複する建物との直接的な連続性や関わりは認めがたい。

**竪穴建物42**(図212・213・214) C-8区の北壁沿いで検出された浅いL字状の落込みで、重複する竪穴建物32・45・37のうち、切り合い関係から竪穴建物37・32より後出し、竪穴建物45よりは先行する。部分的な範囲での検出に留まったため、全体の形状は不明であるが、規模は一辺2.7m以上をはかる。重複・先行する建物のうち竪穴建物37とは、建物軸が概ね一致するが、竪穴建物32とは大きく異なる。南東コーナー付近からは、C系統の土師器無稜高杯(1486)と中型壺体部(1487)が出土しており、これらは床面に伴う遺物と判断できる。出土遺物から、布留式中段階新相～新段階に比定できる。

**竪穴建物32**(図214・215) C-5区・C-8区にまたがって検出された竪穴建物で、竪穴建物42や掘立柱建物33と重複・先行する。微高地C頂部の南西斜面高所部に立地しており、部分的に攪乱を受けているが、ほぼ全体を検出することができた。規模は、南北5.6m、東西5.2m、面積29.1m<sup>2</sup>をはかる。埋土の掘削時には、床面を十分に捉えることができなかつたが、断面から厚さ0.07mの貼床を伴うことが明らかとなった。壁溝の有無は、平面では把握することができなかつたが、断面から判断する限り、少なくとも一部にはめぐっていた可能性がある。加工面は、中央付近がやや高く掘り残されているが、周囲がやや深く掘り下げられており、南西側はL字溝状の凹みがみられた。竪穴の中央には、大きさ0.5mの不整形の1561炉跡があり、底部には土師器の大型壺体部(1500)の破片が敷き詰められていた。大型壺の下部には、炭層がレンズ状に薄く堆積しており、建物の廃絶時に意図的に埋めたと判断できる。さらに炉跡の周辺には、南北2.3m、東西2.1mの範囲で炭化物の分布があり、南西コーナー付近には南北1.9m、東西1.1mの範囲で赤色焼土ブロックの分布がみられた。建物の南壁際中央付近には、楕円形の1563土坑があり、規模は長径1.3m以上、深さ0.14mをはかる。埋土下部からは、

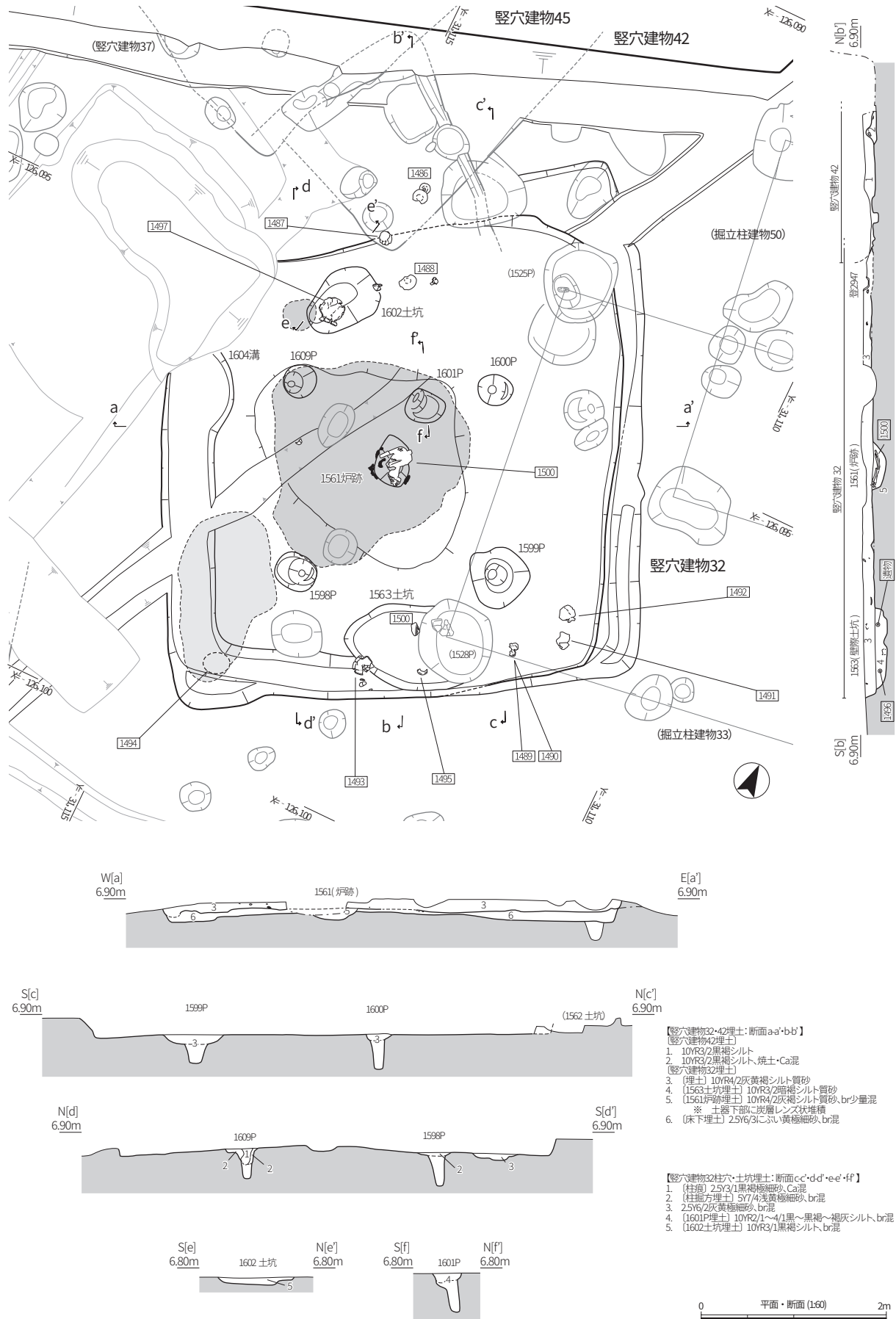


図 214. 堅穴建物 32 平面・断面

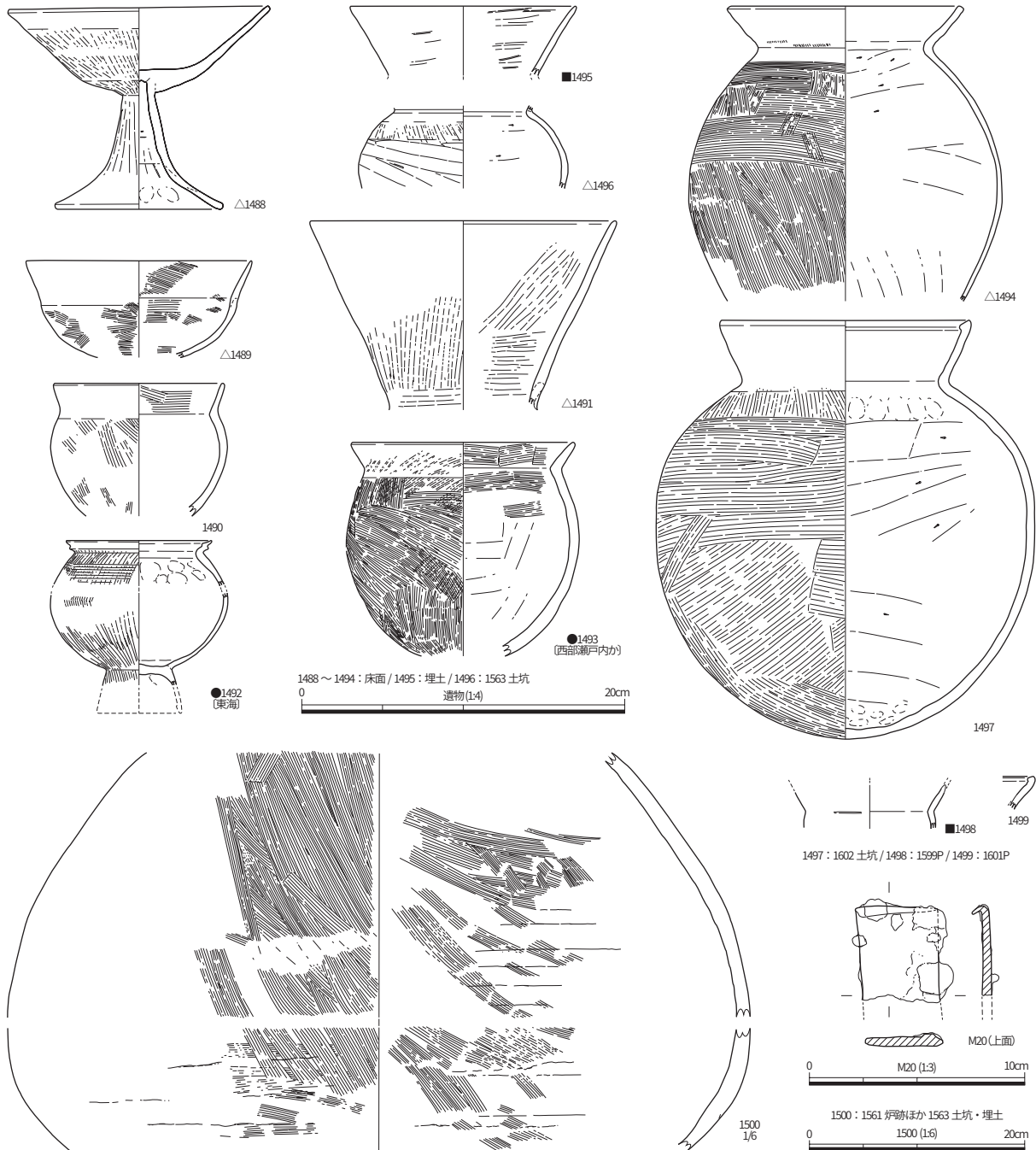


図 215. 竪穴建物 32 出土遺物

炉跡内から出土した大型壺と同一個体の破片 (1500) が出土しており、この建物に直接伴う遺構であることを示す。ほかでは、精製の中型直口壺の口縁部 (1495) が出土し、肩部からは甕 (1493) が出土している。北側には、長径 0.8 m、深さ 0.09 mをはかる不整楕円形の 1602 土坑があり、下部から布留形甕 (1497) が潰れた状態で出土した。床面からは、還元率の高い古式土師器が豊富に出土しており、今回の調査でみつかった竪穴建物の中では最も良好な出土状況を示す。北側では高杯 (1488) が、南東コーナー付近からは小型鉢 (1489)、小型壺 (1490)、中型壺口縁 (1491)、ミニチュアの S 字甕 (1492) がまとめて出土しており、焼土が面的に拡がる南西コーナー付近からは布留形甕 (1494) が出土した。

床面と付属する遺構から出土した遺物は、いずれも古式土師器で、このほかに上面からは性格不明の板状製品 (M20) が 1 点出土している。古式土師器は、各器種がほぼ網羅的に揃っており、外面ハ



ケ調整のC系統(Ⅱ群系)無稜高杯(1488)は、口縁部が直線的にのびる。小型器種では、外面ハケ調整の粗製の小型鉢(1489)と小型壺(1490)が床面から出土し、ほかでは南東支柱穴1599Pからは搬入品とみられる精製のB系統小型丸底鉢の頸部片(1498)が出土している。壺では、B系統の直口壺(1495)と体部(1496)が同一個体の可能性があり、このほかに口縁部が著しく長い大型直口壺の口縁部(1491)や1561炉跡などから出土した内外面ハケの特大型の壺体部片(1500)がある。甕では、1602土坑から出土した全形が復元できる中型の布留形甕(1497)のほか、口縁部の端部形状や胎土が異なる(1494)があり、製作地の違いを反映するとみてよい。口縁部がくの字に短く外反する甕(1493)は、外面調整がタタキのちハケで、畿内以外の地域からの搬入品と判断できる。調整やプローションから、西部瀬戸内や南西四国などの地域が搬入元の候補となる。ミニチュアのS字状口縁台付甕(1492)は、頸部に沈線があるC類<sup>36)</sup>で、ミニチュア品の類例としては大阪府域では久宝寺遺跡や加美遺跡の方形周溝墓からの出土事例が知られる<sup>37)</sup>。ほかに淀川流域では、城陽市下水主遺跡<sup>38)</sup>での出土事例があり、本資料は煤等の付着がないため通常の甕とは異なる使用が推測されるところである。板状製品(M20)については、端部に折り返しがみられるが、用途は不明である。鉄製品と竪穴内部の焼土や炭化物の拡がりに関連するものであるならば、鍛冶工房などの可能性も推測されるところである。

時期については、中型の布留形甕(1497)が厚手化・粗製化が進んだ新しい時期の特徴を備えており、布留式中段階新相～新段階古相頃に比定することができる。その一方で小型精製器種にバリエーションがあり、B系統(Ⅰ群系)の精製器種に細筋のヨコミガキが残る点や、C系統(Ⅱ群系)の無稜高杯(1488)の杯部が直線的に開き外反しない点などやや古い様相も留めており、中段階新相頃に位置づけるが現状では穏当である。特にこの時期の資料は、今回の調査では出土量が少ないため、本遺跡における布留式中段階後半～新段階の土師器の型式変化を考える上で重要な資料といえる。

**竪穴建物 33・43・44** (図 216・217) 竪穴建物 33・43 は、C-8 区東半で検出された重複する 2 棟の竪穴建物で、この 2 棟の南側に L 字状の落込みが重複しており、竪穴建物 44 とした。微高地頂部の南西斜面に立地しており、北東 5 m に竪穴建物 32 が、西 3 m に竪穴建物 40 がそれぞれ近接している。3 棟の竪穴建物は、切り合いと出土遺物から竪穴建物 44 → 33 → 43 の順で推移したと判断できる。

ほぼ同一地点で重複する竪穴建物 33・43 は、検出時には重複する 2 棟の建物という認識がなく、埋土掘削後に重複を把握したため、ふたつの建物の外形は明確にできなかった。ただし南東コーナー部分での壁溝の検出状況から、先行する竪穴建物 33 が北寄りにあり、建替えに伴う竪穴建物 43 はやや南にずれた位置にあることが判明している。2 棟全体での規模は、南北 7.4 m、東西 7.5 m をはかるため、それぞれひとまわり小さい規模に復元できるが、正確な規模は明確でない。支柱穴は、北寄りの 1793P・1579P・1584P・1587P が竪穴建物 33 に伴い、南寄りの 1794P・1578P・1575P・1588P が竪穴建物 43 に伴う可能性が高い。さらに中央炉跡が 2 基の建物にそれぞれに伴うが、いずれも掘り込みが浅く明瞭ではない。また南東コーナー付近に位置する楕円形の 1582 土坑や 1574 土坑は、竪穴建物 43 に伴う壁際の土坑の可能性が高く、このうち 1582 土坑の規模は、長径 1.0 m、深さ 0.5 m をはかる。埋土は、ブロックを顕著に含む浅黄シルトを主体としており、人為的な埋戻し土と判断できる。

南側の竪穴建物 44 については、規模は一辺 2.0 m 以上で、北東コーナー付近に位置する 1597 土坑は、この建物に伴う壁際の土坑の可能性はある。

3 棟の竪穴建物に関連する遺物は、出土量は少ないが、混入と考えられる数点の須恵器細片を除くと、庄内式期に遡る古い時期の古式土師器がまとまっている。竪穴建物 33・43 の埋土からは、胎土から搬



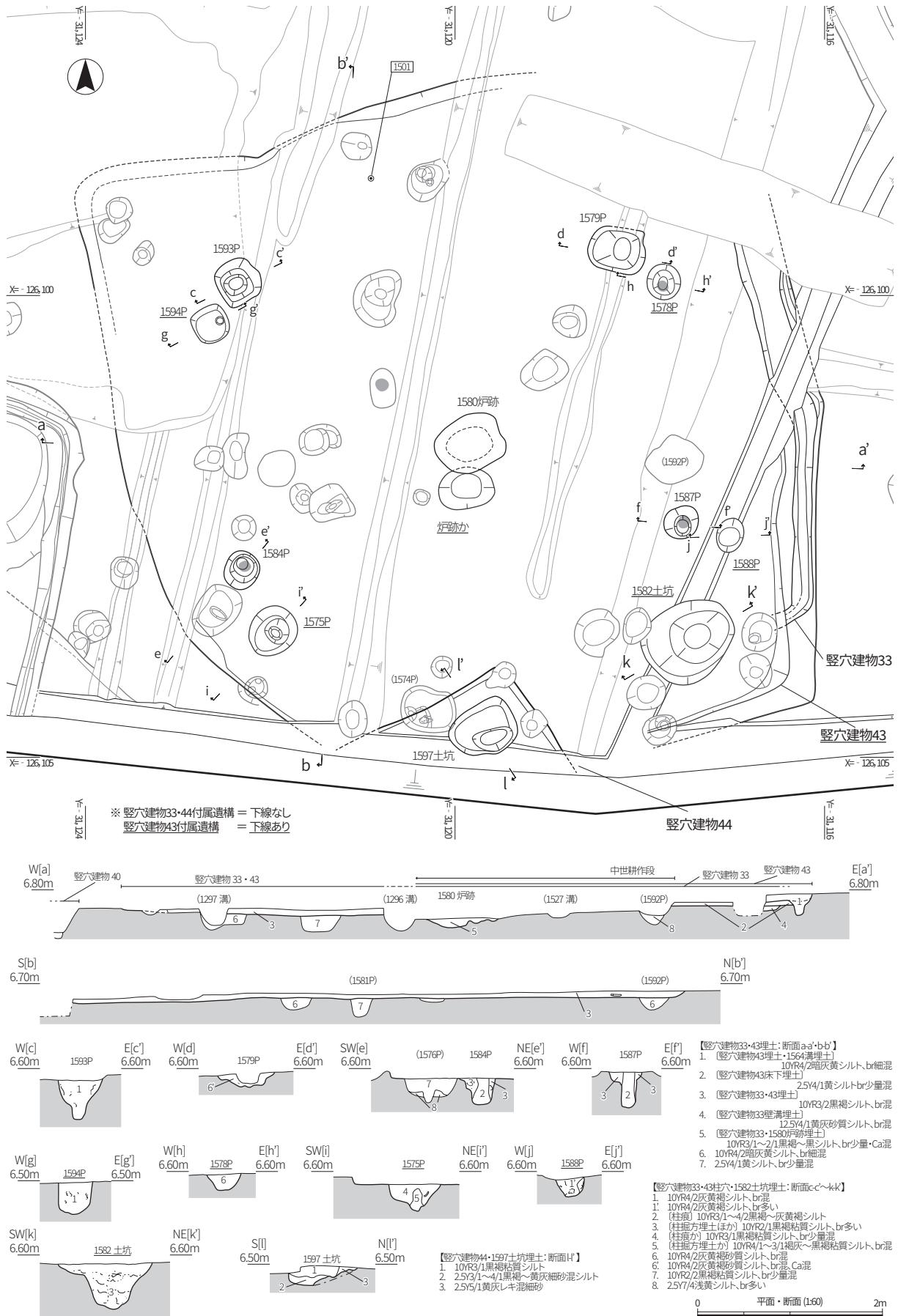


図 216. 竪穴建物 33・43・44 平面・断面

入品と推測される二重口縁壺の頸部片(1501)や、くの字甕の口縁(1502・1503)などが出土している。小型器台(1505)やV様式系の甕(1504・1506・1507)は、竪穴建物33に伴う支柱穴や炉跡からの出土である。1504Pから出土した小平底の小型壺(1508)が竪穴建物43に伴い、竪穴建物44の埋土からは突出した平底壺(1509)の小片が出土しており、いずれもV様式系が主体である。時期については、竪穴建物44は庄内式古段階頃、竪穴建物43は庄内式古～新段階頃、竪穴建物33は庄内式新段階～布留式古段階頃にそれぞれ比定できる。

**竪穴建物 40** (図 217) C-8 区中央西寄り検出された竪穴建物で、東に竪穴建物 33・43 が、西に竪穴建物 41 が隣接する。微高地 C の南西斜面に立地しており、南側 4 分の 1 程度の範囲が調査区外に広がるが、床面が極めて良好な状態で検出された。規模は、南北 4.0 m 以上、東西 5.2 m をはかる。支柱穴の位置関係などから、東西・南北は同規模と推測できるため、面積は約 27 m<sup>2</sup> に復元できる。検出面から床面までの深さが 0.28 m あり、周囲に幅 0.08 ～ 0.15 m、深さ 0.06 m の壁溝がめぐる。床面からは、北東コーナー付近で円形 1550 落込みが、西側で南北に溝状に長い 1549 落込みがそれぞれ検出され、深さは最大で 0.32 m をはかる。これらはブロック土で人為的に埋め戻されており、埋め戻されたのち上面を床面としていたと判断される。その一方で落込みの上面以外の範囲は、竪穴の掘削底面を直接床面としていたものとみられる。また竪穴の中央には、一辺 2.7 m、幅 0.5 m、深さ 0.04 m の口の字状の浅い落込みが検出されたが、壁溝埋土と同質の細かいブロックを含む暗灰～黒粘質シルトを埋土とするため、建物の機能時にはこの溝の部分が一段低くなっていたと判断できる。建物内部で外側が一段高い構造としては、ベッド状遺構との関わりが推測でき、今回の調査では竪穴建物 12 の建物構造と類似する。中央の 1569 炉跡は、径 0.6 m の不整な円形で、深さは 0.08 m をはかる。埋土は、細かいブロックを含む褐灰シルトを主体とし、下部には炭化物層が薄く堆積している。支柱穴は、直径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.18 ～ 0.29 m をはかる。埋土断面から判断する限り、柱はいずれも建物の廃絶時に抜き取られたと判断できる。

埋土および竪穴内の遺構から出土した遺物は、いずれも古式土師器の細片で、出土量は少ない。また良好な資料も少なく、埋土出土の円形浮文のある壺口縁(1510)やくの字甕の口縁(1511)、壺の可能性のある(1512)、1569 炉跡出土の鉢(1513)を図化した。ほかではV様式系タタキ甕や、生駒西麓産の庄内形甕、体部ハケ甕の破片も確認できる。詳細な時期比定は難しいが、布留式古段階古相前後に位置づけることが可能である。床面の状況が詳細に把握できる点が重要で、ベッド状遺構の構造などは隣接する乙訓地域や播磨などの地域の事例との比較検討が重要である。

**竪穴建物 41** (図 218) C-8 区の西半で検出された竪穴建物で、竪穴建物 40 の西に隣接する。微高地 C の南西斜面に立地しており、西側は中世の 1519 大型土坑の掘削によって旧地形が改変されているが、この建物を境にして、西側は地形が大きく下がる。北側 4 分の 1 程度の範囲が調査区外のため、全体の規模・形状は不確かであるが、規模は一辺 5.2 m、面積 27.0 m<sup>2</sup> をはかる。浅い口の字状の凹み 1530 溝と、支柱穴とみられる 1557P・1558P・1560P、東側コーナーに位置する隅丸長方形の土坑などが検出されたが、中央部分に古代に下る 1526 溝が重複しており、炉跡の有無は明確にできなかった。浅い口の字状の凹み 1530 溝は、幅 0.9 ～ 1.6 m、深さ 0.12 m をはかり、埋土はブロック混じりの黒粘土を主体とする。竪穴建物 40 など、今回の調査で検出されたほかの竪穴建物の事例を参考にすれば、床面下部にみられる掘り込みと判断できる。支柱穴は、隅丸方形を呈するものが多く、大きさは 0.4 m 前後、検出面からの深さは 0.35 m 前後をはかる。柱の太さは、柱あたりから 0.1 m 程度に復元される。

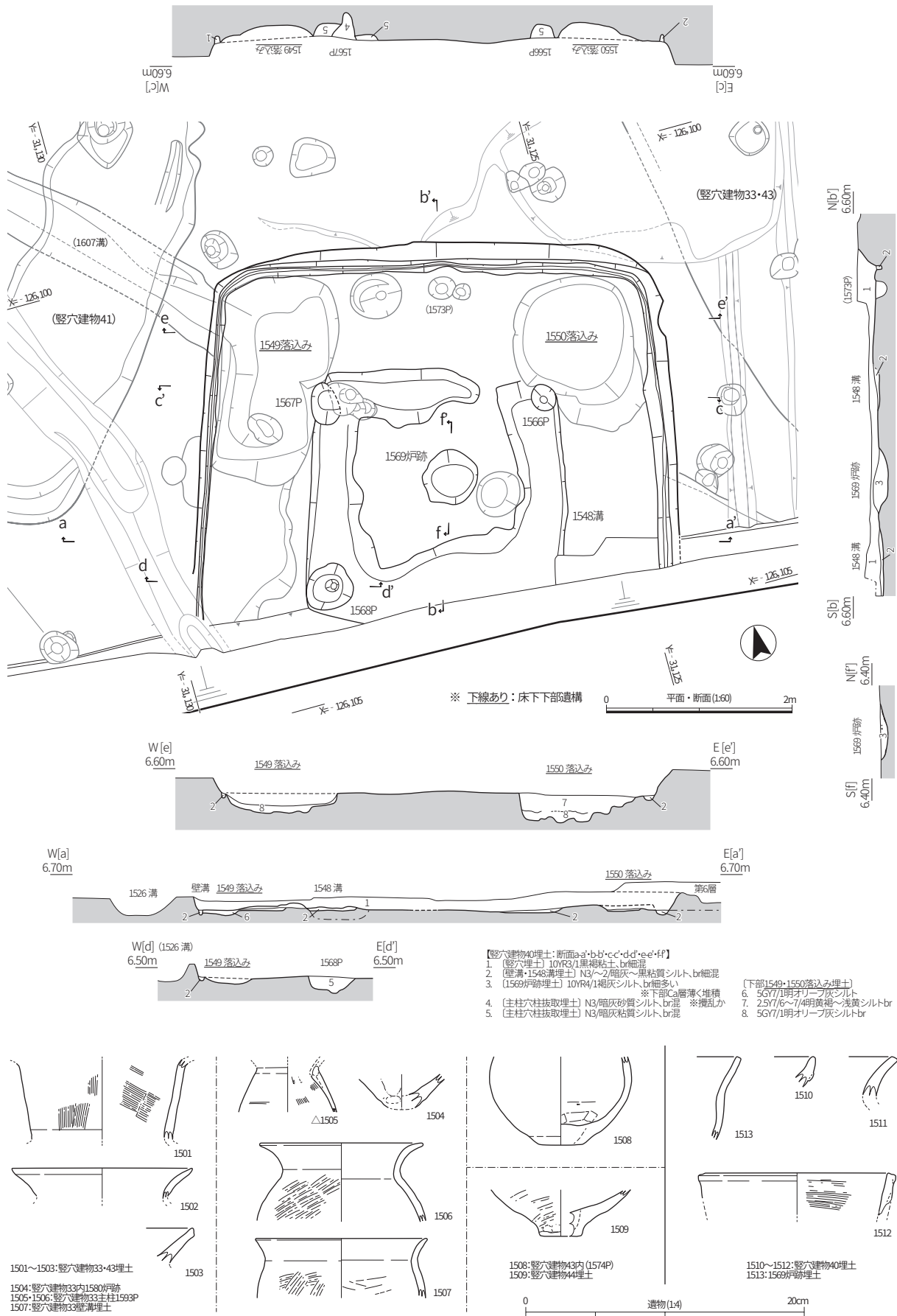


図 217. 堅穴建物 40 平面・断面・出土遺物、堅穴建物 33・43・44 出土遺物

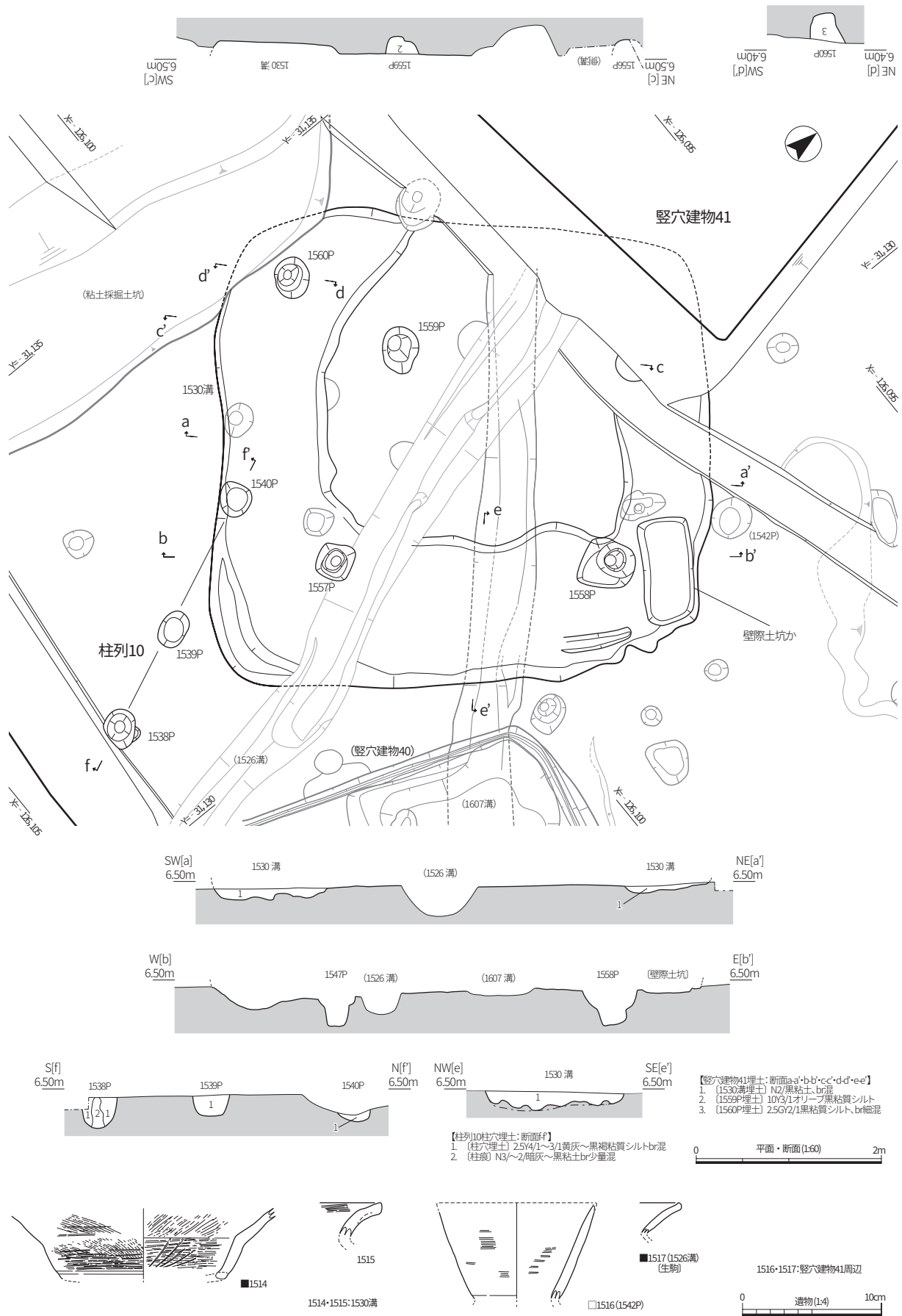


図 218. 堅穴建物 41 平面・断面・出土遺物



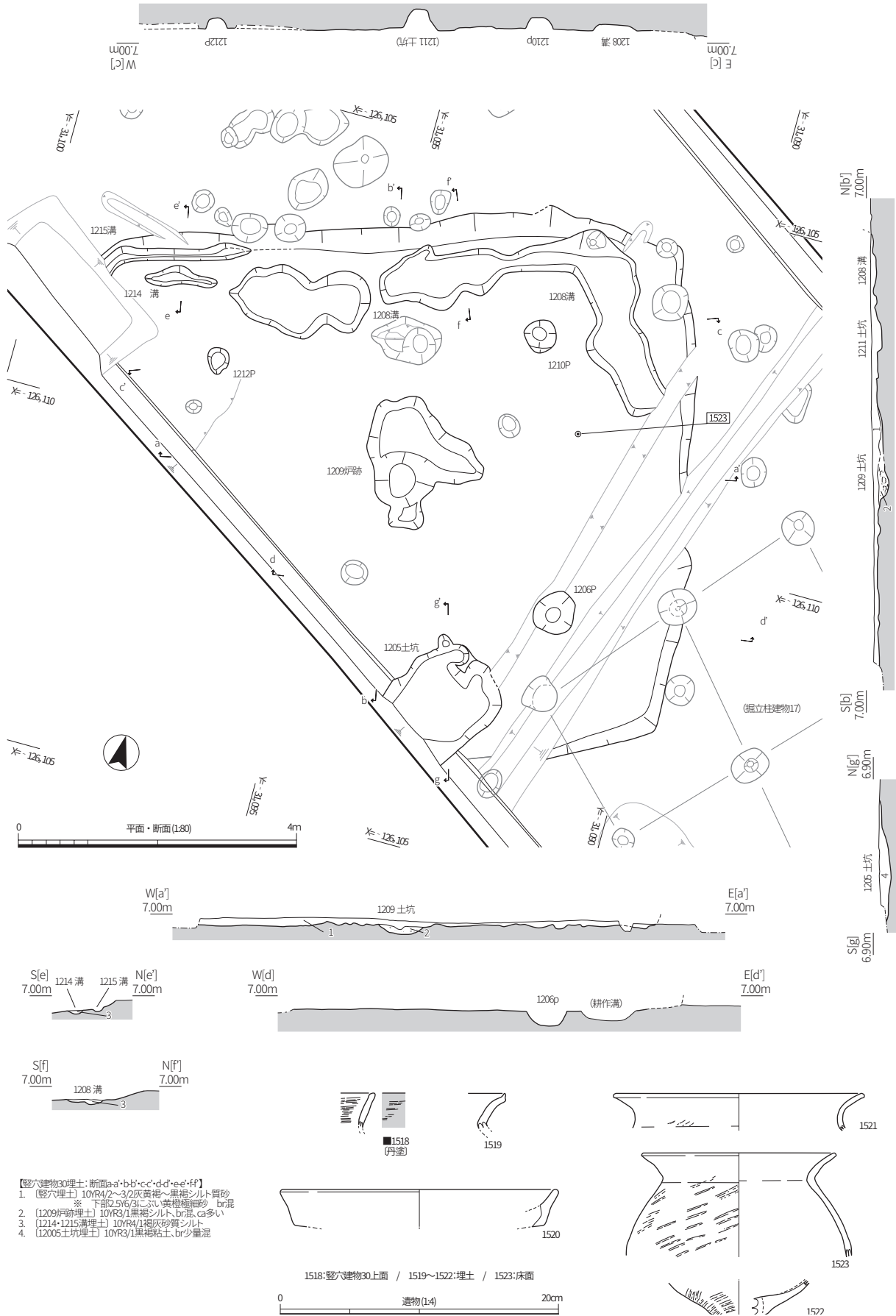


図 219. 竪穴建物 30 平面・断面・出土遺物

1530 溝埋土や周辺からは、少量の古式土師器が出土している。1530 溝埋土から出土した内外面細筋ヨコミガキを施す精製 B 系統の有段高杯 (1514) は、胎土から在地産と認識でき、ほかにはく字甕 (1515) など破片がある。建物の周辺からは、搬入品とみられる細筋ヨコミガキの小型直口壺 (1516) と生駒西麓産庄内形甕の口縁部細片 (1517) が出土しており、時期については布留式中段階古相前後に比定できる。出土遺物から隣接する竪穴建物 40 より後出することは明らかであり、竪穴建物 43・33 → 40 → 41 の順で建替えられたと判断できる。

**柱列 10 (図 218)** C-8 区の西半で検出された 3 基からなる柱穴の並びで、竪穴建物 41 と部分的に重複する。南北の長さは 2.7 m をはかる。柱穴の平面形は、不整円形を呈するものが多く、検出面での柱の太さは 0.4 m 前後で、深さは 0.3 m 前後である。南端の 1538P では、埋土断面から柱痕を確認でき、大きさは 0.10 ~ 0.15 m に復元される。柱穴埋土から出土した遺物はないため、時期については不明である。

**竪穴建物 30 (図 219)** C-5 区中央付近で検出された竪穴建物で、南西端が掘立柱建物 17 と重複する。微高地 C の頂部付近に立地し、東 6 m には 978 土坑が位置する。規模は東西 6.6 m、南北 5.8 m をはかり、面積は 38.3 m<sup>2</sup> に復元できる。上面が後世の耕作によって大きく削平を受けており、残存状況はあまり良くない。このため建物の検出面から基底面までの深さが 0.10 m と浅く、上面を被覆する〔埋土 1〕の性格や壁溝の有無などは明確にできなかった。中央の 1209 炉跡は、大きさ 1.1 m の不整形で、深さは 0.12 m をはかり、埋土にはブロックや炭化物を含む。主柱穴 1206P・1210P・1212P は、規模は 0.3

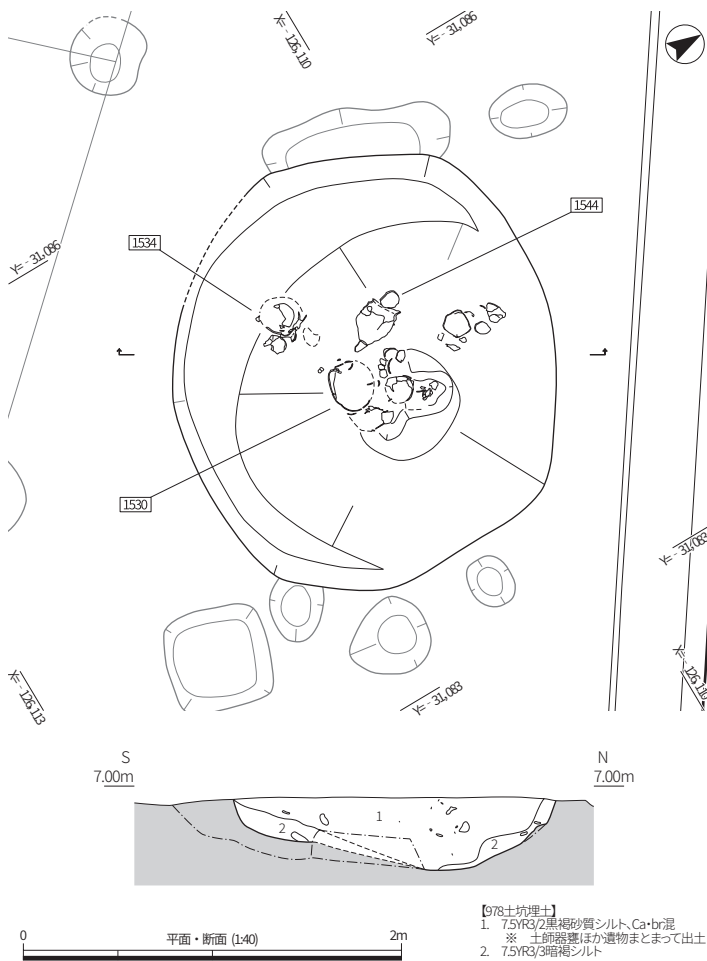


図 220. 978 土坑 平面・断面

~ 0.4 m、深さは 0.25 m 前後である。南側壁際に位置する隅丸方形の 1205 土坑は、ほかの竪穴建物と同様の壁際の土坑と判断できる。規模は 1.1 m 以上、深さ 0.13 m をはかり、埋土はブロック混じりの黒褐シルトを主体とする。壁溝内側の 1208・1214 溝については、他の竪穴建物の事例から建物の機能時には埋められていた可能性が高い。

出土遺物は、混入と考えられる須恵器細片 3 点を除くと、ほかは全て庄内式期に遡る時期の古式土師器で、いずれも細片ながら一定量の出土がある。上面 (1518)、埋土 (1519 ~ 1522)、床面 (1523) に区別でき、V 様式系の甕 (1519・1521 ~ 1523) のほかに、外面に赤色顔料が塗られた小型壺 (1518) や二重口縁壺 (1520) などを図化した。いずれも細片で、図化できた資料も少ないことから詳細な時期比定は難しいが、庄内式古段階~中段階頃に位置づけることがで

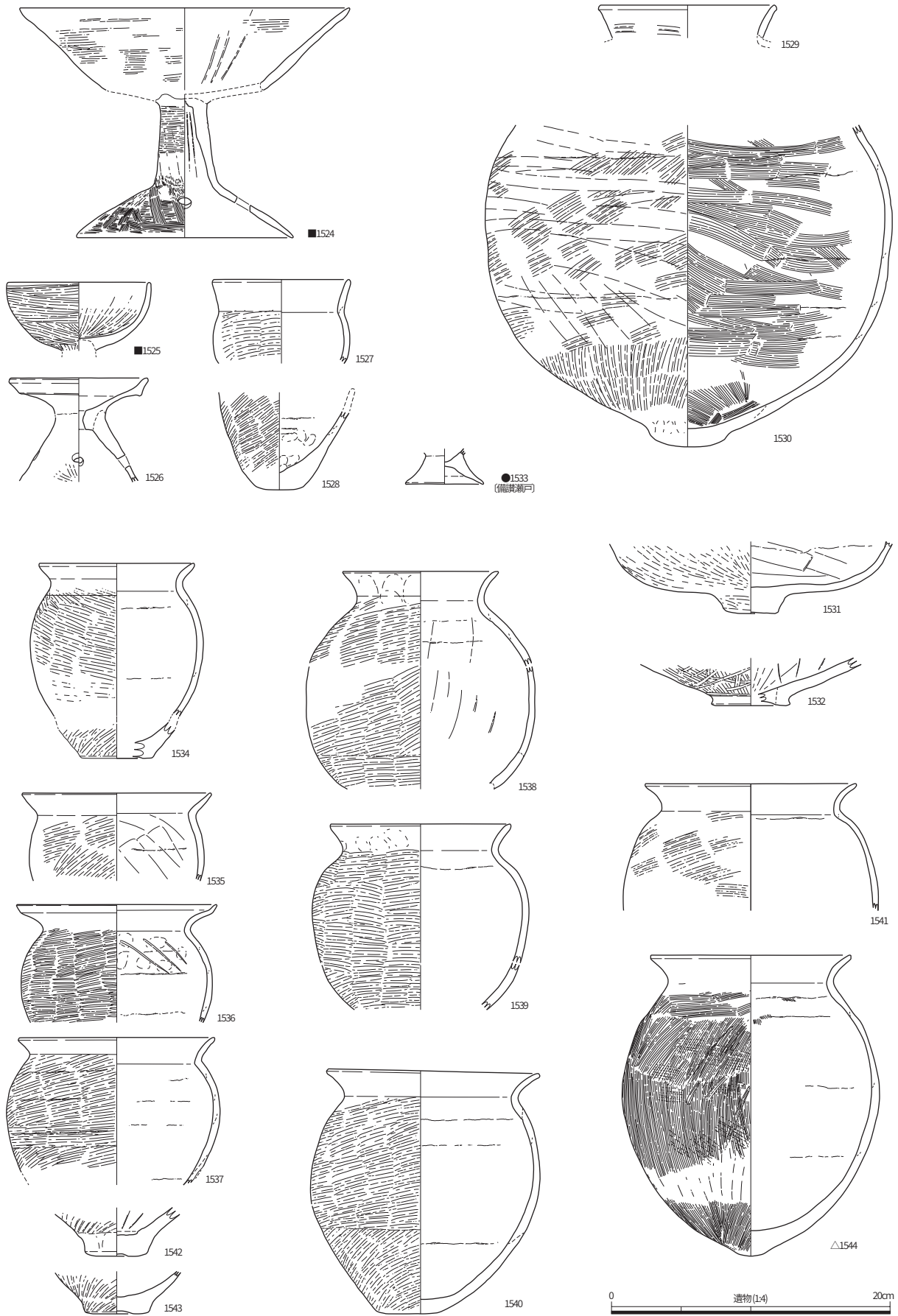


図 221. 978 土坑 出土遺物

きる。近接する 978 土坑とほぼ同時期の建物であるため、ふたつの遺構は同時併存すると判断して大過ない。

**978 土坑** (図 220・221) C-5 区の東半に位置する径 2.4 m の円形の土坑で、古墳時代初頭の土器がまとまって出土した。微高地 C の頂部付近に立地しており、西 7 m に竪穴建物 30 が、南東 5 m に竪穴建物 31 が位置する。検出面からの深さは 0.38 m で、埋土は炭・ブロック混じりの黒褐シルトを主体とし、底部付近から原位置を保った状態で古式土師器が出土した。遺構の性格は明確ではないが、古式土師器の各器種が一括で網羅的に出土しており、集落内祭祀と関わる遺物群の可能性が高い。

出土遺性物は、いずれも庄内式期に遡る古式土師器で、供膳具・壺類・甕類が揃っている (1524～1544)。微高地高所部に遺構が位置し、上面が削平されているため、全体的に器面が風化して状態はあまり良くない。供膳具および小型器種では、内外面にヨコミガキを施す精製 B 系統の大型高杯 (1524) と椀形高杯の杯部 (1525)、A 系統の小型器台 (1526)、小型鉢 (1527・1528) がある。このうち精製高杯 2 点 (1524・1525) は、調整・胎土から中河内からの搬入品と判断できる。一方で小型器台 (1526) は、後述する V 様式系の壺・甕類と同じ胎土の在地の A 系統で、口縁部が屈曲する小型鉢 (1527) は、小型丸底タイプのプロポーションで、外面にタタキが残る点がやや珍しい。壺は、残りの良い資料が少なく、底部～体部上半まで復元できる (1530) は、外面のタタキが不定方向にナデ消されている。口縁部では、短く立ち上がる小型品の破片 (1529) が確認できる。甕は、大半が V 様式系タタキのくの字甕 (1534～1543) で、いずれも小型品である。口縁部の形態にややバリエーションがあるが、底部の残る資料はいずれも底の突出が弱くなっている。なお壺と甕は、いずれも胎土が特徴的な明るい橙色を呈するが、こうした胎土の土器は、高槻市内の弥生土器では古曾部芝谷遺跡をはじめとする丘陵部の遺跡で多い傾向にある。<sup>40)</sup> 全形を復元できる (1544) については、小さな底部に外面タタキのちハケを施す。そのほかの V 様式系甕とは、明らかに異質であり、搬入品と推測されるが、こうした変容甕の系譜は不明である。これ以外では、脚台式の製塩土器 (1533) が 1 点出土しており、備讃瀬戸からの搬入品である可能性が高い。

時期については、中河内の搬入品 (1524・1525) の特徴から、庄内式古段階新相～中相頃に比定できる。今回の調査で出土した古墳時代の遺物の中では特に古い時期の良好なまとまりで、西隣に位置するほぼ同時期の竪穴建物 30 や 1897 井戸などとの関係が問題となる。また、摂津と中河内の土師器の併行関係や、摂津への精製器種の搬入あり方を考える上でも良好な資料群といえる。

**掘立柱建物 38** (図 222・223) P3 区の北西端で検出された南北 3 間×東西 2 間以上の掘立柱建物で、竪穴建物 46 と 1651 溝が重複する。微高地 C の頂部付近の緩斜面地に立地しており、南東 5 m には竪穴建物 46・47・49 が隣接する。建物の規模は、南北長 4.7 m で、東西長は 2 間と仮定した場合、3.9 m に復元される。建物の南北軸は、49.7°西に傾く。南北の柱筋の通りは極めて良い。東西の柱筋は、南北筋に対してやや開き気味である。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものが多く、規模は 0.5 m 前後のものが多い。検出面からの深さは 0.25 m 前後で、1709P では埋土断面から柱根が確認されたが、ほかの柱穴では確認できない。

柱穴埋土からは、土師器・須恵器の細片が少量出土しており、このうち 1636P から出土した TK208 型式頃の須恵器杯蓋 (1550) を図化した。中期中葉以降に下るため、重複する竪穴建物 46 とは時期が離れており、直接的な関連は想定できない。

**竪穴建物 46** (図 222・223) P3 区の北西端で検出された竪穴建物で、掘立柱建物 38 と 1651 溝が重



複する。微高地 C の頂部付近の緩斜面地に立地しており、南東 5 m には竪穴建物 47・49 が隣接する。北東コーナーの一部が調査区外にかかっているが、規模は東西 5.2 m、南北 4.4 m、面積 22.9 m<sup>2</sup>をはかる。上面が削平を受けているため、貼床の有無など詳細な構造は明確にできなかった。竪穴内には、幅 0.5～1.0 m、深さ 0.07 m の浅い口の字状の凹みがあり、これについてはほかの竪穴建物の事例から床面下部の掘り込みと推測される。南壁沿い中央東寄りに位置する楕円形の 1704 土坑は、長径 0.6 m、深さ 0.29 m をはかり、埋土上半から土師器直口壺 (1547) の口縁部や高杯脚部 (1548) が出土した。特に直口壺 (1547) は、口縁部が 2 破片に分割された状態で出土している。口縁部は完存するものの、体部の破片がないため、意図的に破壊した上で口縁部のみを土坑に埋納したと判断できる。主柱穴については、十分に把握することができなかったが、南西主柱穴は 1701P・1702P・1703P のいずれかと推測される。北西・南東主柱穴は、掘立柱建物 38 に伴う 1713P や 1709P と重複する可能性が高く、北東についても同様に、1743・1808 土坑や 1651 溝との重複が推測される。なお竪穴内に位置する 1743・1808 土坑は、先行する別遺構の可能性が高いため、詳細は後述する。

出土遺物には、古式土師器の破片が一定量あり、ほかに上面の耕作溝からの混入とみられる須恵器細片が数点含まれる。床面出土の鉢形土器 (1546) と 1704 土坑出土の C 群 (布留系) 直口壺 (1547) が復元率が高く、ほかに埋土・土坑・周辺柱穴などから出土した外反口縁の甕 (1545) や小型高杯脚部 (1548・1549) などがこの建物との関連が推測される。特に深い鉢形 (1546) は、出土例が少ない器種で、年代・性格など位置づけがやや難しい。ほかでは口の字状の凹みから、用途不明の小型板状鉄器 (M21) が 1 点出土している。時期については、庄内形甕を含まない点からやや新しく、小型高杯の存在などから布留式中段階古相頃に位置づけるのが妥当といえる。

**1743・1808 土坑** (図 222) 竪穴建物 46 の内部に位置する東西に長い隅丸方形の土坑で、規模は東西 1.2 m、南北 0.8 m をはかる。当初は一連の土坑と認識していたが、埋土の掘削をおこなったところ西側がやや深くなり、東西で埋土の様相も異なることが判明したため、別遺構と認識するに至った。埋土は、西側 1743 土坑が黒褐粘土を主体とし、1808 土坑は下部〔埋土 4～6〕が自然堆積、上部〔埋土 2・3〕は人為的な埋戻し土と判断できる。下部から湧水がある深い遺構であるため、いずれも取水遺構の可能性が高い。出土遺物は、1743 土坑から古式土師器の細片が数点出土しており、図化できるものはなかったが、生駒西麓産の壺体部や V 様式系タタキ甕の細片がみられる。その一方で 1808 土坑からは、遺物は出土していない。ふたつの遺構の先後関係については、適切な断面を設定できなかったため不明である。また重複する竪穴建物 46 との関係についても、明確にはできなかったが、出土遺物から類推する限り、この 2 基の土坑が建物 46 に先行する蓋然性が高い。

**竪穴建物 47・48・49** (図 223・224・225) P3 区の北端で検出された重複する 3 棟の竪穴建物で、いずれも傾きを揃えることから、連続する 3 棟の建替えとみなすことができる。微高地 C の頂部付近の緩斜面地に立地しており、北側 5 m に竪穴建物 46・掘立柱建物 38 が隣接するが、竪穴の北東側には東西 4.1 m 規模の現代の攪乱があり、部分的な破壊を受けている。

微高地 C の高所に位置するため、埋土や床面の状況は十分に把握することができなかったが、壁溝が 3 重にめぐることから 3 回の建替えと判断した。断面では、外側の竪穴建物 47 の内側溝〔断面 a-a' : 埋土 8〕を竪穴建物 49 に伴う壁溝〔断面 a-a' : 埋土 2〕が後から掘り込まれていることが確認できるため、竪穴 47 がひとまわり小さい竪穴 49 よりも先行することがわかる。さらに北東コーナー付近には、竪穴建物 47 の内側に竪穴建物 49 とは別の壁溝がめぐると、2 棟とは別の竪穴建物 48 の存在を把握

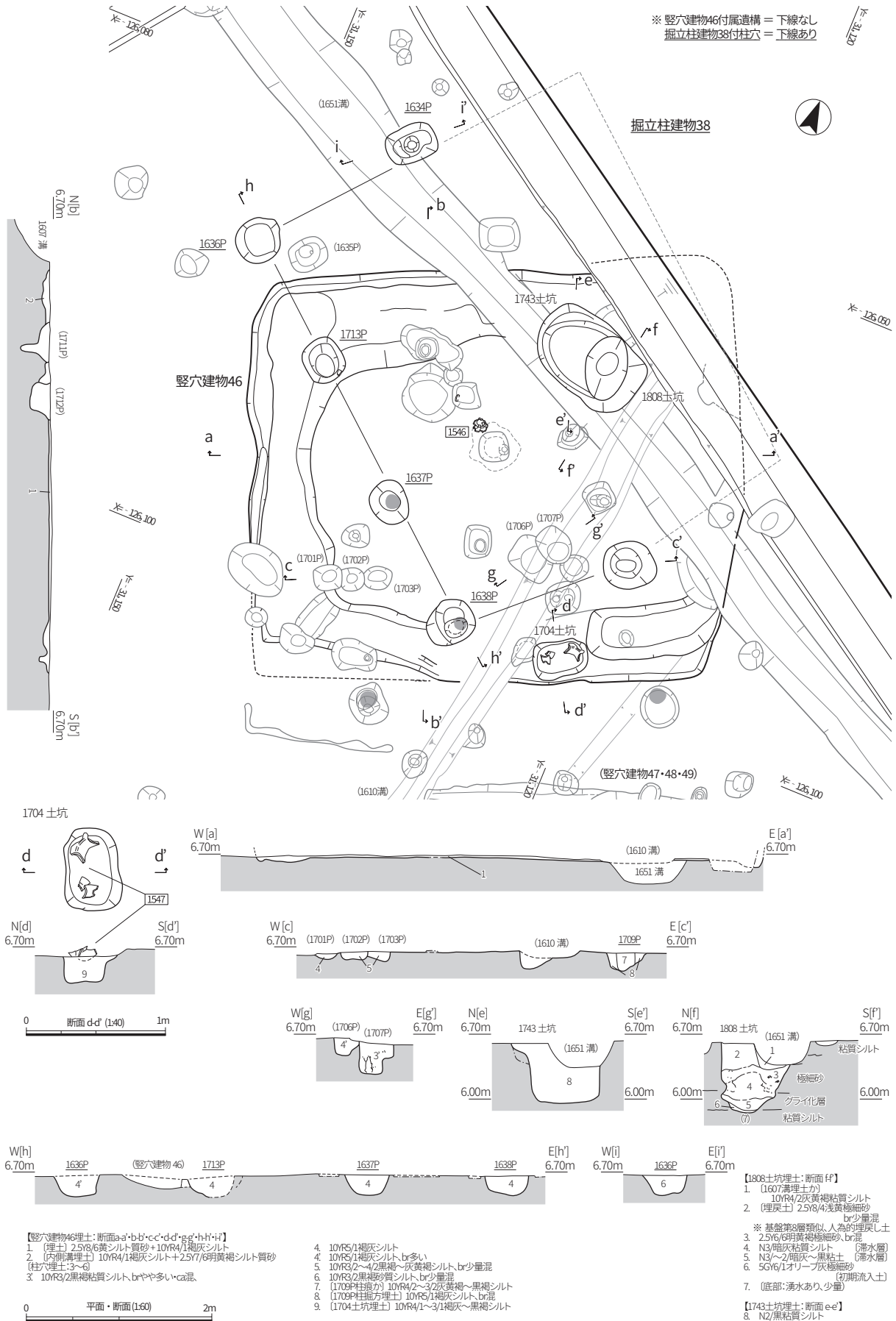


図 222. 竪穴建物 46、掘立柱建物 38 平面・断面

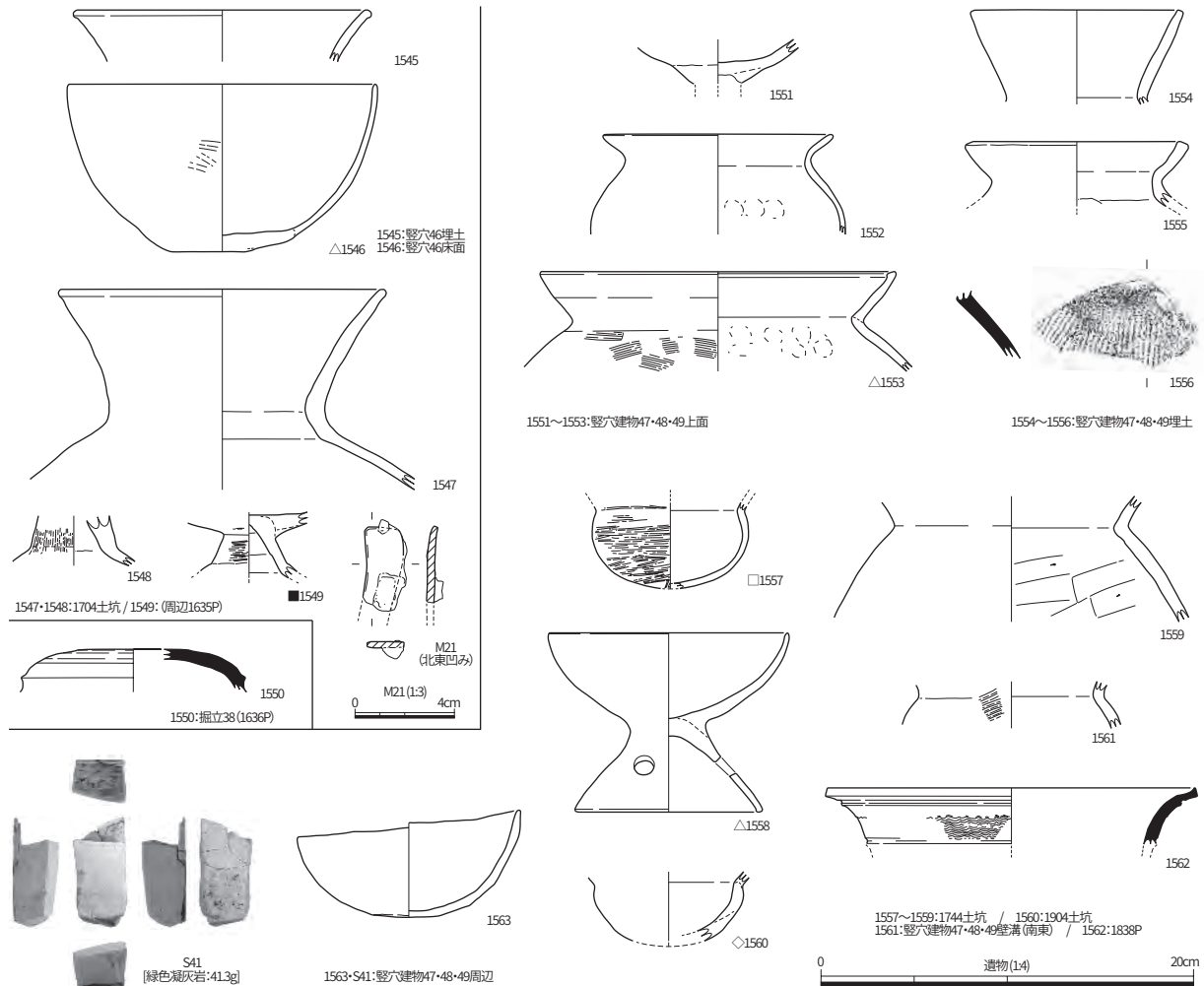


図 223. 竪穴建物 46、掘立柱建物 38、竪穴建物 47・48・49 出土遺物

できる。竪穴建物 48 の輪郭はあまり明確でないが、竪穴 47 建物とほぼ重複した位置にあり、東側の壁溝のみが部分的に内側をめぐる事がわかる。さらに壁際の土坑が 3 基あるため、3 回の建替えがあったことは明らかであり、切り合いから竪穴建物 47 → 49 という順序は確実である。先後関係が明確でない竪穴建物 48 は、小型化という変化の方向性から、竪穴建物 47 → 48 → 49 という順序が推定されるところである。

主柱穴については、1877 P・1881 P・1840 P・1848 P と、1878 P・1881 P・1842 P・1906 P (図 224・225 下線あり) の 2 対の組み合わせが確認でき、それぞれ埋土の様相も異なる。位置関係から前者が竪穴建物 47 に、後者が竪穴建物 49 に伴う可能性が高い。中間の竪穴建物 48 に伴う主柱穴についてはよくわからないが、2 棟の建物の主柱穴の周辺にほかの柱穴も多くあるため、重複する可能性と周辺の柱穴のどちらかの可能性が推測できる。炉跡については、中央に 1700 炉跡がひとつあり、これについては位置から竪穴建物 47 に伴うものと認識できる。壁際の土坑は、位置関係から南側の 1800 土坑が竪穴建物 49 に伴うことが確実で、北側の 1744 土坑と南側の 1904 土坑は竪穴建物 47・48 のどちらかに伴う。建物の小型化と土坑の位置関係から類推すれば、先行する竪穴建物 47 に 1744 土坑が伴い、後続する竪穴建物 48 に伴って南側の 1904 土坑が掘削され、竪穴建物 49 の建替え時に位置が南側に踏襲されて隣接する 1800 土坑が再掘削された、と解釈するのが自然であろう。

建物の規模については、外側の竪穴建物 47 が東西 6.7 m、南北 6.3 m、面積 42.2 m<sup>2</sup> をはかり、内側

第4章 遺構・遺物

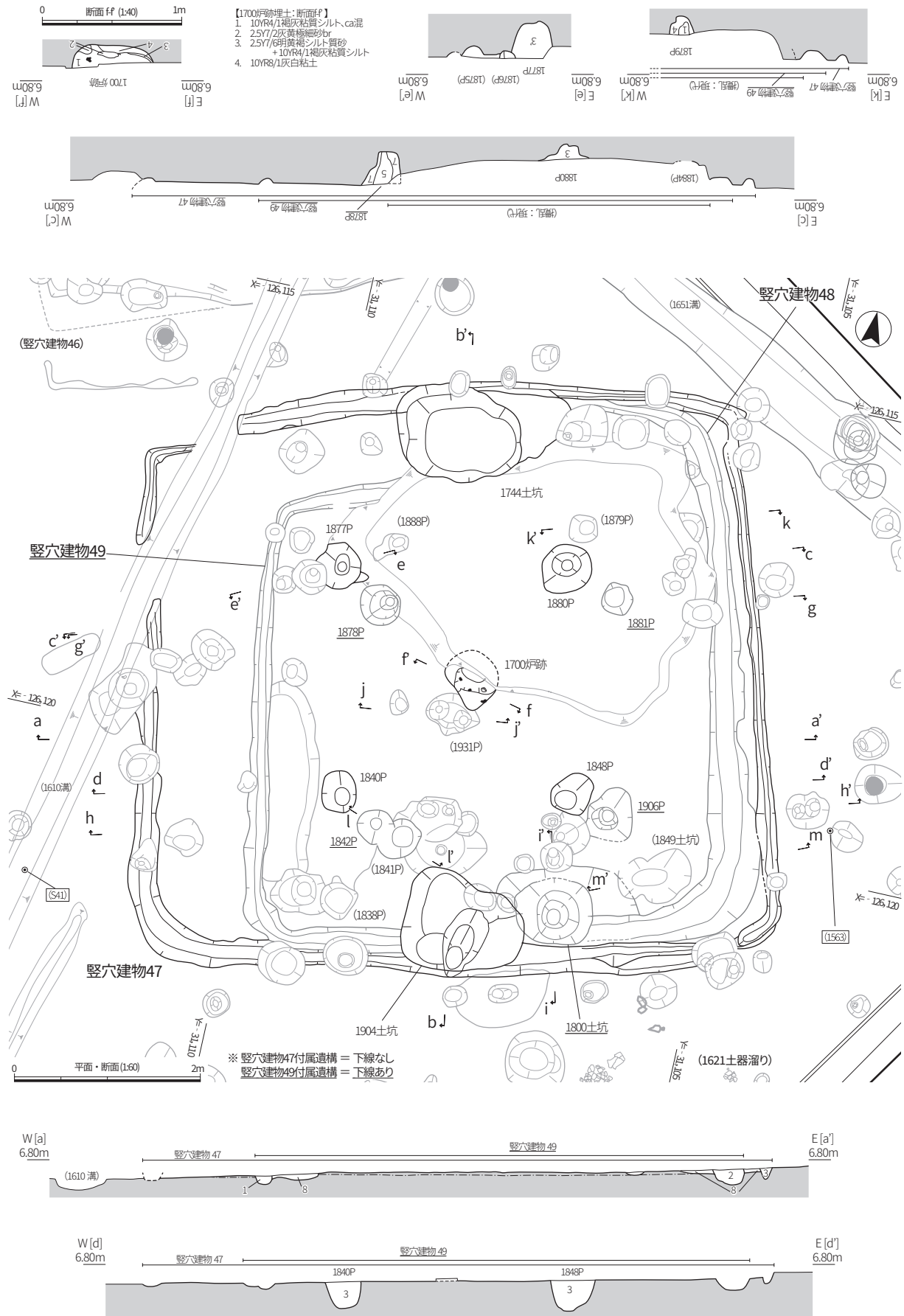


図 224. 竪穴建物 47・48・49 平面・断面 (1)





のひとまわり小さな竪穴建物 49 が東西 5.4 m、南北 5.0 m、面積 27.0 m<sup>2</sup>をはかる。竪穴建物 48 については、竪穴建物 47 よりも東西が僅かに小さくなるが、ほぼ同規模とみなしてよい。支柱穴は、円形を呈するものが多く、直径 0.5 ～ 0.6 m 前後のものが多い。先行する竪穴建物 47 に伴う柱穴には、断面に柱痕が残るものはなかったが、後出する竪穴建物 49 には柱痕が残るものが多くみられ、柱の太さは 0.15 m 前後に復元される。

なお、上面が中世以降に削平を受けているため埋土がほぼ残っておらず、出土遺物も総じて少ない。上面や埋土には、混入と考えられる須恵器（1556 など）も数点出土しているが、それ以外はほぼ古式土師器に限られるため、3 棟は前期以前の建物とみなすのが穏当である（1551 ～ 1560）。埋土・上面などから出土した遺物は、個々の遺物がどの建物に伴うものであるかは定かでないが、総じて甕は、布留形の範疇で捉えられるものが多い（1553・1555）。壁際の土坑に伴う遺物では、竪穴建物 47 に伴う 1744 土坑から臨地品とみられる精製ヨコミガキの小型丸底壺（1567）や小型椀形高杯（1558）、外反気味に口縁がのびる内面ケズリの大型壺（1559）が出土しており、これらは布留式中段階古相頃に比定できる。竪穴建物 48 に伴う 1904 土坑からは、精製品模倣の体部厚手の小型丸底壺（1560）などが出土しており、これらは 1744 土坑よりやや後出する可能性が高い。最も新しい竪穴建物 49 に伴う遺物は明確でないが、埋土出土遺物も含めいずれも布留式中段階の中におさまるため、布留式中段階の新相、下っても布留式新段階古相頃までの期間で 3 棟が連続して建替えられたと判断するのが穏当である。これ以外では、竪穴内の 1838P からは須恵器壺口縁（1562）が出土し、周辺からは椀（1563）や緑色凝灰岩の石核（S41）などが出土している。特に緑色凝灰岩（S41）は、この建物に直接的に伴う遺物であるかは不明であるが、この 3 棟の周辺で玉作りがおこなわれた可能性を示唆するため重要である。

**竪穴建物 51**（図 226） P3 区北東端で検出された L 字状の溝で、1651 溝と重複する。微高地 C の頂部付近の緩斜面地に立地しているが、部分的な検出に留まっているため、全体の規模や詳細な構造は不明である。残存規模は、東西 3.4 m、南北 1.6 m をはかり、竪穴内には幅 0.6 ～ 1.0 m、深さ 0.23 m の L 字状の 1673 溝がめぐる。ほかの竪穴建物の事例から、床面下部の掘り込みと推測され、これ以外では北側壁際の 1736P が支柱穴の可能性もある。この建物に伴う遺物としては、1673 溝出土の須恵器蓋（1564）が TK73 ～ 216 型式頃まで遡る可能性がある。ほかでは、上面・周辺から TK216 ～ 208 型式頃の須恵器・土師器が少量出土している（1565 ～ 1567）。出土遺物が少ないため詳細な時期比定は難しいが、1673 溝出土の須恵器蓋の年代観から、建物の存続時期は TK216 ～ 208 型式期頃と推測される。

**柱列 11**（図 227・228）竪穴建物 47・48・49 の南東 3 m に位置する北東－南西方向の 4 基からなる柱穴の並びで、後述する 1623 土器溜りと重複した位置にある。柱筋の通りは良く、長さは 4.1 m をはかる。柱間寸法は、北から 1.3 m、0.9 m、1.9 m でややばらつきがある。柱穴の太さは、0.2 ～ 0.3 m とやや小ぶり、検出面からの深さは 0.07 ～ 0.24 m である。埋土は、暗色のブロックや炭混じりの粘質シルトを主体とする。1656P から土師器・須恵器の細片が少量出土しており、上面の 1623 土器溜りと時期が近い布留形甕の細片があるため関連する遺構の可能性もある。また、調査地の東端部分で検出された遺構であるため、東側に広がる掘立柱建物を構成する柱列の可能性も想定できる。その一方で、大きさ、柱どうしの間隔、深さなどにややばらつきがみられ、南端の 1657P はやや浅いため柱列を構成する柱穴ではない可能性を考慮する必要があるだろう。

**1623 土器溜り**（図 227・228）竪穴建物 47・48・49 の南東 3 m、竪穴建物 51 の南 5 m に位置し、上述した柱列 11 と重複している。東西 2.0 m、南北 1.3 m の範囲、T.P.+6.8 m の高さで古墳時代中期の

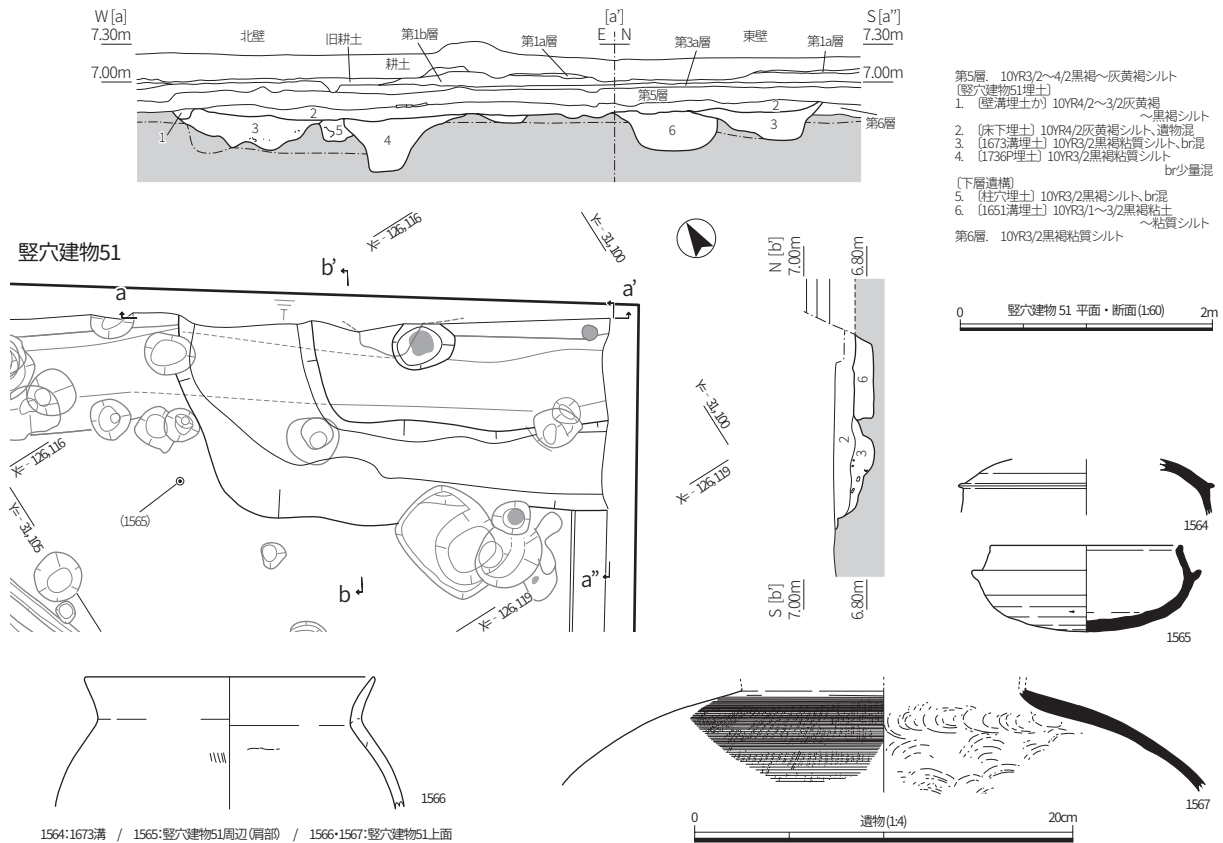


図 226. 竪穴建物 51 平面・断面・出土遺物

土師器・須恵器がまとめて出土したが、検出面では掘り込みは確認できなかった。ただし周辺は、上面が削平を受けているため、西側エリアの 450 落込みや 33 落込み、867 落込みのように、浅い掘り込みを伴っていた可能性がある。

出土遺物には、土師器・須恵器・軟質土器のほか石臼と製塩土器がある。土師器・軟質土器などの酸化炎焼成のものが大半で、須恵器の出土量は少ない。このため供膳具は、小口径の土師器高杯が主体で、形式は無稜外反形と椀形が共伴している (1568 ~ 1577)。また、接合部が確認できるものは全て挿入付加法で、布留式新段階の C 系統 (I 群系) に多い円盤充填の資料は含まない点が特徴的である。ほかでは、須恵器の杯蓋 (1579) 無蓋高杯 (1580)、軟質土器とみられる杯 (1581) があり、特に杯は類似する資料が少なく、胎土から搬入品とみられる。貯蔵具は出土量が少なく、小型壺の口縁部 (1582) と、内面が肥厚する布留系の大型直口壺 (1583)、外面平行タタキ内面ナデ消しの須恵器甕体部の破片 (1584) などが確認できる。煮炊具では、小型甕 (1585 ~ 1587)、大型甕 (1588・1589)、甑 (1590・1591) が出土している。小型甕は、布留形の名残を残す直立気味の口縁部をもつもの (1585) と、外反形のもの (1586・1587) があり、大型甕はいずれも口縁部は布留形である (1588・1589)。甑は、胎土が異なる 2 個体が確認でき、いずれもばらばらの小破片の集合であるものの、ともに破片からおおよその全形が復元できる。このうち比較的残りの良い (1590) は、底部外面にケズリ調整が残り、体部外面は平行タタキのちヨコナデの成形である。底部の透かしは推定 6 個に復元でき、形状は寺井誠の分類の a5<sup>41)</sup> にあたる。把手は、上面の切り込みと下面に棒状の刺突痕があるタイプで、把手の高さで体部中央に沈線があり、接合方法は寺井分類の A 類にあたる。こうした全体的な特徴からみて、比較的古い要素を備える点が特筆できる。このほかに、内外面ナデオサエ成形の小型椀形の製塩土器 22.5g

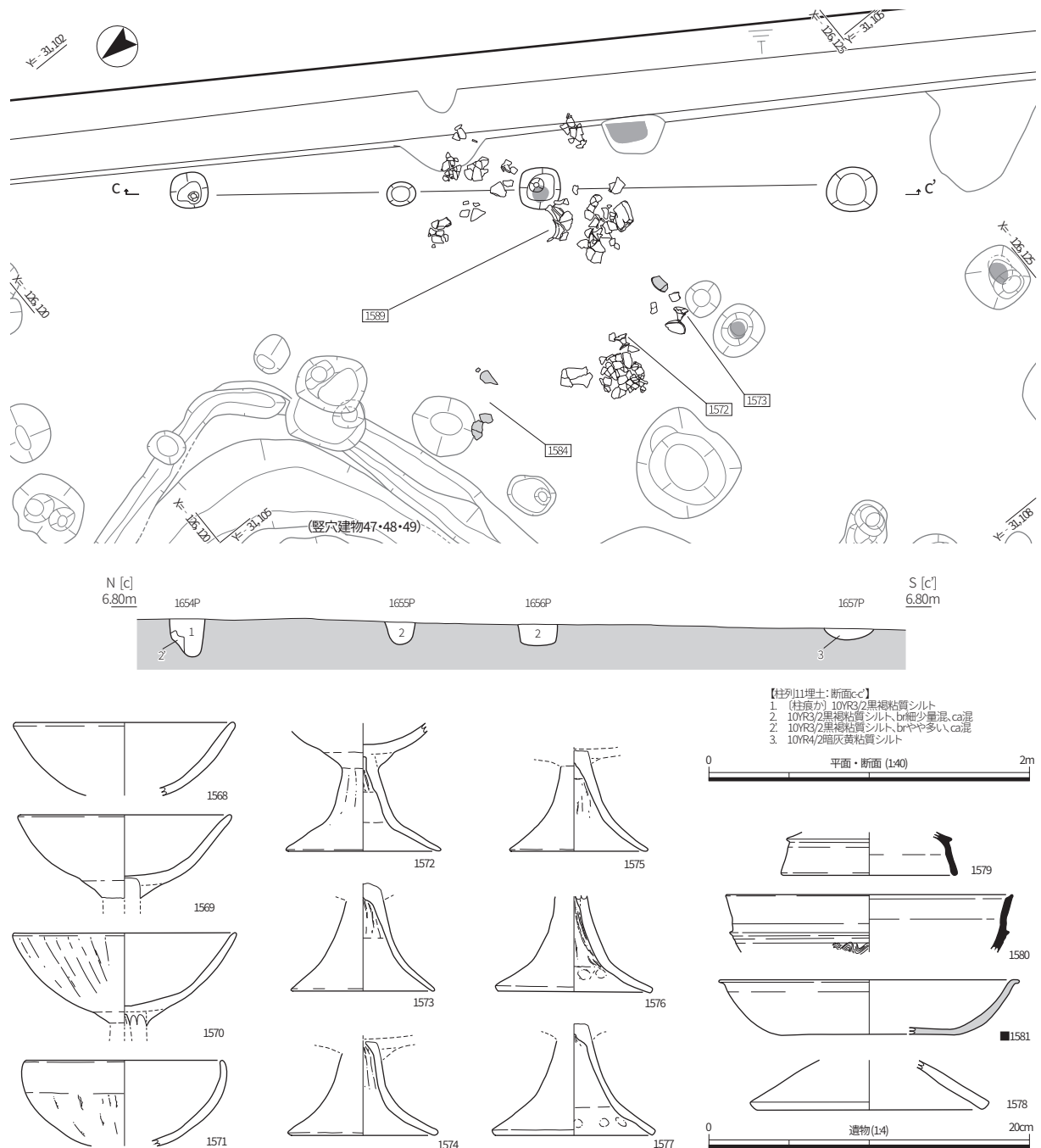


図 227. 柱列 11・1623 土器溜り 平面・断面・出土遺物（1）

(1592) と、上面に面がある石材 (S42) などが出土しており、石材 (S42) は明確な用途は不明であるがなんらかの作業台として用いられた可能性がある。

出土遺物の時期は、土師器が辻編年 3 段階頃、須恵器が TK216 型式頃に位置づけられる。北側に位置する竪穴建物 51 と時期が近いことからその関係性が注目されるが、摂津ではこの時期のまとまった資料が少ないため、韓式系軟質土器の定着過程を考える上で良好な一括資料といえる。

**(掘立柱建物 51)** (図 229・230) P3 区南東端で検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、柱穴の規模や形状などから竪穴建物の支柱穴と判断した。微高地 C の南端付近の西側斜面地に立地し、下部には庄内式期の 1897 井戸が重複する。ほかにも西側の古代の 1618 溝や、南側の 1621 方形土坑、南東側の中世の 1617 井戸などが重複しており、全体の状況を把握しづらいが、北東に位置する楕円形の 1807



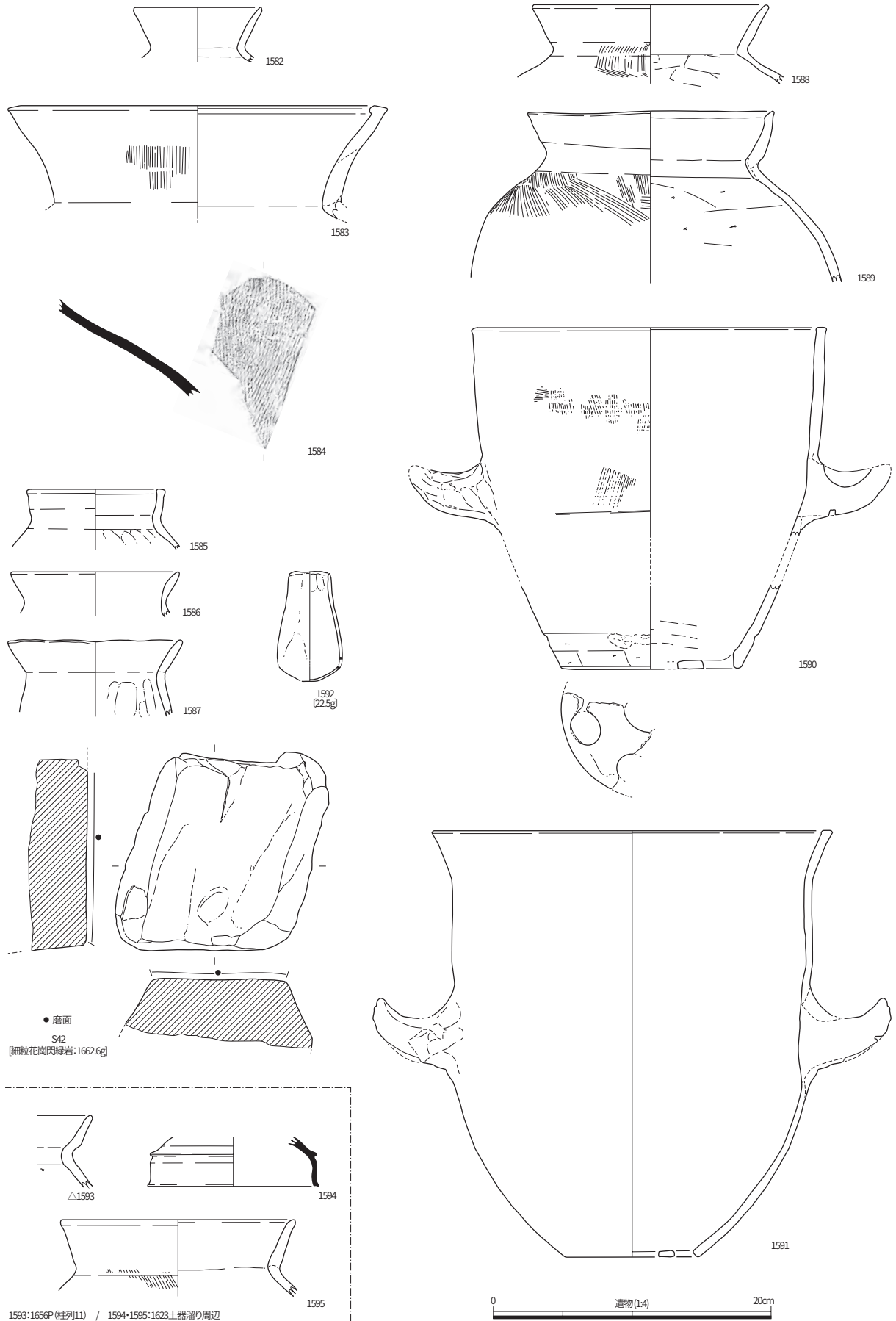


図 228. 柱列 11・1623 土器溜り 出土遺物 (2)

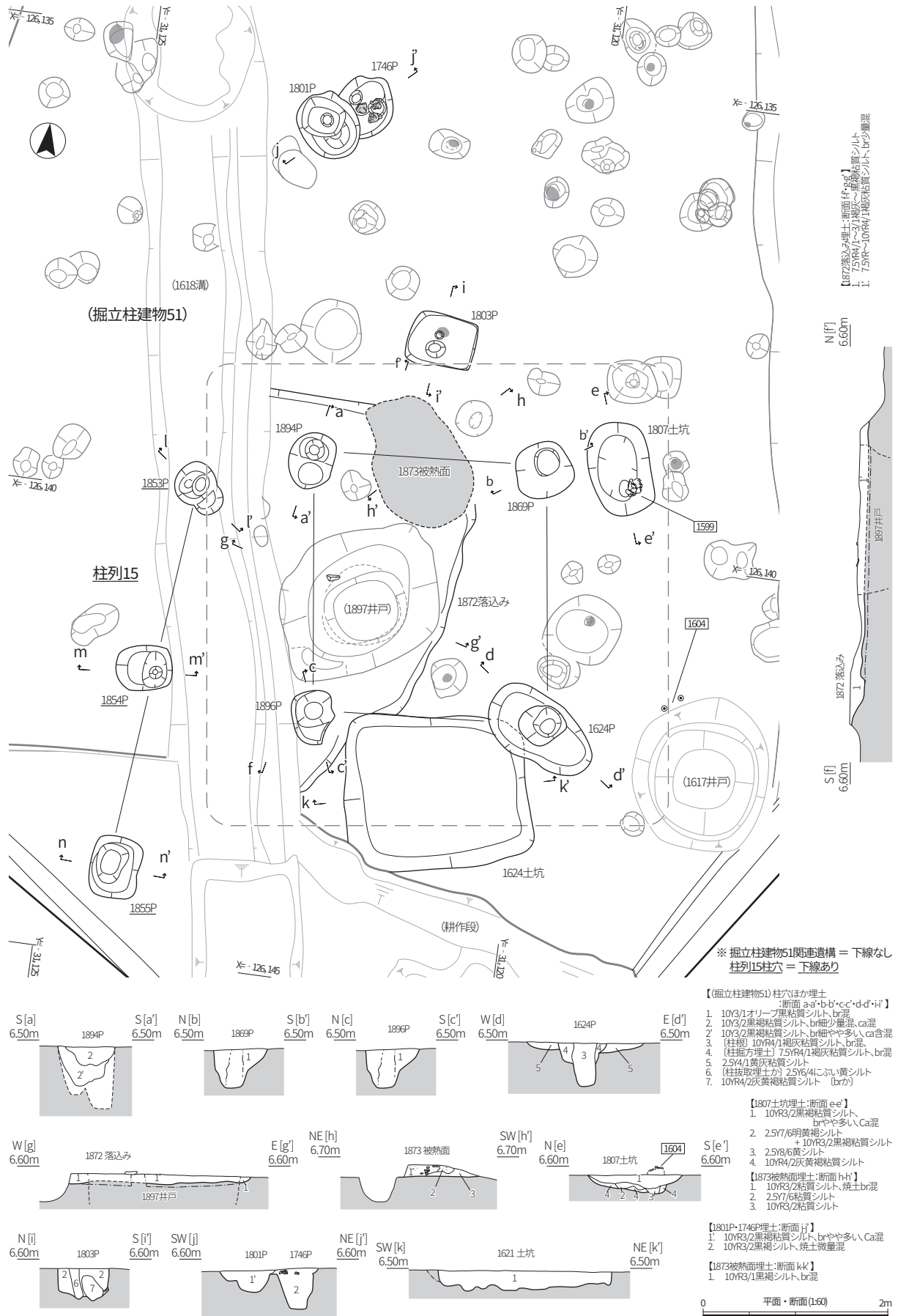


図 229. 掘立柱建物 51、柱列 15 ほか 平面・断面 (1)

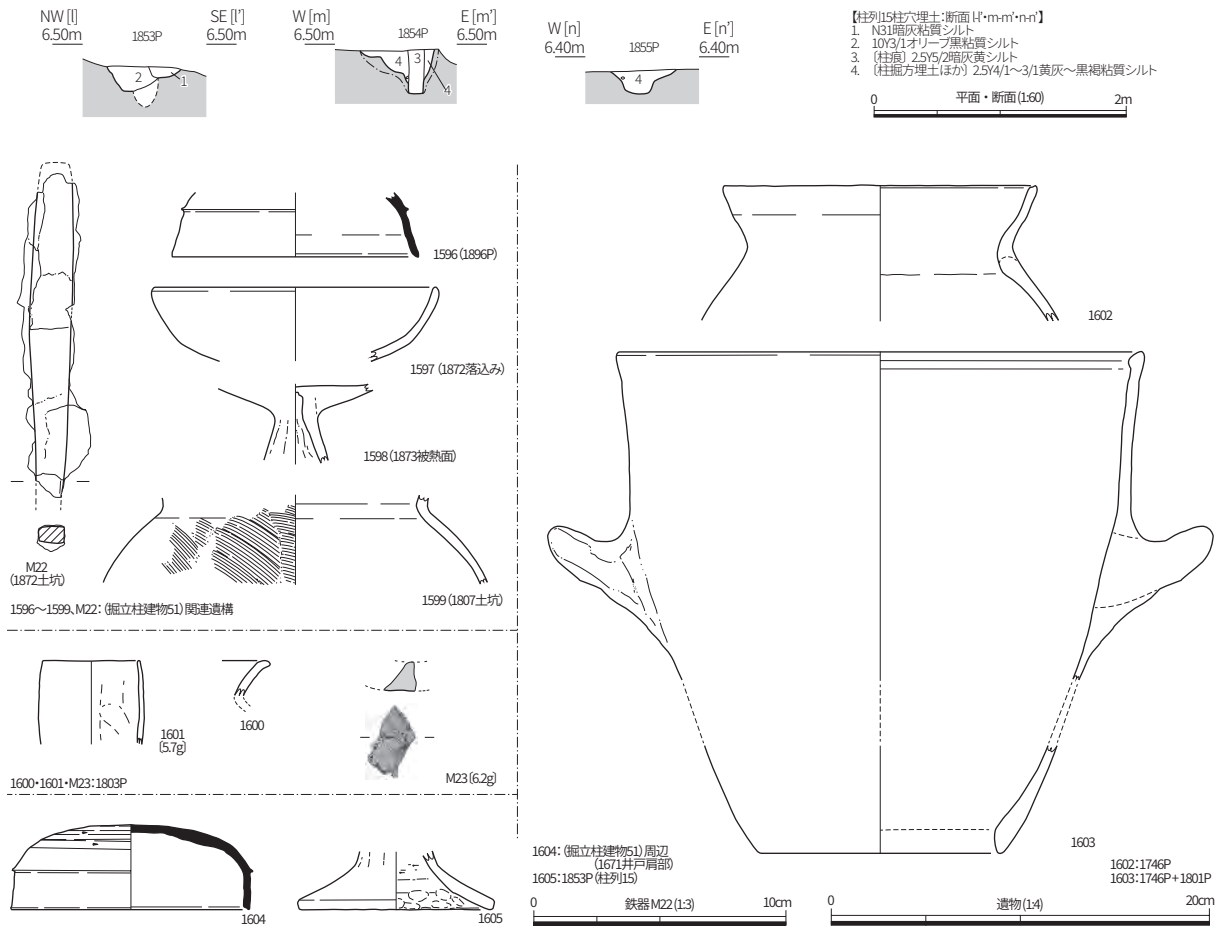


図 230. 掘立柱建物 51、柱列 15 ほか 断面 (2)・出土遺物

土坑や中央北寄りには1873被熱面、中央西側の浅い1872落込みがこの建物に伴う遺構の可能性が高い。建物の規模については、支柱穴とみられる4本の柱間隔は、南北2.7m、東西2.5mをはかるため一辺5mの規模の竪穴建物に復元できる。柱穴の平面形は、隅丸方形や不整形を呈するものが多く、大きさは0.5m前後、検出面からの深さは0.45mで概ね揃う。埋土断面で柱痕が確認でき、柱の太さは0.2m前後に復元される。北東の1807土坑は、1869Pに近接した位置にあり、長径1.0m、深さ0.21mをはかる。埋土は、ブロック・炭化物混じりの黒褐粘質シルトを主体とし、上面から大型化した内面ナデ調整のハケ甕体部(1599)が出土した。1873被熱面は、1872落込み上面で検出された南北2.7m、東西2.5mの焼土の拡がり、位置からみてカマドの可能性も推測できるが、建物のやや内寄りにあるため、なんらかの手工業生産に関連する炉跡の可能性もある。特に1872落込み埋土からは大型の棒状鉄器(M22)が、この建物に近接する1803Pからは鞆羽口の細片(M23)や製塩土器(1601)がそれぞれ出土しており、これらの遺物との関連を積極的に評価してよいのであれば、鍛冶関連遺構の可能性が推測できる。下部の1872落込みについては、南北4.3m以上、幅2.6m以上、深さ0.18mの浅い落込みで、性格は不明だが埋土から関連する遺構と認識できる。

柱穴および関連する遺構から出土した遺物は少ないが、上述したように下部の1872落込みからは大型の棒状鉄器(M22)が出土しており、やや特殊な遺物が含まれる点が注目される。土器類では、1896Pから出土したTK216~208型式頃の須恵器蓋(1596)、1872落込みから出土した辻編年3段階頃の土師器椀形高杯(1597)、1873被熱面から出土した同時期の高杯脚部(1598)などがあり、ほか

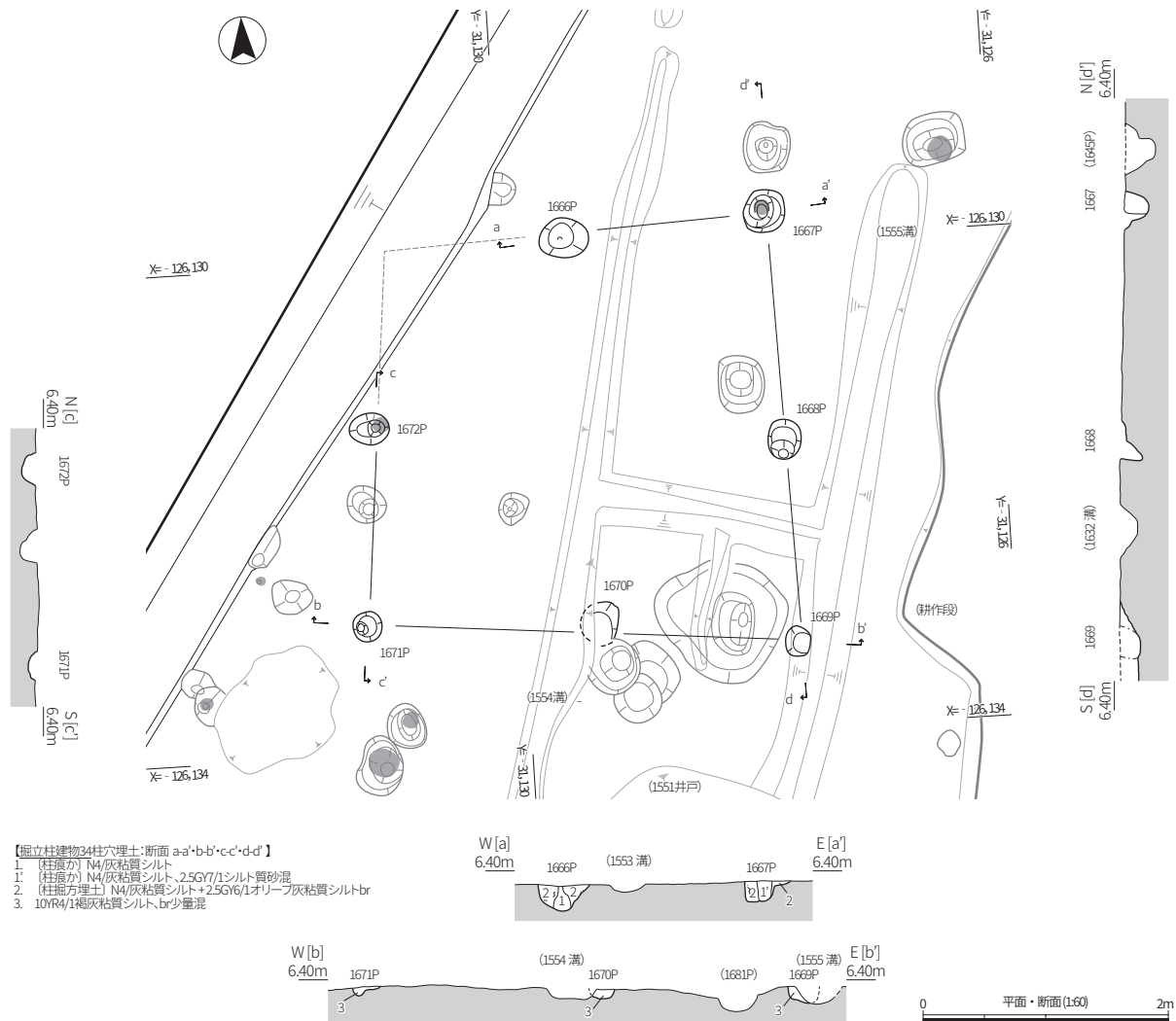


図 231. 掘立柱建物 34 平面・断面

にも 1617 井戸の肩部から出土した TK216 型式頃の須恵器杯 (1604) もこの建物に関連する遺物の可能性がある。出土遺物が少ないためやや根拠は弱いだが、関連する出土遺物から TK216 ~ 208 型式頃に時期比定ができ、建物の検出状況はあまり良くないが、鍛冶工房の可能性が想定できる点が重要である。

なお P3 区南東部からは、主に包含層中から初期須恵器が比較的多く出土しており (図 236 : 1642 ~ 1648、P317)、直接的な結びつきを言及するまでには至らないが、周辺に広がる柱穴などの関連が想定される。さらに詳細は後述するが、上述した轆羽口 (M23) が出土した 1803P や、埋土から焼土塊が多数出土した 1801・1746P がこの建物の近くにあり、関連する遺構の可能性が推測される。

**1803P、1746P・1801P** (図 229・230) (掘立柱建物 51) の北側の隣接・近接地に 1803P が、(掘立柱建物 51) の北 4 m に 1749P・1801P が位置する。1803P は、埋土の堆積状況から隅丸長方形の柱穴と判断でき、規模は直径 0.7 m、深さ 0.35 m をはかる。断面から柱抜き取り痕跡が確認でき、柱の太さは 0.12 m に復元される。出土遺物には、土師器の細片が一定量あり、外反口縁の甕 (1600)、内外面ナデ調整の小型椀形製塩土器 (1601) が計 5.7 g、轆羽口の細片 (M23) などを図化した。このほかには、粘土塊が少量出土している。詳細な時期比定は難しいが、TK216 ~ 208 型式頃と判断でき、近接する (掘立柱建物 51) と近い時期の遺構とみてよい。

隣接する 1801 P と 1746 P は、埋土断面から西側の 1801P が後出するが、同一個体の甕 (1603) の



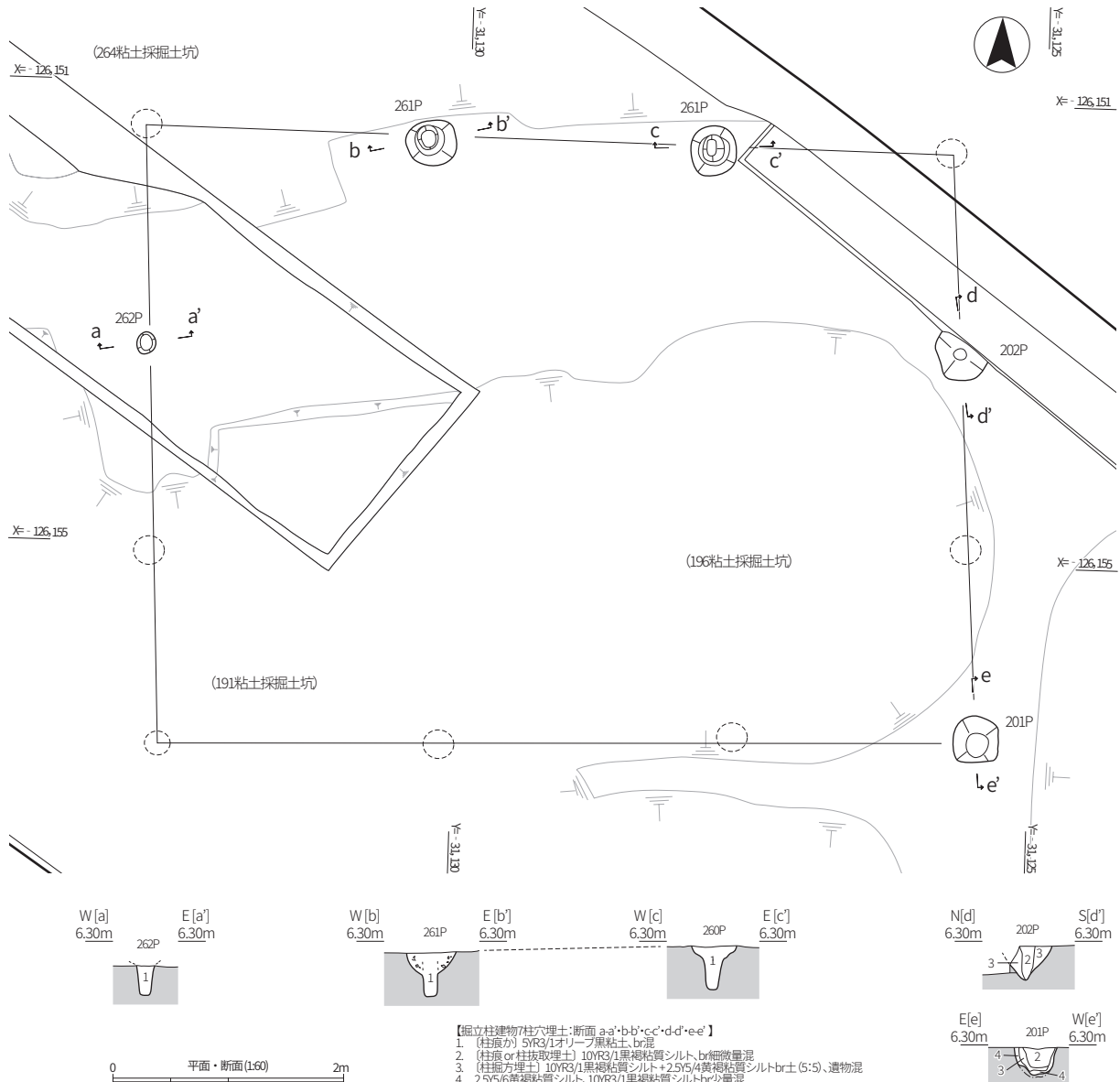


図 232. 掘立柱建物 7 平面・断面

破片がふたつの遺構からまたがって出土するため、一連の遺構とみなすことができる。先行する東側の 1746P は、直径 0.6 m、深さ 0.44 m をはかり、埋土に焼土塊を含む点が特徴である。西側の 1801P は、直径 0.8 m、深さ 0.23 m をはかり、埋土にブロックや炭化物が混じる。1746P からは、口縁部が内湾気味に立ち上がる厚手化した布留系甕 (1602) が出土し、1746P と 1801P にまたがって甕の破片 (1603) が出土した。甕は、内外面の摩滅が顕著で調整は不明であるが、口縁端部が肥厚して内傾する面をもつ。こうした口縁端部の処理は、布留形甕に通有のものであり、軟質土器の在地化の過程を考える上で興味深い資料といえる。詳細な時期比定は難しいが、TK216～208 型式頃に比定できるだろう。隣接する (掘立柱建物 51) と関連する遺構の可能性が高く、出土遺物の内容から鍛冶工房の存在が推測され。

**1621 土坑** (図 229) P3 区南東端に位置し、(掘立柱建物 51) の南側支柱穴 1624P と僅かに重複・隣接する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西 2.0 m、南北 1.6 m をはかる。検出面からの深さは 0.22 m で、埋土はブロック混じりの黒褐シルトを主体とする。埋土の特徴が第 6 層と類似するため古墳時代の遺構と推測されるが、出土遺物がないため、時期や遺構の機能・性格は不明である。

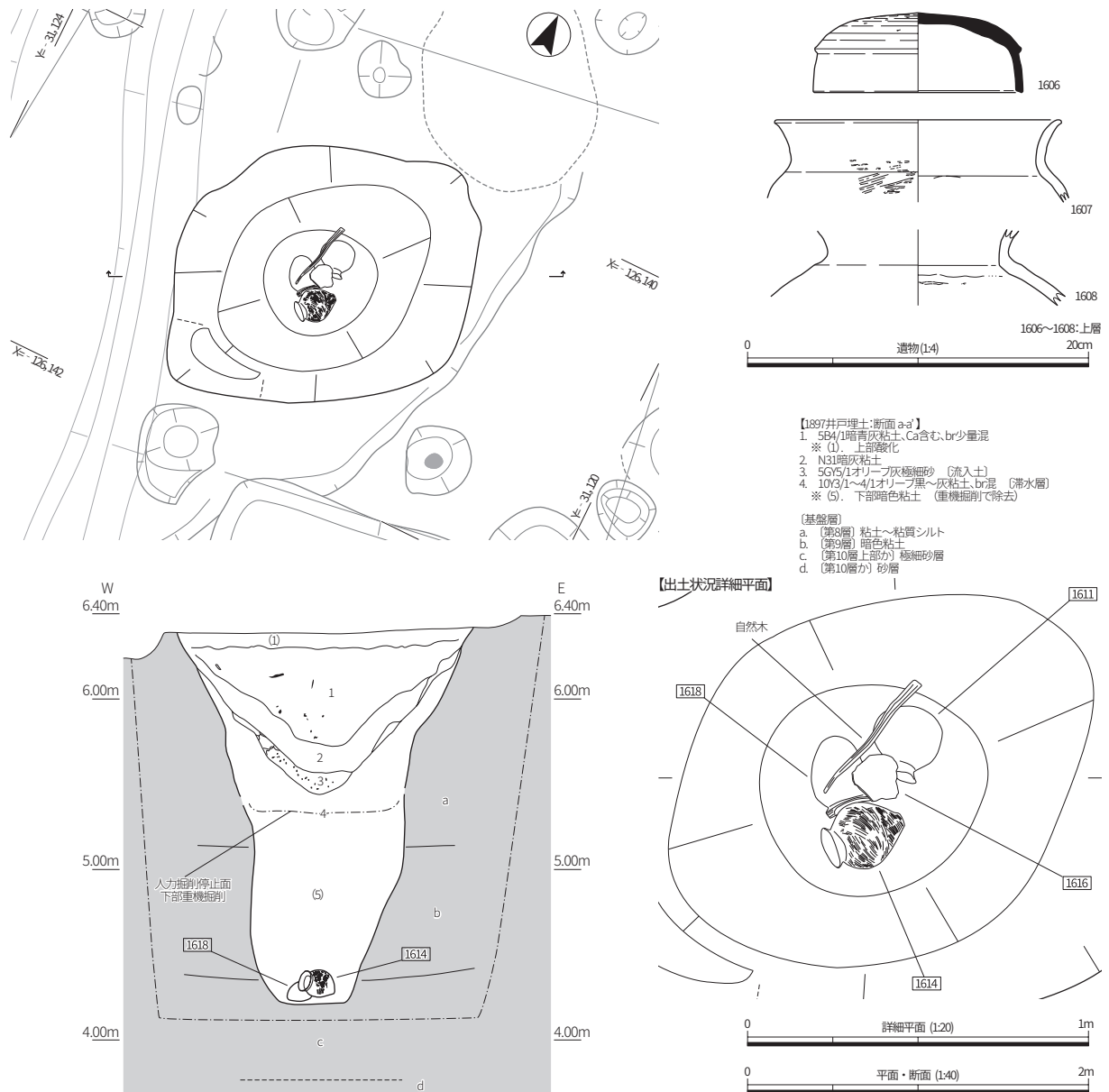


図 233. 1897 井戸 平面・断面・出土遺物（1）

**柱列 15**（図 229・230） P3 区南東端に位置する 3 基からなる南北方向の柱穴の並びで、東側には（掘立柱建物 51）が隣接する。南北長 4.2 m で、柱間寸法は南北 2.1 m に等間隔に揃う。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈するものが多く、検出面での規模は 0.6 m 前後である。古代の 1618 溝が重複しているため検出面からの深さが一定ではないが、底の高さは T.P.+6.1 m 前後に揃う。中間の 1854P は、断面で柱根が明瞭に観察でき、柱の太さは 0.10 ～ 0.15 m である。1853P 出土の土師器高杯脚部（1605）を図化したほか、甕体部の細片が少量出土しており、時期については辻編年 3 ～ 4 段階頃に比定できる。

**掘立柱建物 34**（図 231） P3 区南西端に位置する 2 間×2 間の掘立柱建物で、周辺一帯は中世の耕作段の造成によって上面が大幅に削平されている。微高地 C の南端付近の西側斜面地に立地し、南 3 m には中世の 1551 井戸が位置する。建物の規模は、南北 3.2 m、東西 3.4 m、面積 10.9 m<sup>2</sup> をはかる。柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 1.6 ～ 2.0 m におさまる。柱穴の平面形は、直径 0.2 ～ 0.3 m 前後の小規模な円形を呈し、検出面からの深さは最大で 0.2 m である。ただし上述したように、上面が大幅に削平されているため、本来の形状を十分には保っていない。残存する柱穴はいずれも小さいが、一部に

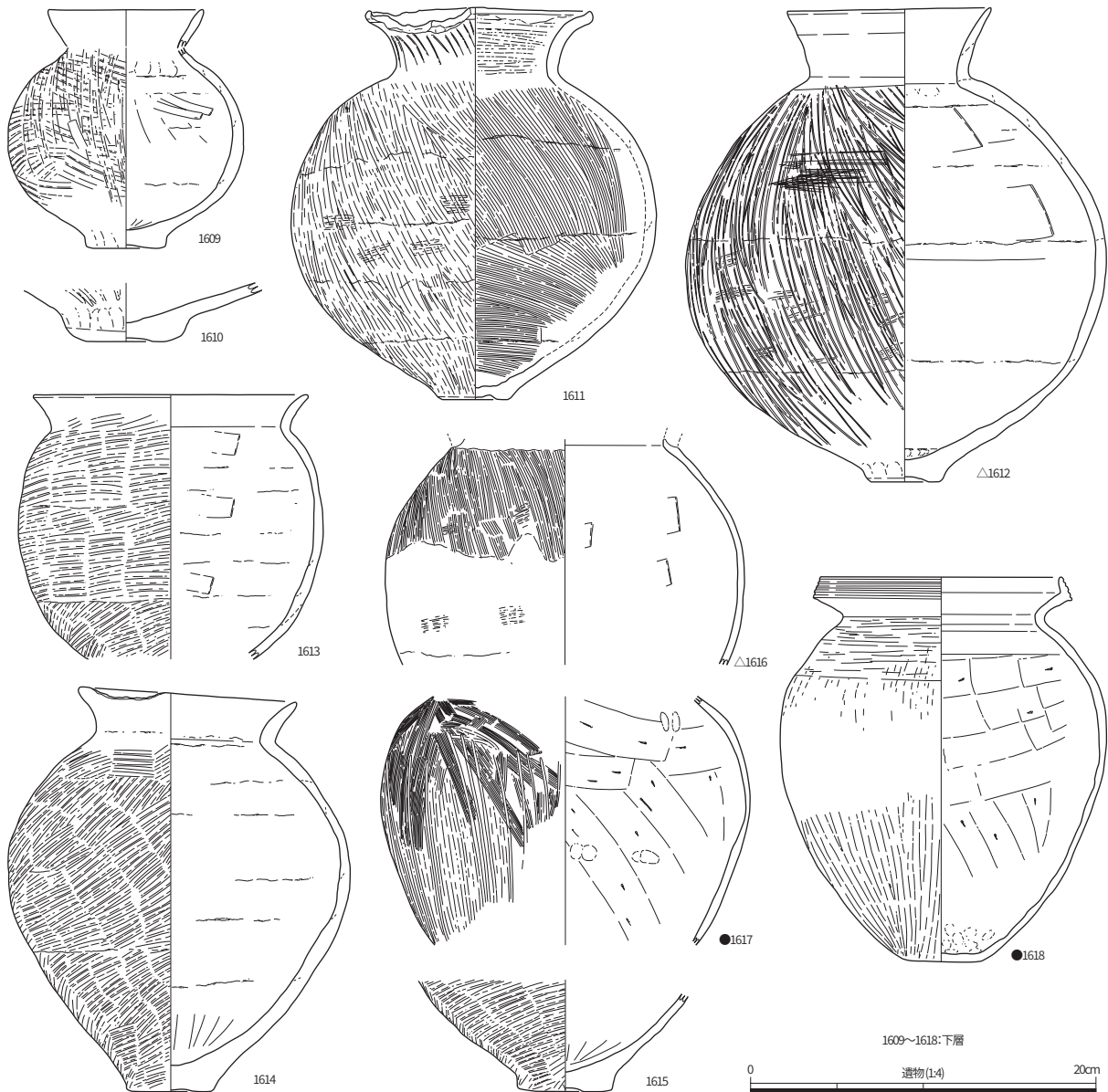


図 234. 1897 井戸 出土遺物 (2)

柱痕が確認でき、柱の太さは0.1 m程度に復元される。出土遺物は、1666P・1667P・1669Pの埋土から土師器の極細片が数点ずつ出土しているが、時期比定は困難である。柱穴の形状から、古墳時代の建物の可能性が高いと認識しているが、中世に下る可能性も考慮する必要があるだろう。

**掘立柱建物 7** (図 232) C-2・C-3 区にまたがって検出された3間×3間に復元される掘立柱建物である。大部分が中世の大型土坑(粘土採掘土坑)と重複しているため、残存する柱穴は少ないが、柱穴の規模や深さ、柱の間隔などが概ね揃うため、掘立柱建物と判断するに至った。微高地Cの南側先端付近に立地しており、周辺一帯では遺構が希薄である。建物の規模は、東西7.2 m、南北5.4 m、面積38.9 m<sup>2</sup>に復元される。柱間寸法は、東西2 m以上、南北1.7~2.0 m前後に復元される。柱穴の平面形は、径0.4 m前後の小規模な円形を呈する。検出面からの深さは0.3 m前後で、底はT.P.+5.90 mに概ね揃う。残存する柱穴の規模は小さいが、柱痕が確認でき、柱の太さは0.15 m前後に復元される。出土遺物は、260 Pの埋土から土師器の極細片が1点出土しているが、時期比定は困難である。掘立柱建物7と同様に古墳時代の建物の可能性が高いと認識しているが、中世に下る可能性も考えられる。

**1897井戸**(図233) P3区南東端で検出された井戸で、古墳時代中期中葉の(掘立柱建物29)と重複する。微高地Cの南端部付近の西斜面縁辺部に立地しており、今回の古墳時代の遺構の中で最も古い時期の遺物がまとまって出土した遺構として注目される。検出面の形状は、隅丸方形に近い形状を呈し、規模は東西1.8m、南北1.5mをはかる。断面形は、上面から底部にかけてすぼまる形状で、底部径は0.7mで、検出面から底面までの深さは2.2mをはかる。上半3分の1がやや開き気味の形状であり、上面が重複する建物等で削平されていた状況をふまえると、本来は漏斗状に大きく開く形状であった可能性がある。埋土は、上層〔埋土1～3〕と下層〔埋土4・5〕に大別できる。上層〔埋土1・2〕は、暗灰色粘土を主体とする滞水層で、下部にレンズ状に堆積する〔埋土3〕は、極細砂の流入土である。また井戸の上面は、著しく酸化し、埋土が変色している。下層〔埋土4・5〕は、主に重機で掘削したため様相が不明確であるが、暗色の泥質土を主体とする。底からは、弥生時代後期後半～庄内式期古相の土器が自然木とともに原位置を保って出土しており、ほぼ完形の壺・甕類4点(1611・1612、1614・1618)とともに、壺・甕類の破片が少量出土している。底面は、暗色の古土壤層〔第9層〕下部の極細砂層に達しており、一定の湧水がみられたため井戸と判断した。

出土遺物は、人力掘削時に出土した上層出土の(1606～1608)と、底面から出土した(1609～1618)に大別できる。底面から土師器がまとまって出土したものの、埋土中からはほとんど遺物が出土していない。また埋土上半の掘削時には、上面付近からTK216型式頃の須恵器杯蓋(1606)が出土したため、当初は古墳時代中期の井戸と認識しながら調査を進めたが、底面出土の土器群から古墳時代初頭に遡ると判断するに至った。上面の須恵器杯蓋(1606)については、重複する1872落込みとほぼ同時期であるため、上面遺構に伴う混入品の可能性が高い。そのほか上層からは、V様式系(1607)のタタキ甕とA系統の直口壺(1608)が出土しており、これについては底面出土遺物との関わりが推測される。

底面から出土した古式土師器には、壺類・甕類があり、V様式系・A系統の壺・甕類とともに完形の吉備型甕(1618)と東部瀬戸内系の薄甕(1617)が共伴して出土した点が特筆される。壺は、V様式系のタタキを明瞭に残す小型品(1609)と、大型で外面タテ方向の細筋のミガキを施すA系統の広口壺(1611)と直口壺(1612)がある。広口壺(1611)は、弥生時代後期から継続する伝統的な形式であるのに対し、直口壺(1612)は庄内式期以降に特有な形式で、広口壺(1611)には外面に明瞭に煤が付着するのに対し、直口壺(1612)にはススの付着がない。また直口壺(1612)は、外面のミガキは細筋、胎土は在地の典型的なものとはやや異なる。甕のうちV様式系のタタキ甕(1613～1615)は、体部下半の分割成形の痕跡が明瞭である。また外面にハケを施す(1616)については、一次調整のタタキの痕跡が確認でき、V様式系の範疇で理解ができる。吉備型甕(1618)は、上述した土器群とともにほぼ完形の状態で出土した。平底で口縁部の凹線文が深く、外面にはタテ方向のミガキを、肩部にはヨコ方向のナデを施す。また外面には煤が明瞭に付着し、内面には炭化物が残存する。明らかな搬入品であり、吉備地域の編年の才の町Ⅱ式、Ⅸ-b・c期<sup>42)</sup>に位置づけられる。畿内で出土した完形の吉備型甕では、八尾市中田刑部土坑<sup>43)</sup>や向日市東土川西遺跡<sup>44)</sup>などとともに最古級の資料であることから、当該時期の吉備型甕の畿内への東進の問題を考える上で重要である。これに加え、別個体の内面ヘラケズリの薄型甕の体部片が1点出土しており(1617)、内面の指頭痕を積極的に評価すれば、東四国系の可能性が推測できる。なお広口壺(1611)とV様式系甕(1614)には、口縁部に部分的な打欠きがみられ、さらに口縁部の大半が欠損する(1612)も同様に打欠きされた可能性が高い。底面出土の遺物の時期



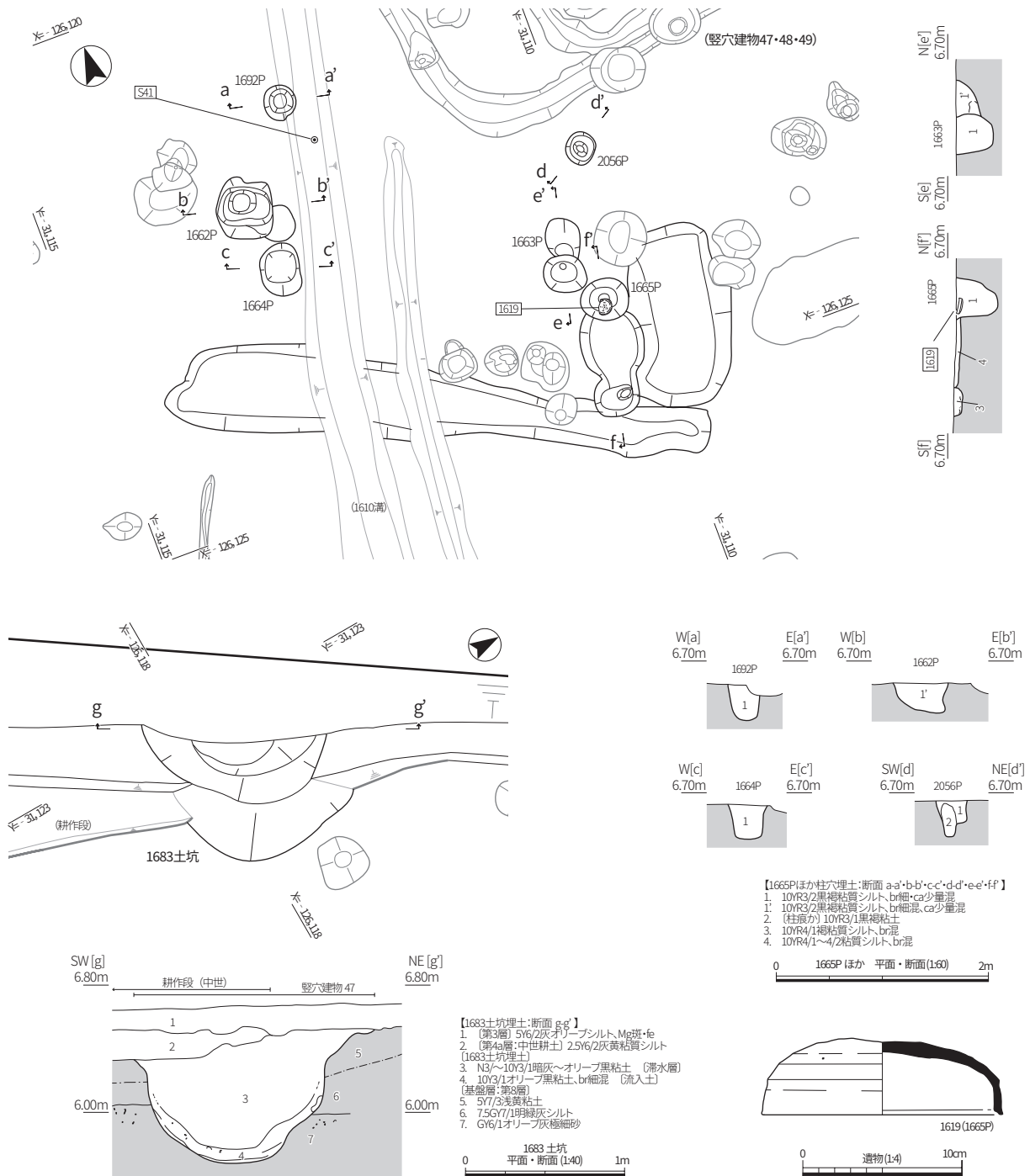


図 235. 1683 土坑、1665 柱穴ほか 平面・断面・出土遺物

については、吉備型甕との併行関係や直口壺 (1612) の存在などから庄内式期古相に比定でき、摂津の弥生土器の編年では森田編年VI-2・3様式と併行する。今回出土した古墳時代の遺物の中で、最も古い時期の良好なまとまりであり、摂津地域と他地域の土器の併行関係や上牧遺跡の古墳時代集落の出現背景、古墳時代開始期の畿内と西日本各地の集団間関係を検討する上で重要な遺物といえるだろう。

**1683 土坑** (図 235) P3 区の西壁沿い北寄りで検出された深さのある土坑で、竪穴建物 46 の南西 10 m に位置する。部分的な検出に留まっており、なおかつ耕作段の削平を受けているため、土坑全体の状況は不確かであるが、検出面の規模は 0.8 m 以上、深さ 0.84 m 以上をはかる。埋土は、自然堆積とみられる泥質の暗色土が厚く堆積しており、取水遺構もしくは水溜遺構の可能性が推測できる。遺物

が出土していないため、時期は不明であるが、埋土の特徴から古墳時代に遡る可能性が高い。

**1693・1699 溝ほか** (図 235) P3 区の中央北寄りに位置する 1693 溝は、長さ 5.0 m、幅 0.7 m をはかり、東端部で直角して長さ 1.7 m、幅 1.0 m の 1699 溝がのびる。いずれも深さ 0.1 m 程度の浅い溝であるが、L 字状を呈する溝の内側（北西側）には、1692P・2056P・1662P・1664P・1663P など、一定の深さのある柱穴がいくつかまとまっており、竪穴建物を構成する可能性がある。1662P・1663P からは、土師器・須恵器の細片が少量出土しており、ほかでは 1699 溝に近接する 1665P から MT15～TK10 型式頃の須恵器杯蓋（1619）が 1 点出土している。建物の有無については、はっきりしたことはわからないが、これらは中期以降に下る遺構と認識でき、建物の復元が課題である。

**包含層ほか出土遺物** (図 236) 微高地 C の南西斜面側は、標高の高い北半は上面が大きく削平されているため包含層がほとんど残っておらず、遺物の出土量は多くはない。その一方で P3 区の南半東側は、包含層にある程度の厚みがあり、遺物もやや多い傾向がある。特徴的な遺物を中心に抽出したが、大まかには C-6・C-8 区など北半では古式土師器が多く、南半の主に P3 区では中期以降の遺物が目立つ。古式土師器では、精製器種や二重口縁壺、外来系土器なども一定量みられるが、微高地 B をはじめとする西側エリアに比べて、外来系土器や加飾壺の出土量は格段に少ない。特徴的なものとしては、端部に刻み目を施す小型直口壺（1621）や鼓形器台の屈曲部（1627）、内面赤彩の小型壺の口縁端部（1639）、脚台式製塩土器（1641）などがある。端部に刻み目を施す直口壺については、系譜は不明ながら纏向遺跡で数点の出土事例がある<sup>45)</sup>。また脚台式の製塩土器（1641）は、体部外面がタテ方向のケズリであるため弥生後期後半頃の脚台Ⅱ式に比定できる<sup>46)</sup>。この付近には、吉備型甕が出土した 1897 井戸や脚台式の製塩土器が出土した 978 土坑が位置しており、東部瀬戸内系の遺物がまとまって出土する点が注目される。

中期以降では、P3 区南東で初期須恵器のまとまって出土する傾向がみられる（1642～1648）。土器以外では、羽口（M24・M26）、鉄滓（M25）などの鍛冶関連遺物、砥石（S45・S46）、被熱痕跡のある敲石（S44）、小型椀形製塩土器（1635・1650）などがある。やや根拠は弱いだが、周辺での遺構・遺物の検出状況から中期以降に下る可能性が高い。特にこの中でも、砥石面が湾曲するきめ細かな仕上砥（S45）は、搬入礫の砂質片岩製である点が重要である。ほかでは、砂岩製の敲石（S44）に敲打痕が 2 か所あり、いずれも被熱黒化している。高温の作業で使用されたことは明らかであり、羽口や鉄滓の存在を重視すれば、鍛冶操業で使用された可能性が推測できる。

このほかに重要な遺物として、P3 区耕作溝から出土したガラス勾玉の尾部（S43）があり、鮮やかなコバルトブルーの色調を呈する。ガラス勾玉は弥生時代に多いが、近隣では向日市芝ヶ本遺跡で前期後葉～中期初頭頃のガラス勾玉の鋳型の出土が報告されており<sup>47)</sup>、ここまでの本遺跡の調査成果を鑑みると、ガラス勾玉（S43）についても同様に古墳時代に下る蓋然性が高い。

#### 〔b. 微高地 C 東半の遺構・遺物：C-2・C-3 区・C-5 区・D-2 区・P2 区〕 (図 237)

建物遺構 21 棟、井戸 1 基などが検出された。微高地頂部にあたる C-5 区東端～D-2 区西端は、中世以降に上面が削平されているため遺構はやや希薄となっているが、南東斜面側には遺構が密集している。建物遺構の内訳は、竪穴建物 9 棟、竪穴建物の可能性が高い 1 間×1 間の建物が 5 棟、掘立柱建物 7 棟で、竪穴建物が主体を占める。掘立柱建物は、微高地縁辺部にまとまっているが、南東側低地部が中世の地下げで削平されているため、南東側にどのように遺構が広がっていたかは不明である。

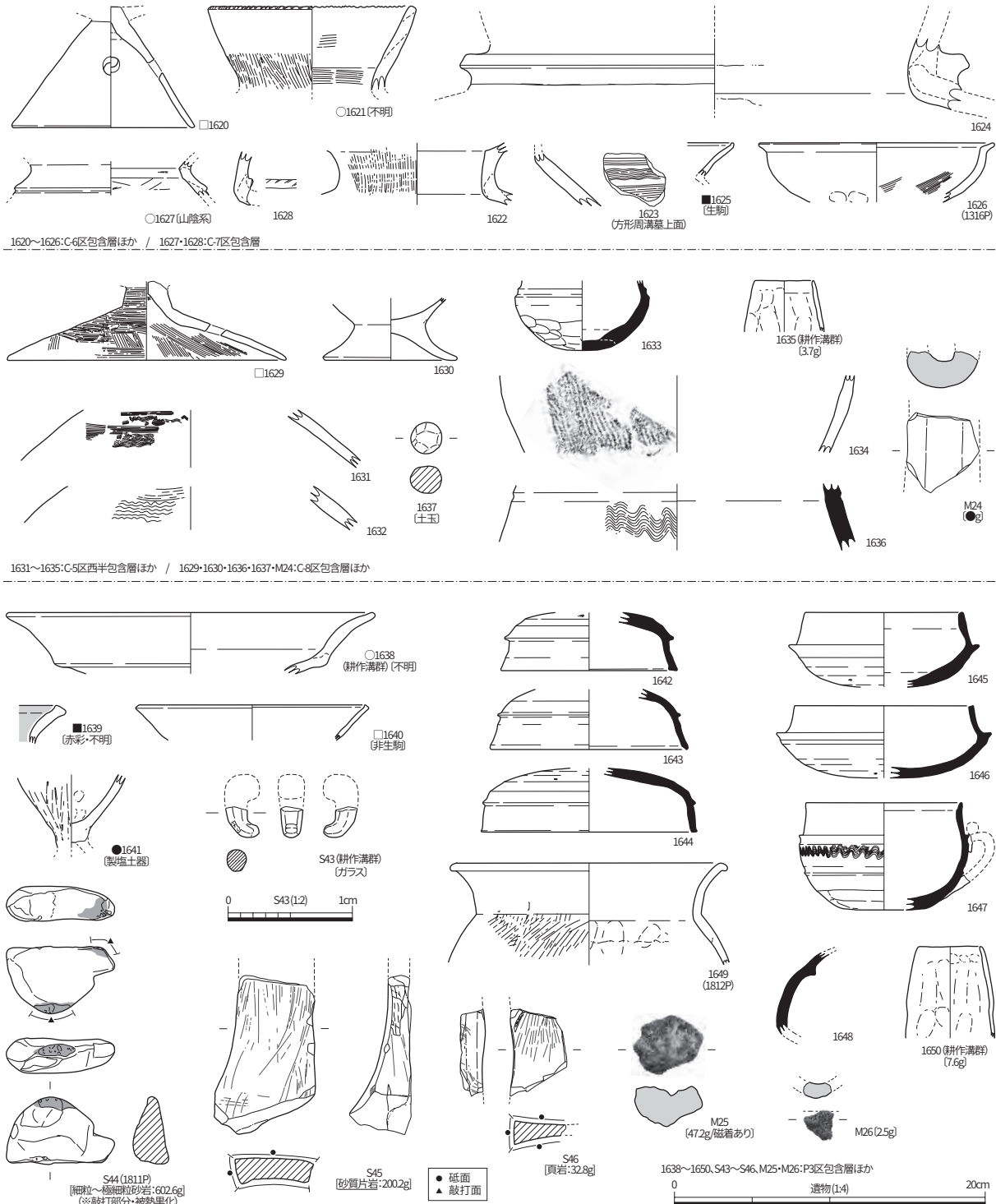


図 236. 中央エリア 微高地 C 西半包含層ほか 出土遺物

**竪穴建物 31** (図 238) C-5 区の東端で検出された竪穴建物で、北西 5 m に掘立柱建物 17 が、南 3 m には掘立柱建物 16 がそれぞれ近接している。微高地 C の頂部付近に立地しているため、上面が大きく削平されており、残存状況は悪い。建物の規模は、東西・南北 5.8 m、面積 33.6 m<sup>2</sup>をはかる。検出面からの深さは 0.05 m 以下で、竪穴の外形を辛うじて把握ができた。1168P・1169P・1170P・1171P が主柱穴とみられるが、大きさはいずれも直径 0.3～0.4 m 前後で、いずれも浅い。竪穴埋土や柱穴埋土から、TK208～23 型式頃の土師器・須恵器の細片が少量出土しており (1651～1654)、これらは





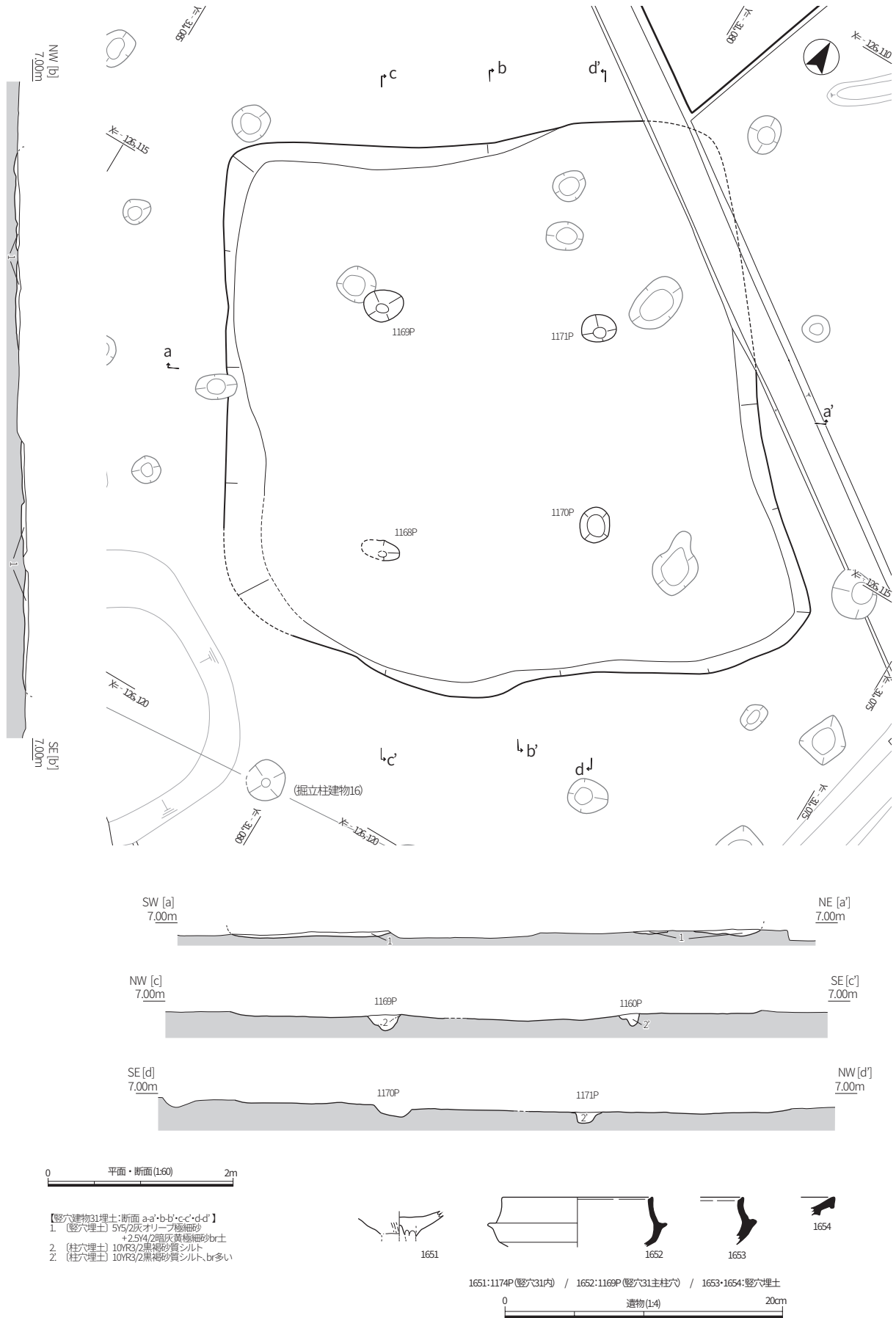


図 238. 竪穴建物 31 平面・断面・出土遺物

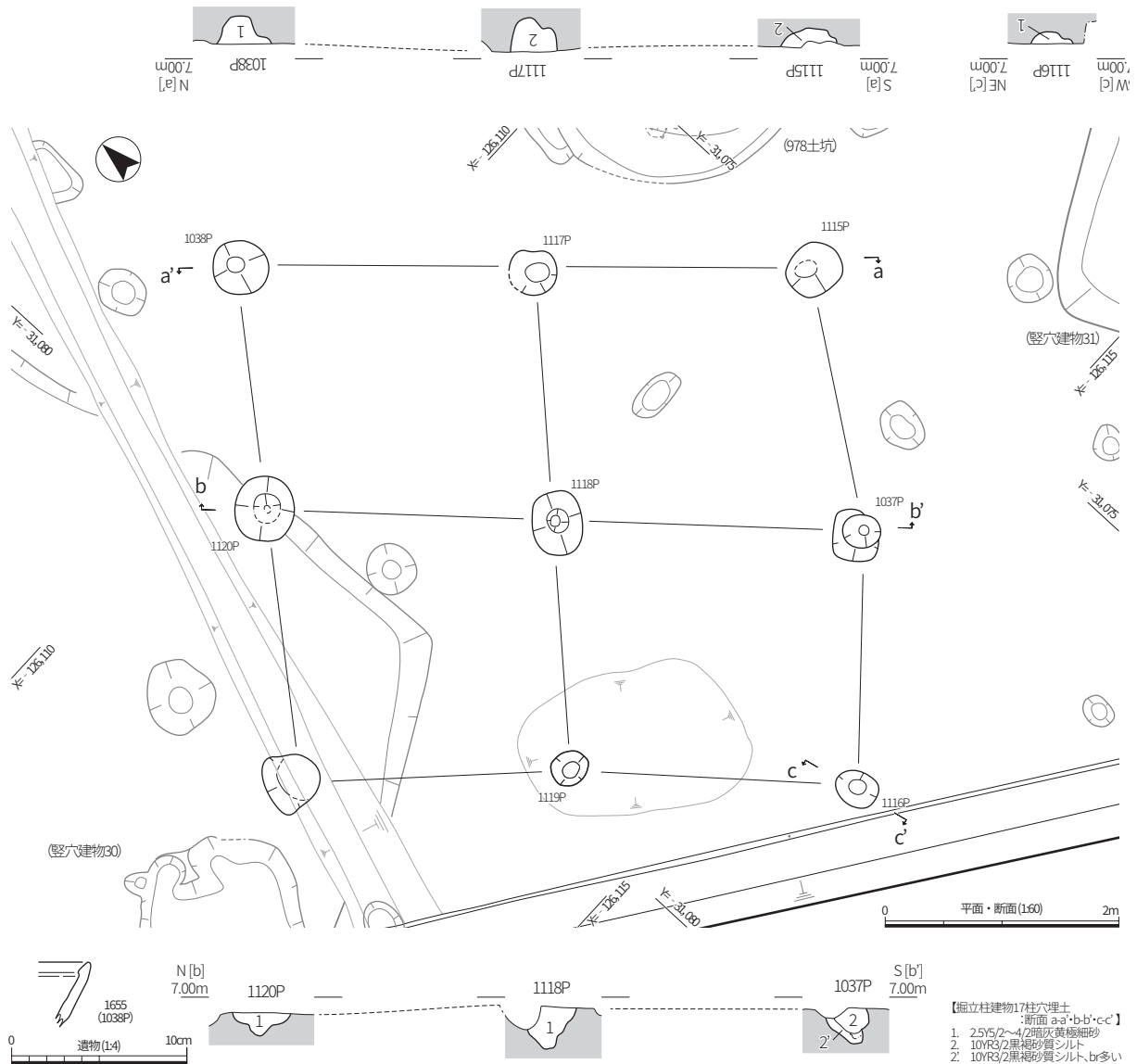


図 239. 掘立柱建物 17 平面・断面・出土遺物

建物の存続時期の一端を示すものとみられる。

**掘立柱建物 17** (図 239) C-5 区の東半で検出された 2 間×2 間の総柱建物で、建物の西側が竪穴建物 30 と重複する。微高地 C の頂部付近に立地しているため、上面が大きく削平されているが、柱穴は一定の深さがある。建物の規模は、東西 5.0 m、南北 4.4 m、面積 22.0 m<sup>2</sup> をはかり、建物の南北軸は 47.3° 東に傾く。柱筋の通りはやや悪く、柱間寸法は 2.2 ~ 2.5 m におさまる。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、規模は径 0.5 m 前後、深さ 0.3 m 前後のものが多い。柱穴埋土は、暗灰黄色または黒褐色の砂質土を主体とする。断面で柱痕が確認できないため、柱は抜取られたと判断できるが、柱あたりから柱の直径は 0.1 ~ 0.15m 程度に復元される。1037P・1038P・1115P・1117P の埋土から土師器の細片が数点ずつ出土しており、このうち布留式新段階以降の布留形甕の口縁端部 (1655) を図化した。そのほかの遺物では、古式土師器も少量含むが、中期以降に下る高杯や甕の細片を確認できるため、建物の時期については辻編年 2 ~ 3 段階頃に位置づけるのが妥当である。

**掘立柱建物 16** (図 240) C-5 区の東端で検出された南北 2 間以上の掘立柱建物で、南西側が調査区外に拡がる。そのため詳細な規模・構造は不明であるが、現状の規模は南北 3.5 m 以上、東西 1.8 m 以上

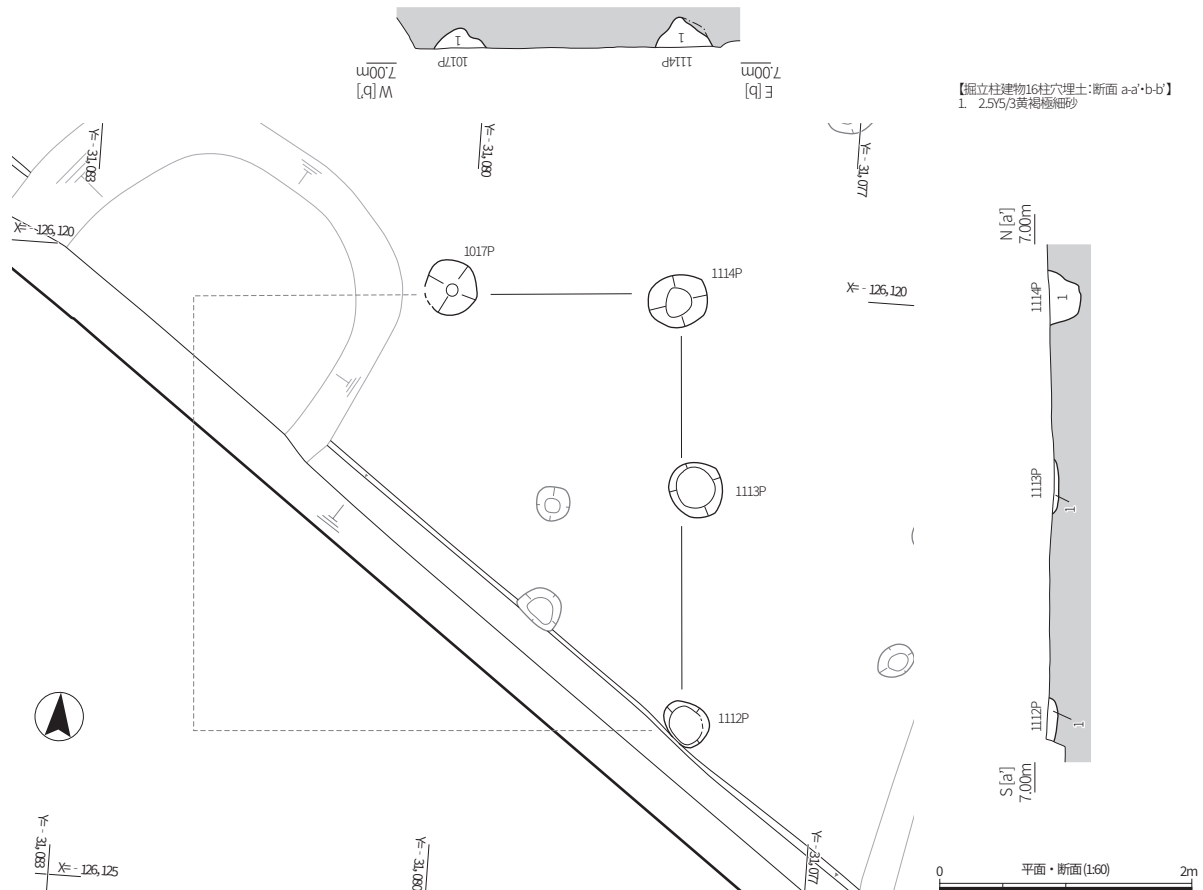


図 240. 掘立柱建物 16 平面・断面

である。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、規模は径 0.4～0.5 mをはかる。検出面からの深さは、0.06～0.25 mまでややばらつきがあり、柱穴埋土は黄褐極細砂を主体とする。また断面から、柱は全て抜取られたと判断できる。1017P・1114P の埋土から土師器の細片が数点ずつ出土しており、細片のため図化していないが、中期以降の高杯や甕体部の破片が確認できる。このため詳細な時期比定は難しいが、辻編年 3 段階以降に位置づけるのが穏当である。

**(掘立柱建物 8)** (図 241) C-1 区で検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、掘立柱建物 16 の南 8 m に位置する。また南側が掘立柱建物 45 と重複し、柱並びの中央部分に 168 溝がはしる。付近一帯は、中世以降の耕作によって上面が大きく削平されており、柱穴の規模や並びなどから竪穴建物の支柱穴と判断した。柱間隔は 2.7～3.1 mをはかるため、一辺 4.5 m 規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は、円形または不整形で、大きさは 0.5～0.6 m である。南西の 170P はやや浅いが、ほかは検出面からの深さが 0.15～0.2 m 程度ある。柱穴埋土は、ブロック混じりの灰黄褐から黒褐シルトを主体とする。169P の埋土から土師器壺体部の細片が出土したが、詳細な時期については不明である。ただし周辺で検出された建物の時期や出土遺物などから、中期以降に下る可能性が高い。

**(掘立柱建物 45)** (図 241) C-1 区と C-2 区にまたがって検出された 1 間×1 間の柱穴の並びで、北側で重複する掘立柱建物 45 と同様に、柱穴の規模や並びなどから竪穴建物の支柱穴と判断した。柱間隔は 3.0 mをはかるため、一辺 4.5 m 規模の竪穴建物に復元できるだろう。柱穴の平面形は隅丸方形で、大きさは 0.4～0.5 m である。柱穴埋土は、黄褐～褐灰色のシルト～極細砂を主体とする。柱穴の埋土からは、土師器・須恵器の細片が少量出土しており、178P から出土した無蓋高杯の破片 (1656) を図

第4章 遺構・遺物

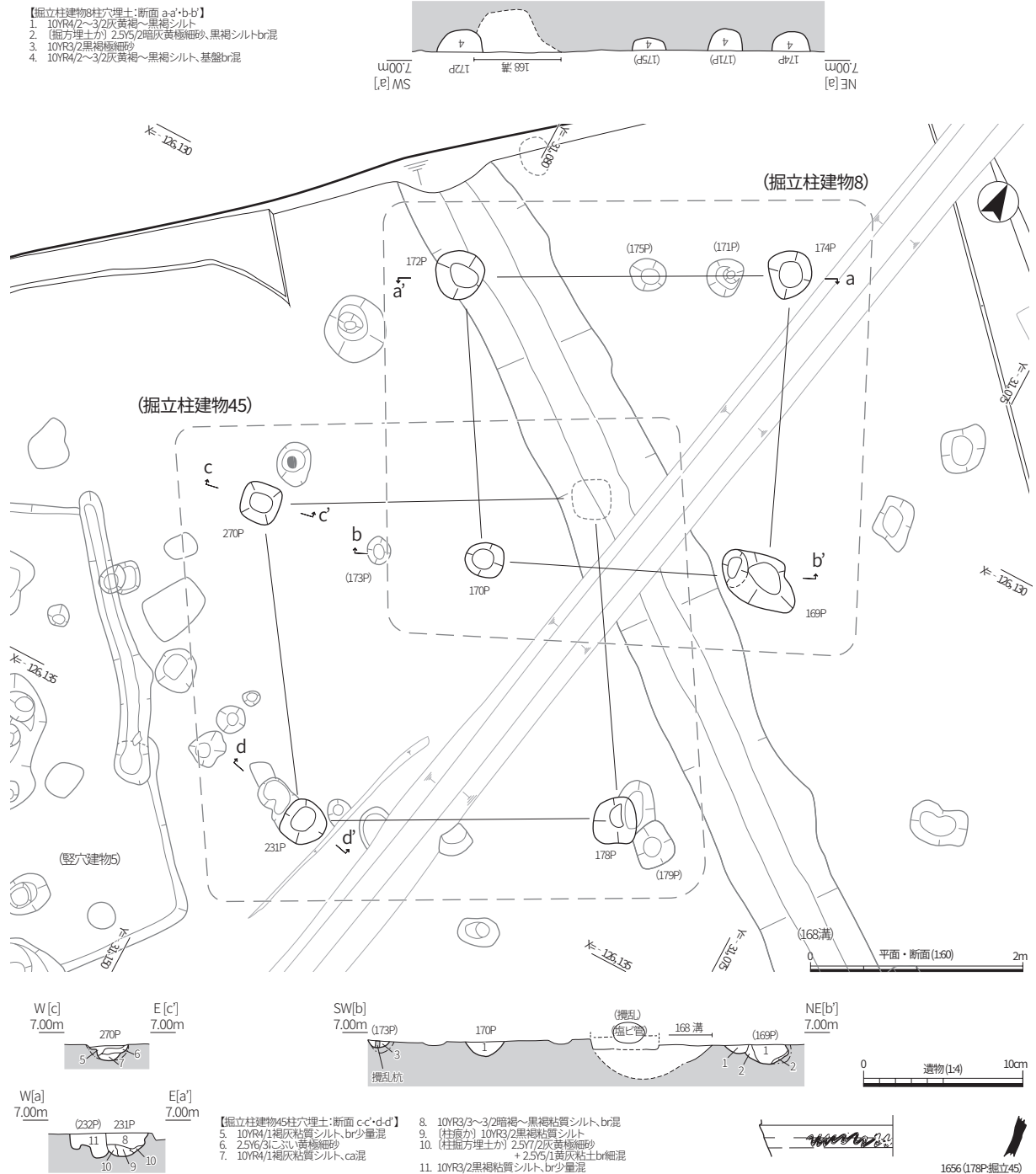


図 241. 掘立柱建物 8・45 平面・断面・出土遺物

化した。詳細な時期比定は難しいが、出土遺物から TK208 ~ 23 型式頃の建物と認識できる。

**竪穴建物 5** (図 242) C-2 区北端付近で検出され、掘立柱建物 45 の南 3 m に位置する。緩斜面地の上部付近に立地しており、検出面の形状はやや幅広く台形状を呈するやや不整な形状であったため、建物遺構としてよいか判断に迷うところであったが、274P・284P・285P などの主柱穴とみられる柱穴の並びが比較的良好いため、竪穴建物と認識するに至った。規模は南北 5.0 m、東西 4.5 m をはかり、面積は 22.5 m<sup>2</sup> である。検出面からの深さは 0.05 m 程度で浅く、北東側では壁溝とみられる 228 溝がある。主柱穴は、形状・規模にややばらつきがあり、検出面からの深さが 0.2 ~ 0.4 m まで幅がある。竪穴中央の 230 土坑や北西コーナ付近の 229 土坑については、いずれも検出面からの深さが 0.3 m をはかる



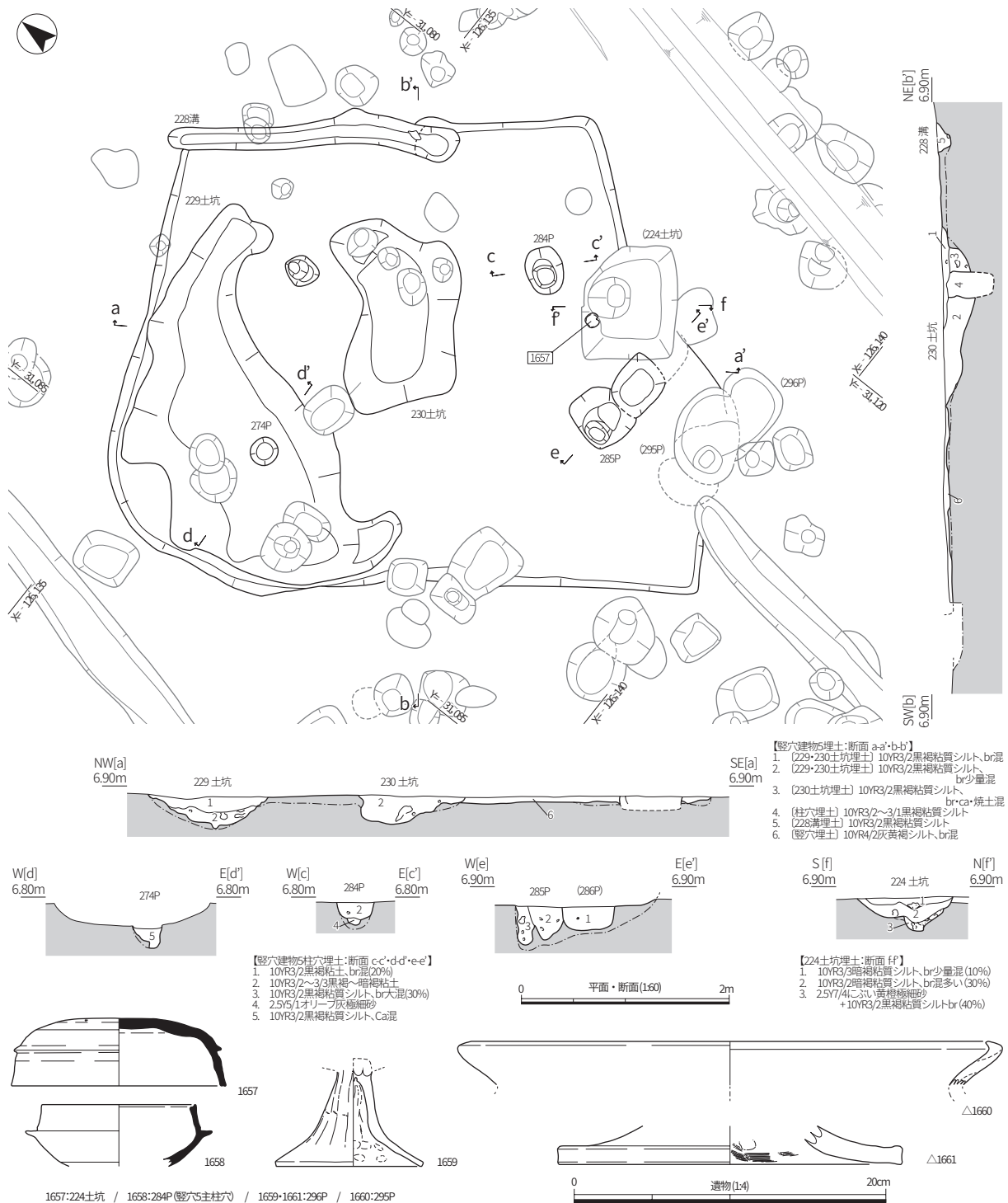


図 242. 竪穴建物5 平面・断面・出土遺物

不整形の土坑で、竪穴建物との関係は明確でない。竪穴埋土は、ブロック混じりの灰黄褐シルトを主体とし、柱穴や土坑は第6層に類似する泥質の暗色土を主体とする。

竪穴埋土や主柱穴からは、土師器・須恵器の細片が一定量出土しており、284Pから出土したTK23～47型式頃の杯身(1658)を図化した。ほかに周辺・関連する遺物としては、肩部224土坑出土のTK216型式頃の杯蓋(1657)や、296P出土の土師器高杯脚部(1659)と弥生時代後期の器台脚部(1661)、296P出土の大型の甕または鉢の口縁(1660)などがあり、このうち(1660)は管見限り類例を知らない。これらの遺物は、弥生土器(1661)を除けばいずれも中期の遺物とみなしてよく、建物の時期は

主柱穴出土の杯身(1658)から中期後葉に下る可能性が高い。なお弥生時代後期の器台(1661)の位置づけについては、同時期の遺物がC-6区で2点出土しているものの、出土量がごく僅かであるため、付近にまとまった遺構が広がる可能性は限りなく低いと思われる。ただし、調査地の北側などに同時期の集落が存在する可能性があるため、周辺での調査の進展に期待したい。

**竪穴建物 4** (図 243) C-2 区北東付近で検出され、竪穴建物 5 の南東 7 m、竪穴建物 50 の西 10 m に位置する。緩斜面地で段状の掘り込みが確認されたことから竪穴建物と判断したが、西側南北辺が攪乱を受け、さらに東半が調査区外であるため、全体の規模・形状は明確でない。現状では、規模は 3.5 m 以上に復元され、検出面からの深さは 0.16 m をはかる。主柱穴は、現状では不明確であるが、竪穴内には楕円形の土坑が 2 基みられる。234・235 土坑は、いずれも長径 0.8～0.9 m、検出面からの深さは 0.2～0.25 m をはかる。竪穴および土坑埋土は、いずれも暗褐～灰黄褐粘質シルトを主体とする。

埋土からは、土師器・須恵器・軟質土器が少量出土しており、床面の一角からは布留形甕(1664)と把手付の鍋の破片(1665)がまとめて出土した。特に外面タタキ調整の軟質土器の鍋(1665)は、畿内でも出土事例は多くないため、在来の布留形甕(1664)と共伴する点が注目される。時期については、235 土坑出土の無蓋高杯(1663)から TK208 型式頃と判断でき、北摂地域での韓式系軟質土器の受容過程を考える上でも重要である。

**(掘立柱建物 52・53・54)** (図 244) C-2 区では、古墳時代の一定の深さがある柱穴が約 200 基検出された。柱穴が密集しており、建物遺構の復元がやや困難であったが、深い柱穴を抽出し分布を検討したところ、C-2 区中央、T.P.+6.5～6.4 m 付近で整った 1 間×1 間の柱並びが少なくとも 3 組確認できたため、竪穴建物を構成する主柱穴と判断するに至った(掘立柱建物 52・53・54)。さらに周辺では、復元率の高い遺物が検出面より 0.1～0.2 m ほど上位でいくつか出土しており、上記の竪穴建物に伴う遺物の可能性が推測される(1666～1669)。中期の遺構は、第 6 層中から掘り込まれるものも多く、本来の竪穴の掘り込み面より下位で遺構検出をしたため輪郭が十分に把握できなかつたとみられる。

柱間隔は、(掘立柱建物 52) とした西側の並びが 3.2～3.4 m、東側の(掘立柱建物 53・54) とした並びが 2.6～2.7 m であるため、規模はそれぞれ 6.0～6.5 m と 5.0 m 前後に復元される。主柱穴とみられる柱穴は、不整円形または隅丸方形を基本とし、大きさは 0.4～0.5 m 前後のものが多い。斜面地のため検出面からの深さは一定ではないが、最も深い 258 P は深さが 0.6 m ある。埋土は、ブロック混じりの暗色の泥質土を主体とし、柱あたりがみられるものはあるが、平面・断面で柱痕が確認できるものがほとんどないため、建物の廃絶時に柱は抜取られた可能性が高い。掘立柱建物 52・54 の北東肩部付近では、方形の 265 土坑と楕円形の 323 土坑が検出されているが、これについては今回の調査で多数みつかったいる竪穴建物の壁際の土坑の可能性はある。

竪穴の掘り込み輪郭が検出できなかったため、これらの建物に明確に伴う遺物は少ないが、上述したように周辺・上面からは復元率の高い遺物がいくつか出土している(1666～1670)。出土地点から確実に建物遺構と関わる遺物と断定することはできないが、TK23～47 型式頃の小口径の杯類や短脚高杯などが主に出土しており、建物の時期については中期後葉～末葉頃と推測しておきたい。

**311 土坑** (図 244) 掘立柱建物 53・54 の南隣接地で検出された楕円形の土坑である。長径 0.5 m、検出面からの深さ 0.27 m をはかる小規模な土坑であるが、埋土から須恵器有蓋高杯蓋 2 点とともに製塩土器が一定量出土した点が特筆される。埋土は、オリーブ黒～黒粘土を主体とし、ブロックが顕著でないため人為的な埋戻し土であるか自然堆積であるかは判断がつかない。また東側に隣接してひとまわり

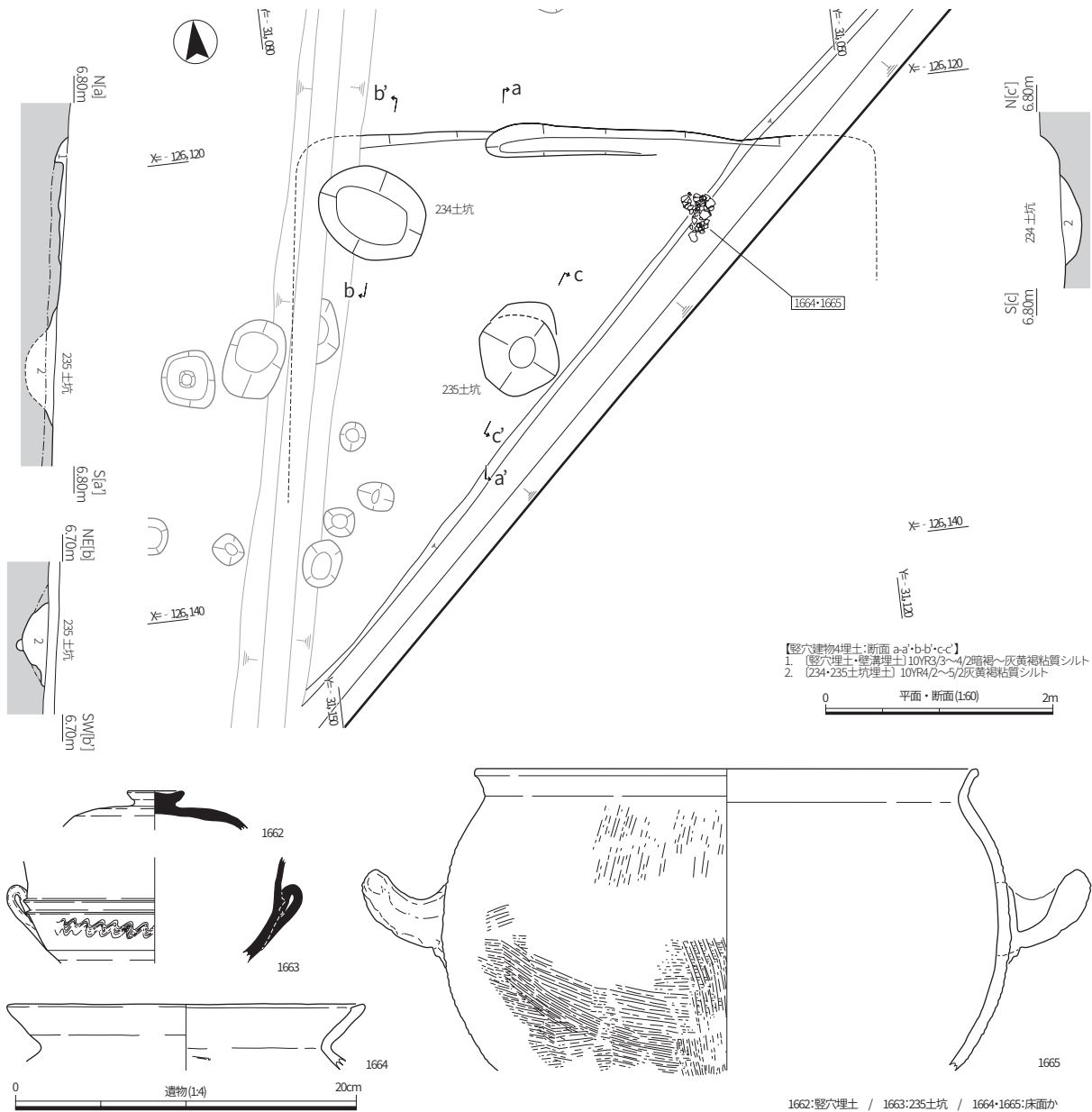


図 243. 竪穴建物 4 平面・断面・出土遺物

規模の小さい 312P があるが、関係性は不明である。

出土遺物は、TK23 型式頃の有蓋高杯蓋 2 点 (1671・1672) と製塩土器 (1674・1675) のほか、壺口縁の破片 (1673) がある。製塩土器は、いずれも内外面ナデ・オサエ成形で、計 15.1g 出土した。これに加え肩部付近では、ほぼ同時期の外面螺旋状にカキメを施す甕の体部片が一定量出土したが、311 土坑と関係するかは不明である。

遺構の機能や性格については明確でないが、廃棄土坑もしくは製塩土器の保管に関連する遺構などの可能性が推測できる。また隣接する建物との関係は、出土遺物から時期は近いものの、柱穴との距離から建物の外側に位置していた可能性が高いため、関係性の有無は現状では明確でない。

**C-2 区・C-3 区南端柱穴群** (図 245) C-2 区南半および C-3 区・C-4 区は、耕作段の造成と粘土採掘土坑の掘削によって基盤層〔第 8 層〕が面的に深く掘り下げられており、古代以前の遺構の拡がりも明確でない。ただし、C-2 区南端・C-3 区東端の高槻用水と並行する一区画が部分的に削平を免れており、

第4章 遺構・遺物

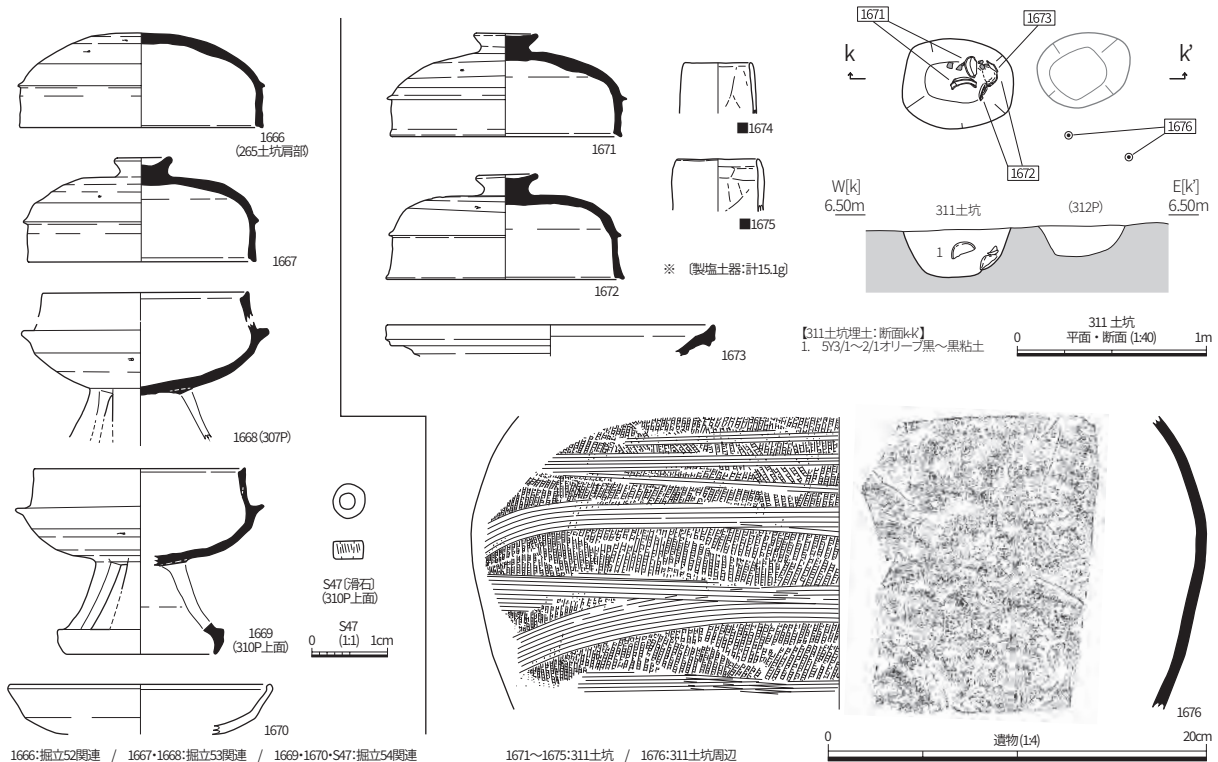
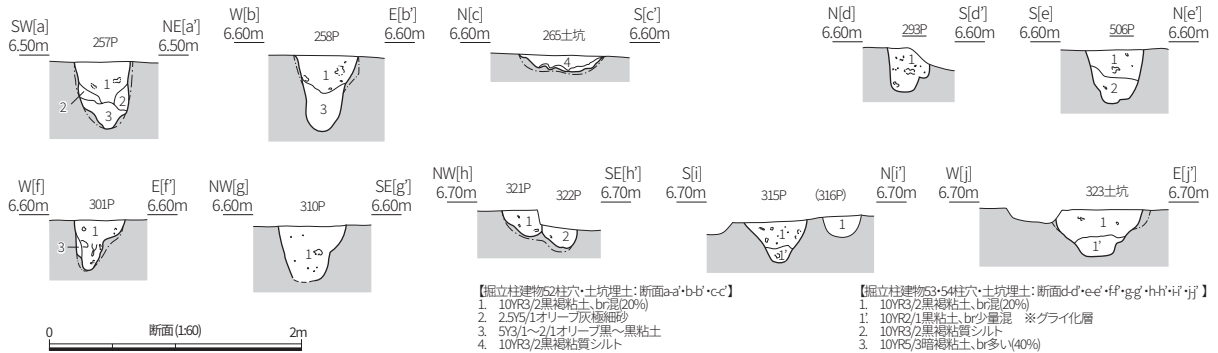
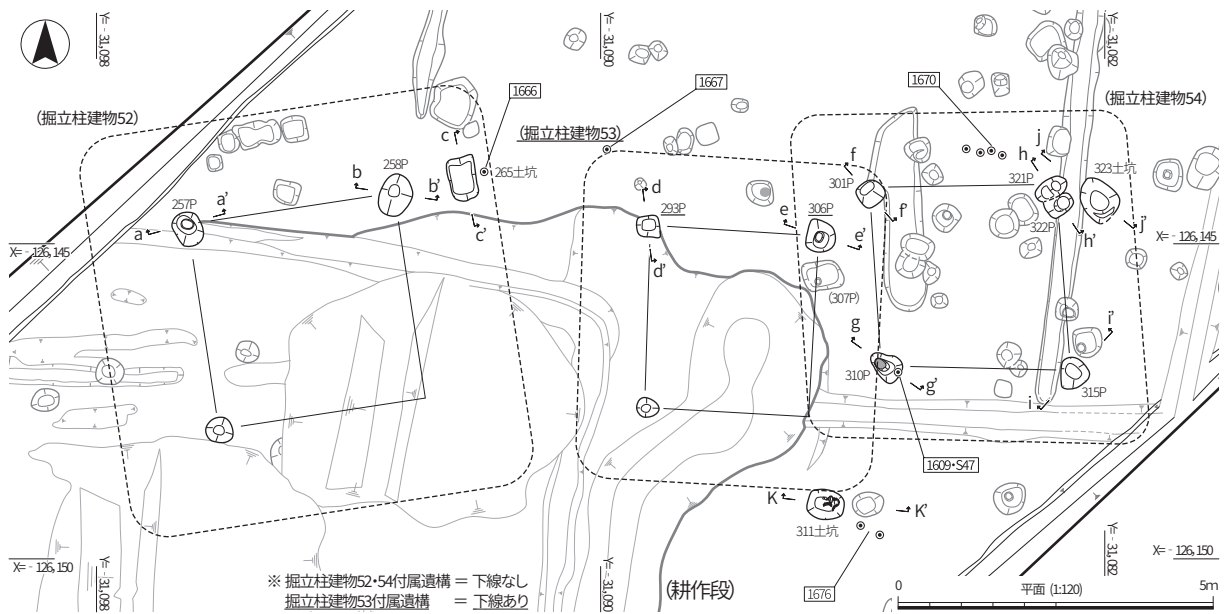


図 244. 掘立柱建物 52・53・54、311 土坑 平面・断面・出土遺物



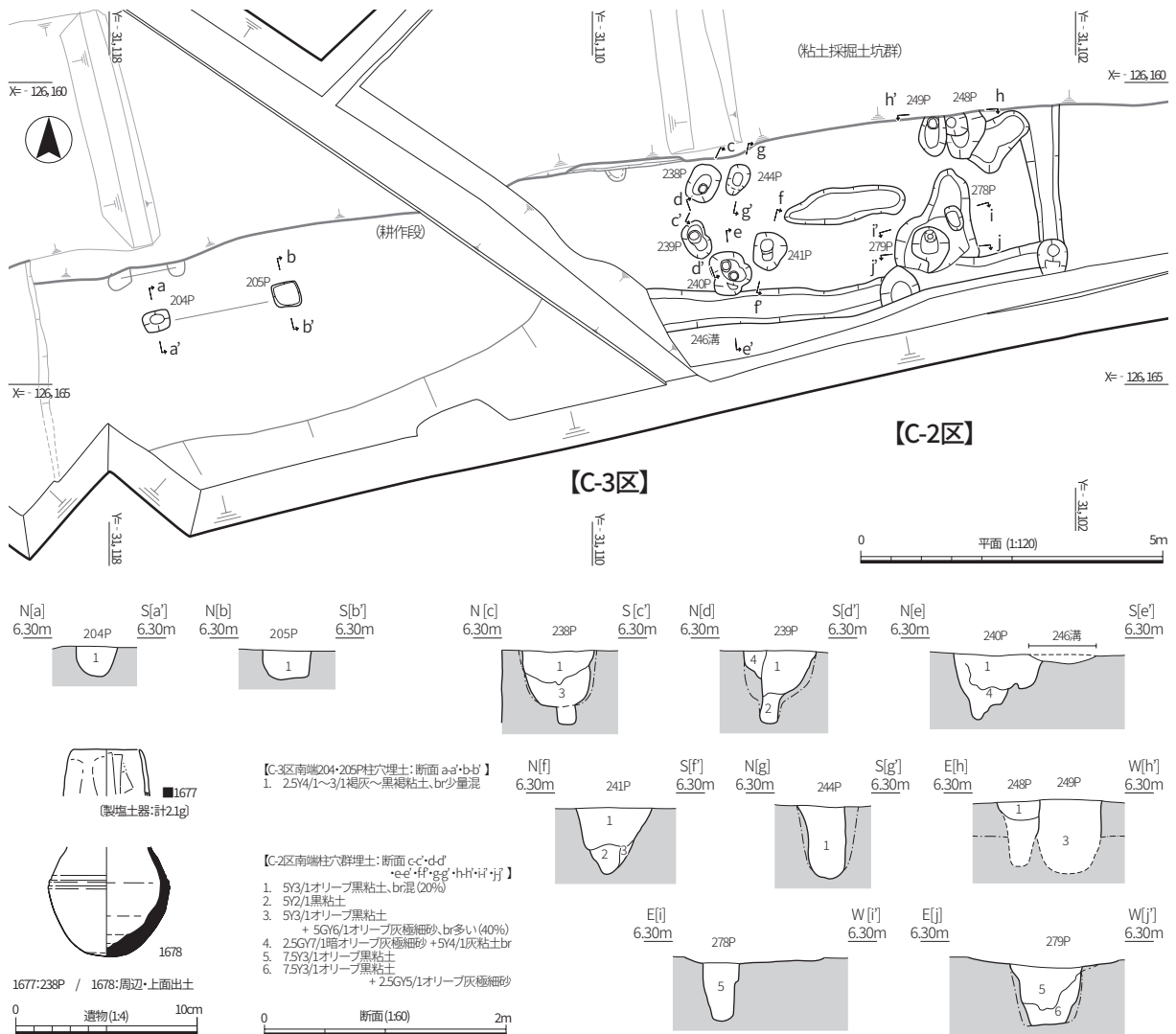


図 245. C-2 区・C-3 区南端柱穴群 平面・断面・出土遺物

この範囲において古墳時代の柱穴がいくつか検出されている。

特に C-2 区の一隅では、建物の復元までは至らなかったものの、深さ 0.5 ~ 0.7 m 程の柱穴がまとめて検出されており (238 ~ 249P、278・279P)、これらは建物を構成する柱穴であった可能性が高い。南北の柱穴の拡がりや明確でないため詳細な構造は不明といわざるをえないが、東西は 1 間の構造に復元できる可能性が高く、狭い範囲に柱穴が集中する点から複数回の建替えが推測される。柱穴群の外縁には、L 字状の溝 (246 溝ほか) がめぐっており、掘立柱建物の雨落ち溝か、もしくは竪穴建物に伴うもののどちらかの可能性を推測することができる。さらにこの柱穴群の西 8 m には、規模・深さが揃う 2 基の柱穴の並びがあり (204P・205P)、これについても建物を構成する可能性を考慮する必要があるだろう。

柱穴群の埋土からは、土師器・須恵器の細片が少量出土している。図化可能な遺物はほとんどなかったが、少量ながらも須恵器が含まれる点や、土師器に大型高杯の破片など確実に中期に下るものが一定量含まれることから、柱穴群の時期は中期以降と判断できる。また 238P・248P からは、製塩土器が出土しており、238P からはナデオサエ成形の破片 (1677) が 2.1g 出土している。詳細な時期比定は困難であるが、柱穴埋土から製塩土器が出土する点や形骸化した把手付椀 (1678) が周辺・上面から

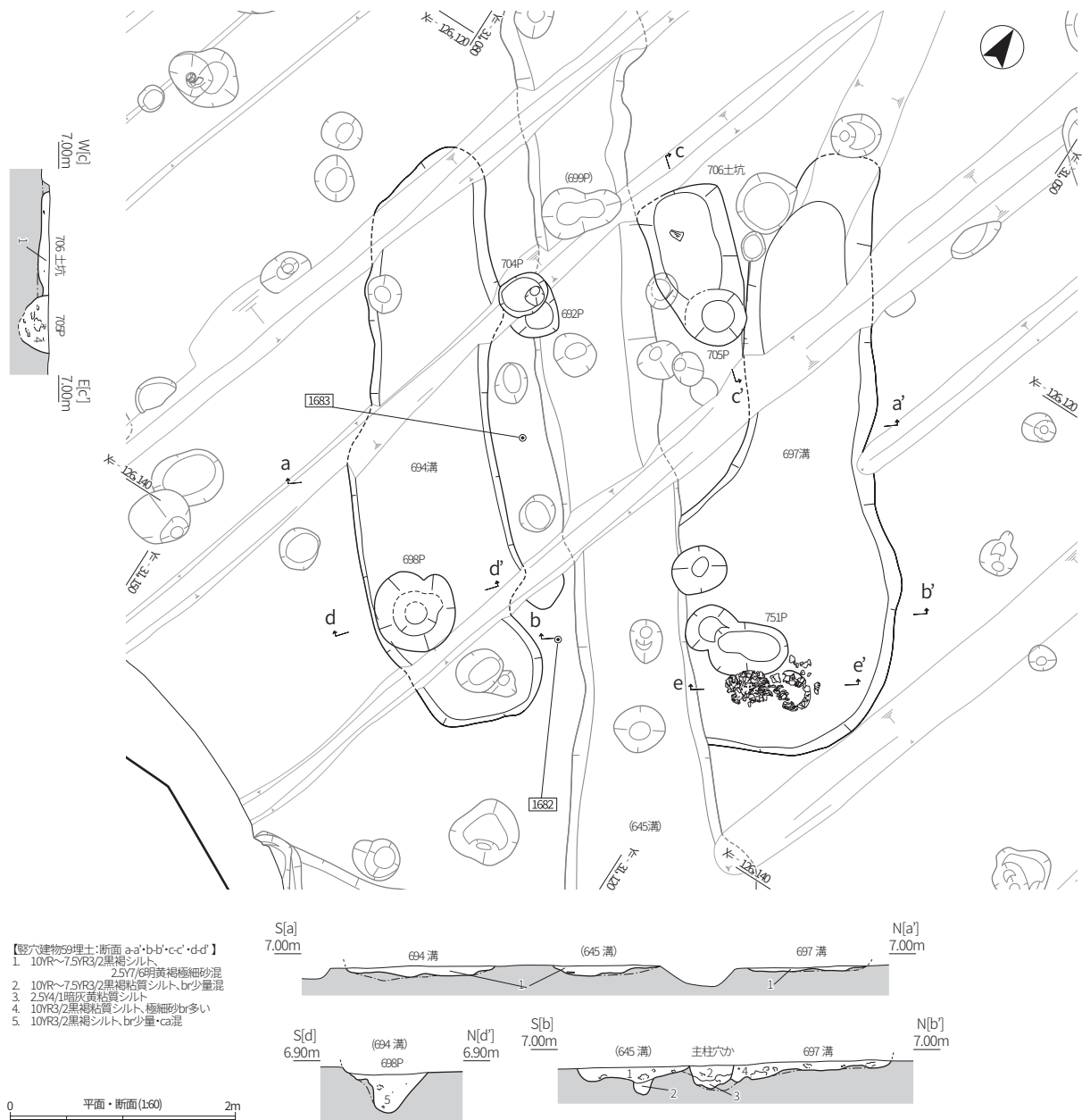


図 246. 竪穴建物 59 平面・断面

出土している点を考慮すると、中期後葉頃の建物が存在していた可能性が高い。

**竪穴建物 59** (図 246・247) D-2 区西半で検出された竪穴建物で、東 6 m に竪穴建物 21 が、南 3 m に竪穴建物 20 が位置する。微高地 C の高所部に立地しているため、上面の削平が顕著で、中世以降の耕作溝群がはしる。さらに竪穴の中央部を縦断するようにして、南北方向に 645 溝がのびており、全体的な残存状況は悪い。こうしたことから調査時は、建物遺構という認識がないまま調査を進めたが、今回の調査では竪穴建物の内部に幅広のコの字または口の字状溝がめぐる事例が多くみつかっており、遺構の形状や規模等から竪穴建物と判断するに至った。

建物の規模は、南北 5.3 m、東西 4.4 m、面積 23.3 m<sup>2</sup>をはかる。竪穴内のコの字状の溝 (694・697 溝) は、幅 1.0 ~ 1.3 m、深さは最大で 0.1 m をはかり、ほかの竪穴建物の事例から床面下部の掘り込みと推測される。北側の 692P・705P が支柱穴と考えられ、南側にも対応する柱穴がある。このうち北東の 705P は、径 0.5 m の円形で、検出面からの深さは 0.27 m をはかる。南東コーナー付近からは、甑

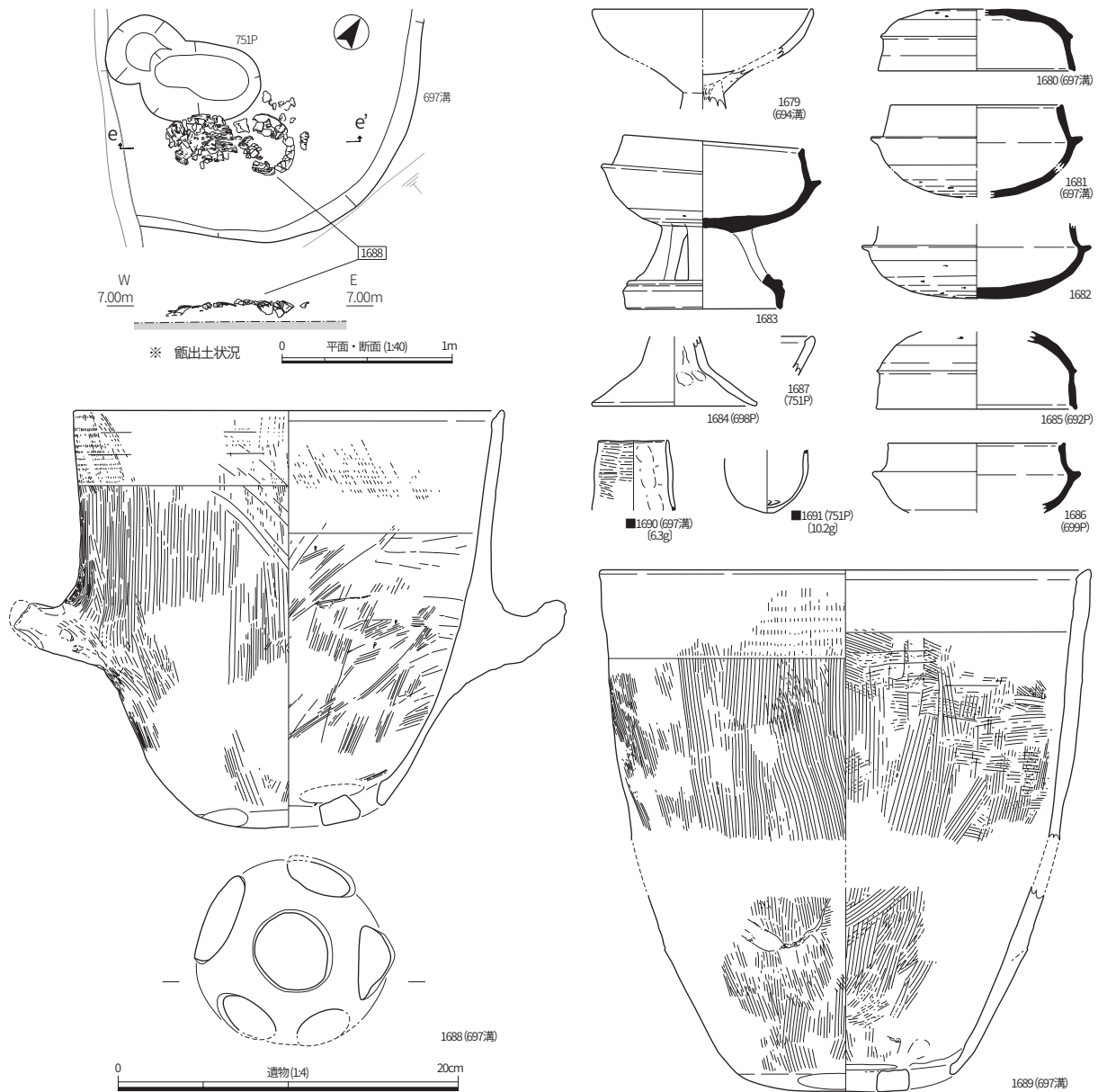


図 247. 竪穴建物 59 遺物出土状況・出土遺物

1 個体分 (1688) が潰れた状態で出土し、ほかに周辺から別個体の甗の破片 (1689) や須恵器片なども出土している。また甗 (1688) の北側下部には、751P とした東西 0.7 m の浅い掘り込みがあり、同時期の遺物も含まれることから、建物に伴う遺構である可能性が高い。ほかでは、南西コーナー付近に位置する 698P とした遺構は、深さが 0.35 m あるため、壁際の土坑の可能性も想定されるところである。なおカマドの有無は不明であるが、甗がまとまって出土している点から、中世以降の造成で削平された可能性が高い。

694・697 溝を中心に、関連する遺構から一定量の遺物の出土が認められる (1679～1691)。土師器・須恵器のほか、甗 2 点と製塩土器があり、土師器には辻編年 4 段階頃の椀形高杯 (1679・1684) や布留形甗 (1687) がある。須恵器は、杯蓋・杯身・有蓋高杯が一定量あり (1680～1683・1685・1686)、これらは概ね TK208～23 型式頃に位置づけられる。甗は、全形を復元できる (1688) と別個体の (1689) があり、いずれも内外面をハケ調整で仕上げる。さらに口縁端部が内傾する端面をもち、これについては P3 区 1746P 出土の甗 (図 230: 1603、P309) と同様に布留形甗からの影響とみるこ

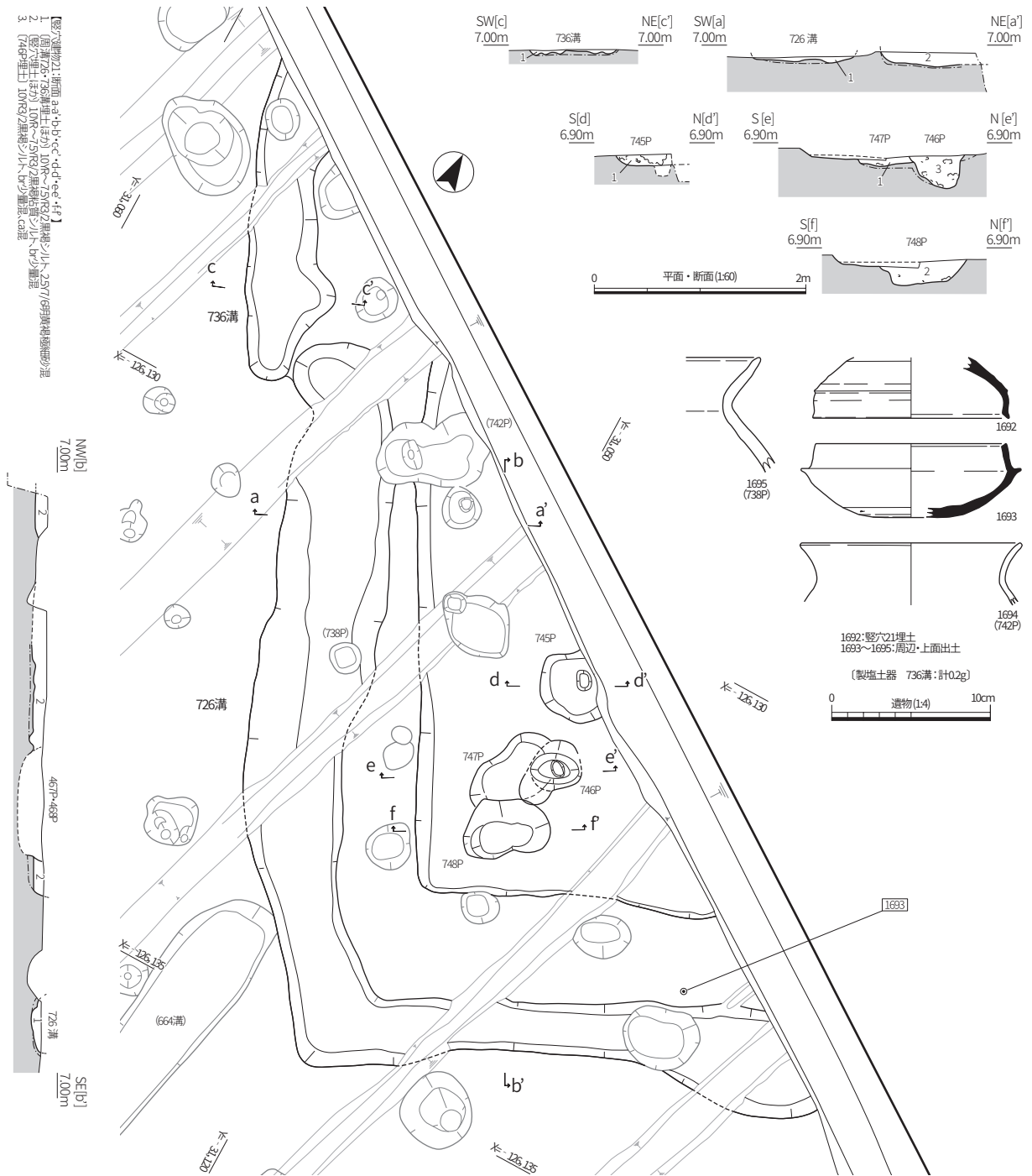


図 248. 竪穴建物 21 平面・断面・出土遺物

とも可能で、この地域における韓式系の器種の定着過程を考える上で重要である。小型椀形の製塩土器は、697 溝から計 6.3g の、751P から計 10.2g の出土があり、内外面ナデの個体 (1691) とともに、外面タタキの個体 (1690) も散見される。上述したように、須恵器の時期は TK208 ~ 23 型式頃に位置づけることができるが、甔の形態や調整にやや新しい要素がみられるため、建物の時期は TK23 型式頃とみるのが穏当である。

**竪穴建物 21** (図 248) D-2 区中央西寄りで検出された竪穴建物で、調査区北壁沿いで検出されたため南西側 3 分の 1 程度の検出に留まる。微高地 C の高所部に立地しているため、上面が大きく削平されており、残存状況があまり良くない。南東 6 m にはこの建物と同一軸の竪穴建物 19 が、西 6 m には竪穴



建物 59 がそれぞれ位置する。現状での建物規模は、南北 4.6 m 以上、東西 2.8 m 以上で、検出面から竪穴の底面までの深さは 0.1 m である。建物の周囲には、竪穴から 0.7 ～ 1.0 m の間隔をあけて幅 0.5 ～ 1.0 m の L 字状の 726・736 溝が建物の周囲をめぐる。建物の周溝と推測され、深さは 0.08 m をはかる。745P や 746P が位置から支柱穴の候補となり、規模は 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m である。断面から柱痕が確認できないため、柱は抜取られた蓋然性が高い。

竪穴埋土や周辺から出土した遺物は少量で、MT15 型式に下る須恵器杯類 (1692・1693) と外反口縁の土師器甕 (1694)、布留形甕 (1695) を図化した。出土遺物が少ないため詳細な時期比定は難しいが、後期初頭頃に比定ができる。部分的な検出に留まったため不明な点が多いが、周溝を有するつくりのしっかりとした建物であることから、周辺の同時期の竪穴建物との関係性が注目される。

**竪穴建物 20** (図 249・250) D-2 区中央の調査区南壁沿いで検出された竪穴建物と推測される遺構で、上面で顕著な被熱痕跡が確認された。微高地 C の南東斜面の上部に立地しており、北 3 m に竪穴建物 59 が、南西 7 m に竪穴建物 50 が位置する。上面の被熱面は、東西 1.8 m、南北 1.9 m の範囲の拡がり、下部に赤変・硬化した被熱面〔断面 a-a'・b-b'：埋土 3〕があり、上面に細かい焼土ブロックを顕著に含む堆積土〔断面 a-a'・b-b'：埋土 1・2〕が被覆していた。被熱面の東寄りには、著しく硬化した範囲が確認され、そこからは土師器甕 (1701) が出土している。ほかに被熱面の中央からは土師器甕 (未図化) が、西寄りでは板状鉄器 (M27) が出土しており、板状鉄器は端部が幅広になる形状から鉄鋌の可能性が推測できる。このことから被熱面は、鍛冶作業に伴う炉跡と考えることもできるが、周辺埋土の洗浄をおこなうことができなかつたため、断定するには至らない。

炉跡の周囲には、直線的な浅い段状の掘り込みが東西で確認されており、その範囲は南北 4.5 m 以上に及び、検出面からの深さは最大で 0.17 m である。ただし竪穴の形状は、整った方形ではなく、上面の炉跡と竪穴状の掘り込みとの関係もあまり明確でない。このことから、竪穴を伴わない地上炉の可能性などもひろく検討する必要があるだろう。なお炉跡・落込みの周囲・下部からは、柱穴・土坑がいくつか検出されており、関連する遺構が含まれている可能性が高い。この中では、竪穴状の掘り込みの肩部付近に位置する 756 土坑が壁際の土坑の可能性もある。また炉跡と重複する 755P は、上面に薄い炭化物の堆積があり、炉跡に関連する遺構とみるのが妥当である。754P と 757 土坑については、炉跡の下部で検出されたことから、明らかに炉跡に先行する。調査区壁際の部分的な検出に留まったため不明な点が多く残されているが、P3 区の (掘立柱建物 51) と検出状況が類似しており、整った形の竪穴を伴わない可能性を考慮する必要があるだろう。

先行する下部遺構も含めると、図化可能な遺物の出土が一定量ある (1696 ～ 1703、M27)。このうち外反口縁の土師器甕 (1701) と小型椀形製塩土器 (1700)、板状鉄器 (M27) が、炉跡上面から出土した遺物であり、炉跡の機能時期と直接的に関わる遺物と認識できる。一方で、布留形甕 (1702) が炉跡の下部の埋土、須恵器無蓋高杯 (1703) が下部遺構 757 土坑の直上からの出土であるため、炉の操業の直前に埋まった遺物と判断できる。このうち須恵器無蓋高杯 (1703) と布留形甕 (1702) は、いずれも TK208 ～ 23 型式頃に比定でき、炉跡上面遺物もそれと極端に時期が下らない。そのほかの遺物の様相などからも、炉跡の機能時期は TK208 ～ 23 型式頃と判断することができる。

**竪穴建物 19** (図 251・252) D-2 区東半で検出された竪穴建物で、南東 15 m の位置に 648 井戸が位置する。微高地 C の南東斜面地に立地しており、この建物を境に東側では遺構が希薄になる。建物の規模は、南北 6.2 m、東西 5.9 m、面積 36.6 m<sup>2</sup> をはかり、北壁中央付近で作り付けのカマドが検出された。

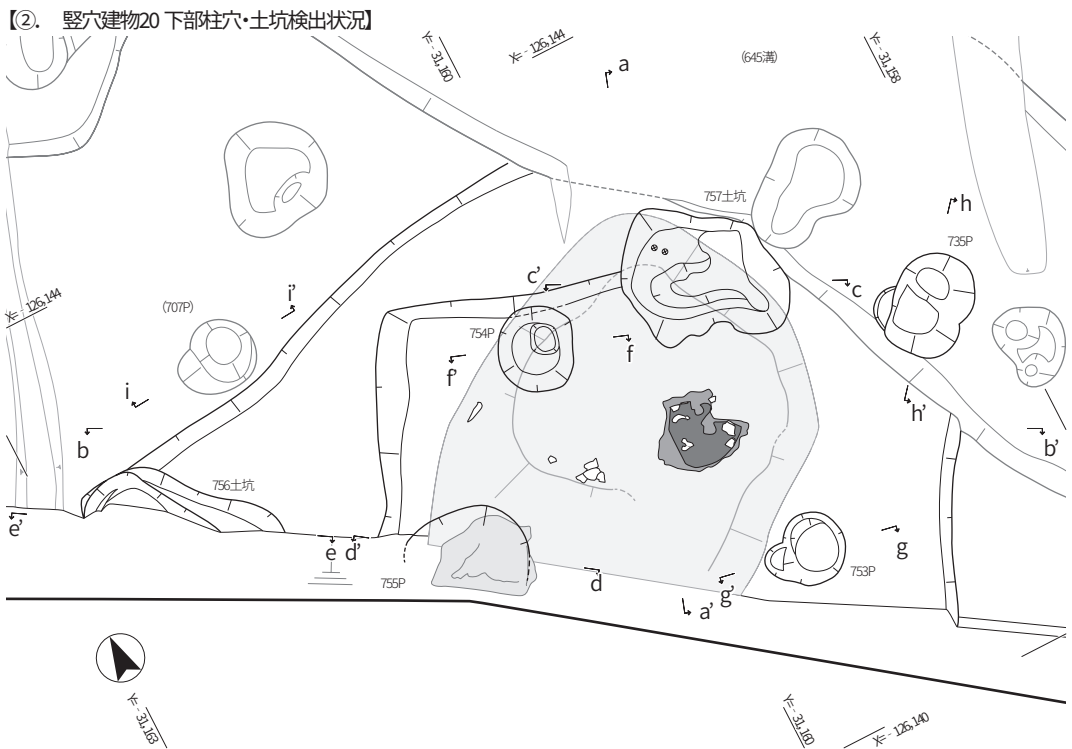
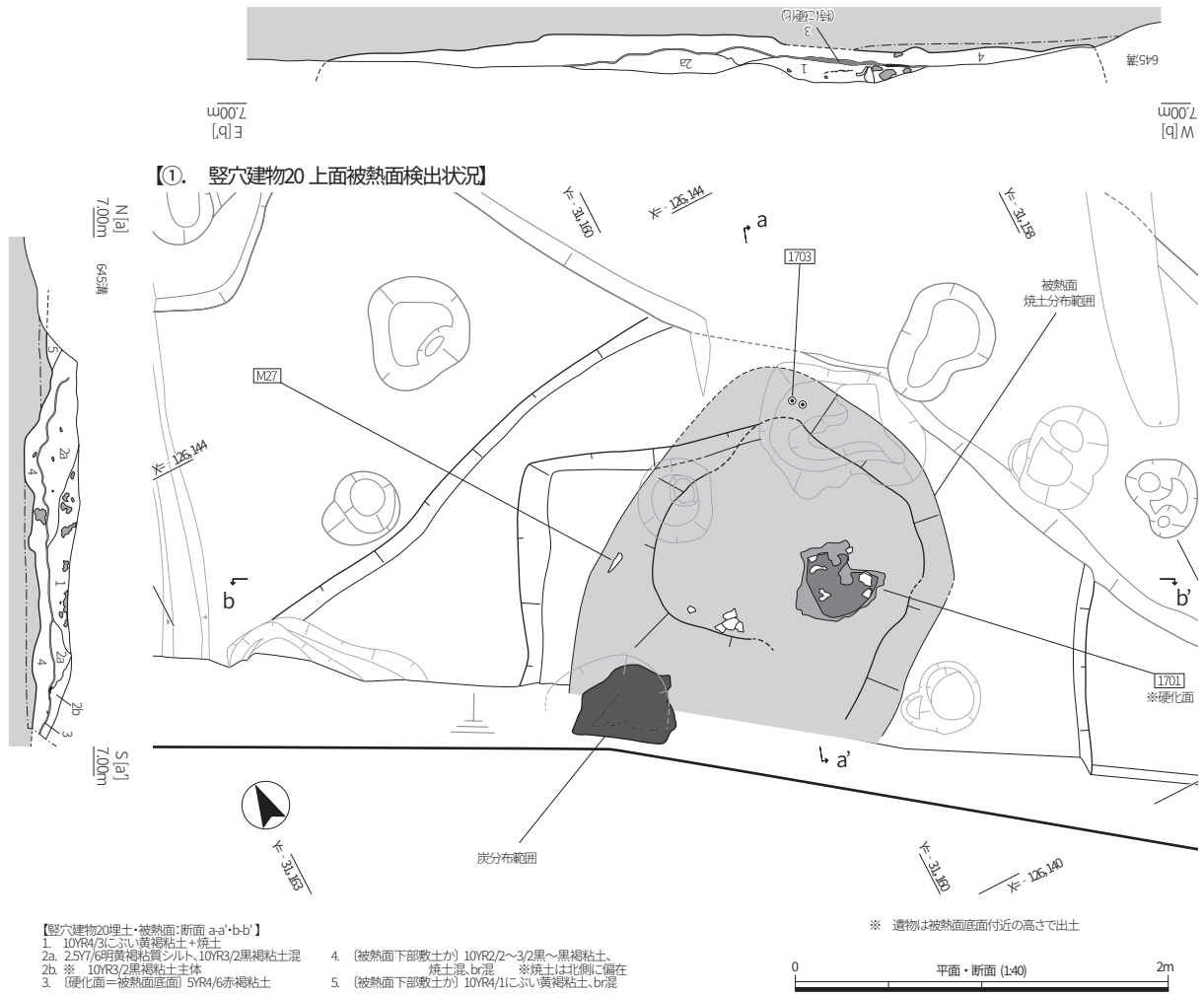


図 249. 竪穴建物 20 平面・断面

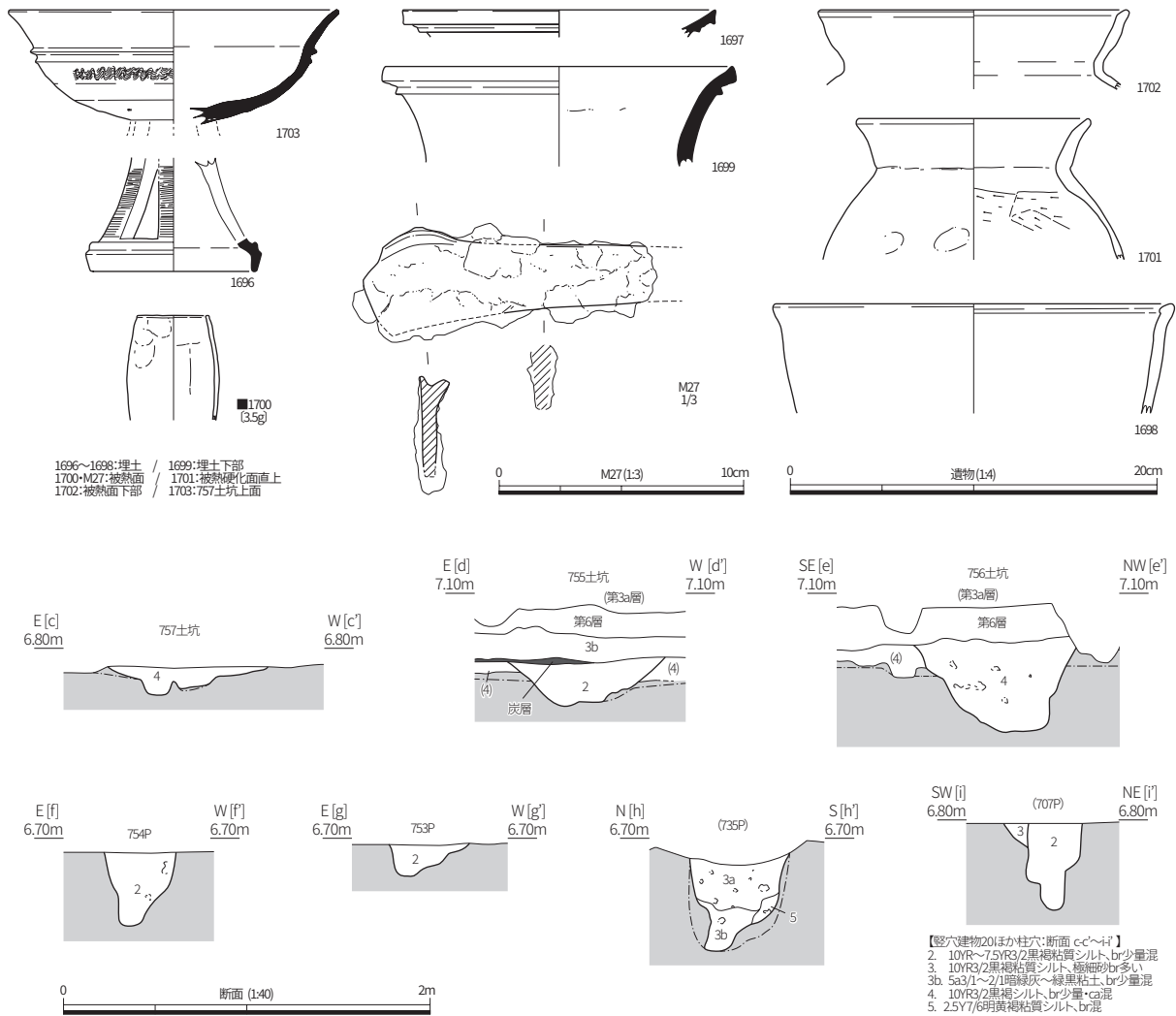


図 250. 竪穴建物 20 断面・出土遺物

断面から、加工面を直接床面とする構造であったと判断でき、建物の南半には幅 0.15 m、深さ 0.03 m の壁溝がめぐる。支柱穴は、いずれも隅丸方形または不整形を呈し、規模は 0.7 ~ 0.8 m、検出面からの深さは 0.4 m 前後である。埋土は、いずれもブロック土が充填されており、柱は全て抜取られたことがわかる。柱穴の規模がやや大きいのが、これについては柱の抜取り時にやや外側から掘り込まれたため柱穴の規模がひとまわり大きくなった可能性を考慮する必要があるだろう。

カマドは、上面の耕作溝によって部分的な破壊を受けているものの、今回の調査で検出されたカマドの中では残存状態が最も良好で、全体の構造が詳細に把握できる。長さ 1.0 m、幅 0.4 m の袖が壁面から竪穴の内側にむかってのび、両袖の内側と中間の焚口部には焼土が分布する。焚口部の幅は 0.4 m で、下部に硬化面がみられる。硬化面の直上の被覆土は、カマドの崩落土と判断できるが、被覆土からは内外面ハケ調整の甑とみられる体部片 (1708) が出土しており、このカマドでの使用が想定できる。排煙部は、袖の先端から 1.8 m 奥に位置し、土師器甕の体部片がまとまって出土した (未図化)。焚口前面には浅い土坑があり、焚口部での作業に伴う掘り込みとみて大過はない。規模は、南北 1.3 m、東西 1.1 m、深さ 0.04 m をはかる。なお建物の北西コーナーには、大小ふたつの方形の土坑 (646・647 土坑) が重複しており、これらの土坑は切り合いから竪穴建物よりも後出する。

埋土および竪穴内の遺構から出土した遺物には、土師器・須恵器があるが、いずれも細片で出土量は

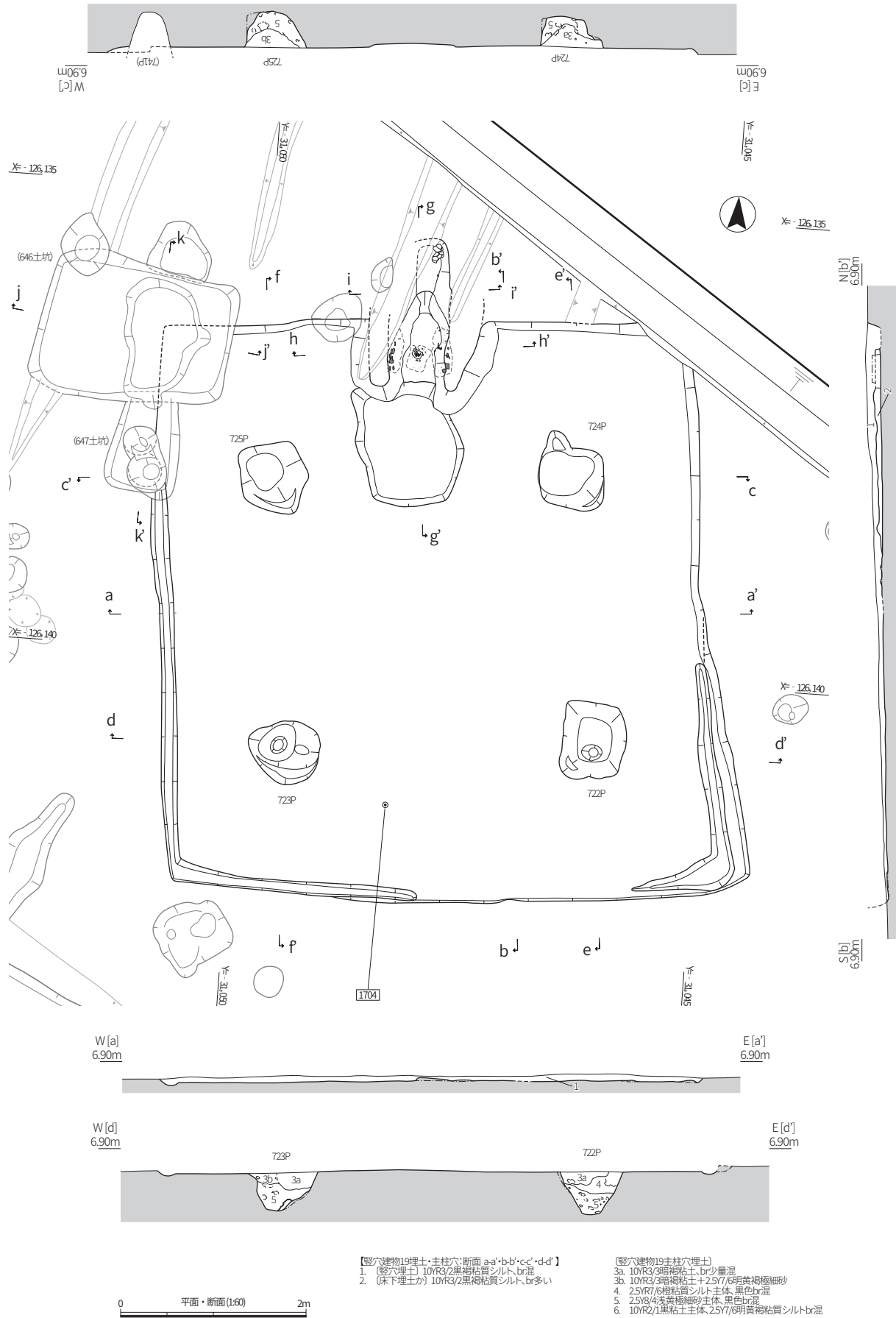


図 251. 豎穴建物 19 平面・断面 (1)



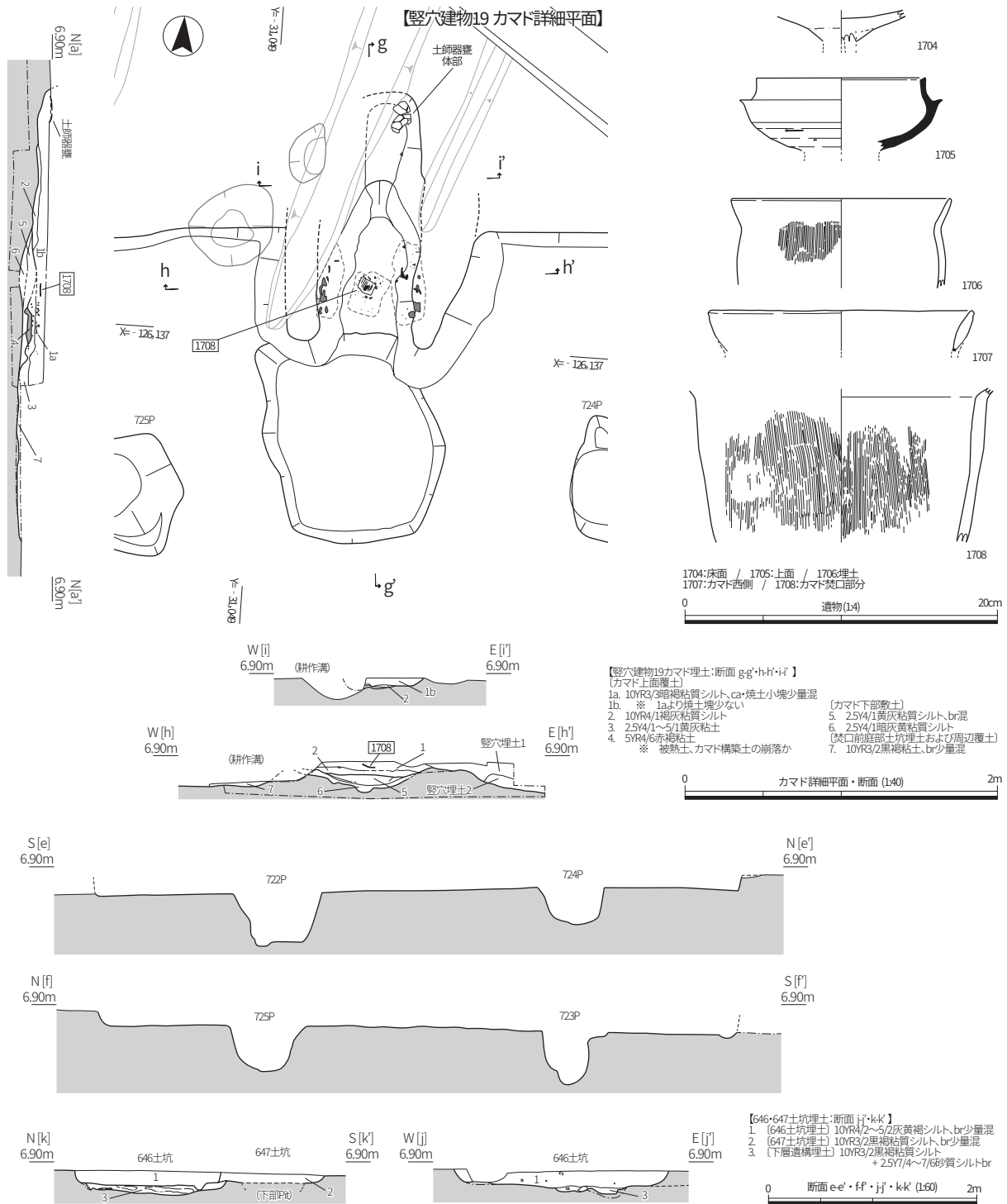


図 252. 豎穴建物 19 平面・断面 (2)・出土遺物

少ない (1704 ~ 1708)。上述した焚口部出土の甑の体部 (1708) のほかに、床面・上面・埋土から土師器の小型の高杯や甕 (1704、1706・1707)、TK23 ~ 47 型式頃の須恵器の有蓋高杯 (1705) などが出土している。このため建物の時期は、中期後葉~末葉頃に比定できる。なお細片のため図化していないが、肩部の 646・647 土坑の出土遺物は、全て建物と近い時期のものである。このことから、建物の廃絶からあまり時間がたたないうちに掘削された遺構とみることができる。

**豎穴建物 50** (図 253・254) P2 区北西端で検出された豎穴建物で、北辺は中世の 640 溝が、上面には掘立柱建物 35 が重複する。微高地 C の南東斜面地に立地しており、建物の東辺中央でカマドの痕跡

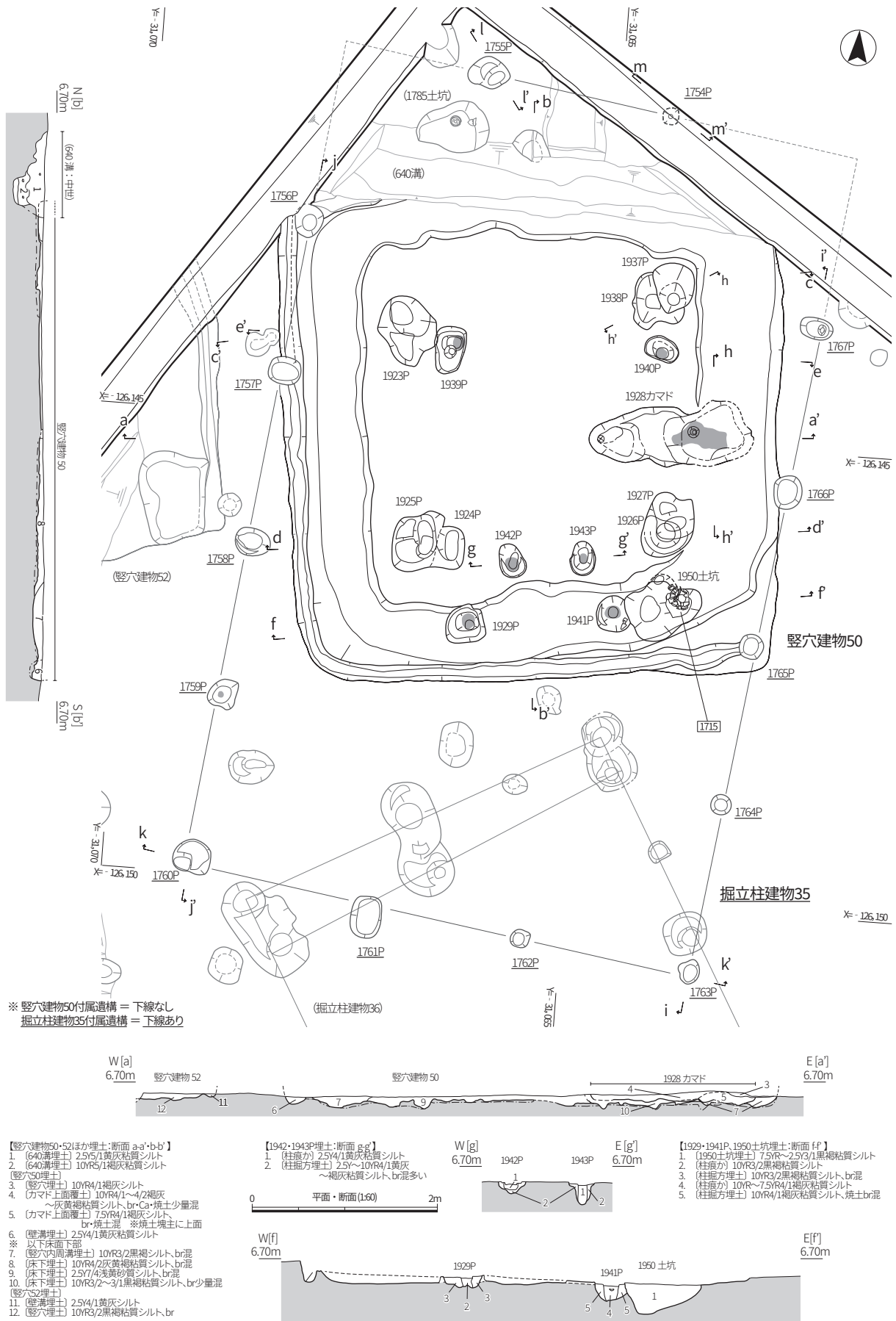


図 253. 竪穴建物 50、掘立柱建物 35 平面・断面 (1)

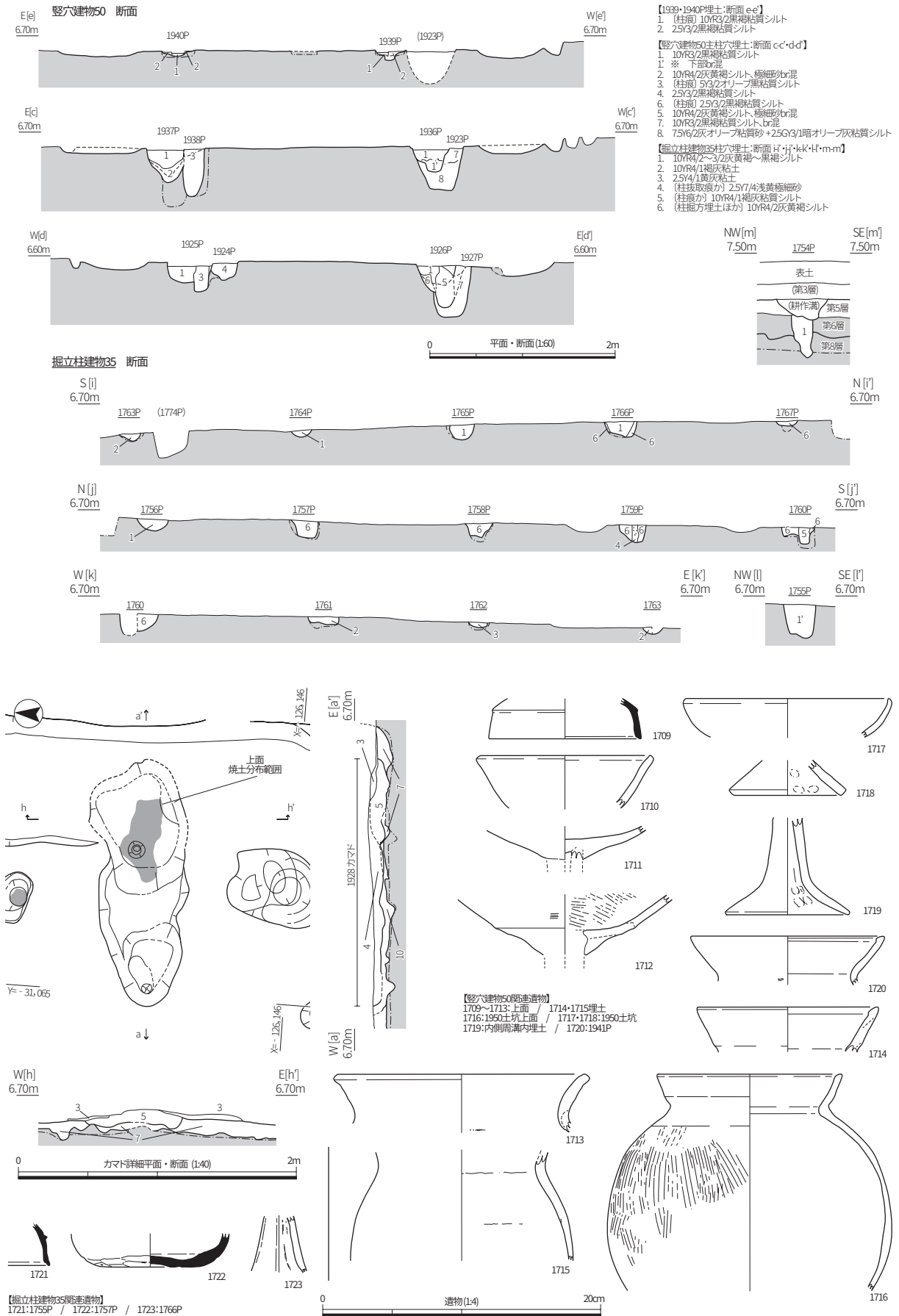


図 254. 竪穴建物 50、掘立柱建物 35 平面・断面 (2)・出土遺物

が検出された。建物の規模は、東西・南北 5.3 m、面積 28.1 m<sup>2</sup>をはかる。竪穴内には、幅 0.8 ～ 1.0 m、深さ 0.1 m 前後の口の字状の浅い溝がめぐり、建物の西壁・南壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.10 ～ 0.15 m の壁溝がめぐる。支柱穴については、同一地点にふたつの柱穴が重複している場合が多くあり、建替えがおこなわれたことを示している。こうした支柱穴は、規模は 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.22 ～ 0.57 m で、一部に断面で柱痕が確認できるものがある。

さらにこれ以外にも、1939P と 1940P、1942P と 1943P、1929P と 1941P など、位置関係や大きさから、上述した支柱穴とは異なる柱穴の組み合わせを認めることができる。特に 1939P・1940P、1942P・1943P は、検出面からの深さが 0.1 ～ 0.2 m でいずれも浅いが、断面で柱痕が確認できるため、遺構検出面の上面に現状とは異なる竪穴の掘り込が存在した可能性を考慮する必要がある。その一方で 1929P・1941P の柱穴の組み合わせは、柱間隔が狭いため支柱穴の可能性は低い。柱穴の並びや方向などから、この建物との関連は肯定してよいと思われるが、機能や性格については不明である。

南東コーナー付近には、長径 0.8 m、深さ 0.27 m の不整楕円形の土坑があり、上面からは布留形甕 (1716) が出土している。この土坑については、ほかの竪穴建物と同様の壁際の土坑と判断することができる。1928 カマドについては、カマドの構築に伴う東西 1.8 m の浅い落込みと焼土の拡がりなど、部分的なカマドの痕跡の検出に留まっている。詳細な構造は不明であるが、カマドの痕跡が現状の竪穴建物の外郭よりも内側にあるため、ややずれた位置に現状とはやや異なる外形の竪穴建物が存在した可能性が浮かび上がる。上述した 1939P・1940P・1942P・1943P の柱穴の組み合わせが、現状の竪穴の外郭のラインとはやや南側にずれた位置にあるため、カマドの痕跡は上記の柱穴と組み合う建物に伴う可能性が高い。このように柱穴のサイズや位置、柱間隔から、南寄りにやや小型の建物の存在が推定できる。建物の順序については、カマドの残存状況と柱穴の基底面の浅さからみて、小ぶりの建物が最も新しい建物と判断するのが穏当である。

出土遺物については、上面や埋土、口の字状の溝、竪穴内の土坑、柱穴などから土師器・須恵器が少量出土している (1709 ～ 1720)。全体的には土師器が多く、須恵器は図化したものでは上面出土の TK208 型式頃の杯蓋 (1709) に限られる。土師器では、高杯と甕が主体で、高杯では椀形高杯 (1717) や大型有段高杯 (1712) などがある。甕は、布留形 (1714・1716・1720) が主体で、ほかに口縁部が外反するもの (1713) もある。特に 1950 土坑上面出土の布留形甕 (1716) は、肩部が粗いタテハケで、全体的に厚手化・大型化が進行する中期の典型的な資料で、辻編年 3 段階頃に位置づけられる。そのほかの資料も概ね近い時期の所産であるため、辻編年 3 ～ 4 段階の時間幅の中で 2・3 回の建替えがなされたことがわかる。

**竪穴建物 52** (図 255) P2 区北西端で検出された逆 L 字状の落込みで、東側に隣接する竪穴建物 50 と向きが揃っている。微高地 C の南東斜面地に立地し、西半は中世の 1917 溝が重複する。さらに西側が未調査地に拡がるため、全体の形状が十分に把握できていない。現状での規模は、東西 3.2 m 以上、南北 2.0 m、深さ 0.06 m をはかる。落込みの東側肩部には、壁溝とみられる幅 0.2 m、深さ 0.04 m の溝があり、南東コーナーには長さ 1.0 m、深さ 1.4 m の隅丸長方形の 1916 土坑がある。

壁際の 1916 土坑からは、古墳時代中期の土師器・須恵器とともに製塩土器がまとまって出土している点が注目される。土器類では、須恵器無蓋高杯の破片 (1725) や土師器椀形高杯 (1724)、布留形甕の口縁 (1726) や小型の外反口縁甕 (1727) などがある。小型椀形の製塩土器 (1728 ～ 1731) は、いずれも内外面ナデオサエ整形で、1916 土坑から 28.3 g、壁溝から 4.1g が出土している。出土遺物



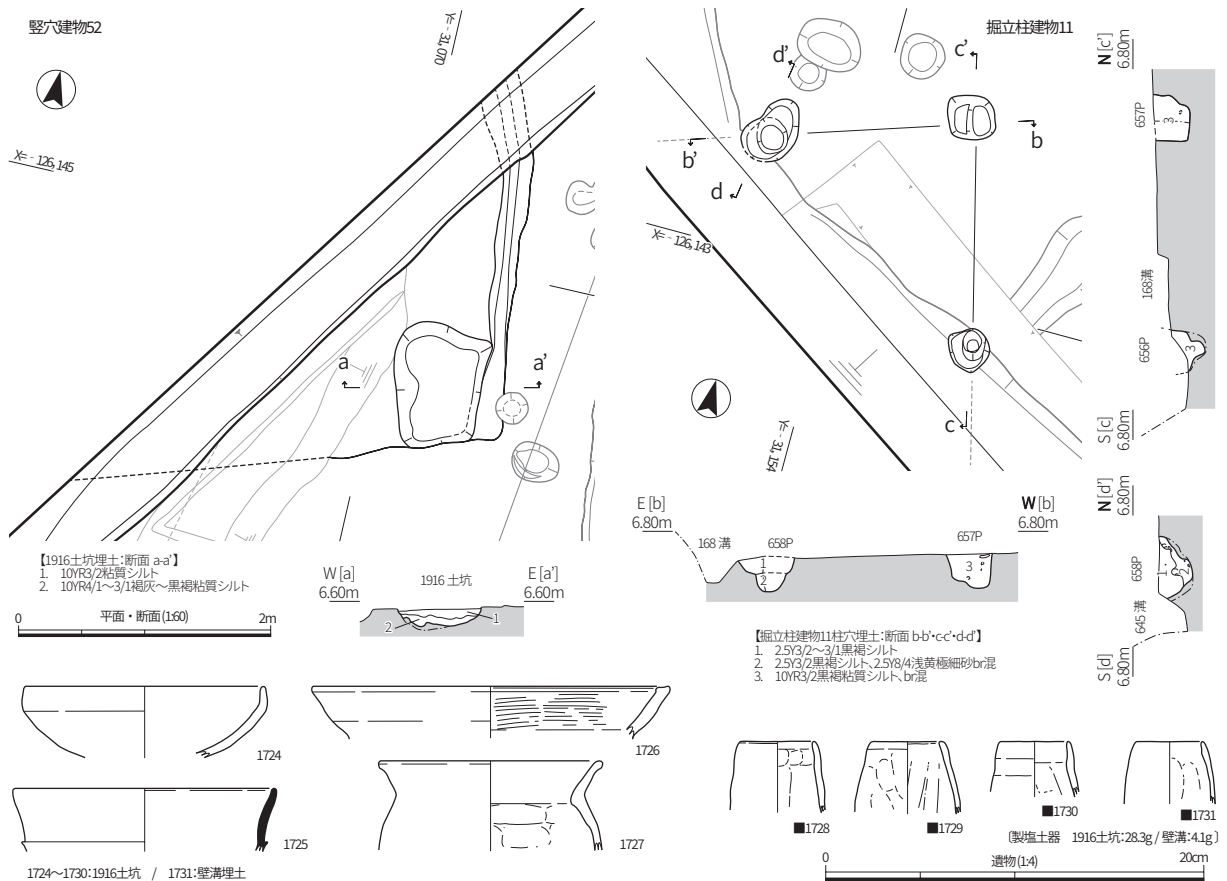


図 255. 竪穴建物 52、掘立柱建物 11 平面・断面・出土遺物

が小破片に限られるため詳細な時期比定が難しいが、TK208～23 型式頃に比定ができる。

**掘立柱建物 11** (図 255) D-2 区西半、南壁際で検出された L 字形に並ぶ 3 基の柱穴で、柱間隔が 1.7～1.8 m におさまリ、柱穴の底の高さが T.P.+6.3 m 前後で概ね揃うことから、やや根拠は弱いだが、掘立柱建物の一部と判断した。柱穴の平面形は不整円形を呈し、規模はいずれも 0.4 m である。柱穴埋土からは遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構はいずれも中期に下ることから、同様に中期に下る建物の可能性が高い。

**掘立柱建物 35** (図 253・254) P2 区北西端で検出された 5 間×3 間の掘立柱建物で、微高地 C の南東斜面地に立地する。竪穴建物 50 とほぼ重複した位置にあり、掘立柱建物 36 や中世の 640 溝と重複する。建物の規模は、南北 9.1 m、東西 5.6 m、面積 51.0 m<sup>2</sup> をはかり、建物の南北軸は 8.6° 東に傾く。柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 1.6～2.0 m におさまる。柱穴の平面形は、いずれも小型円形で、直径 0.3 m 前後のものが多い。深さは 0.10～0.23 m で、柱穴埋土は暗色の粘土～シルトでの砂質土を主体とする。断面で柱痕が確認できるものがあり、柱の太さは 0.08～0.10 m 程度に復元される。

建物の構造・規模、柱穴のサイズが古墳時代のほかの建物とは大きく異なるため、中世に下る可能性を考慮する必要がある。ただし出土遺物は、全て古墳時代の土師器・須恵器 (1721～1723) であるため古墳時代に遡る可能性が高く、時期については TK23～47 型式以降と判断できる。

**掘立柱建物 36** (図 256) P2 区の北半で検出された 2 間×2 間の掘立柱建物で、北側 3 m に竪穴建物 50 が隣接し、掘立柱建物 35 の南端が重複する。微高地 C の南東斜面縁辺部に立地しており、この建物の南側は中世以降の段造成と面的な粘土採掘によって大きく削平を受けている。また南西コーナーの柱

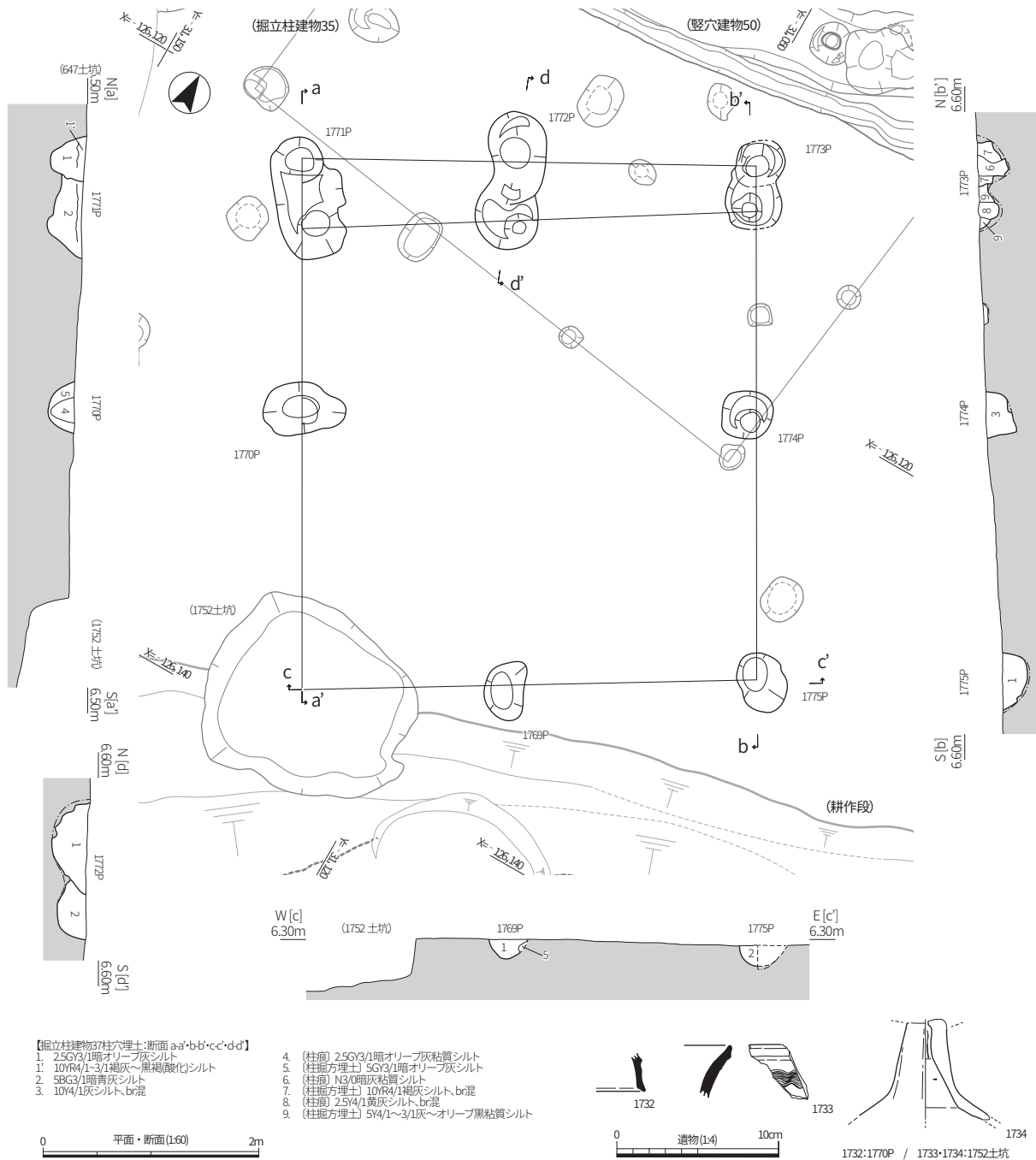


図 256. 掘立柱建物 36 平面・断面・出土遺物

穴は、時期不明の 1752 土坑と重複しており、削平を受けている。建物の北側東西筋の 3 基の柱穴(1771P・1772P・1773P) については、それぞれ 2 基の柱穴が重複しており、切り合いからはいずれも北側の柱穴が新しいことがわかる。建替えが示唆されるが、南半では明らかな再掘削の痕跡が見出せないため、部分的な修築や建物拡張の痕跡であるのか、あるいは建物全体の建替えがおこなわれたのかどうかは判断がつかない。内側の規模は、南北 4.3 m、東西 4.2 m、面積 18.1 m<sup>2</sup>をはかる。外側では南北 4.9 m、面積 20.6 m<sup>2</sup>で、建物の南北軸は 32.7°西に傾く。柱筋の通りは概ね良いが、柱間寸法は 1.6 ~ 2.4 m までややばらつきがある。柱間隔は南側が広く、一方で北半は概ね狭い。柱穴の平面形は、やや不整な楕円形を呈するものも多く、直径 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.18 ~ 0.36 m 前後のものが多い。柱穴埋土は、暗色のシルトを主体とする。北東の 1773P を除いて断面で柱痕が確認できないため、基本的に柱は抜取

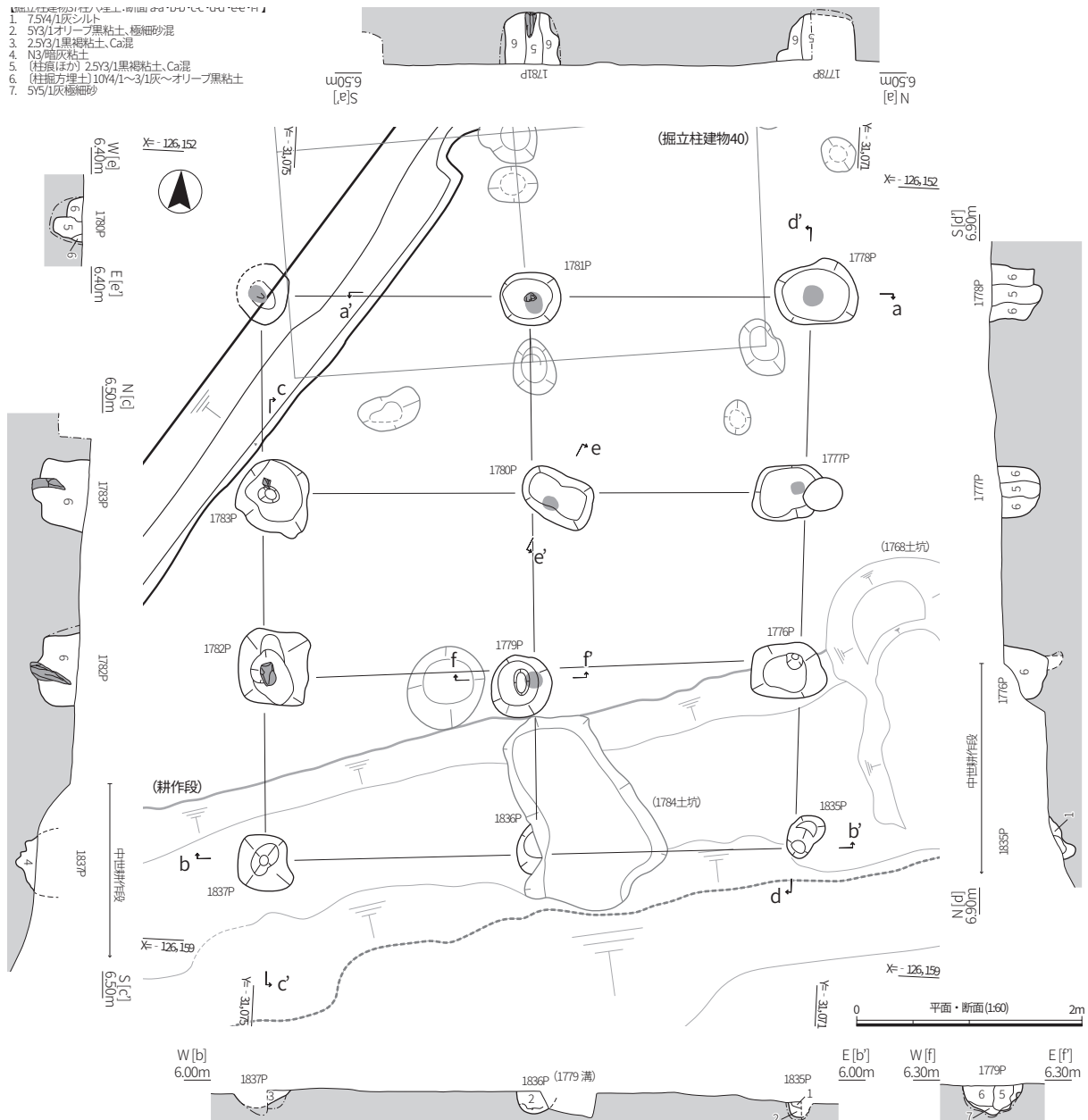


図 257. 掘立柱建物 37 平面・断面

られたと判断できる。北東 1773P では、柱根から柱の太さは 0.15 m 程度に復元される。

1772P 以外の柱穴では、埋土から土師器・須恵器の細片が数点ずつ出土している。土師器の壺・甕の体部片が多いが、須恵器の杯や甕類の破片があり、1770P から出土した TK23 ~ 47 型式頃の杯蓋 (1732) を図化した。それ以外では、重複する 1752 土坑埋土から TK23 ~ MT15 型式頃の壺口縁部 (1733) や土師器高杯脚部 (1734) などが出土しており、関連する遺物の可能性もある。建物の詳細な時期比定は難しいが、TK23 ~ 47 型式以降であることは確実で、中期末葉 ~ 後期初頭頃に存続した可能性が推測される。

**掘立柱建物 37** (図 257) P2 区の中央西側で検出された 2 間 × 3 間の総柱建物で、建物の北辺が掘立柱建物 40 と部分的に重複する。微高地 C の南東斜面縁辺部に立地しており、ほかの建物に比べて地形の傾斜がやや急な斜面下方に立地する点が特徴である。建物の南端裾部は、中世以降の段造成によって大幅に地下げされており、南側 1 間分は上面が大幅に削平されている。ただし柱穴の基底部分が辛うじて

残存しており、建物の詳細な構造を把握することができた。

建物の規模は、南北 5.0 m、東西 4.7 m、面積 23.5 m<sup>2</sup>をはかり、建物の南北軸は 2.8°西に傾く。柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は南北が 1.5～1.8 m、東西が 2.3～2.5 mにおさまる。柱穴の平面形は、不整な円形または隅丸方形を呈するものが多く、規模は 0.5～0.7 mをはかる。深さは、上面の削平により一定しないが、最大の 1783P では深さ 0.51 mをはかる。柱穴底面の標高は、地形の傾斜に沿って下方側が僅かに低い。北辺中央の 1781P と西辺中間の 1782P・1783P では、柱根が残存していた。そのほかの柱穴も断面で柱痕が確認できるものが多く、柱の太さは 0.2 m前後に復元される。柱根については、比較的残りの良い 1781P と 1782P の柱根を図化しており (W15・W16)、1782P の柱痕 (W16) は、長さ 40.1 cm、径 12.8 cmをはかる。いずれも底部に加工痕があり、底面は平滑に整えられている。

出土遺物は、1776P・1777P・1779P・1780P・1783P の埋土から土師器・須恵器の細片が数点ずつ出土している。このうち図化できた遺物は、1777P 出土の土師器高杯脚部 (1735) のみであるが、須恵器には内面ナデ消しの甕の体部片があり、やや古手の様相を示す。出土遺物がごく僅かなため建物の詳細な時期比定は難しいが、TK208～23 型式前後に位置づけるのが穏当で、北東の掘立柱建物 36 に先行する可能性が高い。倉庫と考えられる構造がしっかりとした総柱建物であるため、古墳時代中期の集落景観を復元する上でも重要な遺構のひとつといえる。

**掘立柱建物 40** (図 258) P2 区の中央西壁沿いで検出された 2 間×3 間以上の掘立柱建物で、建物の北西側は調査区外に広がる。微高地 C の南東斜面縁辺部に立地しており、建物の南辺が上述した掘立柱建物 37 と部分的に重複している。現状での建物の規模は、南北 4.3 m以上、東西 4.2 m以上をはかり、建物の南北軸は 6.9°西に傾く。また、このまま 2 間×2 間の構造と仮定した場合、面積は 18.1 m<sup>2</sup>に復元される。柱筋の通りは概ね良く、柱間寸法は 2.1～2.2 mにおさまる。柱穴の平面形は、不整円形を呈するものが多く、径 0.4～0.5 m前後のやや小ぶりなものが多い。検出面からの深さは、斜面に位置するため 0.24～0.41 mまでややばらつきがみられる。埋土は、オリーブ黒色の粘質シルトを主体とする。1830P と 1833P では断面で柱痕が確認でき、柱の太さは 0.12 m前後に復元できる。

出土遺物は、1830P の埋土から土師器の細片が 5 点出土している。甕の体部片などがみられるが、遺物が少ないため詳細は不明である。時期については、周辺の建物と同様に中期の建物とみるのが妥当である。やや根拠は弱いですが、重複する掘立柱建物 37 より後出する中期後葉～末葉頃と推測しておきたい。

**648 井戸** (図 259) D-2 区の東端で検出された井戸で、竪穴建物 19 から南東 15 mに位置する。周辺は遺構が希薄なため、居住域からやや離れた微高地 C の東側斜面の縁辺部に立地していることがわかる。検出面での形状は隅丸方形で、規模は南北 1.0 m、東西 0.8 mをはかる。断面形状は、下半 3 分の 1 が筒状に落込み、上半はやや開き気味に立ち上がる。検出面から底面までの深さは、1.07 mをはかる。この井戸の周辺は、第 6 層の分厚い堆積がみられるが、古墳時代中期の遺構は第 6 層中から掘り込む事例も多い点をふまえると、本来は開口部がより広がる形状であった可能性が推測される。埋土は、上層〔埋土 1・2〕と下層〔埋土 3・4〕に大別できる。上層埋土〔1・2〕は、ブロック混じりの暗灰色系の粘質シルトを主体とするため、人為的埋戻し土の可能性がある。その一方で下層〔埋土 3・4〕は、暗色の泥質土を主体とするため、滞水層と判断できる。〔埋土 2〕からは、土師器甕の上半部 (1736) が出土し、〔埋土 3〕と〔埋土 4〕の層境付近からは、ほぼ完形の (1739) を含む土師器甕 3 点がまとまって出土した。完形の甕 (1739) が底面から 0.18 m上方で出土し、この甕の上面からは甕 2 個体分 (1737・1738) が破片の状態で出土している。特に最下部の甕 (1739) は、口縁部が打欠きされており、上方



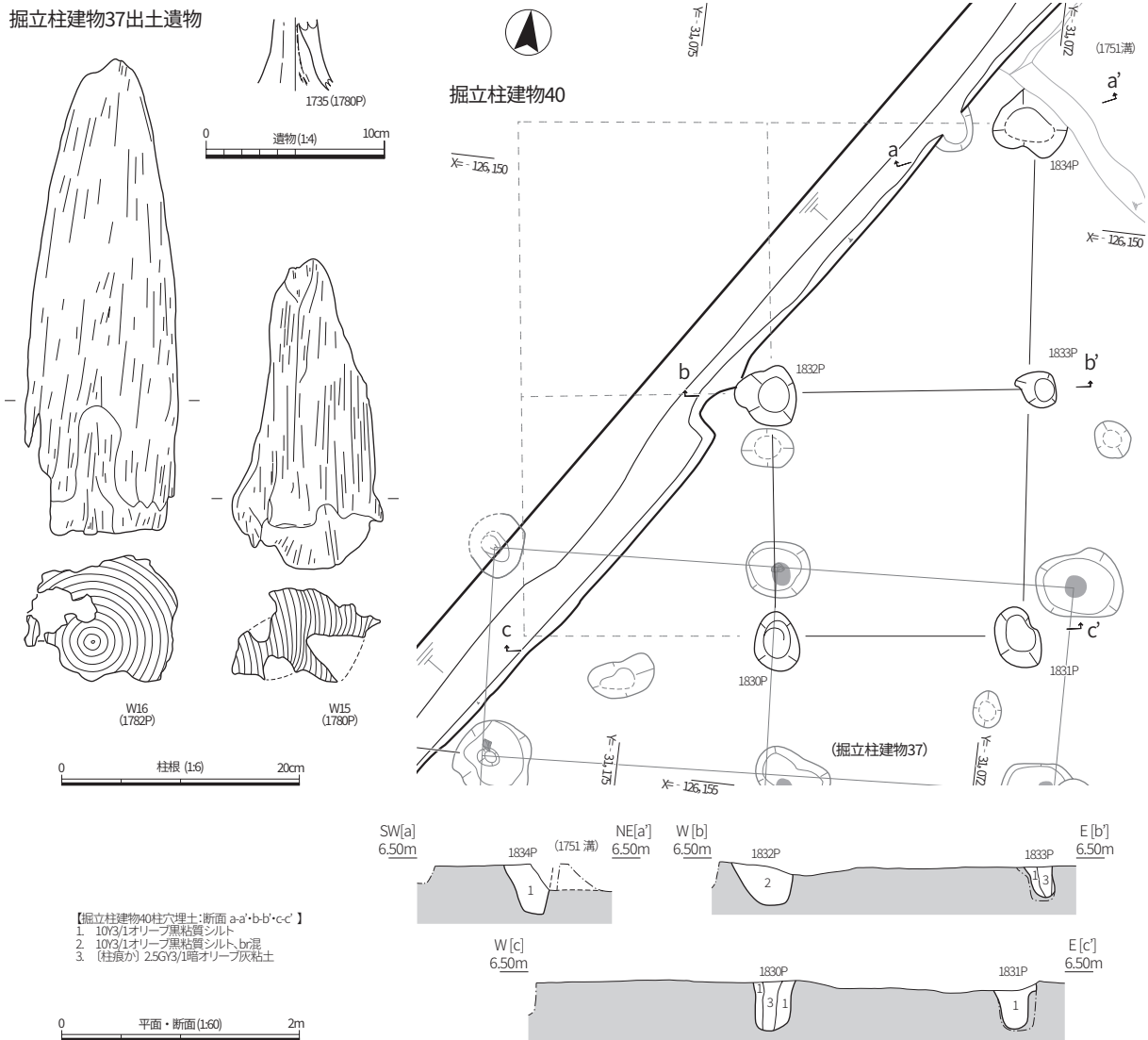


図 258. 掘立柱建物 40 平面・断面、掘立柱建物 37 出土遺物・柱根

の甕 2 点も意図的に破碎を受けた上で投棄されたと判断できる。土器下部の〔埋土 4〕は、初期の機能時堆積層と認識できる。

出土遺物は、上記の土師器甕 4 点に限られる。上層出土の甕 (1736) は、口縁部から肩部の破片で布留形甕の範疇で理解ができる。内面のヘラケズリが残るが、接合部が明瞭に残り、体部が大型化している。下層の甕のうち完形甕上面の 2 点の甕 (1737・1738) は、いずれも中型の布留形甕で、内面にケズリが残るが肩部のヨコハケはない。東側の (1737) は、やや薄手の作りで布留形甕の規範が比較的良く残るのに対し、西側の甕 (1738) は長胴化・厚手化が進行しており、規範が大きく崩れている。また東側の甕 (1737) は、体部中央の 4 分の 1 程度の範囲が欠損し、西側の甕 (1738) は破片が明らかに少ない。下部の完形の甕 (1739) は、小型品で口縁部の 3 分の 1 程度が打欠きされている。口縁部が直立気味にのび、布留形甕の名残を残す変容甕と認識できる。甕以外の器種がないため時期比定がやや難しいが、TK73～216 型式に併行する辻編年 3 段階に比定ができる。西側に古墳時代中期の居住域が展開しており、それに伴う微高地縁辺部の井戸と認識できるが、多くの建物はこの井戸より後出するため、集落中での井戸の性格を考える上で重要な所見となるだろう。

**688 溝・667 土坑ほか** (図 260) 688 溝は、D-2 区西端で検出された南北方向の溝で、検出長 9.5 m、

第4章 遺構・遺物

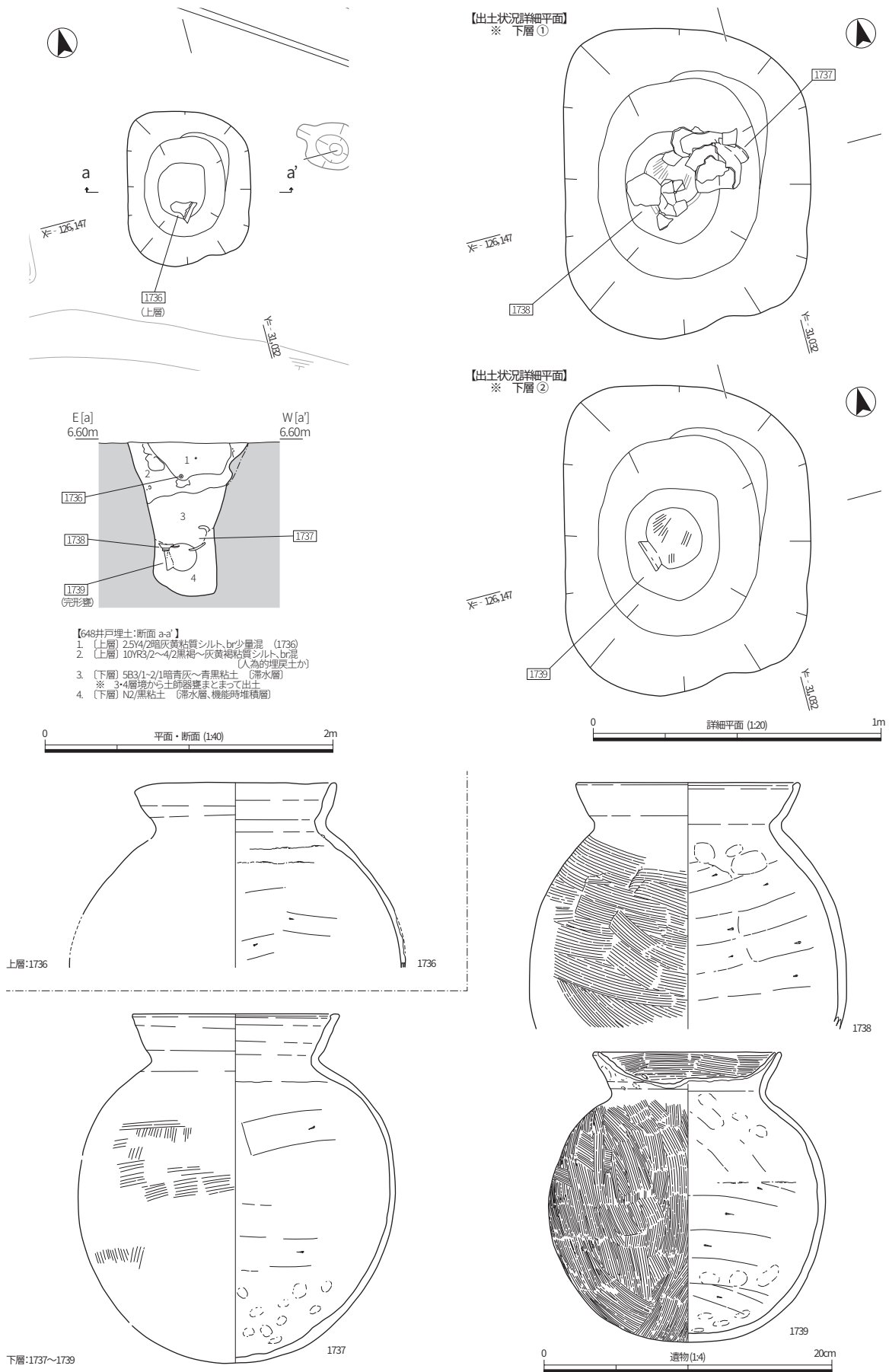


図 259. 648 井戸 平面・断面・出土遺物

幅 0.3～0.5 mをはかる。深さは 0.08 mで、埋土は極細砂混じりの黒褐シルトを主体とする。北側で重複する 645 溝とは方向が異なり、南側には不定形の 667 土坑が重複する。埋土からは、TK208～TK47 型式頃の須恵器の甕 (1740) などが出土した。この溝と重複する 667 土坑は、長さ 1.2 m、幅 0.9 m、深さ 0.13 mをはかり、埋土は 668 溝と同様に極細砂混じりの黒褐シルトを主体とする。上面から TK47～MT15 型式頃の須恵器杯身 (1741) が出土した。

このほかに周辺では、667 土坑と類似する浅い土坑や柱穴が多く検出されているが、建物の復元には至っていない。667 土坑の南東に近接する 680P からは、TK208 型式頃の須恵器壺の口縁 (1742) や土師器の布留系甕 (1743) などが出土し、そこから南に位置する 685P からは、TK47 型式頃の須恵器短脚高杯 (1744) や土師器のハケ甕 (1745) が出土している。北東のやや離れた位置にある 727 土坑からは、須恵器の体部片が内面を内に向けた状態でまとまって出土しており、出土状況から意図的に破碎された上で埋納されたと判断できる。

D-2 区西端は、上面の削平を大幅に受けている地点であることから、ほとんどの遺構は本来の形状を留めていない。遺構から遺物が一定量出土する点や、周囲の斜面地で竪穴建物がまとまって検出されている点を鑑みると、十分な復元には至っていないが、この付近に中期後葉～後期初頭頃の建物遺構がいくつか存在した可能性が高く、このことは集落景観を復元する上で重要な所見である。

**695 焼土坑** (図 260) D-2 区西端で検出された隅丸方形の土坑で、688 溝の西 1 m に隣接する。規模は、東西 0.59 m、南北 0.54 m、深さ 0.20 mをはかる。埋土は、ブロック混じりの灰白極細砂を主体とし、底面が広範囲に赤変・硬化していた。時期については、出土遺物がないため不明であるが、周辺での遺構の検出状況から古墳時代に遡る可能性があるが、その根拠はやや弱い。また、なんらかの焼成を目的とした遺構であることは間違いないが、詳細については不明である。

**711・712・713 焼土坑** (図 261) D-2 区西端で検出された円形または楕円形の小型の土坑である。695 土坑と同様に、いずれも底部に被熱による赤変・硬化面が確認されたが、上述した 695 焼土坑に比べると、底面の被熱が弱く、平面形もそれほど整ったものではない。規模については、ひとまわり大きい楕円形の 711 焼土坑が長径 0.9 mをはかり、ほかの小規模なピット状の 712・713 焼土坑はいずれも径 0.4 mをはかる。検出面からの深さは 0.22 m前後で、埋土は極細砂混じりの黒褐シルトを主体とする。711 焼土坑の埋土からは、土師器の細片が数点出土しているが、時期の特定には至らなかった。古墳時代の遺構であるか、あるいは 695 焼土坑と関連する遺構であるか、まったくもって不明であり、遺構の機能や性格を含めて検討を要する。

**1785 土坑** (図 261) P2 区北西コーナー付近に位置し、南半が重複する中世の 640 溝によって部分的な削平を受けている。残存する規模は、東西 0.8 m、南北 0.6 m以上、検出面からの深さ 0.44 mをはかる。埋土は褐灰シルトを主体とし、埋土上半から TK47 型式頃の須恵器杯蓋 (1747) と有蓋高杯 (1748)、土師器甕 (1749) がまとまって出土した。出土遺物からは、隣接する位置にある竪穴建物 50 よりも後出する時期の遺構のため、現状では直接的な関わりは想定しがたい。

**包含層ほか出土遺物** (図 261) 微高地 C の南東斜面側は、C-5 区東半～D-2 区西半、C-1 区～C-2 区北端が標高が高く、上面が大きく削平されているため、包含層は残っていない。その一方で南東側が緩斜面地になっており、低地部にむかって徐々に包含層が厚くなることから、遺物の出土量が一定量ある (1750～1759、S41、M28)。ここまで報告したように、微高地 C の南東斜面地の遺構は、中期～後期初頭頃にほぼ限定されるため、包含層出土遺物も大半が中期以降のものである。そのため古式土師器に

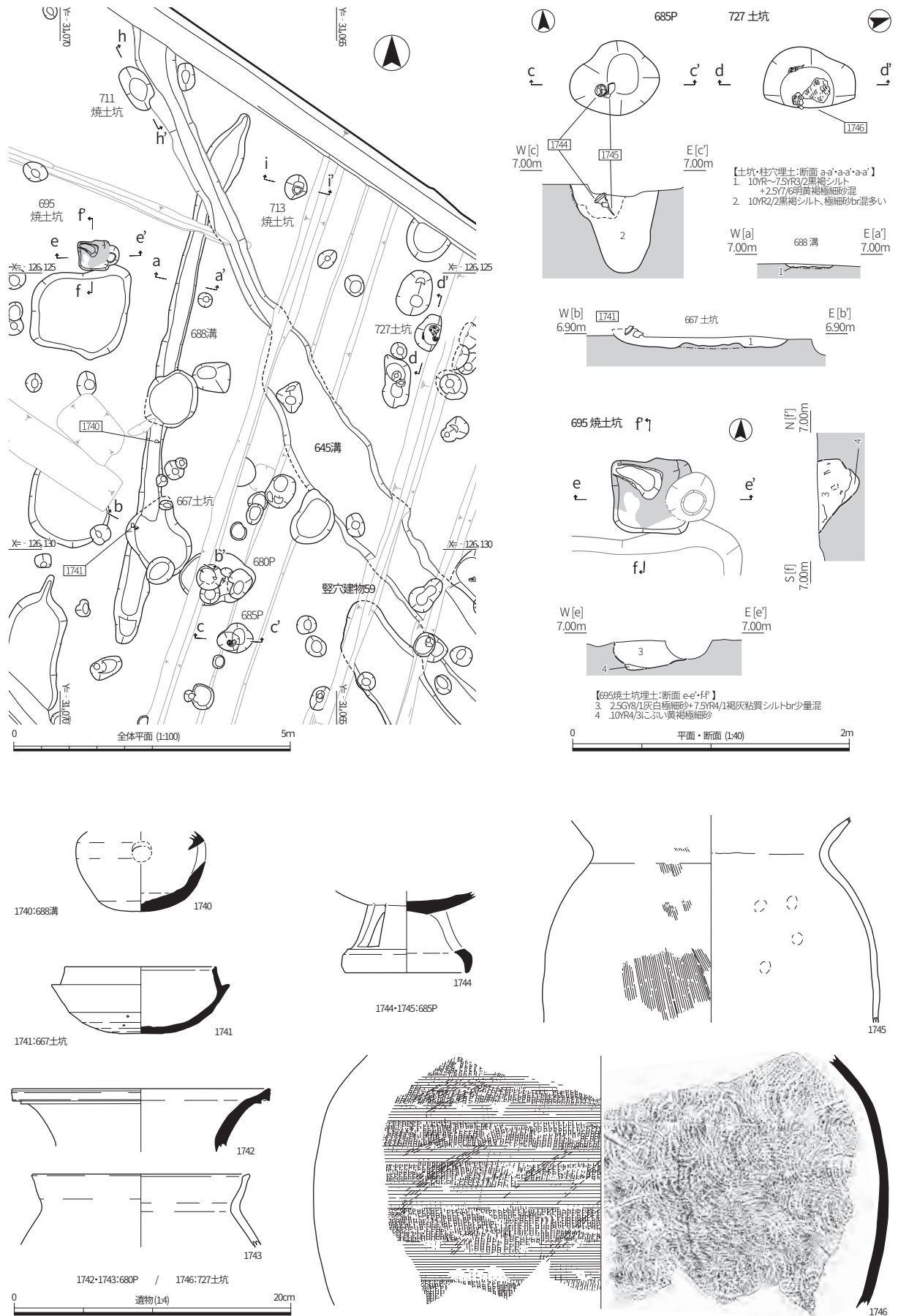


图 260. D-2 区西端遺構群 平面・断面・出土遺物



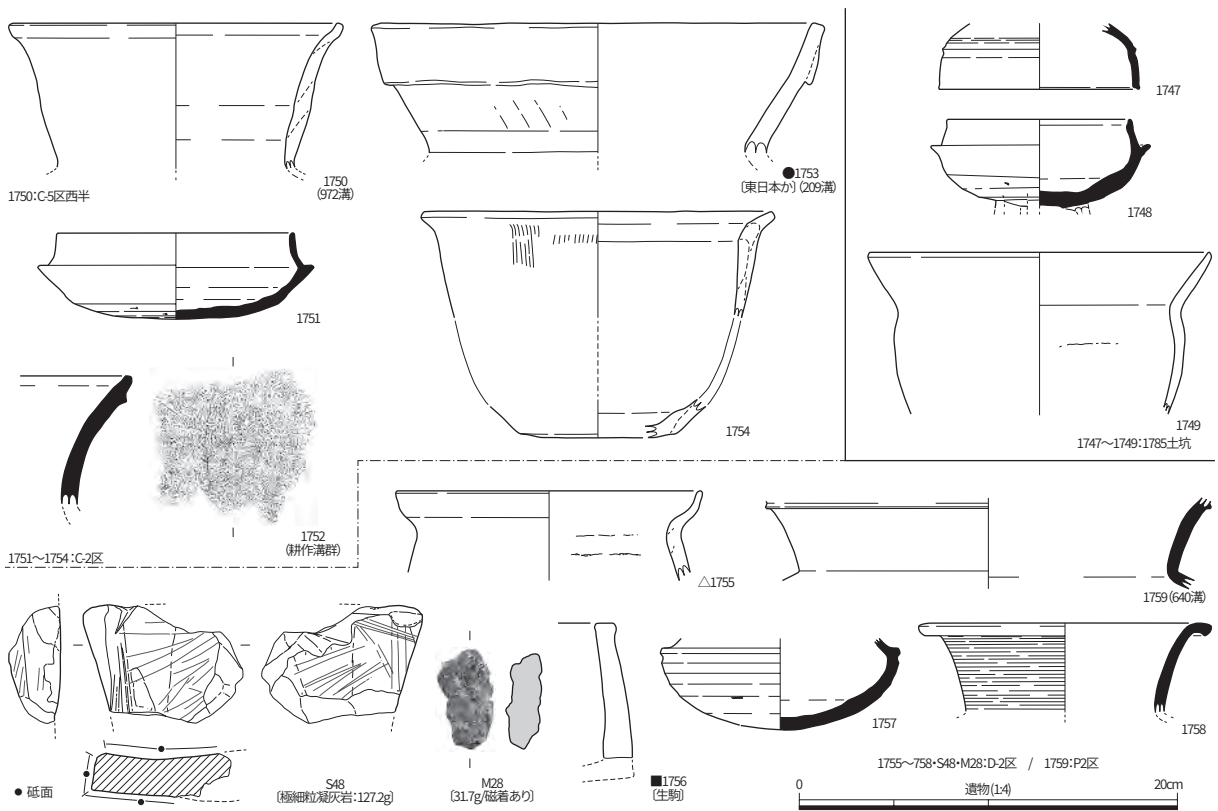
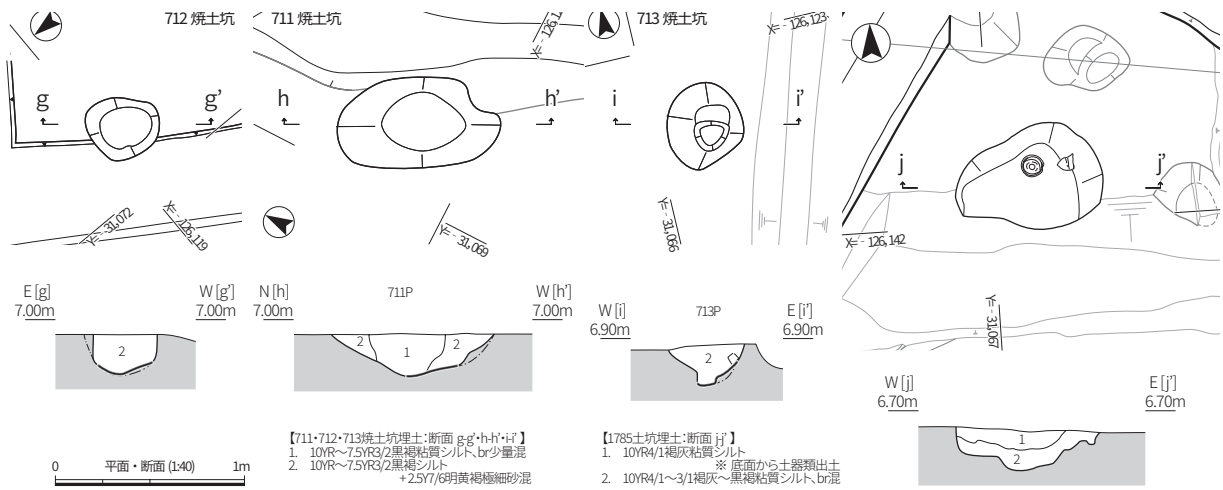


図 261. C-2 区西半遺構群 平面・断面・出土遺物、微高地 C 東半包含層ほか出土遺物

については、東日本系の広口壺 (1753) や甕 (1755)、生駒西麓産の大型複合口縁壺 (1756) などに限られる。東日本系の広口壺 (1753) に関しては、駿河の大廓式などが候補にあげられ、胎土に特徴的な白色粒があり、これについては「パミス」(火山灰) の可能性がある<sup>48)</sup>。確証は得られていないが、この推定が正しいのであれば、今回の調査の出土遺物の中では最も東の地域からの搬入品であり、重要な遺物のひとつといえる。

中期以降の遺物は、中期中葉 (TK208 型式) 以降の遺物が大半であることから、特徴的な遺物は少ない。そのため遺物の出土量は一定量あるが、特徴的なものを中心に抽出・図化している。この中で土師器の大型直口壺 (1750) は、端部の調整や胎土から辻編年 3 段階以降に下る可能性が高く、中期以降組成から離脱する大型直口壺としては最終段階の資料と認識できる。ほかでは、外面ハケ調整の小型平底鉢

(1754)も今回の調査では出土数が少ない器種のひとつである。須恵器については、相対的に古手の資料を中心に図化した(1752・1757・1759)、その一方でTK10型式頃の杯身(1751)は今回の調査で出土した遺物の中で最も新しい遺物のひとつであり、居住域の廃絶時期を考える上で重要である。土器以外では、凝灰岩製の砥石(S48)や鉄滓(M28)などがあり、同区では鍛冶との関連が推測される炉跡なども検出されていることから、これらも中期の遺物とみなして大過はない。

#### 〔c. 微高地C東側低地部：D-1区〕

中央エリア東端は、D-2区からD-1区にかけて地形が大きく落ち込むことが確認されているが、D-1区の範囲に相当する低地部は、ほぼ全面が中世の粘土採掘等に伴う地下げによって基盤層にあたる第8層が深く掘り下げられていた。D-1区については、地形の下がりを確認する目的で設定した調査区であったため、結果として谷部の状況が明確にできなかった点が惜しまれるが、D-1区の東端で僅かに第8層の掘下げが免れた範囲があり、その部分で南北方向の古墳時代の625水路の遺物が検出された。

**625水路**(図262) 幅3.5mをはかる南北方向の水路で、調査では南北4.0m分を検出した。東側肩部および南半は近世の水路が重複しており、本来の幅はやや広いことがわかる。底部は、幅1m程度の並行する2条の溝にわかれており、検出深さは西側が0.62m、東側が5.79mで、僅かに西側が深い。

底部の2条の溝は、堆積状況から西側が先に埋没し、そのうち東側が埋没したことが確実である。ただし東側の溝に関しては、何度かにわたって再掘削されていることから、東側の〔埋土7〕と西側の〔埋土9・10〕などは同時期に堆積した可能性も想定できる。埋土の詳細については、東側の溝に伴う〔埋土2～7〕はいずれも極細砂～細砂を主体とし、ラミナが顕著にみられることから恒常的な流水があったことがうかがえる。その一方で西側の先行する溝の〔埋土8～10〕は、特に下部が泥質な粘土を主体としており、滞水状態で徐々に埋没したことがわかる。

以上みてきたように、水路下部の並行する2条の溝の関係性については、新旧の関係があり、浚渫等によって再掘削された可能性と、埋土から機能の異なるふたつの溝が同時に併存していた可能性の、ふたつの解釈を想定することができる。遺構が検出された範囲が狭いため、どちらの解釈が妥当であるのか判断する材料に欠けるが、東西で堆積状況が大きく異なっている点をふまえると、異なる機能をもつ溝が併存する可能性がやや高いように思われる。そのように理解した場合、東側は恒常的に流す用排水路で、西側は一時的に水を引き込む際の水路と理解することができるだろう。なお625水路の西側には、幅の狭い浅い626溝が並行してのびており、関連する遺構と認識できる。

埋土から出土した遺物については、大半が古墳時代中期の土師器と須恵器で、新しい時期の遺物を含まないことから、この水路が古墳時代の遺構であることは確実である(1760～1766、S47)。出土遺物には、古式土師器の細片もあるため、溝の掘削時期が前期に遡る可能性があるが、図化できるような遺物はいずれも辻編年3段階頃の土師器やTK208型式頃の須恵器などであることから、溝の掘削時期は中期に下る可能性が高い。

#### (4). 東側エリア

E-2区およびP14区の北半では、竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、井戸1基が確認された(図263)。西側エリアや中央エリアと比べて遺構は明らかに希薄で、出土遺物も格段に少ない。また出土遺物は、古墳時代初頭と中期前葉～中葉に限定される。南端のE-2区では、古墳時代の遺物が僅かに出土したが、

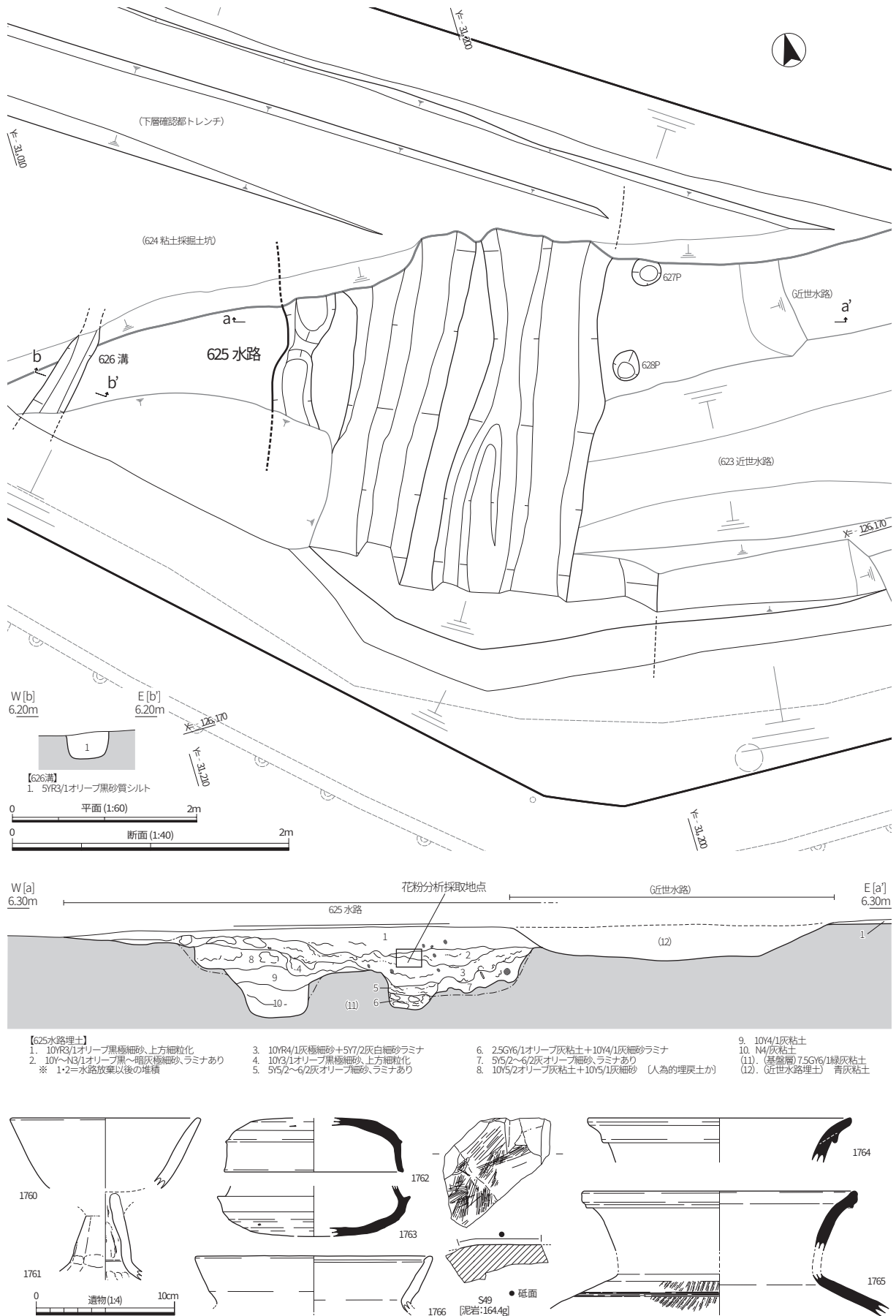


図 262. 625 水路 平面・断面・出土遺物

遺構は検出されていない。

周辺の地形については、西側が谷状に深く下がっており、中央エリアの微高地Cとは分断されている。市道上牧401号線を挟んだ東側は、遺跡の範囲外であるが、事前の試掘調査で東にむかって地形が下がることが明らかとなっている。さらに周辺の現状微地形から判断する限り、北から南にむかって微高地Dがのびており、今回の調査区は微高地の先端部から縁辺部という理解が可能である。ここまで述べてきたように、西側エリアや中央エリアでは古墳時代の遺構・遺物が豊富に検出されているが、地形的には独立しているため、別の居住域と認識することも可能である。

なお上述したように、検出された遺構は、古墳時代初頭と中期の2時期に明確に区別ができるため、[a. 中期] → [b. 初頭～前期] の順で各遺構を報告することとしたい。

### 〔a. 古墳時代中期〕

**掘立柱建物 12** (図 264・265) E-2 区中央西寄りで検出された掘立柱建物で、西 5 m に 790 井戸が位置する。調査区南壁で東西方向の中間の柱穴が確認できないことから、南側は調査区外に 1 間分以上のびることが確実で、東西 2 間×南北 3 間以上の構造に復元できる。規模は、東西 3.8 m、南北 4.3 m 以上をはかり、建物の南北軸は 17.95° 東に傾く。柱筋の通りは概ね良いが、東側南北筋がやや通りが悪い。柱間寸法は、1.7～2.5 m まで幅があるが、南北筋の中間の柱間隔 (799 P -801 P、795 P -794 P 間) がやや幅広で、それ以外は 1.8 m 前後におさまる。柱穴の平面形は、いずれも隅丸方形を呈し、規模は 0.5～0.6 m である。検出面からの深さは 0.26～0.44 m で、断面から判断する限り柱は抜き取られてた可能性が高い。

794P・795P・798P の埋土からは、土師器の細片が少量出土している。この中には、V 様式系タタキ甕の体部片などの古式土師器の破片も含まれるが、中期前葉頃の土師器杯 (1774) が出土しており、建物の時期は辻編年 3～4 段階頃に比定するのが穏当である。

**(掘立柱建物 44)** (図 264・265) E-2 区中央西寄りに位置し、西側が掘立柱建物 12 と一部重複する。調査時は、建物遺構として認識していなかったが、793P・808P・810P・811P の 4 本の柱並びが良く、柱穴の深さが 0.55～0.60 m でほぼ揃うことから、整理作業の過程で竪穴建物を構成する支柱穴と判断するに至った。建物の規模については、柱間隔が 1.9～2.4 m であるため、一辺 4.5～5.0 m 程度に復元できるだろう。

793P 埋土から土師器椀形高杯の破片が出土したが、細片のため図化できなかった。ほかでは、808P 肩部付近から全形が復元できる土師器杯 (1775) が出土しており、床面に伴う可能性がある。土師器杯は、それほど多く出土する器種ではないため時期は明確でないが、おおよそ中期前葉頃と推測される。また、隣接する掘立柱建物 12 の 794P から同様の土師器杯が出土しているが、前後関係は不明である。なお 810P・811P の東に隣接する位置にある 800 被熱面・807 焼土坑・804 土坑は、この建物の壁際付近に位置することになる。直接関連する遺構であるかは検討を要するが、鍛冶関連の遺構と推測されるため、この建物に伴うものであるならば建物の性格を考える上で重要である。

**800 被熱面・807 焼土坑・804 土坑** (図 264・265) 掘立柱建物 12 の東側南北筋上および、掘立柱建物 44 の西端付近に位置し、検出状況からこれらの建物と関連する遺構と認識できる。南北 0.7 m、東西 0.4 m の範囲に赤変する 800 被熱面があり、それに隣接して埋土が細かい赤色焼土のブロックで充填された 807 焼土坑が検出された。さらに埋土には炭化物が含まれ、土師器 (1771・1772) や製塩土器 (1773)



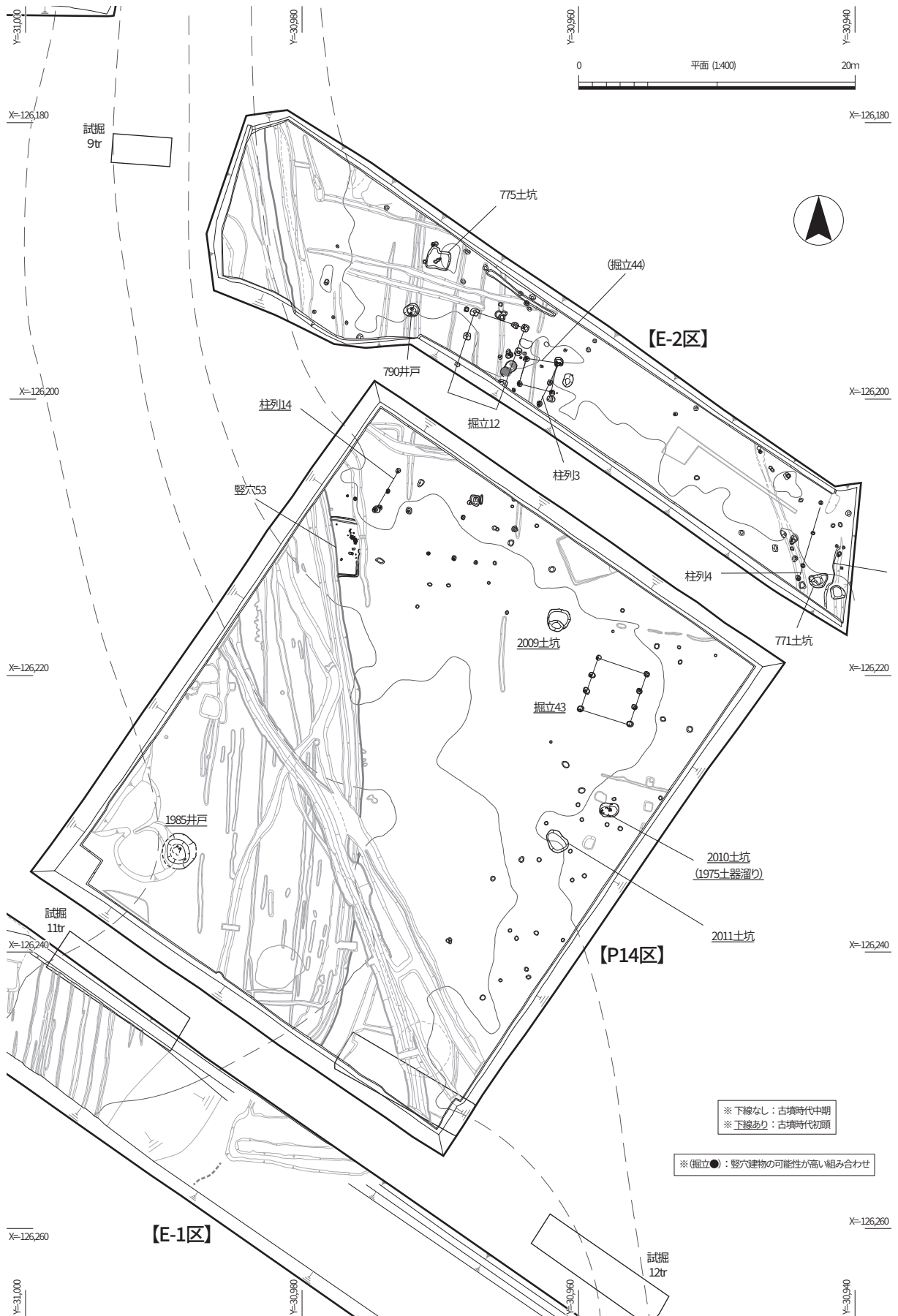


図 263. 東側エリア 古墳時代遺構 全体平面図

第4章 遺構・遺物

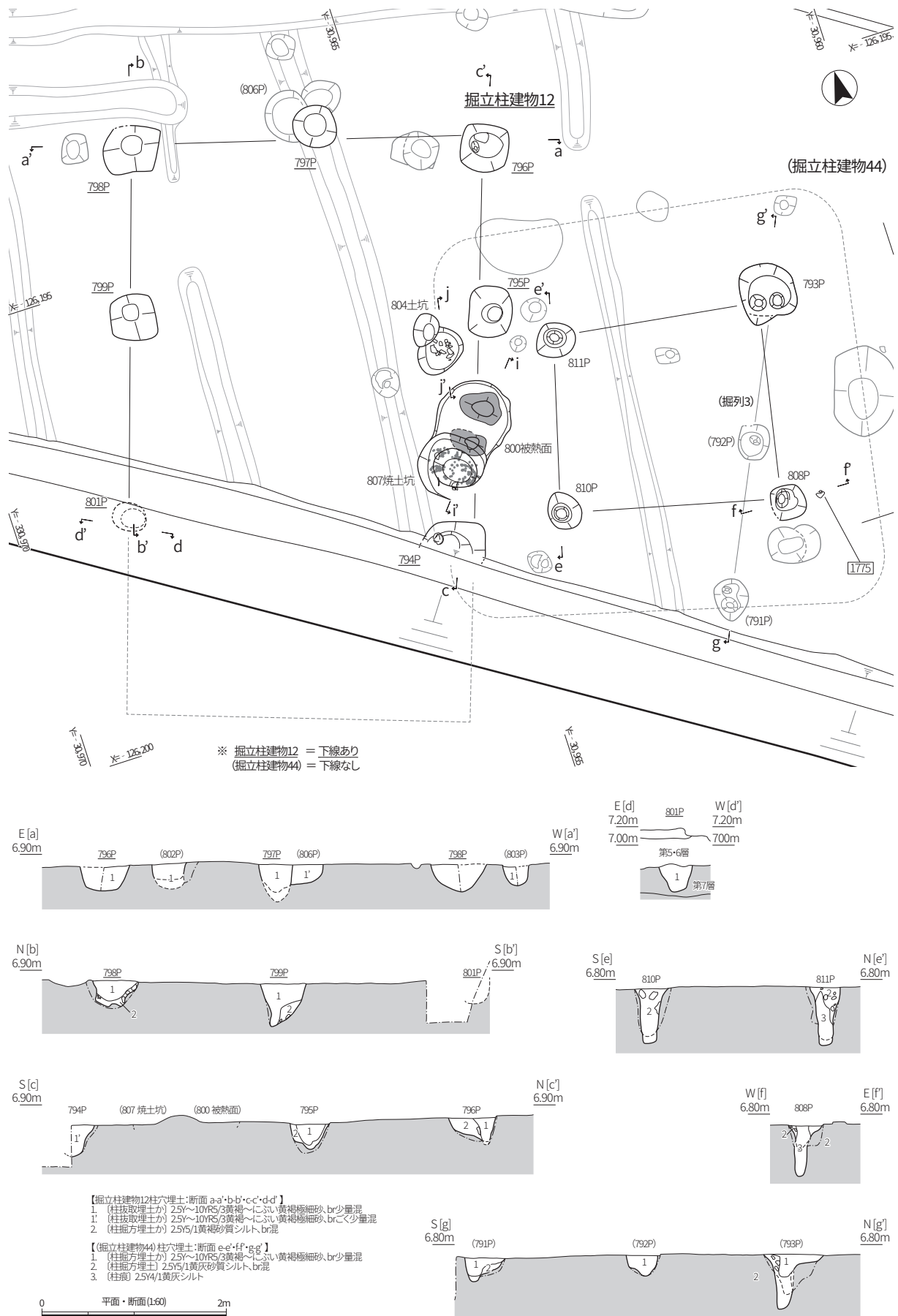


図 264. 掘立柱建物 12・44 ほか 平面・断面

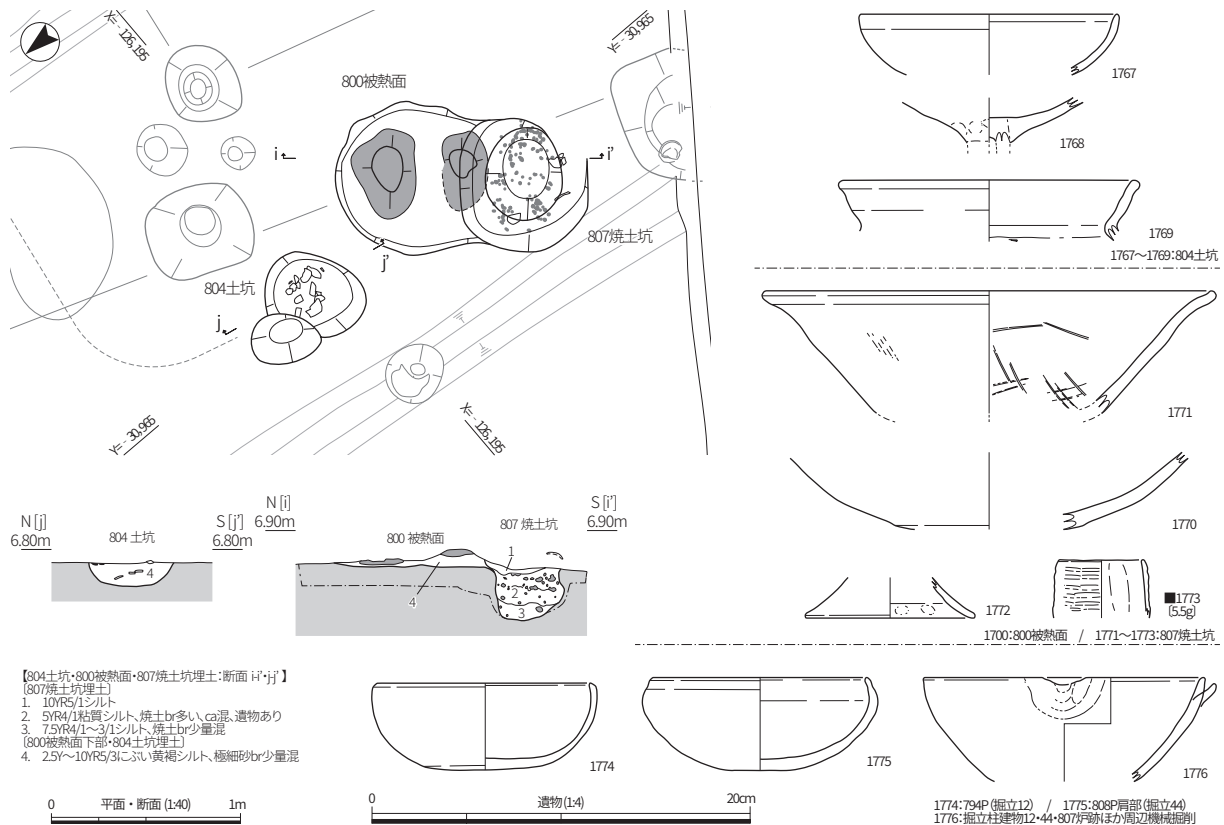


図 265. 800 被熱面・807 焼土坑・804 土坑ほか 平面・断面・出土遺物

の破片なども出土している。具体的な状況はよくわからないが、火を伴う作業場遺構であることは明らかであり、遺構の性格としては鍛冶炉の可能性が推測される。時期については、被熱面と直上から出土した土師器大型有段高杯 (1770) も含め、いずれも辻編年3段階頃に比定できる。隣接する804土坑については、径0.5m、深さ0.13mをはかり、同時期の土師器片 (1767~1769) がまとまって出土することから関連する遺構と認識できる。ほかでは、上面からの出土ではあるものの、この遺構の周辺から土師器の片口鉢 (1776) が出土している。807焼土坑の埋土の水洗選別等をおこなっていないため、鍛造剥片等の検出ができなかった点が悔やまれるが、東側エリアでは鉄滓 (図272:M29、P362) の出土も確認できることから、類似遺構との比較検証が必要といえる。

**竪穴建物 53** (図266・267) P14区北西端で検出された竪穴建物で、掘立柱建物12の南西15mに位置する。中世の耕作段によって西側半分が削平されているが、床面から土師器・須恵器がまとまって出土した。主柱穴を伴わない構造の小型建物で、規模は南北4.2m、東西2.6m以上をはかる。検出面からの深さは0.09mで、竪穴の加工面を直接床面としているため貼床は伴わない。幅0.2~0.3m、深さ0.05mの壁溝が周囲にめぐり、北東コーナー付近で2036焼土坑が、東壁沿い中央付近で2035土坑が検出された。北東コーナーの2036焼土坑は楕円形で、長径0.7m、深さ0.14mをはかる。上面および埋土に細かい焼土や炭化物を顕著に含み、土師器の高杯・甕の破片が少量出土した。東側壁際中央の2035土坑は、楕円形で中央南寄りやや深い。規模は、長径1.0m、深さ0.26mをはかり、埋土からは須恵器の中型壺 (1789) 破片が重なり合って出土した。建物の床面からは、土師器・須恵器が一定量出土しており、特に2036焼土坑と2035土坑の間に集中している。いずれもぼろぼろの破片の状態出土しているため、意図的な破碎を受けた上で、建物の廃絶時に投棄されたことがわかる。さらに北東コーナーの焼土坑の存在から、火を取り扱うなんらかの工房の可能性が推測されるところである。

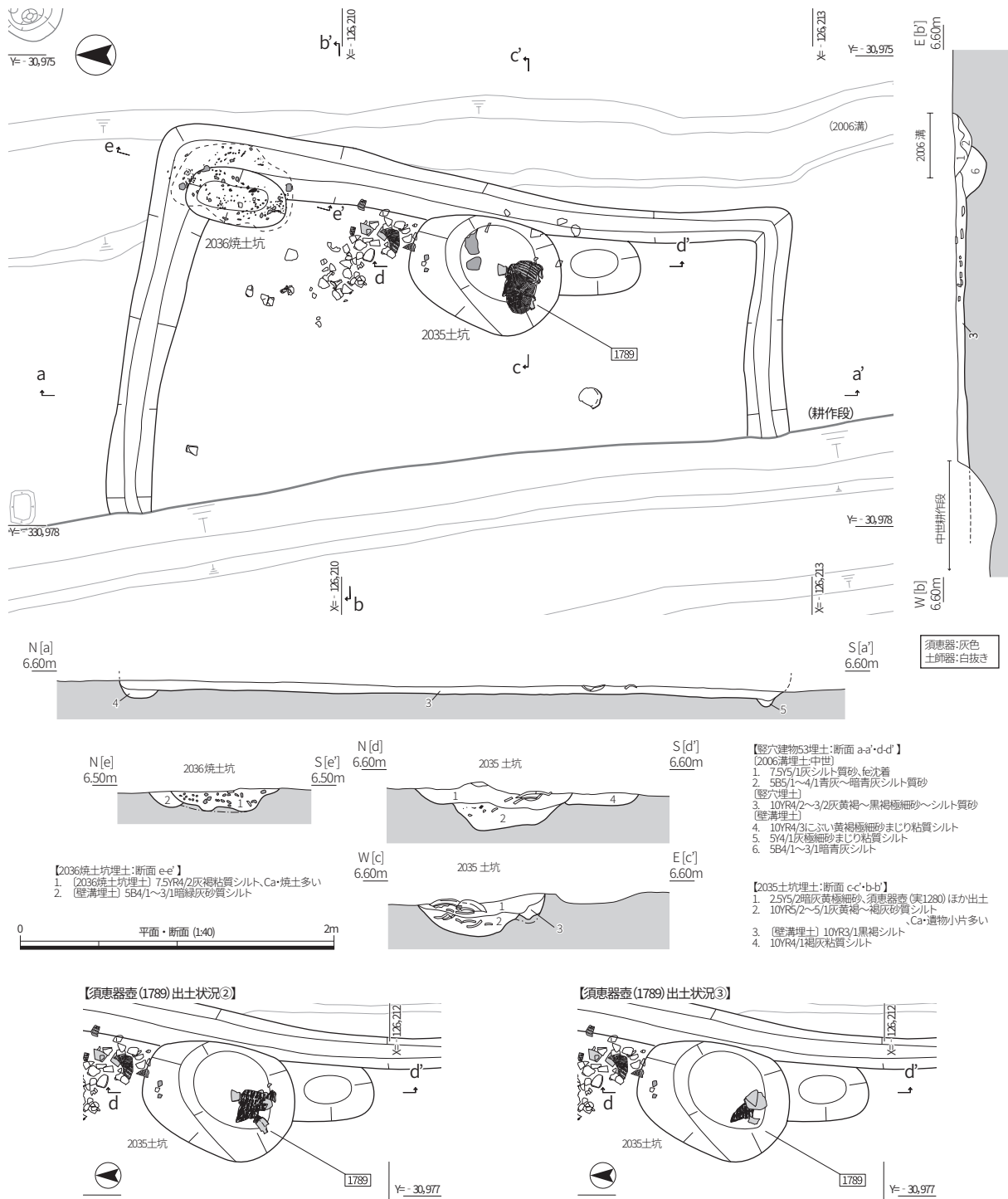


図 266. 竪穴建物 53 平面・断面

上述したように、床面と土坑から土師器・須恵器がまとまって出土しており、ほかに埋土からは砥石が1点出土している。土師器は、高杯が一定量あり(1778~1781、1784~1786)、ほか細筋ミガキを口縁部に施す直口壺(1777)と甕2点(1782・1787)が含まれる。高杯はいずれも椀形高杯で、甕は布留形(1782)と外面ハケ調整の外反口縁(1787)のものが共伴している点が特徴といえる。須恵器は、壺類に限定され(1783・1788・1789)、特に大型の(1789)は全体の60%程度の破片があり、全形を復元できる。2035土坑から北側床面にかけて破片の状態で出土しており、意図的に破砕されたことは明らかである。体部外面は丁寧な平行タタキのち螺旋状に回転ナデを施し、内面には不明瞭な



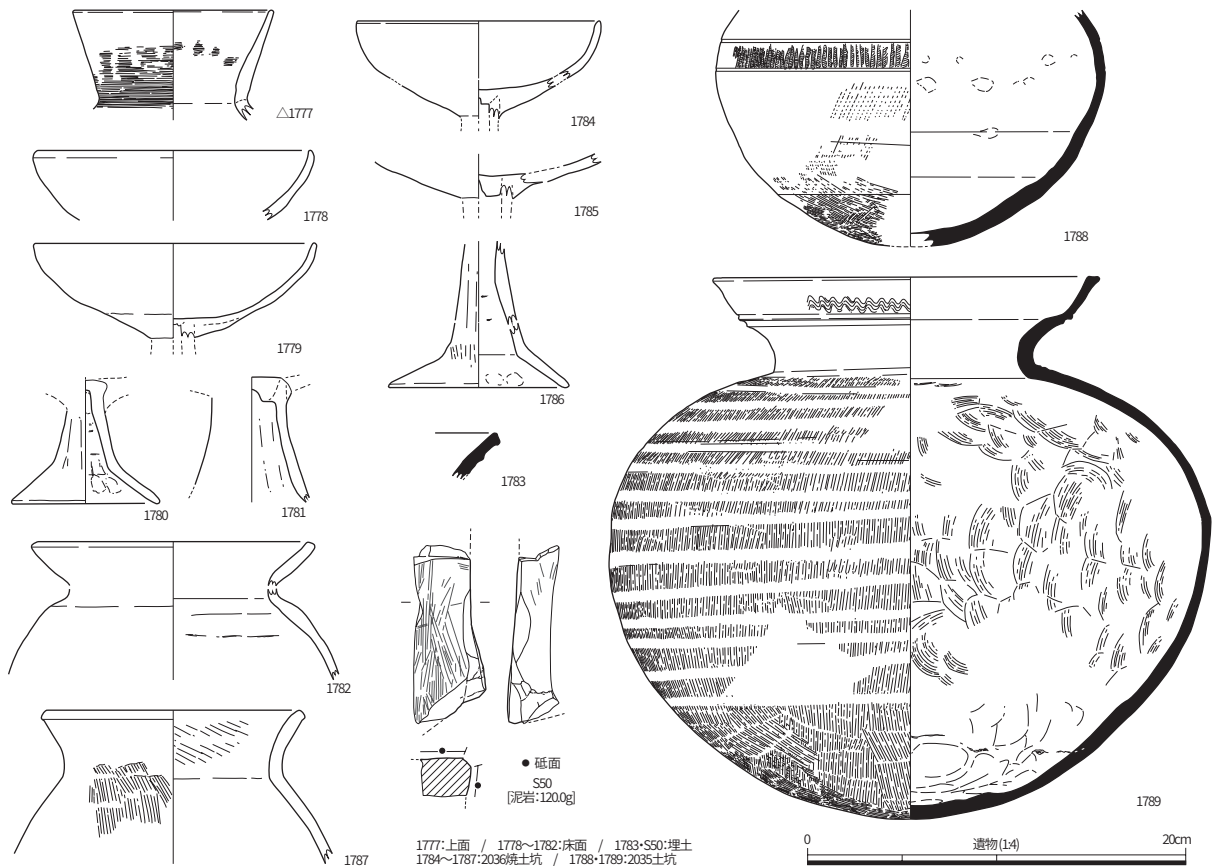


図 267. 竪穴建物 53 出土遺物

同心あて具痕が残る。ほかの2点も含めてTK216～208型式頃に比定でき、辻編年3段階頃の土師器の年代観とも矛盾はない。埋土から出土した砥石(S50)については、きめ細かな仕上用砥石と考えられる。遺物の出土量はそれほど多くはないが、供膳具・貯蔵具・煮炊具がまとまって出土していることから、古墳時代中期中葉の土器のセット関係を考える上で良好な一括資料といえる。

**790 井戸** (図 268) E-2 区西半で検出された井戸で、掘立柱建物 12 の北西 5 m に位置する。E-2 区の中では相対的に標高が高い地点にあるため、井戸の立地としてはやや特異である。検出面の形状は楕円形を呈し、規模は長径 1.1 m をはかる。断面の形状は漏斗状で、検出面からの深さは 1.4 m をはかる。ただし上面は、中世以降の耕作による削平を受けているため本来の規模・深さ等は不明で、上半の断面形状からは開口部はより大きく広がる形状であったことがうかがえる。

埋土は、上層・中層〔埋土 1・2〕がにぶい黄褐～褐灰極細砂を主体とし、下部〔埋土 3〕には 0.9 m の厚さで暗色の泥質土が堆積している。埋土から出土した遺物は少ないが、底面から大ぶりの布留形甕の破片が出土しており、少なくとも 2 個体分の破片が確認できる (1791・1792)。南側からは口縁部～肩部の破片が逆さ向きの状態で、北側からは体部・底部の破片が内面が上方を向いた状態でそれぞれ出土しており、出土状況から意図的に破碎された上で投棄されたと判断できる。埋土の堆積状況からは、布留形甕が投棄されたのち、滞水状態で徐々に埋没が進行したことがわかる。なお上部埋土〔埋土 1・2〕は、下層とは土質が大きく異なっているため、堆積の変化があったか、あるいは人為的に埋め戻された可能性を考慮する必要があるだろう。また調査時には、底部からの積極的な湧水は認められなかったが、遺構の形状、規模からみて井戸とみることが妥当である。

出土遺物は全て土師器で、上述したように出土量は少ない。図化できた遺物は、上層出土の小型丸底

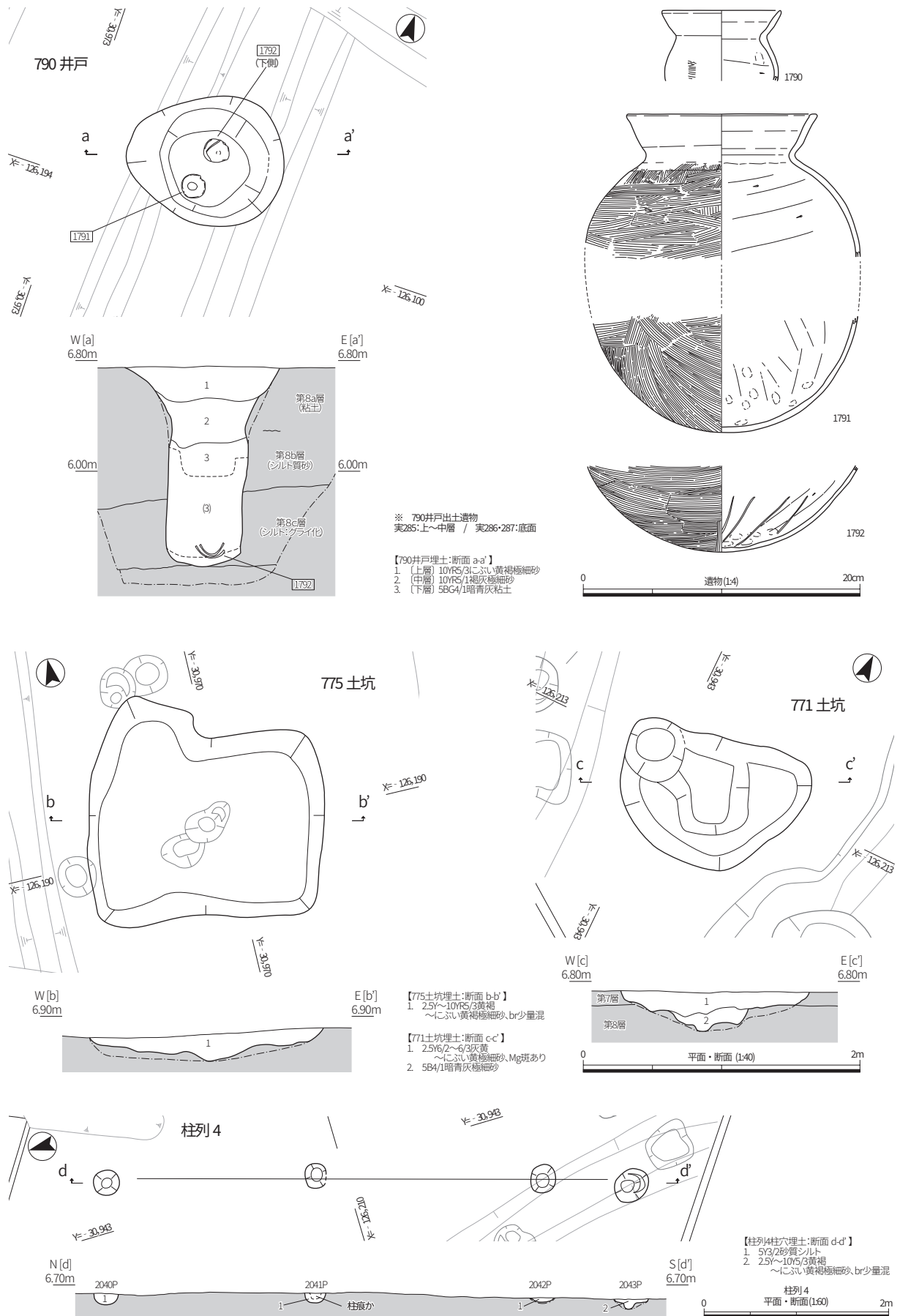


図 268. 790 井戸、775・771 土坑、柱列 4 平面・断面・出土遺物

壺(1790)と底部出土の布留形甕2点(1791・1792)で、このうち底部出土の布留形甕(1791)は、ほぼ全形を復元できる。やや長胴気味の体部形状に肩部にランダムなヨコハケを施し、肩部には米粒状圧痕(3点)がある。時期については、布留式新段階以降、辻編年2～3段階頃に比定でき、上層出土の小型丸底壺(1790)とも時期的な齟齬はない。出土遺物が少ないため、詳細な時期の絞り込みは困難であるが、周辺で検出された建物遺構がいずれも中期前葉～中葉頃のものであるため、中期前葉頃に下る可能性が高い。

**775 土坑**(図268) 掘立柱建物12の北西4m、790井戸の北4mに位置するやや不整な方形土坑で、規模は1.7×1.3m、検出面からの深さは0.24mをはかる。埋土は、790井戸上層埋土と類似するにぶい黄褐極細砂を主体とする。埋土からは、古墳時代の土師器が少量出土しているが、いずれも細片のため図化できるものはなかった。詳細な時期比定は困難で、かつ遺構の機能・性格は不明であるが、古墳時代の遺構の可能性が高く、周辺の中期の遺構との関連が推測される。

**柱列4**(図268) E-2区東端付近で検出された4基からなる柱穴の並びで、北端から南端までの長さは、5.7mをはかる。柱穴は、いずれも浅く規模も小さいため、柵列等の明確な遺構であるかはやや説得力に欠けるところであるが、E-2区東端部からは古墳時代初頭と中期の遺物が一定量出土しており、この付近での遺構が拡がり等を考慮して、詳細図を報告した。

**771 土坑**(図268) 柱列4の東側に隣接する不整形の土坑で、規模は1.4m、検出面からの深さは0.28mをはかる。埋土は、775土坑と同様の灰黄～にぶい黄極細砂を主体とし、古墳時代の土師器の細片が数点出土している。中世の遺物を含まないことと、周辺での古墳時代の遺物の拡がり等を考慮すると、古墳時代まで遡る時期の遺構の可能性が想定できるが、遺構の性格や詳細な時期については不明である。

### 〔b. 古墳時代初頭～前期〕

**掘立柱建物43**(図269) P14区北東端付近で検出された掘立柱建物で、付近一帯は古墳時代の遺構が希薄である。東西1間×南北3間の構造で、規模は東西が3.9～3.8m、南北が3.7mをはかる。このことからわかるように、東西の柱間間隔が異様に広いため、南北の側柱で全体を支える高床構造の倉庫であった可能性が高い。面積は14.2㎡で、建物の南北軸は18.76°東に傾く。柱筋の通りは概ね良好で、南北桁行の柱間寸法は1.2～1.4mにおさまる。詳細にみると、東側の柱筋は1.27m前後で一定しているのに対し、西側は中央の柱間隔が外側に比べ0.15～0.2mほど狭いといった特徴がみられる。柱穴の平面形は、円形を呈するものが多く、検出面での径はいずれも0.4～0.5mである。深さについては、0.28～0.37mにおさまる。埋土から判断する限り、西側中央北寄りの2028Pと南西2030P除いて柱は抜取されたことがわかる。柱あたりや2030Pの柱痕から、柱の太さは0.15m前後に復元される。

このような梁間1間で柱間隔が広い構造の建物としては、P4区の大型掘立柱建物13やそれと重複する掘立柱建物15などとの類似性が指摘できる。さらに2027Pや2030Pの東西方向の柱穴の断面形は、内側に傾斜した形状であり、この点も大型建物13と類似する。なお柱穴がいずれもやや浅いため、後世の耕作によって上面が削平されていることは明らかで、未検出の柱穴の存在を考慮する必要がある。特に上記の大型建物13やB-1区の独立棟持柱建物3などでは、棟持柱の可能性ある柱穴が側柱に比べて明らかに浅いことから、この建物も同様の棟持柱を伴っていた可能性を想定する必要があるだろう。

柱穴埋土から出土した遺物はごく少量で、2023P・2025P・2026P・2030Pから古式土師器が出

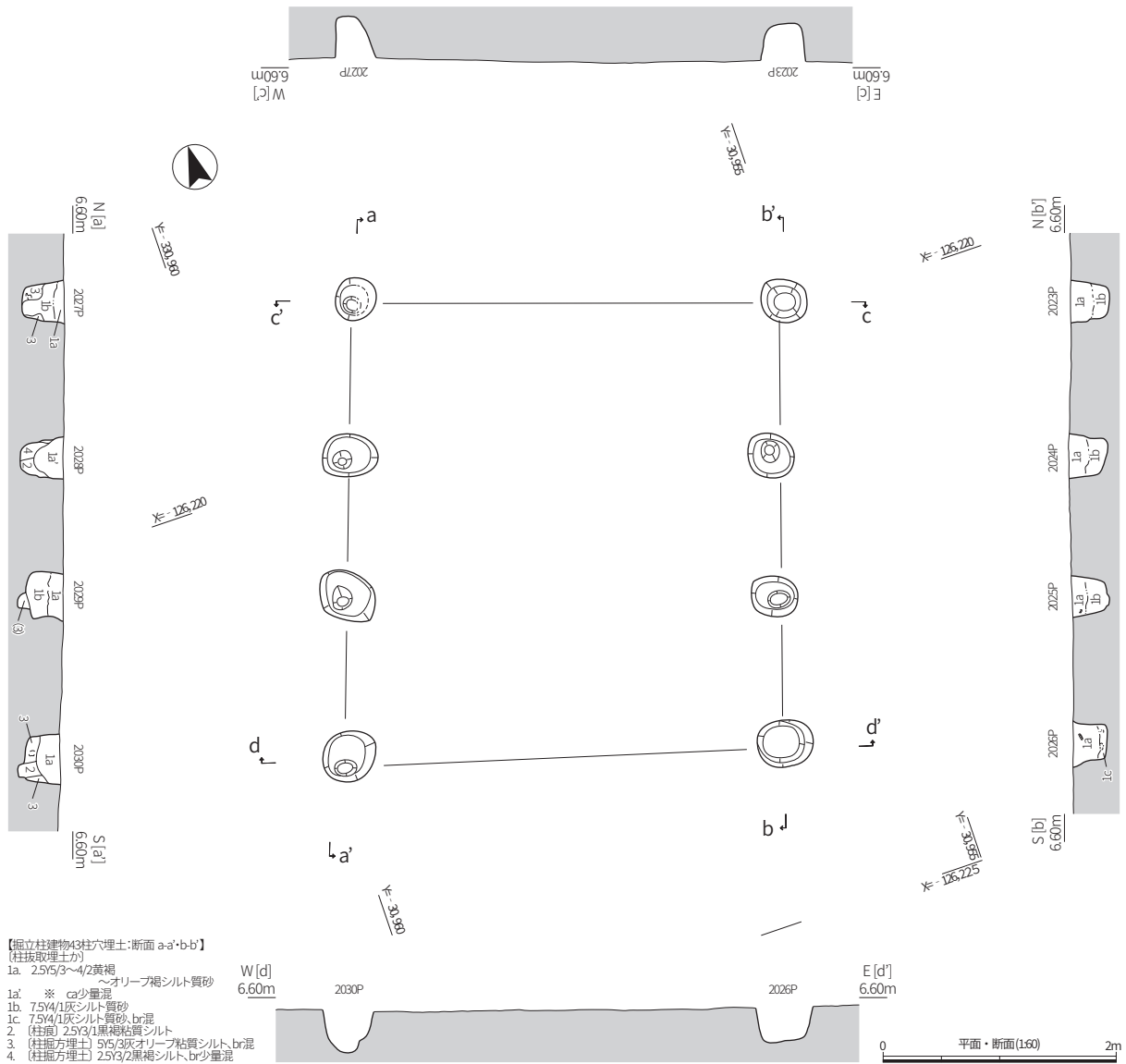


図 269. 掘立柱建物 43 平面・断面

土している。いずれも細片で、ハケ甕やV様式系タタキ甕の体部などが確認できるが、図化できるものはなかった。須恵器をはじめとする中期以降の遺物も出土していないため、布留式古段階以前の遺構の蓋然性が高く、周辺で検出される庄内式～布留式古段階の遺構との関連が注目される。

**1985 井戸** (図 270) P14 区南西端で検出された井戸で、そのほかの古墳時代の遺構とは 25 m 以上離れた位置にある。この地点は、中世の耕作段の造成により大きく地下げされた範囲にあたるため、周辺に古墳時代の遺構が存在した可能性も残されるが、P14 区の南半は古墳時代の遺構が希薄なため、周囲とは離れた位置に単独で立地した可能性が高い。検出面の形状は不整形円形を呈するが、これは西半分に重複する 1981 大型土坑の掘削の影響によるものであり、本来の形状は円形であったとみられる。平面の規模は、検出面で径 2.6 m、底面で径 1.2 m をはかる。検出面からの深さは 1.2 m で、断面の形状は漏斗状で上部が大きく開く。断面漏斗状の井戸は一般的であるが、底が幅広で大きい点がやや特徴的である。埋土は、上層〔埋土 1・2〕、中層〔埋土 3～5〕、下層〔埋土 6・7〕に大別でき、上層〔埋土 1〕は細砂を主体とする。下部〔埋土 2〕は、灰粘質シルトを主体とし、土師器の破片と石製品が一定量出土した。中層〔埋土 4〕は、ラミナ混じりの灰粘土を主体とし、下部に極細砂の流入土〔埋土 5〕がレ



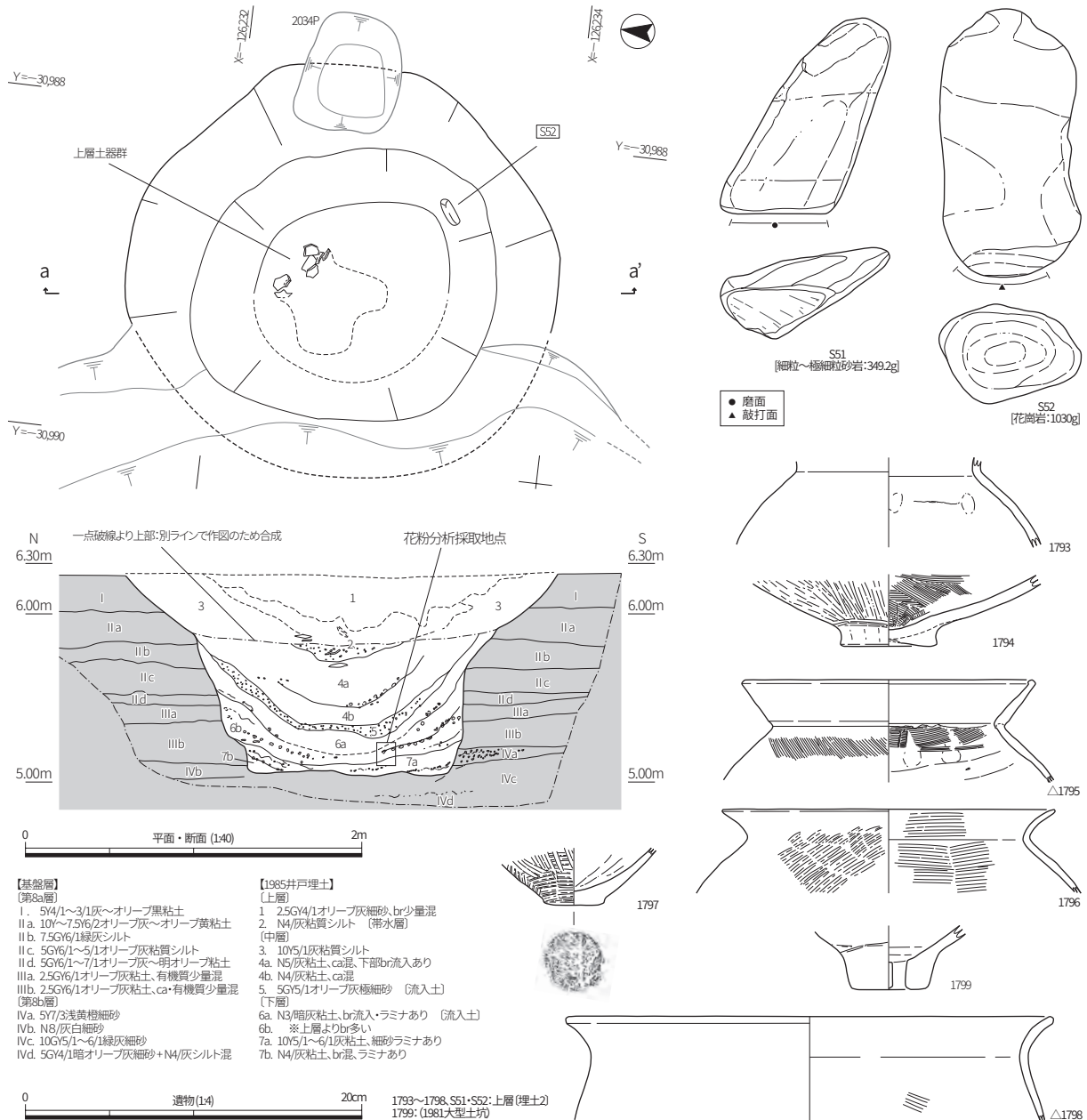


図 270. 1985 井戸 平面・断面・出土遺物

ンズ状に堆積している。下層〔埋土6・7〕は、ラミナが顕著である。いずれも自然堆積と考えられるため、井戸の掘削後、流入土等によって徐々に埋没が進行し、下半部が埋没したのち遺物が投棄され、井戸が廃絶したことがわかる。

出土遺物は、上層〔埋土2〕から古式土師器の破片と石製品がまとまって出土しているが(1793～1798、S51・S52)、下部からは遺物の出土は確認されていない。古式土師器は、全形を復元できるものがなく、器種は中・大型の壺・甕・鉢が主体である。壺底部(1794)は、底部の突出が明確で、甕には庄内形もしくは布留形影響の内面ケズリ外面ハケの口縁部(1795)やV様式系タタキのくの字甕(1796)がある。隣接する1981大型土坑出土の有孔鉢(1799)も関連する遺物とみられ、時期については庄内式期～布留式古段階古相におさまる。上述したように、これらの遺物は井戸の廃絶に伴う上層出土の遺物であるため、井戸の掘削と機能時期はこれ以前とみなすことができる。上層出土遺物についても、体部のハケ甕(1795)を除けばA系統・V様式系の遺物が主体であるなど古い様相を留めており、

第4章 遺構・遺物

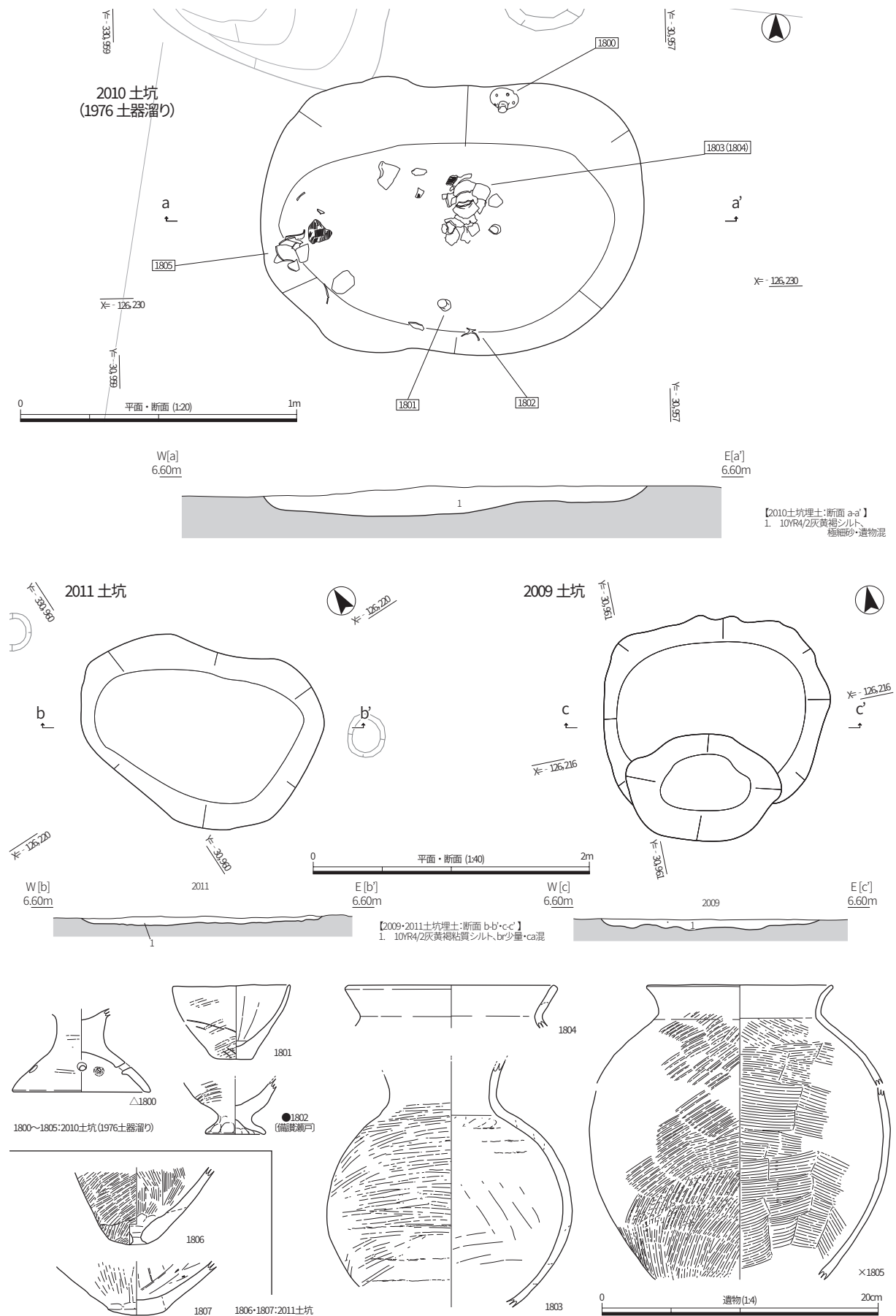


図 271. 2010 土坑 (1976 土器溜り)、2009・2011 土坑 平面・断面・出土遺物

井戸の掘削時期は庄内式期に遡る蓋然性が高い。

**2009 土坑** (図 271) 掘立柱建物の北西 7 m に位置する不整形の土坑である。規模は径 1.6 m、検出面からの深さ 0.08 m をはかる。埋土は、ブロックが少量混じる灰黄褐粘質シルトを主体とする。遺物は出土していないが、後述する 2010・2011 土坑と規模・形状、埋土が酷似しているため、同時期の遺構と判断でき、庄内式期に位置づけられる可能性が高い。

**2010 土坑** (1976 土器溜り) (図 271) P14 区の中央東端付近で検出された楕円形の土坑で、掘立柱建物の南 8 m に位置する。規模は、長径 1.4 m、短径 0.9 m をはかる。検出面からの深さは 0.1 m で浅いが、包含層の掘削時に上面から古式土師器がまとまって出土した (1976 土器溜り)。包含層掘削時は、掘り込みが検出できなかったが、土器溜りの下部で浅い掘り込みが検出されたことから、上層から掘り込みがなされていた可能性が高い。土器溜りの古式土師器は、概ね T.P.+6.7m 前後の高さで出土しており、この点をふまえると、本来の遺構の深さは 0.25～0.3 m 以上に復元される。下部の埋土は、灰黄褐シルトを主体とし、下部埋土からも土師器片が少量出土している。

古式土師器は、破片がばらばらの状態となって出土した。ただし比較的大ぶりの破片が多く、形状を復元できる資料が一定量ある。さらに地点ごとに器種のまとまりもみられることから、意図的に破砕されたのち投棄されたと推測できる。出土した古式土師器には、小型高杯脚部 (1800)、小型鉢 (1801)、直口壺 (1803)、くの字甕 (1804・1805)、製塩土器 (1802) などがある。小型高杯脚部には、小円孔が 5 つ穿孔され、直口壺 (1803) は体部に粗いヨコミガキがみられる。くの字甕 (1804) は、典型的な V 様式系のタタキ甕で、脚台式の製塩土器 (1802) は備讃瀬戸からの搬入品の可能性が高い。A 系統・V 様式系の器種を中心とすることから、時期については庄内式古段階～中段階頃に位置づけられる。遺物の出土量は多くないが、今回の調査で出土した遺物の中でも古い時期の良好な資料群として注目できる。

**2011 土坑** (図 271) 2010 土坑の南西 4 m に位置する楕円形の土坑で、規模・形状・埋土などから 2010 土坑と類似する遺構と認識できる。規模は、長径 1.7 m、短径 1.2 m をはかる。検出面からの深さは 0.06 m で浅いが、類似する 2010 土坑での事例を参考にすると、本来の掘り込み面はより上方で、もう少し深さのある遺構であった可能性が高い。埋土は、灰黄褐粘質シルトを主体とする V 様式系タタキの有孔鉢 (1806) と平底壺の底部 (1807) などが出土しており、2010 土坑とほぼ同時期の庄内式期の遺構と認識できる。

**柱列 14** (図 272) P14 区北西端で検出された 3 基からなる柱穴の列で、竪穴建物 53 の北西 3 m に位置する。調査区の端で検出され、付近に中世以降の耕作段や溝等があるため様相が不明確であるが 2017P の西側の 2032P も含めて、西側と北側に列がのび、掘立柱建物を構成する柱列の可能性が推測できる。現状では、2017P - 2019P 間の長さが 3.3 m で、柱穴の深さは最大で 0.5 m をはかる。2018 P の埋土から、古墳時代の土師器の細片が 1 点出土している。古墳時代初頭または中期のどちらかの時期の遺構の蓋然性が高いが、詳細な時期比定は困難である。

**包含層出土遺物** (図 272) 東側エリアは遺構密度が低く、それと比例して出土遺物の量も少ない傾向にある。その中で包含層中および後世の遺構から出土した遺物は、布留式古段階以前と中期前葉～中葉頃のほぼ 2 時期にまとまっており、付近一帯で検出された遺構と時期的な齟齬はない。さらに特記すべき内容として、E-2 区東端部分から遺物がまとまって出土している点をあげることができ (1808～1810・1812～1814)、付近では少数ながらも古墳時代に遡る可能性のある遺構が検出されている点を

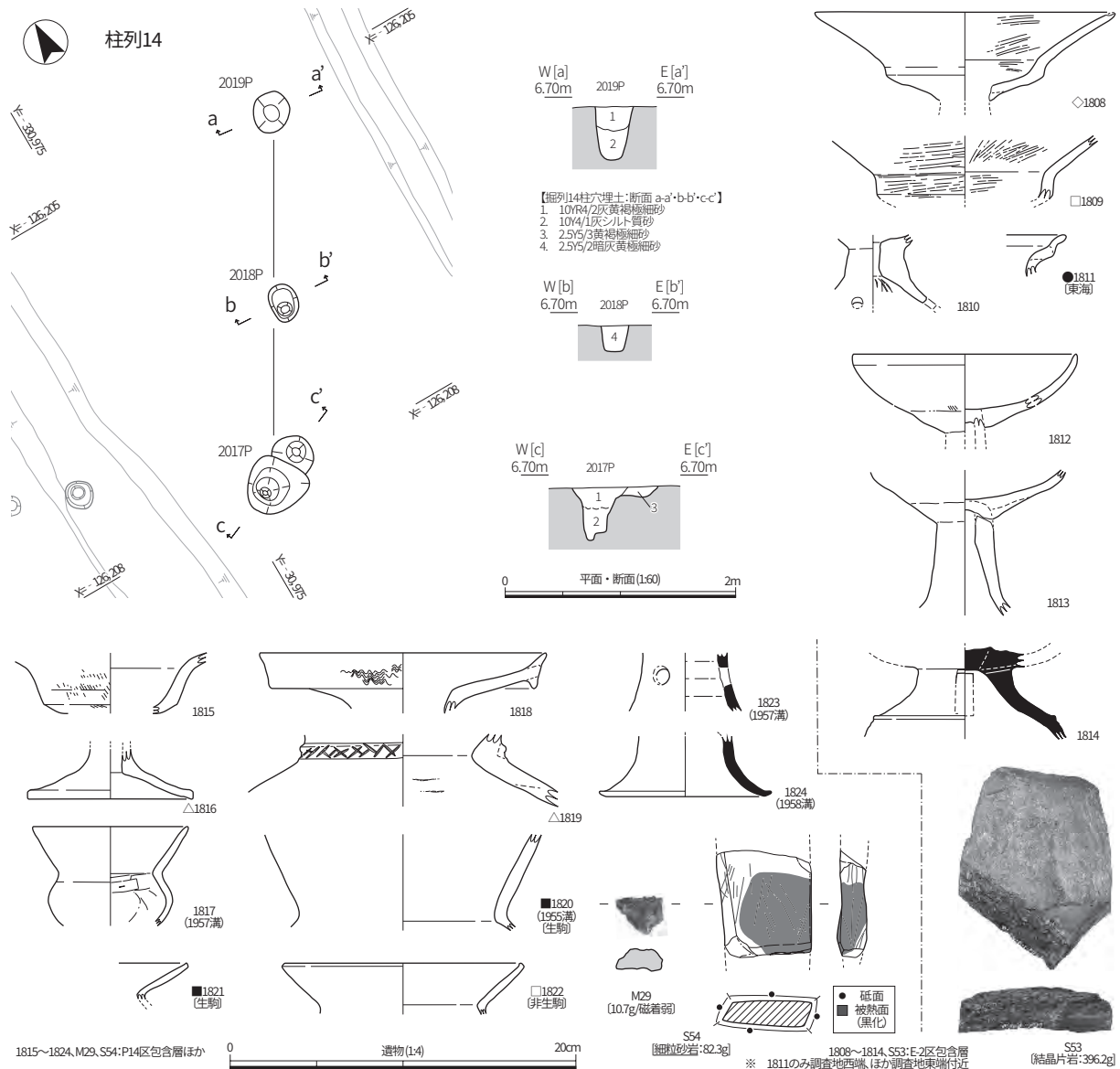


図 272. 柱列 14 平面・断面、東側エリア 包含層ほか 出土遺物

ふまえると、包蔵地範囲外となる北東側にも遺構・遺物が拡がる可能性を考慮する必要がある。

図化した遺物では、今回調査では出土量が少ない有段高杯（1808・1809・1815）が複数あり、このうち精製ヨコミガキ（1809）は、在地胎土であるため模倣品とみなすことができる。外来形土器では、生駒西麓産の庄内形甕（1821）と直口壺（1820）や、S字甕（1811）などがあり、ほかでは二重口縁壺の頸部（1819）なども他地域からの搬入品の可能性が高い。S字甕（1811）については、C類と判断できるが、前期後葉の遺物がないため、位置づけは不明である。土器以外では、砥石（S54）や鉄滓（M29）などがあり、砥石（S54）はきめの細かい仕上砥で、外面が著しく被熱・黒化している。

### (5). 小結

ここまで西側エリア・中央エリア・東側エリアにわけて、古墳時代の遺構・遺物を報告した。成果を通覧すると、全ての地区で古墳時代の遺構・遺物が確認され、広範囲に古墳時代の居住域が拡がることになった。100棟近い数の建物跡の検出、井戸・土坑からのまとまった一括資料の出土、外来形



表5. 古墳時代の遺構・遺物の概要一覧

地区	主要な時期	建物遺構		主要遺構 井戸・土坑・落込みなど (遺物多量出土遺構)	外来系 土器	特記事項
		内 訳	総計棟数			
西側 エリア	微高地 A	前期前葉 ~ 中期初頭 中期中葉 ~ 後期前半	竪穴建物 3+(5) 棟 掘立柱建物 2 棟	10	1482 井戸 116 井戸	○ 朱精製関連遺物
	(浅谷：100 落込み)	初頭前葉 ~ 後期前半				○ 朱精製関連遺物
	微高地 B 1	初頭後葉 ~ 後期前半	竪穴建物 16+(2) 棟 掘立柱建物 4 棟	22	432 土坑 450 落込み 33 落込み	◎ 大型竪穴建物 鍛冶遺構？(初頭～前期前葉) 玉作関連遺物 搬入礫(片岩類) 二重口縁壺・須恵器器台多い
	微高地 B 2	初頭前葉 ~ 前期後葉 中期中葉 ~ 後期前半	竪穴建物 8 棟 掘立柱建物 5 棟	13	971 大型土坑	◎
	微高地 B 南東縁辺部	初頭後葉 ~ 中期初頭 中期中葉 ~ 後期前半	竪穴建物 1 棟 掘立柱建物 3+(1) 棟	5	866 井戸 33 井戸 826 大型土坑 827 落込み 867 落込み	◎ 大型掘立柱建物 独立棟持柱建物 特殊井戸 鍛冶遺構・遺物？(中期中葉～)
(浅谷？)						
中央 エリア	微高地 C 南西斜面	初頭前葉 ~ 前期後葉 中期中葉 ~ 後期前半	竪穴建物 18+(3) 棟 掘立柱建物 4+(4) 棟	29	1897 井戸 978 土坑 1623 土器溜り	○ 玉作関連遺物 鍛冶遺構・遺物？(中期中葉～)
	微高地 C 南東斜面	中期中葉 ~ 後期前半	竪穴建物 9+(5) 棟 掘立柱建物 6 棟	20	648 井戸	△ カマド 鍛冶遺構・遺物？(中期中葉～)
	(浅谷：625 水路)		(前期) ~ 中期後葉			
東側 エリア	微高地 D	初頭前葉 ~ 前期前葉 中期前葉 ~ 中期中葉	竪穴建物 1+(1) 棟 掘立柱建物 2 棟	4	1985 井戸 2010 土坑 790 井戸	△ 鍛冶遺構・遺物？(中期中葉～) 搬入礫(片岩類)

土器や手工業生産に関わる遺物の出土など、多岐に亘る調査成果の蓄積がなされた点は、北摂や淀川流域の古墳時代集落のあり方を考える上で重要である。

その一方で、居住域の存続期間が古墳時代初頭～後期初頭まで長期間に亘るものの、地区ごとに遺構・遺物の密度や遺構・遺物の存続時期の違いも鮮明となり、集落の構造や土地利用の推移を復元するための手がかりを与えてくれる。その概要を簡潔にまとめると、表5の通りとなるが、微高地C南西斜面や微高地Dなどで古墳時代初頭前葉(庄内式古段階)に居住域が形成されて集落が出現し、古墳時代初頭後葉～前期前葉(庄内式新段階～布留式古段階)にかけてほぼ全域で遺構・遺物が増えはじめる。その後、前期を通じて安定的に居住域が営まれ、中期前葉(TK73 型式期)に一次的な減少傾向がみられるものの、中期後葉(TK23・47 型式期)まで継続する。そして後期前葉(TK10 型式期)をもって集落は廃絶する。地区ごとの居住域の推移については、遺構・遺物の多寡はあるものの、多くの地区で居住域は通時的に存続する傾向がみられる。その一方で中央エリアは、微高地南東斜面は中期中葉以降にほぼ限定され、東側エリアは密度が少なく前期中葉～中期初頭までの期間は明確な遺構・遺物がない。これ以外にも、地区ごとにピークとなる時期が微妙に異なっており、詳細については総括の中で改めて検討したい。

また、出土遺物や遺構の特徴なども地区ごとの性格の違いを反映している可能性が高い。例えば微高地 B1 とその周辺エリアでは、二重口縁壺や器台などの加飾性の強い遺物や外来系土器の出土が明らかに多い傾向にあり、前期・中期ともに微高地 B1 が中心的な居住域であったことを示唆する。さらに周辺では、玉作関連遺物や朱精製遺物、鍛冶関連遺構・遺物などの出土も目立っており、集落構造の復元および時間的推移の検討といった基礎的作業が必要な状況にある。

なお今回の調査は、高速道路建設という性格上、東西に長い範囲が対象となったが、南北への遺構・遺物の拡がりにも留意をする必要がある。特に微高地と微高地を分断する浅谷は、いずれも南北方向にのびるため、南北に居住域が拡がるのが明白である。さらにこれまでも、南西 200 m に位置する淀川変電所の調査地点や内ヶ池を挟んで南西 600 m に位置する井尻遺跡などで、同時期の遺構・遺物の拡がり確認されており、遺構・遺物の内容・特徴からみて関連性が深いことはほぼ確実である。淀川分水路である内ヶ池を中心にして拡がる一連の遺跡群と理解するのが妥当であり、上牧遺跡の今回

の調査成果を総括する上では一体的な検討が必要となろう。

【註】

- 1) 竪穴建物は60番まで、掘立柱建物は54番までナンバリングしているが、竪穴建物14・15・17、掘立柱建物47は不確実な遺構であったため欠番とした。それらを除いた総計110棟の建物遺構のうち、竪穴建物1棟と掘立柱建物4棟が確実に古代・中世まで下り(古代=竪穴建物54、掘立柱建物26・41・42、中世=掘立柱建物39)、ほかに帰属時期が不明確な建物遺構が6棟あるため(掘立柱建物7・14・33・34・35・50)、古墳時代と断定できる建物遺構は99棟ということになる。
- 2) 過去の上牧遺跡の調査では、弥生時代後期後半の竪穴建物が1棟検出されており、周辺に先行する時期の居住域が存在する可能性はある。ただし今回の調査成果から、古墳時代初頭を境に規模が大きくなることは疑いないものであり、ことさら弥生時代からの継続性を強調する必要はない。
- 3) 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会  
橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論—松林山古墳と津堂城山古墳から—」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任紀年—』大阪大学考古学研究室  
松木武彦 2021「古墳時代中期の歴史像」『5世紀の倭と東アジア』堺市博物館
- 4) 笹栗拓 2018「津堂遺跡の集落出現期の土器と周辺動向」『古墳出現期土器研究』第5号 古墳出現期土器研究会
- 5) 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 6) 次山淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会  
田中元浩 2005「近畿地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 日本考古学協会  
三好玄 2010「布留式土器様式構造の再検討—精製器種を中心に—」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室  
山本亮 2014「古墳出現期の山城地域における地域間関係の一断片—乙訓地域の古式土師器と竪穴建物跡にみる地域性から—」『古墳出現期土器研究』第2号 古墳出現期土器研究会
- 7) 中久保辰夫 2009「韓式系軟質土器の受容過程」『考古学研究』第56巻第2号 考古学研究会  
中久保辰夫・中野咲 2013「韓式系土器のあり方からみた集落分類」『古代学研究』第199号 古代学研究会
- 8) 森岡秀人 1991「土器の移動1 西日本」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣  
山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『弥生文化博物館研究報告』第3集 弥生文化博物館  
次山淳 2014「古墳出現期の社会と土器の移動」『史林』第97巻第1号 史学研究会  
森岡秀人 2020「土器の動き、人の動き—古墳出現期の地域社会とヤマト王権—」『土器からみた3世紀の播磨』第20回播磨考古学研究会実行委員会
- 9) 高槻市内の弥生時代後期の土器の胎土は、石英と長石が卓越する鉱物組成であることと、長石類の種類と量比から芥川流域と淀川流域ごとの小地域性が存在することが最近の研究で指摘されており、在地土器の認定の参考になる。  
三好裕太郎・濱野俊一・辻康男 2018「三島東部における弥生土器胎土分析に関するノート」『高槻市文化財年報』平成28年度 高槻市教育委員会
- 10) 森岡秀人のいう臨地製土器と同義として用いる。  
森岡秀人 1999「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会  
前掲註7) 森岡 2020
- 11) 外来系土器の認定に際しては、秋山浩三、市村慎太郎、桐井輝輝、中居和志、三好玄、三好孝一、山田隆一、森岡秀人、森田克行の各氏をはじめとして、多くの方々からのご教示を得た。
- 12) 西本和哉編 2016『赤色顔料生産遺跡および関連遺跡の調査 採掘遺跡 石器編』徳島県埋蔵文化財調査報告書 第1集 徳島県教育委員会
- 13) 菅原康夫・藤川智之・氏家敏之 1995『名東遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第14集 徳島県教育委員会・(財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 14) 松山智弘 2018「地域報告 山陰」中国四国前方後円墳研究会編『前期古墳編年を再考する』六一書房
- 15) 高槻市芥川遺跡で縄文時代に帰属する類似資料が出土している。また100落込み(浅谷)周辺では、縄文時代晩期の突帯文土器や石鏃等が少量ながらも出土しているため、石製品(S10)は縄文時代まで遡る可能性がある。  
橋本久和 1995『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市埋蔵文化財発掘調査報告書 第18冊 高槻市教育委員会
- 16) 次山淳 1995「波状文と列点文—布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布—」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集、同朋舎出版
- 17) 鹿野壘 2017『井尻遺跡2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第276集
- 18) 西本和哉編 2021『赤色顔料生産遺跡および関連遺跡の調査 若杉山辰砂採掘遺跡 出土品編』徳島県埋蔵文化財調査報告書 第5集 徳島県教育委員会

- 19) 三宮昌弘 2015 『梶原古墳群』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 259 集
- 20) 山本亮 2014 『古墳出現期の山城地域における地域間完形の一断片』『古墳出現期土器研究』第 2 号 古墳出現期土器研究会
- 21) 新海正博編 2017 『坊籠遺跡』交野市埋蔵文化財調査報告 2017- I・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 288 集 交野市教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター
- 22) 前掲註 17) 鹿野 2017
- 23) 高槻市史編さん委員会編 1973 『高槻市史』第六巻 考古編
- 24) 森田克行 1985 「岡本山 A3 号墳」『高槻市文化財年報』平成 28 年度 高槻市教育委員会
- 25) 高野陽子 2010 「山城の庄内甕をめぐる二、三の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第 6 集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 26) 大東悟 1999 「大型建物(伊勢遺跡・下鈎遺跡・下長遺跡)」『滋賀考古』第 21 号 滋賀考古学研究会  
栗東町教育委員会・(財) 栗東町文化体育振興事業団 2001 『埋蔵文化財シンポジウム 邪馬台国時代の大型建物 一下鈎遺跡・伊勢遺跡の謎に迫るー 記録集』  
森岡秀人 2003 「近畿の様相」『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003 年度滋賀大会実行委員会
- 27) やや時期が下る古墳時代中期の事例となるが、藤井寺市津堂遺跡の 2 棟の大型屋内棟持柱建物は、棟持柱が測柱に比べて明らかに浅い。また、今回の調査で検出された独立棟持柱を備える掘立柱建物 3 も棟持柱がそのほかの柱に比べて浅いことが判明している。重要な問題であるため詳細な検証が必要であるが、同様の事例が一定数存在する可能性は高いだろう。  
笹栗拓編 2016 『津堂遺跡』藤井寺市文化財報告第 39 集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 273 集 藤井寺市教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター
- 28) 加藤利晴・杉谷愛象ほか 1976 『秋里遺跡 I』鳥取市教育委員会  
井殿晴子・藤本隆之・杉谷美恵子 1996 『秋里遺跡』(財) 鳥取教育福祉振興会
- 29) 京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査・整理をおこなっている亀岡市余部遺跡で、類似する資料がまとまっているとのことである。桐井理揮氏および当センター尾崎裕妃のご教示による。
- 30) 宇野隆志編 2016 『四条遺跡 II』奈良県文化財調査報告書第 168 集 奈良県立橿原考古学研究所  
石坂泰士 2020 『新堂遺跡 IV』橿原市埋蔵文化財調査報告 第 16 冊 橿原市教育委員会
- 31) 山田隆一 2006 「大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館  
原田昌則 2020 「古墳時代早期～前期前葉の外來系土器」『新版 八尾市史 考古編 2』八尾市史編纂委員会
- 32) 前掲註 6) 田中 2005
- 33) 畑暢子 1998 「古墳時代前期の土器・土製品」『河内平野遺跡群の動態 IV』大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財調査研究センター
- 34) 石野博信・関川尚功 1976 『纏向』奈良県立橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
- 35) 山中良平編 2019 『放亀山古墳群発掘調査報告書』赤穂市文化財調査報告書 88 赤穂市教育委員会
- 36) 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財調査報告書第 10 集 (財) 愛知県埋蔵文化財センター
- 37) 山田隆一 1992 「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究』III 庄内式土器研究会  
山田隆一 1998 「大阪府下出土の東海・東国地域の土器」『庄内式土器研究』XIV 庄内式土器研究会
- 38) 筒井崇史・高野陽子ほか 2018 『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 39) 前掲註 20) 山本 2014
- 40) 三好裕太郎氏のご教示による。
- 41) 寺井誠 2016 『日本列島における出現期の甕の故地に関する基礎的研究』平成 25～27 年度 (独) 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書
- 42) 柳瀬昭彦 1977 「V 結語」『山陽新幹線建設に伴う調査 II』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集 岡山県教育委員会  
高橋護 1991 「土器の編年 中国・四国」『古墳時代の研究 6』雄山閣
- 43) 高木真光 1981 「中田遺跡刑部地区関西電力 K.K. 地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」『昭和 53・54 年度 埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告 7 八尾市教育委員会
- 44) 國下多美樹・田中元浩 2003 「長岡京跡左京第 36 次 (7ANDL II 地区)」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書 長岡京跡・東土川西遺跡・修理式遺跡』長岡京跡発掘調査研究所 (財) 向日市埋蔵文化財センター
- 45) 前掲註 32) 石野・関川 1976
- 46) 大久保徹也 1994 「岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店
- 47) 國下多美樹 2000 『芝ヶ本遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第 51 集 (第 2 分冊) (財) 向日市埋蔵文化財センター  
なお、芝ヶ本遺跡では、ガラス勾玉の鋳型のほかに緑色凝灰岩製の石釧が出土している。本遺跡でも勾玉出土地点の近くで緑色凝灰岩の石核が出土しており、外來系土器を含む布留式後半の古式土師器がまとめて出土する点など、遺跡どうしの共通性の高さもうかがえる点は注目される点である。
- 48) 佐藤祐樹 「駿河における二重口縁壺の位置づけ」『東生』第 3 号 東日本古墳確立期土器検討会



## 第6節 弥生時代の遺構・遺物

### 1. 概要

今回の調査で検出された弥生時代の主な遺構は、弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）の方形周溝墓で、計14基が検出された。方形周溝墓は、西側エリア微高地Bの北西付近と、中央エリア微高地Cの北西付近の2地点にまとまっており、西側エリアの7基を「方形周溝墓西群」、中央エリアの7基を「方形周溝墓東群」としてそれぞれ報告する（図273）。方形周溝墓以外の遺構・遺物は極めて少ない。東側エリアで検出された2003溝は、良好な検出状況であったものの、それ以外では方形周溝墓群の周辺のごく少数の遺構・遺物の検出に留まっている。

個々の方形周溝墓の規模や出土遺物などの概要は、下記の表6の通りにまとめた。残念ながら埋葬施設は、全て後世の削平によって失われており、周溝からの出土遺物もあまり多くない。それでも淀川の河畔での方形周溝墓群の存在は、調査着手当初はまったく予想しておらず、全体としては良好な状態で周溝が検出された点は特筆すべき成果といえよう。なお出土遺物の編年観については、摂津の弥生土器編年（森田1990）を参照し、以下、報告を進めていきたい。

### 2. 方形周溝墓西群（西側エリアの遺構・遺物：図274～278）

微高地Bで検出された7基の方形周溝墓で、B-2区・A-2区・P6区にかけて分布している。西側エリアの最高所部付近に立地しており、一部の周溝墓は北側の調査範囲外まで広がる。さらに詳細にみると、北西から南東方向に列状にのびる一群〔西2群：周溝墓4・5・7・6〕と、方形周溝墓5を起点に南西方向にむかって列状にのびる一群〔西1群：周溝墓1・2・3〕にグループ分けすることができる。〔西2群〕は、微高地B2の高まりに沿うような形で周溝墓が接続するのに対し、〔西1群〕は方形周溝墓5を起点に微高地B1の南西側斜面の傾斜に周溝墓が列状に並ぶ。面的な調査をおこなっていないため、検証の余地が大いに残るが、後述する東群においても方形周溝墓が列状に接続しており、複数列が並行するような状況を想定する必要はないだろう。

調査の範囲内では、方形周溝墓5が微高地の最高所に立地している。ここを起点に、南東の周溝墓7・

表6. 方形周溝墓一覧

	No.	溝 No.	調査区	規模 (m)	出土遺物		備考
					有無	内容	
方形周溝墓西群	方形周溝墓 1	358 溝	A-2 区 B-2 区	8.4 x 8.5	2	甕：1825・1826	(口縁+底部：同一個体)
	方形周溝墓 2	359 溝	A-2 区	(6.4) x 6.3	△		(縄文土器・サヌカイト剥片)
	方形周溝墓 3	359・360 溝	A-2 区	(3.7) x 6.3	—		
	方形周溝墓 4	459 溝	A-2 区	(6.8 x 5.0)	▲		広口壺 (1827)：方形周溝墓 4・5 接続部
	方形周溝墓 5	460・1333 溝	A-2 区 B-2 区	10.3 x 12.6	2	広口壺・甕：1827～1829	2点胎土異なる (白色・橙色) 埋土上面：布留～後期あり
	方形周溝墓 6	1289 溝	B-2 区	13.1 x (8.7)	5	広口壺・小型鉢・(底部)：1833～1836 濃石：S55	(底部)：胎土生駒西麓産 (埋土上面：庄内新～布留古遺物あり) → 図 145：892 (有孔鉢)
	方形周溝墓 7	1290 溝	B-2 区	11.5 x 9.4	3	(1) 広口壺：1837 (上面) 無頸壺・広口壺：1830～1832	(埋土上面：庄内新～布留古遺物あり) → 図 145：890 (高杯)、891 (小穴鉢)、893・894 (庄内新壺)
方形周溝墓東群	方形周溝墓 9	980 溝	C-5 区	(一辺 3.5m 以上)	1	広口壺：1852	広口壺 (1852)：方形周溝墓 9・10 接続部
	方形周溝墓 10	979 溝	C-5 区	(一辺 4.4m 以上)	▲		
	方形周溝墓 11	1311・1312 溝	C-6 区	(4.8 x 5.9)	▲		破片少量あり (1312 溝)
	方形周溝墓 12	1312・1329・1338 溝	C-6 区	11.6 x 9.2	▲		
	方形周溝墓 13	1329・1344 溝	C-6 区 C-7 区	10.1 x 9.3	6	甕・壺 (底部)：1846～1848 砥石・石臼：S59～S61	砥石：仕上砥 (S59)・粗砥 (S60) セット
	方形周溝墓 14	1315・1317 溝 1359・1360 溝	C-6 区	9.5 x 8.8	2	甕：1849・1850	破片少量あり (1317 溝)
	方形周溝墓 15	1317・1358 溝	C-6 区	(11.7) x 10.2	▲		

※ ▲：破片資料；未図化資料あり △：周溝墓に直接伴わない遺物あり



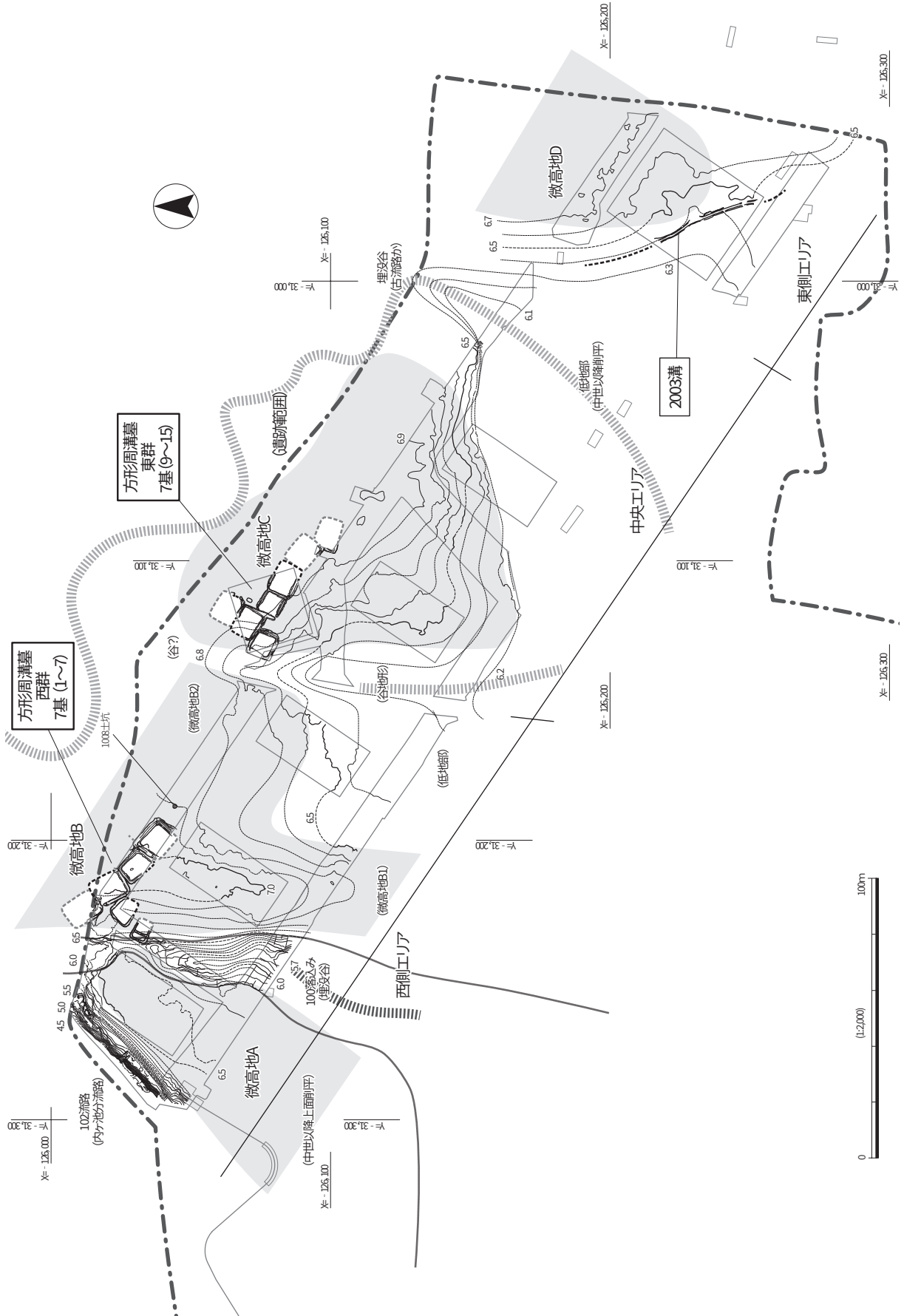


図 273. 弥生時代遺構 調査地全体平面図



図 274. 方形周溝墓西群 平面 (1)

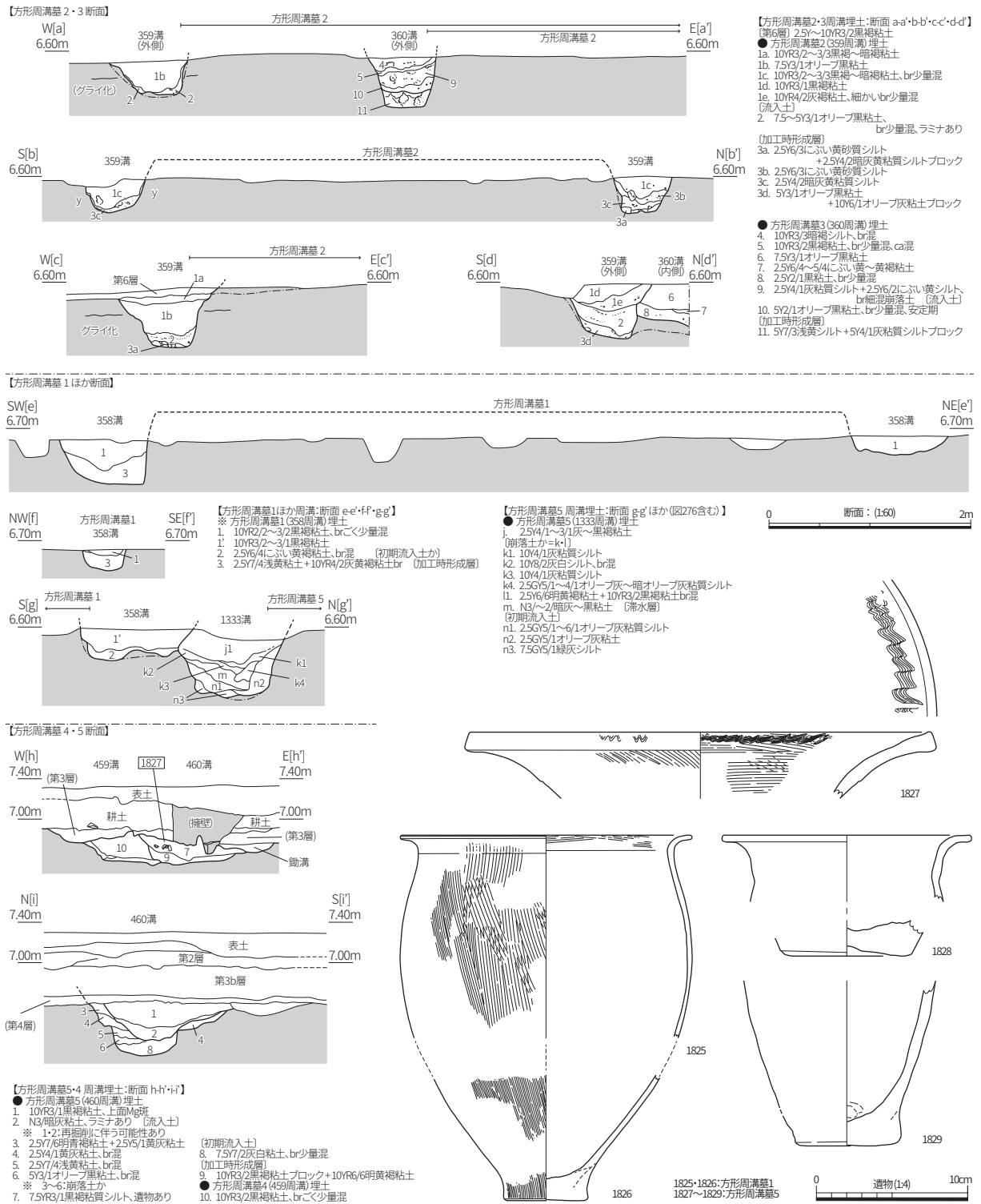


図 275. 方形周溝墓西群 断面(1) 出土遺物(1)

6、南西の周溝墓1・2・3、北西の周溝墓4にむかって緩やかに地形が下がるが、地形の高低差に沿って各周溝墓の周溝の基底面のレベルも下がる。このため現在は、中世以降の削平と近世以降の堆積によってほぼフラットな景観を呈しているが、方形周溝墓群の築造当時は地形の傾斜に沿って周溝墓が列状・階段状に並ぶような景観が復元できる。このようなあり方は、低地に立地しながらも丘陵上にある方形台状墓群の築造イメージに近いが、これについては淀川の沖積作用によって形成された幅の狭い微高地の形状に制約を受けた結果と理解したい。

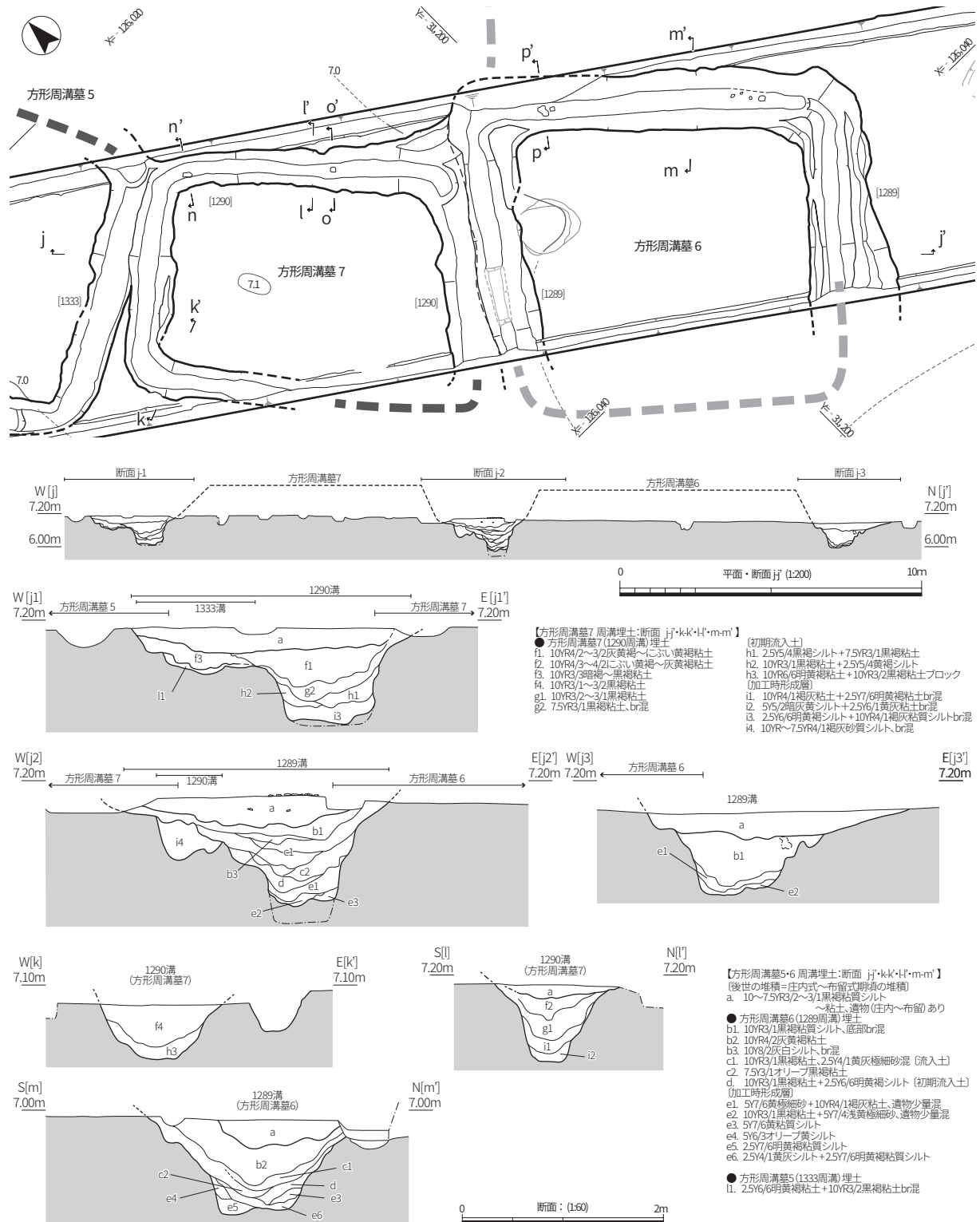


図 276. 方形周溝墓西群 平面 (2)・断面 (2)

**築造順序** 周溝埋土の断面の切り合いから、〔西2群〕では北西から南東にむかって周溝墓4→5→7→6の順で、〔西1群〕では北東から南西にむかって周溝墓5→1→3→2の順でそれぞれ築造されたと判断できる。基本的には、高所部から低地部へむかって順次築造されているが、北西端の方形周溝墓4・5では地形の傾斜と築造順が逆転している。ただしこれについては、方形周溝墓4の大部分が北側未調査地に拡がるため、旧地形と基底面のレベルに検証の余地があり、方形周溝墓4の方が周溝墓5よりも



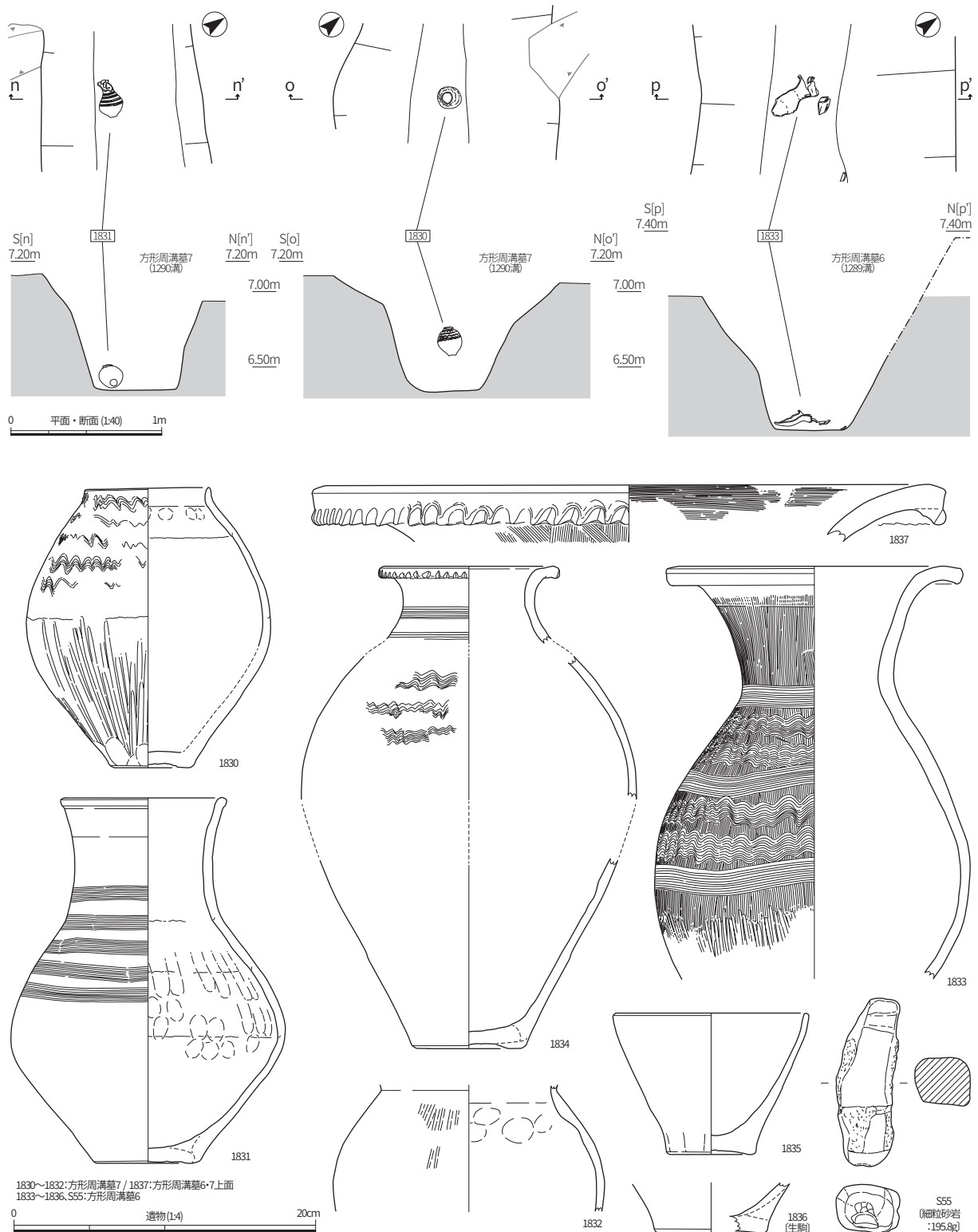


図 277. 方形周溝墓西群 遺物出土状況・出土遺物 (2)

高所部に位置する可能性がある。なお方形周溝墓3・2は、同一地点での拡張と認識でき、断面 d-d' から内側の 360 溝が外側の 359 溝に先行するため、方形周溝墓3→2の順で築造されたことがわかる。

**墳丘規模・構造** 南東方向の〔西2群〕の方形周溝墓は、相対的に規模が大きく、いずれも一辺が10 m以上であるのに対し、南西斜面の〔西1群〕の方形周溝墓はひとまわり小ぶりで、規模は一辺6～8 m前後をはかる。また西群の方形周溝墓は、いずれも平面が長方形で、〔西2群〕では短辺に対し

て長辺は約2 m長く、縦長・列状に並ぶのが特徴である。それに対し〔西1群〕では、方形周溝墓5と向きを揃え、斜面の傾斜に沿って横長・列状に並んでいる。このようにグループごとに墳丘規模や平面の向きに明確な違いがあるため、秩序だった造墓活動がおこなわれていることは明らかである。ただし墳丘の規模差が階層差を反映するかどうかは、埋葬施設の情報など検討材料が不足しており、はっきりしたことはわからない。

周溝については、残存する範囲での幅が最大で1.8 m〔断面 m-m' 付近〕、深さは最大で1.11 m〔断面 j2-j2' 付近〕をはかる。周溝の断面形状は逆台形を呈し、基底面の幅は0.5～0.8 mをはかる。埋葬施設が完全に削平されているため、本来の高さは検出面よりも1 m以上は高いことが予想され、周溝基底面から墳丘頂部まで2 m以上の高まりがあったとみて大過はない。周溝底は傾斜があり、高さが一定ではなく、段差がみられる箇所もある。特に〔西2群〕の列状に並ぶ方形周溝墓5・7・6は、いずれも南東コーナ付近に段があり、南東側よりも北東側が一段下がる点が共通している。こうした傾斜や段差の意味するところは明確ではないが、概ね地形の傾斜に沿って高低差がみられる傾向にあるため、旧地形の影響とみて大過はないだろう。その一方で上述した〔西2群〕の列状の3基は、周溝底の構造が共通しており、さらに東側コーナーの段差上段付近が最も浅い点も共通する。なお最も南に位置する方形周溝墓6では、東側コーナー隅角の傾斜が緩く、段差もあるため、墳丘への進入口となっていた可能性を指摘できる。また〔西2群〕の3基の周溝墓では、周溝の埋土断面からは明確な切り合いが認められ、先行する北西側よりも南東側の新しい周溝が深く掘り込まれている〔断面 j-j'〕。その意図については推測の域をでないが、先行する周溝墓との断絶などが推測されるところである。さらに断面からは、先行する周溝がある程度埋没したのち、隣接する周溝が新たに掘削されたことがわかる。このことは次の周溝墓の築造まである程度の時間幅があったことを示しており、具体的な期間は不明であるが、造墓活動はある程度、長期に亘って続けられたことを示唆する。なお、方形周溝墓7の西側コーナーが部分的に周溝が途切れているように見えるが、これについては上面の大規模な造成によって肩部が削平を受けたことが要因と推測でき、本来であれば周溝は全周していたとみるのが妥当である。

盛土については、上面が大幅に削平されているためか、検出することができなかった。本来の盛土量は不明であるが、微高地頂部付近の基盤となる沖積粘土層〔第8層〕を深く掘り込んでいることは明らかであり、墳丘の大部分を基盤層を削り出して成形していたとみてよい。

**遺物の出土状況** 周溝埋土から出土した遺物の量は極めて少ない。そのため周溝墓の発見当初は、古墳時代の集落が隣接することから、古墳時代に下る可能性を想定して調査を進めていた。さらに周溝の埋土上層・上面から、庄内式～布留式古段階頃の土器がまとまって出土したため（図145：890～895、P202）、古墳時代に下る可能性がより一層強まったが、埋土の掘削を進めると、埋土中から少量ながらも弥生土器の出土がみられるようになった。そして周溝底からは、供献土器とみられる復元率の高いⅡ様式の弥生土器が出土したため、弥生時代中期前葉に遡ることが確定した。

供献土器が出土した方形周溝墓は、〔西群2〕の方形周溝墓5・7・6、〔西1群〕の方形周溝墓1の4基に限られる。出土地点は、周溝墓5は北西側（1827）、周溝墓7・6は北東側（1830・1831、1833～1836・S55）、周溝墓1は北東コーナー（1825・1826）で、大まかには北側から出土する傾向がみられる。器種については、〔西1群〕の周溝墓1からは甕が出土したのに対し、〔西2群〕の3基では壺が多く出土するといった違いがみられる。さらに周溝墓7・6と周溝墓1では、復元率が高い資料が多いが、周溝墓7のほぼ完形の無頸壺（1830）を除くと部分的な欠損や破砕があり、意図的な破壊

を受けた上で投棄されていることがわかる。その一方で周溝墓5の壺は、口縁部のぼらぼらの破片で量も少ないが、これについては北側調査区外に遺物が拡がる可能性が高いため、現状では明確な判断ができない。

供献土器は、周溝底から出土したものが多い。その一方で〔西2群〕の方形周溝墓7・6では、周溝底が一段深く下げられた周溝北東側で供献土器などが出土しているが、周溝底から出土したもの(1831、1833・1835・S55)のほかに、底面からやや遊離した状態で出土したもの(1830、1834・1836)がみられる。このことは遺物の投棄に時間差があることを示しているが、弥生時代の方形周溝墓では埋葬施設が複数あることが一般的であるため、底面の供献土器が初葬時の、中層出土遺物が二次的な埋葬時における供献土器と理解しておきたい。このように〔西2群〕の3基の方形周溝墓は、供献土器の出土状況に加え、上述したように周溝の形状や構造、先行する周溝墓と新規の周溝墓との関係性など、共通点が多くあり、特に葬送儀礼に関わる情報が多く得られた点が重要である。

**出土遺物** 方形周溝墓1・5・7・6の出土遺物を図化した。周溝墓1に伴う甕の口縁(1825)と底部(1826)は、周溝底からの出土で同一個体と考えられる。周溝墓5では、北東側の周溝底出土の内外面に波状文を施す壺口縁(1827)と、周溝南東側の埋土下部出土の甕(1828・1829)があり、甕は摂津に特徴的な白色胎土の(1828)と、石英・長石・チャートを顕著に含む在地胎土の(1829)がある。周溝墓7に伴う供献土器には、周溝北東側の埋土下部出土の無頸壺(1830)と底部出土の壺(1831)があり、外面波状文を施す無頸壺(1830)は摂津の白色胎土、直口気味に口縁がのびる壺(1831)は底部に木葉文の痕跡がある。ほかには、外面タタキの壺肩部の破片(1832)があるが、これについては庄内式期に下る混入品の可能性が高い。周溝墓6に伴う遺物では、周溝北東側の底から広口壺(1833)・小型鉢(1835)・棒状の石製品(S55)が、埋土下部から広口壺(1834)・底部(1836)がそれぞれ出土しており、いずれも供献土器と認識できる。広口壺(1833)と頸部が短い広口壺(1834)は、いずれも摂津特有の白色胎土で、広口壺(1833)は底部が意図的に破壊され、頸部が短い広口壺(1834)は全形復元ができるものの破片数が少ない。小型の鉢と考えられる(1835)は、内面に煤が明瞭に付着し、底部(1836)は生駒西麓産の搬入品である。棒状の石製品(S55)は、使用痕が明瞭で、潰石または敲石と考えられる。周溝墓6・7の周溝上面から出土した大型の広口壺(1837)は、口縁部に特徴的なユビオサエで刻み目状の装飾を施す。これら遺物の時期については、いずれも摂津Ⅱ-2・3様式におさまるため、方形周溝墓西群の造墓活動の時間幅を示す。

**1008 土坑** (図278) 方形周溝墓の南東10mに位置する径1.5mの土坑で、方形周溝墓と同時期のⅡ様式の壺の口縁(1838)と底部(1839)が出土した。深さは0.44mで、埋土は上半〔埋土1〕が黒褐粘土を主体とし、底部〔埋土2〕は加工時形成層とみられる。出土遺物が弥生土器に限られるため、弥生時代の遺構と判断できるが、方形周溝墓群との関連は不明である。

**包含層ほか周辺出土遺物** (図278) 包含層中からの弥生土器の出土はごく稀であるが、方形周溝墓が位置するB-2区では関連する遺物の出土が少量ながらもみられる(1840～1844)。ほかの調査区では極めて限定的であるが、P4区出土の大型壺底部(1845)が比較的残りが良い。基本的には方形周溝墓と関わるⅡ様式に比定できるが、生駒西麓産の口縁部(1844)はⅣ様式に下る資料で、これについては性格は不明である。

土器以外では、サヌカイトの石鏃や剥片の出土が一定量みられる。A-2区やP6区など、浅谷(100落込み)や微高地A周辺での出土が多い傾向があり、方形周溝墓2の周溝南西コーナー付近の埋土から

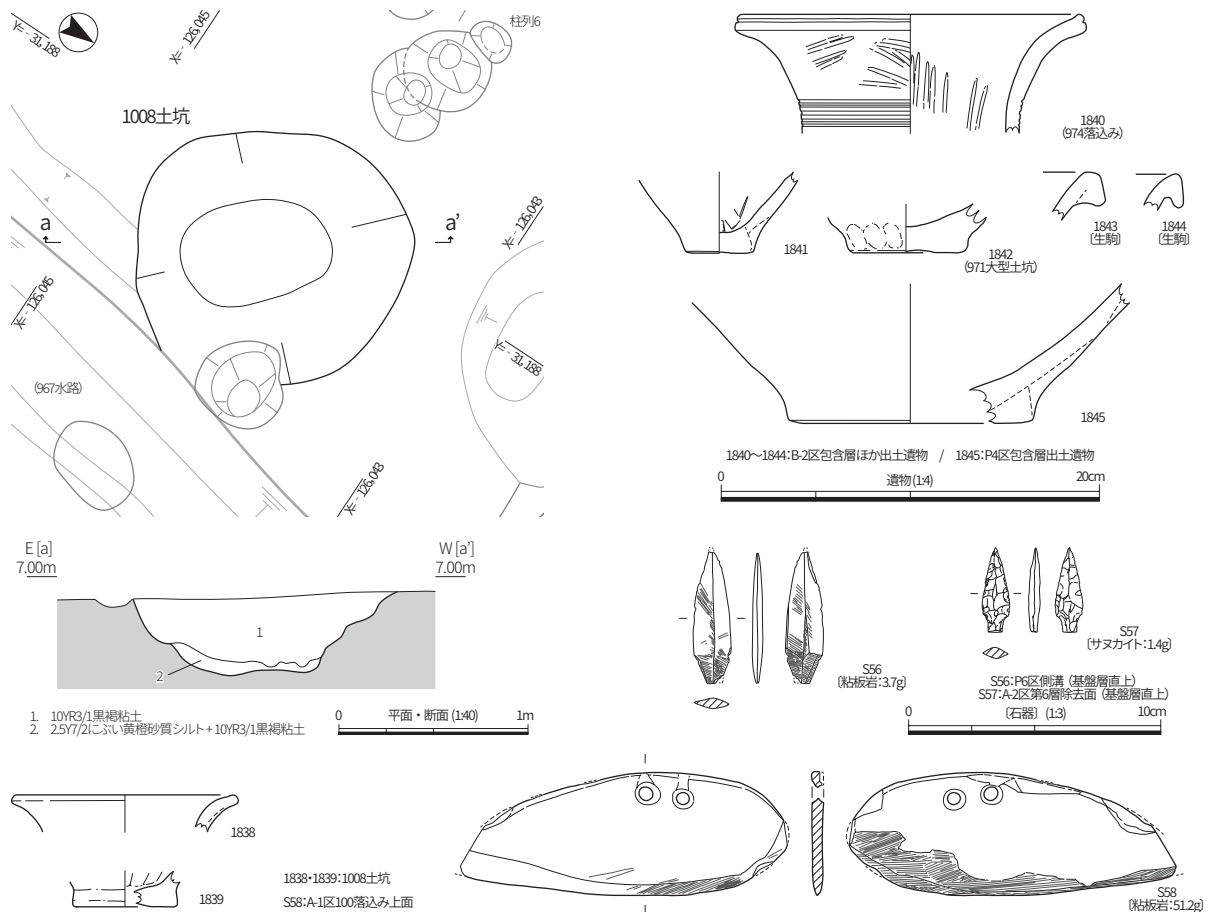


図 278. 1008 土坑 平面・断面・出土遺物、西側エリア包含層 出土遺物

も剥片の出土がみられた。ただし縄文時代晩期の土器も出土するため、弥生時代に下るものは少ないことが予想されるが、有茎式の (S57) は弥生時代に下る可能性が高い。サヌカイト以外では、両面に錆がある粘板岩製の磨製石鏃 (S56) があり、これについては隣接する井尻遺跡で類似資料が出土しており、中期後葉に下る可能性が高い。石鏃以外では、A-1 区浅谷 (100 落込み) 埋土上面から粘板岩製の石庖丁 (S58) が 1 点出土しており、低地部が水田として利用されていた可能性が示唆される。

### 3. 方形周溝墓東群 (中央エリアの遺構・遺物：図 279～282)

微高地 C の北西で検出された 7 基の方形周溝墓で、C-6 区・C-7 区・C-5 区にかけて分布している。中央エリアの最高所部に立地しており、最も北側の方形周溝墓 11・12 は調査範囲外まで広がる。北東から南西方向に列状にのびる一群〔東 1 群：周溝墓 11・12・13〕と、方形周溝墓 12 を起点に南東方向に列状にのびる一群〔東 2 群：周溝墓 14・15・9・10〕にグループ分けすることができる。このうち〔東 2 群〕の方形周溝墓 9・10 は、ごく部分的な検出に留まっているが、C-6 区の方形周溝墓 14・15 との並びから復元案は妥当と考える。平面形は、やや小ぶりな方形周溝墓 13・14 が正方形に近い形状で、方形周溝墓 12・15・9 は東西方向にやや長い長方形に復元できる。〔東 1 群〕とした北東－南西方向の 3 基は、斜面上方から下方にむかって横長・列状に並ぶのに対し、北西－南東方向の〔東 2 群〕は方形周溝墓 12 と向きを揃え縦長・列状に並んでいる。

**築造順序** 周溝埋土の断面の切り合いから、〔東 1 群〕では北東から南西にむかって周溝墓 11 → 12 → 13 の順で築造されたと判断できる。その一方で〔東 2 群〕では、上面が大幅に削平されて





第4章 遺構・遺物

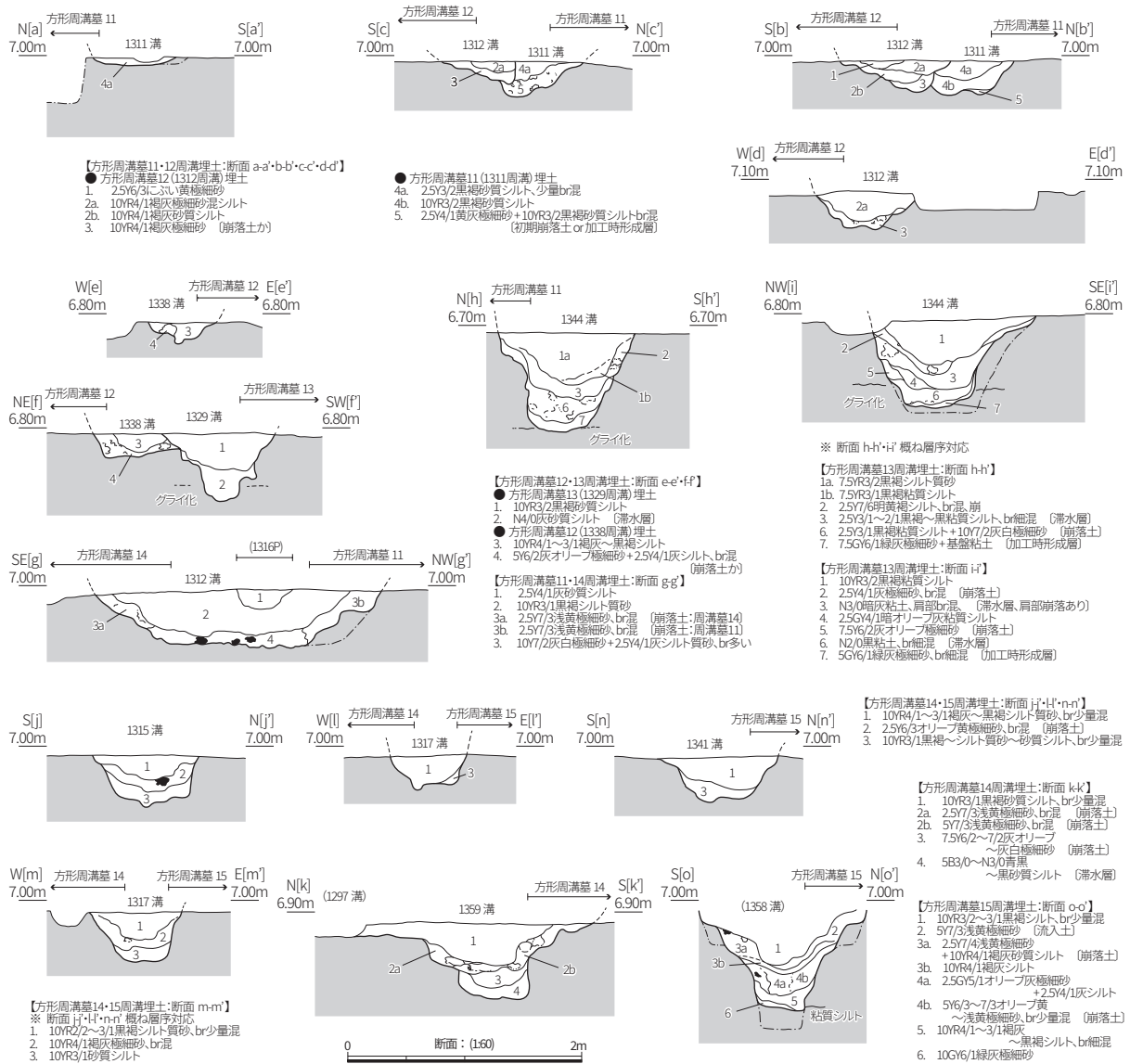


図 280. 方形周溝墓東群 断面 (1)

いたため、周溝は西群よりも明らかに浅く、埋土断面からは築造順序が明確ではない。ただし〔東1群〕や方形周溝墓西群では、高所部から低地部にむかって順に周溝墓が築造されているため、周辺の旧地形の傾斜をふまえると、〔東2群〕は北西側から南東側にむかって周溝墓12→14→15の順で築造された可能性が推測できる。その一方で南東端の周溝墓9・10は、断面埋土の切り合いから周溝墓10→9の順で築造されたことが確実である。このため周溝墓12から周溝墓10までの5基が列状に並ぶものの、南東の2基は周溝墓15までの3基の並びとは築造順序が逆転している。周溝墓15と周溝墓9の間と調査区北側が未調査のため、北西側の3基と南東側の2基の関係が不明確であるが、周辺の微地形から判断する限り方形周溝墓9・10の北側に谷状の落込みの存在が想定でき、南東側では周溝墓10の方が北西の周溝墓9より相対的に高い位置に立地する可能性が高い。これについては、周溝墓10よりも周溝墓9の方が明らかに周溝が深い点からも首肯できるため、高低差にあわせて周溝墓10から周溝墓9の順で築造されたと推測できる。なお周溝墓15と周溝墓9の先後関係については、手がかりがないため不明である。

**墳丘規模・構造** 墳丘全体の規模が復元できるものは、周溝墓12・13・14に限られる。周溝墓12が

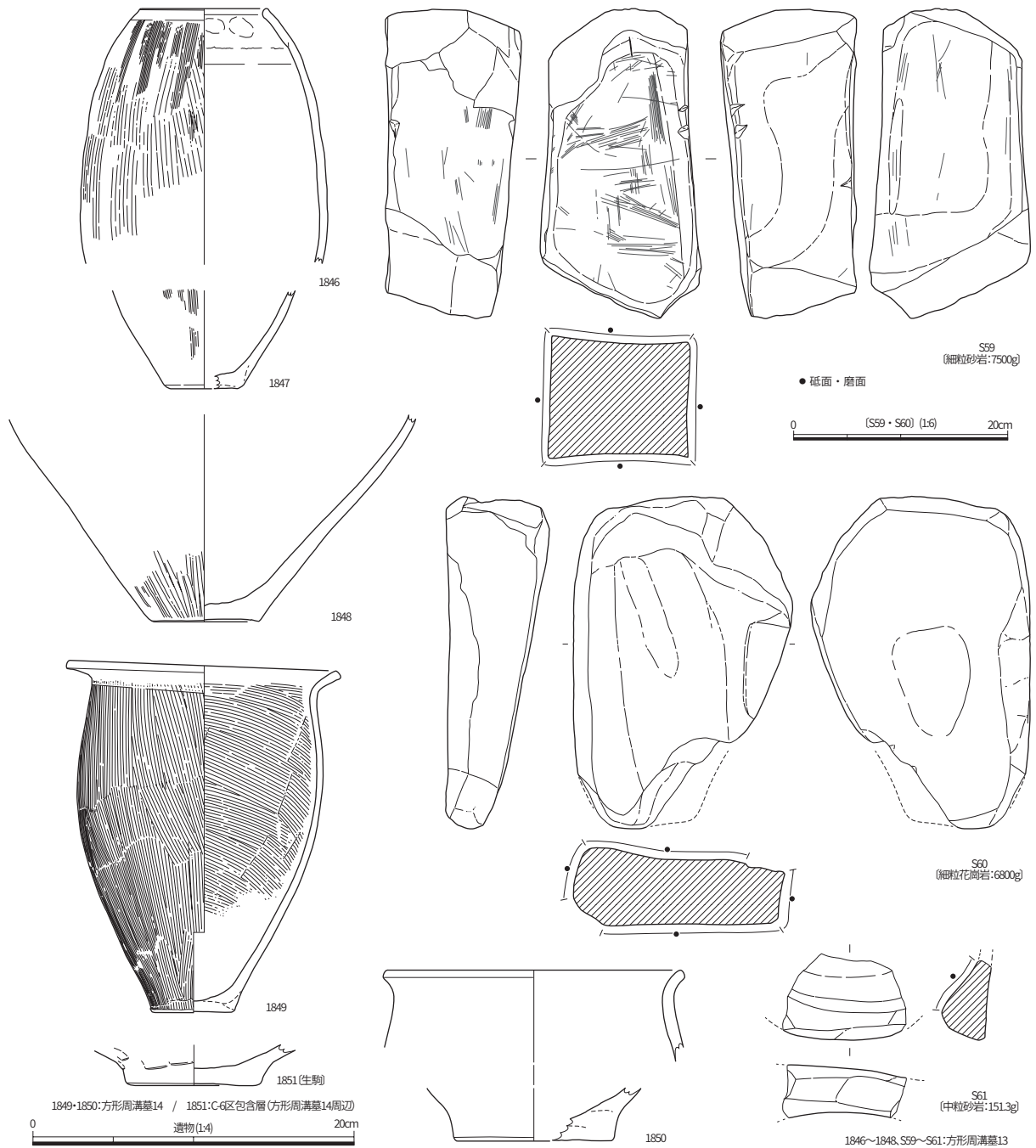


図 281. 方形周溝墓東群 出土遺物 (1)

一辺 11.6 m でやや大きく、全形が不明確ではあるものの周溝墓 15・9 も近い規模に復元できる。そのほかは、いずれも 10 m 前後の規模であるため、西群と違って極端な規模の差はみられない。

周溝については、深さが最大で 0.85 m で〔断面 h-h'・o-o' 付近〕、西群に比べて浅い。さらに北端の方形周溝墓 11 は、北側で深さが 0.08 m しかないため〔断面 a-a' 付近〕、上面が著しく削平されていることがわかる。このため検出幅についてはあくまで参考値であるが、残存する最大幅は 2.0 m をはかる。周溝の断面形状は、逆台形を呈するものが多く、基底面の幅は 0.2 ~ 1.0 m まで幅がある。埋葬施設・盛土は残存しておらず、周溝底から墳丘頂部までの高さも不明である。また周溝底は、西群と同様に高さが一定でなく、段差もみられる。地形の傾斜に沿って周溝墓ごとに底の標高に高低差があり、北端の周溝墓 11 と南西端の周溝墓 13 では 1.2 m、南東の周溝墓 15 とは 0.9 m の比高がある。このこと

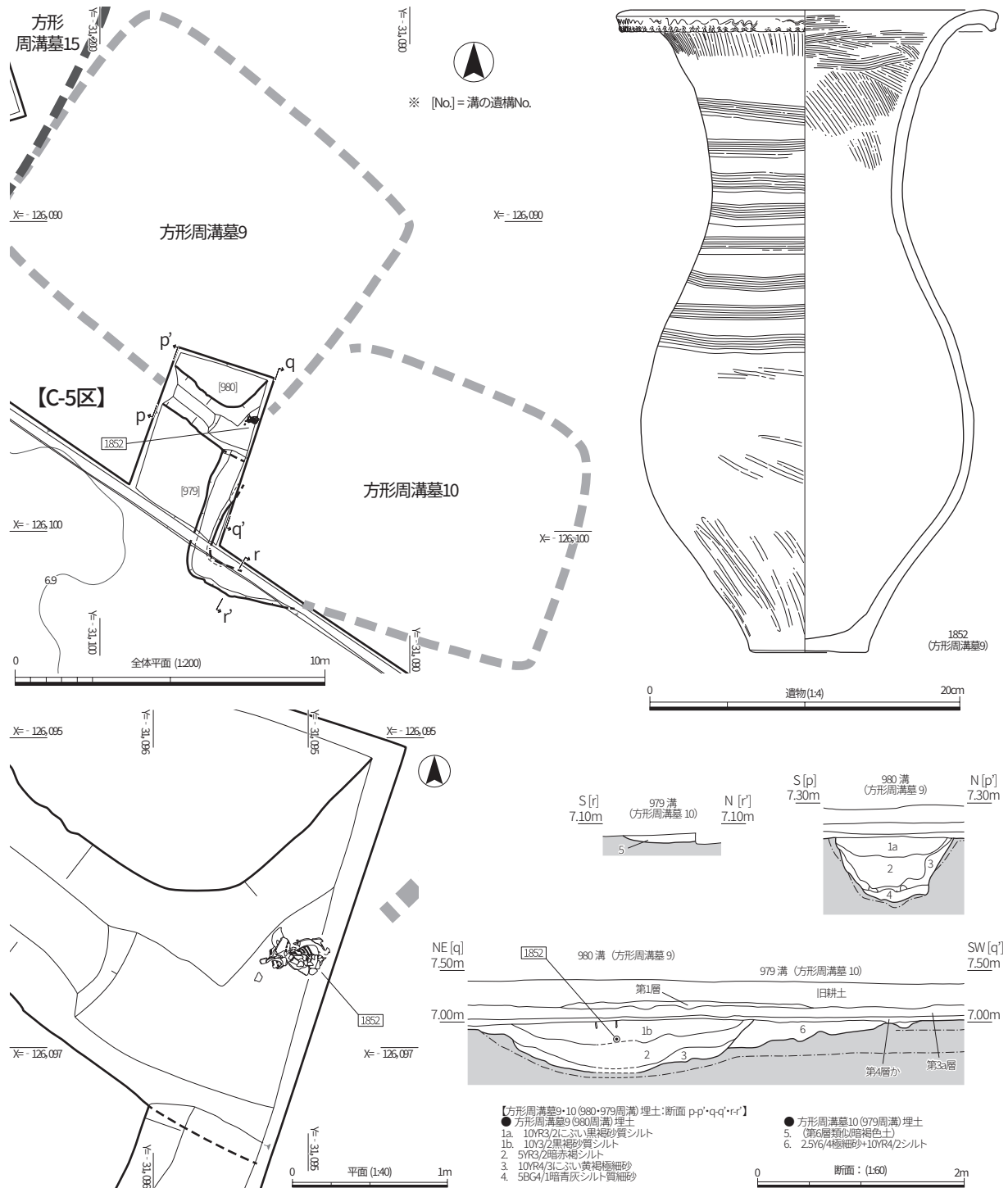


図 282. 方形周溝墓東群 平面・断面・出土遺物 (2)

から列状に並ぶ方形周溝墓群は、明確な段差をもって階段状に並んでいたことがわかる。

**遺物の出土状況** 方形周溝墓の東群では、西群と同様に埋土からの遺物の出土量は少ないが、周溝墓13・14から図化可能な遺物が一定量出土している(1846～1851、S59～S61)。西群では復元率の高い遺物が少数ながらもみられたが、東側では完形近くまで復元できる土器は周溝墓14の甕(1849)と周溝墓9の広口壺(1852)に限られる。特に周溝墓9の広口壺は、埋土中層から潰れたような状態で出土しており、さらに体部中央に欠損部があるため意図的に破碎された可能性が高い。また周溝底から遊離しているため、周溝墓の築造から一定期間時間を置いた上で投棄された供献土器と判断できる。



さらに周溝墓 14 の底面から出土した甕 (1849) にも同様に欠損部があり、こちらも意図的な破砕を受けて供献されたと解釈できる。土器以外では、砥石が 2 点出土しており、仕上砥 (S59) と粗砥 (S60) がセットで出土している。いずれもかなり使い込んだ痕跡があり、実用品の供献の事例として注目される。

**出土遺物** 方形周溝墓西群に比べると、東群に伴う遺物は相対的に少ない。周溝墓 13 に伴う遺物では、壺・甕 (1846～1848)、砥石や石臼 (S59～S61) などがあるが、土器では復元率の高い供献土器はない。その一方で石製品は、顕著な使用痕がみられる実用の砥石が 2 点ある (S59・S60)。きめ細かい仕上砥 (S59) は砂岩製、目の粗い粗砥 (S60) は花崗岩製で、仕上砥 (S59) は砥面 4 面が、粗砥 (S60) は表面・裏面の 2 面が使用に伴って湾曲している。周溝墓 14 に伴う遺物には、周溝底から出土した供献土器の甕 2 点 (1849・1850) があり、ほかに周辺包含層から出土した底部 (1851) がこの周溝墓 14 に伴う可能性がある。このうち全形が復元できる甕 (1849) は、外面体部上半と内面下半に煤が明瞭に付着しており、実際の使用を伴っている。やや離れた位置にある C-5 区の方形周溝墓 6 に伴う広口壺 (1852) は、全形が復元でき、頸部～体部上半にかけて直線文を、口縁部には波状文と刻み目を施す。

これらの遺物の時期は、西群と同様に摂津Ⅱ-2・3 様式におさまる。そのため方形周溝墓東群は、西群と同時期または近い時期に造墓活動がおこなわれたことを示す。

**包含層ほか周辺出土遺物** 中央エリアでは、包含層中や周辺遺構埋土から弥生土器がほとんど出土していない。ほかでは、C-6 区の竪穴建物 37 下部から出土した弥生時代後期の壺底部と器台 (図 213 : 1483・1484、P287)、D-2 区 168 溝出土の壺体部 (図 201 : 1444、P271) があり、C-6 区の壺底部と器台については同時期の遺構・遺物がほとんどないため、位置づけが明確でない。168 溝の壺体部は、方形周溝墓群と同時期で、出土状況から原位置を保っている可能性がある。上述したようにこの溝は、調査区を縦断する古墳時代の集落内排水溝と認識しているが、遺物がほとんど出土しないため、弥生時代に遡る可能性も考慮する必要があるだろう。

#### 4. 東側エリアの遺構・遺物 (2003 溝ほか : 図 283)

東側エリアにおける弥生時代の遺構としては、P14 区南半で検出された 2003 溝がある。飛鳥時代の 1996 溝の下部で検出された溝で、T.P.+6.4～6.5 m の等高線に沿って北西―南東方向にのびる。埋土からの遺物の出土がなかったことから、時期を特定するために埋土中に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定 (AMS 法) を実施したところ、紀元前 4 世紀前半～3 世紀前半頃という年代値が得られたため、弥生時代中期前葉頃に遡ることが判明した【第 5 章第 2 節】。

検出長は 40 m に及び、幅は検出面で 1.2～1.5 m、底部で 0.3～0.4 m をはかる。深さは最大 0.7 m で、断面形状は上部が大きく開き、下部は箱状逆台形にすぼまる。埋土上半には、極細砂や細かいブロックの流れ込みがみられるが、基本は泥質の暗色土を主体とするため、滞水状態で徐々に埋没したことがわかる。また下部には、加工時形成層とみられるブロック土の堆積が確認できるため、人為的な遺構であることは確実である。溝底の標高は、T.P.+5.8～5.9 m におさまる。底面がほぼフラットなため、流水方向は不明であるが、恒常的な流水はないため、排水路などの性格が推測される場所である。西側エリア・中央エリアの方形周溝墓群とほぼ同時期の遺構であるため、周辺の土地利用を考える上で重要な遺構である。なお上述したように、溝の埋土からの遺物の出土はない。周辺包含層中からも、弥生時代の遺物はほとんど出土しておらず、唯一 P14 区南東側溝から出土した底部 (1853) を図化した。

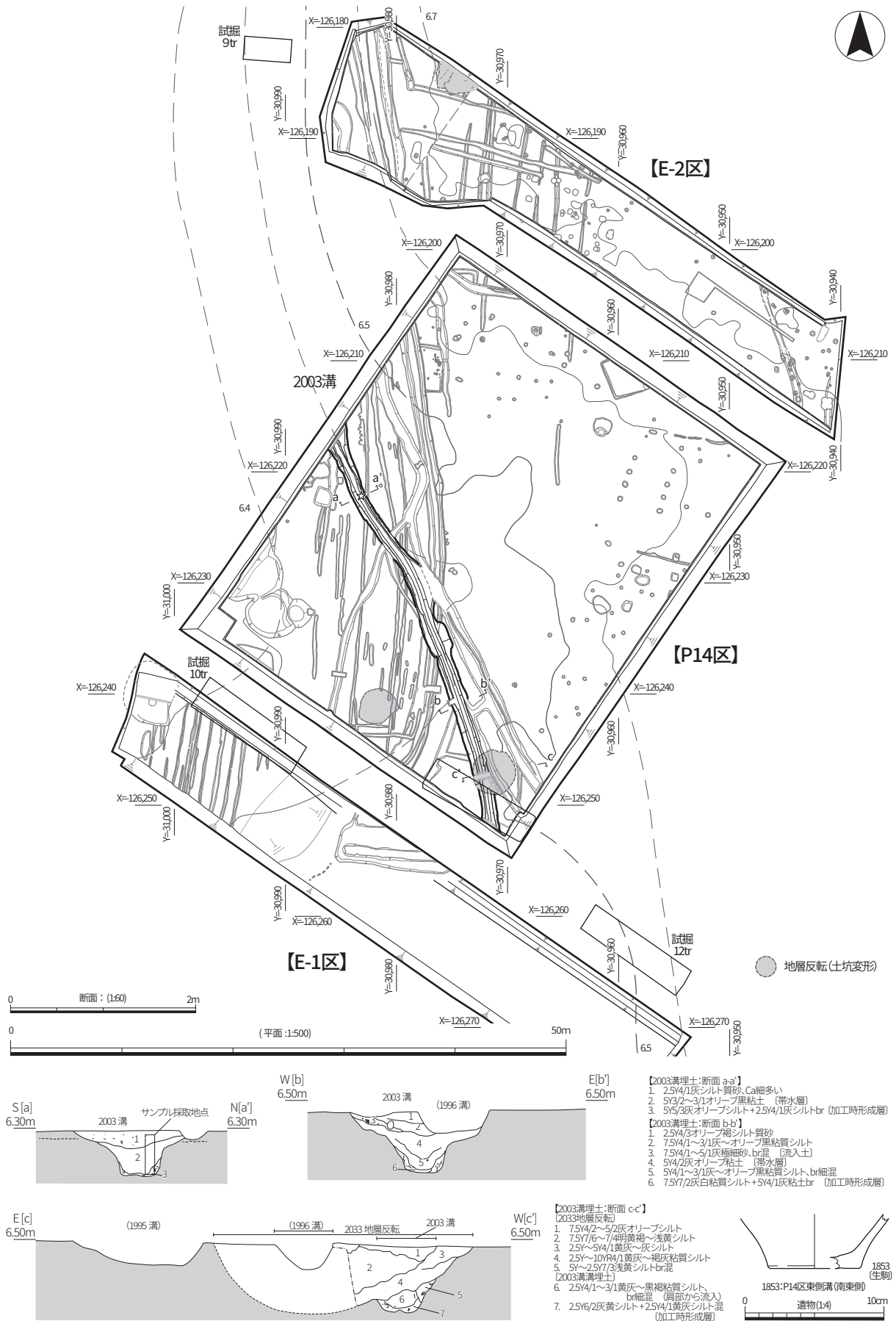


図 283. 東側エリア 2003 溝 平面・断面、P14 区出土弥生土器

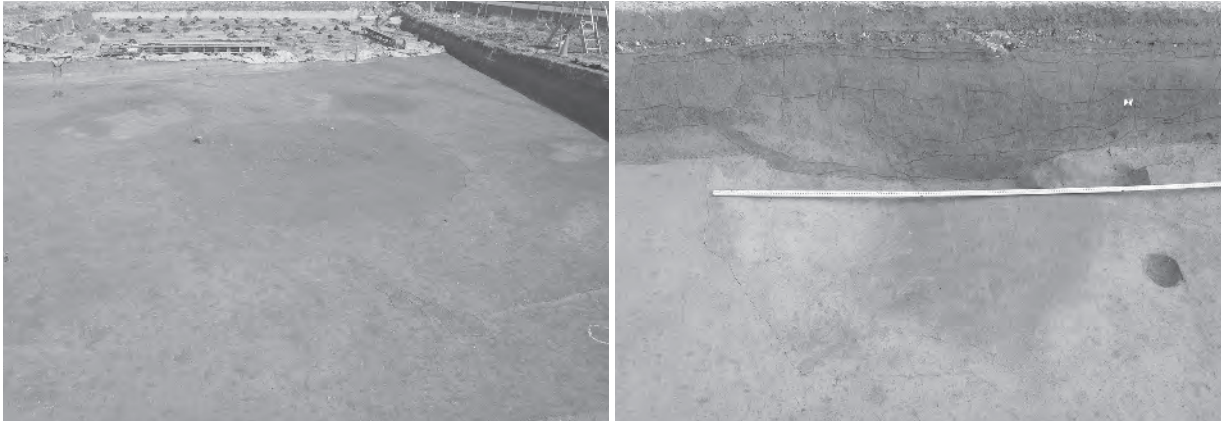


写真3. 土坑状変形検出状況写真 (左:P4区 右:E-2区)

### 5. 地層反転痕跡 (図 283、写真 3)

東側エリアでは、地層反転の痕跡がいくつか確認されている。径3～4m、掘削したものでは深さ0.5mほどの規模のものが多く、いわゆる「土坑状変形<sup>3)</sup>」とされる遺構と類似した形状・堆積状況を示しており、地震痕跡の可能性が推測される。西側エリア P4 区などの事例も含め、調査区低地部での検出事例が目立つ (図 148)。これに伴って遺物が出土した事例がないため時期は明確でないが、P14 区では 2003 溝の上面で、P4 区では古墳時代の遺構の下部で検出された事例があるため、弥生時代中期～後期のものが多いことが予想される。

### 6. 小結

今回の調査で検出された 14 基の方形周溝墓は、埋葬施設が削平されていたが、周溝が良好な状態で検出された。供献土器の出土は顕著でなかったが、方形周溝墓の立地や構造、供献遺物の出土状況、築造順序などに一定の秩序や規範を見出すことができ、このことは葬送儀礼を復元するための一助となるだろう。本遺跡が淀川の河畔・中洲という立地にあるため、まとまった方形周溝墓の発見は摂津東部地域における貴重な調査事例といえる。特にこの地域では、安満遺跡のほかにも、梶原西遺跡、梶原南遺跡、神内遺跡などで同時期のまとまった方形周溝墓の調査事例があり、地形や周辺環境などの問題も含めて、これらの周辺遺跡との比較検討が重要な課題といえるだろう。

#### 【註】

1) このことは、古墳時代まで方形周溝墓の墳丘の高まりや周溝の痕跡が残っていたこと示す。似たような事例は、近隣の梶原西遺跡の方形周溝墓でもみられ、周溝埋土上層からは古代の遺物が出土している。

川瀬貴子 2015 『梶原西遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 261 集

2) 鹿野壘 2017 『井尻遺跡 2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第 276 集

3) 井上智博 2008 「土坑状変形」『讃良郡条里遺跡VI』(財)大阪府文化財センター調査報告書第 173 集

第7節 縄文時代の遺物 (図284)

明確な遺構は検出されていないが、今回の調査では縄文時代晩期を中心とした時期の土器や、石鏃・剥片が少量出土している(1854～1863、S62～S70)。縄文土器には、口縁端部に刻み目を施す滋賀里Ⅲb式の深鉢(1854)と突帯文をもつ長原式の深鉢(1855～1863)があり、破片10点が確認された。多くは生駒西麓産胎土の搬入品で、これ以外に胎土にチャートを含む在地品(1860・1863)や産地不明の(1859)が含まれる。ほかでは、A-3区の内ヶ池分流路から出土した前期・北白川下層Ⅱa式の土器(図23:90、P44)の存在が特筆され、周辺からの流れ込みの遺物であることから、縄文時代前期に遡る未知の遺跡の存在が推測される。

石器は、打製石鏃・石核・剥片が一定量出土しており(S62～S70)、石材はチャート製の大型石鏃(S68)以外は、全てサヌカイトである。石鏃は、出土したもの全てを図化しており(S62・S63・S67～S69)、ほかに未成品とみられる(S70)がある。石核と剥片は、使用痕があるものや未成品を抽出・図化しており、(S64)が横長剥片、大型の(S66)が石刃石核で、剥片(S65)には使用痕がみられる。

出土地点は、未図化の剥片も含め西側エリアに偏る傾向がみられ、その中でも微高地B1以西での出土が多い。また土器(1856)は、浅谷(100落込み)の下部からの出土で、ほかの遺物も全て第6層より上位から出土している。このことから基盤層〔第8層〕の堆積が縄文時代後期以前に遡る蓋然性が高く、周辺一帯の地形の形成過程を考える上で重要な所見となる。

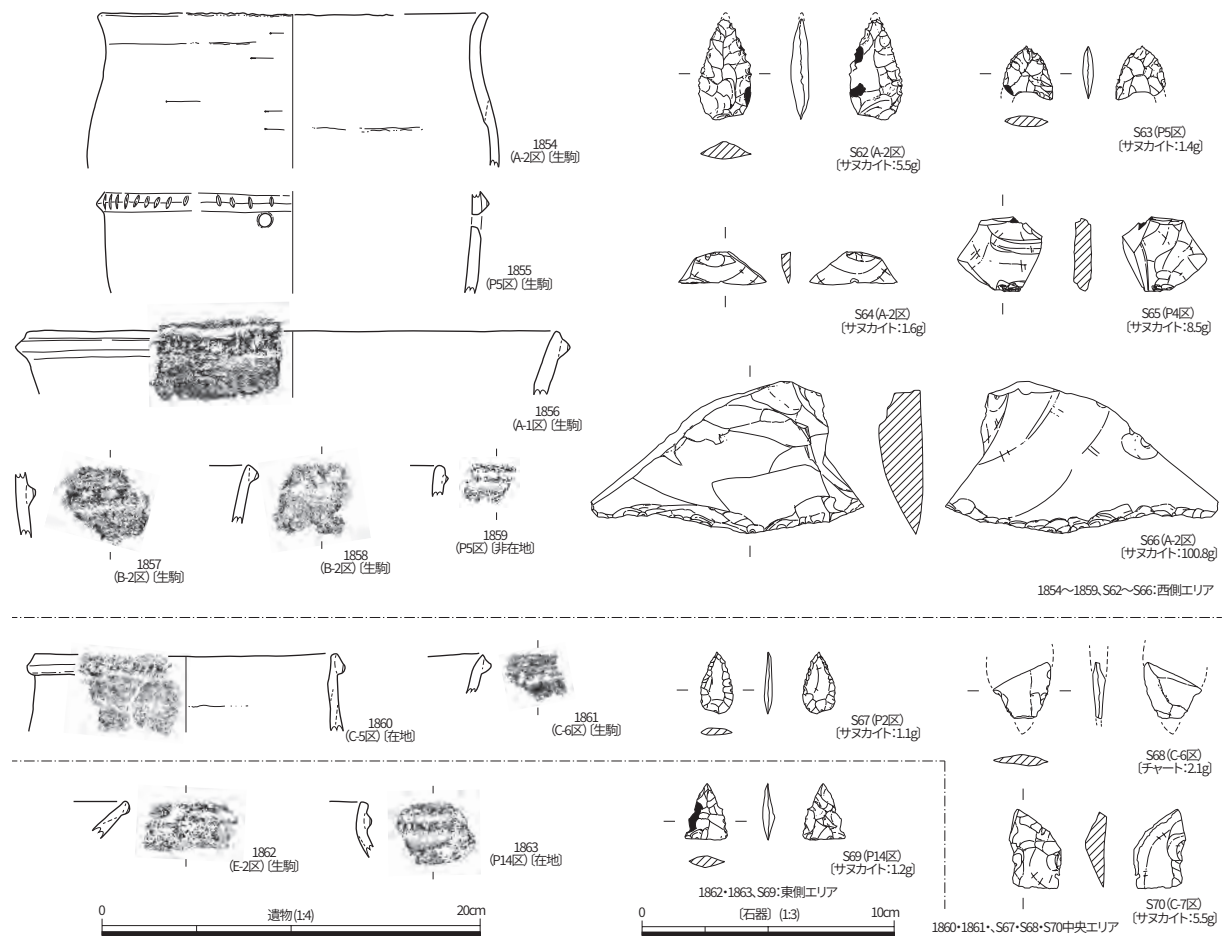


図284. 縄文土器・石器



## 第8節 関西電力電線移設に伴う立会調査（図285・286、写真4）

第1章にて経緯を述べた通り、関西電力の電線移設に伴う工事立会を平成30年11月～平成31年1月にかけて実施した。立会は、本調査A-1区に隣接する内ヶ池水路北側の①地点と、水路を挟んで南西の②地点を対象とし、包含層と遺構・遺物の有無の確認および遺物の回収を目的として実施した（図285）。

①地点では、基盤層（第8層）の上面で径約0.3mの土坑状の落込みを確認したが（写真4：左）、これ以外に遺構・遺物は検出されなかった。そのため立会後は速やかに事業者を引き渡したが、下部の堆積状況を把握するため掘削最深部（T.P.+3.2mまで）の工事に立ち会ったところ、基盤の古土壤層（第9層）の下部で層厚1.4m以上の分厚い粗砂の堆積（第10層）を確認するに至った（写真4：中）。この粗砂（第10層）は、大規模な流路に伴う洪水砂と認識できるが、時期については上層の古土壤層（第9層）の年代が縄文時代早期という年代値が得られており【第5章第2節参照】、それ以前に遡ることは確実である。そのためこの時期には、淀川の主流域が付近一帯に位置していた可能性が高く、淀川の流路の変遷や周辺の地形環境の変化を考える上で重要な所見といえるだろう。

②地点の位置する水路の南西側の区画は、周辺の耕作面よりも約1m高い。この高まりについては、掘削の結果、碎石等を含む現代の盛土であることが判明し、その下部T.P.+6.7～6.2mの範囲で、遺物を含む古土壤層を確認した。古土壤層については、第5・6層に相当する層とみられ、中世～古墳時代後期の遺物の出土を確認した（1865～1872）。さらに古土壤層の上下には、それぞれ第3層相当の耕作土と第8層相当の沖積層の存在が確認でき、西側エリアと同様の層序を示す。このことから北側の微高地A高まりが、②地点付近までのびることが確認でき、居住域が南に拡がることが明らかとなっ

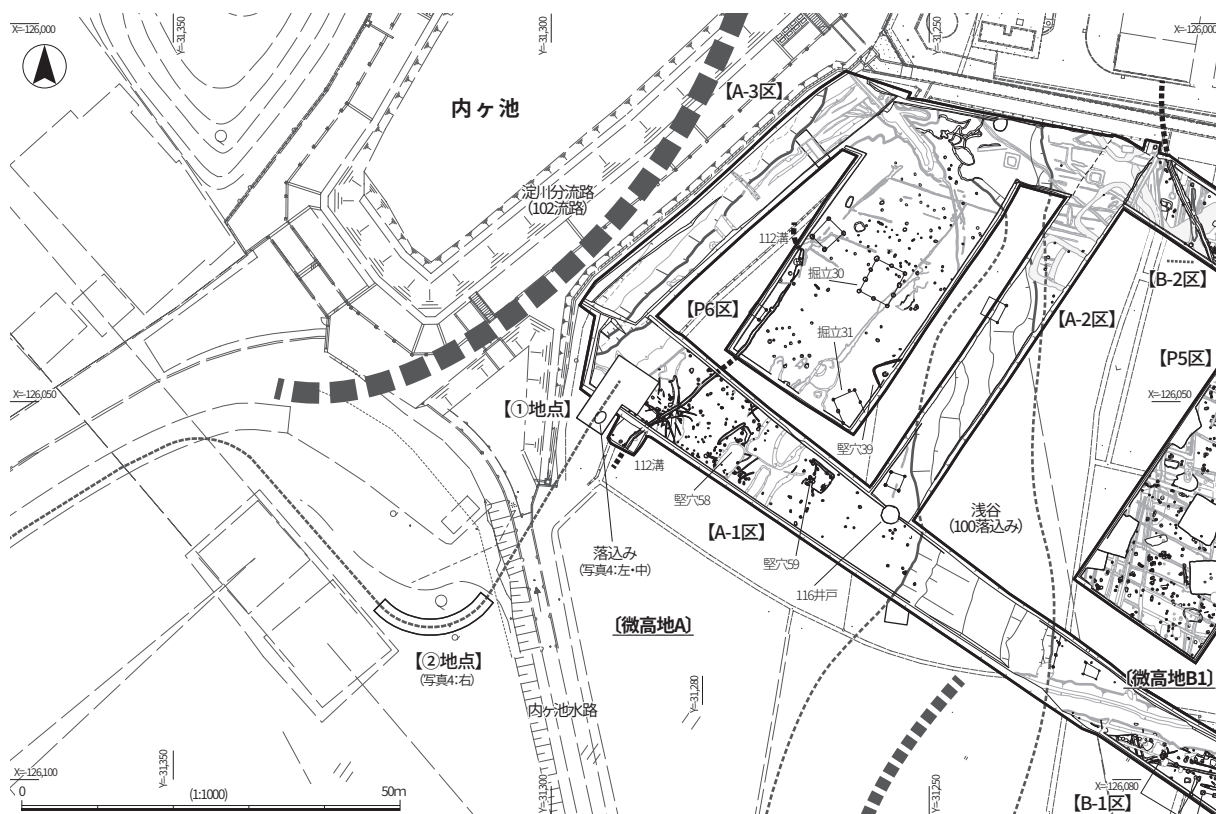


図285. 鉄塔移設に伴う立会調査地点



写真4. 立会風景写真

( 左：①地点落込み検出状況 中：①地点下部洪水粗砂確認状況 右：②地点掘削状況 )

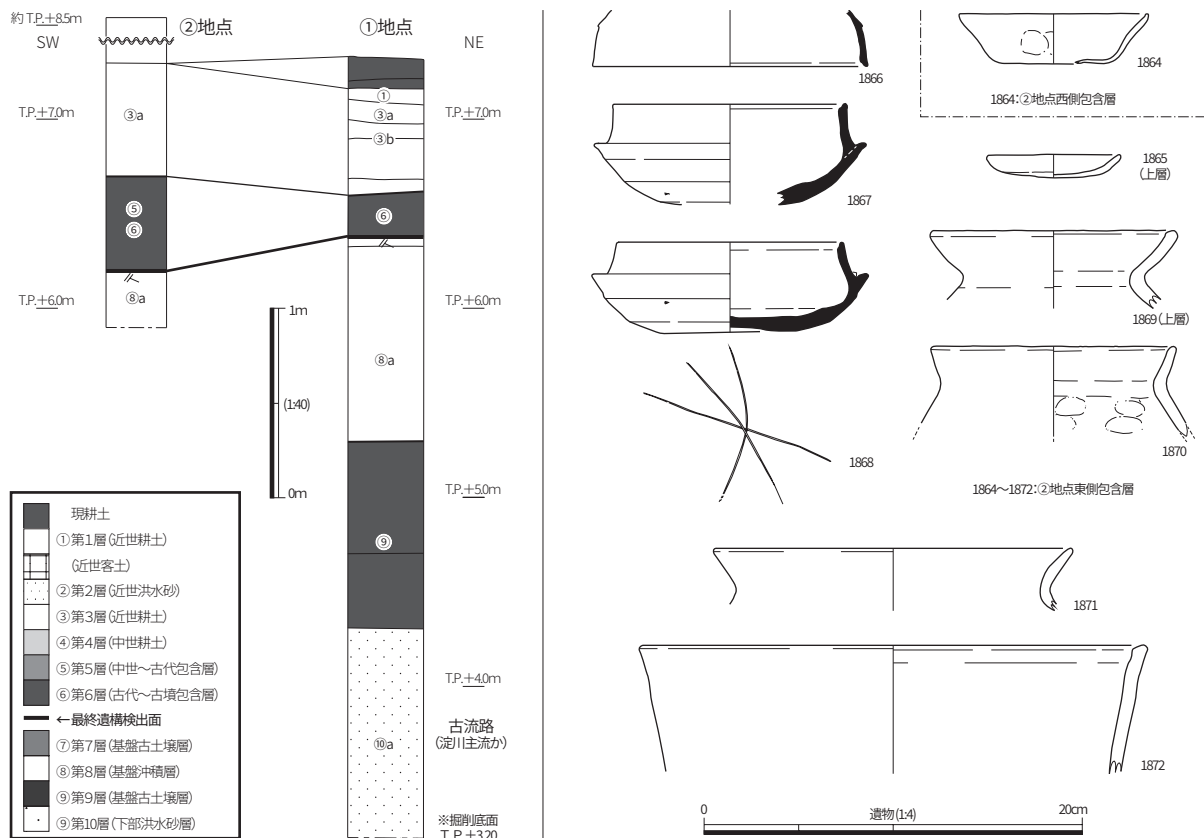


図 286. 立会調査②地点 柱状断面模式図・出土遺物

た。出土遺物には、中世 13～14 世紀代の土師器皿（1864・1865）と、古墳時代中期～後期の土師器・須恵器（1866～1872）があり、このうち土師器皿（1864）が古土壌層上面の耕作土からの出土で、それ以外が古土壌層から出土した遺物である。古墳時代の遺物については、TK208～TK10 型式頃までの遺物を含んでおり、（1866）や（1867）などやや新しい 6 世紀以降の遺物が目立つ傾向がある。また今回の立会では、古墳時代前期以前の遺物が出土していないため、庄内式期・布留式期の居住域が微高地 A の北側に限定されるのか、南側に広がるかは定かではなく、今後の課題といえる。

なお工事掘削は、②地点からさらに西側に延伸するが、内ヶ池水路を跨いで掘削深度を徐々に浅くする設計となっていたため、盛土内におさまる②地点より西側は立会対象外とし、事業者者に速やかに引き渡して立会を完了した。

# 第5章 自然科学分析

## 第1節 分析の概要と目的

年代検討、古環境の検討、遺物の材質および有機質の同定を目的として、各種、自然科学分析を実施した。年代測定は、遺物の出土がなく時期特定が困難な遺構・地層の年代の特定、出土遺物の年代の絞り込みを目的に放射性炭素年代測定を実施した（第2節）。

古環境については、人間活動と周辺の環境に関わる通時的变化を検討するため花粉分析（第3節）、大型植物遺体同定分析（第4節）、昆虫遺体の同定分析（第5節）を実施した。

また今回の調査では、井戸や土坑などから土器が豊富に出土し、種子や動物遺体を伴う事例がいくつかみられた。これらは集落内で執り行われた祭祀儀礼の実態を考える上で重要であり、その内容を明らかにするために大型植物遺体同定分析（第4節）と動物遺存体の同定分析（第6節）を実施した。

遺物の材質に関する分析としては、古墳時代の大型複合口縁壺に付着する黒色物質について、その機能や用途を検討する目的で、赤外分光分析（FT-IR法）による材質同定（第7節）を実施した。

分析試料の採集地点は、下記の図287の通りである。

## 第2節 放射性炭素年代測定

遺構・遺物・地層の帰属時期を明らかにするために、平成30年度と令和2年度に加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。平成30年度は、B-1区32井戸下層出土の布留形甕（図194：1393、P261）と共伴する桃核、A-1区浅谷（100落込み）下部で採取した基盤沖積層（第8b層）内の炭化物、B-1区32井戸下部およびC-3区198大型土坑壁面で採取した基盤古土壤層（第9層）を対象に、計7点の年代測定を実施した。令和2年度は、時期が明確でない遺構の帰属時期を検討するために、P14区2003溝埋土中の炭化材片と、C-6区掘立柱建物26・1478Pの柱根（図72：W6、P111）を対象に計2点の年代測定を実施した。

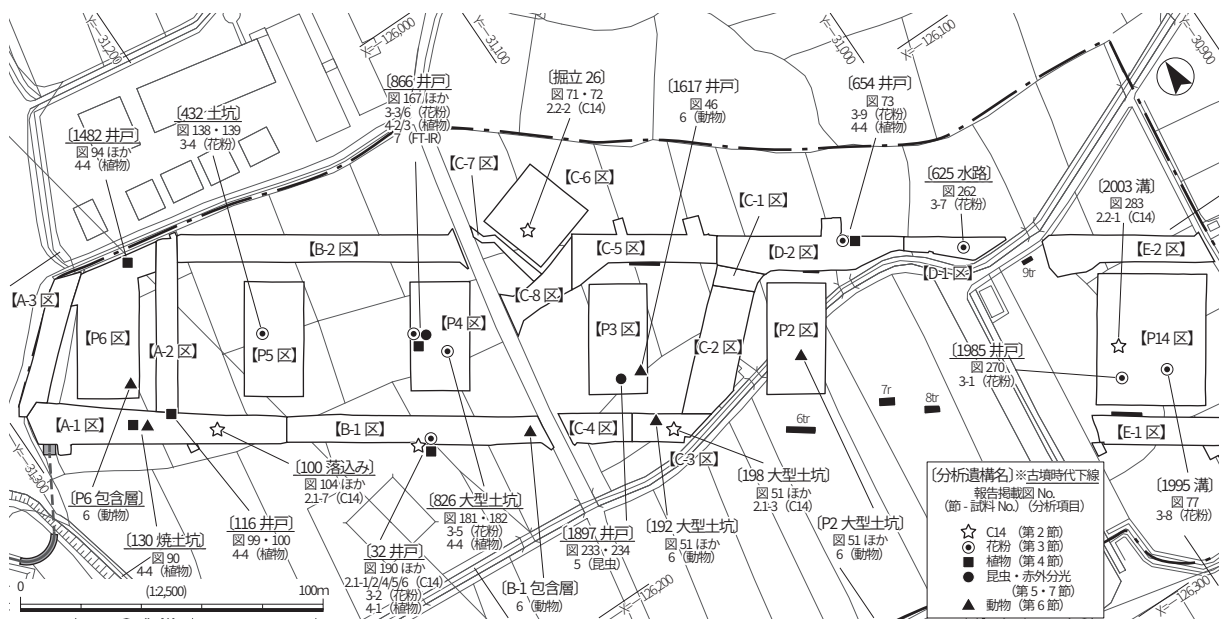


図287. 自然科学分析の試料採集地点



(1). 平成30年度

1. 試料と方法

**測定試料の情報** 調製データは表7のとおりである。試料は、32井戸から採取された2点(試料No.1, 2: PLD-36434, 36435)と、32井戸下部および198土坑下部の基盤下部(古土壌内有機物)から採取された4点(試料No.3~6: PLD-36436~36439)、100落込み下部の基盤下部(洪水堆積物内有機物)から採取された1点(試料No.7: PLD-36440)の、計7点である。32井戸の試料2点は土器付着物と生の種実、100落込み下部の試料は生材(草本類)で、他の4点は土壌(ヒューミン)を測定した。

No.1と2は、32井戸から出土した土器の付着炭化物(No.1)と種実(No.2)であり、共伴関係にある。No.1は、古墳時代初頭(布留0式相当)の甕の外表面付着炭化物である。No.2のモモの核(*Amygdalus persica* L. バラ科)は、褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。

No.3~7は、主として古墳時代およびそれ以降の遺構検出面(以下、遺構検出面とする)の基盤層から採取された堆積物である。これらの基盤層は、層相から氾濫原の構成層と判断される。このうち、No.3~6は、基盤層中において比較的厚い層厚をなして挟在する暗色帯を構成する泥質堆積物である。これらの年代試料の土色は、全体的に暗褐色を呈しており、堆積物中への腐植蓄積を反映した色調と予想される。層相は、塊状無層理をなし、未分解の植物片の挟在は認められない。このような特徴から、No.3~6の暗色帯構成層は、古土壌を構成する堆積と解釈される。暗色帯では、相対的に色調が暗くなる層準が数枚挟在している。この部分は、土壌発達が特に顕著であった層準と推定される。No.3は、このような特に暗色の層準から採取された。一方、No.7については、No.3~6を被覆する碎屑物主体の堆積層の最下部付近に挟在する植物片である。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正をおこなった後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

2. 結果

表8に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}C$ )、同位体分別効果の補正をおこなっ

表7. 放射性炭素年代測定試料および処理 (1) 平成30年度分析実施試料

試料番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
試料 No.1	PLD-36434	調査区: B-1区 遺構: 32井戸 遺物 No.1396 (図194, P261)	種類: 土器付着物 部位: 外面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス処理
試料 No.2	PLD-36435	調査区: B-1区 遺構: 32井戸 遺物 No.1396 (図194, P261)	種類: 生の実(モモ核) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
試料 No.3	PLD-36436	調査区: C-3区 遺構: 198土坑下部 位置: 基盤下部 古土壌内有機物	種類: 土壌(ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
試料 No.4	PLD-36437	調査区: B-1区 遺構: 32井戸下部 位置: 基盤下部 古土壌内有機物	種類: 土壌(ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
試料 No.5	PLD-36438	調査区: B-1区 遺構: 32井戸下部 位置: 基盤下部 古土壌内有機物	種類: 土壌(ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
試料 No.6	PLD-36439	調査区: B-1区 遺構: 32井戸下部 位置: 基盤下部 古土壌内有機物	種類: 土壌(ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
試料 No.7	PLD-36440	調査区: A-1区 遺構: 100落込み下部 位置: 基盤下部 洪水堆積物内有機物	種類: 生の草本類 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)



て暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、図288に暦年較正結果をそれぞれ示す。

暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうために記載した。<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 3. 考察

No.3～6の古土壌が採取された暗色帯は、遺構検出面の下位約1.5m前後に累重する。この暗色帯は、年代試料が採取された調査区の周囲のトレンチでも確認されており、同様の深度で側方へ連続的に埋没していると考えられる。No.3は暗色帯の上部から最上部付近、No.4～6は暗色帯の上部～下部で採取されている。層的に上方に位置するNo.3からは、6600-6500年前頃(Cal BP; 2σ, 以下同様)で、小林(2017)を参照すると縄文時代前期初頭～前葉に相当する年代値が得られている。また、No.3より相対的に下方から採取されているNo.4～6は、No.5が6900-6700年前頃で縄文時代前期初頭～前葉、No.4および6が7400-7200年前頃で縄文時代早期後葉に相当する年代値を示した。

No.3～6は古土壌を構成する腐植を年代試料としており、得られた年代値は土壌生成期間を示していると解釈される。年代値および上記した堆積状況をふまえると、今回の調査区では、7400年前ない

表8. 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (1) 平成30年度分析実施試料

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP ± 1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-36434 試料 No.1 遺物 No.1396	-26.24 ± 0.13	1878 ± 18	1880 ± 20	82-134 cal AD (68.2%)	74-178 cal AD (87.7%) 189-213 cal AD (7.7%)
PLD-36435 試料 No.2 遺物 No.1396	-28.65 ± 0.20	1793 ± 18	1795 ± 20	176-191 cal AD (7.4%) 212-255 cal AD (49.6%) 300-317 cal AD (11.2%)	138-258 cal AD (78.0%) 284-322 cal AD (17.4%)
PLD-36436 試料 No.3	-25.55 ± 0.12	5802 ± 22	5800 ± 20	4707-4653 cal BC (46.9%) 4640-4617 cal BC (21.3%)	4721-4583 cal BC (95.4%)
PLD-36439 試料 No.6	-26.80 ± 0.17	6310 ± 26	6310 ± 25	5320-5292 cal BC (35.8%) 5266-5229 cal BC (32.4%)	5341-5219 cal BC (95.4%)
PLD-36437 試料 No.4	-25.21 ± 0.24	6388 ± 26	6390 ± 25	5462-5448 cal BC (9.9%) 5379-5321 cal BC (58.3%)	5468-5402 cal BC (32.2%) 5389-5316 cal BC (63.2%)
PLD-36438 試料 No.5	-24.15 ± 0.20	5996 ± 23	5995 ± 25	4931-4923 cal BC (6.8%) 4911-4845 cal BC (61.4%)	4948-4826 cal BC (92.1%) 4817-4801 cal BC (3.3%)
PLD-36440 試料 No.7	-17.62 ± 0.14	4480 ± 21	4480 ± 20	3327-3263 cal BC (34.4%) 3252-3219 cal BC (16.2%) 3175-3161 cal BC (7.1%) 3120-3099 cal BC (10.5%)	3339-3207 cal BC (60.1%) 3196-3089 cal BC (34.7%) 3045-3039 cal BC (0.6%)

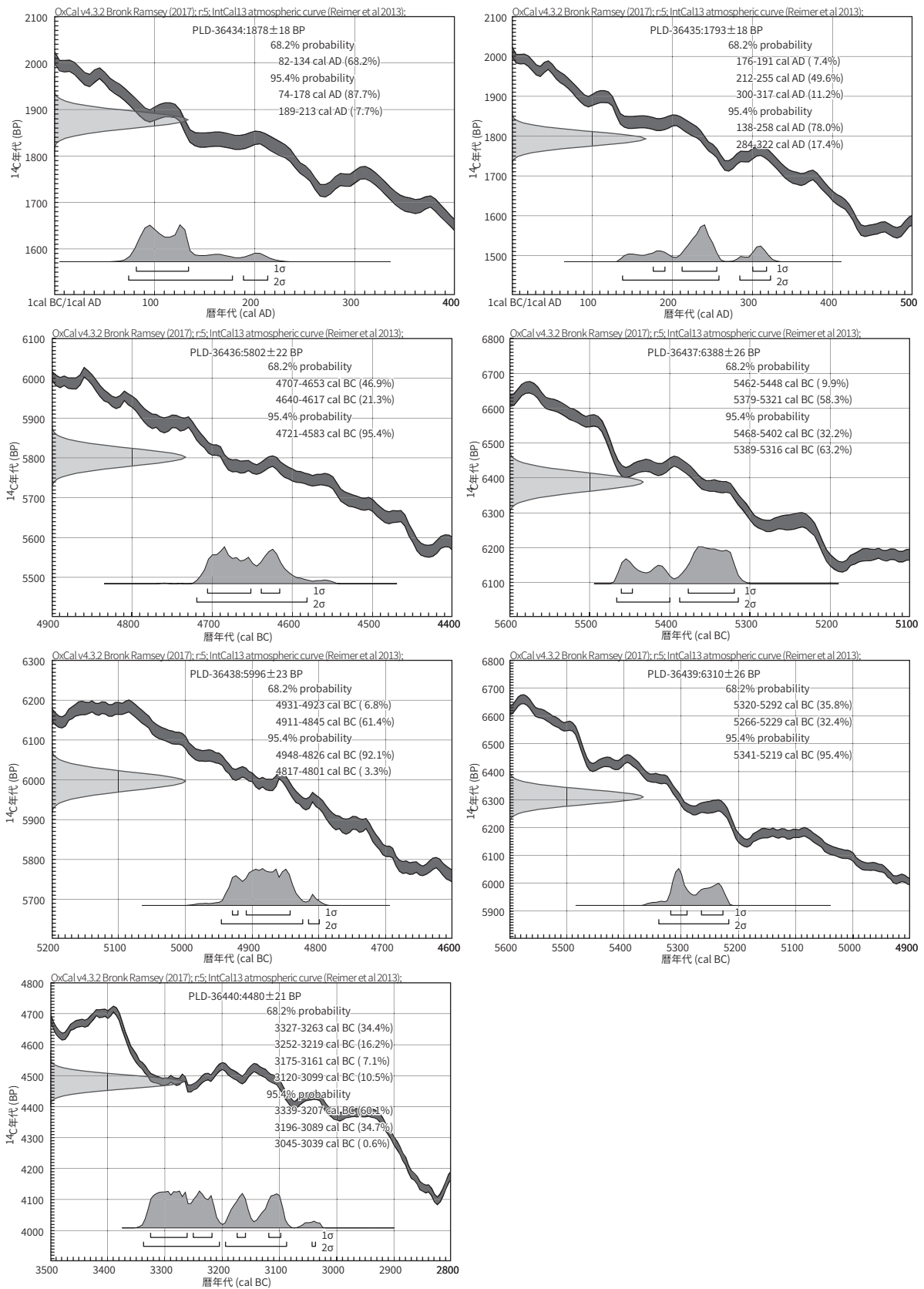


图 288. 曆年較正結果 (1) 平成 30 年度分析実施試料

しそれ以前から 6500 年前頃に、氾濫原上において土壌生成が卓越する時期が存在していた状況がうかがえる。この時期には、調査区周辺の氾濫原へ流入する洪水堆積物は減少し、長期間に亘る安定した地表環境が維持されていたと推測される。層相と年代にもとづく、暗色帯は、間欠的に供給される浮遊泥質洪水堆積物を母材として、上方付加的に形成された堆積性の土壌発達層準と考えられる。

No.7 は、暗色帯に比較的近い砂質泥層から採取された植物片である。No.7 は、5000-5300 年前頃で、小林（2017）を参照すると縄文時代中期前半に相当する年代値を示しており、下位の暗色帯と層的に矛盾のない年代値であった。この年代値と遺構検出面の基盤層の堆積状況から、調査区付近の氾濫原は、5000～5300 年前頃から堆積環境が不安定となり、洪水堆積物による埋積が進行したと考えられる。これに対し、今回は遺構検出面に近い層準からは年代試料を採取できず、氾濫原の埋積が静穏化した時期の年代情報が得られなかった。ただし、遺構検出面付近では縄文時代晩期の土器が検出されている。この発掘調査結果から、調査区付近の氾濫原は、縄文時代晩期にすでに安定した堆積環境へ転じていたと推定される。

なお、遺構検出面を被覆する層準では、古墳時代以降から古代の堆積物の累重がほとんど認められない。このような堆積状況と発掘調査成果から、調査区付近の氾濫原では、縄文時代晩期頃に離水傾向がすでに強まっており、安定的な堆積環境が古代頃まで維持されるような状況であったと推測される。上牧遺跡の上流側に位置する島本町の広瀬遺跡では、古墳時代前後の遺構検出面の下で層厚 3m 前後の氾濫相をなす基盤層の埋積時期は、年代測定の結果、5700-5600 年前頃から 4300-4100 年前頃であった（島本町教育委員会、2013）。また、発掘調査成果によれば、広瀬遺跡の遺構検出面は古墳時代にすでに離水傾向へと転じていたと認識される。さらに、遺構検出面から比較的浅い深度において、縄文時代後期中葉～後葉の元住吉山式の土器が検出されており（島本町教育委員会、2013）、縄文時代後期中葉～後葉には埋積が静穏化しつつあった可能性もうかがえる。広瀬遺跡におけるこのような氾濫原の堆積環境の変化は、今回年代値が得られた上牧遺跡の埋没状況とも類似していると認識される。

以上をふまえると、上牧遺跡からその上流側の広瀬遺跡付近の淀川右岸の氾濫原では、およそ 6000 年前頃以降に埋積が活発化していた様子うかがえる。離水傾向へ転じた時期に関する年代情報は得られていないものの、発掘調査成果は、縄文時代晩期もしくは後期中葉頃にすでに埋積が静穏化しつつあった可能性を示唆する。この点については、より詳細な層序・年代にもとづく地質学的検討をおこなっていく必要がある。

ところで、今回の調査区では、近世に粗粒な洪水堆積物の流入が認められた。このような近世の洪水堆積物は、17 世紀以降に顕著化したとされる、はげ山化に伴う土砂流入量の増大による淀川の河床上昇（村田、2009）との関連が推定される。上述した島本町域でも、国道 171 号線以西の淀川の堤外地との間の氾濫原に、近世頃の堆積物が厚く埋積すると指摘されている（島本町教委、2014）。

以上から、上牧遺跡周辺の淀川右岸の氾濫原では、縄文時代晩期頃から古代もしくは中世のある段階まで、当時の主流路が下刻傾向にあり、周囲への洪水堆積物の供給が不活発であったと推察される。

No.1 と 2 は、藤尾（2013）によれば弥生時代後期前半～古墳時代初頭および前期に相当する暦年代を示した。布留 0 式相当の土器に付着していた No.1 と共伴する No.2 の暦年代については、森岡・三好・田中（2016）で示された段階での実年代観にもとづく、No.2 の暦年代が相対的に妥当と判断される。No.1 は、より古い年代値が得られているが、現段階ではその要因を特定するまでに至っていない。

## (2) 令和2年度

### 1. 試料と方法

**測定試料の情報** 調製データは表9のとおり、P14区2003溝土壌内炭化物とC-6区掘立柱建物26・1478P柱根(図72:W6、P111)の2点である。柱根については、最外面は消失しており、最終形成年輪は確認できなかったが、辺材部と考えられる。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### 2. 結果

表10に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}C$ )、同位体分別効果の補正をおこなって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、暦年較正結果を、図289に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ:IntCal20)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 3. 考察

測定結果は、2003溝埋土中の炭化材片の<sup>14</sup>C年代が $2235 \pm 20$  BP、 $2\sigma$ の暦年較正年代は383-348 cal BC (22.10%) および314-205 cal BC (73.35%)で、紀元前4世紀前半~3世紀末の暦年代を示した。若林(2018)の土器型式および時期区分と暦年代の関係にもとづくと、この暦年代は、ほぼ弥生時代中期前半に相当する。掘立柱建物26・1478Pの柱根については、<sup>14</sup>C年代が $1415 \pm 20$  BP、 $2\sigma$ の暦

表9. 放射性炭素年代測定試料および処理 (2) 令和2年度分析実施試料

試料番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
試料 No.1	PLD-42508	遺構: 2003 溝 調査区: P14 区 試料 No. 溝埋土内炭化物	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
試料 No.2	PLD-42509	遺構: 掘立柱建物 26・1478P 調査区: C-6 区 試料 No. 柱杭 W6 (図 72)	種類: 生材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明(辺材部?) 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)



表 10. 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (2) 令和2年度分析実施試料

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-42508 試料 No. 2003 溝埋土内炭化物	-26.83 $\pm$ 0.23	2235 $\pm$ 20	2235 $\pm$ 20	371-352 cal BC (15.01%) 287-228 cal BC (46.78%) 219-209 cal BC (6.47%)	383-348 cal BC (22.10%) 314-205 cal BC (73.35%)
PLD-42509 試料 No. 柱杭 W6 (図 72)	-24.82 $\pm$ 0.24	1413 $\pm$ 20	1415 $\pm$ 20	607-622 cal AD (29.92%) 638-653 cal AD (38.35%)	604-656 cal AD (95.45%)

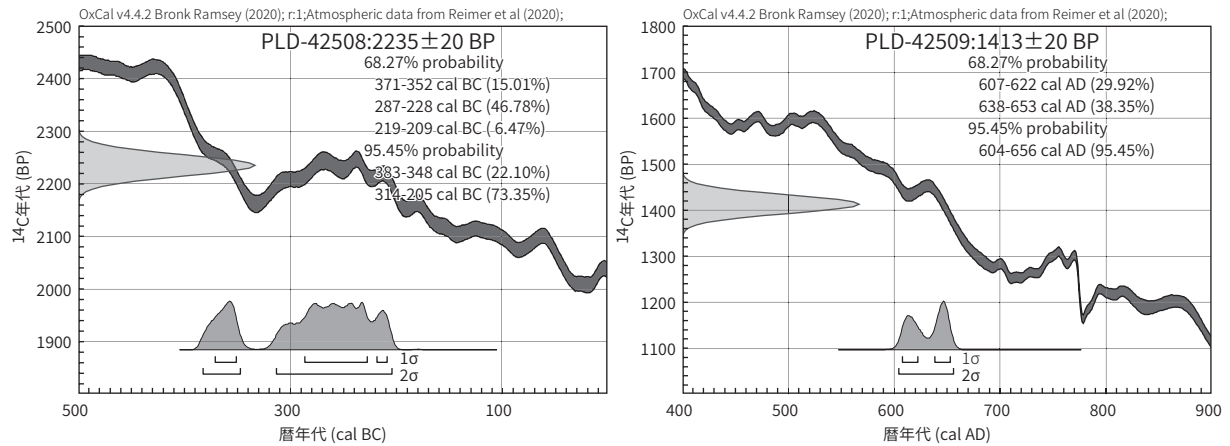


図 289. 暦年較正結果 (2) 令和2年度分析実施試料

年較正年代は 604-656 cal AD (95.45%) で、7 世紀初頭～中頃の暦年代を示した。岸本 (2011) の須恵器編年および時期区分と暦年代の関係にもとづくと、この暦年代は飛鳥時代に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料はいずれも最終形成年輪を欠く材である。したがって、今回の測定結果は、いずれも古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

(伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・辻 康男)

[パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ]

【引用・参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.  
 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.  
 小林謙一 (2017) 縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—. 263p, 同成社.  
 森岡秀人・三好 玄・田中元浩 (2016) 総括. 古代学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」: 335-398, 六一書房.  
 村田路人 (2009) 近世の淀川治水 日本史リブレット 94. 102p, 山川出版社.  
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.  
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, G., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.  
 島本町教育委員会 (2013) 大藪浄水場送水施設整備 (土木・建築) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 26p, 島本町教育委員会.  
 島本町教育委員会 (2014) 広瀬・江川・東大寺・高浜地区遺跡範囲確認調査概要報告. 24p, 島本町教育委員会.  
 岸本直文 (2011) 古墳編年と時期区分. 「古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み」: 34-44, 同成社.  
 若林邦彦 (2018) 近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代—石川県八日市地方遺跡の研究結果との対比—. 同志社大学考古学研究室編「同志社大学考古学シリーズ X II 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集」: 119-129, 同志社大学考古学研究室.

### 第3節 花粉分析

#### 1. 概要と目的

古墳時代から奈良時代における周辺植生や古環境の復元・変遷を検討するために花粉分析を実施した。古環境の変遷は、居住域の動向と併せて検討することで、環境・人間活動・土地利用の相互関係に関する理解を深めることができ、遺跡周辺の開発動向などを推定する上でも有用である。今回の調査では、中世以降の削平が著しく地層が安定的に地層が累重するような良好な地点がなかったため、年代の特定ができる井戸や土坑内の埋土を対象とし、その様相を時系列的にみて周辺植生の特色や変化を考察した。分析対象とした資料は、表11の通りである。

#### 2. 分析方法

(1). 分析試料 分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10～200g(湿潤重量)である。試料は花粉の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

分析に供する試料の採取間隔は、堆積層の状態と目的によって数cmから数mと異なるが、遺跡調査の場合は、一般に遺物にもとづく土層区分に対応した採取間隔をとることが多い。

(2). 分析処理 分析処理の手順を、図290(分析フロー)に示す。1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

(3). 顕微鏡による検定・計数 抽出した花粉はグリセリンゼリーと混合してスライドガラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入してプレパラートとする。各試料につき2～3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを光学顕微鏡下の400～1000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析で通常木本花粉で100～250個の検定、計数をおこない、同時に出現する草本花粉・胞子の検定、計数も行う。

(4). 解析法 花粉分析結果の解析は以下の手順で進める。

- 1) 花粉の種類ごとの出現率計算とダイアグラムの作成
- 2) 各地点における花粉消長パターンの読みとりと局地花粉帯の設定
- 3) 地層対比や古植生・古気候の復元

#### 3. 分析結果

##### (1). 微化石概査結果

花粉分析用プレパラート、および花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、表12のとおりである(植物片、微粒炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、植物珪酸体、火山ガラスは、花粉分析処理の残渣を観察した)。

ほとんどの試料で微粒炭の検出量が多く、植物片、珪藻の検出量は少なかった。また、花粉、植物

珪酸体の検出量は、やや少なかった。全ての試料で植物片の検出量が多かった。試料No. 2では火山ガラスの検出量が多かったが、堆積時期からすると、二次堆積の可能性が高い。

試料No.4、5、8に関して、微粒炭が多く花粉、植物片が少ないことから、(土壌

表11. 分析試料の概要

No.	採取地点	掲載図 No.	時期	備考
1	P14区: 1985井戸	図270	古墳時代初頭後葉～前期前半	
2	B-1区: 32井戸(下層)	図190	古墳時代前期前半	土器群周辺埋土
3	P4区: 866井戸(下層)	図170	古墳時代前期前半～中頃	最深部(底)
4	P5区: 432土坑	図138	古墳時代前期中頃	
5	P4区: 826大型土坑(中層)	図181	古墳時代前期後半	炭層
6	P4区: 866井戸上層	図170	古墳時代前期後半～中期初頭	土器群下部埋土サンプル
7	D-1区: 625水路(中層)	図262	古墳中期中頃～後半	溝資料
8	P14区: 1995溝	図77	飛鳥時代後半	溝資料
9	D-2区: 654井戸	図73	奈良時代中頃～後半	

化に伴う) 紫外線による花粉、胞子の劣化・消滅、あるいは堆積中の化学反応による劣化・消滅が生じたものと考えられる。

(2). 花粉分析結果

1) 花粉化石の含有状況 9 試料の花粉分析をおこなった結果、全ての試料から花粉、胞子化石が検出できたが、試料 No.4、5、8 では花粉・胞子化石含有量が少なく、統計処理に十分な量の木本花粉が検出できなかった。

2) 検出された花粉化石の種類 検出された花粉化石は表 13 に示す 54 種類であった。このほか、6 種類(形態分類群を除く)の胞子化石を検出した。これらのうち、花粉組成を特徴付ける種類は、以下に示すようなものであった。

① 卓越木本花粉 コウヤマキ属、アカガシ亜属、アカメガシワ属

② 卓越草本花粉・胞子(栽培種及び栽培の可能性のあるものを含まない) イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属

③ 栽培種花粉(栽培の可能性のあるものを含む) イネ科(40ミクロン以上)、ソバ属、アブラナ科

3) イネ科の細分について イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。

稲作が行われる前の自然堆積物では、イネ科(40ミクロン未満)花粉が高率となることはあるが、イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範におこなわれたとされる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることが多くなる。更に稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率で検出される。

一方図 291 に示すように、イネ科(40ミクロン以上)花粉にはイネ属(Oryza)を含んでいるが、全てがイネ属であるわけではない。

これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科(40ミクロン以上)花粉について、全てがイネ属に由来するわけではないが、その多く

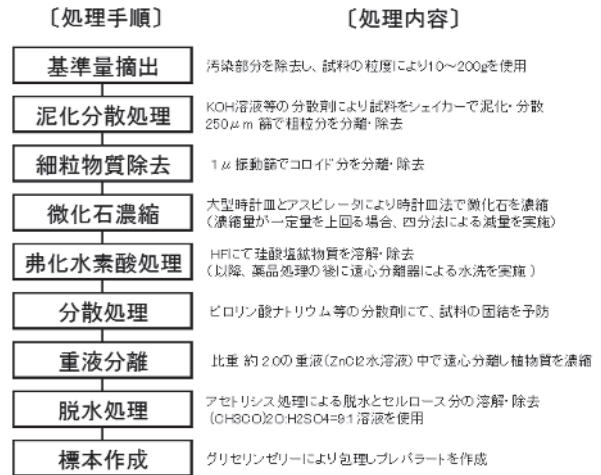
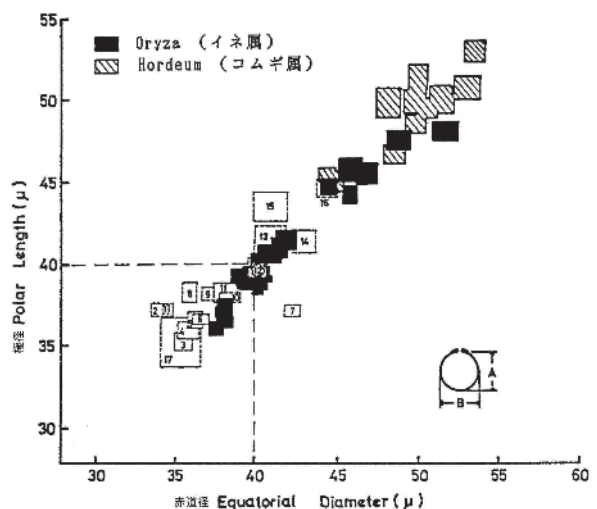


図 290. 花粉分析処理フロー

表 12. 微化石概査結果

試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
9	◎	○	○	○	△	△
8	△	◎	×	△×	△	△
7	○	△	△	△	◎	○
6	◎	○	○	△	◎	○
5	△	◎	×	△	○	△
4	△	◎	×	△×	◎	△
3	○	◎	○	○	○	○
2	○	◎	○	△×	△	◎
1	○	◎	○	×	○	○

※ 試料No.: 下位から古い時代順に並ぶ  
凡例 ◎: 十分な数量が検出できる ○: 少ないが検出できる △: 非常に少ない  
△×: 極めてまれに検出できる ×: 検出できない



- 〔図中のイネ・コムギ以外のイネ科〕
1. *Zizania latifolia* (マコモ)
  2. *Isperata cylindrica* var. *koenigii* (チガナ)
  3. *Trisetum bifidum* (カヌツリグサ)
  4. *Arthraxon hispidus* (コブナグサ)
  5. *Digitaria adscendens* (メヒシバ)
  6. *Echinochloa crusgalli* subsp. *edulis*
  7. *Polypogon monspeliensis* (ヒエガエリ)
  8. *Phalaris arundinacea* (クサヨシ)
  9. *Beckmannia syzigachne* (カズノコグサ)
  10. *Echinochloa crusgalli* var. *longisetata*
  11. *Alopecurus aequalis* var. *aururensis* (スズメノテッポウ)
  12. *Echinochloa crusgalli*
  13. *Paspalum thunbergii*
  14. *Alopecurus japonicus*
  15. *Echinochloa crusgalli* var. *oryzicola*
  16. *Aspopyron ciliare* var. *minus* (アオカモジグサ)
  17. *Phragmites communis* (アシ)

図 291. イネ科花粉の粒径比較図(中村 1974)

表 13. 花粉化石組成表

試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
5 <i>Abies</i> モミ属	20 9.5%	4 1.8%	20 8.7%			2 1.0%	7 3.1%		35 15.5%
10 <i>Tsuga</i> ツガ属	4 1.9%	9 3.9%	6 2.6%		1 11.1%	4 1.9%	14 6.2%	2 8.7%	2 0.9%
13 <i>Picea</i> トウヒ属	0%	0.0%	1 0.4%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
21 <i>Pinus (Diploxylon)</i> マツ属 (複雑管束亜属)	6 3%	12 5.3%	5 2.2%	1 7.7%	0.0%	3 1.4%	9 4.0%	1 4.3%	11 4.9%
30 <i>Sciadopitys</i> コウヤマキ属	25 12%	2 0.9%	25 10.9%	9 69.2%	3 33.3%	2 1.0%	70 30.8%	18 78.3%	16 7.1%
32 <i>Cryptomeria</i> スギ属	9 4%	30 13.2%	23 10.0%	1 7.7%	0.0%	29 13.9%	4 1.8%	0.0%	19 8.4%
41 Cupressaceae type ヒノキ科型	0%	10 4.4%	3 1.3%	0.0%	0.0%	1 0.5%	0.0%	0.0%	3 1.3%
52 <i>Myrica</i> ヤマモモ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
62 <i>Pterocarya-Juglans</i> サウグルミ属-クルミ属	3 1%	1 0.4%	1 0.4%	0.0%	0.0%	1 0.5%	0.0%	0.0%	4 1.8%
71 <i>Carpinus-Ostrya</i> クマシデ属-アサダ属	6 3%	1 0.4%	10 4.3%	0.0%	0.0%	1 0.5%	1 0.4%	0.0%	5 2.2%
73 <i>Corylus</i> ハシバミ属	0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
74 <i>Betula</i> カバノキ属	0%	7 3.1%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 4.3%	0.0%
75 <i>Alnus</i> ハンノキ属	4 2%	2 0.9%	3 1.3%	1 7.7%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
80 <i>Fagus</i> ブナ属	6 3%	3 1.3%	2 0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2 0.9%
81 <i>Fagus crenata</i> type ブナ型	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%
82 <i>Fagus japonica</i> type イヌブナ型	2 1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%
83 <i>Quercus</i> コナラ亜属	34 16%	12 5.3%	24 10.4%	0.0%	0.0%	5 2.4%	42 18.5%	1 4.3%	30 13.3%
84 <i>Cyclobalanopsis</i> アカガシ亜属	84 40%	101 44.3%	72 31.3%	1 7.7%	4 44.4%	41 19.6%	64 28.2%	0.0%	74 32.7%
85 <i>Castanea</i> クリ属	0%	22 9.6%	1 0.4%	0.0%	0.0%	2 1.0%	1 0.4%	0.0%	1 0.4%
88 <i>Castanopsis-Pasania</i> シノキ属-マテバシ属	0%	3 1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
92 <i>Ulmus-Zelkova</i> ニレ属-ケヤキ属	7 3%	0.0%	17 7.4%	0.0%	0.0%	3 1.4%	0.0%	0.0%	13 5.8%
94 <i>Celtis-Aphananthe</i> エノキ属-ムクノキ属	0%	4 1.8%	11 4.8%	0.0%	0.0%	2 1.0%	3 1.3%	0.0%	7 3.1%
97 Moraceae-Urticaceae クワ科-イラクサ科	0%	5 2.2%	3 1.3%	0.0%	1 11.1%	5 2.4%	1 0.4%	0.0%	2 0.9%
141 <i>Mallotus</i> アカメガシワ属	0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	105 50.2%	1 0.4%	0.0%	0.0%
170 <i>Acer</i> カエデ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.5%	4 1.8%	0.0%	0.0%
172 <i>Aesculus</i> トチノキ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.5%	0.0%	0.0%	0.0%
220 Ericaceae ツツジ科	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.5%	1 0.4%	0.0%	0.0%
230 <i>Symplocos</i> ハイノキ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
241 <i>Ligustrum</i> type イボタノキ属型	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
302 <i>Sparganium</i> ミクリ属	0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	18 7.9%	0.0%	0.0%
305 <i>Alisma</i> サジオモダカ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2 0.9%	0.0%	0.0%
311 Gramineae(<40) イネ科 (40ミクロン未満)	32 15%	56 24.6%	54 23.5%	3 23.1%	3 33.3%	6 2.9%	93 41.0%	21 91.3%	40 17.7%
312 Gramineae(>40) イネ科 (40ミクロン以上)	27 13%	24 10.5%	19 8.3%	2 15.4%	19 21.1%	5 2.4%	44 19.4%	4 17.4%	15 6.6%
320 Cyperaceae カヤツリグサ科	0%	0.0%	10 4.3%	0.0%	0.0%	2 1.0%	46 20.3%	0.0%	19 8.4%
411 <i>Rumex</i> ギンギン属	0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
416 <i>Echinocaulon-Pescicaria</i> ウナギツカミ節-サナエタデ節	7 3%	0.0%	7 3.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20 8.8%	0.0%	6 2.7%
420 <i>Fagopyrum</i> ソバ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 4.3%	0.0%
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae アカザ科-ヒコ科	0%	5 2.2%	7 3.0%	2 15.4%	2 22.2%	3 1.4%	17 7.5%	3 13.0%	0.0%
430 Caryophyllaceae ナデシコ科	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 4.3%	0.0%
450 Ranunculaceae キンボウゲ科	0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
461 Cruciferae アブラナ科	0%	30 13.2%	5 2.2%	2 15.4%	0.0%	1 0.5%	9 4.0%	0.0%	0.0%
501 Leguminosae マメ科	1 0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 4.3%	0.0%
521 <i>Impatiens</i> ツリフネソウ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
530 Vitaceae ブドウ科	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6 2.9%	1 0.4%	0.0%	0.0%
560 <i>Trapa</i> ヒシ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%
581 <i>Hydrocotyle</i> チドメグサ属	0%	4 1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
601 <i>Trachelospermum</i> テイカカズラ属	1 0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
651 <i>Patrinia</i> オミナエシ属	0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
671 <i>Trichosanthes</i> カラスウリ属	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
710 Carduoideae キク亜科	2 1%	3 1.3%	4 1.7%	1 7.7%	0.0%	1 0.5%	7 3.1%	2 8.7%	1 0.4%
711 <i>Ambrosia-Xanthium</i> ブタクサ属-オナモミ属	0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
712 <i>Artemisia</i> ヨモギ属	75 36%	15 6.6%	27 11.7%	1 7.7%	1 11.1%	10 4.8%	70 30.8%	31 134.8%	19 8.4%
713 <i>Carthamus</i> type ベニバナ属型	0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 0.4%	0.0%	0.0%
720 Cichorioideae タンポポク科	2 1%	1 0.4%	0.0%	2 15.4%	0.0%	2 0.9%	4 17.4%	0.0%	0.0%
802 <i>Urostachys sieboldii</i> type ヒモラン型	0%	0.0%	0.0%	3 23.1%	3 33.3%	0.0%	2 0.9%	2 8.7%	0.0%
850 <i>Ophioglossum</i> ハナヤスリ属	9 4%	4 1.8%	11 4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	4 1.8%	0.0%	3 1.3%
875 <i>Davallia</i> シノブ属	25 12%	7 3.1%	7 3.0%	7 53.8%	1 11.1%	0.0%	19 8.4%	13 56.5%	2 0.9%
881 Pteridaceae イノモトソウ科	10 5%	0.0%	0.0%	2 15.4%	0.0%	0.0%	5 2.2%	1 4.3%	0.0%
886 <i>Aspid.-Asple.</i> オンシタ科-チャセンシタ科	84 40%	19 8.3%	40 17.4%	16 123.1%	6 66.7%	5 2.4%	39 17.2%	166 721.7%	10 4.4%
891 Polyodiaceae ウラボシ科	4 2%	0.0%	5 2.2%	0.0%	2 22.2%	0.0%	2 0.9%	1 4.3%	0.0%
898 MONOLATE-TYPE-SPORE 単条溝孢子	61 29%	22 9.6%	30 13.0%	15 115.4%	4 44.4%	1 0.5%	28 12.3%	21 91.3%	2 0.9%
899 TRILATE-TYPE-SPORE 三条溝孢子	77 37%	13 5.7%	48 20.9%	6 46.2%	6 66.7%	2 1.0%	64 28.2%	44 191.3%	12 5.3%
木本 (針葉樹)	64 10.2%	67 15.5%	83 16.3%	11 14.7%	4 7.1%	41 16.3%	104 14.4%	21 6.2%	86 24.2%
木本 (広葉樹)	146 23.3%	161 37.3%	147 28.9%	2 2.7%	5 8.9%	168 66.9%	123 17.0%	2 0.6%	140 39.3%
草本・藤本	147 23.4%	139 32.2%	137 27.0%	13 17.3%	25 44.6%	34 13.5%	334 46.1%	68 20.1%	101 28.4%
孢子	270 43.1%	65 15.0%	141 27.8%	49 65.3%	22 39.3%	8 3.2%	163 22.5%	248 73.2%	29 8.1%
総数	627	432	508	75	56	251	724	339	356
含有量 (粒数/g)	2,277	2,890	3,437	118	343	8,876	1,124	247	7,650



はイネ属に由来すると推測される。

**4) 分析結果** 分析結果を図 292 の花粉ダイアグラム、表 13 の花粉組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料 1g 中の粒数）を算出し、変化を示している。

また、検出量の少なかった 3 試料については、検出できた種類を「\*」で示した。

**5) 花粉群集の特徴** 試料 No.4、5、8 では花粉・孢子化石含有量が少なく、統計処理に十分な量の本木花粉が検出できなかった。

本木花粉、草本・藤本花粉、孢子的割合は試料によりバラつき、含有量の少ない試料 No.4、5、8 では孢子的割合が高い傾向にあった。先の微化石概査結果では、これらの試料は微粒炭の含有量が多く、植物片の含有量が少ないという、共通の特徴を持った試料であった。また、これらの試料ではコウヤマキ属がその他の種類に比べ特に高率で検出されているほか、オシダ科-チャセンシダ科の孢子も 100% 程度の出現率を示している。

その他の 6 試料ではアカガシ亜属の出現率が 30 ~ 40% ほどの出現率を示し、コナラ亜属やスギ属が数 ~ 10 数% の出現率を示す。また、試料 No.2 ではクリ属が、試料 No.6 ではアカメガシワ属が、試料 No.7 ではコウヤマキ属が特徴的に検出されている。

4. 考察

**1. 従来の分析結果との比較** 大阪湾沿岸域におけるこの時期の森林植生は、低地から丘陵、山地低所にアカガシ亜属を主体とした照葉樹林、山地中腹から高所にモミヤツガ、スギ、コウヤマキなどを主体とする温帯針葉樹林、山地高所にブナやミズナラを主体とする冷温帯落葉広葉樹林が広がっており、更にこれらの森林が開発などにより伐採され、アカマツ林やコナラ林などの遷移林（あるいは薪炭林）へと移り変わり始め

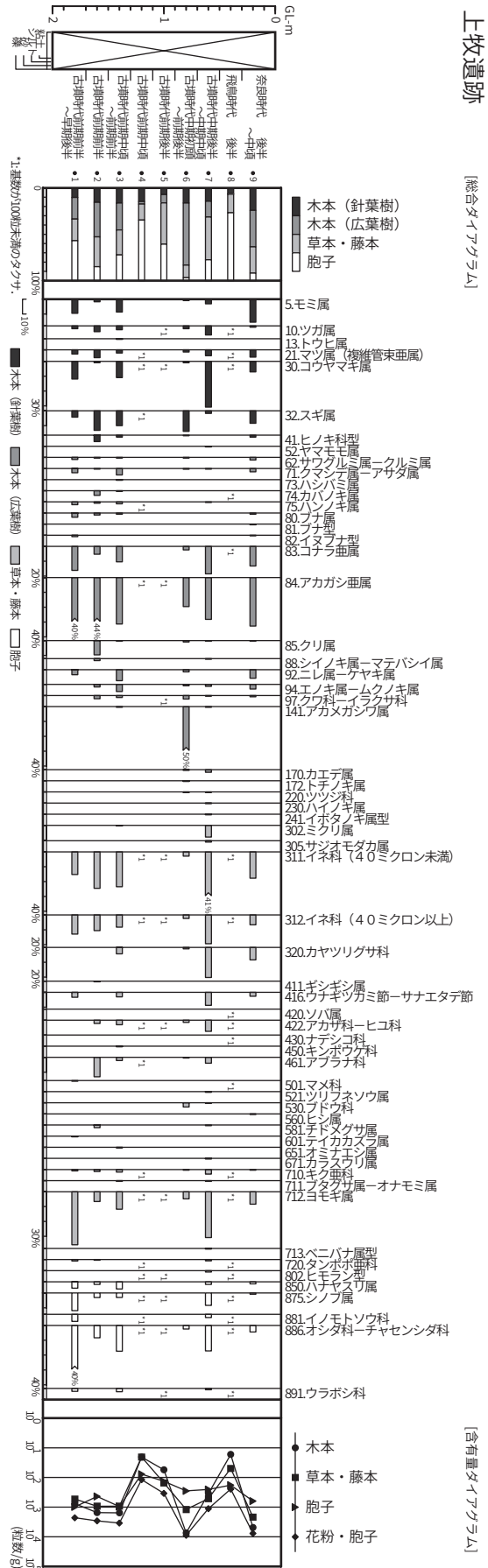


図 292. 花粉ダイアグラム

たとされる(古谷 1979)。また、高槻市内の新池遺跡でも、この傾向が認められている(松江 1993)。

今回の分析結果はマツ属(複雑管束亜属)が低率なものの、コナラ亜属はやや高率で検出され、コナラ林などの遷移林(あるいは薪炭林)への拡大が示唆される。一方で、試料 No.2 ではクリ属、試料 No.6 ではアカメガシワ属、試料 No.7 ではコウヤマキ属が他地点(他時期)に比べ突出した出現率を示している。これらのうちクリ属、アカメガシワ属は代表的な陽樹で、日当たりの良い場所であれば容易に生育する。また、花粉の飛散域が極めて狭く、局所的な植生を示しやすい。また、同様のことは草本・藤本花粉やシダ孢子にもいえる。このようなことから、今回突出して検出できた木本花粉や草本・藤本花粉、孢子は局所的な植生を示していると考えられる。

**2. 上牧遺跡内(近辺)での局地的な植生について** 3世紀から8世紀に至る、調査地周辺地域の森林植生は前述の通りであり、ここでは割愛する。草本・藤本花粉ではイネ科(40ミクロ未満)、ヨモギ属が他の分類群より高率で検出される傾向にある。このことから、遺跡内あるいは周辺にススキ類やシバ類あるいはササ類などのイネ科植物、ヨモギ類が普遍的に分布していたものと考えられる。また、イネ科(40ミクロ以上)の出現率も他の分類群より高率で検出される傾向にあり、遺跡周辺には水田が広がっていた可能性も示唆される。

以下では遺構近辺での局地的な植生について、分析試料ごとに考察する。

・ No.1 (P14区 1985井戸: 3世紀前半~中頃) 木本花粉では、近辺での生育を示唆するような検出傾向を示す分類群はなかった。草本・藤本花粉ではヨモギ属が、シダ類孢子ではオシダ科-チャセンシダ科が突出している。1985井戸の近辺には、ヨモギ類やオシダ科のオクマワラビなど日当たりの良い場所に生育する草本やシダ植物が特に多く生育していたと考えられる。

・ No.2 (B-1区 32井戸(下層): 3世紀中頃~後半) 前述のようにクリ属が突出して検出され、32井戸の近くにクリが生育していたと考えられる。クリに関しては三内丸山遺跡などにみられるように、大規模に栽培されていた可能性もある。しかし今回の分析結果からは、栽培の可否を含めクリの分布範囲(栽培規模)までは想定できなかった。

草本・藤本花粉ではアブラナ科がやや突出して検出される。井戸の周囲などやや湿った所に、アブラナ科の中でも湿潤環境を好むタネツケバナ類が特に多く生育していたと考えられる。

・ No.3 (P4区 866井戸(下層): 3世紀後半~4世紀初頭) 木本花粉では、近辺での生育を示唆するような検出傾向を示す分類群はなかった。草本・藤本花粉、シダ類孢子でも特に突出した分類群はなかった。カヤツリグサ科が他の試料(時期)に比べやや高率であるが、866井戸の近辺にスゲ類やハリイ類、ホタルイ類などの湿潤環境を好む種類が生育していたと考えられる。

・ No.6 (P4区 866井戸(上層): 4世紀後半) 前述のようにアカメガシワ属が突出して検出され、866井戸の近くにアカメガシワが生育していたと考えられる。アカメガシワは典型的なパイオニア植物で、成長すると樹高は10mにも達するが、現在も身の回りの至る所で生育している。50%もの出現率を示すことから単木とは考えにくく、シュートを生じても繁殖することから、まとまって生育し藪状になっていた可能性も指摘できる。

草本・藤本花粉、シダ類孢子の出現率は低率で、特に突出した分類群もなかった。

・ No.7 (D-1区 625水路(中層): 5世紀中頃~後半) 前述のようにコウヤマキ属が突出して検出され、625水路沿い(あるいは上流部)にコウヤマキが生育していたと考えられる。現在の自生地は岩肌の露出するような尾根筋であるが、このような条件の悪い場所でも生育できることから、現在の生育地は

人手に掛かりにくい場所に生育した個体（あるいは森林）が残存したものと考えられる。古谷（1979）でもコウヤマキ属が高率を示す層準が認められるほか、棺材として用いられたほか柱や井戸材等に用いられており（伊東・山田 2012）、比較的身近な樹木であったと考えられる。また、この試料で検出された樹木花粉の種類は分析をおこなった9試料中最も多く、625水路沿いにはコウヤマキの外、多くの種類の樹木が茂っていたことが分かる。草本・藤本花粉、シダ類孢子では、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、カヤツリグサ科、ウナギツカミ節-サナエタデ節などの湿地に生育する種類や、ミクリ属やサジオモダカ属などの湿性植物も検出され、625水路内にはミクリ類やサジオモダカ類、水路内や周辺にアシ類や、スゲ類やハリイ類、ホタルイ類、ウナギツカミ類やサナエタデ類などが生育していたと考えられる。また、イネ科（40ミクロン以上）も検出され、625水路の上流域に水田が広がっていた可能性も指摘できる。これらのほか、ヨモギ属やアカザ科-ヒユ科、アブラナ科などのやや乾燥した場所に生育する種類も突出し、625水路の近辺で生育していたものと考えられる。また、カラスウリ属が僅かであるが検出された。アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、カラスウリ属には栽培種も含まれ、625水路近辺で畑作がおこなわれていた可能性も示唆される。

・No.8 (P14区 1995溝：7世紀後半) 木本花粉の検出量が少なかったが、栽培種のソバ属が検出された。1995溝近辺で畑作が行われていたと考えられる。

・No.9 (D-2区 654井戸：8世紀中頃～後半) 木本花粉では、モミ属がやや突出する。前述のようにモミは温帯針葉樹林の構成要素として山地中腹から高所に主として分布すると考えられる。しかし、照葉樹林に混淆することも多く、井戸の比較的近辺に生育していた可能性が示唆される。また、草本・藤本花粉、シダ類孢子ともに、他地点に比べ特に突出する種類はなかった。

## 5. まとめ

上牧遺跡の発掘調査に伴い、3世紀前半から8世紀後半にかけての試料について花粉分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

1) 背後の山地植生に大きな変化は認められなかった。低地から丘陵、山地低所にアカガシ亜属を主体とした照葉樹林、山地中腹から高所にモミヤツガ、スギ、コウヤマキなどを主体とする温帯針葉樹林、山地高所にブナやミズナラを主体とする冷温帯落葉広葉樹林が広がっていたものと推定できた。また、古墳の築造や開発により、コナラ林などの遷移林（あるいは薪炭林）が拡大し始めたものと考えられる。

2) 井戸内の堆積物からは、時として祭祀を推定させる、特異な分類群の花粉が検出されることがあるが、今回は特異な分類群の花粉は検出できなかった。

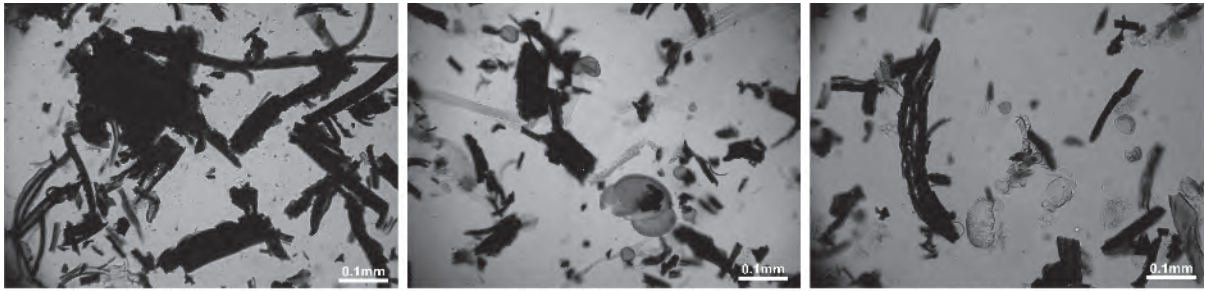
3) 各試料（時期）を比較して、突出する分類群から局地的な植生について考察した。詳細は上述の通りであるが、32井戸のクリ、625水路のコウヤマキ、654井戸のモミなどが特徴的で、周辺での生育の可能性を示唆する。ほかでは、625水路のイネや995溝のソバは、周辺地での水田や畑作との関連が推測される。

（渡辺 正巳〔文化財調査コンサルタント〕）

## 【参考文献】

- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学-出土木製品用材データベース-, 449p, 海青社, 滋賀。  
 中村 純 (1974) イネ科花粉について、特にイネを中心として. 第四紀研究, 13, 187-197.  
 古谷正和 (1979) 大阪周辺地域におけるウルム水期以降の森林植生変遷. 第四紀研究, 18(3), 121-141.  
 松江実千代 (1993) 新池遺跡周辺における古植生とその変遷. 新池-新池地輪製作遺跡発掘調査報告書-, 高槻市文化財調査報告書, 17, 314-332, pl.136-139.

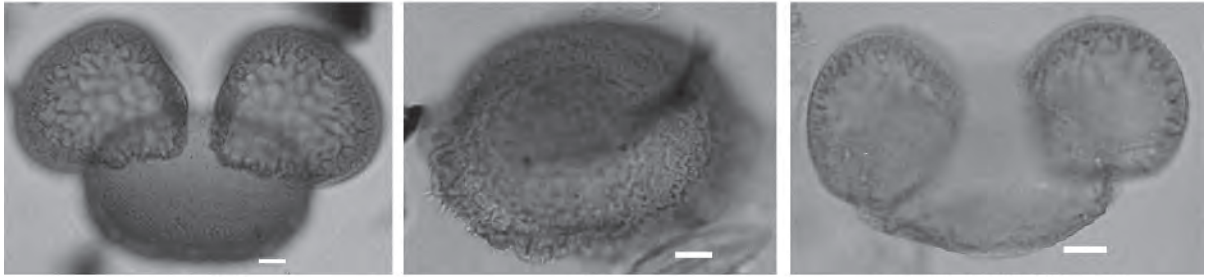




検出状況：No.5

検出状況：No.6

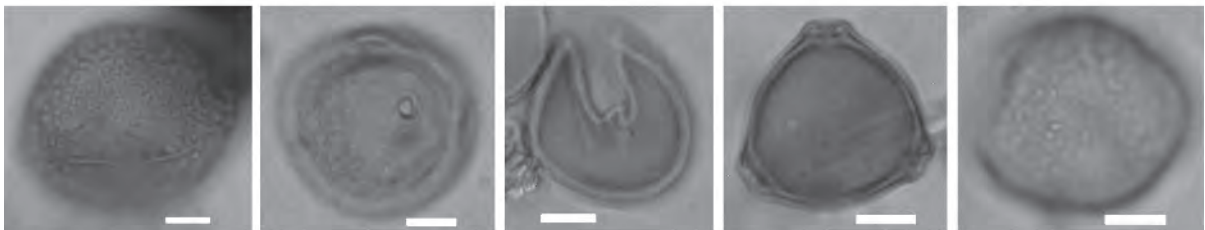
検出状況：No.7



モミ属

ツガ属

マツ属(複維管束亜属)



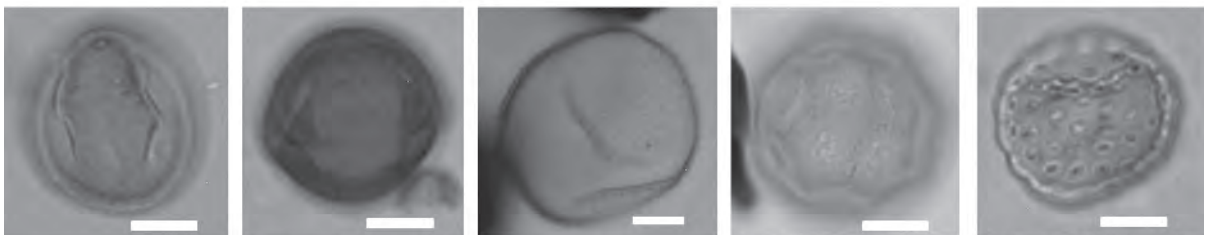
コウヤマキ属

スギ属

スギ属

カバノキ属

コナラ亜属



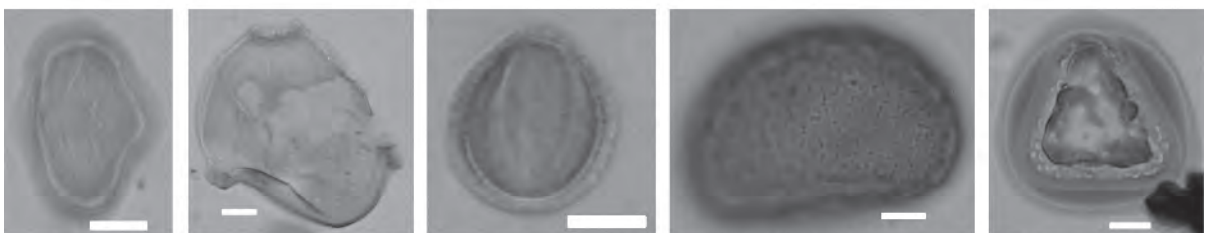
アカガシ亜属

アカメガシワ属

ミクリ属

サジオモダカ属

アガサ科-ヒユ科



チドメグサ属

カラスウリ属

ヨモギ属

シノブ属

イノモトソウ科

記述のあるもの以外、  
スケールバーは0.01mm

写真5. 花粉顕微鏡写真



## 第4節 大型植物遺体同定分析

### 1. 調査の概要と分析の目的

今回の調査では、古墳時代・奈良時代の井戸・土坑から、土器とともに種子や木材が出土した。種実は、当時の遺跡周辺の植生復元の手がかりとなるだけでなく、井戸祭祀の実態や当時の人々の植物利用のあり方を明らかにするための資料といえ、井戸堆積物中の木材は当時の人々の木材利用のあり方を知る手がかりとなる。そこで今回は、これらの種実や木材を対象に、大型植物遺体同定分析を実施した。

### 2. 分析試料点数について

今回の分析試料は、以下の4点である（表14）。

**分析試料1（B-1区：32井戸上層・下層）**〔図190ほか：P257〕 古墳時代前期の井戸に伴う種実。井戸下層で検出された壺と甕の周囲と容器内に堆積していた比較的大型の種実である。

**分析試料2（P4区：866井戸上層・下層）**〔図167ほか：P227〕 古墳時代前期～中期初頭の井戸に伴う種実、および大型複合口縁壺（図180：1231、P243）周辺の炭化材と釣瓶土器（図180：1234、P243）に巻かれていた蔓などである。

**分析試料3（P4区：866井戸中層）**〔図167ほか：P227〕 古墳時代前期の井戸に伴う種実、および木材片である。

**分析試料4（116井戸、1480井戸、130焼土坑、826大型土坑、654井戸）** いずれも種子で、116井戸は古墳時代前期前半（図99、P148）、1480井戸は古墳時代中期初頭（図94ほか、P143）、竪穴建物57内130土坑は古墳時代前期（図90、P138）、654井戸（図73、P112）は奈良時代後半である。

### 3. 同定結果

**a. 種実同定** 種実試料はあらかじめ発掘担当者により現地取り上げおよび水洗篩分された残渣試料であった。試料は肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、分類群別、部位別に同定・計数をおこなった。

古墳時代前期～中期初頭の同定結果を表15に示す。栽培あるいは利用されていたと考えられる木本は、モモ、ウメを、草本はアサ、ヒョウタン、キュウリ属メロン仲間の5分類群を出土した。その他周囲に生育していたと考えられる木本はアカガシ亜属、ケヤキ、ヒメコウゾ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ノブドウ、アオツヅラフジの7分類群が同定された。また、分類群不明の種実破片があった。井戸内堆積物から出土した種実は個数としては少ない。最も多く出土したのはヒメコウゾ、次いでモモ、アカメガシワであるが、ヒメコウゾとアカメガシワは小種実である。井戸内からはヒョウタンは出土せず前期の130焼土坑から1粒のみ出土したに過ぎなかった。利用植物であるアサとメロン仲間も出土したが少なかった。

奈良時代後半の同定結果を表16に示す。調査は654井戸1基のみであるが、ヒョウタンを多く出土し、モモは破片、メロン仲間は1粒のみ出土した。路傍などに生育する植物の種実の出土種類がやや多く、カタバミ属、イヌビエ、ヘビイチゴ属、アカザ属、ナス属などとともにやや湿った場所に生育するタガラシも出土した。

以下に出土した種実のうち特筆すべき分類群の形態記載をおこなう。

アカガシ亜属 (*Quercus* subgen *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

果皮破片は楕円球形のほぼ半分で基部の着点は欠落しているが果実長の2分の1程度の部分が幅が広く果実の肩に殻斗の痕跡である輪状紋がわずかに残っている。

表 14. 上牧遺跡分析試料一覧

試料 No.	区	遺構	時期	層位	登録番号	試料の種類
1	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	上層	123	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	上層	133	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1396 壺周辺)	142	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1388 壺周辺)	147	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1388 壺内)	149	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1393 壺内)	150	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1394 壺周辺)	203	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1392 壺内)	248	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1390 壺内)	250	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1391 壺内)	251	種実
	B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1392 壺・1396 壺周辺)	252	種実
B-1	32 井戸	古墳時代前期前半	下層 (1390 壺・1396 壺・1391 壺周辺)	253	種実	
2	P4	866 井戸	古墳時代中期初頭	上層	2062	種実
3	P4	866 井戸	古墳時代前期前半～中頃	中層	2085	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半～中頃	中層	2085	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半～中頃	中層	2100	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半～中頃	中層	2153	種実
2	P4	866 井戸	古墳時代前期前半～中頃	中層下部	2153	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層南側ステップ	2222	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層南側ステップ	2279	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層①	2342	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層①	2342	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層①	2257	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層②	2341	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層③	2343	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層④	2349	種実
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層④	2349	種実
3	P4	866 井戸	古墳時代前期前半～中頃	中層下部	2153	木片と樹皮
2	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層①	2257	炭化材
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層①	2342	炭化材
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層② 直口壺(1234)付着	2341	葉
	P4	866 井戸	古墳時代前期前半	下層② 直口壺(1234)付着	2341	木材
4	A-1	116 井戸	古墳時代前期前半	下層 (564 壺周辺)	293	種実
	A-1	116 井戸	古墳時代前期前半	上層 (562 壺内)	322	種実
4	P6	1480 井戸	古墳時代中期初頭	上層②・③	2901	種実
	P6	1480 井戸	古墳時代中期初頭	下層	2930	種実
4	A-1	130 焼土坑	古墳時代前期		300	種実
4	P4	826 大型土坑	古墳時代前期後半		1880	種実
4	D-2	654 井戸	奈良時代後半	上層	1604	種実
	D-2	654 井戸	奈良時代後半	上層 (青灰粘土)	1605	種実

ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) ニレ科ケヤキ属

葉の破片は片側の葉縁が残り、浅くやや湾曲した粗い鋸歯が確認できる。

モモ (*Amygdalus persica* L.) バラ科モモ属

核は高さ 35.0-16.3mm、幅 25.8-16.8mm の卵形で上下端が尖り、基部は裂けて穴がある。表面には粗く深い流理状の溝と狭く深い穴があり、核壁は厚く固い。ネズミとみられる動物に食べられた痕跡がある核や欠けたり風化している核がみられた。比較的大きく先端が尖った形が多く、いわゆるノモモタイプと考えられる。

ウメ (*Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese) バラ科ウメ属

核は高さ 11.1-15.3mm の卵形で表面はごく浅い溝があるかほとんどなく、小孔が多数ある。

カラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

表 15. 上牧遺跡出土種実 (古墳時代)

分類群	出土部位/層位	登録番号	123	133	142	147	149	150	203	248	250	251
		調査区	B-1	B-1	B-1	B-1	B-1	B-1	B-1	B-1	B-1	B-1
		遺構	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸	32 井戸
		時期	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半
アカガシ亜属	果皮半分		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ケヤキ	葉破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒメコウゾ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	核完形		-	-	3	1	1	1	1	5	2	4
	核完形食痕		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	核完形風化		-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
	核半分		1	2	3	-	-	-	-	-	-	-
	核破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	核破片炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウメ	核完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	核完形炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アサ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アオツツラフジ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒョウタン	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キュウリ属メロン仲間	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	種実破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

分類群	出土部位/層位	登録番号	252	253	2062	2085	2100	2153	2222	2279	2342	2257
		調査区	B-1	B-1	P4	P4	P4	P4	P4	P4	P4	P4
		遺構	32 井戸	32 井戸	866 井戸	866 井戸	866 井戸	866 井戸	866 井戸	866 井戸	866 井戸	866 井戸
		時期	前期前半	前期前半	中期初頭	前期前半~中頃	前期前半~中頃	前期前半~中頃	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半
アカガシ亜属	果皮半分		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ケヤキ	葉破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒメコウゾ	内果皮		-	-	-	53	-	-	-	-	-	-
モモ	核完形		3	1	1	-	2	-	-	1	-	-
	核完形食痕		-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
	核完形風化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	核半分		-	-	-	4	1	-	2	-	1	-
	核破片		-	-	-	2	-	-	3	-	-	3
	核破片炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウメ	核完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	核完形炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	5	-
アカメガシワ	種子		-	-	-	9	-	6	-	-	-	-
ノブドウ	種子		-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
アサ	種子		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アオツツラフジ	種子		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヒョウタン	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キュウリ属メロン仲間	種子		-	4	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	種実破片		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

分類群	出土部位/層位	登録番号	2341	2343	2349	293	322	2901	2930	300	1880
		調査区	P4	P4	P4	A-1	A-1	P6	P6	A-1	P4
		遺構	866 井戸	866 井戸	866 井戸	116 井戸	116 井戸	1480 井戸	1480 井戸	130 焼土坑	826 大型土坑
		時期	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	前期前半	中期初頭	中期初頭	前期	前期後半
アカガシ亜属	果皮半分		-	-	1	-	-	-	-	-	-
ケヤキ	葉破片		2	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒメコウゾ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	核完形		-	1	1	1	-	-	1	-	-
	核完形食痕		-	-	3	-	-	-	-	-	-
	核完形風化		-	-	-	-	-	-	-	-	-
	核半分		1	-	4	-	-	-	-	-	-
	核破片		-	-	-	-	-	-	2	-	-
	核破片炭化		-	-	-	-	-	4	-	-	1
ウメ	核完形		-	-	2	-	-	-	-	-	-
	核完形炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	1
カラスザンショウ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	種子		-	-	-	-	6	-	-	-	-
ノブドウ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-
アサ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-
アオツツラフジ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒョウタン	種子		-	-	-	-	-	-	-	1	-
キュウリ属メロン仲間	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	種実破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-

内果皮は楕円形で黒色、一端に細い溝状のへそがあり、全体に比較的大きさが揃ったやや深い網目が密布する。内果皮外側の光沢がある黒色の外果皮が残っている果実がある。破損が無い場合利用植物から除外した。

アサ (*Cannabis sativa* L.) アサ科アサ属

表 16. 上牧遺跡出土種実 (奈良時代)

分類群	出土部位/層位	登録番号	1604	1605
		調査区	D-2	D-2
		遺構	654 井戸	654 井戸
		時期	奈良時代後半	奈良時代後半
クワ属	種子	-	-	1
モモ	核破片	2	-	-
イヌビエ	穎果	-	-	4
アカザ属	種子	-	-	1
ノミノフスマ近似種	種子	-	-	1
ヘビイチゴ属	核	-	-	3
タガラシ	果実	-	-	1
キツネノボタン近似種	果実	-	-	1
スマレ属	種子	-	-	1
ヒョウタン	種子	84	-	6
キュウリ属メロン仲間	種子	-	-	1
アカバナ科	果皮	-	-	1
カタバミ属	種子	-	-	7
ナス属	種子	-	-	3
コナスビ	種子	-	-	1
チドメグサ属	果実	-	-	1
キク科	果実	-	-	2

果実は側面観が円形とレンズ形、上面観はレンズ形で、中央で2分割する構造であり、基部には白っぽく盤状の丸いへそがある。壁はやや固くやや厚く表面は淡褐色で平滑、表皮に血脈状模様がある。

アカザ属 (*Chenopodium*) アカザ科

種子は円形で扁平、黒色で強い光沢があり一端に唇状の基部がある。表面に細かいすじ状の網目がみえることがある。本遺跡では潰れた種子が出土したため一部を利用した可能性もある。

ヒョウタン (*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. var. *siceraria*) ウリ科ヒョウタン属

種子は高さ13mm程度、へそ側が狭い長三角形で、へそから上にむかって肋が2本伸び肋上に長さ0.5mm

ほどの軟らかい毛がある。本遺跡で出土した果皮は破片で、厚いスポンジ状で表面は平滑、内面はざらつく。

キュウリ属メロン仲間 (*Cucumis melo* L.) ウリ科

種子は高さ6.8-7.6mm、淡黄色で水滴型で扁平、表面の網目は短い長方形ないし正方形である。

**b. 樹種同定** 試料は全て866井戸からの出土である。生材からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤ガムクロラルでプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。炭化材は横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割り取り、粘土でプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察・同定した。樹種同定結果を表17に示す。針葉樹はヒノキを、広葉樹はクリ、コナラ属アカガシ亜属、クワ属、ミズキ、不明環孔材、樹皮の6分類群を出土した。また木本以外にイネ科のタケ亜科とススキ属を出土した。以下に同定の根拠となる細胞構造学的記載をおこなう。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.) ヒノキ科ヒノキ属

晩材部の幅は狭く、樹脂細胞が晩材部に偏って分布する。放射細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する (図179: W12, P242)。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

大道管が数列配列したのち小管孔が火炎状に配列する環孔材。放射細胞は同性で単列である。

コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

厚壁の丸い管孔が年輪とあまり関係なく放射方向に配列する環孔材。放射細胞は同性で単列と複合状の大きいものがある。

クワ属 (*Morus*) クワ科

年輪初めに大きい道管が配列し、その後徐々に径を減じて接線方向や斜めに塊状に不規則に配列する環孔材。道管は単穿孔で道管放射組織間壁孔はレンズ状でやや大きい。放射細胞は異性で1-5細胞幅程度の紡錘形である。

ミズキ (*Cornus controversa* Hemsl. ex Prain) ミズキ科ミズキ属

やや小さい道管が単独ないし放射方向に数個複合して、晩材部にむかって径がやや小さくなる散孔材。道管の穿孔板は階段状で段数は多く、放射細胞は異性で1-5細胞幅程度の紡錘形で単列部がやや長い。



フジ (*Wisteria floribunda* (Willd.) DC.): 広口壺 (図 180: 1234, P243) に巻かれていたつる植物で、外皮は褐色で平滑、光沢がある。試料は当年生茎の環状の木部の一部で髓や皮層、表皮は残存していない。丸い大～中くらいの道管が層をなして配列する。これらの道管の周囲には断面多角形の小道管が多数ある。大～中くらいの道管が層をなしている部分は当年枝の最初に作られた二次木部で、これらの道管が配列しているラインより下は一次木部であり、画面の右と左側に水平方向に潰れた一次木部道管の集まりがある。二次木部の接線断面では、幅が1～5細胞程で背が非常に高い放射組織が確認できる。放射組織の構成細胞は大きさ、形がまちまちで、粗雑である。小道管の穿孔は単一である。試料の切片内には二次木部の年輪が認められないことから、夏頃に死んだものと推定される。

イネ科 (Poaceae): 横断面では泡状の細胞の中に維管束鞘が散在する。タケ亜科 (Bambusoideae) としたものは稈の径が10mm程度で明瞭な節があり表面が平滑で中空である。ススキ属 (*Miscanthus*) としたものは稈の径が6mm程度で中空ないし髓が詰まり表面に凹凸がある。

#### 4. 出土種実と樹種からみた当時の植物利用と周辺的环境

**a. 古墳時代前期～中期初頭** 今回調査された遺構は古墳時代の前期～中期初頭にかけての井戸5基の井戸内堆積物および土坑から出土した種実で、利用植物のモモ、ウメ、アサ、ヒョウタン、メロン仲間が出土したが出土個数は少なかった。井戸は廃絶後に祭祀事例としてヒョウタンの果実を投げ入れることがあるが本遺跡の古墳時代の井戸ではこうした行為がおこなわれなかった可能性がある。また、井戸は廃絶後に食料残渣などを廃棄する場合もよくみられるが、本遺跡では利用植物種実の個数も少ない。一方で古墳時代の井戸には壺が多数堆積しており、板、木片、炭化材はいくつか堆積していた。板は廃棄物とみられるが、木片、炭化材は意図的に廃棄されたものかは不明である。木片5点のうち2点はクリ、2点はクワ属で井戸構築材として利用する場合もあることから、井戸枠の残骸の可能性もある。壺付着フジは夏頃刈り取られて皮むき等されずに巻かれていたと考えられる。炭化材はいずれもあまり大きくない破片で、樹種はイネ科のタケ亜科とススキ属、ミズキ、アカガシ亜属が確認されたが、ほかの破片もタケ亜科が多かった。タケ亜科は杭などに利用することも考えられるが、今回調査した遺構から出土したタケ亜科は径が細いことから杭材ではないと思われる。

**b. 奈良時代後半** 654井戸堆積物からはヒョウタンの種子を多く出土し、その他は主に路傍などに生育する草本の種実を出土した。ヒョウタンは果実は確認されなかったものの井戸祭祀に関連して井戸廃絶時に投げ入れられた可能性も考えられる。その他のカタバミ属、イヌビエ、ナス属などは周辺に生育していた場所から堆積したと考えられる。大阪府では八尾市久宝寺遺跡の古墳時代の井戸からヒョウタンの果皮と種子が検出され、井戸廃絶時の儀礼関連の可能性を言及した。山崎氏は奈良県内の弥生時代～古墳時代にかけて検出された井戸から出土した様々な遺物を検討し、ヒョウタンなどの植物種子が祭祀具とともに出土する例が多く井戸祭祀との関連性が高いとの見解をまとめている (山崎 2005)。本遺跡では古墳時代には確認されなかったが奈良時代の井戸ではヒョウタン種子が確認され、井戸廃絶時の祭祀との関連性が高いとみられる。

(吉川 純子 [古代の森研究舎])

表 17. 上牧遺跡古墳時代出土木材の樹種

登録番号	遺構	層位	状況	樹種
2257	866 井戸	下層①	板	ヒノキ
2341	866 井戸	下層②	壺付着蔓	フジ
2153-1	866 井戸	中層下部	木片	クワ属
2153-2	866 井戸	中層下部	木片	クリ
2153-3	866 井戸	中層下部	木片	クリ
2153-4	866 井戸	中層下部	木片	広葉樹樹皮
2153-5	866 井戸	中層下部	木片	クワ属
2257-1	866 井戸	下層①	炭化材	ミズキ
2257-2	866 井戸	下層①	炭化材	アカガシ亜属
2257-3	866 井戸	下層①	炭化材	ススキ属
2342-1	866 井戸	下層①	炭化材	タケ亜科
2342-2	866 井戸	下層①	炭化材	ススキ属



1. ケヤキ、葉 (2341) 2. クワ属、種子 (1605) 3. ヒメコウゾ、内果皮 (2085) 4. モモ、核 (203) 5. ウメ、核 (2349) 6. アカメガシワ、種子 (2085) 7. アオツツラフジ、種子 (2153) 8. カラスザンショウ、内果皮 (2342) 9. ノブドウ、種子 (2153) 10. アカザ属、種子 (1605) 11. ヘビイチゴ属、核 (1605) 12. アサ、種子 (2085) 13. ノミノフスマ近似種、種子 (1605) 14. チドメグサ属、果実 (1605) 15. タガラシ、果実 (1605) 16. キツネノボタン近似種、果実 (1605) 17. イヌビエ、穎果 (1605) 18. コナスビ、種子 (1605) 19. ナス属、種子 (1605) 20. アカバナ科、果皮 (1605) 21. カタバミ属、種子 (1605) 22. スミレ属、種子 (1605) 23. ヒョウタン、種子 (300) 24. キュウリ属メロン仲間、種子 (1605) 25. キク科、果実 (1605) 26. 不明、種実 (2342) スケール：実線は1mm、白抜きは10mm

写真6. 上牧遺跡出土種実

〔次頁写真7〕

1. ヒノキ (板 2257 図 179 : W12) 2. クリ (木片 2153) 3. アカガシ垂属 (炭化材 2257)  
C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは0.1mm

【引用文献】

山崎孝盛. 2005. 古墳時代の井戸祭祀に関する一考察 ～奈良県の井戸を題材として～. 岡山大学大学院文化科学研究科紀要 第20号. 71-87.



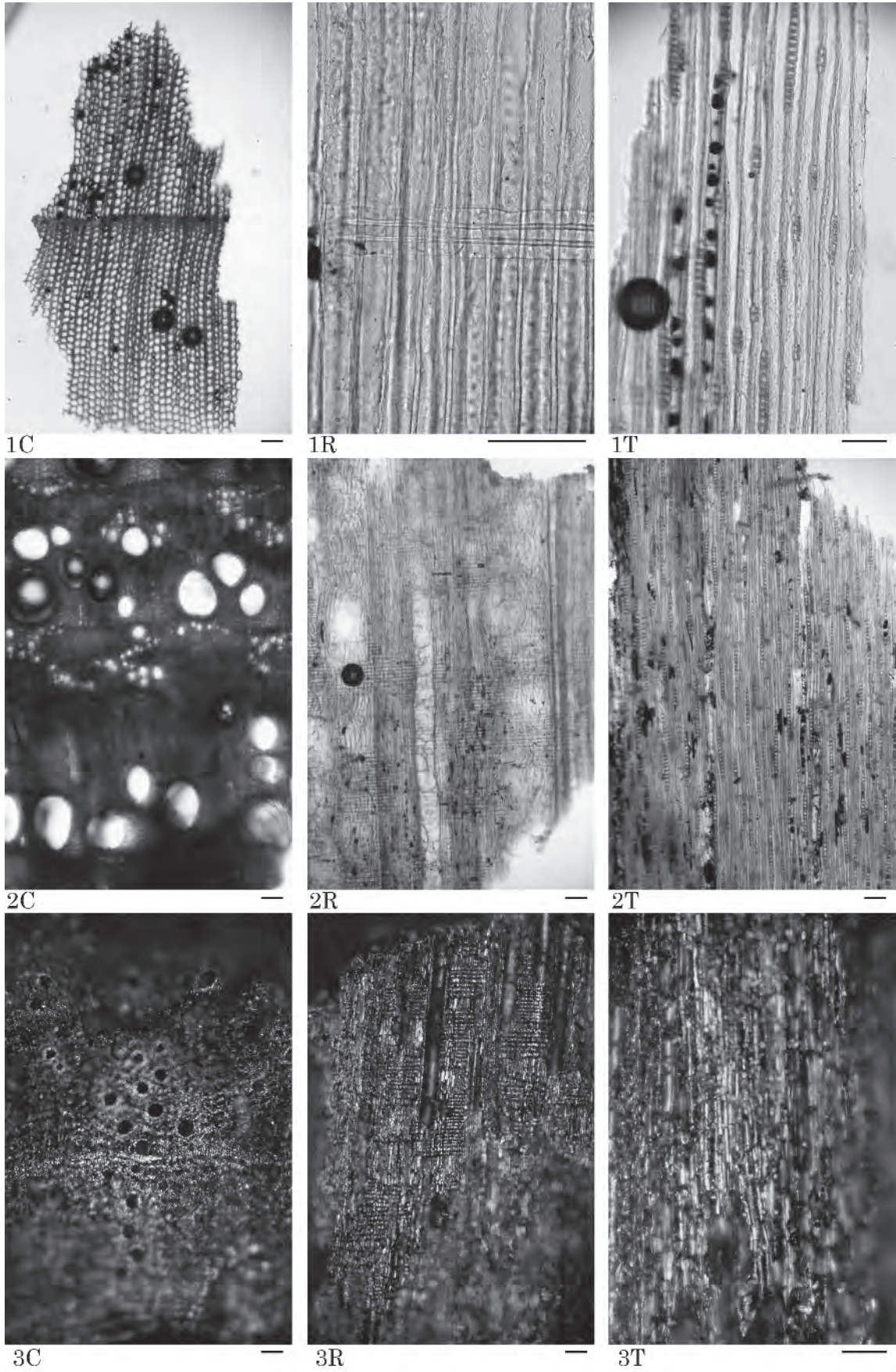


写真7. 上牧遺跡出土木材(1)



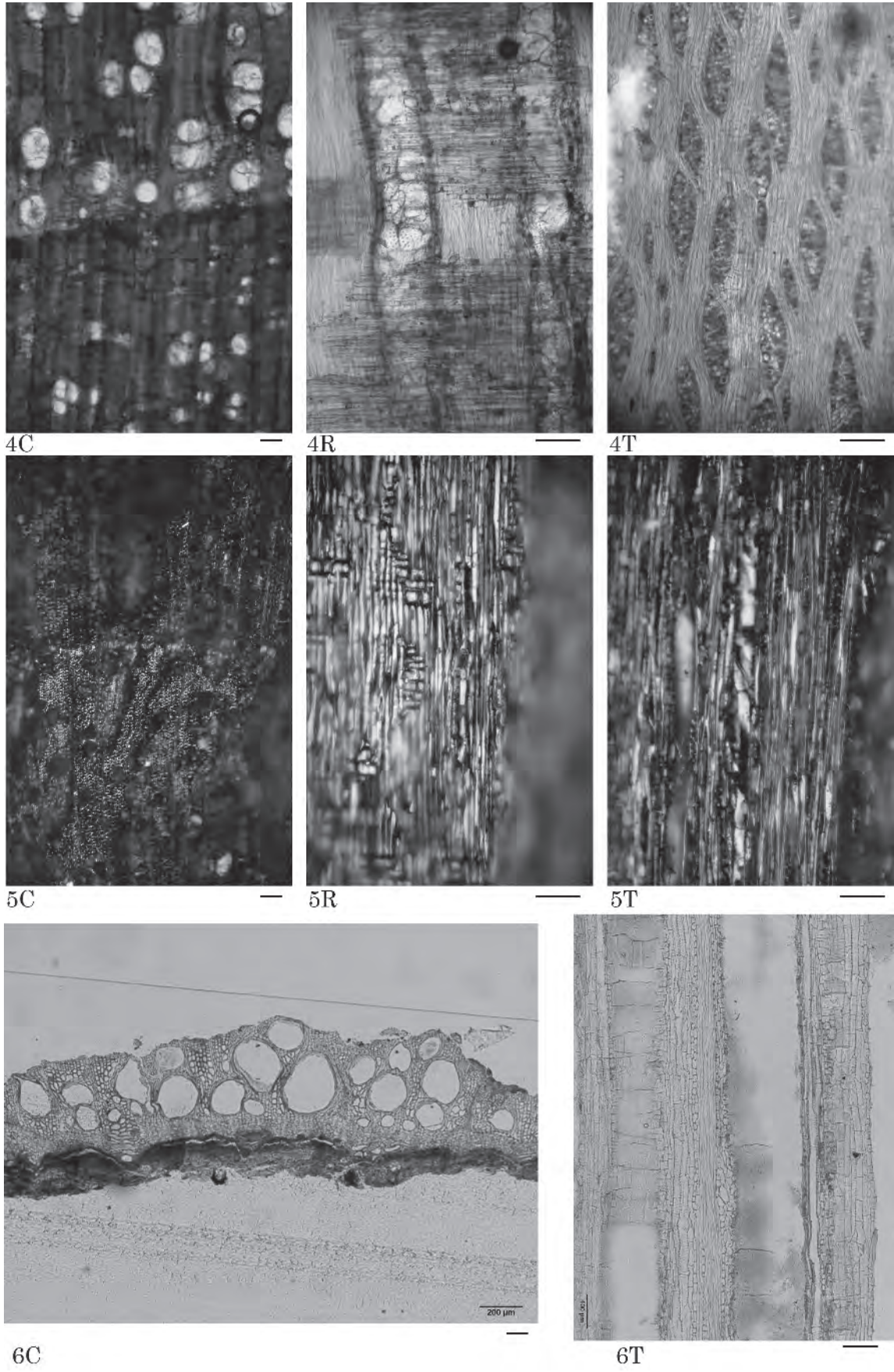
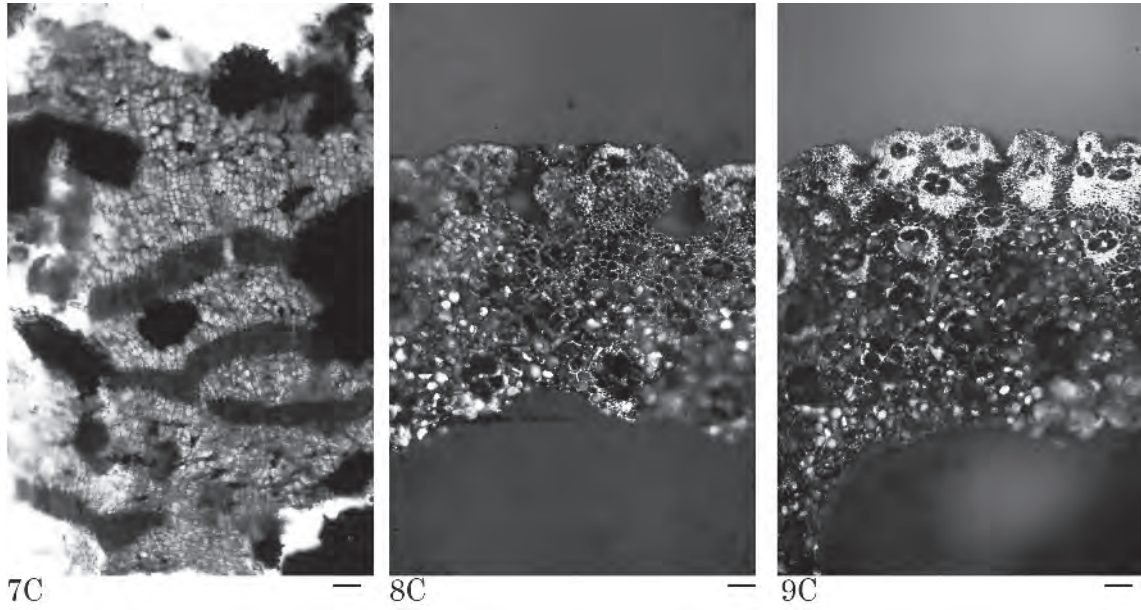


写真8. 上牧遺跡出土木材(2)





7.広葉樹樹皮(木片 2153) 8.タケ亜科(炭化材 2342) 9.ススキ属(炭化材 2257)  
C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

写真9. 上牧遺跡出土木材(3)

(前頁写真8)

4.クワ属(木片 2153) 5.ミズキ(炭化材 2257) 6.フジ(広口壺の蔓 2341)  
C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

## 第5節 昆虫遺体の同定分析

初宿 成彦 [大阪市立自然史博物館]

**概要** 1897 井戸底部から出土した庄内式期古段階の土師器 (P 3 区: 古墳時代初頭、図 233: P312) とともに昆虫遺体が出土した。古墳時代集落の開始期の遺構であり、当時の周辺の環境を検討する目的で昆虫遺体の同定分析を実施した結果、7 点・2 種の昆虫遺体を確認した。詳細は下記の通りである。

### 1. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky, 1860

分布: 北海道～奄美大島、朝鮮半島、千島、サハリン、朝鮮半島。

関西での生息環境: 平地～低山地の草地・川原・里山・疎林。

生態: 成虫はマメ類、ブドウ、クリなどの植物の葉を食べる。幼虫は土中で根を食べる。

変異: 緑、青紫、赤褐・橙の色彩型がある。

産出点数: 6 点 ・左上翅全【i-3】、長さ 10.5mm、幅 4.5mm (写真 10-1)

・左上翅全【i-7】: 長さ 10.3mm、幅 4.8mm (写真 10-2)

・右上翅全【i-4】、長さ 9.8mm、幅 3.5mm

・上翅部分【i-1】(端部欠損: i-5 と同一の可能性)

・上翅部分【i-5】(端部のみ: i-1 と同一の可能性)・左上翅部分【i-2】

### 2. コアオハナムグリ *Gametis jucunda* (Faldermann, 1835)

分布: 北海道～大隅諸島、朝鮮半島、中国、ロシア東部、インドシナ半島、インド北部。

関西での生息環境: 平地から中山地の都市部、草地、川原、里山、疎林。

生態: 成虫は多種の花に集まるほか、樹液にも来る。幼虫はもろくなった朽木や腐った落葉の中などにもぐっている。

産出点数: 1 点 ・左上翅全【i-6】、長さ 9.4mm、幅 3.8mm (写真 10-3)

**推定される周辺環境** 産出した両種とも、平地から低山地の草地から疎林まで広く普通に産する種であり、当時の環境について特筆して考察できる点は無い。

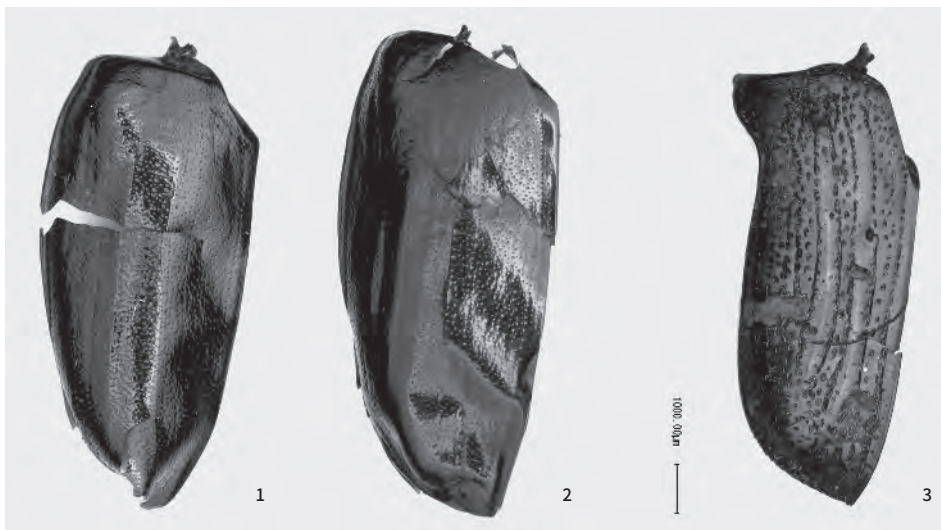


写真 10. 上牧遺跡  
出土昆虫遺体

1・2: ヒメコガネ  
3: コアオハナムグリ

1. 概要

出土した動物遺存体は、多数の細片化した貝類の殻皮と、哺乳類が12点である(表18)。貝類は古墳時代前期の遺構から出土しており、いずれも保存状態に恵まれず、殻質が分解して殻皮の細片のみである(写真11)。哺乳類は、大部分が中世の遺構および遺物包含層から出土しており、1点は古墳時代と思われる遺物包含層から出土している。哺乳類は、貝類に比べれば保存状態は良いが、脆弱な状態であるため、ナチュラルコート塗布して強化した。

2. 遺構から出土した動物遺存体

竪穴建物57内の130焼土坑(A-1区:古墳時代前期、図99:P148)から出土した貝類の種同定は困難であるが、淡水産のイシガイ科の殻皮と思われる。192大型土坑(C-3区:中世、図51ほか:P84)から、ウマあるいはウシの臼歯の細片1点が出土している。1617井戸(P3区:中世、図46:P76)の下層から、ウマの骨格部位6点(写真12)、ウマあるいはウシの骨2点、計8点が出土している。ウマの脛骨(左1右1)と中足骨(左1不明1)が2点ずつ、趾骨(基節骨・左)、遊離歯(下顎第3後臼歯・右)1点ずつを同定した。脛骨(右)と中足骨(左)の遠位端最大幅(Bd)は、それぞれ59.7mm、45.8mmを測る。それぞれ体高115~120cm、125~130cmと推定され、これらは日本在来の野間馬や宮古馬などの小型馬、木曾馬や御崎馬などの中型馬に相当する。下顎第3後臼歯は、歯冠高23.5mmを測り、13~14歳の老齡馬と推定される。ほかウマあるいはウシの2点は、部位不明の長管骨の骨幹部である。中世粘土採掘土坑(P2区、図51ほか:P84)からウマの遊離歯(第1切歯・上下左右不明)1点が出土している。咬耗状況から若齡馬と推定される。

1617井戸から出土した馬骨のうち、中足骨と趾骨は関節状況では同一個体と考えられる。脛骨と中足骨では推定体高に差があるが、これらや部位不明の破片を含めて同一個体に由来するものである可能性がある。中世の井戸からウシやウマの頭蓋骨や下顎骨が出土する場合、祭祀に関連するものとして注目される(松井

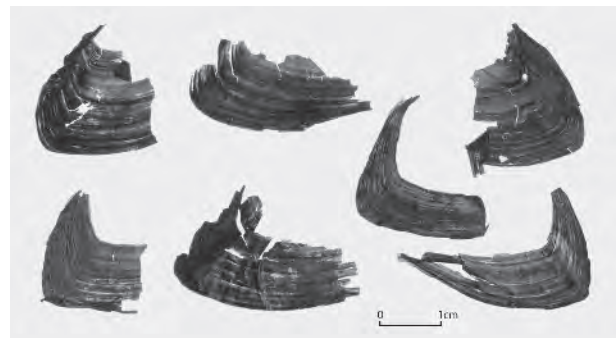


写真11. 貝類の樹皮 (130 焼土坑)



写真12. 馬骨・馬歯 (1617 井戸)

表 18. 動物遺存体一覧表

試料 No.	登録 No.	調査区	出土遺構	時期	小分類	部位	部分	左右	備考 (計測単位は mm)
1	81	B-1 区	(包含層：第 1～4 層) 12B-6d・6e・7d	中世以降か	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	-	若齢
2	300	A-1 区	130 焼土坑 (竪穴建物 57 内)	図 99、P148 古墳時代前期	イシガイ科?	殻皮		-	複数あり
3	388	C-3 区	192 大型土坑	図 51 ほか、 P84 14 世紀～	ウマ/ウシ	遊離歯	臼歯	-	
4	2586	P6 区	(包含層：第 6 層) 13A-6e・7e・7f	古墳時代か	不明	肋骨	骨幹部		新しい?
6	3344	P3 区	1617 井戸下層	図 46、P7 13 世紀	ウマ	脛骨	骨幹部 - 遠位端	右	Bd59.7, Dd39.2
					ウマ	脛骨	近位部 - 遠位端	左	
					ウマ	中足骨	骨幹部 - 遠位端	-	
					ウマ	中足骨	骨幹部 - 遠位端	左	
					ウマ	趾骨	基節骨	左	GL72.2, Bp49.3, Bd40.9
					ウマ	遊離歯	下顎第 3 後臼歯	右	L31.0, B11.1, H23.5
					ウマ?	長管骨	骨幹部	-	Bd45.8
ウマ?	長管骨	骨幹部	-						
7	3349	P2 区	中世粘土採掘土坑		ウマ	遊離歯	第 1 切歯	-	若齢

1995 など)。本例の場合は、後肢の骨格部位に集中しており、解体したものを投棄したことを想定するが、解体痕はみられず、遊離歯もあることから即断は避けたい。

### 3. 遺物包含層から出土した動物遺存体

B-1 区の 12B-6d・6e・7d 区：第 1～4 層（近世～中世耕作土）の機械掘削中に出土した 1 点は、ウマの上顎臼歯であり、破片化しているため歯種は特定できないが、歯冠は長く若齢馬と推定される。  
P6 区：13A-6e・7e・7f 区の第 6 層から種不明の肋骨の骨幹部が出土している。小片ではあるが、ほかの骨に比べて保存状態が良く、被熱していないにもかかわらず白色から薄茶色を呈するため、古墳時代のものか検証が必要と思われる。

註) 西中川駿ら (1991) に倣う。

#### 【引用文献】

- 西中川駿編 1991 『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成 2 年度文部省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告
- 松井章 1995 「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』61、国立歴史民俗博物館 pp.55-71
- Driesch, Angela von den 1976 A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES  
Peabody Museum of archaeology and Ethnology Harvard University



## 第7節 赤外分光分析 (FT-IR 法)

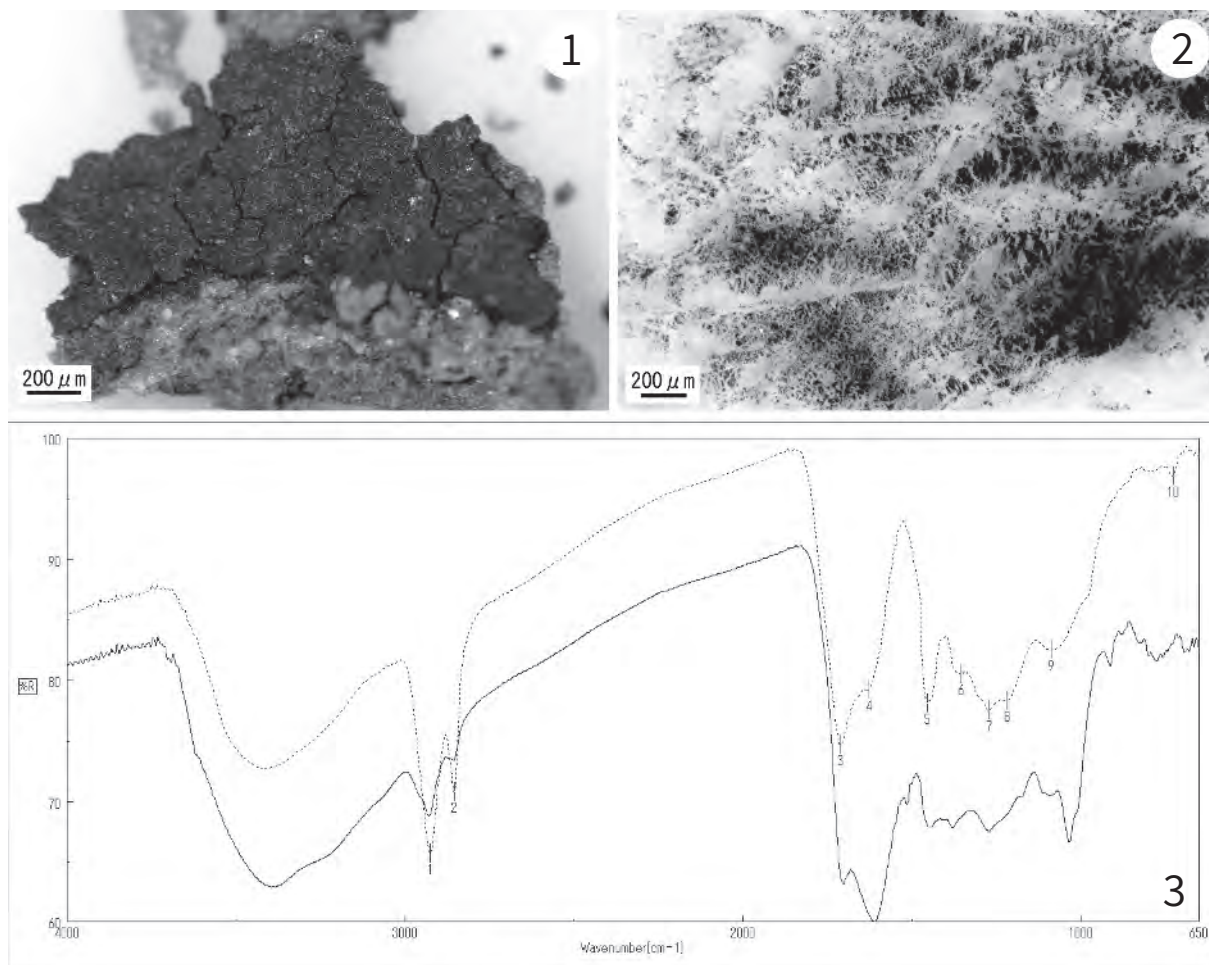
### 1. 試料と方法

分析試料は、866 井戸下層 (P4 区) から出土した古墳時代前期前半頃の大型複合口縁壺 (図 180 : 1231、P243) の付着物 1 点である (図 293)。この土器は、讃岐系近畿型・生駒西麓産と考えられている土器で、口径 27cm、口縁部の約 4 分の 3 が残存している。付着物は黒色で、口縁部の内面全体に厚く付着し、一部は胴部内面にもみられた。ここでは、当該土器の機能や性格を検討するために、付着物の材質を調べた。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて付着物を表面から薄く削り取り、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に押し潰して挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 (日本分光株式会社製 FT/IR-410、IRT-30-16) を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。なお、同定では市販されている生漆の吸収と比較した。

### 2. 結果および考察

以下に、試料の特徴と赤外分光分析の結果について述べる。図 293-3 の赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率 (%R)、横軸は波数 (Wavenumber (cm<sup>-1</sup>); カイザー) である。また、赤外吸収スペクトル



1. 黒色付着物の拡大写真 2. 黒色付着物の測定試料 3. 黒色付着物の赤外吸収スペクトル図  
(3.赤外吸収スペクトル図 実線：黒色付着物、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置)

図 293. 大型複合口縁壺 (1231) 黒色付着物とその赤外吸収スペクトル図

表 19. 生漆の赤外吸収位置とその強度

生漆			
吸収 No.	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

図に示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す（表 19）。

付着物は、やや光沢のある黒色で、肥厚した層からなり、表面には亀甲状亀裂がみられた（図 293-1）。なお、メスで潰すと、やや硬質であった（図 293-2）。

赤外分光分析では、炭化水素の吸収（No.1 と No.2）が明瞭にみられた。また、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（No.7、No.8 は変換点）が確認された（図 293-3）。ただし、No.6 の吸収は明瞭ではない。1035 cm<sup>-1</sup> 付近の吸収は、劣化に伴うゴム質の吸収と考えられる。

炭化水素の吸収（No.1 と No.2）がみられ、ウルシオールの吸収（No.7 と No.8）が確認されたため、漆と同定される。なお、付着物にみられる亀甲状の亀裂は、乾燥時に収縮して生じたと考えられる。

### 3. おわりに

大型複合口縁壺の黒色付着物は、赤外分光分析により漆と同定された。当該土器は、口縁部の約 4 分の 3 が残存する個体であるが、大型壺であり少なくとも内面では全体的に均一に付着することから、漆を塗布した可能性が考えられる。（藤根 久 [パレオ・ラボ]）

## 第 8 節 分析結果のまとめ

ここまで、年代測定、古環境の検討、遺物の材質および有機質の同定を目的とした自然科学分析の結果を報告した。以下では分析の内容・目的ごとに成果を簡潔にまとめたい。

**年代測定** 周辺の地形形成に関わる地層の年代決定、時期不明の遺構の年代決定、主要遺物の実年代測定を目的として分析を実施した。地層に関しては、基盤層下部の沖積層下部（第 8b 層）と古土壌層（第 9 層）の年代測定を実施し、縄文時代早期後葉～中期前葉の堆積層であることを明らかにできた。層厚約 1m にも及ぶ基盤沖積層（第 8 層）の最終的な形成時期は不明であるが、第 8 層中に古土壌層などが介在しないため、その期間は不明ながらも、それほど長期の年代を見積もる必要はないと思われる。どんなに新しく見積もっても、上面での突帯文土器の出土から縄文時代晩期までには地形の形成が完了していたことは確実で、周辺の地形形成と人間活動の関係性を考える上で重要な所見となった。

時期不明の遺構の年代決定に関する成果としては、古代の掘立柱建物 26 と弥生時代の 2003 溝の時期決定につながる成果を得ることができた。特に P14 区の 2003 溝は、調査当初は古墳時代の遺構の可能性を想定していたが、分析の結果、弥生時代中期前葉まで遡ることが明らかとなり、集落景観や土地利用を復元する上でも重要な成果となった。その一方で 32 井戸の布留式古段階古相の布留形甕（図 194：1396、P261）については、外面の煤と甕内部の桃核で離れた年代値が出たため課題が残った。特に外面煤の年代値は、2 世紀前半頃という明らかに古い年代値が出ているが、分析結果の齟齬の要因は不明である。また測定値にやや幅が出るため、AMS の年代測定値をもって土器型式レベルの細かな年代の絞り込みをおこなうことは、現状ではやや難しい状況にあると言わざるを得ない。ただし 100 年前後のオーダーであれば時期決定をおこなう上で非常に有効であり、複合的な遺跡における時期不明の遺構の年代特定に特に威力を発揮する結果となった。

**古環境の検討** 主に花粉分析によって、居住域が進出・拡大する古墳時代とその前後の時期を対象に、古環境の変遷について検討した。その結果、背後の山地植生に大きな変化はなかった、とする結論が出されたため、人間活動の活発化が周辺環境にどれほどの影響を与えたのか、十分に解明することができなかった。また今回の分析では、後世の攪乱の影響もあって安定的に地層が累重する地点があまりなく、年代がほぼ確実な遺構埋土を分析対象とした。その結果、局地的な植生の影響を強く受けた面があり、課題となった。その一方で成果としては、866 井戸上層からアカメガシワの花粉がまとまって検出され、これについては大型植物遺体同定分析からも同様の結果が得られている。二次林に特徴的なパイオニア種の典型例であり、古墳時代には周辺一帯が開けた環境にあったことを示すため、集落景観や淀川近傍の環境、周辺の開発動向などを考える上で参考となるデータといえる。さらに灌漑水路と推定される625 水路からは、イネ科花粉が比較的高率で検出されており、周辺一帯に古墳時代の水田が存在した可能性が推測された。今回の調査では、低地部の土地利用のあり方が十分に解明できなかったため、今後、周辺で調査をおこなう際の課題といえるだろう。

**有機質の同定分析** 古墳時代や中世の井戸から出土した種子・木材、動物遺存体を対象に、井戸祭祀の実態を解明する目的で同定分析を実施した。分析の結果、古墳時代の井戸では桃核が多く確認され、特に32 井戸や866 井戸下層など古墳時代前期前半に遡る事例では、まとまった数量が確認された。一方で時期が下る前期後葉～中期初頭前後の事例では、数量は少ないが、炭化したものが含まれる点が注目される。共伴する土器に被熱痕を伴うものが多数あり、祭祀儀礼を復元する上でも重要な所見となる。

井戸以外の遺構では、前期の竪穴建物57に伴う130 焼土坑の埋土から水洗選別によって検出された種子と貝類について同定分析を実施した。その結果、種子はヒョウタン、貝類はイシガイとみられる淡水産の二枚貝であることが判明した。焼土とともに検出されたため、調理に伴う遺構の可能性が推測され、淀川河畔における古墳時代の動植物の利用や食生活を考える上で貴重な事例となった。

古代以降では、奈良時代の654 井戸の種子がヒョウタンであることが判明し、これについては既往の調査事例などからみて井戸祭祀との関連が推測できる。中世の1617 井戸の動物骨は、ウマの後肢を中心とした部位の骨であることが判明したが、特定部位に偏っており、儀礼に伴う解体か、単なる投棄によるものであるかは評価は分かれる。さらにこれ以外にも、中世の粘土採掘土坑や包含層からウマの歯や骨がいくつか出土しており、中世以降の動物利用の実態を考えるためのデータを取得できた。

**大型複合口縁壺付着の黒色物質の同定** 866 井戸下層から出土した讃岐系の生駒西麓産大型複合口縁壺(図180:1231、P243)について、主に口縁部内面に付着する黒色物質の同定分析を実施した。これまでに近畿各地で同様の黒色物質の付着事例の報告が多数あったが、分析実績がなかったため、成分が「漆」であることが判明した点は、遺物の機能・性格を推定する上で大きな成果といえる。漆の機能としては、その特徴から水漏れ防止措置、土器自体の強化などが推定でき、ほかには漆の貯蔵によって付着した可能性も考えられる。漆の付着状況は、体部内面と口縁部では明らかに異なっており、特に口縁部にはべっとりと漆が付着している。このため口縁部への塗布が目的であったと判断でき、口縁部の強化を目的とした可能性が推測できる。大型の複合口縁壺の用途や内容物については、土器単体では明確にはできないが、あえて強化措置をおこなうという点から内容物の希少性の高さがうかがえ、あくまで推測の域を出ないが、酒類などの液体の貯蔵などが想像される場所である。なお今回の調査では、同形式の讃岐系の生駒西麓産大型複合口縁壺を12点図化している。少なくとも5個体以上の数を確認することができ、出土量が特に多い調査事例となることから、遺跡の性格を考える上でも重要な遺物である。



## 第6章 総括

ここまで、今回の発掘調査成果を時代ごとに整理・報告してきた。断絶期間を挟みながらも、弥生時代、古墳時代、古代、中世の各時代の遺構・遺物が確認され、長期に亘る人間活動の歩みを明らかにできた。また調査地は、淀川と旧河道の内ヶ池に挟まれた中州上に立地するが、大阪府域では淀川近傍での発掘調査事例はあまり多くはなく、淀川周辺の地形環境の変化に関する所見を得ることができた点も重要な成果である。

そこで本章では、ここまでの成果をもとに、通時的な遺跡の消長について、地形環境変遷、土地利用の変遷をふまえながら時代順にまとめることとしたい。その上で、各時代の遺構・遺物・遺跡の検出状況、遺構・遺物の特徴、成果の意義、今後の検討すべき課題などについて整理する（第1節）。さらに今回の調査で最も豊富に遺構・遺物が確認された時期が古墳時代であり、初頭～後期まで継続する集落の具体像が明らかとなった。その成果は多岐に亘るため、節を改めて、遺構・遺物の特徴、集落構造の復元・変遷、周辺遺跡との関係を検討し（第2節）、その上で調査成果全体を総括したい（第3節）。

なお、上牧遺跡の過去の淀川変電所の調査区（以下、変電所地区）や、隣接する井尻遺跡と梶原南遺跡は、内ヶ池を中心とする一連の遺跡群という認識ができる。そのため併せて検討する必要があり、個別の調査成果の詳細については表3（P21）を適宜参照されたい。<sup>1)</sup>

### 第1節 遺跡の消長・地形環境・土地利用の変遷

#### （1）. 検出された遺構・遺物と通時的な土地利用の推移（図295・296）

**縄文時代以前の遺物と地形形成過程** 明確な遺構は検出されなかったが、晩期の土器や石器・サヌカイト剥片が少量出土している。土器の出土の背景は明確でないが、定住的な集落が存在した可能性は極めて低く、土地への関与もそれほど積極的なものではなかったことがわかる。

このようにあまり顕著な考古学的な成果は得られなかったが、AMS法による基盤層下部〔第8b層および第9層〕の年代測定によって縄文時代における淀川河畔の地形変化に関する所見を得られた点は重要である。その概略を模式図的に表せば、図294の通りであり、弥生・古墳時代の遺構検出面下部の基盤層の形成年代は、上面での晩期の土器の出土から遅くとも後期以前と判断できる。その後については、中世までの堆積は薄く土壌化している点が特徴で、地形の凹凸も顕著であることから、縄文時代後期には既に淀川河畔部に安定的な微高地が形成されていたことは明らかである。なお現在みられるような平坦な地形は、近世以降に淀川本流からの洪水堆積物によって凹地が埋まることで形成されたことも今回の調査で判明しており、これまでほとんど明確でなかった淀川周辺での地形発達過程に関する所見を得ることができた点は重要であろう。

このほかに、内ヶ池分流路から前期に遡る北白川下層Ⅱa式の縄文土器1点が出土している。嶋上郡東部では最古の遺物であることから重要で、周辺に未知の遺跡の存在が推測される。

**弥生時代** 中期前葉（Ⅱ様式）の方形周溝墓14基と、同時期と推定される2003溝が検出された（図295上）。それ以外の時期では、中期後葉頃の土器・石器、後期の土器が数点ずつみつまっているが、これらについては出土の背景が不明で、中期前葉以外の時期は人間の積極的な関与は認めがたい。

今回の調査では、前期の遺物が出土していないため、それ以前の晩期とはやや時期が空いており、方



形周溝墓群の築造は唐突にはじまったことを示している。方形周溝墓は東西2群に分かれ、それぞれ7基ずつが確認されている。西群・東群ともに供献遺物は少量であるが、いずれも摂津Ⅱ-2・3様式におさまり、明瞭な時期差はない。方形周溝墓以外では、2003溝がAMSの年代測定によって弥生時代中期に遡ることが明らかとなり、これについては遺構の特徴からみて灌漑水路の可能性はある。ほかでは、浅谷（100落込み）上面で石庖丁が1点出土しており、周辺に耕作域が存在した可能性を示唆するものといえる。

**古墳時代** 古墳時代初頭～後期前葉までの遺構・遺物が豊富に確認されている。居住域として継続的に土地利用がなされ、これまでに建物が99棟以上、井戸・大型土坑をはじめとする取水関連遺構が10基検出されている（図295下）。時期によって遺構・遺物の量に多寡はみられるが、居住域がほぼ断絶することなく継続する点が特徴で、詳細については次節で改めて述べる。

**古代** 飛鳥時代・奈良時代・平安時代前半の遺構・遺物がそれぞれ検出されているが、遺構密度は低く、全体的な土地利用に不明な点が多い（図296上）。古墳時代後期中葉～後期後葉に空白期があるため、古墳時代の集落とは完全に断絶しており、古代の遺構も単発の検出で、継続性が乏しい。

時期ごとにみれば、飛鳥時代と平安時代前半の遺構・遺物は東側エリアに限定され、両時期ともに建物が検出されているものの、遺物の出土量も極めて少ない。これらの遺構の性格は不明であるが、北側からのびる微高地Dの先端部に位置するため、まずは北側未調査地の状況を確認する必要がある。

その一方で奈良時代の遺構は、前後の時期と同様に少ないが、西側エリアと中央エリアで検出されている。内ヶ池沿いの淀川分流路（102流路）と区画溝957溝から集中して遺物が出土しており、102流路は河岸祭祀に伴う遺物の投棄や、957溝から出土した小型瓦・鍛冶関連遺物・製塩土器など、特殊性が認められる。ほかでは、中央エリアで大型柱穴を伴う1間×1間の掘立柱建物26と製塩土器が出土した654井戸なども確認されている。全体的に遺構が希薄なため、具体的な土地利用は明確でないが、河川祭祀の痕跡や小型瓦の存在など、一部にみられる特殊な遺構・遺物の存在と空白地との関係が、土地利用を復元するための手がかりになると思われる。

**中世** 主に13世紀代の灌漑水路をはじめとする耕作関連遺構が調査地全面で検出されており、微高地B1と微高地C西半の2地点では、小規模な居住域も確認されている。遺物については、10～15世紀までの遺物が確認されているものの、13世紀代を除けば極めて限定的で、ほかに11・14・15世紀代の遺構が僅かに確認されている（図296下）。

特に10・12世紀代の遺物は、出土量がごく僅かで、10世紀は9世紀代に引き続き遺跡の空白期と呼べるような状況を呈する。後続する11世紀は、西側エリア微高地B1とその周辺で少量ながらも遺構・遺物が確認され、その後、13世紀代に入ると遺構・遺物が明らかに増加する。上述したように耕作関連遺構が中心で、東側エリアでは水田畦畔も確認されている。さらに古代まで流路として機能していた内ヶ池は、淀川から切り

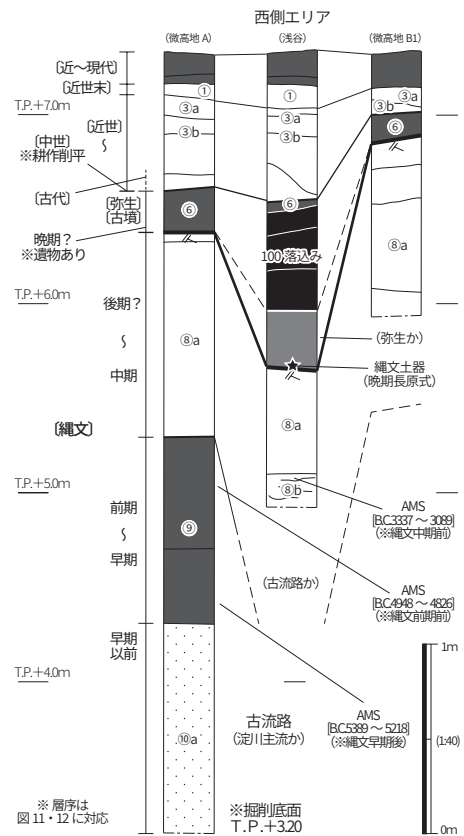


図294. 各層の形成時期

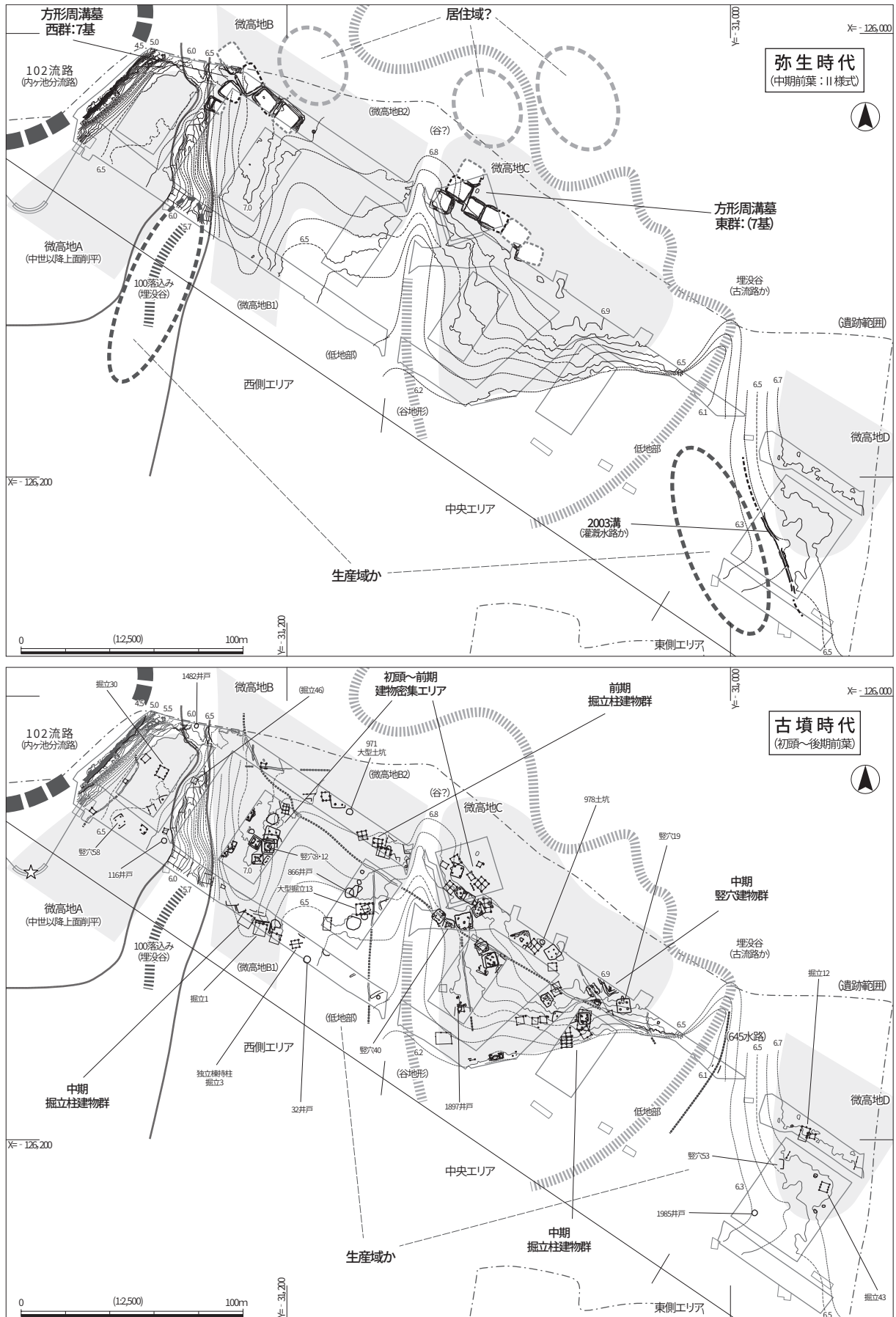


図 295. 土地利用の通時的変遷 (1)



図 296. 土地利用の通時的変遷 (2)



離されて池となったことも、今回の調査で明らかとなった。微高地 C の居住域では、方形区画や井戸などが検出されているが、一時的なものである。14 世紀以降の遺構は、粘土採掘土坑とみられる大型土坑群（14 世紀）と区画溝（15 世紀）に限定され、遺物も時期を追って減少する。

**近世** 水路や鋤溝の検出状況から、中世に引き続き現代まで耕作地としてほぼ継続的に土地利用がなされたことがわかる。中世以前の地形は、凹凸が顕著にあり耕作区画ごとの段差も大きかったが、地形が低い地点を中心に淀川の越流堆積物を母材とする近世の耕作土（第3層）が厚く堆積している。現在みられるようなフラットな景観が、近世を通じて徐々に形成されたことがうかがえ、このことは淀川の河床が近世以降に急激に上昇したことを間接的に示す。さらに淀川寄りの東側エリアでは、享和二年（1802）の大洪水の際のものとみられる洪水粗砂（第2層）の堆積と災害復旧土坑が面的に確認されており、近世以降の淀川周辺環境変化に関する知見を得ることができた。

## （2）. 各時代における遺構・遺物の特質と周辺遺跡との関係

通時的に遺構・遺物の検出状況を概観したが、一定量の遺構・遺物がみられるのは弥生時代中期前葉、古墳時代、奈良時代、中世（13 世紀代）に限定される。古墳時代については次節で詳述するため、古墳時代を除く各時代の遺構・遺物の特色、調査成果の要点、課題についてまとめておく。

**弥生時代** 弥生時代の集落は、居住域・墓域・生産域がセットとなるのが一般的とされるが<sup>2)</sup>、今回の調査では中期前葉の方形周溝墓群がまとまって検出されているものの、それ以外の情報が不足している。現状では、東側エリアの 2003 溝を灌漑水路とみなしてよいのであれば、低地部に生産域が存在していた可能性が推測される。西側エリアの浅谷（100 落込み）出土の石庖丁もその可能性を補完するものといえるが、やや根拠が弱いため、確実な水田の痕跡などを調査で明確にする必要がある。居住域に関する情報は、これまでに一切得られていないためその有無はまったくもって不明である。方形周溝墓群は、調査地北側に拡がる可能性が高く、さらに北側の未調査に集落域の存在を推定することができる。ただし推測の域を出ないため、集落構造を復元するためには周辺域での調査の進展を待つ必要がある。

方形周溝墓群の構造に関しては、西群・東群の 2 群に分かれ、立地などからさらにふたつのグループに細分することができる。供献遺物が少量なためやや不確かではあるが、出土土器はほぼ同時期であるため、ふたつの群が同時併存していた可能性も想定できる。このように仮定した場合、造墓の母体となる集団が 2～4 つのグループに分節化していたことを示唆する。

こうした中期の方形周溝墓は、嶋上郡東部と隣接する乙訓南西部にかけて多数の検出事例が知られている。特に多い例では、安満遺跡で 100 基以上が<sup>3)</sup>、大山崎町下植野南遺跡で 82 基がこれまでに確認されており、前者は中期を通して継続するのに対し、後者は中期中葉にほぼ限定される。上牧遺跡は、このふたつの遺跡のほぼ中間に位置するが、ほかに梶原西遺跡で 8 基、梶原南遺跡で 10 基弱が、神内遺跡で 20 基<sup>4)</sup>の方形周溝墓がそれぞれ確認されており、周辺での検出事例も多い。いずれも時期は中期前葉（Ⅱ様式）にほぼ限定され、10～20 基前後の群の規模、一辺 10 m 前後の墳丘規模など、共通点も多い。ほぼ同時期に出現・停止する点をふまえると、地域内での連動する動きと捉えるのが妥当であり、その背景としては中期以降拡大する安満遺跡の動向や、檜尾川・淀川周辺の環境変化などとの関連が推測されるところである。ただしどの遺跡も、本遺跡と同様に居住域や生産域の様相が不明な点が課題で、居住域の実態把握が進めば、弥生時代中期の集落動向を検討する上で良好なフィールドとなるだろう。

**奈良時代** 淀川旧流路の内ヶ池を挟んで西側に隣接する梶原南遺跡は、これまでに奈良時代の遺構・遺



物が豊富に検出されており、大原駅家の最有力候補地と目されている。その一方で上牧遺跡は、全体的に遺構・遺物が希薄な点が対照的であるが、一部に特殊な遺構が存しており、特に微高地 B2 の 957 溝では小型瓦や鍛冶関連遺物、製塩土器がまとまって出土した点が重要である。小型瓦は類例が少なく、丸瓦のみの出土であるため特殊な使用が推定され、遺構・遺物の拡がりから北側未調査地に工房的な施設か仏教関連施設が存在した可能性が示唆される。ほかでは、柱穴の大きさから高さのある構造に復元できる掘立柱建物 26（櫓か）や 654 井戸などがあり、これらは調査地の北側に偏るため、北側未調査地に散在的にこの時期の遺構が分布する可能性がある。

遺構の時期については、奈良時代前葉～中葉を中心とするため、梶原南遺跡と時期的に併行する。内面あて具痕のある土師器甕など、共通した土器の地域性を備えており、関係性があることは明らかであるが、中州上に立地する上牧遺跡の空闲地の土地利用が問題となる。単なる放棄地とすることも一案であるが、古代山陽道の淀川渡しの推定地周辺という水路・陸路の結節点となる立地や、淀川周辺および隣接する井尻遺跡における古代・中世の牧に関する文献の記載、「上牧」という地名などから、想像を逞しくすれば、広大な空闲地を馬の放牧地としてあてがった可能性も想定できる。周辺一帯は、島状に微高地が点在する景観が復元できるが、こうした環境は馬の管理上、好都合な牧に適した地形といえ、まとまった製塩土器の出土などもこれを補強する材料となろう。

より具体的な根拠が必要であるが、空闲地の評価や散在する個別遺構の性格を追求することは困難であるため、山麓扇状地を通過する山陽道と梶原寺、水陸の結節点となる梶原南遺跡、内ヶ池分流路など、周辺一帯の同時期の遺跡や構成要素を含めた全体的なランドデザインを検証することも重要になる。内ヶ池分流路では、今回の調査で河岸祭祀の痕跡がみつかったことから重要視されていたことは疑いなく、土器や瓦をはじめとする出土遺物などについて、今後はより深く検証する必要がある。

**中世** 灌漑水路や耕作溝群が面的に検出され、現行区画に沿った耕地開発が 13 世紀代に遡ることが明らかとなった点が成果のひとつである。西側エリアと中央エリアでは、耕作地に付随するような形で小規模な居住域が形成されており、変電所地区や梶原南遺跡でも同時期の居住域が確認されている。内ヶ池の成立も 13 世紀以前に遡ることが今回の調査で判明しており、この時期に広域的かつ一体的な耕地開発が進められたと判断することができる。

その一方で内ヶ池西側の井尻遺跡では、先行する 11 世紀代の遺構・遺物が豊富に確認されており、屋敷地の存在を示す方形区画などが検出されている。今回の調査では、西側エリア微高地 B1 と南東低地部で 11 世紀代の遺構が確認されているが、遺物が少ないため、内ヶ池東側への進出はそれほど積極的ではなかったとみるのが穏当である。また内ヶ池周辺では、条里的な正方位の区画がみられないが、これについては旧地形の凹凸の形状に制約を受けており、微地形に即して耕地開発がおこなわれたことを示すものとみてよい。その一方で檜尾川扇状地では、安満遺跡の調査成果から条里地割が 8 世紀後半には成立したことが判明しており<sup>8)</sup>、後続する 9 世紀代には大規模な開発がおこなわれたことが文献記載や上流域の成合谷の遺跡動向から推測できる<sup>9)</sup>。この対照的なあり方は、開発時期の違いを反映しているものとみられ、淀川河畔の低地部を含めた開発地の拡大を意図した中世以降の特質とみなすことができる。地形に即した耕地開発のあり方は、歴史地理学の分野では中世の普遍的な開発のあり方と認識されているが、考古学的な調査からその実態を追認できたことは大きな成果であるため、同様の事例の積み重ねが今後の課題といえるだろう。

後続する 14 世紀以降は、遺物の出土量が減り、居住域が継続しない。中央エリアと東側エリアの低

地部では、粘土採掘土坑とみられる大型土坑が面的に確認されているが、埋め戻された上で耕地復旧がなされており、その後は近世～現代にかけて耕作地として継続的に土地利用がなされている。14世紀以降の居住域の移動先は明確ではないが、現在の上牧集落に所在する本澄寺が文明三年（1471）の創建とされており、遅くとも15世紀後半までには現集落が成立していたことは確実である。周辺の中世集落が14世紀には一斉に解体する現象をふまえると、既存の集落に集約化された可能性を指摘できる。

## 第2節 古墳時代集落の様相

今回の調査における最大の成果は、古墳時代の建物が99棟以上検出され、具体的な集落像が描けるようになった点である。建物数は、淀川北岸地域の遺跡の中では芥川流域の郡家川西遺跡の150棟に次ぐ2番目の規模で、未調査地を含めれば事業地内だけでも150～200棟近い数の建物数の存在が推定できる。さらに井戸・土坑からは、豊富な一括資料が出土しており、建物と主要遺構の帰属時期については、遺物の特徴とともに表20にまとめた。以下では、遺構・遺物に関する基礎分析を進め、その結果をふまえて古墳時代の集落の詳細な変遷や周辺の遺跡との関係性を検討したい。

### （1）. 出土遺物の基礎分析

ここまで繰り返し述べたように、古墳時代の遺物が全体の8割程度を占めており、図化した古墳時代の遺物は1,397点を数える。長期に亘る集落の様相変化を考えるため、表20では一括性の高い遺構出土資料を既往の土器編年の枠組みをもとに時期ごとに配列した。摂津では、古式土師器の編年が未整備であるが、今回の調査では河内や大和などからの搬入品が一定量出土したため、主要遺構の変遷順は大枠の支持を得られると思われる。既に述べた通り、集落出土土器の系統的な理解は集落や居住集団の性格を検討する上で重要であることから、まずは主要遺構の土器の変遷を手掛かりに、出土土器の主要系統の推移をまとめる。その上で、外来系土器の出土傾向と手工業生産関連遺物など特徴的な遺物の様相を整理し、出土遺物からみた上牧遺跡の特色を浮き彫りにしたい。

#### a. 土器の主要系統の変化（図297）

**庄内式古段階～中段階** V様式系が甕主体で、甕以外の器種の出土は少ないが、A系統と小型の精製B系統の器種が共伴する。良好な量が少ないため出土量比は明確でないが、A系統が優勢で、B系統はいずれも搬入品とみられる。

**庄内式新段階～布留式古段階古相** V様式系・庄内形甕の両方が共伴し、これに布留形甕が徐々に加わる。良好な資料はあまり多くないため正確な出土量比を算出することができないが、図化しただけでも生駒西麓産庄内形甕は32点が確認でき、淀川北岸地域の他の遺跡と比べても出土量が多いのが特徴である。甕以外の器種はあまり多くないが、A系統と精製B系統が共伴する点は前時期と同様で、やはりA系統が優勢で、B系統は搬入品が多い。

**布留式古段階新相～中段階古相** 32井戸上層、866井戸下層、971大型土坑、432土坑など、一括性の高い資料が豊富に出土しており、V様式系・庄内形甕・布留形甕が共伴するのが特徴である。古段階古相の971大型土坑では、庄内形甕はいずれも非生駒西麓産で、摂津に多い白色胎土の資料<sup>11)</sup>や山城型庄内形甕<sup>12)</sup>などの出土も確認できる（図87：461、P133）。中段階古相に下る432土坑では、布留形甕が大半で、V様式系と庄内形甕は出土量が減る（図139、P197）。このことから甕は、布留式古段階新相頃を境に布留形が優勢になると判断できる。さらに布留形甕は、口縁部形態にバリエーションがあり、大和・





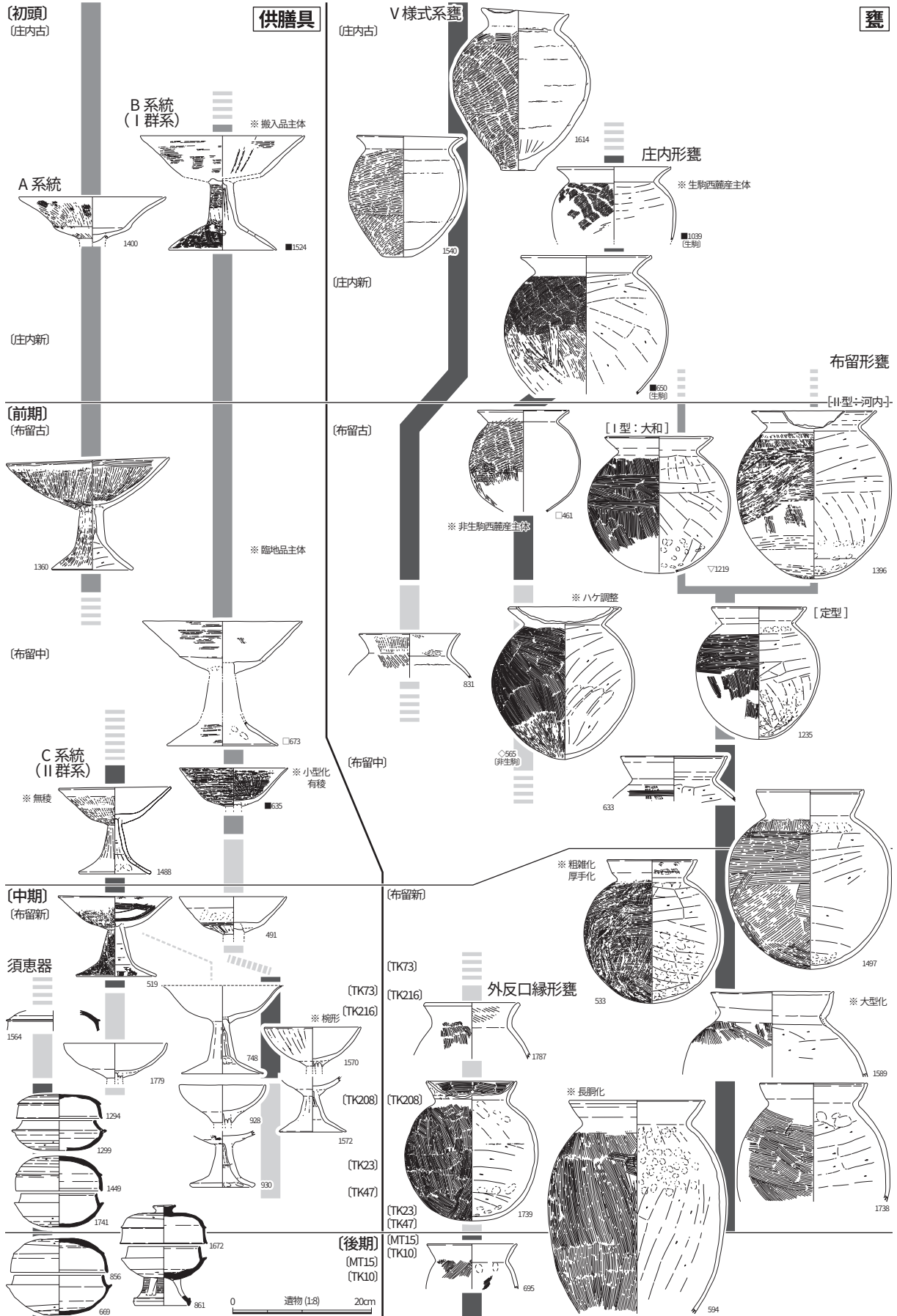


図 297. 出土土器の主要系統の移り変わり



河内の両地域に由来するタイプ<sup>13)</sup>が混在するのも特徴である。それ以外の器種の出土量も増加傾向にあり、A系統・精製B系統・C系統が共伴する。精製B系統の小型品は、搬入品と臨地品があり、ほかはタテミガキのA系統タイプから、徐々にハケ調整を主体とするC系統に移行する。

**布留式中段階中相～新相** 良好な資料群が相対的に少ないが、甕は布留形甕が完全に主体となり、定型化口縁のものが多くなる。前段階までは、出土土

器に占める甕の量が相対的に多かったが、この時期以降ほかの器種の出土比率が相対的に高まり、高杯は杯部が小型化する<sup>14)</sup>。小型精製B系統とC系統が共伴し、C系統はB系統と同一の器種・形式のものがみられる。精製B系統は、搬入品と臨地品があり、これに加え小型丸底壺・鉢にはプロポーション・胎土・色調などを明らかに意識した模倣の一群があることから、周縁部における精製器種の定着過程を考える上で興味深い事例となるだろう(図298)。

**布留式新段階(辻編年1・2段階)** 866井戸上層や1482井戸などで良好な一括資料が豊富に出土している。全体の組成の中で高杯・小型丸底壺の出土量が激増し、布留形甕を含めて主要な3器種となる。布留形甕は、定型口縁のものが大半で厚手化する。ほかでは、肩部に米粒状圧痕<sup>15)</sup>がみられる資料がある。中期に下る事例はあまり知られていないが、隣接する井戸遺跡では辻編年3段階まで下る資料が出土しており、地域性のひとつとして捉えることができるかもしれない。高杯・小型丸底壺は、ハケ調整を主体とするC系統(Ⅱ群系)が主系統となり、B系統(Ⅰ群系)は1～2割程度に留まる。ただし細部にはバリエーションがあり、形態・調整などに個別の系統の規範が崩れた折衷的な資料が一定数みられるが、これは中期以降の布留式の規範の崩壊を示す資料とみなせる<sup>16)</sup>。なお、この段階の後半期には須恵器の生産が開始されているが、今のところTG232型式の須恵器の出土はない<sup>17)</sup>。

**辻編年3段階(TK73～216型式併行)** 特に前半は、良好な資料が少なく様相が不明瞭であるが、甕は布留形が主体で、大型化・厚手化が顕著に進む。高杯は、主要形式が無稜外反形から椀形へ変化するが、それに伴って脚部の接合方法がC系統に多い円盤充填法からB系統的な脚部中実の挿入付加法へと変化しており、主要形式の変化と製作技法の変化が連動している<sup>18)</sup>。須恵器は、この段階の後半のTK216型式併行から徐々に出土量が増える。ほかでは、外面タタキの甌・鍋など、軟質土器の出土が確認できる。

**辻編年4～5段階(TK208～TK10)** 須恵器の出土量が増加し、TK208型式以降は須恵器主体の器種構成へ変化し、TK47型式期以降は土師器の供膳具はほぼみられなくなる。須恵器の杯類は、通常は後期になると口径が大きくなるが、33落込み出土資料などでは小口径の杯類や短脚高杯と共伴するため、中期的な形式が後期まで残る可能性がある<sup>19)</sup>。甕は、TK208型式併行期までは布留形が優勢であるが、徐々に外反形口縁の資料が主体となり、後期には布留形は姿を消す。

**b. 外来系土器 (図299)**

庄内式古段階～布留式新段階頃まで、200点余りの外来系土器が確認でき、図299では特徴的なもの

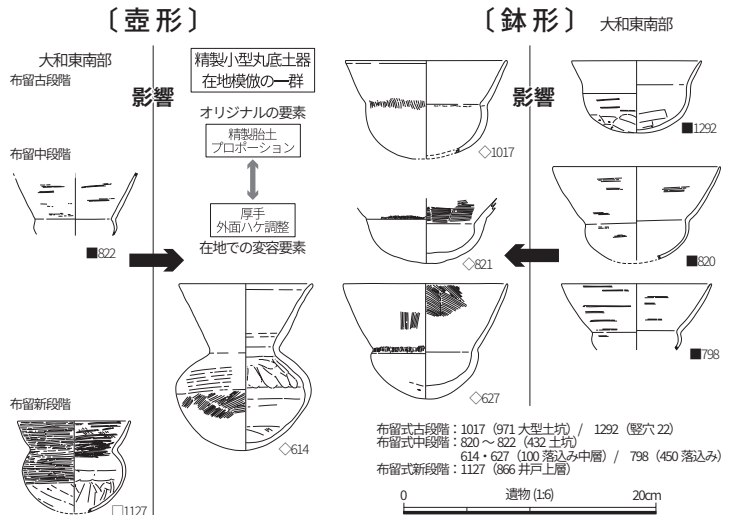


図298. 小型精製器種の在地模倣の過程

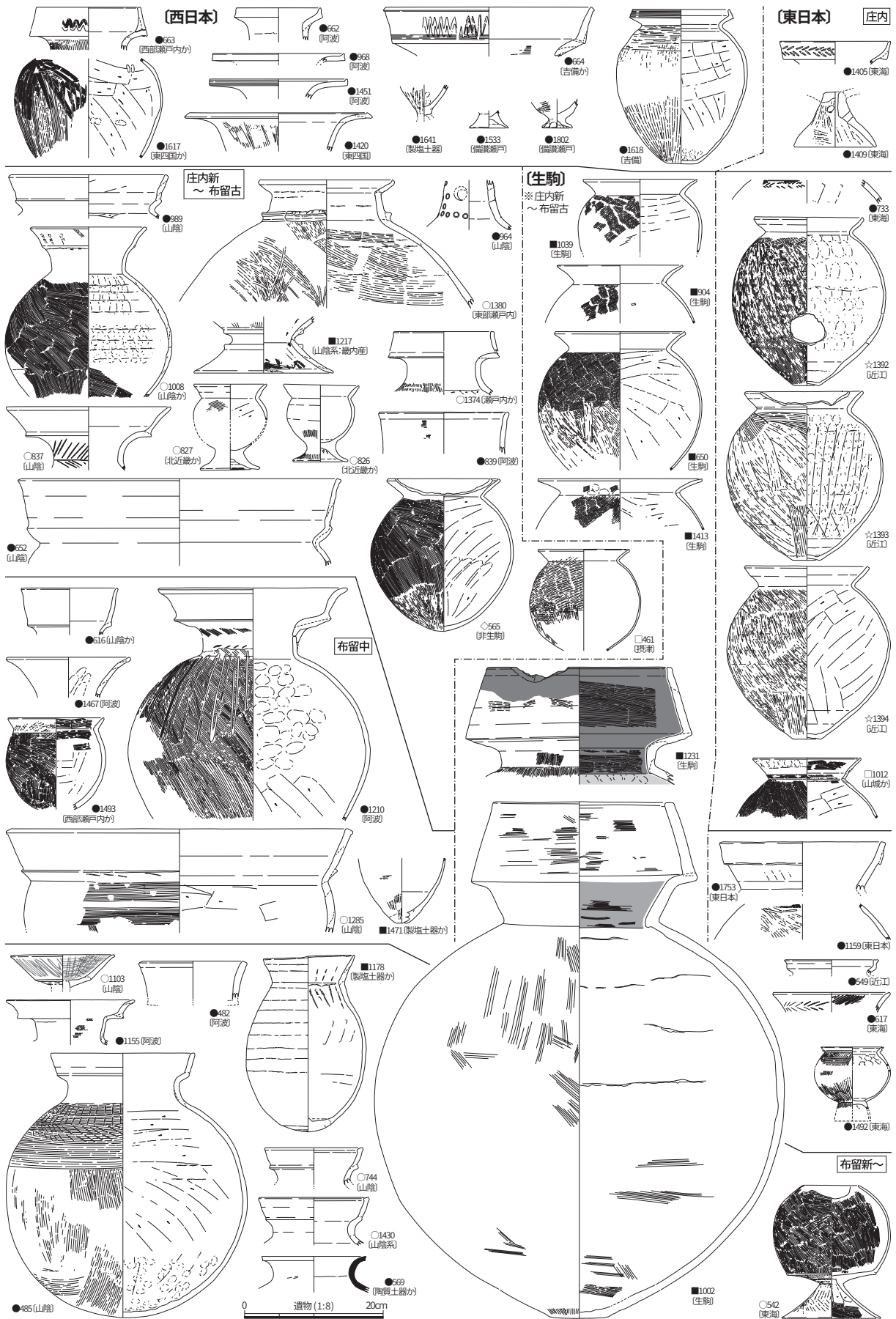


図 299. 主な外来系土器

や残りが良いものを抽出している。「西部瀬戸内」・「吉備」・「阿波」・「東部瀬戸内」・「山陰」・「北近畿」・「河内」・「大和」・「近江」・「東海」・「東日本」などの地域の土器が確認でき、器種は壺と甕が多い。大半が本遺跡より西の地域の土器で、特に河内・阿波・山陰の資料が多く、この点の変電所地区や安満遺跡の出土傾向とも近い<sup>20)</sup>。また河内の生駒西麓産の土器は、庄内形甕が多いことは当然であるが、これに加えて大型複合口縁壺がまとまって出土する点も特筆される。阿波の搬入土器については、胎土に結晶片岩を含む<sup>21)</sup>と識別が容易で、器種は壺に偏るなど特徴的なあり方を示す。東の地域では、近江・東海などの搬入品がみられるが、量的には少ない。特に近江は、淀川を介して地理的に繋がっており、高槻市域では古曾部・芝谷遺跡や安満遺跡などで弥生時代中期末～後期前半の湖南地域からの搬入品が一定量出土している<sup>22)</sup>。しかし今回の調査では、受口状口縁甕の出土は細片数点に留まっており、庄内式以降はこの地域への近江系土器の搬入量が激減することがわかる。最も東の地域の土器は、駿河「大廓式」の可能性のある壺(1753)で、西では西部瀬戸内系の複合口縁壺(663)や甕(1493)などが候補となる。

土器全体に占める外来系土器の比率が重要であるが、遠隔地の土器は72点(うち●49点・○23点)、隣接する畿内地域の搬入土器と臨地模倣品は129点(うち■97点・□32点)、折衷資料は5点(☆5点)を数える。報告した古墳時代の土器全体(1,397点)の中で、これらの占める割合は14.7%であり、これに加え、位置づけが難しい非在地土器や模倣品(うち△99点・◇19点)などが含まれることから、一定量の外来系土器の出土があると評価できる。ただし外来系土器は、ほぼ可能な限り抽出・図化しており、出土土器全体の統計的な分析が十分にできていない。そのためあくまで概算であるが、出土比率は全体の5%程度になると思われる。その一方で、布留式古段階新相～中段階古相の32井戸上層や大型土坑、432土坑など一括性の高い出土資料における外来系土器の占める割合は高く、このことは遺構の性格を考える上で重要である。

以下では、時期ごとの出土傾向の整理と特徴的な資料についてやや詳しくみる。

**庄内式古段階～中段階** 1897井戸の完形の吉備型甕(1618)は、八尾市中田刑部土坑<sup>23)</sup>と向日市東土川西遺跡<sup>24)</sup>と並ぶ畿内最古級の資料として注目される。内面ヘラケズリの東部瀬戸内系の薄甕(1617)や在地のV様式系土器と共伴しており、遺構の種類や出土量は異なるが、土器の組成が東土川西遺跡と類似する。吉備地域の搬入品は、河内での出土比率が高い<sup>25)</sup>が、庄内形甕や精製B系統の定着が進まない淀川流域でV様式系甕と共伴する最古段階の資料が増加したことは、吉備型甕の畿内への流入過程や庄内式のはじまりを考える上で重要である。これ以外でまとまった資料は少ないが、阿波、西部瀬戸内、備讃瀬戸系の製塩土器(1533・1641・1802)など西日本各地から搬入品が一定量あり、これに脚部が内湾する小型器台(1409)など近江～東海近辺の資料が少量含まれる。

**庄内式新段階～布留式古段階古相** 良好な資料は少ないが、上述したように生駒西麓産の庄内形甕が量的にみられるようになる点が特筆される。ほかに特徴的な資料を抽出すると、32井戸下層の近江・畿内の折衷甕(1392・1393・1394)、山陰系竹管文を施す壺の頸部(964)などがある。近江折衷甕は、下半部だけみれば上げ底や内外面の調整が湖南地域の資料と酷似するようである<sup>26)</sup>。山陰系竹管文の壺は、頸部とみられる細片で、丁瓢塚古墳をはじめとする播磨～西摂の有力な前方後円墳で出土する特殊な壺<sup>27)</sup>に類似する資料とみられる。

**布留式古段階新相～中段階古相** 西日本各地の搬入品がまとまって出土しており、阿波・山陰などの資料が多い。良好な資料としては、32井戸上層の瀬戸内系大型壺(1380)、866井戸下層の畿内産とみられる鼓形器台(1217)、866井戸下層および971大型土坑の生駒西麓産大型複合口縁壺(1231・



1002)、866 井戸中層の阿波系二重口縁壺 (1210)、432 土坑の羽状文のある山陰系二重口縁壺 (837) と丹波系小型台付壺 (826・827) などがある。特に 971 大型土坑の大型複合口縁壺 (1002) は、全形を復元でき、羽状文の二重口縁壺 (837) は畿内では出土例がほとんど知られていない。

**布留式中段階中相～新段階** 出土量は減少傾向にあるが、引き続き布留式新段階まで外来系土器が一定量出土する。前段階までにみられた山陰・阿波などの西日本系土器に加え、竪穴建物 32 のミニチュアの S 字甕 (1492) や 1482 井戸の脚付無頸壺 (542) など、東海系の資料がみられるようになる。特に脚付無頸壺 (542) は、屈曲部以下が廻間式の高杯と酷似する折衷的な器種で、管見の限り類例を知らない。淀川流域では、垂水南遺跡など河口部の遺跡で布留式後半以降に東海系が増えるが、こうした動きが淀川流域全体で連動する可能性を指摘できる。ほかに良好な資料としては、竪穴建物 32 出土の西部瀬戸内～南四国系の甕 (1493)、掘立柱建物 46 出土の肩部に施文がある山陰系大型甕 (485)、866 井戸上層の内外面に暗文を施す高杯 (1103)、甕形製塩土器 (1178) などがある。さらに P6 区北側、1482 井戸の周辺では、陶質土器の可能性のある壺の口縁部 (図 101:569、P150) が 1 点出土しており、時期は不明だが、注目される遺物である。

### c. その他の土器

**加飾壺と器台** 竪穴建物 8 出土の加飾壺 (710) は、頸部突帯に細かな竹管文を密に施す特異な資料であるが、これについては梶原古墳群で類例が出土している (図 300)<sup>29)</sup>。尾根を切断する方形台状墓に伴う供献土器と考えられており、ミガキの方向等は異なるが、観察・比較した限りにおいては竹管文や胎土が酷似しているため同工品と認識できる。特に竪穴建物 8 は、今回の調査で検出された竪穴建物の中で最大規模で、唯一周溝を伴うため、集落と墳墓との関連を考える上で重要な遺物である。

加飾壺については、全体の出土量はそれほど多くはないため出土資料は全て図化したところ、微高地 B1 の周辺に出土が偏ることが判明した (図 145、P202)。このことから、微高地 B1 は相対的に上位階層の居住域の可能性が高い。さらに須恵器器台や装飾付き須恵器も集中する傾向があるため (図 146、P203)、中期以降も継続して中核的な居住域であったと判断できる。

**製塩土器** 庄内式期を中心とした時期の備讃瀬戸系の脚台式製塩土器、布留式中～新段階頃の甕形製塩土器、中期中葉以降の小型椀形製塩土器が確認できる (図 299 ほか)。庄内式期の脚台式製塩土器は、中央エリアや東側エリアで確認でき、出土地点や遺構での共伴関係などから吉備型甕や精製 B 系統との関連が推測できる (1533・1641・1802)。特に外面ケズリの脚台Ⅱ式の資料 (1641) は、出土例が僅かであり、注目すべき資料といえる。甕形製塩土器については、866 井戸上層で内外面ナゲ調整の全形と破片資料が (1178・1179)、C-6 区竪穴建物 37 で外面タタキの底部片 (図 212:1563、P284) が出土している。いずれも被熱痕跡があり、赤変・黒化・硬化しており、管見の限り摂津では初の出土事例とみられる。脚台式と甕形の製塩土器は、いずれも内陸部では中河内や淀川河口部に偏在的に分布し、

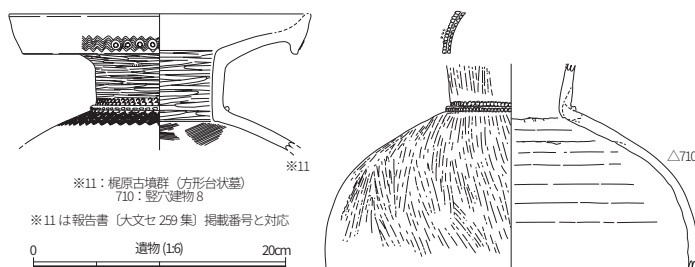


図 300. 梶原古墳群と上牧遺跡の二重口縁壺

大和盆地の纏向遺跡などを含め土器交流拠点とよばれるような拠点的な遺跡での出土が目立つことから、本遺跡の性格を考える上でも重要である。<sup>30)</sup>

小型椀形製塩土器は、中期中葉～後葉の集落遺跡では普遍的に出土する遺物のひとつで、今回の調査では破片が計



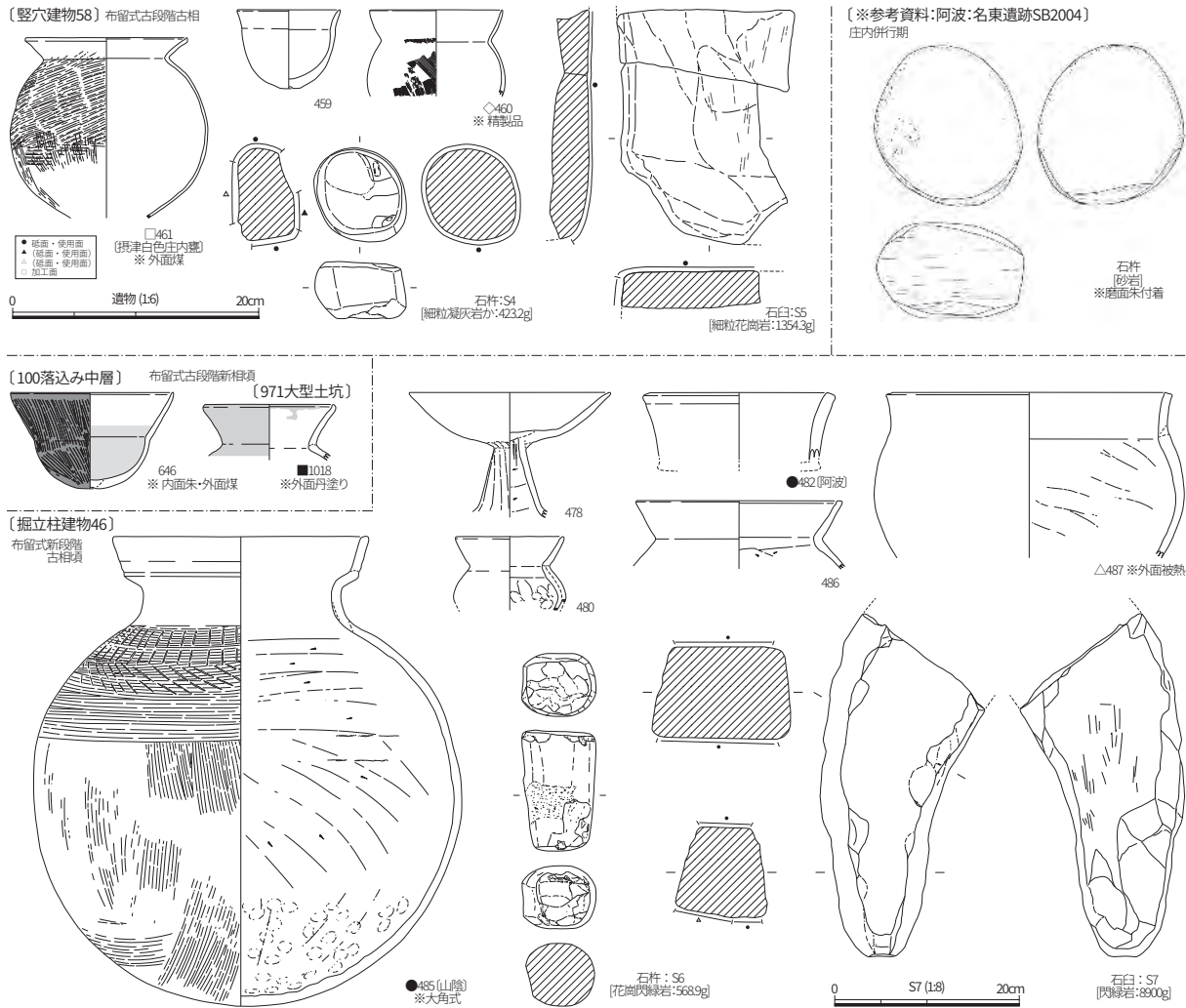


図 301. 朱関連遺物

192.9g 出土している。まとまった量が出土する遺構はなかったが、中期の遺構が多い微高地 C 南東での出土量が多い。主に建物遺構、鍛冶関連遺構の周辺で出土し、B-2 区 311 土坑では須恵器有蓋高杯蓋とともに埋納されたような状態で出土している。整形は、内面ナデの破片が大半で、外面タタキの破片はごく僅かであり、こうした様相は淀川流域全体の傾向とも合致する。<sup>31)</sup>

d. 手工業生産関連遺物

朱関連遺物、玉作関連遺物、鍛冶関連遺物などが出土しており、遺跡の性格を考える上で重要である。  
**朱関連遺物** A-1 区 堅穴建物 58 と A-2 区 (掘立柱建物 46) から石杵・石臼が共伴して出土している (図 301)。いずれも磨石・磨台のセットで、赤色顔料を製粉化するための道具と考えられる。特に堅穴建物 58 出土の石杵は、サイズの違いがあるが、徳島県名東遺跡の朱精製工房出土の朱付着の石杵と形態が酷似する。朱の精製工程に関しては、最近の研究で朱の定着のために最終工程で膠と朱を煮詰めていた可能性が指摘されており、<sup>33)</sup> 浅谷 (100 落込み中層) から出土した外面煤・内面朱付着の小型丸底鉢 (646) は、その工程で使用された可能性が高い。<sup>34)</sup> さらに堅穴建物 58 では、外面に煤が明瞭に付着する小型庄内形甕 (461) が小型の壺・鉢類 (459・460) とともに出土しており、この資料は内面に朱の付着は確認できないが、同様の使用が想定できる。(掘立柱建物 46) 出土資料では、粗製の鉢 (487) に明瞭な被熱痕跡がみられるため、朱の精製工程との関連が推測される。さらに阿波 (482) や山陰 (485)

の搬入品が共伴しており、特に朱の産出地の阿波産の壺が含まれる点は重要である。こうした遺物の組成から、上記の2棟の建物は朱の精製工房の可能性が指摘できる。現状では、朱の付着が肉眼では観察できないが、近年、蛍光X線による非破壊分析で朱付着の有無を確認する試みがなされており<sup>35)</sup>、追検証が必要となろう。

さらにこれに加え、微高地 B1 では結晶片岩が複数点出土しており(図 147、P204)、これ以外にも石杵・石臼とみられる石製品が遺構や包含層から多数出土している(遺物一覧表、P510・511 参照)。全てが朱に関連するものとはいえず、別の用途も十分に想定ができるが、潰石や磨石、磨台または潰台に分類される資料に偏っているため、辰砂の製粉化など朱精製の最終工程にあたる作業が集落内でおこなわれていた可能性を示唆する。また阿波の搬入土器は、器種が壺類に偏ることから、内容物として朱が運ばれた可能性を推測することも、あながち間違いとまでは言い切れないだろう。さらに阿波の搬入土器は、畿内で広域的に出土するため<sup>36)</sup>、この問題は本遺跡に留まるものではなく、古墳の埋葬施設などで大量に使用される朱の流通や消費の過程を考える上で、重要な問題を提起するだろう。

**玉作関連遺物** B-1 区包含層〔第6層〕(図 147：S25、P204)、P3 区の耕作溝群埋土(図 223：S41、P301)、P6 区の中世水路埋土から、玉類や石製腕飾類の素材となる緑色凝灰岩の石核や剥片が出土している。さらに P5 区竪穴建物 11 からは、緑色凝灰岩の管玉(図 128：S16、P204)が出土したため、玉作工房の可能性を想定して土壌洗浄をおこなったが、剥片等は確認できなかった。なお隣接する井尻遺跡では、緑色凝灰岩と滑石の石釧が1点ずつ出土しており、内ヶ池周辺で中期初頭～前葉頃に玉類や石製品の製作がおこなわれた可能性が高いと判断できる。また、本遺跡の北西 1.7 km の丘陵上に位置する萩之庄 1 号墳では、緑色凝灰岩製の玉類や石製腕飾類がまとめて出土しており<sup>37)</sup>、供給先の候補となることから、岩石学的な比較検討が望まれる。ほかに玉作とは直接関連しないが、ガラス勾玉が中世の耕作溝から出土している点も重要であろう(図 236：S43、P317)。

**鍛冶関連遺物** 古墳時代に遡る可能性が高い羽口や鉄滓の細片が少量ながらも出土している点が重要である(遺物一覧表、P511 参照)。鉄製品では、P6 区 1298 落込みと P4 区 867 落込みから出土した板状鉄斧(図 101：M12、P150 / 図 169：M18、P229)、D-2 区竪穴建物 20 出土の鉄鋌の可能性のある板状鉄製品(図 250：M27、P333)、P3 区(掘立柱建物 51)出土の大型の棒状鉄器(図 230：M22、P309)などがある。867 落込みの板状鉄斧(M18)は手斧の可能性があり、鉄器研磨用とみられるきめの細かい大型の7面砥石(S30)が共伴する点が注目される。また竪穴建物 20 と(掘立柱建物 51)には、被熱面が伴い、遺構周辺内外からは羽口の断片や製塩土器などが出土しているため鍛冶作業がおこなわれた可能性が推定できる。ほかにも、用途不明の板状製品や棒状製品が一定量出土しており、鍛冶との関連が推測される遺構・遺物は中期に下るものが多い。

その一方で庄内式～布留式古段階に遡る竪穴建物 7・18 には、大型の炉跡が伴っている。調査時には鍛冶炉の可能性が推測されたため、竪穴建物 7 の埋土の洗浄をおこなったが、鍛造剥片等の微細遺物は確認できなかった。鉄製品以外の遺物として注目される資料としては、敲打痕部分が著しく黒化した敲石(図 182：S33、P247 / 図 236：S44、P317)と一部が被熱赤変・黒化する板状石材(図 103：S11、P152)を挙げるができる。いずれも用途は明確ではないが、高温作業に用いられたことは明らかであり、その候補として鍛冶作業における使用を念頭に置く必要もあるだろう。

#### e. 上牧遺跡の出土遺物の特質と評価

出土遺物のうち古式土師器の主要な系統についてまとめると、布留式古段階前後を境に V 様式系 +

A系統のセットから、布留形+C系統のセットに切り替わりが進むため、大枠では汎畿内的な土器様相の変化と概ね連動すると評価ができる。庄内形甕とB系統については、従属する形で河内からの搬入があり、生駒西麓産庄内形甕は布留式古段階新相までは一定量の出土がある。B系統の小型精製品は、布留式古段階までは搬入品が主体で、中段階以降は徐々に模倣品が増えるが、継続して搬入品がみられるため、畿内中枢部、おそらくは大和との関係性が継続している。布留式新段階は、豊富な一括資料があり、主要な系統がC系統（II群系）に完全に切り替わる。直前の中段階中相～新相の資料が少ない点が課題であるが、摂津・山城における大局的な土器の系統変化とおおよそ調和的といえる。<sup>38)</sup>

なお畿内の古墳時代集落では、庄内形甕と精製B系統の土器の流入状況が、集落の位置づけを考える上で重要と考えられている。<sup>39)</sup>本遺跡では、庄内式の早い段階から一定量の搬入品の精製器種が出土し、庄内式新段階以降は生駒西麓産の庄内形甕の搬入品の比率が高い点は特筆すべき内容といえる。現状では、統計的な分析が不十分であるが、田中元浩による集落類型のII A類と認識することができ、淀川流域の中では中核的な遺跡と評価することができる。さらに外来系土器の搬入状況からも同様の指摘が可能であり、特に西日本各地からの搬入品が庄内式期～布留式期を通じて安定的にもたらされることは、他地域と繋がりをもつ交流拠点のような性格を備えている。特に庄内式の早い段階で、東部瀬戸内や河内との繋がりの中で集落が出現する点は、その希少性からみても強調すべき内容といえる。その一方で、東日本地域からの外来系土器の流入はやや低調であるが、点的に近江・東海系の遺物の出土があり、布留式古段階と布留式中段階新相以降に近江系や東海系のやや特異な資料が目立つ。

さらに土器以外の遺物では、朱・玉・鍛冶など手工業生産に関わる遺物が一定量あり、外来系土器と同様に遠隔地との繋がりを見出せる資料といえる。特に朱と玉に関する遺物は、出土遺物の組成や出土状況、使用痕などから、単なる流通の過程での出土ではなく、本遺跡もしくは周辺での生産が確実視できる点が重要である。朱と阿波の土器との関係については、中河内の遺跡群や溝咋遺跡の状況とも合致するとされ、土器交流拠点と呼ばれるような遺跡で一時的に集約し、最終的な精製・製品化を経た上で消費地へ搬出するような状況が復元できるだろう。玉類に関しては、石材のみの出土であるため、確定的なところまでは言及できないが、朱と同様に畿内での小規模な生産がはじまっている可能性が高く、工房の確認や古墳出土品との岩石学的な分析・検討が必要である。いずれにしても、遠隔地からもたらされる朱や玉の流通と消費に関する一端が明らかとなり、集約化がまだそれほど進まない古墳時代前半期の手工業生産のあり方を復元する上で重要な成果を提供するものであるといえるだろう。

なお須恵器の生産がはじまる中期以降については、TK216型式以降に須恵器と韓式系軟質土器の普及・定着が進む。特にTK208型式頃には、須恵器を主体とする器種構成に置き換わっている点は、畿内中枢の動向とも概ね一致する。初期須恵器や軟質土器の出土量自体はそれほど多くはないが、中期前葉～中葉頃には外面タタキの甗・鍋などの出土もあり、渡来系集団の一定の関与が認められる。

以上みてきたように、全体としては畿内の土器類の大枠の変化と調和的で、外来系土器が量的に出土する点や中期の須恵器普及も比較的早い点をふまえると、外の地域との繋がり比較的強い集落という評価は概ね妥当といえよう。

## (2) 遺構の基礎分析

建物遺構と遺物がまとまって出土した井戸・土坑等について、構造の特徴と時間的推移についてまとめる。報告文と上述の遺物の基礎分析の際には、既往の編年案との擦り合わせを意図し、土器型式に



依拠して時期を記述したが、以下では今回の調査で明らかとなった遺構・遺物のまとまりを重視して、表 20 (P421) の両端の年代的枠組み〔段階〕を用いて様相を整理することとしたい。

### 1. 建物の構造と特徴 (図 302)

今回の調査で確認された古墳時代の建物数は、総計 105 棟を数える。その内訳は、竪穴建物が 56 棟、掘立柱建物が 49 棟で、時期があいまいで古代・中世に下る可能性がある掘立柱建物 6 棟を除くと、確実なものとしては 99 棟を数える。また 1 間×1 間の柱穴の並びについては、ひとまず(掘立柱建物)と表記して 16 棟を報告したが、検出状況などから竪穴建物の主柱穴のみの検出事例と判断できる。これを竪穴建物に含めると、105 棟のうち内訳は竪穴建物 72 棟、掘立柱建物 33 棟となり、全体的な傾向としては竪穴建物が主体の集落という評価ができる。以下では、表 21・表 22 にまとめた竪穴建物と掘立柱建物の基本的な情報をもとに、建物構造の特徴について時期的な推移を検討する。

なお建物数については、同一地点での建替えを別の建物としてカウントしたものと、ひとつの建物として 1 カウントとしたものが混在している。組合せが不明の多数の柱穴の存在や、微高地頂部と縁辺部における上面の削平をふまえると、実際の遺構と建物の数は現状数よりも多くなることはほぼ確実である。また建物の時期決定については、出土遺物と重複する切り合い関係から判断したが、不確かなものが一定数含まれる。ただし、須恵器の有無などで大まかな区別ができるものも多く、建物遺構の推移を把握する上では十分に有意なデータとなるだろう。

**竪穴建物**(表 21) いずれも古墳時代に通有の方形の竪穴建物で、全体を検出できたものは多くはないが、規模は平均で 5 m 前後のものが多い(図 302)。最大規模の竪穴建物 8 は、一辺 7 m 規模で、唯一、周堤・周溝を伴う。竪穴建物は、集落の存続期間を通じ継続するが、検出数は前期 1a 期(庄内新～布留式古)にピークがあり、その後はやや減少傾向にある。また建替えが頻繁におこなわれており、同一地点で複数回の建替えがおこなわれるパターンと、少し位置をずらしながら継続するパターンがみられる。建替えは、3 回・4 回おこなわれる場合が通例で、このことは居住域が安定的に継続したことを示す。ただし建替えが頻繁におこなわれるのは、前期に特有の現象で、中期では竪穴建物 50 の事例を除けば、同一地点での建替えはそれほど顕著ではなく、やや継続性に乏しい面を指摘できる。

建物の基本構造は、主柱穴が 4 本の構造のものが主流で、中期以降には竪穴建物 53 のように主柱穴を伴わないものが一定数ある。竪穴建物に付属する遺構としては、炉跡、カマド、壁溝、壁際の土坑、などを挙げることができ、炉跡については中 2 期までは普遍的にみられるが、須恵器が本格的に定着する中 3 期以降は炉跡はなくなる。それと代わるようにしてカマドを伴う建物が出現するが、カマドの検出数は 3 例に留まるため、数自体は少ない。壁溝については、伴うものと伴わないものがあり、建物構造に関わる違いを反映しているとみられるが、その差異は明確にできなかった。壁際に土坑を伴う事例は 29 例ある。全体の 40% であるが、建物の部分的な検出に留まっている事例もあるため、かなりの高率で伴う遺構とみなしてよい。前期から中期まで継続するが、性格・機能に関する手がかりはほとんど得られていない。ただし竪穴建物 13 や竪穴建物 46 では、小型精製器種や大型直口壺が意図的に埋められており、重要な遺構という認識は可能である。続いて床面下部の凹みについては、口の字形・コの字形・一部分など、形態は様々であるが、いずれも掘削後に埋め、上面を床面としている点が共通する。その意図と機能については、やはり不明と言わざるを得ないが、中期初頭以前の建物に多く、中期以降は貼床を伴うものが少なくなる。以上をまとめると、時期ごとに炉跡の有無や床面の構造の違いがあり、中期前葉～中葉頃を境に竪穴建物の構造が変質することを指摘できる。



表 21-1. 竪穴建物一覧

竪穴 No.	地区	時期	残存率	規模 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	重層建物	炉跡	カマド	壁際土坑	内側凹み	ほか付属遺構	図 No.	
竪穴 39	W:A	早 1 期	1/3	一辺約 5.0	(25+)	-	-	○	-	-	-	89	
竪穴 30	C:W		3/4	6.6x5.8	38.3	-	-	○	-	○	○	219	
竪穴 44	C:W		1/5以下	一辺 21+	-	-	-	-	-	○	-	216	
竪穴 60	W:B1	早 2 期	1/2	6.3x(5.7+)	(40+)	-	-	-	-	○	-	150	
竪穴 24	W:B2		1/5以下	一辺 35+	-	-	-	-	-	-	-	155	
竪穴 43	C:W		ほぼ完	(7.4x7.5 以下)	50 以下	-	-	○	-	○	○	216	
竪穴 58	W:A	前 1a 期	完	5.0x4.3	21.5	-	-	-	-	△	-	87	
竪穴 57	W:A		ほぼ完	3.7x3.2	11.8	-	△	-	○	-	-	焼土坑	90
竪穴 16	W:B1		1/4	(6.2x2.1+)	(12.8)	+4	-	-	-	-	-	-	114
竪穴 10	W:B1		1/5	5.1x(2.6+)	(13.3)	△	-	-	○	○	-	-	116
竪穴 18	W:B1		1/2	(5.0x4.0)	(20+)	△	●	-	○	○	△	-	119
竪穴 8	W:B1		4/5 以上	7.0x7.0 周溝 (10.0x9.0+)	49.0 (90.0+)	△	○	-	○	○	-	-	122
竪穴 3	W:B2		1/3	5.4x (2.3+)	(25.0)	-	-	-	-	○	○	-	131
竪穴 25	W:B2		1/5以下	一辺 1.6+	(1.9)	△	-	-	-	-	-	-	155
竪穴 33	C:W		ほぼ完	6.5x7.5	48.8	△	○	-	○	-	-	-	216
竪穴 40	C:W		3/4	5.2x(5.4)	(28.1)	-	○	-	○	-	○	ベッド	217
竪穴 12	W:B1	前 1b 期	完	5.7x5.7	32.5	△	○	-	○	○	ベッド	122	
竪穴 7	W:B1		完	4.4x5.1	22.4	△	●	-	○	○	-	床面粗砂 焼土坑(壁際)	126
竪穴 23	W:B2		1/4以上	一辺 4.8+	(20+)	-	-	-	-	△	-	-	155
竪穴 22	W:I		1/5	(4.8x3.5+)	(20+)	-	-	-	-	○	-	-	183
竪穴 35	C:W		完存	4.6x4.8	22.1	△	○	-	○	-	○	-	211
竪穴 9	W:B1	前 1c 期	1/2	5.4x(3.3+)	(25+)	△	○	-	○	○	-	115	
竪穴 41	C:W		4/5	5.4x5.1	27.5	-	-	-	△	△	○	-	218
竪穴 36	C:W		1/3	一辺 3.6+	(12+)	△	-	-	-	-	-	-	212
竪穴 46	C:W		4/5以上	5.2x4.4	22.9	△	△	-	-	○	○	-	222
竪穴 13	W:B1	前 2a 期	完存	6.7x6.6	44.2	+1?	○	-	○	○	-	124	
竪穴 37	C:W		1/3	4.1x4.6	18.9	△	-	-	○	-	-	-	212
竪穴 47	C:W		ほぼ完	6.7x6.3	42.2	△	△	-	○	○	-	-	224
竪穴 48	C:W	ほぼ完	(6.7x6.3)	(42.2-)	△	△	-	○	○	-	-	224	
竪穴 32	C:W	前 2b 期	ほぼ完	5.6x5.2	29.1	△	○	-	○	○	土坑/焼土 被熱面	214	
竪穴 49	C:W		ほぼ完	5.4x5.0	27.0	△	△	-	○	○	○	-	225
竪穴 42	C:W	中 1a 期	1/5以下	一辺 2.7+	-	-	-	-	-	-	-	212	
竪穴 11	W:B1	中 2 期	完	外: 4.9x5.3 内: 3.5x4.0	外: 26.0 内: 14.0	+1	△	-	△	○	△	128	
竪穴 6	W:B1		1/2	4.8x(2.0+)	(20+)	-	○	-	○	-	-	-	130
竪穴 2	W:B1		3/4	内: 3.6x3.5 外: 一辺 4.9+	内: 12.6 外: (20+)	+1	-	-	-	-	-	-	131
竪穴 51	C:W	中 3a 期	1/5以下	一辺 3.4+	-	-	-	-	-	○	-	226	
竪穴 4	C:E	中 3b 期	1/3	一辺 3.5+	-	-	-	-	○	△	-	243	
竪穴 50	C:E		ほぼ完	5.3x5.3	28.1	+3	-	○	○	○	○	-	253
竪穴 53	E		1/2	4.2x(2.6+)	(16+)	-	-	-	○	○	-	焼土坑 壁際	266
竪穴 31	C:E	中 4a 期	完存	5.8x5.8	33.6	-	-	-	-	-	-	238	
竪穴 5	C:E		完存	4.8x4.5	21.6	-	-	-	△	△	△	-	242
竪穴 20	C:E		1/3	一辺 4.5+	(20+)	-	●	-	-	△	-	焼土坑か	249
竪穴 45	C:E		1/5以下	一辺 3.2+	-	-	-	-	○	○	-	-	255
竪穴 52	C:E	中 4b 期	1/5以下	一辺 2.7+	-	-	-	-	-	-	-	212	
竪穴 59	C:E		ほぼ完	5.3x4.4	23.3	-	-	-	-	△	○	-	246
竪穴 19	C:E	完存	6.2x5.9	36.6	-	○	○	○	○	-	-	251	
竪穴 34	W:B1	後 1 期	1/5	一辺 3.4+	-	-	-	-	○	-	-	118	
竪穴 38	C:W		ほぼ完	5.7x4.8	27.4	-	-	○	-	-	-	-	210
竪穴 21	C:E		1/4	一辺 4.6+ 周溝: (一辺 9.5+)	(20+)	-	-	-	-	-	-	外周溝	248
竪穴 1	W:B1	前(前期)	1/5以下	一辺 3.3+	-	-	-	-	○	-	-	132	
竪穴 55	W:B1	前(前期)	1/5	一辺 6.2+	-	-	-	-	○	-	-	132	
竪穴 56	W:B1	前(前期)	1/5以下	一辺 3.4+	-	-	-	-	○	-	-	132	
竪穴 26	W:B2	不明	1/5以下	一辺 3.8+	-	△	-	-	-	-	-	155	
竪穴 27	W:B2	不明	1/5以下	一辺 2.6+	-	△	-	-	-	-	-	155	
竪穴 28	W:B2	不明	1/4	(4.5x1.1+)	(20.0)	-	-	-	-	-	-	155	
竪穴 29	W:B2	不明	1/5以下	一辺 2.5+	-	△	-	-	-	-	-	155	

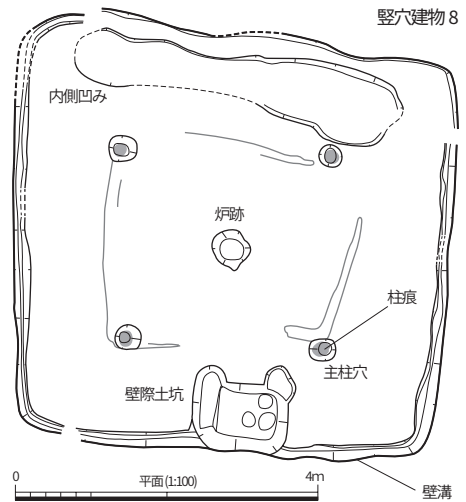


図 302. 竪穴建物の基本構造

表 21-2. (掘立柱建物) 一覧 ※ 竪穴建物

掘立 No.	地区	時期	規模 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	ほか	図 No.
掘立 27	C:W	前 1b 期	(3.1x2.9) (一辺 5.0)	(5)	-	208
掘立 46	W:A	中 1a 期	(2.5x2.5+) (一辺 5.5+)	(30)	石杵 (石臼)	9
掘立 44	E	中 3a 期	(2.3x2.0) (一辺 4.0~4.5)	(20+)	特殊炉跡	264
掘立 51	C:W	中 3b 期	(2.5x2.7) (一辺 5.0)	(25)	特殊炉跡 壁際	229
掘立 49	W:A	中 4a 期	(1.7x1.7) (一辺 3.5~4.0)	(13)	-	86
掘立 45	C:W		(3.2x3.0) (一辺 4.5)	(20)	-	241
掘立 48	W:B1	中 4b 期	(2.2x2.1) (一辺 4.0~4.5)	(18)	-	114
掘立 29	C:W		(1.8x2.1) (一辺 4.0)	(15)	壁際	209
掘立 52	C:E		(3.4x3.3) (一辺 6.0~6.5)	(35)	△壁際	244
掘立 53	C:E		(2.7x2.9) (一辺 5.0)	(25)	-	244
掘立 54	C:E	(2.9x2.9) (一辺 5.0)	(25)	△壁際	244	
掘立 8	C:E	中前期半	(2.8x2.8) (一辺 4.5)	(20)	-	241
掘立 32	W:A	不明	(2.1x1.9) (一辺 5.0)	(25)	-	85
掘立 6	W:A		(2.5x2.7) (一辺 4.0~4.5)	(18)	-	86
掘立 9	W:A		(1.9x2.0) (一辺 4.0)	(15)	-	90
掘立 5	W:A		(1.9x1.4) (一辺 3.5~4.0)	(13)	-	117

表 4-2 凡例 (表上)  
 ※ 規模 上段: 柱間隔 / 下段: 推定規模  
 ※ 面積 ( ) あり: 推定面積

表 4-1 凡例 (表左)  
 ※ 炉跡 ●: 大型炉跡 (特殊炉跡)  
 ※ 面積 ( ) あり: 推定面積

一部の建物にみられる特殊な遺構としては、大型の炉跡、焼土坑、ベッド状遺構がある。大型炉跡については、上述した通り中期以降に多く、鉄器や鍛冶関連遺物の共伴事例がみられるため、鍛冶作業に伴う遺構の可能性を指摘できる。前期以前の事例では、庄内式新段階～布留式古段階に遡る事例が2棟あり、ほかに中央炉跡を中心に広範囲に焼土が広がる竪穴建物 32 の事例もある。このうち竪穴建物 7 では、壁際土坑とは別に焼土坑が伴っており、竪穴建物 32 では小型鉄製品が出土している。こうした点を積極的に解釈すれば、なんらかの手工業生産に関わる遺構と評価することは可能で、鍛冶作業に伴う遺構の可能性は残される。ほかに手工業生産に関わる建物遺構としては、上述した通り、石杵・石臼の出土から竪穴建物 58 と (掘立柱建物 46) が朱精製に関わる工房とみてよい。さらに竪穴建物 11 や

竪穴建物 47・48・49 の内外からは、緑色凝灰岩の管玉や石核が出土しており、これらの建物自体、または近辺に玉作工房の存在が推定できる。

ほかでは、二枚貝が出土した焼土坑を伴う竪穴建物 57 や、ベッド状遺構を伴う竪穴建物 12・40 が特殊な遺構の事例で、いずれも前期前葉以前の建物に伴う。このうちベッド状遺構は、播磨が起源とされるが、畿内では山城の乙訓地域や対岸の交野など淀川流域での検出事例がある。特に乙訓地域では、庄内式期～布留式古段階の事例が集中的にみられ、<sup>40)</sup> 上牧遺跡や交野市坊領遺跡の事例とも時期が一致するため、淀川を通じた周辺地域との交流関係のなかでもたらされたものと推測される。

**掘立柱建物** (表 22) 全体的な傾向としては、2間×2間または2間×3間の構造のものが多く、一部を除くと平面形は、梁行・桁行の長さが等しい方形基調の建物が多い (図 303)。掘立柱建物の時期については、確実なものでは前 1b 期以前と中 3a 期以降に限られ、前期後半～中期前半に空白期がある。

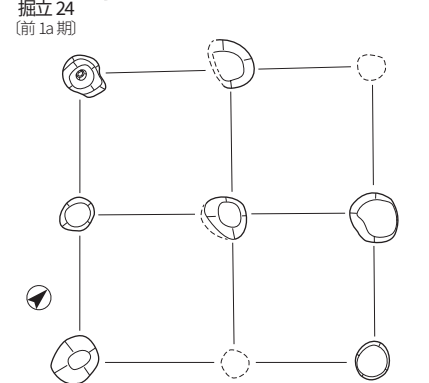
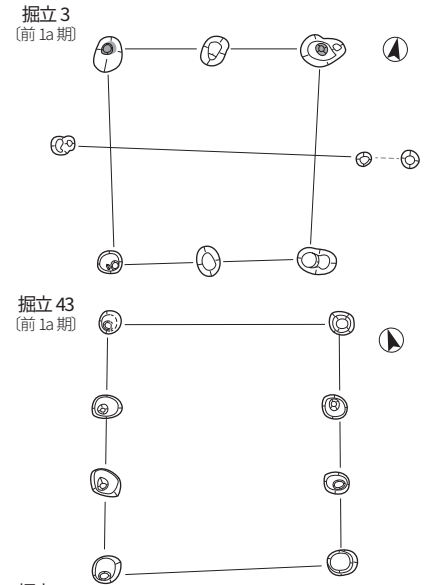
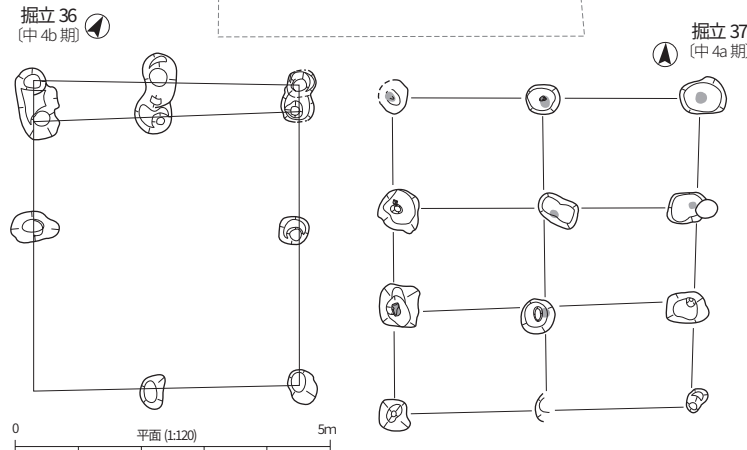
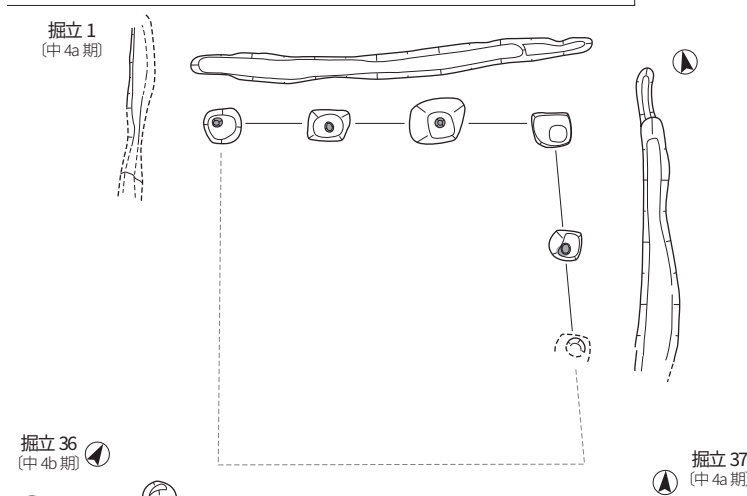
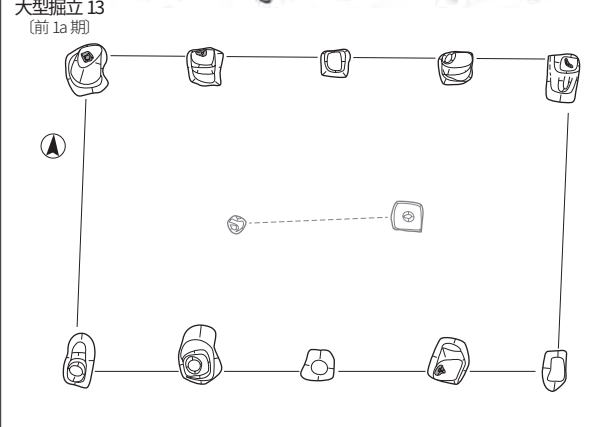
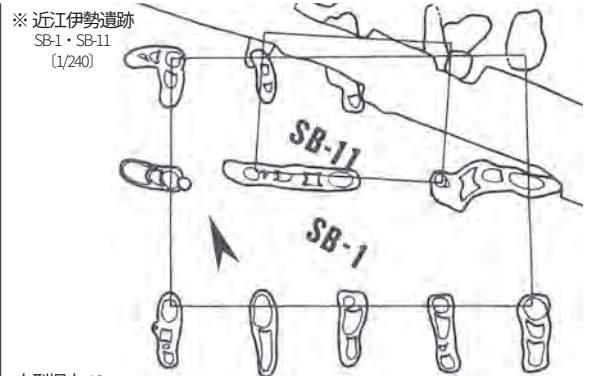
このうち前 1b 期以前は、総柱建物と梁行 1 間で間隔が広いタイプの建物为中心で、やや特殊な構造の建物が多い。特に総柱建物は、前期以前の検出事例が少ないため注目できる。梁行 1 間の建物は、側柱で全体を支える構造で、弥生時代以来の高床倉庫と考えられており、<sup>41)</sup> 大型掘立柱建物 13 や独立棟持柱建物 3 も広義的には同様の構造と認識できる。また立地については、総柱建物が柱穴が密集する微高地高所部に立地するのに対し、梁行 1 間の倉庫は微高地の先端部や縁辺部で単独立地するものが多く、構造と立地に相関がみられる。さらに大型建物 13 と後続する掘立柱建物 15 や独立棟持柱建物 3、東側エリア掘立柱建物 43 などには、近くに井戸が存在しており、いずれも時期は近い。倉庫と井戸祭祀の関連が推測でき、集落内祭祀の実態や梁間 1 間タイプの倉庫の性格を検討する上で重要な視点になる。

中期以降は掘立柱建物の数が増加し、特に中 3 b 期以降は確実なものでは竪穴建物よりも数が多くなる。建物の規模に大きな差がないため、建物の主要な形式が竪穴から掘立柱に移り変わっていることを示すとみられるが、このことは古墳時代の全体的な建物構造の変化とも連動している。構造は、2間×2間または2間×3間のものが主体で、特に前期以前には2間×3間構造のものはほとんどないなど構造上の違いがあり、前期以前と中期の掘立柱建物の連続性はないとみてよいだろう。立地についてはさまざまであり、前期にみられたような建物構造との相関はうかがえない。ただし微高地 B1 の掘立柱建物 1 は、規模がひとまわり大きく、周溝も伴うため格式の高い建物と判断できる。周辺一帯は、前期以来の中核的な居住域であり、やはり竪穴建物から掘立柱建物へといった流れを看取することができる。さらに掘立柱建物 1 は、周囲の掘立柱建物 2・4 へと継続するとみられるが、現状では部分的な検出に留まっており、南側未調査地に中期の中核的な居住域が存在する可能性を指摘できる。

**大型掘立柱建物 13** 掘立柱建物の中で確実に古墳時代に遡るもののうち、規模が最大の建物が大型掘立柱建物 13 である。1間×4間の長方形の構造で、規模は長辺 7.6 m をはかる。時期については、柱掘方埋土から出土した土師器の年代観から庄内式新段階に比定できる。報告文でも記した通り、平面形や柱穴の特徴から、近江湖南地域の「伊勢型」と呼ばれるような規格性の高い大型建物の一群との構造上の類似を指摘できる。伊勢遺跡や下鈎遺跡、下長遺跡をはじめとする近江湖南の事例は、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半を中心とし、梁間 1 間×桁行 3～5 間の長方形プランを基調とする。面積は、80 m<sup>2</sup> 級と 40 m<sup>2</sup> 級におおよそ分類できるようであるが、<sup>43)</sup> 本遺跡の大型建物 13 は近江でいう小型のタイプと概ね様相が一致する。また柱穴の形状は、梁行方向に細長い形状で、長大な柱を効率的に落とし込むために断面が傾斜することが特徴であるが、大型建物 13 も同様の構造的な特徴が認められる。ただし建物の建て方に決定的な違いがあり、近江の事例では建物の外側から内側に向かって柱を落とし込む

表 22. 掘立柱建物一覧

掘立 No.	地区	時期	構造	規模 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	方位	備考	図 No.
掘立 30	WA	早 2 期	2 間 x 3 間 ● 傍生系倉庫か	5.0 x 4.3	21.5	28.5° E		88
掘立 19	WB2		2 間 x 2 間 総柱	4.0 x 4.0	16	8.0° E		153
掘立 18	WB2		2 間 x 2 間 総柱	3.9 x 4.0	15.6	12.3° W	柱根	152
掘立 13	WL		4 間 x 1 間 ● 大型建物 屋内棟持柱か	7.6 x 4.9	37.2	3.2° W	柱根	164
掘立 3	WL	前 1a 期	2 間 x 1 間 ● 独立棟持柱	3.3 x 3.3	11.2	10.7° W		189
掘立 25	CW		2 間 x 2 間 総柱	4.5 x 4.4	19.8	48.4° W		204
掘立 24	CW		2 間 x 2 間 総柱	4.6 x 4.7	21.6	45.8° W		206
掘立 43	E		1 間 x 3 間 ● 傍生系倉庫	3.9 x 3.7	14.4	18.8° E		269
掘立 20	WB2	前 1b 期	2 間 x 1 間 +	4.0 x (2.1+)	(16)	13.6° E		154
掘立 15	WL		2 間 x 1 間 ● 傍生系倉庫	3.0 x 3.0	9	23.0° W		166
掘立 17	CE	中 3a 期	2 間 x 2 間 総柱	5.0 x 4.5	22.5	47.3° E		239
掘立 16	CW	中 3b 期	2 間 x 2 間 +	(2.0 x 3.5) (4.0 x 3.5)	(7.00) (14.00)	4.2° W		240
掘立 12	E		2 間 x 3 間か	3.8 x 4.3	16.3	18.0° E		264
掘立 1	WB1		3 間 x 2 間 + 周溝付 大型建物	(5.4 x 3.4+)	(28)	13.4° E	周溝	134
掘立 21	WB2		3 間 x 1 間 +	(5.1 x 2.0+)	(25)	16.4° E		154
掘立 22	WB2	中 4a 期	2 間 x 2 間	3.8 x 3.8	14.4	3.2° W		149
掘立 38	CW		2 間 x 3 間 近接棟持柱か	(4.7 x 3.8)	17.7	49.7° W		222
掘立 37	CE		2 間 x 3 間 総柱	5.0 x 4.7	23.5	2.8° W	柱根	257
掘立 2	WB1		2 間 x 2 間 +	(4.4 x 2.1+)	(19)	18.4° E		135
掘立 4	WB1		3 間 x 1 間 +	(5.7 x 2.4+)	(30)	31.1° E		133
掘立 23	CW		2 間 x 2 間	4.0 x 3.6	14.4	29.8° W		203
掘立 33	CW	中 4b 期	1 間 x 1 間か (特殊)	4.0 x 4.6	18.4	8.4° W	柱根 (古代?)	207
掘立 35	CE		3 間 x 5 間	9.1 x 5.6	51	8.6° E	(中世?)	253
掘立 36	CE		2 間 x 2 間	4.3 x 4.2	18.1	32.7° W	建替 or 拡張	256
掘立 40	CE		+2 間 x 2 間 + 総柱	(4.2 x 4.3+)	(18.1+)	6.9° W		258
掘立 50	CW	後 1 期	1 間 x 1 間か (特殊)	4.1 x 3.3	13.5	-	(古代?)	207
掘立 31	WA	初 頭	1 間 x 2 間 + ● 傍生系倉庫	(3.1 x 3.4+)	(10.5+)	23.3° W		89
掘立 10	WB1		3 間 x 3 間 + 総柱	(4.3 x 2.9+)	(12.5+)	11.7° E		120
掘立 28	CW	前期前半	1 間 x 2 間か	(3.2 x 2.4)	7.7	32.6° W		205
掘立 14	WL	前期後半	4 間 x 2 間	(4.3 x 2.6)	11.2	4.3° E	(中世?)	183
掘立 11	CE	中 期後半	1 間 x 1 間 +	(一辺 1.8+)	(2.7)	15.1° W		255
掘立 34	CW		2 間 x 2 間	3.2 x 3.4	10.9	3.6° E	(中世?)	231
掘立 7	CE	不明	3 間 x 3 間	7.2 x 5.4	38.9	1.8° W	(中世?)	232



0 平面 (1:120) 5m

図 303. 掘立柱建物の諸型式



のが通例のようであるが、大型建物 13 の場合は柱穴断面から逆方向の内側から外側に向かって柱を落とし込まれていることがわかる。

このように柱の建て方にやや相違がみられるものの、大柱としては湖南の大型建物の系譜を引くものとみてよいと思われるが、現状では受口状口縁甕など近江との関係を直接的に示すような遺物の出土は少ない。時期の近い遺物としては、この大型建物 13 の南西 30 m に位置する 32 井戸から近江・畿内折衷タイプの上げ底甕（図 194：1392～1395、P261）がまとまって出土しているが、32 井戸に関しては独立棟持柱建物 3 と近接するためこの建物との繋がりが強いとみられる。その一方で大型建物 13 は、隣接する 866 井戸との関係が重要であり、32 井戸出土の近江系土器を大型建物 13 と直接的に結び付けられるかどうかは評価を保留したい。

近江以外では、近隣の乙訓地域に弥生後期前半の大藪遺跡の事例<sup>44)</sup>が知られている。時期的な隔たりがあり、さらに大藪遺跡の事例は単発で周辺に継続するものがないため、現状では本遺跡と直接的に繋がりを推測することは困難と言わざるを得ない。ただし上述したように、近江の典型例からの変容がみられる点を考慮すれば、淀川を介して繋がる周辺地域での二次的な変容を視野に入れる必要がある。乙訓地域では、庄内式期には中海道遺跡の四面庇付建物など別系統の大型建物の事例<sup>45)</sup>があり、建物の系譜の問題は摂津や山城での大型建物の調査事例の増加を待つて改めて検討する必要があるだろう。

なお東側エリアの掘立柱建物 43 は、上述した梁間 1 間タイプの弥生系の倉庫と考えられる建物で、柱穴の断面が傾斜する形状が大型建物 13 と共通する。規模はひとまわり以上小さいが、立地などにも共通性がみられ、大型建物 13 の建替えに伴う掘立柱建物 15 の例も含めて、同一系譜上にある小型の倉庫が複数みられる点は重要と考える。総柱建物の存在も含め、前期以前の掘立柱建物は通常の居住に伴う竪穴建物とは、性格・機能が異なることを指摘ができよう。

## 2. 井戸・大型土坑・土坑（図 302）

先の遺物の分析では、土器系統の変遷を明らかにする目的で井戸をはじめとする一括性の高い資料群を中心に検討を進めた。こうした土器をはじめとする遺物がまとまって出土する遺構は、後述する出土遺物の組成などからみても祭祀性が強いやや特異な遺構と認識でき、遺物の出土状況など基礎的な整理が必要である。そこで（表 23）では、遺構の種類と遺物の出土遺物の情報をまとめ時期ごとに並べた。

**時期ごとの遺構の特徴** 中期前葉から中葉頃を境にまとまった遺物が出土する遺構の種類に変化が生じており、中 1 期以前は井戸が主体で、中 3 期以降は浅い落込みが多くなる。これ以外では、大型土坑と土坑があり、大型土坑については幅広の底部形状から井戸と区別したが、取水遺構または水溜遺構と考えられるため、井戸と大きな機能差はないとみられる。まとまった遺物が出土する土坑については、井戸や大型土坑と同様に中 1 期以前に限定されるが、井戸と大型土坑が主に微高地縁辺の低地部に立地するのに対し、土坑は居住域の中心近くの高所部にあるなど立地に明らかな違いがある。中期中葉以降にみられる掘り込みの浅い落込みは、低地部と高所部の両方で検出されている。規模が大きいため遺物は散在的に分布する傾向があり、掘り込みが検出されなかった 1623 土器溜りも同様の性格と推測される。

さらに中期中葉頃を境に、遺物が集中して出土する遺構の形状が大きく変化するが、時期的には土器の様相変化や建物の構造変化とも相関する点は重要で、土器を伴う集落内祭祀のあり方に変化があったことが想定できる。その一方で後述するように、土器の意図的な打欠きや破碎といった行為は通時的におこなわれており、古墳時代の集落内祭祀の通時的な変化を考える上で貴重な調査事例となろう。

なお通常の集落遺跡では、流路内や溝内から遺物がまとまって出土する事例も多い。ただし今回の調



表 23. 井戸・大型土坑・土坑・落込み一覧

遺構名	調査区	エリア	時期	存続期間	立地	規模 (m) (規模 x 深さ)	形状	出土状況			出土遺物内容			特記事項	周辺遺構 (関連遺構)	図 No.	
								井戸 下層	井戸 上層	ほか	土師器	須恵器	外来系				
● 1897 井戸	P3区	C:W	早 1	庄内古	△	低地	1.8 x 2.2		○	×		○	○	○	吉備型甕 (杓の町II) + V様式系	(微高地 CW)	233
△ 978 土坑	C5区	C:W	早 1	庄内古新	-	微高地 居住域	2.4 x 0.4	(浅)	-	-	○	○	○	○	精製器種 B 系統 + V 様式系甕 備前瀬戸系製埴土器	竪穴 30	220
△ 2010 土坑	P4区	E	早 1	庄内古 ~中	-	低地	規模 x 深さ		-	-	△	△	○	○	備前瀬戸系製埴土器	掘立 43	271
● 1985 井戸	P13区	E	早 2	庄内古 ~中	△	低地		漏斗形	-	△		△	△	○	備前瀬戸系製埴土器	掘立 43	270
● 866 井戸	P4区	W:L	前 1a ~中 3a	庄内古 ~中 3	◎	低地	4.1 x 3.2	特殊	◎	◎	○	◎	◎	◎	※ 特殊井戸、3期に亘る使用、再掘削あり 下層：庄内新へ布留古新 / 中層：布留中古 上層：布留新古 / 上層上面：辻 3 下層：釣瓶、布留形甕群 中層：布留形甕・阿波系二重口縁壺 上層：大量投棄 (高杯・小型丸底甕ほか)	大型掘立 13 (独立棟持柱 3)	170
● 32 井戸	B-1区	W:L	前 1a ~1b	布留古 ~古新	△	低地	3.0 x 2.6	漏斗形	◎	◎		◎	◎	○	下層：布留古古 / 上層：布留古新 下層：畿内・近江折衷甕 + 布留形甕・桃核 上層：破片遺物・瀬戸内ほか外来系土器	独立棟持柱 3	190
● 116 井戸	A-1区 A-2区	W:A	前 1b	布留古新	-	低地	2.3 x 1.7	幅広	○	○		◎	△	○	上層：布留形甕 / 下層：大型直口壺 最下層：庄内形甕 (在地・八ヶ)	(微高地 A)	99
○ 971 大型土坑	B-2区	W:B2	前 1b	布留古新	-	微高地 居住域	2.9 x 1.1	幅広	×	◎		○	◎	○	上層：壺・甕類ほか多数 生駒西産大型複合口縁壺 下層：(遺物少量)	微高地 B1 竪穴建物群	157
△ 432 土坑	P5区	W:L	前 1c	布留中古	-	微高地 居住域	2.4 x 0.5	(浅)	-	-	◎	◎	◎	◎	破片遺物多数、被熱痕跡 山陰・阿波・北近畿・精製 B 系統ほか	微高地 B1 竪穴建物群	138
● 1482 井戸	P6区	W:A	(前 1c) ~中 1b	布留古新 ~新	○	低地	1.8 x 2.5	漏斗形	×	◎		◎	○	○	下層：布留古新~中古 / 上層：布留新 下層：遺物僅少、受口甕、布留形甕 上層：大量投棄 (高杯・小型丸底甕ほか) 東海系須恵器付無須恵器ほか	(微高地 A)	94
○ 826 大型土坑	P4区	W:L	(前 2a) ~中 1a	布留中 ~新古	○	低地	2.9 x 1.0	幅広	△	○		○	△	○	下層：布留中以前 / 上層：布留新古 上層：遺物多い (高杯ほか) 山陰系大型鉢 炭化物層 下層：遺物僅少	(微高地 B)	181
- 100 落込み 土器溜り 2	A-1区	W:V	前 2a	布留中	-	谷	-	-	-	-	○	○	△	○	小型精製器種 (模倣品 + 搬入品)、鉄器	微高地 B1 竪穴建物群	104
- 100 落込み 土器溜り 3	A-1区	W:V	前 2a	布留中	-	谷	-	-	-	-	○	○	△	○			
● 790 井戸	E-2区	E	中 2	辻 2・3	△	微高地 居住域	1.1 x 1.4	漏斗形?	○	×		○		○	下層：布留形甕破片 x 2	掘立 12 (掘立 44)	268
□ 1623 土器溜り	P3区	C:W	中 3a	辻 3 TK216	-	微高地 居住域	(2.0) x (0.0)	-	-	-	○	◎	△	○	土師器主体、柳形高杯、軟質土器杯 布留形甕・韓式系甕 (古相) 敵台・製埴土器	(微高地 CW)	227
● 648 井戸	D-2区	C:E	中 3a	辻 3	-	低地	1.0 x 1.1	漏斗形?	○	△		○		○	下層：布留形甕破片 x 3 上層：布留形甕破片 x 1	微高地 CE 建物群	259
□ 827 落込み	P4区	W:L	中 3b	辻 3 TK216	-	低地	6.3 x 0.2	浅・広	-	-	○	○	◎	○	須恵器主体、杯類主体 初期須恵器大甕 打欠土師器直口壺、製埴土器	(微高地 B)	184
□ 867 落込み	P4区	W:L	中 3b	辻 3 TK216	-	低地	6.7 x 0.2	浅・広	-	-	○	○	◎	○	86 井戸上層遺構 須恵器主体、杯類主体 鉄釜、大型 7 面砥石、製埴土器	(微高地 B)	168
□ 450 落込み	P5区	W:B1	中 4a	TK208 ~23	-	微高地 居住域	5.0 x 0.3	浅・広	-	-	○	△	◎	○	須恵器主体、破片資料 鉄器・製埴土器	微高地 B1 建物群	136
□ 33 落込み	B-1区	W:B1	後 1	TK47 ~TK10	○	微高地 居住域	4.4 x 0.2	浅・広	-	-	○	△	◎	○	須恵器主体、杯類 + 有蓋高杯、大甕・器台 打欠口縁、不明板状土製品 (磚?)	微高地 B1 掘立柱建物群	199

※ 遺構記号凡例 ●…井戸 / ○…大型土坑 / △…土坑 / □…落込み・土器溜り (掘込み浅い)  
 ※ 存続期間凡例 ◎…長期間 (3 型式以上) / ○…長期 (2 型式以内) / △…中期 / - …短期  
 ※ セル塗なし…井戸 / セル塗あり…井戸以外  
 ※ 出土状況・出土遺物内容 = 出土量 ◎…特に多い / ○…多い / △…少量 / ×…破片少量 / - …なし

査は、居住域の中心部分が主な調査対象地であったため、居住域の縁辺部に遺物が投棄された溝などの遺構が存在する可能性があるだろう。

**井戸の構造と特徴** 井戸は、最も特徴的かつ複雑な構造の遺構で、出土遺物も豊富なためやや詳しく特徴を整理する。断面形状はいずれも漏斗状で、底部が筒状に深い。特に中 1 期以前の井戸は、深さが 2.5 m 以上の深さのものがあるが、中期の井戸は相対的に浅い。今回の調査で検出され井戸は、全て素掘で井戸枠を伴うものはない。これについては、基盤が安定した粘土層〔第 8 層〕を主体とし、掘削時の崩落もほとんどみられなかったため、環境的な要因が大きいと推測される。基本的には取水目的の遺構と推測されるが、今回の調査で検出された井戸は底部から顕著に湧水がみられるものがほとんどなかった。これについては、掘削底面が緻密な粘土・シルトを主体とする第 8 層または第 9 層で止まっており、豊富な湧水がある第 10 層まで到達していないことに原因がある。現在と当時の地下水位が異なっていた可能性があるため、一概に湧水がなかったと結論づけることはできないが、そもそも恒常的に豊富な湧水があるような井戸が必要であったか再検証する必要があるだろう。

さらに中 1 期以前の井戸では、遺物が豊富に出土するものが多く、遺物の出土位置を上層と下層に大別できる。上層での出土事例では、出土位置を境に上下の堆積状況が変化する事例が目立ち、下層での

出土事例は、底部付近からまとめて出土する場合が多い。堆積状況との関係から、下層の事例は掘削の初期や機能時に遺物の投げ込み、上層の事例は井戸の廃絶に伴う投棄とみなすことも可能であろう。

遺物の出土状況は、上層ではばらばらの破片の状態で土器が出土する場合が多く、器種も多様であるが、下層に伴う完形品や復元率が高いものが多く、器種は壺・甕類に偏るなど、様相の違いが鮮明である。さらに上層・下層ともに、体部の穿孔や口縁部打欠きされた土器が多くあり、意図的な仮器化や破壊を経た上で投棄したと判断できる。なお、居住域内の432土坑や978土坑については、遺物の出土状況や組成に井戸との類似性を指摘できる。特に432土坑は、破片がばらばらの状態で出土しており、32井戸上層と出土状況・遺物の組成が酷似するため、執りおこなわれる土器を伴う祭祀の内容に差はないとみてよいだろう。さらに432土坑では、土器の一部に明らかな被熱痕跡が認められ、ほかに866井戸上層や1482井戸上層の資料には、破片の一部のみに火を受けた資料が確認できる。炭化した桃核の出土も確認でき、土器を破壊した上で火にかける行為がおこなわれたことを示すとともに、こうした事例は前期中葉～中期前葉を中心にみられる。

遺物の組成については、異なる系統の資料が混在することと、外来系土器の比率が高いことが特徴である。具体的には、1897井戸下層では吉備型甕と在地のV様式系がセットで、32井戸下層では畿内・近江折衷甕とII型布留形甕がセットで出土した例を挙げることができ、他地域系と在地の土器が共伴する事例が多い。むしろ同一器種であっても、系統の異なる資料が混在するのが一般的ともいえる状況を呈しており、例えば井戸と出土状況が酷似する432土坑では、小型精製器種の系統のバリエーションが豊富である。このことは、井戸や土坑の投棄行為に出自の異なる様々な集団が関与したことを示しているとみられるが、畿内の井戸の検出事例では普遍的にみられる現象でもあるため、古墳時代の井戸をめぐる祭祀の実態を考える上で重要な所見といえる。

井戸の存続期間については、掘削から廃棄までの期間が長期に亘るものが一定数ある。特に866井戸は、掘削が庄内式新段階に遡るのに対し、最終の廃棄が上層の遺物から布留式新段階に下るため、150年程度の期間に及ぶ継続的な関与を認めることができる。さらに最上面には、辻編年3段階に下る時期の土師器が伴っており、最終的な埋没には更なる時間を要していたことがわかる。866井戸の場合は、中層での遺物の出土などから井戸の再掘削が推測できるなど、あくまで特殊な事例ではあるが、ほかの井戸でも長期間の使用が想定できるものがあり、1482井戸では布留古段階～新段階までの継続的な使用が確認できる。ほかでは、1897井戸、1985井戸、826大型土坑なども、遺物の出土状況と堆積状況から一定期間の使用の可能性を推測できることから、井戸の特殊性を指摘できるだろう。

なお、井戸と居住域との関係性をみた場合、例えば1897井戸の出土遺物は、今回の調査で出土した古墳時代の遺物の中で最も古い一群で、この井戸よりも明らかに先行する遺物がほとんどみられない。このことから集落の開始期に先立って井戸が掘削された可能性を指摘できるが、こうしたパターンはD-2区の648井戸やE-2区の790井戸などの事例にも当てはまる。いずれも隣接する居住域に先駆けて井戸が掘削されており、居住域と井戸の関係、井戸の性格を考える上で重要な視点となるだろう。<sup>49)</sup>

このように井戸は、遺物の出土状況や組成、存続期間などに一定のルールがあり、いくつかのパターンに類型化が可能である。近年の集成によれば、古墳時代の井戸は2013年現在で大阪府下で433基、近畿圏で680基の検出数を数えるなど、豊富な調査事例がある。<sup>50)</sup> その一方で分布に偏在性があり、かつ時期によっても数が異なることも併せて指摘されている。特に中期以降は、検出数がやや減少し、限定的な分布を示すが、こうした動向と本遺跡で井戸が数を減らす現象が結びつくものとみられる。井戸

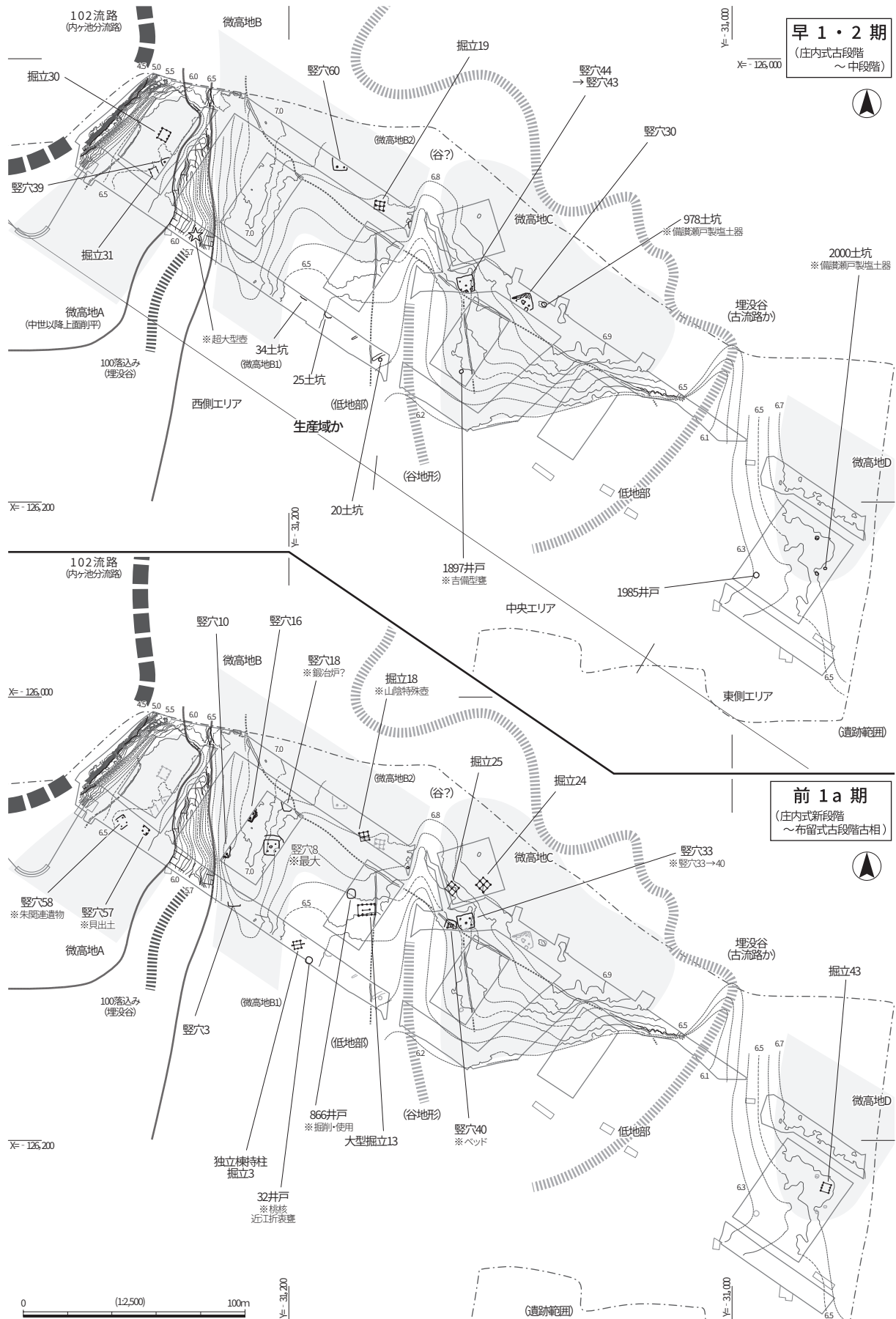


図 304. 古墳時代集落の景観変遷 (1)



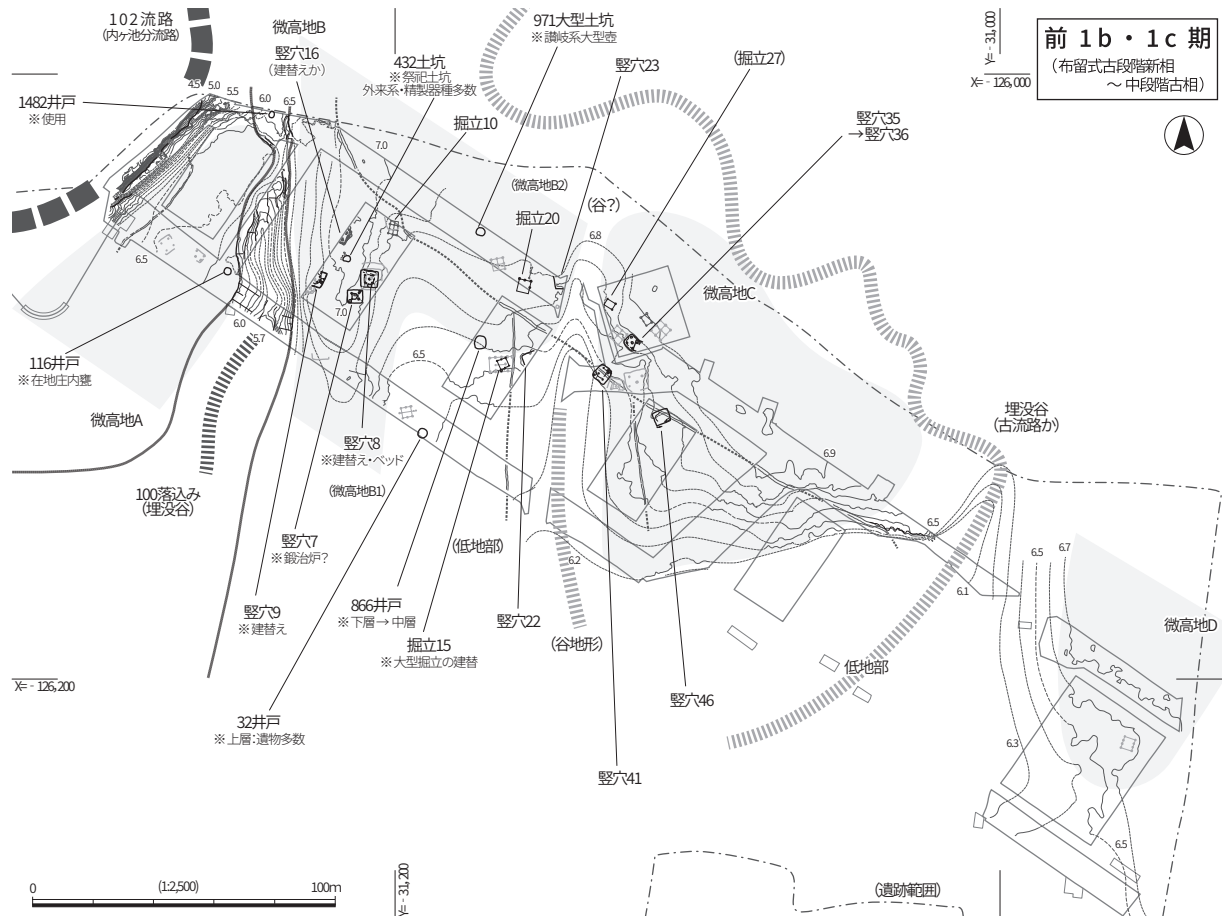


図 305. 古墳時代集落の景観変遷 (2)

における祭祀の実態を復元するためには、やはり詳細な比較検討が必要であるが、こうした問題を考える上でも多様な遺物が豊富に出土した 866 井戸や 32 井戸は一級の事例となるだろう。

### (3). 集落構造の復元と景観の推移

ここまでの遺構・遺物の検討をふまえ、集落の具体的な構造復元と景観変遷を整理する。図 304～308 に各段階ごとの集落の復元図を示したが、個々の遺構の継続期間は不明のものも多く、継続性や変化を表現するために前段階のものは灰色で表現した。さらに変電所地区と井尻遺跡は、同一遺跡群という理解ができるため、併行する時期の概要を記し、内ヶ池周辺の全体動向をまとめる。

**上牧早 1・2 期〔庄内式古段階～中段階〕** (図 304 上) 西側エリアと中央エリア微高地 C の南西斜面、東側エリアの広範囲で遺構・遺物が検出されているが、今のところ遺構・遺物はそれほど多くはない。微高地 C 南西斜面には、1897 井戸や 978 土坑などが位置し、978 土坑には竪穴建物 30 が隣接している。いずれも在地の V 様式系土器群と東部瀬戸内系の搬入品が共伴するため、他地域の集団との接触を通じて集落が形成されたことを示唆する。現状から判断する限り、このエリアが当初の集落の中心とみるのが穏当ではあるが、西側エリアにも浅谷 (100 落込み) 下層から出土した超大型加飾壺 (図 110 : 656、P161) や搬入品を含む 25 土坑・34 土坑など、やや特殊な遺構・遺物に関する情報が断片的ながらもみられる。次段階の状況を加味すれば微高地 B 周辺の未調査地にまとまった遺構・遺物が存在する可能性が想定でき、微高地ごとに分散して居住域が形成されることがうかがえる。

周辺では、変電所地区で庄内式期や弥生後期後半の高杯や V 様式系甕が数点ずつ出土している。ただ



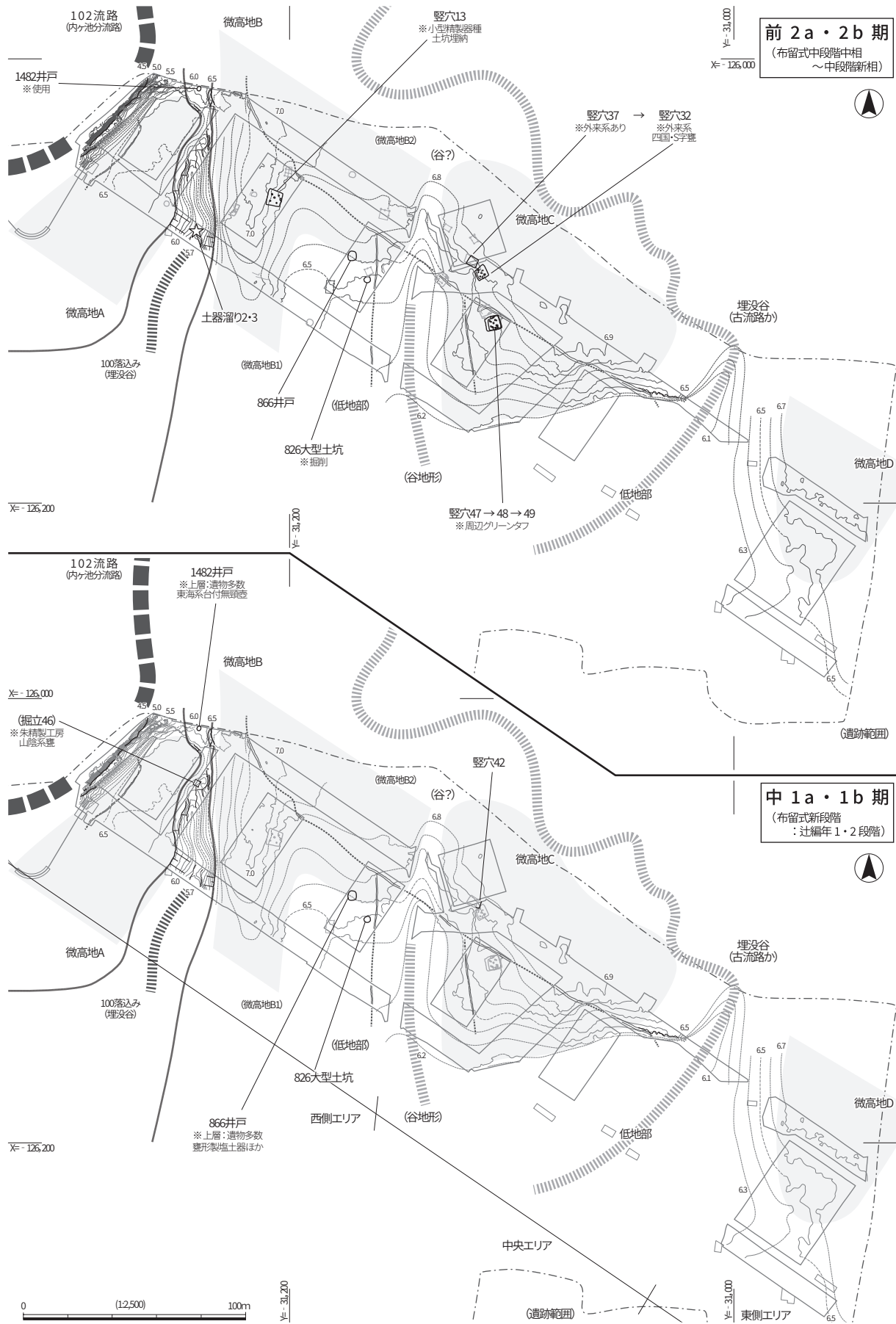


図 306. 古墳時代集落の景観変遷 (3)

し現状ではそれほど顕著ではないため、広範囲に居住域が広がるかどうかは疑問である。その一方で先行する居住域の有無は、古墳時代集落のはじまりを考える上で重要な問題でもあり、検討を要する。

**上牧前 1a 期（庄内式新段階～布留式古段階古相）**（図 304 下） 遺構・遺物の検出範囲は前段階を踏襲しつつ、集落が拡大する。最も建物数が多い時期で、特に微高地 B と微高地 C 南西斜面でまとまって建物が検出されている。その中でも、微高地 B1 が建物の規模や加飾壺の出土状況から集落の中核的な位置を占めると判断できる。調査地の北側高所部にあたる微高地 B2 や微高地 C 北側では、総柱の倉庫が複数検出されており、これについては柱穴の検出数からみてさらに建物数が増えることが予想される。その一方で間に挟まれた微高地 B 南東低地部では、大型掘立柱建物 13 と独立棟持柱建物 3 に遺物が多数出土する井戸が付随して、祭祀ゾーンと呼べるような空間を形成している点が特筆される。

このほかでは、微高地 A の朱精製工房の可能性のある竪穴建物 58、微高地 B1 の鍛冶との関連が推測される大型炉跡を伴う竪穴建物 7・18、ベッド状遺構を伴う竪穴建物 40 の存在などが注目でき、外来系土器の出土も含め集落が発展的に拡大する様子を鮮明に描くことができる。

変電所地区と井尻遺跡では、この時期以降遺物がみられるようになり、東海系の二重口縁壺や非生駒西麓産の庄内形甕などの出土が確認できる。現状での規模は不明であるが、外来系土器の搬入などもあり、遺跡群全体でみても集落域の拡大期と認識することができる。

**上牧前 1b・1c 期（布留古段階新相～中段階古相）**（図 305） 大きくは前段階の様相が継続するとみてよいが、建物数がやや減少し、東側エリアの居住域が解体される。微高地 B1 では、同一地点での建物の建替えがおこなわれており、安定的に集落が経営されていると評価ができるが、微高地 C 南西斜面では掘立柱建物と竪穴建物が混在するなど集落景観が変化する。また微高地 A では、井戸が存在するが、今のところ明確な建物遺構がみられない。低地部では、大型建物 13 が解体され小型の掘立柱建物 15 に建替えられるが、866 井戸は継続的な使用がみられる。さらに微高地 B でも、祭祀関連遺物がまとまって出土する井戸・土坑が複数あり、外来系土器も多く出土することから、特に西日本各地からの物資や人々の往来があったことがわかる。こうした細かな変化と連動するように主要な土器系統が A 系統・B 系統から C 系統へと移り変わっており、関連が注目される。

変電所地区と井尻遺跡では、この時期以降、遺物の量が増え、吉備・近江・山陰など外来系の搬入品が増える。また変電所地区では、小型丸底壺や二重口縁壺がこの時期以降増えるため、遺跡群全体では規模が拡大化している可能性を指摘できる。

**上牧前 2a・2b 期（布留式中段階中相～新相）**（図 306 上） 前段階と同様に微高地 B1・微高地 C 南西斜面で建物遺構が継続するが、建物数が減少傾向にある。微高地 C 南西斜面では継続的な建物の建替えがおこなわれているが、微高地 B1 では建物数が大きく減少し、中核的な竪穴建物 13 を最後に明確な建物遺構がみられなくなる。特に隣接する浅谷（100 落込み）では、この時期に遺物を盛んに投棄されており、居住域の縮小化と連動する可能性が推測できる。出土遺物の量も含めて、集落規模の縮小化を指摘できるが、外来系土器は継続して出土している。

この時期の変電所地区は、小型丸底壺や二重口縁壺の出土量のピークで、井尻遺跡でも遺物の出土が継続する。このため遺跡群の中で居住域の移動と、集落規模が縮小というどちらの評価が正しいものであるか、現状では判断材料に欠け、今後の見極めが必要である。

**上牧中 1a・1b 期（布留式新段階：辻編年 1・2 段階）**（図 306 下） 建物遺構が一気に減少し、明確なものでは朱の精製工房の可能性が高い（掘立柱建物 46）に限られる。これとは対照的に、低地部で

は井戸に伴う形で集中的に大量の遺物が出土している。1482 井戸・866 井戸・826 大型土坑が該当するが、いずれも長期間に亘って使用された取水遺構であるため、井戸の廃絶に伴う遺物の投棄行為と居住域の解体が直接的に結びつくものとみてよいだろう。

さらにこの時期は、変電所地区と井尻遺跡でも同様に遺物が豊富に出土している。特に変電所地区では、今回の調査と同様の一括遺物が豊富に出土する井戸が複数基確認され、さらに包含層中とされる遺物にこの時期の高杯や小型丸底壺が多く含まれる。井尻遺跡では、溝からまとまった遺物の出土があり、遺跡群全体でみてもこの時期の遺物の出土量は明らかに多い。現状では、居住の実態を示す建物遺構の様相が不明確であるため、まとまった規模の居住域の有無を明らかにすることが今後の課題である。いずれにしても、居住域の移動と集落構造の変化、井戸への遺物の大量投棄などといった現象が連動しており、集落の変容期となることは明確である。

なお井尻遺跡で出土した緑色凝灰岩と滑石の石釧は、この時期もしくは前後する段階に伴うものと考えられる。上牧遺跡の緑色凝灰岩の管玉や石核もこの前後の時期のもであり、(掘立柱建物 46) の朱関連遺物も含め、遺跡群全体で手工業生産に関わる遺物の出土が目立つ時期と評価できる。

**上牧中 2 期〔辻編年 3 段階古相：TK73 型式〕** (図 307-1) 微高地 B1 で建物が数棟確認され、790 井戸の位置する東側エリアも居住が復活した可能性がある。一括資料の投棄などはなく、出土遺物もごく僅かであるため、集落の衰退期とみるのが妥当である。なお、土器の系統変化を重視して独立した段階を設定したため、ほかの段階と比べ時間幅が短く、前後どちらかの段階と同時期の可能性<sup>51)</sup>がある。

**上牧中 3a・3b 期〔辻編年 3 段階：TK216～208 型式〕** (図 307-2) この時期も設定した時間幅がやや短い、須恵器の普及と軟質土器が流入するなど土器様相に抜本的な変化がある時期である。微高地 B・C・D の広域で遺構・遺物が確認されており、集落の復活を印象づける。特にこれまでまったく遺構・遺物の分布がなかった微高地 C の南東斜面に新たに居住域が形成され、南西斜面も含め微高地 C に建物遺構が広がる。さらに建物の立地は、高所部に掘立柱建物、低地部に竪穴建物という区別がみられる。また、韓式系軟質土器や鍛冶との関わりが推定できる炉跡が確認されており、渡来系集団との関わりが推定できる。微高地 C の東側は、谷状に地形が落込んでいるが、谷の東側でこの時期頃の掘削とみられる 625 水路があり、水路の掘削と谷の東西の居住域の形成に関わる可能性がある。この 625 水路については、花粉分析の結果、比較的高率でイネ科の花粉が検出され、周囲での水田の存在が推測されることから、中期以降に耕地開発が進んだことを示すものといえよう。

なお西側の微高地 B と周辺低地部では、明確な建物遺構は未確認であるが、低地部の浅い落込みからはまとまった遺物があり、微高地頂部では器台の出土が一定量みられる。このことから微高地 B には、上位階層の居住関連遺構の存在が推定できる。周辺の状況としては、変電所地区ではこの時期の明確な遺構・遺物が確認できないが、一方で井尻遺跡では豊富に遺物が出土している。特に椀形高杯が大量に出土した土器溜りなど特殊な祭祀的な様相を帯びる遺構の存在が特筆される。

**上牧中 4a・4b 期〔辻編年 4～5 段階：TK208～47 型式〕** (図 308-1) 微高地 B と微高地 C で主に遺構・遺物が広がるが、東側エリア微高地 D は再び居住域が姿を消す。微高地 A については、確実な建物遺構はないが、遺物が増加する。前段階に引き続き微高地 C が中心で、特に南東斜面で建物が密集して検出されている。竪穴建物も多く検出されているが、掘立柱建物の比率が高まっているのも特徴で、前段階では高所部に掘立柱建物が分布していたが、この段階では竪穴建物が高所部に、掘立柱建物が低地部に分布するなど集落景観に変化がみられる。微高地 B では、検出された建物数は少ないが、微高地 B1 の



第6章 総括

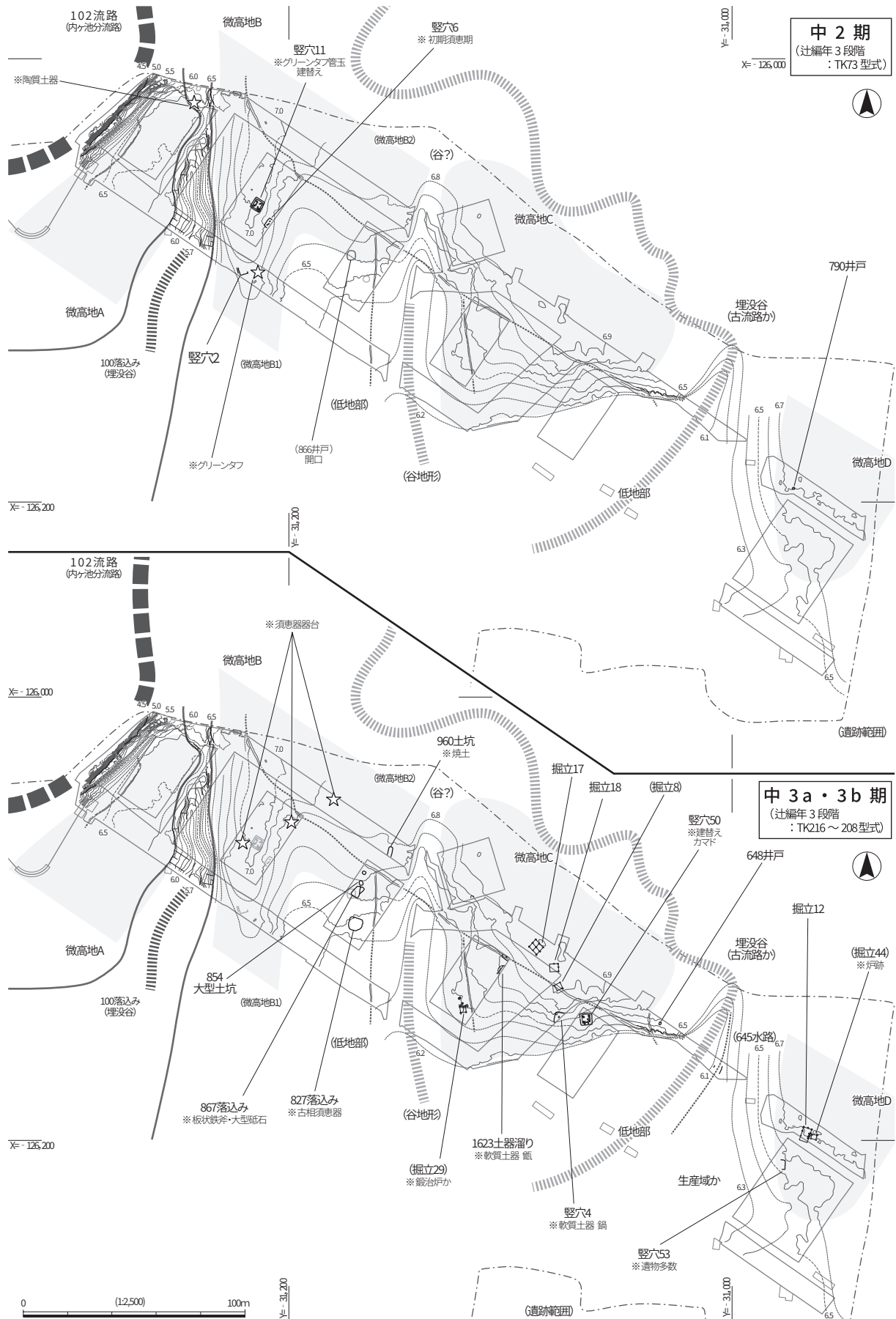


図 307. 古墳時代集落の景観変遷 (4)



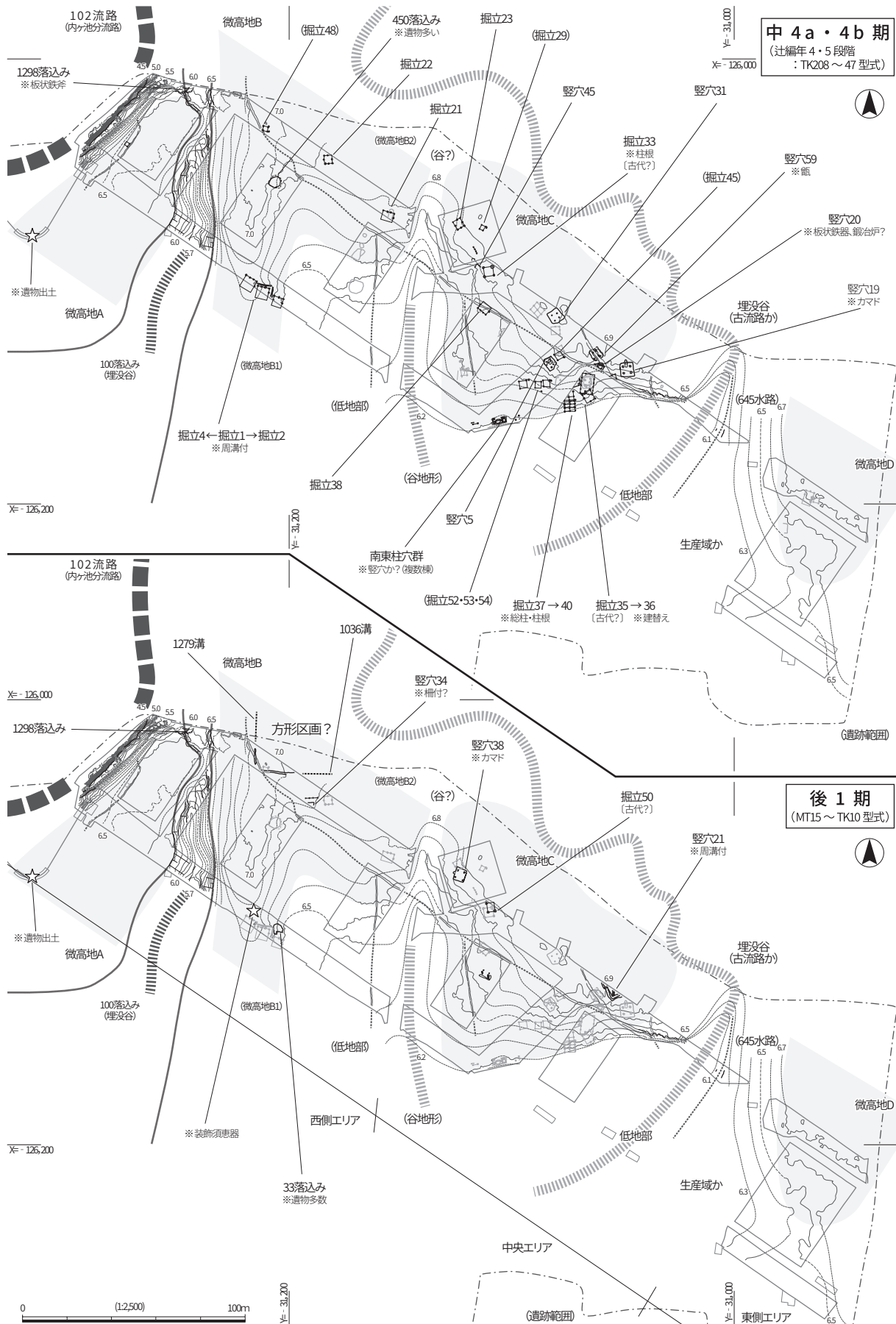


図 308. 古墳時代集落の景観変遷 (5)

南端部で掘立柱建物が集中している。掘立柱建物1など周溝を伴う規模の大きな建物が含まれ、前段階に須恵器器台が集中する点をふまえると、前期と同様に相対的に上位階層の居住域の可能性が推測できる。特に居住域の本体は、南側未調査地に拡がるのが確実で、今後の調査の進展が望まれる。

周辺では、井尻遺跡で遺物の出土量がやや減るが、一方で変電所地区ではこの時期から再び遺物の出土がみられるようになり、前段階に復活した中期の集落が安定的に継続することがうかがえる。

**上牧後1期〔MT15～TK10型式〕**（図308-2）遺構・遺物の拡がり、前段階と同様に微高地A～Cにかけてみられるが、前段階に比べ明らかに遺物量が減少するため、集落の衰退期と理解ができる。建物遺構では、微高地C南東の竪穴建物21は周溝が付随するが、それ以外に特筆すべき点はない。微高地B1南端の掘立柱建物群は、解体または南に移動するが、集落の最終段階の土器がまとまって出土する33落込みの存在は、集落解体時における遺物の投棄と評価することもできるだろう。ほかでは、微高地B1の調査地北端で東西方向の1036溝と南北方向の1279溝がそれぞれ検出されており、性格は不明であるが、接続してL字状に屈曲するのであれば、北東側に方形区画が存在する可能性が考えられる。なお変電所地区と井尻遺跡では、後期に下る遺物の出土は数点に留まっており、今回の調査地点と同様に衰退期と評価できるだろう。

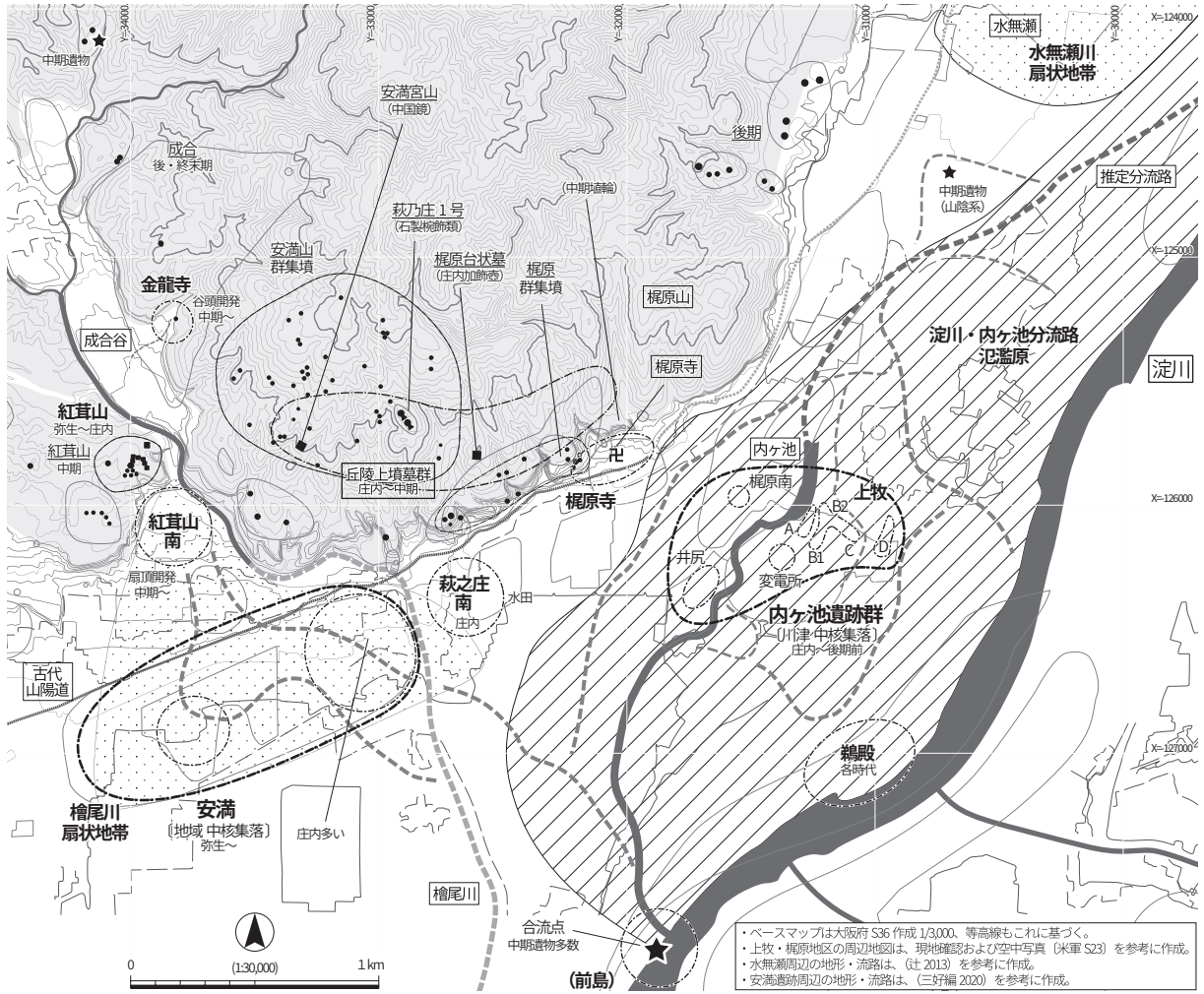
**小結** 以上、通時的な集落構造の変遷をみてきたが、その内容をまとめるたい。集落の出現時期は、庄内式のはじまりの時期で、外部地域と在地集団の交流を背景に集落が形成され、庄内式の終わりから布留式のはじまりにかけて拡大し、前期を通して安定的に集落が営まれている。その一方で、中期初頭～前葉にかけて衰退期があり、中期中葉に復活発展し、集落が消滅する後期前葉まで継続する。こうした展開から、一時的な衰退期を挟む中期前葉頃が集落の画期といえるが、ちょうどこの時期を境にして、遺物の主要系統の変化や外来系土器の搬入状況、竪穴建物の構造変化と掘立柱建物の増加、遺物が多く出土する祭祀関連遺構の変質などがおこる。集落の画期と遺構・遺物の変化が連動しているため、単なる集落の変化に留まらず居住集団の変質を伴うと考えることができる点が重要といえよう。

その一方で、古墳時代のほぼ全期間に亘って集落が継続する点も本遺跡の大きな特徴で、具体的な集落景観の推移を通時的に把握できる数少ない事例である。集落の構造を詳細にみると、時期ごとに土地利用のあり方が緩やかに変化するが、中心的な居住域は一貫して微高地B1あり、微高地B南東低地部を中心に祭祀ゾーンと呼べるようなエリアが存在する。特に集落が拡大する前1a期では、最高所部に総柱建物を中心とした倉庫が立ち並ぶエリア、微高地上の居住エリア、低地部の祭祀エリアというような、地形に即した計画的な土地利用のあり方が鮮明になる。

今回の調査は、南北に分断された地形を横断するような形で東西に長い調査区を設定することになったため、古い時期の淀川の堆積作用によって形成された南北方向に長い複数の微高地の存在を確認した。微高地それぞれに古墳時代の居住域が形成されていることが調査で明らかとなったが、各微高地は調査地外の南北方向にさらにのびるため、居住域が現状よりも拡がるのが確実である。さらに過去の変電所地区の調査地点や内ヶ池西側の井尻遺跡も連動した動きがみられるため、一定のエリアに拡がる集落遺跡の範囲や全体像を把握することが今後の課題といえるだろう。

#### （4）. 周辺集落・古墳築造動向との関係

続いて周辺遺跡との関係を整理し、地域内での上牧遺跡の位置づけを検討したい。図309では、上牧遺跡を含む嶋上郡東部エリアの集落遺跡および古墳の動向について、既往の研究成果に最近の調査



時期	檜尾川上流域				檜尾川扇状地			山麓扇状地		内ヶ池遺跡群						合流点 鶴殿前島	水無瀬 古墳群 (集落)		
	(成合)	金龍寺 ほか	紅茸山	紅茸山	紅茸山 南	安満	秋之庄 南	(安満山) (秋之庄)	(梶原)	梶原寺	井尻	梶原南	上牧						
												変電所	微A	微B	低地部	微C	微D		
(弥生)																			
初頭	庄内																		
	早1期																		
前期	布留																		
	早2期																		
	前1a期																		
	前1b期																		
	前1c期																		
	前2a期																		
中期	前2b期																		
	中1a期																		
	中1b期																		
	TK73 中2期																		
	TK216 中3a期																		
後期	TK208 中3b期																		
	TK23 中4a期																		
	TK47 中4b期																		
	MT15 TK10 TK43 後1期																		
(飛鳥)																			

※ (古墳) が古墳群、細字が集落遺跡  
 古墳の編年の位置は (内田編 2020)、(今西 2021) など参照  
 ※ 集落遺跡 ● = 顕著な遺構・遺物などあり  
 集落の動態: (岡田 2016)、(森本 2014)、(清水 2021) および各報告書を参照

図 309. 上牧遺跡と周辺の環境・集落・古墳



データを追加してにまとめた<sup>52)</sup>。周辺の地形に関しては、まだ不明な点も多いが、梶原近辺では近世以前は淀川の洪水砂が山麓裾近くまで押し寄せる氾濫原であったことが判明しており<sup>53)</sup>、この結果をふまえた周辺一帯の微地形観察と空中写真の検討から地形の大枠を図 309 に示している。現在までに確認されている古墳時代の集落遺跡は、淀川の河川の影響を受けたダイナミックな地形に制約されるされる形で一定のまとまりをみせており、檜尾川扇状地および上流部、北側丘陵山麓部、内ヶ池分流路周辺にグループ分けができる。上牧遺跡は、井尻遺跡と梶原南遺跡とともに内ヶ池分流路沿いに位置するひとつのまとまりを形成しており、以下では“内ヶ池遺跡群”と称して周辺遺跡との関係を整理しておきたい。

**上牧遺跡と周辺集落の動向** まとまった集落遺跡の調査事例がまだ少ないため、状況が大きく変化する可能性があるが、継続性のある遺跡は安満遺跡と上牧遺跡を包括する内ヶ池遺跡群に限られ、それ以外は一過性が強い。弥生時代以来この地域の中核である安満遺跡は、古墳時代以降の集落構造に不明な点も多いが、出土遺物から古墳時代を通じてほぼ継続していることが判明している<sup>54)</sup>。特に庄内式期と布留式新段階頃を中心に、井戸や土坑から一括性の高い遺物が多数出土しており、弥生時代後期以降も地域の中核として継続しているとみて大過はないだろう。さらに安満遺跡に隣接する萩之庄南遺跡や紅茸山南遺跡などでは、古墳時代初頭の遺構・遺物などが検出されているが、その内容からみて安満遺跡と同一、または外縁の衛星的な集落とみるのが穏当である。

さらに安満遺跡は、古墳時代初頭の庄内形甕の定着状況や外来系土器の出土のあり方から、地域の交易拠点とされるような内容を備えており<sup>55)</sup>、特に一定量の庄内形甕や阿波系の土師器がまとまって出土する点が上牧遺跡の様相と類似する。古墳時代の集落遺跡は、隣接する遺跡どうしであっても土器様相に大きな差がある場合があり、近似する土器の組成から上牧遺跡と安満遺跡の関連性の高さがうかがえる。その一方で安満遺跡は、庄内形甕は非生駒西麓産の比率が高く、外来系土器の出土量や搬入地域が上牧遺跡に及ばない点などで、様相をやや異にしており、上牧遺跡の方がより外の地域との繋がりが強い遺跡とみてよい。また安満遺跡では、古墳時代後期以降も集落遺跡が継続するのに対し、内ヶ池遺跡群では後期後半以降に集落が途絶えるなど、前後の時期との継続性にも違いがみられ、このことは遺跡の性格の相違を示すとみられる。特に安満遺跡は、弥生時代以来、地域の中核的な農耕集落として発展することは周知の事実であるのが、それに対し内ヶ池遺跡群では、古代以前の耕作域の実態が不明確で、仮にあったとしてもごく小規模なものともみて大過はない。こうした点から、安満遺跡が地域の伝統的な中核集落であるのに対し、上牧遺跡を含めた内ヶ池遺跡群が古墳時代以降に淀川の水上交通網の結節点に位置する新興の交流・交易拠点という評価ができるだろう。

ほかにこの地域では、中期に檜尾川の扇頂部や上流域などに紅茸山南遺跡や金龍寺旧境内跡といった遺跡が新たに出現する点も特徴である。地形的な上位面への集落の移動といった現象は、中・後期の広域的な動向と連動しており、特に韓式系土器や初期須恵器が一定量含まれる点で渡来系集団による開発型集落と評価できる<sup>56)</sup>。さらに中期の事象では、近年、内ヶ池分流路と淀川の合流地点付近で多量の須恵器・土師器が採集され、淀川近傍での遺跡の具体像が明らかとなった点が重要である<sup>57)</sup>。コンテナ数十箱以上に及ぶ採集遺物は、ローリングをほとんど受けておらず、完形品も多数含まれることから規模の大きな遺跡の存在が推測されるが、遺物の時期は各時代に及んでいるものの、特に TK216～208 型式前後の遺物が多い。

以上のような嶋上郡東部エリアにおける中期の集落遺跡の状況変化は、時期的には上牧遺跡の中 3 b 期における集落の拡大期とも一致しており、相互の関係性が問題となる。このうち檜尾川上流域との関



係については、集落の性格が異なるため繋がりを強調することは難しいが、上牧遺跡でも韓式系軟質土器が少なからず出土しており、この地域への渡来系集団の流入の窓口となっていた可能性は想定できる。その一方で内ヶ池分流路で繋がる前島・鶴殿地区は、管見の限り出土土器の特徴が一致するものも多く、地理的にみても関連する遺跡とみるのはごく自然である。

**集落と古墳の関係** 淀川北岸地域では、西の芥川・安威川流域に一貫して中心があり、弁天山古墳群といった安定的な地域の有力首長系列、太田茶臼山古墳や今城塚古墳などの大王墓とそれに準ずるクラスの超大型古墳があり造墓活動が活発な地域である。その一方で檜尾川流域以東は、青龍三年紀年銘鏡が出土した安満宮山古墳群や石製腕飾類が多量に出土した萩之庄1号墳の存在が目ざされてはいるものの、傑出した規模の大型古墳の築造は一貫してみられない。現状では、集落域の近傍での墓域存在は未確認であるため、北側の丘陵尾根上の古墳群と平野部の集落が結びつく可能性が高い。集落の規模から判断する限り、安満遺跡と内ヶ池遺跡群の居住集団との関連が推測できるが、安満山や萩之庄に存在する前・中期古墳については位置関係からみて安満遺跡との関係が有力である。ただし内ヶ池遺跡群では、出土遺物から上牧遺跡と梶原台状墓の精製二重口緑壺や(図300)、井尻遺跡・上牧遺跡出土の緑色凝灰岩の石釧・管玉・石核と萩之庄1号墳の関連が推測できるため、集落の有力者の一部は尾根上の墓域に埋葬された可能性を考えることができる。さらに梶原古墳群でも、近年になって埴輪を伴うような中期古墳の存在が推測されるようになってきたため、集落の規模と墓域との位置関係から内ヶ池遺跡群との関わりを想定することは十分に可能といえよう。

後期については、安満山古墳群で40基程度、梶原古墳群で20基程度からなる群集墳の存在が知られているが、前者については檜尾川扇状地の集落との関連で考えるの妥当である<sup>58)</sup>。一方で梶原古墳群は、のちの梶原寺造宮氏族に連なる地域有力集団の墓域とみられるが、群集墳の造宮の開始時期と内ヶ池遺跡群が消滅・移動する時期が一致する点は重要である。内ヶ池遺跡群の6世紀以降の衰退・移動の要因は明確ではないが、淀川の水上交通との関連で集落が形成された点をふまえると交通網体系の変化との関連も推測できる。特に中期後半以降は、馬匹生産の発展的な展開から陸上交通網の整備が進んだと考えられており<sup>59)</sup>、古代山陽道に面する梶原古墳群や梶原寺の出現背景として6世紀以降の道路網の整備と結びつく可能性も想定できる。梶原D2号墳出土の金銅装馬具などは、こうした変化を間接的に示す物証であるともいえ、内ヶ池遺跡群における集落の消滅・移動の背景として、水上交通から陸上交通へのウェイトの変化や、この変化に伴う山麓部への集落の移動などを推測しておきたい。

### (5) 上牧遺跡の古墳時代集落の特質と歴史的位

今回の調査では、古墳時代の建物が約100棟検出され、初頭から後期までの長期に亘る集落の実態が明らかとなった点が大きな成果である。豊富な遺構・遺物、井戸における祭祀儀礼、大型建物の存在、在地の土器の系統把握、外来系土器の出土など、調査成果が多岐に亘っており、北摂有数の古墳時代集落の内容を提示できる良好な調査事例となった。

ここまでの検討をふまえ、上牧遺跡の古墳時代集落の特徴を改めて整理すると、淀川の水上交通を背景に成立した新興の集落遺跡と認識でき、出土遺物の内容から在地の集団と西日本各地の人々の往来がある寄港地的な性格を想定できる。特に古墳時代の集落遺跡は、社会や環境の変化によって頻繁に移動を繰り返すなど流動性が高いことが知られているが、上牧遺跡のように古墳時代のほぼ全期間通じて居住が継続する遺跡の存在はむしろ珍しく、一貫した視点で集落の変化を捉えることのできる希少な調査

事例といえるだろう。こうした継続性の背景には、繰り返し述べてきたように水上交通との関係があることは明白であり、外来系土器の存在や前期に遡る倉庫の存在はこれを傍証するものといえる。さらに他地域とのつながりが強い遺跡において、朱や玉など小規模ながらも遠隔地との交易を背景とした手工業生産の痕跡が伴う点は、古墳時代の手工業生産の展開、物資の流通・消費を考える上でも重要である。

西日本諸地域と大和を結ぶ大動脈は、河内湖から河内・大和川流域が中心であることはこれまでの調査・研究の蓄積から明らかであるが、その一方で淀川を介したネットワークの重要性が古墳時代前期以降に高まると認識されている<sup>60)</sup>。古墳の築造動向や副葬品の内容から類推されてきたことではあるが、北摂や北河内の集落遺跡の内容から言及されたことはこれまでにはほぼなく、淀川を介した交易網に関する具体的に示す成果がこれまでに少なかったため大きな成果といえる。交易の実態や規模についてはいまだ未知数で課題も多いが、近年資料が増えつつある淀川本流域での遺跡の実態把握などを進める必要がある。現状では、大和川流域の中河内の諸遺跡に遠く及ばないが、土器の組成など西日本諸地域との交流といった内容に共通する側面がみられるため、遺跡の実態が把握できれば淀川と大和川の相対的な関係性や時間的な推移など、具体的な状況もわかってくるだろう。

また上牧遺跡では、生駒西麓産庄内形甕の量的な出土などから、布留式前葉頃までは河内と西日本諸地域との関係を軸に交易が維持されたと推測されるが、布留式定着以降は庄内形甕の出土量の減少からその関係が徐々に弱まる。この点については、生駒西麓地域での専門的な庄内形甕の生産体制の崩壊といった現象とも連動するため、一概に関係性が弱まったとは即断できないが、それと相反するように一部に大和との関係もうかがえる布留形甕や精製器種の出土もみられるため、ネットワークの変化と捉えることもできる。その後の前期後葉以降の状況については不明な点も多いが、東海地域などとの関係性が新たに見出され、中期以降は渡来系集団の流入と文化の定着も進むことが出土遺物からうかがえるが、こういったあり方は淀川流域や大阪平野全般の傾向とも概ね合致している。その一方で中期以降は、遺物から他地域との関係を類推することが難しくなるため、中期中葉以降の居住域の復活の背景については十分な言及ができない。中期の集落遺跡では、耕地開発や新しい手工業生産の展開などによって成立する特徴的な内容の遺跡が多く流動性も高いため<sup>62)</sup>、周辺の同時期の集落遺跡との比較の中から具体的な遺跡の特徴を抽出する作業が必要となる。さらに後期以降の集落の衰退・消滅・移動の背景については、陸上交通網の整備と軌を一にした現象と評価したが、考古資料による具体的な根拠がまだまだ不十分であるため、山麓部での調査の進展が望まれるところである。

今後の課題としては、隣接する周辺地域との関係をより深く検討することが必要となってくる。上牧遺跡を含む嶋上東部エリアの状況については、集落と古墳の動向の大枠を整理し関係性を追求したが、淀川北岸地域全体の中での相対的な位置づけと、淀川を介してつながる周辺地域との関係を模索することが重要である。特に西側の安威川・芥川流域では、大規模な古墳の継続的な築造がなされ、その基盤となる集落の実態把握も進んでいるが、嶋上郡東部エリアは古墳の築造が低調な点で相違があり、その背景を検証する必要があるだろう。可耕地の狭さや生産力が問題になると予想されるが、そのようにみた場合、上牧遺跡のような淀川の交易網の通過点上に位置する集落の管理と経営の主体をどのように考えるかが問題となる。特に中河内の場合も、集落の内容に比例して前期以前の大規模な古墳の築造が低調であるなど共通点がみられる。交易拠点と呼ばれるような遺跡群と造墓活動の関係は、このエリアの問題にとどまるものではないため、広域的な比較検討が必要となろう。また淀川北岸地域全体からみれば、大和を含めた東の地域からの玄関口といえるような場所に位置するため、淀川北岸地域と他地域を結ぶ交易

網の復元においても重要な存在といえる。

淀川を介して繋がる周辺地域のうち隣接する山城地域は、木津川流域、巨椋池周辺、乙訓地域など各エリアで集落遺跡の調査・研究の蓄積がある。中でも、乙訓地域では水垂遺跡や馬場遺跡など高率で生駒西麓産の庄内形甕が搬入されるような集落遺跡があり、その様相は上牧遺跡とも類似するため、<sup>63)</sup>交易網の復元において相互の関係性を検証することが重要である。さらに乙訓地域では、日本海側への入口とされる小畑川流域で布留式中段階以降に山陰系の土器がまとまって出土する鴨田遺跡などの存在も知られており、<sup>64)</sup>東西・南北方向に錯綜する複数の西日本地域からの物資の搬入ルートの復元とネットワークの解明、および时期的な推移が問題となろう。その一方で北河内や北摂などは、溝咋遺跡などでの優れた分析はあるものの、<sup>65)</sup>畿内でも土器や集落遺跡に関する蓄積が浅い地域のひとつであるため、今回の調査成果を通じて分析を深化させる必要がある。

以上のように今回の調査成果は、淀川近傍の古墳時代集落の実態を明らかにすることができ、地域史の復元という意味においても大きな成果を得ることができた。さらにそれのみならず、淀川を介して繋がる他地域との関係性が明らかできたことも重要な調査成果のひとつであり、このことは刻々と変化する古墳時代の社会変化の一端を反映するものといえるだろう。

### 第3節 調査成果の意義

今回の発掘調査では、弥生時代～中世までの遺構・遺物を多数検出し、淀川近傍での通時的な土地利用と人間活動の関係を明らかにすることができた。最後に発掘調査と整理作業から得られた知見について簡潔にまとめると、次の通りである。

- ・ 淀川周辺の古環境変化に関する通時的な理解が進み、周辺の安定した地形の形成が縄文時代前期に遡ることが判明した。そのような環境は中世まで長期に亘って継続するが、近世以降は環境変化が著しく、淀川の河床の上昇や大規模な洪水が発生する状況に変化することが明らかとなった。
- ・ 弥生時代中期前葉の方形周溝墓を14基確認した。同時期の方形周溝墓群が周辺遺跡でも検出されているため、出現背景や付属する集落や生産域の実態を明らかにすることが課題である。
- ・ 古墳時代初頭～後期に亘って長期間継続する集落の存在を確認した。豊富な遺構・遺物、井戸の祭祀、外来系土器の出土など内容が充実しており、北摂有数の集落遺跡の調査成果となった。
- ・ 古代の遺構・遺物は相対的に少なかったが、内ヶ池分水路での河岸祭祀の痕跡や、特殊な区画溝の存在が調査で明らかとなった。その内容や性格に不明な点も多いが、大原駅家と目される梶原南遺跡に隣接しており調査の進展と比較検討が望まれる。
- ・ 面的な発掘調査によって、13世紀頃からはじまる耕地開発の実態を明らかにすることができた。さらに中世の耕地区画は、現行の区画と概ね一致しており、現代まで継続して続く耕作地としての土地利用がこの時期にはじまったことが明らかとなった点が重要である。

以上のような調査成果の中でも、古墳時代の遺構・遺物が最も豊富で大きな成果となった。上牧遺跡の古墳時代集落は長期間継続するが、その出現・発展・衰退は淀川を通じた地域内外のネットワークの変化と関連することが発掘調査の成果から一端がみてとれた。こうしたネットワークは、時代とともに



経て絶えず変化するものであるが、今回の調査は東西地域を結ぶ新たな大動脈として期待される新名神高速道路の建設に伴うものであり、今後は新たなネットワークの形成によって、現代社会に新しい変化や価値が生まれることが期待されている。結果として、発掘調査によって判明した過去の姿と現代の開発が交錯するような状況を見出すことができたが、それはこの地域の地勢的な特色に基づくものであり、こうした地域の歴史の掘り起こしができた点が大きな成果であったといえよう。発掘調査の成果を地域史のみならず各時代の歴史像の解明につなげることが重要であり、より充実した歴史復元のためにひろく今回の調査成果が活用されることが望まれるところである。

【註】

- 1) 既往の調査成果については、第2章第2節にまとめてある。調査成果の詳細および報告は、表3 (P21) を参照されたい。
- 2) 若林邦彦 2017 「集落と墳墓の立地からみた弥生～古墳時代の社会変化」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集
- 3) 今西康宏編 2013 『三島弥生文化の黎明—安満遺跡の探求—』高槻市立今城塚古代歴史館 平成25年度春季特別展図録
- 4) 藤井整 2004 「弥生時代中期の下植野南遺跡」『下植野南遺跡Ⅱ』京都府遺跡調査報告書第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 5) 川瀬貴子 2015 『梶原西遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第261集
- 6) 橋本久和・高橋公一・木曾広 2002 「神内遺跡の調査」『高槻市文化財年報』平成12年度 高槻市教育委員会
- 7) 安田初雄 1959 「古代における日本の放牧に関する歴史地理的考察」『福島大学学芸学部論集』第10号 福島大学学芸学部
- 8) 森田克行 1988 「嶋上郡の方形地割に関する覚書」『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要12』高槻市文化財調査概要Ⅻ 高槻市教育委員会
- 9) 笹栗拓 2017 「高槻市成合遺跡群における律令期前後の地域社会の変容」『洛北史学』第19号 洛北史学会
- 10) 金田章裕 1993 『微地形と中世村落』吉川弘文館
- 11) 森岡秀人 1999 「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- 12) 高野陽子 2010 「山城の庄内式甕をめぐる二、三の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 13) 田中元浩 2005 「近畿地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 日本考古学協会
- 14) 三好玄 2013 「高杯形土器における布留式土器定型化の様相」『古墳出現期土器研究』第1号 古墳出現期土器研究会
- 15) 次山淳 1995 「波状文と列点文—布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布—」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集、同朋舎出版
- 16) 津堂遺跡や応神陵外堤など、古市古墳群周辺で中期初頭～前葉に下る事例が知られている。  
笹栗拓編 2016 『津堂遺跡』藤井寺市文化財報告第39集・(公財)大阪府文化財センター調査報告書第273集 藤井寺市教育委員会・(公財)大阪府文化財センター  
一瀬和夫ほか 1989 『大水川改修に伴う発掘調査概要Ⅵ』大阪府教育委員会
- 17) 笹栗拓 2019 「布留式土器の変容過程～八尾市佐堂遺跡と茨木市総持寺遺跡出土資料の分析を中心に～」『大阪文化財研究』第52号 (公財)大阪府文化財センター
- 18) 中期の椀形高杯の出現背景については、従来は、布留式からの連続性が強調されてきたが(辻 1999、中野 2010)、今回出土した上牧遺跡の資料を見る限り、明らかに製作技術の変化と連動しており、再検証が必要である。  
辻美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室  
中野咲 2010 「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論叢』橿原考古学研究所紀要第33冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 19) 大山崎町松田遺跡では、大口径と小口径の杯類が混在するTK47型式とMT15型式の中間的な一群が抽出され、杯類の大型化は漸的に変化すると評価されている(古閑編 2011)。ただし上牧遺跡の33落込みでは、口縁端部に段のつかないTK10型式に下るような資料に、小口径の杯類と短脚高杯が共伴するため、小口径が残る可能性を考えておきたい。  
古閑正浩編 2011 『松田遺跡』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第41集 大山崎町教育委員会
- 20) 山田隆一 2003 「淀川流域の古墳時代初頭集落について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』同刊行会
- 21) 角閃石を含むいわゆる讃岐系とされる大型複合口縁壺については、胎土分析から生駒西麓産という結果が得られており



(梅本編 20015)、この理解に全面的に従う。

梅本康広編 2015『元稻荷古墳の研究』向日丘陵古墳群調査研究報告第2冊 (公財)向日市埋蔵文化財センター

- 22) 宮崎康雄 1996『古曾部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第20冊 高槻市教育委員会
- 23) 高木真光 1981「中田遺跡刑部地区関西電力 K.K. 地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」『昭和 53・54 年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告7 八尾市教育委員会
- 24) 國下多美樹・田中元浩 2003「長岡京跡左京第 36 次 (7ANDL II 地区)」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書 長岡京跡・東土川西遺跡・修理式遺跡』長岡京跡発掘調査研究所 (財)向日市埋蔵文化財センター
- 25) 秋山浩三・小林和美・後藤理加・山崎頼人 2000「近畿における吉備型甕の分布とその評価」『古代吉備』第 22 集 古代吉備研究会
- 26) 中居和志氏のご教示による。
- 27) 岸本直文 1988「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』第 71 巻第 6 号 史学研究会  
西本和哉 2005「丁瓢塚古墳採集の壺形土器」『古代学研究』169 号 古代学研究会
- 28) 山田隆一 1992「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究』III 庄内式土器研究会  
山田隆一 1998「大阪府下出土の東海・東国地域の土器」『庄内式土器研究』XIV 庄内式土器研究会
- 29) 三宮昌弘 2015『梶原古墳群』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第 259 集
- 30) 山田隆一 2006「大阪府出土の阿波・讃岐・播磨系土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館  
河田泰之 1996「大阪湾を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 18 集
- 31) 岩崎郁実 2021「大阪府交野市森遺跡出土製塩土器の検討」『交野市文化財だより』第 32 号 交野市教育委員会
- 32) 菅原康夫・藤川智之・氏家敏之 1995『名東遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第 14 集 徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター
- 33) 西本和哉編 2021『赤色顔料生産遺跡および関連遺跡の調査 若杉山辰砂採掘遺跡 出土品編』徳島県埋蔵文化財調査報告書 第 5 集 徳島県教育委員会
- 34) 外面煤・内面赤色顔料付着する土器は、中河内の諸遺跡でも同様の出土事例が一定数みられるようである。  
前掲註 30) 山田 2006
- 35) 前掲註 33) 西本編 2021
- 36) 前掲註 30) 山田 2006  
原田昌則 2020「古墳時代早期から前期前葉の外來系土器」『新版 八尾市史 考古編2』八尾市史編纂委員会  
川部浩司 2011「古墳時代開始期における大和地域と四国北東部地域の地域間交流」『研究紀要』第 16 集 (財)由良大和古文化研究協会
- 37) 高槻市史編さん委員会編 1973『高槻市史』第六巻 考古編
- 38) 三好玄 2010「布留式土器様式構造の再検討—精製器種を中心に—」『待兼山考古学論集II』大阪大学考古学研究室
- 39) 前掲註 13) 田中 2005
- 40) 山本亮 2014『古墳出現期の山城地域における地域間完形の一断片』『古墳出現期土器研究』第 2 号 古墳出現期土器研究会
- 41) 植木久 1991「高床建物の変遷」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房
- 42) 森岡秀人 2003「近畿の様相」『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003 年度滋賀大会実行委員会
- 43) 大東悟 1999「大型建物 (伊勢遺跡・下鈎遺跡・下長遺跡)」『滋賀考古』第 21 号 滋賀考古学研究会
- 44) 小泉信吾・千喜良淳 2002『大藪遺跡発掘調査報告書』大藪遺跡発掘調査団
- 45) 梅本康広 1997「中海道遺跡—第 32 次発掘調査概要—」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集 (財)向日市埋蔵文化財センター
- 46) 河内の場合は、中期以降に低地の遺跡で井戸枿を伴う事例が多くなるが (鹿野 2013)、その一方で低位段丘以上の遺跡では井戸枿を伴う事例がほとんどないため、少なくとも古墳時代以前の井戸枿の有無は環境的な要因が大きいと考えられる (笹栗編 2016)。  
鹿野壘 2013「近畿地方の古墳時代から飛鳥時代の井戸—大阪府域を中心として—」『続・井戸再考—古墳・飛鳥時代の井戸—』第 54 回埋蔵文化財研究会発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会  
前掲註 16) 笹栗編 2016
- 47) 今回の調査地点の北側に五領水源地 (ポンプ場) が隣接している。1970 年 (昭和 45) に設置され、地下水の取水をおこなっていたが、取水量の減少により 2004 年 (平成 16) 以降は取水を廃止されている。このことから、周辺の地下水位が下がっている可能性が高く、基盤層下部であり顕著な湧水がないことの原因の可能性もある。  
<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/kakuka/suido/jousui/46.html> (令和3年8月22日閲覧)
- 48) 例えば、古墳時代前期前葉 (布留式古段階新相) の標識的な資料でもある八尾市萱振遺跡 SE03 では、埋土上層に布

## 第6章 総括

留形甕や生駒西麓産庄内形甕に加え、吉備・山陰・讃岐・阿波など各地の壺・甕類が同時に投棄されている。このような各地域の外来系土器がまとまって出土する事例は、決して例外的なものではない。

大野薫 1983 編『萱振遺跡発掘調査概要 I』大阪府教育委員会

- 49) 森本徹 2013 「集落景観の変化と井戸の性格」『続・井戸再考—古墳・飛鳥時代の井戸—』第 54 回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会
- 50) 前掲註 46) 鹿野 2013  
杉山拓己・岡田雅彦・前田俊雄 2013 「奈良県の様相」『続・井戸再考—古墳・飛鳥時代の井戸—』第 54 回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会
- 51) 須恵器出現前後にあたるこの時期は、土師器の系統変化や様式の抜本的な変化を伴うが、特に畿内周辺部では編年が未確立で、周辺部では総じて土器編年の整合の問題があるため、検証の余地が大きい。
- 52) 図 309 の作成は下記の文献等および各遺跡の既刊報告書を参考にした。  
集落：森本徹 2014 「摂津地域」『古代学研究』第 201 号 古代学研究会  
岡田賢 2016 「摂津地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房  
清水邦彦 2021 「摂津地域東部における遺跡動態—古墳時代から飛鳥時代にかけて—」『古墳時代から飛鳥時代集落遺跡の分析からみた社会変化』六一書房  
古墳：内田真雄編 2020 『群集墳と横穴式石室—古墳時代後期の三島—』高槻市立今城塚古代歴史館 令和2年度春季企画展図録  
今西康宏編 2020 『三島埴輪総覧』高槻市立今城塚古代歴史館 令和2年度秋季企画展図録  
地形：三好裕太郎編 2020 『安満遺跡範囲確認調査報告書その2—平成 26・27・28 年度 農場北側地区—』高槻市文化財調査報告書第 36 冊 高槻市  
辻康男 2013 「広瀬遺跡の自然科学分析」『広瀬遺跡発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書第 24 集 島本町教育委員会
- 53) 三好裕太郎 2019 「梶原寺跡隣接地の試掘確認調査」『高槻市文化財年報』平成 29 年度 高槻市教育委員会
- 54) 橋本久和 1974 『安満遺跡発掘調査報告書—中世集落跡の調査—』高槻市文化財調査報告書第 5 冊 高槻市教育委員会  
森田克行・橋本久和 1977 『安満遺跡発掘調査報告書—9 地区の調査—』高槻市文化財調査報告書第 10 冊 高槻市教育委員会  
前掲 52) 三好 2020
- 55) 前掲 13) 田中 2005、前掲註 30) 山田 2006
- 56) 前掲註 2) 若林 2017  
中久保辰夫 2017 『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版
- 57) 内田真雄 2019 「鵜殿遺跡・前島遺跡の考古資料 (1)」『高槻市文化財年報』平成 29 年度 高槻市教育委員会  
内田真雄 2019 「鵜殿遺跡・前島遺跡の考古資料 (2)」『高槻市文化財年報』平成 30 年度 高槻市
- 58) 笹栗拓 2016 「北摂三島の群集墳と成合地区の後・終末期古墳の位置づけをめぐって」『大阪文化財研究』第 48 号 (公財) 大阪府文化財センター
- 59) 諫早直人 2012 「馬匹生産の開始と交通網の再編」『古墳時代の考古学』7 同成社
- 60) 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『弥生文化博物館研究報告』第 3 集 弥生文化博物館
- 61) 福永伸哉 2011 「古墳時代政権交代と畿内の地域関係」『古墳時代政権交代論の考古学的再検討』大阪大学大学院文学研究科
- 62) 中久保辰夫・中野咲 2013 「韓式系土器のあり方からみた集落分類」『古代学研究』第 199 号 古代学研究会  
前掲註 56) 中久保 2017
- 63) 前掲 13) 田中 2005、前掲註 40) 山本 2014
- 64) 山中章・松崎俊郎・中塚良ほか 1985 『鴨田遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第 14 集 向日市教育委員会
- 65) 合田幸美 2000 「溝咋遺跡出土の外来系土器について」『溝咋遺跡 (その 1・2)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 49 集

## 第1章 第1節 (試掘調査：土器類)

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	4		土師器	皿		全形	E-2区相当(757溝)		試掘10tr	13c代	8.5			1.4	0.3	内断75rR8/4 浅黄橙 外10rR8/4 浅黄橙	密	良好	10/12	4層除去面遺構、(試掘2溝) 口縁部ヨコナデ
2	4		瓦器	碗		全形	E-2区相当(757溝)		試掘10tr	13c代	13.8			4.9	0.3	内外5/5/1 灰白 断5/8/1 灰白	密	良好	11/12	4層除去面遺構、(試掘2溝) 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
3	4		土師器	杯A		全形	E-2区相当	(第3層以下)	試掘10tr	8c代	12.2			3.4	0.5	内断75rR6/6 橙 外75rR/6 橙	密	良好	口：5/12	口縁部ヨコナデ
4	4		須恵器	壺		体部 ～底部	P3区相当	(第5層)	試掘3tr	9～ 10c代			8.9	(5.5)	0.5	内外25r/1 灰白 断25r/2 灰黄	密	良好	底：2/12	本調査時同一個体破片出土
5	4		須恵器	杯蓋		口縁 ～天井部	P3区相当	(第5・ 第6層)	試掘3tr	TK216 ～208	11.2			3.8	0.5	内N6/0 灰 外N7/0 灰白 断25rR/1 赤灰	密	良	口：2/12	TK208 型式頃 天井部カキメ
6	4		須恵器	杯蓋		口縁 ～天井部	C-5区相当 (西端)	(第6層)	試掘4tr	TK208	13.5			(4.4)	0.4	内外N7/0 灰白 断75rR/2 灰橙	密	良好	口：3/12	TK208 型式頃 天井部回転ヘラケズリ
7	4		須恵器	杯身		受部 ～体部	C-5区相当 (西端)	(第6層 直上)	試掘4tr	TK208		(12.8)		2.3	0.5	内5rR6/1 青灰 外25rR/1 黄灰 断75rR/1 褐灰	密	良好	1/12以下	内外面ナデ
8	4		土師器	高杯		脚部	P3区相当	(第5・ 第6層)	試掘3tr	辻3				(3.4)		内外断75rR/6 橙	密	良	1/12以下	内外面マメツ
9	4		土師器	高杯	C系統 II群系	接合部	E-2区相当	(第3層 以下)	試掘10tr	辻3				(1.5)	0.3	内75rR/4にふい橙 外10rR/4にふい黄橙 断75rR/4にふい橙・ 25rR/2 灰黄	密	良好	1/12以下	内外面マメツ
10	4		土師器	壺		底部	C-8区相当	第4層 除去面	試掘1tr	庄内			3.6	(3.2)	0.6	内外10rR/2にふい橙 断75rR/4にふい橙	密	良好	底：4/12	外面V様系タタキ 内面ナデ

## 第4章 第1節 (102流路：土器類)

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
11	20		土師器	皿		全形	102流路	B層	A-3	14c代	6.9			1.7	0.3	内外断 75rR/4にふい橙	密	硬	9/12	口縁部ヨコナデ
12	20		土師器	皿		全形	102流路	B層	A-3	14c代	6.5			1.4	0.3	内外10rR/4 浅黄橙 断75rR/6 橙	密	硬	口：9/12	口縁部ヨコナデ
13	20		土師器	皿		全形	102流路		A-3	13c代	8.6			1.3	0.4	内外断25r/1 灰白	密	やや軟	口：3/12	口縁部ヨコナデ
14	20		土師器	皿		全形	102流路	B層	A-3	13c代	8.9			(1.7)	0.4	内外断25r/1 灰白	密	やや軟	口：3/12	口縁部ヨコナデ
15	20		土師器	皿		全形	102流路	B層	A-3	13～ 14c代	9.5			1.9	0.3	内75rR/3 浅黄橙 外断10rR/2 灰白	密	硬	口：2/12	口縁部ヨコナデ 精良胎土、接合痕明瞭
16	20		土師器	皿		全形	102流路	B層	A-3	13c 後半頃	12.1			1.3	0.3	内外断10rR/3 浅黄橙	密	やや軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ
17	20		土師器	皿		全形	102流路	B層	A-3	14c 後半頃	10.6		4.8	2.3	0.3	内断10rR/2 灰白 外25r/2 灰黄	密 精良	硬	口：3/12	口縁部ヨコナデ 橋本I期
18	20		瓦器	小皿		全形	102流路	B層	A-3	13c代	7.9			1.5	0.3	内N5/0 灰 外N4/0 灰 断N8/0 灰白	密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ
19	20		瓦器	椀		口縁 ～体部	102流路	B層	A-3	13c代	14.0			(4.1)	0.4	内N5/0 灰 外N4/0 灰 断N8/0 灰白	密	硬	口：3/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
20	20		瓦器	椀		全形	102流路	B層	A-3	13c代	14.0		5.8	4.8	0.3	内N5/0 灰 外105/1 灰 断N8/0 灰白	密	硬	口：1/12 以下 底：1/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
21	20		土師器	高台付椀	西日本 搬入品か	底部	102流路	B層	A-3	12～ 13c代			6.7	(1.7)	0.5	内10rR/2にふい黄橙 外25r/2 灰黄 断N4/0 灰	密	やや軟	底：12/12	ヨコナデ成形、貼付高台 西日本系、搬入品か
22	20		山茶碗	椀	北部系	底部	102流路	B層	A-3	12c 後半頃			7.3	(2.9)	0.4	内外25r/1 灰白 断25r/1 灰白	密	硬	底：6/12	回転ナデ、底部糸切り底 北谷系・均質手 谷道間窯跡、古手の山茶碗
23	20		白磁	碗		口縁	102流路	B層	A-1	13c代	14.2			(3.5)	0.4	内75r/2 灰白 外5r/2 灰白 断75r/1 灰白	密	硬	口：2/12	回転ナデ、施釉
24	20		須恵器	羽釜		口縁	102流路	B層	A-1	中世?	18.0			(3.2)	0.5	内外5r/1 灰 断5r/1 灰白	密	硬	1/12以下	ヨコナデ
25	20		土師器	土釜	摂津式 土釜	口縁	102流路	B層	A-3	11～ 12c代	23.8			(8.0)	1.0	内10rR/2 灰黄橙 外10rR/3にふい黄橙 断10rR/2にふい黄橙	粗	やや軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ 体部外面粗相いたテハケ 胎土：古墳時代の在り胎土 と類似
26	20		土製品	土鍾		全形	102流路	B層	A-3	中世か	35 (長)	44 (幅)		3.5	0.7	内10rR/3にふい黄橙 外10rR/4にふい黄橙 断10rR/1 灰白・ 10rR/2にふい黄橙	密	硬	6/12	ナデ・オサエ成形 ローリングあり
27	20		土師器	皿	ての字	全形	102流路	B層	A-3	11c代	9.4		4.6	1.4	0.4	内10rR/2にふい黄橙 外10rR/3 浅黄橙 断10rR/1 灰白	密 精良	硬	口：12/12 ほぼ完形	口縁部ヨコナデ
28	20		瓦器	椀		全形	955溝	102流路 B層関連	A-3	14c代	11.9		4.6	4.2	0.3	内外断5r/1 灰白	密	やや軟	口：3/12 底：3/12	口縁部ヨコナデ 体部下半オサエ顕著 内面ミガキ、見込みミガキ
29	20		瓦器	椀		口縁 ～体部	958溝	102流路 B層関連	A-3	13c代	12.0			(4.4)	0.3	内外25r/1 灰白 断25r/3 淡黄	密	軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
30	20		瓦器	鉢		口縁	958溝	102流路 B層関連	A-3	13c代	24.8			(2.4)	0.7	内外N4/0 灰 断5r/1 灰白	密	やや軟	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ
31	20		土師器	皿		全形	959溝	102流路 B層関連	A-3	13c代	9.0			1.7	0.3	内25r/1 灰白 外5r/1 灰白 断75rR/2 灰白	密	硬	口：4/12	口縁部ヨコナデ
32	20		瓦器	椀		口縁 ～体部	959溝	102流路 B層関連	A-3	13c代	14.3			(3.1)	0.3	内外N4/0 灰 断N8/0 灰白	密 精良	硬	口：3/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
33	20		須恵器	杯B		体部 ～底部	102流路	B層	A-3	8c末 ～9c初			10.9	(4.3)	0.4	内N6/0 灰 外10r/1 灰 断10r/1 灰白	密	硬	底：3/12	回転ナデ 重量感あり=成産か
34	20		須恵器	杯B		口縁 ～底部	102流路	B層	A-3	8c末 ～9c初	17.2		11.4	6.2	0.5	内外断N6/0 灰	密	硬	口：1/12 以下 体：1/12	回転ナデ
35	20		須恵器	甕		口縁	102流路	B層	A-3	8c末 ～9c初				(8.9)	1.1	内N5/0 灰 外N4/0 灰 断N6/0 灰	やや密	硬	口：1/12 以下	内外面自然釉 重量感あり=成産か
36	20		灰釉陶器	壺	東海産 長頸壺	頸部	102流路	(攪乱)	A-3	8c末 ～9c初	10.0			(5.2)	1.3	内25r/1 灰白 外25r/1 黄灰 断5r/2 灰オリーブ	密 精良	硬	頸：3/12	外面自然釉
37	20		須恵器	杯G		体部 ～底部	102流路	B層	A-3	飛鳥II			5.8	(2.1)	0.3	内外N7/0 灰白 断10r/1 灰白	密	硬	底：12/12	回転ナデ

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
38	20		須恵器	杯H		全形	102 流路	B層	A3	飛鳥I新-II	9.0	11.2	6.0	2.4	0.3	内外断N60灰	密	硬	口:4/12 全体30%	回転ナデ 胎土黒色粒	
39	20		須恵器	壺		口縁 ~肩部	102 流路	B層	A1	6・7c	14.6				0.6	内N50灰 外N60灰 断N50灰・N70灰白	密	硬	口:4/12	回転ナデ 内面同心円あて具痕	
40	21	C11 33	須恵器	杯A		全形	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	13.6	13.8	9.8	4.1	0.4	内25f5/2暗灰黄 外53/2オリーフ黒 断25f8/1灰白	密	硬	口:10/12 全体90%	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ 内面煤・墨付着 墨書あり「一」 → 墨部用に使いか ※40・41・42同一生産地	
41	21	C11 33	須恵器	杯A		完形	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	14.4	14.5	11.4	4.0	0.4	内25f7/1灰白 外25f7/2灰黄	やや 密	硬	完形	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ ※40・41・42同一生産地	
42	21	C11 33	須恵器	杯B		全形	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	14.4	14.5	9.0	4.1	0.5	内断25f7/1灰白 外N60灰	密	硬	口:6/12	回転ナデ ※40・41・42同一生産地	
43	21		須恵器	杯B		底部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV			7.8	(1.1)	0.4	内外N60灰 断25f5/1褐灰	密	硬	底:4/12	回転ナデ	
44	21	C11	須恵器	杯A		体部~ 底部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV		18.1	14.1	(2.7)	0.4	内25f5/4にふい 外10f8/4にふい黄橙 断10f7/2にふい黄橙	密	硬	底:3/12	回転ナデ 焼成不良品	
45	21	C11 33	須恵器	壺	小型壺	完形	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	9.2	13.0			0.6	内外N60灰 断25f8/1灰白	やや 密	硬	ほぼ完形	回転ナデ 類例少ない器形 → 生産地不明	
46	21		須恵器	壺		体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV					1.0	内5f8/1青灰 外N60灰 断N60灰	密	硬	破片	内面~破面墨付着	
47	21		須恵器	甕	大甕	口縁~ 体部	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	24.2	43.2			0.6	内5f7/1灰白 外断N60灰白	やや 粗	やや 軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面格子状タタキ 内面同心円状の当て具痕	
48	21		白磁	椀		口縁	102 流路	D層 (北半)	A3	中世					0.4	内外25f7/1灰白 断N60灰白	密	硬	口:1/12 以下	施釉 ※上層の混入か	
49	21	C11	土師器	小型甕		全形	102 流路	C層 (南半)	A1	平城IV	12.1	13.6			10.6	内外断 10f8/3浅黄橙	密	硬	口:7/12 全体70%	口縁部ヨコナデ 体部断面内面ハケ・オサ エ 外面煤付着、底部穿孔 胎土精良、非在地胎土か	
50	21	C11 33	土師器	甕	小型甕	全形	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	12.3	12.9			10.5	0.4	内断 10f7/2にふい黄橙 外75f8/3にふい黄	やや 密	硬	口:2/12 体:完形 全体80%	口縁部内面ハケのちヨコ ナデのち 体部外面粗いハケ 内面ナデ・オサエ 外面煤付着、在地胎土か
51	21	C11	土師器	甕	小型甕	全形	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	13.8	13.9			11.2	0.4	内75f8/6橙 外断75f7/6橙	密 精良	硬	口:12/12 全体70%	口縁部内面ハケのちヨコ ナデのち 体部外面粗いハケ 内面ナデ・オサエ 非在地胎土か(精良)
52	21	C11 33	土師器	甕	小型甕	全形	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	14.8	15.8			(12.8)	0.5	内外断 10f7/3にふい黄橙	密	硬	口:8/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデのち 体部外面粗いハケ 内面ナデ 外面、内面底部煤付着 在地胎土か
53	21	C11	土師器	甕	小型甕	全形	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	15.1	15.7			13.2	0.6	内外 75f8/4にふい黄橙 断10f8/4浅黄橙	密	硬	口:11/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデのち 体部外面粗いハケ 内面ナデ 外面煤著に付着 在地胎土か
54	21	C11	土師器	甕	小型甕	底部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV		(12.4)			(4.7)	0.5	内断 10f7/4にふい黄橙 外75f7/6橙	密 精良	硬	底部のみ	外面ハケ 内面上半ナデ底部当て具痕 非在地胎土か(精良)
55	21		土師器	甕	中型甕	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	16.7	18.3			(9.3)	0.5	内断25f7/2灰黄 外25f5/1黄灰	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ナデ 内外面煤付着
56	21		土師器	甕	中型甕	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	19.4	20.1			(7.9)	0.5	内断 10f8/3にふい黄橙 外10f8/2灰黄橙	やや 密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ、内面ナデ
57	21	C11	土師器	甕	中型甕	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	19.6	20.8			(12.2)	0.5	内10f7/4にふい黄橙 外断 10f7/3にふい黄橙	密	硬	口:4/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ナデ 外面煤著に付着
58	21		土師器	甕	中型甕	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	26.2	27.8			(8.5)	0.6	内75f7/6橙 外75f8/6橙 断10f8/2灰黄橙	やや 密	やや 硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ナデ 外面下半煤付着
59	21	33	土師器	鉢	大型鉢	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	46.2				(9.6)	0.7	内10f7/3にふい黄橙 外25f4/1黄灰 断10f7/2にふい黄橙	密	硬	口:3/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ内面ヨコハケ 外面煤付着
60	22	C11	土師器	甕	長胴甕 (在地)	口縁 ~体部	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	28.4				(27.8)	0.6	内外 10f7/3にふい黄橙 断10f7/2にふい黄橙	密	良好	口:12/12 全体60%	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ 内面上半ヨコハケ下半同心 円あて具痕 内外面煤付着
61	22	C11	土師器	甕	長胴甕 (在地)	口縁 ~体部	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	29.2	26.6			(29.3)	0.7	内75f8/4にふい黄橙 外10f7/4にふい黄橙 断10f7/3にふい黄橙	密	硬	口:3/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ 内面上半ヨコハケ下半同心 円あて具痕 外面煤付着
62	22		土師器	甕	長胴甕 (在地)	口縁 ~体部	102 流路	D層 (北半)	A3	平城IV	28.8	25.8			(23.5)	0.6	内外断 10f7/3にふい黄橙	密	硬	口:5/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ 内面上半ヨコハケ下半同心 円あて具痕 外面煤付着
63	22	C11	土師器	甕	長胴甕	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	27.3	28.2			28.3	0.6	内外75f8/6橙 断10f7/4にふい黄橙	密	硬	口:12/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ 内面上半ヨコハケ下半同心 円あて具痕 外面煤付着(やや弱く付着)
64	22		土師器	甕	長胴甕 (在地)	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	29.2	26.0			(17.6)	0.5	内75f8/3にふい黄橙 外75f8/4にふい黄橙 断75f8/2灰白	やや 密	硬	4/12 口:12/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ 内面上半ナデ・オサエ下半 同心円あて具痕 外面煤付着
65	22	C11 33	土師器	甕	長胴甕 (在地)	口縁 ~体部	102 流路	D層 (南半)	A3	平城IV	29.5	26.8			31.3	0.6	内外断 10f7/4にふい黄橙	密	硬	口:12/12	口縁部内面ハケのちヨコ ナデ 外面ハケ 内面上半ヨコハケ下半同心 円あて具痕 外面煤付着



第1節 (102 流路) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
66	23		土器	甕	長胴甕	口縁～体部	102 流路	D層(南半)	A-3	平城Ⅳ	27.5			(22.2)	0.6	内外断 10R7/3 にふい黄橙	密	良好	3/12 口: 5/12	口縁部内面ハケのちヨコナデ 外面ハケ 内面上半板ナデ下半オサエ 外面集付着
67	23	C11 33	土器	甕	長胴甕	口縁～体部	102 流路	D層(南半・ポイントあり)	A-3	平城Ⅳ	29.2	26.0			0.5	内 7.5R7/4 にふい橙 外断 10R7/3 にふい黄橙	密	良好	11/12 口: 10/12	口縁部内面ハケのちヨコナデ 外面ハケ 内面上半ヨコハケ下半無文 あて具痕 外面集付着
68	23		土器	壺	阿波産	肩部	102 流路	A層(樹皮掘削)	A-3	庄内 ～布留				(3.7)	0.7	内 2.5R6/3 にふい黄 外 7.5R6/6 橙 断 2.5R6/2 灰黄	密	やや硬	細片	肩部内面オサエ 片岩あり、阿波産
69	23	36	須恵器	把手付椀		全形	102 流路	A層	A-3	TK216 ～208	6.8		4.9	8.2	0.7	内外 5B3/1 暗青灰 外 5PB4/1 暗青灰	やや密	硬	口: 6/12 全体 70%	内外面回断ナデ 外面下半ケズリ 把手欠損 胎土・整形やや粗雑
70	23		土器	高杯か		脚部	102 流路	B層	A-3	庄内～ 布留古 か			16.6	(2.2)	0.4	内 10R8/2 灰白 外 2.5R6/2 灰白 断 2.5R5/1 黄灰	密	やや硬	底: 1/12	外・内: ナデ
71	23		土器	高杯	無稜 外反形	杯部	102 流路	B層	A-3	辻 3	18.7			(6.7)	0.6	内 7.5R6/4 にふい橙 外断 10R7/3 にふい黄橙	やや密	硬	口: 1/12	杯部内面ハケのちヨコナ 凸面接合、非在地胎土か ローリングあり
72	23		土器	高杯	大型 有段形	杯底部	102 流路	BorC層	A-3	辻 3				(5.7)	1.0	内 7.5R6/4 にふい橙 外 7.5R7/4 にふい橙 断 10R7/4 にふい黄橙	密	硬	1/12 以下	杯部ヨコナデ 外面黒斑、非在地胎土か ローリングあり
73	23		須恵器	壺		口縁	102 流路	B層	A-3	TK208 ～23	17.0			(5.4)	0.6	内 5Y7/1 灰白 外 5R6/2 灰白 断 7N7/0 灰白	やや粗	硬	口: 1/12	波状文 1条
74	23		須恵器	甕		口縁	102 流路	B層	A-3	TK73 ～216				(6.9)	0.7	内 5R6/0 灰 外 4N4/0 灰 断 2.5R6/1 赤灰	密	硬	1/12 以下	回転ナデ
75	23		土器	高杯	(B系統か)	脚部	102 流路	CorD層	A-3	辻 3				(7.1)	0.7	内断 10R7/4 にふい黄橙 外 10R6/3 にふい黄橙	密	硬	脚: 12/12	内外面マメツ 脚部外面タテナデか内面ケ ズリか
76	23		須恵器	高杯		脚部	102 流路	C層	A-3	TK208 ～23			8.8	(6.0)	0.7	内外 5R6/0 灰 断 10R6/1 灰	密	硬	底: 3/12	菱形スカシ 3 方向
77	23		須恵器	蓋	壺蓋か	天井 ～口縁	102 流路	D層	A-3	MT15 ～TK10	9.0			(3.7)	0.4	内断 5R6/0 灰 外 7.5R6/1 灰	密	硬	4/12	天井部回転ヘラケズリ
78	23		須恵器	杯蓋		全形	102 流路	D層	A-3	MT15 ～TK10	14.0			5.6	0.4	内外断 5R6/0 灰	やや密	硬	口: 3/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
79	23		土器	小型 丸底壺	(C系統か)	体部 ～底部	102 流路	C層	A-3	辻 3		10.0		(6.3)	0.6	内 7.5R6/2 灰褐 外断 10R7/3 にふい黄橙	密	硬	体: 12/12	内外面ナデ 非在地胎土か ローリングあり
80	23		土器	壺	C系統 大型 直口壺	口縁部	102 流路	C層	A-3	布留 古～中	16.2			(7.4)	0.5	内外断 10R7/3 にふい黄橙	密	硬	口: 1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面ハケ 非在地胎土か ローリングあり
81	23		土器	壺	C系統 中型 直口壺	口縁	102 流路	D層	A-3	布留中	14.8			(6.5)	0.7	内 2.5Y7/2 灰黄 外 2.5Y4/1 黄灰 断 2.5R6/2 灰黄	密	硬	口: 2/12	口縁部ハケのちヨコナデ
82	23		土器	壺	山陰系 二重口縁	口縁	102 流路	D層	A-3	布留 古～中	13.6			(4.5)	0.7	内 2.5Y4/1 黄灰 外 2.5Y7/2 灰黄 断 2.5Y5/1 黄灰	やや密	硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ
83	23		須恵器	甕	大甕	頸部	102 流路	C層	A-3	TK73 ～216				(6.9)	0.7	内外 5R6/0 灰 断 2.5Y7/1 灰白	密	硬	1/12 以下	外面平行タタキ 内面回転ナデ
84	23		須恵器	壺	大型 ・把手付	体部	102 流路	CorD層	A-3	中期後 葉～後 期か				(13.0)	0.8	内 10R7/2 にふい黄橙 外断 2.5R6/1 灰白	密	やや軟	1/12 以下	外面タタキの回転力キメ 内面同心門あて具痕あり 産地不明
85	23		土器	壺	A系統 大型 直口壺か	体部	102 流路	C層	A-3	庄内～ 布留古				(9.3)	0.6	内外 10R6/6 明黄橙 断 10R7/4 にふい黄橙	やや密	硬	1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面V様式系タタキ 内面ナデ・接合痕あり ローリングあり
86	23		土器	甕	布留形	口縁	102 流路	D層	A-3	辻 3～	21.0			(4.3)	0.7	内 10R7/3 にふい黄橙 外 7.5R6/4 にふい橙 断 10R7/1 灰白	密	硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ
87	23		土器	甕	外反 口縁形	口縁 ～体部	102 流路	C層	A-3	中期 後葉～ 後期	17.0	22.0		(11.1)	0.5	内外 2.5R6/2 灰黄 断 2.5Y7/2 灰黄	密	硬	口: 2/12	非在地胎土か ローリングあり
88	23		製塩土器		小型椀形	体部	102 流路	D層	A-3	辻 3 ～4	6.4			(5.8)	0.3	内 7.5R7/2 明黄橙 外 5R7/2 灰白 断 5R7/2 灰白	やや密	硬	2/12	外面タタキ
89	23		弥生土器	壺	生駒西麓産	底部	102 流路	C層	A-3	弥生			6.8	(3.4)	0.7	内 10R4/3 にふい黄橙 外断 10R5/3 にふい黄橙	やや密	やや硬	底: 12/12	角閃石あり ローリングあり
90	23	52	縄文土器	深鉢		体部	102 流路	C層	A-3	前期				(5.6)	(0.5)	内断 10R6/3 にふい黄橙 外 10R4/2 灰黄褐	密	硬	破片	外面縄文内面ミガキか ローリングおぼなし 北白川下層II a 式

第4章 第2節 (中世: 土器類)

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
91	28		土器	皿		完形	(北西攪乱)		P6	14～ 15c代	9.5		5.8	2.0	0.4	内外 2.5Y7/2 灰黄 断 10R7/2 にふい黄橙	やや密	硬	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 口縁部黒変・部分的集付着
92	28		土製品	土錘		全形	(北西攪乱)		P6	中世			4.9	4.0	1.0	内外 10R8/2 灰白 断 10R8/2 灰白・ 5G/1 灰	密	硬	5/12	オサエ整形
93	28		土器	皿		口縁 ～底部	1291 溝		P6	13c代	8.0			(1.8)	0.3	内 2.5R6/3 淡黄 外 5R8/1 灰白 断 2.5Y7/2 灰黄	密	硬	口: 2/12	口縁部ヨコナデ
94	28		土器	皿		全形	1291 溝		P6	14c代	8.7				0.4	内断 7.5R6/3 浅黄橙 外 2.5Y7/2 灰黄	密 精良	硬	口: 5/12	口縁部ヨコナデ 下半ユビオサエ
95	28		土器	皿		口縁 ～底部	1291 溝		P6	13c代	11.4			(2.0)	0.5	内 7.5R7/3 にふい橙 外 7.5R6/3 にふい橙 断 7.5R7/4 にふい橙	密	硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ
96	28		土器	皿		口縁 ～底部	1291 溝		P6	13～ 14c代	12.0			(2.4)	0.4	内 7.5R8/3 浅黄橙 外 7.5R8/4 浅黄橙 断 10R7/3 にふい黄橙	密	硬	口: 1/12 全体 20%	口縁部ヨコナデ
97	28		瓦器	椀		口縁 ～底部	1291 溝		P6	13c代	13.6		5.8	4.8	0.2	内 4N4/0 灰 外 3N3/0 暗灰 断 7N7/0 灰白	密	硬	口: 3/12 底: 5/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込ミガキ
98	28	32	瓦器	椀	輪花椀	全形	1291 溝		P6	13c代	10.7		6.4	3.9	0.3	内外 5R6/0 暗灰 断 7.5R8/1 灰白	密	硬	6/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込ミガキ
99	28		須恵器	鉢		口縁	1291 溝		P6	13c代 か	30.4			(3.9)	0.5	内外断 5R6/0 灰	密	硬	口: 1/12 以下	回転ナデ

遺物一覧表

No.	図 No.	写真	遺物	器種	系統 形式	(部位)	遺構名	層位・ 位置等	調査 区	時期	口径	最大 径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
100	28		瓦器	椀		完形	1291 溝		P6	13c 後半 ~14c	13.1		5.0	4.6	0.4	内5/4/1 灰 外N4/0 灰 断N8/0 灰白	密	硬	12/12 ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 外面下半オサエ顕著 内面ミガキ、見込ミガキ	
101	28		土師器	皿		全形	1291 溝	最下部	P6	12~ 13c代	13.5			2.6	0.4	内外75/8/3 浅黄橙 断10/8/2 灰白	密 精良	硬	口:6/12 全体60%	口縁部ヨコナデ	
102	28		土師器	皿		完形	1291 溝	最下部	P6	12~ 13c代	14.4			2.1	0.5	内外25/8/2 灰白 断25/7/2 灰黄	やや 密	硬	12/12 完形	口縁部ヨコナデ	
103	29		瓦器	椀		口縁 ~ 体部	1292 土坑		P6	13c代				(2.6)	0.3	内外N4/0 灰 断5/8/1 灰白	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
104	29		瓦器	椀		口縁 ~ 体部	103-107		A-1	13~ 14c代	13.0			(3.5)	0.3	内外N5/0 灰 断N8/0 灰白	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 体部下半オサエ顕著 内面ミガキ	
105	29		瓦質 土器	鍋		口縁	103-107		A-1	13~ 14c代	36.8			(5.5)	0.8	内外N3/0 暗灰 断25/8/1 灰白	密	やや 軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ	
106	29		土製品	土鍾		完形	鳥島埋土		A-1	中世か		1.4			3.1	0.2	内75/8/3 にふい橙 外断75/8/4 にふい橙	密	硬	12/12	151 と胎土同じ 44g
107	30		土師器	皿		口縁 ~ 底部	362 溝		P5	15c代	7.2		5.5	1.4	0.4	内75/8/4 にふい橙 外断5/8/6 橙	密	硬	口:3/12 全体60%	口縁部ヨコナデ 底部オサエ	
108	30		土師器	皿		全形	362 溝		P5	15c代	6.4			1.3	0.4	内外 75/8/4 にふい橙 断75/8/6 橙	密	やや 硬	口:5/12 全体50%	口縁部ヨコナデ	
109	30		土師器	皿		口縁 ~ 体部	362 溝		P5	15c代	7.5			2.0	0.5	内断75/8/3 浅黄橙 外10/8/3 にふい黄橙	密	やや 硬	口:3/12 全体30%	口縁部ヨコナデ 下半オサエ	
110	30		土師器	皿		全形	362 溝		P5	15c代	8.2	4.0	1.9	0.5	0.5	内外断10/8/3 にふい 黄橙	密	やや 硬	口:2/12 全体30%	口縁部ヨコナデ	
111	30		土師器	皿		口縁 ~ 底部	362 溝		P5	15c代	11.1			2.1	0.3	内断N5/0 灰 外10/8/2 にふい黄橙	密	硬	口:2/12 全体30%	口縁部ヨコナデ 下半オサエ	
112	30		土師器	皿		口縁 ~ 底部	362 溝		P5	15c代	12.4		3.2	2.2	0.3	内外10/8/2 灰白 断10/8/3 浅黄橙	密 精良	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ	
113	30		土師器	皿		口縁 ~ 底部	362 溝		P5	15c代	14.6		7.6	2.1	0.4	内外断10/8/2 灰白	密 精良	硬	口:1/12 全体20%	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ	
114	30		土師器	皿		口縁 ~ 体部	362 溝		P5	15c代	15.4			(2.3)	0.3	内外10/8/2 灰白 断N5/0 灰	密 精良	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ	
115	30	32	青磁	碗		口縁 ~ 底部	362 溝		P5	15c代	15.4		5.7	8.0	0.5	内外 10/6/2 オリーブ灰 断N8/0 灰白	密	硬	口:1/12 以下 底:12/12	内外面施釉	
116	30		常滑	甕		口縁	362 溝		P5	15c代	12.8			(4.6)	0.8	内10/5/1 灰 外75/8/2 灰褐 断75/8/1 明黄橙	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ	
117	30	32	常滑	大甕		体部 ~ 底部	362 溝		P5	15c代			41.6	(35.5)	1.2	内75/8/3 にふい赤褐 外75/8/6 赤 断75/8/3 にふい赤褐	やや 粗	硬	底:5/12	外面タテ方向ケズリ	
118	30		土師器	羽釜		口縁、 体部	362 溝		P5	15c代	28.6	33.4		6.8 +12.0	0.6	内10/8/2 にふい黄橙 外10/8/1 褐灰 断25/7/3 浅黄	やや 密	硬	口:1/12 体:20%	口縁部ヨコナデ 外面下半縁付着	
119	31		土師器	皿		口縁 ~ 底部	418P		P5	10~ 11c代	9.9			(2.2)	0.4	内10/8/3 浅黄橙 外10/8/1 灰白 断10/8/3 浅黄橙	密	やや 軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 内外面マメツ	
120	31		黒色 土器	椀		内黒 A類	口縁 + 底部	418P	P5	10c 後半	15.9			(3.2)	0.3	内断N3/0 暗灰 外10/8/4 にふい黄橙	密	やや 軟	口:1/12	内黒、黒色土器A類 内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
121	31		黒色 土器	椀		両黒 B類	口縁	418P	P5	11c代	18.9			(3.6)	0.3	内N15/0 黒 外断N2/0 黒	密	硬	口:1/12	両黒、黒色土器B類 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
122	31		土師器	皿		口縁 ~ 底部	431P		P5	13~ 14c代	9.8		7.6	1.5	0.3	内外断75/8/3 浅黄橙	密	硬	口:5/12	口縁部ヨコナデ	
123	31		須恵器	杯		口縁 ~ 底部	386 溝		P5	9~ 10c代	11.5		7.0	4.0	0.5	内外25/7/2 灰黄 断5/7/1 灰白	密	軟	口:1/12 以下 底:3/12	内外面マメツ	
124	31	32	瓦器	椀		二重高台	口縁 ~ 底部	376P	P5	13c代	16.1		3.0	5.7	0.4	内10/4/1 灰 外N6/0 灰 断25/7/2 灰黄	密	やや 軟	口:1/12 以下 底:6/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 二重高台(剥離) → 弁尻類例あり	
125	32		黒色 土器	椀		両黒 B類	口縁	400 土坑	P5	11c代				(2.4)	0.3	内N3/0 暗灰 外断N2/0 黒	密	やや 軟	口:1/12 以下	両黒、黒色土器B類	
126	32		土師器	皿		口縁 ~ 底部	385 土坑	上層	P5	12c代	9.6			(1.7)	0.4	内断10/8/2 灰白 外10/8/3 浅黄橙	密	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 内面縁付着 → 燈明皿として使用か	
127	32		土師器	皿		全形	385 土坑	上層	P5	11c代	10.1			1.0	0.3	内断10/8/3 浅黄橙 外75/8/4 浅黄橙	密 精良	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ	
128	32		土師器	皿		口縁 ~ 底部	385 土坑	下層	P5	11c代	8.6			(1.9)	0.3	内外10/8/2 灰白 断N3/0 暗灰	密 精良	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ	
129	32		黒色 土器	椀		両黒 B類	口縁	385 土坑	P5	11c代				(3.6)	0.3	内外断N3/0 暗灰	密	硬	口:1/12 以下	両黒、黒色土器B類 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
130	32		土師器	羽釜		口縁	385 土坑	下層	P5	11~ 12c代	21.4	(26.2)		(2.9)	0.8	内外10/8/2 灰黄橙 断10/8/3 にふい黄橙	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ	
131	34		土師器	皿		完形	31 水路		A-1	14c代	6.8			2.0	0.6	内・外10/8/6 明黄橙	密	やや 軟	完形	口縁部ヨコナデ	
132	34		土師器	皿		全形	(31 水路)	(北側溝)	A-1	14c代	7.3		6.0	1.3	0.5	内外25/7/3 浅黄 断10/8/3 にふい黄橙	密	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 下半オサエ	
133	34		土師器	皿		口縁 ~ 底部	165 ・166 溝	(西半)	B-1	13~ 14c代	8.0			1.6	0.3	内75/8/6 浅黄橙 外断75/8/4 にふい橙	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ	
134	34		瓦器	椀		口縁 ~ 底部	(31 水路)	(北側溝)	A-1	13c代	14.2		5.9	5.1	0.4	内25/8/1 灰白 ・N5/0 灰 外断10/8/1 灰白	密	硬 不良	口:4/12 底:3/12	口縁部ヨコナデ	
135	34		古瀬戸	壺	徳利形 or花瓶	頸部 ~ 体部	31 水路		A-1	14c代 古瀬戸 前期				(6.6)	1.1	内外25/7/1 灰白 断5/6/2 灰オリーブ	密	硬	1/12 以下	回転ナデ	
136	34		須恵器	大甕		口縁	31 水路		A-1	13~ 14c代	26.7			(6.0)	1.0	内N6/0 灰 外N5/0 灰 断5/7/1 灰白	密	硬	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タタキ	
137	34		瓦質 土器	羽釜		口縁 ~ 底部	(31 水路)	(北側溝)	A-1	13~ 14c代	31.7	36.5		(7.4)	0.5	内10/6/1 灰 外N6/0 灰 外5/8/1 灰白	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ、内面ハケ	
138	34		瓦質 土器	羽釜		口縁 ~ 底部	165 ・166 溝	(西半)	B-1	14c代	39.0	46.0		(7.2)	0.6	内10/5/1 灰 外75/8/1 灰 断25/8/1 灰白	密	硬	1/12 以下	口縁部ヨコナデ、内面ハケ	
139	34		土師器	皿		ての字	口縁 ~ 底部	18 土坑	(西半)	B-1	11c代	9.6			(0.7)	0.3	内断10/8/2 灰白 外10/8/3 浅黄橙	密	やや 軟	口:1/2	口縁部ヨコナデ

第3節 (中世) 土器類

No.	図 No.	写真	遺物	器種	系統 形式	(部位)	遺構名	層位・ 位置等	調査 区	時期	口径	最大 径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
140	34		黒色 土器	椀	両黒 B類	全形	18 土坑	(西半)	B-1	11c代	15.5		5.5	4.8	0.4	内外断N30 暗灰	密	やや 軟	口:3/12 底:3/12	両黒、黒色土器B類 内外面マメツ 内外面ミガキ	
141	34		黒色 土器	椀	両黒 B類	口縁 ~底部	18 土坑	(西半)	B-1	11c代	15.5			(4.8)	0.4	内外断 10/3/1 オリーブ黒	密	やや 軟	口:4/12	両黒、黒色土器B類 内外面マメツ 内外面ミガキ 見込みミガキ	
142	34		黒色 土器	椀	両黒 B類	口縁~ 底部	18 土坑	(西半)	B-1	11c代	15.4				0.4	内外断 10/3/1 オリーブ黒	密	やや 軟	口:3/12	両黒、黒色土器B類 内外面マメツ 内外面ミガキ	
143	34		黒色 土器	椀	両黒 B類	口縁 ~底部	18 土坑	(西半)	B-1	11c代	16.1		5.2	5.2	0.4	内断 10/3/1 オリーブ黒 外N30 暗灰	密	硬	口:4/12 底:5/12	両黒、黒色土器B類 口縁部ヨコナデ 内外面ミガキ	
144	34		黒色 土器	椀	両黒 B類	口縁 ~体部	39P	(西半)	B-1	11c代	14.0			(4.6)	0.4	内外N30 暗灰 断N40 灰	密	硬	口:2/12	両黒、黒色土器B類 口縁部ヨコナデ 内外面ミガキ	
145	34		瓦	平瓦	梶原 瓦窯産		38P		B-1	8 c代	長 (15.5)	幅 (13.2)			(1.8)	内75/8/4 浅黄橙 白10/8/3 浅黄橙 断5/8/6 橙	やや 密	硬		凸面布目痕 凸面格子タタキ 梶原瓦窯産	
146	34		土師 器	皿		口縁 ~底部	(第5層 直上面)	38	B-1	14~ 15c代	9.8			(2.2)	0.5	内外 10/8/3 にふい黄橙 断10/8/4 にふい黄橙	密	硬	口:6/12	オサエ整形	
147	34		須恵 器	杯		底部	機械掘削	(西半) 鉄塔下部	B-1	10~ 11c代			8.0	(1.6)	0.6	内外断5/7/1 灰白	密	硬	底:3/12	底部糸切痕	
148	34		黒色 土器	椀	両黒 B類	口縁 ~体部	機械掘削	(西半) 鉄塔下部	B-1	11c代	15.5				(4.7)	0.4	内外断N30 暗灰	密	硬	口:1/12	両黒、黒色土器B類 口縁部ヨコナデ 内外面ミガキ
149	34		青磁	碗		口縁	(第5層)	(西半)	B-1	13c代				(2.3)	0.4	内外5/7/2 灰白 断5/8/1 灰白	密	硬	口:1/12 以下	内外面施釉	
150	34		土師 器	羽釜	摂津式 土釜	口縁 ~鈎部	(北側溝)	(西半)	B-1	11c代	17.5	21.4		(3.7)	0.8	内10/8/2 灰黄褐 外10/8/3 浅黄橙 断10/8/1 灰白	粗	硬	口:2/12	外面下部架付着	
151	34		土製 品	土鍾		全形	(第5層 上半)		B-1	中世か		0.9			3.4	0.1	内75/8/3 浅黄橙 外断75/8/4 浅黄橙	密	硬	11/12	106 と胎土同じ 1.9g
152	36		瓦器	椀		口縁 ~体部	967 水路		B-2	13c 後半~	13.3			(4.3)	0.3	内外N7/0 灰白 断10/8/1 灰白	密	硬	口:1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ 色抜け	
153	36		白磁	椀		口縁	967 水路		B-2	12~ 13c代	15.4			(2.9)	0.3	内外5/7/1 灰白 断5/8/1 灰白	密	硬	口:1/12 以下	内外面施釉	
154	36		瓦器	椀		底部	631 水路		B-2	13c代			4.8	(1.1)	0.4	内N7/0 灰白 外N5/0 灰 断25/8/1 灰白	密	やや 軟	底:6/12	内外面マメツ	
155	36		土師 器	皿	ての字	口縁 ~底部	630・631 水路		P4	11~ 12c代	8.8				1.2	0.3	内10/8/2 灰白 外10/8/3 浅黄橙 断10/8/1 灰白	密 精良	やや 軟	口:1/12 以下	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
156	36		灰釉 陶器	壺	東海産か	底部	630 水路		P4	9c代			6.6	(4.5)	0.3	内5/6/2 灰オリーブ 外25/7/1 灰白 断25/8/1 灰白	密 精良	硬	底:1/12	内外面回転ナデ 内面灰精	
157	36		土師 器	羽釜		口縁 ~鈎部	633 溝	(630 水路 下部溝)	P4	中世	21.9			(3.2)	0.5	内10/8/3 にふい黄橙 外10/8/4 にふい黄橙 断10/8/1 黄灰	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ	
158	36		須恵 器	鉢		口縁	633 溝	(630 水路 下部溝)	P4	13c代	31.3			(4.3)	0.4	内25/6/1 黄灰 外10/8/2 にふい黄橙 断25/6/1 黄灰	密	硬	口:1/12	回転ナデ	
159	37		土師 器	皿		全形	629 水路		P4	13~ 14c代	7.7		5.0	0.8	0.3	内外断10/8/2 灰白	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ	
160	37		土師 器	皿		口縁 ~底部	629 水路		P4	14c代	11.9			(1.5)	0.4	内10/8/4 浅黄橙 外断10/8/3 浅黄橙	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ	
161	37		瓦器	椀		口縁	629 水路		P4	13c代	13.2			(2.9)	0.3	内外10/5/1 灰 断25/8/2 灰白	密	硬	口:1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
162	37		瓦器	椀		底部	629 水路		P4	13c代			5.8	(1.0)	0.4	内N5/0 灰 外N4/0 灰 断25/8/1 灰白	密	やや 軟	底:3/12	内外面マメツ	
163	37		青磁	碗		口縁	629 水路		P4	13c代	17.6			(3.2)	0.3	内外10/6/2 オリーブ灰 断25/7/1 灰白	密	硬	口:1/12	内外面施釉	
164	37		白磁	碗		口縁	629 水路		P4	13c代	15.4			(4.6)	0.5	内5/7/2 灰白 外断25/7/1 灰白	密	硬	口:1/12 以下	内外面施釉	
165	37		須恵 器	鉢		口縁	629 水路		P4	中世				(2.8)	0.6	内5/6/1 灰 外5/7/1 灰白 ・N6/0 灰 断25/6/2 灰黄	やや 密	硬	口:1/12 以下	ヨコナデ	
166	37		須恵 器	鉢		底部	629 水路		P4	中世			10.4	(5.1)	0.8	内断N8/0 灰白 外N7/0 灰白	やや 密	硬	底:1/12	回転ナデ	
167	37		須恵 器	壺		口縁	(耕作溝群)	(西半)	B-2	中世か	17.4			(4.3)	0.6	内外断5/7/1 灰白	密	やや 軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ	
168	37		土師 器	鉢		口縁 ~体部	(耕作溝群)	(西半)	B-2	13~ 14c代	28.7	29.8		(6.3)	0.7	内断10/8/1 灰白 外10/8/2 灰黄褐	密	やや 軟	口:2/12	ヨコナデ 169 と胎土同一	
169	37		瓦質 土器	羽釜		口縁 ~体部	(耕作溝群)	(西半)	B-2	14c代	23.5	26.0		(10.4)	0.4	内外25/7/1 灰白 断25/5/1 黄灰	密	やや 軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面オサエ、内面ハケ 168 と胎土同一	
170	37		常滑	大甕		口縁	(機械掘削)	(西半)	B-2	15c代	34.1			(4.7)	1.0	内10/8/2 灰赤 外25/8/2 灰赤 断10/8/1 灰白	やや 粗	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ	
171	38		土師 器	皿	ての字	完形	16 溝	(東半)	B-1	11c代	9.6				1.8	0.4	内外25/7/2 灰黄 断10/8/3 にふい黄橙	密	やや 硬	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ
172	38		須恵 器	杯		底部	(第4層)	(東半)	B-1	10~ 11c代			5.6	(1.4)	0.5	内外断N6/0 灰	やや 密	硬	底:4/12	底部糸切痕	
173	38		須恵 器	壺		口縁	(第4・ 第5層)	(東半)	B-1	9~ 10c代		(18.1)		(5.4)	1.0	内外断5/7/1 灰白	やや 密	硬	口:1/12 以下	回転ナデ	
174	38		緑釉 陶器	椀		体部 ~底部	(第4・ 第5層)	(東半: 南側溝)	B-1	9c代			7.2	(1.8)	0.5	内25/8/1 灰白 外断N7/0 灰白	密	硬	底:3/12	回転ナデ 畿内産か	
175	42		土師 器	皿		口縁 ~底部	1296 溝		C-6	13c代	8.3		7.0	0.7	0.3	内75/8/4 浅黄橙 外75/8/4 にふい橙	密	やや 軟	口:4/12	内外面マメツ	
176	42	32	土師 器	皿		全形	1296 溝		C-6	13c代	8.5				1.6	0.3	内75/8/4 にふい橙 外断75/8/6 橙	やや 密	硬	完形	口縁部ヨコナデ
177	42	32	瓦器	椀		全形	1296 溝		C-6	13c代	14.1		6.0	4.7	0.3	内・外N4/0 灰	密	やや 軟	ほぼ完形	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
178	42	32	瓦器	椀		全形	1296 溝		C-6	13c代	14.3		4.8	4.7	0.4	内25/7/1 灰白 外N6/0 灰 断5/8/1 灰白	密	硬	口:11/12 底:12/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ	

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
179	42	32	瓦器	椀		全形	1296溝		C-6	13c代	13.9		5.5	4.7	0.4	内N5.0灰 外S5.1灰 断面S8.1灰白	密	硬	完形	口縁部ヨコナデ 下半オサエ顯著 内面ミガキ、見込みミガキ
180	42		瓦器	椀		完形	1296溝		C-6	13c代	13.9		4.9	4.7	0.3	内N4.0灰 外N5.0灰・N8.0灰白 断面S7.1灰白	密	やや軟	ほぼ完形	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
181	42	32	須惠器	播鉢	東播	口縁 ~底部	1296溝		C-6	13c代	29.2		10.4	9.9	0.6	内外N6.0灰 断面N5.0灰	やや粗	硬	口：1/12 以下 底：6/12	回転ナデ 底部糸切底
182	42	32	瓦器	三足釜		口縁 ~脚部	1296溝		C-6	13c代	16.4	23.9		26.1	0.4	内S4.1灰 外S5.1灰 断面S8.1灰白	密	やや硬	口：7/12 脚：2/3	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
183	42		土師器	羽釜		口縁 ~体部	1296溝		C-6	13c代	25.6	31.6		(20.8)	0.6	内外断7.5R6.6明焼	やや密	硬	口：3+/12	口縁部ヨコナデ 内外面下半煤付着
184	42	32	土師器	羽釜		口縁 ~底部	1296溝		C-6	13c代	27.6	36.8		(23.3)	0.5	内7.5R7.4にふい槽 外7.5R5.3にふい槽 断面S7.6.1褐灰	やや密	硬	口：5/12	口縁部ヨコナデ 外面下半煤付着
185	42		土師器	皿		口縁 ~底部	1297溝		C-8	13c代	9.2		5.2	1.7	0.3	内N6.0灰 外N5.0灰 断面N8.0灰白	密	やや軟	口：3/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
186	42		瓦器	椀		口縁 ~体部	1297溝		C-6	13c代	14.4				0.3	内N4.0灰 外10.5.1灰 断面S8.1灰白	密	やや軟	口：4/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
187	42		瓦器	椀		口縁 ~体部	1297溝		C-8	13c代	15.6				0.3	内N4.0灰 外N5.0灰 断面10.6.1灰白	密	やや軟	口：2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
188	42		土師器	羽釜		口縁 ~鋳部	1297溝		C-6	13c代	32.0			(5.6)	0.5	内7.5R7.6槽 外7.5R6.6槽 断面10.6.4にふい槽	普通	硬	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面煤付着
189	42		土師器	皿		口縁	972溝		C-5	14c代				(1.1)	0.4	内外断 7.5R7.4にふい槽	密	軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ
190	42		土師器	皿	(燈明皿)	全形	1553溝		P3	13c代	8.5	4.9	1.4	0.4	内10.6.1褐灰 外10.6.1褐灰 断面7.5R7.2明焼	密	硬	口：9/12	口縁部ヨコナデ 内外面煤付着 → 燈明皿として使用か	
191	42		瓦器	椀		完形	1553溝		P3	13c後半	15.0	5.0	5.1	0.3	内外N4.0灰 断面S8.1灰白	密	硬	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ	
192	42		瓦器	椀		口縁 ~体部	1612溝		P3	13c代	12.5			(3.3)	0.4	内外断S8.1灰白 外S7.1灰白	密	軟	口：2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
193	42		瓦器	椀		全形	1613溝		P3	13c代	14.2	5.0	4.8	0.3	内S7.1灰白 外N4.0灰 断面S8.1灰白	密	やや軟	口：6/12 底：12/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
194	42		須惠器	鉢		底部	1614溝		P3	13c代か		9.0	(5.1)	1.0	内外断N6.0灰 外N7.0灰白	密	硬	底：2/12	回転ナデ	
195	43		土師器	皿		口縁 ~底部	1797P	掘立39	P3	13c代	8.3	7.0	1.3	0.3	内10.6.2灰白 外10.6.3浅黄槽 断面10.6.4にふい槽	密	やや軟	口：9/12	内外面マメツ・剥離 口縁部ヨコナデ	
196	43		土師器	皿		全形	1797P	掘立39	P3	13c代	6.7	1.5	0.3	0.3	内外7.5R8.3浅黄槽 断面10.6.3にふい槽	密精良	やや硬	口：9/12	口縁部ヨコナデ	
197	43		土師器	皿		口縁 ~底部	1792P	(掘立39 周辺)	P3	14c前半	8.4	1.6	0.3	0.3	内10.6.2灰白 外7.5R7.4にふい槽 断面10.6.1褐灰	やや密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ	
198	43		瓦器	椀		底部	1721P	柱列12	P3	13c代		4.8	(0.7)	0.2	内外N4.0灰 断面N8.0灰白	密	やや軟	底：1/12	内外面マメツ	
199	44	32	土師器	皿		全形	1551井戸	中層	P3	13c代	8.4	1.6	0.5	0.5	内外10.6.3浅黄槽 断面10.6.2にふい槽	密	やや硬	口：11/12 全体：95%	口縁部ヨコナデ	
200	44	32	土師器	皿		口縁 ~底部	1551井戸	中層	P3	13c代	8.6	1.4	0.4	0.4	内7.5R8.3浅黄槽 外7.5R8.4浅黄槽 断面10.6.2にふい槽	密	硬	口：2/12 全体：5/12	口縁部ヨコナデ	
201	44	32	土師器	皿		完形	1551井戸	中層	P3	13c代	13.8	6.8	2.9	0.4	0.4	内2.57/2灰黄 外2.58/2灰白 断面N4.0灰	密	硬	口：11/12 ほぼ完形	口縁部ヨコナデ
202	44	32	瓦器	椀		完形	1551井戸	中層	P3	13c代	14.3	3.9	5.1	0.4	0.4	内外N8.0暗灰 断面N8.0灰白	密	硬	完形	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
203	44	32	瓦器	椀		完形	1551井戸	中層	P3	13c代	14.5	5.2	5.0	0.3	0.3	内N2.0黒 外N3.0暗灰 断面S8.1灰白	密	硬	口：11/12 ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
204	44	32	瓦器	椀		完形	1551井戸	中層	P3	13c代	13.8	5.1	4.6	0.4	0.4	内N4.0灰 外N3.0暗灰	密	硬	完形	口縁部ヨコナデ 体部下オサエ顯著 内面ミガキ、見込みミガキ
205	44	32	瓦器	椀		全形	1551井戸	中層	P3	13c代	15.0	5.0	5.2	0.5	0.5	内N3.0暗灰 外N4.0灰 断面S8.1灰白	密	硬	口：11/12 底：9/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
206	44	32	瓦器	椀		全形	1551井戸	中層	P3	13c代	14.4	5.3	4.9	0.4	0.4	内N3.0暗灰 外N4.0灰 断面N8.0灰白	密	硬	口：11/12 底：11/12	口縁部ヨコナデ 体部下オサエ顯著 内面ミガキ、見込みミガキ
207	45		土師器	皿		完形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	9.0	9.2	4.4	1.5	0.5	内10.6.2にふい槽 外10.6.1灰白	やや密	やや軟	完形	口縁部ヨコナデ
208	45		土師器	皿		全形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	9.1	9.3	5.3	1.4	0.4	内S7.3にふい槽 外10.6.1褐灰 断面S8.2灰白	密	硬	口：12/12 全体：95%	口縁部ヨコナデ
209	45		土師器	皿		口縁 ~底部	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	9.3	9.5	1.4	0.4	0.4	内外 7.5R7.3にふい槽 断面10.6.2にふい槽	やや密	硬	口：9/12 全体：6/12	口縁部ヨコナデ
210	45		土師器	皿		全形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	8.6	8.9	5.0	1.2	0.4	内10.6.2灰黄槽 外2.5.1黄灰 断面10.6.2にふい槽	密	硬	口：5/12 全体：6/12	口縁部ヨコナデ 内面煤付着 → 燈明皿として使用か
211	45	32	土師器	皿		全形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	13.7	6.8	3.0	0.5	0.5	内外10.6.2灰白 断面N4.0灰	密	やや硬	口：9/12	口縁部ヨコナデ
212	45		土師器	皿		口縁 ~底部	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	13.0	13.3	9.0	2.2	0.5	内10.6.4.1褐灰 外2.5.6.2灰黄 断面2.5.5.1黄灰	密	硬	口：5/12 全体：35%	口縁部ヨコナデ 内面煤付着 → 燈明皿として使用か
213	45		土師器	皿		口縁 ~底部	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	15.0	15.2	6.8	2.3	0.5	内外断 10.6.3にふい槽	密	硬	口：3/12 全体：3/12	口縁部ヨコナデ 口縁部煤付着
214	45	32	瓦器	小皿		完形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	8.6	8.8	1.7	0.4	0.4	内N6.0灰 外N5.0灰	密精良	硬	完形	口縁部ヨコナデ 見込みミガキ
215	45		瓦器	小皿		全形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	9.3	9.5	1.6	0.3	0.3	内外断10.6.1灰白	密	硬	口：6/12 全体：50%	口縁部ヨコナデ 見込みミガキ
216	45	32	瓦器	小皿		完形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	8.9	9.0	1.9	0.4	0.4	内N7.0灰白 外N5.0灰 断面N8.0灰白	密	やや軟	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 見込みミガキ
217	45	32	瓦器	小皿		完形	1551井戸	上層 (南半)	P3	13c代	8.7	8.8	1.7	0.3	0.3	内N5.0灰 外S5.1青灰	密	硬	完形	口縁部ヨコナデ 見込みミガキ
218	45		瓦器	椀		全形	1551井戸	上層 (北半)	P3	13c代	13.6	5.1	4.9	0.4	0.4	内外N5.0灰 断面2.5.8.1灰白	密	硬	口：7/12 底：12/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ



第3節 (中世) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
219	45		瓦器	椀		口縁 ~底部	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	13.5		4.8	4.6	0.4	内外N60灰 断N80灰白	密	やや硬	口:11/12 底:11/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
220	45		瓦器	椀		全形	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	13.8		5.1	4.9	0.4	内N40灰 外N50灰 断N80灰白	密	やや硬	口:8/12 底:10/12	口縁部ヨコナデ、体部下 オウ土着 内面ミガキ、見込みミガキ
221	45		瓦器	椀		全形	1551 井戸	上層 (南半)	P3	13c代	12.8		3.9	(4.0)	0.3	内外N40灰 断N80灰白	密	硬	口:12/12 底:4/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
222	45	32	瓦器	椀	把手付 小型椀	口縁 ~底部	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	9.5		7.8	4.8	0.5	内N50灰 外N40灰 断5/6/1灰	密	やや軟	口:6/12	ヨコナデ 把手付
223	45		瓦器	鉢		体部 ~底部	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代		(17.7)	13.3	(4.3)	0.8	内25/6/1黄灰 外N40灰 断25/6/1灰白	密	やや軟	底:5/12	ヨコナデ
224	45		瓦器	鉢		口縁 ~底部	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	17.2		10.7	(4.6)	0.5	内外N40灰 断N80灰白	密	やや軟	口:5/12 底:3/12	回転ナデ
225	45		瓦器	鍋	中型鍋か	口縁	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	28.0			(4.5)	0.5	内25/7/1灰白 外N40灰 断25/6/1黄灰	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ、内面ハケ 外面わずかに煤付着
226	45		瓦器	三足釜		ほぼ 全形	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	18.6	23.0		(10.4)	0.4	内25/6/1黄灰 外25/5/1黄灰 断25/7/2灰	やや粗	やや軟	口:3/12	内外面マメツ、外面煤付着 脚部は別個体で還元焼成
227	45		瓦器	鉢		口縁	1551 井戸	最下層 (南半)	P3	13c代	50.6			(7.0)	1.3	内外N80暗灰 断25/7/1灰白	やや密	硬	口:1/12	ヨコナデ 外面煤着に付着
228	45		土師器	羽釜		口縁 ~鋳部	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	30.2			(7.3)	0.6	内10/R5/2灰黄褐 外75/R3/3にふい黄橙 断10/R7/1灰白	粗	やや軟	口:1/2	内外面マメツ 外面煤着に付着
229	45		土師器	羽釜		口縁 ~鋳部	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	34.8			(4.5)	0.7	内10/R6/2灰黄褐 外75/R3/3にふい黄橙 断10/R5/1褐灰	やや密	硬	口:1/12	ヨコナデ、内面ハケ 鋳下半煤付着
230	45		須恵器	甕		口縁	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	20.1			(4.8)	1.0	内N40灰 外N50灰 断N60灰	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面タタキ
231	45		須恵器	片口鉢	東播系	全形	1551 井戸	上層+最 下層 (北半+ 南半)	P3	13c代	26.2		9.1	10.0	0.7	内N60灰 外N50灰 断N70灰白	やや粗	硬	口:3/12 底:12/12	回転ナデ 底部糸切痕
232	45	32	山茶碗	碗	南部系	全形	1551 井戸	上層 (北半)	P3	13c代	15.4		7.0	5.6	0.7	内外断25/7/1灰白	やや粗	やや硬	口:2/12 底:12/12	回転ナデ 底部「尚」墨書あり
233	46		土師器	皿		口縁 ~底部	1552 井戸		P3	13c代	8.2		5.3	0.9	0.3	内外断 5/R7/4にふい黄	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ
234	46		瓦器	椀		口縁 ~底部	1552 井戸		P3	13c 後半	13.1		6.0	4.2	0.3	内外N80暗灰 断N80灰白	密	硬	口:2/12 底:6/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
235	46		土師器	羽釜		口縁 ~脚部	1617 井戸		P3	13c代	20.5			(4.4)	0.5	内外断5/R7/4にふい黄 外25/7/1灰白	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ
236	48		瓦器	椀		底部	640 溝		D2	13c代			6.3	(1.9)	0.3	内25/4/1黄灰 ・25/7/2灰黄 外25/5/1黄灰 ・25/7/2灰黄 断25/7/2灰黄	密	軟	底:9/12	内外面マメツ 内面ミガキ
237	48		瓦器	椀		口縁 ~底部	641 土坑		D-2	13c代	15.2		6.0	5.3	0.4	内外N60灰 断5/R8/1灰白	密	軟	口:2/12 底:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
238	48		土師器	皿		口縁 ~底部	1917 溝		P2	13c代	9.0			1.1	0.3	内外断 10/R8/3浅黄橙	密精良	やや軟	口:1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
239	48		土師器	羽釜		口縁 ~鋳部	1917 溝		P2	中世				(2.6)	0.8	内外断25/R8/2灰白	やや粗	軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 白色胎土(在地か)
240	48		須恵器	壺		底部	1751 溝		P2	10c			8.0	(2.6)	0.5	内外断N60灰	密	硬	底:1/12	回転ナデ
241	49		土師器	皿		口縁 ~底部	1753 井戸	上層1	P2	13c代	9.0			1.1	0.3	内外25/5/1黄灰 断25/7/2灰黄	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ
242	49		瓦器	椀		底部	1753 井戸	上層1	P2	13 ~14c代			4.0	(2.8)	0.4	内外断10/R8/2灰白	密	やや軟	底:3/12	炭素未吸着
243	49		瓦器	椀		全形	1753 井戸	上層1・2	P2	13c 後半~ 14c	12.6		4.2	4.0	0.2	内N60灰 外N50灰 断N80灰白	密	硬	口:5/12 底:9/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ、見込みミガキ
244	49		土師器	皿		口縁	1753 井戸	上層2	P2	13 ~14c代	11.6			(1.9)	0.6	内75/R8/4浅黄橙 外断 10/R7/4にふい黄橙	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ
245	49		土師器	皿		全形	1753 井戸	上層2	P2	13c代	12.8		2.5	0.4	0.4	内外25/7/2灰黄 断10/R7/3にふい黄橙	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
246	49		瓦器	小皿		全形	1753 井戸	上層2	P2	13 ~14c代	9.7		7.0	1.5	0.3	内外N40灰 断N80灰白	密	硬	口:4/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
247	49		瓦器	椀		口縁	1753 井戸	上層2	P2	13c代	14.1			(3.7)	0.3	内外N40灰 断25/7/2灰黄	密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
248	49		須恵器	碗		底部	1753 井戸	上層2	P2	中世か			5.6	(2.0)	0.4	内外断5/6/1灰	密	硬	底:3/12	底部糸切痕
249	49	32	瓦質土器	鍋		口縁 ~体部	1753 井戸	上層2	P2	13 ~14c代	22.7			(10.8)	0.5	内外N15/0黒 断25/7/1灰白	密	硬	口:9/12	口縁部ヨコナデ 内面ヨコハケ 外面炭化物・煤多量に付着
250	55		土師器	皿		口縁 ~底部	193 大型土坑		C-3	14c代	6.9			1.5	0.4	内外10/R8/2灰白 断10/R7/4にふい黄橙	密	硬	口:5/12	口縁部ヨコナデ
251	55		土師器	皿		全形	193 大型土坑		C-3	14c代	6.9		3.4	1.8	0.3	内外断 10/R7/3にふい黄橙 外25/7/2灰黄	密	硬	口:9/12	口縁部ヨコナデ
252	55		土師器	皿		口縁	193 大型土坑		C-3	14c代	9.6			(1.2)	0.4	内10/R8/2灰白 外10/R7/3にふい黄橙 断10/R8/3にふい黄橙	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
253	55		須恵器	鉢		口縁	214 大型土坑		C-2	13 ~14c代				(3.8)	0.7	内外断N70灰白 外N60灰	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ
254	55		瓦器	小皿		口縁	215 大型土坑		C-2	13 ~14c代	8.6			(1.3)	0.3	内外N40灰 断25/7/1灰白	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
255	55		瓦器	椀		底部	220大型土坑		C-2	13 ~14c代			5.9	(1.8)	0.3	内外25/8/1灰白 断25/7/1灰白	密	軟	底:1/12	内外面マメツ 炭素未吸着、白い
256	55		古瀬戸	平椀		底部	220 大型土坑		C-2	14c代			6.3	(2.2)	0.7	内5/7/2灰白(軸) 外断25/7/2灰黄	密	硬	底:6/12	回転ナデ 内面施釉
257	55		瓦器	(把手付鉢)		把手	264 大型土坑		C-4	13c代	(5.3) 長辺	(4.5) 短辺			0.9	内外N80暗灰 断75/R1灰白	密	硬	(把手)	把手のみ
258	55		土師器	皿		口縁	1519 大型土坑		C-8	13 ~14c代	10.9			(1.8)	0.4	内外10/R7/2にふい黄橙 外75/R3/3にふい黄橙 断10/R8/2灰白	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ

遺物一覧表

No.	図 No.	写真	遺物	器種	系統 形式	(部位)	遺構名	層位・ 位置等	調査 区	時期	口径	最大 径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
259	55		瓦器	椀		口縁	1519 大型土坑		C-8	13c 後半～ 14c	10.9			(2.9)	0.3	内N60灰 外N50灰 断面75/71灰白	密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
260	55		瓦器	椀		底部	1519 大型土坑		C-8	13c 後半		4.9	(1.2)	0.4	内N60灰 外N50灰 断面N80灰白	密	硬	底：2/12	見込みミガキ	
261	55		須恵 器	播鉢	東播	底部	1519 大型土坑		C-8	13～ 14c代		7.1	(5.1)	0.7	内外断N60灰	やや 密	硬	底：2/12	回転ナデ	
262	55		瓦質 土器	羽釜		口縁 ～体部	1519 大型土坑		C-8	14c代	25.0	29.6		(12.2)	0.6	内25/72灰黄 外N60灰 断面25/61灰白	密	硬	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面下半煤付着
263	55		古 瀬戸	碗		底部	(機械掘削)		C-5	13c代 古瀬戸 前期			(6.2)	(1.6)	0.5	内外5/7/2灰白 断面5/8/1灰白	密	硬	体：1/12	回転ナデ 内面見込み文様
264	55		黒色 土器	椀	内黒 A類	底部	(第5・6層)		D-2 (坂路)	9～ 10c代		9.0	(3.6)	0.2	内10/R1/71黒 外断 10/R7/3にふい黄橙	密	硬	底：1/12	内黒、黒色土器A類 内面ミガキ	
265	55		古 瀬戸	壺	瓶子	体部	(東側溝)		P-3	13～ 14c代				(7.0)	0.8	内断25/8/1灰白 外5/6/2灰オリーブ	やや 粗	硬	体：1/12 以下	回転ナデ 施軸
266	55		土製 品	土錘			(機械掘削)		P-3	中世				(3.6)	1.0	内75/R5/4にふい褐 外断75/R7/6橙	密	硬	全体25%	オサエ整形
267	55		土師 器	皿	ての字	口縁	(第5・6層)	(耕作段 層部)	P-2	10～ 11c代				(1.8)	0.3	内外断 10/R7/3にふい黄橙	密 精良	硬	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ
268	55		瓦器	釜		口縁	第4a層		C-4	13～ 14c代				(2.8)	0.5	内外N30暗灰 断面5/8/1灰白	密	硬	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ
269	55		瓦質 土器	鉢		口縁	第4a層		C-4	中世	23.6			(3.7)	0.7	内外断25/8/1灰白	密	やや 硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ
270	55		瓦器	小皿		全形	第4a層		P-3	13～ 14c代	9.7	6.9	1.6	0.3	内N40灰 外10/4/1灰 断面5/6/2灰オリーブ	密	やや 軟	口：5/12	口縁部ヨコナデ	
271	55		瓦質 土器	鉢		口縁	第4a層		P-3	14c代	33.2			(6.4)	1.0	内N50灰 外75/3/1オリーブ黒 断面75/5/1灰	密	硬	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ
272	55		瓦器	椀		底部	第4a層		P-2	13c 後半～ 14c		2.8	(1.1)	0.3	内外N30暗灰 断面25/8/3淡黄	やや 密	やや 軟	底：12/12	内外面マメツ	
273	55		青磁	碗		口縁	第4a層		P-2	13c代				(4.3)	0.5	内外25/7/1 明オリーブ灰 断面N80灰白	密	硬	口：1/12 以下	施軸
274	55		白磁	碗		口縁	第4a層		P-2	13c代				(2.3)	0.3	内外断N80	密	硬	口：1/12 以下	施軸
275	60		土師 器	皿		口縁	766溝		E-2	13c代	8.9	(6.8)	(1.5)	0.4	内断 10/R7/3にふい黄橙 外10/R8/3浅黄橙	密	硬	口：2/12	口縁部ヨコナデ	
276	60		瓦器	椀		全形	766溝		E-2	13～ 14c代	15.9	4.6	5.6	0.3	内5/8/1灰白 外N50灰 断面25/7/2灰黄	密	やや 硬 やや 不良	口：6/12 底：5/12	口縁部ヨコナデ 下半オサエ顕著 内面ミガキ 炭素吸着不十分	
277	60		瓦器	椀		口縁 ～底部	766溝		E-2	13～ 14c代	13.5	4.5	4.3	0.3	内外断10/5/1灰	やや 密	軟	口：9/12 底：4/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 下半オサエ顕著 内面ミガキ	
278	60		土師 器	皿		口縁	766溝		E-2	13～ 14c代	8.0			(1.4)	0.4	内N30暗灰 外N40灰 断面N80灰白	密	やや 軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ
279	60		施軸 陶器	椀		底部	766溝		E-2	13～ 14c代		4.8	(1.5)	0.8	内75/6/3オリーブ黄 外断5/8/1灰白	密	硬	底：12/12	施軸 削り出し高台	
280	60		土師 器	羽釜		口縁 ～鈎部	766溝		E-2	13～ 14c代	23.2	26.6		(6.6)	0.4	内断 10/R7/3にふい黄橙 外10/R5/3にふい黄褐	やや 密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ 外面煤付着
281	60		土師 器	羽釜		口縁 ～鈎部	766溝		E-2	13～ 14c代	26.4	34.0		(6.4)	0.6	内10/R8/2灰白 外10/R8/3浅黄橙 断面10/2/1黒	やや 密	硬	口：2/12	口縁部ヨコナデ
282	60		瓦器	三足釜		口縁 ～脚部	766溝		E-2	13c代	7.9	21.9	(12.8)	0.4	内外10/4/1灰 断面N80灰白	密	軟	口：2/12	口縁部ヨコナデ	
283	60		土師 器	皿		口縁 ～底部	767溝		E-2	13～ 14c代	12.3	8.8	1.9	0.4	内75/R8/4浅黄橙 外断75/R8/3浅黄橙	密 精良	やや 軟	口：2/12	口縁部ヨコナデ	
284	60		瓦器	椀		口縁 ～底部	1999溝		P-14	13c代	12.9	5.0	4.5	0.3	内外N40灰 断面N80灰白	密	軟	口：1/12 底：2/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ	
285	60		瓦器	椀		口縁	水田画d		P-14	13～ 14c代	13.5			(3.1)	0.4	内外N40灰 断面N80灰白	密	やや 軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ
286	61		土師 器	皿		口縁 ～底部	9 大型土坑		E-1	13～ 14c代	6.7	7.3	1.0	0.4	内10/R7/2にふい黄橙 外断10/R8/2灰白	密	やや 軟	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ	
287	61		土師 器	皿		口縁 ～底部	1981 大型土坑		P-14	13～ 14c代	10.8		(2.0)	0.3	内外25/8/2灰白 断面25/7/3浅黄	密 精良	硬	口：4/12	口縁部ヨコナデ	
288	61		瓦器	椀		全形	1981 大型土坑		P-14	14c代	12.5	4.2	3.9	0.3	内N40灰 外N30暗灰 断面5/6/2灰オリーブ	密	硬 やや 不良	口：7/12 全体70%	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ 無高台	
289	61		土師 器	皿		口縁 ～底部	1983 大型土坑		P-14	13～ 14c代	10.2			(2.7)	0.3	内10/R8/3浅黄橙 外10/R8/2灰白 断面10/R7/1灰白	密 精良	硬	口：2/12	口縁部ヨコナデ
290	61		土師 器	皿		口縁 ～底部	1984 大型土坑		P-14	13～ 14c代	7.0	(5.9)	(1.8)	0.3	内外 10/R7/2にふい黄橙 断面10/R7/1灰白	やや 密	やや 軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ	
291	63		土師 器	皿		口縁 ～底部	1990溝		P-14	13～ 14c代	7.0			(1.1)	0.2	内外断 10/R8/4浅黄橙	密 精良	やや 軟	口：2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
292	63		土師 器	皿		口縁 ～底部	(耕作溝群)	第4a層 相当 下段東西 (最南端)	P-14	13～ 14c代	7.3	6.3	1.2	0.3	内断 10/R7/3にふい黄橙 外10/R6/2灰黄褐	密	やや 軟	口：2/12	口縁部ヨコナデ	
293	63		瓦質 土器	羽釜		口縁 ～鈎部	(耕作溝群)	第4a層 相当 下段東西 (最南端)	P-14	14c代	14.4	18.8		(4.2)	0.5	内外N30暗灰 断面N50灰	密	やや 軟	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ
294	63		瓦	軒丸瓦		瓦当	第2・ 第3層	(西側 下段)	E-2	10～ 11c代				(1.6)	0.3	内外25/7/1灰白 断面10/R8/2灰白	密	硬		大和南部系 薬師寺・興福寺に同紋瓦あり
295	63		土師 器	皿		全形	第4a層	(南西 下段)	P-14	13～ 14c代	6.6			1.1	0.3	内10/R7/3にふい黄橙 外断10/R8/2灰白	密	やや 軟	口：3/12 全体40%	口縁部ヨコナデ
296	63		土師 器	皿		口縁 ～底部	第4a層	(南西 下段)	P-14	13～ 14c代	8.4			1.1	0.3	内10/R7/2にふい黄橙 外断 10/R7/3にふい黄橙	密 精良	やや 軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ

第4節(古代) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
297	63		土師器	皿		口縁	第4a層	(南西下段)	P14	13~14c代	9.0			(1.6)	0.3	内外断10R7/3にふい黄橙	密精良	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
298	63		土師器	皿		口縁~底部	第4a層	(南西下段)	P14	13~14c代	9.4	7.0	1.2	0.3	0.3	内外断7.5R8/3浅黄橙	密	やや硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ
299	63		瓦器	椀		口縁~底部	第4a層	(南西下段)	P14	14c代	11.9		3.4	3.7	0.2	内N5.0灰外N4.0灰断7.5R1/1灰白	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ内面ミガキ無高台
300	63		陶器	壺	古瀬戸カ	底部	第4a層	(南西下段)	P14	14c代			7.0	(2.2)	0.5	内断2.5R/2灰白外10R7/4にふい黄橙	密	やや硬	底:3/12	施釉
301	63		土師器	羽釜		口縁~鋳部	第4a層	(南西下段)	P14	13~14c代	24.1			(3.1)	0.5	内7.5R6/3にふい黄橙外7.5R7/4にふい黄橙	やや密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ
302	63		瓦質土器	羽釜		口縁~鋳部	第4a層	(南西下段)	P14	13~14c代	21.0	24.6		(3.4)	0.7	内断2.5R/2灰白外N4.0灰	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ
303	63		瓦器	椀		体部	763溝		E-2	13~14c代				(2.9)	0.3	内10.5/1灰外N5.0灰断7.5R1/1灰白	密	やや軟	体:1/12以下	内面ミガキ
304	63		瓦器	椀		全形	1964溝		P14	13~14c代	14.1		4.6	5.1	0.3	内外10R8/1灰白断10R7/1灰白	密	やや軟	口:10/12底:11/12	内外面マメツ口縁部ヨコナデ内面ミガキ灰染灰着不十分
305	63		須惠器	片口鉢	東播系	口縁	(第5層)		P14	13~14c代	30.6			(5.3)	0.6	内外断N7.0灰白	密	硬	口:1/12以下	回転ナデ
306	63		備前	播鉢		口縁	(第5層)		P14	中世	34.5			(4.2)	1.2	内N5.0灰外2.5R/1黄灰断5.5R1灰	やや密	硬	口:1/12以下	内外面ナデ内面見込み

第4章 第4節(古代:土器類)

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
307	65		須惠器	杯蓋		口縁	1499P	柱列9	P6	8c前半				(1.1)	0.4	内外N6.0灰断5R4/1暗赤灰	密	硬	細片	端部細片降灰あり
308	65		土師器	杯A		口縁	352溝		P6	平城II~III	20.1			(2.2)	0.4	内外断5R6/6橙	密	硬	口:1/12以下	口縁部ヨコナデ内面暗文、搬入品か
309	65		須惠器	杯B		底部	352溝		P6	平城II~III			10.1	(1.5)	0.5	内外断N7.0灰白	密	硬	底:2/12	回転ナデ
310	65		土師器	甕	長胴甕	頸部	357溝		B-2	8c代				(5.2)	0.6	内断7.5R7/6橙外7.5R7/4にふい黄橙	密	やや軟	頸:1/12	口縁部ヨコナデ外面タテハケ
311	66		土師器	鉢		口縁	976土坑		B-2	8c代	30以上			(3.6)	0.6	内外断7.5R7/6橙	密	やや軟	口:1/12以下	内外面マメツ
312	66		須惠器	壺		肩部	976土坑		B-2	8c前半か				(8.1)	0.7	内断2.5R/1灰白外2.5R/1黄灰	密	硬	肩:1/12	外:降灰、自然釉
313	67		土師器	杯C		口縁~底部	957溝	地点E	B-2	平城II~III	12.5		8.6	(3.5)	0.6	内外断7.5R6/6橙外7.5R7/6橙	やや密	やや軟	口:3/12	内外面マメツ口縁部ヨコナデ重量感あり
314	67		土師器	杯C		口縁~底部	957溝	地点D	B-2	平城II~III	13.6	14.0	12.4	3.8	0.7	内外断7.5R7/6橙断7.5R6/6浅黄橙	やや粗	普通	口:2/12	口縁部ヨコナデ重量感あり
315	67		土師器	杯A		体部~底部	957溝	地点C	B-2	平城III		(15.8)	11.6	(3.5)	0.4	内10R8/4浅黄橙外7.5R7/6橙断10R8/3浅黄橙	密	やや軟	口:1/12全体:1/12	口縁部ヨコナデ
316	67		土師器	杯A		口縁~底部	957溝	地点C	B-2	平城II~III	19.7			3.9	0.5	内10R7/4にふい黄橙外10R8/3浅黄橙・5R7/6橙断10R7/4にふい黄橙・10R8/3浅黄橙・5R7/6橙	密精良	やや硬	口:3/12全体30%	内外面マメツ口縁部ヨコナデ内面暗文
317	67		土師器	皿A		口縁~底部	957溝	地点B	B-2	平城II~III	19.1	19.3	16.4	(2.9)	0.4	内外断7.5R6/6橙断7.5R7/6橙	やや密	普通	口:1/12	口縁部ヨコナデ
318	67		土師器	皿A		全形	957溝	地点B	B-2	平城II~III	19.8			3.5	0.6	内7.5R7/4にふい黄橙外7.5R7/6橙断10R7/2にふい黄橙	密	硬	口:5/12全体50%	内外面マメツ口縁部ヨコナデ外面黒斑あり
319	67		須惠器	杯A		口縁~底部	957溝	地点E	B-2	平城II~III	12.8			3.8	0.5	内断2.5R/2灰白外2.5R/1灰白・2.5R/1黄灰	密	軟	口:3/12全体20%	内外面マメツ回転ナデ瓦質知味の焼成
320	67	34	須惠器	杯A		完形	957溝	地点B	B-2	平城III	14.4			4.5	0.4	内7.5R/1灰外7.5R7/1灰白	密	やや硬	ほぼ完形全体98%	回転ナデ
321	67		須惠器	杯A		口縁~底部	957溝	地点D	B-2	平城II~III	14.8			4.2	0.5	内2.5R/2灰黄外2.5R/1灰白断2.5R7/2灰黄・2.5R/1灰白	密	軟	口:2/12	回転ナデ
322	67	34	須惠器	杯B蓋		全形	957溝	地点B	B-2	平城II~III	16.9			2.5	0.5	内外断N7.0灰白断5R7/1灰白	密	硬	口:6/12全体55%	天井部回転ヘラケズリ重ね焼きの痕跡あり
323	67		須惠器	杯B蓋		口縁~天井部	957溝	地点D	B-2	平城III	15.9			2.4	0.6	内外断N7.0灰白外N6.0灰	やや密	硬	口:3/12全体30%	天井部回転ヘラケズリやや重量感あり
324	67		須惠器	杯B		口縁~底部	957溝	E	B-2	平城I~II	15.2		11.6	4.0	0.5	内外断5R7/1灰白	密	やや硬	底:2/12	回転ナデ
325	67		須惠器	杯B		全形	957溝	地点C	B-2	平城II~III	15.6			3.9	0.5	内断5R7/1灰白外5R6/1灰	密	やや硬	底:7/12全体60%	回転ナデ
326	67	34	須惠器	杯B		全形	957溝	地点E	B-2	平城II~III	15.6			3.9	0.5	内断N7.0灰白外N6.0灰	密	普通	口:4/12底:6/12全体40%	回転ナデ
327	67	34	須惠器	杯B		全形	957溝	地点D	B-2	平城III	18.2			6.0	0.6	内外断5R7/1灰白	密	やや軟	底:12/12	回転ナデ
328	67		須惠器	杯	系統不明	全形	957溝	地点D	B-2	平城III	14.2			5.3	0.4	内断7.5R/1灰外7.5R7/1灰白	密	硬	底:6/12	回転ナデ外面底部ヘラケズリ類例乏しい器形シャープなつくり
329	67		須惠器	高杯		杯部	957溝	地点D	B-2	平城II~III	20.0			3.1	0.7	内外断5R6/1灰	密	やや軟	口:6/12	回転ナデ
330	67		須惠器	壺Q		肩部	957溝	地点D	B-2	平城II~III		(20.1)		(6.0)	0.7	内外断N5.0灰断7.5R6/2灰黄	やや密	硬	肩:4/12	回転ナデ
331	67		須惠器	壺Q		肩部	957溝	地点C	B-2	平城II~III	17.3			(6.5)	0.6	内N6.0灰外N4.0灰断N7.0灰白	やや密	硬	肩:3/12	回転ナデ
332	67	34	須惠器	壺Q	東海産か	頸部~底部	957溝	地点B	B-2	平城II~III		22.3	10.8	(14.5)	0.6	内外断2.5R/1黄灰断2.5R7/1灰白	密精良	硬	底:12/12	回転ナデ
333	67		須惠器	壺		底部	957溝	地点B	B-2	平城II~III			13.0	(10.8)	0.8	内N7.0灰白外N6.0灰断10R7/1灰白	密	良	底:2/12	回転ナデ

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
334	67		須恵器	壺		底部	957溝	地点B	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ			122	(4.1)	0.8	内断 25/7/1 灰白 外 N6/0 灰	やや密	やや硬	底: 4/12	回転ナデ 自然釉・降灰あり
335	67		須恵器	壺		底部	957溝	地点B	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ			131	(3.9)	0.8	内断 25/8/1 灰白 外 25/7/1 灰白	粗	硬	底: 5/12	回転ナデ
336	67		須恵器	壺	小型直口壺	口縁	957溝	地点E	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	11.0			(4.7)	0.8	内 N7/0 灰白 外断 N5/0 灰	密	堅緻	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面平行タタキ 内面同心円当て具痕 自然釉・降灰あり
337	67		須恵器	壺		口縁	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	23.2			(4.5)	0.8	内 5/8/1 灰白 外断 N8/0 灰白	やや密	やや軟	口: 2/12	内: 内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
338	67		須恵器	甕		口縁	957溝	地点B	B-2	平城Ⅱ	29.4			(4.4)	0.8	内外 5/6/1 灰 断 25/7/1 灰白	やや密	やや硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ 波状文
339	67		須恵器	鉢	把手付大型鉢	口縁～体部	957溝	地点D・E	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	29.0	36.6		(11.7)	0.5	内外断 75/7/1 灰白	密	やや軟	口: 1/12	口縁部ヨコナデ 外面平行タタキ 内面同心円当て具痕 類別: 長屋王部
340	67		土師器	甕		口縁～体部	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	16.0			(6.6)	0.4	内外断 10/R8/4 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 1/12 頸: 3/12	内外面マメツ
341	67		土師器	甕		口縁～体部	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	19.8	21.0		(8.5)	0.4	内断 10/R8/3 浅黄橙 外 75/R6/4 にふい橙	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面板ナデ
342	68		土師器	甕	長胴甕	口縁	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	27.7			(6.3)	0.6	内外断 10/R8/3 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ、外面ハケ
343	68		土師器	甕	長胴甕	口縁～体部	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	27.8			(8.0)	0.4	内外断 10/R8/4 浅黄橙	やや密	硬	口: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面オサエ
344	68		土師器	甕	長胴甕	口縁	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	29.0			(4.3)	0.6	内外断 75/R7/4 にふい橙	密	硬	口: 1/12	口縁部ハケのちヨコナデ 外面タテハケ内面ヨコハケ
345	68		土師器	甕	長胴甕	口縁～体部	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	29.2	25.4		(12.5)	0.6	内 75/R6/2 灰褐～ 75/R4/1 褐灰 外断 75/R7/4 にふい橙	やや密	良好	口: 1/12 頸: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ヨコハケ
346	68		土師器	甕	長胴甕	口縁～体部	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	28.7			(12.0)	0.6	内断 10/R7/4 にふい黄橙 外 N8/0 暗灰	やや密	やや硬	口: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面板ナデ
347	67		土師器	鉢	(他地域系カ)	口縁～体部	957溝	地点D	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	24.0			(6.8)	0.5	内外 10/R8/3 浅黄橙 断 25/5/1 黄灰	不明	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ 北側・長原遺跡等南河内に 類例あり
348	67		土師器	鍋か		口縁	957溝	地点E	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	26.4			(5.6)	0.4	内 10/R8/2 灰白 外断 10/R8/3 浅黄橙	やや密	硬	口: 2/12	内外面マメツ 外面葉付着
349	68		土師器	移動式籠		口縁～体部	957溝	地点E	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	28.2			(12.2)	0.8	内 10/R6/3 にふい黄橙 外 75/R7/6 橙 断 10/R7/3 にふい黄橙	密	硬	口: 1/12 突: 2/12	外面ハケ、内面ナデ
350	68	34	瓦	丸瓦	小型瓦須恵質		957溝	地点D・E	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	10.8				1.9～2.4	△ N6/0 灰 凹 5/R6/1 青灰 断 N7/0 灰白	やや密	堅緻	全体 40% 程度	凸面雑タタキのちナデ 凹面布目痕あり 胎土チャート: 在地産カ
351	68		瓦	丸瓦	小型瓦		957溝	地点E	B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	長(11.6)	幅(7.2)			1.7	表 N4/0 灰 断 N8/0 灰白	粗	軟	全体 20% 程度	凸面縦方向ナデ 凹面布目
352	69	34	製塩土器		胎土 I	口縁	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	10.0	11.0		(5.1)	0.7	内外断 10/R8/4 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面ナデ
353	69	34	製塩土器		胎土 E	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	13.1	14.6		(6.1)	0.7	内断 10/R3/2 黒褐外 25/R5/6 明赤褐	粗	硬	口: 2/12	内外面マメツ
354	69	34	製塩土器		胎土 E	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	14.0			(5.2)	1.0	内外 25/R4/6 赤褐 断 5/5/1 灰	粗	硬	口: 2/12	内外面ナデ
355	69	34	製塩土器		胎土 E'	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	12.6			(5.9)	0.5	内外 75/R6/6 橙 断 25/R6/2 灰黄	粗	やや硬	体: 3/12	内外面ナデ 外面オサエ顯著
356	69	34	製塩土器		胎土 E'	口縁	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	10.0	12.0		(6.5)	0.9	内外 5/R5/6 明赤褐 断 10/R5/4 にふい黄橙	やや粗	硬	体: 1/12	内外面オサエ顯著
357	69	34	製塩土器		(胎土 E')	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	11.6	12.2		(5.2)	0.7	内断 10/R8/2 灰白 外 10/R7/4 にふい黄橙	やや粗	やや硬	口: 2/12	内外面マメツ
358	69	34	製塩土器		胎土 F	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	11.5			(8.9)	0.6	内断 75/R7/6 橙 外 5/R6/8 橙	やや粗	硬	体: 1/12	外面赤変・硬化部分あり
359	69	34	製塩土器		胎土 F	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	11.8	14.0		(6.7)	1.1	内 75/R8/6 浅黄橙 外 75/R7/6 橙 断 25/R1/1 黄灰	やや粗	やや硬	体: 1/12	内外面ナデ
360	69	34	製塩土器		胎土 F'	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	12.8	14.6		(5.4)	0.9	内外 10/R8/2 灰白 断 5/7/1 灰白	やや密	やや硬	口: 2/12 体: 3/12	内外面ナデ 接合痕顯著
361	69	34	製塩土器		胎土 F'	口縁	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	12.8	15.0		(3.6)	0.9	内 5/R6/8 橙 外 25/R6/4 にふい橙 断 25/R5/2 暗灰黄	やや密	やや硬	口: 1/12	内外面ナデ
362	69	34	製塩土器		胎土 F	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	16.2	17.2		(7.5)	0.7	内外 75/R7/6 橙 断 5/7/1 灰白	やや粗	やや硬	体: 1/12	内外面ナデ
363	69	34	製塩土器		胎土 H	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	11.8	12.9		(5.8)	0.6	内外 75/R8/1 灰白 断 10/R5/1 褐灰	粗	やや軟	口: 1/12	内外面ナデ
364	69	34	製塩土器		胎土 H	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	10.5	13.2		(6.8)	0.7	内外 75/R8/3 浅黄橙 断 10/R4/1 褐灰	粗	やや軟	体: 2/12	内外面ナデ
365	69	34	製塩土器		胎土 G	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	13.6	14.1		(5.2)	0.6	内 10/R6/3 にふい黄橙 外 75/R3/3 にふい黄橙 断 10/R8/2 灰黄褐	やや粗	やや硬	口: 2/12	内外面ナデ
366	69	34	製塩土器		胎土 D	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	11.4			(7.2)	0.6	内 25/R6/1 黄灰 外断 25/R5/1 黄灰	やや密	やや硬	体: 2/12	内外面ナデ
367	69	34	製塩土器		胎土 D	口縁～体部	957溝		B-2	平城Ⅱ～Ⅲ	16.5	18.2		(9.1)	0.6	内断 N6/0 灰 外 25/R6/2 灰黄	やや密	やや硬	口: 1/12 以下	内外面マメツ
368	69		須恵器	鉄鉢		口縁～体部	機械掘削(957溝東側角辺)		B-2	平城Ⅲ	19.2			(5.4)	0.5	内断 5/7/1 灰白 外 5/R6/1 灰	密	硬	口: 2/12	内外面回転ナデ 丁寧なつくり
369	69		瓦器	椀		口縁～体部	960溝		B-2	13c 代	13.2			(3.9)	0.5	内 N3/0 暗灰 外 N4/0 灰 断 N8/0 灰白	密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
370	69		須恵器	壺	東海産カ	口縁～底部	1292土坑		P6	8c 代			9.3	(5.6)	0.7	内断 10/R7/1 灰白 外 25/R6/2 灰黄	密	硬	底: 3/12	回転ナデ 自然釉付着
371	69		須恵器	壺		底部	(北2号攪乱) (落込み)		P6	平安カ			15.2	(4.2)	0.7	内外断 25/7/2 灰黄	密	硬	底: 1/12 以下	回転ナデ
372	69		土師器	杯 A		全形	(第 6 層)		P5	平城Ⅲ	15.8	16.0	10.0	3.6	0.4	内 75/R6/4 にふい橙 外 75/R7/6 橙 断 75/R7/4 にふい橙	密精良	やや軟	口: 1/12 以下	口縁部ヨコナデ 内面暗文
373	69		土師器	皿		口縁～底部	(第 5・6 層)	(南西)	P5	平城Ⅲ	21.7	21.9	17.6	2.7	0.5	内 75/R6/4 にふい橙 外 75/R6/6 橙 断 75/R7/6 橙	密	やや軟	口: 4/12	内外面マメツ・剥離 口縁部ヨコナデ



第4節(古代) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
374	69		土師器	甕	長胴甕	口縁～体部	(第6層)	ポイントあり	P5	8c代	28.0			(16.5)	0.7	内断75R7/4にふい橙 外10R8/4浅黄橙 ・75R6/6橙	密	硬	口:4/12	口縁部/Vケのちヨコナデ 外面ハケ内面版ナデ
375	70		須恵器	杯A		全形	1618溝	(1619土坑以北)	P3	平城II～III	14.4		11.8	5.9	0.5	内N6.0灰 外断57/1灰白	密	硬	口:2/12	回転ナデ 底部へラ記号
376	72		土師器	甕		口縁	1405P	掘立26	C6	7～8c代	24～			(2.6)	0.7	内10R7/6明黄褐 外断10R7/4にふい黄橙	密		口:1/12以下	口縁部ヨコナデ
377	73		土師器	杯A		全形	654井戸	上層	D2	平城III～IV	13.0	13.2		3.5	0.5	内外5R6/6橙 断10R7/4にふい黄橙	密	硬	口:3/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
378	73		土師器	杯A		口縁～底部	654井戸	上層	D2	平城III	17.4			(3.5)	0.5	内外5R7/6橙 断75R6/6橙	密	硬	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 底部ケズリ
379	73		土師器	皿		口縁～底部	654井戸	上層	D2	平城III	19.6	20.0		(2.4)	0.4	内外断5R6/6橙	密	硬	口:1/12以下	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
380	73		土師器	杯A		口縁～底部	654井戸	上層+中層1+中層3	D2	平城II～III	19.2			3.7	0.4	内断75R8/4浅黄橙 外5R7/6橙	密	硬	口:3/12 全体40%	口縁部ヨコナデ 底部ケズリ 内面左上り暗文ミガキ
381	73		須恵器	杯A		口縁～底部	654井戸	中層1	D2	平城III	14.0		10.7	3.4	0.5	内外断N8/0灰白	密	やや硬	口:3/12	回転ナデ
382	73	34	須恵器	杯身A		完形	654井戸	中層3	D2	平城III	13.2			3.5	0.4	内外断25R/1灰白	密	やや軟	完形	回転ナデ 外面塗書「つ」
383	73	34	土師器	甕	小型甕	口縁～体部	654井戸	上層+中層3+下層	D2	8c代	14.8			(7.7)	0.4	内10R4/2灰黄褐 外75R6/3にふい橙 断10R8/2灰白	密	硬	口:11/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ヨコハケ 外面被熱赤変・硬化 焼付着 3ヶ所つまみ片口状になる
384	73		土師器	甕	小型甕	口縁～体部	654井戸	中層1	D2	8c代	15.7			(6.2)	0.6	内75R7/4にふい橙 外75R6/3にふい橙 断10R7/4にふい黄橙	やや密	硬	口:3/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面/Vケ内面版ナデ
385	73		土師器	甕	小型甕	口縁～体部	654井戸	上層	D2	8c代	18.4			(5.3)	0.7	内10R7/3にふい黄橙 外断5R6/6橙	やや粗	硬	頸:15/12	内外面マメツ 外面被熱赤変 口縁部ヨコナデ 内面ヨコハケ
386	73		土師器	甕		口縁	654井戸	中層1	D2	8c代	20.6			(2.6)	0.6	内外10R7/3にふい黄橙 断25R/2灰白	やや密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ
387	73		土師器	甕		体部	654井戸	中層1	D2	8c代		16.4		(5.5)	0.7	内外断5R6/6橙	密	硬	体:3/12	外面タタキ 内面オサエ
388	73		土師器	甕		口縁～体部	654井戸	中層3	D2	8c代	22.4			(12.7)	0.6	内5R7/4にふい橙 外10R7/2にふい黄橙 断10R7/3にふい黄橙	密	硬	口・頸:3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面赤変
389	73		土師器	甕	中大型	口縁～体部	654井戸	上層+中層1	D2	8c代	24.6			(9.5)	0.6	内75R7/6橙 外75R6/6橙 断10R7/4にふい黄橙	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ヨコハケ
390	73		土師器	甕	中大型	口縁～体部	654井戸	上層	D2	8c代	25.7			(8.7)	0.6	内外10R7/4にふい黄橙 断75R6/4にふい橙	密	硬	口・頸:3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ヨコハケ
391	73	34	土師器	鉢	片口鉢	口縁～体部	654井戸	上層+中層1	D2	8c代	27.4			(10.7)	0.5	内外断10R6/4にふい黄橙	やや密	硬	口:7/12 全体45%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ 内面同心円あて具痕 外面焼付着、在地産か
392	73		製塩土器			口縁～体部	654井戸	上層	D2	8c代	13.8	16.0		(5.0)	0.7	内57/2灰白 外75R/1灰白 断107/1灰白	粗	硬	口:1～2/12	ナデ・オサエ整形 接合痕跡
393	73		製塩土器			体部	654井戸	中層3	D2	8c代				(7.0)	0.8	内57/2灰白 外75R/1灰白 断107/1灰白	粗	硬	破:1～2/12	ナデ・オサエ整形 接合痕跡
394	73		製塩土器			口縁～体部	654井戸	上層	D2	8c代				(5.0)	0.6	内54/1灰 外10R7/2にふい黄橙 断N6.0灰	やや軟	硬	破:1～2/12	ナデ・オサエ整形 接合痕跡
395	73		製塩土器			体部	654井戸	中層1	D2	8c代	12.6	14.0		4.2	0.7	内10R7/6明黄褐 外10R7/4にふい黄橙 断25R/1黄灰	普通	硬	口:1～2/12	ナデ・オサエ整形 接合痕跡
396	74		土師器	杯C		口縁～底部	(機械掘削)		P3	平城III～IV	13.4			(1.1)	0.5	内外75R6/6浅黄橙 断10R6/3にふい黄橙	やや密	硬	口:1/12以下	内外面マメツ
397	74		須恵器	蓋		口縁～天井部	(機械掘削)		P3	平城II～III	16.2			(2.8)	0.6	内外断N7/0灰白	密	硬	口:5/12	回転ナデ
398	74		灰釉陶器	壺	東海産小壺	頸部	1617井戸		P3	9c代	6.2			(3.6)	0.5	内外断N8/0灰白	荒削り手	硬	頸:2/12	回転ナデ 自然窯(灰釉)
399	74		緑釉陶器	碗	近江or篠	底部	(機械掘削)		C5	9c		6.2	(1.3)	0.7	内外10R6/2オリーブ灰 断257/2灰黄	やや密	やや軟	体:3/12	内外面マメツ	
400	74		須恵器	杯B		底部	耕作溝群	機械掘削 除去面	D2	9c代			8.3	(2.2)	0.5	内外断N6/0灰	やや粗	硬	底:6/12	回転ナデ
401	74		須恵器	壺		底部	638水路		D2	8c代		13.0	(2.1)	0.6	内外断N6/0灰	精緻	硬	底:3/12	回転ナデ	
402	74		須恵器	甕		口縁	(第5層)		D2	8c代				(5.8)	1.2	内外断N7/0灰白	精緻	硬	口:1/12以下	回転ナデ 外面タタキのちカキメ
403	74		土師器	鉢		口縁～体部	(624大型土坑)		D1	古代か	15.0			(3.8)	0.5	内10R7/4にふい黄橙 外断10R7/2にふい黄橙	密	普通	口:1/12以下	口縁部ヨコナデ
404	74		瓦	平瓦	梶原瓦窯産		640溝	(中世溝)	P2	8c代				(1.7)		凹・凸・断N6.0灰	密	硬		凹面布目痕 凸面繻目 須恵器質、梶原瓦窯産
405	76		須恵器	杯H蓋		口縁～天井部	堅穴54		P14	飛鳥I新	13.4			(2.5)	0.4	内25R/2灰白 外断25R/1灰白	密	軟不良	口:1/12	内外面マメツ
406	76		須恵器	杯H		口縁～体部	(北側溝)		P14	飛鳥I新	12.9	14.9		(3.6)	0.5	内断N7/0灰白 外N6.0灰	密	硬	口:2/12	回転ナデ 底部へラ切未調整
407	76		須恵器	杯身		全形	(堅穴54上面)	ポイントあり	P14	飛鳥I新～II	11.8			4.0	0.4	内断N8/0灰白 外5R6/1灰	密	軟不良	口:6/12 全体75%	回転ナデ 底部へラ切未調整 杯H蓋反転使用か
408	76		須恵器	甕		体部	堅穴54		P14	7c代		31.0		0.8	内N6.0灰 外断N7/0灰白	密	やや軟	体:2/12	内外面マメツ(使用感あり) 外面平行タタキ 内面同心円あて具痕(凹凸深い)	
409	76		土師器	甕		口縁	1994土坑	堅穴54	P14	飛鳥I	22.2	(18.0)		(6.8)	0.5	内外75R5/4にふい黄橙 断75R3/3暗褐	密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面粗いVケ、内面不明 生物付着
410	76	35	土師器	羽釜		口縁～体部	1994土坑	堅穴54	P14	飛鳥I	22.0	27.6		(11.3)	0.4	内外断5R5/8明赤褐	密	硬	口:7/12	口縁部オサエ・ヨコハケ 外面粗いVケ、内面不明 生物付着
411	76		土師器	甕		口縁	堅穴54		P14	7c代	16.6			(3.3)	0.7	内断75R6/4にふい橙 外75R6/3にふい黄	やや密	硬	口:2/12	内外面マメツ 内面ハケ

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
412	78	34	須恵器	杯蓋B		全形	1995溝		P14	飛鳥IV~V	15.4			(2.2)	0.4	内外N60灰 断7.5R6/1灰	密	硬	口:1/12 全体50%	回転ナデ
413	78		須恵器	杯B		体部 ~底部	1995溝		P14	飛鳥IV			9.4	(3.4)	0.5	内外断57/1灰白	密	やや硬	底:6/12 全体30%	回転ナデ
414	78	34	須恵器	杯B		全形	1995溝		P14	飛鳥IV~V	13.1		8.4	4.7	0.4	内外N60灰 断5R5/1紫灰	密	硬	口:1/12 全体35%	回転ナデ
415	78		須恵器	杯B		口縁 ~底部	1995溝		P14	飛鳥IV	15.1		8.2	4.0	0.5	内外断N60灰	密	硬	底:6/12	回転ナデ 貼付台高相雑
416	78		須恵器	杯B		底部	1995溝	(412・414周辺)	P14	飛鳥IV			9.1	(1.7)	0.6	内7.5/7/1灰白 ・N70灰白 外断7.5/7/1灰白 ・7.5R1灰白	密	やや軟	底:6/12	回転ナデ
417	78		須恵器	杯Bカ		底部	1995溝	(412・414周辺)	P14	飛鳥IV			8.8	(1.8)	0.5	内外断2.5R6/1黄灰	密	硬	全体30%	回転ナデ
418	78		須恵器	杯A		底部	1995溝		P14	飛鳥IV~V			6.8	(2.0)	0.5	内外断57/1灰白	密	軟不良	底:3/12	内外面マメツ 回転ナデ
419	78		須恵器	高杯		杯底部 ~脚部	1995溝	(412・414周辺)	P14	7c代				(4.2)	0.4	内外断2.5/7/1灰白	密	硬	接:100%	回転ナデ、自然釉
420	78		須恵器	壺		口縁	1995溝		P14	7c代	14.4			(3.3)	0.5	内断7.5R8/1灰白 外7.5/7/1灰白 ・N50灰	密	軟不良	口:2/12	内外面マメツ
421	78		須恵器	杯B		底部	1995溝		P14	飛鳥II			9.6	(5.3)	0.7	内N70灰白 外N60灰 断N70灰白 ・5R5/1褐灰	密	硬	底:3/12	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ 丁寧なつくり
422	78	34	土師器	長胴甕		全形	1995溝		P14	飛鳥IV~V	29.7	25.4		(30.7)	0.5	内断10R6/6明黄褐 外7.5R6/6橙	やや密	やや軟	口:7/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面板ナデオサエ 外面埋付着、口縁・胴部意匠的打抜き
423	78		須恵器	杯G		全形	770溝		E-2	飛鳥II	9.3			3.8	0.3	内N50灰 外2.5/5/1黄灰 断N70灰白	密	硬	口:1/12 全体60%	回転ナデ
424	78		須恵器	壺	長頸壺	頸部 (南側溝)			E-2	7c代				(11.0)	0.7	内外N40灰・N60灰 断N70灰白	密	硬	頸部のみ	回転ナデ 自然釉
425	78		土師器	皿	皿C	口縁	(1995・1996溝周辺)		P14	7cか	17.8			(2.1)	0.3	内7.5R6/3にふい 外断5R5/6明赤褐	密	硬	口:1/12	表面剥離 口縁部ヨコナデ
426	78		須恵器	壺		口縁	1996溝		P14	飛鳥IV~V	14.4			(2.5)	0.4	内N60灰 外N50灰 断5R5/3にふい赤褐	密	硬	口:1/12	回転ナデ
427	78		土師器	甕		口縁 ~体部	2001溝	断面H ライン 周辺	P14	飛鳥IV~V	14.6			(12.8)	0.5	内断 10R7/2にふい黄橙 外10R5/2灰黄褐	密	硬	口:4/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 外面埋付着
428	78		須恵器	杯B蓋		口縁	2000土坑		P14	飛鳥IV~V				(1.1)	0.3	内N60灰 外10R6/1褐灰 断7.5R6/2灰褐	密	硬	口:1/12 以下	回転ナデ
429	79		土師器	甕	都城型甕	口縁 ~体部	(第5層)	ポイント あり 掘立41 周辺	P14	9c代	17.0			(7.4)	0.6	内外断 10R7/3にふい黄橙	密	硬	口:8/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内外面オサエ
430	80		土師器	皿		口縁 ~底部	1989焼土坑		P14	9c代	14.0			2.1	0.3	内外断 10R7/4にふい黄橙	密	硬	口:3/12 全体20%	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 下半オサエ、弱く煤付着
431	80		土師器	皿		口縁 ~底部	1989焼土坑		P14	9c代	13.8			2.1	0.4	内10R7/3にふい黄橙 外7.5R6/4にふい黄橙 断10R7/3にふい黄橙 ・7.5R6/4にふい黄橙	密	硬	口:5/12 全体20%	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 下半オサエ、弱く煤付着
432	80		土師器	皿		口縁	1988焼土坑		P14	9c代	11.8			(1.9)	0.3	内断10R8/2灰白 外10R7/3にふい黄橙	密精良	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 下半オサエ
433	80		土師器	鉢		口縁 ~体部	1989焼土坑		P14	9c代	21.6			(6.1)	0.7	内10R4/1褐灰 外10R6/4にふい黄橙 断10R4/1褐灰・ 10R6/4にふい黄橙	密	硬	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面オサエ内面ハケム 上半外面弱く煤
434	80		須恵器	杯身		全形	(1965)		P14	飛鳥I新~	12.8			3.3	0.6	内2.5R2灰白 外断2.5R1灰白	密	軟	口:1/12 全体40%	回転ナデ 底部へラ切未調整 杯H蓋反転使用か
435	80		須恵器	杯身		底部	(1965)		P14	飛鳥I新~			6.8	(1.6)	0.4	内断N60灰 外N70灰白 ・5R6/2灰褐	密	硬	底:4/12	回転ナデ 底部へラ切未調整
436	80		土師器	甕		口縁	(1966)		P14	7c代				(2.1)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外5R6/6橙 断10R6/2灰黄褐	密	硬	口縁部のみ	口縁部ハケのちヨコナデ
437	80		須恵器	杯H蓋		全形	812P		E-2	飛鳥I新	12.5			3.9	0.6	内外N70灰白 断10R7/2にふい黄橙	密	硬	口:10/12 全体98%	回転ナデ 天井部へラ切未調整
438	80		須恵器	杯H蓋		全形	(第5層)	ポイント あり	E-2	飛鳥I新	11.5			3.7	0.7	内外N60灰 断5P7/1明紫灰	密	硬	口:1/12 全体60%	回転ナデ 天井部へラ切未調整
439	80		須恵器	杯G		全形	(機械掘削)		E-2	飛鳥I新	11.3			3.5	0.7	内断N70灰白 外N50灰	密	硬	口:4/12 全体40%	回転ナデ 底部不調整
440	80		土師器	甕		口縁	(第5層)	ポイント あり	E-2	7c代	21.0			(6.3)	0.5	内外断 10R7/3にふい黄橙	密	やや硬	口:2/12	内外面マメツ
441	80		須恵器	杯H		全形	(第5層)		P14	飛鳥I新	9.3	11.4		2.8	0.4	内N50灰 外N60灰 断5R5/1褐灰	密	硬	口:1/12	回転ナデ 底部へラ切未調整
442	80		須恵器	杯H		口縁 ~体部	(第5層)		P14	飛鳥I新	13.2	14.8		(1.8)	0.4	内断N70灰白 外N50灰	密	硬	口:2/12	回転ナデ
443	80		須恵器	杯H		口縁 ~底部	(第6層)	ポイント あり (2006溝 肩部)	P14	飛鳥IV~V	11.4	13.2		3.1	0.5	内断N70灰白 外N50灰	密	硬	口:3/12	回転ナデ 底部へラ切未調整 底面碎灰
444	80		須恵器	杯A or高杯		口縁 ~体部	(第6層)		P14	飛鳥II	10.0			(2.6)	0.4	内N70灰白 外N70灰白 ・N90暗灰 断2.5/4/1黄灰	やや密	硬	口:2/12	回転ナデ
445	80		須恵器	杯A		口縁 ~体部	(第5層)		P14	飛鳥IV~V	14.0			(3.6)	0.6	内外断N80灰白	やや密	硬	口:1/12	回転ナデ
446	80		須恵器	高杯		脚部	(1956溝)	(近世~)	P14	7c代				(6.2)	0.5	内外断N60灰	密	硬	脚部のみ	回転ナデ
447	80		須恵器	甕カ		口縁	第4a層		P14	7c代	22.6			(5.7)	0.7	内外N60灰 断5R5/2灰褐	密	硬	口:1/12	回転ナデ

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
448	80		須恵器	台付壺		底部 ~脚部	(1956溝)	(近世~)	P14	7c代					0.5	内外断N7/O灰白	密	やや硬	接:7/12	回転ナデ	
449	80		須恵器	こね鉢		底部	第4a層		P14	7c代			8.0	(4.6)	0.7	内外N6/O灰 断5YR6/2灰褐	密	硬	底:4/12	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ	
450	80		瓦	平瓦	梶原瓦窯産		(第5層 除去面)	ポイントあり	P14	8c代か					(1.9)	凹面25Y6/4にふい 凸面25Y7/2灰黄 断7.5YR8/6浅黄橙	やや密	やや硬		凹面・凸面マメツ 梶原瓦窯産か	
451	80		瓦	平瓦	梶原瓦窯産		(第4a層)		P14	8c代					1.7	凹凸面・断N5/O灰	密	硬		凹面ケズリか	
452	80		土師器	皿		口縁	(機械掘削)	(北東)	P14	9c代	16.8				(2.8)	0.3	内7.5YR7/6橙 外7.5YR7/4にふい 断7.5YR7/6橙・ 7.5YR7/4にふい	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ハケ
453	80		黒色土器	椀	内黒A類	体部 ~底部	(1955溝)	(近世~)	P14	9c代			5.8	(2.3)	0.3	内N2/O黒 外2.5Y7/3浅黄 断N2/O黒	密	硬	底:1/12 以下	内黒・黒色土器A類 内外面マメツ	
454	80		土師器	甕		口縁	(1969溝)		P14	古代					(2.9)	0.5	内10R7/4にふい 外10R7/4にふい 断10R7/4にふい ・N4/O灰 断10R7/4にふい	密	硬	口:1/12 以下	外面黒化
455	80		須恵器	鉢		口縁	766溝		E-2	古代か 9c代	26.7				(4.5)	0.7	内N7/O灰白 外7.5Y1/1灰 断5R8/1灰白	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 波状文3条
456	80		須恵器	壺		底部	(第5層)		P14	9c代			14.9	(4.0)	1.3	内外N6/O灰 断N7/O灰白	やや密	硬	底:4/12	外面タタキ	

第4章 第5節 (古墳時代:土器類)

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
457	85		土師器	甕	布留形	口縁	113溝		A-1	布留新	(17.8)				(3.4)	0.5	内7.5YR7/6橙 外7.5YR6/6橙 断7.5YR8/4浅黄橙	やや密	軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ
458	86		須恵器	杯蓋		全形	1486P	掘立49	P6	TK208 ~23	13.6				4.7	0.5	内断N6/O灰 外N5/O灰	密	硬	口:2/12	天部回転ヘラケズリ左回り
459	87	36	土師器	鉢	A系統 小型鉢 (底あり)	完形	108溝	竪穴58	A-1	布留古 古~古新	8.4		1.6	6.4	0.4	内2.5R8/3淡黄 外断2.5R8/2灰白	やや密	やや軟	ほぼ完形	内外面マメツ	
460	87		土師器	壺	(C系統) 精製 B系統影響 小型 丸底壺か	口縁 ~体部	108溝	竪穴58	A-1	布留古 古~古新	10.8	11.2			(7.0)	0.3	内5YR8/4淡橙 外2.5YR6/6橙 断5YR7/6橙	密	やや軟	口:2/12 全体20%	内外面マメツ 外面ハケ 胎土精良・精製B系統の影響・ 模倣品
461	87	C10 36	土師器	甕	庄内形 (非生駒)	口縁 ~体部	108溝	竪穴58	A-1	布留古 古~古新	13.2	(16.0)		(14.6)	0.2	内断2.5R8/2灰白 外10R8/4浅黄橙 ・2.5Y2/1黒	やや密	やや軟	口:11/12 全体30%	口縁部ヨコナデ・外面細筋 タタキ 内外面被熱・ハクリ 白色胎土→攪拌庫内内面産	
462	88		土師器	小型鉢		小平底	1456P	掘立30	P6	庄内か			2.2	(2.4)	0.8	内外2.5R8/2灰白 断7.5YR6/6明褐	やや密	硬	底:2/12	内外面マメツ	
463	88		土師器	壺	C系統 中型直口 壺	頸部	1460P	掘立30	P6	布留古 か	9.0				(4.7)	0.5	内7.5R8/1灰白 外N3/O暗灰 断N3/O暗灰	やや密	やや軟	頸:2/12	口縁部内面ハケ
464	88		土師器	甕	布留系 小型	全形	(第6層)	ポイントあり 掘立30・ 1485周辺	P6	布留古	11.9	13.8		13.5	0.4	内7.5YR7/6橙 外5YR6/6橙 断7.5YR8/3浅黄橙	やや密	やや軟	口:3/12 頸:4/12 大:8/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面オサエ・ ナデ 接合痕顕著	
465	89		土師器	小型器台か	小型器台 or小型 広口壺	口縁	竪穴39	壁溝 (西側)	P6	庄内か	(9.0)				(1.1)	0.5	内外断10R8/2灰白	密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部内面波状文 在地胎土(精良)
466	89	36	土師器	鉢	A系統 平底	全形	竪穴39	床面 ポイント	P6	庄内~ 布留古	10.0	11.0	2.6	12.2	0.4	内10R7/3にふい 外7.5YR6/4にふい 断N3/O暗灰 ・N3/O暗灰 断7.5YR6/6橙	やや密	やや軟	底:完形 口:4/12	内外面ナデ	
467	89		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	竪穴39	埋土北半	P6	庄内新 ~布留古					(4.3)	0.3	内外10R8/3浅黄橙 断7.5YR7/6橙	やや密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 体部内面ケズリ
468	89		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ~肩部	竪穴39	埋土南半	P6	庄内か	20.2				(4.8)	0.4	内10R8/2灰白 外7.5YR6/4にふい 断7.5YR6/6橙	やや密	やや軟	口:1/12 頸:1/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式系タタキ 在地胎土(V様式胎土)
469	90		土師器	甕(布留系)		口縁	130焼土坑	竪穴57	A-1	布留古 か	13.7				(2.0)	0.4	内7.5YR2/2灰褐 外5YR2/1黒褐 断5YR6/6明赤褐	やや密	やや硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケか 非在地胎土か
470	90		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁	130焼土坑	竪穴57	A-1	布留古 か	14.4				(2.6)	0.3	内10R8/2灰黄褐 外7.5YR3/3にふい 断7.5YR6/3にふい	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土か
471	92		土師器	高杯	C系統 II群系 無稜 外反形	接合部	100 落込み 土器溜1	(上面)	A2	布留新 辻1・2					(2.2)	0.5	内5YR7/6橙 外10R7/6明黄褐 断10R4/1褐灰	普通	やや硬	接:完形	内外面マメツ 円盤充填・棒状痕あり
472	92		土師器	高杯	(B系統 ・C系統) 折衷系	脚部	100 落込み 土器溜1	(上面)	A2	布留新 辻1・2					(7.6)	0.7	内断2.5Y7/4浅黄 外10R8/3浅黄橙	やや密	硬	接:100%	外面タテ面取り内面シボリ痕 凸面接合
473	92		土師器	小型丸底壺	(C系統 II群系か)	口縁 ~肩部	100 落込み 土器溜1	(上面)	A2	布留新 辻2	8.2	(8.6)			(3.6)	0.5	内5Y2/1黒 外5Y3/1オリーブ黒 断2.5Y4/1黄灰	密	硬	口:3/4	口縁部ヨコナデ 体部外面不明内面ナデ・オ サエ 非在地胎土(黒色)
474	92		土師器	鉢	C系統 中型鉢	口縁	100 落込み 土器溜1	(上面)	A2	布留新 辻1	25.0	(27.0)			(3.6)	0.9	内外 10R7/4にふい 断2.5Y3/1黒褐	やや密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
475	92		土師器	壺	平底	底部	100 落込み 土器溜1	(上面)	A2	~布留 新			6.1	(2.4)	0.8	内10R8/2灰黄褐 外10R8/2灰黄褐 断10R4/1褐灰	やや密	硬	底:完形	内面ケズリ 在地胎土(V様式胎土)	
476	92		土師器	甕	布留形	口縁	100 落込み 土器溜1	(上面)	A2	布留新 辻1・2	14.5				(4.1)	0.5	内7.5YR7/4にふい 外断7.5YR7/6橙	やや密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
477	92	36	土師器	高杯	C系統 II群系 無稜形	杯部	(掘立46)	100 落込み 土器溜1	A2	布留新 辻1・2	17.8				(6.2)	0.4	内10R8/2灰黄褐 外断 10R7/2にふい	やや粗	やや軟	口:7/12 杯:70%	杯部内外面マメツ 円盤充填・棒状痕
478	92		土師器	高杯	C系統 II群系 無稜形	杯部 ~脚部	(掘立46)	100 落込み 土器溜1	A2	布留新 辻1・2	16.3				(10.1)	0.5	内外 10R7/3にふい 断10R6/1褐灰	やや粗	硬	口:2/12 全体25%	杯部内外面マメツ 脚部外面タテ面取り内面ケ ズリ 円盤充填
479	92		土師器	高杯	(系統不明) 無稜形 (直口)	杯部	(掘立46)	100 落込み 土器溜1	A2	布留新 辻1・2	15.6				(3.8)	0.6	内10R8/3浅黄橙 外10R8/3にふい 断10R6/1褐灰	やや密	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 杯部オサエ 浅い杯部・外反しない口縁 →非典型的形状

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
480	92		土師器	小型丸底壺	(C系統II群系)	口縁～底部	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻2	8.5	9.2		(6.0)	0.6	内5YR6/8 橙 外新2.5YR6/4 にふい黄橙	やや密	やや硬	口:3/12 頸:8/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 体部外面不明内面ナデ・オサエ	
481	92		土師器	小型丸底壺	(C系統II群系)	肩部	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	6.2	9.4		(3.4)	0.3	内外10YR8/4 浅黄橙 新2.5YR2 灰白	やや密	やや軟	頸:3/12	内外面マメツ 内面ユビオサエナハケカ	
482	92		土師器	壺	阿波産複合口縁壺	口縁	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	14.4			(5.5)	1.0	内外7.5YR7/6 橙 新10YR8/3 浅黄橙	やや粗	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 緑泥片岩あり ※ 阿波産職入品	
483	92		土師器	壺	C系統大型直口壺	口縁	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	18.6			(7.6)	0.6	内外新10YR8/4 浅黄橙	普通	軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ	
484	92		土師器	壺	(山陰系?)大型二重口縁壺	口縁～底部	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	15.8	28.0		(26.6)	0.6	内2.5YR2 灰白 外2.5Y7/3 浅黄 新5Y4/1 灰	やや密	やや軟	口:1/12 頸:4/12	内外面マメツ 粗粒品、山陰系の可能性あり → G71 大型土坑:1008と形態類似	
485	92	C10 36	土師器	甕	山陰系二重口縁壺	(完形)	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	10.0	34.7			38.1	0.5	内外新2.5YR2 灰白	やや密	やや硬	口:3/12 全体60%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ肩部跡のみ目文(4段) 内面ケズリ底部跡 丸底、山陰大角式
486	92		土師器	甕	布留形	口縁	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	16.6			(5.5)	0.4	内7.5YR6/4 にふい黄橙 外新10YR8/3 浅黄橙	やや粗	やや軟	口:1/12 以下 頸:1/12	内外面マメツ 内面ケズリ	
487	92		土師器	鉢	系統不明中型鉢	口縁～底部	(擬立46)	100 落ち込み土器溜1	A2	布留新辻1・2	20.2	25.2		(13.4)	0.7	内2.5YR2 灰白 外1.5YR7/6 暗灰 新N3.0 暗灰	やや粗	硬	口:1/12 以下 頸:2/12	内外面マメツ、内面ナデ 外面被熱、一部赤変 系統不明、粗粒品	
488	95		土師器	高杯	B系統I群系無稜形	杯部+脚部	(1482井戸)	上面周辺	P6	布留新辻1・2	16.0			11.4	(11.7)	0.4	内10YR7/3 にふい黄橙 外7.5YR7/6 橙 新10YR7/4 にふい黄橙	やや密	やや軟	口:2/12 脚:2/12 全体30%	凸面被熱 II群系影響I群系 在地胎土か
489	95		土師器	高杯	C系統II群系無稜形	全形	(1482井戸)	上面周辺	P6	布留新辻1・2	16.0			11.6	13.5	0.4	内外5YR7/8 橙 新10YR4/1 褐灰	密	やや軟	口:6/12 脚:11/12 全体70%	内外面マメツ 凸面被熱・棒状痕
490	95		土師器	壺	(山陰系)二重口縁壺	口縁	(1482井戸)	上面周辺	P6	布留新辻1・2	16.6			(8.0)	0.7	内外7.5YR6/6 橙 新7.5Y7/1 灰白	やや密	やや軟	口:5/12 頸:8/12	口縁ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ 在地胎土か	
491	95	C8 37	土師器	高杯	B系統I群系有稜形	杯部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	15.2			(5.5)	0.4	内7.5YR6/4 にふい黄橙 外7.5YR7/4 にふい黄橙 新10YR8/2 灰白	やや密	やや硬	口:7/12 杯:70%	杯底部ケズリ、弱い被熱 凸面被熱 在地胎土か	
492	95	C8	土師器	高杯	B系統I群系	脚部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	11.3			(8.0)	0.5	内新10YR8/2 灰白 外10YR7/2 にふい黄橙	密	硬	脚:6/12 全体60%	エンタシス形 外面タテミガキ内面ケズリ 凸面被熱 非在地胎土か	
493	95	C8 37	土師器	高杯	(折衷)無稜外反形	杯部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	17.6			(5.6)	0.5	内10YR7/4 にふい黄橙 外2.5Y6/2 灰黄 新10YR7/2 にふい黄橙	密	硬	口:11/12 杯:90%	外面ハケ・オサエ杯底部ケズリ 凸面被熱 I群系影響II群系形態模倣	
494	95		土師器	高杯	C系統II群系無稜形	全形	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	15.8			10.4	12.9	0.5	内5YR7/6 橙 外1.5YR7/6 橙 新5YR6/6 橙	密	やや軟	口:10/12 脚:11/12 全体90%	外面ハケ 凸面被熱・棒状痕 在地精良胎土
495	95		土師器	小型丸底壺	B系統精製	口縁～底部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留中～新	8.6			(5.8)	0.3	内外7.5YR6/6 橙 新7.5YR7/6 橙	密	やや軟	口:2/12 頸:5/12	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 職入品	
496	95		土師器	小型丸底壺	B系統I群系	肩部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	5.2	8.0		(3.8)	0.3	内7.5YR7/3 にふい黄橙 外5YR5/6 明赤褐 新7.5YR6/6 橙	密	硬	頸:3/12 肩:3/12	外面ケズリ内面ナデ 形跡はII群系 I群系影響II群系形態模倣 在地胎土(精良)、磁地品か	
497	95	C8 36	土師器	小型丸底壺	C系統II群系	全形	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻2	9.0	8.9			9.6	0.4	内外2.5Y6/2 灰黄 (口～頸) N2.0 黒(頸～体) 新N2.0 黒	やや密	硬	口:7/12 全体70%	外面ハケ内面ナデ 重量感あり 内面から体部穿孔の可能性あり
498	95	C8 36	土師器	小型丸底壺	C系統II群系	(ほぼ)完形	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	8.8	9.0			8.5	0.3	内新7.5YR6/6 橙 外10YR8/4 浅黄橙	やや密	やや軟	口:9/12 全体90%	外面ハケ内面オサエ・ナデ 胎土薄手 頸部跡あり
499	95		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	口縁～底部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	6.2	8.8		(6.1)	0.3	内2.5YR2 灰白 (口～頸) N3.0 暗灰(頸～体) 外2.5Y7/3 浅黄 新N3.0 暗灰	やや密	硬	口:1/12 頸:3/12	外面ハケ内面ケズリ 在地胎土	
500	95		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	体部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	5.2	9.6		(6.4)	0.4	内外2.5Y7/2 灰黄 新2.5Y5/1 黄灰	やや密	硬	頸:2/12 体:30%	外面ハケ内面ケズリ 在地胎土 496と形態類似	
501	95	C8 36	土師器	壺or甕	(C系統II群系)中型壺or小型甕	口縁～底部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻2	9.2	13.0		(12.5)	0.4	内5YR7/6 橙 外7.5YR6/6 橙 新2.5Y5/1 黄灰	やや密	やや軟	口:(ほぼ)完形 全体60%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ 在地胎土(精良) ※ 496と胎土類似	
502	95	C8 37	土師器	壺	C系統II群系直口小型	全形	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	13.3	15.7			14.4	0.4	内10YR7/2 にふい黄橙 外7.5YR7/6 橙 新10YR8/2 灰白	やや密	やや軟	口:10/12 全体80%	外面ハケ 内面ケズリ底部跡 体部穿孔(内面から) 口縁部跡了ききの可能性あり 内外面被熱
503	95	C8 37	土師器	壺	C系統II群系大型二重口縁壺	口縁～底部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	16.4	(27.5)		(31.1)	0.3	内外7.5YR7/6 橙 新10YR8/3 浅黄橙	やや密	硬	口:完形 全体60%	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのちヨコナデ 内面ケズリ底部オサエ 布留甕・小丸の主流の一群の 同一の製作規範 山陰系の在地化した口縁部形状	
504	95		土師器	壺	平底	底部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2				6.8	(2.0)	0.8	内2.5Y5/1 黄灰 外10YR4/1 褐灰 新10YR3/1 黒褐	密	硬	底:6/12	非在地胎土か
505	95	C8	土師器	鉢	布留系(山陰系)大型鉢	口縁～肩部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	37.1	38.3		(11.5)	0.5	内外2.5YR2 灰白 新N3.0 暗灰	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ケズリ 531と同一個体の可能性あり 在地胎土か(白色)	
506	95		土師器	甕	布留形	口縁	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻2	13.8			(3.9)	0.6	内10YR8/3 浅黄橙 外10YR6/3 にふい黄橙 新10YR6/1 褐灰	やや密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ	
507	95		土師器	甕	布留形	口縁	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	14.0			(3.7)	0.5	内外2.5Y8/3 浅黄 新N4.0 灰	やや密	硬	口:2/12	在地胎土 底部シャープ・薄手 ※ やや古手	
508	95		土師器	甕	布留形	口縁	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻2	14.6			(3.8)	0.6	内外5YR6/8 橙 新10YR5/1 褐灰	やや密	やや軟	口:2/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ	
509	95		土師器	甕	布留形小型	口縁～底部	1482井戸	上層除去面①	P6	布留新辻2	12.2	16.2		(9.8)	0.4	内外2.5Y7/2 灰黄 新2.5Y4/1 黄灰	やや密	硬	口:8/12 頸:10/12	口縁部ヨコナデ 外面タテ・ナメハケ 脚部ヨコハケ 内面ケズリ	



第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
510	95	C8 36	土師器	甕	布留形中型	全形	1482 井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	16.0	23.4		24.4	0.4	内 25f8/3 淡黄 外 25f8/3 淡黄 断 25f7/1 灰白 断 25f8/2 灰白	やや密	硬	口: 5/12 全体 80%	口縁部ヨコナデ 外面タテ・ナメハケ肩部 ヨコハケ 内面ケズリ底部指頭痕 在地胎土か	
511	95	C8 36	土師器	甕	布留形中型	全形	1482 井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	15.4	22.5		25.7	0.3	内外断 75fR8/4 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 5/12 全体 70%	全体的にマメツ・ハクリ → 被熱か 内面ケズリ底部指頭痕	
512	96	C8 37	土師器	壺	C系統II群系大型直口壺	口縁~体部	1482 井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2	19.4	28.7		(22.0)	0.8	内 5fR7/8 橙 外 25f8/3 淡黄 断 5fR7/8 橙	やや密	やや軟	口: 8/12 頸: 12/12	口縁部ヨコナデ 外面タテ・ナメハケ肩部 ヨコハケ 内面ケズリ 外面被熱・ハクリ	
513	96		土師器	壺	超大型	底部	1482 井戸	上層除去面①	P6	布留新辻1・2		(62+)		30.6	1.2	内 25f7/2 灰黄 外 25f6/2 灰黄 断 10fR6/3 にふい黄橙	密	やや硬	底: 12/12	内面ハケ 非在地胎土か	
514	96	C8	土師器	高杯	(B系統I群系) (C系統II群系影響) 有稜形	杯部	1482 井戸	上層除去面①・②間(南半)	P6	布留新辻1・2	15.6			(5.4)	0.3	内 10fR6/3 にふい黄橙 外 10fR6/6 明黄褐 断 10fR5/1 褐灰	やや密	硬	口: 1/12 杯: 20%	底部ケズリ 口縁部シャープ 全体ヨコナデ整形 口縁充填 II群系影響I群系	
515	96	C8	土師器	高杯	C系統II群系	脚部	1482 井戸	上層除去面①・②間(南半)	P6	布留新辻1・2			12.4	(8.8)	0.4	内 25f7/2 灰黄 外 25f7/4 浅黄 断 25f8/2 灰白	密	硬	底: 10/12 脚: 90%	外面タテハケ 内面ケズリ裾部オサエ 口縁充填、内面押し付け 非在地胎土か ※ (淀川流域周辺地か)	
516	96		土師器	小型丸底壺	(B系統I群系) C系統影響	全形	1482 井戸	上層除去面①・②間(南半)	P6	布留新辻2	9.4	8.4		8.6	0.3	内 N30 暗灰 外 25f8/3 淡黄 断 25f8/3 淡黄	やや密	硬	口: 2/12 頸: 3/12 全体 20%	底部外面ケズリ内面ナデ 口縁部一層部ハケ II群系影響I群系 在地胎土	
517	96		土師器	甕	布留形	口縁~肩部	1482 井戸	上層除去面①・②間(南半)	P6	布留新辻2	15.0	15.4		(4.7)	0.6	内 10fR7/3 にふい黄橙 外 25f8/2 灰白 断 75f6/1 灰	やや密	硬	口: 5/12 頸: 6/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ	
518	96		土師器	高杯	(折衷) 無稜外反形	杯部	1482 井戸	上層除去面①・②間	P6	布留新辻1・2	17.4			(5.1)	0.4	内 10fR7/3 にふい黄橙 外 25f7/2 灰黄 断 25f7/1 灰白	密	硬	口: 10/12 杯: 90%	杯部ケズリ・オサエ 杯部ヨコナデ、凸面接合 在地胎土 (精良) (II群系影響I群系、折衷)	
519	96	C8 37	土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	全形	1482 井戸	上層除去面②+③	P6	布留新辻2	16.4			9.6	11.5	0.4	内 25f8/3 淡黄 外 25f8/3 淡黄 断 25f6/1 黄灰	密	硬	口: 9/12 脚: 6/12 全体 60%	杯部外面ハケのち口縁部ヨコナデ 内面ハケ放射シガキカ 底部外面ハケ・内面ケズリ 口縁充填、棒状痕あり
520	96		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	口縁~体部	1482 井戸	上層除去面①・②間	P6	布留新辻2	9.5	10.0		(6.8)	0.5	内 25f8/1 灰白 外 25f8/3 淡黄 断 N6/0 灰	やや密	軟	口: 5/12 頸: 12/12 全体 50%	内外縞マメツ 外面ハケ、内面下半ケズリ か上半オサエ 在地胎土か (精良)	
521	96	C8 37	土師器	壺	中型	全形	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻2	11.6	14.3		14.2	0.4	内外断 25f7/2 灰黄	やや密	やや軟	口: 5/12 頸: 3/12 全体 50%	外面ハケ・ヨコナデ 内面ケズリ底部指頭痕 体部穿孔 (内面から、3ヶ所) 内外面被熱	
522	96		土師器	壺	瀬戸内系か二重口縁壺か	口縁	1482 井戸	上層除去面①・②間(北半)	P6	布留新辻1・2					0.8	内 N40 灰 外 25f7/2 灰黄 断 25f7/2 灰黄	密	硬	1/12 以下	東部瀬戸内径か、要検討 在地胎土か (精良)	
523	97		土師器	高杯	(折衷) 有稜高杯	杯部	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻1・2	13.4			(4.5)	0.5	内 5fR7/6 橙 外 75fR8/4 浅黄橙 断 N5/0 灰	やや密	やや軟	口: 2/12 杯: 50%	内外面マメツ 口縁充填・棒状痕なし 形整I群系的 調整・胎土II群的 在地胎土	
524	97		土師器	高杯	(C系統II群系) 無稜外反形	杯部	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻1・2	16.8			5.4	0.5	内 75fR7/6 橙 外 75fR7/6 橙 断 25f8/3 淡黄	密	硬	口: 3/12	内外面マメツ 在地胎土 (精良)	
525	97	C8	土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻2	14.6			(5.2)	0.5	内 5fR7/6 橙 外 75fR7/4 にふい黄橙 断 25f6/1 黄灰	やや密	やや軟	口: 3/12	外面ハケ・ヨコナデ 口縁充填・棒状痕 在地胎土・厚手	
526	97		土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻2	16.8			(5.1)	0.5	内 10fR7/6 明黄褐 外 75fR6/6 橙 断 75fR6/6 橙	やや密	やや軟	口: 11/12 杯部 ほぼ完形	外面ハケ・ヨコナデ 口縁充填・棒状痕 在地胎土・重量感あり	
527	97	C8 38	土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	全形	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻2	16.9			12.6	13.5	0.5	内 25f7/2 灰黄 外 25f7/2 灰黄 断 75fR7/6 橙	やや密	やや軟	ほぼ完形	杯部外面ハケ・ヨコナデ 口縁充填・棒状痕 在地胎土・重量感あり ※ (534と胎土類似) 1120 (866井戸上層)の同工品
528	97		土師器	高杯	(C系統II群系)	杯底部~脚部	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻1・2				(10.0)	0.5	内 75fR8/4 浅黄橙 外 75fR8/6 浅黄橙 断 N30 暗灰	やや密	やや軟	接: 12/12	杯部外面ハケ、脚部内面ケズリ 口縁充填・棒状痕 在地胎土か (やや異質)	
529	97		土師器	小型丸底鉢	(C系統II群系) 模倣品	体部	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻1・2		10.5		(4.9)	0.7	内 5fR7/8 橙 外 5fR7/8 橙 断 N5/0 灰	やや密	硬	頸: 4/12	外面ハケ 内面ナデ (+ミガキカ) 精製B系統の模倣品 在地胎土	
530	97		土師器	壺	二重口縁壺	口縁	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻1・2	15.8			(5.3)	0.6	内 25f7/4 浅黄 外 25f7/4 浅黄 断 10fR8/3 浅黄橙	密	硬	口: 2/12	ヨコナデ整形 在地胎土 (精良)	
531	97	C8 36	土師器	大型鉢	布留系(山陰系)大型鉢	口縁~肩部	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻1・2	41.0			(14.2)	0.5	内 25f7/3 浅黄 外 25f8/3 浅黄 断 N30 暗灰	やや密	硬	口: 4/12	口縁部ヨコナデ 「外面ハケ内面ケズリ」 5f5と同一個体の可能性あり 在地胎土か (白色)	
532	97	C8 38	土師器	甕	布留形小型	完形	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻1・2	11.9	16.3		16.6	0.3	内 10fR7/3 にふい黄橙 外 10fR7/3 にふい黄橙 断 N20 黒 断 10fR8/3 浅黄橙	密	硬	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 体部タテ・ナメハケ 肩部ヨコハケ ※ 米粒状斑痕 (x3) 内面ケズリ・底部指頭痕 体部穿孔 (内面から) 在地胎土 (精良)	
533	97	C8	土師器	甕	布留形小型	全形	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻2	13.0	19.6		20.7	0.4	内 10fR7/3 にふい黄橙 外 10fR7/3 にふい黄橙 断 10fR8/1 灰白	密	硬	口: 12/12 全体 95%	口縁部ヨコナデ 外面タテ・ナメハケ 内面ケズリ下半指頭痕 在地胎土 (精良)	
534	97		土師器	甕	布留形中型	口縁~体部	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻2	14.3	20.8		(11.1)	0.4	内 25f7/3 浅黄 外 25f7/3 浅黄 断 25f7/1 灰白	やや密	やや軟	口: 10/12	口縁部ヨコナデ 体部タテ・ナメハケ 内面ケズリ	
535	97		土師器	甕	布留形中型	口縁~体部	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻1・2	14.8	21.8		(9.1)	0.4	内 25fR5/8 明赤褐 外 25fR5/8 明赤褐・ N20 黒 断 25 Y 5/1 黄灰	やや密	やや軟	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 体部外面ハケ肩部ヨコハケ 内面マメツ 非在地胎土か	

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
536	97		土師器	甕	布留形中型	口縁～体部	1482 井戸	上層除去面②・③	P6	布留新辻1・2	15.6	21.6		(18.2)	0.4	内257/2 灰黄 外10R7/4にふい黄橙 断258/2 灰白	密	やや軟	口：4/12	口縁部ヨコナデ 体部ハケ肩部ヨコハケ 内面ケズリ、薄手 非在地胎土か(精良)
537	97		土師器	甕	布留形中型	口縁～体部	1482 井戸	上層除去面②	P6	布留新辻2	15.5	23.8		(16.4)	0.4	内10R6/3にふい黄橙 外N20黒 断258/3 淡黄	やや密	硬	口：3/12 頸：4/12	口縁部ヨコナデ 体部タテ・ナメハケ 内面ケズリ
538	97	C8	土師器	高杯	(B系統I群系) C系統II群系影響 有稜高杯	杯部	1482 井戸	上層除去面③	P6	布留新辻1・2	15.4			(4.5)	0.6	内外258/3 淡黄 断258/1 灰白	密	やや軟	杯部 ほぼ完成形	杯部ハケ・ヨコナデ 挿入付加法か II群系影響I群系折衷 在地精良胎土
539	97		土師器	高杯	C系統II群系 無稜 外反形	杯部	1482 井戸	上層除去面③	P6	布留新辻1・2	16.9			(4.7)	0.5	内75R/6 橙 外10R7/4にふい黄橙 断N40 灰	やや密	やや軟	口：3/12 杯：40%	外面ハケのちヨコナデ 口蓋充填・棒状痕 在地胎土(精良) 重量感あり
540	97	C8	土師器	小型丸底壺	C系統II群系	口縁～体部	1482 井戸	上層除去面③	P6	布留新辻2	7.9	9.6		(7.7)	0.4	内10R8/4 浅黄橙 外75R/4にふい橙 断N40 灰	やや密	硬	口：2/12 頸：4/12	口縁部ヨコナデ外面ハケ 内面下半ケズリ上半オサエ
541	97	C8 38	土師器	壺	C系統II群系 中型壺	完形	1482 井戸	上層除去面③	P6	布留新辻1・2	10.1	13.8		14.0	0.4	内10R7/4にふい黄橙 ・N30 暗灰 外10R7/4にふい黄橙 ・N30 暗灰 ・10R4/2 灰黄褐 断10R8/2 灰白	やや密	硬	ほぼ完成形	内面ケズリ下半オサエ 体部穿孔(内面から) 内外面被熱 外面煤跡著、彫落あり 在地胎土(精良)
542	97	C8 C10 37	土師器	台付無頸壺	東海系(廻間)	全形	1482 井戸	上層除去面③	P6	布留新か	7.8	16.9	4.2	19.2	0.3	内256/1 黄灰 外10R7/3にふい黄橙 断258/3 淡黄	やや密	やや軟	脚：4/12 口：7/12 全体70%	折衷的特殊器種 外面ハケ調整 薄手、口縁・脚部打欠き
543	98		土師器	高杯	C系統II群系	杯底部～脚部	1482 井戸	上層除去面④	P6	布留新辻1・2				(9.0)	0.5	内外10R6/3にふい黄橙 断10R7/3にふい黄橙	密	硬	全体60%	外面面取り 脚部内面ケズリ 口蓋充填・棒状痕 非在地胎土か
544	98		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	1482 井戸	上層除去面④	P6	布留新辻1・2				(7.4)	0.5	内256/2 暗灰黄 外N20 黒 断5R6/6 橙	密	硬	接：6/12	外面面取り 脚部内面ケズリ 口蓋充填・棒状痕
545	98	C8	土師器	小型丸底壺	C系統II群系	全形	1482 井戸	上層除去面④	P6	布留新辻2	8.6	9.8		8.7	0.3	内外256/1 黄灰 断N40 灰	やや密	硬	口：1/12 体部 ほぼ完成形	口縁部ヨコナデ 体部上半オサエ 外面ハケ、内面ケズリ 体部穿孔(内面から) 打欠きあり
546	98	C8	土師器	甕	布留形小型	全形	1482 井戸	上層除去面④	P6	布留新辻1・2	12.0	14.7		15.4	0.4	内N40 灰 外N40 灰 ・257/4 浅黄 断N50 灰	密	硬	口：5/12 全体70%	口縁部ヨコナデ 外面ナメハケ 肩部ヨコナデ 内面ケズリ底部煤跡 重量感あり
547	98	C8 38	土師器	甕	布留形小型	全形	1482 井戸	上層除去面④	P6	布留新辻1・2	13.0	17.4		18.8	0.4	内外257/3 浅黄 ・N20 黒 断258/3 淡黄	密	硬	口：6/12 頸：6/12 全体70%	口縁部ヨコナデ 外面ナメハケ 肩部ヨコナデ ※ 米粒状圧痕(x2) 内面ケズリ底部煤跡 在地胎土(精良)
548	98		土師器	甕	布留形中型	口縁～体部	1482 井戸	上層除去面④	P6	布留新辻1・2	14.2	20.5		(18.9)	0.3	内256/3にふい黄 外256/3にふい黄 ・N20 黒 断N40 灰	密	硬	口：10/12 頸：11/12	口縁部ヨコナデ 外面ナメハケ 肩部ヨコナデ ※ 米粒状圧痕(x4) 内面ケズリ 在地胎土(精良) やや薄手
549	98		土師器	甕	受口形か近工系	口縁	1482 井戸	最下層	P6	布留古新 ～中古	13.2			(2.1)	0.5	内254/3 オリーブ褐 外N20 黒 断10R7/2にふい黄橙	密	硬	口：2/12	口縁部ヨコナデ 外面煤 非在地胎土か
550	98		土師器	甕	布留形	口縁	1482 井戸	最下層	P6	布留古新 ～中古	14.6			(4.7)	0.3	内10R6/3にふい黄橙 ・N20 黒 断5R6/8 橙	密	硬	口：3/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ケズリ 外面煤 非在地胎土の可能性あり
551	98		土師器	甕	布留形中～大型	口縁～肩部	1482 井戸	最下層	P6	布留古新 ～中古	17.2			(5.6)	0.3	内253/3 黒褐 外N20 黒 断5R7/4にふい橙	やや密	硬	口：2/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ケズリ 外面煤、非在地胎土の可能性あり
552	100		土師器	高杯	精製B系統 有稜形	杯底部～脚部	116 井戸	上層	A-1	布留古新				(5.0)	0.5	内75R8/3 浅黄橙 外75R/4にふい橙 断10R8/2 灰白	密	やや軟	接：12/12	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 在地胎土か → 磁地品か
553	100		土師器	高杯	A系統	杯底部～脚部	116 井戸	上層	A-1	布留古新				(7.1)	0.5	内10R8/3 浅黄橙 外10R7/3にふい黄橙 断10R8/1 橙灰	密	硬	接：6/12	外面タテミガキ 口蓋充填か、外面葉付着
554	100		土師器	高杯	精製B系統 低脚	(脚部)	116 井戸	上層	A-2	布留古新			14.2	(2.9)	0.4	内257/2 灰黄 外75R/4にふい橙 断75R6/2 灰褐	密	やや軟	底：3/12	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 穿孔(スリ孔数不明) 搬入品の可能性あり
555	100		土師器	壺	(A系統) 二重口縁壺	口縁	116 井戸	上層	A-1	布留古新	17.0			(3.6)	0.5	内75R6/6 橙 外75R/6 橙 断258/2 灰白	密	やや軟	口：2/12	内外面タテミガキか(細筋)
556	100		土師器	壺	(平底)	(底部)	116 井戸	上層	A-2	布留古新			5.0	(2.7)	0.8	内257/1 灰白 外258/2 灰白 ・N30 暗灰 断N40 灰	密	硬	底：12/12	内外面ナデ 黒斑あり
557	100		土師器	壺	(丸底)	底部	116 井戸	上層	A-1	布留古新			3.6	(1.9)	0.4	内断258/2 灰白 外257/3 浅黄 ・N30 暗灰	密	やや軟	底：12/12	内外面ナデ
558	100		土師器	甕	(布留影響) くの字	口縁	116 井戸	上層	A-1	布留古新	13.5			(3.6)	0.4	内257/2 灰黄 外10R7/2にふい黄橙 断75R/4にふい橙	密	やや軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ケズリ
559	100		土師器	甕	V様式系	体部	116 井戸	上層	A-1	布留古新				(5.1)	0.5	内N30 暗灰 外10R8/2 灰白 断10R7/1 灰白	密	硬	頸：1/12	外面V様式系タテ 内面ナデ・オサエ
560	100		土師器	甕	(布留系)	口縁	116 井戸	上層	A-1	布留古新	14.4			(3.2)	0.6	内外10R7/2にふい黄橙 断10R6/1 橙灰	密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ
561	100		土師器	甕	布留形	口縁	116 井戸	上層	A-1	布留古新	14.0			(3.7)	0.4	内257/2 灰黄 外10R7/2にふい黄橙 断10R6/2 灰黄褐	密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ内面ハケ 外面タテハケ、内面ケズリ
562	100	38	土師器	甕	布留形	完形	116 井戸	上層	A-1	布留古古 ～古新	14.4	19.9		22.9	0.3	内外258/3 淡黄 断257/1 灰白	密	硬	ほぼ完成形	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのちタテハケ 内面ケズリ底部煤跡 外面葉付着
563	100		土師器	高杯	精製B系統 大型	杯部	116 井戸	下層	A-2	布留古新	24.3			(9.7)	0.4	内外5R7/6 橙 断5R6/7 明赤褐	密	やや軟	口：1/12 以下	内外面細筋ヨコミガキ 凸面接合 在地胎土か → 磁地品or模倣品

第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
564	100	38	土師器	壺	(C系統)大型直口壺(小平底)	全形	116井戸	下層	A2	布留古新	12.3	24.9	3.9	26.1	0.9	内75R8/4 浅黄橙 外5R7/6 橙 新10R7/1 灰白	密	硬	口:10/12 底:12/12 全体90%以上	口縁部タテハケのちヨコナデ 外面上半タテハケ 下半ケズリ 内面底ナデ:ヨコナデ 外面接着
565	100	C10 39	土師器	甕	庄内形(非生駒)丸底	全形	116井戸	下層(最深部)	A2	布留古新	15.8	20.5		22.0	0.4	内75R7/4 にふい橙(口~脚) 75R3/1 黒褐(脚~底) 外N2.0 黒 新25R7/1 灰白	密	硬	口:8/12	口縁部ヨコナデ、打欠き 外面タタキのち全面ハケ 内面ケズリ 在地裏製品か
566	101		須恵器	杯身		口縁~底部	1298 落込み		P6	TK23 ~47	11.4			(5.5)	0.6	内外N6.0 灰 新N7.0 灰白	密	硬	口:2/12	底部回転ヘラケズリ右回り
567	101		須恵器	杯身		口縁~底部	1298 落込み		P6	TK23 ~47	12.0	14.4		(5.2)	0.3	内外N6.0 灰 新N7.0 灰白	密	硬	口:5/12	底部回転ヘラケズリ
568	101		須恵器	高杯	長脚	脚部	1298 落込み		P6	MT15 頃			7.1	(6.7)	0.7	内N6.0 灰 外N5.0 灰 新N7.0 灰白	やや密	やや硬	脚:7/12	円孔スカシ3方向 類別不明
569	101	36	(須恵器)	壺	陶質土器か	口縁~頸部	100落込み 周辺		P6	(~中期 前葉か)	15.0			(5.2)	0.6	内外10S/1 灰 新10R7/1 灰白	密	硬	口:3/12 頸:6/12	口縁部全面あり 回転ナデ
570	101		須恵器	壺		(口縁)	100落込み	(アゼ南・東肩)	P6	TK23 ~47	19.6			(5.6)	0.9	内断N7.0 灰白 外10R6/1 灰	やや密	やや硬	口:1/12	波状文1段
571	101		須恵器	甕		口縁	1298 落込み		P6	TK23 頃	18.0			(4.4)	0.5	内外断N7.0 灰白	密	硬	口:2/12	回転ナデ 内面4段
572	101		須恵器	壺		口縁	1298 落込み		P6	TK47 ~TK10	16.3			(5.5)	0.5	内外N6.0 灰 新10R6/1 褐灰	密	硬	口:3/12	回転ナデ
573	101		須恵器	壺	中型壺	体部	1298 落込み		P6	TK23 ~	(8.3)	13.8		(11.8)	0.5	内5B5/1 青灰 外5B4/1 暗青灰 新5B6/1 青灰	密	硬	全体60%	外面下半平行タタキ 内面下半あて具
574	101		須恵器	壺		頸部~体部	1298 落込み		P6	TK216 前後	(12.3)			(9.6)	0.4	内外N6.0 灰 新5R4/1 暗赤灰	密	硬	頸:1/12	外面平行タタキのち回転ナデ 内面あて具
575	101		須恵器	壺		頸部~底部	1298 落込み		P6	TK208 頃	(7.1)	21.2		(17.1)	0.7	内外N6.0 灰 新N7.0 灰白	やや密	やや硬	全体25%	体部中央回転力キメ 下半平行タタキのち回転ナデ 内面底部オサエ
576	101		土師器	甕	外反口縁	口縁~体部	1298 落込み		P6	中期 後葉~	19.9			(10.1)	0.4	内断75R7/6 橙 外75R7/4 にふい橙		やや軟	口:8/12	口縁ハケのちヨコナデ 外面ハケ 内面ナデか、接合痕 非在地胎土か
577	101		土製品	土錘		完形	1298 落込み		P6	中期か	長5.0	1.8	0.6		0.6	外10R7/3 にふい黄橙 新10R7/4 にふい黄橙	やや密	硬	ほぼ完形	上端下端切痕あり
578	102		土師器	壺	複合口縁壺	口縁	1503土坑		P6	布留古か		(20.2)		(2.5)	0.8	内10R7/3 にふい黄橙 外10R8/3 浅黄橙 新N5.0 灰	密	硬	屈:1/12	内外面ナデ 非在地胎土、搬入品か
579	103		土師器	小型器台	A系統小型器台A	口縁~脚部	1448P		P6	庄内~ 布留古	9.8			(6.3)	0.4	内外10R8/4 浅黄橙 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:5/12 接:12/12	内外面マメツ 非在地胎土(V様式胎土)
580	103		土師器	高杯	A系統	脚部	1291溝	(中世)	P6	庄内	3.2			(7.5)	0.7	内断 75R8/3 浅黄橙	密	やや軟	脚:12/12	外面タテミガキ 円孔スカシ4方向
581	103		土師器	壺	垂下口縁加飾壺 中型二重口縁壺	口縁	(第5・6層)	南高台②	P6	庄内古~中	17.9			(3.2)	0.5	内外5R6/6 橙 新10R8/4 浅黄橙	やや密	やや軟	口:4/12	口縁部波状文3段
582	103		土師器	壺	中型(平底)	体部	(第5・6層)	南高台②	P6	庄内~ 布留古	8.2	15.8	3.2	(11.8)	0.4	内75R7/6 橙 外5R6/6 橙 新N6.0 灰	密	やや軟	底:12/12	内外面マメツ
583	103		土師器	壺	阿波産大型	体部	(第6層)		P6	庄内か		(37.0)		(14.3)	0.6	内断10R8/3 浅黄橙 外5R4/4 にふい赤褐	密	硬	体:2/12	内外面マメツ 外面タテハケか 結晶片若多量含む ※ 阿波搬入品
584	103		土師器	甕	河内型庄内形生駒西産	口縁~肩部	(第6層)		P6	庄内新~ 布留古	17.0			(6.2)	0.4	内外断 75R5/4 にふい橙	やや密	やや軟	頸:1/12	口縁部ヨコナデ 外面細筋タタキ内面ケズリ 角閃石あり、生駒西産
585	103		土師器	甕	河内型庄内形生駒西産	頸部~肩部	(第6層)		P6	庄内新~ 布留古	11.0	14.0		(2.7)	0.3	内外5R3/1 黒褐 新10R7/2 にふい黄橙	やや密	硬	屈:1/12	外面細筋タタキ 角閃石あり、生駒西産
586	103		土師器	甕	河内型庄内形生駒西産	頸部	(第3層 除去面 精査)		A-1	布留古 か	11.0			(4.0)	0.4	内外10R4/2 灰黄褐 新N3.0 暗灰	やや密	やや軟	頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ケズリ 角閃石あり、生駒西産
587	103		土師器	甕か	山陰系 or 北近畿系	頸部	(第6層)		P6	布留 1298 落込み東 ~ 1450 周辺				(16.0)	0.5	内外25R2 灰白 新N4.0 灰	やや密	硬	屈:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 非在地胎土、搬入品か
588	103		須恵器	杯身		口縁~底部	1449P		P6	TK208	11.6	14.4		(4.3)	0.3	内断N7.0 灰白 外N6.0 灰	密	やや硬	口:7/12	底部回転ヘラケズリ左回り
589	103		須恵器	杯身		全形	(第6層)		P6	TK10	13.4	16.2		4.7	0.6	内外断N7.0 灰白	やや密	やや軟	口:6/12	底部回転ヘラケズリ左回り
590	103		須恵器	甕		体部	(第6層)		P6	MT15 あり (掘立31 周辺)	(6.0)	9.7		(6.5)	0.6	内外25S/1 黄灰 新25R7/1 灰白	密	硬	体:11/12	櫛形線文 穿孔部分使用痕あり
591	103		須恵器	壺		肩部	(第6層)	(南東 高台)	P6	TK216 ~208	(9.0)			(4.3)	0.7	内外N7.0 灰白 新25R6/1 赤灰	密	硬	頸:2/12	肩部波状文2条
592	103		須恵器	器台	筒形器台か	筒部	(第4・ 第5層)	(南東 上段)	P6	TK23 ~		(3.1)		(5.3)	0.8	内外5P85/1 青灰 新5R6/1 紫灰	密	硬	筒:3/12	文様帯波状文2段 方形スカシ3方向縦列配置
593	103		須恵器	大甕		口縁	(第3~ 第5層)		P6	TK23 ~	23.4			(7.8)	0.7	内5V6/1 灰 外N6.0 灰 新N7.0 灰白	密	硬	口:4/12	回転ナデ、平行タタキ 上面自然積
594	103		土師器	甕	布留形	口縁~体部	(第5・6層)	南高台①	P6	中期 後葉~	19.4	25.6		(30.8)	0.7	内75R7/3 にふい橙 外75R7/4 にふい橙 新5R6/6 橙	やや密	やや軟	口:5/12 頸:4/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面上半ナデ オサエ下半ケズリ
595	107		土師器	杯A		口縁~体部	100落込み 上面		A-1	8c 代か	14.4		10.3	(3.0)	0.4	内10R7/3 にふい黄橙 外断75R7/3 にふい橙	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
596	107	35	須恵器	杯身		全形	100落込み	最上層	A-1	TK23	10.6	12.3		4.7	0.3	内5P86/1 青灰 外5P85/1 青灰 新5R3/1 暗紫灰	密	硬	口:11/12 全体90%	底部回転ヘラケズリ右回り
597	107		須恵器	甕		口縁	100落込み	最上層	A-1	TK216 ~208	19.6			(6.3)	0.6	内5P85/1 青灰 外5P84/1 暗青灰 新5R5/1 赤灰	密	硬	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 上面4段
598	107		須恵器	甕		肩部	100落込み	最上層	A-1	TK73 ~216				(10.6)	1.1	内5P85/1 青灰 外5B4/1 暗青灰 新5R6/1 紫灰	やや密	硬	頸:1+1/12	回転ナデ 上面4段
599	107		土師器	大型鉢	布留系(山陰系)	口縁	100落込み	最上層	A-1	布留中	36.6			(5.2)	0.8	内25R7/2 灰黄 外25R2/2 灰白 新5R3/1 オリーブ黒	やや密	やや硬	屈:1/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土、搬入品か

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
600	107	35	須恵器	杯蓋		完形	100 落込み	上層	A-1	TK23	13.3			4.8	0.5	内断 10/6/1 灰 外 N5/0 灰	やや密	やや軟	口: 12/12 ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ左回り	
601	107		須恵器	高杯		脚部	100 落込み	上層	A-1	TK23 ~47			8.7	(5.7)	0.5	内断 5/8/1 灰白 外 10/4/1 灰	密	軟不長	底: 12/12 脚: 12/12	円孔スカン3方向	
602	107		須恵器	壺		口縁	100 落込み	上層	A-1	TK216 ~208	12.7			(4.0)	0.4	内外 5P/6/1 青灰 断 10/6/1 灰	密	硬	口: 5/12	波状文 施の可能性大	
603	107		須恵器	甕		体部	100 落込み	上層	A-1	TK208 ~23		9.9		(6.7)	0.8	内 N6/0 灰 外 N5/0 灰 断 10/R/2 灰黄褐	密	硬	体: 完形	体部凹突痕 穿孔下部使用痕あり	
604	107	35	須恵器	甕		体部	100 落込み	上層	A-1	TK216 ~208		11.2		(8.2)	0.6	内外 N4/0 灰 断 5R/4/1 暗赤灰	密	硬	体: 完形	体部凹突痕 底部回転ヘラケズリ	
605	107		須恵器	壺		口縁	100 落込み	上層	A-1	TK208	16.4				0.6	内外 5/6/1 灰 断 7.5/5/1 灰	密	軟	口: 2/12	波状文 2段	
606	107		須恵器	器台	筒形器台	筒部	100 落込み	上層	A-1	TK23 ~47		(6.8)		(5.6)	0.8	内外 N6/0 灰 断 5/7/2 灰白	密	硬	筒: 3/12	方形スカン3方向	
607	107		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	100 落込み	上層	A-1	中期 後半頃	19.5				(6.6)	0.7	内外断 2.5/8/4 淡黄	やや密	やや軟	口: 4/12	内外面マメツ 内面ナデか
608	107		土師器	小型器台 or 小型高杯	(精製 B系統か)	筒部 ~脚部	100 落込み	上層	A-1	庄内か		12.4		(6.7)	0.3	内外 2.5/R/6 橙 断 10/R/3 黒褐	やや密	やや硬	接: 12/12	内外面マメツ 精製 B系統か	
609	107		土師器	高杯	(B系統 I群系)	脚部	100 落込み	中層	A-1	布留 中中 ~中新					(7.0)	0.5	内 7.5/R/4 にふい 外 10/R/3 にふい 断 N3/0 暗灰	やや密	硬	脚: 5/12	脚部外面タテ面取り 内面シボリ 凸凹接合
610	107		土師器	高杯	C系統 II群系	脚部	100 落込み	中層	A-1	布留 中中 ~中新					(6.5)	0.5	内外 2.5/R/4 にふい 断 2.5/R/2 灰白 ・N5/0 灰	やや密	硬	脚: 6/12	脚部外面タテ面取り 内面ケズリ 凹部充填、棒状痕
611	107		土師器	小型器台	精製 B系統 小型器台 C	受部 ~脚部	100 落込み	中層	A-1	布留 中中	8.8				(6.7)	0.5	内断 7.5/R/4 にふい 外 7.5/R/3 にふい	密	やや軟	口: 6/12	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 精製胎土、非在地か
612	107		土師器	ミニチュア 土器	(精製 B系統か)	体部	100 落込み	中層	A-1	布留 中中 ~中新		6.1		(3.7)	0.5	内 10/R/3 にふい 外 10/R/6 赤 ・2.5/R/2 灰白 断 N4/0 灰	密	硬	体: 11/12	体部外面ヨコミガキ ※ 赤色顔料付着 小型丸底蓋のミニチュア模 倣品か、重量感あり 非在地胎土か	
613	107	35	土師器	小型丸底鉢	C系統 II群系 (底部あり)	全形	100 落込み	中層	A-1	布留 中中	12.8	10.0			8.4	0.6	内 7.5/R/4 にふい 外 7.5/R/6 橙 断 N4/0 灰	やや密	やや軟	口: 3/12 全体 60%	口縁部内外面ハケ 外面葉付着 重量感あり、在地胎土か
614	107	35	土師器	小型丸底壺	C系統 (精製 B系 統模倣)	全形	100 落込み	中層	A-1	布留 中中 ~中新	10.5	10.8			13.2	0.4	内 7.5/R/6 橙 外 5/R/6/4 にふい 断 10/R/3 浅黄橙	密精良	やや軟	口: 10/12 全体 90%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面半オサエ下 半ナデ 精良胎土、重量感あり 精製胎土の在り模倣品
615	107		土師器	壺	C系統 小型壺	全形	100 落込み	中層	A-1	布留 中中 ~中新	10.9	13.2			12.0	0.6	内 7.5/R/6 橙 外 7.5/R/4 にふい 断 N3/0 暗灰	やや密	硬	口: 1/12 頸: 6/12	口縁部オサエのちヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ底部指 痕痕 厚手、重量感あり 非在地胎土 ※ (周辺からの搬入品か)
616	107		土師器	壺	山陰系 中型 直口壺	口縁	100 落込み	中層	A-1	布留 古~中	13.8				(6.8)	0.5	内 10/R/2 にふい 外 2.5/5/2 暗黄 断 7.5/R/4 にふい	やや密	やや軟	口: 2/12 後: 4/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデか 非在地胎土(精良) 搬入品か 山陰系直口壺
617	107		土師器	壺	東海系 柳ヶ坪型 壺	口縁	100 落込み	中層	A-1	布留 古~中	16.8				(2.9)	0.6	内外 10/R/3 にふい 断 10/R/2 灰白	密	硬	口: 2/12	口縁部羽状文(尖突・貝殻 模倣) 搬入品か、東海系
618	107		土師器	壺	垂下口縁 加飾壺	口縁	100 落込み	中層	A-1	庄内~ 布留古	16.4				(1.9)	0.6	内外 7.5/R/4 にふい 断 10/R/2 灰白	やや密	やや軟	口: 2/12	波状文のち円形浮文
619	107		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西産	口縁	100 落込み	中層	A-1	庄内新 ~ 布留古	15.6				(3.4)	0.4	内外 10/R/3 にふい 断 N3/0 暗灰	やや密	やや軟	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 外面細筋タタキ 角内白あり、生駒西産
620	107		土師器	甕	V様式系	肩部	100 落込み	中層	A-1	庄内新 ~ 布留古	9.4				(3.0)	0.4	内 2.5/4/1 黄灰 外 10/R/2 灰黄褐 断 2.5/5/1 黄灰	密	やや軟	頸: 1/12	体部 V 様式系タタキ 内面ハケ・ナデ 非在地胎土か
621	107		土師器	高杯	C系統 II群系 無稜形	杯部	100 落込み	中層一拵	A-1	布留 中中 ~中新	14.7				(4.6)	0.5	内 2.5/8/2 灰白 外 10/R/2 灰白 断 2.5/6/1 黄灰	やや密	やや軟	口: 1/12 以下	杯部内外面ハケ 凹部充填、棒状痕 非在地胎土か
622	107	35	土師器	高杯	精製 B系統か 有稜形	杯部	100 落込み	中層一拵	A-1	庄内~ 布留中	15.5				(7.2)	0.3	内外 7.5/R/6 橙 断 10/R/3 浅黄橙	密	やや軟	口: 4/12	内外面ミガキ(方向不明) 非在地精良胎土、B系統か 系統不明 他地域系の可能性あり
623	107		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	100 落込み	中層一拵	A-1	布留 古新 ~中古	14.2				(5.9)	0.4	内 10/R/3 浅黄橙 外 10/R/4 にふい 断 N6/0 灰	やや密	硬	口: 6/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのち肩部ヨコ ハケ 内面ケズリ
624	107		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	100 落込み	中層一拵	A-1	布留 古新 ~中古	18.6				(10.2)	0.3	内 10/R/2 にふい 外 10/R/3 にふい 断 7.5/R/6 橙	密	硬	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 外面不定方向ハケ肩部ヨコ ナデ 内面肩部オサエ下半ケズリ
625	108		土師器	高杯	精製 B系統 椀形	口縁	100 落込み 土器溜 2	中層一拵	A-1	布留 中中	8.8	9.0			(2.5)	0.4	内 5/R/6 橙 外 N3/0 暗灰 断 2.5/6/2 灰白 断 2.5/6/1 黄灰	密	やや軟	口: 2/12	内外面細筋ヨコミガキ 精製 B系統、在地模倣品か
626	108		土師器	高杯	精製 B系統 小型	脚部	100 落込み 土器溜 2	中層一拵	A-1	布留 中中		14.0	(1.9)			0.4	内外 5/R/5/6 明赤褐 断 10/R/3 浅黄橙	普通	やや軟	脚: 2/12	外面細筋ヨコミガキ 内面ハケ 非在地胎土か → 搬入品の可能性あり
627	108		土師器	小型丸底壺	C系統 (B系統影 響)	全形	100 落込み 土器溜 2	中層一拵	A-1	布留 中中	13.0				9.1	0.6	内 2.5/R/6 橙 外 5/R/6 橙 断 5/5/1 灰	やや密	やや軟	口: 1/12 体: 完形	口縁部ハケ 体部外面ケズリ 胎土精良・厚手 → 精製 B系統の在地形 模倣品
628	108		土師器	小型器台	小型器台 C	上半 ~脚部	100 落込み 土器溜 2	中層一拵	A-1	布留 中中		9.3	(6.1)		0.5	内外 5/R/6 橙 断 5/R/6 明赤褐	密	硬	口: 6/12 全体 60%	口縁部ヨコナデ 外面細筋ヨコミガキ + タテ ミガキ 内面細筋ヨコミガキ 非在地胎土か → 搬入品か	
629	108		土師器	壺	(C系統か) 大型 直口壺	口縁 ~肩部	100 落込み 土器溜 2	中層一拵	A-1	布留 中中	16.6				(8.8)	0.5	内外面 7.5/R/8 橙	やや粗	やや軟	口: 1/12 以下 頸: 6/12	口縁部ヨコナデ
630	108		土師器	壺	広口 短頸壺	口縁	100 落込み 土器溜 2	中層一拵	A-1	布留 中中	17.8				(2.6)	0.4	内 2.5/7/1 灰白 外 2.5/4/2 暗黄 断 10/R/4 にふい	普通	やや軟	口: 2/12	内外面マメツ



第5節 (古墳) 土器類

No.	図 No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
631	108		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	100 落込み土器溜 1	中層一括	A-1	布留中中	14.5	(18+)		(7.5)	0.4	内10R8/4 浅黄橙 外7.5R7/4 にふい黄橙 新7.5R6/1 褐灰	密	やや軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ内面ハケ 外面タテハケ、内面ケズリ 非在地胎土か
632	108		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	100 落込み土器溜 2	中層一括	A-1	布留中中	15.6			(3.4)	0.4	内10R6/3 にふい黄橙 外5R2/1 黒褐 新10R6/2 灰黄褐	やや密	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ
633	108		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	100 落込み土器溜 2	中層一括	A-1	布留中中	15.4			(6.5)	0.4	内7.5R6/6 橙 外7.5R7/4 にふい黄橙 新10R6/6 明黄褐	やや密	硬	口:8/12	口縁部ヨコナデ内面ハケ 外面タテハケ肩部ヨコハケ 内面ケズリ 非在地胎土か
634	108		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	100 落込み土器溜 2	中層一括	A-1	布留中中	19.0			(4.1)	0.4	内10R7/3 にふい黄橙 外10R5/2 灰黄褐 新7.5R6/3 浅黄橙	やや密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ
635	108	35	土師器	高杯	精製B系統有稜形	口縁	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	15.6			(5.5)	0.3	内外5R6/6 橙 新10R7/4 にふい黄橙	密	硬	口:6/12 杯部約55%	杯部内外面細筋ヨコミガキ 内面放射ミガキ 凸面接合、三好I群系F類 搬入品 or 産地生產品
636	108		土師器	高杯	A系統か	脚部	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中			11.2	(5.8)	0.7	内7.5R7/4 にふい黄橙 外10R5/1 褐灰 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	脚:6/12 脚部約60%	内面脚部細筋ハケ 非在地胎土か(周辺地域か)
637	108		土師器	小型器台	A系統小型器台B	脚部	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中			11.6	(6.5)	0.6	内7.5R5/2 灰褐 外7.5R7/4 にふい黄橙 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	脚部完形	内外面マメツ 円孔スキャン3方向
638	108		土師器	壺	(布留系)中～小型壺	口縁	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	10.0			(4.3)	0.3	内外10R7/2 にふい黄橙 新2.5R6/1 黄灰	密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ
639	108		土師器	壺	(A系統)中型直口壺	全形	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	17.8	22.4		24.6	0.5	内2.5R8/2 灰白 外新10R6/3 にふい黄橙	やや密	やや軟	口:6/12 体:60%	外面タテ・ナナメミガキ 内面ケズリ 尖底 B系統影響のA系統
640	108		土師器	壺	A系統大型直口壺	口縁～肩部	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	13.0			(11.4)	0.7	内外7.5R8/4 浅黄橙 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:11+12	内外面マメツ 内面オサエ
641	108		土師器	壺	C系統大型直口壺	口縁	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	20.8			(8.8)	0.6	内外2.5R7/3 浅黄 新2.5R6/1 黄灰	やや密	硬	口:2/12 頸:3/12	体部外面・口縁部内面ハケ 体部内面ケズリ 非在地胎土か(周辺地域か)
642	108		土師器	壺	(平底)	底部	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中			4.9	(4.3)	0.8	内2.5R7/1 灰白 外2.5R3/1 黒褐 新2.5R5/1 黄灰	やや密	硬	底:8/12	平底・大型器底部 在地胎土
643	108	35	土師器	甕	(布留系)小型甕	全形	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	12.6	12.7		10.9	0.3	内7.5R7/6 橙 外10R7/3 にふい黄橙 新10R4/1 褐灰	密	硬	口:6/12 全体70%	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ケズリ 非在地胎土か (641:大型直口壺)と胎土 類似
644	108		土師器	甕	(庄内形)大和型か	口縁	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	(12.2)			(3.7)	0.5	内10R3/2 黒褐 外10R4/3 にふい黄橙 新10R8/3 浅黄橙	密	やや硬	頸:2/12	外面左上がりタタキ 内面ケズリ 非在地胎土か ※ 搬入品か(大和か)
645	108		土師器	甕	布留形	口縁	100 落込み土器溜 3	中層一括	A-1	布留中中	(16.0)			(3.4)	0.5	内10R7/4 にふい黄橙 外10R3/1 黒褐 新2.5R8/2 灰白	密	硬	口:1/12 以下	口縁部断片 大サイズか
646	109	C11 35	土師器	小型丸底鉢	C系統II群系(底部あり)	全形	100 落込み	中層	A-1	布留中中	13.2	9.3		7.8	0.4	内新7.5R8/3 浅黄橙 外N3.0 暗灰	やや密	やや軟	口:2/12 頸:3/12	口縁部内外面ハケ 外面ハケ 外面埋着、内面赤色顔料 付着 ※ 朱精製用土器の可能性 在地胎土か
647	109		土師器	小型器台	A系統	脚部	100 落込み	中層～下層	A-1	布留古			15.6	(4.3)	0.6	内外10R7/2 にふい黄橙 新10R8/1 灰白	密	硬	脚:3/12	外面ミガキ内面ハケ スキャン孔数不明
648	109		土師器	甕	(布留系)	口縁+体部	100 落込み	中層～下層	A-1	布留古	14.7	21.0		22.2	0.5	内2.5R7/1 灰白 外10R6/2 灰黄褐 新2.5R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:3/12	内外面マメツ 外面ハケか
649	109		土師器	甕	(布留系)	口縁	100 落込み	中層～下層	A-1	布留古	15.9			(5.0)	0.3	内10R6/1 褐灰 外10R8/2 灰白 新N4.0 灰	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ
650	109	C10 35	土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁～体部	100 落込み	中層～下層	A-1	庄内新～布留古	18.6	23.6		(20.0)	0.3	内新10R5/2 灰黄褐 外10R4/2 灰黄褐	やや密	やや軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ 外面右より細タタキ 下半タテハケ 内面ケズリ 角内石あり、生駒西麓産
651	109		土師器	壺	A系統短頸直口壺	口縁+肩部	100 落込み	中層～下層	A-1	庄内新～布留古	18.8	(29.4)		(11.7)	0.6	内外10R8/3 浅黄橙 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 体部外面V様式タタキ
652	109		土師器	鉢	山陰系大型鉢	口縁	100 落込み	中層～下層	A-1	布留古	45.6			(13.5)	0.7	内10R8/3 浅黄橙 外10R7/4 にふい黄橙 新N2.0 黒	普通	やや硬	稜:1/12	口縁部ヨコナデ 体部外面黒
653	109		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	100 落込み	(側溝層位不明)	A-1	庄内新～布留古	(15.8)			(2.2)	0.5	内7.5R3/2 黒褐 外7.5R2/1 黒褐 新7.5R4/3 橙	やや密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 角内石あり、生駒西麓産
654	110	35	土師器	高杯	A系統加飾有段高杯	杯部	100 落込み	最下層	A-1	庄内古	22.8			(6.2)	0.5	内10R7/3 にふい黄橙 外2.5R8/2 灰白 新N6.0 灰	やや密	やや軟	口:4/12	杯部内外面タテミガキ 口縁部竹管文
655	110	35	土師器	高杯	精製B系統有稜形か	脚部	100 落込み	最下層	A-1	庄内			15.8	(4.2)	0.3	内2.5R6/2 灰黄 外5R5/3 にふい赤褐 新5R5/8 明赤褐	密	硬	脚:5/12	脚部外面細筋ヨコミガキ 円孔スキャン3方向 非在地胎土、精良
656	110	35	土師器	壺	加飾超大型二重口壺	口縁～体部	100 落込み	最下層	A-1	庄内古		76.0			1.6	内2.5R8/2 灰白 外10R8/2 灰白 新5.3/1 オリーブ黒	やや粗	やや硬	全体5%以下	頸部～肩部波状文・直線文 主体の加飾 外面ミガキ・ケズリ 内面ナデ 破面焼成→焼成失敗品か 在地胎土(V様式)胎土
657	110		土師器	小型	(精製B系統)小型器台A	口縁	160 土坑	(100 落込み底面)	A-1	庄内	9.0			(2.0)	0.4	内5R6/6 橙 外5R6/4 にふい黄橙 新N5.0 灰	密	やや軟	口:1/12	内外面ヨコミガキ 在地胎土か(精良) 精製B系統影響の在地品か
658	110		土師器	壺	中型直口壺	口縁部	160 土坑	(100 落込み底面)	A-1	庄内	(12.2)			(5.2)	0.8	内外10R7/3 にふい黄橙 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	頸:1/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(精良)
659	110		土師器	高杯	(B系統C系統)折表系無稜形	接合部	100 落込み	(層位不明)	A-2	布留新 辻1・2				(2.7)	0.6	内10R8/3 浅黄橙 外10R7/6 明黄褐 新2.5R6/2 灰黄	やや密	硬	接:12/12	杯底部外面ケズリ 円蓋充填
660	110		土師器	高杯	B系統I群系	脚部	100 落込み	(層位不明)中層か	A-2	布留中			11.4	(7.9)	0.4	内2.5R7/1 灰白 外10R7/2 にふい黄橙 新2.5R6/3 にふい黄	やや密	硬	脚:7/12 脚部80%	外面タテ面取り 内面シボリ痕 凸面接合
661	110		土師器	壺	四国系か広口壺	口縁	100 落込み	(層位不明)中層～下層か	A-2	庄内古	13.8			(2.9)	0.8	内10R8/2 灰白 外10R7/3 にふい黄橙 新5.4/1 灰	やや密	硬	口:1/12 頸:4/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 非在地か、搬入品か

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
662	110		土師器	壺	阿波産 中型 広口壺	口縁	100 落込み	(層位不明) 中層～下 層対応か	A2	庄内古	12.0			(5.0)	0.7	内断5R7/8 橙 外5R6/8 橙	密	やや軟	屈:1/12	内外面マメツ 結晶片岩あり、阿波搬入品
663	110		土師器	壺	西部 瀬戸内か 複合 口縁壺	口縁	100 落込み	(層位不明) 中層～下 層対応か	A2	庄内古	15.0	(17.0)		(6.2)	0.7	内10R8/3 浅黄橙 外10R8/6 黄橙 断10R8/2 灰白	密	やや硬	屈:4/12 口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ・波状文 頸部外面タテハケ 西部瀬戸内(伊予など)搬 入品か
664	110		土師器	壺	瀬戸内か 大型複合 口縁壺	口縁	100 落込み	(層位不明) 中層～下 層対応か	A2	庄内古	29.6			(7.1)	0.9	内10R8/4 浅黄橙 外10R8/3 浅黄橙 断10R8/2 灰黄褐	密	やや硬	屈:2/12 口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ・波状文 櫛歯線文5条 非在地胎土か、搬入品か
665	110		土師器	壺	阿波産 二重 口縁壺	頸部	100 落込み	(層位不明) 中層～下 層対応か	A2	布留古～中	21.6			(12.4)	1.2	内外25R/2 灰白 断5R5/6 明赤褐	密	硬	頸:1/12	内外面マメツ 結晶片岩あり、阿波搬入品
666	111		土師器	甕	V様式系 く字甕	口縁	1280 溝		B-2	庄内	10.0			(4.2)	0.7	内10R8/2 灰白 外5R7/6 橙 断N30 暗灰	やや密	やや硬	頸:2/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(V様式胎土)
667	111		軟質土器	甌or鍋		把手	831 溝		P4	中期		(6.0)	3.3		2.7	外75R8/3 浅黄橙 断10R8/1 灰白	やや密	硬	(把手)	全体マメツ
668	112		須恵器	壺	中型	口縁 ～肩部	1279 溝	ポイント あり	B-2	TK47～	18.2			(7.4)	0.7	内外N6/0 灰 断N7/0 灰白	密	硬	口:4/12 頸:3/12	回転カキメ
669	112		須恵器	杯身		全形	1036 溝	ポイント あり	B-2	TK10	12.8	13.2		6.8	0.4	内外断N6/0 灰	密	硬	口:4/12 体:8/12	底部回転ヘラズリ左回り
670	112		土師器	甕	外反 口縁形	口縁 ～肩部	1036 溝	ポイント あり	B-2	辻4～	20.4			(6.6)	0.4	内75R8/4 浅黄橙 外5R8/4～7/4 淡橙～ふい 断75R8/4 浅黄橙		やや軟	口:7/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ナデオサエ
671	114		須恵器	杯蓋		口縁～ 天井部	1401P	掘立48	B-2	MT15	14.0			(3.8)	0.4	内外断N5/0 灰	密	硬	口:3/12	天井部回転ヘラズリ右回り
672	114		土師器	壺か	脚付壺か	接合部	竪穴 16・17	ポイント あり	P5	庄内～ 布留古	(4.6)			(3.0)	0.5	内外75R7/6 橙 断10R8/4 浅黄橙	密	軟	屈:完形	内外面マメツ 外面タテ面取りか
673	115		土師器	高杯	精製 B系統 庄内系 大型	杯部 +脚部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留古 ～中古	23.0	16.0	18.0		0.5	内外5R5/6 明赤褐 断10R5/2 灰黄褐	やや密	やや軟	口:9/12 脚:2/12	内外面マメツ 杯部外面ヨコミガキ 内面/Vケか 凸面接合 在地胎土 → 磁地品
674	115		土師器	高杯	(C系統か) 有稜外反	杯部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留中	15.0			(4.0)	0.5	内10R7/2 にふい黄橙 外10R6/1 褐灰 断75R4/3 褐	やや粗	やや軟	口:1/12	内外面マメツ 非在地胎土か
675	115		土師器	高杯	A系統か 小型・屈曲	脚部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留 中古	3.2	(5.9)		(5.5)	0.8	内外10R8/3 浅黄橙 断N6/0 灰	密	やや軟	脚:6/12	内外面マメツ 脚部内面ケズリ
676	115		土師器	高杯	(B系統)	脚部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留中	(2.6)			(6.0)	0.5	内外5R7/6 橙 断5R5/6 明赤褐	やや密	硬	接:完形	外面タテ面取り 内面シボリ痕 凸面接合
677	115		土師器	高杯	(B系統)	脚部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留 中前後				(8.1)	0.9	内外5R6/8 橙 断75R7/8 黄橙	やや密	やや硬	接:完形	内外面マメツ 脚部内面ケズリ、凸面接合 非在地胎土か (C系統影響・折衷的)
678	115		土師器	小型丸 底壺	C系統か	口縁 ～体部	竪穴9	埋土南東	P5	布留中	9.0	8.6		(8.5)	0.5	内25R/1 黄灰 外25R/3 淡黄 断10R8/4 にふい黄橙	やや密	やや軟	口:3/12 体:6/12	内外面マメツ 685 と胎土類似
679	115		土師器	壺	二重 口縁壺か	口縁	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留中	16.8			(3.2)	0.7	内外75R7/4 にふい黄橙 断25R/2 灰白	やや密	やや軟	口:5/12	口縁部ヨコナデ
680	115		土師器	壺	二重 口縁壺	口縁	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留中	16.0			(5.3)	0.6	内外25R/2 灰白 断10R6/4 にふい黄橙	やや密		口:1/12	口縁部ハケのちヨコナデ 非在地胎土か 搬入品か
681	115		土師器	壺	二重 口縁壺か	口縁屈 曲部	竪穴9		P5	布留 中古		(17.0)		(2.7)	0.7	内75R7/6 橙 外75R6/6 浅黄橙 断75R6/6 橙	やや密	硬	屈:2/12	内外面ヨコナデ
682	115		土師器	壺	(A系統) 大型	頸部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留 古～中	(11.2)			(4.8)	0.8	内10R8/3 浅黄橙 外10R8/2 灰白 断N6/0 灰	やや密	やや硬	頸:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
683	115		土師器	甕	河内型 庄内形か 生駒西麓産	口縁	竪穴9	床下凹み (南半)	P5	布留 古～中 か				(2.1)	0.4	内75R4/2 灰褐 外10R2/1 黒 断75R5/4 にふい黄	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 庄内形甕か 角閃石あり、生駒西麓産
684	115		土師器	甕	布留形	口縁 ～肩部	竪穴9	床面 ポイント	P5	布留中	13.2			(7.4)	0.5	内75R6/6 橙 外75R6/6 橙 断25R/2 灰黄	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
685	115		土師器	甕	布留形	口縁 ～肩部	2049P	(竪穴9 内)	P5	布留 中古	15.2			(4.5)	0.4	内10R7/3 にふい黄橙 外75R6/6 橙 断5R8/1 灰白	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 未定型、678 と胎土類似
686	115		土師器	高杯	(A系統か)	脚部	竪穴9 (上面)		P5	庄内～ 布留古		(16.4)	15.2	(1.9)	0.8	内10R7/4 にふい黄橙 外10R8/3 にふい黄橙 断25R/2 灰白	やや密	やや軟	脚:4/12	内外面マメツ 円孔スキャン(孔数不明) 在地胎土か(磁地品)
687	115		土師器	壺	(A系統か) 広口 短頸壺	口縁	竪穴9 (上面)		P5	庄内～ 布留古	17.2			(3.2)	0.6	内10R7/4 にふい黄橙 外75R8/4 浅黄橙 断25R/2 灰白	やや密	やや軟	頸:2/12	内外面マメツ
688	115		土師器	甕	布留形	口縁 ～肩部	竪穴9 (上面)		P5	布留古	13.4			(5.5)	0.4	内N6/0 灰 外10R7/4 にふい黄橙 断N6/0 灰白	やや密	やや軟	口・頸: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 非在地胎土か ※(685 と胎土類似)
689	116		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西麓産	口縁	497P	竪穴10 内ヒット	P5	庄内新 ～布留古	16.0			(2.5)	0.3	内外N2/0 黒 断75R4/2 灰褐	やや密	硬	頸:1/12	口縁部ヨコナデ 外面埋付着被熱赤変 角閃石あり、生駒西麓産
690	116		土師器	甕か	A系統	小平底	竪穴10	埋土南半	P5	庄内新 ～布留古		3.6	(2.0)	0.7	内25R/2 灰白 外5R9/1 灰 断5R7/1 灰白	やや密	やや軟	底:3/12	内外面マメツ	
691	118		須恵器	杯身		受部 ～底部	竪穴34		B-2	TK208 ～23		13.0		(4.5)	0.7	内5R7/1 灰白 外10R7/1 灰白 断5R6/1 灰	密	やや軟	口:2/12	底部回転ヘラズリ左回り
692	118		須恵器	杯蓋		口縁～ 天井部	1287P	竪穴34	B-2	TK23 ～47	14.1			(3.6)	0.3	内断10R6/1 灰 外N6/0 灰	やや密	やや硬	口:1/12 以下	回転ナデ
693	118		須恵器	甕		口縁	1287P	竪穴34	B-2	TK47～	22.2			(5.1)	0.7	内N6/0 灰 外N5/0 灰 断75R6/1 褐灰	やや密	硬	口:1/12	回転ナデ
694	118		土師器	甕	(布留系か)	口縁 ～肩部	1287P	竪穴34	B-2	辻4～	14.9	15.1		(4.6)	0.6	内外25R/2 灰黄 断25R/3 浅黄	やや密	やや硬	口:1/12	口縁部ハケのちヨコナデ 外面タテハケ内面ナデ
695	118		土師器	甕	外反 口縁形	口縁 ～肩部	1293 土坑	(竪穴 34内)	B-2	辻4～	12.8	13.0		(6.5)	0.5	内外 10R7/3 にふい黄橙 断10R7/2 にふい黄橙	やや密	やや硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 内面オサエ・ハケ
696	118		軟質土器	甌or鍋		把手	1293 土坑	(竪穴 34内)	B-2	中期					3.9	内5R7/6 橙 外断75R8/2 灰白 ・75R7/2 弱褐灰	やや密	やや硬	(把手)	オサエ整形

第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
697	119		土師器	高杯	精製B系統か大型	脚部	竪穴18	ポイントあり(壁面内)	P5	庄内~布留古		(15.0)	14.8	(9.8)	0.5	内外2.9/7.3 浅黄 断5.9/6.6 橙	密	やや硬	接:12/12 脚:2/12	内外面マメツ 凸面接合 円孔スカシ4方向 非在地胎土(精良) ※ 搬入品(大和or河内)
698	119		土師器	高杯	精製B系統か小型	脚部	(竪穴18)	(北側溝内)	P5	庄内~布留古			10.4	(5.3)	0.4	内2.9/8.3 淡黄 外7.9/7.4にふい 断N4.0 灰	密	やや硬	屈:12/12 脚:2/12	内外面マメツ 外面ヨコミガキか 非在地胎土(精良)
699	119	39	土師器	ミニチュア土器	鉢形	完形	竪穴18	ポイントあり	P5	庄内か	5.8	6.3	3.8	5.1	0.6	内7.9/6.4にふい 外10.9/7.2にふい 断2.9/2.2 灰白	やや密	硬	ほぼ完形	ハケナテ整形
700	119		土師器	小型丸底鉢	精製B系統	屈曲部~体部	竪穴18	埋土西	P5	庄内新~布留古	(9.8)	11.6		(3.9)	0.3	内外5.9/5.3にふい 断10.9/6.3にふい 黄橙	密	やや軟	屈:2/12	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 非在地胎土(精良) ※ 搬入品(大和or河内)
701	119		土師器	壺	中~小型丸底	底部	竪穴18		P5	庄内新~布留古				(1.7)	0.6	内10.9/8.4 浅黄 外7.9/6.6 橙 断2.9/2.2 暗灰	やや密	やや軟	底:12/12	外面タタキなし 在地胎土(V様式胎土)
702	119		土師器	壺	C系統中型直口壺	口縁	竪穴18	埋土西	P5	布留古~	16.8			(6.1)	0.6	内外7.9/7.6 橙 断5.9/5.1 灰	やや密	やや硬	口:2/12	口縁部外面タテハケ内面ヨコハケのちヨコナデ
703	119		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	竪穴18	埋土西	P5	庄内~布留古	14.0			(1.3)	0.5	内10.9/7.4にふい 外10.9/6.3にふい 断N4.0 灰	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面煤
704	119		土師器	壺	垂下口縁加飾壺二重口縁壺	口縁	(竪穴18上面)		P5	庄内	20.4			(1.4)	0.6	内10.9/5.2 灰黄 外2.9/7.3 浅黄 断N3.0 暗灰	やや密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ・割離 口縁部内面波状文ミガキ 非在地胎土(周辺部)
705	119		土師器	壺	小型加飾壺生駒西産か	頸部	(竪穴18上面)		P5	庄内か	11.0			(2.4)	0.6	内外7.9/5.6 明 断7.9/5.1 黄灰	密	やや軟	屈:1/12	頸部突帯、刻目あり 角閃石あり、生駒西産か
706	119		土師器	有孔鉢	(A系統)	底部	(竪穴18上面)		P5	布留古か			1.9	(2.7)	0.5	内10.9/8.2 灰白 外10.9/7.3にふい 断N3.0 暗灰	やや密	やや軟	孔:9/12	外面タタキなし 在地胎土(V様式胎土)
707	119		土師器	壺or鉢	広口短頸壺or小型鉢	口縁	(竪穴18上面)		P5	庄内か	15.9			(5.4)	0.5	内8.0 灰白 外10.9/8.4にふい 断10.9/5.2 灰黄	やや密	やや軟	口:1/12 頸:1/12	内外面マメツ
708	119		土師器	壺	讃岐系近畿型大型複合口縁壺生駒西産	口縁~頸部	(竪穴18上面)		P5	布留古前後	26.0			(6.4)	1.8	内外5.9/6.6 橙 断2.9/4.1 黄灰	やや密	硬	頸:1/12	頸部内面ハケ 角閃石あり、生駒西産
709	119		土師器	甕	布留系	口縁~頸部	(竪穴18上面)		P5	布留古	13.8			(4.1)	0.4	内10.9/8.4 浅黄 外10.9/8.2 灰白 断10.9/7.1 灰白	やや密	やや軟	頸:5/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ケズリ
710	123	39	土師器	壺	大型二重口縁壺	頸部~肩部	竪穴8	床面ポイント	P5	庄内新~布留古	7.6	29.6		(16.2)	0.7	内外7.9/7.4にふい 断7.9/5.1 灰	密	硬	頸:6/12	口縁部体部外面タテミガキ 内面ナデ 頸部突帯、頸部竹管文4列+ 在地胎土(精良) ※ 類別: 梶原台状壺
711	123		土師器	高杯	B系統I群系	脚部	竪穴8or12	床面ポイント	P5	布留古~中				(7.3)	0.7	内外7.9/7.4にふい 断7.9/6.3にふい 黄橙	密	硬	接:12/12 脚:1/12 以下	外面タテ面取り内面シボリ 凸面接合 ※ 竪穴12に伴うか
712	123		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	竪穴8or12	埋土	P5	古墳前期				(1.7)	0.4	内断10.9/8.2 灰白 外10.9/3.1 黒褐	やや密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ
713	125	39	土師器	小型器台	精製器種小型器台B	杯部	458 土坑	竪穴13(壁際土坑)	P5	布留中中	5.0			(4.5)	0.4	内外10.9/7.4にふい 黄橙+4.0 灰 断10.9/7.4にふい 黄橙	やや密	軟	口:12/12	内外面マメツ 在地胎土
714	125	39	土師器	小型器台	精製器種小型器台B	脚部	458 土坑	竪穴13(壁際土坑)	P5	布留中中		9.6	(5.6)	0.3	内外10.9/8.4 浅黄 断7.9/7.6 橙	密	軟	脚:7/12	内外面マメツ 円孔スカシ3方向 在地胎土	
715	125	39	土師器	壺	精製B系統中型直口壺	ほぼ完形	458 土坑	竪穴13(壁際土坑)	P5	布留中中	11.1	16.1	17.0	0.4	内外断5.9/7.8 橙	密	軟	口:10/12	全体マメツ・調整不明 口縁部外面ヨコミガキか 口縁部内面ヨコミガキのち 放射ミガキ 接合痕あり 搬入品か	
716	125		土師器	壺	垂下口縁二重口縁壺	口縁	竪穴13	埋土	P5	古墳前期			(1.7)	0.6	内10.9/4.2 灰黄 外7.9/6.3にふい 断7.9/3.6 明	やや密 精良	やや軟	口:1/12 以下	口縁部波状文 非在地胎土か	
717	125		土師器	ミニチュア土器	鉢形	体部~底部	竪穴13	壁溝	P5	布留中か		2.7	(3.0)	0.6	内外5.9/6.6 橙 断10.9/8.4 浅黄	やや密	やや軟	底:12/12	ナデオサエ成形	
718	127		土師器	高杯	A系統	脚部	竪穴7	埋土北東	P5	庄内~布留古	(3.4)		(6.0)	1.3	内7.9/6.2 灰 外7.9/5.5にふい 断N5.0 灰	やや密	やや軟	屈:6/12	外面タテミガキ 円孔スカシ(3方向か)	
719	127		土師器	壺	直口壺(中・小型)	口縁	竪穴7	埋土南東	P5	庄内~布留古	8.6		(5.1)	0.4	内外10.9/6.2 灰黄 断10.9/7.4にふい 黄橙	やや密	やや軟	口:3/12	口縁部外面タテミガキ 在地胎土(精良) ※ 720と同一個本	
720	127		土師器	壺	(小平底)	底部	竪穴7	埋土南東	P5	庄内~布留古		(8.4)	(2.8)	0.4	内断10.9/8.2 灰白 外10.9/8.4 浅黄	密	やや軟	底:12/12	外面ミガキか 在地胎土(精良) ※ 719と同一個本	
721	127		土師器	壺	中型広口短頸壺か	口縁	竪穴7		P5	布留古か	13.2		(3.7)	0.6	内10.9/8.3 浅黄 外2.9/6.2 灰黄 断10.9/8.3 浅黄 ・N3.0 暗灰	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデか	
722	127		土師器	壺	広口短頸壺	口縁	竪穴7	埋土南東	P5	庄内~布留古	14.4		(4.5)	0.6	内N5.0 灰 外10.9/6.4にふい 断10.9/8.3 浅黄	やや密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ	
723	127		土師器	壺	A系統中型壺	肩部	竪穴7	埋土北西	P5	庄内~布留古	(9.0)	15.8	(6.7)	0.6	内2.9/4.1 黄灰 外10.9/5.2 灰黄 断2.9/4.2 暗灰	密	硬	頸:2/12	外面タテミガキ(平滑) 内面ナデ・接合痕 非在地胎土か	
724	127		土師器	甕	(V様式系)くの字甕か	口縁	竪穴7		P5	布留古か	12.4		(2.2)	0.5	内2.9/7.2 灰黄 外10.9/7.3にふい 断2.9/5.1 黄灰	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部タテハケのちヨコナデ 布留影響か	
725	127		土師器	甕	河内型庄内形生駒西産	口縁	竪穴7	埋土南東・南西	P5	庄内新~布留古	14.6		(3.0)	0.4	内10.9/4.3にふい 外断10.9/3.2 黒褐	やや密	やや軟	頸:1/12	内外面マメツ 角閃石あり、生駒西産	
726	127		土師器	甕	庄内形か	口縁	竪穴7		P5	布留古か			(2.0)	0.5	内外10.9/6.2 灰黄 断7.9/7.6 橙	やや密	やや軟	口:1/12 以下	内外面マメツ 非在地胎土か	
727	127		土師器	有孔鉢	A系統	体部~底部	竪穴7	床面北東埋土北東	P5	庄内新~布留古		(11.0)	1.6	(4.8)	0.5	内7.9/6.3にふい 外10.9/6.2 灰黄 断10.9/8.3 浅黄	やや密	硬	底:12/12	外面タタキか

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
728	127		土師器	甕	布留形	口縁+肩部	竪穴7	埋土南西	P5	布留古	16.5			(5.8)	0.7	内10R41褐灰 外M40灰 新10R32黒褐	やや密	硬	口：1/12 以下 頸：2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのち肩部ヨコナデ 内面ケズリ
729	127		土師器	甕	(布留系)	口縁	竪穴7	壁溝	P5	布留古か				(2.9)	0.5	内外10R52灰黄褐 新10R44褐	やや密	硬	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ
730	127		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西麓産	口縁	竪穴7	床面直上	P5	庄内新 ~ 布留古				(2.1)	0.5	内7.5R32黒褐 外7.5R21黒 新7.5R43褐	やや密	やや軟	口：1/12 以下 (細片)	角閃石あり、生駒西麓産
731	127		土師器	高杯		接合部	竪穴7	床下	P5	庄内新 ~ 布留古	3.3			(2.3)	0.5	内7.5R66橙 外5R66橙 新10R41褐灰	やや密	やや軟	屈：12/12	外面ミガキ 在地胎土(V様式の胎土)
732	127		土師器	甕	河内型 庄内形 (非生駒)	口縁	472P	(竪穴7 内ビット)	P5	布留古か				(2.3)	0.5	内外 10R73にふい黄橙 新N40灰	やや密	やや軟	口：1/12 以下	口縁部ヨコナデ 在地胎土(雲母あり)
733	127		土師器	壺	東海系	肩部	617P	(竪穴7 内ビット)	P5	布留古か				(3.4)	0.7	内N30暗灰 外7.5R76橙 新7.5R51褐灰	やや密	硬	肩：1/12	肩部外面直線文+羽状文(貝 殻模様) 非在地胎土(精良) ※ 搬入品か
734	127		土師器	高杯	無稜 外反形	杯部	竪穴7	(床面 北西)	P5	布留新 ~ 辻1・2	18.4			(5.3)	0.4	内外7.5R76橙 新2.5R2灰白	やや密	やや軟	口：5/12	内外面マメツ 杯部ヨコナデ ※布留新段層積 ※ 隣接竪穴遺物6の混入か
735	129		土師器	高杯	C系統 II群系	接合部	竪穴11	埋土北西	P5	布留新 ~ 辻2~3	(2.3)			(1.3)	0.6	内外7.5R86浅黄橙 新10R83浅黄橙	やや密	やや軟	接：12/12	円盤充填・棒状痕
736	129		土師器	高杯	B系統 I群系	接合部	竪穴11	床面 ポイント 内側溝内	P5	布留新 ~ 辻2~3	(2.4)			(2.0)	0.8	内外5R76橙 新10R83浅黄橙	やや密	やや軟	接：12/12	凸面接合
737	129		土師器	高杯	C系統 II群系	接合部	竪穴11	埋土南東	P5	布留新 ~ 辻2~3	(2.2)			(1.7)	0.6	内外 10R73にふい黄橙 新10R61褐灰	やや密	やや硬	接：12/12	円盤充填・棒状痕
738	129		土師器	甕	布留形	口縁	竪穴11	埋土南東	P5	布留新 ~ 辻2~3	14.4			(4.0)	0.5	内7.5R83浅黄橙 外2.5R73浅黄 新2.5R72灰黄	やや密	やや軟	頸：2/12	口縁部ヨコナデ 肩部内面オサエ 非在地胎土か (739と同一胎土)
739	129		土師器	甕	布留形	口縁 ~ 肩部	竪穴11	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	12.2	(14.0)		(5.5)	0.4	内7.5R83浅黄橙 外7.5R76橙 新10R73にふい黄橙	やや密	やや軟	口：2/12	内外面マメツ 肩部内面ケズリ 非在地胎土か (738と同一胎土)
740	129		土師器	甕	布留形	口縁 ~ 体部	竪穴11	床面 ポイント 外側溝内 + 内側溝内	P5	布留新 ~ 辻2~3	14.4	20.8		(10.5)	0.4	内10R73にふい黄橙 外10R84浅黄橙 新7.5R66橙	やや密	硬	頸：4/12	口縁部ヨコナデ 外面タテヨコハケ 内面ケズリ
741	129		土師器	高杯	C系統 II群系	接合部	389溝	(竪穴11 上面溝)	P5	布留新 ~ 中前期 前半	(3.0)			(3.0)	0.7	内外7.5R76橙 新5R61灰	やや密	やや軟	接：12/12	脚部内面ケズリ 円盤充填・棒状痕 在地胎土(735と同一胎土)
742	129		土師器	高杯	(C系統 II群系)	脚部	389溝	(竪穴11 上面溝)	P5	布留新 ~ 中前期 前半		(7.5)	(6.5)		0.7	内外7.5R83浅黄橙 新10R831黒褐	密	やや軟	接：12/12 屈：12/12	円盤充填 外面ハケか 非在地胎土、搬入か
743	129		土師器	高杯	C系統 II群系	脚部	562土坑 (上面)		P5	布留新 ~ 中前期 前半	(2.8)			(7.4)	0.5	内外新5R76橙	やや密	硬	接：12/12	円盤充填・棒状痕
744	129		土師器	土師器	山陰系	口縁	(竪穴11 上面・周辺)		P5	布留新 ~ 中前期 前半	14.0			(5.3)	0.7	内外 10R73にふい黄橙 新2.5R41黄灰	やや密	やや軟	口：3/12	口縁部ヨコナデ、端部厚 非在地胎土か(搬入品か)
745	129		土師器	須恵器	壺	頸部	(竪穴 11内)	ポイント あり (内側溝 上面)	P5	TK216				(4.4)	0.7	内N40灰 外N30暗灰 新N70灰白	密	硬	頸：1/12	回転ナデ
746	129		土師器	甕	V様式系 (平底)	底部	(竪穴 11内)	ポイント あり (内側溝 上面)	P5	庄内か		5.0	(2.9)		0.9	内N30暗灰 外2.5R62灰黄 新7.5R51灰	やや密	やや軟	底：3/12	外面タタキ 在地胎土(V様式の胎土) ※ 直接伴わない
747	130		土師器	高杯	B系統 I群系 無稜 外反形	杯部	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	18.4			(5.3)	0.5	内外7.5R84浅黄橙 新7.5R66橙	やや密	やや軟	接：3/12	内外面マメツ 凸面接合
748	130		土師器	高杯	B系統 I群系 無稜 外反形	杯部 + 脚部	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	18.0	11.7	(12.7)		0.4	内新10R82灰白外 7.5R66橙	やや密	やや軟	接：12/12 脚：4/12	内外面マメツ 脚部外面タテ面取り 内面マメツ痕 凸面接合
749	130		土師器	高杯	(B系統 I群系) 無稜 外反形	杯部	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	18.8			(6.5)	0.5	内7.5R74にふい橙 外10R82灰黄褐 新10R72にふい黄橙	やや密	硬	口：1/12 屈：3/12 接：12/12	口縁部ヨコナデ 杯部外面不定方向ナデ 凸面接合か I群系・II群系折衷的資料
750	130	39	土師器	高杯	C系統 II群系 無稜 外反形	杯部	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	16.9			(4.9)	0.5	内外新 7.5R83浅黄橙	やや密	やや軟	口：6/12 杯：60%	内外面マメツ 円盤充填・棒状痕
751	130		土師器	高杯		脚部	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3		12.6	(5.1)		0.6	内N40灰 外2.5R73浅黄 新2.5R71灰白	やや密	やや軟	脚：4/12	内外面マメツ 痕屈曲部オサエ
752	130		土師器	甕	布留形	口縁	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	15.4			(3.1)	0.5	内7.5R66橙 外10R72にふい黄橙 新2.5R31黒褐	やや密	やや軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ
753	130		土師器	甕	布留形	口縁	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	14.6			(2.7)	0.5	内10R73にふい黄橙 外10R83にふい黄橙 新2.5R82灰白	やや密	やや軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ
754	130		土師器	甕	布留形	口縁 ~ 肩部	竪穴6	床面 ポイント	P5	布留新 ~ 辻2~3	13.3			(7.9)	0.4	内外新 10R72にふい黄橙	やや密	やや軟	口：4/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 体部内面ケズリ
755	130		土師器	甕	外反 口縁形	口縁	竪穴6	埋土北西	P5	布留新 ~ 辻2~3	13.0			(3.4)	0.5	内2.5R83淡黄 外10R73にふい黄橙 新7.5R61灰	やや密	やや軟	口：3/12 頸：4/12	口縁部ヨコナデ
756	130		須恵器	甕		体部	竪穴6	床面 ポイント	P5	TK73				(4.8)	0.9	内2.5R72灰黄 外2.5R71灰白 新7.5R76黄橙	密	軟不良	体部 小破片	外面平行タタキ 内面心円あて具痕(弱い) 焼成不良
757	132		土師器	壺	精製 B系統 中型	体部	竪穴3	(埋土)	B-1	布留古か		(14.6)		(3.8)	0.4	内外2.5R66橙 新2.5R58明赤褐	密 精良	硬	体：1/12	外面ハケの細筋ヨコミガキ 内面オサエ 非在地胎土、搬入品か



第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
758	132		土師器	甕	河内型庄内形生駒西産	肩部	竪穴3	(埋土)	B-1	庄内新~布留古	8.8			(2.7)	0.3	内外10FR5/2 灰黄褐 断N40 灰	やや密	硬	頸:3/12	外面極細タキ内面ケズリ 角内石あり、生駒西産	
759	132		土師器	壺	平底広口短頸壺か	頸部~底部	竪穴3	床面ポイント	B-1	庄内~布留古	9.0	4.2	(13.7)	0.4	内N40 灰 外7.5FR3にふい壺 断2.5Y7/1 灰白	やや密	硬	底:6/12	内面ナデ 在地胎土(V様式)胎土		
760	132		土師器	高杯	大型有段形	杯部+脚部	91 土坑	竪穴2	B-1	布留新~辻2~3	22.6		14.6	(15.0)	0.6	内外断 10FR4 浅黄橙	やや密	やや硬	口:2/12 稜:4/12 底:2/12	内外面マメツ 杯部ヨコナデ	
761	133		土師器	甕	外反口縁形	口縁	84・85P	掘立4	B-1	中期後葉~	14.5			(3.3)	0.5	内7.5FR4 浅黄橙 外7.5FR4にふい壺 断10FR1 褐灰	やや粗	やや硬	口:1/12	内外面マメツ	
762	134		土師器	高杯	椀形	接合部	55P	掘立1	B-1	辻3~4				(1.3)	0.7	内外断5FR7/6 橙	密	やや軟	接:12/12	樽状痕 内外面マメツ	
763	134		土師器	高杯	C系統	脚部	(35 溝)	(掘立1) (南側溝) ポイントあり	B-1	辻3			11.0	(8.9)	0.5	内外5FR5/6 明赤褐 断10FR3/1 黒褐	やや密	軟 悪い	底:2/12 接:6/12 脚部30%	内外面マメツ 内面シボリ痕	
764	134		土師器	高杯	C系統	脚部	(35 溝)	(掘立1) (南側溝) ポイント	B-1	辻1~3				(7.6)	0.7	内5FR6/6 橙 外7.5FR7/6 橙 断7.5Y2/1 黒	やや密	やや軟	脚部60%	内外面マメツ 脚部内面ケズリ	
765	134		土師器	高杯	阿波産 屈曲高杯	脚部	(35 溝)	(掘立1) (南側溝) ポイント	B-1	布留か				(5.7)	0.6	内5FR6/8 橙 外5FR6/6 橙 断10FR7/4にふい黄橙	やや密	普通	脚部60%	内面シボリ 結晶片岩含有あり → 阿波産品	
766	134		土師器	甌		口縁	(35 溝)	(掘立1) (南側溝) ポイント	B-1	中期後葉	30.8			(5.8)	0.7	内外断 5FR~2.5FR6/8 橙	やや密	軟	口:1/12	内外面マメツ	
767	134		須恵器	杯蓋		口縁~天井部	35 溝	掘立1	B-1	TK208 ~23	12.4			4.3	0.5	内N70 灰白 外N60 灰 断N80 灰	やや密	良好	口:5/24	天井部回転ヘラケズリ左回り	
768	134		須恵器	無蓋高杯		口縁	35 溝	掘立1	B-1	TK208 頃	16.0			(4.4)	0.3	内N40 灰 外5B3/1 暗青灰 断N40 灰	やや密	硬	口:1/12	液状文 内面薄灰あり	
769	134		須恵器	壺		口縁	(35 溝)	(掘立1) (南側溝) ポイント	B-1	TK23 ~47	17.8			(5.0)	0.6	内外N60 灰 断5PB6/1 青灰	やや密	やや軟	口:1/12	外面カキメ	
770	134		土師器	甕	布留形	口縁	35 溝	掘立1	B-1	辻3前後	17.0			(3.4)	0.5	内10FR7/2にふい黄橙 外7.5FR3にふい壺 断7.5FR6/6 橙	やや粗	良好	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 内面ヨコナデのちハケ	
771	134		製塩土器		小型椀形	底部	35 溝	掘立1	B-1	中期		0.6	(0.9)	0.4	内N70 灰白 外10FR4/4 浅黄橙 断N60 灰	密	やや軟	底:12/12	ナデ・オサエ 胎土精良、総計53g		
772	134		須恵器	杯蓋		全形	(35 溝)	(周辺) (掘立1)	B-1	TK208 ~23	11.6			4.0	0.5	内5P5/1 紫灰 外5B3/1 暗青灰 断5FR5/1 紫灰	密	堅緻	口:3/12	天井部回転ヘラケズリ	
773	134		須恵器	杯身か		口縁~底部	(35 溝)	(周辺) (掘立1)	B-1	TK208 頃	11.2			(5.3)	0.6	内5PB6/1 青灰 外断N60 灰	密	硬	口:7/12	底部回転ヘラケズリ左回り	
774	134		須恵器	有蓋高杯		接合部	(35 溝)	(周辺) (掘立1)	B-1	TK208 ~23		13.0		(2.7)	0.5	内外N60 灰 断N60 灰	密	硬	受:3/12	杯底部回転ヘラケズリ 4方向スカシカ	
775	134		須恵器	高杯		脚部	(35 溝)	(周辺) (掘立1)	B-1	TK208 ~23			9.5	(5.6)	0.6	内外断N60 灰	密	硬	底:2/12	外面カキメ 3方向スカシ	
776	135		須恵器	杯身か		受部~体部	43P	掘立2	B-1	TK208 ~23		(13.2)	(2.5)	0.4	内断N70 灰 外5PB6/1 青灰	密	硬	受:2/12	底部回転ヘラケズリ		
777	135		土師器	高杯	C系統 II群系 無稜 外反形	全形	(掘立2 周辺)	ポイントあり	B-1	布留 中新~新	16.4	12.6	14.8	0.4	0.4	内10FR7/3にふい黄橙 外10FR2/2 灰黄褐 断2.5Y7/1 灰白	やや密	やや軟	口:3/12 脚:7/12	内外面マメツ 脚部内面ケズリ 円盤充填・樽状痕	
778	135		土師器	壺	C系統 小型 丸底壺	全形	(掘立2 周辺)	ポイントあり	B-1	布留 中新~新	7.5	9.2		8.6	0.4	内5FR6/6 橙 外10FR7/3にふい黄橙 断7.5FR7/3にふい壺	やや密	やや軟	口:4/12 頸:8/12 全体60%	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 底部内面留痕	
779	135		土師器	壺	C系統 大型 直口壺	頸部~肩部	(掘立2 周辺)	ポイントあり	B-1	布留 古墳	12.0	29.6	(9.1)	0.4	0.4	内外2.5Y7/2 灰黄 断2.5B2 灰白	やや密	やや軟	頸:2/12	外面ハケ 内面ケズリ	
780	137	42	須恵器	杯蓋		全形	450 落込み	(南西)	P5	TK208 ~23	12.8			4.4	0.4	内N40 灰 外N60 灰 断N80 灰白	密	硬	口:2/12	天井部回転ヘラケズリ	
781	137	42	須恵器	杯蓋		口縁~天井部	450 落込み	(南東)	P5	TK208 ~23	14.0			(4.1)	0.4	内外断N70 灰白	密	硬	口:2/12 稜:3/12	天井部回転ヘラケズリ左回り	
782	137	42	須恵器	有蓋高杯蓋		全形	450 落込み	(北東)	P5	TK208 ~23	12.4			5.3	0.4	内N60 灰 外N60 灰 断2.5FR2 灰赤	密	硬	口:2/12	天井部回転ヘラケズリ	
783	137	42	須恵器	有蓋高杯		杯部	450 落込み	(南西)	P5	TK208 ~23	10.8			(5.3)	0.4	内外断N60 灰	密	硬	口:1/12 以下	底部回転ヘラケズリ左回り	
784	137		須恵器	無蓋高杯		杯部	450 落込み	(南東)	P5	TK208 ~23				(4.2)	0.6	内N60 灰 外2.5B2 灰黄 断10FR6/1 褐灰	密	硬	稜:2/12	液状文1段	
785	137	42	須恵器	高杯	短脚	底部~脚部	450 落込み	(南東)	P5	TK208 ~23		8.0	(6.2)	0.6	0.6	内外N60 灰 断N70 灰白	密	硬	底:12/12	脚部カキメ 菱形スカシ2方向	
786	137		須恵器	高杯	短脚	脚部	450 落込み	(南東)	P5	TK208 ~23		8.9	(4.3)	0.6	0.6	内外N60 灰 断2.5B2 灰黄	密	やや軟	底:3/12	脚部カキメ 方形スカシ3方向	
787	137	42	須恵器	高杯	短脚	脚部	450 落込み	(南西)	P5	TK208 ~23		7.9	(5.3)	0.6	0.6	内外断N70 灰白	密	硬	底:3/12	方形スカシ3方向	
788	137	42	土師器	高杯		脚部	450 落込み	(南西)	P5	辻4~		9.1	(6.1)	0.6	0.6	内5FR7/8 橙 外外5FR7/6 橙	やや密	やや軟	脚:12/12	内外面マメツ 脚部内面シボリ痕	
789	137		須恵器	壺		口縁	450 落込み	(南西)	P5	TK208 ~23	16.8			(5.8)	0.7	内断5B6/1 灰 外10FR1 灰	密	やや硬	口:1/12	液状文1条	
790	137		須恵器	甕		口縁	450 落込み	(アゼ部分)	P5	TK208 ~23	22.7			(2.7)	0.5	内外N60 灰 断N60 灰	密	やや硬	口:1/12	回転ナデ	
791	137		須恵器	甕		口縁	450 落込み	(北西)	P5	TK208 ~23	22.0			(2.2)	0.5	内N60 灰 外N60 灰 断N70 灰白	密	硬	口:1/12 以下	回転ナデ	
792	137	42	須恵器	甕	中型	体部(下半)	450 落込み	(南東)	P5	TK208 ~23		26.0			0.6	0.6	内N60 灰 外N30 暗青灰 断5FR5/1 紫灰	密	やや硬	体:2/12 口:1/12 以下	外面平行タタキ 内面可心門あて具(弱)
793	137	42	須恵器	甕	大型	体部(下半)	450 落込み	(南西)	P5	TK208 ~23					0.8	0.8	内5B6/1 青灰 外5PB3/1 暗青灰 断5FR4/1 暗赤灰	密	硬	破片	外面平行タタキ 内面無文あて具
794	137		土師器	甕	布留形 小型	口縁~肩部	450 落込み	(北東)	P5	辻4~	11.8	13.8		(5.8)	0.6	0.6	内7.5FR4/2 灰褐 外2.5FR4にふい壺 断7.5FR3/1 黒褐	やや密	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ナデ

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
795	137		土師器	甕	布留形	口縁	450 落込み	(アゼ部分)	P5	辻4~	134			(3.7)	0.6	内10FR3 浅黄橙 外5FR8 橙 新10FR1 褐灰	やや密	やや硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリか
796	137		土師器	甕	外反口縁	口縁	450 落込み	(北西)	P5	辻4~	18.8			(4.4)	0.6	内75FR4 にふい橙 外10FR2 灰黄褐 新75FR2 明黄橙	やや密	軟	口:1/12	内外面マメツ
797	137		製塩土器		小型碗形	口縁 ~ 体部	450 落込み		P5	辻4~	2.2	3.2		(3.8)	0.2	内75FR4 にふい橙 外新57/1 灰白	密 精良	やや軟	口:2/12	内外面ナデ・オサエ 計 36.3g
798	137		土師器	小型丸底壺	精製B系統	口縁 ~ 肩部	450 土坑		P4	布留中	11.8			(5.2)	0.3	内外5FR6 橙 新N5/0 灰	密	やや軟	口:1/12 頸:1/12	内外面細筋ヨコミガキ 非在地胎土(精良 大和か) ※この遺構に直接伴うもの ではない
799	137	42	須恵器	杯蓋		全形	450 落込み	(上面)	P5	TK208 ~ 23	13.3				0.5	内外N6/0 灰 新N7/0 灰白	密	硬	口:2/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
800	137		須恵器	杯蓋		口縁~ 天井部	450 落込み	(上面)	P5	TK208 ~ 23	12.9			(4.8)	0.4	内75FR8 黄橙 外75FR4 にふい橙 新75FR8 黄橙 ・75FR1 褐灰	密	やや軟	口:1/12	天井部回転ヘラケズリ右回り 酸化・焼成不良 ※ 801 杯蓋とセットか
801	137		須恵器	杯身		口縁 ~ 底部	450 落込み	(上面)	P5	TK208 ~ 23	11.6				0.4	内断5FR7 橙 外75FR3 にふい橙	密	やや軟	口:1/12 以下	底部回転ヘラケズリ左回り 酸化・焼成不良 ※ 800 杯身とセットか
802	137		須恵器	高杯	短脚	脚部	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47			8.3	(5.8)	0.6	内N5/0 灰 外断N6/0 灰	密	硬	底:2/12	方形スカシ3方向
803	137		須恵器	高杯	短脚	脚部	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47				(8.6)	0.6	内外N6/0 灰 新10FR1 赤灰	密	硬	脚:2/12	方形スカシ3方向
804	137		須恵器	高杯	短脚	脚部	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47		11.9	(6.3)	0.8	内断N6/0 灰 外N5/0 灰	密	硬	脚:2/12	方形スカシ4方向	
805	137		須恵器	壺		口縁	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47	19.0			(5.4)	0.7	内25FR1 黄灰 外25FR1 黄灰 新75FR4 にふい橙	密	やや軟	口:1/12	波状文 2段
806	137		須恵器	甕		口縁	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47	20.2			(5.6)	0.7	内断N7/0 灰白 外N6/0 灰	密	硬	口:1/12 以下	口縁部突帯
807	137	42	須恵器	甕		口縁	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47	24.2			(5.4)	0.7	内25FR2 暗黄 外25FR1 黄灰 新10FR3 浅黄橙	密	硬	口:1/12 以下	口縁部突帯
808	137		須恵器	大甕		頸部	450 落込み	(上面)	P5	TK23 ~ 47			(5.5)	0.9	内N5/0 灰 外N3/0 暗灰 新5FR5/1 紫灰	密	硬	頸:1/12 以下	頸部径約 36 cm	
809	137		土師器	甕	外反口縁	口縁 ~ 肩部	450 落込み	(上面)	P5	辻4~	11.5	(13.5)		(3.9)	0.6	内断10FR6 黄橙 外5FR6 橙	やや密 やや硬	やや硬	口:2/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ
810	139		土師器	高杯	精製B系統 大型	杯部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	18.0			(7.6)	0.5	内外10FR7/6 明黄褐 新25FR4 浅黄	やや密 やや硬	やや硬	口:1/12 以下	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 凸面接合 在地胎土か → 臨地品or模倣品
811	139		土師器	高杯		口縁	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	16.2			(2.6)	0.3	内外5FR8 橙 新75FR6 浅黄橙	やや密	軟	口:2/12	内外面マメツ
812	139		土師器	高杯	(C系統か)	口縁	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	16.6			(3.2)	0.4	内75FR3 にふい橙 外5FR6 明赤褐 新75FR4 褐灰	やや密	やや軟	口:3/12	内外面マメツ 外面ヨコナデ
813	139		土師器	高杯	精製B系統 有後形	杯底部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	12.6			(4.1)	0.4	内外10FR5/2 灰黄褐 新10FR1 褐灰	やや密	やや軟	杯:60%	内外面細筋ヨコミガキ 内面放射ミガキ 杯底部ハケ、凸面接合 在地胎土か → 臨地品or模倣品
814	139		土師器	高杯	(A系統)	脚部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		7.8		(8.0)	0.7	内25FR6 明赤褐 外75FR7/6 橙 新5FR6 明赤褐	密	軟	接:12/12	内外面マメツ
815	139		土師器	高杯or 小型器台	(B系統か) 小型品か	脚部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		9.6		(5.3)	0.6	内5FR5/4 にふい赤褐 外75FR4 にふい橙 新5FR1 灰	密	硬	接:12/12 全体 30%	内外面マメツ 脚部内面ケズリ 凸面接合か 厚手 → 在地模倣品
816	139		土師器	小型器台	A系統 小型器台A	脚部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		13.6	(7.0)	0.4	内外75FR7/4 にふい橙 新25FR2 灰白	やや密	やや軟	脚:11/12 脚部 80%	内外面マメツ 円形スカシ3孔(配置/バラ ンス悪い)	
817	139		土師器	高杯	精製B系統	脚裾部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		13.0	(2.2)	0.5	内75FR7/6 橙 外断10FR7/4 にふい黄橙	密	やや軟	脚:1/12	外面細筋ヨコミガキ 内面ハケ 在地模倣品か	
818	139		土師器	小型器台	小型器台B	脚部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古			(3.7)	0.6	内外断 10FR8/4 浅黄橙	やや粗	やや軟	接:10/12	内外面マメツ	
819	139		土師器	小型器台	小型器台A	脚部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		6.0	(3.3)	0.4	内外断 10FR8/4 浅黄橙	やや密	やや軟	接:5/12	内外面マメツ	
820	139	39	土師器	小型丸底鉢	精製B系統	口縁 ~ 底部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	13.2			(7.3)	0.2	内25FR6/8 橙 外75FR7/6 橙 新5FR5/6 明赤褐	密	軟	口:8/12 屈:12/12	内外面マメツ 内外面細筋ヨコミガキ 精製B系統輸入品(大和か)
821	139		土師器	小型丸底鉢	C系統 (B系統 影響)	頸部 ~ 底部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		11.0		(5.2)	0.6	内外断 10FR8/3 浅黄橙	密	やや軟	頸:3/12	口縁部ハケ 体部内外面ナデ 胎土精良・厚手 → 精製B系統の在地形態 模倣品
822	139		土師器	小型丸底壺	精製B系統	頸部 ~ 体部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古			(5.0)	0.2	内外5FR4/4 にふい赤褐 新5FR7/4 にふい橙	密	やや軟	頸:3/12	内外面細筋ヨコミガキ 体部被熱・剥落 精製B系統輸入品(大和か)	
823	139		土師器	壺	小型壺 (平底)	体部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	8.6	2.4	(6.2)	0.5	内外断 10FR8/4 浅黄橙	密	軟	底:12/12	内外面マメツ	
824	139	39	土師器	壺	(A系統) B系統影響 中型壺	完形	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	11.4	12.2		10.9	0.5	内外断5FR6/6 橙	密	やや軟	ほぼ完形	口縁部細筋タテミガキ 外面マメツ、内面ナデ 底部あり 精製B系統影響A系統
825	139		土師器	壺	B系統か 中~小型 壺	体部~ 底部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古		2.1	(4.5)	0.5	内外10FR6/2 灰黄褐 新10FR5/1 褐灰	密	やや軟	底:12/12	底部内外面ケズリ 底部あり 非在地胎土、搬入品か	
826	139	39	土師器	台付壺	北近畿系 小型 台付壺	全形	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	10.8	9.7	7.7	11.2	0.4	内断10FR3 浅黄橙 外10FR4/1 褐灰	やや密	軟	口:9/12 脚部 ほぼ完形	口縁部ヨコナデ、外面ハケ 827 と同工品 胎土在地か
827	139		土師器	台付壺	北近畿系 小型 台付壺	口縁 ~ 肩部 + 脚台部	432 土坑		P5	布留 古新 ~ 中古	10.4	10.6	8.6	5.2 +3.9 (12.5)	0.5	内25FR2 灰白 外10FR2 灰白 新10FR7/3 にふい黄橙	やや密	軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ケズリ 826 と同工品 胎土在地か

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
828	139	39	土師器	有段口縁鉢	(C系統)精製B系統影響	口縁~底部	432 土坑		P5	布留古新~中古	172			5.4	0.3	内外10R7/3にふい黄橙 断75R6/6薄	やや密	やや軟	口:3/12 全体30%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ、内面ナデ 薄手、精製B系統影響
829	139		土師器	有段口縁鉢	精製B系統	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古				(2.4)	0.3	内外25R5/6明赤褐 断25R4/6赤褐	密	硬	口:1/12 以下	内外面細節ヨミガキ 精製B系統搬入品 (大和カ)
830	139		土師器	壺	広口短頸壺	口縁~肩部	432 土坑		P5	布留古新~中古	16.6	20.0		(7.5)	0.5	内外断10R8/3浅黄橙	密	軟	口:4/12	内外面メツ 内面ケズリカ
831	139		土師器	壺	A系統	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	14.4	17.6		(6.4)	0.4	内外断10R8/3浅黄橙	やや密	やや軟	口:11/12 頸:12/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式タキ 内面接合痕
832	139		土師器	壺	A系統中型直口壺	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	10.6	10.8		(6.0)	0.6	内外断25R8/3淡黄	やや密	やや軟	口:1/12	内外面タテミガキ
833	139		土師器	壺	中型直口壺	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	9.8	12.0		(6.4)	0.5	内外10R7/3にふい黄橙 断10R6/3にふい黄橙	やや密	やや軟	口:1/12 頸:3/12	内外面メツ 口縁部ヨコナデ
834	139		土師器	壺	A系統直口壺	頸部~体部	432 土坑		P5	布留古新~中古		16.0			0.4	内10R7/4にふい黄橙 外10R6/2灰黄褐 断25R8/3淡黄	密	硬	頸:3/12	内外面メツ 内面ハケ
835	139		土師器	壺	C系統大型直口壺	口縁~肩部	432 土坑		P5	布留古新~中古	15.9	24.8		(17.0)	0.4	内外断10R8/4浅黄橙	やや密	やや軟	口:10/12	内外面ハクリ・メツ ※ 被熱か 外面ハケ
836	139		土師器	壺	二重口縁壺	口縁~頸部	432 土坑		P5	布留古新~中古	16.4			(7.0)	0.5	内外断75R6/3にふい褐	密	やや軟	口:3/12	内外面メツ
837	139	39	土師器	壺	山陰系二重口縁壺	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	23.6			(9.2)	0.8	内10R6/3にふい黄橙 外10R7/4にふい黄橙 断10R6/1褐灰	やや密	軟	口:1/12 以下	内外面メツ 頸部凹状文 器地品か搬入品
838	139	39	土師器	壺	大型二重口縁壺	口縁~頸部	432 土坑		P5	布留古新~中古	23.8			(9.3)	0.6	内10R7/3にふい黄橙 外10R4/2灰黄褐 断10R7/2にふい黄橙	密	軟	口:6/12	内外面メツ
839	139		土師器	壺	阿波産複合口縁壺か	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	18.4			(6.0)	0.7	内10R6/3にふい黄橙 外10R7/4にふい黄橙 断25R8/2灰白	普通	軟	口:1/12	内外面メツ 結晶片若あり→阿波搬入品
840	139		土師器	甕	河内型庄内形生駒西産産	口縁	(432 土坑)	(上面 34・390 溝)	P5	布留古新~中古	17.6			(2.9)	(0.4)	内断25R6/2灰黄 外10R5/2灰黄褐	密	硬	口:1/12 以下	口縁部階断タキのちヨコナデ 角閃石あり、生駒西産産
841	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	15.6			(4.2)	0.4	内10R7/3にふい黄橙 外10R5/2灰黄褐 断25R6/2灰黄	やや密	やや軟	口:11/12 頸:10/12	内外面メツ 口縁部ヨコナデ、外面ハケ 非在地胎土か
842	139		土師器	甕	庄内形(非生駒)	頸部	432 土坑		P5	布留古新~中古		15.6		(3.8)	0.3	内25R8/2灰白 外断25R4/1黄灰	普通	硬	頸:2/12	内外面メツ 在地胎土か → 模倣品
843	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	12.4			(3.5)	0.4	内10R6/2灰黄褐 外5R3/1黒褐 断10R4/2灰黄褐	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ
844	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	13.2			(3.3)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外10R6/2灰黄褐 断10R8/2灰白	やや密	軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ
845	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	15.8			(4.0)	0.5	内10R7/4にふい黄橙 外10R6/2灰黄褐 ・10R7/4にふい黄橙 断75R7/8黄橙	やや密	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ
846	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	15.3			(3.8)	0.4	内外10R6/6明黄褐 断10R6/2灰黄褐	やや密	軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ
847	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古	18.6			(4.4)	0.4	内25R4/1黄灰 外25R6/2灰黄 断5R4/1灰	密	硬	口:3/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 非在地胎土
848	139		土師器	甕	布留形	口縁	432 土坑		P5	布留古新~中古				(3.9)	0.4	内25R8/3淡黄 外10R8/3浅黄橙 断25R6/1黄灰	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 外面葉付着
849	140		土師器	壺	讃岐系近畿型大型複合口縁壺	頸部~体部	432 土坑		P5	布留古新~中古		54.0		(17.4)	1.2	内外5R4/8赤褐 断10R5/3にふい黄褐	やや密	やや軟	頸:3/12	内外面ハケ 角閃石あり ※ たたし生駒西産産でない可能性
850	142		須恵器	杯蓋		全形	33 落込み		B-1	MT15~TK10	11.8			4.6	0.5	内外10R6/1灰 断75R6/1灰	やや密	やや軟	口:3/12 全体40%	天井部回転ヘラケズリ右回り
851	142		須恵器	杯蓋		全形	33 落込み		B-1	MT15	12.1			4.4	0.4	内N70灰白 外N50灰 断N60灰	密	硬	口:1/12 全体40%	天井部回転ヘラケズリ右回り
852	142		須恵器	杯蓋		全形	33 落込み		B-1	MT15	12.5			4.9	0.5	内N70灰白 外断10R7/1灰白	やや密	硬	口:3/12 全体40%	天井部回転ヘラケズリ左回りか
853	142	42	須恵器	杯蓋		口縁~天井部	33 落込み		B-1	MT15~TK10	13.0			(4.5)	0.5	内断N70灰白 外25R7/1灰白	やや密	やや硬	口:5/12	天井部回転ヘラケズリ
854	142	42	須恵器	杯蓋		全形	33 落込み		B-1	MT15	12.4			4.6	0.6	内外断N80灰白	密	軟	口:5/12 天井部100%	天井部回転ヘラケズリ
855	142	42	須恵器	杯蓋		全形	33 落込み		B-1	MT15	12.5			5.1	0.5	内断5R6/3にふい橙 外N60灰	やや粗	やや硬	口:11/12 全体95%	天井部回転ヘラケズリ左回り 胎土チャート混、在地産か
856	142	42	須恵器	杯蓋		完形	33 落込み		B-1	TK10	14.0			4.9	0.5	内N70灰白 外10R5/1灰	密	硬	口:5/12 天井部100%	天井部回転ヘラケズリ左回り
857	142		須恵器	杯身		全形	33 落込み		B-1	MT15	9.6			4.6	0.5	内外N60灰 断N80灰白	やや密	軟不良	口:5/12 全体50%	底部回転ヘラケズリ
858	142	42	須恵器	杯身		口縁~底部	33 落込み		B-1	MT15~TK10	11.0			4.2	0.4	内断N70灰白 外10R6/1灰	密	硬	口:3/12 全体40%	底部回転ヘラケズリ左回り
859	142		須恵器	杯身		口縁~底部	33 落込み		B-1	MT15~TK10	11.2			(4.6)	0.5	内外断5R8/1灰白	やや密	軟不良	口:3/12 全体20%	底部回転ヘラケズリ左回りか
860	142	42	須恵器	有蓋高杯		全形	33 落込み		B-1	TK47~MT15	10.4		8.6	8.3	0.4	内N60灰 外断N40灰	密	硬	口:10/12 杯部ほぼ完成 底:4/12	杯蓋部回転ヘラケズリ右回り 3方透かし
861	142		須恵器	有蓋高杯		全形	33 落込み		B-1	TK47~MT15	10.2		7.7	8.5	0.5	内断5R5/1青灰 外5R4/1暗青灰	やや粗	普通	口:4/12 底:2/12 頸:9/12 全体60%	底部回転ヘラケズリ左回りか 脚部外面カキメ 3方透かし

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
862	142	42	須恵器	有蓋高杯		受部 ~脚部	33 落込み		B-1	TK47 ~MT15			7.8	(8.9)	0.6	内5835/1青灰 外106/1灰 新106/1灰	やや粗	やや硬	底:4/12 頸:12/12 受:2/12 全体40%	脚部外面カキメ 3方透かし	
863	142	42	須恵器	有蓋高杯		受部 ~脚部	33 落込み		B-1	TK47 ~MT15			9.2	(8.6)	0.5	内外N6/0灰 新105/1灰	やや粗	普通	底:8/12 頸:100% 全体40%	杯底部回転ヘラケズリ右回り 3方透かし	
864	142	42	須恵器	甕		全形	33 落込み		B-1	TK47 ~TK10	11.4	10.0			11.5	0.5	内外断N6/0灰	やや密	硬	体部完形	体部完形・口縁部破片 → 人為的打欠きか 頸部波状文 孔部分欠けあり = 使用痕
865	142		須恵器	壺	短頸壺	体部	33 落込み		B-1	TK47 ~MT15	8.5	13.9		(9.6)	0.5	外585/1青灰 新584/1暗赤灰	やや密	硬	体部完形	体部完形・口縁部なし → 人為的打欠きか 底部手持ちヘラケズリ 胎土チャート混、在地産か	
866	142		須恵器	甕		体部	33 落込み		B-1	TK23 ~47		16.4		(10.7)	0.6	内N6/0灰 外N5/0灰 新106/1灰	密	硬	頸:7/12 全体20%	肩部カキメ 上面4灰 (正置焼成)	
867	142		須恵器	甕		(口縁)	33 落込み		B-1	TK23 ~47	18.4			(5.0)	0.6	内断107/1灰白 外106/1灰	普通	やや硬	口:1/12	回転ナデ	
868	142	42	須恵器	大甕		肩部 ~底部	33 落込み		B-1	TK23 ~47	12.0	24.0		(21.4)	0.7	内外N6/0灰 新N7/0灰白	やや密	やや硬	頸:4/12 体:8/12	外面併行タタキのち上半回 転カキメ 内面あて具痕 (同心円状) 軟質	
869	142	42	須恵器	大甕		体部 ~底部	33 落込み		B-1	辻5~		47.3		(28.5)	0.6	内外N5/0灰 新587/1明赤灰	密	良好	体:7/12 底:9/12	外面下半格子タタキ上半 平行タタキのち回転カキメ 内面同心円状具痕のち ナゲし (同心円状)	
870	142	42	土師器	甕	外反口縁形	全形	33 落込み		B-1	辻5~	9.6	10.8			11.3	0.7	内外断 1087/6明黄褐	やや粗	やや軟	口:1/12 全体20%	内外面マメツ
871	142		土師器	甕	外反口縁形	頸部	33 落込み		B-1	辻5~				(4.2)	0.5	内7586/6橙 外断 1087/4にぶい黄橙	普通	やや軟	頸:3/12	内外面マメツ 接合痕明瞭	
872	142		土師器	甕	外反口縁形	口縁 ~肩部	33 落込み		B-1	辻5~	13.6	(15+)		(5.8)	0.6	内断586/8橙 外2582/2灰白	普通	硬	頸:3/12	外面白色スリップ 内面ナメナデ	
873	142		土師器	甕	外反口縁形	口縁 ~肩部	33 落込み		B-1	辻5~	14.4			(5.7)	0.6	内外断 587/4にぶい橙 内くびれ部1086/6赤橙 外くびれ部2586/1橙	粗	やや軟	口:3/12	内外面マメツ	
874	142		土師器	甕	外反口縁形	口縁 ~体部	33 落込み		B-1	辻5~	11.8	(15+)		(6.5)	0.4	内断1087/6明黄褐 外7587/6橙	密精良	やや軟	口:1/12 頸:2/12	内外面マメツ 内面ナメナデ	
875	142		土師器	甕	外反口縁形	口縁 ~肩部	33 落込み		B-1	辻5~	15.8			(6.5)	0.5	内断1088/6黄橙 外7588/6浅黄橙	密	軟	口:1/12 頸:1/12	内外面マメツ 内面ナメナデ	
876	143		須恵器	杯身		受部 ~体部	(33落込み)	(周辺)	B-1	TK47 ~MT15				(2.8)	0.5	内7587/6橙 外586/3オリーブ黄 新7586/6浅黄橙	やや粗	軟 悪い	受:3/12	焼成不良品	
877	143		須恵器	高杯		脚部	(33落込み)	(周辺)	B-1	MT15 ~TK10				(4.8)	0.5	内外N3/0暗灰 新N6/0灰	やや粗	良好	接:12/12	長脚化 円孔スキャン2or3方向	
878	143		須恵器	高杯	長脚	脚部	(33落込み)	(周辺)	B-1	MT15 ~TK10				(5.4)	0.4	内外断N5/0灰	密	硬	脚:2/12	長脚一段スキャン3方向か 脚部カキメか	
879	143		須恵器	器台	筒形器台	口縁	(33落込み)	(周辺)	B-1	TK23 ~MT15	17.4			(2.9)	0.6	内N5/0灰 外N4/0灰 新N0灰	密	硬	口:2/12	波状文	
880	143		須恵器	器台	筒形器台	筒部	(33落込み)	(周辺)	B-1	TK23 ~MT15		(10.4)		(5.2)	0.7	内N6/0灰 外105/1灰 新N8/0灰白	密	硬	体:1/12	波状文・突帯3条 方形スキャン孔数不明	
881	143		須恵器	器台	高杯形器台	接合部	(33落込み)	(周辺)	B-1	MT15 ~TK10				(5.2)	0.9	内断2588/1灰白 外2586/1黄灰 杯部9面N7/0灰白	密	堅緻	接:6/12	長脚化か 3方スキャン	
882	143		須恵器	壺		口縁	(33落込み)	(周辺)	B-1	TK47 ~TK10	18.6			(4.1)	0.7	内外584/1暗青灰 新2582/2灰赤	密	硬	口:2/12	外面:カキメ	
883	143		須恵器	壺		口縁 ~肩部	(33落込み)	(周辺)	B-1	TK47 ~TK10	16.0	(24.6)	(10.3)		0.7	内外断107/1灰白	やや密	軟	口:3/12	平行タタキのち肩部カキメ 内面同心円 軟質	
884	143		土師器	甕	外反口縁形	口縁	(33落込み)	(周辺)	B-1	辻5~	16.0	(19+)		(5.2)	0.4	内断2586/6橙 外1087/6明黄褐	やや粗	やや軟	口:1/12 体:2/12	内外面マメツ 内面オサエ	
885	143	42	土師器	甕	外反口縁形大型	口縁 ~体部	(33落込み)	(周辺)	B-1	辻5~	20.0	(28.0)	(11.0)		0.5	内1084/3にぶい黄橙 外1085/4にぶい黄橙 新586/8明黄褐	やや密	硬	口:2/12	内外面マメツ 外面タテハケ	
886	143		土製品	板状土製品		板状 埴状	(33落込み)	(周辺)	B-1	(中期末 ~ 後期初)	長: 10.7	幅: 11.4			2.8	内1088/2灰白 外1087/4にぶい黄橙 新N5/0灰	やや密	やや軟	-	外面:一部粗いハケ 面あり、用途・性格不明	
887	144		土師器	高杯	(B系統 大型か)	脚部	410 土坑		P5	庄内 ~ 布留古	3.1			(6.4)	0.9	内外587/6橙 新2586/1黄灰	やや密	やや硬	屈:6/12	内外面マメツ 円蓋穴填 胎土精良、折衷的	
888	144		土師器	甕	(布留系)	口縁	410 土坑		P5	庄内 ~ 布留古	15.5			(2.1)	0.4	内外断 1087/3にぶい黄橙	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土	
889	144		土師器	壺		平底	410 土坑		P5	庄内		(12.3)		(3.5)	0.7	内断N6/0灰 外7586/6橙	やや密	硬	底:6/12	外面ナデ内面ハケ 在地胎土 (V様式の胎土)	
890	145		土師器	高杯	B系統 I群系	脚部	1289 溝 (上面)	方形須溝壺 6・7上面	B-2	布留中	3.2			(8.5)	0.5	内7588/3浅黄橙 外587/6橙 新2586/8橙	やや密	やや軟	接:12/12	内外面マメツ 凸面接合	
891	145		土師器	小型丸底鉢	(A系統か)	口縁 ~体部	1289 溝 上層	方形須溝壺 6・7上面	B-2	庄内 ~ 布留古	9.3			(4.5)	0.3	内7585/4にぶい黄 外断7587/6橙	やや密	やや軟	口:4/12	内外面マメツ	
892	145		土師器	有孔鉢	A系統	底部	1289・ 1290 溝 接続部上層	方形須溝壺 6・7上面	B-2	庄内 ~ 布留古				(4.7)	0.7	内N3/0暗灰 外7587/4にぶい黄 新2582/2灰白	やや密	やや軟	底:完形	外面ナデ内面ハケ 在地胎土 (V様式の胎土)	
893	145		土師器	甕	河内型 庄内形 (非生駒)	口縁	1289・ 1290 溝	方形須溝壺 6・7上面	B-2	庄内 ~ 布留古	17.2			(2.2)	0.5	内2587/1灰白 外1085/2灰黄褐 新1086/1褐灰	やや密	やや軟	口:1/12 以下 頸:1/12	口縁部ヨコナデ	
894	145		土師器	甕	河内型 庄内形 (非生駒)	口縁 ~体部	1289・ 1290 溝 接続部上層	方形須溝壺 6・7上面	B-2	庄内 ~ 布留古	14.8			(6.3)	0.3	内1086/3にぶい黄橙 外586/1灰 新588/1灰白	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面細タタキ 内面ヘラケズリ	
895	145		土師器	甕	受口状	口縁	1289・ 1290 溝 上層	方形須溝壺 6・7上面	B-2	庄内 ~ 布留古	13.0			(2.3)	0.6	内7587/6橙 外7588/4浅黄橙 新7588/3浅黄橙	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 周辺・丹波などの搬入品か	
896	145		土師器	壺	加飾 二重 口縁壺	口縁	(第5層)		B-2	庄内 ~ 布留古	(11.4)			(2.2)	0.4	内外586/6橙 新7586/1灰	密	軟	稜:3/12	円形浮文 在地胎土か (精良)	
897	145		土師器	壺	二重 口縁壺	口縁	(機械彫削)		B-2	庄内 ~ 布留古	16.0			(3.4)	0.6	内外7587/4にぶい黄 新587/6橙	密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ 在地胎土か (精良) ※ 他地域系か	



第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
898	145		土師器	壺	垂下口縁二重口縁壺	口縁	(耕作溝群)		B-2	庄内～布留	19.0			(3.1)	0.6	内10FR5/2 灰黄褐 外10FR7/6 明黄褐 断5FR1 灰白	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ
899	145		土師器	壺	二重口縁壺	頸部	(第5層)		B-2	庄内～布留古	(9.6)			(3.8)	0.6	内25FR2 灰白 外25FR7/4 にふい橙 断5FR1 灰	密	やや軟	頸: 3/12	頸部突帯 (刻み目文) 非在地胎土 (精良) ※ 搬入品か
900	145		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第5層)		B-2	庄内新～布留古	15.0			(2.4)	0.5	内外断10FR3 にふい黄褐	やや密	硬	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
901	145		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第5層)		B-2	庄内新～布留古				(1.4)	0.4	内外10FR3 にふい黄褐 断25FR2 灰黄	やや密	やや硬	破片	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
902	145		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁～肩部	(第5層)		B-2	庄内新～布留古	15.8	19.2		(6.0)	0.4	内10FR4/4 褐 外断10FR4/2 灰黄褐	やや密	やや硬	口: 2/12	口縁部オサエのちヨコナデ 外面細断タタキ内面ケズリ 角閃石あり、生駒西麓産
903	145		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第6層)		B-2	庄内新～布留古	18.0			(1.4)	0.4	内10FR3 黒褐 外10FR2 黒 断10FR3 灰黄褐	やや密	やや硬	口: 1/12	口縁部タタキ出し・ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
904	145		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁～肩部	(第5層)		B-2	庄内新～布留古	17.8	21.6		(8.4)	0.3	内25FR2 灰黄 外10FR3 にふい黄褐 断75FR4 灰	やや密	やや硬	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面細断タタキ内面ケズリ 角閃石あり、生駒西麓産
905	145		土師器	甕	系譜不明	口縁	(第6層)	除去面精査	B-2	庄内	13.9			(2.0)	0.6	内10FR3 浅黄橙 外75FR3 浅黄橙 断75FR3 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 1/12 以下	口縁部ヨコナデ 非在地胎土か、搬入品か
906	145		土師器	壺	垂下口縁二重口縁壺	口縁	(第6層)		P5	庄内～布留古		(18.1)		(2.8)	0.9	内75FR7/4 にふい橙 外10FR4/4 浅黄橙 断25FR1 灰白	やや密	やや軟	口: 1/12	口縁部内外面波状文 内面ヨコミガキ
907	145		土師器	壺	垂下口縁二重口縁壺	口縁	364 溝		P5	庄内～布留古	19.6			(2.1)	0.5	内75FR3 黒褐 外10FR3 にふい黄褐 断75FR4 灰褐	やや密	やや硬	口: 1/12	口縁部外面波状文
908	145		土師器	壺	二重口縁壺	口縁	(第6層)		P5	庄内～布留古	21.4			(2.9)	0.6	内5FR6 明赤褐 外10FR3 にふい黄褐 断10FR2 灰白	やや密	やや軟	口: 3/12	口縁部外面波状文
909	145		土師器	壺	垂下口縁二重口縁壺	口縁	(第6層)		P5	布留古前後	15.8			(2.5)	0.4	内外10FR4 浅黄橙 断10FR7/4 にふい黄橙	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ
910	145		土師器	壺	加飾壺	頸部	(第6層 除去面)	473 溝 上面	P5	庄内～布留古				(4.4)	0.6	内75FR7/6 橙 外75FR8 黄橙 断25FR1 黄灰	やや密	軟	頸: 1/12	頸部突帯・刻み目
911	145		土師器	壺	加飾壺	肩部	(第6層)		P5	庄内	(21.0)			(3.7)	0.7	内N50 灰 外75FR4 浅黄橙 断25FR1 黄灰	密	やや軟	肩: 2/12	肩部平浮文 + 波状文 内面ナデ
912	145		土師器	壺	大型加飾壺	頸部	(第6層)		P5	庄内	(20.0)			(3.3)	1.4	内25FR2 灰黄 外10FR4 浅黄橙 断10FR3 にふい黄橙	密	やや軟	突: 1/12	頸部突帯・刻み目あり 非在地胎土 (精良)
913	145		土師器	壺	加飾壺	頸部	(第6層)		P5	庄内新～布留古	10.4			(3.1)	0.7	内75FR4 にふい橙 外断5FR6 明赤褐	やや密	硬	頸: 4/12	頸部突帯
914	145		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第6層)		P5	庄内新～布留古	15.0			(3.1)	0.4	内外断10FR5/4 にふい黄橙	やや密	硬	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 肩部外面細断タタキ 角閃石あり、生駒西麓産
915	145		土師器	甕	山陰系	口縁	(第6層)		P5	布留新	15.8			(5.0)	0.7	内外10FR3 にふい黄橙 断N30 暗灰	やや密	やや軟	口: 1/12	口縁部ヨコナデ、端部厚 非在地胎土か (搬入品か)
916	145		土師器	壺	讃岐系近畿型大型複合口縁壺生駒西麓産	肩部	(第6層)	除去面精査	P5	布留古～	20.0			(4.7)	1.6	内25FR3 黄褐 外25FR2 灰黄 断N40 灰	やや密	硬	肩: 1/12	肩部外面ハケ内面ナデ 角閃石あり、生駒西麓産
917	146		須恵器	高杯		脚部	1342P	ポイントあり	B-2	TK47		8.0		(3.8)	0.5	内外断N50 灰	密	硬	脚: 12/12	円孔スカシ4 方向
918	146		土師器	甕 (布留系か)	口縁～肩部	1342P			B-2	辻4～	14.1			(7.4)	0.5	内外断25FR6 明赤褐	密精良	やや軟	口: 2/12 頸: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ナデ 919 と同一の可能性大
919	146		土師器 (脚台部)	脚台部	1342P				B-2	辻4～	(6.8)	6.7	(2.5)	0.4	内外5FR8 明赤褐 断5FR6 橙	密	やや軟	脚: 3/12	918 と同一の可能性大	
920	146		須恵器	甕		口縁	1289・1290 溝 上面	方形須恵墓6・7 上面	B-2	中後半～	(50.0)			(4.9)	0.7	内5FR5 青灰 外5FR1 暗青灰 断5FR4 暗紫灰	密	硬	口: 1/12 以下	波状文
921	146		須恵器	壺		肩部～体部	(967 溝)	中世溝	B-2	後期前半か				(7.5)	0.7	内外N70 灰白 断25FR1 灰白	密	硬	肩: 2/12	ヘラ描き波状文
922	146		須恵器	壺	中型	頸部～肩部	(第5層)		B-2	TK73～216				(7.3)	0.6	内N60 灰 外N30 暗灰 断N50 灰白	密	硬	頸: 3/12	波状文
923	146		須恵器	器台	高杯形器台	杯部	(第5～第6層)		B-2	TK73～216				(3.7)	0.9	内10FR1 灰 外10FR1 灰 断10FR1 灰白	密	硬	杯: 1/12	波状文 内面暗灰
924	146		須恵器	器台	高杯形器台	脚部	(耕作溝群)	機械掘削除去面	B-2	TK73～				(5.8)	0.9	内外断10FR1 灰	密	硬	脚: 1/12	脚部無文か 外面自然釉付着
925	146		須恵器	甕	大甕	口縁～肩部	(第5～第6層)		B-2	後期～	31.0			(13.2)	1.0	内N70 灰白 外5FR1 灰 断5FR1 灰白	密	硬	口: 1/12 以下 頸: 1/12	外面平行タタキ 内面心円あて具痕
926	146		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	473 溝上面 (土器留り)	ポイントあり	P5	TK216～208	12.4			(4.1)	0.4	内外断N60 灰 外N70 灰白	密	硬	口: 3/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
927	146		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	473 溝上面 (土器留り)	ポイントあり	P5	TK208～23	13.2			(4.0)	0.4	内外5FR1 灰白 断25FR2 灰黄	やや密	やや硬	口: 1/12 体: 3/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
928	146		土師器	高杯	椀形	口縁	473 溝上面 (土器留り)	ポイントあり	P5	辻3～4	12.3			(5.6)	0.3	内外断5FR8 橙	密精良	やや軟	口: 2/12 接: 12/12	内外面マメツ 凸面接合
929	146		土師器	高杯	椀形	口縁	473 溝上面 (土器留り)	ポイントあり	P5	辻3～4	13.8			(3.6)	0.4	内外断5FR7 橙	密	やや軟	口: 3/12	内外面マメツ 杯底部オサエ
930	146		土師器	高杯		杯底部～脚部	473 溝上面 (土器留り)	ポイントあり	P5	辻4		8.5		(5.9)	0.6	内75FR6 浅黄橙 外5FR8 橙 断10FR4 浅黄橙	密精良	やや軟	脚: 5/12 接: 12/12	内外面マメツ 杯底部ハケ 脚部内面シボリ痕・接合痕 凸面接合
931	146		須恵器	高杯		脚部	374 溝		P5	TK73		13.0		(3.1)	0.6	内外N60 灰 断75FR2 灰褐	密	硬	底: 1/12	方形スカシ7 方向
932	146		須恵器	壺		肩部	(第6層)		P5	TK208				(3.7)	0.8	内外断N70 灰白	密	硬	頸: 1/12	肩部外面波状文1 条
933	146	47	須恵器	器台	高杯形器台	杯部	(機械掘削)	ポイントあり	P5	TK216～208	30.0			13.9	0.5	内10FR3 赤褐 外5FR1 紫灰 断10FR4 にふい赤橙	密	硬 やや不良	口: 4/12 接: 4/12	文様帯1 段・波状文3 条 底部平行タタキのち回転ナデ 内面無文あて具

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
934	146	47	須恵器	器台	高杯形器台	杯部	(第6層)	ポイントあり	P5	TK216	34.8			(13.1)	0.7	内5P5/1紫灰 外5P6/1青黒 新5R4/2灰赤	密	硬	口:1/12 稜:3/12	文様帯3段・中央波状文3条 底部平行タタキ
935	146		須恵器	器台か	高杯形器台か	杯部か	(竪穴18上面)	(竪穴18上面)	P5	TK208頃				(4.1)	0.8	内10/7/1灰白 外5P3/1~4/1暗青灰 新5R4/1紫灰	密	硬	破片	突帯低い 波状文2段以上
936	146		須恵器	器台か	高杯形器台か	杯部か	(機械彫削)	(除去面精査) (南半)	P5	TK23~				(2.4)	0.8	内外5P3/1暗青灰 新5R3/1暗紫灰	密	硬	細片	突帯低い 波状文2段以上
937	146		須恵器	器台		脚部	369溝		P5	TK216 ~208				(4.3)	1.1	内N5/0灰 外N7/0灰白 新10/7/1灰白	やや密	硬	脚:1/12	波状文2段以上 方形スカシ6方向
938	146		須恵器	壺か	脚付壺か	接合部	385溝	(上層)	P5	中期後半頃				(4.3)	1.0	内5P6/1青灰 外5P3/1暗青灰 新5R3/1紫灰	密	硬	接:5/12	脚部1段目・小円孔スカシ4方向 各段波状文 裝飾付脚付壺or器台
939	146		須恵器	無蓋高杯		杯部~脚部	(第6層)	17水路西	B-1	TK23 ~47	13.0	9.6	9.9	0.4	内N6/0灰 外2S/8/2灰白 新N5/0灰	密	硬	脚:7/12 接:12/12 稜:2/12	波状文1段 脚部力キメ 方形スカシ3方向	
940	146		須恵器	蓋	(壺蓋か)	口縁~天井部	(第5層)		B-1	MT15 ~TK10	9.0			(3.8)	0.3	内外N3/0暗灰 新N5/0灰	やや密	硬	口:2/12	内外面暗灰 器種不明
941	146		須恵器	裝飾付	不明(裝飾付か)	口縁	(第3層除去面精査)	(33落込み周辺)	B-1	後期前半頃か	14.4	15.8		(7.3)	0.8	内5P6/1青灰 外10/4/1灰 新5P4/1暗紫灰	やや密	硬	大:2/12	杯部外面彫削突起文 受部芯着・刺痕痕跡あり
942	146		須恵器	脚付壺		脚部	31水路	(北側溝内)	B-1	後期前半頃か		14.0		(4.0)	0.7	内外新5R6/1青灰	やや密	やや硬	脚:2/12	外面波状文 方形スカシあり
943	149		土師器	高杯	精製B系統か楕形	口縁	1151P	掘立22	B-2	庄内~布留	12.6			(3.5)	0.4	内10/R/6明黄褐 外5P6/6明赤褐 新10/R/3にふい黄橙	密	やや硬	口:1/12 以下	内外面マメツ 外面脚部ヨコミガキ 在地胎土(精良) ※遺構と直接関わらない
944	149		製塩土器		備前瀬戸か脚台式	脚部	1151P	掘立22	B-2	庄内~布留	6.5			(1.7)	0.4	内外7.5/R/4にふい橙 新10/R/3にふい黄橙	密精良	硬	脚:3/12	※遺構と直接関わらない
945	149		土師器	甕	布留形	口縁	1153P	掘立22	B-2	布留				(1.4)	0.6	内外新5R/6橙	やや密	やや軟	破片	内外面マメツ
946	149		須恵器	杯身		口縁~底部	1200P	掘立22	B-2	TK208 ~23	11.7	13.4		5.0	0.4	内外N5/0灰 新7.5/R/3にふい橙	やや密	やや硬 やや不良	口:1/12 体:3/12	底部回転ヘラズリ左回り
947	150		土師器	高杯		脚部	1156周溝	(竪穴60上面)	B-2	辻3・4		9.4	(7.0)	0.7	内7.5/R/6橙 外7.5/R/8黄橙 新10/R/6黄橙	密精良	やや硬	脚:10/12 脚部90%	内外面マメツ	
948	150		須恵器	蓋		口縁~天井部	1156周溝	(竪穴60上面)	B-2	TK73 ~216	14.2			(4.4)	0.4	内5P6/1青灰 外5P6/1青灰 新5R3/1紫灰	密	硬	稜:1/12	天井部ヘラズリ左回り・ 刺痕文・波状文3条・波状 文2条・掘削点文 ※上面掘削に伴う混入の 可能性大
949	150		須恵器	有蓋高杯		杯部+脚部	1156周溝	(竪穴60上面)	B-2	TK23 ~47	10.3	7.3	9.2	0.5	内N6/0灰 外N3/0灰 新10/7/1灰白	密	硬	頸:4+/12 脚:5/12	底部回転ヘラズリ左回り 方形スカシ3方向	
950	150	47	須恵器	器台	高杯形器台	口縁~底部	1198土坑	(竪穴60上面)	B-2	TK73 ~216	40.3			(16.8)	0.8	内5P5/1紫灰 外5B3/1暗青灰 新5R4/1暗赤灰	やや密	硬	稜:2/12 口:1/12	文様帯4段・2突帯3段 (波状文・波状文3条・波状 文2条・掘削点文) 内外面暗灰
951	151		土師器	高杯	A系統小型楕形	口縁~脚部	1156周溝	竪穴60	B-2	弥生後期後半 ~庄内中	11.6			(8.1)	0.5	内7.5/R/6橙 外新7.5/R/6橙	密	やや軟	口:4/12 接:12/12	内外面マメツ 在地胎土か(精良)
952	151		土師器	壺	A系統(B系統帯)小型短頸壺	口縁	1156周溝	竪穴60	B-2	庄内~布留古	11.6			(3.8)	0.5	内外10/R/4浅黄橙 新7.5/R/6橙	密	やや軟	口:3/12 頸:5/12	口縁部ヨコナデのちタテ方 向脚部ミガキ 在地胎土(精良) →B系統模倣or影響品
953	151		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	1156周溝	竪穴60	B-2	弥生後期後半 ~庄内中	10.6			(2.7)	0.4	内7.5/R/3浅黄橙 外7.5/R/6橙 新10/R/2灰白	やや密	やや軟	口:2/12 頸:2/12	内外面マメツ 在地胎土(V様式的胎土)
954	151		土師器	壺	阿波	肩部	1156周溝	竪穴60	B-2	庄内古か					0.9	内10/R/3にふい黄橙 外10/R/4にふい黄橙 新10/R/4褐灰	密	硬	細片	内外面マメツ 片岩あり、阿波産
955	151		土師器	壺	(平底)	底部	1156周溝	竪穴60	B-2	庄内		3.6	(2.9)	0.5	内7.5/R/4にふい橙 外10/R/3浅黄橙 新2.5/R/3淡黄	やや密	やや軟	底:11+/12	内外面マメツ 在地胎土(V様式的胎土)	
956	151		土師器	甕	V様式系(平底)	底部	1156周溝	竪穴60	B-2	弥生後期後半 ~庄内中		4.3	(6.1)	0.5	内5/7/1灰白 外10/R/3にふい黄橙 新N6/0灰	やや密	やや軟	底:12/12	外面V様式系タタキ 在地胎土(V様式的胎土)	
957	151		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	1156周溝	竪穴60	B-2	庄内				(1.3)	0.4	内外7.5/R/3褐 新7.5/R/4にふい橙	やや密	やや硬	細片	口縁部タタキ出しヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
958	151		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	976土坑	(竪穴60周辺)	B-2	庄内				(1.6)	0.4	内新10/R/3にふい黄橙 外10/R/3にふい黄橙	やや密	やや硬	破片	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
959	151		土師器	甕	A系統	脚部	1179土坑	竪穴60下部	B-2	弥生後期後半 ~庄内中	(3.8)			(5.2)	0.8	内外10/R/2灰白 新N4/0灰	やや密	やや軟	底:6/12 頸:6/12	外面タテミガキ 在地胎土(精良)
960	151		土師器	壺	A系統短頸直口壺	口縁	1179土坑	竪穴60下部	B-2	庄内	12.1			(3.9)	0.5	内7.5/R/3浅黄橙 外10/R/2灰黄褐 新N4/0灰	やや密	やや軟	口:2/12	在地胎土(V様式的胎土)
961	151		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁~肩部	1179土坑	竪穴60下部	B-2	弥生後期後半 ~庄内中	14.8	(15.8)		(5.9)	0.4	内2.5/R/3淡黄 外10/R/2にふい黄橙 新2.5/R/2灰白	やや密	やや軟	口:2/12 頸:3/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式系タタキ 内面ナデ 在地胎土(V様式的胎土)
962	151		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁~体部	1179土坑	竪穴60下部ポイント	B-2	弥生後期後半 ~庄内中	13.8	(18.8)		(18.0)	0.4	内7.5/R/4にふい橙 外7.5/R/4にふい黄橙 新7.5/R/3にふい橙	やや密	やや軟	口:3/12 頸:3/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式系タタキ 内面ナデ・接合痕 在地胎土(V様式的胎土)
963	152		土師器	壺	A系統広口短頸壺	口縁	1084P	掘立18	B-2	庄内	17.0			(3.9)	0.8	内2.5/R/1黄灰 外新2.5/R/2灰黄	密	やや軟	口:1/12 以下 底:1/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(V様式的胎土)
964	152		土師器	壺か	山陰系	肩部	1084P	掘立18	B-2	庄内~布留古		(11.0)		(6.7)	0.9	内外5/R/6橙 新10/R/3浅黄橙	やや粗	やや軟	脚:2/12	円孔スカシ+竹管文3段以上 非在地胎土・搬入品 類別(丁部塚古墳など)

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
965	152		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	1084P	掘立18	B-2	庄内新〜布留古						内10R3/1黒褐 外10R2/1黒 新10R6/2灰黄褐	やや密	硬	細片	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産	
966	152		土師器	小型器台	A系統	脚部	1085P	掘立18	B-2	庄内〜布留		8.6	(2.6)	0.4		内外5R6/6橙 新10R8/3浅黄橙	密	やや軟	脚:1/12	内外面マメツ 在地胎土 (V様式胎土、精良)	
967	152		土師器	高杯or小型器台	A系統	脚部	1085P	掘立18	B-2	庄内〜布留				9.8	(1.6)	0.4	内5R7/6橙 外5R7/6橙 新10R7/1灰白	密	やや軟	脚:1/12	内外面マメツ 在地胎土 (V様式胎土、精良)
968	153		土師器	壺	阿波産 広口壺	口縁	1228P	掘立19	B-2	庄内〜布留古	18.9				(1.2)	0.7	内外10R5/3にふい黄褐 新10R5/1褐灰	密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ 片岩あり、阿波産
969	153		土師器	甕	V様式系(庄内影響か)	口縁	1228P	掘立19	B-2	庄内〜布留古	10.6				(2.1)	0.4	内外7.5R8/3にふい黄褐 新2.5R6/6橙	密	やや硬	頸:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 在地胎土(V様式胎土)
970	153		土師器	甕	V様式系(庄内影響か)	口縁	1005P	掘立19	B-2	庄内〜布留古	15.0				(2.7)	0.4	内外5R7/6橙 新10R8/3浅黄橙	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 在地胎土(V様式胎土)
971	154		土師器	甕	V様式系くの字甕	頸部	1202P	掘立20	B-2	庄内〜布留古					(2.2)	0.5	内10R7/2にふい黄橙 外10R6/3にふい黄橙 新10R7/3にふい黄橙	やや密	やや軟	細片	内外面マメツ 在地胎土(V様式胎土)
972	154		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	1202P	掘立20	B-2	庄内〜布留古	14.9				(1.3)	0.4	内外7.5R8/4浅黄橙 新N5.0灰	やや密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ
973	154		土師器	甕	布留系か	口縁	1202P	掘立20	B-2	庄内新〜布留古	10.9				(3.3)	0.5	内10R6/2灰黄褐 外10R6/1褐灰 新N3.0暗灰	やや密	やや軟	頸:1/12	口縁部内面ハケ 非在地胎土か
974	154		須恵器	杯蓋		口縁〜天井部	1001P	掘立21	B-2	TK216〜208	14.0				4.1	0.4	内断N5.0灰 外N6.0灰	密	硬	口:1/12	天井部回転ヘラケズリ右回り 975杯身とセットか
975	154		須恵器	杯身		受口〜底部	1001P	掘立21	B-2	TK208		12.9			2.5	0.4	内外N5.0灰 新2.5R4/2灰赤	密	硬	体:3/12	底部回転ヘラケズリ右回り 974杯蓋とセットか
976	154		土師器	有孔鉢	A系統	体部〜底部	1001P	掘立21	B-2	庄内					(4.9)	0.6	内N4.0灰 外新10R8/2灰白	やや密	硬	底:3/12	外面V様式系タタキ 在地胎土(V様式胎土) ※ 遺構と直接関わらない
977	156		土師器	壺	(C系統か)小型直口壺	頸部	1184P	(竪穴23内)	B-2	布留古か					(3.4)	0.6	内2.5/4.1黄灰 外2.5/5.1黄灰 新10R6/3にふい黄橙	やや密	硬	頸:3/12	内面縁部ハケ体部ケズリ 非在地胎土か
978	156		土師器	甕	受口(系譜譜面)	口縁	竪穴23		B-2	庄内〜布留古					(2.5)	0.6	内外2.5R2/2灰白 新2.5/4.1黄灰	やや密	やや軟	口:1/12以下	内外面マメツ 非在地、搬入か
979	156		土師器	甕	V様式系(庄内影響か)くの字甕	口縁	1187P	(竪穴24内)	B-2	庄内〜布留古	12.2				(3.0)	0.4	内10R7/2にふい黄橙 外5R7/6橙 新10R8/3浅黄橙	やや密	やや硬	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タタキ内面ケズリ 在地胎土(V様式胎土)
980	156		土師器	小型器台		口縁	1187P	(竪穴24内)	B-2	庄内〜布留古					(1.3)	0.4	内外5R7/6橙 新7.5R6/4浅黄橙	やや密	やや軟	細片	在地胎土か(精良)
981	156		須恵器	杯蓋		全形	1181土坑	(竪穴25隣接)	B-2	TK216〜208	13.0				4.4	0.4	内10R6/1褐灰 外5.6/1灰 新5.7/1灰白	密	やや硬	口:6/12	天井部回転ヘラケズリ
982	158		土師器	高杯	A系統か	脚部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新					(8.6)	(1.4)	内10R5/3にふい黄褐 外7.5R6/6橙 新N6.0灰	やや密	やや軟	脚部50%	内外面マメツ 在地胎土(V様式胎土)
983	158		土師器	高杯	(折衷的)大型	脚部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新					(6.1)	0.5	内10R8/3浅黄橙 外10R8/3浅黄橙 ・7.5R7/6橙 新N3.0暗灰	普通	やや軟	脚部30%	凸面接合 外面ハケ A系統・B系統折衷的
984	158		土師器	高杯	A系統	脚部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新					(6.3)	0.5	内外10R8/4浅黄橙 新5R6/6橙	密	硬	脚部30%	外面タテミガキ
985	158		土師器	高杯	A系統小型	脚部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新			9.1	(5.1)	0.4	内外10R8/3浅黄橙 新N5.0灰	密	やや軟	脚:1/12	外面タテミガキ 脚部部ヨコナデ	
986	158		土師器	てづくね	小壺鉢(全形)	(全形)	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	6.2	3.7	2.9		0.6	内2.5/6.1黄灰 外2.5/6.3淡黄 新2.5/7.1灰白	密	やや軟	口:1/12 全体30%	手づくね 在地胎土(精良)	
987	158		土師器	有孔鉢	A系統(V様式系)	底部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新				2.6	(2.8)	0.5	内断7.5R7/4にふい橙 外2.5/7.2灰黄	密	硬	底:6/12	外面タタキ
988	158		土師器	壺	A系統大型二重口縁壺	頸部〜肩部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古古〜古新	6.8	(20+)			(7.2)	0.6	内N4.0灰 外10R7/2にふい黄橙 新10R7/2にふい黄橙	密	硬	頸:2/12	外面タテミガキ 内面ケズリ・オサエ 頸部空帯(剥離) 胎土精良 ※ 搬入品の可能性あり
989	158		土師器	壺or甕	山陰系大型	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	22.3				(6.3)	0.7	内2.5/6.3淡黄 外2.5/8.1灰白 新N6.0灰	密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 体部内面ケズリ 搬入品or産地生産品
990	158		土師器	壺	阿波産複合口縁	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	(20+)				(4.3)	0.6	内外5R6/6橙 新2.5/6.2灰黄	密	やや軟	頸:3/12	凹縁外、外面ハケ 緑泥片岩含む→阿波搬入品
991	158		土師器	壺	讃岐系近畿型大型複合口縁生駒西麓産	頸部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	26.3				(7.0)	1.8	内外7.5R6/6橙 新10R5/1褐灰	密	硬	頸:1/12	内外面ハケ 直立口縁 角閃石あり、生駒西麓産か
992	158		土師器	壺	(平底)	底部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古古〜古新			3.0	(2.6)	0.7	内外10R8/2灰白 新2.5/6.1黄灰	密	硬	底:11+12	外面タテミガキ	
993	158		土師器	甕	庄内形河内型生駒西麓産	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	16.6				(4.6)	0.4	内外10R7/2にふい黄橙 新10R8/2灰白	密	硬	口:2/12	外面縁細タタキ惠 角閃石あり、生駒西麓産
994	158		土師器	甕	庄内形(非生駒)	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	16.3				(4.1)	0.5	内7.5R7/4にふい橙 外7.5R8/1黒褐 新N6.0灰	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ・ハケ 外面ハケ 内面ケズリ肩部ハケあり 非生駒西麓産、在地胎土か (典型的ではない)
995	158		土師器	甕	布留形	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古古〜古新	14.6				(3.6)	0.4	内10R7/3にふい黄橙 外10R3/1黒褐 新2.5/3.1黒褐	密	硬	口:2/12	口縁部オサエ・ハケ 外面タテハケ・内面ケズリ 非在地胎土 ※ 搬入品の可能性あり
996	158		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	12.5				(4.4)	0.4	内10R6/3にふい黄橙 外10R6/3にふい黄橙 ・10R3/1黒褐 新10R8/3浅黄橙	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ
997	158		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	12.8				(3.6)	0.4	内断2.5/7.3浅黄 外10R6/3にふい黄橙	やや密	やや軟	口:3/12	外面V様式系タタキ
998	158		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁〜体部	971大型土坑	(上面〜上層)	B-2	布留古新	12.4	15.0			(10.4)	0.4	内10R8/4浅黄橙 外5R6/4にふい橙 新5R5/6明赤褐	密	硬	口:1/12以下 頸:3/12	外面ナデか、内面板ナデか V様式系の変容形か

遺物一覧表

No.	図 No.	写 真	遺物	器種	系統 形式	(部位)	遺構名	層位・ 位置等	調査 区	時期	口径	最大 径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
999	158		土師器	甕	V様式系	肩部	971 大型土坑	(上面～ 上層)	B-2	布留 古新	10.0			(4.4)	0.5	内5R5/4にふい赤褐 外5R6/3にふい橙 新5R6/6橙	普通	硬	頸:1/12	外面V様式系タタキ 内面ケズリ+オサエ 在胎土 (V様式の粗い)
1000	158		土師器	甕	V様式系	肩部	971 大型土坑	(上面～ 上層)	B-2	布留 古新	20.6			(4.8)	0.7	内外5R7/6橙 新N6/0灰 ・25R3淡黄	やや 密	硬	頸:1/12	外面V様式系タタキ 内面ケズリ+オサエ
1001	158		土師器	甕	V様式系 (平底)	底部	971 大型土坑	(上面～ 上層)	B-2	布留 古古 ～古新			2.8	(2.4)	0.5	内10R8/2灰白 外10R7/4にふい黄橙 新10R5/2灰黄褐	密	硬	底:8/12	外面V様式系タタキ 内面/ハケ
1002	159	C10 43	土師器	壺	讃岐系 近畿型 大型複合 口縁 生駒西産	(全形)	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	25.6	59.2	7.5	74.6	1.0	内10R4/4褐 外75R5/8明褐 新25R/1 ～3/1黄灰～黒褐	普通	硬	口:9/12 大:12/12 底:12/12 全体70%	全形復元可能、小平底 内外面ハケ調整 内面接合痕 露出内面やや黒化(赤痕跡) 角閃石あり、生駒西産
1003	160		土師器	小型丸 底壺	C系統	腰部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新		8.3		(6.9)	0.5	内外断 75R7/4にふい橙	やや 密	やや 軟	腰部完形	口縁部欠けか 外面ハケ、内面ナデ・オサエ
1004	160	43	土師器	壺	精製 B系統 中型壺	口縁 ～底部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	12.2	13.8		(7.0)	0.4	内外断5R6/6橙	密	硬	口:2/12 体:90%	内外面マメツ 外面底部ケズリ 在胎土 (精良)、露地品か
1005	160	43	土師器	鉢	A系統 中型鉢	ほぼ 完形	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	16.0	14.2		8.9	0.6	内外10R8/3浅黄橙 新10R7/2にふい黄橙	やや 密	やや 軟	口:11/12 全体 ほぼ完形	口縁部欠けか 外面ハケ 内面ナデ・ナメミガキ 在胎土 (やや精良)
1006	160		土師器	壺	A系統 大型直口 壺	口縁 ～肩部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	9.0	21.8		(16.3)	0.5	内25R/2灰白 外75R7/6橙 新25R/1黄灰	やや 密	やや 軟	頸:7/12	外面タテミガキ 内面オサエ・接合痕あり (1008:二重口縁部)と同工 品か
1007	160		土師器	壺	C系統 大型 直口壺	口縁 ～肩部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	16.4	(26+)		(14.2)	0.6	内25R/1灰白 外10R8/4浅黄橙 新N5/0灰	やや 密		口:11/12	口縁部ハケ 外面ハケ内面ケズリ
1008	160		土師器	壺	山陰系か 大型二重 口縁壺	口縁 ～腰部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	16.4	24.0		(24.5)	0.5	内25R/1灰白 外10R8/2灰白 ・10R2/1黒 新10R8/2灰白	やや 密	やや 軟	口:3/12	外面ハケ、内面下半ハケ上 半オサエ・接合痕 在胎土か (1006:直口壺)と整形・胎 土等が類似 → 同工品の可能性あり
1009	160		土師器	壺	C系統か (平底)	底部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新			5.9	(3.6)	0.5	内5R8/2灰白 外10R7/4にふい黄橙 新10R8/2灰白	密	やや 軟	底:12/12	外面ハケ・ミガキ 内面ケズリ 在胎土
1010	160		土師器	壺	大型 (底あり)	底部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新			9.6	(3.1)	0.7	内25R/2灰白 外10R8/4浅黄橙 新N5/0灰	密	硬	底:5/12	非在胎土か
1011	160	43	土師器	甕	(布留系)	口縁 ～肩部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	14.2	19.2		(10.9)	0.3	内10R6/3にふい黄橙 外5R6/6橙 新25R/1黒褐	密	硬	口:9/12	外面極細ハケ 内面ケズリナデ 露出内面曲ややあまい 布留傾向懸 (庄内影響) 在胎土 (精良)
1012	160	43	土師器	甕	庄内形 (山城型か)	口縁 ～肩部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	15.6			(8.7)	0.3	内5R6/6橙 外5R6/6橙 ・5R3/1黒褐 新N3/0暗灰	やや 密	硬	口:5/12	口縁部オサエハケ 右上がり極細タタキのち テハケ 内面ケズリ肩部ハケあり
1013	160		土師器	甕	庄内形 模倣品	頸部 ～肩部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	13.2			(7.6)	0.3	内25R/2灰黄 ・25R/1黒褐 外N3/0暗灰 新25R/1黄灰	密	硬	頸:3/12	外面、口縁部極細ハケ 腰部内面粗いハケ+ケズリ 非在胎土か、産地不明
1014	160		土師器	甕	布留形	口縁 ～肩部	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	14.0	(18+)		(7.6)	0.3	内外25R/1黄灰 新N3/0暗灰	普通	やや 軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ケズリ
1015	160	43	土師器	甕	(異形甕) 布留 影響か	ほぼ 完形	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	11.8	19.6		20.1	0.4	内25R/3浅黄 ・25R/1灰白 外断25R/3浅黄	やや 密	やや 軟	口:12/12 全体90%	くの字口縁 外面タテハケ、内面ケズリ 底部わずかに突りあり 布留影響懸
1016	160		土師器	甕	擬口縁 系統不明	口縁	971 大型土坑	埋土2 一括	B-2	布留 古新	17.5			(3.0)	0.6	内外断75R6/6橙	密	硬	口:1/12 以下	擬口縁 外面タテハケ内面ハケ 搬入品
1017	160	43	土師器	小型丸 底鉢	(C系統) 精製B 系統影響	口縁 ～底部	971 大型土坑	(下部 埋土3b)	B-2	布留 古新	12.8			(7.8)	0.4	内外断5R6/8橙	密	やや 軟	口:5/12 全体70%	内外面マメツ 外面ハケ、内面ナデ 在胎土 (精良) B系統影響の在胎模倣品
1018	160	43	土師器	壺	小型壺 赤彩土器	口縁	971 大型土坑	(下部 埋土3b)	B-2	布留 古新	10.5			(4.5)	0.5	内外25R5/8明赤褐 ・75R4/3褐 新N5/0灰	普通	やや 軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 赤色顔料付着 (内外部分的:剥離あり) 非在胎土、搬入品か
1019	160		土師器	壺	精製 B系統 二重 口縁壺	頸部	971 大型土坑	(下部 埋土3b)	B-2	布留 古新	11.0			(2.7)	0.4	内外5R6/6明赤褐 新5R6/6橙	密	硬	屈:3/12	口縁部節節ヨコミガキ 内面放射ミガキ 搬入品
1020	160	43	土師器	小型器 台	東海系か	脚部	971 大型土坑	(下部 埋土3b)	B-2	布留 古古 ～古新			13.0	(7.1)	0.4	内外 10R7/3にふい黄橙 新N4/0灰	密	やや 軟	脚部完形	外面タテミガキ 内面オサエ 円孔スキャン3方向(上位) 内湾気味脚部 在胎土か(やや精良)
1021	160		土師器	甕	布留形 中型	口縁 ～肩部	971 大型土坑	(下部 埋土3b)	B-2	布留 古新	13.8			(6.7)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外10R3/1黒褐 新25R/2灰白	やや 密	やや 軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ
1022	160		土師器	甕	布留形 中型	口縁 ～肩部	971 大型土坑	(下部 埋土3b)	B-2	布留 古新	15.7			(6.8)	0.4	内10R5/2灰黄褐 外10R3/2灰黄褐 ・25R/2灰黄 新75R7/4にふい橙	やや 密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ
1023	161		須恵器	杯蓋	全形		963土坑	ポイント あり	B-2	Tk216	12.9			(4.4)	0.4	内N5/0灰 外断N6/0灰	密	硬	口:3/2	天井部回転ヘラケズリ右回り
1024	161		須恵器	杯身	口縁 ～腰部		963土坑		B-2	Tk216 ～208	12.2	14.4		(3.1)	0.3	内断N6/0灰 外N5/0灰	密	硬	口:2/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1025	161		須恵器	把手付 椀	底部		963土坑	ポイント あり	B-2	Tk216 ～208			3.5	(3.1)	0.7	内75R/1灰 外N4/0灰 新75R/1褐灰	密	硬	底:6/12 稜:7/12	底部不定方向ナデ
1026	161		須恵器	杯身	口縁 ～底部		963土坑		B-2	Tk216				(4.5)	0.6	内N6/0灰 外N5/0灰 新75R6/2灰褐	密	硬	口:1/12 以下	底部回転ヘラケズリ
1027	161		土師器	杯	口縁		963土坑	ポイント あり	B-2	辻3～4	15.9	12.6		(2.2)	0.2	内外断75R7/6橙	密 精良	やや 軟	口:3/12	内外面マメツ 非在胎土 (精良)
1028	161		土師器	高杯	(B系統・ C系統) 折衷的	杯底部	963土坑	ポイント あり	B-2	辻3～4		12.9		(3.3)	0.5	内5R7/6橙 外5R7/8橙 新75R8/3浅黄橙	密	やや 硬	接:12/12	杯底部内外面ハケ 凸面接合、稜状痕あり 非在胎土 (精良)
1029	161		土師器	壺	中型 広口壺	口縁	963土坑		B-2	辻3 ～4か	16.7			(3.7)	0.4	内25R/3淡黄 外10R7/4にふい黄橙 新N4/0灰	密	硬	口:1/12 頸:2/12	内外面マメツ



第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1030	161		土器	甕	布留系	口縁	963 土坑		B-2	中期前半～中頃	16.8			(2.6)	0.5	内10FR3にふい黄褐外7.5FR6褐断2.5S1黄灰	やや密	硬	口:1/12	内外面マツ口縁部ヨコナデ
1031	161		須恵器	杯身		完形	(南側溝) 963 土坑か		B-2	TK216～208	11.5	13.5		4.7	0.4	内10FR2灰黄褐外7.5FR2灰褐断2.5S2暗灰黄	やや密	やや軟	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ右回り
1032	161		須恵器	杯身		口縁～底部	(土器溜り)	ポイントあり	B-2	TK47	10.2	12.4		(4.1)	0.4	内外N7.0灰白断N4.0灰	密	硬	口:6/12	底部回転ヘラケズリ
1033	161		土器	甕	布留系	口縁～体部	(土器溜り)	ポイントあり	B-2	辻4～5	17.8			(8.2)	0.3	内7.5FR7.6褐外7.5FR4にふい黄褐断10FR7.4にふい黄褐	やや密	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ内面ケズリか(不明瞭)
1034	161		土器	甕or鉢	布留系	口縁～体部	(土器溜り)	ポイントあり	B-2	辻4～5	22.4	22.8		(9.0)	0.7	内10FR2灰白外10FR3浅黄褐断10FR1灰白		やや軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ外面粗いタテナメハケ内面ナデオサエ
1035	161		土器	小型器台	小型器台A	脚部	998P		B-2	庄内～布留古	(4.1)			(4.6)	0.7	内5FR7.6褐外2.5S3淡黄断5FR1灰白	密	やや軟	屈:12/12	内外面マツ円孔スカシ3方向在地胎土(精良)
1036	161		土器	壺	二重口縁壺	頸部	957 溝	(古代)	B-2	庄内～布留古	(9.0)			(3.3)	0.7	内外5FR6.8褐断7.5S1灰	やや密	やや軟	頸:1/12	頸部突帯(刻み目文)
1037	161		土器	壺	二重口縁壺	頸部	957 溝	(古代)	B-2	庄内～布留古	(7.2)			(2.0)	0.5	内N4.0灰外5FR6.8褐断N5.0灰	密	やや軟	頸:2/12	頸部突帯(刻み目文)非在地胎土(精良)※ 搬入品か
1038	161		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第6層)		B-2	庄内新～布留古	15.7			(1.9)	0.5	内2.5A2暗灰黄外10FR31黒褐断10FR2灰黄褐	やや密	やや硬	口:1/12 頸:1/12	口縁部ヨコナデ角閃石あり、生駒西麓産
1039	161		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁～体部	(第6層)		B-2	庄内新～布留古	16.4	17.9		(10.6)	0.4	内断7.5FR4にふい黄褐	やや密	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ外面粗細タタキ内面ケズリ角閃石あり、生駒西麓産
1040	161		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第6層)	除去面精査	B-2	庄内新～布留古				(1.2)	0.4	内断10FR3にふい黄褐外10FR4にふい黄褐	やや密	硬	口:1/12以下	口縁部ヨコナデ角閃石あり、生駒西麓産
1041	161		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	1064P		B-2	庄内新～布留古				(2.1)	0.5	内7.5FR4にふい黄褐外7.5FR1褐灰断7.5FR6.6褐	やや密	やや硬	破片	口縁部ヨコナデ角閃石あり、生駒西麓産
1042	161		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	1234P		B-2	庄内新～布留古	16.4			(1.9)	0.4	内10FR2灰黄褐外10FR41褐灰断10FR2灰白	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ハケのちヨコナデ非生駒西麓産胎土
1043	161		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	肩部	1232P		B-2	庄内新～布留古		(16.2)		(2.2)	0.4	内10FR2灰黄褐外10FR32黒褐断10FR2灰白	やや密	やや軟	肩:1/12	肩部外面タタキ内面ケズリ角閃石あり、生産地不明※ 非生駒西麓産胎土
1044	161		須恵器	器台	高杯形器台	脚部	971 大型土坑	(上面～上層)	B-2	TK73～216				(2.9)	(1.2)	内N5.0灰外N7.0灰白断10FR7.1灰白	密	硬	脚:1/12	方形スカシ孔数不明混入か
1045	164		土器	高杯か	(A系統か)	口縁	900P	掘立13	P4	庄内新	18.9			(3.2)	0.3	内2.5Y7.2灰黄外10FR2灰黄褐断2.5Y7.1灰白	密	硬	口:1/12	内外面細網タミガキ非在地胎土、搬入品か
1046	164		土器	甕	V様式系	小平底	900P	掘立13	P4	庄内新		(1.6)	(2.5)	0.7	0.7	内2.5Y3.1黒褐外2.5S2暗灰黄断7.5FR2.2灰褐	やや密	硬	底:5/12	外面タタキ在地胎土(V様式の胎土)
1047	164		土器	小型器台か	小型器台or高規	脚部	901P	掘立13	P4	庄内新				(3.1)	0.5	内7.5FR4.4浅黄褐外7.5FR3.3浅黄褐断7.5FR3.6浅黄褐	密	やや軟	破片	内外面マツ、円孔スカシ在地胎土か(精良)
1048	164		土器	甕	V様式系	口縁	901P	掘立13	P4	庄内新	(12～13)			(1.8)	0.5	内2.5S6.1黄灰外N3.0暗灰断5Y5.1灰	やや密	硬	口:1/12以下	口縁部ヨコナデ在地胎土(V様式の胎土)
1049	164		土器	壺	中型(平底)	底部	903P	掘立13	P4	庄内新		3.0	(4.0)	0.5	0.5	内2.5FR2.2灰白外7.5FR4にふい黄褐断N5.0灰	密	やや軟	底:12/12	外面ハケ在地胎土か(精良)
1050	164		土器	甕	(布留系か)	口縁	904P	掘立13	P4	庄内新	(13.0)			(1.6)	0.4	内10FR7.2にふい黄褐外10FR2灰黄褐断10FR3.3浅黄褐	やや密	やや軟	口:1/12以下	口縁部ヨコナデ在地胎土
1051	164		土器	壺	垂下口縁加飾壺	口縁	909P	掘立13	P4	庄内新	21.8			(3.3)	0.7	内外5FR5.6明赤褐断N4.0灰	やや密	やや軟	口:1/12	内外面マツ円形浮文刻雜在地胎土(V様式の胎土)
1052	164		土器	甕	V様式系	口縁	906P	掘立13	P4	庄内新				(2.1)	0.4	内5FR6.6褐外7.5FR4にふい黄褐断10FR2.2灰白	やや密	やや軟	口:1/12以下	口縁部ヨコナデ在地胎土(V様式の胎土)
1053	164		土器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	頸部	906P	掘立13	P4	庄内新				(1.6)	0.3	内10FR2灰黄褐外10FR32黒褐断10FR3.3にふい黄褐	やや密	硬	破片	内外面マツ角閃石あり、生駒西麓産
1054	169	47	土器	高杯	椀形	杯部	867 落込み		P4	辻3	12.7			(5.8)	0.5	内断7.5FR4.4浅黄褐外7.5FR7.6褐	密	軟	口:3/12 杯部60%	内外面マツ口縁部ヨコナデ凸面接合・棒状痕
1055	169		土器	高杯	椀形か	接合部	867 落込み		P4	辻4				(3.9)	0.5	内7.5FR7.6褐外7.5FR7.8黄褐断2.5S1黄灰	密	軟	接:12/12	内外面マツ口縁部ヨコナデ凸面接合・棒状痕
1056	169		土器	高杯	大型有段	杯部	867 落込み		P4	TK216～208	20.8			(3.5)	0.5	内7.5FR7.6褐外7.5FR7.4にふい黄褐断10FR1灰白	やや密	やや軟	口:1/12 屈:2/12	内外面マツ
1057	169		須恵器	杯蓋		全形	867 落込み		P4	TK208	12.0			4.2	0.4	内外10Y7.1灰白断N6.0灰	密	普通	口:7/12 全体30%	天井部回転ヘラケズリ右回り
1058	169	47	須恵器	杯蓋		全形	867 落込み		P4	TK208	12.6			4.2	0.4	内5PB6.1青灰外5R4.1暗青灰断5FR1赤灰	密	硬	口:2/12 屈:3/12 全体30%	天井部回転ヘラケズリ右回り
1059	169	47	須恵器	杯蓋		全形	867 落込み		P4	TK216～208	13.6			4.8	0.4	内5PB5.1青灰外5R4.1暗青灰断5FR1紫灰	やや密	硬	口:3/12 全体30%	天井部回転ヘラケズリ左回り
1060	169	47	須恵器	杯蓋		全形	867 落込み		P4	TK216～208	13.4			5.0	0.5	内断5PB5.1青灰外10S1.1灰	密	硬	口:6/12 全体70%	天井部回転ヘラケズリ左回り
1061	169	47	須恵器	杯身		完形	867 落込み		P4	TK216～208	10.4			4.6	0.4	内外N5.0灰断N7.0灰白	密	硬	口:12/12	ほぼ完形 底部回転ヘラケズリ左回り
1062	169	47	須恵器	杯身		完形	867 落込み		P4	TK216～208	10.8			4.4	0.5	内外断N5.0灰	密	硬	完形	底部回転ヘラケズリ左回り
1063	169		須恵器	杯身		体部～底部	867 落込み		P4	TK216～208		(13.7)	(3.9)	0.5	0.5	内断5FR1.1赤灰外5R4.1暗赤灰	密	硬	体:3/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1064	169	47	須恵器	高杯	短脚	脚部	867 落込み	ポイントあり	P4	TK216～208		(11.5)	(6.1)	0.7	0.7	内7.5FR2.2灰褐外2.5S6.1黄灰・7.5FR3.3にふい黄褐断2.5Y7.1灰白	密	やや軟	底:6/12	方形スカシ4方向
1065	169		須恵器	壺	(小型) 甕か	口縁	867 落込み		P4	TK216～208	(12.2)			(3.1)	0.3	内N8.0灰白外N8.0灰白・N3.0暗灰断7.5FR1.1褐灰	密	やや硬	口:1/12以下	回転ナデ

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1066	169	47	須恵器	甕		口縁	867 落込み		P4	TK216 ~208	(18.8)			(6.1)	0.6	内256/1黄灰 外N60灰 新256/1黄灰	密	やや軟	口:2/12	ナデ
1067	169		須恵器	甕		口縁	867 落込み 埋土		P4	TK216 ~208	27.9			(4.2)	0.8	内N50灰 外N40灰 新5R8/1紫灰	やや密	やや軟	口:1/12	回転ナデ
1068	169		土師器	甕	布留形	口縁	867 落込み		P4	TK216 ~208	14.0	14.2		(2.5)	0.5	内外断10R8/2灰白	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
1069	169		軟質土器	鉢か	(細片)	体部	867 落込み		P4	TK216 ~208					(0.6)	内75R7/6橙 外75R6/3にふい揚 新10R8/4浅黄橙	密	やや硬	-	体部破片形状不明確 外面成形のタタキ 1355 (854大型土坑) 類似品
1070	169		土師器	高杯	椀形	杯部	868 落込み	867 落込み 隣接	P4	TK216 ~208	14.0			(6.3)	0.5	内外断 10R7/4にふい黄橙	密精良	軟	口:3/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
1071	169		土師器	高杯		脚部	868 落込み	867 落込み 隣接	P4	TK216 ~208		9.4	8.9	(3.7)	0.5	内外断5R7/6橙	やや密	軟	底:6/12	内面シボリ
1072	169		須恵器	杯蓋		口縁~ 天井部	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	(12.0)			(3.6)	0.3	内外N60灰 新75R6/1褐灰	密	硬	口:1/12	天井部カキメ
1073	169		須恵器	杯身		口縁 ~底部	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	(11.0)	(13.6)		(4.6)	0.4	内N60灰 外断N50灰	密	硬	口:1/12	底面回転ヘラケズリ右回り
1074	169		須恵器	無蓋 高杯		杯部	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208				(7.3)	0.4	内外断N50灰	密	硬	口:1/12 以下	波状文2段
1075	169	47	須恵器	把手付 椀		全形	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	9.2	10.4	3.7	7.0	(0.3)	内58/1暗青灰 外N60灰 新5R4/1暗青灰	密	硬	口:6/12 全体70%	波状文1段 底部不定向ナデ 内面自然線輪灰
1076	169	47	須恵器	壺	小型	口縁	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	8.7			5.8	(0.4)	内N70灰白 外105/1灰白 新75/1灰白	やや密	硬	頸:5/12	外面波状文
1077	169	47	須恵器	壺	小型	口縁	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	(9.0)			(4.9)	0.6	内外N70灰白 新N80灰白	密	硬	口:1/12	直口形 類似少ない器形
1078	169		須恵器	壺		口縁	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	(17.3)			(2.2)	0.6	内断N80灰白 外N60灰	密	硬	口:1/12	波状文1段以上 内外面自然線輪灰
1079	169	47	須恵器	壺	中型	口縁	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	(18.9)			(3.7)	0.5	内断N80灰白 外105/1灰	密	硬	口:1/12	波状文2段
1080	169		須恵器	甕		肩部	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	(18.0)			(4.4)	0.4	内外断N60灰	密	硬	肩:2/12	外面平行タタキのち回転カ キメ 内面無文アテ具
1081	169		土師器	甕	布留形	口縁	868 落込み	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	18.5			(6.1)	0.7	内75R8/4浅黄橙 外断75R7/6橙 新5R4/1浅黄橙	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ
1082	169		土師器	(甌)		把手	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208						内75R8/6浅黄橙 外75R7/6橙 新25/21黒	やや密	やや硬	-	ナデ整形
1083	169		製塩土器		小型椀形	口縁	(867落込み)	(周辺・ 上面)	P4	TK216 ~208	4.2	(5.3)		(2.9)	0.3	内外断25/7/1灰白	密	硬	口:2/12	内外面ナデ整形 ※ 全体の集積中1点区化 計1066
1084	169		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西麓産	口縁	867 落込み		P4	布留 古新	14.4			(2.5)	0.6	内10R6/3にふい黄橙 外10R3/3暗橙 新10R3/3にふい黄橙	密	硬	口:1/12 頸:1/12	口縁部細細タタキのちヨコ ハケ 生駒西麓産庄内形獲 866に伴う可能性あり
1085	174		土師器	高杯	椀形	杯部	866 井戸	上層上面 (東半)	P4	辻3	14.6			(4.6)	0.4	内256/2灰白 外256/3淡黄 新N30暗灰	やや密	硬	口:4/12	口縁部ヨコナデ (867に伴う可能性あり)
1086	174		土師器	高杯		脚部	866 井戸	上層上面	P4	辻3		8.5		(5.0)	0.6	内外256/2灰白 新25/7/1灰白	やや密	硬	脚部60%	外面タテミガキ 内面ケズリ (867に伴う可能性あり)
1087	174		土師器	高杯	大型 有段形	全形	866 井戸	上層上面	P4	辻3	21.6			(14.8)	0.7	内10R7/4にふい黄橙 外5R7/8橙 新256/2灰白	密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ 凸面接合か、口縁部反 (867に伴う可能性あり)
1088	174		土師器	高杯	(C系統 II群系)	脚部	866 井戸	上層上面	P4	辻3			12.2	(3.3)	0.6	内外256/2灰白 新N30暗灰	やや密	やや軟	脚:2/12 脚部10%	脚部内面ケズリ
1089	174		土師器	小型 丸底鉢		口縁 ~体部	866 井戸	上層上面	P4	辻2~3	9.8			(5.0)	0.4	内256/2灰白 外256/2灰白 ・N30暗灰 新N60灰	やや密	硬	口:2/12	内外面ナデ・オサエ
1090	174		土師器	甕	布留形 中型	口縁 ~肩部	866 井戸	上層上面	P4	辻2~3	14.4	20.6		(8.8)	0.5	内外 10R7/4にふい黄橙 新10R7/1灰白	やや密	硬	口:2/12 頸:3/12	口縁部ヨコハケ 体部外面ヨコハケ 内面ケズリ 1100と胎土・細部調整類似 非在地胎土か
1091	174		土師器	甕	外反形	口縁 ~肩部	866 井戸	上層上面	P4	辻3~	12.6	16.0		(8.4)	0.7	内10R8/4浅黄橙 外断10R8/2灰白	やや密	やや軟	口:5/12 頸:12/12	内外面マメツ 内面接合痕
1092	174		土師器	高杯	無稜形	杯部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻3	15.6			(4.5)	0.6	内10R7/3にふい黄橙 外25/7/3浅黄 新256/1黄灰	やや密	硬	口:1/12 杯:20%	内外面タテミガキのちヨコナデ (867に伴う可能性あり)
1093	174		土師器	高杯	無稜 外反形	杯部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻3	17.0			(5.6)	0.6	内外5R6/3橙 新75R6/3にふい揚	やや密	やや軟	口:3/12 杯:4/12	外反口縁 ※ 類似形態あまりない (867に伴う可能性あり)
1094	174		土師器	高杯	(C系統 II群系)	杯底部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻2~3				(3.1)	0.6	内外10R6/2灰黄褐 新10R8/2灰白	やや密	やや軟	接:12/12	内外面マメツ 片蓋充填・棒状痕
1095	174		土師器	高杯	C系統 II群系	杯底部 ~脚部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻2~3		10.6		(5.7)	0.5	内10R8/3浅黄橙 外75R7/4にふい橙 新N50灰	やや密	やや軟	接:12/12	杯部外面タテミガキ 脚部外面タテミガキ 内面ケズリ 片蓋充填・棒状痕
1096	174		土師器	高杯	(C系統 II群系)	杯底部 ~脚部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻2~3		10.6		(3.9)	0.4	内外75R7/4にふい橙 新75R6/4にふい橙	やや密	やや軟	接:12/12	脚部外面タテミガキ 片蓋充填 (ナデツケ)
1097	174		土師器	小型 丸底壺		口縁 ~体部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻2~3	9.4			(6.5)	0.3	内外断 10R8/4浅黄橙	やや密	やや軟	口:6/12 全体30%	内外面マメツ
1098	174		土師器	壺か	台付壺か	接合部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻2~3				(3.0)	0.7	内10R5/2灰黄褐 外10R4/1褐灰 新N40灰	やや密	硬	接:12/12	外面ハケ・内面ケズリ 器種・類似不明
1099	174		土師器	鉢	(山陰系) 大型鉢	口縁	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	(布留 中~新)	44.8			(7.0)	0.9	内外256/2灰白 新N40灰	やや密	やや軟	口:1/12	内外面マメツ
1100	174		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	辻2~3	13.0			(4.0)	0.4	内外10R8/3浅黄橙 新10R8/1灰白	密	やや軟	口:7/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 1090と胎土・細部調整類似 非在地胎土か
1101	174		土師器	甕	(受口状)	口縁	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	(布留 古以前)	17.1			(2.7)	0.5	内外75R6/4にふい橙 新10R8/2灰白	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 系譜不明
1102	174		土師器	甕	V様式系	肩部~ 底部	866 井戸	上層上面 ~上層	P4	(布留 古以前)	12.0	16.4		(4.0)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外75R7/2明褐灰 新10R7/2にふい黄橙	密	やや軟	頸:1/12	外面V様式タタキ 内面オサエ

第5節（古墳） 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1103	174	C9 44	土師器	高杯	(B系統I群系)山陰系か有稜形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	14.8			(4.6)	0.6	内外7.5R7/4にふい橙新N50灰	やや密	やや軟	口:11/12 杯部90%	杯底部ケズリ、凸面接合 外面凹形状+不定方向ミガキ ミガキ山陰類似資料あり ※(因幡秋里遺跡ほか)
1104	174	C9 44	土師器	高杯	(C系統II群系)B系統影響無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	15.8			(5.7)	0.5	内10R7/3にふい黄橙外7.5R7/6橙新10R8/2灰白	やや密	硬	口:10/12 杯部90%	外面ハケのちヨコナデ 杯底部オサエ 凸面接合・内面オサエ 製作技法一部B系統影響
1105	174	C9	土師器	高杯	(B系統I群系)有稜形	杯部 ~脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2			9.1	(10.4)	0.4	内外10R6/2灰黄褐新2.5R2灰白	密	硬	全体40%	杯部ヨコナデ 脚部外面タテミガキ 内面ケズリ 凸面接合、II群系影響
1106	174		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2			11.0	(7.5)	0.4	内5R5/6明赤褐外7.5R7/6橙新N50灰	やや密	やや軟	脚:1/12 脚部50%	外面タテ面取りのちハケ 内面ケズリ
1107	174		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2		6.1		(7.2)	0.6	内7.5R6/4にふい橙外10R7/4にふい黄橙新N40灰	密	硬	脚部60%	外面タテ面取りのちハケ 内面ケズリ
1108	174		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2		8.2		(6.7)	0.5	内7.5R6/6橙外10R7/4にふい黄橙新10R8/2灰白	やや密	硬	脚部50%	外面タテ面取りのちハケ 内面ケズリ
1109	174		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2		6.4		(7.7)	0.5	内外7.5R7/6橙新N50灰	やや密	やや軟	脚部50%	内面ケズリ
1110	174		土師器	高杯	(B系統I群系)C系統影響大型有段形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	22.2			(7.5)	0.4	内2.5Y7/3浅黄外10R8/3浅黄橙新N70灰白	やや密	硬	口:1/12 以下	内外面ハケのちヨコミガキ 凸面接合 C系統影響折衷的
1111	174	C9 44	土師器	高杯	C系統II群系大型有段形	全形	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	19.6	19.9	14.8	13.9	0.6	内外7.5R6/3にふい橙新N50灰	やや密	やや軟	口:10/12 脚:3/12 杯部90% 脚部70%	内外面マメツ 脚部外面タテ面取り 凸面接合・棒状痕 外面彩色スリップ 在地粘土(精良)
1112	174		土師器	高杯	C系統II群系大型有段形	杯底部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2		18.0		(1.8)	0.7	内5R6/6橙外5R3/1黒褐新N30暗灰	密	やや軟	10%以下	内外面ハケ
1113	174		土師器	高杯	C系統II群系大型有段形	脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2			17.2	(8.2)	0.7	内外7.5R7/6橙新N40灰	やや密	やや軟	脚:2/12 脚部50%	外面タテ面取り 内面ケズリ
1114	175		土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	14.3			(4.2)	0.4	内7.5R6/4にふい橙外7.5R7/4にふい橙新N40灰	密	やや軟	口:3/12 杯部30%	外面ハケのちヨコナデ 凸面接合・棒状痕 在地粘土(精良)
1115	175	C9	土師器	高杯	(C系統II群系)B系統影響有稜形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	14.4			(5.2)	0.4	内7.5R5/2灰褐外10R8/3にふい黄褐新2.5R2灰白	やや密	やや軟	口:6/12 杯部80%	内外面マメツ、煤付着 凸面接合・棒状痕 非在地粘土か ※ 形状・製作技法折衷的
1116	175	C9	土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	15.1			(5.0)	0.4	内外7.5R6/4にふい橙新N50灰	やや密	やや軟	杯部 ほぼ全形	外面ハケのちヨコナデ 凸面接合・棒状痕 在地粘土(精良)
1117	175		土師器	高杯	(C系統II群系)B系統影響無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	15.2			(4.9)	0.5	内外2.5R2灰白新N40灰	やや密	硬	口:5/12 杯部50%	杯底部ケズリ 凸面接合ヨコナデ 凸面接合・棒状痕
1118	175		土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	16.0			(5.2)	0.5	内外7.5R7/4にふい橙新2.5R2灰白	密	硬	口:4/12 杯部40%	外面ハケのちヨコナデ 凸面接合
1119	175	C9	土師器	高杯	(C系統II群系)B系統影響無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	16.6			(5.7)	0.4	内5R4/6赤褐・7.5R7/4にふい橙外2.5Y7/3浅黄新N50灰	やや密	やや軟	口:9/12 杯部90%	杯底部ケズリ 凸面接合ヨコナデ 凸面接合・棒状痕 製作技法一部B系統影響
1120	175	C9 44	土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	17.5			(5.1)	0.4	内2.5R2灰白外10R8/3浅黄橙新N50灰	やや密	やや軟	口:8/12 杯部70%	外面ハケのちヨコナデ 凸面接合・棒状痕 3Z(1482井戸上層)の同工品
1121	175		土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯底部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	2.6			(2.1)	0.6	内外10R7/4にふい黄橙新N40灰	やや密	硬	接:12/12	外面ハケのちヨコナデ 凸面接合・棒状痕
1122	175		土師器	高杯	II群系無稜外反形	杯底部 ~脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2		11.7	13.1	(13.0)	0.6	内10R6/3にふい黄橙外10R6/3にふい黄橙新N40灰	密	硬	脚:2/12 脚部50% 杯部25%	杯部ハケのちヨコナデ 杯底部ケズリか 脚部外面タテ面取りのちハケ 内面ケズリ 凸面接合・棒状痕あり 形態・技法折衷的資料
1123	175		土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	16.4			(5.0)	0.6	内2.5Y7/3浅黄外2.5Y3/1黒褐新2.5Y4/1黄灰	密	やや硬	口:6/12 杯部50%	外面ハケのちヨコナデ 在地粘土か(精良)
1124	175		土師器	高杯	(C系統II群系)無稜外反形	杯部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	17.4			(5.6)	0.5	内10R5/2灰黄褐外2.5Y7/2灰黄新N20黒	やや密	硬	口:3/12 杯部30%	外面ミガキ?のちヨコナデ 接合部不明瞭
1125	175		土師器	高杯	無稜外反形	杯部 +脚部	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	15.8		11.8	(13.5)	0.4	内7.5R5/3にふい橙外7.5R3/1黒褐新N30暗灰	密	やや軟	口:3/12 脚:2/12	杯底部ケズリのちミガキ 形態・技法折衷的資料
1126	175		土師器	高杯	C系統II群系無稜外反形	全形	866 井戸	上層	P4	布留新辻1・2	16.4	17.0	11.1	(13.2)	0.6	内7.5R7/6橙外7.5R7/6橙新10R8/2灰白	やや密	やや軟	口:2/12 脚:9/12 全体60%	外面ハケのちヨコナデ 脚部外面タテミガキ 内面ケズリ 凸面接合・棒状痕
1127	175	C9 44	土師器	小型丸底壺	B系統I群系	口縁 ~底部	866 井戸	上層	P4	布留中~新	9.0	8.2			0.2	内10R7/3にふい黄橙外新7.5R8/4浅黄橙	密	硬	口:10/12 全体90%	口縁部断筋ヨコミガキ 体部上半断筋ヨコミガキ 下ケズリ 在地粘土(精良)か → 磁地品

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1128	175	C9 44	土師器	小型丸底壺	B系統 I群系	全形	866 井戸	上層	P4	布留中～新	10.4	9.0		8.3	0.3	内外5R7/8 橙・5R3/1 黒褐 断5R7/6 橙	やや密	硬	口:3/12 全体40%	口縁部外面細筋ヨコミガキ内面ハケ 体部上半細筋ヨコミガキ下半ケズリ 在地胎土(精良)か → 磁地品
1129	175		土師器	小型丸底鉢	B系統 I群系	口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留中～新	11.8			(5.1)	0.6	内外10R8/3 浅黄橙 断10R8/2 灰白	密	やや軟	類:1/12	口縁部細筋ヨコミガキ内面ハケ 体部上半細筋ヨコミガキ下半ケズリ 在地胎土(精良)か → 磁地品
1130	175		土師器	小型丸底壺	C系統 II群系	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	7.2	8.2		(7.3)	0.3	内外5R6/6 橙 断5R7/6 橙	やや密	やや軟	口:2/12 類:4/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ナデ・オサエ
1131	175		土師器	小型丸底壺	(C系統 II群系)	口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	8.6	8.6		(6.1)	0.4	内10R7/4にふい黄橙 外10R7/4にふい黄橙・N20黒 断10R8/2 灰白	やや密	硬	口:4/12 類:5/12	口縁部ヨコナデ 外面ミガキ内面ケズリ上半オサエ・ハケ
1132	175		土師器	小型丸底壺	(C系統 II群系)	口縁～底部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	8.4	8.8		(8.5)	0.4	内外5R6/6 橙 断N50 灰	やや密	やや軟	口:3/12 類:9/12 全体40%	口縁部ヨコナデ 内外面ナデ
1133	175	C9 44	土師器	小型丸底壺	C系統 II群系	胴ま完	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	8.8	9.1		8.6	0.4	内外10R5/2 灰黄褐 断5R5/6 赤赤褐	密	硬	口:10/12 類:9/12 ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ 在地胎土(精良)
1134	175		土師器	小型丸底壺	C系統 II群系	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	7.8	9.8		8.8	0.4	内10R6/2 灰黄褐・10R4/1 褐灰 外10R6/2 灰黄褐・N30 暗灰 断10R8/3 浅黄橙	密	硬	口:3/12 類:9/12 全体70%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ 非在地胎土か ※ (周辺での生産か)
1135	175	C9 44	土師器	小型丸底壺	C系統 II群系	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	8.8	11.0		9.8	0.4	内外5R7/6 橙・N20 黒 断5R5/4 浅黄橙	やや密	硬	口:4/12 類:4/12 全体20%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ 内面ケズリ上半オサエ 在地胎土(精良)
1136	175		土師器	小型丸底壺	C系統 II群系	体部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	8.0	12.8		(7.6)	0.5	内10R5/2 灰黄褐 外10R4/1 褐灰 断N40 灰	やや密	硬	類:2/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ 内面ケズリ上半オサエ
1137	175	C9 44	土師器	小型丸底鉢	丹波か	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	10.0			8.7	0.4	内外25/7/2 灰黄・75/5/1 灰 断N40 灰	やや密	硬	口:9/12 全体80%	ナデ・オサエ成形 接合痕明瞭
1138	175	C9 44	土師器	小型丸底鉢	丹波か	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	9.6			7.5	0.4	内25/7/2 灰黄 外75R7/6 橙 断N50 灰	やや密	硬	口:4/12 類:7/12 全体60%	ナデ・オサエ成形 接合痕明瞭
1139	175		土師器	小型丸底鉢	丹波か	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	9.1		(6.0)	8.1	0.4	内外25/7/2 灰黄 断N30 暗灰	やや密	硬	口:2/12 類:3/12 全体20%	ナデ・オサエ成形 接合痕明瞭
1140	175		土師器	小型丸底鉢	丹波か	口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	9.7		(6.1)	0.3		内25/8/2 灰白 外10R7/3にふい黄橙 断N50 灰	やや密	やや軟	口:3/12 類:3/12	ナデ・オサエ成形 接合痕明瞭
1141	175		土師器	小型丸底鉢		口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	10.9		(5.6)	0.6		内断10R4/1 褐灰 外25/5/2 暗灰黄	密	やや軟	口:2/12 類:2/12	ナデ・オサエ成形 在地胎土(精良) B系統影響在地製物品か
1142	175		土師器	鉢か	小型鉢か	口縁	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	11.8	12.0	(4.5)	0.5		内75R7/6 橙 外5R6/8 橙 断5R7/6 橙	密	硬	口:1/12	内外面ハケ
1143	175	C9 44	土師器	小型壺	(II群系)	完形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	5.8	8.0		7.5	0.4	内10R7/2にふい黄橙 外75R7/4にふい黄橙 断10R8/2 灰白	密	硬	口:7/12 全体90%	内外面底部ケズリ 上半オサエ 口縁部ヨコナデ 口縁部削り欠きの可能性あり
1144	175	C9 44	土師器	ミニチュア鉢	てづくね	完形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	7.5			4.2	0.6	内75R7/6 橙 外10R7/4にふい黄橙 断10R5/3にふい黄橙	やや密	やや軟	口:8/12 全体90%	てづくね整形 オサエ・ナデ 非在地胎土か
1145	175		土師器	小型器台	小型器台C	屈曲部～脚部	866 井戸	上層	P4	布留中か	2.8	8.9	(4.5)	0.6		内外75R6/4にふい黄橙 断10R8/4 浅黄橙	密	やや軟	屈:4/12	外面細筋ヨコミガキ内面ハケ 非在地胎土搬入品か
1146	176		土師器	壺	(精製B系統)か 中型短頸壺	口縁	866 井戸	上層	P4	布留中～新	11.6		(3.8)	0.8		内外5R7/8 橙 断5R6/8 橙	やや密	硬	口:10/12 類:12/12	口縁部細筋ヨコミガキ内面ケズリ 非在地胎土か ※ (周辺製物品か)
1147	176	C9 44	土師器	壺	生駒か C系統 中型直口壺	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	10.5	14.0	14.7	0.5		内外10R4/2 灰黄褐 断10R7/4にふい黄橙	やや粗	やや軟	口:1/12 類:12/12 全体70%	口縁部ハケ 外面ハケ・内面ケズリ 非在地胎土・生駒西産産か
1148	176	C9 44	土師器	壺	C系統 中型直口壺	全形	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	11.2	15.7	17.9	0.3		内外75R7/6 橙 断75R5/1 褐灰	やや密	やや軟	口:10/12 全体90%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ肩部ヨコハケ 内面ケズリ底部指跡痕 外面ハケリ・被熱か 在地胎土(精良)
1149	176		土師器	壺	A系統 大型直口壺	口縁	866 井戸	上層	P4	布留古か	13.5		(5.9)	0.8		内5R6/6 橙 外10R5/2 灰黄褐 断10R8/3 浅黄橙	やや密	やや軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(V様式的胎土)
1150	176		土師器	壺	(A系統) 大型直口壺	口縁	866 井戸	上層	P4	布留古か	14.5		(6.1)	0.9		内5R6/6 橙 外10R5/2 灰黄 断N60 灰	やや密	やや軟	口:2/12 類:2/12	口縁部タテハケのちヨコナデ C系統影響 A系統 在地胎土(V様式的胎土)
1151	176		土師器	壺	A系統 大型直口壺	口縁	866 井戸	上層	P4	布留古か	13.8		(6.0)	0.6		内外75R6/4にふい黄橙 断N50 灰	やや密	やや軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(V様式的胎土)
1152	176		土師器	壺	(A系統) 中型直口壺	口縁	866 井戸	上層	P4	布留古か	14.2		(7.6)	0.8		内外10R4/2 灰黄褐 断N50 灰	やや粗	やや軟	口:2/12	口縁部タテミガキ 在地胎土(V様式的胎土)
1153	176		土師器	壺	C系統 大型直口壺	口縁	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	17.9	19.0	(8.2)	0.7		内10R7/3にふい黄橙 外25/7/2 灰黄 断N40 灰	やや密	やや軟	口:2/12 屈:3/12	口縁部ヨコナデ
1154	176	C9 44	土師器	壺	C系統 大型直口壺	口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	17.1	16.1	(17.7)	0.5		内10R7/4にふい黄橙 外25/7/2 灰黄 断N30 暗灰	密	硬	口:10/12 類:10/12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ 在地胎土(精良)
1155	176	C10 44	土師器	壺	阿波産 中型二重口縁壺	口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留中～新か	18.4		(6.5)	0.5		内外10R7/3にふい黄橙 断10R7/1 灰白	やや密	やや軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ 片岩含む → 阿波搬入品 (129:中層出土)と同一個体の可能性あり
1156	176		土師器	壺	阿波産 大型二重口縁壺	口縁～体部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	19.5	29.6	(25.5)	0.8		内外5/7/2 灰白 断5/6/2 灰オリープ	密	やや軟	口:1/12 類:1/12	口縁部ヨコナデ 外面ケズリ上半オサエ 非在地胎土 → 阿波搬入品(片岩なし)
1157	176	C9 44	土師器	壺	C系統 大型二重口縁壺	口縁～底部	866 井戸	上層	P4	布留新 辻1・2	23.0	33.2	(42.9)	0.6		内5R3/1 黒褐 断5R7/6 橙(口～胴) 外75R7/6 橙 断75R7/3にふい黄橙	密	やや軟	口:6/12 底:11+12	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ



第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1158	176		土師器	壺	讃岐系近畿型生駒西産大型複合口縁	(口縁)	866 井戸	上層上面~上層	P4	布留	25.6	32.6		(16.3)	1.0	内5R5/4にふい赤褐外7.5R5/4にふい褐断N50灰	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ角肉石あり、生駒西産(1231;下層)同一個体の可能性あり
1159	176		土師器	壺	東日本系か大型	底部	866 井戸	上層	P4	-		25.4		(5.2)	0.7	内2.5R7/2灰黄外7.5R7/6褐断10R6/4にふい黄橙	密	やや軟	10%以下	外面タテミガキ肩部身部施文か非在地胎土、搬入品か
1160	176		土師器	壺	A系統(平底)大型	底部	866 井戸	上層	P4	布留古か		15.6	3.9	(4.4)	0.7	内5R/1灰白外2.5R/1灰白断5R6/1灰	やや密	やや軟	底:12/12	外面タテミガキ
1161	176		土師器	壺	(平底)大型	底部	866 井戸	上層	P4	布留古か			8.2	(1.9)	0.8	内外10R8/4浅黄橙断N50灰	やや密	やや軟	底:6/12	
1162	176		土師器	壺	(平底)大型	底部	866 井戸	上層	P4	布留古か		8.6	4.6	(2.6)	0.7	内2.5R7/2灰黄外N30暗灰断N50灰	密	硬	屈:2/12	内外面ハケ
1163	176	C9 44	土師器	壺か	台付	底部~台部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2				(6.6)	0.7	内2.5R/1黄灰外2.5R/2灰黄断2.5R/1灰白	やや密	硬	底:7/12	外面ケズリ内面ナデ非在地胎土か(精良)系譜不明・要検討
1164	177		土師器	甕	布留形小型	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	11.6	13.0		(6.8)	0.4	内7.5R7/4にふい橙外7.5R7/1黒断2.5R6/1黄灰	やや密	やや軟	口:3/12 類:3/12	口縁部ハケ外面ハケ内面ケズリ非在地胎土か
1165	177		土師器	甕	布留形小型	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留古~中	13.7			(4.9)	0.4	内外断10R6/2灰黄褐	やや密	やや軟	口:2/12 類:4/12	口縁部ヨコナ内面ケズリ
1166	177		土師器	甕	布留形小型	口縁~体部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	12.2	14.4		(12.4)	0.3	内外10R8/1褐灰断10R7/1灰白	密	硬	口:2/12 類:2/12	口縁部ヨコナ外面ハケ内面ケズリ在地胎土(精良)
1167	177		土師器	甕	布留形小型	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	15.2			(6.1)	0.3	内外10R7/3にふい黄橙断10R8/2灰白	密	やや軟	口:7/12 類:7/12	口縁部ヨコナ外面ハケ内面ケズリ上半ナデ非在地胎土か、精良
1168	177		土師器	甕	布留形	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	14.6			(5.1)	0.4	内10R7/3にふい黄橙外10R7/3にふい黄橙・N20黒断N40灰	密	硬	口:4/12 類:5/12	口縁部ヨコナ内面ケズリ非在地胎土か(精良)
1169	177	C9 45	土師器	甕	布留形中型	(ほぼ完)	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	13.0	20.6			0.3	内7.5R7/6橙外N20黒・7.5R6/8橙断N40灰	密	やや軟	口:11+/12	口縁部ヨコナ外面ハケ肩部ヨコハケ内面ケズリ底部指痕※米粒状圧痕(x3)
1170	177		土師器	甕	布留形中型	口縁~体部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	14.6	21.6		(10.3)	0.5	内外7.5R8/4浅黄橙断10R8/3浅黄橙	やや密	硬	口:4/12 類:4/12	口縁部ヨコナ外面ハケ内面ケズリ上半オサエ
1171	177	C9	土師器	甕	布留形(大型)	口縁~体部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	14.2	(23+)		(12.6)	0.4	内5R5/4にふい赤褐外5R2/1黒断5R5/8明赤褐	やや密	やや軟	口:9/12 類:9/12	口縁部ヨコナ外面ハケ肩部ヨコハケ内面ケズリ
1172	177		土師器	甕	布留形中型	口縁	866 井戸	上層	P4	布留古~中	16.5			(3.8)	0.3	内外2.5R7/2灰黄断N50灰	やや密	硬	口:1/12 類:2/12	口縁部ヨコナ内面ケズリ
1173	177		土師器	甕	布留形中型	口縁	866 井戸	上層	P4	布留中か	16.3			(4.6)	0.5	内5R6/1灰外7.5R5/1灰断7.5R6/1灰白	やや密	やや軟	口:2/12 類:4/12	口縁部ヨコナ内面ケズリ
1174	177		土師器	甕	(布留系か)	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留古か	17.5			(7.1)	0.6	内外断10R7/3にふい黄橙	やや密	硬	口:1/12 類:2/12	口縁部ヨコナ内外面ハケ
1175	177		土師器	甕	(布留影響か)	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	10.2	15.4		(4.5)	0.4	内10R7/4にふい黄橙外10R7/3にふい黄橙・N20黒断2.5R6/2灰白	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナ内面ケズリ非在地胎土か系譜不明・要検討
1176	177		土師器	甕	台付甕か	底部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2		11.1		(4.1)	0.3	内10R6/2灰黄褐外10R7/3にふい黄橙断10R8/2灰白	密	硬	接:12/12	外面粗いハケ・内面板ナデ非在地胎土か(精良)系譜不明・要検討
1177	177		土師器	鉢	(C系統)小型~中型	口縁	866 井戸	上層	P4	布留中~新	21.2			(4.2)	0.7	内10R8/3浅黄橙外10R7/4にふい黄橙断10R5/1褐灰	やや密	硬	口:4/12 類:4/12	口縁部ハケ・オサエ外面ハケ内面ケズリ在地胎土(V線式的胎土)系譜不明
1178	177	C9 C10 45	土師器	製塩土器	甕形	(ほぼ完)	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	13.0	17.3			0.5	内外2.5R8/2灰白断N50灰	やや粗	硬	口:10/12 全体80%	内外面ナデ、接合痕明瞭体部外面被熱赤変非在地胎土
1179	177		土師器	製塩土器	甕形	口縁~肩部	866 井戸	上層	P4	布留新注1・2	11.8	14.8		(10.3)	0.4	内10R6/2灰黄褐外10R5/2灰黄褐断10R3/1黒褐	やや粗	硬	口:2/12 類:2/12	内外面ナデ、接合痕明瞭体部外面被熱赤変非在地胎土
1180	177		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	866 井戸	上層~中層	P4	布留新注1・2			10.9	(9.1)	0.5	内10R6/2灰黄褐外10R7/3にふい黄橙断N40灰	密	硬	脚:5/12 接:12/12	外面タテ面取り内面ケズリ(上層帰属か)
1181	177		土師器	高杯	精製B系統	脚部	866 井戸	上層~中層	P4	布留中				(7.7)	0.8	内5R7/4にふい橙外2.5R6/4にふい橙断5R8/3淡橙	密	やや軟	脚:6/12	外面タテ面取りのち極細ヨコミガキ非在地胎土、搬入品(中層帰属か)
1182	177		土師器	小型器台	精製B系統小型器台A	脚部	866 井戸	上層~中層	P4	布留中				(5.4)	0.4	内5R6/4にふい橙外2.5R5/4にふい赤褐断5R8/4淡橙	密	硬	屈:12/12	外面極細ヨコミガキ凸面接合口孔スリ3方向非在地胎土搬入品(1182と胎土類似)(中層帰属か)
1183	177		土師器	壺	(A系統)大型直口壺	口縁	866 井戸	上層~中層	P4	布留古~中	12.8			(6.2)	0.9	内5R6/6橙外10R5/2灰黄褐断10R8/3浅黄橙	やや密	やや軟	類:3/12	口縁部外面ハケのちヨコナデ(中層帰属か)
1184	177		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	上層~中層	P4	布留古	15.2			(5.2)	0.3	内7.5R8/2灰褐・10R7/3にふい黄橙外10R7/3にふい黄橙断7.5R8/3浅黄橙	密	硬	口:1/12 類:2/12	口縁部ヨコナ内面ケズリ非在地胎土か(中層帰属か)
1185	177		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	866 井戸	上層下部~中層	P4	布留新注1・2				(7.2)	0.5	内外10R5/2灰黄褐断10R5/1褐灰	やや密	硬	接:12/12	外面タテ面取り内面ケズリ(上層帰属か)
1186	177		土師器	器台か	A系統	脚部	866 井戸	上層下部~中層	P4	布留古~中			12.3	(1.9)	0.4	内外10R8/2灰白断N50灰	密	硬	脚:3/12	外面タテミガキ在地胎土(精良)(中層帰属か)
1187	177		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	口縁~体部	866 井戸	上層下部~中層	P4	布留新注1・2	5.9	8.2		(5.6)	0.4	内2.5R8/3淡黄外10R8/3浅黄橙断7.5R7/6橙	やや密	やや軟	類:3/12	内外面マメツ、内面ケズリ(上層帰属か)
1188	177		土師器	小型丸底壺	(B系統I群系か)	口縁~体部	866 井戸	上層下部~中層	P4	布留新注1・2	8.8			(6.3)	0.5	内10R8/4浅黄橙外7.5R8/4浅黄橙断N50灰	やや密	やや軟	口:1/12 類:6/12	口縁部ヨコナ内面ケズリか
1189	177		土師器	壺	C系統小型直口壺	口縁	866 井戸	上層下部~中層	P4	布留中~新	10.9			(4.9)	0.5	内外10R7/2にふい黄橙断N50灰	密	硬	口:2/12 類:1/12	口縁部ハケのちヨコナ非在地胎土(精良)
1190	177		土師器	壺	小型二重口縁壺	頸部	866 井戸	上層下部~中層	P4	布留中か	5.4	6.6		(4.0)	0.7	内外7.5R7/6橙断10R8/3浅黄橙	やや密	やや軟	類:11/12	内外面マメツ在地胎土(精良)(中層帰属か)

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
1191	177		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西産	口縁	866 井戸	上層下部 ~中層	P4	庄内新 ~布留古	15.7				0.4	内 75R3/2 黒褐 外 75R2/1 黒 断 75R4/2 灰褐	やや 密	やや 軟	口: 1/12 以下 頸: 2/12	口縁部ヨコナデ 体部外面縁部タキ 内面ケズリ 角内石あり、生駒西産	
1192	177		土師器	甕	布留形 中型	口縁 ~肩部	866 井戸	上層下部 ~中層	P4	布留中 か	14.4	19.2			0.3	内 75R7/6 橙 外 75R7/6 橙 ・N2/0 黒 断 N8/0 灰白	やや 密	やや 軟	口: 3/12 頸: 4/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのち肩部ヨコ ハケ 内面ケズリ	
1193	177		土師器	甕	布留形 小型	口縁 ~肩部	866 井戸	上層下部 ~中層	P4	布留 古~中	14.4	17.8		(7.8)	0.4	内 75R8/4 浅黄橙 外 75R8/4 浅黄橙 ・N3/0 暗灰 断 75R8/3 浅黄橙	やや 密	やや 軟	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 体部外面ハケ内面ケズリ	
1194	177		土師器	壺か	A系統 台付壺か	接合部	866 井戸	上層下部 ~中層	P4	布留古		10.4			(3.3)	0.7	内 10R6/3 にふい黄橙 外 10R5/1 褐灰 断 10R6/1 褐灰	やや 密	硬	接: 12/12	外面タテミガキ 在地胎土 (V様式的) (中層産)
1195	178		土師器	小型 丸底壺	B系統	口縁	866 井戸	中層	P4	布留中	10.5				(3.5)	0.5	内 25R2/2 灰白 外 25R2/2 灰黄 断 25R1/1 灰白	やや 密	やや 軟	口: 3/12	口縁部縮ヨコミガキ 器地品 or 模倣品
1196	178		土師器	有段 口縁鉢	C系統	口縁 ~体部	866 井戸	中層	P4	布留 古~中	16.8				(4.6)	0.4	内 10R7/3 にふい黄橙 外 25R7/3 浅黄 断 N5/0 灰	密	やや 軟	口: 1/12 以下 底: 1/12	口縁部ヨコナデ 体部外面ハケ
1197	178		土師器	小型 器台	精製 B系統	脚裾部	866 井戸	中層	P4	布留 古~中				12.9	(2.8)	0.5	内 75R6/4 にふい橙 外 75R7/2 にふい黄橙 断 75R8/3 浅黄橙	密	硬	裾: 2/12	外面縮ヨコミガキ 内面粗いハケ 在地胎土か (精良) → 磁地か
1198	178		土師器	有孔鉢	A系統 (V様式系)	体部 ~底部	866 井戸	中層	P4	布留古			6.8	(3.3)	0.5	内断 10R7/2 にふい黄橙 外 25R7/2 灰黄	密	硬	底: 12/12	外面V様式タキ	
1199	178		土師器	壺	(A系統か) 直口壺	口縁	866 井戸	中層	P4	布留古 か	13.5				(7.6)	0.7	内 10R7/2 にふい黄橙 外 10R5/2 灰黄褐 ・N2/0 黒 断 N6/0 灰	密	硬	口: 7/12	口縁部タテ・ナメハケ 非在地胎土か、系統不明
1200	178		土師器	壺	C系統 大型 直口壺	口縁	866 井戸	中層	P4	布留中	18.8				(9.1)	0.7	内外 10R5/2 灰黄褐 断 10R7/2 にふい黄橙	密	やや 軟	口: 1/12 以下 頸: 3/12	内外面ヨコナデ
1201	178		土師器	壺	(A系統か) 二重 口縁壺	口縁	866 井戸	中層	P4	布留 古~中				19.0	(3.8)	0.8	内外 10R7/3 にふい黄橙 断 10R8/2 灰白	やや 密	やや 軟	屈: 1/12	内外面ヨコナデ 在地胎土 (V様式的胎土)
1202	178		土師器	壺	A系統 (平底)	底部	866 井戸	中層	P4	布留古			2.7	(2.8)	0.5	内 75R3/1 黒褐 外 10R6/2 灰黄褐 断 10R6/2 灰黄褐	密	やや 軟	底: 12/12	外面V様式タキ 非在地胎土	
1203	178		土師器	壺	精製か (平底)	底部	866 井戸	中層	P4	布留古			5.8	(3.4)	0.7	内 N2/0 黒 外 25R2/2 灰黄 断 N2/0 黒 ・25R7/2 灰黄	密	硬	底: 4/12	外面ナデ内面ハケ 非在地胎土か、精良	
1204	178		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	866 井戸	中層	P4	布留古	14.6				(4.2)	0.2	内 10R7/2 にふい黄橙 外 10R6/2 灰黄褐 ・N3/0 暗灰 断 N5/0 灰	やや 密	硬	口: 5/12 頸: 5/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ケズリ 非在地胎土、搬入品か
1205	178		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	中層	P4	布留古	14.6				(2.9)	0.3	内 10R7/3 にふい黄橙 外 10R7/3 にふい黄橙 ・N3/0 暗灰 断 25R2/2 灰白	やや 密	硬	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 口縁形態田中I型
1206	178		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	中層	P4	布留古	14.8				(3.8)	0.4	内 25R2/2 灰黄 外 N3/0 暗灰 断 25R2/2 灰白	密	やや 軟	口: 3/12 頸: 3/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリか 口縁形態縮し外傾面 ※ (田中分類II型)
1207	178		土師器	甕	布留系	口縁	866 井戸	中層	P4	布留古	15.7				(5.1)	0.4	内 10R6/1 褐灰 外 25R4/1 黄灰 断 10R4/1 褐灰	密	硬	口: 1/12	口縁部ヨコハケ 内面ケズリ 口縁形態縮し外傾面 ※ (田中分類II型) 非在地胎土か
1208	178		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	中層	P4	布留 古~中	11.8				(3.8)	0.3	内 10R6/2 灰黄褐 外 N4/0 灰・5R7/6 橙 断 25R2/2 灰黄	やや 密	硬	口: 1/12 頸: 1/12	口縁部ヨコナデ 口縁形態内面肥厚 (定型化)
1209	178		土師器	壺	阿波産 中型二重 口縁壺	体部	866 井戸	中層	P4	布留古		21.6			(7.2)	0.4	内 25R5/1 黄灰 外 10R8/3 にふい黄橙 ・10R8/3 にふい黄橙 ・10R7/2 にふい黄橙 ・10R7/1 黒 断 10R7/3 にふい黄橙	やや 密	硬	頸: 3/12	外面ハケのち上下ミガキ 内面上半オサエ 非在地胎土 ※ 阿波搬入品 (片岩なし)
1210	178	C9 C10 45	土師器	壺	阿波産 大型二重 口縁壺	口縁 ~体部	866 井戸	中層	P4	布留古	21.8	27.9		(26.9)	0.5	内断 10R8/3 浅黄橙 外 10R7/3 にふい黄橙	やや 密	やや 軟	口: 11+12	口縁部ヨコナデ 外面ハケのち上下ミガキ 下半タテミガキ 内面上半オサエ 底部タテミガキ 非在地胎土 ※ 阿波搬入品 (片岩なし)	
1211	178		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	866 井戸	中層	P4	布留古	13.4				(4.8)	0.2	内 75R5/2 灰褐 外 N2/0 黒	密	硬	口: 6/12 頸: 6/12	口縁部ヨコナデ 体部外面タテハケ 内面ケズリ ※ (口縁形態田中分類I型) 非在地胎土か
1212	178	C9 45	土師器	甕	布留形 中型	口縁 ~体部	866 井戸	中層	P4	布留古	17.2	24.0		25.2	0.2	内断 25R8/3 淡黄 外 25R8/3 淡黄 ・N2/0 黒	密	硬	口: 10/12 体部 40%	口縁部ヨコナデ 外面ナメハケタテハケ 内面ケズリ底部内面縮面 ※ (口縁形態田中分類I型)	
1213	178		土師器	高杯	A系統 大型	杯部	866 井戸	中層 ~下層	P4	~ 布留古					(3.7)	0.5	内 10R7/3 にふい黄橙 外 10R7/2 にふい黄橙 断 10R8/1 灰白	やや 密	硬	稜: 3/12	内外面タテミガキ
1214	178		土師器	甕	布留形 小型	口縁 ~体部	866 井戸	中層 ~下層	P4	布留 古~中	11.4	12.6		(6.2)	0.3	内 25R6/1 黄灰 外 10R8/3 浅黄橙 断 25R7/1 灰白	やや 密	硬	口: 1/12 頸: 3/12	口縁部ヨコナデ、被熱赤変 体部外面タテハケのち肩部 ヨコハケ 内面ケズリ 口縁形態縮し外傾面 ※ (田中分類II型)	
1215	178		土師器	甕	V様式系	体部	866 井戸	中層 ~下層	P4	~ 布留古					(4.1)	0.7	内外 10R7/2 にふい黄橙 断 10R8/2 灰白	密	硬	頸: 1/12 以下	外面タキ (V様式系) 在地胎土 (V様式的胎土粗い)
1216	179		土師器	壺	A系統 中型 直口壺	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	12.8				(4.9)	0.8	内外 10R7/3 にふい黄橙 断 N4/0 灰	やや 密	やや 軟	口: 2/12	タテハケのちヨコハケ 在地胎土 (V様式的胎土)
1217	179	C9 46	土師器	鼓形 器台	近畿型	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新		9.0	20.0	(8.2)	0.6	内 10R6/2 灰黄褐 外 25R7/3 浅黄 断 10R8/2 灰白	密	硬	底: 1/12 筒: 4/12	受部外面タテミガキ 内面ケズリ 脚部外面ヨコナデ 内面ハケ 非在地胎土か (精良)	
1218	179	C9 46	土師器	甕	(布留系)	(ほぼ完)	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	16.0	21.8		24.5	0.2	内 10R6/3 にふい黄橙 外 N3/0 暗灰 断 10R8/2 灰白	密	硬	口: 9/12 全体 80%	口縁部内面ハケのちヨコナデ 体部外面タテハケ肩部ヨコ ナデ ※ (口縁形態田中分類I型) 非在地胎土 ※ 周辺搬入品 (大和か)	

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1219	179	C9 46	土師器	甕	布留形	口縁 ～ 体部	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	15.0	20.6		(19.8)	0.2	内 5YR4/2 灰褐 ・N2/0 黒 外 N2/0 黒 新 25/8/2 灰白 ・N4/0 灰	密	硬	口：4/12 全体 50%	口縁部ヨコナデ 体部タテハケのち体部中央 ヨコハケ 内面ケズリ底部附磨痕 ※(口縁形態田中分類Ⅰ型) 非在地胎土 ※ 周知輸入品(大和か)
1220	179	C9 46	土師器	甕	布留形	口縁 ～ 体部	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	15.8	20.5	(16.1)		0.3	内 10/R6/3 にふい黄橙 ・7.5YR3/2 黒褐 外 N2/0 黒 新 10/R8/3 浅黄橙	やや 密	硬	口：5/12 類：11/12	口縁部ヨコナデ 体部外面ハケ背部ヨコナデ 内面下半ケズリ 上半ケズリ 口縁部内面磨痕(厚(定型 布留形)) 在地胎土か
1221	179		土師器	甕	布留傾向	体部	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新		20.6		(15.7)	0.3	内 2.5Y7/2 灰黄 ・10/R3/1 黒褐 ・N2/0 黒 外 2.5Y7/3 浅黄 ・N2/0 黒 新 2.5Y7/2 灰黄	密	硬	体：3/12	外面タテナメハケ内 面ケズリ 非在地胎土か
1222	179	C9	土師器	甕	布留形	体部 ～ 底部	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新		22.0		(17.0)	0.3	内 7.5YR3/1 黒褐 外 N2/0 黒 新 7.5YR2/2 灰白	やや 密	硬	底：12/12	体部外面タテハケのち肩部 ヨコハケ 内面ケズリ底部附磨痕 1228 と同一個体の可能性あり
1223	179	C9	土師器	甕	(布留系)	体部 ～ 底部	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新		21.7		(12.9)	0.3	内 10/R3/2 黒褐 外 10/R5/2 灰黄褐 新 10/R8/2 灰白	密	硬	底：12/12	体部外面ハケ、内面ケズリ 非在地胎土か
1224	179		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	19.3			(3.1)	0.4	内 2.5Y3/1 黒褐 外 N2/0 黒 新 N3/0 暗灰 ・2.5Y8/2 灰白	密	やや 軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラケズリ 破片一定数あるが復元不可 ※ 口縁のみ抽出 ※(口縁形態田中分類Ⅰ型) 非在地胎土か、1222 と同一個 体の可能性あり
1225	179	C9	土師器	甕	布留形	体部 ～ 底部	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新		22.0		(12.5)	0.3	内 N3/0 暗灰 ・10/R4/1 褐灰 外 N2/0 黒 新 10/R7/3 灰白 ・N5/0 灰	密	硬	底：12/12	外面タテハケ 内面ケズリ底部附磨痕 内面底部灰化(物類著)に付着 1224 と同一個体の可能性あり
1226	179		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	16.6			(2.6)	0.2	内 10/R7/3 にふい黄橙 外 N2/0 黒 新 10/R8/2 灰白	密	やや 軟	口：1/12	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラケズリ ※(口縁形態田中分類Ⅱ型) 非在地胎土か 口縁破片のみ、1227 と同一 個体の可能性あり
1227	179		土師器	甕	布留形	(底部)	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新				(3.3)	0.2	内 10/R4/2 灰黄褐 外 N2/0 黒 新 10/R8/2 灰白	密	硬	底：12/12	体部内面ケズリ底部附磨痕 在地胎土か、1226 と同一個 体の可能性あり
1228	179		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	14.7			(4.4)	0.3	内 10/R4/2 灰黄褐 外 N2/0 黒 ・10/R7/3 にふい黄橙 新 N3/0 暗灰	やや 密	硬	口：4/12	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラケズリ ※(口縁形態田中分類Ⅰ型) 非在地胎土か 破片一定数あるが復元不可、 口縁のみ抽出
1229	179		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	15.2			(2.7)	0.5	内 10/R8/2 灰白 外 N2/0 黒 新 2.5Y8/2 灰白	密	硬	口：3/12	口縁部ヨコナデ ※(口縁形態田中分類Ⅰ型) 非在地胎土か ※ 1243 と形態類似=同工品
1230	179		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 南側 ステップ	P4	布留 古新	15.6			(2.4)	0.4	内 2.5Y7/2 灰黄 ・N2/0 黒 外 2.5Y7/2 灰黄 新 N2/0 黒	やや 密	やや 軟	口：3/12	口縁部内外ヨコハケ ※(口縁形態田中分類Ⅱ型) 非在地胎土か
1231	180	C9 C10 46	土師器	壺	讃岐系 近畿型 生駒西麓産 大型複合 口縁壺	口縁	866 井戸	下層 北側 最深部①	P4	布留 古新	25.7	32.7	(16.9)		1.0	内 N2/0 黒 外 7.5YR4/3 褐 ・N2/0 黒 新 N3/0 暗灰	やや 密	硬	口：7/12	口縁部ハケのちヨコナデ 口縁部内面磨痕に付着 口縁部一部欠け 体部内外面ハケ、体部破片 一定数あり 角肉石あり、生駒西麓産
1232	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 北側 最深部①	P4	布留 古新	14.6			(5.7)	0.3	内 10/R6/3 にふい黄橙(口～脚) ・N2/0 黒(頸～体) 外 10/R6/2 灰黄褐 新 N3/0 暗灰	密	硬	口：1/12 類：3/12	口縁部ヨコナデ 体部外面タテハケ 内面ケズリ 口縁形態田中 C 類Ⅱ型 非在地胎土か、1230 と同一 個体の可能性あり
1233	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層 北側 最深部①	P4	布留 古新	17.2			(2.2)	0.4	内 10/R6/2 灰黄褐 外 N3/0 暗灰 新 7.5YR7/3 にふい橙	密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ ※(口縁形態田中分類Ⅱ型) 非在地胎土か、1221 と同一 個体の可能性大
1234	180	C9 C10 45	土師器	壺	A 系統 大型 直口壺 (平底)	完形	866 井戸	下層 北側 最深部②	P4	庄内	14.7	27.0	4.8	31.6	0.8		密	硬	完形	内外面ナデorミガキ 鈎瓶土器 フツツルが割断状に付着残存
1235	180	C9 46	土師器	甕	布留形	(ほぼ完)	866 井戸	下層 北側 最深部③	P4	布留 古新	13.5	17.9		19.1	0.3	内 10/R4/1 褐灰 外 N2/0 黒 ・7.5YR4/2 灰褐 新 2.5Y8/2 灰白 ・N6/0 灰	密	硬	(ほぼ完形)	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのち上半ヨコ ハケ 内面ケズリ底部附磨痕 端部肥厚 = 定型布留形(薄 非在地胎土か、1236 (小型) と同工品
1236	180	C9 46	土師器	甕	布留形	(ほぼ完)	866 井戸	下層 北側 最深部③	P4	布留 古新	15.4	21.4		23.9	0.3	内 10/R3/1 黒褐(底部) ・10/R5/2 灰黄褐 外 N2/0 黒 新 10/R8/2 灰白	やや 密	硬	口：12/12 全体 90%	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのち上半ヨコ ハケ 内面ケズリ底部附磨痕 端部肥厚 = 定型布留形(薄 非在地胎土か、1235 (中型) と同工品
1237	180		土師器	小型器 台	口縁	866 井戸	下層 北側 最深部④	P4	庄内～ 布留古				(1.0)	0.5	内 5YR8/2 灰白 外 2.5Y8/2 灰白 新 N4/0 灰	密	やや 軟	小破片	在地胎土(精良)	
1238	180		土師器	高杯か	脚部	866 井戸	下層 北側 最深部④	P4	布留 古新				(1.9)	0.6	内 10/R7/3 にふい黄橙 外 5YR6/6 橙 新 N5/0 灰	やや 密	やや 軟	小破片	ヨコナデ 在地胎土か	
1239	180		土師器	小型器 台	口縁	866 井戸	下層 北側 最深部④	P4	庄内～ 布留古		11.7			(1.4)	0.5	内 N4/0 灰 外 10/R5/2 灰黄褐 新 2.5Y7/2 灰黄	密	硬	口：1/12	口縁部磨弱い凹線 在地胎土か
1240	180		土師器	壺	広口壺	口縁	866 井戸	下層 北側 最深部④	P4	庄内～ 布留古	14.8			(1.7)	0.6	内 2.5Y7/3 浅黄 外 10/R5/2 灰黄褐 新 2.5Y8/2 灰白	やや 密	硬	口：1/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(V 様式胎土)
1241	180	C9 46	土師器	壺	大型 (平底)	(底部)	866 井戸	下層 北側 最深部④	P4	庄内			4.7	(3.5)	0.6	内 10/R5/3 にふい黄橙 外 2.5Y8/3 浅黄 新 2.5Y8/2 灰白	やや 密	硬	底：12/12	外面ハケ 内面板ナデ

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1242	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層北側最深部④	P4	布留古新	16.4			(3.7)	0.4	内10R63にふい黄橙 外N20黒 断25R2灰白 ・N50灰	密	硬	頸:1/12	口縁部ヨコナデ 体部外面タテハケ 内面ケズリ ※(口縁形態由中分類I型) 非在地胎土か
1243	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層北側最深部④	P4	布留古新	15.2			(2.4)	0.4	内10R62灰黄褐 外N20黒 断10R2灰白	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ ※(口縁形態由中分類I型) 非在地胎土か、1229と形態 類似=同工品
1244	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層北側最深部④	P4	布留古新	12.0			(3.7)	0.5	内25R72灰黄 外N30暗灰 ・25R2灰白 断N40灰	やや密	硬	頸:1/12 以下	口縁部内湾ヨコナデ 非在地胎土か
1245	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層北側最深部④	P4	布留古新	11.6			(2.0)	0.3	内外 10R72にふい黄橙 断10R2灰白	やや密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ ※(口縁形態由中分類II型) 非在地胎土か
1246	180		土師器	甕	布留形	口縁	866 井戸	下層北側最深部④	P4	布留古新	15.9			(2.9)	0.4	内10R52灰黄褐 外10R72にふい黄橙 ・N20黒 断N60灰	やや密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ ※(口縁形態由中分類II型) 在地胎土か
1247	180		土師器	甕	庄内形(非土師)	口縁	866 井戸	下層北側最深部④	P4	布留古 ・古新	16.0			(2.1)	0.4	内25R2灰白 外25R2灰黄 断75R1灰白	密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部外面ヨコナデ 内面ハケ 胎土在地か
1248	181		土師器	高杯	C系統II群系 無稜 外反形	杯部 ~脚部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	16.9			(11.7)	0.5	内75R66橙 外10R66明黄褐 断25R1黄灰	密	硬	口:5/12 全体50%	杯部ヨコナデ 脚部外面タテ面取り 内面ケズリ 円蓋充填・棒状痕
1249	181		土師器	高杯	(C系統II群系力) 無稜形	(破片)	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	18.0	10.4	14.0		0.4	内25R58明赤褐 外5R68橙 断10R41褐灰	密	軟	口:1/12 底:2/12	内外面マメツ 円孔スカシ2カ所 非在地胎土か
1250	181		土師器	高杯	C系統II群系	杯部 ~脚部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2		12.0	7.1		0.6	内外75R84浅黄橙 断10R2灰白	密	軟	脚:2/12 脚部30%	脚部内面ケズリ 円蓋充填・棒状痕
1251	181		土師器	高杯	(B系統II群系力) 無稜形	杯底部 ~脚部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	(13.4)	9.2	(10.3)		0.5	内75R76橙 外75R84浅黄橙 断25R1黄灰	密	やや軟	脚:3/12 全体30%	凸面接合か 椀形に近いプロポジション 非在地胎土か
1252	181		土師器	高杯	有稜形	杯部 ~脚部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2		12.0	(8.9)		0.6	内外75R66橙 断25R71灰白	密	やや軟	脚:2/12 脚部20%	内外面マメツ 円蓋充填
1253	181		土師器	高杯		脚部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2		12.6	(3.0)		0.5	内10R84浅黄橙 外10R83浅黄橙 断25R2灰黄	やや密	やや軟	底:2/12	内外面マメツ
1254	181		土師器	高杯	(C系統II群系力)	脚部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2		11.7	(3.4)		0.4	内外 10R73にふい黄橙 断25R2灰白	やや密	やや軟	底:3/12	内外面マメツ タメミガキ
1255	181		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	口縁 ~肩部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	9.0	10.4	(5.6)		0.6	内10R73にふい黄橙 外N30暗灰 ・25R2灰黄 断25R2灰白	やや密	やや軟	口:3/12	外面ハケ 内面オサエ
1256	181		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	口縁 ~肩部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	9.2	11.0	(5.9)		0.5	内N30暗灰 外断75R84浅黄橙	やや密	硬	口:1/12 頸:2/12	外面ハケ 内面オサエ
1257	181		土師器	小型丸底壺	C系統II群系	体部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	5.4	9.4	(7.2)		0.4	内25R74浅黄 外10R74にふい黄橙 断10R73にふい黄橙	やや密	硬	頸:1/12 全体20%	外面ハケ 内面ナデ?ケズリ?
1258	181		土師器	壺		底部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2		0.8			0.9	内25R3淡黄 外5R1灰 断5R1灰	普通	硬	底:12/12	内外面ナデ
1259	181		土師器	小型丸底鉢	B系統影響	口縁 ~底部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	11.0				0.6	内断10R72にふい黄橙 外10R61褐灰	密	やや軟	口:1/12 底:2/12	内外面マメツ 在地胎土(精良) B系統影響在地胎土か
1260	181		土師器	ミニチュア鉢	てづくね 小型 平底	口縁 ~底部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	6.8		3.9	3.1	0.5	内10R61褐灰 外25R71灰白 断N50灰	密	やや軟	全体40%	手づくね・オサエ整形
1261	181		土師器	壺	短頸 直口壺	口縁 ~肩部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	11.6			(5.9)	0.7	内5R78橙 外5R76橙 断25R1黄灰	やや密	やや軟	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 内面両部ユビオサエ 系統不明
1262	181		土師器	壺	C系統II群系 大型 直口壺	口縁	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	17.8			(6.4)	0.8	内75R74にふい橙 外75R66橙 断25R1黄灰	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 在地胎土(精良)
1263	181		土師器	壺	大型複合 口縁壺	口縁	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	(20+)			(3.9)	0.7	内外 10R74にふい黄橙 断10R51褐灰	やや密	やや軟	大:1/12	口縁部ヨコナデ
1264	181		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	13.7			(3.6)	0.6	内10R52灰黄褐 外25R1黒灰 断10R84浅黄橙	やや密	やや軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ
1265	181		土師器	甕	布留形	口縁	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	13.8			(4.8)	0.4	内外25R66橙 断75R72明褐灰	密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリか
1266	181		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	11.2			(6.2)	0.7	内外75R76橙 断75R84浅黄橙	密	やや軟	口:1/12 以下 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面両部ヨコハケ 内面ケズリ 非在地胎土か
1267	181		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	826 大型土坑	上層	P4	布留新 辻1・2	15.1			(6.2)	0.4	内75R42灰褐 外5R21黒褐 断N30暗灰	やや密	やや軟	口:4/12	内外面マメツ
1268	182		土師器	高杯	C系統II群系 無稜 外反形	杯部	826 大型土坑	中層	P4	布留新 辻1・2	16.4			(5.6)	0.4	内外 10R74にふい黄橙 断25R3淡黄	やや密	やや軟	口:1/12 杯部20%	杯部ヨコナデ 円蓋充填・棒状痕
1269	182		土師器	高杯	C系統II群系 無稜 外反形	口縁	826 大型土坑	中層	P4	布留新 辻1・2	16.5			(5.2)	0.5	内10R52灰黄褐 外10R31黒灰 断75R49褐 断N30暗灰	密	硬	口:3/12 杯部30%	杯部外面ハケのちヨコナデ 円蓋充填・棒状痕 内外面葉付着・被熱
1270	182		土師器	高杯	C系統II群系 無稜 外反形	口縁 ~脚部	826 大型土坑	中層	P4	布留新 辻1・2	16.9			(8.7)	0.4	内10R74にふい黄橙 外10R51褐灰 断10R83浅黄橙	やや密	やや軟	口:1/12 杯:3/12 杯部30%	杯部外面ハケのちヨコナデ 脚部外面タテハケ 内面ケズリ 円蓋充填・棒状痕
1271	182	43	土師器	高杯	C系統II群系 無稜 外反形	完形	826 大型土坑	中層	P4	布留新 辻1・2	14.9	12.7	13.3		0.5	内75R76橙 外75R74にふい橙 断10R73にふい黄橙	密	硬	口:3/12 全体50%	杯部ヨコナデ 脚部外面タテハケ 内面ケズリ 円蓋充填・棒状痕 非在地胎土か
1272	182		土師器	高杯	(C系統) 無稜 外反形	杯部 +脚部	826 大型土坑	中層	P4	布留新 辻1・2	15.6		9.1	10.9	0.5	内5R66橙 外75R53にふい褐 断N50灰	密	硬	底:9/12 全体70%	杯部ヨコナデ II群系変容 脚部太い=畿内通有でない



第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1273	182		土師器	高杯	B系統・C系統折衷有稜形	口縁+脚部	826大型土坑	中層+上層	P4	布留新辻1・2	14.2				0.3	内75F8/3褐 外75F5/6明赤 新10F8/1黒褐	密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 口縁充填 非在地胎土
1274	182		土師器	高杯	(C系統II群系)椀形	杯部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻2	12.8				0.5	内10F7/3にふい黄橙 外10F6/3にふい黄橙 新25F4/1黄灰	密	やや硬	口:4/12	杯部ヨコナデ 口縁充填 非在地胎土(精良)
1275	182		土師器	高杯	C系統II群系無稜形	脚部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2				(10.0)	0.5	内75F8/4浅黄橙 外75F6/4にふい黄橙 新25F5/1黄灰	普通	やや軟	杯:2/12 脚部 ほぼ完形	脚部外面ハケ内面ケズリ 口縁充填 非在地胎土(混和材多い)
1276	182		土師器	高杯	B系統I群系	脚部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2				(7.9)	0.5	内75F7/4にふい黄橙 外10F7/4にふい黄橙 新75F8/3浅黄橙	やや密	やや軟	脚部60%	外面タテ面取り 凸面接合
1277	182		土師器	高杯	(C系統II群系)	脚部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2			14.9	(4.0)	0.4	内外断 10F7/3にふい黄橙	やや密	硬	底:3/12	煤付着
1278	182		土師器	小型器台	(B系統か)	脚裾部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2		9.0	(1.8)		0.3	内5F6/6橙 外5F5/6明赤褐 新10F8/3浅黄橙	密	やや軟	底:2/12	外面ナデ?ミガキ? 胎土精良 (搬入品の可能性あり)
1279	182		土師器	小型丸底壺	(C系統II群系)	体部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2	6.0	9.2	(6.8)		0.4	内75F7/6橙 外25F8/3淡黄 新25F6/1黄灰	密	硬	頸:3/12	外面ナデ 内面ケズリ
1280	182		土師器	壺か	(B系統か)小型	体部~底部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2				(5.9)	0.4	内5F5/1灰 外25F7/2灰黄 新5F5/1灰	密	硬	底:12/12	外面ケズリ 内面ケズリのちナデか 粗製品
1281	182		土師器	壺	C系統中~大型直口壺	口縁	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2	16.0			(7.5)	0.8	内75F8/3にふい褐 外75F6/4にふい橙 新N5/0灰	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土(精良)
1282	182		土師器	壺	C系統大型直口壺	口縁~肩部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2	17.4			(8.4)	0.6	内外10F5/2灰黄褐 新10F8/2灰白	普通	やや軟	口:11+/12	内外面マメツ ハケ、煤付着
1283	182		土師器	甕	布留形	口縁	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2	12.6			(5.0)	0.4	内75F6/6橙 外N2/0黒 新N4/0灰	密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 非在地胎土(精良)
1284	182		土師器	甕	布留形	口縁	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2	13.6			(5.5)	0.3	内外75F6/3にふい褐 新N5/0灰	密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 非在地胎土(精良)
1285	182	43	土師器	鉢	山陰系大型鉢	口縁~肩部	826大型土坑	中層	P4	布留新辻1・2	46.6	48.0	(15.1)		1.1	内10F8/2灰白 外N2/0黒 ・25F7/2灰黄 新75F4/1灰	密	やや軟	口:1/12 頸:1/12	口縁部ヨコナデ 外面ヨコハケ内面ケズリ
1286	182		土師器	高杯	(C系統II群系)無稜形	口縁	826大型土坑	下層	P4	布留中	16.9			(5.6)	0.4	内10F8/3浅黄橙 外75F8/3浅黄橙 新5F4/1灰	やや密	やや軟	屈:1/12	内外面マメツ
1287	182		土師器	高杯か	(A系統)	脚部	826大型土坑	下層	P4	布留中古~中中			14.8	(3.8)	0.6	内外5F7/6橙 新75F8/2灰白 ・N5/0灰	密	硬	裾:1/12	外面タテミガキ 非在地胎土(精良) ※B系統影響のA系統
1288	182		土師器	小型器台	C系統小型器台B	接合部	826大型土坑	下層	P4	布留中古~中中		5.8	(4.3)		0.8	内外断 10F8/3浅黄橙	密	軟	脚部60%	タテハケか
1289	182		土師器	小型器台	C系統小型器台A	接合部	826大型土坑	下層	P4	布留中古~中中		5.7	(3.1)		0.7	内10F7/3にふい黄橙 外10F6/3にふい黄橙 新10F5/1褐灰	密	硬	脚部30%	タテハケ 円孔スカシ3方向か
1290	182		土師器	壺	C系統大型直口壺	口縁	826大型土坑	下層	P4	布留中古~中中		29.4	(16.4)		0.6	内外25F7/2灰黄 新N3/0暗灰	やや密	やや軟	頸:3/12 体:2/12	外面ハケ(肩部ヨコハケ) 内面ケズリ
1291	182		土師器	甕	布留形中型	口縁~肩部	826大型土坑	下層	P4	布留中古~中中	14.9	23.2	(9.2)		0.4	内25F7/2灰黄 外N3/0暗灰 新10F8/2灰黄褐	密	硬	口:4/12	口縁部ハケのちヨコナデ 体部外面タテハケ 肩部ヨコハケ 内面ケズリ
1292	183		土師器	小型丸底鉢	精製B系統	全形	934P	竪穴22	P4	布留古か	10.3				0.3	内外75F6/4にふい橙 新10F8/1褐灰	密	硬	口:1/12 以下 屈:3/12	口縁部ヨコナデ 体部外面上半ヨコミガキ下 半ケズリ 非在地胎土 ※搬入品か(大和か)
1293	183		土師器	甕	(布留形か)	口縁~体部	934P	竪穴22	P4	布留古か	17.8	(23.2)	(7.8)		0.4	内外10F7/2にふい黄橙 新N6/0灰	やや密	やや軟	口:12/12	口縁部ヨコナデ 肩部内面オサエ 体部内面非ケズリか
1294	185	47	須恵器	杯蓋		全形	827落込み		P4	TK216~208	12.3			3.5	0.4	内N6/0灰 外断N7/0灰白	密	硬	口:5/12	回転ヘラケズリ
1295	185	47	須恵器	杯蓋		全形	827落込み		P4	TK216~208	12.2			4.3	0.5	内外断N7/0灰白	密	やや硬	口:2/12	天井部カキメ左回り
1296	185		須恵器	杯蓋		口縁~天井部	827落込み		P4	TK216~208	12.6			4.2	0.4	内断25F6/1黄灰 外10F7/1灰白	密	硬	口:3/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
1297	185	47	須恵器	杯蓋		全形	827落込み		P4	TK216~208	12.9			4.6	0.4	内5F6/1青灰 外N6/0灰 新5F5/1赤灰	密	硬	口:4/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
1298	185		須恵器	杯身		口縁~底部	827落込み	(埋土南西)	P4	TK216~208	10.0		(4.3)	0.4	内外N6/0灰 新5F6/1紫灰	密	硬	口:3/12	底部回転ヘラケズリ右回り	
1299	185	47	須恵器	杯身		口縁~底部	827落込み		P4	TK216~208	10.6			4.3	0.4	内外N6/0灰 新N4/0灰	密	硬	口:3/12	底部回転ヘラケズリ右回り
1300	185	47	須恵器	杯身		口縁~底部	827落込み		P4	TK216~208	10.8		(4.8)	0.5	内5F6/1紫灰 外N6/0灰 新5F5/2灰褐	密	硬	口:4/12	底部回転ヘラケズリ右回り	
1301	185	47	須恵器	杯身		全形	827落込み		P4	TK216~208	11.5			5.3	0.5	内外断N7/0灰白	密	やや硬	口:1/12 以下	底部回転ヘラケズリ右回り
1302	185	47	須恵器	高杯		底部~脚部	827落込み		P4	TK216		9.6	(6.8)		0.5	内5F6/1明青灰 外N7/0灰白 新5F5/1紫灰	密	硬	底:12/12	底部回転ヘラケズリ右回り
1303	185		土師器	高杯		椀形	827落込み		P4	辻3	12.0		(3.3)	0.4	内外75F7/4にふい橙 外5F5/6明赤褐	密	軟	口:1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ	
1304	185	47	土師器	高杯		杯部	827落込み		P4	辻3	16.4			5.5	0.6	内断75F8/6浅黄橙 外75F8/6黄橙	密	軟	口:3/12	内外面マメツ 凸面接合
1305	185		土師器	高杯		接合部	827落込み		P4	辻3			(3.0)	0.7	内外断75F7/6橙	密	軟	接:12/12	内外面マメツ 凸面接合	
1306	185		土師器	高杯	大型有段	屈曲部	827落込み		P4	辻3			(4.5)	0.7	内外断 75F6/4にふい橙	密	軟	稜:2/12	内外面マメツ	
1307	185		土師器	高杯か		接合部	827落込み		P4	辻3			(4.4)	1.0	内外断5F6/6明赤褐	密精良	硬	接:12/12	凸面接合か	
1308	185		土師器	高杯		脚部	827落込み	(埋土南東)	P4	辻3			(6.0)	(0.8)	0.5	内75F7/3にふい橙 外75F7/4にふい橙 新10F8/2灰白	密	軟	脚部80%	凸面接合か 脚部内面ケズリ
1309	185	47	土師器	壺	中型直口壺	体部	827落込み		P4	辻3	14.6		(11.9)	1.0	内外断75F7/6橙	やや密	やや硬	体部完形	口縁部欠けきか	

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1310	185		土師器	壺	中型直口壺	体部	827 落込み		P4	辻3		(17.2)		(12.4)	0.7	内10R8/3 浅黄橙 外25R6/6 明赤褐 断25R4/4 にぶい焼	密精良	硬	額: 3/12	口縁部打欠きか 白色スリップ、搬入品か
1311	185		土師器	甕	布留形	口縁	827 落込み		P4	辻3	14.2			(5.3)	0.5	内外5R6/4 にぶい橙 断5R6/2 灰褐	やや粗	軟	口: 1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ナデαケズリ
1312	185	47	土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	827 落込み		P4	辻3	16.2			(6.9)	0.7	内25R/2 灰白 外10R7/2 にぶい黄橙 断54/1 灰	やや密	やや硬	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面ナメハケ内面オサエ
1313	185		土師器	甕	外反口縁形	口縁 ~肩部	827 落込み		P4	辻3	14.4			(4.8)	0.4	内外75R6/4 にぶい橙 断75R7/4 にぶい焼	密精良	軟	口: 1/12	内面接合痕 薄手
1314	185	47	土師器	鍋	小型品	口縁 ~体部	827 落込み		P4	辻3	17.5			(9.2)	0.5	内外断10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口: 3/12	内外面マメツ 片口部分あり
1315	185		土師器	甌		口縁	827 落込み		P4	辻3	29.0			(6.1)	0.5	内10R7/2 にぶい黄橙 外断10R8/2 灰白	密	硬	口: 1/12	外面被熱・赤変・硬化
1316	185		土師器	甌		把手	827 落込み	(埋土北西)	P4	辻3				(5.5)	(0.7)	内外断75R8/4 浅黄橙	密	やや軟	1/3以下	ほぼ完成形
1317	185		須恵器	杯蓋		口縁~ 天井部	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	12.8			4.1	0.3	内外N7/0 灰白 断N8/0 灰白	密	硬	口: 3/12 以下	天井部回転ヘラケズリ右回り
1318	185	47	須恵器	杯蓋		全形	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	13.4			5.0	0.3	内外N5/0 灰 断N4/0 灰	やや密	やや硬	口: 4/12	天井部回転ヘラケズリ
1319	185		須恵器	杯身		口縁 ~底部	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	10.8			(4.2)	0.3	内外N6/0 灰 断5R6/2 灰褐	密	硬	口: 4/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1320	185	47	須恵器	杯身		口縁 ~底部	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	11.6			5.0	0.3	内外断N6/0 灰	密	硬	口: 5/12	底部回転ヘラケズリ
1321	185		須恵器	有蓋高杯		杯底部	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208		(14.6)		(2.5)	0.6	内N7/0 灰白 外断N6/0 灰	密	硬	1/12 以下	回転ナデ
1322	185		土師器	高杯	(C系統・II群系) 無稜 外反形	杯部	827 落込み	(上面)	P4	辻2~3	15.4			(4.5)	0.7	内25R/2 灰白 外25R/4 淡黄 断25R2/1 黒	やや密	硬	口: 1/12 以下 接: 12/12	口縁部ヨコナデ、外面ハケ 円蓋穴填・棒状痕
1323	185		土師器	高杯		直口形	杯部	827 落込み	(上面)	P4	辻3	12.6		(3.4)	0.6	内外75R7/4 にぶい橙 断75R8/3 浅黄橙	密	やや硬	口: 3/12	口縁部ヨコナデ
1324	185		土師器	高杯		接合部	827 落込み	(上面)	P4	辻3				(5.7)	0.8	内外断75R7/6 橙	密精良	軟	接: 12/12	内外面マメツ 脚部内面シボリ痕 凸面接合
1325	185	47	土師器	高杯		脚部	827 落込み	(上面)	P4	辻3		9.0	(5.8)	0.7	内外5R6/6 橙 断75R6/4 にぶい橙	密精良	やや硬	底: 7/12	脚部外面タテ面取り 内面シボリ痕	
1326	185		土師器	高杯	(大型 有段形)	脚部	827 落込み	(上面)	P4	辻3				(7.2)	0.7	内25R6/6 明赤褐 外断5R6/6 橙	密精良	軟	接: 12/12	内外面マメツ 脚部内面シボリ痕 凸面接合
1327	185		土師器	高杯	大型 有段形	口縁	827 落込み	(上面)	P4	辻3	22.1			(6.0)	0.9	内5R6/6 橙 外5R7/6 橙 断75R8/4 浅黄橙	密精良	やや軟	口: 1/12	外面タテハケのちヨコナデ
1328	185		須恵器	甌		口縁 ~体部	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	10.4	12.1	(9.3)	0.6	内N7/0 灰白 外N4/0 灰 断10R6/1 赤灰	密	硬	大: 2/12 小: 1/12	胴部稜突文	
1329	185		軟質土器	鉢か	小型鉢か	口縁 ~体部	827 落込み	(上面)	P4	辻3	(16.8)			(9.5)	(0.6)	内外25R8/4 淡黄 断25R2/1 黒	やや密	硬	体: 2/12 口: 1/12 以下	外面ハケ内面ハケ・オサエ
1330	185		土師器	壺		口縁	827 落込み	(上面)	P4	庄内~ 布留か		(19.2)		(4.9)	(0.9)	内75R8/4 浅黄橙 外10R8/3 浅黄橙 断25R4/1 黄灰	やや密	やや硬	額: 3/12	外面ヨコナデ内面ミガキか 搬入品か、時期要検討
1331	185		土師器	甕		肩部	827 落込み	(上面)	P4	-				(5.8)	(0.7)	内外25R8/3 淡黄 断25R2/1 黒	やや密	やや硬	肩: 1/12	外面タテキ内面ケズリ V様式系?、時期要検討
1332	185		須恵器	壺		口縁	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	13.7		(2.4)	0.4	内N6/0 灰 外N4/0 灰 断25R6/2 灰赤	密	硬	口: 1/12	波状文1段+	
1333	185		須恵器	壺		口縁	827 落込み	(上面)	P4	TK216 ~208	14.8			(3.1)	0.5	内N6/0 灰 外N5/0 灰 断75R6/3 にぶい焼	密	硬	口: 1/12 以下	回転ナデ
1334	185	47	須恵器	器台	高杯形 器台	脚部	827 落込み	(上面)	P4	TK216				(5.7)	1.0	内N4/0 灰 外N5/0 灰 断75R8/1 灰白	やや密	硬	突: 2/12	方形スカシ孔7方向 千鳥配置
1335	185		製塩土器		小型椀形	口縁	827 落込み		P4	辻3~4 TK216 ~208	4.0		(2.8)	0.2	内75R8/4 浅黄橙 外25R6/3 淡黄 断25R4/1 黄灰	密	やや硬	破片	外面タテキ 1335・1336: 計75g	
1336	185		製塩土器		小型椀形	口縁	827 落込み		P4	辻3~4 TK216 ~208	3.8		(2.8)	0.2	内外断10R8/4 浅黄橙	密	やや硬	破片	内外面ナデ 1335・1336: 計75g	
1337	186		土師器	甌		把手	915P	(827 下部 遺構)	P4	辻3				(0.7)		内外10R7/4 にぶい黄橙 断25R4/1 黄灰	密	やや硬	(把手)	細身
1338	186	47	土師器	高杯		脚部	916P	(827 下部 遺構)	P4	辻3		10.3	(7.3)	0.6	内外断5R7/8 橙	密精良	やや硬	底: 10/12 脚部90%	内外面マメツ 外面タテ面取り 内面シボリ痕	
1339	186		土師器	高杯		脚部	840 土坑	(827 肩部 遺構)	P4	辻3		8.6	(5.7)	0.5	内外断10R7/6 明赤褐	密精良	軟	底: 7/12 脚部60%	内外面マメツ 外面タテ面取り 内面シボリ痕	
1340	186		須恵器	杯身		全形	840 土坑	(827 肩部 遺構)	P4	TK216 ~208	10.8			4.9	0.5	内5R6/6 紫灰 外N5/0 灰 断5R6/2 灰褐	密	硬	口: 3/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1341	186		須恵器	杯身		底部	840 土坑	(827 肩部 遺構)	P4	TK216 ~208				(4.5)	0.6	内N6/0 灰 外断10R6/1 灰	密	硬	体: 6/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1342	186		須恵器	大甕		体部	840 土坑	(827 肩部 遺構)	P4	TK73 ~216		98.2		1.0	内外断10R7/1 灰白 ~10R6/1 灰	やや密	普通 ~やや軟	大: 3/12	内外面ナデ・平滑 内面弱い同心円あて具あり	
1343	186		土師器	壺	讃岐系 近畿型 生駒西麓産 大型 複合口縁	頸部	840 土坑	(827 肩部 遺構)	P4	布留					1.1	内10R6/3 にぶい黄橙 外75R7/4 にぶい橙 断25R3/1 黒褐	密	硬	額: 1/12	内外面マメツ 角内白あり、生駒西麓産 (下層886 井戸: 1158) と同 一団体の可能性あり ※この遺構に直接伴うもの ではない
1344	187	42	土師器	高杯	椀形	杯部	854 大型土坑		P4	辻3	13.3			(5.3)	0.5	内75R7/6 橙 外断5R7/6 橙	密	軟	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 脚部内面シボリ痕 凸面接合
1345	187	42	土師器	高杯	椀形	杯部	854 大型土坑		P4	辻3	12.8			(5.0)	0.6	内外断75R7/4 にぶい橙	密	軟	口: 3/12	内外面マメツ 凸面接合
1346	187		土師器	高杯	椀形	口縁	854 大型土坑		P4	辻3	12.7			(3.8)	0.5	内外断75R7/4 にぶい橙	密	軟	口: 2/12	口縁部ヨコナデ
1347	187		土師器	高杯		脚部	854 大型土坑		P4	辻4		4.3	(4.6)	0.4	内25R6/6 橙 外5R6/6 橙 断75R2/1 黒	密	普通	接: 8/12	脚部外面タテ面取り 内面シボリ痕	

第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1348	187		土師器	杯		全形	854大型土坑		P4	辻5	12.4	13.3		6.1	0.2	内外75R8/4浅黄橙 新75R7/6橙	密	軟	口:9/12 全体70%	内外面マメツ
1349	187	42	須恵器	杯蓋		全形	854大型土坑		P4	TK216	(11.0)			(4.3)	(0.5)	内N50灰 外N60灰 新N80灰白	密	硬	口:2/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
1350	187	42	須恵器	杯身		全形	854大型土坑		P4	TK216	(11.0)	(13.0)		(4.0)	0.3	内N70灰白 外N40灰 新75R2/2灰赤	密	硬	口:4/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1351	187		須恵器	無蓋高杯		口縁 ~頸部	854大型土坑		P4	TK216	(13.8)				0.6	内外10R8/2灰白 新10R8/3浅黄橙	密	軟不良	口:1/12 以下 接:12/12	内外面回転ナデ 脚部スカシあり
1352	187		土師器	壺	直口壺	口縁 ~頸部	854大型土坑		P4	辻6	11.2			(6.2)	0.7	内外断 75R7/4にふい橙	やや密	軟	口:2/12	内外面マメツ、内面接合痕
1353	187	42	須恵器	壺		口縁	854大型土坑		P4	TK216	18.0			(6.5)	0.7	内外断N50灰	密	硬	口:12/12 頸:12/12	波状文2段
1354	187		土師器	甕	布留形	口縁 ~体部	854大型土坑		P4	辻7	12.6	(15.0)		(5.5)	0.4	内75R5/2灰褐 外25R6/4にふい赤褐 新25R5/6明赤褐	粗	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ハケ、内面ナデ
1355	187		軟質土器	甕か		体部片	854大型土坑		P4	辻8				(1.2)	0.8	内75R6/6浅黄橙 外断10R8/3浅黄橙	やや密	硬	小破片	矢羽状タタキ 1069(867落込み)類似品
1356	188		須恵器	甕		口縁	838土坑		P4	TK216	8.0			(3.0)	0.5	内105/1灰 外5R6/1紫灰 新5R6/1紫灰	密	硬	突:3/12	回転ナデ
1357	188		土師器	高杯	B系統 I群系	接合部	864土坑		P4	布留新 ~辻2~3	(2.4)			(2.0)	0.5	内外25R8/2灰白 新N30暗灰	やや密	やや軟	接:12/12	凸面接合 脚部内面シボリ
1358	188		土師器	甕	V様式系 小型 くの字甕	体部	863土坑		P4	庄内	(9.4)	11.2		(8.0)	0.6	内10R7/3にふい黄橙 外25R6/2灰黄 新10R5/4にふい黄橙	密	やや軟	頸:2/12 体:3/12	外面タタキ内面ナデ 非在地胎土か(V様式胎土か)
1359	188		土師器	甕	V様式系 (柱内環帯か) くの字甕	口縁	833溝	ポイントあり	P4	庄内新 ~布留古	16.0			(2.9)	0.6	内10R7/2にふい黄橙 外10R8/3浅黄橙 新10R7/4にふい黄橙	やや密	やや軟	口:1/12 頸:1/12	口縁部ヨコナデ 体部内面ケズリ
1360	191		土師器	高杯	A系統 大型	完形	32井戸	上層	B-1	布留古新	23.5		11.8	16.3	0.5	内10R8/3浅黄橙 外75R7/4にふい橙 新10R8/2灰白	密	やや軟	口:11+12 脚部完形	杯部内外面タタミガキ 脚部内外面タタミガキ 内面ケズリ 接合部中蓋充填の可能性 →C系統残存の可能性
1361	191		土師器	高杯	B系統 大型	杯部	32井戸	上層	B-1	布留古新				(5.5)	0.5	内75R8/4浅黄橙 外5R7/6橙 新N70灰白	やや密	やや軟	屈:2/12	内外面マメツ 搬入品の可能性あり
1362	191		土師器	高杯	B系統	脚部	32井戸	上層	B-1	布留古新			16.3	(2.1)	0.4	内5R4/1褐灰 外5R5/4にふい赤褐 新5R8/4淡橙	密	硬	口:2/12	外面細筋ヨコミガキ 内面ハケのちナデ? 小平孔4方向 搬入品の可能性高い
1363	191		土師器	小型器台	近江・東海系か 小型器台A	脚部	32井戸	上層	B-1	布留古新		10.0	(7.8)	0.7	内外75R7/4にふい橙 新10R8/2灰白	密	硬	脚:6/12	外面タタミガキ、内面ナデ 平孔スカシ4方向(上位) 内面脚部、貫通孔 東海系の可能性大	
1364	191	40	土師器	小型器台	小型器台B ミニチュア	脚部	32井戸	上層	B-1	布留古新	4.2		(5.1)	0.6	内外 10R6/3にふい黄橙 新10R7/1灰白	密	硬	全体60%	てづくねミニチュア模倣品 平孔スカシ4方向	
1365	191		土師器	小型丸底壺	C系統	口縁 ~体部	32井戸	上層	B-1	布留古新	9.6	7.5	(7.3)	0.5	内10R8/2灰白 外10R7/2にふい黄橙 新N50灰	密	やや軟	口:1/12	外面ハケ、内面ナデ	
1366	191		土師器	小型丸底鉢		口縁 ~体部	32井戸	上層	B-1	布留古新	12.0		(3.9)	0.4	内10R8/3浅黄橙 外10R7/3にふい橙 新5R8/4淡橙	密	やや軟	口:2/12	内外面マメツx 庄内式以前の形式	
1367	191		土師器	鉢	C系統 小型鉢	口縁 ~体部	32井戸	上層	B-1	布留古新	13.4	12.7	(5.7)	0.6	内外25R8/2灰白 新N60灰	密	やや軟	口:1/12 全体25%	内外面マメツ 外面ハケ	
1368	191		土師器	壺	(A系統) 小平底 小型壺	全形	32井戸	上層	B-1	布留古新	8.3	11.3	1.6	12.7	0.6	内75R7/6橙 外5R6/8橙 10R4/1褐灰(下半) 新25R8/1灰白	密	やや軟	口:7/12	外面ヨコミガキ(太) 内面ケズリ脚部オサエ 外面煤付着、小平底 B・C系統残存のA系統か
1369	191		土師器	壺	CorA系統 直口壺	(口縁)	32井戸	上層	B-1	布留古新	14.6		(5.0)	0.7	内25R8/1灰白 外25R5/2暗黄 新25R5/1黄灰	やや密	軟	口:3/12	内外面マメツ 外面タテハケ、煤付着	
1370	191		土師器	壺	(A系統) 直口壺	口縁	32井戸	上層	B-1	布留古新	15.8		(5.4)	0.7	内外25R7/2灰黄 新N50灰	やや密	軟	口:2/12	内外面マメツ 角閃石?	
1371	191	40	土師器	壺	精製 B系統 小型二重 口縁壺 (垂下口縁)	口縁 ~頸部	32井戸	上層	B-1	布留古新	16.5		(5.1)	0.4	内外10R8/4浅黄橙 新10R8/2灰白	密	硬	口:11/12	口縁部内外面細筋ヨコミガキ 頸部IV 胎土精良、随地的模倣品 小型二重口縁壺一特殊品	
1372	191		土師器	壺		底部	32井戸	上層	B-1	布留古新		(3.0)	0.7		0.7	内10R8/3浅黄橙 外25R8/2灰白 75R7/4にふい橙 新N60灰	密	やや軟	底:12/12	内外面ナデ、外面黒斑あり 胎土精良 →搬入品の可能性あり
1373	191		土師器	壺	(系統不明) 二重 口縁壺	口縁	32井戸	上層	B-1	布留古新		11.9	(3.9)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外25R7/2灰黄 新10R6/1褐灰	密	やや軟	稜:1/12	屈曲部限り付け 他地域系か(系統不明)	
1374	191		土師器	壺	(東部瀬戸 内系) 中型複合 口縁壺	口縁 ~頸部	32井戸	上層	B-1	布留古新	14.4	16.0	(9.1)	0.8	内断25R7/2灰黄外 10R6/2灰黄褐	やや密	やや軟	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケメ 内面ケズリ 搬入品or在地模倣品	
1375	191		土師器	壺か	平底 小型品	底部	32井戸	上層	B-1	布留古新		5.0	(1.7)	0.3	内10R7/3にふい黄橙 外10R6/2灰黄褐 新10R8/2灰白	密	硬	底:12/12	外面タテハケ	
1376	192	40	土師器	壺	A系統 大型 直口壺 小平底	完形	32井戸	上層	B-1	布留古新	11.1	20.8	2.5	25.2	0.5	内10R7/2にふい黄橙 外10R8/3浅黄橙 新N40灰	密	硬	口:11+12 全体90%	口縁部外面ヨコミガキ 内面タタミガキ 外部外面タタミガキ 内面ケズリ 煤付着・ばらばらの小破片 →意匠的破片か
1377	192	40	土師器	壺	A系統 大型 直口壺か 小平底	頸部 ~底部	32井戸	上層	B-1	布留古新		23.3	4.8	(23.4)	0.6	内10R8/3浅黄橙 ・N30暗灰 外10R8/3浅黄橙 新N60灰	やや密	やや軟	底:12/12 体部70%	外面上半タテハケ下半タテ ミガキ 内面上半タテナデ下半ハケ 体部隆起あり 口縁部欠け 煤付着・ばらばらの小破片 →意匠的破片
1378	192		土師器	壺	A系統 (平底)	底部	32井戸	上層	B-1	布留古新			3.6	(6.4)	0.5	内N50灰 外10R7/3にふい黄橙 新10R8/3浅黄橙	密	やや軟	底:12/12	外面タタミガキ 内面ハケのちナデ
1379	192		土師器	壺	讃岐系 近畿型 生駒西確産 大型複合 口縁	口縁	32井戸	上層	B-1	布留古新	30.0		(9.1)	1.4	内N30暗灰 外25R5/2暗黄 新N40灰	密	硬	口:1/12	口縁部ハケのちヨコナデ 内面漆付着 角閃石あり、生駒西確産	

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1380	192	C10 40	土師器	壺	(東部瀬戸内系)大型広口壺	口縁～体部	32 井戸	上層	B-1	布留古新	19.0	(40+)		(18.5)	0.7		内25/8/2 灰白 外10/R/4 浅黄橙 新N60 灰	密	軟	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのちタテミガキ 内面ハケ・接合痕 頸部突帯刻み面文 在地胎土か
1381	192		土師器	甕	(V様式系)くの字甕	口縁	32 井戸	上層	B-1	布留古新	15.0			(3.1)	0.4		内外5/R/4にふい赤褐 新10/R/1 褐灰	密	やや軟	口: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
1382	192		土師器	甕	布留形	口縁	32 井戸	上層	B-1	布留古新	13.4			(3.8)	0.4		内外10/R/3にふい黄橙 新10/R/2 灰白	密	硬	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 外面タテ・ヨコハケ 内面ケズリ
1383	192		土師器	甕	(布留系)	口縁	32 井戸	上層	B-1	布留古新	14.8			(2.9)	0.3		内7.5/R/6 橙 外7.5/R/4 浅黄橙 新10/R/2にふい黄橙	やや密	軟	口: 1/12	口縁部ヨコナデ
1384	192		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	32 井戸	上層	B-1	布留古新	16.0			(5.8)	0.4		内断2.5/8/2 灰白 外N30 暗灰	やや密	やや軟	口: 8/12	口縁部ヨコナデ 外面肩部ヨコハケ 内面ケズリ
1385	192		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	32 井戸	上層	B-1	布留古新	14.5			(6.9)	0.3		内断2.5/7/2 灰黄 外2.5/3/1 黒褐	やや密	やや軟	口: 10/12	口縁部ハケのちヨコナデ 外面タテ・ナメハケ 内面ケズリ
1386	192		土師器	甕	布留形	口縁～体部	32 井戸	上層	B-1	布留古新	12.6	16.0		(9.2)	0.3		内2.5/4/1 黄灰 外N20 黒 新10/R/2 灰白	密	硬	口: 10/12	口縁部ヨコナデ 外面タテ・ヨコハケ 内面ケズリ
1387	192		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	32 井戸	上層	B-1	布留古新	12.9			(5.7)	0.3		内10/R/3 浅黄橙 外10/R/2 灰白 新10/R/1 灰白	密	硬	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ・内面ケズリ
1388	193	C8 40	土師器	壺	(A系統)大型直口壺(平底)	全形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	13.2	21.0	4.0	26.7	0.5		内10/R/3 黒褐 ・2.5/7/3 浅黄 外7.5/R/3 橙 ・2.5/7/3 浅黄 新2.5/8/1 灰白	密	やや軟	口: 5/12 底: 12/12	口縁部ヨコナデのちタテミガキ 外面タテミガキ 内面ケズリ・板ナデ 桃核x1
1389	193	C8 40	土師器	壺	A系統大型直口壺(古)	全形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	13.2	21.5	3.6	27.1	0.6		内10/R/3にふい黄橙 ・2.5/4/3 オリーブ褐 外10/R/3にふい黄橙 ・N20 黒 新N70 灰白	密	硬	口: 10/12 体部完形	口縁部ヨコナデ 外面上半ハケ 下半V様式系タテ 内面ケズリ・下半ハケオサエ 体部小穿孔
1390	193	C8 41	土師器	壺	(A系統)大型直口壺(平底)	全形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	12.3	22.0	3.6	26.1	0.4		内2.5/3/1 黒褐(口～頸) 5/4/1 灰 (頸～ 底)	密	硬	口: 9/12 底: 12/12	口縁部ヨコナデのちタテミガキ 外面ハケ 内面ケズリ肩部ナデ 口縁部打欠き 桃核x2
1391	193	C8 41	土師器	壺	A系統大型直口壺(平底)	ほぼ完形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	12.5	20.3	4.0	22.1	0.5		内2.5/8/2 灰白(口～頸) N30 暗灰 (頸～底) 外7.5/R/8 黄橙 ・2.5/8/2 灰白 新7.5/R/8 黄橙	密	やや軟	口: 10/12	口縁部ヨコナデ 外面上半ハケ 下半V様式系タテ 内面板ナデ 桃核x4
1392	194	C8 C10 41	土師器	甕	畿内・近江折衷上付底	完形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	15.5	22.1	3.4	24.3	0.4		内2.5/8/2 灰白 外2.5/8/3 淡黄 新2.5/6/1 灰	密	硬	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 外面粗いハケ・内面オサエ 体部穿孔(内側から) 桃核x20(半分)x4
1393	194	C8 C10 41	土師器	甕	畿内・近江折衷上付底	ほぼ完形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	16.8	22.6	4.0	24.3	0.3		内10/R/2 灰黄褐 ・10/R/2 1 黒 外N20 黒 ・10/R/3にふい黄橙 新10/R/1 灰白	やや密	硬	口: 8/12	口縁部ヨコナデ 外面粗いハケ・ナデ 内面上半オサエ・ナデ 下半ケズリ 口縁部打欠き 桃核x1
1394	194	C8 C10 41	土師器	甕	畿内・近江折衷上付底	全形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	17.6	23.6	4.0	25.0	0.3		内2.5/3/2 黒褐 ・2.5/6/2 灰黄 外2.5/7/3 浅黄 ・N20 黒 新2.5/8/1 灰白	やや密	硬	口: 10/12 底: 10/12	口縁部ヨコナデ 外面粗いハケ 内面ケズリ 桃核x1
1395	194		土師器	甕	(近江系)上付底	底部	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古			4.0	(1.4)	0.4		内7.5/R/2 黒 外7.5/R/2 灰褐 新N20 黒	密	硬	底: 12/12	外面ハケ 上付底
1396	194	C8 41	土師器	甕	布留形	ほぼ完形	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	18.0	22.3		24.2	0.3		内2.5/5/3 黄褐 ・N20 黒 外2.5/8/3 淡黄 ・N20 黒 新10/R/2 灰白	やや密	硬	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 内面ケズリ底部研削痕 桃核x1、AMS分析実施
1397	194		土師器	甕	(布留系 or 庄内系)	底部	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古				(6.3)	(0.3)		内2.5/3/1 黒褐 外2.5/3/1 黒褐 ・N20 黒 新2.5/6/2 灰黄	やや密	硬	底: 12/12	外面ハケ内面ケズリ 搬入品の可能性あり 桃核x3
1398	194		土師器	高杯	A系統	脚部	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古			13.8	(2.1)	0.5		内外2.5/7/2 灰黄 新2.5/5/1 黄灰	密	硬	脚: 1/12	外面タテミガキ
1399	194		土師器	壺	(庄内瀬戸内)くの字甕	口縁	32 井戸	下層	B-1	庄内新～布留古古	14.6			(2.6)	0.6		内外7.5/R/6 橙 新7.5/R/4 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ・内面ケズリ
1400	195		土師器	高杯	A系統大型	杯部	34 土坑 (周辺)		B-1	庄内中～新	21.2			(6.5)	0.4		内2.5/8/2 灰白 外5/R/7 橙 新10/R/4 浅黄橙	やや密	硬	口: 4/12 屈: 5/12	外面タテハケのちミガキ 凹部充填 非在地胎土か ※ 他地域系の可能性あり
1401	195		土師器	高杯	A系統か大型有稜	杯部	34 土坑		B-1	庄内中～新	22.2			(6.0)	0.5		内外2.5/8/3 淡黄 新2.5/8/2 灰白	やや密	軟	口: 4/12 杯部 40%	内外面マメツ
1402	195		土師器	高杯	精製B系統大型	脚部	34 土坑 (周辺)		B-1	庄内中～新			13.7	(7.8)	0.7		内外断7.5/R/3 浅黄橙	密	やや軟	脚: 1/12 脚部 60%	内外面マメツ 円孔スカシ3方向 非在地胎土・搬入品か
1403	195		土師器	小型器台		脚部	34 土坑		B-1	庄内中～新			11.2	(7.2)	0.4		内外7.5/R/6 橙 新7.5/R/6 浅黄橙	やや密	やや軟	脚: 3/12	内外面マメツ 円孔スカシ3方向 非在地胎土か(精良)
1404	195		土師器	鉢	台付鉢	体部～底部	34 土坑		B-1	庄内中～新		3.9			0.4		内5/R/6 橙 外7.5/R/4にふい橙 新N30 暗灰	やや密	やや軟	屈: 9/12 脚: 1/12	非在地胎土か
1405	195		土師器	壺	東海系	口縁	34 土坑 (側溝内・ポイントあり)		B-1	庄内中～新	15.8			(3.6)	0.3		内外10/R/4 浅黄橙 新2.5/7/1 灰白	やや密	やや軟	口: 4/12	内外面マメツ 口縁部羽状文 東海系・搬入品か
1406	195		土師器	甕	布留形	口縁	34 土坑 (周辺)		B-1	布留古	17.6			(3.8)	0.3		内10/R/4にふい黄橙 外10/R/2 黒褐 新N30 暗灰	密	硬	口: 1/12 頸: 2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ 非在地胎土か
1407	195	43	土師器	高杯	精製B系統椀形	杯部	25 土坑		B-1	辻3～4	11.0			(4.7)	0.5		内10/R/2にふい黄橙 外7.5/R/4にふい橙 新7.5/R/2 灰白	普通	硬	口: 6/12	内外面マメツ剥離 内外面細筋ヨミガキ・内 面羽状ミガキ 凸面接合 非在地胎土か ※ 搬入品 or 露地品
1408	195	43	土師器	小型器台	A系統小型器台A	脚部	(25 土坑)		B-1	庄内中～新			12.2	(6.8)	0.5		内7.5/R/4にふい橙 外10/R/2 灰白 新10/R/4にふい黄橙	密	やや軟	底: 6/12	外面タテミガキ 円孔スカシ3方向



第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1409	195	43	土師器	小型器台	近江・東海系か小型器台A	脚部	25土坑		B-1	庄内中～新					0.9	内5R7/8 橙 外5R6/6 橙 新5R7/6 橙	粗	軟	底:2/12	外面タテミガキ 円孔スカシ3方向(上方) 貫通孔、内湾部 東海系か
1410	195		土師器	壺	広口短頸壺	口縁	25土坑		B-1	庄内中～新	16.0				0.6	内10R8/3 浅黄褐 外10R8/4 浅黄褐 新N50 灰	密	軟	口:2/12	内外面マメツ
1411	195		土師器	壺	(小平底)	底部	25土坑		B-1	庄内中～新			14	(2.4)	0.6	内10R7/3 にふい黄褐 外75R7/4 にふい黄褐 ・5R1 灰白 新25R6/1 黄灰	密	やや軟	底:12/12	内外面ナデ 黒斑あり
1412	195		須恵器	杯身		杯部	(25土坑)		B-1	TK216		(12.7)		(3.9)	0.6	内外断N70 灰白	密	やや硬	大:3/12	側溝部分、混入か
1413	196		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁～体部	21溝		B-1	庄内新～布留古	23.6				0.3	内外10R3/2 黒褐 新10R7/3 にふい黄褐	やや密	やや軟	口:1/12 以下 頸:2/12	口縁部オサエのちヨコナデ ※ タタキ痕跡残 外面細細タタキ内面ケズリ 角閃石あり、生駒西麓産
1414	196		土師器	鉢	中型鉢生駒西麓産	口縁	26土坑		B-1	庄内新～布留古	39.8			(6.0)	0.5	内10R5/3 にふい黄褐 外75R4/4 にふい黄褐 新N30 暗灰	やや密	やや軟	口:4/12	内外面マメツ 角閃石あり、生駒西麓産
1415	197		土師器	壺	広口壺	口縁	20土坑	(上層)	B-1	庄内	16.8			(1.8)	0.7	内外10R5/4 にふい黄褐 新N70 灰白	やや密	やや軟	口:3/12	内外面マメツ 在地胎土(V様式胎土)
1416	198		土師器	高杯	B系統I群系無稜外形	杯部	(第6層)	ポイントあり	P4	中期前半	12.7			(6.1)	0.6	内外75R7/6 橙 新75R6/6 橙	やや密	やや軟	口:2/12 接:12/12	凸面接合 非在地胎土か(精良)
1417	198		土師器	高杯	(C系統II群系)	脚部	(第5層)		P4	前期か	(3.3)			(7.0)	0.7	内外75R7/6 橙 新5R6/6 橙	やや密	やや硬	接:12/12	外面タテミガキ?ハケ? 内面ケズリ 極肉厚あり 円形スカシ3方向(上方)
1418	198		土師器	壺	直口壺生駒西麓産	口縁	(第5層)	(南・東・南)	P4	布留中	19.0			(7.0)	0.6	内断75R6/6 明褐 外75R4/3 褐	やや密	硬	口:1/12 頸:2/12	口縁部タテハケのちヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
1419	198		土師器	壺か	不明壺生駒西麓産	口縁	(第5層)		P4	布留か				(5.5)	0.8	内10R5/3 にふい黄褐 外75R4/4 にふい黄褐 新75R4/1 灰	やや密	やや硬	破片	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
1420	198		土師器	壺	東四国系広口壺	口縁	(第5層)		P4	庄内か	25.6			(5.5)	0.6	内5R5/6 明赤褐 外5R6/8 橙 新75R6/1 灰	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 外面タテハケ 非在地胎土 ※ 四国東部搬入品か
1421	198		土師器	壺	讃岐系近畿型生駒西麓産大型複合口縁壺	口縁	(第5層)		P4	庄内新～布留		(29.0)		(9.0)	1.0	内10R5/3 にふい黄褐 外10R4/2 灰黄褐 新10R6/4 にふい黄褐	やや密	やや硬	屈:1/12	口縁部ヨコナデ、外面 角閃石あり、生駒西麓産
1422	198		土師器	甕	受口(丹波か)	口縁	(第5層)		P4	庄内～布留	10.1			(2.3)	0.4	内10R8/2 灰白 外10R7/3 にふい黄褐 新N40 灰	密	やや軟	口:1/12 以下 屈:2/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土か ※ 丹波か摂津など搬入品か
1423	198		土師器	壺	山陰系複合口縁壺	口縁	(第6層)		P4	布留古～中	14.0			(4.4)	0.5	内外断10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:1/12 以下 頸:1/12	口縁部ヨコナデ 体部内面ケズリ 搬入品
1424	198		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第5層)		P4	庄内新～布留	15.4			(3.6)	0.4	内10R4/2 灰黄褐 外75R4/3 褐 新75R4/1 褐灰	やや密	やや硬	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面細細タタキ 内面ケズリ 角閃石あり、生駒西麓産
1425	198		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(耕作溝群)		P4	庄内新～布留		(1.9)			0.4	内10R4/2 灰黄褐 外10R3/1 黒褐 新10R3/2 黒褐	やや密	やや硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
1426	198		須恵器	樽型甕		円盤周辺	(第6層)		P4	TK216～208		10.2			0.7	内N70 灰白 外N60 灰 新107/1 灰白	密	やや硬	体:2/12	波状文 3条以上
1427	198		須恵器	樽型甕		円盤周辺	629水路	(中世)	P4	TK216～208			9.8		0.8	内N60 灰 外断N50 灰	密	やや硬	円:3/12	円盤径 98cm 波状文 3条以上
1428	198		須恵器	器台	高杯形器台	脚部	(機械彫削)		P4	TK73～216				(5.6)	1.2	内N50 灰 外104/1 灰 新107/1 灰白	密	硬	突:1/12	波状文 2段以上 方形スカシ(孔数不明)
1429	198		土師器	高杯	(精製B系統か)無稜形	口縁部+脚部	(32井戸周辺・西)	ポイントあり	B-1	布留古～中か	17.6		11.0	11.8	0.4	内外75R7/6 橙 新N50 灰	密精良	やや軟	脚:4/12 口:3/12	内外面マメツ 非在地胎土(精良) → 搬入品か ※ 類似少ない器形
1430	198		土師器	壺	山陰系	口縁	(機械彫削)	(鉄塔西)	B-1	布留新 辻2	15.8			(6.9)	0.7	内25R6/3 淡黄 外10R8/3 浅黄褐 新N50 灰	やや密	やや軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ、端部厚 在地胎土か、山陰系
1431	198		土師器	壺	讃岐系近畿型生駒西麓産大型複合口縁壺	一次口縁	17水路	(中～近世)(32井戸周辺)	B-1	布留古か		(34.0)		(6.2)	1.8	内外25R6/2 灰黄 新25R1 黄灰	やや密	硬	口:1/12	内面ハケ 角閃石あり(少量) 生駒西麓産
1432	198		土師器	高杯	精製B系統有段高杯	杯部	(第4層)	(東半)	B-1	庄内～布留古				(3.9)	0.6	内10R6/2 灰黄褐 外10R5/2 灰黄褐 新10R7/2 にふい黄褐	やや密	やや軟	体:2/12	外面ハケのち細節ヨコミガキ 在地胎土、磨地品か
1433	198		土師器	高杯	A系統	脚部	(第6層)	(西側拡張)	B-1	庄内古か	3.2	(12.2)	(8.4)	0.8	内外75R8/3 浅黄褐 新N70 灰白	やや密	やや軟	接:12/12	内外面マメツ 円孔スカシ孔5孔 在地胎土(精良)	
1434	198		土師器	甕	河内型庄内形か生駒西麓産	口縁	(第6層除去面精査)	ポイントあり	B-1	庄内新～布留古	16.6		(2.6)	0.4	内外断75R5/4 にふい黄褐	やや密	やや硬	口:3/12	口縁部オサエのちヨコナデ 内面ケズリ 頸部内面屈曲あまい 角閃石あり、生駒西麓産	
1435	198		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁～肩部	(第4・第5層)	(北側溝)	B-1	庄内新～布留古	16.6		(3.7)	0.3	内75R4/2 灰褐 外5R6/4 にふい赤褐 新75R5/1 褐灰	やや密	硬	頸:2/12	口縁部ハケのちヨコナデ 外面細細タタキ内面ケズリ 角閃石あり、生駒西麓産	
1436	198		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	(第4層)		B-1	庄内新～布留古	16.5			(3.2)	0.4	内外75R5/3 にふい黄褐 新75R4/3 褐	やや密	硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面細細タタキ 内面ケズリ 角閃石あり、生駒西麓産
1437	198		土師器	甕	河内型庄内形か生駒西麓産	頸部～肩部	(耕作溝群)		B-1	庄内中～新か	9.0		(3.1)	0.4	内外10R5/3 にふい黄褐 新10R7/3 にふい黄褐	やや密	やや硬	頸:2/12	外面細細タタキ内面ケズリ 頸部内面屈曲細かい 角閃石あり、生駒西麓産	
1438	198		須恵器	器台	筒形器台か	筒部	耕作溝群	第3層除去面(新)	B-1	中期後半～未		12.4	(1.4)		0.9	外5R6/1 暗青灰 新N80 灰白	密	硬	突:3/12	突帯部分 1439と同一個体の可能性大
1439	198		須恵器	器台	筒形器台か	筒部	耕作溝群	第3層除去面(古)	B-1	中期後半～未		(8.8)	(2.3)		0.9	内5R5/1 青灰 外5R3/1 暗青灰 新N80 灰白	密	硬	筒:3/12	円形スカシ6孔千鳥配置か 1438と同一個体の可能性大

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
1440	201		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	645溝	(竪穴20北西)	D-2	TK23	11.8			(3.6)	0.4	内外断N6.0灰	密	硬	口:2/12	回転ナデ 赤色顔料付着	
1441	201		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	645溝		D-2	TK47	10.5			(3.6)	0.4	内外10R6.1灰 断N6.0灰	密	やや硬	口:1/12	回転ナデ	
1442	201		須恵器	無蓋高杯		杯底部～脚部	645溝	(ポイントあり)	D-2	TK23 ～47			8.2	(6.5)	0.4	内外N6.0灰 断10R7.1灰白	密	硬	脚:1/12 接:12/12	円形スカーン2方向	
1443	201		土師器	甕	(布留系か)小型甕	口縁～底部	645溝		D-2	辻4～	12.6	17.0		(8.2)	0.4	内外断7.5R7.6橙	やや密	やや軟	口:2/12 頸:2/12	内外面マメツ 内面ナデ・オサエ	
1444	201		弥生土器	壺		体部	168溝		D-2	II様式		25.0		(11.6)	0.7	内10R7.3にふい黄橙 外10R7.2にふい黄橙 断2.5R7.3浅黄	やや密	やや硬	大:2/12	外面線文2帯、内面ハケ 168溝に伴うか不明	
1445	203		須恵器	杯身		受部	1423P	掘立23	C-6	TK23 ～47				(2.2)	0.3	内外断2.5R7.2灰黄	密	軟	細片	焼成不良品	
1446	206		土師器	壺	(系譜不明)小型壺	口縁	1301P	掘立24	C-6	庄内～布留	8.8			(2.4)	0.6	内外7.5R7.6橙 断7.5R8.6浅黄橙	密精良	硬	口:2/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリか 系譜不明・時期不明 ※ 搬入品か	
1447	207		須恵器	有蓋高杯		口縁+脚部	1525P	掘立33	C-8	TK47	10.2	12.2	8.0	4+4.7	0.5	内外5R6.1青灰 断5R5.1紫灰	密	硬	受:2/12 頸:2/12	底部回転ヘラケズリ左回り 方形スカーン3方向	
1448	207		土師器	壺	C系統大型(平底)	肩部～底部	1135P		C-8	庄内～布留古	9.1	25.4	5.4	(23.8)	0.6	内10R8.3浅黄橙 ・N4.0灰 外10R7.2にふい黄橙 断N7.0灰白	密	やや軟	底:10/12	外面ハケ内面肩部オサエ上 半ケズリ下半ハケ 在地胎土か(精良胎土) 1500(竪穴32)と胎土・整 形類似(小型品)	
1449	209	48	須恵器	杯蓋		完形	1370土坑	掘立29	C-6	TK47	12.3				0.5	内N7.0灰白 外N6.0灰	やや密	やや硬	完形	天井部回転ヘラケズリ左回り 胎土チャート混 → 在地生産か	
1450	210	48	須恵器	杯蓋		全形	竪穴38	(上面)	C-6	TK47	11.8				4.5	0.4	内5R6.1明青灰 外5R6.1青灰 断5R4.1暗赤灰	密	硬	口:10/12 全体90%	天井部回転ヘラケズリ右回り
1451	210		土師器	壺	阿波産 広口壺	口縁	竪穴38	(上面)	C-6	庄内か	19.6			(2.9)	0.8	内7.5R6.6橙 外断 10R7.3にふい黄橙	密	硬	口:1/12	口縁部凹線文 建物に伴わない可能性大 阿波産(片岩なし)	
1452	210		製塩土器	小型碗形		口縁	竪穴38		C-6	中期	(4.4)			(2.6)	0.2	内外10R8.3浅黄橙 断N8.0灰白	やや密	やや硬	口:2/12	内外面マメツ・ハクリ 総量1.5g	
1453	210		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	1409P	(竪穴38内ピット) ※主柱の可能性有	C-6	TK216 ～208	12.9			(3.4)	0.3	内外N6.0灰 断2.5R6.2灰赤	密	硬	口:2/12	天井部回転ヘラケズリ	
1454	210		須恵器	杯身		口縁～底部	1432P	竪穴38	C-6	TK10か	12.1	14.6		(3.0)	0.3	内断N6.0灰 外5R6.1褐灰	密	硬	口:2/12	回転ナデ	
1455	210		土師器	壺	小型	平底	1432P	竪穴38	C-6	～布留中			1.6	(3.2)	0.5	内外7.5R7.8黄橙 断7.5R7.6橙	やや密	やや軟	底:12/12	内外面マメツ 在地胎土(V様式胎土)	
1456	211		土師器	壺	精製B系統 二重口縁壺	頸部	竪穴35	主柱 1380P 上面	C-6	庄内～布留古	(5.7)			(3.6)	0.6	内7.5R7.6橙 外7.5R8.4浅黄橙 断N4.0灰	やや密	やや軟	頸:12/12	頸部外面細筋ヨコミガキ 肩部波状文か 在地胎土か→胎地品か (1457と胎土類似同一個体か)	
1457	211		土師器	壺	(小平底)	底部	竪穴35・36		C-6	庄内～布留古		1.4	(2.6)	0.6	0.6	内断N8.0暗灰 外2.5R8.2灰白	やや密	やや軟	底:3/12	底部外面ミガキ内面ハケ 在地胎土か(胎地品か) (1456と胎土類似同一個体か)	
1458	211		土師器	壺	大型(平底)	体部+底部	竪穴35		C-6	庄内	(30.0)				0.6	内外2.5R8.2灰白 断2.5R6.1黄灰	やや密	やや軟	底:6/12 大:2/12	内外面ハケ 在地胎土(V様式胎土)	
1459	212		土師器	高杯	C系統II群系	脚部	(竪穴37)ポイントあり		C-6	布留中古	(2.3)	(4.1)		(7.6)	0.6	内外10R8.3浅黄橙 断2.5R8.1灰白	やや密	やや軟	屈:12/12	脚部内面ケズリ 在地胎土か(精良)	
1460	212		土師器	高杯	B系統I群系	脚部	(竪穴37)ポイントあり		C-6	布留古新～中古	(3.0)			(7.0)	0.8	内7.5R6.4にふい黄 外10R8.3にふい黄橙 断2.5R5.1黄灰	やや密	やや硬	接:12/12	凸面接合 脚部内面接合痕明瞭 在地胎土か(精良)	
1461	212		土師器	高杯か	(B系統)小型	接合部	竪穴37	埋土西	C-6	布留古新～中古	(2.7)			(3.6)	0.4	内外断5R7.6橙	密精良	やや軟	屈:12/12	内外面マメツ、凸面接合 非在地胎土(精良)、搬入品	
1462	212		土師器	小型器台	(B系統か)	脚部	竪穴37	埋土西	C-6	布留中	(4.6)		10.0	(5.0)	0.5	内外7.5R8.4浅黄橙 断5R5.1灰	密	やや軟	屈:2/12	脚部内面ケズリか 円孔スカーン3方向 在地胎土(精良)、胎地品か	
1463	212		土師器	小型丸底壺	(B系統か)	口縁	竪穴37	埋土下半	C-6	布留中	10.5			(3.5)	0.3	内外5R7.6橙 断10R6.1褐灰	やや密	やや軟	屈:2/12	内外面マメツ	
1464	212		土師器	小型丸底鉢	(C系統か)	屈曲部～体部	竪穴37	埋土西	C-6	布留中	(7.1)			(4.2)	0.6	内10R6.2灰黄橙 外10R7.2にふい黄橙 断10R7.4にふい黄橙	やや密	やや軟	頸:2/12	外面ハケ 内面凹線部ハケ体ナデ	
1465	212		土師器	小型丸底鉢	C系統	口縁～体部	1465P	(竪穴37内ピット)	C-6	布留古～中	11.5			(3.8)	0.4	内7.5R7.3にふい橙 外7.5R7.6橙 断7.5R5.1灰	密	やや軟	口:2/12	体部外面ハケ 在地胎土(精良) 精製B系統製成or影響品	
1466	212		土師器	小型丸底鉢	(C系統か)	屈曲部	竪穴37	埋土下半	C-6	布留中	(8.0)			(3.1)	0.5	内2.5R8.2灰白 外10R8.3浅黄橙 断N6.0灰	やや密	やや軟	頸:2/12	内面ケズリ	
1467	212		土師器	壺	阿波系 広口壺	口縁	竪穴37	埋土下半	C-6	布留新	17.4			(5.8)	0.7	内外10R6.4にふい黄橙 断10R7.3にふい黄橙	密	やや軟	口:1/12	口縁部内面ナデ 片岩あり、阿波産	
1468	212		土師器	壺	瀬戸内系 複合口縁壺	屈曲部	竪穴37	埋土下半	C-6	布留古～中	20.0			(5.6)	0.6	内10R8.4浅黄橙 外10R6.4にふい黄橙 断10R6.1褐灰	密	やや硬	頸:1/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリか(不明瞭) 非在地胎土(精良)、搬入品	
1469	212		土師器	甕	庄内形甕 (非生駒)	口縁	(竪穴37)ポイントあり		C-6	布留古～中	13.2			(3.0)	0.4	内7.5R7.6橙 外5R6.6橙 断10R8.3浅黄橙	やや密	やや軟	頸:3/12	口縁部ヨコナデ内面ハケ 外面ハケ内面ケズリ 非生駒西産庄内産	
1470	212		土師器	甕	布留形	口縁～肩部	(竪穴37)ポイントあり		C-6	布留古～中	15.8			(5.2)	0.4	内外5R7.6橙 断2.5R5.1黄灰	やや密	やや軟	口:2/12 屈:3/12	口縁部ヨコナデ 内面ケズリ	
1471	212		土師器	製塩土器	甕形	体部～底部	(竪穴37)ポイントあり		C-6	布留古～中		1.7	(9.3)	0.4	0.4	内5R8.3淡橙 外2.5R6.4にふい橙 断2.5R8.1灰白	やや密	硬	底:9/12	体部外面タタキ 内外面赤変・被熱 非在地胎土、搬入品	
1472	212		土師器	壺	東四国系か 広口壺	口縁	(竪穴37)ポイントあり		C-6	布留か	24.4			(2.4)	0.9	内10R8.4浅黄橙 外5R6.6橙 断7.5R8.4浅黄橙	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面ハケ 非在地胎土、搬入品	
1473	213		土師器	高杯	B系統I群系	脚部	1393炉跡 周辺	(竪穴37)上面遺構	C-6	布留古～中	(2.4)			(7.5)	0.7	内外10R7.4にふい黄橙 断10R8.4浅黄橙	やや密	やや軟	接:12/12	凸面接合 在地胎土か(精良)	
1474	213	48	土師器	壺	C系統小型壺	完形	竪穴37	1393に伴う可能性有	C-6	布留古新～中古	9.7	11.1		9.0	0.3	内外5R7.6橙 断10R8.2灰白	やや密	やや軟	口:9/12 全体90%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ内面ケズリ 在地胎土(精良)	

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
1475	213		土師器	有段口縁鉢	精製B系統	口縁+底部	1393 炉跡周辺	(竪穴37 上面遺構)	C-6	布留中	14.8			(5.5)	0.4	内外断5R5/6 明赤褐	密	硬	口:1/12 以下 屈:2/12	口縁部~体部内外面細筋ヨコミカキのち体部内面放射状ミカキ底部外面ケズリ非在地胎土(精良) ※ 搬入品(大和か)	
1476	213		土師器	壺	垂下口縁加飾壺	口縁	1393 炉跡周辺	(竪穴37 上面遺構)	C-6	~布留古か	18.6			(1.9)	0.5	内外7.5R8/6 浅黄褐 断2.5R3 淡黄	密	やや軟	口:1/12	口縁部波状文在地胎土か(精良)	
1477	213		土師器	壺	C系統か大型直口壺	口縁~屈曲部	1393 炉跡周辺	(竪穴37 上面遺構)	C-6	布留古~中	(12.0)			(5.5)	0.7	内10R8/4 浅黄褐 外10R8/3 浅黄褐 断N7.0 灰白	やや密	やや軟	頸:2/12	内外面マメツ	
1478	213		土師器	壺	(平底)	底部	1393 炉跡周辺	(竪穴37 上面遺構)	C-6	~布留古か			3.9	(1.7)	0.5	内10R6/2 灰黄褐 外5R6/6 褐 断10R6/2 灰黄褐	密	やや軟	底:11+1/12	内外面マメツ非在地胎土(精良)	
1479	213		土師器	高杯		脚部	(竪穴37)		C-6	辻4			8.7	(5.7)	0.5	内外7.5R7/6 褐 断7.5R7/4 にふい黄	密	やや軟	脚幅:6/12	内外面マメツ内面シボリ痕在地胎土(精良)	
1480	213		須恵器	有蓋高杯蓋		全形	1393 炉跡周辺	竪穴37	C-6	TK208~23	11.9				5.4	0.5	内5PB4/1 暗青灰 外5PB3/1 暗青灰 断5PB3/1 青灰	やや密	硬	口:6/12 全体70%	天井部回転ヘラケズリ右回り
1481	213		須恵器	杯身		口縁~底部	(竪穴37 上面遺構)	ポイントあり	C-6	TK23~47	10.8	12.7	4.3		0.4	内2.5R1/1 灰白 外10R7/3 にふい黄褐 断2.5R1/1 灰白	密	軟	口:1/12 以下 受:9/12	底部回転ヘラケズリ左回り焼成不良品・胎土チャート混→在地生産か	
1482	213		須恵器	杯蓋		口縁~天井部	竪穴37	埋土下半(混入か)	C-6	TK208	13.4			(3.9)	0.4	内外5PB4/1 暗青灰 断5R4/1 褐灰	密	硬	口:2/12	天井部回転ヘラケズリ左回り	
1483	213		弥生土器	壺	(平底)	底部	竪穴37	(竪穴37 下部)	C-6	V様式			5.3	(3.1)	0.6	内10R7/2 にふい黄褐 外7.5R7/6 褐 断10R7/4 にふい黄	やや密	やや軟	底:6/12	内外面マメツ※遺構に伴わない	
1484	213		弥生土器	器台		筒部	竪穴37	ポイントあり	C-6	V様式		(9.7)	(6.8)		1.1	内7.5R6/4 にふい黄 外5R7/6 褐 断7.5R7/4 にふい黄	やや密	硬	体:4/12	筒部縦線・円孔スカン4方向※遺構に伴わない	
1485	213	48	須恵器	有蓋高杯		全形	竪穴45	ポイントあり	C-8	TK47	11.2	12.7	7.7	8.1	0.5	内外N6.0 灰 断5R4/1 暗赤灰	密	硬	口:6/12 脚:7/12	底部回転ヘラケズリ右回り脚部回転カキメ方形スカン2方向※ 倒置焼成	
1486	213		土師器	高杯		全形	竪穴42		C-8	布留新辻1・2	15.6				12.6	0.5	内外10R7/3 にふい黄褐 断10R8/2 灰白	密	やや軟	口:7/12 脚:11/12 全体90%	内外面マメツ杯部ヨコナデ杯部内面ケズリ円蓋充填・棒状痕
1487	213		土師器	壺	C群II群系中型壺	体部	竪穴42		C-8	布留中~新		15.0		(11.3)	0.4	内5R7/6 褐 外2.5Y7/2 灰黄 断10R8/2 灰白	やや密	硬	大:5/12	体部外面ハケ内面上半ケズリ・底部附痕1486と胎土類似・同系統の整形技術	
1488	215	48	土師器	高杯	C群II群系無稜形	全形	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中新	16.0		10.4	12.6	0.4	内5R7/6 褐 外5R6/6 褐 断10R8/2 灰白	密	やや硬	口:9/12 脚:4/12 全体80%	杯部外面ハケのちヨコナデ杯部外面タテ面取り内面ヘラケズリ非在地胎土か(精良)	
1489	215		土師器	小型丸底鉢	C系統	口縁~底部	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中新	13.9			(6.0)	0.4	内2.5R2/2 灰白 外10R7/3 にふい黄褐 断10R8/3 浅黄褐	やや密	やや軟	口:2/12	内外面ハケ薄手・精製B系統影響か非在地胎土	
1490	215		土師器	小型丸底鉢	C系統	口縁~底部	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中	10.4	11.0		(8.2)	0.5	内2.5R1/1 黄灰 外断2.5R3 淡黄	密	やや軟	口:1/12 以下 屈:2/12 大:3/12	口縁部ハケのちヨコナデ外面タテハケ内面ナデ	
1491	215		土師器	壺	(A系統)か大型直口壺	口縁	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中	18.9			(11.7)	0.5	内7.5R6/6 褐 外5R6/6 褐 断N6.0 灰	密	やや軟	口:1/12 頸:5/12	口縁部タテ・ナナメミカキ非在地胎土か	
1492	215	C10 48	土師器	甕	S字甕小型	口縁+体部	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中新	8.9		11.0	(8.5)	0.2	内2.5Y7/4 浅黄 外2.5R3 淡黄 断5Y2/1 黒	密	硬	頸:4/12 接:12/12	口縁部ヨコナデ・頸部縦線外面粗いタテハケ肩部ヨコハケ内面オサエ・搬入品か	
1493	215	C10 48	土師器	甕	厚底(西部瀬戸内か)	口縁+体部	竪穴32	床面ポイント+1563土坑	C-8	布留中新	13.7	14.4		(13.2)	0.6	内外7.5R7/6 褐 断7.5R7/3 にふい黄	密	硬	口:4/12 体:10/12	口縁部ハケのちヨコナデ外面タテ面取り内面ナメハケ内面ナデハケ厚底・搬入品か	
1494	215	48	土師器	甕	布留形	口縁部~体部	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中新	14.0	19.4		(18.3)	0.3	内2.5R4 淡黄 外断2.5R3 淡黄	やや密	硬	頸:3/12 体:4/12	口縁部ヨコナデ外面タテハケのち上半ヨコハケ内面ケズリ・非在地胎土か1229(866井戸下層)と形態類似=同工品か	
1495	215		土師器	小型丸底鉢	精製B系統	口縁	竪穴32	(北西)	C-8	布留中新	13.9			(4.3)	0.4	内外5R6/3 褐 断5R6/6 明赤褐	密	硬	口:1/12	口縁部ヨコミカキ搬入品か	
1496	215		土師器	壺	B系統中型	肩部~体部	1563 土坑	竪穴32内	C-8	布留中新	6.8	13.0		(5.2)	0.3	内外2.5R6/6 明赤褐 断7.5R7/4 にふい黄	密	硬	頸:6/12	外面ケズリ肩部ハケのちヨコナデ内面ケズリ丹塗リ土器・精製品非在地胎土・搬入品	
1497	215	48	土師器	甕	布留形	全形	竪穴32	床面ポイント	C-8	布留中新	15.4	23.4		25.9	0.6	内10R7/2 にふい黄褐 外10R7/4 にふい黄褐 断5R6/4 にふい黄	やや密	硬	口:5/12 大:6/12	口縁部ヨコナデ外面タテ面取り内面ハケのち上半ヨコハケ内面ケズリ肩部オサエ底部附痕	
1498	215		土師器	小型丸底壺	精製B系統	頸部	竪穴32	(南東)	C-8	布留中新	8.0			(2.5)	0.4	内外7.5R4/3 褐 断7.5R6/3 にふい黄	密精良	やや軟	頸:1/12	内外面ヨコミカキ搬入品か	
1499	215		土師器	甕	布留形	口縁	1601 炉跡	竪穴32内	C-8	布留中新				(2.0)	0.4	内外5R7/6 褐 断N4.0 灰	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ	
1500	215		土師器	壺	超大型壺	体部	竪穴32	床面ポイント+1563土坑・1528P	C-8	布留中新		68.8		(37.0)	1.5	内10R7/4 にふい黄褐 外10R8/4 浅黄褐 ・N3.0 暗 断2.5R2 灰白	密精良	やや軟	体:2/12	内外面ハケ内面接合痕	
1501	217		土師器	壺	C系統二重口縁壺	一次口縁	竪穴33・43	ポイントあり	C-8	布留中		12.4		(5.8)	0.5	内外断5R6/6 褐	やや密	やや軟	屈:2/12	頸部内外面ハケ非在地胎土か	
1502	217		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	竪穴33・43	(埋土アセ南西)	C-8	庄内か	12.9			(2.2)	0.5	内外7.5R8/3 浅黄褐 断N5.0 灰	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ在地胎土(V様式胎土)	
1503	217		土師器	甕	V様式系くの字甕	口縁	竪穴33・43	(埋土アセ南西)	C-8	庄内新~布留古				(2.5)	0.7	内10R5/1 褐灰 外N3.0 暗 断7.5R6/6 褐	密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ非在地胎土か	
1504	217		土師器	鉢or甕	V様式系小型鉢or小型甕	小平底	1580 炉跡	(竪穴33)	C-8	庄内か			1.9	(2.5)	0.6	内2.5R2/2 灰白 外10R5/6 赤 断N4.0 灰	やや密	やや軟	底:1/12 以下	在地胎土(V様式胎土)	
1505	217		土師器	小型器台か	B系統か小型器台	脚部か	1593P	(竪穴33)	C-8	布留か	(4.4)	7.0		(3.3)	0.3	内外2.5R2/2 灰白 断N4.0 灰	密精良	やや軟	屈:4/12	外面ヨコミカキか内面ハケ在地胎土か(精良) →郷地生産or直接模倣	

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1506	217		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ～肩部	1593P	(竪穴33)	C-8	庄内	11.8	12.2		(5.7)	0.5	内10R7/4にふい黄橙 外10R8/3 浅黄橙 新N40灰	やや 密	やや 軟	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式系タタキ 在地胎土(V様式の胎土)
1507	217		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ～肩部	竪穴33	(南東 コーナー 付近)	C-8	庄内	12.4			(4.3)	0.5	内75R4/1褐灰 外N30暗灰 新25R3 淡黄	密	硬	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式系タタキ 内面ナデ 在地胎土(V様式の胎土)
1508	217		土師器	壺	平底 小型	体部 ～底部	1574P	(竪穴43 (竪穴44 肩部))	C-8	庄内		10.2	3.2	(6.4)	0.5	内25R/1黄灰 外10R4/1褐灰 新25R6/6橙	やや 密	硬	底:7/12	内外面ナデ 在地胎土(V様式の胎土)
1509	217		土師器	(底部)	平底	底部	竪穴44		C-8	弥生 後期末 ～ 庄内古			3.0	(3.3)	0.6	内N40灰 外75R8/3 浅黄橙 新N20黒	やや 密	やや 軟	底:3/12	外面V様式系タタキ 内面ナデ 在地胎土(V様式の胎土) 底部突出
1510	217		土師器	壺	加飾壺	口縁	竪穴40	埋土北西	C-8	庄内				(2.2)	0.8	内外25R/2灰白 新5R/1灰白	やや 密	やや 軟	口:1/12 以下	円形浮文
1511	217		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁	竪穴40	埋土北東	C-8	庄内 (新)か				(2.8)	0.7	内75R7/6橙 外75R8/2灰褐 新N50灰	やや 密	やや 軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 外面埋付着 在地胎土(V様式の胎土)
1512	217		土師器	壺か	複合 口縁壺か	口縁	竪穴40	埋土北西	C-8	庄内 ～ 布留古か	13.2	14.2		(2.8)	0.6	内外57/1灰白 新55/1灰	やや 密	やや 軟	口:1/12	口縁部ハケ・ナデ 形式・系譜不明
1513	217		土師器	小型 丸底鉢	A系統か	口縁 ～体部	1569 炉跡	竪穴40	C-8	庄内	(11.8)			(5.9)	0.5	内外25R/2灰黄 新75R5/4にふい黄	やや 密	やや 軟	口:1/12 以下	内外面マメツ 在地胎土(精良)
1514	218		土師器	高杯	精製 B系統か 有段高杯	杯部	1530溝	竪穴41	C-8	布留古 か		(19.0)		(5.1)	0.7	内10R7/3にふい黄橙 外5R6/6橙 新75R7/4にふい黄	密	硬	屈:4/12	内外面ハケのち細筋ヨコミ ガキ の内面放射状ミガキ 非在地胎土。搬入品か
1515	218		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁	1530溝	竪穴41	C-8	庄内 ～ 布留古				(2.4)	0.8	内25R/2灰黄 外75R6/6明赤褐 新25R8/2灰白	やや 密	やや 軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ、大型品か 在地胎土(V様式の胎土)
1516	218		土師器	壺	精製 B系統 中型 直口壺	口縁	1542P	竪穴41	C-8	布留中 か	(11.4)			(6.7)	0.6	内75R6/6橙 外5R6/6橙 新25R8/2灰白	やや 密	やや 軟	頸:2/12	内外面細筋ヨコミガキ 在地胎土か → 搬入品or露地品
1517	218		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西産	口縁	1526溝	(古代溝 (竪穴41 周辺))	C-8	庄内新 ～ 布留古	(13.6)			(2.2)	0.5	内10R4/2灰黄褐 外10R3/2黒褐 新10R5/2灰黄褐	やや 密	やや 軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西産
1518	219		土師器	壺	小型 短頸壺 生駒西産	口縁	(機械掘削 除去面)	(竪穴30 上面)	C-5	庄内 ～ 布留	(16.5)			(2.5)	0.5	内外25R/6赤褐 新5R6/6橙	やや 密	やや 軟	口:1/12 以下	口縁部内外面ヨコミガキ 赤彩土器 角閃石あり、生駒西産
1519	219		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁	竪穴30	埋土北東	C-5	庄内				(2.5)	0.5	内5R6/6橙 外5R7/6橙 新10R5/1褐灰	やや 密	やや 硬	口:1/12 以下	口縁部タタキのちヨコナデ 在地胎土 (V様式の胎土、精良)
1520	219		土師器	壺	A系統 二重 口縁壺	口縁	竪穴30	埋土北東	C-5	庄内 ～ 布留	19.8			(2.7)	0.5	内10R8/4浅黄橙 外10R8/3浅黄橙 新N50灰	やや 密	やや 軟	口:2/12	内外面マメツ 在地胎土(精良)
1521	219		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁	竪穴30	埋土北西	C-5	庄内古 ～中	17.6			(2.7)	0.4	内75R8/3浅黄橙 外75R4/4にふい黄 新75R7/4にふい黄	やや 密	やや 軟	口:1/12	口縁部タタキのちヨコナデ 在地胎土(V様式の胎土)
1522	219		土師器	甕	V様式系 (平底)	底部	竪穴30	埋土北西	C-5	庄内古 ～中			2.6	(2.6)	0.7	内25R5/8明赤褐 外5R7/6橙 新N20黒	やや 密	やや 軟	底:3/12	外面V様式系タタキ 在地胎土(V様式の胎土)
1523	219		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ～肩部	竪穴30	床面 ポイント	C-5	庄内古 ～中	13.7	(16.2)		(7.5)	0.4	内外10R8/3浅黄橙 新75R7/4にふい黄	やや 密	やや 軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 体部外面V様式系タタキ 在地胎土(V様式の胎土)
1524	221	C8 50	土師器	高杯	精製 B系統 大型高杯	口縁 +脚部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	23.7		15.6	16.0	0.5	内10R7/2にふい黄橙 外5R5/8明赤褐 新10R5/3にふい黄橙	やや 粗	やや 軟	口:2/12 脚:6/12	杯部内外面細筋ヨコミガキ、 内面放射ミガキか 脚部外面細筋ヨコミガキ 裾部ハケ 円孔スカシ4方向 搬入品:河内か 久宝寺531井戸と同時期
1525	221	C8 50	土師器	高杯	精製 B系統 樹形高杯	杯部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	10.1			(4.9)	0.4	内外5R6/6橙 新75R6/1灰	密	硬	口:2/12	杯部内外面細筋ヨコミガキ、 内面放射ミガキか 搬入品:河内か 久宝寺531井戸と同時期
1526	221	C8 50	土師器	小型 器台	小型器台A	口縁 ～脚部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	9.8			(7.4)	0.3	内外5R7/8橙 新25R7/1灰白	やや 密	軟	口:7/12 接:12/12	内外面マメツ 円孔スカシ4方向 在地胎土
1527	221		土師器	甕	V様式系 小型鉢	口縁 ～体部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	9.8			(5.9)	0.4	内10R8/4浅黄橙 外25R8/2灰白 新25R5/1黄灰	やや 密	やや 軟	口:3/12	外面V様式系タタキ 口縁部ヨコナデ
1528	221	50 C8	土師器	甕	V様式系 鉢か	体部 ～底部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	(10.0)		3.3	(7.0)	0.5	内5R7/6橙 外75R7/6橙 新25R3/1黒褐	密	硬	底:5/12	外面V様式系タタキ 内面オサエ
1529	221		土師器	壺か	短頸 直口壺か	口縁	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	15.5			(1.7)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外10R6/2灰黄褐 新25R8/2灰白	密	硬	口:2/12	V様式系タタキあり
1530	221	C8	土師器	壺	A系統 大型壺 平底	体部 ～底部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)		29.2	5.4	(24.1)	0.5	内外新 75R7/4にふい黄	やや 粗	硬	底:12/12	外面タタキのちナデ 内面ハケ
1531	221	C8	土師器	壺	A系統 大型壺 平底	底部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)		(20+)	4.0	(5.2)	0.5	内N30暗灰 外新10R8/4浅黄橙 ・N30暗灰(底部)	密	硬	底:12/12	外面タテミガキ 内面板ナデ
1532	221		土師器	壺か	A系統か (平底)	底部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)			5.6	(3.4)	0.7	内75R7/6橙 外10R8/3浅黄橙 新75R4/1灰	密	硬	底:3/12	外面タタキのちミガキ
1533	221	50	製塩 土器		脚台式 備置瀬戸	底部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)			5.5	(2.5)	0.4	内外75R6/6にふい黄橙 新75R6/6浅黄橙	やや 密	軟	脚:4/12	内外面オサエ 薄作り 搬入品:備置瀬戸
1534	221	C8 50	土師器	甕	V様式系 くの字甕	全形	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	11.2	12.4	5.0	(14.0)	0.4	内10R7/3にふい黄橙 外5R7/4にふい黄 新10R5/1褐灰	密	硬	口:10/12 底:2/12	内外面V様式系タタキ 内面接合痕
1535	221		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ～体部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	12.7			(5.2)	0.5	内75R8/4浅黄橙 外75R7/6橙 新25R5/1黄灰	密	硬	口:2/12	外面V様式系タタキ 内面接合痕、板ナデか
1536	221		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ～体部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	14.3			(8.5)	0.4	内75R7/4にふい黄 外新75R7/6橙	やや 密	やや 軟	口:2/12	外面V様式系タタキ 内面オサエ、接合痕 口縁部つまみ、端面あり
1537	221	50 C8	土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ～体部	978土坑		C-5	庄内古 古(新)	14.0	15.3		(10.6)	0.5	内10R8/3浅黄橙 外10R8/4浅黄橙 ・N40灰 新10R7/1灰白	やや 密	硬	口:9/12	外面V様式系タタキ 内面接合痕



第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1538	221		土師器	甕	V様式系<の字甕	口縁~体部	978 土坑		C5	庄内古古(新)	112	164		(15.6)	0.5	内5R7/6 橙 外5R7/6 浅黄橙	密	硬	口:4/12	外面V様式系タタキ 内面接合痕
1539	221		土師器	甕	V様式系<の字甕	口縁~体部	978 土坑		C5	庄内古古(新)	129			(13.3)	0.5	内75R8/6 浅黄橙 外75R7/6 橙 新5R7/6 橙	密	軟	口:2/12	外面V様式系タタキ 内面接合痕
1540	221	C8 50	土師器	甕	V様式系<の字甕 平底	全形	978 土坑		C5	庄内古古(新)	15.1	15.9	4.4	(17.6)	0.5	内75R7/8 黄橙 ・75R5/1 褐灰 外75R7/6 橙 新10R8/1 褐灰	密	やや軟	口:3/12 底:12/12	外面V様式系タタキ 内面接合痕
1541	221		土師器	甕	V様式系<の字甕	口縁~体部	978 土坑		C5	庄内古古(新)	15.2	18.4		(9.1)	0.5	内5R6/8 橙 外5R7/6 橙	密	軟	口:3/12	外面V様式系タタキ 内面接合痕
1542	221		土師器	甕か	V様式系 甕 平底	底部	978 土坑		C5	庄内古古(新)			4.6	(3.5)	0.7	内75R7/6 橙 外10R7/3 にふい黄橙 新10R8/2 灰白	やや粗	硬	底:12/12	外面V様式系タタキ
1543	221		土師器	甕か	V様式系 甕 平底	(底部)	978 土坑		C5	庄内古古(新)			4.5	(3.1)	0.4	内75R5/1 灰 外10R7/4 にふい黄橙 新5R7/6 橙 ・75R5/1 灰	やや密	やや軟	底:12/12	外面V様式系タタキ
1544	221	C8 50	土師器	甕	V様式系<の字甕 尖底	全形	978 土坑		C5	庄内古古(新)	14.4	18.5	1.6	21.6	0.5	内5R7/6 橙 外5R7/6 橙	やや密	やや軟	口:6/12	外面タタキのちタテハケ 内面ナデ・接合痕 尖底、系統不明
1545	223		土師器	甕	(布留系か)	口縁	竪穴46	床面北西	P3	布留中~新	15.6			(2.8)	0.5	内外断 10R8/3 浅黄橙	やや密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ
1546	223		土師器	鉢	(小平底)	全形	竪穴46	床面 ポイント	P3	布留中~新	16.4		3.3	9.0	0.3	内25R8/2 灰白 外10R7/3 にふい黄橙 新10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:2/12 底:12/12	内外面マメツ 外面ミガキ 類例少ない ※上ノ井戸・登志院な と布留新に類例あり
1547	223	48	土師器	壺	C系統 大型直口 壺	口縁	1704 土坑	竪穴46 壁際土坑	P3	布留古新 ~中古	17.4			(10.7)	0.6	内75R6/6 橙 外5R6/4 にふい橙 新N6/0 灰	やや密	やや軟	口:11/12 頸:11/12	内外面マメツ 内面ケズリか
1548	223		土師器	高杯	(C系統か)	脚部	1704 土坑	竪穴46 壁際土坑	P3	布留中 前後	(6.6)			(2.7)	0.6	内外75R7/4 にふい橙 新25R2 灰黄	やや密	やや軟	屈:2/12	脚部外面タテハケ内面ナデ
1549	223		土師器	高杯	精製 B系統 小型	脚部	1635P		P3	布留古	(2.8)			(3.5)	0.5	内断5R6/6 橙 外5R7/6 橙	密	やや軟	屈:12/12	内外面マメツ 外面細筋ヨコミガキ 凸面接合 非在地胎土(精良)、搬入品
1550	223		須恵器	杯蓋		天井部	1636P	掘立38	P3	TK208 ~23				(2.3)	0.7	内外断N6/0 灰	密	やや硬	破片	天井部回転ヘラケズリ
1551	223		土師器	高杯	(B系統 I群系)	接合部	(竪穴 47・48・49 上面)	ポイント あり	P3	布留新 ~中期 前半	(2.6)			(2.4)	0.6	内25R6/8 橙 外75R6/6 橙 新25R5/4 にふい赤褐	やや密	やや硬	接:12/12	内外面マメツ 凸面接合
1552	223		土師器	甕	V様式系<の字甕	口縁~肩部	(竪穴 47・48・49 上面)	ポイント あり	P3	~布留 古か	12.0	(13.6)		(5.4)	0.3	内10R8/3 浅黄橙 外10R8/4 にふい黄橙 新5R6/6 橙	やや密	やや軟	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 内面オサエ
1553	223		土師器	甕	布留形	口縁~肩部	(竪穴 47・48・49 上面)	ポイント あり	P3	布留中~新	19.0	(20.8)		(5.3)	0.4	内25R6/6 橙 外5R6/6 橙 新75R5/1 灰	やや密	やや軟	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 脚部外面ナメハケ 内面オサエ 非在地胎土、搬入品か 1470 (竪穴37)と胎土調整 類似か
1554	223		土師器	壺	A系統 中・小型 直口壺	口縁	竪穴 47・48・49	埋土南西	P3	布留古~中	10.8			(5.1)	0.6	内外 10R7/3 にふい黄橙 新25R2 灰白	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ
1555	223		土師器	甕	布留形	口縁	竪穴 47・48・49	埋土南東	P3	布留新~	11.0			(3.5)	0.6	内10R4/1 褐灰 外5R8/3 赤橙 新N2/0 黒	やや密	やや軟	口:1/12 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 肩部内面オサエか
1556	223		須恵器	甕		肩部	竪穴 47・48・49	埋土南東	P3	~TK216				(3.7)	0.5	内5P8/1 青黒 外5P7/1 明青灰 新5P7/1 明青灰	密	硬	肩部小片	外面平行タタキ 内面回転ナデ ※竪穴に直接伴うか不明確
1557	223		土師器	小型 丸底鉢	精製 B系統	体部	1744 土坑	竪穴 47・48・49 壁際土坑	P3	布留中	(8.0)	(8.4)		(4.6)	0.3	内25R8/2 灰白 外75R6/4 にふい橙 ・N2/0 黒 新25R2 灰白	やや密	やや軟	屈:2/12	体部外面ヨコミガキ 非在地胎土→産地品
1558	223		土師器	高杯	(B系統 I群系) 小型碗形	全形	1744 土坑	竪穴 47・48・49 壁際土坑	P3	布留中 か	12.8		9.6	9.6	0.4	内N4/0 灰 外断5R6/6 橙	やや密	やや軟	口:1/12 以下: 屈:12/12 頸:2/12	内外面マメツ 凸面接合 円孔スリ3方向 非在地胎土(精良) ※ 他地域系の可能性あり
1559	223		土師器	壺	直口壺 or 広口壺	頸部~肩部	1744 土坑	竪穴 47・48・49 壁際土坑	P3	布留中 か	(12.6)			(6.7)	0.6	内外断5R7/6 橙	やや密	やや軟	屈:1/12	体部内面ケズリ
1560	223		土師器	小型 丸底壺	C系統 (精製B系 統模倣)	体部	1904 土坑	竪穴 47・48・49 壁際土坑	P3	布留中	(8.0)			(3.7)	0.6	内75R5/2 灰褐 外75R6/3 にふい褐 新75R5/1 褐灰	密	硬	屈:2/12	厚手内面ナデ 非在地胎土(精良) → 精製B系統在地模倣
1561	223		土師器	甕	V様式系<の字甕	肩部	壁溝 (南東 ・南北方向)	竪穴 47・48・49	P3	~布留 古か	(10.0)			(2.5)	0.5	内5R7/6 橙 外N4/0 灰 新57/1 灰白	密	やや軟	屈:1/12	外面タタキ 非在地胎土(精良)
1562	223		須恵器	壺		口縁	1838P	(竪穴 47・48・49 内)	P3	~TK73	19.8			(3.0)	0.6	内N7/0 灰白 外10R4/1 灰 新N5/0 灰	密	硬	口:1/12	内外面ナデのち波状文 突帯・端部シャープ
1563	223	50	土師器	杯		全形	(第6層)	ポイント あり 竪穴 47・48・49 1623 土器溜まり 周辺	P3	布留中~ 布留新	11.8		2.5	5.7	0.4	内5R8/4 赤橙 外5R7/8 橙 新75R8/4 浅黄橙	粗	やや軟	口:6/12 全体80%	内外面マメツ
1564	226		須恵器	蓋	稜~ 天井部		1673 溝	竪穴51 (周溝)	P3	~TK73		13.5		(3.0)	0.6	内N7/0 灰白 外5R5/1 灰 新5R6/1 赤灰	密	硬	稜:2/12	天井部回転ヘラケズリのち 回転ナデ
1565	226		須恵器	杯身		全形	(第6層)	(竪穴51 肩部) ポイント あり	P3	TK47	10.0	12.2		4.6	0.6	内外N6/0 灰 新N7/0 灰白	密	硬	口:1/12 底:12/12	底部回転ヘラケズリ左回り 底部ヘラ記号?
1566	226		土師器	甕	外反 口縁形	口縁~体部	竪穴51	(上面)	P3	辻4~	15.3			(7.0)	0.4	内10R6/2 灰黄褐 外5R6/6 粉黄褐 新75R7/4 にふい橙	やや密	やや軟	口:2/12 頸:3/12	内外面マメツ 外面タテハケ内面ナデ
1567	226		須恵器	甕		肩部	竪穴51	(上面)	P3	TK23~	(15.0)			(5.6)	0.5	内25R7/1 灰白 外5R8/1 ~7/1 灰白断 25R8/1 灰白	密	やや軟 やや不良	頸:3/12	外面平行タタキのち回転力 キム 内面同心円あて具痕(弱) ナデ消し

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1568	227		土師器	高杯	無稜形	杯部	1623 土器溜り		P3	辻3	13.6			(4.5)	0.6	内外断75R7/6 橙	密	軟	口:6/12	内外面マメツ
1569	227	51	土師器	高杯	無稜 外反形	杯部	1623 土器溜り		P3	辻3	13.2			(5.2)	0.5	内外断75R7/6 橙	密	軟	口:7/12	内外面マメツ 凸面接合
1570	227	51	土師器	高杯	椀形	杯部	1623 土器溜り		P3	辻3	13.7			(5.8)	0.5	内外断5R7/6 橙	密	やや軟	口:8/12	内外面マメツ 外面タテミガキか 凸面接合
1571	227		土師器	高杯	椀形	杯部	1623 土器溜り		P3	辻3	12.2			(5.3)	0.5	内外断75R7/6 橙	密	軟	口:5/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
1572	227		土師器	高杯		接合部 ~脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			9.4	(8.0)	0.5	内外断5R7/6 橙	密	軟	底:6/12	外面タテミガキか 内面ヨコナデか 凸面接合
1573	227		土師器	高杯		脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			9.2	(6.2)	0.4	内外断75R7/6 橙	密	軟	底:3/12	内外面マメツ 内面ヨコナデ 凸面接合
1574	227		土師器	高杯		脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			9.0	(5.9)	0.5	内外断75R7/6 橙	密	軟	底:6/12	内外面マメツ 内面ヨコナデ 凸面接合
1575	227	51	土師器	高杯		脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			8.9	(6.2)	0.4	内外断75R7/6 橙	密	軟	底:1/12	内外面マメツ 内面ヨコナデ 凸面接合
1576	227		土師器	高杯		脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			9.5	(6.0)	0.6	内外75R7/6 橙 断75R7/4にふい橙	密	軟	底:7/12	内外面マメツ 内面ヨコナデ 凸面接合
1577	227	51	土師器	高杯		脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			9.8	(6.8)	0.5	内外断75R7/6 橙	密	軟	底:5/12	内外面マメツ 内面ヨコナデ 凸面接合
1578	227		土師器	高杯		脚部	1623 土器溜り		P3	辻3			14.0	(3.1)	0.6	内10R7/3にふい黄橙 外75R7/6 橙 断10R8/3 浅黄橙	密	やや硬	底:3/12	内外面マメツ
1579	227		須恵器	杯蓋		口縁~ 天井部	1623 土器溜り		P3	TK216	10.8			(3.8)	0.3	内外断10G/1 灰	密精良	硬	稜:1/12	
1580	227		須恵器	無蓋 高杯		口縁	1623 土器溜り		P3	TK216	17.8			(3.6)	(0.4)	内断10G/1 灰 外10G/1 灰	密	硬	口:1/12	外面波状文
1581	227	51	軟質土器	杯		全形	1623 土器溜り		P3	辻3 TK216	18.6		11.0	3.5	0.4	内断5R8/1 灰白 外5R8/2 灰白	密	やや軟	口:6/12 全体50%	軟質、焼成不良 内外面マメツ、口縁部外反 類少ない
1582	228		土師器	壺	小型	口縁	1623 土器溜り		P3	辻3	9.0			(3.9)	0.4	内外75R7/3にふい橙 断25G/1 黄灰	密精良	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
1583	228	51	土師器	壺	布留系 大型直口壺	口縁	1623 土器溜り		P3	辻3	27.2			(8.1)	1.0	内75R7/4にふい橙 外75R7/6 橙 断N30 暗灰	普通	普通	口:2/12	口縁部ハケのちヨコナデ
1584	228	51	須恵器	甕		体部	1623 土器溜り		P3	TK73 ~216				(0.5)		内5P86/1 青灰 外5P85/1 青灰 断5R4/1 暗赤灰	密	硬	破片	外面平行タキ 内面無文
1585	228	51	土師器	甕	(布留系)	口縁	1623 土器溜り		P3	辻3	9.4			(4.3)	0.4	内10R7/3にふい黄橙 外75R7/4にふい橙 断75R4/1 褐灰	やや密	普通	口:6/12	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 直立口縁
1586	228		土師器	甕	外反 口縁形	口縁	1623 土器溜り		P3	辻3	12.0			(3.2)	0.5	内外断 10R7/4にふい黄橙	やや密	軟	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ
1587	228	51	土師器	甕	小型	口縁	1623 土器溜り		P3	辻3	12.3			(5.5)	0.7	内10R7/3にふい黄橙 外5R7/4にふい橙 断N30 暗灰	やや密	軟	口:4/12	口縁部ヨコナデ 内面ナデ
1588	228		土師器	甕	布留形	口縁	1623 土器溜り		P3	辻3	16.8			(5.7)	0.5	内外断10R8/2 灰白	やや密	軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケか 内面ナデorケズリ
1589	228	51	土師器	甕	布留形	口縁 ~体部	1623 土器溜り		P3	辻3	17.6	(27.0)		(12.4)	0.5	内25R8/3 浅黄 外10R8/6 黄橙 断25G/1 黄灰	やや密	普通	口:6/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ・ナメハケ 内面ケズリ
1590	228		軟質土器	甌		口縁 ~底部	1623 土器溜り		P3	辻3	25.2		12.8	(24.6)	0.7	内75R7/4にふい橙 外5R7/6 橙 断5R7/4にふい橙	やや密	やや軟	底:6+12 口:7/12	体部外面タキのちナデ 体部中央沈線、最下部ケズリ 把手上面切込み 下面竹管状突起 挿入法:寺井分類A 底部中央穿孔+外縁円孔6 = 寺井分類ab
1591	228		軟質土器	甌		口縁 ~底部	1623 土器溜り		P3	辻3	28.6		9.4	30.7	0.6	内外10R8/2 灰白 断N20 黒	やや密	やや軟	口:3/12	抹角平底頸部あり 体部外面ナデか 把手下面竹管状突起 挿入法:寺井分類A 底部 = 寺井分類cか (2 or 3 or 4)
1592	228		製塩土器		小型椀形	口縁 ~底部	1623 土器溜り		P3	辻3	2.8	4.7		(7.9)	0.2	内外断 10R8/3 浅黄橙	密	硬	口:2/12	内外面ナデ整形 計22g
1593	228		土師器	甕	布留形 (山陰系)	口縁	1656P	柱列11	P3	~辻3				(5.2)	0.5	内75R5/3にふい橙 外25R7/6 橙 断N30 暗灰	やや密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 体部内面ケズリ 外面被熱赤変 ※ 山陰系の可能性あり
1594	228		須恵器	蓋		口縁~ 天井部	1623 土器溜り 周辺	(第5層)	P3	TK73 ~216	12.3			(3.6)	0.5	内外断N6/0 灰	密	硬	口:2/12 稜:3/12	天井部回転ヘラケズリのち 回転ナデ
1595	228		土師器	甕	(布留系)	口縁	1623 土器溜り 周辺	(第5層)	P3	辻3~4	16.8			(5.5)	0.6	内外75R7/3にふい橙 断10R4/1 褐灰	密	硬	口:4+12 口:5+12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ内面ナデか
1596	230		須恵器	杯蓋		口縁~ 天井部	1896P	掘立51	P3	TK216 ~208	13.0			(3.4)	0.3	内外断N6/0 灰	密	硬	口:2/12	回転ナデ
1597	230		土師器	高杯	椀形	口縁	1873 被熱面	掘立51	P3	辻3~4	14.8			(3.9)	0.5	内5R6/6 橙 外5R4/6 赤褐 断5R6/6 橙	密精良	やや軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 赤色スリップ、精良胎土
1598	230		土師器	高杯	(B系統 I群系)	接合部	1872 土坑	掘立51	P3	辻4				(4.2)	0.5	内75R7/6 橙 外75R7/6 橙 断10R7/4にふい黄橙	密	やや軟	接:12/12	内外面マメツ 凸面接合
1599	230		土師器	甕	布留系か	肩部 ~体部	1807 土坑	掘立51	P3	辻4~	14.0			(4.8)	0.4	内10R6/2 灰黄褐 外断 10R7/3にふい黄橙	やや密	硬	頸:4/12	外面タテハケ内面ナデ 外面黒付き破片あり
1600	230		土師器	甕	外反 口縁形	口縁	1803P		P3	辻3~4				(1.9)	0.5	内10R7/2にふい黄橙 外断10R5/2 灰黄褐	やや密	やや軟	口:1/12 以下	内外面マメツ 内外面煤
1601	230		製塩土器		小型椀形	口縁 ~体部	1803P		P3	中期	5.0			(4.4)	0.3	内75R8/4 浅黄橙 外10R8/3 浅黄橙 断57/1 灰白	やや密	やや軟	破片	ナデ・オサエ やや精良、総量57g
1602	230		土師器	甕	布留形	口縁 ~肩部	1746P		P3	辻3~4	16.5			(7.1)	0.5	内外5R7/6 橙 断5R7/4にふい橙	やや密	硬	口:2/12 頸:2/12	内外面マメツ
1603	230		軟質土器	甌		全形	1746P +1801P		P3	辻4	27.7			24.2	0.6	内断10R7/6 明黄褐 外75R7/6 黄橙	やや密	やや硬	口:1/12 体:2/12 底:2/12	内外面マメツ 端部内面肥厚(布留影響) 外面被熱赤化

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
1604	230		須恵器	蓋		完形	(1617井戸肩部)	ポイントあり(中世)	P3	TK208	12.5			4.5	0.3	内外5PB4/1暗青灰 断5R4/1暗紫灰	密	硬	口:11/12 ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ右回り	
1605	230		土師器	高杯	(B系統II群系)	脚部	1853P	柱列15	P3	辻3~4			10.0	(3.1)	0.5	内外断10R7/4にふい黄橙	密 精良	硬	脚:5/12	脚部内面ケズリ 在地胎土か(精良)	
1606	233		須恵器	杯蓋		全形	1897井戸	(上層)	P3	TK216	12.2			4.7	0.5	内外断N7/0灰白	密	硬	口:2/12	底部回転ヘラケズリ右回り	
1607	233		土師器	甕	V様式系くの字蓋	口縁	1897井戸	(上層)	P3	庄内古古か	(16.6)				(4.8)	0.5	内外5R7/4にふい橙 断5R7/6橙	やや密	軟	口:2/12	外面V様式系タタキ
1608	233		土師器	壺	直口壺	頸部	1897井戸	(上層)	P3	庄内古古か	(10.6)				(4.5)	0.6	内7.5R7/3にふい橙 外7.5R7/3~8/3にふい橙 断7.5R6/1橙灰	やや密	硬	頸:2/12	内外面ナデ
1609	234		土師器	壺か	V様式系小型平底	口縁~底部	1897井戸	最下層	P3	庄内古古	8.9	13.6	4.6	13.8	0.6	内2.5R3淡黄 外2.5R2灰黄 断10R7/2にふい黄橙 ・N3/0暗灰	密	軟	口:2/12 底:6/12	外面V様式系タタキのちタテナデか 内面ナデ・接合痕	
1610	234		土師器	壺	(平底)	底部	1897井戸	最下層	P3	庄内古古			4.4	(3.4)	0.6	内2.5R2灰黄 ・2.5R1黒褐 外2.5R2灰黄 断2.5R2灰白	やや密	硬	底:12/12	底部オサエ 外面タテミガキ	
1611	234	C8 49	土師器	壺	A系統 広口短頸壺 平底	全形	1897井戸	最下層	P3	庄内古古	12.9	21.2	3.7	22.7	0.7	内2.5R2暗灰黄 (口~頸) 2.5R1黒褐(頸~底) 外10R8/1灰白 ・N2/0黒 断2.5R2灰白	密	硬	口:8/12 ほぼ完形	口縁部内面ヨコミガキ 外面タタキのちタテミガキ 内面ハケ、接合痕 口縁部凹み、外面煤	
1612	234	C8 49	土師器	壺	A系統か大型直口壺(平底)	全形	1897井戸	最下層	P3	庄内古古	11.8	24.3	4.1	27.5	0.6	内2.5R2灰白 1N7/0灰白 外2.5R2灰白 断2.5R2灰白 ・N6/0灰	やや密	硬	口:2/12 底:12/12	外面タタキのちタテ方向細筋ミガキか 内面ヨコ方向ケズリ? 内面ナデ・接合痕 非在地胎土か	
1613	234	49	土師器	甕	V様式系くの字蓋	口縁~体部	1897井戸	最下層	P3	庄内古古	15.9	17.7		(15.3)	0.6	内10R3/1黒褐 外10R3/3にふい黄橙	やや密	硬	口:2/12	外面V様式系タタキ 内面ナデ・接合痕 分割成形	
1614	234	C8 49	土師器	甕	V様式系くの字蓋 平底	全形	1897井戸	最下層	P3	庄内古古	12.6	19.9	5.1	23.4	0.7	内2.5R3淡黄 ・10R5/4にふい黄褐 外2.5R3淡黄 断2.5R6/1黄灰	密	硬	口:11/12 ほぼ完形	外面V様式系タタキ 内面接合痕 分割成形、平底	
1615	234	C8	土師器	甕	V様式系平底	底部	1897井戸	最下層	P3	庄内古古			7.4	(6.4)	0.5	内N6/0灰 外2.5R2灰白 断7.5R8/4淡黄橙	密	やや硬	底:12/12	外面V様式系タタキ 内面ナデ	
1616	234	C8	土師器	甕		体部	1897井戸	最下層	P3	庄内古古		10.4		(13.0)	0.4	内2.5R3オリブ褐 外N2/0黒 断2.5R2灰黄	密	硬	体:3/12	外面タタキのちタテハケ 内面ナデか 外面煤顕著 非ケズリ・薄手→系統不明	
1617	234	49	土師器	甕	東四国か	体部	1897井戸	最下層	P3	庄内古古		21.4		(14.4)	0.4	内5.5/2灰オリブ 外2.5R2灰黄 断2.5R3淡黄	やや粗	硬	肩:1/12	外面タテミガキ・肩部ハケ 内面ケズリ・圧痕 薄蓋、東部瀬戸内搬入品	
1618	234	C8 C10 49	土師器	甕	吉備型平底	完形	1897井戸	最下層	P3	庄内古古	14.0	18.9	4.6	22.3	0.4	内10R3/2黒褐 外N5/0黒 断10R8/3淡黄橙	やや粗	硬	ほぼ完形	口縁部凹み 外面タテミガキ 肩部ヨコスリナデ 内面ヘラケズリ 外面煤顕著 内面煤・炭化物 ※吉備搬入品:オの町II式	
1619	235	50	須恵器	杯蓋		全形	1665P		P3	TK10	15.2			4.8	0.5	内5PB6/1青灰 外5PB5/1青灰 断5P6/1紫灰	やや密	硬	口:7/12 全体70%	天井部回転ヘラケズリ右回り 黒色粒	
1620	236		土師器	小型器台	精製B系統 小型器台B	脚部	(機械彫削)	除去面精査	C6	庄内新~布留古			11.6	(7.8)	0.4	内外断5R5/6明赤褐	密	やや軟	脚端:9/12 接:12/12	内面マメツ 凸面接合 内孔スカシ4方向 在地胎土か →器地品 or 搬入品	
1621	236		土師器	壺	C系統 中型短頸直口壺	口縁	(機械彫削)	除去面精査	C6	布留古	13.0			(5.4)	0.8	内2.5R3淡黄 外7.5R6/6淡黄橙 断N4/0灰	やや密	硬	口:4/12	口縁部凹み 口縁部内外面ハケのちヨコナデ 非在地胎土 ※搬入品の可能性大	
1622	236		土師器	壺	C系統 二重口縁壺	頸部	(機械彫削)	除去面精査	C6	庄内~布留古	(10.0)			(4.0)	0.8	内10R8/3淡黄橙 外7.5R8/4淡黄橙 断7.5R6/1橙灰	やや密	硬	頸:2/12	頸部タテハケのちヨコナデ	
1623	236		土師器	壺	加飾壺	肩部	1297溝	(方形周溝墓上面)	C6	庄内				(4.4)	0.8	内2.5R2灰白 外7.5R8/4淡黄橙 断N5/0灰	やや密	やや軟	破片	直線文・波状文・直線文	
1624	236		土師器	壺	超大型加飾壺	頸部	(機械彫削)	除去面精査	C6	庄内新~布留古	(32.8)			(4.5)	1.5	内10R8/2灰白 外5R8/1灰白 断10R6/1橙灰	やや密	硬	頸:1/12	頸部突帯	
1625	236		土師器	甕	河内型庄内形生駒西麓産	口縁	1386P		C6	庄内新~布留古				(2.1)	0.3	内外7.5R4/2灰褐 断N4/0灰	やや密	やや硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 角肉石あり、生駒西麓産	
1626	236		土師器	杯		口縁~体部	1316P		C6	中期か	14.9			(3.8)	0.5	内10R7/3にふい黄橙 外10R7/4にふい黄橙 断10R5/3にふい黄橙	やや密	硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 外面オサエ内面ハケ	
1627	236		土師器	鼓形器台	(山陰系)	屈曲部	(第6層)	(南半)	C7	布留古か	(9.0)	(12.2)		(2.4)	0.6	内7.5R6/2灰褐 外7.5R6/5にふい褐 断5R7/6橙	やや密	硬	屈:2/12	屈曲部ヨコナデ内面ケズリ 非在地胎土、搬入品	
1628	236		土師器	壺	加飾壺	頸部	(第6層)	(南半)	C7	庄内~布留古				(3.4)	0.7	内断10R8/2灰白 外5R7/6橙	やや密	やや軟	破片	頸部突帯刻み目	
1629	236		土師器	高杯	精製B系統	脚部	1515溝	(中近世耕作溝)(竪穴32・33周辺)	C8	庄内			18.0	(5.1)	0.4	内外7.5R4/2灰褐 断5R5/6明赤褐	密	硬	屈:12/12 脚:1/12 以下	外面ハケのち細筋ヨコミガキ 内面ハケ 内孔スカシ3方向 凸面接合 在地胎土か(精良) ※搬入品 or 器地品	
1630	236		土師器	(台部)	鉢か	台部	(1596P)		C8	庄内~布留古			8.6	(4.0)	0.4	内外7.5R7/6橙 断2.5R2灰白	密	やや軟	脚:10/12 接:12/12	内外面マメツ 在地胎土(精良)	
1631	236		土師器	壺	加飾壺	肩部	(南側溝・西側溝)		C5	庄内	(15.0)			(3.7)	0.6	内5R6/6橙 外2.5R3淡黄 断10R4/1橙灰	やや密	やや軟	肩:2/12	肩部直線文+波状文+直線文+波状文 在地胎土か(精良) (V様式)胎土、精良	
1632	236		土師器	壺	加飾壺	肩部	(機械彫削)		C5	庄内	(18.0)			(2.8)	0.8	内10R7/2にふい黄橙 外10R8/3淡黄橙 断5R4/1灰	やや密	やや軟	肩:1/12	肩部直線文+波状文 在地胎土か(精良)	
1633	236		須恵器	把手付碗か		体部~底部	(第6層)	(竪穴32上面付近)	C5	TK216前後か		8.6	2.0	(4.5)	0.7	内5PB6/1青灰 外N3/0暗灰 断5R4/1暗赤灰	密	硬	体:3/12	波状文なし 外面下半不定方向ナデ	

遺物一覧表

No.	図 No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1634	236		軟質土器	甌か		体部	(機軸掘削除去面精査)		C5	中期前葉～中葉		(13.0)		(5.0)	0.6	内5YR6/8 橙 外10R7/6 明黄褐 断面5YR6/8 橙	やや密	やや硬	体: 2/12	体部外面平行タタキ内面ナデ
1635	236		製塩土器		小型椀形	口縁	(耕作溝群)		C5	中期	(3.8)			(3.3)	0.3	内25Y6/2 灰黄 外断面5R/1 灰白	やや密	やや硬	口: 3/12	ナデ・オサエ整形 やや精良、総量 37g
1636	236		須恵器	器台	高杯形器台	脚部	(第3・4層)		C-8	TK216～208				(4.3)	0.9	内外断N4/0 灰	やや密	硬	脚: 1/12	波状文、内外面破断面隆灰スカシ孔有無・形状・個数不明
1637	236		土製品	土玉		完形	(第3層)北壁内		C-8			2.0			1.7	外25Y7/2 灰黄	密	硬	完形	
1638	236		土師器	壺	系譜不明二重口縁壺	口縁	(第5層)		P3	布留古～中	23.4			(3.9)	0.6	内7.5YR6/4 にふい橙 外10R7/3 にふい黄橙 断面2.5Y7/1 灰白	やや密	やや硬	口: 2/12	内外面マメツ非在地胎土、搬入品か
1639	236		土師器	壺か	産地不明小型壺	口縁	(耕作溝群)		P3	布留か				(2.4)	0.5	内断7.5R7/6 橙 外10R4/6 赤	やや密	やや軟	口: 1/12 以下	口縁部内外面赤彩角閃石あり ※ 搬入品 (非生駒西麓産か)
1640	236		土師器	甌	庄内形甌(非生駒)	口縁	(第5層)		P3	～布留古か	14.4			(2.3)	0.3	内外7.5R7/6 橙 断面2.5R/1 灰白	やや密	やや硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ非在地胎土(非生駒) ※ 搬入品か
1641	236		製塩土器		備前瀬戸脚台式	脚部台	(第5・6層)		P3	弥生後期後半～庄内古	(2.1)		6.8	(5.0)	0.5	内5YR6/6 橙 外5YR4/6 赤褐 断面5YR6/6 明赤褐	やや密	硬	接: 12/12	脚部外面ケズリ内面オサエ非在地胎土か、搬入品
1642	236		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	1616 土坑	(13c 代)	P3	TK216～208	11.3			(4.7)	0.7	内5P67/1 明青灰 外5P63/1 暗青灰 断面10R5/2 灰赤	密	硬	口: 3/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
1643	236		須恵器	蓋		口縁～天井部	(第5層)		P3	TK73～216	12.6			(3.9)	0.6	内外N5/0 灰 断面10R4/2 灰赤	密	硬	口: 4/12	天井部回転ヘラケズリのち回転ナデ
1644	236		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	(第5層)		P3	TK216～208	13.2			(4.1)	0.5	内5R5/1 紫灰 外2.5YR5/3 にふい赤褐 断面2.5YR5/2 灰赤	密	硬	口: 2/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
1645	236		須恵器	杯身		口縁～底部	(第5層)		P3	TK216～208	10.0			(4.8)	0.7	内5R5/1 紫灰 外5P65/1 青灰 断面10R6/2 灰赤	密	硬	受: 3/12 口: 1/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1646	236		須恵器	杯身		口縁～底部	(第5層)		P3	TK216～208	11.5			4.7	0.5	内断10Y6/1 灰 外10Y5/1 灰	密	やや硬	口: 1/12 受: 2/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1647	236		須恵器	把手付椀		口縁～底部	(第5層)		P3	TK208～23	10.0	11.0	5.4	6.9	0.4	内5B3/1 暗青灰 外5B2/1 青黒 断面5R7/1 明オリーブ灰	密	やや硬	口: 3/12 体: 4/12 全体 30%	波状文1条 外面下半手持ちヘラケズリ 把手欠損
1648	236		須恵器	甌		口縁	(耕作溝群)		P3	TK216前後				(5.3)	0.7	内5R5/1 赤灰 外断面5P63/1 暗青灰	密	硬	口: 1/12 以下	回転ナデ
1649	236		土師器	甌	直立外反形	口縁～肩部	1812P		P3	辻4～	17.0			(6.6)	0.5	内10R6/2 灰黄褐 外10R7/3 にふい黄橙 断面10R8/2 灰白	やや密	やや硬	口: 3/12	口縁部ヨコナデ 外面タテナメハケ 内面オサエ
1650	236		製塩土器		小型椀形	口縁～体部	(耕作溝群)		P3	中期	3.8			(5.9)	0.3	内2.5Y5/1 黄灰 外N4/0 灰 断面5R/1 灰白	粗	硬	破片	ナデ・オサエ胎土粗い、総量 76g
1651	238		土師器	高杯	(B系統1群系か)	接合部	1169P	竪穴 31	C-5	中期中葉～				(1.8)	0.7	内外5YR6/6 橙 断面5Y6/2 灰オリーブ	やや密	やや硬	接: 12/12	外面タテハケ凸凹接合、折衷的
1652	238		須恵器	杯身		口縁～底部	1174P	(竪穴 31内)	C-5	TK23	10.8	12.9		(3.6)	0.3	内外5P64/1 暗青灰 断面5P65/1 青灰	密	硬	口: 2/12	底部回転ヘラケズリ
1653	238		須恵器	杯身		口縁～受部	竪穴 31	埋土南東	C-5	TK208				(3.4)	0.7	内断5Y7/1 灰白 外N7/0 灰白	密	やや硬	口: 1/12 以下	回転ナデ
1654	238		須恵器	壺		口縁	竪穴 31		C-5	TK208				(1.3)	0.5	内外5Y6/1 灰 断面5Y7/1 灰白	密	硬	口: 1/12 以下	回転ナデ
1655	239		土師器	甌	布留形	口縁	1038P	掘立 17	C-5	布留新～辻2～3				(7.7)	0.5	内外10R8/2 灰白 断面10R5/1 褐灰	密	硬	口: 1/12 以下	口縁部ヨコナデ
1656	241		須恵器	無蓋高杯		杯部	178P	掘立 45	C-2	TK23～47				(2.6)	0.5	内外N6/0 灰 断面N7/0 灰白	密	硬	口: 1/12	波状文1条
1657	242	50	須恵器	杯蓋		全形	224 土坑	(竪穴 5内)	C-2	TK208	13.8			4.3	0.5	内5P67/1 明青灰 外5B6/1 青灰 断面5P6/1 紫灰	密	硬	口: 10/12 全体 90%	天井部回転ヘラケズリ右回り
1658	242		須恵器	杯身		口縁～底部	284P	(竪穴 5内)	C-2	TK23～47	9.8	12.0		(4.0)	0.4	内外5P65/1 青灰 断面5P5/1 紫灰	密	硬	口: 2/12	底部回転ヘラケズリ
1659	242		土師器	高杯	(1群系か)	脚部	296P	(竪穴 5内)	C-2	辻4～		9.3		(6.2)	0.3	内外5YR6/6 橙 断面7.5R7/6 橙	密	硬	脚: 7/12 接: 12/12	外面タテ面取り 内面シボリ痕 凸凹接合か
1660	242		土師器	甌or鉢	器種不明	口縁	296P	竪穴 5	C-2	不明	33.2			(2.8)	0.8	内外5YR6/6 橙 断面7.5YR6/6 橙	やや密	硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ
1661	242		弥生土器か	器台		脚部	295P	竪穴 5	C-2	弥生後期か			22.0	(2.5)	1.4	内断7.5YR6/4 にふい橙 外5YR6/6 橙	やや密	硬	脚: 1/12	端部ヨコナデ 弥生土器の器台か ※ 直接以降に伴わない
1662	243		須恵器	有蓋高杯蓋		天井部	竪穴 4		C-2	TK208～47				(2.3)	0.4	内断N6/0 灰 外N4/0 灰	密	硬	つまみ完存	天井部回転ヘラケズリ
1663	243		須恵器	無蓋高杯		杯部	235 土坑	(竪穴 4)	C-2	TK208～47				(6.4)	0.6	内N5/0 灰 外断面7.5R4/1 暗赤灰	密	硬	口: 2/12	波状文一段 把手付
1664	243		土師器	甌	布留形	口縁	竪穴 4	竪穴 4	C-2	辻3～4	20.8			(3.9)	0.6	内2.5Y4/1 黄灰 外2.5Y7/2 暗黄 断面7.5YR6/6 橙	やや粗	硬	口: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 内面ケズリ
1665	243		軟質土器	鍋	把手付	口縁～体部	竪穴 4		C-2	中期前葉～中葉	29.4	33.6		(17.8)	0.6	内5YR6/6 橙 外断面5R7/6 橙	やや密	やや軟	口: 2/12 全体 約 25%	外面平行タタキ 内外面葉付着 把手跡のみあり (挿入法: 寺井分類A)
1666	244		須恵器	杯蓋		全形	265 土坑	(掘立 52 周辺) ポイントあり	C-2	TK23	12.8	13.0		5.0	0.4	内外7.5Y6/1 灰 断面2.5Y6/2 灰黄	密	やや軟 不	口: 1/12 天: 5/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
1667	244		須恵器	有蓋高杯蓋		全形	(掘立 53 周辺)	掘立 53	C-2	TK23	12.1			5.5	0.4	内5P66/1 青灰 外断面5Y6/1 赤灰	密	硬	口: 10/12 全体 90%	天井部回転ヘラケズリ右回り
1668	244		須恵器	有蓋高杯		杯部～脚部	307P	(掘立 53 周辺)	C-2	TK47 頃	10.8			7.8	0.4	内10R7/3 にふい黄橙 外2.5Y7/1 灰白 断面10R7/3 にふい黄橙	やや密	軟不良	接: 7/12 受: 2/12	底部回転ヘラケズリ左回り 方形スカシ3方向、黒色粒
1669	244		須恵器	有蓋高杯		全形	(310P 上面)	掘立 54	C-2	TK23～47	11.0	13.1	7.9	9.8	0.4	内5P65/1 青灰 外5P64/1 暗青灰 ～5P4/1 暗紫灰 断面5R3/1 暗紫灰	密	硬	口: 9/12 脚: 3/12	底部回転ヘラケズリ左回り 方形スカシ3方向、黒色粒 倒筒焼成
1670	244		土師器	杯		口縁～体部	(掘立 54 周辺)	ポイントあり	C-2	辻3～4	13.7			(2.6)	0.4	内断5YR6/6 橙 外7.5R7/6 橙	やや密	やや硬	口: 3/12	口縁部ヨコナデ、端部凹



第5節(古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1671	244	50	須恵器	有蓋高杯蓋		全形	311 土坑		C2	TK208 ~ 23	12.2	12.6		5.5	0.4	内N50 灰 外N40 灰 新 75R4/2 灰褐	密	硬	口: 11/12 体: 12/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
1672	244	50	須恵器	有蓋高杯蓋		全形	311 土坑		C2	TK208 ~ 23	12.5			5.6	0.4	内外N60 灰 新 5R4/2 灰褐	密	硬	口: 6/12 体: 12/12 全体 85%	天井部回転ヘラケズリ右回り 口縁部一部打欠きか
1673	244		須恵器	壺		口縁	311 土坑		C2	TK208 ~ 23	17.3			(1.6)	0.4	内N60 灰 外N50 灰	やや密	硬	口: 1/12	回転ナデ
1674	244	50	製塩土器	小型椀形	ナデ	口縁 ~ 体部	311 土坑		C2	中期後葉	3.4			1.7	0.2	内 25R7/4 淡赤橙 外 25R5/6 明赤褐 新 N30 暗灰	やや粗	硬	口: 3/12	ナデ・オサエ整形 21g
1675	244	50	製塩土器	小型椀形	ナデ	口縁 ~ 体部	311 土坑		C2	中期後葉	4.2			2.8	0.3	内 N40 灰 外 N30 暗灰 新 75G/1 灰	やや密	硬	破片	ナデ、25g 1674・1675 含め計 151g
1676	244		須恵器	甕		体部	(311 土坑) 周辺	312P 肩部 ポイントあり	C2	TK208 ~		(39.0)		(15.5)	0.5	内 N60 灰 外 5R/1 灰 新 57/1 灰白	密	やや硬	体: 3/12	外面平行タタキのち回転カキメ 内面同心円あて具痕(弱) ナデ消し
1677	245		製塩土器			小型椀形	238P		C2	中期	(3.6)			(2.6)	0.2	内 N40 灰 外 N30 暗灰 新 N60 灰	粗	硬	口: 1/12 以下	ナデ・オサエ整形 胎土粗い、総重 21g
1678	245		須恵器	把手付椀か		体部 ~ 底部	(190 堤 上面)	(中世以降)	C3	TK23 ~ 47 頃か		6.8	2.2	(6.1)	0.6	内 N60 灰 外 N70 灰白 新 5R6/1 紫灰	密	硬	全体 40%	面回転ナデ 体部弱い突帯
1679	247		土師器	高杯	C 系統 II 群系 椀形	口縁 + 接合部	694 溝	壁溝西	D2	辻 4	13.4			(5.9)	0.5	内外断 75R7/6 橙	密	やや軟	口: 2/12 接: 12/12	内外面マメツ 円蓋充填
1680	247		須恵器	杯蓋		口縁 ~ 天井部	697 溝	竪穴 59 壁溝東	D2	TK23 ~ 47	11.5			3.6	0.5	内断 N60 灰 外 N70 灰白	密	硬	口: 2/12 接: 3/12	天井部回転ヘラケズリ右回り
1681	247		須恵器	杯身		口縁 ~ 底部	697 溝	竪穴 59 壁溝東	D2	TK208 ~ 23	10.1			(5.5)	0.4	内外 N70 灰白 新 5R2/1 紫黒	密	硬	口: 2/12 全体 15%	底部回転ヘラケズリ右回り
1682	247		須恵器	杯身		口縁 ~ 底部	竪穴 59	ポイント あり	D2	TK208 ~ 23		13.4		(4.4)	0.5	内 N60 灰 外 57/1 灰白 新 5R6/1 灰	密	やや軟	全体 40%	底部回転ヘラケズリ左回り
1683	247		須恵器	有蓋高杯		全形	竪穴 59	ポイント あり	D2	TK23 ~ 47	10.5	12.9	9.0	10.2	0.5	内外断 N70 灰白	密	やや硬	口: 1/12 底: 7/12	底部回転ヘラケズリ右回り 脚部外面回転カキメ 方形スキャン 3 方向
1684	247		土師器	高杯		脚部	698P	(竪穴 59 内 pt)	D2	辻 4		9.6	(4.1)	0.5	内断 75R7/6 橙 外 5R6/6 橙	密	やや軟	脚: 4/12	内外面マメツ 脚部内面シボリ痕	
1685	247		須恵器	杯蓋		口縁 ~ 天井部	692P	竪穴 59 主柱	D2	TK23 ~ 47	10.6			(4.0)	0.5	内 5R5/1 青灰 外 5R4/1 暗青灰 新 5R4/1 暗紫灰	密	硬	口: 1/12 接: 2/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
1686	247		須恵器	杯身		口縁 ~ 底部	699P	(竪穴 59 内 pt)	D2	TK23 ~ 47	13.0	12.2		(4.1)	0.3	内断 N70 灰白 外 257/1 灰白	密	硬	口: 2/12	回転ナデ
1687	247		土師器	甕	布留形	口縁	751P	竪穴 59	D2	辻 4				(3.3)	0.5	内 75R7/6 橙 外断 10R8/2 灰白	やや密	硬	口: 1/12 以下	内外面マメツ
1688	247	51	軟質土器	甌		全形	697 溝	竪穴 59	D2	中期後葉か	25.2	11.2	24.6	0.6	内外断 75R7/4 にふい橙	やや密	やや硬	口: 11/12 全体 85%	口縁部ヨコナテ端面肥厚 外面タテハケ内面ハケナデ スキャン 145: 寺井分類 C 1 在地胎土か ※ 1689 と同工品か	
1689	247		軟質土器	甌		口縁 ~ 底部	697 溝	竪穴 59	D2	中期後葉か	28.8	12.8	(30.7)	1.0	内断 75R7/4 にふい橙 外 75R7/6 橙	やや密	硬	底: 4/12 口: 8+/12	口縁部ヨコナテ端面肥厚 外面タテハケ内面ハケナデ スキャン 145: 寺井分類 C 1 在地胎土か ※ 1688 と同工品か	
1690	247		製塩土器			小型椀形	697 溝	竪穴 59	D2	中期後葉	4.0			(4.1)	0.3	内 10R6/3 にふい黄橙 外 75R5/6 明黄褐 新 10R4/1 褐灰	やや粗	やや軟	口: 2/12	タタキあり (30g) ナデ・オサエ整形破片あり 計 63g
1691	247		製塩土器			小型椀形	751P	竪穴 59 (697 土坑 下部)	D2	中期後葉		4.9	0.6	(3.7)	0.3	内外 5R8/1 灰白 新 N70 灰白	密精良	やや硬	底: 12/12	内外面ナデ (96g) 胎土精良、計 102g
1692	248		須恵器	蓋		口縁 ~ 天井部	竪穴 21	(アゼ西)	D2	TK47 ~ MT15	12.3			(3.9)	0.5	内外断 N50 灰	密	硬	口: 2/12	天井部回転ヘラケズリ
1693	248		須恵器	杯身		口縁 ~ 底部	(竪穴 21 周辺)	ポイント あり	D2	MT15	11.8			(4.6)	0.4	内断 N60 灰 外 N60 灰 ~ N50 灰	密	硬	口: 1/12 全体 25%	底部回転ヘラケズリ右回り
1694	248		土師器	甕	外反 口縁形	口縁	742P	(竪穴 21 内)	D2	辻 4 ~	13.8			(3.9)	0.4	内外断 10R5/3 にふい黄褐	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ
1695	248		土師器	甕	布留形	口縁 ~ 肩部	738P	(竪穴 21 内)	D2	中期後葉				(7.3)	0.7	内外 5R7/6 橙 新 75R6/4 にふい橙	やや密	硬	口: 1/12 以下	内外面マメツ 内面非ケズリ
1696	250		須恵器	高杯		脚部	竪穴 20	埋土東	D2	TK47 ~ MT15		8.8	(6.2)	0.8	内 N60 灰 外断 57/1 灰白	密	硬	脚: 4/12	回転カキメ 方形スキャン 3 方向 長軸化傾向	
1697	250		須恵器	壺		口縁	竪穴 20	埋土西	D2	TK208	17.0			(1.2)	0.5	内 5R6/1 青灰 外 5R4/1 暗青灰 新 5R6/1 紫灰	密	硬	口: 2/12	回転ナデ 上面準灰
1698	250		軟質土器			口縁	竪穴 20	埋土東	D2	中期後葉 ~	20.5			(6.0)	0.5	内 75R6/6 橙 外断 10R6/6 明黄褐	やや密	やや硬	口: 1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナテ 端面肥厚 → 布留影響か
1699	250		須恵器	甕		口縁	竪穴 20	埋土下部	D2	TK208 ~ 23	19.0			(5.5)	0.7	内 N60 灰 外断 57/1 灰白	密	硬	口: 2/12	回転ナデ
1700	250		製塩土器			小型椀形	竪穴 20	(被熱面)	D2	中期後葉 ~	3.8		(5.0)	(5.7)	0.2	内外 25R8/1 灰白 新 25R8/3 淡黄	密	やや硬	体: 3/12	ナデ・オサエ整形 胎土精良、計 35g (1691: 竪穴 59 と胎土同じ)
1701	250		土師器	甕	外反 口縁形	口縁 ~ 肩部	竪穴 20	(被熱面)	D2	辻 4 ~	12.5			(7.2)	0.4	内 25R4/1 黄灰 外断 75R6/6 橙	粗	硬	口: 3/12 頸: 3/12	内外面マメツ 外面オサエ内面ヘラケズリ 布面影響、搬入品か
1702	250		土師器	甕	布留形	口縁	竪穴 20	(被熱面 下部)	D2	TK208 ~ 23	16.7			(4.3)	0.5	内 25R8/2 灰白 外 10R7/3 にふい黄橙 新 25R6/1 黄灰	やや密	やや硬	口: 1/12	口縁部ヨコナテ
1703	250		須恵器	無蓋高杯		杯部	竪穴 20	ポイント あり	D2	TK208	17.8		(6.2)	0.5	内 N60 灰 外 5R4/1 暗青灰 新 5R5/1 明青灰	密	硬	接: 2/12 接: 4/12	底部回転ヘラケズリ右回り 波状文 1 段 方形スキャン 3 方向	
1704	252		土師器	高杯	(B 系統 I 群系)	接合部	竪穴 19	ポイント あり	D2	中期中葉 ~				(2.2)	0.5	内外断 75R7/6 橙	密精良	やや軟	接: 12/12	内外面マメツ 凸面接合
1705	252		須恵器	杯身		口縁 ~ 底部	(竪穴 19 周辺)	上面	D2	TK23 ~ 47	10.7	13.0		(4.7)	0.5	内 N60 灰 外 N70 灰白 新 5R6/1 赤灰	密	硬	口: 3/12	底部回転ヘラケズリ右回り 底部準灰 = 倒置焼成
1706	252		土師器	甕 or 鉢	小型	口縁 ~ 体部	竪穴 19	埋土北西	D2	辻 4 ~	13.2			(5.7)	0.4	内 75R7/4 にふい橙 外 75R6/4 にふい橙 新 10R7/2 にふい黄橙	密	やや軟	頸: 2/12	外面タテハケ内面ナデ 焼付着
1707	252		土師器	甕	布留系	口縁	(カマド西)	肩部下	D2	辻 4 ~	16.7			(2.4)	0.5	内外 75R7/6 橙 新 10R7/4 にふい黄橙	密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ

遺物一覧表

No.	図 No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1708	252		土師器	鉢か	(不明) 平底鉢 or 甌か	体部	(カマド 焚口)	竪穴 19	D-2	辻 4~		(18.2)		(9.3)	0.8	内 10R7/3 にふい黄橙 外 10R7/4 にふい黄橙 断 75R8/2 灰白	やや密	やや軟	体: 2/12	内外面タテハケ
1709	254		須恵器	蓋		口縁	(竪穴 50 上面)	(第5-6層)	P2	TK216	10.8			(2.9)	0.4	内 N6/0 灰 外断 N7/0 灰白	密	硬	口: 1/12	回転ナデ
1710	254		土師器	高杯	(椀形)	口縁	(竪穴 50 上面)		P2	辻 3~4	12.2			(3.8)	0.5	内外断 75R7/6 橙	密精良	やや軟	口: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 非在地胎土か (精良)
1711	254		土師器	高杯	(C 系統 II 群系)	杯底部	(竪穴 50 上面)		P2	辻 3	(2.6)			(2.4)	0.5	内断 5YR6/8 橙 外 25R8/2 灰白	やや密	やや軟	接: 12/12	内外面マメツ 口縁充填
1712	254		土師器	高杯	大型有段形	杯底部	(竪穴 50 上面)		P2	辻 3~4	(3.0)			(4.3)	0.5	内外 5YR7/8 橙 断 75R4/1 灰	密	やや軟	接: 2/12 後: 2/12	内外面ハケか 凸面接合か 非在地胎土か (精良)
1713	254		土師器	甕	外反口縁形	口縁	(竪穴 50 上面)		P2	辻 3~4	17.8			(4.2)	0.7	内外 10R7/2 にふい黄橙 断 10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナ
1714	254		土師器	甕	布留形	口縁	竪穴 50	(埋土 南東)	P2	辻 3~4	13.0			(3.2)	0.6	内 10R8/2 灰白 外 5YR7/6 橙 断 N4/0 灰	やや密	やや軟	口: 2/12	口縁部ヨコナデ
1715	254		土師器	甕	(外反形か)	頸部 ~ 体部	竪穴 50	(埋土 南東)	P2	辻 3~4	(12.0)	16.0		(7.8)	0.4	内 10R7/3 にふい黄橙 外断 5R8/4 にふい赤褐	やや密	やや軟	頸: 1/12	内面ナデか・接合痕明瞭
1716	254	50	土師器	甕	布留形	口縁 ~ 体部	ポイントあり	竪穴 50	P2	辻 3~4	13.2	20.4		(15.6)	0.5	内 10R8/1 灰白 外 10R8/3 浅黄橙 断 10R8/2 灰白		やや軟	口: 5/12 全体 20%	口縁部ヨコナデ 外面タテハケのち肩部ヨコ ナデ内面不明
1717	254		土師器	高杯	椀形	口縁	1950 土坑	竪穴 50 壁際土坑	P2	辻 3~4	14.6			(2.8)	0.4	内外断 75R8/4 浅黄橙	密	やや軟	口: 1/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土か (精良)
1718	254		土師器	高杯		脚部	1950 土坑	竪穴 50 壁際土坑	P2	辻 3~4		7.6	(2.5)	0.7	内外 5YR7/6 橙 断 10R8/4 浅黄橙	密	やや軟	脚: 2/12	内外面マメツ 非在地胎土か (精良)	
1719	254		土師器	高杯		脚部	竪穴 50	内側壁溝 (南西)	P2	辻 3~4		8.8	(7.0)	0.6	内外 5YR6/8 橙 断 10R8/1 黒褐	密	やや硬	脚: 4/12	内外面マメツ 非在地胎土か (精良)	
1720	254		土師器	甕	布留形	口縁	1941P	(竪穴 50 内 pt)	P2	辻 3~4	13.8			(3.5)	0.5	内外 25Y5/1 黄灰 断 N3/0 暗灰	やや密	やや硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ
1721	254		須恵器	杯蓋		口縁 ~ 天井部	1755P	掘立 35	P2	TK208				(3.0)	0.4	内外 N5/0 灰 断 N6/0 灰	密	硬	口: 1/12 以下	回転ナデ
1722	254		須恵器	杯か		底部	1766P	掘立 35	P2	TK216	(11.4)	8.0	(2.4)	0.4	内 5P8/1 青灰 外 5P8/1 暗青灰 断 5P6/1 紫灰	密	硬	底: 3/12	底部手持ちヘラケズリ	
1723	254		土師器	高杯		脚部	1757P	掘立 35	P2	辻 3~4		(4.0)	(4.0)	0.5	内外 5YR5/8 明赤褐 断 5YR7/6 橙	やや密	やや軟	脚: 5/12	外面タテ面取り 内面シボリ 非在地胎土か	
1724	255		土師器	高杯	椀形	口縁	1916 土坑	竪穴 52 壁際土坑	P2	辻 3	12.6			(3.8)	0.4	内 10R7/4 にふい黄橙 外 75R8/2 にふい黄褐 断 N5/0 灰	やや密	やや軟	口: 2/12	口縁部ヨコナデ
1725	255		須恵器	無蓋高杯		口縁	1916 土坑	竪穴 52 壁際土坑	P2	TK216 ~ 208	13.7			(3.4)	0.4	内 5P8/1 青灰 外 5P8/1 暗青灰 断 5P5/1 紫灰	密	硬	口: 1/12	回転ナデ
1726	255		土師器	甕	布留形	口縁	1916 土坑	竪穴 52 壁際土坑	P2	辻 3~4	18.8			(2.8)	0.6	内 10R7/3 にふい黄橙 外 10R8/4 にふい黄橙 断 25R4/1 黄灰	やや密	やや硬	口: 2/12	口縁部ハケのちヨコナデ
1727	255		土師器	甕	外反口縁形	口縁	1916 土坑	竪穴 52 壁際土坑	P2	辻 3~4	11.6			(4.8)	0.5	内 75R7/1 明褐灰 外 75R8/2 にふい褐 断 5YR5/1 褐灰	やや密	軟	口: 1/12 以下 頸: 1/12	口縁部ヨコナデ・内面ナデ 外面被熱赤変
1728	255		製塩土器	小型椀形		口縁	1916 土坑	竪穴 52	P2	中期 後葉	3.9			3.8	0.3	内外断 75R8/1 灰白	密精良	硬	口: 4/12	ナデ・オサエ整 8.1g
1729	255		製塩土器	小型椀形		口縁	1916 土坑	竪穴 52	P2	中期 後葉	3.4			3.8	0.3	内・外 5YR6/6 橙 断 75R8/3 浅黄橙	密精良	硬	口: 2/12	ナデ・オサエ整形 4.3g
1730	255		製塩土器	小型椀形		口縁	1916 土坑	竪穴 52	P2	中期 後葉	3.4			2.9	0.4	内 5YR6/6 橙 外 25R8/4 赤褐 断 5YR8/4 浅橙	粗	やや硬	口: 1/12	ナデ・オサエ整形 4.0g (ほか 11.6g) 1728・1729・1730 含め 総計 28.0g
1731	255		製塩土器	小型椀形		口縁	壁溝 (南東・ 南北方向)	竪穴 52	P2		(3.4)			(3.3)	0.3	内 75R7/1 灰白 外断 75R8/1 灰白	密精良	やや硬	口: 3/12	ナデ・オサエ整形 2.9g 胎土精良 (1691・竪穴 59 と胎土類別) 計 4.1g
1732	256		須恵器	杯蓋		口縁	1770P	掘立 36	P2	TK23 ~ 47				(2.4)	0.3	内断 25Y6/1 黄灰	密	やや硬	口: 1/12 以下	回転ナデ 上面黄灰
1733	256		須恵器	壺か		口縁	1752 土坑		P2	TK23 ~ 47				(3.3)	0.6	内 5P8/1 青灰 外 5P8/1 暗青灰 断 5P5/1 赤灰	密	硬	口: 1/12 以下	波状文
1734	256		土師器	高杯		脚部	1752 土坑		P2	辻 3~4		(8.2)	(6.2)	0.6	内断 75R6/6 橙 外 25R8/3 淡黄	密	やや軟	接: 12/12	外面タテ面取り 内面ケズリ 凸面接合・非在地胎土か (精良)	
1735	258		土師器	高杯		脚部	1777P	掘立 37	P2	辻 3~4	(4.2)	(4.0)	0.6	内外 5YR6/6 橙 断 10R8/2 灰白	密精良	やや軟	脚: 3/12	外面タテ面取り 内面シボリ 非在地胎土 (精良)		
1736	259		土師器	甕	布留形 中型	口縁 ~ 体部	648 井戸	上層	D-2	辻 3	23.3		(13.7)	0.4	内 5YR7/8 橙 外 5YR7/6 橙 断 10R8/4 浅黄橙	密	軟	口: 11+12 体部 10%	口縁部ヨコナデ 外面マメツ 内面ケズリ・接合痕	
1737	259	51	土師器	甕	布留形 中型	完形	648 井戸	下層	D-2	辻 2~3	14.3	22.0	24.2	0.5	内 N3/0 暗灰 外 N3/0 暗灰 ・ 75R8/4 にふい橙 断 75R6/6 橙	密	やや軟	口: 12/12 全体 70%	口縁部ヨコナデ 外面ハケ肩部ヨコハケか 内面ケズリ底部研痕	
1738	259		土師器	甕	布留形 中型	口縁 ~ 体部	648 井戸	下層	D-2	辻 3	15.3	22.0	(17.1)	0.6	内 75R7/4 にふい橙 外 10R7/4 にふい黄橙 断 25R8/2 灰白	密	硬	口: 1/12	口縁部ヨコナデ 外面ナメ・ハケ 内面ケズリ肩部研痕	
1739	259	51	土師器	甕	(布留影響) 小型	完形	648 井戸	下層	D-2	辻 3	13.0	19.2	20.1	0.5	内 10R7/3 にふい黄橙 外 10R8/4 橙 ・ 10R8/2 黒 断 10R8/3 浅黄橙	やや密	やや軟	口: 7/12 体: 100%	口縁部ヨコナデ内面ハケ 外面タテハケ 内面上半ナテ下半ケズリ 底部研痕 口縁部付つき	
1740	260		須恵器	甕		体部	688 溝		D-2	MT15 ~	9.5		(5.8)	0.5	内 5P5/1 紫灰 外 5P8/1 暗青灰 断 5R4/1 暗紫灰	密	硬	底: (ほぼ 完形) 体: 2/12	内外面無文 整形粗雑	
1741	260		須恵器	杯身		全形	667 土坑	(ポイントあり)	D-2	TK47 ~ MT15	10.8		4.8	0.5	内 5B5/1 青灰 外 5B4/1 暗青灰 断 5G7/1 明オリ〜灰	やや粗	硬	口: 3/12 全体 40%	底部回転ヘラケズリ右回り	
1742	260		須恵器	甕		口縁	680 土坑	(689・ 690・691 上面)	D-2	TK208 ~ 23	18.5		(4.6)	0.7	内 75R2/1 黒 外 N7/0 灰白 断 5Y6/1 灰	密	硬	口: 1/12	回転ナデ 上面自然粗雑着にて付着	
1743	260		土師器	甕	(布留系)	口縁 ~ 肩部	680 土坑	(689・ 690・691 上面)	D-2	辻 4~	15.6		(5.3)	0.5	内 25YR6/8 橙 外 75R6/6 橙 断 5YR6/8 橙	密	軟	口: 2/12 頸: 2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ	
1744	260		須恵器	高杯		杯底部 ~ 脚部	685P	(ポイントあり)	D-2	TK47		8.2	(6.1)	0.4	内外 N5/0 灰 断 5P6/1 紫灰	やや密	硬	脚: 10/12 脚部 95%	方形スカシ 3 方向	

第5節 (古墳) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1745	260		土師器	甕	(布留系か)	口縁～体部	685P	(ポイントあり)	D-2	辻3～4		(24.0)		(15.0)	0.5	内断10YR8/3 浅黄橙 外5Y7/6 橙	密	硬	口:1/12 以下	外面タテハク内面オサエ
1746	260		須恵器	甕		体部	727P		D-2	TK23・47～		(42.0)		(18.3)	0.6	内断N5/0 灰 外N6/0 灰	密	硬	体:2/12	外面平行タタキのち回転カキメ 内面同心円あて具痕
1747	261		須恵器	杯蓋		口縁～天井部	1785 土坑		P2	TK23～47	10.6			(3.5)	0.4	内N8/0 灰白 外5Y5/1 灰 新N8/0 灰	密	硬	口:1/12	天井部回転カキメ 上面黄灰
1748	261		須恵器	有蓋高杯		杯部	1785 土坑		P2	TK23～47	9.7	11.6		(4.6)	0.6	内5PB6/1 青灰 外5PB3/1 青灰 ～5P6/1 紫灰 断5RP4/1 暗紫灰	密	硬	口:11/12 杯部90%	底部回転ヘラケズリ左回り 方形スカシ3方向
1749	261		土師器	鉢か		口縁～体部	1785 土坑		P2	辻4～	18.0			(8.6)	0.5	内7.5YR7/6 橙 外5YR7/8 橙 断10YR8/3 浅黄橙	やや密	軟	口:1/12 頸:2/12	内外面マメツ
1750	261		土師器	直口壺	中型	口縁	972 溝	(13c代)	C-5	(中期)	17.2			(7.7)	0.6	内外7.5YR6/8 橙 断7.5YR6/6 橙	やや密	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 類例少ない器形
1751	261		須恵器	杯身		全形	(第6層)	ポイントあり	C-2	TK10	12.4	14.6		4.6	0.5	内外断N6/0 灰	やや密	やや硬	口:2/12 受:4/12	底部回転ヘラケズリ左回り 胎土チャート混 → 在地生産か
1752	261		須恵器	甕	大甕	口縁	(耕作溝群)(新)	(中世後半以降)	C-2	～TK73				(6.8)	0.8	内5B6/1 青灰 外5PB3/1 暗青灰 断5R5/1 赤灰	密	硬	破片	回転ナデ 外面平行タタキ残る
1753	261		土師器	壺	東日本系 広口壺	口縁	209	(近世)	C-2	前期か	23.0			(6.9)	1.0	内断10YR8/6 黄橙 外2.5Y7/6 明黄褐	粗	やや軟	頸:2/12	白色粘泥(バミスカ) 非在地胎土・搬入品 → 東日本・駿河大塚式か
1754	261		軟質土器	平底鉢		口縁+底部	(第6層)		C-2	辻3～4	16.4			(12.0)	0.6	内10YR8/4 浅黄橙 外2.5YR6/6 橙 断10YR2/1 黒	やや粗	軟	頸:3/12 底:4/12	内外面マメツ 外面ハク内面ナデか 内面一部に弱く附着 外面一部赤変
1755	261		土師器	甕	受口状 系譜不明	口縁～肩部	(第6層)		D-2	庄内～ 布留	16.0			(4.7)	0.7	内2.5B2/2 灰白 外10YR7/1 灰白 断5YR6/4 にふい橙	やや密	やや軟	口:1/12 以下 頸:2/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土か、系譜不明
1756	261		土師器	壺	讃岐系 近畿型 生駒西麓産 大型複合 口縁壺	口縁	(第6層)		D-2	庄内新～ 布留古				(7.1)	1.1	内外7.5YR6/6 明褐 断10YR3/3 にふい黄褐	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 二次口縁接合痕あり 角閃石あり、生駒西麓産
1757	261		須恵器	杯身		受部～底部	(第6層除 去面精査)		D-2	TK73～216		12.7		(4.8)	0.6	内N7/0 灰白 外10YR1/1 灰 断7.5Y7/1 灰白	密	やや硬	受:3/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1758	261		須恵器	壺		口縁	(第5層)		D-2	TK47～TK10	14.3	(15.5)		(4.8)	0.5	内5PB3/1 暗青灰 外5B3/1 暗青灰 断5RP5/1 紫灰	やや密	硬	口:2/12 頸:3/12	回転カキメ
1759	261		須恵器	甕		口縁	640 水路	(中世)	P2	TK73～216		(23.6)		(4.8)	0.5	内5PB4/1 暗青灰 外7.5R5/1 赤灰 断7.5R4/2 灰赤	密	硬	頸:2/12	回転ナデ
1760	262		土師器	高杯	椀形か	口縁	625 水路	(下層)	D-1	辻3	13.4			(5.1)	0.6	内外7.5YR7/6 橙 断10YR8/4 浅黄橙	密精良	やや硬	口:1/12	口縁部ヨコナデ 非在地胎土 ※(1761と同一胎土か)
1761	262		土師器	高杯		脚部	625 水路	(下層)	D-1	辻3				(6.2)	0.6	内外7.5YR7/6 橙 断10YR8/4 浅黄橙	密精良	やや硬	脚:5/12	外面タテ面取り内面シゴリ痕 凸面接合 非在地胎土か ※(1760と同一胎土か)
1762	262	50	須恵器	杯蓋		口縁～天井部	625 水路	(下層)	D-1	TK208	12.8			(3.9)	0.5	内5PB6/1 青灰 外断5R4/1 暗赤灰	密	硬	口:4/12	天井部回転ヘラケズリ左回り
1763	262		須恵器	杯身		体部～底部	625 水路	(下層)	D-1	TK208		14.0		(3.7)	0.6	内外N4/0 灰 断5RP5/1 紫灰	密	硬	大:1/12	底部回転ヘラケズリ左回り
1764	262		須恵器	壺		口縁	625 水路	(上層)	D-1	TK208	18.8			(3.2)	0.9	内外N5/0 灰 断5Y5/1 灰	やや密	やや硬	口:1/12	回転ナデ
1765	262		須恵器	甕	大甕か	口縁～肩部	625 水路	(下層)	D-1	TK208	18.6			(9.1)	0.7	内外N5/0 灰 断2.5YR6/4 にふい橙	密	やや軟	口:1/12	回転ナデ 外面タタキのち回転カキメ
1766	262		土師器	甕	布留形	口縁	625 水路	(下層)	D-1	辻3	16.7			(4.1)	0.6	内10YR7/3 にふい黄橙 外10YR7/4 にふい黄橙 断10YR8/4 浅黄橙	密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコナデ 外面素付着
1767	265		土師器	高杯	椀形	口縁	804P	炉跡	E-2	辻3	13.6			(3.2)	0.4	内7.5YR2/1 黒 外5YR4/3 にふい赤褐 断5YR8/8 明赤褐	密	やや軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ
1768	265		土師器	高杯	B系統 I群系	接合部	804P	炉跡	E-2	辻3	(2.2)			(2.5)	0.5	内10YR7/3 にふい黄橙 外7.5YR6/4 にふい橙 断5YR6/6 明赤褐	やや密	硬	接:12/12	凸面接合 1767と同一か
1769	265		土師器	甕	布留形	口縁	804P	炉跡	E-2	辻3	15.6			(3.2)	0.5	内10YR8/4 浅黄橙 外10YR7/3 にふい黄橙 断N4/0 灰	やや密	やや軟	口:7/12	体部破片あり 口縁部ヨコナデ 外面ハク、内面ケズリ
1770	265		土師器	高杯	(大型有段形か)	杯部	800	炉跡	E-2	辻3	(10.0)	(21.0)		(4.1)	0.6	内外断5YR6/8 橙	密	やや軟	後:2/12	内外面マメツ 非在地胎土か(精良)
1771	265		土師器	高杯	大型有段形	口縁	807 焼土坑	炉跡	E-2	辻3	23.8			(6.5)	0.6	内外5YR5/4 にふい赤褐 断5YR4/8 赤褐	密	硬	口:1/12 以下 後:2/12	口縁部ヨコナデ 外面内面ミガキか
1772	265		土師器	高杯		脚部	807 焼土坑	炉跡	E-2	辻3	(9.0)			(2.2)	0.4	内7.5YR5/4 にふい黄橙 外10YR7/4 にふい黄橙 断7.5YR7/6 橙	やや密	やや軟	脚:2/12	裾部ナデ・オサエ整形 非在地胎土か
1773	265		製塩土器		小型椀形	口縁	807 焼土坑 下部	炉跡	E-2	中期 中葉 ～後期	(4.4)			(3.1)	0.3	内断2.5B2/2 灰白 外2.5Y4/1 黄灰	密	やや軟	口:1/12	タタキあり(1.4g) +ナデオサエ整形、計5.5g
1774	265	52	土師器	杯		完形	794P	掘立12	E-2	辻3	11.4			4.6	0.4	内2.5B2/2 灰白 外7.5YR5/3 にふい橙 断5YR6/6 橙	やや密	やや軟	口:8/12 全体80%	内外面マメツ
1775	265		土師器	杯		全形	(808P) 周辺肩部	掘立44	E-2	辻3	11.2	12.5	3.2	4.9	0.5	内外5YR5/6 明赤褐 断7.5YR6/6 橙	密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 在地胎土か(精良)
1776	265		土師器	鉢か	片口鉢 or 鍋	杯部	(機械掘削)	掘立12 周辺	E-2	辻3か	14.8			(5.5)	0.5	内2.5B2/2 灰白 外5YR7/2 灰白 ・10YR4/1 褐灰 断7.5YR6/6 橙	やや密	やや軟	口:2/12	片口、外面一部赤変 用途不明
1777	267		土師器	壺	精製 B系統 中型 直口壺	口縁	堅穴53	上面	P14	中期 前葉か	10.4			(5.8)	0.5	内7.5YR7/6 橙 外断7.5YR7/4 にふい橙	密	やや軟	口:1/12	口縁部ヨコミガキ 非在地胎土か(精良) → 時期不明
1778	267		土師器	高杯		口縁	堅穴53	床面 ポイント	P14	辻3	14.5			(3.3)	0.5	内外10YR7/4 にふい黄橙 断10YR8/3 浅黄橙	密	やや硬	口:2/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 非在地胎土か(精良)
1779	267		土師器	高杯	C系統 II群系 椀形	杯部	堅穴53	床面 ポイント	P14	辻3	14.8			(5.1)	0.4	内5YR7/6 橙 外断7.5YR8/8 黄橙	密	やや軟	杯部50% 口:1/12 以下	内外面マメツ 口蓋穴痕・棒状痕 非在地胎土か(精良)

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
1780	267		土師器	高杯		脚部	堅穴 53	床面 ポイント	P14	辻 3	2.1		7.7	(6.6)	0.5	内 5R7/6 橙 外 5R7/6 橙 断 5R6/6 橙		やや軟	脚: 3/12 接: 12/12	脚部外面タテ面取り 内ケズリ 凸面接合 非在地胎土か(精良)	
1781	267		土師器	高杯	C系統 II群系 大型か	脚部	堅穴 53	床面 ポイント	P14	辻 3か	3.9			(6.6)	0.6	内外 10R6/3にふい黄橙 断 7.5R6/6 橙	密	やや軟	接: 12/12	内外面マメツ 凸面接合 非在地胎土か(精良)	
1782	267		土師器	甕	布留形	口縁 + 肩部	堅穴 53	床面 ポイント	P14	辻 3	14.2	17.6		(7.3)	0.5	内 2.5R8/2 灰白 外 2.5R7/2 灰白 断 N30 暗灰	やや密	やや軟	口: 2/12	内外面マメツ 凸面接合 非在地胎土か(精良)	
1783	267		須恵器	壺		口縁	堅穴 53		P14	TK216 ~ 208				(2.4)	0.6	内 10.3/1 オリーブ黒 外 10.2/2 黒 断 10.6/1 灰	密	硬	破片	回転ナデ 上面焼灰	
1784	267		土師器	高杯	C系統 II群系 椀形	杯部	2036 土坑	堅穴 53	P14	辻 3	12.8			(5.2)	0.4	内 7.5R4/2 灰褐 外 5R6/6 橙 断 7.5/5.1 灰	密	やや軟	接: 12/12 口: 2/12	内外面マメツ、外面煤付着 凸面接合・棒状痕 在地胎土か(精良)	
1785	267		土師器	高杯	C系統 II群系	杯底部	2036 土坑	堅穴 53	P14	辻 3				(2.0)	0.6	内 5R6/6 橙 外 7.5R5/4にふい黄 断 7.5/4.1 灰	密	やや軟	接: 12/12	内外面マメツ 凸面接合 非在地胎土か(精良)	
1786	267		土師器	高杯	C系統 II群系	脚部	2036 土坑	堅穴 53	P14	辻 3	2.0		9.6	(7.8)	0.5	内 5R6/6 橙 外断 10R7/4にふい黄橙	密	やや軟	接: 12/12 脚: 3/12	脚部外面タテ面取り 内ケズリ	
1787	267		土師器	甕	外反形	口縁 ~ 肩部	2036 土坑	堅穴 53	P14	辻 3	13.4	16.8		(8.1)	0.6	内外 5R6/6 橙 断 10R7/2にふい黄橙	やや密	やや軟	口: 3/12	口縁部内面ハケのちヨコナデ 外面タテ面ハケハケ	
1788	267		須恵器	壺		体部 ~ 底部	堅穴 53	上面 + 2035 土坑	P14	TK216 ~ 208		20.6		(12.5)	0.6	内 N6.0 灰 外 N7.0 灰白 断 5R6/1 赤灰	密	硬	大: 3/12	体部中央突 下半平行タタキ	
1789	267	52	須恵器	壺	中型	全形	2035 土坑	堅穴 53	P14	TK216 ~ 208	19.4	31.2			28.7	0.5	内外 N6.0 灰 断 5R6/1 赤灰	密	硬	口: 1/12 大: 6/12 体: 70%	口縁部外面波状文 外面平行タタキのち回転ナデ 内面凹心凹あて具痕 (凹凸浅い)
1790	268		土師器	小型 丸底壺	C系統 II群系	口縁 ~ 体部	790 井戸		E-2	辻 3	8.6	8.2		(5.1)	0.3	内 7.5R5/4にふい黄 外 10R8/3 浅黄橙 断 10R7/1 灰白	密	軟	口: 2/12	外面ハケ 内面下半ケズリ	
1791	268	52	土師器	甕	布留形	口縁 ~ 体部 + 底部	790 井戸	下層	E-2	辻 2~3	13.8	19.8			10.3 + 8.4	0.4	内外 7.5R8/6 浅黄橙 ・ 7.5R2.1 黒 断 7.5R6/6 浅黄橙	密	やや軟	口: 11+/12 底: 12/12	口縁部ヨコナデ 外面ナメヨコハケ ※ 米粒状瓦痕 (x 3) 内面ケズリ底部研削痕
1792	268		土師器	甕	布留形	底部	790 井戸	下層	E-2	辻 2~3				(6.2)	0.3	内 N2.0 黒 ・ 10R8/3 浅黄橙 外 N2.0 黒 ・ 10R6/2 灰黄褐 断 10R8/2 灰白	密	やや軟	底: 12/12	外面ナメヨコハケ 内面ケズリ底部研削痕	
1793	270		土師器	壺 (直口壺か)		肩部	1985 井戸		P14	庄内 中~新		18.0		(5.4)	0.5	内外断 10R8/2 灰白	やや密	軟	頸: 2/12	内外面マメツ	
1794	270		土師器	壺	A系統 (平底)	底部	1985 井戸		P14	庄内 中~新			5.8	(4.2)	0.6	内 2.5/7.2 灰黄 外 2.5/6.3にふい黄 断 7.5R6/6 明褐	やや粗	硬	底: 6/12	外面タテミガキ、内面ハケ	
1795	270		土師器	甕 (布留系か)		口縁 ~ 肩部	1985 井戸		P14	庄内 中~新	17.2	19.6		(6.1)	0.5	内外 10R7/3にふい黄橙 断 10R6/1 褐灰	密	やや軟	口: 8/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ、内面ケズリ 肩部ハケ 非在地胎土 ※ 搬入品の可能性あり	
1796	270		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁	1985 井戸		P14	庄内 中~新	19.8	20.8		(5.0)	0.4	内 2.5R8/2 灰白 外断 7.5R7/4にふい黄	密	軟	口: 1/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式タタキ 内面ハケ (1805: 2000 土坑) と酷似	
1797	270		土師器	甕	V様式系 (平底)	底部	1985 井戸		P14	庄内 中~新		3.6	(3.4)	0.4	内 2.5R8/2 灰白 外 10R8/3 浅黄橙 断 10R6/1 褐灰	密	硬	底: 12/12	外面V様式タタキ		
1798	270		土師器	鉢 (系統不明)		口縁	1985 井戸		P14	庄内 中~新	29.2			(6.1)	0.4	内 7.5R6/4にふい黄 外 7.5R5/3にふい黄 断 5/5.1 灰	密	軟	口: 1/12	内外面マメツ 非在地胎土か、系統不明	
1799	270		土師器	有孔鉢	A系統 (平底)	底部	(1981 土坑)	(粘土採掘土坑)	P14	庄内		4.4	(3.8)	0.6	内外断 2.5/7.2 灰黄	やや密	やや軟	底: 12/12	壺タイプ 在地胎土 (精良)		
1800	271	C8 52	土師器	高杯	(A系統) 小型高杯	脚部	2000 土坑	(1976 土器溜り)	P14	庄内 古~中	10.0	9.8		(6.0)	0.6	内 10R8/2 灰白 外 7.5R7/4にふい黄 断 7.5R6/6 橙	密	やや軟	脚: 11+/12	内外面マメツ 外面ヨコミガキか 円孔スカシ 5 方向	
1801	271	C8 52	土師器	鉢	小型鉢	ほぼ完	2000 土坑	(1976 土器溜り)	P14	庄内 古~中	8.9	2.6	5.4	(0.3)	0.3	内 7.5R8/3 浅黄橙 外 10R8/2 灰白 断 10R7/4にふい黄橙	やや密	やや軟	口: 4/12 底: 12/12	外面V様式系タタキのちナデ 内面板ナデ	
1802	271	52	製塩土器	脚台式 備置瀬戸か		脚部	2000 土坑	(1976 土器溜り)	P14	庄内 古~中	(8+)	4.2	(4.0)	0.7	0.7	内 10R2.1 黒 外 10R5/2 灰黄褐 断 10R6/1 褐灰	密	やや軟	底: 8/12	外面タタキ 内面オサエ	
1803	271	52	土師器	壺	(A系統) 大型直口 壺	口縁	2000 土坑	(1976 土器溜り)	P14	庄内 古~中		17.7	(17.7)	0.6	0.6	内外 7.5R8/4 浅黄橙 断 2.5/7.1 灰白	密	やや軟	頸: 12/12 体: 4/12	外面ヨコミガキ (大) 内面ナデ B系統影響の A系統 在地胎土 (V様式が粗い)	
1804	271		土師器	甕 (くの字?)		口縁	2000 土坑	(1976 土器溜り)	P14	庄内古 ~中	14.8			(3.1)	0.5	内断 10R8/3 浅黄橙 外 10R4/3にふい黄褐	やや密	やや軟	口: 1/12	口縁部ヨコナデ	
1805	271		土師器	甕	V様式系 くの字甕	口縁 ~ 体部 + 体部 下半	2000 土坑	(1976 土器溜り)	P14	庄内 古~中	13.4	21.7		(21.3)	0.5	内外 2.5R8/2 灰白 ・ 2.5/4.1 黄灰 断 2.5/7.3 浅黄	密	やや軟	口: 2/12	口縁部ヨコナデ 外面V様式タタキ 内面ハケ 分割成形	
1806	271		土師器	有孔鉢	A系統	体部 ~ 底部	2011 土坑	ポイント あり	P14	~ 庄内中		2.8	(5.6)	0.6	0.6	内外 10R7/2にふい黄橙 断 10R4/1 褐灰	やや密	硬	底: 6/12	外面V様式系タタキ 内面ハケ 分形研削痕跡 在地胎土 (V様式の胎土)	
1807	271		土師器	壺	A系統 (平底)	底部	2011 土坑	ポイント あり	P14	庄内		4.1	(3.9)	0.5	0.5	内外 2.5/7.1 灰白 断 N30 暗灰 ・ 10R7/6 明黄褐	やや密	やや軟	底: 12/12	外面タテミガキ 内面ケズリ	
1808	272		土師器	高杯	(A系統) 有段高杯	杯部	(第 4 層)		E-2	弥生後 期後半 ~ 庄内古	17.4	9.2		(5.1)	0.5	内 5R7/6 橙 外 10R8/3 浅黄橙 断 7.5R6/6 橙	やや密	やや硬	口: 1/12 接: 2/12	杯部内面ヨコ・ナメミガキ	
1809	272		土師器	高杯	(B系統) 有段高杯	杯部	(第 4 層)		E-2	庄内	(10.6)			(3.7)	0.4	内 2.5R8/2 灰白 外断 10R7/4にふい黄橙	やや密	硬	屈: 2/12	内外面ヨコミガキ (大筋) 在地胎土か (精良) 精製 B 系統の在地製物品 or 影響品	
1810	272		土師器	小型 器台	A系統 小型器台	接合部 ~ 脚部	(第 4 層)		E-2	庄内 古~中	(3.2)			(3.9)	0.6	内外 10R8/3 浅黄橙 断 N30 暗灰	やや密	やや硬	接: 12/12	ナテ整形 貫通孔、円孔スカシ 3 方向	
1811	272		土師器	甕	東海系 S字甕 C類	口縁	(第 5 層)	ポイント あり	E-2	布留中 ~ 新か				(2.4)	0.5	内 10R7/2にふい黄橙 外 10R5/2 灰黄褐 断 N40 灰	やや密	やや軟	口: 1/12 以下	口縁部ヨコナデ 非在地胎土、搬入品	
1812	272		土師器	高杯	(B系統 I群系) 椀形	口縁	(第 6 層)	調査東端 (766 溝東 ・ 772 溝 周辺)	E-2	辻 3	12.9			(4.6)	0.4	内 10R8/4 浅黄橙 外 10R7/4にふい黄橙 断 7.5R7/6 橙	やや密	やや軟	口: 1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面ハケか、凸面接合	



第6・7・8節(弥生・縄文・立会) 土器類

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1813	272		土師器	高杯	(B系統II群系)	杯部 ~脚部	(第6層)	調査東端 (766溝東・772溝 周辺)	E-2	辻3	(3.2)				0.5	内5R7/6 橙 外10R8/3 浅黄橙 断7.5R6/6 橙	密	やや軟	接:12/12	内外面マメツ 凸面接合 非在地胎土か(精良)
1814	272		須恵器	壺	台付壺か	脚部	(第4層)		E-2	TK216	(5.4)				0.6	内外N7/0 灰白 断10R5/2 灰赤	密	硬	接:5/12	方形スカシ2方向
1815	272		土師器	高杯	C系統 有段高杯	杯部	(第5層)		P14	布留中 ~新か	(7.8)				0.7	内5R8/4 淡橙 外5R6/6 橙 断7.5Y3/1 オリーブ黒	やや密	やや軟	接:2/12	杯部内外ハケのちヨコナデ 非在地胎土か(精良)
1816	272		土師器	高杯 or 小型 器台	A系統	脚部	(第5層)		P14	~ 庄内中	(9.6)				0.5	内10R7/2 にふい黄橙 外7.5R7/4 にふい黄橙 断7.5R6/6 浅黄橙	やや密	やや軟	脚幅:4/12	内外面マメツ
1817	272		土師器	小型 丸底壺	C系統 II群系	口縁 ~体部	(1957溝)	G近世 耕作溝	P14	布留 中~新	9.0				0.4	内10R7/3 にふい黄橙 外10R8/3 浅黄橙 断2.5Y7/2 灰黄	やや密	やや軟	頸:4/12	内面頸部ケズリ下半ナデ
1818	272		土師器	壺	垂下口縁 加飾二重 口縁壺	口縁	(第5・6層)		P14	庄内	16.6				0.7	内外7.5R5/4 にふい黄橙 断7.5R5/6 明褐	やや密	やや軟	口:3/12	外面波状文 非在地胎土か(精良)
1819	272		土師器	壺	加飾壺 系譜不明	頸部	(第6層)	(堅穴 54上面 ポイント あり)	P14	庄内	(8.0)				1.0	内10R7/4 にふい黄橙 外10R8/3 浅黄橙 断10R8/2 灰白	やや密	やや軟	頸:2/12	頸部突帯刻み目文(クロス 非在地胎土(角閃石あり) ※ 搬入品)
1820	272		土師器	壺	直口壺 生駒西麓産	口縁	(1955溝)	(古代 水路)	P14	布留	(12.0)				0.8	内外断 10R4/2 灰黄褐	やや密	やや硬	頸:1/12	内外面マメツ 角閃石あり、生駒西麓産
1821	272		土師器	甕	河内型 庄内形 生駒西麓産	口縁	(第5層)		P14	庄内新 ~ 布留古					0.4	内外断7.5R4/2 灰褐	やや密	やや軟	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ 角閃石あり、生駒西麓産
1822	272		土師器	甕	庄内形甕 (非生駒)	口縁	(第5層)		P14	庄内新 ~ 布留古	13.7				0.4	内外10R8/2 灰白 断10R4/6 褐	やや密	やや軟	口:1/12 頸:1/12	口縁部ヨコナデ
1823	272		須恵器	高杯か		脚部	1957溝	G近世溝	P14	TK216 ~208					0.5	内5P8/1 青灰 外5P8/3 暗青灰 断5R5/1 紫灰	密	硬	脚:5/12	円孔スカシ3方向
1824	272		須恵器	(脚部)		脚部	1969溝	(中世溝)	P14	TK216 前後			9.2	(3.5)	0.6	内外N6/0 灰白 断7.5Y7/2 灰白	密	やや硬	脚:2/12	類似あまりない

第4章 第6・7・8節(弥生・縄文・関電立会:土器類)

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1825	275		弥生土器	甕		口縁 ~体部	358溝	方形 周溝墓1 (最下層)	B-2	II様式	19.0	19.3		(13.4)	0.3	内10R8/2 灰白 外10R7/3 にふい黄橙 断10R8/2 灰白	やや粗	やや軟	口:2/12	口縁部ハケのちヨコナデ 外面ハケ内面マメツ 外面接合 ※ 1230と同一個体
1826	275		弥生土器	甕		底部	358溝	方形 周溝墓1 (最下層)	B-2	II様式		(14.9)	5.6	(9.4)	0.4	内外 10R7/2 にふい黄橙 断10R8/2 灰白	やや粗	やや軟	底:12/12	外面ハケ内面マメツ 外面接合 ※ 1229と同一個体
1827	275		弥生土器	壺		広口壺	459溝	方形 周溝墓4	A-2	II様式	30.1			(4.4)	0.7	内外7.5R7/4 にふい黄橙 断7.5R5/6 明褐	やや粗	硬	口:1/12	口縁部内外ハケ・波状文
1828	275		弥生土器	壺		短頸壺	1333溝	方形 周溝墓5 (下層)	B-2	II様式	16.2		7.4	(6.8)	0.5	内2.5R8/2 灰白 外2.5R8/3 淡黄 断2.5Y7/2 灰黄	やや粗	軟	口:2/12 底:6/12	内外面マメツ 摂津白色胎土
1829	275		弥生土器	甕		底部	1333溝	方形 周溝墓5 (下層)	B-2	II様式		(12.7)	6.8	(10.9)	0.7	内7.5R7/4 にふい黄橙 外7.5R7/6 橙 断10R8/2 灰白	やや粗	硬	底:12/12	内外面マメツ
1830	277	53	弥生土器	壺		無頸壺	1290溝	方形 周溝墓7 (下層)	B-2	II様式	8.1	16.2	5.0	18.6	0.5	内2.5Y7/3 浅黄 外10R7/4 にふい黄橙 断2.5Y7/2 灰黄	やや粗	やや硬	口:9/12 底:12/12	外面波状文下半タテミガキ 内面マメツ、摂津白色胎土
1831	277	53	弥生土器	壺		広口壺	1290溝	方形 周溝墓7 (最下層)	B-2	II様式	10.5	18.2	6.3	24.2	0.6	内2.5Y7/3 浅黄 外10R8/4 にふい黄橙 断2.5Y7/2 灰黄	やや粗	硬	口:3/12 底:12/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 外面直線文内面ナデオサエ
1832	277		弥生土器	壺か		体部	1290溝	方形 周溝墓7 (下層)	B-2	V様式 か		18.0		(8.4)	0.5	内2.5Y7/3 浅黄 外5Y6/1 灰 断2.5Y7/2 灰黄	やや密	やや硬	頸:2/12	外面タキ内面オサエ 混入か
1833	277	53	弥生土器	壺		広口壺	1289溝	方形 周溝墓6 (最下層)	B-2	II様式	17.5	20.9		(27.4)	0.6	内10R6/3 にふい黄橙 外10R5/3 にふい黄橙 断2.5Y7/2 灰黄	やや粗	硬	口:7/12	外面タテハケ 下半タテミガキ 直線文・波状文の加飾 意図的な打欠きか
1834	277		弥生土器	壺		広口壺	1289溝	方形 周溝墓6 (中層)	B-2	II様式	11.2	12.0	7.0	(32.0)	0.5	内外10R8/2 灰白 断2.5Y7/3 浅黄	やや粗	やや軟	口:5/12 底:7/12	内外面マメツ 口縁部刻み目 直線文・波状文の加飾 摂津白色胎土
1835	277		弥生土器	鉢		小型鉢	1289溝	方形 周溝墓6 (最下層)	B-2	II様式	12.6	13.0	5.5	9.4	0.5	内10R8/2 灰白 外5R7/4 にふい黄橙 断10R7/3 にふい黄橙	密	硬	口:1/12 底:12/12	内外面マメツ
1836	277		弥生土器	壺		生駒西麓産	1289溝	方形 周溝墓6 (中層)	B-2	II様式			7.0	3.4	0.7	内10R5/3 にふい黄橙 外7.5R4/4 にふい赤褐 断10R4/3 にふい黄橙	やや粗	硬	底:5/12	内外面マメツ
1837	277	53	弥生土器	壺		口縁	1289 ・1290溝 上層	方形 周溝墓 6・7周辺	B-2	II様式	39.8	42.0		(3.8)	1.2	内10R7/4 にふい黄橙 外7.5R7/3 にふい黄橙 断10R8/2 灰白	やや粗	硬	口:1.5/12	口縁部ハケ 口縁部オサエ刻み目状裝飾
1838	278		弥生土器	壺か		口縁	1008土坑		B-2	II様式	11.6			(2.0)	0.8	内10R5/4 にふい黄橙 外7.5R4/3 褐 断10R8/2 灰白	やや密	やや軟	口:2/12	内外面マメツ
1839	278		弥生土器	壺か		底部	1008土坑		B-2	II様式			5.2	(1.9)	0.7	内10R6/1 褐灰 外10R5/2 灰黄褐 断7.5R7/4 にふい黄橙	密	硬	底:3/12	ナテ調整
1840	278		弥生土器	壺		口縁	(974落込み)		B-2		17.8	18.6		(6.3)	0.8	内10R6/3 にふい黄橙 外10R7/2 にふい黄橙 断10R8/2 灰白	密	硬	口:1/12	口縁部内外面ミガキ 口縁部・頸部口縁文
1841	278		弥生土器	甕		底部	(第6層)		B-2	II様式			3.6	(4.3)	0.5	内10R6/2 灰黄褐 外10R5/2 灰黄褐 断10R4/1 褐灰	密	硬	底:8/12	内外面ナデ
1842	278		弥生土器	(底部)		底部	971 大型土坑	(上面 ~上層)	B-2	II様式			5.6	(2.6)	1.2	内N4/0 灰 外10R6/4 にふい黄橙 断7.5Y6/1 灰	やや粗	やや軟	底:2/12	周溝墓関連の遺物の混入か
1843	278		弥生土器	壺		生駒西麓産	口縁	(第6層)	B-2	II様式				(2.6)	0.7	内外 10R5/3 にふい黄橙 断10R6/3 にふい黄橙	やや密	硬	口:1/12 以下	口縁部ヨコナデ
1844	278		弥生土器	壺		生駒西麓産	口縁	827土坑	P4	IV様式				(1.9)	0.8	内10R3/1 黒褐 外断10R4/2 灰黄褐	やや粗	硬	口:1/12 以下	角閃石あり、生駒西麓産

遺物一覧表

No.	図No.	写真	遺物	器種	系統形式	(部位)	遺構名	層位・位置等	調査区	時期	口径	最大径	底径	器高	器厚	色調	胎土	焼成	残存率	備考	
1845	278		弥生土器	壺		底部	(第6層)		P4	Ⅱ様式		(23.2)	12.8	(7.4)	1.1	内25/82灰白 外10/R8/3浅黄橙 断25/82灰白	密	やや硬	底:2/12	内外面マメツ	
1846	281		弥生土器	壺	無頸壺	口縁 ~体部	1344溝	方形 周溝墓13	C6	Ⅱ様式	7.8	15.4		(15.9)	0.5	内N30暗灰 外N30暗灰 ・10/R7/2にふい黄橙 断N30暗灰	密	硬	口:2/12	外面タテハケ 内面オサエナデ	
1847	281		弥生土器	甕		底部	1344溝	方形 周溝墓13	C6	Ⅱ様式	(11.4)	4.1	(6.1)	0.4	内25/51黄灰 外10/R7/2にふい黄橙 断10/R7/3にふい黄橙	密	硬	底:2/12	内外面マメツ 外面タテハケ		
1848	281		弥生土器	壺		底部	1329溝	方形 周溝墓13	C6	Ⅱ様式	(25.3)	6.5	(12.9)	0.6	内10/R8/3浅黄橙 外10/R7/2にふい黄橙 断10/R8/2灰白	やや粗	やや硬	底:12/12	内外面マメツ 外面下半タテミガキ		
1849	281	53	弥生土器	甕		全形	1359溝 (下層)	方形 周溝墓14	C6	Ⅱ様式	16.6		4.7	21.9	0.5	内断 10/R7/4にふい黄橙 外10/R6/6明黄橙	やや粗	硬	口・底: 12/12	口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 内面ヨコハケ 外面斜め付着	
1850	281		弥生土器	甕か		口縁 +底部	1360溝	方形 周溝墓14	C6	Ⅱ様式	18.2		9.6	(9.0)	0.7	内10/R7/4にふい黄橙 外10/R7/3にふい黄橙 断25/7/4浅黄	やや粗	硬	口:0.8/12 底:6/12	内外面マメツ	
1851	281		弥生土器	壺	生駒西麓産	底部	(機械除去 面精査)			Ⅱ様式				8.3	(2.6)	0.6	内10/R6/6黄褐 外10/R3/1にふい黄褐 断10/R3/1黒褐	やや密	硬	底:12/12	内外面マメツ
1852	282	53	弥生土器	壺		全形	827土坑	方形 周溝墓9	C5	Ⅱ様式				(1.9)	0.8	内10/R3/1黒褐 外断10/R4/2灰黄褐	やや粗	硬	口:3/12 底:12/12	口縁部波状文端部刻み目文 内外面ハケ 外面下半ミガキ 直線文8条の加飾	
1853	283		弥生土器	壺	生駒西麓産	底部	(東側溝)		P14	弥生			6.4	(3.9)	0.6	内75/R5/4にふい褐 外75/R6/6明褐 断25/4/1黄灰	やや密	硬	底:2/12	内外面マメツ 角閃石あり、生駒西麓産	
1854	284	52	縄文土器	深鉢	生駒西麓産	口縁 ~体部	359溝	方形 周溝墓 ポイント あり	A2	晩期 滋賀里 III b	20.0	21.8		(8.2)	0.5	内25/4/1黄灰 外5/R4/4にふい赤褐 断25/3/1黒褐	やや粗	やや硬	口:1/12 体:2/12	口縁部刻み目 外面ケズリ	
1855	284		縄文土器	深鉢	生駒西麓産	体部	(第6層)		P5	晩期 長原式				(5.3)	0.5	内5/R6/6明赤褐 外5/R3/2暗赤褐 断5/R4/4にふい赤褐	やや密	硬	突:1/12	突帯文刻み目 補修痕あり	
1856	284	52	縄文土器	深鉢	生駒西麓産	口縁	100落込み	最下層	A-1	晩期 長原式	28.0			(3.5)	0.7	内10/R4/2灰黄褐 外10/R3/1黒褐 断25/4/2暗黄	やや粗	硬	口:1/12	口縁部突帯刻み目 角閃石あり、生駒西麓産	
1857	284	52	縄文土器	深鉢	生駒西麓産	(突帯)	971 大型土坑	(上面~ 上層)	B-2	晩期 長原式				(3.5)	(0.7)	0.5	内外10/R4/4褐 断10/R4/2にふい黄褐	やや粗	硬	細片	突帯・刻み目 角閃石あり、生駒西麓産
1858	284		縄文土器	深鉢	生駒西麓産	口縁	(耕作溝群)		B-2	晩期 長原式				(3.1)	0.5	内75/R5/6明褐 外断25/3/1黒褐	やや密	硬	破片	突帯文・刻み目あり	
1859	284		縄文土器	深鉢		口縁	450落込み		P5	晩期 長原式				(1.7)	0.6	内外10/R4/1褐灰 断25/3/1黒褐	やや粗	やや硬	破片	突帯文・刻み目あり 非在地粘土、搬入品	
1860	284	52	縄文土器	深鉢	(在地)	口縁 ~体部	(第6層)		C5	晩期 長原式	15.8			(4.0)	0.6	内10/R8/3浅黄橙 外10/R6/1褐灰 断10/R8/6黄橙	粗	やや硬	口:2/12	突帯文・刻み目あり 非在地粘土	
1861	284	52	縄文土器	深鉢	生駒西麓産	口縁	1329溝 (上面)	方形 周溝墓 12・13	C6	縄文				(2.1)	0.5	内75/R4/1褐灰 外断75/R4/4褐	やや粗	硬	細片	口縁部突帯 角閃石あり、生駒西麓産	
1862	284		縄文土器	深鉢	生駒西麓産	口縁	(第5層)		E-2	晩期 長原式				(2.0)	0.5	内断25/3/1黒褐 外10/R3/4暗褐	やや密	やや硬	破片	口縁部刻み目あり	
1863	284	52	縄文土器	深鉢	(在地)	口縁	(北側溝)		P14	晩期 長原式				(3.0)	0.5	内10/R8/4浅黄橙 外75/R6/4にふい橙 断10/R7/6明黄褐	粗	やや硬	細片	突帯文・刻み目あり 非在地粘土	
1864	285		土師器	皿		全形	包含層 (第5-6層)	南側	関電 ②	14c~	10.0		5.4	1.6	0.2	内75/R6/6浅黄橙 外断10/R8/4浅黄橙	密 精良	やや軟	口:2/12	内外面ナデ・オサエ整形	
1865	285		土師器	皿		完形	—	(北側)	関電 ②	13c代	7.0			1.2	0.3	内外75/R8/4浅黄橙	密 精良	硬	完形	口縁部ヨコナデ	
1866	285		須恵器	杯蓋		口縁	包含層 (第5-6層)	(北側)	関電 ②	MT15	14.5			(3.0)	0.3	内外N7/0灰白 断N30暗灰	密	硬	口:1/12	天井部回転ヘラケズリ	
1867	285		須恵器	杯身		口縁 ~底部	包含層 (第5-6層)	(北側)	関電 ②	MT15	12.2	14.4		(5.3)	0.6	内断25/7/1灰白 外25/6/1黄灰	やや密	やや硬	口:3/12	底部回転ヘラケズリ右回り	
1868	285		須恵器	杯身		全形	包含層 (第5-6層)	(北側)	関電 ②	MT15 ~TK10	11.8			4.8	0.5	内N6/0灰 外10/4/1灰 断10/7/1灰白	密	硬	口:3/12 体:5/12	底部回転ヘラケズリ右回り 受部溶着痕跡 底部ヘラ記号	
1869	285		土師器	甕	(布留系)	口縁	—	(北側)	関電 ②	辻4~	12.8			(4.1)	0.6	内外5/R6/8橙 断75/R7/6橙	密	やや硬	口:2/12	口縁部ヨコナデ 内面非ケズリ	
1870	285		土師器	甕	布留系	口縁	包含層 (第5-6層)	(北側)	関電 ②	辻4~	12.8			(4.8)	0.5	内10/R7/4にふい黄橙 外75/R6/6橙 断10/R6/3にふい黄橙	やや密	やや軟	口:3/12	口縁部ヨコナデ 体部内面オサエ	
1871	285		土師器	甕	外反 口縁形	口縁	包含層 (第5-6層)	(北側)	関電 ②	中期 後半 ~後期	18.8			(3.3)	0.5	内外断75/R7/8黄橙	密	やや軟	口:4/12	内外面マメツ 非在地粘土、搬入品か	
1872	285		軟質土器	甕		口縁	包含層 (第5-6層)	(北側)	関電 ②	中期 後半 ~後期	26.5			(6.8)	0.7	内外75/R7/6橙 断10/R8/6黄橙	やや密	やや硬	口:1/12	内外面マメツ 口縁部ヨコナデ 端部内側面(布留影響か)	

木製品一覧表

遺物 No.	図 No.	写真 No.	種類	遺構名	調査区	時期	口径・底径/長	最大径/幅	器高	器厚/厚	残存率	備考
W1	20		漆器椀	トレンチ(西側)	C-4		6.8			0.4	屈:5/12	内:赤漆 外:黒漆
W2	20	54	斎串	102 流路A層	A-3	古代	長 15.1	幅 2.0		厚 0.5	全体90%	
W3	55		漆器椀	102 流路A層	A-3		5.6		(2.3)	0.4	屈9/12	内:赤漆 外:黒漆
W4	72	54	柱根	1405p	C-6	古代	11.4	43.1		8.8	-	
W5	72	54	柱根	1300p	C-6	古代	15.2	32.8		9.6	-	
W6	72	54	柱根	1478p	C-6	古代	29.0	48.4		17.5	-	
W7	152		柱根	1085p	B-2	古墳前期	10.0	27.2		3.6	-	
W8	165		柱根	900p	P4	古墳初頭 ~前期	17.5	21.7		4.8	-	
W9	165	54	柱根	903p	P5	古墳初頭 ~前期	17.2	40.1		13.3	-	
W10	165	54	柱根	904p	P6	古墳初頭 ~前期	19.9	43.1		20.8	-	
W11	165	54	柱根	906p	P7	古墳初頭 ~前期	16.9	23.5		10.4	-	
W12	179		板状製品	866 埋土	P4	古墳前期	(3.6)	2.0		0.2	-	ヒノキ
W13	179		棒状?	866 埋土	P4	古墳前期	4.9	3.5		1.5	-	加工痕・平滑面あり
W14	207		柱根	1525p	C-8	古墳 中期末~	8.5	13.2		5.4	-	
W15	258	54	柱根	1780p	P2	古墳中期	12.7	26.1		7.9	-	底面加工痕あり
W16	258	54	柱根	1782 p	P2	古墳中期	12.9	40.1		10.6	-	底面加工痕あり

金属器一覧表

遺物 No.	図 No.	写真 No.	種類	遺構名	調査区	時期	長	幅	厚	重量 (g)	残存率	備考	
M1	60	54	鉄刀	7 溝	E-1	中世	19.0	5.6	2.7	(95.5)	完形	保存処理 No.1	
M2	63	54		1975 溝	P14	中世	5.4	10.8	2.5	(37.2)	ほぼ完	保存処理 No.4	
M3	69	34	羽口	957 溝	B-2	奈良	3.9	6.1	2.8	37.0	細片		
M4	69	34	羽口	957 溝	B-2	奈良	4.7	4.8	2.4	26.0	細片		
M5	69	34	羽口	957 溝	B-2	奈良	3.6	3.2	2.0	17.9	細片		
M6	69	34	羽口	957 溝	B-2	奈良	3.8	3.2	3.2	35.1	細片		
M7	69	34	羽口	957 溝	B-2	奈良	4.7	4.2	2.0	23.8	細片		
M8	69	34	羽口	957 溝	B-2	奈良	5.4	2.9	2.8	20.5	細片		
M9	69	34	鉄滓	957 溝	B-2	奈良	6.5	7.0	2.4	92.7	細片		
M10	69	34	鉄滓	957 溝	B-2	奈良	2.9	4.8	2.4	15.2	-		
M11	69		鉄釘	957 溝	B-2	奈良か?	4.3	1.8	0.7	13.8	-		
M12	101	54	(短冊形)	1298 落込み	P6	古墳中期	13.8	5.5	1.6	(251.3)	ほぼ完形	保存処理 No.3	
M13	137		棒状鉄器 (小)	450 土坑	P5	古墳中期か	4.1	1.6	1.0	(19.0)	小片	先端部残存	
M14	103		羽口	(東側溝)	P6	古墳か	2.9	3.2	1.8	17.1	細片		
M15	108		板状鉄器 (小)	100 落込み	土器溜り2 (中層)	A-1	古墳前期	5.7	3.1	0.6	(55.3)	小片	
M16	103		棒状鉄器 (小)	(南高台)	P6	古墳か	5.1	0.4~1	0.3	(13.4)	小片		
M17	147		鉄滓	(第6層)	B-1	古墳か	3.7	5.3	2.4	49.6	-		
M18	169	54	板状鉄器? (手斧か)	868 土坑	P4	古墳中期	7.4	4.8	0.4	(105.2)	ほぼ完形	保存処理 No.2	
M19	198		鉄滓	(第5層)	P4	古墳~古代	3.6	3.4	1.7	21.4	-		
M20	215		板状鉄器	竪穴32	C-5	古墳前期か	4.1	3.8	0.4	(40.3)	不明	折曲げ	
M21	223		板状鉄器 (小)	竪穴46	P3	古墳前期	3.4	1.1	0.2	(7.2)	小片		
M22	230		棒状鉄器 (大型)	掘立51	1872 土坑	P3	古墳中期	12.3	1.7	0.8~1.2	(86.5)	50%以上	大型・保存状態悪い
M23	230		羽口	1803P	P3	古墳中期	3.7	2.5	1.5	6.2	細片		
M24	236		羽口	(第3・4層)	(機械掘削除去面)	C-8	古墳~古代か	5.2	4.7	2.3	(48.0)	細片	
M25	236		鉄滓	(第5層)	P3	古墳中期か	3.8	4.5	2.5	47.2	-		
M26	236		羽口	(第5層)	P3	古墳中期か	1.9	1.8	1.0	2.5	細片		
M27	250		板状鉄製品 (鉄鋸か)	竪穴20	D-2	古墳中期	12.0	4.3	0.8	(113.9)	50%程度か		
M28	261		鉄滓	(第6層)	D-2	古墳中期か	5.0	3.0	1.9	31.7	-		
M29	272		鉄滓	(第5層)	P14	古墳中期か	2.3	2.7	1.3	10.7	-		

遺物一覧表

石製品一覧表

遺物 No.	図 No.	写真 No.	種類	石材	遺構名	調査区	時期	長	幅	厚	重量 (g)	残存率	備考	
S1	23	54	砥石	灰白色極細粒砂岩	102 流路 D 層	A-3	～古代	7.6	6.1	2.4	199.3g	破片		
S2	56		碁石か	粘板岩か	1522 土坑	C-8	中世か	2.0	1.8	0.8	4.4g	完形	自然石の可能性あり	
S3	69			灰白色中粒～細粒砂岩	957 溝	B-2	古代	9.7	8.0	8.2	1.21kg	破片		
S4	87	C11	石杵	磨石	細粒凝灰岩か	竪穴 58 (108 溝)	A-1	古墳 初頭～前期	7.6	7.5	4.6	423.2g	ほぼ完	名東遺跡に類似 ラミナあり
S5	87	C11	石臼	磨台	細粒花崗岩	竪穴 58 (108 溝)	A-1	古墳 初頭～前期	19.1	14.4	3.0	1.35kg	破片 x 2	2 破片に分割、人為的か 短冊状長石目立つ
S6	92	C11	石杵	磨石	花崗閃緑岩	掘立 46 (100 落込み 土器溜まり 1)	A-2	古墳 中期初頭	9.8	6.0	5.1	568.9g	ほぼ完	石英脈?あり、角閃石含む
S7	93	C11	石臼	磨台	閃緑岩	掘立 46 (100 落込み 土器溜まり 1)	A-2	古墳 中期初頭	37.1	21.2	10.0	8.9kg	破片	両面使用 短冊状長石目立つ
S8	96	54	石杵	敲石	アブライト	1482 井戸	P6	古墳 中期初頭	9.0	8.1	5.2	487.4g	ほぼ完	側面使用痕跡 ザクロ石 (φ 0.3mm) 含む
S9	103	54	玉類	管玉	滑石	第 6 層 除去面精査 (竪穴 58 周辺)	A-1	古墳 前～中期	2.2	0.7	0.6	1.5g	ほぼ完	S29 と同一石材同じ
S10	103		敲台	兼 磨台	灰白色細粒砂岩	(ポイントあり) 116 井戸周辺	A-2	不明	12.3	11.9	6.8	1.47g	ほぼ完	縄文の可能性もあり 亜円礫、ラミナあり
S11	103		敲台か	(被熱)	赤褐色～ 灰白色細粒砂岩	(東側溝)	P6	古墳中期か	9.8	2.8	3.0	361.7g	破片	上面被熱赤変 上面～側面一部被熱黒化 鍛冶関連遺物か
S12	107		砥石	仕上砥 (提砥か)	淡黄灰白色細粒砂岩	(101 落込み)	A-1	古墳 前期以前	5.9	2.4	1.6	28.9g	破片	
S13	107		砥石	粗砥	灰白色極細粒砂岩	(100 落込み)	A-1	古墳 前期以前	9.2	5.7	4.7	277.7g	破片	
S14	110	C11	石臼	磨台	花崗岩質岩	100 落込み 中下層	A-1	古墳初頭	13.7	5.8	3.5	232.2g	破片	片理?、粒状のかり長石、 長石線のある泥質ホルンフェルス礫 含む (φ 7 × 3mm)
S15	110		石杵	磨石	泥岩	(100 落込み)	A-2	古墳	5.3	5.1	5.1	237.7g	完形か	立方体、磨面 2 面
S16	129	C11 54	玉類	管玉	緑色凝灰岩	竪穴 11	P5	古墳 中期初頭	2.7	0.8	0.8	1.9g	完形	
S17	129		玉類	白玉	滑石	竪穴 11 (埋土北西)	P5	古墳 中期初頭	0.4	0.4	0.2	0.1g	完形	埋土洗浄により検出
S18	140		石臼	(磨台)	塊状チャート	432 土坑	P5	古墳 前期中葉	15.2	23.7		5.0kg	完形	S37 と同一石材、同一用途か
S19	144		石杵	磨石	綿状チャート	410 土坑	P5	古墳 前期前葉	15.0	7.7	4.5	670.5g	完形か	
S20	147	C10	石杵 (搬入礫)	磨石か	結晶片岩	31 水路 (中世～近世)	A-1	古墳か	14.8	6.2	4.1	582.8g	断面半裁	※搬入礫 片理顕著、Qz 目立つ、 紅塵石含む?
S21	147	C10	(搬入礫)	用途不明 (棒状)	結晶片岩	362 溝 (中世)	P5	不明 (古墳か)	15.6	8.7	6.2	1.22kg	破片	※搬入礫 片理顕著、Qz 目立つ
S22	147	C10	(搬入礫)	用途不明 (板状)	砂質片岩	東側溝 (南東)	P5	不明 (古墳か)	13.8	7.5	4.8	699.9g	破片	※搬入礫 砥石 (石 41) と同一の石材 片理顕著、Qz 目立つ、 細粒
S23	147	C10	(搬入礫)	用途不明 (棒状)	砂質片岩	東側溝 (南東)	P5	不明 (古墳か)	13.9	4.0	3.6	258.9g	破片	※搬入礫 砥石 (石 41) と同一の石材 片理顕著、Qz 目立つ、 細粒
S24	147	C10	(搬入礫)	用途不明 (板状)	結晶片岩	第 6 層 (北東)	P5	不明 (古墳か)	9.2	4.8	1.5	109.4g	破片	※搬入礫 片理顕著、Qz 目立つ
S25	147	C11	石核 (搬入礫)	玉素材	緑色凝灰岩	(第 6 層) 西半	B-1	古墳	4.6	4.2	4.3	87.9g	破片 x 4	※搬入礫 被熱痕跡あり
S26	147		石杵	磨石	泥岩	(第 6 層)	P5	古墳	12.8	4.5	4.1	193.5g	完形か	
S27	147	C11	砥石		灰白色細粒～極細粒 凝灰岩	(第 6 層) 西半	B-1	古墳	10.4	7.2	1.5	201.2g	欠損あり	φ 0.5mm の岩片含む
S28	161		砥石		片岩	(機械掘削 除去面精査)	B-2	古墳か	8.7	4.4	1.7	66.9g	破片	
S29	161		玉類	管玉	滑石	957 溝 (古代溝)	B-2	古墳か	2.7	0.7	0.8	2.3g	完形	S9 と石材同じ
S30	169	54	砥石	仕上砥 大型多面	灰白色細粒砂岩	867 落込み	P4	古墳 中期中葉	27.8	14.3	9.4	4.8kg	完形か	鉄器用か
S31	181		石臼	敲台 or 凹台	灰色細粒砂岩	826 大型土坑	P4	古墳 前期後葉 ～中期初頭	7.7	7.3	2.6	175.6g	破片	円形凹み多数あり
S32	182		玉類	白玉	滑石	826 大型土坑	P4	古墳 前期後葉 ～中期初頭	0.4	0.4	0.3	0.1g	完形	
S33	182		敲石		暗灰色細粒砂岩	826 大型土坑 (下層)	P4	古墳 前期後葉 ～中期初頭	15.7	13.3	5.4	1.47kg	完形か	敲打部分、被熱黒化 亜円礫、チャート・泥岩岩片 (φ 4～ 5mm) 含む
S34	186		磨石か (搬入礫)	(棒状)	結晶片岩	827 落込み (上面)	P4	古墳 中期中葉	12.0	2.5	2.0	807.5g	完形か	※搬入礫 片理顕著、Qz 目立つ
S35	186		石臼	砥石 or 磨台	黒色チャート	827 落込み	P4	古墳 中期中葉	10.5	6.5	8.8	568.3g	完形	
S36	186		石臼	敲石 or 磨台	閃緑岩	827 落込み	P4	古墳 中期中葉	13.9	6.6	5.5	548.8g	完形	敲打痕あり
S37	192		石臼	(磨台)	灰色チャート	32 井戸	B-1	古墳 前期前葉	28.9	19.5	11.8	9.4kg	完形か	S18 と同一石材、同一用途か
S38	198	54	滑石製品	有孔円板	滑石	629 水路 (中世水路)	P4	古墳中期か	3.0	2.5	0.5	5.3g	完形	
S39	207	54	砥石	仕上砥	淡黄灰白色極細粒 凝灰岩	1523P (掘立 33)	C-8	中期後葉～	6.1	5.8	1.5	65.4g	破片	花崗岩岩片含む
S40	211		磨石か	棒状	黒色泥岩	1440 炉跡 (竪穴 35)	C-6	前期	7.2	2.5	2.8	58.3g	破片	
S41	223	C11	石核 (搬入礫)	玉素材	緑色凝灰岩	1610 溝上面 (竪穴 47・48 ・49 周辺)	P3	古墳 前期～中期 か	5.8	2.8	2.4	41.3g	破片 x 3 +	玉・石製品素材



遺物 No.	図 No.	写真 No.	種類	石材	遺構名	調査区	時期	長	幅	厚	重量 (g)	残存率	備考	
S42	228	54	石臼 or 砥石	細粒花崗閃緑岩	1623 土器溜り	P3	古墳中期前葉～中葉	15.3	14.2	5.0	1.66kg	破片	黒雲母が集合する	
S43	236	C11	玉類	勾玉 (ガラス)	(機械除去面)	P3	古墳前期か	1.0	0.7	0.7	0.7g	破片	コバルトブルー	
S44	236		石杵	砥石	灰色細粒～極細粒砂岩	1811P	P3	古墳中期か	4.3	6.9	2.2	602.6g	完形か	敲打部分2カ所：被熱黒化 鍛冶関連の砥石か 泥質ホルンフェルス岩片含む
S45	236	54	砥石 (搬入礫)	仕上砥	砂質片岩	(第5層)	P3	古墳中期か	10.2	6.5	1.7	200.2g	破片	※搬入礫 湾曲著しい、鉄器用か (S22・23) と同一の石材 片理顕著、Qz目立つ、細粒
S46	236		砥石	(小型)	灰白色頁岩	(第5・6層)	P3	古墳中期か	5.6	3.6	1.5	32.8g	破片	湾曲あり、鉄器用か
S47	244		玉類	白玉	滑石製	(第5・6層)	C-2	古墳中期	0.4	0.4	0.3	0.1g	完形	
S48	261		砥石		淡黄白色～淡桃白色極細粒凝灰岩	(第5層)	D-2	古墳中期か	8.5	6.2	1.9	127.2g	破片	擦痕あり、顕著 岩片含む
S49	262		砥石		黒色泥岩	625 水路	D-1	古墳中期 中葉～後葉	7.9	7.8	2.7	164.4g	破片	
S50	267	54	砥石	仕上砥	黒色泥岩	竪穴 53	P14	古墳 中期中葉	9.4	3.8	1.6	120g	破片	湾曲あり、鉄器用か
S51	270	54	石杵	磨石 or 濃石	灰色細粒～極細粒砂岩	1985 井戸	P14	古墳初頭	11.6	6.8	3.1	349.2g	完形	
S52	270		石杵	濃石か	花崗岩	1985 井戸 (上層)	P14	古墳初頭	15.9	8.1	5.9	1.03kg	完形	一部風化、表面は暗く 中央に Qz 脈 (幅 6cm) 挟む
S53	272	C10	(搬入礫)	用途不明 (板状)	結晶片岩	(E-2 東端)	E-2	古墳か	11.6	8.9	2.8	396.2g	破片	※搬入礫 片理顕著、Qz目立つ
S54	272		砥石	仕上砥か (板状)	灰色細粒砂岩	第4層 (下段青灰粘土)	P14	(古墳中期か)	6.2	5.5	1.5	82.3g	破片	一部被熱黒化 中世まで下る可能性あり
S55	277	52	石杵	砥石 or 濃石	黄灰色細粒砂岩	方形周溝墓 6	B-2	弥生 中期前葉	11.0	4.2	3.2	195.8g	完形か	凝灰岩片含む
S56	278	52	磨製石鏃		粘板岩か	(東側溝)	P6	弥生 中期後葉か	5.2	1.5	0.4	3.7g	ほぼ完形	S58 と同一石材か
S57	278	52	打製石鏃		サヌカイト	(第6層 除去面)	A-2	弥生	3.4	1.1	0.4	1.4g	完形か	
S58	278	52	石包丁		粘板岩	機械掘削 (31.溝水路北)	A-1	弥生	12.9	4.9	0.5	51.2g	ほぼ完形	S56 と同一石材か
S59	281	52	砥石 (仕上げ砥)		灰色細粒砂岩	方形周溝墓 13	C-6	弥生 中期前葉	28.9	15.0	12.7	7.5kg	完形か	S60 とセットで出土 やや変成作用を受けているのか!? Qz目立つ
S60	281	52	砥石 (粗砥)		細粒花崗岩	方形周溝墓 13	C-6	弥生 中期前葉	31.1	20.3		6.8kg	一部欠損	S59 とセットで出土 弱片状、火を受けて変色部分あり
S61	281	52	石臼		黄褐色中粒砂岩	方形周溝墓 13	C-6	弥生 中期前葉	7.4	5.3	3.0	151.3g	破片	湾曲あり
S62	284	52	打製石鏃		サヌカイト	493 溝	A-2	縄文か	4.0	2.1	0.7	5.5g	ほぼ完	先端欠損
S63	284	52	打製石鏃		サヌカイト	432 土坑 (上層・中層)	P5	縄文か	2.1	2.0	0.4	1.4g	基部 一部欠損	
S64	284		不明 (使用痕あり)		サヌカイト	周溝墓 2・3 上面精査	A-2	縄文か	3.5	1.4	0.4	1.6g	(剥片)	用途不明 使用痕あり
S65	284		横長剥片		サヌカイト	(第6層)	P4	縄文か	3.4	2.9	0.7	8.5g	(剥片)	
S66	284		石刃石核		サヌカイト	459 溝 第6層除去面	A-2	縄文か	10.8	6.0	1.7	100.8g	完形か	
S67	284	52	打製石鏃		チャートか	1917 溝 第6層除去面	P2	縄文か	2.5	1.3	0.3	1.1g	完形	
S68	284		打製石鏃 (大型)		黄土色チャート	機械掘削 除去面精査	C-6	縄文か	2.3	2.2	0.5	2.1g	欠損あり	大型石鏃 鏃身・先端欠損
S69	284	52	打製石鏃		サヌカイト	水田画 e 第5層除去面 南東半	P14	縄文か	2.2	1.7	0.5	1.2g	一部欠損	
S70	284		石鏃 未成品か		サヌカイト	(第6層)	C-7	縄文か	3.1	2.1	0.7	5.5g	(未成品)	横長剥片加工途中



# 図 版



B-1区 竪穴建物・掘立柱建物 検出作業 [南東から]





上牧遺跡と内ヶ池・梶原山 [P6区 南から：奥マンション群が阪急上牧駅付近]



上牧遺跡と淀川 [P14区 南西から：奥タワーマンションが京阪樟葉駅付近]



## カラー図版 2

調査区全景



古墳時代建物群と弥生時代中期方形周溝墓群 [C5区 南西から：奥が上牧集落]



古墳時代・中世の遺構群 [P3区 北東から：奥が1971・1972年調査の淀川変電所]





上牧遺跡の発掘調査と並行しておこなわれる高速道路建設事業 [P2区(手前)・P3区(奥) 南東から]



古墳時代遺構群と古代区画溝(954溝) [B2区 西から]



淀川旧分流路(102流路)と内ヶ池 [A3区 南から]



カラー図版 4

大型掘立柱建物 13 と 866 井戸



大型掘立柱建物 13 と 866 井戸 [P4区 南東から]



867 落込み・866 井戸上層～中層の堆積状況 [P4区 西から]





下層南ステップ・北側最深部① 土師器甕・壺出土状況 [南西から]



上層 土師器群出土状況 [南西から]



中層 土師器甕・壺出土状況 [南西から]



下層北側最深部遺物② 釣瓶土器出土状況 [西から]



下層北側最深部遺物③ 布留形甕出土状況 [西から]



カラー図版6

古墳時代  
竪穴建物



古墳時代の竪穴建物群と土坑 [P5区 南から]



竪穴建物 40 床面検出状況 [C8区 南西から]





971 大型土坑 土師器出土状況 [B-2区 南西から]



1897 井戸下層 土師器甕出土状況 [P3区 南西から]



987 土坑 土師器出土状況 [C-5区 南東から]



32 井戸下層 土師器壺・甕出土状況② [B-2区 北東から]



33 落込み 土師器・須恵器出土状況 [B-2区 北東から]



カラー図版 8

古墳時代初頭～前期の土師器 1



上段：1897 井戸・2000 土坑（1976 土器溜り）・978 土坑出土土師器群 [庄内式期]  
中絶：32 井戸出土土師器群 [布留式古段階]  
下段：1482 井戸上層出土土師器群 [布留式新段階]



上段：866 井戸下層・中層出土土師器群 [布留式古段階～中段階]  
下段：866 井戸上層出土土師器群 [布留式新段階]



カラー図版 10

古墳時代初頭～前期の土師器 3 / 搬入礫



主な他地域系土器 [庄内式期～布留式期]



右：搬入礫  
結晶片岩 (S21) / 砂質片岩 (S22)  
結晶片岩 (S20) / 砂質片岩 (S23)  
結晶片岩 (S24) / 緑泥片岩 (S53)

左：866 井戸 釣瓶土器 (1234) [出土直後撮影]



[S = 1/2]

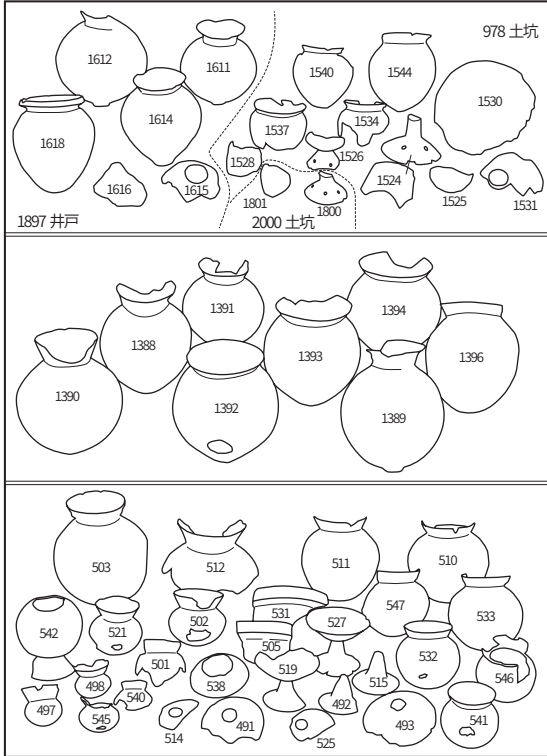
上段左上：ガラス勾玉 (S43)・管玉 (S16) / 上段左下：緑色凝灰岩石核 (S25・S41)  
上段右：赤色顔料関連遺物 [石杵・石臼・赤色顔料付着小型丸底鉢] / 下段：砥石 (S27)



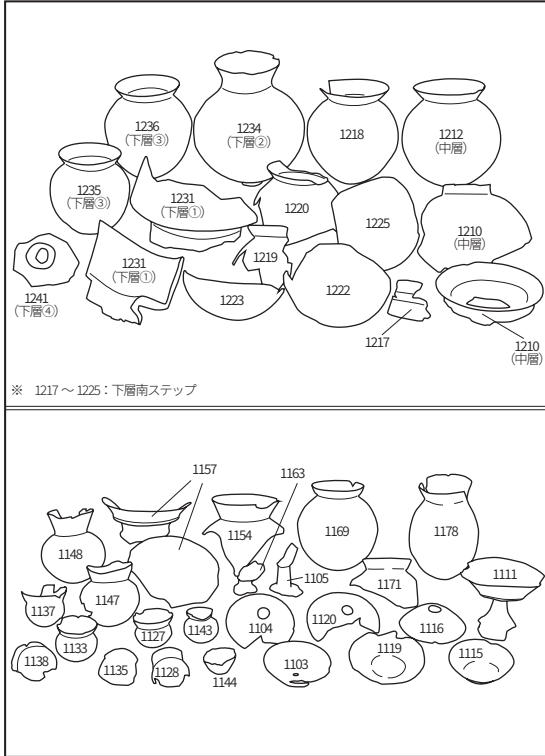
102 流路出土古代土師器・須恵器 [奈良時代後半]



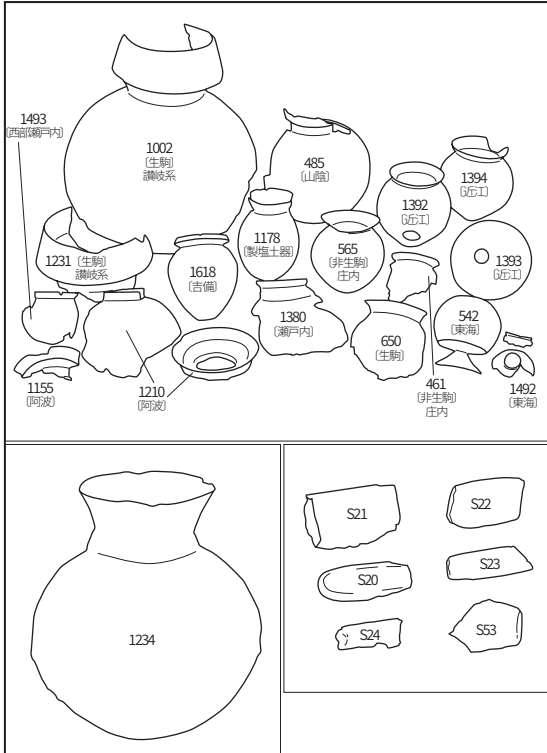
カラー図版8



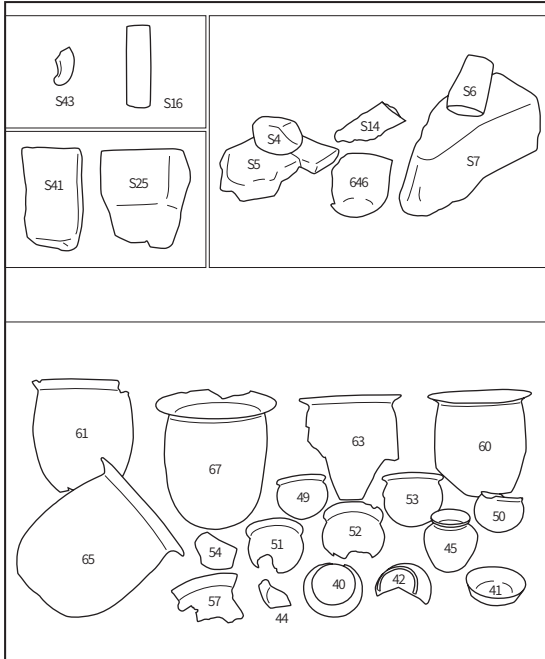
カラー図版9



カラー図版10



カラー図版11





上牧遺跡とその周辺 [南西から：写真右側中央淀川変電所と奥側が上牧遺跡 (平成 28 年 5 月 12 日撮影)]



上牧遺跡とその周辺 [西から：写真中央付近が上牧遺跡 (平成 28 年 2 月 22 日撮影)]



調査地遠景 [南東・淀川堤防から (平成 29 年 12 月 14 日撮影)]



調査地遠景 [北西・市道上牧町 301 号線付近から (平成 29 年 11 月 21 日撮影)]

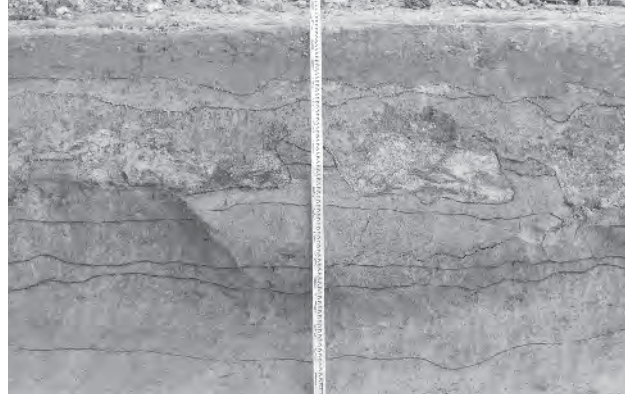


## 図版 2

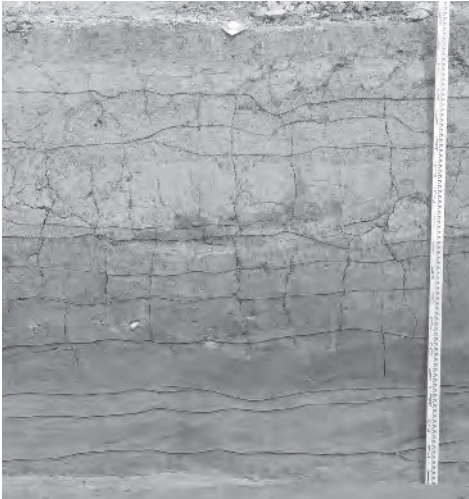
基本層序



B-1 区北壁断面 [東端：下部暗色帯が古墳時代包含層（第6層）]



P14 区東壁断面 [中央付近：上部に近世洪水砂を充填する土坑群（第2層）]



C-5 区北壁断面 [中央西寄り：近世作土層（第1層）直下で古墳時代の遺構を検出]



A-1 区 100 落込み断面 [南西から：土器含む層が中層]

D-2 区北壁断面 [中央東寄り：下部暗色帯が古墳時代包含層（第6層）]



C-2 区西壁断面 [中央付近：右下暗色帯が古墳時代包含層（第6層）、左直上の灰色土が中世作土層（第4層）]



E-2 区北壁断面 [中央東寄り：下部暗色帯が古墳時代包含層（第6層）]

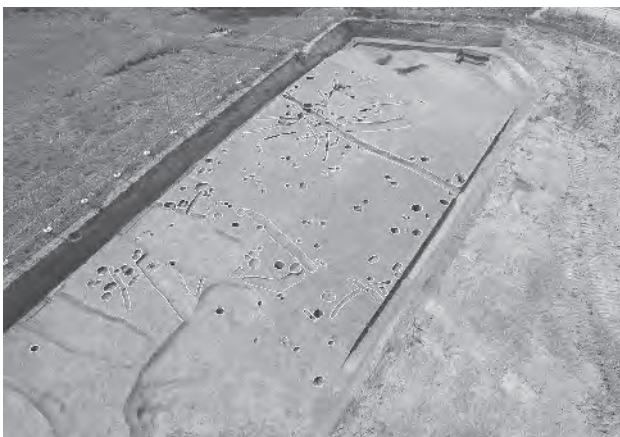




P6区全景 [南西から]



A-3区全景 [南から：古代の淀川分流路(102流路)の肩部]



A-1区西端全景 [東から：奥落ち込みが古代の淀川分流路(102流路)]



A-1区全景 [南東から：中央暗色帯が100落込み、手前溝が近世31水路]



図版 4

調査区全景2  
(西側エリア  
B2区・A2区・P5区・B1区)



B-2区西側全景 [南東から：奥が方形周溝墓群]



B-2区東側西端全景 [南から：中央やや左が971井戸]



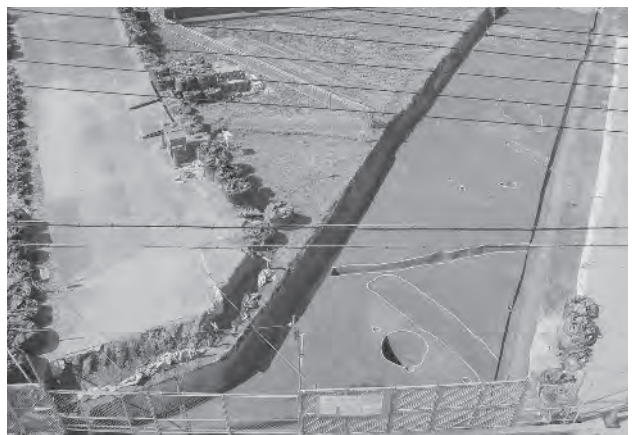
B-2区東側東端全景 [西から：密集する古墳時代の竪穴建物と柱穴群]



A-2区全景 [南西から：中央暗色帯が100落込み、手前が116井戸]



P5区全景 [南西から]



B-1区全景 [東から：手前が20土坑]





P4区全景 [南西から：中央手前土坑が 827 落込み]



P6区全景 [南西から：手前が掘立柱建物 3 (独立棟持柱建物)]



図版 6

調査区全景 4  
(中央エリア  
C8区・C7区・C6区・C5区・C4区・C3区)



C-8区全景 [南西から：手前に竪穴建物41(左)と竪穴建物40(右)]



C-6区・C-7区全景 [南西から：中央右がC6区、奥に方形周溝墓群]



C-5区全景 [北西から]



C-4区全景 [南東から]



C-3区全景 [北西から]





P3区全景 [南西から：手前左が1551井戸(中世)、手前中央右が1897井戸(古墳時代)]



C5区全景 [南東から：手前が竪穴建物30]



C2区全景 [北東から：手前が古墳時代遺構群、奥が粘土採掘土坑群]



図版 8

調査区全景 6 (中央エリア P2区・C-1区・D-2区・D-1区)



P2区全景 [南西から：手前が耕作に伴う段造成、奥に古墳時代の建物群]



P2区上段 古墳時代中期建物群全景 [南東から]



C-1区全景 [南東から]



D-2区全景 [北西から：古墳時代中期遺構群]



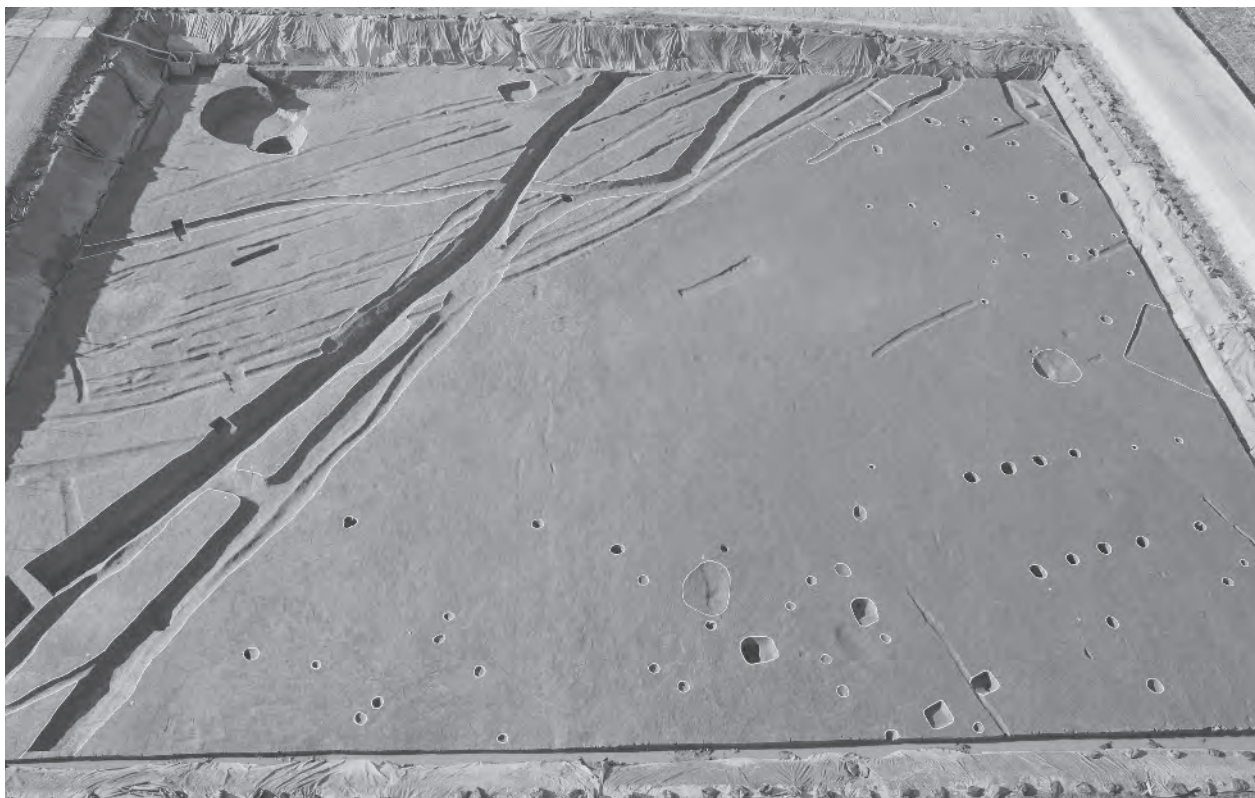
D-1区全景 [北西から：手前は粘土採掘土坑、奥に現水路と並行する近世水路]



D-1区東端全景 [西から：古墳時代の灌漑水路 (625：写真左) と近世水路]



調査区全景 7  
(東側エリア  
P14区・E2区・E1区)



P14区全景 [南東から]



E-2区西端全景 [南西から：中世耕作段と溝群]



E-2区東側全景 [西から：中世溝群と古墳時代柱穴群]



E-2区東側完掘全景 [北西から]



E-1区全景 [北西から：奥側近世災害復旧土坑群]



図版 10

中世後半から近世の土地利用  
／  
中世の遺構 1  
(西側エリア)



D-2 区耕作溝群検出状況 [西から：中世後半～近世後半頃]



P14 区災害復旧土坑検出状況 [西から]



E-2 区耕作段検出状況 [南から：近世洪水砂 (第2層) で耕作段が埋没]



E-1 区災害復旧土坑検出状況 [西から]



P5 区 402・400 土坑完掘状況



B-2 区 631 水路断面 [南から]



P5 区 381 井戸断面 [南西から]



P5 区 402 土坑断面 [東から]



P5 区 402 土坑断面 [東から]





P4 区中世灌漑水路群検出状況 [南西から：左右方向手前が 629 水路・奥が 630 水路、左側上下方向が 631 水路]



P6 区 1291 断面 [北西から：内ヶ池に接続する排水路]



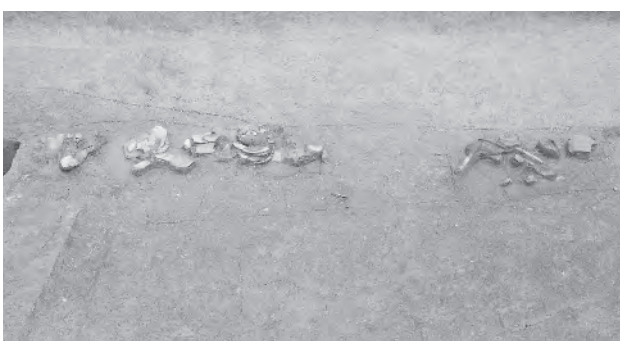
P6 区 1291 断面 [南西から]



P5 区 362 溝完掘状況 [西から：中世後半区画溝]



P5 区 362 溝断面 [東から：断面遺物は常滑焼大甕]



C-5 区 1297 溝出土土師器・瓦器集積 [南から]



C-5 区 1297・1296 溝断面 [西から：左 1297 溝下部に方形周溝壙]



図版 12

中世の遺構 3  
(中央エリア)



P3区 1551 井戸断面 [南から]



C-2区耕作段・粘土採掘土坑 [西から]



C-3区 193 粘土採掘土坑断面 [東から]

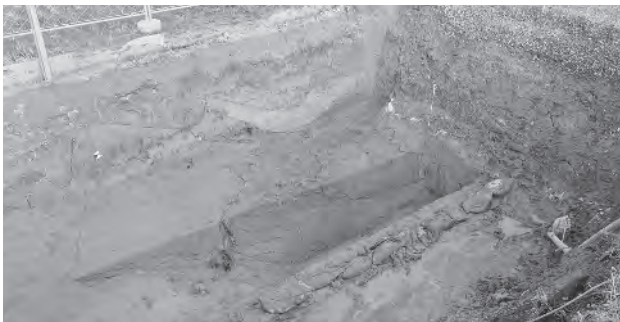


P3区 1551 下部土師器皿・瓦器椀出土状況 [南から]

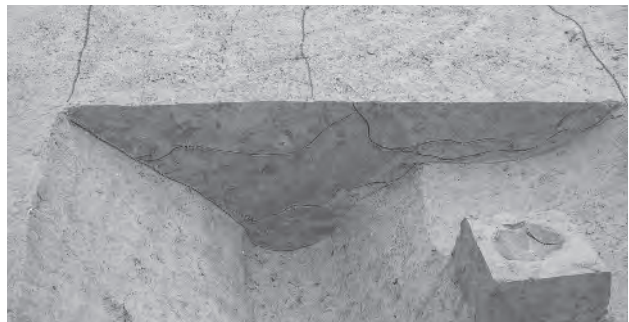




P14 区第4層除去面全景 [南西から：上段13世紀代の水田、下段は14世紀代の耕作溝・粘土採掘土坑]



D-2 区 638 水路断面 [西から：奥部に近世水路が重複]



D-2 区 640 溝断面 [西から]



P2 区 1753 井戸瓦質鍋出土状況 [北西から]



P3 区 1617 井戸断面 [西から]



E-2 区 769・767・768 溝完掘状況 [西から]



E-2 区 766 溝遺物出土状況 [西から]



P14 区 1975 溝鉄鎌 (M2) 出土状況 [南から]



E-1 区 7 溝小刀 (M1) 出土状況 [南西から]



図版 14

古代の遺構 1  
102 流路  
(西側エリア)



A-3 区 102 流路 (古代淀川分流路) 遺物出土状況 [南西から]



A-3 区 102 流路下部断面 [北東から：手前の土師器甕は 67]



A-3 区 102 流路下部断面 [西から]



A-3 区 102 流路遺物出土状況 [南西から：45・61・62]

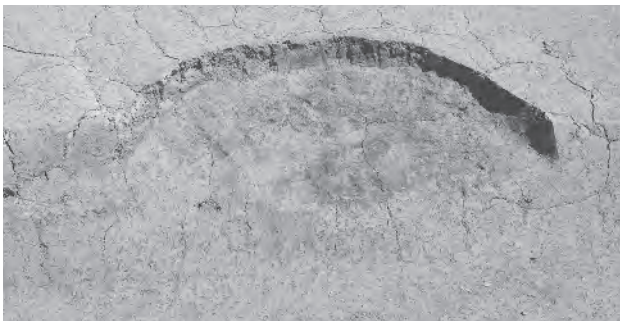




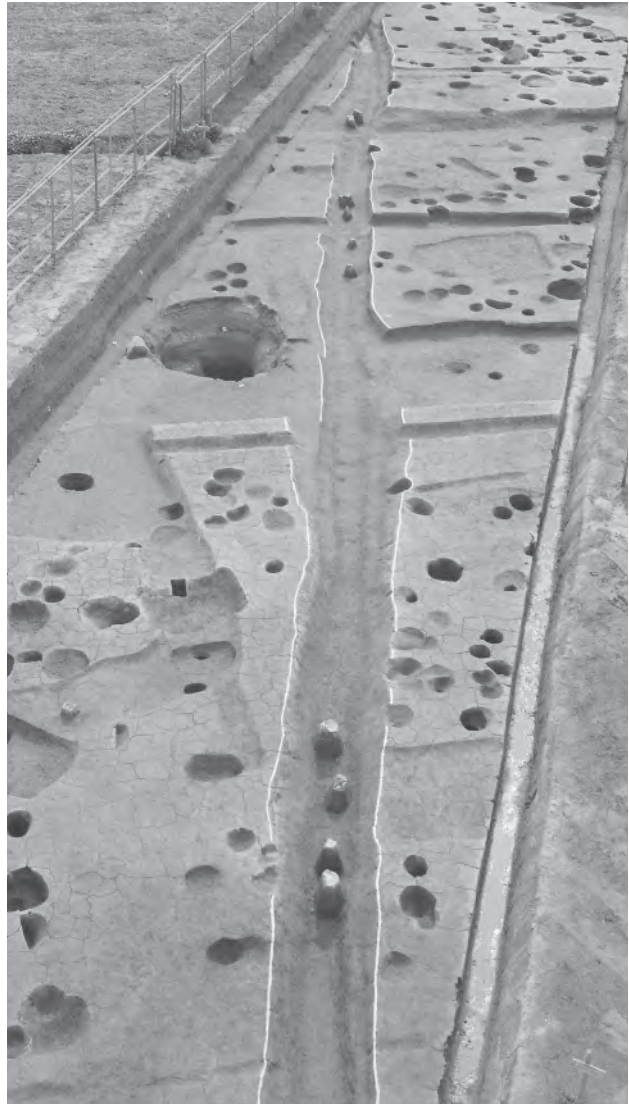
B-2 区 957 溝遺物出土状況 [西から: 318・322・332]



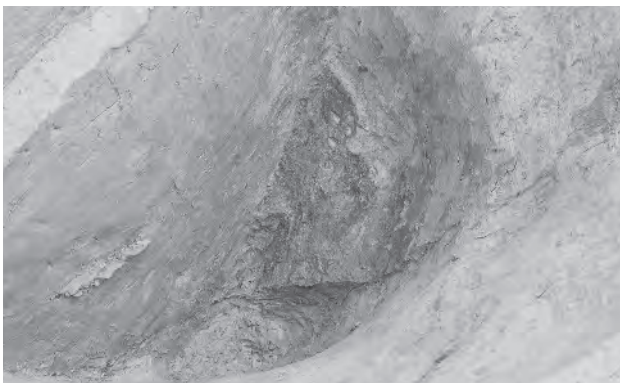
B-2 区 957 溝断面 [南東から: 西から 2 番目]



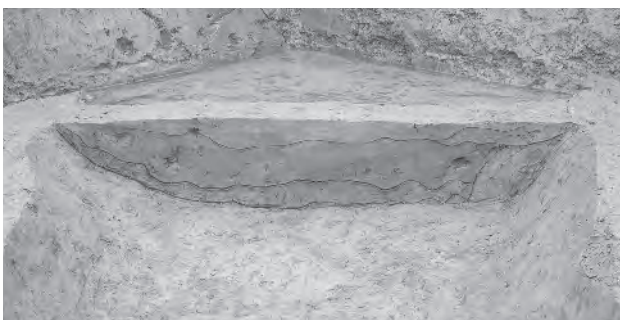
P6 区 1479 焼土坑 [南から]



B-2 区 957 溝全景 [北西から]



D-2 区 654 井戸下部有機質層検出状況 [西から]



C-3 区 197 溝断面 [北から]



D-2 区 654 井戸断面 [南西から]



図版 16

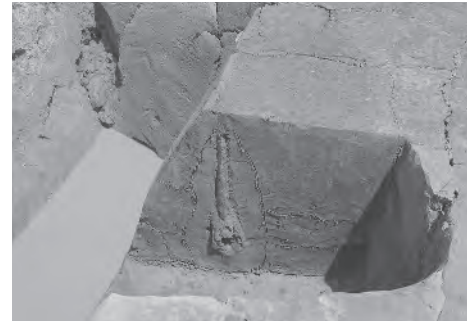
古代の遺構 3  
建物遺構・水路・焼土坑  
(中央エリア・東側エリア)



C-6区掘立柱建物 26 [南から]



掘立柱建物 26・1478P 柱痕検出状況 [南から]



掘立柱建物 26・1478P 断面 [南から]



P14区 1995 溝遺物出土状況 [南から: 422・414]



P14区 2001 溝遺物出土状況 [南から: 427]



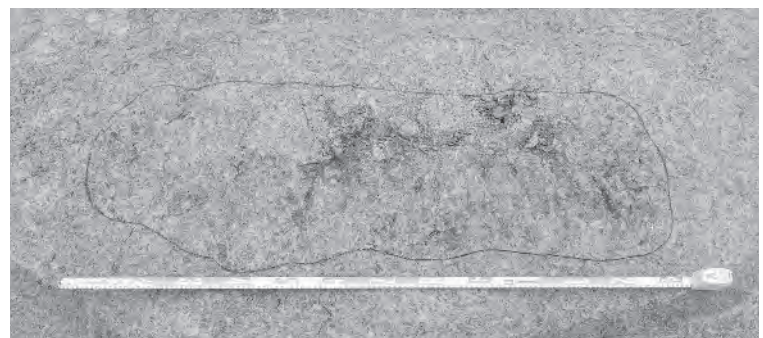
P14区 1996・1995 溝断面 [南西から]



P14区竪穴建物 54 上面羽釜 (410) 出土状況 [南西から]



P14区 2002 溝断面 [南東から]



P14区 1989 焼土検出状況 [東から]





A-1 区 100 落込み全景および断面 [南から：中央が土器溜り 3、左奥が土器溜り 2]



A-2 区 100 落込み遠景 [南から]



A-2 区 100 落込み遠景 [北から：手前が土器溜り 1]



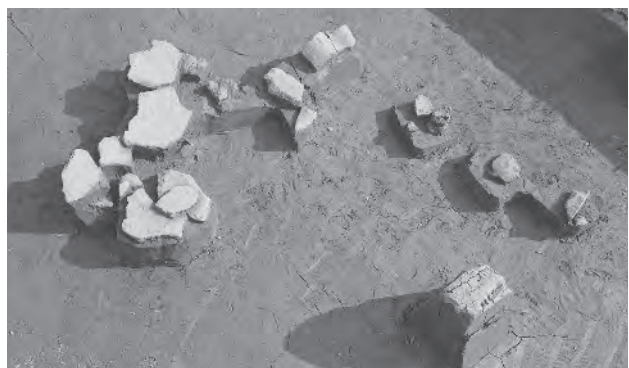
A-1 区 100 落込み下部断面 [西から：中央が 160 土坑]



A-1 区 100 落込み土器溜り 3 [南から]



A-1 区 100 落込み土器溜り 2 [南から]



A-1 区 100 落込み最下部超大型壺 (656) 出土状況 [南から]

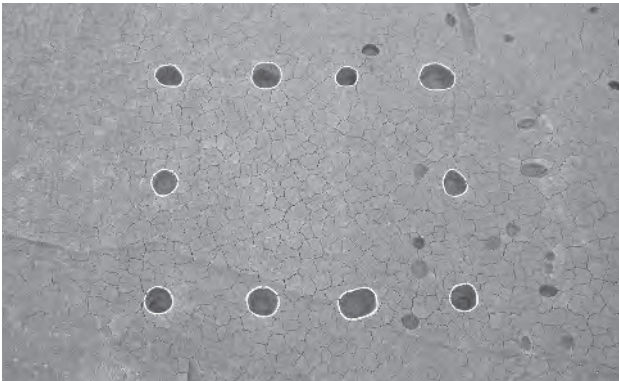


図版 18

古墳時代の遺構②  
建物遺構  
(西側エリア)



B-2 区掘立柱建物 18・19・20・21 [南から]



P14 区掘立柱建物 30 [南東から]



P5 区掘立柱建物 10 [南西から]



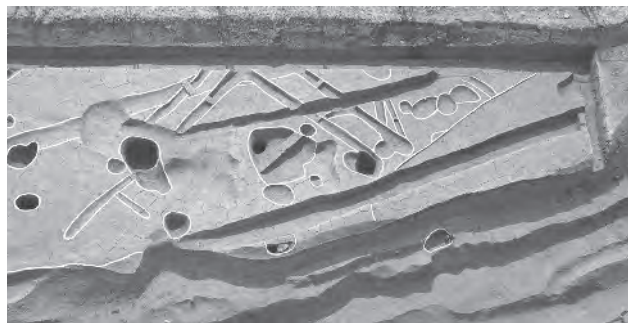
P5 区竪穴建物 6 床面遺物検出状況 [南東から]



P5 区竪穴建物 6 [北西から]



P6 区竪穴建物 39 断面 [西から]



B-2 区竪穴建物 2・3 [北から：手前が近世水路 (31 水路)]





B-1 区掘立柱建物 1 [北から]



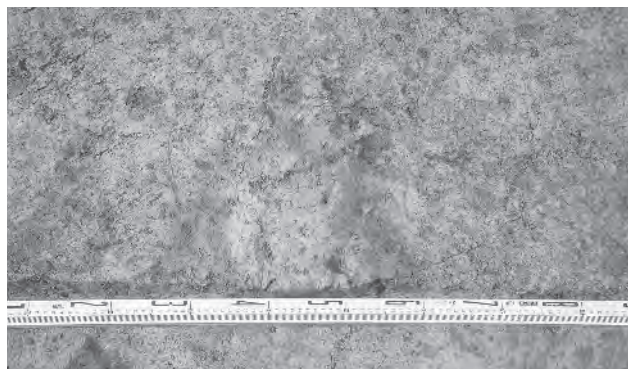
P5 区竪穴建物 7 床面検出状況 [南から]



P5 区竪穴建物 7 床面炉跡検出状況 [南から]



P5 区竪穴建物 7・503 焼土坑断面 [西から]



P5 区竪穴建物 7 炉跡下部被熱痕跡 [東から]



A-1 区竪穴建物 58・108 溝土師器出土状況 [南から]



A-1 区竪穴建物 58・108 溝石杵出土状況 [西から]

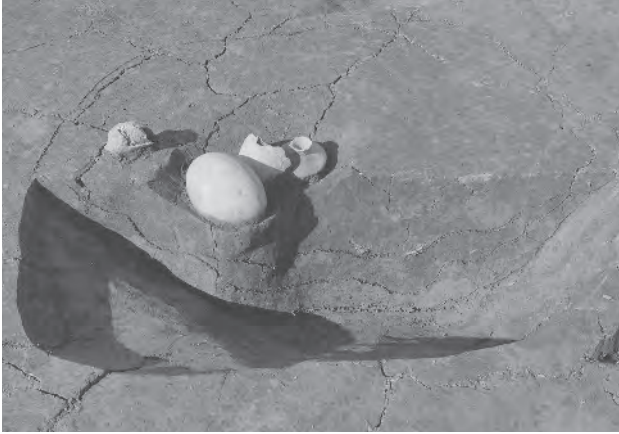


A-1 区竪穴建物 58・130 焼土坑検出状況 [南東から]



図版 20

古墳時代の遺構 4  
 建物遺構における出土遺物・溝断面  
 (西側エリア)



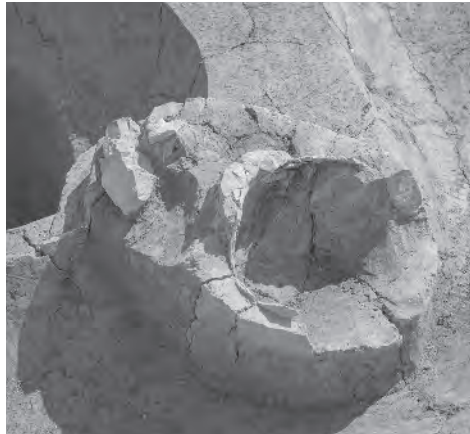
P5 区竪穴建物 13・458 土坑断面 [東から]



P5 区竪穴建物 8 床面二重口縁壺 (710) 出土状況 [南東から]



P5 区竪穴建物 11 床面管玉  
 出土状況 [南西から]



P5 区竪穴建物 11 床面土師器甕出土状況 [北西から]



P4 区竪穴建物 22・934 柱穴遺物出土状況  
 [南西から]



B-2 区 1280 溝断面 [南東から]



P4 区 831 溝断面 [南東から]



A-1 区 112 溝断面 [南西から]

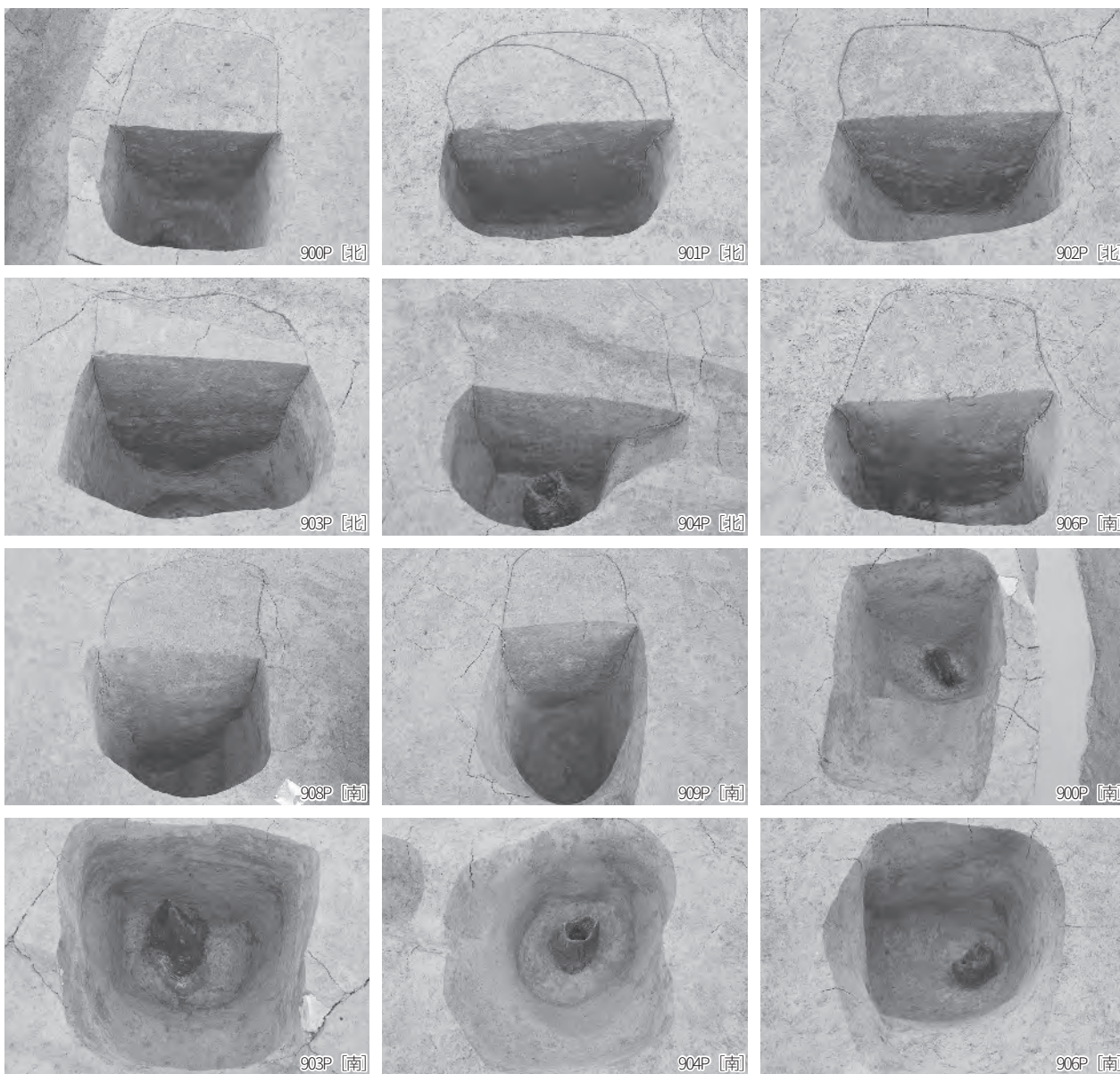


B-1 区 22 溝断面 [南から]





P4 区大型掘立柱建物 13 [南から：柱穴上列右から 900～904P、下列右から 905～909P]



P4 区大型掘立柱建物 13 柱穴断面および柱痕検出状況 [写真右下に柱穴番号および撮影方向]



図版 22

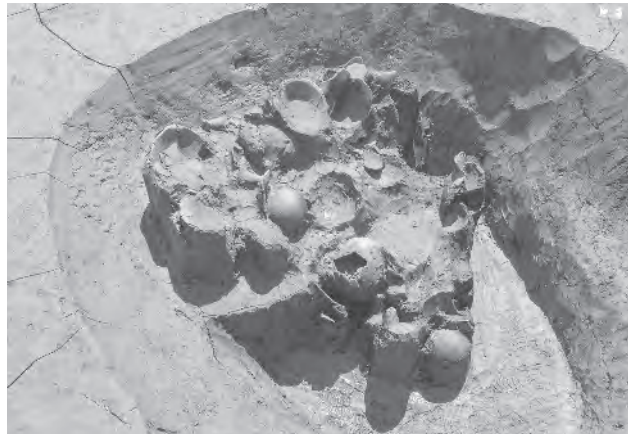
古墳時代の遺構 6  
1482 井戸  
(西側エリア)



P6 区 1482 井戸上層土師器出土状況① [南西から]



P6 区 1482 井戸上層①・②土師器出土状況・断面 [南西から]



P6 区 1482 井戸上層土師器出土状況② [南東から]

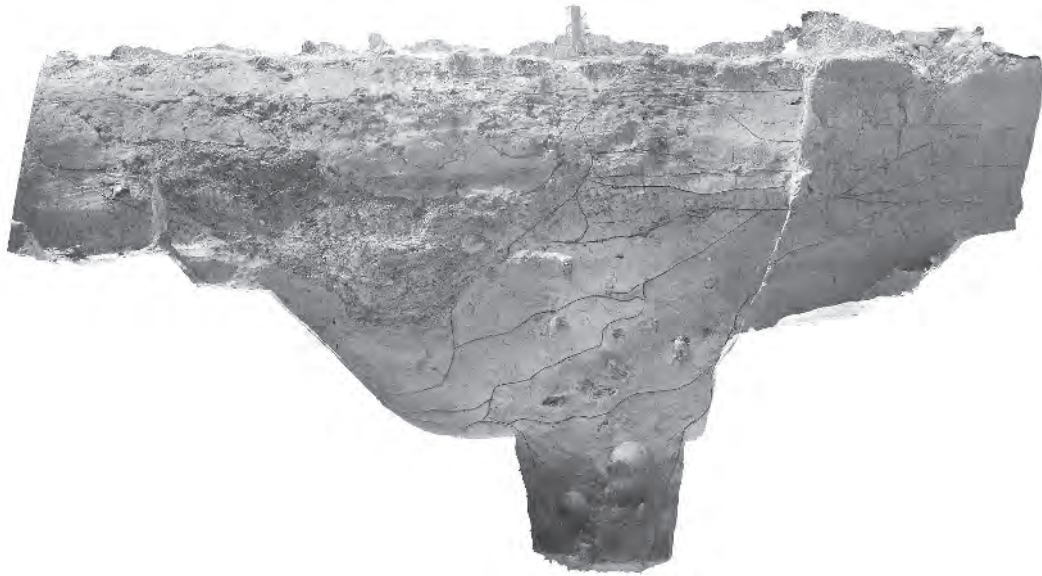


P6 区 1482 井戸上層土師器出土状況③ [南西から]

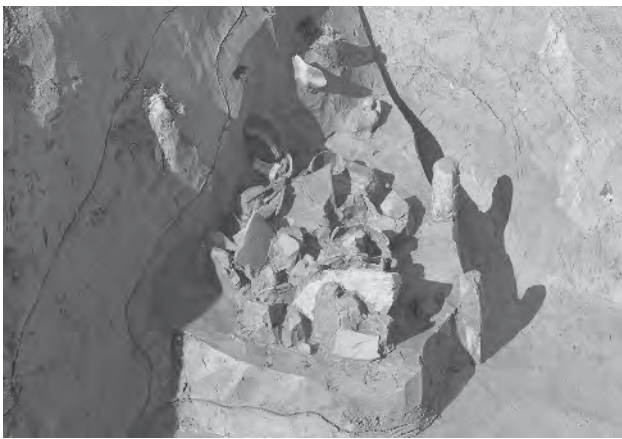


P6 区 1482 井戸完掘 [南西から]





B-1 区 32 井戸 (下部) と中近世水路 (17 水路: 上部) の断面オルソ画像 [S=1/40]



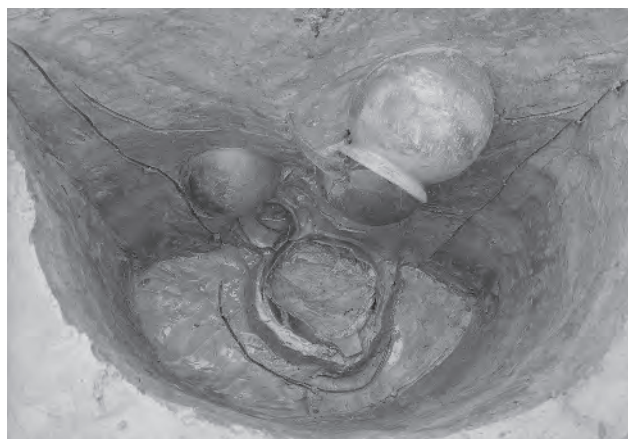
B-1 区 32 井戸上層土師器出土状況① [東から]



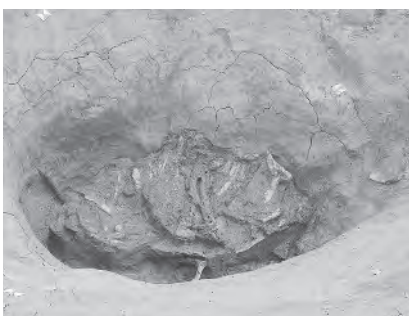
B-1 区 32 井戸上層土師器出土状況② [北東から]



B-1 区 32 井戸下層土師器壺・甕出土状況① [北東から]



B-1 区 32 井戸下層土師器壺・甕出土状況③ [北東から]



P6 区 866 井戸中層木材・樹皮出土状況 [西から]



P6 区 866 井戸下層北側最深部遺物出土状況 [西から]



P6 区 866 井戸下層北側最深部完掘状況 [西から]



図版 24

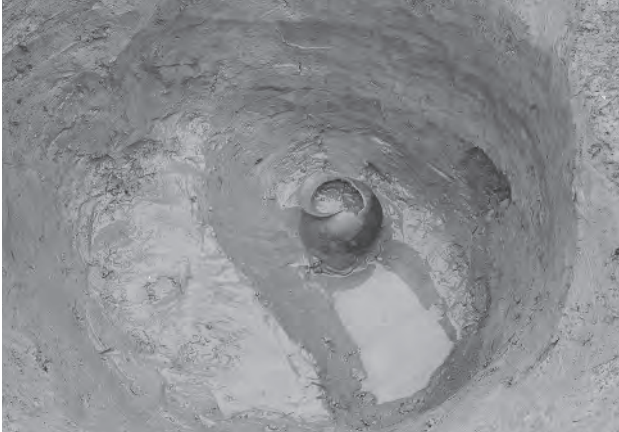
古墳時代の遺構 8  
井戸・土坑・落込み  
(西側エリア)



A-1 区 116 井戸断面 [南西から]



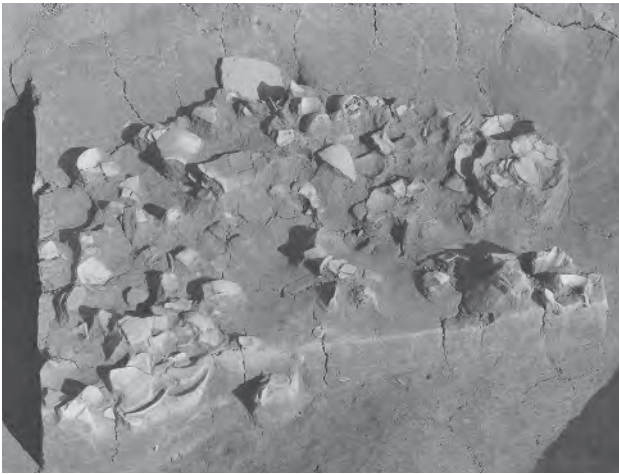
A-2 区 116 井戸下層①土師器大型直口壺出土状況 [西から]



A-2 区 116 井戸最深部土師器庄内形甕出土状況 [南から]



B-2 区 971 大型土坑断面 [南東から]



P4 区 432 土坑土師器出土状況① [南から]



P4 区 432 土坑土師器出土状況② [南から]



P4 区 432 土坑断面 [南から]



P4 区 450 落込み断面・遺物出土状況 [南西から]

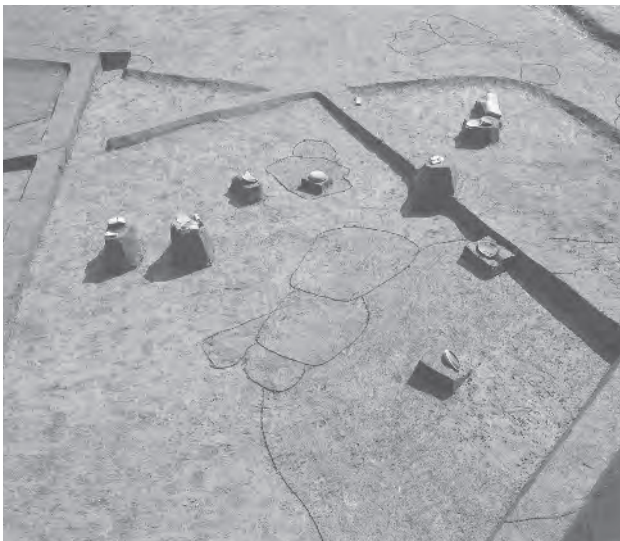




P6 区 826 大型土坑断面 [南西から]



P6 区 854 大型土坑断面 [西から]



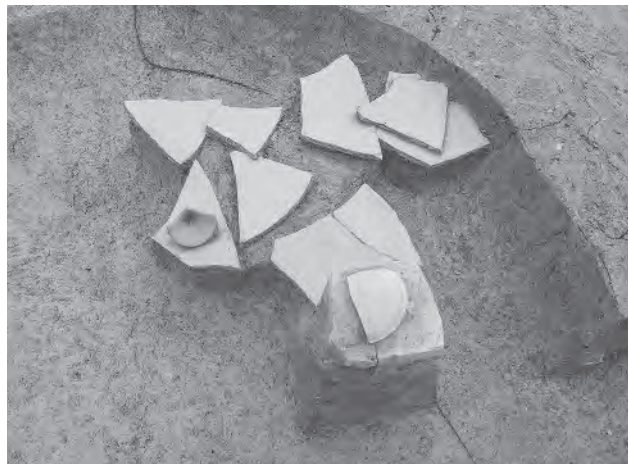
P6 区 867 落としみ遺物出土状況 [北から：写真右下部に 866 井戸]



P6 区 867 落としみ土師器・須恵器・砥石出土状況 [南西から]



P6 区 827 落としみ断面・遺物出土状況 [南西から]



P6 区 840 土坑初期須恵器大甕出土状況 [北西から]



B-2 区 963 焼土坑断面 [南西から]



B-1 区 25 土坑断面・遺物出土状況 [西から]



図版 26

古墳時代の遺構 10  
 建物遺構と付属遺構・遺物出土状況  
 (中央エリア)



C-8区竪穴建物 32 床面検出状況 [南東から]



C-8区竪穴建物 40 完掘状況 [南から]



C-5区竪穴建物 30 [南西から]



竪穴建物 32・1561 炉跡断面 [南東から]



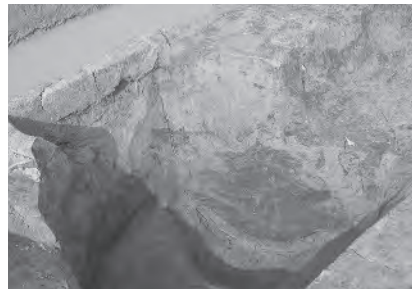
竪穴建物 32 床面土師器出土状況 [南東から]



P3区ガラス勾玉 (S43) 出土状況 [西から]



P3区竪穴建物 46・1746 土坑土師器  
 出土状況 [西から]

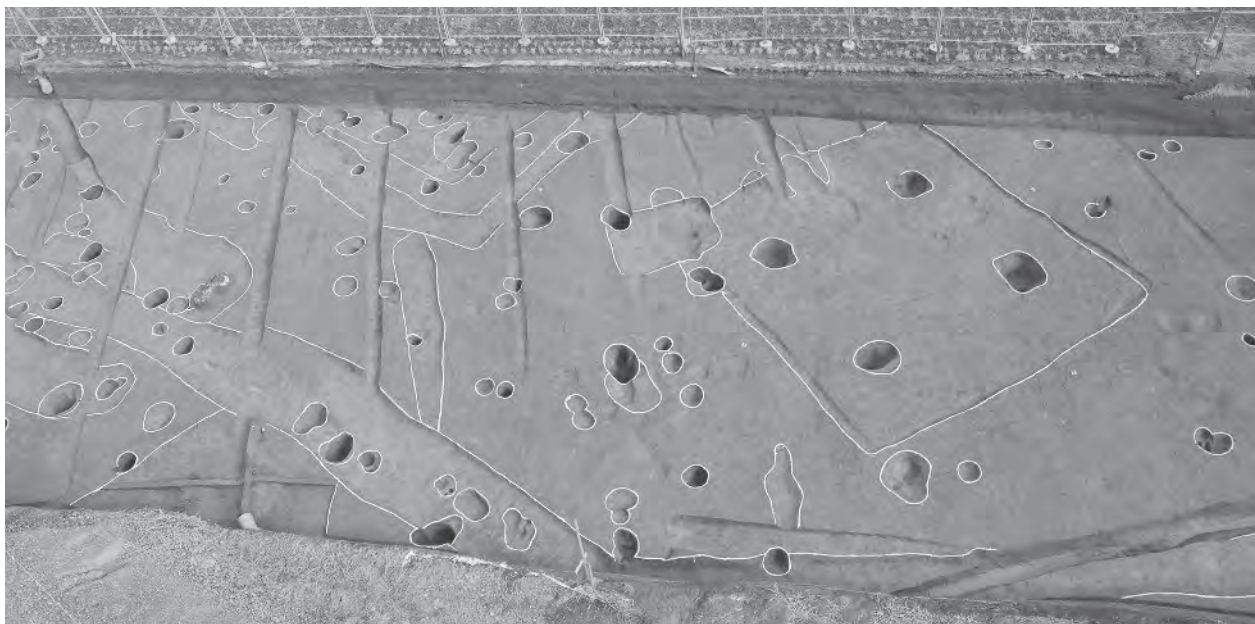


P3区 1808 土坑断面 [西から]



D-2区竪穴建物 20 焼土面検出状況  
 [南西から：カマド痕跡か]





D-2 区竪穴建物 59・20・21・19 [南西から：写真左が竪穴建物 59]



P2 区竪穴建物 50 床面検出状況 [西から]



D-2 区竪穴建物 59 甕 (1688) 出土状況 [西から]



D-2 区竪穴建物 19 カマド断面 [南西から：写真右が焚口]



図版 28

古墳時代の遺構 12  
水路および溝断面・井戸・土器溜り・土坑  
(中央エリア)



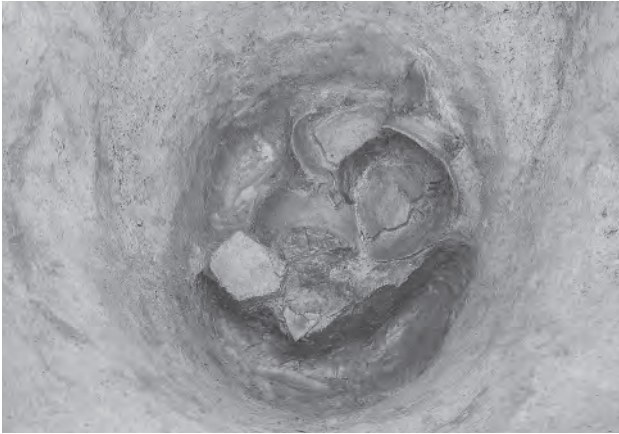
D-1 区 625 水路断面 [南から]



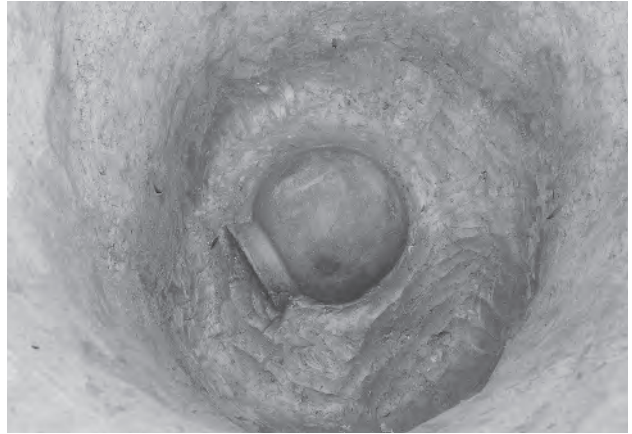
P3 区 1622 溝断面 [南から]



D-2 区 168・640 溝断面 [南東から:写真左 168 溝が古墳時代、640 溝は中世]



D-2 区 647 井戸下層①土器甕出土状況 [南西から]



D-2 区 647 井戸下層②土器甕出土状況 [南西から]

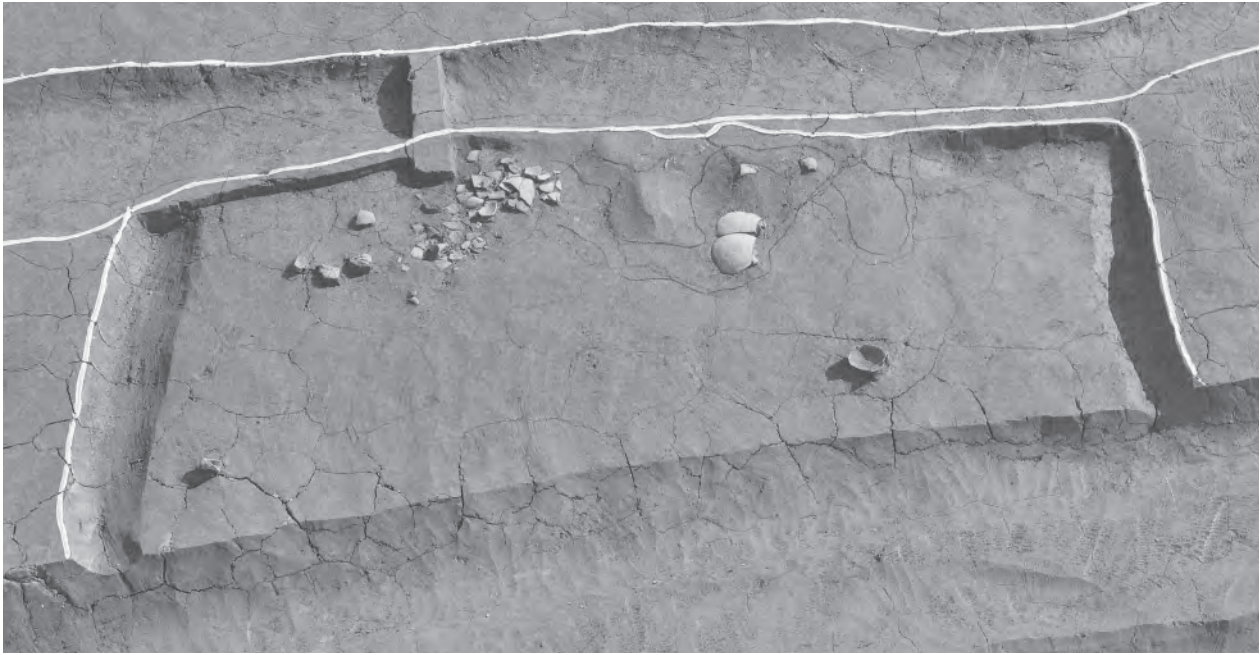


P3 区 1623 土器溜り土器・須恵器出土状況 [南から]

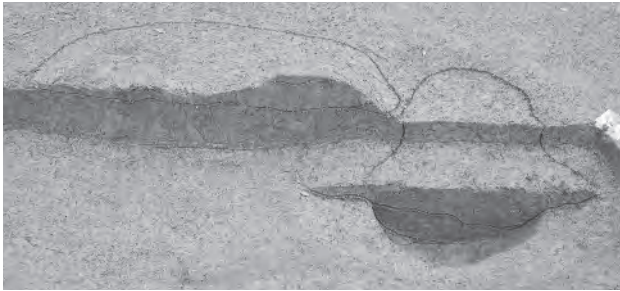


C-2 区 311 土坑須恵器・製塩土器出土状況 [南から]

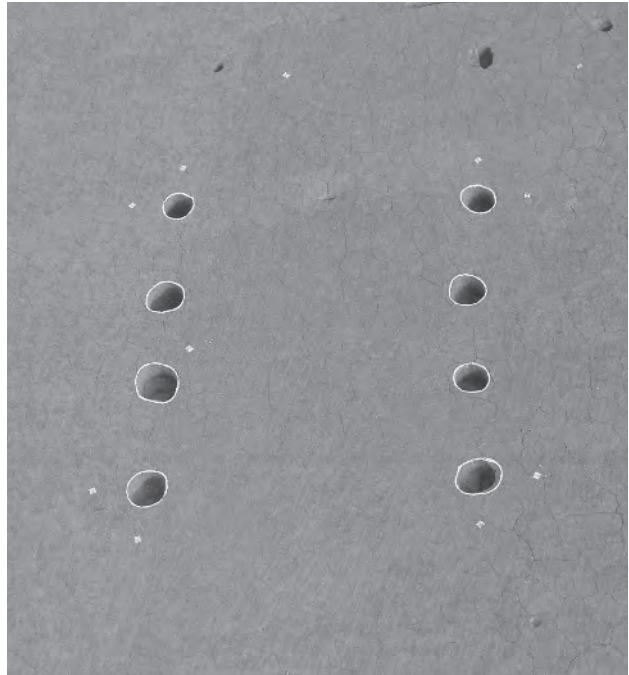




P14区 竪穴建物 53 床面検出状況 [西から]



E-2区 800 炉跡・807 焼土坑断面 [西から：掘立柱建物 12 付属遺構か]



P14区 掘立柱建物 43 [南から]



E-2区 790 井戸最深部土師器甕出土状況 [南から]



P14区 1985 井戸断面 [西から]



P14区 2000 土坑 (1976 土器溜り) 遺物出土状況 [南西から]



図版 30

弥生時代の遺構 1  
方形周溝墓西群  
(B2区・A2区)



B-2区方形周溝墓5・6・7 [西から]



B-2区方形周溝墓7土器出土状況 [南東から：手前が1830]



B-2区方形周溝墓7土器出土状況 [東から：1831]



A-2区方形周溝墓1・2・3・4・5 [南西から]



B-2区方形周溝墓7・6周溝断面 [南西から：右が方形周溝墓6]



B-2区方形周溝墓5・7周溝断面 [南西から：右が方形周溝墓7]



A-2区方形周溝墓1・2・3検出状況 [南東から]



B-2区方形周溝墓5・1周溝断面 [北西から：右が方形周溝墓1]





C-6区方形周溝墓東群検出状況 [北東から：手前左が方形周溝墓15]



C-5区方形周溝墓9土器出土状況 [南東から：1852]



C-6区方形周溝墓13周溝断面 [南西から]



P14区灌漑水路2003溝断面 [北から：上部が地層反転]



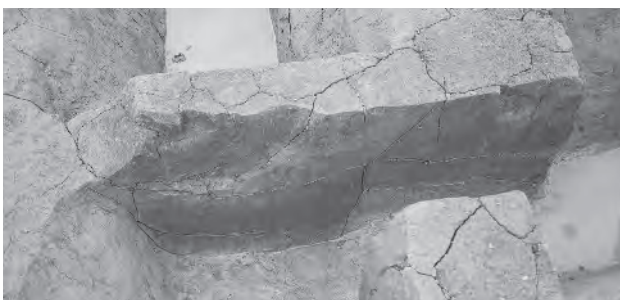
C-6区方形周溝墓15周溝断面 [南菱から：上部に中世1296溝が重複]



P14区灌漑水路2003溝断面 [南東から：上部に古代1996溝が重複]



C-6区方形周溝墓14周溝断面 [南東から]



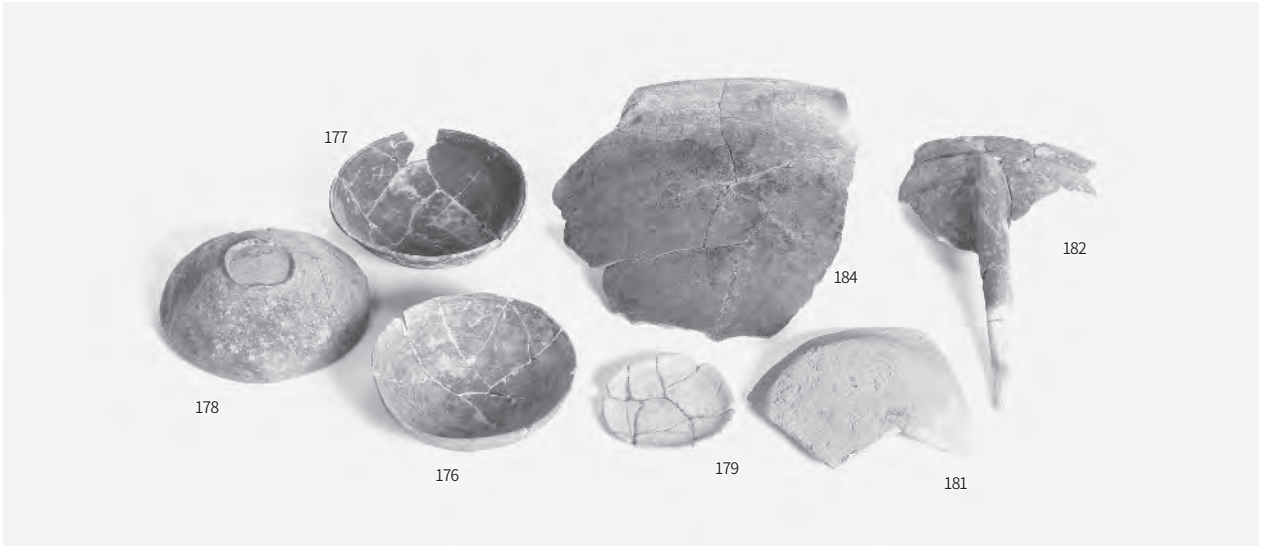
A-2区方形周溝墓2・3周溝断面 [南東から：左が方形周溝墓2]



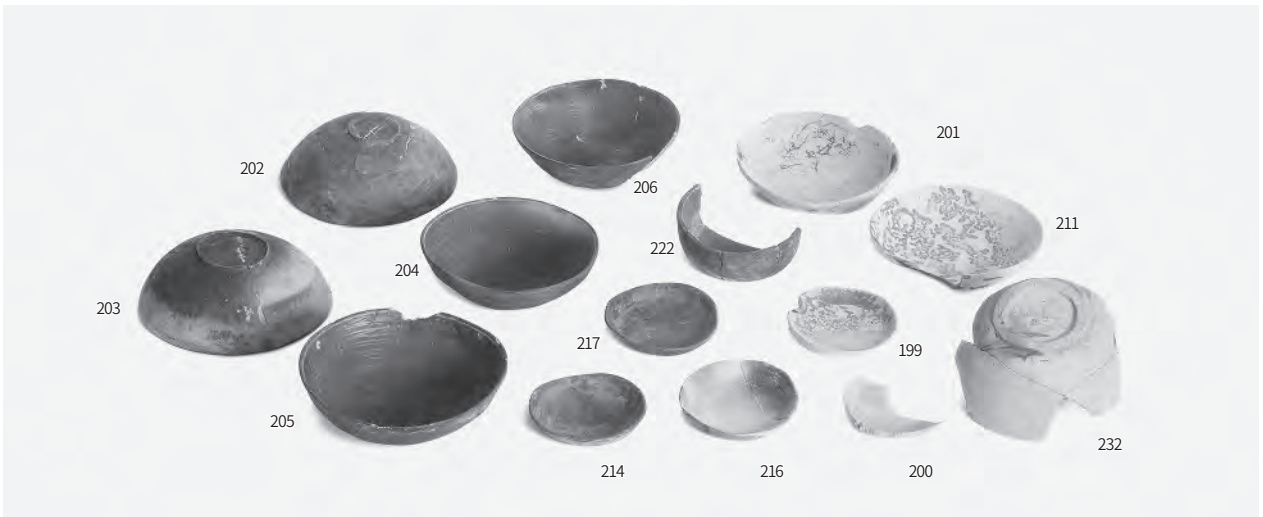
C-6区方形周溝墓12・13周溝断面 [南西から：右が方形周溝墓12]

図版 32

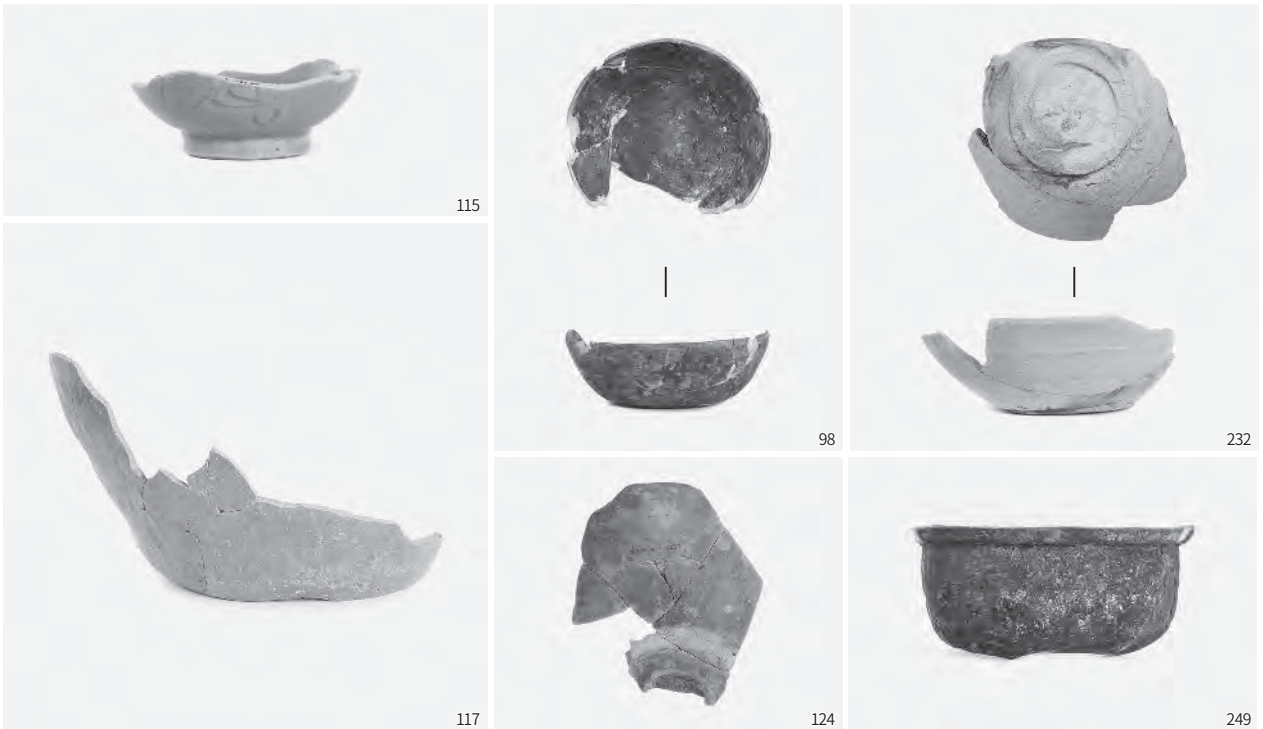
中世の遺物  
 (鎌倉時代  
 1296溝・1551井戸ほか)



1296 溝 : 176 ~ 179 ・ 181 ・ 182 ・ 184

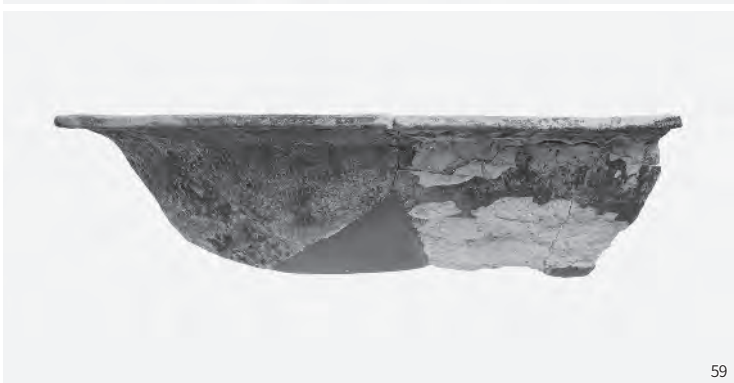


1551 井戸 : 199 ~ 206 ・ 211 ・ 214 ・ 216 ・ 217 ・ 222 ・ 232



362 溝 (115 ・ 117) / 1291 溝 (98) / P5 区 376P (124) / 1551 井戸 (232) / 1753 井戸 (249)







図版 34

古代の遺物 2  
 (奈良時代 957溝・654井戸 / 飛鳥時代 1995溝)



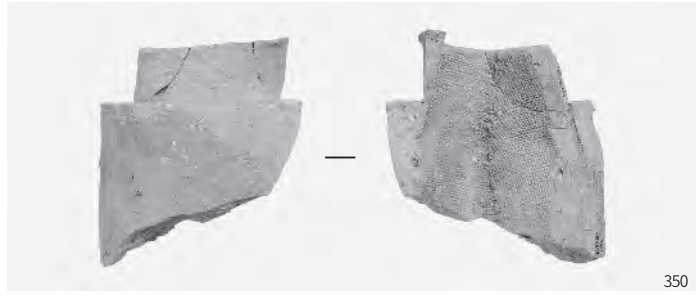
320



332



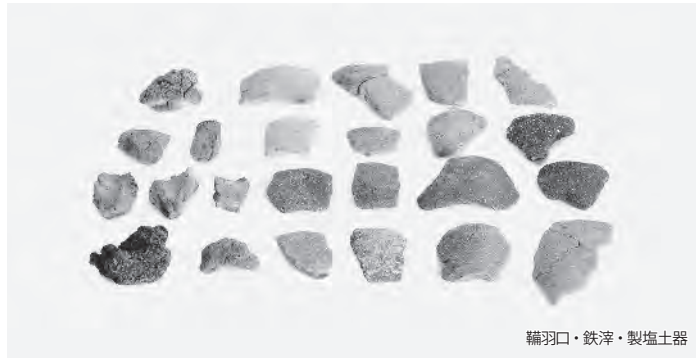
322



350



326



鞆羽口・鉄滓・製塩土器

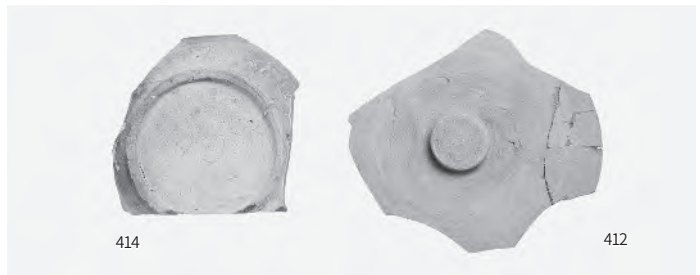


327

957 溝：320・322・326・327・332・350 / 鞆羽口・鉄滓 (M3～M10)・製塩土器 (352～367)



382

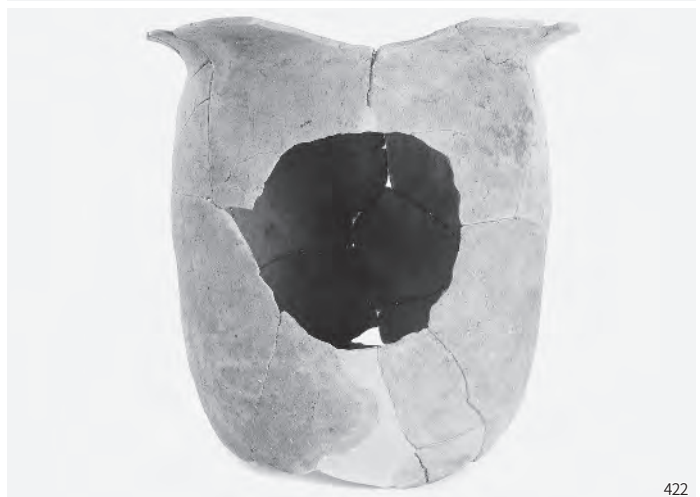


414

412



383



422



391

654 井戸：382・383・391

1995 溝：412・414・422



410

竪穴建物 54 上面 : 410



600

596



646

613

614



604



635



650



643



622



656



654



655

図版 36

古墳時代の遺物 2  
 (西側エリア  
 建物遺構・1482井戸ほか)



466



459



461



477



485



竪穴 39 : 466 / 竪穴建物 58 (108 溝) : 459・461 / 掘立柱建物 46 (100 落込み土器溜り 1) : 477・485



69



569



497

498



531



501

102 流路 : 69 / 100 流路 (北側 P6 区) : 569 / 1482 井戸 : 497・498・501・531





519



527



491



493



502



521



542



512



503

図版 38

古墳時代の遺物 4  
(西側エリア  
1482 井戸・116 井戸)



1482 井戸 : 532・541・547 / 510・511



116 井戸 : 562・564

古墳時代の遺物 5 (西側エリア 竪穴建物・432土坑・116井戸)



竪穴建物 8 : 710 / 竪穴建物 13 (458 土坑) : 713・714・715 / 竪穴建物 18 : 699 / 竪穴建物 6 : 750  
116 井戸 : 565 / 432 土坑 : 820・824・826・828・837・838



図版 40

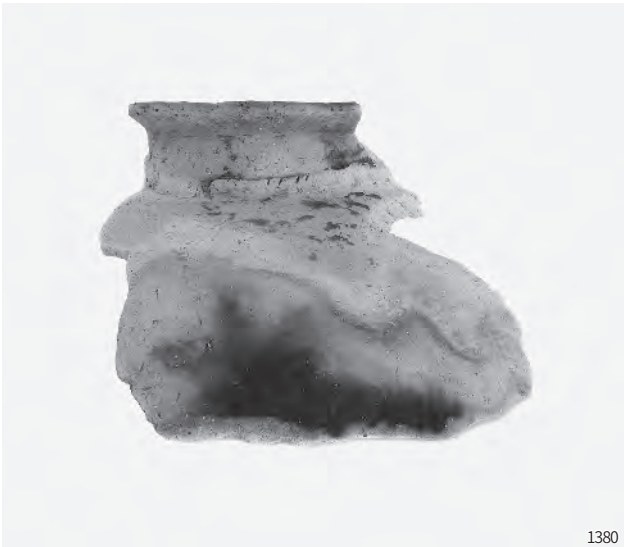
古墳時代の遺物 6  
(西側エリア 32井戸)



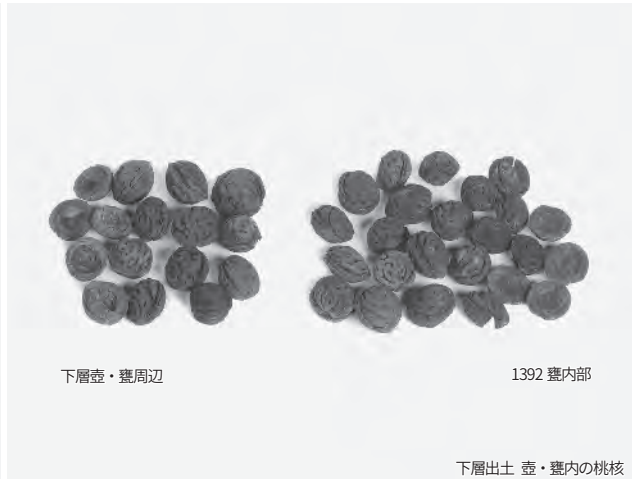
1388



1389



1380



下層壺・甕周辺

1392 甕内部

下層出土 壺・甕内の桃核



1376



1364

1371



1377



1390



1391



1392



1393



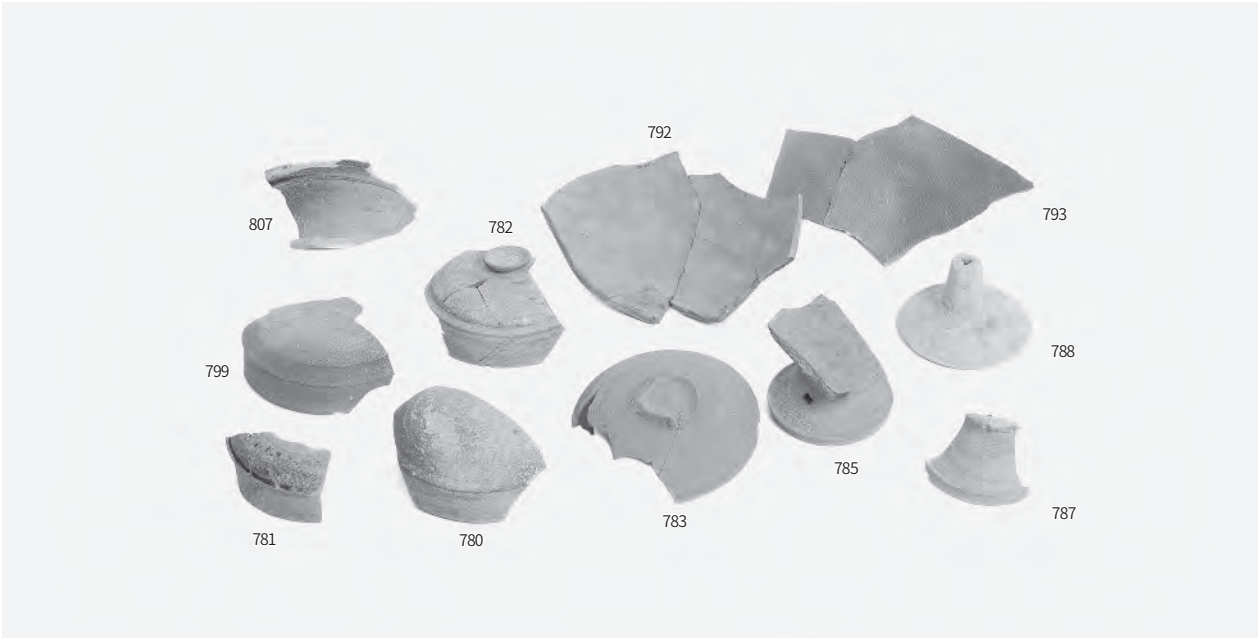
1394



1396

図版 42

古墳時代の遺物 8  
 (西側エリア  
 450 落込み・  
 33 落込み・  
 854 大型土坑)



450 落込み：780～783・785・787・788・792・793・799・807



33 落込み：853～856・858・860・862～865・868～870・885



854 大型土坑：1344・1345・1349・1350・1353



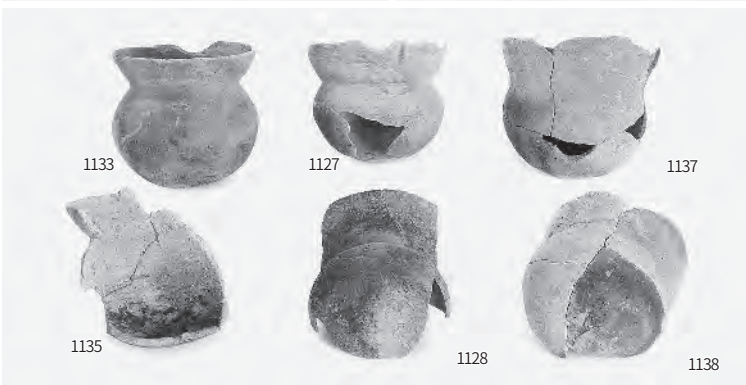
古墳時代の遺物 9 (西側エリア 971大型土坑・826大型土坑・25土坑)



971大型土坑 上層：1002・1004・1005・1011・1012・1015 / 下層：1017・1018・1020  
 826大型土坑：1271・1285 / 25土坑：1407～1409

図版 44

古墳時代の遺物 10  
 (西側エリア  
 866 井戸)

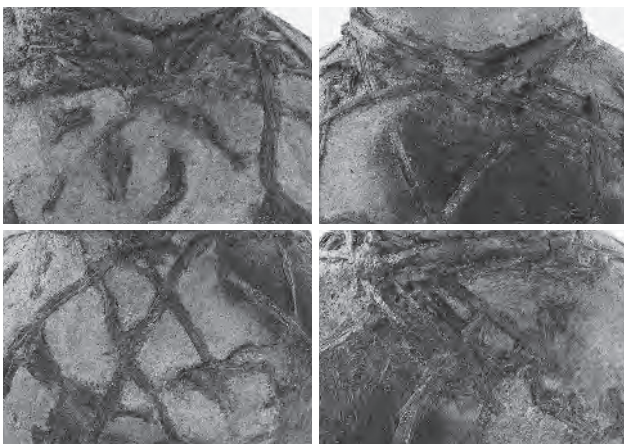


866 井戸 上層 : 1103・1104・1111・1155・1120・1127・1128・1133・1135  
 ・1137・1138・1143・1144・1147・1148・1154・1155・1157・1163





1234



1169



1210



1178



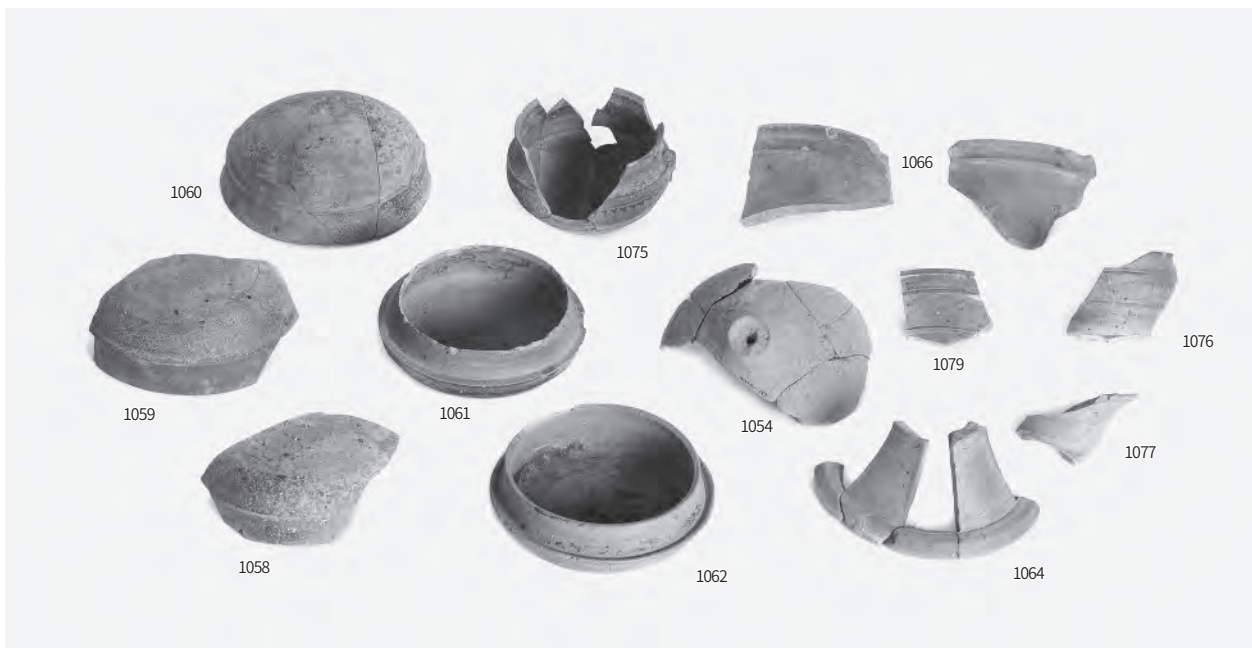
1212



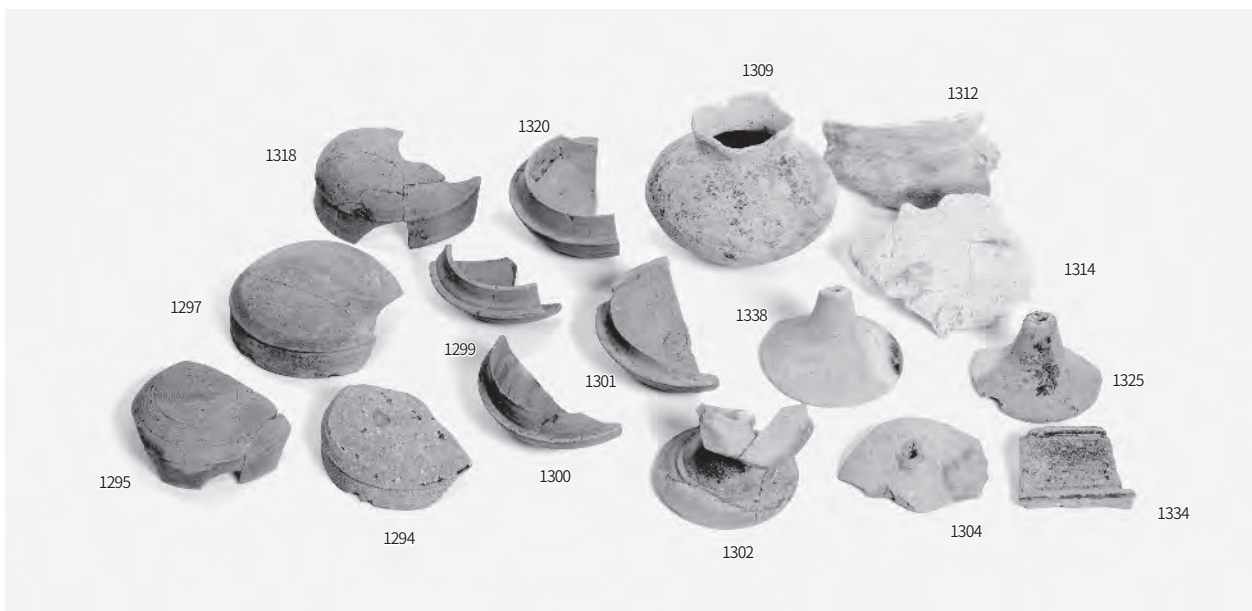
図版 46

古墳時代の遺物12  
(西側エリア  
866井戸)





827 落込みほか：1054・1058・1059・1060・1061・1062・1064・1066・1075・1076・1077・1079



867 落込みほか：1294・1295・1297・1299～1302・1304・1309・1312・1314・1318・1320・1325・1334・1338



西側 エリア 微高地 B1 包含層出土須恵器器台：933・934・950

図版 48

古墳時代の遺物 14  
 (中央エリア  
 竪穴建物 32 ほか、  
 建物遺構)



1488



1494

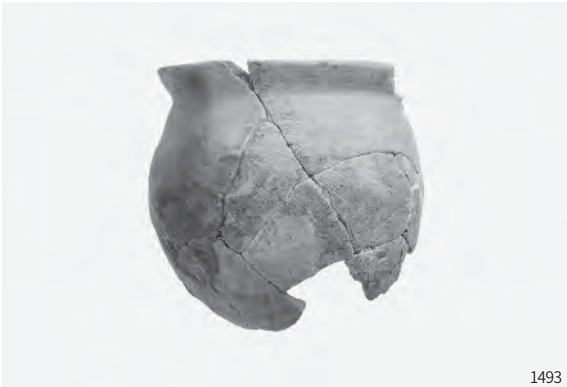


1492



1497

竪穴建物 32 : 1488 ・ 1492 ~ 1494 ・ 1497



1493



1450



1449



1485



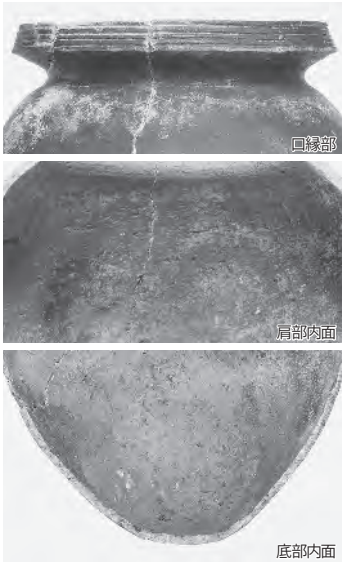
1474



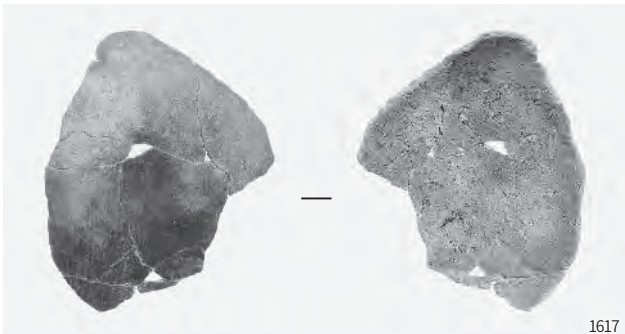
1547

竪穴建物 38 : 1450 / 竪穴建物 45 : 1485 / 掘立柱建物 29 (1370 土坑) : 1449  
 竪穴建物 37 : 1474 / 竪穴建物 46 (1704 壁際土坑) : 1547





1618



1617



1611



1613



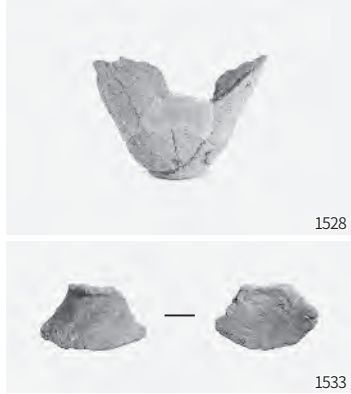
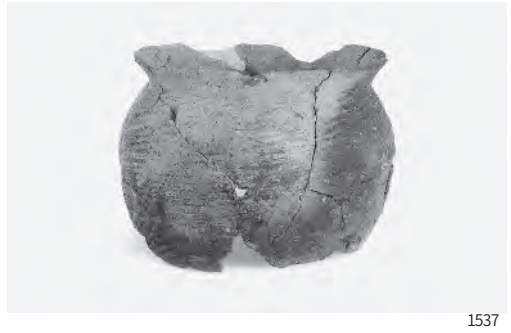
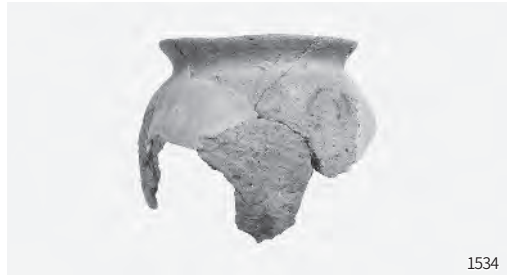
1614



1612

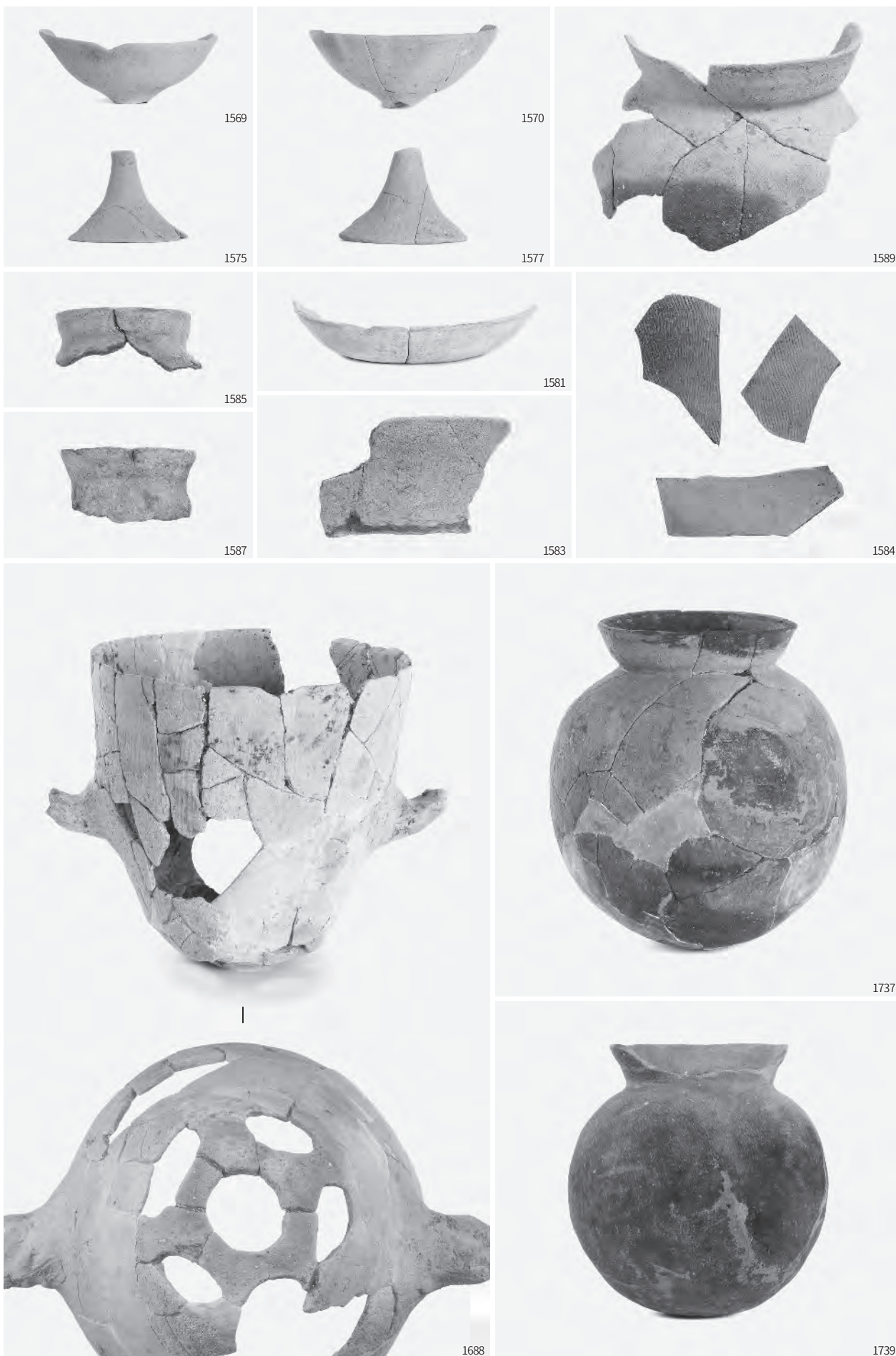
図版 50

古墳時代の遺物 16  
 (中央エリア  
 978 土坑・建物遺構・  
 311 土坑)



978 土坑：1524～1526・1528・1533・1534・1537・1540・1544／豎穴建物 5：1657／625 水路：実 17621665P：1619／  
 包含層 (1623 土器溜り周辺)：1563／豎穴建物 52：1716／311 土坑：1671・1794・製塩土器 1674・1675



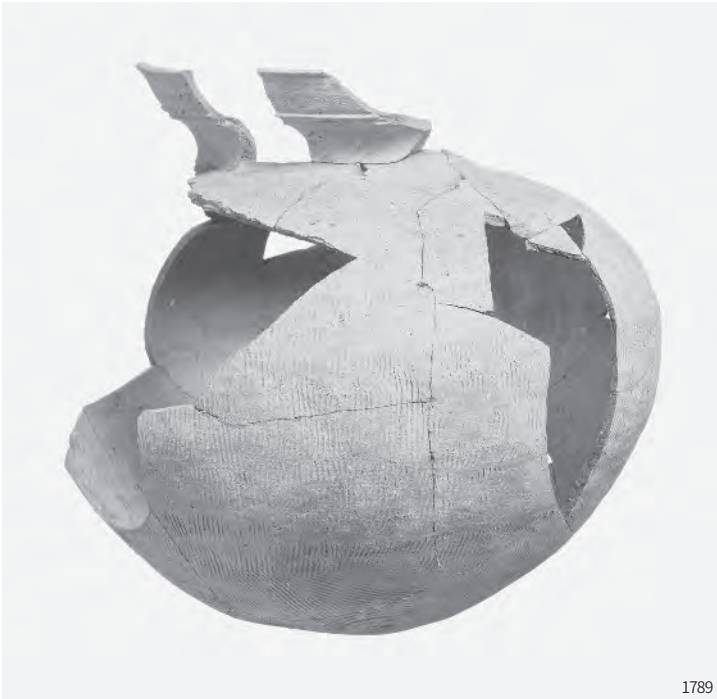


1623 土器溜り：1569・1570・1575・1577・1581・1583・1584・1585・1587・1589  
 竪穴建物 59 (697 溝)：1688 / 648 井戸 下層：1737・1739

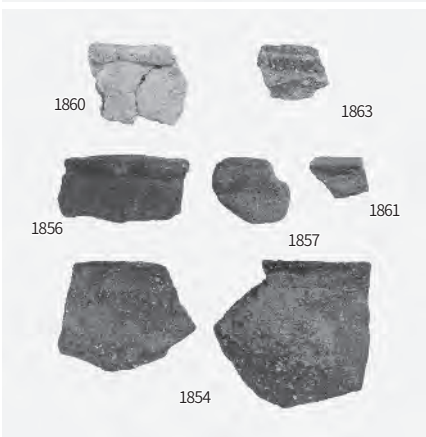


図版 52

古墳時代の遺物 18 / 縄文土器・石器類 (東側エリア 建物遺構・790井戸・1623土器溜り)



竪穴建物 53 : 1789  
掘立柱建物 12 (794P) : 1774  
790 井戸 : 1791  
1976 土器溜り : 1800 ~ 1803



上段：縄文土器 前期 (北白川下層 II a)  
下段：縄文土器 晚期 (長原式)

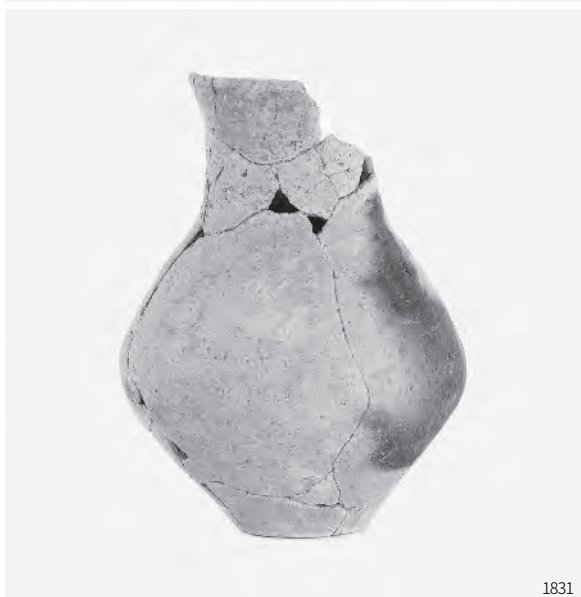
石包丁：S58 / 石鏃：S56・S57・S62・S63・S67・S69  
方形周溝墓出土砥石・石製品：S59 ~ S61 (方形周溝墓 13)・S55 (方形周溝墓 6)



1830



1833



1831



1837



1849

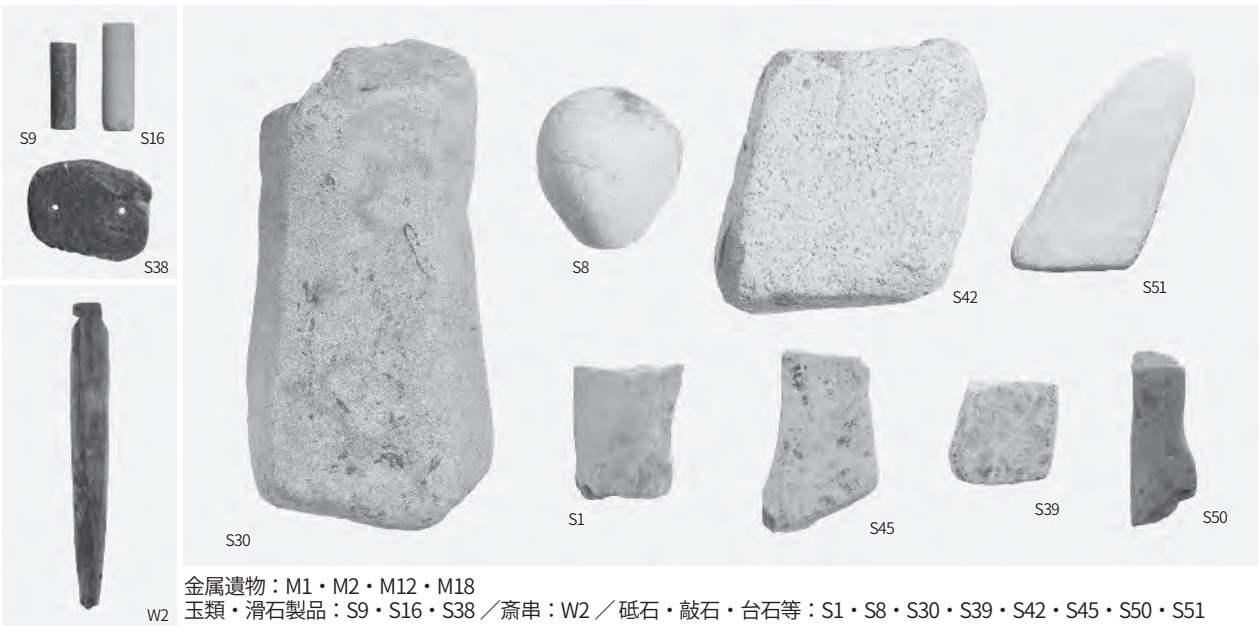
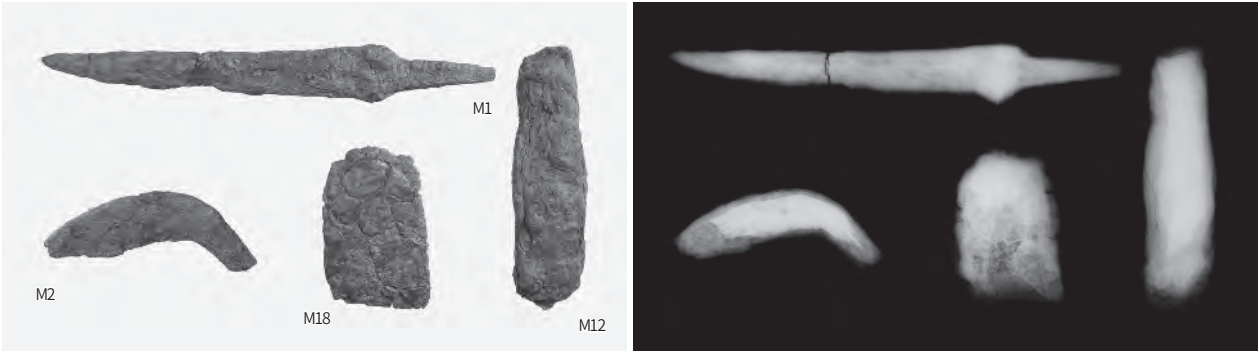


1852

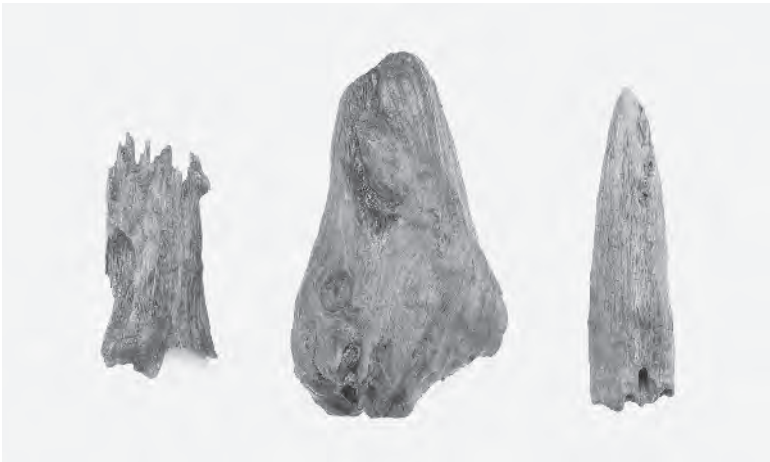
方形周溝墓 6 : 1833 / 方形周溝墓 7 : 1830・1831 / 方形周溝墓 6・7 周辺 : 1837 / 方形周溝墓 14 周辺 : 1849・1852

図版 54

中世・古代・古墳時代の金属製品・石製品・木製品



金属遺物：M1・M2・M12・M18  
 玉類・滑石製品：S9・S16・S38 / 斎串：W2 / 砥石・敲石・台石等：S1・S8・S30・S39・S42・S45・S50・S51



[掘立柱建物柱根]

掘立柱建物 13 (左上)：W9・W10・W11  
 掘立柱建物 26 (左下)：W4・W5・W6  
 掘立柱建物 37 (右上)：W16・W17



# 報告書抄録

ふりがな	かんまきいせき						
書名	上牧遺跡						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 313 集						
編著者名	笹栗拓 (編)、初宿成彦、丸山真史						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行年月日	令和 3 年 12 月 22 日						
所収遺跡名	所在地	コード		緯度 経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
上牧遺跡	大阪府高槻市 上牧町三丁目・四丁目 梶原中村町	27207	157	北緯 34° 86' 27"  東経 135° 65' 93"	2017.11.01 ~ 2018.07.31	2,945	新名神高速道路 建設事業
					2018.08.01 ~ 2019.07.31	7,715	
					2019.08.01 ~ 2019.11.30	1,380	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上牧遺跡		縄文時代 (前期・晩期)		縄文土器・石器	北白川下層Ⅱ a 式の土器 晩期の突帯土器とサヌカイト		
	墓	弥生時代 (中期前葉)	方形周溝墓	弥生土器・石器・石製品	中期前葉 (IV 様式) 方形周溝墓 14 基		
	集落	古墳時代 (初頭～後期)	竪穴建物・掘立柱建物 大型掘立柱建物 井戸・土坑・落込み	土師器・須恵器 製塩土器・鉄器・石製品 玉作・朱精製関連遺物 ガラス勾玉・管玉 搬入礫・桃核	淀川に近接する中核集落 建物遺構 99 棟以上 大型掘立柱建物と隣接する特殊井戸 井戸・土坑出土の一括遺物・祭祀関連遺物 外来系土器多数、釣瓶土器 玉作・朱精製ほか手工業生産遺物		
		古代 (飛鳥・奈良)	掘立柱建物・井戸 流路・溝	土師器・須恵器 製塩土器・瓦・鉄器 鍛冶関連遺物	淀川分流路 (内ヶ池) における河岸祭祀 小型瓦・製塩土器・鍛冶関連遺物		
		中世 (平安・鎌倉・室町)	掘立柱建物・区画溝・井戸 灌漑水路・耕作溝群	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器類・山茶碗 瓦・鉄器・漆器	13 世紀の耕地開発と関連集落 方形区画、粘土採掘土坑群 墨書山茶碗、小刀		
	生産						
	生産ほか	近世	灌漑水路・耕作溝群・災害復旧土坑		享和二年淀川大洪水に伴う災害復旧土坑		
要約	<p>淀川の近傍に位置する弥生時代～中世の複合遺跡で、弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺構・遺物 を検出し、長期に亘る土地利用の変遷と環境の変化を明らかにした。</p> <p>この中でも古墳時代の遺構・遺物が最も豊富で、100 棟近い数の建物や井戸などがまとめて検出さ れるなど、古墳時代初頭～後期前葉までの長期に亘る集落の実態が明らかとなった、大型建物の存在や 井戸における祭祀、外来系土器の出土、手工業生産関連遺物の出土など、調査成果は多岐に及んでおり、 北摂で有数の古墳時代集落の調査となった。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 313 集

## 上 牧 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2021 年 12 月 22 日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 / アイイズ株式会社 大阪営業所  
大阪市中央区久太郎町 2-5-31